

CODE : BREAKER —  
Another—

冷目

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世の中には罪がある。罪を犯せば人は罰を受ける。それが当然だ。しかし、中には罪を犯しても罰を受けずに済んでいる者たちが少なからずいる。そんな者たちを裁く存在がいた。その名は『コード：ブレイカー』。またの名を『存在しない者』。彼らは本当の名前も過去も捨て、*“悪”*を裁くために闇を生きる。『コード：ブレイカー』は6人存在する。しかし、今の『コード：ブレイカー』は少し違った。数は6人だったが、本来なら存在しない『ナンバー』がいた。それが、『コード：07』。

この話は、CODE：BREAKERに『コード：07』がいたら、という話です。あ

くまで主人公は原作と同じ大神ということにしていますが、話によってはオリキャラを主人公枠にしてしまうかもしれません。基本的に原作通りですが、オリジナルも入れていきたいと思います。ただ話の中盤辺りから無茶苦茶な設定があったり、未熟者なので原作キャラが原作とは性格が違ったりするかもしれないのでそういうのが許せない方は、ストレスを抱えないためにもUターンすることをおすすめします。

最後になりましたが、頑張りますのでぜひ読んでください。

# 目次

## 序章篇

code:00 支配 | 1

code:01 帰還と出会い

4

code:02 存在しない『コード』:

『ブレイカー』 | 19

code:03 怒りの裁き | 30

code:04 友情と物 | 52

code:05 ロスト | 70

code:06 桜小路家へ | 88

code:07 本気 | 104

## 人見篇

code:08 罨 | 126

code:09 続く危機 | 144

code:10 通じぬ力 | 158

code:11 人見の最期 | 182

## 番外篇

code:extra 1 バレンタ

インデー | 209

code:extra 2 ホワイト

デー | 227

code:extra 3 在りし日

の記憶 | 235

code:extra 4 在りし日

の記憶 | 253

〜平家 将臣〜

code:extra	5	在りし日
の記憶	優	266
〜夜原	優	
『捜シ者』篇	序	
code:12	つかの間の休息	
290		
code:13	護るべきもの	
312		
code:14	大神宅にご訪問	
332		
code:15	地獄	350
code:16	『捜シ者』	372
code:17	遊騎の本気	387
code:18	リリーの傷	409
code:19	正義の鉄槌	429
code:20	優の過去	448
code:21	『Re-CODE』	現
code:22	絶望的な終焉	478
496		
code:23	終わっていた戦い	
522		
code:24	憎しみの爆発	
549		
code:25	本物	570
code:26	ミニとロスト(前篇)	598

の記憶く天宮院 遊騎く	code:extra 9	在りし日	766
真実	code:extra 8	あの日の	746
子の一日	code:extra 7	夜原 優	719
stories	code:extra 6	If s	702
番外篇	code:29	訪れぬ平穩	680
	code:28	生徒会室へ	650
			622
			code:27 ミニとロスト(後篇)

謎	code:35	力の高みと謎の深み	911
	code:34	嘘から始まる幾重の	888
	code:33	切り裂かれた誓い	863
	code:32	黒と白の対峙	838
	code:31	束縛の拘束衣	
	code:30	動き出す敵	819
	『捜シ者』篇 中		
	えた牙		794
	code:extra 10	風に消	

を目指して

code:44	1132	揺れる心と大火の花	
code:43	1107	不協和音と夏の夜	
code:42	1084	“特別”な君	
code:41		強さに隠れた脆さ	
code:40		誰が為に	1058
code:39		決裂	1040
code:38		真の主	1012
code:37		瘢痕に刻む	987
code:36		小さき一步	959
code:36		を目指して	937
code:45		ミニミニ事件簿	1152
code:46	1184	開かれし扉	1209
code:47		Memory to	
revive			1237
code:48	1266	『脳』の真髄	
code:49		迎えし時間	1290
番外篇			
code:extra		在りし	
日の記憶〜八王子 泪〜			
code:extra	1320	それぞ	

れの夏の夜  
 code:extra 13 『捜シ者』たちの日常生活  
 code:extra 14 夢を追う者たち  
 code:extra 15 うら若き乙女の放課後ライフ  
 『捜シ者』篇 終  
 code:50 罨まみれの開幕戦  
 1444 code:51 世界で一番闘いにくい敵  
 code:52 リスクという名のパ

ラドックス  
 code:53 託す誓い  
 code:54 垣間見る強さ  
 code:55 覚悟の一撃、決意の一撃  
 code:56 牙を向きし破壊神  
 code:57 捧げし天使の両翼  
 code:58 扉の奥に潜む謎  
 code:59 パンドラ・メモリー  
 1664  
 1636  
 1608  
 1579  
 1557  
 1393  
 1419  
 1371  
 1467  
 1495



code:66	「悪には悪を」	1841	まる	code:65	虚無を貫き、紅きに染	1820	剣	code:64	立ち上がりし諸刃の	1792	code:63	戦場が語りし真実	1766	code:62	至高の青、煉獄の炎	code:61	最恐の復活	1722	code:60	傾く天秤の支柱	1698	
code:extra20	咲けな	2003	荘『、過去の住人たち	code:extra19	『渋谷	1985	守護神	code:extra18	流麗の	1970	code:extra17	あの人	1956	code:extra16	あの人	番外篇	code:68	Happy	1923	code:67	? つきの涙	1874

	code:74	繋がりにある二人	2187
	code:73	イレギュラーな訪問	2149
	code:72	『エンペラー』狂想曲	2117
	code:71	おはよう、『エンペラー』様	2080
	code:70	虚しさの渦中	2046
	code:69	We are LO	2021
	code:68	い少女	2021
	code:67	『エンペラー』復活篇	2021
	code:66	りを呼ぶ	2275
	code:65	code:77 『魔』の石	2301
	code:64	code:78 誰が為にその力を振	2326
	code:63	code:79 隻腕の宿敵	2356
	code:62	code:80 命を買う金	2386
	code:61	code:81 たった一人のヒーロー	2410
2433	code:82	『狩り』の始まり	2433
	code:75	code:75 そのために	2248
	code:76	code:76 理不尽な不幸が始まる	2248

番外篇

code : X   1	過去	past	
code : X   2	邂逅	encou	2461
nter			2484
code : X   3	無	Invisi	2513
ble < ^ 1 >			
code : X   4	無	Invisi	2530
ble < ^ 2 >			
code : X   5	無	Invisi	2556
ble < ^ 3 >			
code : 83	破壊が伝える覚悟		
『青い炎狩り』篇	序		

code : 86	大いなる遺志に集い	2635	2612	code : 84	『影』は迫る	2590
し者、刃向かう者				code : 85	諦めていた再会	
		2654				



## 序章篇

### code:00 支配

人は常に支配されている。

子どもならば親に、学生ならば学校に、社会人ならば会社に、そして法に。

しかし、そんなものは人間が生み出した支配。その気になれば、いつでもその支配から逃れることは出来る。ほとんどの場合、犯罪者という汚名を背負うことになるが、違う。そんなものは支配ではない。絶対に逃れることは出来ないから支配なのだ。

我々が絶対に逃げられない支配。それは我々の身近に、本当に身近に存在する。

それは……脳だ。

「……任務完了」

シャンデリアや天蓋付きのベッドなど、高級そうな装飾がなされた部屋に無機質な声

が響いた。いや、高級そうな装飾がなされた部屋というのは間違いだった。なぜなら、その部屋にあるほとんどの物が汚れてしまっていて、装飾品としての価値が無いに等しいからだ。血という紅い液体によって。

「しかし、海外に逃げるとはな。そんなもの、ただの悪あがきだというのに」

無機質な声の主が再び無機質な声を発した。今、この部屋にいる人間は彼だけ。あとは、かつて人間だったもの、頭が潰れた体があるだけだ。唯一の人間である彼は少年だった。短く黒い髪。血で所々汚れている黒い学ランのような服。どこからどう見ても、ただの学生だった。しかし、その顔……というよりその眼は、明らかに学生のそれではなかった。冷たく、感情など無いかのような眼だった。

少年は顔を拭いた。そして、ズボンのポケットから携帯電話を取り出した。最新のタッチ式のタイプだ。慣れた手つきでボタンを押すと、少年は携帯電話を耳に当てた。それからすぐ、携帯電話から電話特有の少々電子音染みた声がした。

『はい』

「任務は完了しました。偽装工作を行った後、空港に向かいます」

『了解しました』

ひどく端的なやり取りだった。しかし、少年は特に気にしていないようだった。

「では、失礼します」

少年がそう言って電話を切ろうとした。すると、制止の声が聞こえた。

『お待ちください。仕事のお話があります』

「仕事？」

『はい。日本に戻り次第、行ってもらいます。それは……』

この数十分後。とある国のとある高級ホテルの一室が木端微塵に破壊されるという事故が起こったという速報がニュースで流れた。

『快適な空の旅をお楽しみください』

そういう意味の外国語が飛行機の機内に流れた。それを聞くと、乗客たちは音楽を聴いたり窓から見える景色を楽しむなど、それぞれ楽しんでいた。

その中に一人、頬杖をつけて窓の外を見る少年がいた。しわ一つ無い学ランのような服を着て、二つ並んだ席の窓側に座っていた。

少年は窓の外を見ながら、ポツリとつぶやいた。

「珍種……か」

## code : 01 帰還と出会い

日本の首都である東京。そこにある日本の政治の中心地、国会議事堂。その一室で一人の男が椅子に座りながらテレビをジッと見ていた。

『本日、渋谷の交差点でビルのガラスが割れる事故が発生しました。幸いにも怪我人はいないとのこと。続いているニュースは』

そこでテレビの画面が黒に変わった。男がリモコンを操作しテレビを消したからだ。リモコンを机の上に置くと、男は指を組んだ。

「……相変わらず、やる事が派手だね。まあ、これで余計なことはいないだろう」  
微笑を浮かべながら呟く男。すると、部屋にノックの音が響いた。男は音の出所であるドアのほうに目を向けた。

「入りましたまえ」

「失礼いたします」

入ってきたのは黒いサングラスとスーツに身を包んだ男。男は手に資料のような物を持っており、それを持ったまま椅子に座っている男の前まで歩いた。

「総理。先ほど、『コード：06』のエージェントより連絡があり、桜小路桜は間違い



なく珍種だそうです」

総理と呼ばれた椅子に座った男。彼は日本の現総理大臣である藤原総理<sup>ふじわら</sup>。そう考えると、スーツの男は政治関係者で政策についての話なのか、と思うかもしれない。しかし、会話の内容は明らかに政策とは無縁だとわかる。

「……やはりか。『コード：06』が直接確かめたのだろうか？」

「はい。異能を使いましたが打ち消されたようです」

「そうか、そうか。『コード：06』を向かわせた甲斐があったというものだ」

藤原総理は微笑みながら言った。彼にとっては良い報告だったようで笑顔のまま話を続けた。

「それで、他には何かあるかい？」

「はい、もう一つ」

スーツの男は返事をする、藤原総理をまつすぐ見ながら報告した。

『コード：07』が帰国しました」

それを聞いた藤原総理の顔から先ほどまでの笑顔が消えた。いや、笑顔自体は消えていない。ただ、笑顔が明らかに先ほどまでの笑顔とは違った。まるで人をあざ笑うかのよう、そんな笑顔が変わった。

「……そうか。戻ってきたか。……『コード：07』、真性の犬が」

「話はまだ終わっていない！」

時は一日経ち、場所も変わった。ここは輝望高校。都内にある普通の高校だ。そこにあるクラス、1年B組で一人の少女が一人の少年に対して大声を上げていた。少女の名は桜小路 桜。少々、桜色が入っていて腰の辺りまで伸びた黒髪。触れてしまえば折れてしまいそうなほど華奢で儂げな肢体。この輝望高校のマドンナ的存在で男子生徒からの人気も高い。しかし、実はこの桜という少女はそんな見た目通りの少女ではない。だが、それは後に語るとする。

今、桜は目の前にいる少年との間にある机に何枚もの新聞紙を置いて、少年と話をしようとしていた。一方の少年は桜の行動がよくわからないらしく、桜を不思議そうに見ている。

「ここに真実は一つもない。……どういうことだ？」

ここ、つまり桜が机の上に置いた新聞紙。そこには、ヤクザの関係者が逃亡したこと、警察官僚と警察官数人が失踪したことが載っていた。一見すれば、時々聞くようなよく

あるニュース。しかし、桜は知っていた。このニュースの真実を。この情報が、偽りだということ。

「さあ、どうなんだ。早く答えろ、おわがみ大神」

大神、と呼ばれた少年。彼の名は大神おわがみ零れい。数日前に1年B組に転校してきた転校生だ。真面目さを感じさせる6：4分けの短い黒髪。着崩さずに着られた制服。そして、左手のみにしている黒い手袋。手袋以外なら、どこからどう見ても真面目な優等生と見える少年だった。現に、今も感じの良い微笑を浮かべている。

「桜小路さん。朝からそんなに大声を出したら喉に悪いですよ。先ほど買ってきたお茶です。まだ口は付けていませんから、どうぞ」

「む？……それもそうだな。では、いただくとしよう」

そう言って、大神は桜に缶のお茶を差し出した。桜も大神の言葉に納得したようでお茶を飲み始めた。二人の仲の良さを感じさせるような光景。しかし、次の瞬間にはそう見れない光景になった。

「って！ 違うのだ！」

瞬間、桜の手にあった缶が一瞬で潰れた。桜の握力によってだ。普通に考えれば、ただの女子高生が缶を握りつぶせるはずはない。だが、桜にはそれが可能だった。

実は、この桜小路桜という少女は格闘技を心得ておりとんでもなく強いのだ。さら

に、昔の武士のような喋り口調をしており、とてもじゃないが華奢で惚げとは思えない武士娘だった。

「話を逸らすな、大神！ 私は覚えているのだぞ！ 昨日あつたことを！」

昨日あつたこと。それを聞いた大神は机の上に広がる新聞紙を片付け始めた。そして片付けながら、先ほどまでと変わらぬ微笑みのまま言った。

「昨日あつたこととは、オレがヤクザの連中を全員殺し、そこに突入してきた警察官、それを指示した警察官僚も皆殺しにしたこと、ですか？」

大神は、確かにそう言った。近くにいる桜にしか聞こえぬくらいの声で。とてもじゃないが、普通の男子学生がやることではないようなことを。平然と口にした。

「そんなことはオレも覚えてますよ。オレが『コード：ブレイカー』としてやったことですからね。ヤクザ共は麻薬を売りさばく悪人。警察官も警察官僚もそのヤクザに協力していた、正義という化けの皮を被った悪なんですから」

『コード：ブレイカー』。大神が口にしたその単語は、普通なら聞くことはない言葉。何故なら、これは言ってみれば闇の世界の言葉。俗に言う裏社会でも一部の者たちにか通じない言葉だ。

『コード：ブレイカー』とは『存在しない者』。本当の名前も、過去も、家族も。全てを捨て、罪を犯したのに様々な理由で罰から逃れた者たち。そんな「法では裁くことの

できない悪”を裁く存在だ。協力している警察官僚によつて捕まらないヤクザ。同じく権利を利用して捕まらない警察官と警察官僚など、形は違えど、そんな“悪”は数多くいる。なぜ『コード：ブレイカー』である大神がこんな普通の高校にいて学生をやっているのか。それを大雑把に言うのと、桜が大きく関係しているからだ。

「ですから、自信を持っていいですよ。その眼で見、その耳で聞いたものだけが真実なんです。珍種の桜小路 桜さん」

「誰が珍種だ！ お前はまた意味の分からんことを！」

大神の言葉に桜は怒りをあらわにする。大神が言った「珍種」という言葉。それが、大神が輝望高校にいる今の理由だった。珍種である桜を監視・観察するのが今の大神の仕事のため、大神は輝望高校にいるというわけだ。まあ、転校してきた理由は別の理由だが、それはどこか別の機会に語るとしよう。

「しかし、あの真実をこும்完璧に隠すなど……。一体どれほどの力を持っている……。『コード：ブレイカー』とは何だというんだ……。」

「……そうね。私も知りたいわ」

得体の知れない存在である『コード：ブレイカー』の力を認識し、冷や汗を流す桜の背後から、桜に同意する声があった。そこにいたのは、緑のジャージを着て、眼鏡をかけた女性。そして……

「この犬がどうしてここにいるのかってことを……！」

「か、神田先生！ それと『子犬』！」

眼鏡の女性は一二年B組担任の神田先生。生徒からは「神田ちゃん」の愛称で親しまれている。そして、その神田先生に捕まってジタバタしている子犬は桜がつれてきた『子犬』。ちなみに、命名したのは桜である。

「桜ー、ゴメンねー！ 神田ちゃんに見つかっちゃった！」

神田と『子犬』のさらに後ろで三人の女子生徒が申し訳なさそうな顔をしていた。彼女たちは桜のクラスメイトであると同時に親友だった。クリーム色のツインテールでスタイルの良い高津<sup>たかつ</sup> あおば、茶髪でロングストレートのツボミ、頭の上に団子を作り焦げ茶色の髪をした紅葉<sup>もみじ</sup>の三人だ。

「学校にペットは連れてきちゃダメって校則に書いてあるでしょ！ 誰の犬ですか！」

神田先生が顔を真っ赤にして怒鳴った。すると、桜は大神を、大神は桜を指差した。

二人はこの後、神田先生がいつもいる体育準備室に放課後になつたら来るよう言われた。

「な、なんてかわいそうなの〜」

体育準備室に神田先生の泣き声が響き渡った。教室にいた『子犬』について大神と桜に話を聞いた神田先生だったが、その美談ぶりに感動してこのように泣き崩れてしまったのだ。その話の内容とは、「母犬が不良グループによって殺され、子どもである子犬が路頭に迷っているところを大神と桜が助けた」というものだった。ちなみに、この話をしたのは大神だが、実はこの話は真実半分嘘半分だった。

真実はこうだ。母犬が不良グループによって殺されそうになり、それを桜が助けようとしたが隙を突かれて危機に瀕していた。それを救ったのが大神だった。しかし、その救い方は普通ではなかった。大神は不良グループを皆殺しにすることで桜を救った。さらに、どういうわけか母犬すらも大神が首を絞めて殺してしまったのだ。その理由はわからないが、不良グループに関しては理由がはっきりしている。不良グループは昨日大神が壊滅させたヤクザの下部組織で、彼らもヤクザと同様、捕まることない。法では裁ききれない悪。だからだ。

元々、大神が輝望高校に来たのもこの不良グループが大いに関係している。大神が不良グループのメンバー数人を裁いたところを桜に目撃され、大神は桜を口封じに殺すために転校してきたのだ。その後、桜が珍種とわかるまでは、目撃情報を他人に言わないように監視するため、高校に在籍していたというわけだ。

「グス……わかりました！　そういうことなら、連れてきても構わないわ！　この体育準備室も使つていいからね！」

「おお！　ありがとうございます、神田先生！」

「ありがとうございます」

神田先生の寛大な対処に二人は礼を言った。その後、神田先生が実家から届いたという玉ねぎや焼酎を『子犬』に与えようとしたため一悶着あつたが、とりあえず落ち着いた。

「では、失礼しました」

とりあえず、『子犬』は体育準備室に預けて荷物を取りに準備室を出た桜。神田先生に『子犬』のことを説明した時やクラスメイトと接する時、そして『コード：ブレイカー』として悪人を裁く時の大神の変化つぷりに不気味に思いながら、教室に向かつて歩き始めた……が。

「ちよ?!」

突然、桜の背後から手が現れた。そして、あろうことか桜の胸を揉み始めた。

「や……やめろー!」

さすがの桜もこれには耐えられず、その場を離れた。そして、自分の胸を揉んだ不埒者に制裁を下すため振り返つて顔を確認した。そこにいたのは、特徴的なねをした金



髪に眼鏡をかけた、童顔の少女だった。

「よかった。桜ちゃんのおっぱいたち、今日も元気なの〜」

童顔の少女は平然と、のんびりとした口調で言った。彼女を見た桜は制裁を下そうとした手を下ろし、戸惑っていた。何故なら、彼女は仮にも女性であり、輝望高校の生徒会に所属する先輩だったのだ。

「ふ、藤原先輩……。いつも言っておりますが、淑女が淑女のち……。乳房を触るといのはいかがなものか……。」

藤原ふじわら 寧々音ねねねというのが彼女の名前だ。先ほどの行動からは想像できないだろうが、輝望高校生徒会の副会長なのだ。ちなみに、桜の言葉からもわかる通り、桜にとつてこのやり取りはよくあることだった。何故そこまで桜の胸を気に入っているのか本人に聞いてみると、「ぼよぼよでほわほわしてて、寧々音は大好きだから」とのことだ。

桜から行動をやんわりと注意された寧々音だが、途端に怪訝そうな顔をして桜から離れ始めた。そのことに罪悪感を感じたのか、桜はため息をついて言った。

「わかりました……。少しだけなら」

「わ〜い!」

許可が下りた途端、幸せそうな顔で桜の胸に飛び込み顔をうずめる寧々音。それを桜は耐えることにしてじっとしていた。すると、寧々音の頭の上に誰かの手が置かれた。

それは、いつの間にか寧々音の背後にいた学生服を着た短く黒い髪をした男子生徒のものであった。

「……副会長。それは桜小路さんのご迷惑になると何度言えばわかるんですか」

「あゝ、ゆうくん。久しぶりなの〜」

頭に手を置かれたことで上を向いた寧々音。男子生徒は寧々音よりも背が高かったため、上を見るだけでも顔を見ることができた。対して、男子生徒は寧々音が顔を見ようとした瞬間、寧々音から視線を逸らした。当の寧々音は気にしていないようだったが、桜はというと……

（何なのだ、こやつは！ 目も合わせないとは失礼ではないか！）

ものすごい形相で睨んでいた。格闘技の心得がある彼女にとつて、このようなちよつとした礼儀作法すらも気になるらしい。

「あら、夜原君やはら。そういえば、海外留学から昨日の夜に帰ってきてたのよね」

神田先生が男子生徒に親しげに話しかけた。神田先生の言葉を聞くと、桜は目をパチ

パチさせた。

「も、もしや夜原先輩ですか!」

「……知ってるんですか?」

「もちろんだ。大神、お前は知らないだろうがこの人は夜原やはら 優ゆう先輩なのだ。生徒会の会計さんで、少し前から海外に短期留学していたのだ。ですよね、夜原先輩」

大神の問いに答え、確認のため本人と顔を合わせようとする桜。しかし、当の優は先ほど寧々音から顔を逸らしたように、桜からも顔を逸らして返事をした。

「……ああ」

それを見て、桜は再びものすごい形相になり、拳をわなわなと震わせていた。

「や、夜原先輩……! 人と話すときは目を見て……つて、藤原先輩!」

桜が優に注意をしようとする、寧々音が間にゆらりと入ってきて桜の胸に再び顔をうずめた。

「桜ちゃん、仕方ないの。ゆうくんは見れないから」

「見れない、とはどういう意味ですか? 藤原先輩」

胸に顔をうずめていることは気にしないことにしたらしく、寧々音に尋ねる桜。すると、優が突然口を開いた。

「君が1年B組に入った転校生、大神 零君か」

「……………」

「どうやら大神に話しかけたようだった。優は先ほどまでとは違って大神の顔を見ながら話しかけていたが、対する大神は少し不機嫌そうな顔をしていた。」

「大神君？」

すると、話しかけられた大神ではなく寧々音が反応を示した。そして桜から離れると、大神にゆつくりと近づいていった。

「大神君と桜ちゃんって付き合ってるって噂だけどダメなの。ひーたんとみーたんは寧々音のだからあげないの〜」

「……………ひーたん、みーたんとは？」

「左のおっぱいがひーたん、右のおっぱいがみーたんなの〜」

「あいにく僕はまだみーたんにもひーたんにもお目にかかったことがないので僕の負けです」

普通に会話を進める二人。相変わらずゆつくりとした口調の寧々音と、寧々音の言葉に引きもせず答える大神。後ろでは桜が「マジメに答えるな!」と怒っていた。

「それじゃーね、大神君には特別。みーたんとひーたんの秘密を教えてあげようかなー」

そう言うのと、寧々音は眼鏡を外した。眼鏡を外したことで、寧々音の瞳の色がより鮮

明に見えた。そして、ここで初めてわかった。寧々音の瞳の色が左目と右目で違うことに。金色の右目と銀色の左目が彼女の目だということ。

桜も知らなかったらしく、思わずその目に見入っていた。すると……

「……!」

「な!」

突然、大神が寧々音の頭を掴んだ。瞬間、桜が急いで止めに入ろうとした。

「大神! やめろ!」

桜の制止の言葉を聞いてから数秒後、大神は寧々音を掴んでいた手の力を抜いた。そして、ぽんぽんと頭の上に二、三回優しく手を置いた。

「すみません、先輩。人違いでした」

その後、大神はその場を去った。桜は大神の行動に怒りを示しながら共に去っていった。その場に残った神田先生と寧々音は頭に疑問符を浮かべ、優は腕を組んで大神の背中をずっと見ていた。

「ああ……ナアニ？」

その日の夜。満月が輝く中、都内の工事現場に組み立てられた鉄骨の上に一人の少年が座っていた。少年は左手に煙が出ている煙草を持ち、右手で携帯電話を耳に当てていた。おそらく電話がかかってきたのだろう。

「……わかつてる。悪人掃除ゴキだろ？ どうせ一人や二人。オレ一人で楽勝……え？

大神 零と？ ……それにあいつも？ ……わかった。構わないヨ」

そう言うと、少年は電話を切った。そして、左手に持っていた煙草を口まで運び、煙を口から吐き出した。

「ちようどいいヤ、大神。オレ様が教えてやるヨ。この『コード・ブレイカー』の刻様がテメエの非力さをナ。それと、あいつ。あいつには、犬野郎に出番はねえつてことを改めて思い知らせてやるヨ……」

月明かりに照らされた少年の顔。金色の右目と銀色の左目が妖しく光った。

## code : 02 存在しない『コード：ブレイカー』

夜中の住宅街。その中にある月明かりと街灯のみに照らされた道。そこに三人の学生と一匹の小犬が並んで歩いていた。その内二人は大神と桜。そして子犬とは『子犬』のこと。もう一人は、特徴的なはねをした金髪のおツドアイの少年だった。

「このバイトは『正義』の味方をやる代わりに他では得られぬ対価を得ている。つまり『コード：ブレイカー』の六人それぞれに目的があるってワケ」

おツドアイの少年が歩きながら説明をしている。相手は桜だ。少年の説明を聞いて桜の頭に疑問符が浮かぶ。

「目的？」

「たとえば……大切な誰かを護るため、とか」

「と……刻君？」

桜は、急に雰囲気が変わった少年の名を戸惑いながら呼んだ。

少年の名は刻。偏差値70を超えるエリート校である閉成学院高校に通う高校生、というのは仮の顔だ。彼は大神と同じ『コード：ブレイカー』。とある事情で大神たちと行動を共にしている。その途中、桜から『コード：ブレイカー』について聞かれたので、

『コード：ブレイカー』の目的について説明したというわけだ。

「ま、どーでもいいケド」

そう言つて、刻は雰囲気を戻した。それを見た桜は、聞いても無駄だと思ひ話題を変  
えることにした。

「そうか……。刻君、『コード：ブレイカー』がそれぞれに目的があるというのならそ  
れは大神にもあるのだろうか？」

桜は思ひ切つて自分が一番気になっていることを聞いた。桜は今まで何度も見た。  
大神が人を殺すところを。そして、殺す過程で大神が傷つき血を流すところを。何故、  
傷つきながらも人を殺すのか。桜はそれが気になつて仕方がなかつた。

「桜ちゃん、大神については興味津々だね。オレ、妬げちゃうナア。もしかして……」  
質問を受けた刻は、桜の背後に回つた。そして……桜の胸を揉んだ。

「ココ、もう揉まれちゃ「破廉恥な！」ガフツ！」

そして、すぐさま桜の制裁を受けた。桜に思ひつきり殴られたことで、刻は道に倒れ  
て頭から血を流していた。さらに、そのあまりの威力に道には数本のヒビが拡がった。

「ヒドイナア。姉ちゃんはよくてなんでオレはダメなんだヨ」

倒れた状態で刻は視線だけを動かして桜を見た。桜は、刻の「姉ちゃん」という言葉  
に反応した。



「姉ちゃん？ ……ということは、やはり藤原先輩のご兄弟か！ 目が同じなものな！」

桜の言う通り、刻のオッドアイは寧々音と同じ色だった。金色の右目に銀色の左目。さらに言うと、刻の特徴的な髪のはねも寧々音の髪と似ていた。

「ふむ……ならば仕方ないか？ いや、どうなんだ？」

姉がいいのだから弟もいいのでは？ 桜の中にはそんな疑問が浮かんで桜を迷わせていた。その隙を狙ってか、刻がゆつくりと桜に近づく。両手を桜の胸に向けて伸ばした状態で。そして、あと数cmで触れるというところで刻は桜から離れた。大神が手刀で刻に攻撃しようとしたからだ。その後、大神は桜に「こいつは平気で嘘をつく。いちいち騙されるな、馬鹿」と説教をした。

「大神！ 誰が馬鹿だ！」

「そー、そー。誰が？ つきだつて？ 大神君」

大神の説教に桜と刻が反応した。大神は桜を無視して、刻の方を見た。

「テメエ以外に誰かいるか？」

「……ムカつくな、お前」

その瞬間、二人の間に険悪な雰囲気 flowed。桜も危機感を感じたのか、大神に対する怒りを忘れて話を逸らすことにした。

「そ、そういうえば！今日は大神と刻君以外にもう一人誰か来るのだろうか？」

それは、今から数十分前の話。学校で寧々音たちと話した後、大神と桜はいつも通りに帰宅した。その道中、大神に何者かから電話がかかってきて大神はある場所に向かった。そのある場所とは、国会議事堂だった。大神についていった桜はガードマンに止められ、大神はなぜかスルーされて国会の中に入ってしまった。その後、桜は機転を利かせた作戦でガードマンを抜けた。しかし、中に入った途端スーツを着た異様な雰囲気纏う男たちに囲まれた。そんな桜を救ったのが刻だ。刻は桜を自分の連れと言い、桜を大神のところ案内した。桜がそこで見たのは大神と、彼と話す謎の連中。そして、大神と顔を合わせた時によって知らされた。

今日の仕事は刻と大神。そしてもう一人を加えた三人で行う、と。これが、刻が大神たちと行動を共にしているとある事情だ。

「大神、一体誰が来るのだ？ 教えてくれ」

「……………」

桜は大神に尋ねたが、大神は無視して歩き出した。普通に考えれば、国会で聞いた時点で刻と一緒に仕事をするのを聞いた大神が、もう一人の協力者が誰なのか知るはずはないのだが。

「ならば、刻君！」

桜は大神に聞くのを諦めて、刻に尋ねた。『コード：ブレイカー』の目的を話してくれた時のように教えてくれる、と思ったが、返ってきた答えは真逆のものだった。

「悪いケド、オレあいつ嫌いなんだよネ。だからあいつの話はしたくない」  
そう言つて、刻も歩き始めた。二人に自分の問いをスルーされて、桜の中に怒りが沸き上がった。

「むむむ……！ あー！ スッキリしないのだ！ 一体誰だというのだ！」

「……夜中にそんな大声出すとは、ずいぶん近所迷惑な奴だな」

ついに大声を出した桜。そこに聞こえてきたのは、男の声だった。しかし、それは聞いたことの無い声ではなかった。むしろ、記憶に新しい声だった。桜は、声が聞こえた方を向いた。そして、そこに立っている意外な人物の名を呼んだ。

「夜原先輩!？」

そこにいたのは学校で顔を合わせた夜原優だった。電柱に寄りかかり、上の方に付いたライトで全身が照らされている。桜が驚いていると、大神が優に近づいていった。

「……先に来ていたのか」

「〃エデン〃からの指示だ」

「ハッ。あんな奴らの命令を素直に聞くとか、テメエは本当に犬野郎だな」

「……何とでも言え。オレは〃エデン〃に従う」

優は、大神だけでなく刻とも普通に話し始めた。それを見て、桜の驚きはますます大きくなる。

「あ、あの……もしや夜原先輩が刻君が言っていたもう一人の……？」

「一緒にバイトをする人間ってことだろ。確かにそれはオレだ」

平然と答える優。しかし、その答えはあることを意味することになる。桜はその意味を確認した。

「で、では先輩も大神や刻君と同じ『コード：ブレイカー』なのですか？」

「ああ」

「な、ななな何ですと!？」

またも平然と答える優。それに反比例するかのような驚きようを見せる桜。すると突然、刻が間に入ってきた。

「一緒にしないでほしいナア」

「と、刻君？」

刻の口には煙草が唾えられていた。国会で初めて会った時も吸っていて、桜は注意したがスルーされてしまった。だから、今も吸っているのだろう。

刻は煙草を口から離すと、口から煙を吐き出した。

「こんなやつと、同じ」なんて、虫唾が走るネ」

そう言つて、再び煙草を唾える刻。煙草のことは一度スルーされたので、桜は刻の態度を注意することにした。

「刻君。そんな言い方はよくないのだ。仮にも年上の方だぞ」

「関係ないネ。年は上だろうが、番号はオレのほうが上だし」

「番号？」

刻の口から出た言葉に桜は首をかしげた。そして、チラリと大神を見た。すると、大神はため息をついてから説明を始めた。

「……僕たち『コード：ブレイカー』には『コード：ナンバー』という01から06までの番号があるんです。僕は『コード：06』。刻は『コード：04』。基本的に番号が数字として小さいほうが格上なんです。……僕は最近『コード：ブレイカー』になりましたから一番下の『コード：06』なんです。誰でも最初は06ですから」

「おお！ そうなのか！ あの番号にはそういう意味があったのか。では、夜原先輩は何番なのだ？ 刻君より下ということは、五番ですか？」

桜が優の方を見て尋ねると、優は桜から顔を逸らした。そして、ポツリと呟いた。

「……07」

優の口から出た番号は、先ほどの大神の話では一度も出てこなかった番号だった。桜は再び首をかしげた。

「07、ですか？ 『コード：ブレイカー』は06まででは？ ん？ もしや私が聞き間違いを……」

「こいつは『エデン』に泣きついて、『エデン』のお情けで『コード：ブレイカー』になっただけだヨ」

今度は刻が説明した。しかし、それでも桜の中に疑問は浮かび、桜はそれを消化すべく質問を続けた。

「『エデン』？ お情けとは？」

「さつき国会議事堂で大神と話していた奴等いたデシヨ？ あいつらが『エデン』。オレたち『コード：ブレイカー』の上司みたいなやつらだヨ」

「僕たち『コード：ブレイカー』が悪を裁くと、奴らが『コード：ブレイカー』の存在を隠すために情報操作を行っているんです。政府の関係者ということであらゆる権力やあらゆる手段を使って」

「そ、そうだったのか……」

刻と大神によって桜の疑問はどんどん消化されていった。そして、残った疑問は一つ。

「それで？ 夜原先輩がお情けで『コード：ブレイカー』になったというの？」

「それは……」

「しゃべるな。オレが自分で説明する」

桜の最後の疑問を刻が答えようとする、優がそれを止めた。すると、刻は眉間にしわを寄せて優を睨んでから歩き出した。どうやら、刻はかなり優のことが気に入らないようだ。

「本来『コード：ブレイカー』は01から06までしか存在しない。さっき大神が言った通りだ。そして、オレが『コード：07』だというのも本当だ。ここから長くなる。歩きながら話すぞ」

「わかりました」

相変わらず桜とは全く目を合わせないまま、二人は歩き始めた。順番としては、一番前が大神と刻。少し離れて桜と優という具合だ。

『『コード：ブレイカー』はそれぞれに目的がある。それはオレも同じだ。オレはどうしてもその目的を達成しなかった。だからオレは、ある知り合いに頼んで“エデン”のところに行き、“エデン”に頼んだ。『コード：ブレイカー』になりたい、つてな。だが、

最初は断られた。オレが頼みに行つたときには大神が『コード：06』になつていたら、番号に空きはなかつた」

「ある知り合い、ですか？」

「それについて話す気はない」

桜の問いをバツサリと切り捨てる優。優はそのまま話を続けた。

「その後も何度も頼んで、何とか特例ということで認めてもらった。条件はあつたがな」

「条件？」

「ああ。『コード：ブレイカー』は上位ナンバーの奴が死んだり、評価が上がるとナンバーが上がる。簡単に言うとな昇進とか昇格だな。だが、オレにはそれが無い。一生07のまま。一生下つて端つてことだ」

昇進・昇格がない。務める上で、これ以上悪い条件はないだろう。一般企業で言えば、一生お茶係。部活で言えば、一生玉拾いとか雑用ということなのだから。

「そうなのですか……」

「さらに、『コード：07』っていうナンバーは特例としてオレに与えられたものだから。オレが死んでも後任はいない。『エデン』が言っていたが、オレは最初で最後の『コード：07』だそう。『コード：ブレイカー』は『存在しない者』だが、オレはそ



の『存在しない者』の中でも本来なら存在しない人間。都合のいい捨て駒だ」

言いながら、優はフツと笑った。桜には、それが自虐の笑みのように見えた。すると、刻が首だけ振り向いて立ち止まった。

「話は終わったようだね。ナイスタイミング。じゃ、田畑邸たばたに潜入と行きますか」

彼らの前にあつたのは巨大な鉄製の扉。扉から離れると、奥に建てられている立派な家が見えた。

「政治家の田畑たばた茂しげる。奴は全国の病院から稀血まれけつと呼ばれる特殊な血液を持つ人間を集めて拉致・監禁しているらしい」

「その真偽を確かめて、“悪”なら全てを闇に葬れつてことサ」

「またも明らかになった“正義”と思つていた人物の“悪”の顔。警察官や政治家と言つても、結局は人間ということなのだろうか。」

「……行くぞ」

「仕切んじやねーヨ。犬野郎が」

優が一步前に出ると、刻がそれをすぐさま追い越した。今宵も、『コード：ブレイカー』による裁きが始まろうとしていた。

## code:03 怒りの裁き

異能とは一部の人間が持つ特殊な能力のことだ。『コード・ブレイカー』は、この異能を用いて悪を裁く。そして、その異能は人によって全く異なる。

大神は、人を一瞬でチリも残さず燃やし尽くすほどの熱さを持つ、左手から発する『青い炎』。

刻は、鉄などに作用し触れずに物を飛ばしたり、銃弾を送り返すことができる『磁力』。優は……まだ異能を使っていない。

田畑邸に着いた大神たちは、刻が『磁力』を作用させてセキュリティシステムをダウンさせ、『磁力』で扉を捻じ曲げて田畑邸内に入った。そこで待っていたのは田畑邸のガードマンたちだった。桜は近づいてきた相手に得意の格闘術を、刻は『磁力』を使いガードマンが撃ってきた銃弾を反発現象で送り返し、大神はガードマンたちが撃った銃弾を『青い炎』で防ぎ、刻の最後の一本だった煙草も燃え散らした。

ちなみに、この過程で優は特に何もしていない。桜が「もちろん人殺しは良くないのですが、先輩は戦わないのですか？」と微妙に矛盾している質問をしたが、優はしれっとうこう返した。

「オレがやるよりも二人がやったほうが効率がいい」

実際、話が終わるころには終わっていた。さらに道中、大神が『コード・ブレイカー』になった目的が『捜シ者』を見つけて殺すためということが刻から明かされた。しかし、当の大神は『捜シ者』という名を聞いた瞬間、尋常ではない殺気を放った。そこまでして殺したい相手である『捜シ者』が何者なのか。桜の中に、また新たな疑問が浮かんだ。

「田畑、お前の言う通り世の中には死んでいい人間もいる。ただし、テメエみたいな悪人のことだな。田畑……！」

場所は変わり田畑邸の地下室のような部屋。『子犬』が犬自慢の嗅覚で入り口を見つけたのだ。入ってみると、そこにあったのは大量の人間の臓器。これが何を意味するのか。田畑が稀血と呼ばれる特殊な血液を持った人たちを拉致・監禁しているという話を踏まえればわかるだろう。

臓器売買。この瞬間、田畑は「悪」だと判明した。

「待て！ 大神！ 殺してはダメだ！」

桜が大神を止めようと前に出ようとす。彼女はとても正義感が強く、「悪」を絶対に許さない。それは、人殺しを行う大神も同様だった。そもそも、彼女が大神の仕事についてくる理由も大神が人を殺すのを止めるためなのだ。相手が「悪」だろうと殺してはいけない。それを大神に教えるために。桜はそれを成すために大神と行動してきた。それが正しいことだと信じて。

「ッ!？」

しかし、その考えが本当に正しいのか。桜は考えることになる。震える手で桜の腕を掴んだ、全身包帯だらけの男によって。

「殺してくれ……。あいつら、息子のゆうたまで切り刻んだ……。許せない……。！  
殺してくれ……。！」

「……………」

その瞬間、桜の思考がフリーズした。「悪」だから殺してはいけない。そう信じていた。

しかし、現実はどうだ？

目の前の男は田畑の、「悪」の死を望んでいる。それを救いとしている。「悪」を殺してはいけないのなら、目の前の男は救われないということなのか？ 田畑に殺された息子

のために彼の死を望む男は間違っているのか？そんな思いが桜の中を巡っていた。

「……………」

大神は、そんな桜を無視して歩を進めた。桜はそれに気づき、急いで大神を止めようとした。

「お、大神！ 待……………」

「ハイ、そこまで」

「刻君!?!」

大神を止めようと進んだ桜を刻が後ろから覆いかぶさるで止めた。桜は、またふざけているのか、思い刻を振り払おうとした。しかし、できなかつた。耳元で囁かれた刻の言葉によって。

「桜ちゃん。言つとくけど、今の迷ってる君じゃ大神は止められない。……………ひとつ教えてあげるヨ。世に言う正義のヒーローって奴はさ、正義のためなら悪いヤツをブツ殺すからヒーローなんだよネ」

「と、刻君……………」

刻の手には「ひのタマン たい あくまじん」というタイトルの絵本があった。タイトルだけでわかる。それがヒーローが主人公のお話だと。ヒーローが悪者を斃す話だと。刻が言っているのは、『コード・ブレイカー』とこの絵本のヒーローの根本は変わら

ないということなのだろう。

「田畑。貴様のような悪（クズ）はこの世から消え去るがいい。跡形もなくな」

「はたして君にそれができますかな？ 『コード：ブレイカー』君？」

その瞬間、大神から紅い液体が飛び出た。

「……ッ!？」

「さあ、解体手術のお時間デス」

見てみると、大神の背後に白衣を着た屈強な男が二人いた。どちらも明らかに一般人とは呼べない雰囲気をしており、その両手にはメスが握られていた。

「彼らはウチの執刀医です。ロシア特殊部隊スペツナズで最高の暗殺技術を体得しているので腕は確かですよ」

「ちっ……」

大神が左手を伸ばした。『青い炎』で燃え散らそうとしたのだろう。しかし、その手は空気を掴み、男たちは大神の背後に移動していた。それぞれ、大神の左腕と右腕を切りながら。

「大神!」

「速いナア……」

刻が感心したかのように言った。確かに、男たちのスピードはかなりのものだ。一般

人なら目で追うこともできない。コンビネーションも中々だ。

「さつき聞こえたけどあなた、何やらステキな力を持つてるんでしょ？」

「でも、それも直接触れないと使えないとなれば、意味ないわね」

男たちが大神の唯一の弱点を指摘した。その顔には、勝ち誇ったかのような笑みが浮かんでいた。

「あいつら、異能についても知ってるのか？」

「いや、おそらくオレたちの会話を傍受したんだろう。お前があいつらと同じことをペラペラと喋ってたからな」

「だからナニ？ そんなの言い訳にもならねーヨ」

まるで大神のことを心配していないかのような刻の言葉。優はやれやれとため息をついた。

「診察終了！」

「さあ、解体手術よ！」

肩、足と大神の体がどんどん傷ついていく。傷の多さに比例して大神の体から流れる血も増えていく。しかし、大神はいくら攻撃を受けても悲鳴なんて一言も上げなかった。

「ウフフ。クールね、アナタ。でも痛いなら痛いつて言っていないのヨ？ ……ん？」

男の足元に何か転がった。それは、クマのぬいぐるみだった。首の部分にはネームプレートが付いていて、「ゆうた」と書かれていた。それは、先ほど桜に田畑を殺すよう頼んだ男が口にした子どもの名前。白衣の男は、ぬいぐるみをひよいと拾い上げた。

「ああ。思い出したわ。このぬいぐるみの持ち主ね、すぐきれいな内臓の持ち主だったの。でね、解体した時に彼ったら「助けて」って言ったのよ。……バカよねえ！」

そう言うと、男たちは笑みを浮かべた。その顔はとてつもなく下品な、「悪」の顔だった。

「助けて」よ！ 「助けて」！ 助けるわけじゃない！ その声が聞きたくてやっつてんだから！」

「そんな声もあなたで67人目？ いえ76人目？ 忘れたけどこれだから解体手術はやめられない！」

男たちは下品な笑いを浮かべながらぬいぐるみをメスで引き裂き、地面に叩きつける。この時、彼らは気づかなかつた。その行為が……

「あなたも言いなさいよ！ 必死になって！ 「助けて」、「助けてお願い」って！ さあ、早く……」



一人の男を悪魔に変えたことに。

「ガハアツ!?!」

「夜原先輩!?!」

男の言葉が遮られ、その屈強な体が吹っ飛んだ。一人の男の……夜原優の回し蹴りが顔に命中したことによって。

「い、いきなりなにす……………る……………」

「……………」

優は無言で男を見下していた。その制服に身を包んだ体からは想像できないような殺気を放ちながら。まるでその場に存在する全てを手にかけるような雰囲気。それは彼のはるか後ろにいる桜と刻にも感じられた。桜は知っていた。このような雰囲気を

出した人間が行う行動を。桜はそれを止めるべく動き出す。

「せ、先輩！ 殺しては……」

しかし、刻がまたも桜を止めた。先ほどとは違い、力を込めた腕で桜の体を捕まえることで。

「無駄だよ、桜チャン。あなつたあいつには、もう言葉は届かない。……よく見たほうがいい。あれがあいつの本性なんだカラ。大神と同じ。感情なんて無いただの……殺人マシーン」

刻の目が鋭くなった。その目には、尻餅をついた状態の白衣の男と、それを見下す優。

「な、なによ……。なんなのよ、アンタ……」

「……………」

「だ、黙つてないでなんとか言いなさいよ！」

白衣の男がメスを優に向けて突っ込んだ。しかし、次の瞬間。男の手からメスの刃が消えた。

「な!?!」

それを行ったのは優。彼が放った回し蹴りが、メスの刃を木端微塵に砕いたのだ。

「ま、まさか足でメスを……!?! ありえない！」

「黙れ」

明らかに先ほどまでとは違う声。学校で聞いたものとも、『コード・ブレイカー』という正体がわかった時のものとも違った。

「これ以上、悪の言うことを聞く気はない」

「この……ガキがああああ!!」

メスを碎かれた男が優に突っ込んでいった。素手で優を殺すつもりなのだろう。しかし、それは自らの寿命を縮める行為だったとすぐに知る。

「があー!」

優が右手を突き出し、男の顔を掴んだ。そして、そのまま壁に押し付ける。

「殺した相手を忘れるような下衆は死ね。最後に教えてやる。オレが殺すのはお前で129人目だ」

「う、うそ……。や、やめて!」

男が命乞いを始めた。その目から涙を流しながら、先ほどまでの態度とは180度違う。だが、その言葉が優に届くことはなかった。

「目には目を」

「あ……。や、やめ……」

「歯には歯を」

「あ……ああ………」

「悪には無慈悲なる裁きを」

男の顔が潰れた。いや、砕かれた。優の握力によって。一人の少年の握力で大の男の頭蓋が砕かれたのだ。頭を砕いたことで優の体は返り血に染まる。顔も、服も、何もかも。

「よ、よくもー」

もう一人の白衣の男がメスを構えて優に向かっていった。敵討ちのつもりだろうが、それは間違った行為だった。

「な!？」

こちらの男も頭を掴まれた。それは、親指に指輪をした左手。大神だ。

「いい、いや……!」

「燃え散れ。」

男の体が『青い炎』に包まれる。体の一片も、塵の一つも残さずに。男の体が燃え散るのには、十秒とかからなかった。

だが、桜の意識は大神の『青い炎』ではなく、優の方に向かっていた。

「夜原先輩……人の頭を割るなんて……。一体どうやって……」

「あれがあいつの異能『脳』だよ」

刻が桜を解放した。とりあえず、この場に残った“悪”は裁いたからだ。ちなみに、田畑はすでにどこかに姿を眩ませていた。

「の、『脳』?」

「人って、普段は本気になっても本来の力の3割程度の力しか使えないって知ってる? 脳にリミッターがかけられているからサ。あいつは、そのリミッターを自在に外すことができる。そうすることで、あらゆる感覚器官が普通の人間以上になる。筋力のリミッターも外れるからその力もとんでもないものになるってワケ」

「う……うむ?」

スラスラと説明する刻。一方の桜はいまいち理解できてないようで、眉間にしわを寄せながら首を傾げていた。すると、優が桜たちのところに戻ってきた。その体は、男の血でベツタリと汚れている。

「つまり、いつでも火事場の馬鹿力を出せるってことだ」

「おお！　そういうことですか！」

「今のでわかったのかヨ……」

優の説明で合点がいった桜は目を輝かせ、桜の思考回路が理解できない刻は呆れた顔をしていた。と思ったら、桜はハツとして優を睨みつけた。

「先輩！　なぜ殺したのですか！　いくら悪人でも殺すことは――」

「……悪人でも殺すことはない。お前はそう言いたいのか？」

「そ、そうです！」

「あれを見てもか？」

優が親指を立てた状態であるものを指差した。それは、先ほどの包帯を巻いた男だった。ポロポロになったクマのぬいぐるみを持った大神が男の傍にいる。

「オレと大神がああ二人を裁くことであの男は救われた。あの男は間違っているか？」

「それは……」

「どうでもいい」

大神が割って入ってきた。その後ろでは、『青い炎』が雄々しく燃えていた。炎の中に、かすかに包帯を巻いた男とクマのぬいぐるみが見えた。大神にとつて、せめてもの弔いなのだろう。

「オレたち『コード・ブレイカー』は悪を裁く。その結果、誰かが救われようとオレたちはただの悪。正しいとか間違っているとかなど関係ない」

「……何、感情的になつてんの？ たかがバイトだろ。お前のそういう所マジウゼエわ」

大神の言葉を聞いて、刻が苛立ち気にな大神を睨みつける。優は二人の様子を気にせず顔を拭い、桜は自らの中に生まれた葛藤と戦っていた。

「燃え散れ。」

田畑の体が『青い炎』に包まれた。哀しい顔をした大神によつて。病気の娘であるしさのために、同じ稀血の人間でちさに適合する臓器を探すために稀血の人間を殺してい

た田畑。だが、桜は許せなかった。どんな理由があろうと多くの人を殺した田畑を。悪」という存在を。そんな桜がとつた行動は……ハグだった。

ハグをすることで、悪”である田畑も、他の人間と同じ温かい血が流れている一人の人間だということを伝えたのだ。それは、桜が自らの葛藤と戦い抜いた結果、得た答えだった。どんな理由があっても殺しちゃいけない。これは理屈じゃない。桜のその言葉で、良心を取り戻した田畑。大神を、正義の味方である『ひのタマン』と言い、自分を悪である「あくまじん」として、大神に自分を殺させようとした。それが、田畑なりの償いだったのだろう。そして、大神はそれを感じ取ったのかはわからない。

だが、大神は田畑を裁いた。

田畑の体を燃え散らす『青い炎』は少しずつ小さくなり、塵すらも残さずに消えた。これでよかったのかはわからない。ただ、田畑にとつてはよかったのだろう。

しかし、だからと言って全員が納得するわけではなかった。

「よくも……、よくもパパを……!!」 『あくまじん』でもパパはパパなのに! 『ひのタマン』なんて大嫌い! 死んじやえ! 死んじやえー!!」

ちさが車いすから身を乗り出し、持っていた絵本を大神にぶつけた。身を乗り出したことで床に着いた体を何とか起こして、桜はちさに駆け寄りその体を支える。ちさは涙をあふれさせながら大神を睨んでいる。大神は、その場から動きもせず、頭のみ動かし



てちささを見た。そして、冷たい目でちささを見下した。

「……ああ、そうさ。お前の父親はオレが殺した。だが、このままだとお前は病気によって何もできずに死ぬ」

「な……………！ 大神！」

それは正しかった。しかし、目の前で父を殺された病気の少女にとっては酷な真実だった。それでも、大神は言葉をつづけた。

「悔しかったら生き延びてみる。生き延びてオレを殺しに来い。覚えていてやる。オレはお前のことを絶対に忘れない」

「パパを……………パパを返せ！ 悪魔ー！！ うわあああああ！！」

「ち、ちさちゃん……………！」

暴れるちささを桜は止めようとする。しかし、彼女は病気を持つまだ幼い少女。まるでガラスのように儂い存在。桜はちさを止めようとする腕に力を込めることができなかつた。

「……………！」

すると、優がゆつくりと桜の隣に座った。そして、ちさの頭を何の躊躇もなく掴んだ。

「先輩！！ まさか！」

桜の頭の中に先ほど頭を砕かれた男のイメージが浮かぶ。そして、最悪の展開が頭を

よぎる。

「先輩！ ダメです！」

「心配するな」

そう言うと、優はゆっくりとちさから手を離れた。見ると、ちさは眠っていた。先ほどまで喉を傷めそうなほどの声を出していたというのに、今は安らかな寝息を立てている。

「簡単な催眠術だ。問題はない」

「……そうですか」

「さ、早いところ出ようぜ。どうせここは大神が燃やすシ」

刻の言葉に桜と優が頷く。見ると、大神の左手には『青い炎』が灯っていた。そして、ちさを連れた一行は田畑邸を出た。

田畑邸の庭。『青い炎』に包まれる田畑邸を前にして大神と桜は何やら話し込んでい

た。そこから少し離れた場所で、眠ったちさの隣で刻と優が話していた。

「なあ、どうせアレ使ったんだ口？ なにか消したワケ？」

「……いや、眠らせたただけだ。下手に消せば、この子の生きる意味がなくなる」

刻はしゃがんだ状態で『青い炎』で火を点けた煙草を啜えながら、優は立って目の前の『青い炎』を見たまま話していた。

優の返答を聞いた刻は、頭をかきながら立ち上がった。

「あつそ。んじゃ、報告は済ませたからオレは行くとするヨ」

「本当のターゲットのところ……か？」

優の言葉を聞くと、刻はピタリとその体を停止させた。そして、ギロリと優を睨みつけた。

「聞いてたのかよ。趣味悪いーな」

「聞こえたんだ。オレは仕事中、ずつとリミッターを解除してるからな。ちなみに、今はもう異能を解いている」

「チツ……」

刻は舌打ちをすると歩き出した。優が聞いたという「本当のターゲット」の下に向かうのだろう。つまり、今回の件の黒幕だ。それが誰なのか、優は特に興味はなかった。裁くべき「悪」が何人いようと関係ないからだ。

すると、桜との話が終わったのか大神が歩いてきた。すでに異能を解いていた優は大神に何があったのかはわからないが、顔を手で覆った大神の様子を見て彼にとって予想外なことが起こったことだけは安易に予想できた。

「どうした？ 少し顔が赤くないか？」

「黙れ」

無愛想にもほどがある大神の返答。大神はそのまま優の横を通り過ぎた。しかし、優はまったく気にせずに続けた。

「まあ、あの珍種は何するかわからないからな。奇想天外な行動をしても不思議はないが、お前がそんなになるほどとはな。貴重なものを見た」

「……………」

すると、大神がピタリと立ち止った。優が振り向いて首を傾げていると、大神はそのままの状態で話し出した。

「……………桜小路さん」

「むっ？」

突然、名を呼ばれた桜は小走りで大神と優の下に向かった。いまだ、大神は二人に背を向けたままだ。

「なんだ、大神」

「優に何か言いたいことがあるんじゃないですか？ 例えば、人と目を合わせて話せ、とか」

大神が振り向きながら言った。それも、満面の優等生スマイルで。

「おお！ そうだ！」

「な……………」

桜はポンと手を叩き、優は青ざめた顔をしていた。

「先輩！人と話すときは目を見て話さないと失礼ですよ！さあ、私と目を見て話しましょう！」

「な!? や、やめろ！」

二人の距離が近かったこともあり、桜は優の顔をいとも簡単に掴んだ。両手で顔の両側を掴んでいるため、桜の力を考えれば絶対に逃げられない。

「くそ！ なら異能で……………」

『脳』の異能を使おうとする優。そんな優を見て、大神は意地の悪い笑顔をしながらい言った。

「珍種に触られていては異能は使えませんよ、優」

異能が使えない。それは珍種の特種能力のようなものだった。それだけではなく、珍種には異能が効かず、異能を無効化することができるのだ。異能を完全に打ち消す存

在。それが珍種だ。優がそれを実感したのはいいが、それはずいぶん間抜けなやり取りによるものとなってしまった。

「な、なに!?! なら!」

優は最後の手段として目を瞑った。そこまでして、優は桜の顔を見たくないのだろうか。しかし、すぐに優の目は開かれた。後ろから回された大神の手によって、強制的に開かれたのだ。

「お、大神! お前!」

「僕もあなたの貴重な姿を見たいと思ひましてね」

大神にとつて、これは仕返しなのだろう。一方の桜は、チャンスを生かそうと顔をぐいと近づける。

「さあ、先輩!」

「う……………」

そして、桜と優の目が完全に合った。桜はジッと優の目を見る。対する優は、冷や汗をダラダラと流していた。

「う……………あ……………」

すると、優の顔が徐々に赤くなっていた。それに呼応するかのように冷や汗の量も増えていった。

「あ、ああ……………」

「先輩……………」

さすがの桜もおかしいと思い、首を傾げる。しかし、すでに遅かった。

「ガフツ……………」

優は……………倒れた。

「先輩!?! どうしたんですか!?! 大神! 私は何かしてしまっただけ!?!」

顔を真っ赤にして倒れた優と慌てふためく桜。そして、それを見て満面の笑みを浮かべる大神。満足したのか、大神は満面の笑みで桜の問いに答えた。

「優は女性が苦手なんですよ。目を合わせるだけで赤面して、言葉もはつきりしなくなる。十数秒も目を合わせていると、今のように倒れるんですよ。理由は知りませんがね」

「な、なんだと! 先輩! せんぱーい!!」

すでに田畑邸を燃やす『青い炎』も消え、闇のみとなった夜の街に桜の音が響き渡った。

## code:04 友情と物

収賄を行った政治家の田畑茂が焼身自殺をした、という作り上げられたニュースが世に流れて五日経った。政治家の隠れた悪行と突然の死に、流れた当時は多くの人が驚愕した。しかし、五日も経てばニュースにもならず、人々の記憶からも消え始めている。事件も、田畑茂という人間のことも。

この件の真相を知る者の一人である桜は、そのことに何とも言えないやるせなさを感じていた。だが、たとえ人々が忘れても、ちさにつけられた傷は消えても、大神だけは忘れない。そんなことを思った朝のことだった。

「オハヨー！ 桜！ 大神君！」

「……ッス」

「今日も仲が良いようで！」

学校の玄関前で登校途中の桜と大神に元気よく挨拶してきたのは桜の親友であるあおば。そして、高校生とは思えないほど身長が高く寡黙な上杉うえすぎ萌はじめ、マエシユンの愛称で親しまれている前田まえだの二人だった。

仕事では冷たいが、学校では感じの良い優等生キャラの大神は三人に爽やかに挨拶を



返した。

「おはようございます。高井さん、横田君、大杉君」

「大神君……高津、前田、上杉ツス」

しかし、思いつきり名前を間違えてる大神。上杉に指摘されたが爽やかな笑顔を崩さずに、大神は訂正した。

「あ、すみません。そうでしたね、高杉君」

「……上杉ツス」

指摘されたばかりだというのに間違える大神。もはや、素で間違ったのかキャラとして間違えたのかわからない。

「あはは！ 大神君、もしかして寝ぼけてる？」

「いえ、そんなことはありませんよ」

「そう？ じゃあ、いいけどね。ねえ桜、ちよつと来て。大神君、桜借りるね」

「むっ？」

大神と話すあおぼだったが、急に桜の手を取って校舎の中に入っていった。それに続く上杉と前田。一人残された大神は、気にせずに校舎まで歩いて行った。

「とうわけだから。桜、よろしく！」

「それじゃ、お先に失礼するぜ」

「……ツス」

大神が校舎に入ると、ちようど話は終わったようであおばたちと別れる桜がいた。桜は無言であおばたちに手を振っていたが、大神に気づくとズンズン近づいてきた。

「おい、大神。いい加減クラスメイトの名前を覚えろ。失礼だぞ。そんなんじや、友達なんて一人もできないぞ」

「……フツ。友達、ですか」

桜の言葉を鼻で笑う大神。それを見て、桜はムツとする。

「何がおかしいのだ!」

「いいこと教えてあげますよ、桜小路さん。僕がこの学校にいるのは仕事……いえ、バイトを円滑に進めるため。それと、珍種であるあなたの観察をするためです。関係の無い人間と交流する必要なんてないんです。まあ、適当にやりますよ。当たり障りなくね。クラスメイトなんて言っても、卒業したらすぐに忘れまますよ。……どんな事件でもすぐに忘れてしまうように」

大神の言葉に反論できない桜。どんな事件でも忘れてしまう、というのは実感し始めているからだ。だが、桜は言葉に詰まりながらも反論しようとした。

「そ、そんなこと……」

「桜、オハヨ」

「オハヨー、桜ちゃん」

しかし、登校してきたツボミと紅葉の挨拶で言葉が途切れた。まあ、当の大神も桜の言葉など聞かずに下駄箱を開いていた。すると、大神が一瞬だけ止まった。

「……………」

下駄箱の中に靴以外の物が入っていたのだ。見てみると、封筒に入った手紙だった。大神は黙って封筒から手紙を出して、内容を確認した。そこには、「大神君が転校してきから大神のことばかり気になります。一度、二人だけで会えないでしょうか」というような内容が書かれていた。俗に言うラブレターというやつだろう。横から手紙を覗き込んだツボミが茶化すように話しかける。

「うわー！ 大神君、またラブレターもらってんじゃん！ 君もモテるねえー！」

また、というのは言葉の通りで、大神が転校してきて数日経った日のことだった。今回のように登校してきた大神の下駄箱の中に、電話番号が書かれた紙とバスケットが入っていたのだ。それは明らかにラブレターとプレゼント。しかし、実際は違った。それを入れたのは大神のバイト上の関係者。おそらく「エデン」のメンバー。紙に書かれた電話番号は「エデン」の関係者につながる番号。そして、バスケットの中に入っていたのは『子犬』だった。『子犬』は、こうして大神と桜の下にやってきたのだ。

だが、今回の手紙は明らかに本物。仕掛けでも何でもない、純粋な恋心をつづつた恋

文だ。ツボミの言葉に、大神は笑顔で答えた。

「戸惑いますね。ですが、好意を持ってくれるなんて嬉しいです」

「君も男の子だね〜！　ちゃんと会ってあげなよ！」

「ツボミちゃん、早く行こ」

「はいはい」

紅葉に急かされて歩き出すツボミ。大神も手紙を持ったまま歩き出した。

そして立ち止まった。彼の脇には、「燃えるゴミ」と書かれたゴミ箱。そして……

大神は何の躊躇もなく、その手紙を捨てた。

「大神！　お前、何てことを！」

即座に桜が大神の胸倉を掴んで壁に押し付ける。純粹な好意による手紙。それを捨てた大神が許せなかったのだろう。しかし、対する大神は平然としていた。そして、平

然と言った。

「言ったでしよう？ 交流する必要なんてないって。ましてや、ガキの恋愛ごっこに付き合うほど僕は暇じゃないんですよ」

「な……………」

人の気持ちなんてまるで考えてないような言葉。桜自身、恋はしたことないが好きなの相手に手紙を出すことがどれだけ勇気があることかはわかっていた。だが、大神はその勇気も恋心も切り捨てた。桜は確信した。大神はやはり冷たい人間だ、と。

「そんなこと言ってるといつか痛い目見るんだからな！ ざまーみろだぞ！」

「大神！ お前が教室に入ることは、この桜小路桜が絶対にさせぬ！」

「……………何やってるんですか、あなたは」

全ての授業が終わって放課後になった時間。1—Bの扉の前で、桜は胴着姿で教室に入ろうとする大神を通せんぼしていた。桜の足元では、『子犬』が呆れた顔をしていた。

「僕は鞆を取りに行きたいんです。通してくれませんか？」

「いかん！」

「なぜ？」

「う……うるさい！ とにかくここは通さないのだ！」

やる気十分な桜と意味がわからない大神。二人のやり取りが平行線のまま続く。しかし、それが曲線となる出来事が起きた。

「ひーたんのみーたん、見つけたの〜」

「ひゃー！ ふ、藤原先輩！」

「副会長、飛びつくのは相手を驚かせるのでやめてください」

「夜原先輩まで！」

突然、寧々音が桜に後ろから飛びつき桜の胴着を脱がした（中にTシャツは着ている）。そして、それを優が呆れ顔で注意した。二人の登場で大神と桜の話は完全に途切れた。

「桜ちゃんの胴着（コスプレ）姿が寧々音を呼んだの〜」

「胴着はコスプレではありませんよ、副会長」

自由奔放な寧々音。優は呆れ顔になりながらも寧々音の言葉に反応していた。すると、寧々音が何かに気づいた。その視線の先にいたのは『子犬』。一人と一匹の視線が交差した。その瞬間、彼女たちは戦闘態勢となった。

「しゃー!」

「ワン!」

「ちよ! 藤原先輩!」

「どっちが上か決めたいようですね」

桜が寧々音を止め、大神が『子犬』を掴んで止めつつ争いの原因を読み取った。犬同士ならば納得するかもしれないが、相手は人間である寧々音。まったく意味がわからない。

「そ、そういえば藤原先輩。先日、御姉弟にお会いしました。優秀な御姉弟で……」

『子犬』との張り合いをやめて、桜の胸に顔をうずめる寧々音。桜はそれに耐えながら、弟である刻に会ったことを報告した。

すると、寧々音は桜の顔を見上げた。そして、いつものゆつくりとした口調で言った。

「おかしな桜ちゃん。ひーたんにはみーたんがいるけど、寧々音には姉弟なんていないの〜」

「え!？」

「……」

寧々音の言葉に驚きを隠せない桜とそれを黙って見ている優。桜は詳しく聞こうと寧々音を問い詰めようとした。

「ど、どういうことですか？ たしか、刻君がそうだつて……」

「Z」

しかし、当の寧々音は桜の胸に顔を埋めたまま寝ていた。これでは話は聞けまい。だが、その眠りはわりとすぐに覚めた。

「虫！ 虫いた！」

寧々音は地面を這つて移動する虫を見つけ、それを這つて追いかけていった。寧々音の奇想天外さに振り回され、桜は聞きたいことを聞くことができなかつた。

「姉弟がいなくて……。どういふことですか、夜原先輩！」

桜は、寧々音を追いかけずにその場に残つた優に話を聞くことにした。優は相変わらず桜と目を合わせることはなく、ぶつきらぼうに答えた。

「オレたちは『コード：ブレイカー』、『存在しない者』だ。『存在しない者』には名前も戸籍も存在しない。全ては『エデン』から与えられた偽りのものとなる。もつとも、家族とは完全に縁を切ることになるがな。個人を特定できるものは全て抹消され、家族



から完全に孤立する。彼女が刻のことを知らないのはそれが理由だ」

「そ、そんな……」

自分の存在を表すものを全て抹消され、愛する家族からも孤立する。『コード・ブレイカー』がそのような過去を持つていることを桜は知らなかった。だがそれは、彼ら『コード・ブレイカー』の目的が、家族から孤立することになっても成し遂げたいものであるということの意味している。そこまでの覚悟を抱えて、彼らは悪を裁いているのだ。

「まあ、刻もこうなることは覚悟して『コード・ブレイカー』になったんだ。気にするほどのことじゃない。それより、あれはいいのか？」

「え？」

優が指差した先。そこにあつたのは、1—Bの扉を開こうとする大神の姿だった。桜は慌てて大神を止めた。

「駄目だ、大神！ 開けてはならん！」

「……桜小路さん。もしかしてあなた、何かオレに隠してませんか？」

「そ、そんなことは……」

言葉に詰まる桜。それはつまり、隠していることを認めたということと同義だった。

「あなたがオレを教室に入れたくない理由……。それは彼らにオレのことを話したからですか？ だとしたら、余計なことをしましたね。だったらオレは、片っ端から全員

……」

大神の左手から手袋が外される。それは、これから異能を使うという合図。彼がクラスメイトたちを本気で殺そうとしているということだ。

「や、やめ……」

桜の制止も空しく、大神は扉を開いた。

次の瞬間、聞こえてきたのは巨大な叫びだった。

『大神君、ようこそ！ 1年B組へ！』

「……え？」

マイクによつて叫びのようになった前田の声。それに呼応するかのように鳴るクラッカー。パーティー会場のような飾り付けがなされた教室内。そこは、大神が想像していた状況とはまったく違っていた。

「歓迎会、遅くなってゴメンね〜！ 本当はカラオケでやりたかったんだけど、大神君のバイトの都合もあるからさ！ 色気ないけど教室でやることにしたんだ！ ほら！

主役はこれ被って！」

クラッカーを持ったあおばが大神に話しかけ、大神に手作り感が漂う円錐型の帽子を被せた。すると、クラスメイトが一斉に大神に話しかけに来た。その内容は、大神に対する質問だった。以前はどこに住んでいたのか、部活は決めたのか。そんな質問ばかりだった。さらに、紐によってまとめられた紙の束を渡された。

「これは？」

「名簿だよ！ お前がオレたちの名前を間違わないようにな！」

中を見てみると、クラスメイト一人一人の名前と写真、そして大神に対するメッセージが一言書かれていた。

「……なんでこんなことを？」

素で理解できないらしく、ポカンとした顔で大神が訪ねた。すると、クラスメイトたちは笑顔のまま返した。

「決まってるんだろ！ オレたちは一年間同じクラスなんだ！ 楽しくやった方が得だろ！」

「それに、大神君っていつも笑ってるけど桜以外とは話しくそうだったし……。もしかししたら、無理して笑ってるんじゃないかって心配してたんだよね」

「よろしくな！ 大神！」

「よろしく！」

クラスメイトたちに囲まれる大神。その様子を、桜と優は廊下から見ている。

「……なるほど。だから、お前は大神を止めていたわけだ」

「私も今朝になって知ったのです。あおば……親友から、準備をする間だけ大神を教室に入れないようにしてほしい、と。これで大神もクラスの皆と仲良くするでしょう」

そう。今朝、あおばが桜に言ったのはこのことだった。だから、桜は大神を止めていた。まあ、それが露骨すぎたため大神に変な疑惑を持たせてしまっていたが。

優は桜の言葉を聞くと、微笑を浮かべた。桜はそれを見て疑問符を浮かべる。

「何がおかしいのですか？」

「こんなことで大神がクラスメイトと仲良くなるとは思えないがな。だがまあ、少しは接し方が変わるんじゃないか？ 保証はないがな。……それじゃ、オレは部外者だから行く。せいぜい楽しめ」

そう言つて、優はI—B前から立ち去ろうとした。しかし、それは思わぬ形で止められた。

「あ！ 夜原先輩じゃないですか！」

突然、背後から声をかけられた優。声をかけたのはあおば。おそらく桜を呼びに来て、立ち去ろうとした優を見つけたのだろう。声をかけられたことで、優は立ち止まっ

て振り返った。もちろん、あおぼと目は合わせていない。

「ちようどよかった！ 夜原先輩も入ってくださいよ！ 大神君の歓迎会と一緒に夜原先輩のおかえり会もやりましょう！」

「え？ いや、オレは……」

慌てて断ろうとする優。しかし、あおぼはその隙を与えなかった。

「ツボミ！ 紅葉！ 夜原先輩の分の帽子用意して！ 皆ー！ 夜原先輩のおかえり会も一緒にやろー！」

「お！ いいじゃねーか！ よし！ 盛り上がっていいこうぜ！」

トントン拍子で話が進んでいった。ただ、当の優は必至で断ろうとしていた。

「待て、オレは別に……」

「ほら、夜原先輩。一年生とも交流しましょうよ」

「海外留学のお話、たくさん聞かせてくださいね」

「ちよ……！！ 引っ張るな、おい！」

「夜原先輩！ 入りまゝす！」

「人の話を聞けええええええ！！」

その後、1—Bの教室では大神の歓迎会と優のおかえり会が盛大に行われた。

「……………」

「夜原先輩、女子にたくさん話しかけられたからってそんなにぐったりしなくても」

「黙れ……」

まったく力が入ってない言葉。その顔も、どこか青ざめていた。夕日が照らす屋上で、優はぐったりと座り込んでいた。

大神の歓迎会と優のおかえり会はかなり盛り上がった。ただ、優にとっては苦痛なことが起きた。先輩で生徒会役員。さらには海外留学を経験してきたということになっている優は、女子生徒からの人気がすごかった。それだけなら一応、男子生徒もいたので問題はないが、とある問題が発生した。女子生徒たちと目を合わせないために顔をそむけていたのだが、その行動が女子生徒たちから「可愛い」と評判で余計に女子生徒に話しかけられる回数が増えていった。まあ、自分で自分の首を絞めたようなものだが。

「よかつたではないですか。うちのクラスの女子と仲良くなれて。なあ、大神」

桜が大神の方を向いた。しかし、大神は渡された名簿を何か言いながら見ていた。つまり、無視されたのだ。それでも、桜はめげずに話しかけ続けた。

「大神。たしかに卒業したら人は忘れてしまいかもしれない。それでも、同じクラスにいる間は仲良くしてもいいではないか。卒業なんてまだ先のことだ。だからお前ももう少し……」

「必要ない」

その瞬間、名簿が青く輝いた。大神の左手から発せられた『青い炎』によつて。

「お前！ 何をする！ せつかく皆が……！」

桜は血相を変えて大神から名簿を奪い取った。そして、手で叩くことで『青い炎』を消した。燃え始めて炎が小さかったからなのか、桜が異能を打ち消す珍種という存在だからなのか。まあ、それはどちらでもよいだろう。

必死な桜に対して、大神は動揺も何も見せずに夕日を眺めていた。そして、ポツリと言った。

「物は嫌いです。人が死んでも物は残るから。だから、先に片付けておきたいんですよ」

それは、どこかいつもの大神とは違った様子だった。冷たいようにも聞こえるが、それだけではないような。そんなことが感じられる言葉だった。すると、大神はまたポツリと続けた。

「ですが、心配はいりません。載っていたデータは全部覚ええました。あいつら、忘れる

と面倒そうですから」

「……………え？」

大神の言葉を聞いて、大神の目の前にいた桜はポカンとした。

そう、大神は覚えた。クラスメイトの名前と顔を。だから名簿は必要なかった。クラスメイトの名前は「記憶」として残した。だから「物」である名簿は必要ないということだ。

「……………フ」

優が静かに笑った。それを聞いて、大神は少しだけ眉間にしわを寄せた。

「なんだ」

「いや、めんどくさい奴だと思っただけ」

「まったくその通りです。必要ないと言っておきながら、しっかりと覚えているではないか」

桜も微笑を浮かべながら優に同意した。そして、大神の肩をポンポンと叩いた。

「まあ、実によいことだ。その調子でクラスメイトの皆とも仲良くしていくのだぞ」

「……………覚えただけでいいでしょう。かかわる気はありません」

「なんだと！」

肩に置かれた桜の手を払い、相変わらずな態度の大神。しかし、桜は感じていた。大



神のこの態度は、ひよつとしたら不器用の裏返しだと。本当は、自分たちを照らすこの夕日のように暖かな心を持った男なのではないか、と。

## code : 05 ロスト

「急にいなくなっただと思えば、こんな所でゴミと戯れて何やってるんですか？ 桜小路さん。珍種であるあなたの観察をしている僕の身にもなってくださいよ」

「お……大神！」

とあるビルの屋上で、『子犬』を抱えながら大神は言った。その手に、破壊された小型の発火装置を持って。

大神の歓迎会から数日が経った。現在、輝望高校周辺の地域一帯で連続放火事件が話題になっていた。自動発火装置による無差別な放火で何人もの命が失われたというものだ。大神と桜のクラスメイトがその事件に恐怖する中、過去に大神が在籍していた中学校の同級生である野口のぐち 総介そうすけが大神と接触した。彼は大神のことを、当時の姓だった神子島かごしまと呼んで親しげに話しかけた。だが、大神にしてみればそれはどうでもいいことだ。野口を軽くあしらった後、大神は帰宅した。

だが、それも当然のことだ。歓迎会の日に優が言ったように、『コード：ブレイカー』は『存在しない者』。過去なんて無いも同然なのだ。それに、学校に通うこと自体、バイトを円滑に進めるためにしていることなので大神にとって深い意味はない。

そして帰宅時。桜はに大神に言った。存在も過去も消してまで悪を滅し『捜シ者』を見つけないのか、と。それに対して大神は、前回ののように感情を爆発させることはなく、普段通りに答えた。

「詮索するな、と言ったでしょう。それと、オレは悪を許さない。バイトであろうとなかろうと悪を見つけたら滅します。オレの意志で」

桜はそれを許すはずがなかった。大神に悪人を殺させないために行動を始めた。どんなに小さい「悪」でも見逃さずに注意していき、「悪」の根源を断つことを決めた。その過程で桜は、例の連続放火魔に捕まった。さらに、驚きなのは放火魔の正体だ。放火魔の正体は大神の同級生だった野口総介。彼は桜に小型の発火装置を付けて束縛し、あろうことか『子犬』にまで小型の発火装置を付けたのだ。『子犬』を助けようとした桜だったが、無情にも『子犬』に付けられた発火装置のタイマーが「0」となった。そして、『子犬』がいた場所から大量の火の粉が上がった。

しかし、『子犬』は無事だった。大神によって助けられていた。『子犬』の無事を確認し、桜は涙を流した。

『子犬』……！ よく無事で……！」

「来やがったな」

そんな桜に対して、犯人である野口は強気な態度で大神を見た。そこには、学校で見

せた人懐っこい笑顔はなく、大神がよく見る「悪」の表情が浮かんでいた。

「お前も殺してやるよ、大神！ どうせオレのことを忘れた奴だ。それに、あの人にお前を殺すように頼まれたこともあることだし、一番派手な方法で殺してやる！」

その瞬間、大神が立っている場所の左右から爆発とも呼べるような巨大な焔が発生した。どうやら、野口が事前に仕掛けていた発火装置が起動したらしい。大神と『子犬』は、一瞬で炎に飲まれていった。

「大神！ 『子犬』ー!!」

「ハハハハ！ 我ながらタイミングが神だぜ！ 神！」

叫ぶ桜と笑う野口。しかし、次の瞬間にはその笑いは消えることになる。

「……ゴミが。こんな炎じゃチリ一つ燃やせやしない」

焔が消えた。消火したのではない。大神の『青い炎』によって燃え散らされたのだ。焔すら燃え散らす『青い炎』の威力に、桜はただ驚愕していた。そして、それは野口も同様だった。

「な!? 左手から炎が!? あ、ありえない！ 来るな！ 化け物!!」

どうやら異能の存在は知らなかったらしく、野口は震えながら後ずさっていく。

「ま、町中に発火装置が仕掛けてある！ 俺に何かしたら町中火の海……」

とことん往生際の悪さを見せる野口。すると、彼の足元に何かが投げつけられた。

「ヒッ!?!」

野口は思わずその場で尻餅をついた。見てみると、グチャグチャに捻じ曲げられ丸型に固められた複数の発火装置だった。完全に壊れているようで、タイマーが作動しているものは一つもない。だが、妙だった。発火装置は、まるで人の手で捻じ曲げられたかのように丸形にされていて、よほどの力で投げつけられたのか床に完全に埋まっていた。さらに、床には数本のヒビが入っている。こんなことをやってのける人間を、大神は一人しか知らなかった。そして、その人物は大神の後ろから現れた。

「発火装置はすべて破壊した。残念だったな」

「夜原先輩!」

やはり優だった。おそらく、『脳』の異能で筋力を強化して発火装置を捻じ曲げ、野口の足元に投げつけたのだろう。

「余計なことを……」

大神が不快そうに優を睨む。すると優は、ポケットから携帯電話を出して大神に見せた。

「お前のエージェントから連絡があったんだ。手伝ってほしいとな」

「ふん。まあいい」

そう言うと、大神は野口に向かって歩き始めた。一歩ずつ、静かに距離を詰める大神。

対して野口は、大神が一步近づぐごとに体の震えを大きくさせている。すると、何を思ったのか野口は急に左手を差し出した。

「ま、待てよ！ と、友達じゃねえか、大神！ さあ、仲直りの握手だ!!」

「お前……!」

優が苛立ち氣に眉をひそめた。どうやら、今回のことをケンカ程度に感じているらしい。先ほどは殺してやると言った相手に友達と言って許しを請う。都合のいいものだった。あつさり切り捨てる。大神ならそうすると優は確信していた。しかし……

「……………」

「お、大神……………」

大神は応じた。彼の握手に。しっかりと左手と左手を掴み合い、哀しみを込めた眼をして。

「…………お互い変わったな。だが、もうあの頃には戻れない。…………せめて俺の手で送ってやる。左手の握手は別れの握手だ」

大神の左手に『青い炎』が灯る。そして、野口の左手に燃え移った。『青い炎』はあつという間に野口の全身に燃え広がった。

「ヒアアアア!! 友達を燃やすなんて…………! この悪魔…………!! この親殺し!!」

燃え散りながら大神に罵声を飛ばす野口。すでに皮膚は焼け焦げ、ただの黒い影のよ

うな見た目をしていた。

「お前なんて、今に殺される……。お前の『捜シ者』に……な………」

『捜シ者』の名を聞き、大神の目に殺意が宿る。野口がその名を知っているということは、今回の件には『捜シ者』が絡んでいるということだろう。そして、野口を悪に堕としたのもおそらく……。

「……さて、今日のバイトは終わりだ。オレは帰る」

「夜原先輩！ ちょっと待ってください！」

帰ろうとする優を、大神に拘束を解いてもらった桜が止めようと近づく。すると、優はその顔に明らかな嫌悪の表情を浮かべた。

「黙れ、動くな、オレに触れるな」

ストレートな言葉を連続で述べると、優は下に向かって飛び降りた。『脳』の異能を持つ彼なら屋上から飛び降りようと問題はないだろう。問題があるのは、どちらかという  
と桜の方だ。

「うう……。やはり近づこうとすると冷たいのだ……」

まあ、原因は田畑邸で桜の自業自得な気もするが、優の露骨な態度を見るとどつちが悪いかとも言えなくなってくる。

「…………いや、明日だ。明日こそ頑張るのだ。……大神」

桜は優との仲を改善するという誓いを改めて立てると、大神の方を見た。大神は、野口が遺したゲーム機を『青い炎』で燃え散らしていた。野口という「人」は死んだが、ゲーム機という「物」は遺った。歓迎会の日に言った通り、彼にとつてこれは気持ちのいいことではないのだろう。

「この事件は、お前の『捜シ者』が絡んでいるのか？野口君を悪に堕としたのは『捜シ者』なんだろう？」

「……………」

桜は大神の顔を覗き込んだ。しかし、大神は答えなかった。言葉で答えようとしなかった。そのかわり……

「ツ……………」

「お、大神…………？」

突然、大神が桜に覆いかぶさった。それはまさに、外国人が挨拶したりする時などに用いるハグというものだった。



「そうか！ お前もやつとハグする気になったか！ うむ、言葉はいらん！ いらんぞ！ ……ん？」

バンバンと大神の背中を叩く桜。実は、このハグというのは桜にとつては驚くことでも何でもない。むしろ、こうなることを待っていたのだ。以前から大神に人殺しをやめさせるために、桜はハグすることで命の大切さや人の温かさを伝えようとしていた。まあ、大神はその度にスルーしているのだが。

そんな大神が突然、自分からハグしてきたのだが桜は不審がらずにそれを受け止めた。しかし、すぐにある異変に気付いた。

「大神！ お前、体が異様に冷たいぞ！ どうしたんだ!？」

相手の体温が直に伝わるハグ。だからこそ気づけた異変。それは、大神の体温が異常に低いことだ。見てみると、大神自身も震えていて冷や汗らしきものもかいていた。あまりにも突然のことに桜は混乱していた。すると、その場に電子音が鳴り響いた。

「……………む？ 携帯が鳴っている？」

音がする方を見ると、携帯電話が落ちていた。それは、大神がいつも使用している最新式の携帯電話だった。

「お、大神のか……………？ まさか、いつものバイトの電話？」

大神は今まで、バイトに関する話を全て電話でしていた。それはつまり、  
“エデン”

という謎の組織からの電話だということだ。桜の耳に電子音がこだまする。ゴクリと喉を鳴らすと、桜はゆつくりと携帯を手に取り、通話ボタンを押した。

「は、はい……！」

『……やっぱり倒れたのね。だから忠告したのに』

聞こえてきたのは女性の声。凜とした美しい声だった。しかし、桜はどこかで聞いたことがあるように感じていた。

『「まったく世話のかかるマスターです」』

すると、電話の向こうから聞こえる声と同じ声が、桜の背後から聞こえた。振り向いてみると、そこに立っていたのは意外な人物だった。

「か、神田先生……!?!」

「……すみません。遅刻しました」

翌日、野口が家の都合で転校したという話題で持ち切りになった1—Bに、大神が遅

刻して教室に入ってきた。昨日同様、具合が悪そうだ。

「こちら大神君！ 遅刻厳禁よ！ 体調悪いの？」

そんな大神を担任である神田先生が叱った。傍から見れば普通の光景かもしれないが、桜はただならぬ雰囲気で見っていた。

昨日、体に異常を起こした大神の下にやってきた神田。彼女は桜に「明日は遅刻厳禁」と先生らしいことを言うと、大神を連れてどこかへ行ってしまった。神田は大神と……『コード：ブレイカー』と関係があるのだろうか。そんな疑問が桜の中に浮かんだ。大神に来るバイトの電話は神田からのものだったということとはわかり、疑問の答えはほとんど出ているようなものかもしれないが、だが、桜は真実を知るために、神田がいるであろう体育準備室へと向かった……と思ったら思わぬ障害物（？）が現れた。

「……………」

廊下には本来ないはずの丸テーブル。その上にはティーセットが置かれていて、制服を着た一人の男子生徒が椅子に座り紅茶を飲んでいた。桜はズンズンと近づき、その男子生徒に話しかけた。

「平家先輩。すいませんがどいてもらえませんか？ 通れないので」

彼の名は平家 正臣。輝望高校の生徒会書記を務めていて、輝望高校一の変人とも呼ばれている。その理由は、今も行っているこのティータイムだ。彼はいつも、どこかし

らでお茶を飲んでいる。どこから出したのかわからない丸テーブルと椅子を用意して。その手に、明らかに高校生が読むようなものではない如何わしい書物を持ちながら。

「ああ……これは失礼しました。お詫びに一杯どうですか？」

「む……？ おお、それはお気遣いどうも」

謝罪した平家に促された桜は、周囲の目を気にすることなく平家の向かい側の椅子に座った。そして、何食わぬ顔でお茶を飲み始めた。

「うむ。美味しい」

「……は日当たりが最高でしょう？」

平家も桜を歓迎しているようで談笑を始めた。しかし、桜が自分の目的を思い出したことでそれは中断された。

「おお、いかん！ 先輩、私には行かなければならない所が」

「そうですか。……あなた気を付けてください。死相デッドフェイスが見えてますよ」

桜が平家の横を通り過ぎる際、平家がポツリと呟いた。その顔に、どこか妖しさを感じさせる笑みを浮かべて。

「………そうですか。気を付けます」

桜は礼を言うのと、体育準備室に向かって再び歩き出した。

「神田先生、あなたは一体……」

授業がない時に神田がいつも在室している体育準備室に、異様な緊張感が漂っていた。それは、普通の高校ではまず感じるほどの無い程のものだった。それもそのはずだ。桜が体育準備室に入った瞬間、桜は神田にハサミやカッターという武器を向けられた。もちろん、相手が桜だとわかると神田はすぐに下げたが。その時、向けられた殺気は明らかに本物だった。大神ほど強くはなかったが、背筋が冷えるような鋭い殺気だった。

殺気を抑えた神田は桜の問いを聞くと、髪を縛っていたゴムを取り髪を自由にさせ、いつもとは違う雰囲気を見せつつ問いに答えた。

「私は『エデン』のエージェントの一人、神田。『コード：ブレイカー』である我が主人（マイ・マスター）をお護りするのが私の仕事です」

微笑を浮かべる神田。その微笑も話し方も何もかも、今まで桜がクラスで見てきた神田のものとは違っていた。すると、奥の方から声がした。

「まあ、いずれわかることだろうとは思っていたがな」

「夜原先輩!」

部屋の奥を見ると、優が胡坐をかいとお茶を飲んでた。さらに、ふと視線を動かすとベッドに誰かが寝ていたのが見えた。それは、桜が体育準備室に向かおうとした時、いつの間にか消えていた人物。

「大神!」

そう、大神だ。苦しそうに顔を歪め、冷や汗をかいている。その隣では、桜についてきていた『子犬』が必死に大神の顔を舐めていた。

「未だ体温は低く、体調もすぐれぬまま。このような時は私がお護りします」

「……誰も手を貸せとは言っていない」

「私が勝手にしているだけです。お気になさらず」

片膝をつけて大神に頭を下げる神田。その動作一つ一つに凛々しさがあがり、桜はますます普段との違いを感じていた。そう、まるで学校とバイトの時とで顔を使い分ける大神のような感じを。

「先生……。先生は全て知っていたのですか? 『コード・ブレイカー』のことも……。今までの先生の姿は嘘だったのですか!? 野口君のことだって、今朝のは演技で……」

「……野口君? 野口君……。……うっ」

野口の名を桜が出した途端、神田の表情がどんどん曇っていった。そして……

「野口く〜ん！　こんなあんまりよく〜！　もう会えないなんて〜！」  
ボロボロと泣き出してしまった。その姿は先ほどまでとは違い、凛々しさの欠片もなかった。

「……フランダーズの猫」

「バトラツシユ〜！」

「アルプスの少女ハイジーン」

「立てた〜！！　うわああ〜ん！！」

「……フツ。愉快だな」

神田が泣きだしたと思つたら、優が感動モノの名作アニメのタイトルを次々に言い出した。神田はそれにいちいち反応して号泣し、優はそれを見て心から愉快そうな笑みを浮かべていた。

「う〜……。ティツシユ、ティツシユ……ウギヤ〜！」

泣きすぎたため、ティツシユを取ろうとする神田。すると、涙でよく見えないためか足を挫いて思いっきり転んだ。涙もろく、足を挫いて転ぶその姿は、桜がいつも教室で見る神田の姿そのものだった。そんな神田の姿を見て、桜はただただ戸惑っていた。

「〜、これは一体……」

「……何を考えているが知らないが、神田は実力は確かだが自分自身を偽れるような

奴じゃない」

大神の言葉が意味すること。それは、神田が教室で見せていた姿は偽りのものではなく、神田の本当の姿であるということ。先ほど見せていた凛々しい姿も、教室で見せるドジな姿も、その両方が神田の本当の姿なのだ。

「叔母を訪ねて三千里」

「うわあぁ〜ん!!」

ただ、当の神田はまだ優のおもちやとなっていた。意外と優も意地の悪い性格である。

「次は……」

「呑気だねえ。そんな呑気なことやってるヒマないんじゃないノ？」

「刻君！」

体育準備室の窓の向こう。そこにいたのは刻だった。その手には、相変わらず煙草があつた。

「ヤッホー、桜チャン。大神が倒れたって聞いて見学に来たヨ」

刻は窓を開けると軽やかに中に入ってきた。今まで外にいたのももちろん土足なのだ……まあ、気にしてもしょうがないだろう。

「大神〜、外は暑いヨ〜。お前は冷え冷えでいいネ。ん〜、冷たくて気持ちいい〜」



「…………どけー！」

「おっと」

「ぐ……………」

煙草を啜えて、大神にくつつ付いて頬をすり寄せる刻。大神は手で振り払おうとしたが、刻はそれをいとも簡単に避ける。すると、体調が悪い状態で急に動いたためか、大神の体がグラリと傾いた。

「マイ・マスター！ 無理は禁物です！」

大神の体を神田が支えた。それを見て、刻はニヤリとした。

「へっ。悔しかったら『青い炎』で攻撃してこいヨ。ホラホラ。……つて無理だよネ。『青い炎』を使いすぎると体温が急激に下がって『青い炎』は二十四時間使えなくなるんだもんナ」

「なに!? 大神が『青い炎』を使えない!?」

刻の口から語られた衝撃の事実。それを補足するように優が口を開く。

「ロスト。異能者が異能を使いすぎると起こる現象だ」

今まで無敵と思っていた異能者の思わぬ弱点。思わぬ形でそれを知った桜。そして、勝ち誇ったかのような笑みを浮かべて大神に話かけた。

「そうか！ それはおめでどう、大神！ これでもう人殺しはできんな！ 参ったか

!

「なっ……!?!」

満面の笑顔で大神の肩を叩く桜。対して大神は、桜の表情に明らかに怒りや苛立ちを感じていた。

『コード：ブレイカー』などやめて部活に入れ。柔道部なんかどうだ？ お前は軟弱だからな。どれ、私が案内してやろう」

「おい、桜小路。聞き逃しているようだからもう一度言う。ロストは二十四時間の間だけ異能が使えなくなるだけだ。昨日の夜にロストしたから今日の夜には戻るぞ」

「なんと!?!」

大袈裟なポーズで驚きを表現する桜。どうやら本当に聞き逃したらしい。

「ううむ……!?! ならば、早急に対策を考えねば。まあ、まずは部活だな。ロストしている間だけでも部活動に励むのだ。さあ、行くぞ大神」

今日の夜には元に戻ることに頭を抱えていた桜だったがすぐに気を取り直したよう  
で、体育準備室の扉を指差した。すると、神田が大神を支えながら桜のことを見た。

「申し訳ありませんがそういう訳にはいけません。桜小路さんの行動は制限させていただきます。我々が行う今度の仕事は、あなたの少々特殊な家庭事情が関係して  
ますので」

「え？」

「桜小路さん。あなたの命が狙われているのです」  
「……え？」

## code : 06 桜小路家へ

「神田先生は？」

「サポートに徹するって。『マイ・マスターは役に立たないけど、刻君がいれば安心だワ』って言ってたし」

「……あまり下らない嘘をつくな」

「うっせえ。てか、元々桜チャンを護る今回のバイトは大神のバイト……。大神が異能をロストしたおかげでオレが呼ばれたんだシ。つか、なんでお前もいるんだヨ」

「このバイトはオレにも話が来ていた。元々はオレと大神でやる予定だったらしい。だからオレがここにおいても不思議じゃないだろう」

「へっ。『コード：07』と一緒にか。やっぱり『コード：06』は下っ端ってことか。かわいいそうだね。最強の大神君」

「……………」

神妙な顔をしている桜の問いに、刻が軽口を交えながら答えた。その後、突っかかってきた優と苛立ち気に話しながら、大神に嫌味を言う刻。大神は、眉をひそめながらただ黙っている。

だが、それは仕方のないこともある。大神は昨日の夜から異能を使いすぎによって起こる、異能が二十四時間使えなくなるロスという状態となっていた。また、この時の大神は異能が使えなくなるだけでなく体温が著しく下がる。そのため、今の彼は立つて歩くだけでも精一杯なのだ。

「そもそも、なぜ私が命を狙われる？」

桜が最も気になっていいる疑問を口にした。今より数時間前。担任の神田が『エデン』のエージェントであることが判明した。そして、その神田の口から出た話が、『コード：ブレイカー』が行う次の仕事に桜の特殊な家庭事情が関係しているということ、そして桜の命を狙われている、というものだった。今、彼らはそれに関わる仕事を行うため、ある場所に向かっていった。

「………忘れたとは言わせないヨ」

刻が言い終わると同時に、彼らは立ち止まった。目的地である………桜の自宅に着いたからだ。だが、それはどう見ても一般的な家庭とは言えなかった。なぜなら………

「桜お嬢！ お帰りなさい!!」

武家屋敷のような豪邸、スーツを着た男たちが玄関までの道を挟んで並び、桜に向かって頭を下げていた。スーツを着た男たちの出迎えと「お嬢」という敬称。それらが意味する答えを刻が口にした。

「君はこの任侠組織、『鬼桜組』組長の娘なんだかう」

そう。これが神田の言っていた桜の特殊な家庭事情。彼女の実家は任侠組織である『鬼桜組』。桜はその組長の娘なのだ。これでは、命が狙われていようと警察に助けを求めるとはできない。

「そんなに家は特殊か？」

しかし、当の桜はあまりわかっていないようだった。そんな桜を見て、刻は呆れたような顔になった。

「自覚ないのね……。ま、でも安心していいヨ、桜チャン。オレたち『コード：ブレイカー』は法で裁けない悪を裁く。それは『法で護れない人を護る』ってことでもある。ヤクザの娘となれば警察にはそう簡単に頼めない。そんな君はこのオレが護ってアゲル」  
こんな時でも軽口を交える刻。だが、彼の言っていることは間違いではない。警察に助けを求めることのできない桜が命を狙われている。その桜を護るといのが、今回の『コード：ブレイカー』たちの仕事なのだ。

だが、当人である桜はあっさりと言った。

「必要ない。自分の身は自分で護る。では失礼する」

そう言つて家に入ろうとする桜。刻は慌てて桜を止めようとする。

「ちよ！ じゃあ、アレ！ お友達として遊びに来たつてコトで！」

「……………うむ。それならよい。案内しよう」

機転を利かせて家に入ること自体は許された刻たち。桜は彼らを案内するためさっさと家の中に入った。そんな桜の背中を見ながら刻たちはひそひそと話し出した。

「オレがあいつの友達など虫唾が走る。さっさと訂正しろ」

「ウルセー！ だつたら帰れ、お前！」

眉間にしわを寄せて明らかに嫌悪を示す優。どうやら、桜に無理矢理目を合わせられたことをまだ許していないようだった。そんな優の態度を見て苛立つ刻だったが、優は平然とした態度で言い返した。

「バイトを受けた以上、帰るわけないだろう」

「チツ、うぜえな……………！ ……まあいい。最近続いている有力暴力団組長の子どもの暗殺。そのせいで組同士が疑心暗鬼に陥って今にも抗争に発展しかねない状況……………。それを防ぐためにも、ここでオレたちが止める必要がある。それに、『エデン』として観察対象の珍種に死なれるわけにはいかナイ。と言つても、本来ならオレのバイトじゃないしオレはサボっちゃおうかな。その時はロストした大神君と犬野郎の優がどうするのか見せてもらおうとするヨ」

「……………」

苛立ちながらも今回の仕事の背景を口にする刻だったが、結局は軽口で終わった。そ

んな刻を、大神は相変わらず黙ったまま睨んでいた。

話が終わった彼らは、桜の後を追って桜小路家に入っていた。

「おお……！」

桜小路家の玄関は見事の一言に尽きた。見た目からも予想できる通り和を中心とした仕様となっており伝統と格式を感じられた。普段は感情を表に出さない優も感動して目を輝かせている。

「うっわー、広っ！ こんな置物、ヤクザ映画でしか見たことないナア〜」

「アア!? なんやアンチャン！ ケンカ売つとんのか、コラ！ わしらはヤクザちゃう！ 任侠や！ 桜嬢のご学友でもそこんとこ間違わんでもらおうか！」

「はっ。」

わざとらしく大声で話す刻。すると、『鬼桜組』の組員たちが刻の言葉に真っ先に反応した。彼らにしてみれば、刻の言葉は馬鹿にしているようなものに聞こえたのだろう。組員たちはものすごい形相で刻を睨みつけるが、刻はそれでもおちゃらけてみせる。しかし次の瞬間、組員以上の形相と殺気を感じた。



「その通りだ……！ 刻……！」

「え？」

「任侠とヤクザは月とスッポン……！ 誇り高き任侠組織を！ チンピラの集まりのヤクザと一緒にするな！ 昔ながらの漢の集まりなんだよ！ 任侠つてのは！」

「は、はい……。ゴメンナサイ……！」

先ほどの目を輝かせていた状態とは真逆。鬼のような形相と殺気で刻に迫る優。その迫力には刻は思わず素直に謝っていた。そして、優の言葉を聞いた組員たちはワツと優の周りに集まった。

「おお！ そっちのアンチャンはわかつとるの！ その通りや！ わしらは誇り高き任侠や！ いやあ、嬉しいの！ 若いアンチャンにわかる奴がおるとはの！」

一人は優とぶんぶんと勢いのある握手をして、一人は優の肩をバンバンと叩いたり、優は組員たちになんか気に入られたようだった。

「いや、それほどでも。ところで、『鬼桜組』の組長と言えばあの方ですよ？ 『関東のあばれ龍』の異名を持つ……！」

「おお！ その通りや！ よく知つとるの！」

「あ、『あばれ龍』……？」

優の言葉に、組員たちは嬉しそうに、刻は大神の後ろに隠れて恐る恐る反応した。す

ると、優はペラペラと説明を始めた。

「弱きを助け強きをくじく仁義に命を懸けた昔カタギの漢の中の漢。任侠の世界の人間が畏れ、尊敬する漢。そこからついた異名だ。本名は桜小路さくらこうじ 剛徳ごうとくさんだ」

それは、言い方が悪いが桜が命を狙われる原因となっている男のことであった。『鬼桜組』の組長にして桜の父親。彼について生き生きと説明する優を見て、未だに大神の背中に隠れている刻は尋ねた。

「随分と知ってんな……。いくらバイトのためとはいえ、そこまで情報集める必要なくねーか？」

「何を言ってる。このことはこのバイトを受ける前から知ってたぞ」

「はあ!？」

バイトを受ける前から知っていた。それはつまり、ほとんど趣味の世界ということの意味していた。驚く刻を無視して、優は珍しく自分から桜に話しかけた。

「さあ、それより早く行こう。会うのは初めてなんだ。案内してくれ、桜小路」

「わかりました。しかし、夜原先輩は父上のファンだったのでですね。意外です」

目こそ合わせないものの桜と普通に話している優。歩いていく二人の背中を見ながら、刻は小さな声で大神に尋ねた。

「なあ。なんであいつ、あんなに生き生きしてるの？ つーか、怖いんだけど……」

「……優は和風の物とか昔ながらのものが好きらしい。だからだろう」

「マジかよ……」

好きにしても限度がある。だが、優の前でそれらの物を馬鹿にするような発言はよそう、と刻は固く心に誓った。

「着いたのだ」

桜によって案内されたのは奥の方に位置する襖によって閉められた部屋。どうやら、

この中に剛徳がいるようだ。

「いよいよ『関東のあばれ龍』に……」

「まあ、そんな異名持つてるってことは結構強面な人なんだろうーナ」

もはや素で楽しそうな優に剛徳という人物について色々と予想している刻。大神は特に興味がないようで相変わらず無表情だ。

「父上。桜、ただいま帰りました」

桜が襖を開けた。そして、彼らは『あばれ龍』と対面した。

「……………や。おカエリ、桜チャン。ケホツ……」

(えええええ!!?)

あまりにも予想と違いすぎた剛徳の姿に、刻が大袈裟とも言えるほどの驚愕の表情を浮かべていた。それもそうだ。『あばれ龍』という異名を持ち、仮にも任侠組織のトップに立つ男だ。目を合わせるだけでも一般人なら気絶するような雰囲気を持った強面の男などを想像しただろう。しかし、そこにいたのは青白い顔に細長い体格をした明らかに具合の悪そうな男だった。

「桜チャン！ 無事か!? ん!? 今日も学校は元気で楽しかったかい!？」

「大丈夫です。父上」

剛徳は桜に近寄って娘の無事を確認していた。その様子を見るだけで、彼が桜を溺愛しているということが安易に予想できた。すると、剛徳は鼻血を出して倒れかけた。

「大声を出して鼻血とめまいが……。桜、救急箱を……」

「はい。父上は本当に病弱でいらっしやる」

二人の様子を見れば見るほど、『関東のあばれ龍』という異名が嘘に感じてくるよう

だった。刻はこっそりと大神に近づいて話しかけた。

「え……？ あれなの？ マジで？ なあ、大神？」

「……そうなんじゃないですか？ 別にどうでもいいですが」

平然と答える大神。刻は、剛徳と会うことを最も楽しみにしていた男の意見を聞くことにした。

「冷めてんな、お前……。なあ、優はどう……」

「……………」

「石化してやがる!？」

かなりシヨックだったようで、優はその場で固まっていた。期待が大きかった分、実際に見た時のシヨックも大きかったのだろう。

そんな中、桜たちが入ってきた襖とは別の襖が急に開いた。そこから現れたのは、セーラー服に、クマの刺繍がなされたエプロンを着て、手にはお玉を持った可愛らしい少女(?) だった

「桜きゆんが男の子連れてきたってホント？ こんなこと初めて〜！」

少女(?) はパタパタと大神たち男三人に近づいた。石化していた優だったが、それには気づいたようでサツと目を逸らした。

「しかも三人!? キャー! 誰が本命!? しかもこっちの彼ハーフじゃない!? カッ

コイイ〜！」

ブンブンと両手を振って騒ぎ立てる少女(？)。すると、刻が彼女に優しく話しかけ始めた。

「何？ 君、桜ちゃんの妹？ もしかして、オレに興味あるのかな？」

しかし、次の瞬間に桜が発した言葉で、刻の顔はまたも驚愕に変わる。

「コスプレもほどほどにしてくださいと言ったはずです。母上」

「母あ!？」

またも衝撃の事実だった。どう見ても少女にしか見えない少女(？)の正体は桜の母親だった。

「だって、似合うんだもん。ねー、ゴー君」

「幼妻ユキちゃんがかわいすぎてまた鼻血が……」

病弱で今にも死にそうな父親に少女にしか見えないコスプレが趣味らしい母親。これが任侠組織『鬼桜組』の組長とその妻なのである。また、妻である桜小路ユキに寄り寄られ鼻血を出す剛徳の姿を見て、優は再び石化したというのは余談である。

「姉さん！ いただきやす！」

「……桜ちゃんの家って、いろいろ強烈だネ」

「そうか？ 気にしたことはないぞ」

剛徳とユキに挨拶した三人は、「客人が来たら同じ釜の飯を食う」という『鬼桜組』のしきたりによって開かれた宴会に出席していた。一般家庭では考えられないような家族構成やルールに刻は少し引いていたが、桜はまったく気にしていないようだった。やはり、自分の家のことなので慣れてしまっているのだろう。ちなみに、先ほど何度も石化していた優はというと……

「人は見かけによらないんだよ……。病弱だろうが『あばれ龍』に違いないんだ……。ハ、ハハ……」

乾いた笑いを浮かべながら宴会に参加しようとしていた。だが、その手は異常なほど震えているため、箸を全く使えていない。

一方、桜は組員たちと賑やかそうに話していた。まあ、会話の内容を聞いてみると、「桜嬢に媚なんて早い！」と、大神たち三人の誰かが桜の恋人か何かだと思っ込んでいるようだった。会話の内容は何にしろ、組員たちに囲まれて話す桜を見て、大神はポツリと呟いた。

「……いい御家族ですね」

「ああ！」

大神の言葉に、桜は満面の笑みで答えた。

「手品いきますよ、手品〜」

「おおー！ 浮いてやがるぜー！」

「と、刻君……。それは……」

宴会もだいぶ盛り上がってきて、刻は『磁力』による手品を披露していた。異能を使う人間から見れば明らかに異能の無駄遣いだが、それを止める者はいない。優は何とか正常に戻って食事をしており、大神はいつの間にか宴会を行っている部屋から姿を消していた。

「……む？ 大神と父上は？」

桜が大神と剛徳がいなことに気づいた。桜は、近くにいた優に聞いてみることにした。

「夜原先輩。二人がどこに行ったか知りませんか？」



「知らない」

端的に答える優。どうやら、この返答にも慣れたようで桜は気にせずを考え出した。「そうですね……。では、探してきます！」

そう言うと、桜は部屋を飛び出した。こういう時の桜の行動力は凄まじいものがあった。二人がいる場所の見当がついているかどうかは知らないが。

「……………ふう」

「ねえねえ。優君だったよね？」

大きく息を吐いた優の隣に突然やってきたのはユキだった。優は慌てて目を逸らす。

「は、はい……………」

「さつき桜きゅんが言ってたんだけど、優君がゴー君のファンってホント？」

「はい……………。素晴らしい方だと思っっています……………」

「うわー、ユキちゃん嬉しい！ やっぱりゴー君はカッコイイよね！」

パタパタと手を振るユキと苦笑いを浮かべる優。どうやら、今の優にとつてユキと話すのは結構辛いものがあるらしい。優は、ユキのペースに飲まれまいと自分から話題を振ることにした。

「……………あの、一ついいですか？」

「な〜に？」

「その、剛徳さんは前から病弱なんですか？　桜さんを心配させないための演技……とかではないんですか？」

それは剛徳の姿を見たときから気になっていたものだった。仮にも『鬼桜組』の組長なのだ。それなりの実力があるはずなのだが、剛徳の姿からしてそんな実力があるとは思えない。だから、仮に病弱だとしてもそれは愛する娘である桜の前で演じている。嘘“なのではないか、と優は考えていた。……そうであってほしいという優本人の希望も入っているかもしれないが。

「演技なんかじゃないよ。でも、最近は大変なことしていないから大丈夫！」

あっさりりと明るく希望を否定された優。また乾いた笑いを浮かべながら話を繋げた。

「ハハ……。まあ、『鬼桜組』はこの雰囲気を見ても悪いことなんてしなさそうですもんね。これには何か理由があるんですか？」

「気になる？」

ユキが下から優の顔を覗き込んだ。優は視線だけを動かして目を合わせないようにして答えた。

「え、ええ……」

「……それはね、桜きゆんとゴー君が約束したからなの」

「約束？」

「うん。それは……」

ユキが話そうとしたその時。手品をしていた刻が手品をやめて、突然叫んだ。

「大神ー!! 北に四十五度の方向!!」

その瞬間、家の奥の方から窓が割れる音が響いた。その音を聞いて、宴会を行っていた部屋はパニックになる。

「な、なんだ!?!」

「い、一体なにがあつたの!?!」

パニック状態の中、優は刻に近づいてこつそりと話しかけた。

「始末屋だな」

「ああ。どうやら金属系の武器を使う連中みてーだ。おかげでオレの『磁力』で気づけたシ。けど、どうせザコだ。神田チャンが何とかするだロ」

「……そうだな」

満月が外の闇を照らす中、桜小路家に不穏な影がよぎろうとしていた。

## code:07 本気

「さあ、桜小路 桜。始末させてもらおう」

黒髪に白のメッシュという髪色をした男が武器を構えた。彼は始末屋である春人はるとはつきり言つて、状況は最悪だった。宴の最中に窓ガラスが割れ、そのせいで宴は中断。その原因は、桜を狙ったボーガン<sup>ボウガン</sup>を武器とする始末屋の攻撃だった。桜と一緒に、大神と剛徳もいたが、大神が剛徳から借りた刀でボーガンの矢を打ち落とし三人とも無事だった。また、始末屋も外にいた神田が始末した。

その後、剛徳は「行くところがある」と言つて家を出て、大神たち『コード：ブレイカー』三人は泊まることにした。そこに、新たな始末屋である春人がやつてきた。実はこの春人という始末屋。過去に大神が裁いたはずの「悪」だった。彼は、大神の『青い炎』で燃え散る自らの左手を切り離して生き残つたらしい。その春人の他に、外から銃を撃つ始末屋がいた。名は『壺49』<sup>いちじく</sup>。彼女は外にあるビルの屋上から桜小路家を狙撃していた。最初は刻が『磁力』によつて『壺49』の弾を防いでいたが、運の悪いことに刻がロストしてしまった。刻はロストすると、体が子どももの姿になつてしまい異能が二十四時間使えなくなる。三人の『コード：ブレイカー』のうち二人がロスト。目の前

には春人、外からは『壺49』。彼らは完全に追い詰められていた。

「……おい優。お前が何とかしろよな。お前しかまともに動けないんだシ」

ロストして子どもの姿になった刻がボソリと呟いた。しかし、優の返事は弱気なものだった。

「相手は大神が裁き損ねた春人だ。異能を使ってもそう簡単には勝てない。それに、下手に戦えば外の『壺49』に蜂の巣にされる。オレの異能は銃相手だと不利だ」

「お前ってホント不利な相手が多いよナ。そんなんで『コード・ブレイカー』になれたとかおかしい話だぜ」

「不利な相手？」

自分の命を狙う始末屋がいるというのに、疑問を遠慮なくぶつける桜。肝が据わっているのか、それとも馬鹿なだけなのか。……まあ、確実に後者だろう。

そんな桜の疑問に刻が優を親指で指差しながら答えた。

「こいつは異能の特性上、不利な相手が多いのサ。異能者相手も苦手だし、銃みたいな遠距離用の武器を持った奴も苦手。ただ身体能力が高くなるだけなら、特殊能力染みてる『青い炎』も『磁力』も防げないからネ」

「オレの異能の特性上、近づかなければ攻撃は出来ない。だから遠距離用の武器を持つた相手も戦いにくい。ただの人間を相手にしての近接戦闘なら問題はないんだが

な

「そ、そんな……」

状況が最悪であるということを改めて実感する桜。彼女は何かを考えるように俯くと、急に顔を上げて言い放った。

「この役立たずどもめ。お前達に護ってもらうなどまっぴら御免だ。私の方がよっぽど役に立つ。それでは、おひらきだ！」

そう言つて、桜は廊下を全速力で走つていった。『壺49』の銃弾が桜を狙つたが、一発も当たることにはなかった。桜の脚力はそこまでのものだったようだ。

残つた大神たちは、先ほどの桜の顔を思い出していた。そして、刻がポツリと呟いた。

「……あれつてあの顔だよナ」

「そうだな」

春人が来る少し前のことだ。大神たちは桜の部屋に招待された。その時にユキから桜が嘘をつくときに決まつた表情をするという話をされた。ユキ曰く、桜が嘘をつくときは必ず誰かのためについているらしい。だから、ユキは嘘をつかれてもよしとしている。さつきの表情はその表情。目は点になり、わざとらしく口角を上げた口。見間違えるはずがなかった。先ほどの桜の言葉は……嘘だった。

「あのバカが……！」

未だにロスト中の大神が桜の後を追っていった。いつの間にか、春人がいなくなっていたからだ。おそらく、桜を追っていったのだろう。その大神を追おうと、刻も走り出す。

「あ！ 待て大神！」

「ワン！」

刻が走り出すと、『子犬』もほぼ同時に走り出した。どうやら、刻に対抗しているようだった。

「バカか、お前！ 歩幅が違うんだから追い抜けるわけ……」

ない。そう言おうとしたその時、『子犬』がさつきと刻を追い抜かした。『子犬』は振り返って、刻を鼻で笑った。

「テメエ！ 待て！」

大神を追うという目的を忘れ、『子犬』を追いかけはじめる刻。すると、近くにあった部屋のドアが開いた。

「ねえ、どうしたの？ さつきから変な音が……」

「あ、ヤバ！」

出てきたのはユキだった。彼女が出てきたのは当然とも言える。なにせ、今までのやり取りは全てユキがいた桜の部屋の近くで行われていたのだ。桜の部屋でユキによる

桜の嘘をつく時の顔についての話が一段落した時に春人がやってきたので、ユキを避難させる暇がなかったのだ。『壺49』の銃弾の音など、普段の生活では聞き慣れない音が鳴り続けければ、誰でも不審に思つて確かめようとするだろう。だが、今の状況は危険すぎた。

「こうなつたら……お母さん！」

「え？」

ユキを部屋の中に入れるために、刻が子どもの姿を最大限に利用してユキに抱きついた。そのままユキを部屋に押しつけていき、なんとか彼女が怪我を負うことは回避できた。ついでに、『子犬』が刻の頭に噛り付いていたので『子犬』の無事も保証できるだろう。廊下に残つたのは、優一人。

「ナイスだ、刻。さて……」

優は銃弾が来た方向を見た。今は銃弾は発射されていない。どうやら弾を補充しているようだ。優は自分が取るべき行動を考えた。考えがまとまると、独り言のように呟いた。

「……さて」

次の瞬間、優は自分が着ている制服のボタンに手をかけた。そして、ボタンを一つずつ外し始めた。



「ああは言ったが……オレなりの対策ってものがあるんだよ。それを見せてやる……」

「何かする気でしようか……？　しかし、おそらくあの男も『コード：ブレイカー』……。油断はできませんね」

銃のスコープ越しに廊下の様子を確認している『壺49』は、優の行動に疑問を抱きながらも警戒心を高めていた。そして、全てのボタンを外し終えた優は、制服の内ポケットに手を忍ばせた。そこから取り出したのは……一丁の拳銃だった。

「ホホホホ……これは驚きました。まさか『壺49』と張り合うつもりですか？」  
優の無駄とも言える行動を『壺49』は笑い飛ばした。それもそのはず。『壺49』は長距離狙撃用の銃で遠距離から廊下を狙撃しているのに対し、優が取り出したのはただの拳銃。どう考えても届くはずがない。

すると、優はゆっくりと目を閉じた。数秒後、目を開けた優は拳銃を構えた。それを見て、『壺49』は勝利を確信した。

「ホホホホ！　愚かな！　あんな銃で『壺49』に対抗するなど！　そのようなことは

無駄だと教えてさしあげましょう！」

『壺49』が一発の弾を発射した。弾は優の頭部に向かって一直線に進んでいった。

「……………」

その場から動こうとしない優。そして、ゆっくりと引き金に手をかけた。

そして……撃った。

「ホホホ！　そこからでは何発撃っても無駄です！　さあ！　頭を撃ち抜かれて死に

なさい！」

優の行動をあざ笑う『壺49』。しかしその瞬間、一つの音が空間に響き渡った。

「な!?!」

それは、まるで金属と金属がぶつかり合うような音。そして、発射した弾を追っていたスコープ越しに見えた信じられない光景。

「バカな！　弾で弾を!?!」

その光景とは、優の拳銃から発射された銃弾が『壺49』が発射した銃弾に当たり、威

力を相殺させるというものだった。自分の目に映ったありえない光景に驚く『壺49』だったが、すぐに次の行動に移った。

「おのれ！」

数に物を言わせて弾を乱射する『壺49』。すると、優は内ポケットからもう一丁の拳銃を取り出し、二丁の拳銃から次々と弾を撃った。そして、あの音が次々と響き渡っていった。

「……………そ、そんなバカな」

『壺49』が弾をいくら撃とうと、それが優に届くことはなかった。それどころか、優が立つ桜小路家の廊下を傷つけることすらなかった。『壺49』が撃った全ての弾を、優が拳銃で無効化したのだろう。

「く……………しかし、いずれ弾切れを起こすはず！ それまで撃ち続けろば……………」

「死デットゾーン相ソウが見えてますよ？」

『壺49』の背後から突然聞こえてきた声。その次の瞬間、『壺49』の武器である狙撃用の銃が一瞬でただの鉄くずとなった。

「終わったか。……『壺49』。お前にしてみればオレはあり得ないことをしているだろうな。だが、オレはそれが可能だ。ある能力に通常時以上のリミッターをかける代わりにその対となる能力を限界以上に強化する技……『束脳・反転』。今の俺は聴覚を犠牲にして視力を強化している。視力が強化されれば動体視力も強化される。銃弾なんて止まって見えるんだよ」

聞こえるはずもない説明を淡々と述べる優。そして、『束脳・反転』により強化された彼の目には『壺49』を討つ一人の人間の姿がうつすらと見えた。

「……まさかあなたがいるとは。ありがとうございます」

その人間に向かって軽く一礼すると、優はユキと刻（+『子犬』）がいる桜の部屋に入つて刻を蹴り飛ばした。

「行くぞ、この野郎」

「イデェー！」

その後、優はユキの頭を掴んで彼女を眠らせた。

月のみが視界を照らす夜の世界。その中でも、月明かりすら通りそうにないほど木々が密集した場所を一人と一匹が走っていた。

「あー、くそ。まだイテーよ。優！ テメエ、あとで覚えてろヨ！」

「別にいい。今すぐ地面にたたき落してほしいなら勝手にしろ」

「……嘘デス」

ロストしているためか強く言い返せない刻。今の状況は、『子犬』が先頭で匂いを嗅ぐことで大神と桜を探し、その『子犬』の後を優が追いかける形だった。ちなみに、刻は優におんぶされている。だから走っているのは“一人”と一匹なのだ。

「つーか、お前も考えろよナ！ ユキちゃんがいるのに銃でやり合いやがって。しかも、ユキちゃんを眠らすし。あの後ユキちゃんと一緒にお風呂でも入ろうと思つてたのにヨ！」

（やっぱり落とすか……）

最初は正論のように聞こえたが、後半は明らかに刻の煩惱だった。それを聞いて、優の中に危ない考えがよぎったその時。一つの光が彼の視界に入った。前を走っていた『子犬』も、光の方に向かって吠えている。どうやら、あそこに大神たちがいるらしい。

「行くぞ」

「リョーカイ。つか、もう下ろせ」

言われてすぐに刻を下ろす優。その後、彼らは光の方に向かって進んでいった。そして、彼らは驚きの光景を目の当たりにした。

「桜ちゃん!?!」

彼らの目に飛び込んできたのは巨大な『青い炎』。そして、炎の中にいる桜と春人の姿だった。どうやら、大神がロストから戻り『青い炎』を使い春人を燃え散らそうとしたようだ。しかし、そこに桜がいる理由が全くわからない。

「ワン!!」

「……………待て」

桜を心配して飛び込もうとする『子犬』。刻が首を掴むことでそれを止めた。その目は、炎の中にいる桜に向けられていた。その後ろでは、優も同じように桜をジッと見ていた。

「ぐ……………! ダメだ……………! お前は死んじやダメだー!!」

「う……………!」

桜が叫んだ瞬間、桜から光が放たれた。そのあまりの眩しさに刻たちは目を瞑った。そして、次に目を開けた時……………

『青い炎』は跡形もなく消えていた。

「本当に大神の異能を打ち消した……。これが桜ちゃんの……。珍種のパワーってやつか……」

「実際に見ると驚きだな……。厄介な奴」

刻と優が驚きの声を上げる。どうやら彼らは、桜の珍種としての力を見るために傍観に徹していたようだ。すると、一部始終を見ていた大神が声を大にして笑い始めた。

「あつはつはつは！ あなたは本気で、命懸けでオレに悪人殺しをやめさせようというわけか。……面白い」

ニヤリと笑みを浮かべる大神。桜は珍種だが、桜にその自覚はない。それなのに、彼女は『青い炎』の中に飛び込んだ。大神にとって、そんな無茶苦茶な行動をとる桜は興味深い存在となったのだろう。

「なぜ炎が……。いや、それよりなぜオレを助けた？ オレはお前を殺そうとしたんじゃないぞ……？」

桜によって命を救われた春人は多くの疑問を感じていた。『青い炎』が消えた理由も気になるが、何より気になるのは桜が自分を助けた理由だった。桜の命を狙った自分を

助けるなど、正気の沙汰ではないからだ。

そんな春人の問いに、桜は真つ直ぐな目をして答えた。

「そんなことは関係ない。お前は大神に殺されかけても、生きてきた。お前は命の尊さを知っている。だからお前は生きるべきだ。たとえどんなに苦しくても。そして、もう人殺しなどするな」

桜の真つ直ぐな言葉に、春人は何も言えなかった。あくまで「悪」を裁くのではなく、説得することでやり直させようとする桜。しかし、そんな桜の思いを大神はあっさりと否定した。

「残念ですが、春人。あなたには死んでもらいます。一度死にかけたのに人殺しを続けるような悪（クズ）は殺します」

左手に『青い炎』を灯し、薄ら笑いを浮かべる大神。桜は大神を止めるべく春人の前で両手を広げた。

「させん！ お前にそんなことをする権利などない！」

先ほどまで自分の命を狙っていた春人を護り、あろうことか背を向ける桜。今の桜にとって、春人は「悪」などではなく、護るべき「人」なのだろう。しかし、大神は止まろうとしなかった。

「あるんですよ。オレはそのためだけに存在しているんですから」



『青い炎』が灯った左手を伸ばす大神。しかし、桜は退こうとしない。『青い炎』が桜に届くまで、あと数cm——！

「ッ！」

その時、大神と桜の間で何か跳ねた。明かりが無ければほとんど何も見えないこの暗闇の中でも、それが何であるかはつきりと見えた。

「光る……ムチ？」

そう。それは自ら光を放つ一本のムチだった。そして、そのムチの出所から学生服を着た一人の男が現れた。

「あなたの仕事は桜小路さんの護衛。始末屋の殺しは逸脱行為……。この『コード：02』平家将臣はそんなこと許しませんよ？ 『コード：06』大神零君」

「平家先輩!？」

現れたのは大神と桜が通う輝望高校の生徒会書記である平家だった。どうやら、彼も『コード：ブレイカー』だったらしい。

「平家先輩も『コード：ブレイカー』だったのですか！ 驚きです！」

自分の学校の先輩が『コード：ブレイカー』であることに対して悠長に驚きを示す桜。そんな桜に刻が横槍を入れた。

「一緒にしないでヨ。桜ちゃん」

「どうした？ 刻君。まさか平家先輩も夜原先輩と同じようにお情けで『コード・ブレイカー』になったと言うのか？」

「いや、違うけどサ。こいつはオレたちのバイトをこつそり見ては『エデン』にチクリチクリ屋なんだヨ」

刻の皮肉染みた言葉。しかし、当の平家は薄ら笑いを浮かべて右手を額に当てた。

「嫌ですねえ、刻君。私はジャッジ。『コード：ブレイカー』の裁きが正しく行われているのか監視するのが私の仕事でもあるんですから」

すると、平家はどこからか如何わしいタイトルの本を取り出し、バツと開いた。

「とりあえず今回の仕事。大神君は65ポイント。優君は40ポイント。刻君は5ポイントです」

「はあ!? なんでそんなにオレが低いんだよ！ ふざけんな！」

どうやら開いたページに査定が書かれた紙が挟んであったらしい。すると、その査定に刻が腕をぶんぶん振り回して猛反発した。しかし、平家が人差し指で刻の額を押さええているのでその腕が届くことはなかった。

「あなたのそのロスト姿が何よりの証拠でしょう？」

「うるせえ！ お前のロスト姿よりマシだろうが！」

刻がその言葉を言った瞬間。平家の目がキツと刻を見た。

「悪い子だ。おしおきが必要ですね」

すると、刻は一瞬で桜の背後に移動した。そして……

「ゴメンナサイ」

素直に謝罪の言葉を口にした。それを聞くと、平家はゆつくりと目を閉じた。

「……良い子です」

「おお！」

完璧に刻を教育している平家。その完璧っぷりに桜は目を輝かせていた。一方、刻は「あれだけは絶対に嫌だ……」と言いながら『子犬』を抱きしめていた。どうやら、彼にとつて平家のおしおきはトラウマ級のものらしい。

すると、優が平家の前に出て頭を下げた。

「すみませんでした、平家さん。本来ならオレが裁くべき『巻49』を平家さんに任せ  
てしまつて……」

「いいんですよ、優君。あの状況では仕方ありません」

「……ありがとうございます」

刻と違い、普通に平家と話す優。平家の口調から、完全に怒りが収まったのを確認した刻は平家に文句を言い始めた。

「たく、最初から動けよなヘンタイ。結局、あいつは殺したワケ？」

「そんな酷いことはしませんよ。ただ、心には死の束縛をさせてもらいましたけどね」  
「そっちの方がヒデエ……」

平家の言葉に刻が再び恐怖した。すると突然、桜が叫んだ。

「春人がいない!?!」

見てみると、桜に庇われていたはずの春人の姿がどこにもなかった。どうやら、彼らが談笑している間に姿を眩ませたらしい。

「……………」

すると、大神は黙って歩き始めた。そんな大神を、平家が微笑を浮かべながら止める。  
「大神君。勝手なことをすると評価が下がりますよ? あなたには他に優先すべき仕事があるでしょう」

「……知りませんね。あいつはオレが燃え散らします」

そう言つて再び歩き出す大神。桜は、それを物理的に止めようと手を伸ばした。

「待て、大神! 春人を殺しては……」

「桜小路さん。彼は本来の仕事をしに行くだけです。お茶にしましょう」

平家はそんな桜の肩に手を置いて彼女を止めた。そして、いつの間にか用意していたティータイムセット一式まで案内し桜を座らせた。しかし、雲が立ち込めてきたのでティータイムはすぐに中止になったとか。

「えつと、ここを右か……」

春人が桜小路家を襲ったあの日から数日が経った。桜は今、ある場所に向かっている。と言っても今持っている紙に書かれた住所に向かっている。そこで何かがあるのかはわからない。桜がここに向かう元の原因は昨日のことだ。

春人がいなくなった次の日から、桜は今まで通り普通に学校に行っていた。その時に大神から聞いたことだが、行方をくまませた春人は神田が探しているらしいが見つからないらしい。その日、とある用事で再び桜小路家に来た大神と刻を歓迎するため、桜小路家では再び宴が開かれた。大神は剛徳に借りた刀を返しに、刻は『子犬』に借りを返しに来たらしい。

その時、剛徳は桜に話があると云った。剛徳は今回の事件の原因は自分にあると桜に打ち明けた。しかし、桜はそのことを知っていた。春人からその事について聞いていたのだ。春人を雇った依頼主は、妻と子どもを『鬼桜組』と敵対するヤクザとの間に起こ

た抗争に巻き込まれて失ったということを（この依頼主は春人の襲撃後、大神によって裁かれた）。剛徳はその責任を取るために組長をやめると言った。そんな剛徳に、桜は思いつきりチョップをかました。そして、剛徳が組長をやめたら『鬼桜組』の組員の行く先がなくなる。それに剛徳を慕っている組員の信頼を失ってしまう、と。桜はそれが嫌だったのだ。剛徳は昔、「もう人を傷つけるようなことはしない」という約束を桜との間に交わした。『指切り』ではなく、恋人つなぎのように指全部を組む桜小路家の結束の証……『指組み』をして。桜は再び剛徳と『指組み』をした。そして、桜の思いを伝えた。剛徳は涙を流し、組長を辞めることをやめた。その夜、桜は大神から、剛徳に渡してほしい、と言われて一通の封筒を預かった。またこの時、桜が剛徳とユキの実子ではないこと……拾われっ子であるということが判明した。

そして今朝、桜は剛徳に大神からの封筒を渡した。そこには一人の子どもの写真と、住所が書かれた紙が入っていた。しかし、剛徳はこれら二つに覚えがないらしい。なので、桜が向かっているというわけだ。

「ハハ」か……」

桜は紙に書かれた住所に到着した。そこにあつたのは何の変哲もない幼稚園で、子どもたちが楽しそうに遊んでいる。その子どもたちの中に、写真に写っていた子どもの姿があつた。見たところ、他の子どもたちと何ら変わりはないようだった。

「大神……。あの子が一体なんだというのだ……」

「あの子は、ある意味お前と同じと言えるべき子どもだ」

「夜原先輩!? それに平家先輩も!」

呟いた桜の背後から、聞き慣れた声があった。振り向いてみると、そこには電柱に背中を預けて立つ優と道の真ん中でティータイムを楽しむ平家の姿があった。優はそうでもないが、平家は周囲の人たちから奇妙なものを見る目で見られていた。

「おはようございます。桜小路さん」

「おはようございます。平家先輩、夜原先輩。ところで、夜原先輩。あの子が私と同じとはどういうことですか?」

周囲から奇妙な目で見える平家とも普通に挨拶を交わす桜。彼女にしてみれば、もはや見慣れた光景なのだろう。

そして、桜の疑問に優は淡々と答えた。

「あの子は今回の事件でお前同様、春人のターゲットでありながら無事だった子ども。始末屋・春人が始末しなかった子どもだ」

「え……?」

優の言葉を聞いて呆然とする桜。そこに平家の言葉が続く。

「入手したりリストによると、あの子はあなたの次に始末されていたはず。桜小路さん

を始末できなかったのだからあの子を始末するはずと思っていたのですが……不思議ですなえ」

「春人が消えてからあの子を見張っていたが、春人も、春人以外の始末屋が来ることはなかった。前者も後者も依頼人が死んだからというのはあるだろうが……春人に關してはどこか引つかかる」

「……もしかしたら誰かの情熱と行動で、ちよつとした気まぐれを起こしたのかもしれませんなえ」

誰かの情熱と行動。それは、紛れもなく桜のこと。桜の真つ直ぐな言葉が「悪」に……春人に通じたのかもしいないということなのだろう。

「どう思われますか？　桜小路さん」

「……私にはわかりません。ですが、もしかしたら……」

平家の問いに、桜は曖昧な答えを返した。しかし、その時の桜の顔はこの上なく嬉しそうな顔をしていた。

「……桜小路さん。お茶を一緒にしませんか？　珍しいお茶を手に入れたんです」

「はいー」

「優君もどうぞ」

「……頂きます」



その後、彼らは路上でのティータイムを満喫した。これは桜の後日談だが、その日の  
お茶は本当に美味しく感じたという。

## 人見篇

## code : 08 罨

「お願いします！ オレを『コード：ブレイカー』にしてください！」

「駄目だ。さっさと帰れ」

ある日の夜中。国会議事堂の中のある部屋で、一人の少年がローブを羽織った数人の男たちを前に叫んだ。

「何度も来るその精神は褒めてやる。それでもお前に与える『コード：ナンバー』は無い。わかったら帰れ。二度と来るな」

「お願いします！ オレはどうしても『コード：ブレイカー』になつて悪を裁きたいんです！ 一生下つ端でもいいです！ お願いします！」

もはや何度も聞いた拒否の言葉。それでも少年は叫び続けた。すると、今まで閉まっていた入り口の扉が開いた。

「……？」

「誰だ。……ん？ お前は……」

少年は振り向いて扉を開けた人物を見た。後ろから月光が射しているため顔は見え

ないが、細長い体系をしていることはわかった。入ってきた人物が誰だかわからない少年に対し、ローブを羽織った男たちはそれが誰なのかわかっていようだった。

「突然すみません。ちよつと言いたいことがあったので」

そう言いながら、その人物は少年に近づいた。声の感じからして男性だろう。

「ここまで言ってるんです。認めてあげてもいいんじゃないでしょうか？」

「……！」

少年にしてみれば希望と受け取れる言葉だった。誰かは知らないが、自分の望みを叶える手助けをしてくれようとしている。

「黙っている。いくらお前でも決定権は我々にある」

「面倒は私が見ます。だからエージェントも必要ありません。彼ならどんな条件を出してもやれると思いますよ。ね？」

男は少年を見た。少年はしばらく黙っていたが、しばらくして力強く言った。

「はい！」

「彼もこう言っています。『コード：ブレイカー』が増えるのはあなた方にとっても悪いことではないでしょうか？ どうですか？」

「……だが」

「面白いじゃないか」

再び扉が開く音がした。しかし、それは先ほど入ってきた男とは真逆の方向。ローブを羽織った男たちの方にある扉が開いたのだ。そこから出てきたのは、今の日本人なら誰しも見たことがあるはずの人物だった。

「藤原総理！」

少年が心底驚いたような顔をした。対して藤原は、小さく手を挙げて微笑んだ。

「初めまして、だね。君のことはよく知っているよ」

「……総理のあなたがなぜここに？ こいつは我々が……」

「いや、大した用じゃないよ。ただ、彼に『コード・ナンバー』を与えようと思って来ただけさ」

「な!?!」

「え!?!」

藤原の発言に、ローブを羽織った男たちと少年は驚きの声を上げた。

「な、なぜ!?!」

「ここまで熱心に頼みに来るんだ。彼はきつと役に立つ。それに、彼は来るたびにこちらの警備を抜けてやってくる。その技量と異能は評価すべきだろうか？」

「……………」

男たちは藤原にそれ以上の反論はしなかった。そして、呟くような声で確認した。

「……本当によろしいんですね？」

「ああ」

そう言うのと、藤原は少年の方を向いた。

「それでは君を『コード：ブレイカー』の『コード：07』として迎えよう。ただ、このナンバーは特例として認められたナンバーだ。色々特殊な条件はあるだろうが構わないかな？」

「は、はい！ もちろんです！」

「よろしい。じゃあ期待しているよ。『コード：07』」

そして、藤原は部屋から出ていった。男たちもそれに続いて退室する。部屋には、『コード：07』となった少年と、途中から入ってきた男のみが残った。

「おめでとう！ 君は晴れて『コード：ブレイカー』に、私たちの仲間になった。それにしても『07』か。なんだか特別な感じがするね」

「あ、ありがとうございます」

男は拍手しながら少年に近づいた。しかし、少年の前に立つと拍手をやめ、先ほどよりも真剣さがこもった声で言った。

「だけど、わかってるよね？ 『コード：ブレイカー』となったからには、もう普通の生活には戻れない。『存在しない者』となり、その背中には罪の十字架を背負うことに

なる。苦しみも伴うだろう……。それこそ、普通に生活していれば味わうことのないような苦しみを……」

少年はゴクリと唾を飲んだ。男の迫力に完全に怯んでいたためだ。

「逃げ出すことも許されない。逃げ出せば消されるだけ……。それでもいいんだね？」

「は、はい！」

少年は力強く答えた。すると、男はボン、と少年の頭に手を乗せた。

「いい答えだ。大丈夫。さっき言った通り君の面倒は私が見る。君を立派な『コード・ブレイカー』に育てると約束しよう」

「は、はい！……あの、それであなたは？」

少年が尋ねると、男は声を出して笑った。

「ハハハ！　そういうえげまだ名乗っていなかったね。ゴメン、ゴメン。あく、でも自己紹介か。そんなに得意じゃないんだよね。ふわああ……。ま、名前を言えばいいかな」

男はあくびをしてポリポリと頭をかいた。そして、男はスツと右手を差し出した。

「私は人見<sup>ひとみ</sup>。『コード：ブレイカー』のエース、『コード：01』の人見だ」

そこで、やっと男の……。人見の顔が見えた。髪は肩口まで伸び、後ろで団子のように束ねている。そしてその顔は、先ほどの藤原総理のように微笑んでいた。少年は、

人見と固い握手を交わした。

これが、今では夜原 優と名乗っている少年と、今では裏切り者として敵となった元『コード：01』人見の出会いだった。

「人見さんが……!?!」

ある日の夜。優の携帯電話に大神のエージェントである神田から電話がかかってきた。その内容は、元『コード：ブレイカー』人見が藤原総理を街中で襲撃したというものだった。幸い、大神と刻の手により総理は無事で市民から怪我人は出なかったらしい。

「そうか……、わかった。今、総理は？ ……輝望高校に？ なるほど、考えたな。よし。オレも大神たちと合流する。……ああ。そうか。アジトの場所がわかっただけでもこちらにしてみれば有利だな。気を付けてくれ」

神田から大神たちが輝望高校にいること、神田たちエージェントは人見のアジトの場

所を突き止めたことを聞くと、優は電話を切った。今は「エデン」から支給されたアパートの自分の部屋にいた。誰もいない部屋で、優はポツリとつぶやいた。

「人見さん……いや、人見……。なぜ総理を……」

「夜の学校か……。やっぱり雰囲気が違うな」

神田の連絡を受けた優はすぐに輝望高校に向かった。時間が時間のため、電気などまったく点いていない闇の世界。まるで昼とは別世界のように感じた。

だが、それは今の優にとつては困ることもある。藤原総理を匿っている大神たちが学校のどこかにいることはわかる。ただ、状況的に電気を点けられないから居場所の特定が難しいのだ。すると、優はポツリと呟いた。

「常に相手の裏をかき二の手三の手を考える……。あの頃の人見だったら、大神たちのこの選択は高評価だろうな」

過去を思い出しながら歩き続ける優。すると、彼の耳にある音が聞こえてきた。

「……………ピアノ？」



誰もいないはずの夜中の学校で、ピアノが鳴る。学校の怪談ではありきたりなものだが、それで怖がるほど優は初心ではなかった。だが、違和感を感じていた。なぜなら、聞こえてくるピアノの音に殺気が感じられたのだ。殺気が感じられたのが気になるが、おそらくこのピアノの音の出所に大神たちがいるのだろう。

「居場所を教えてくださいるのはありますが、少し恐ろしいな……」  
そう言って、優はピアノの音の出所である音楽室に向かった。

「やっぱりここか」

「んだよ。お前も来たのかヨ」

「神田から連絡が来てな」

音楽室は教室の位置的に見ても最も狙撃されにくい場所であった。おそらく、大神たちはそれを配慮してここにしたのであるだろう。

すると、もはや見慣れた気がする場違い人物を見つけた。

「夜原先輩！ 先輩も来てくださったんですね！」

「まさかとは思ったが、やっぱりいるのか……」

そこにいたのは、桜と『子犬』だった。今回も大神についてきたらしい。とりあえず桜のことはスルーすることにして、優は先ほどから気になっていたことを聞いた。

「ところで、さっきのピアノは誰だ？ おかげで場所がわかったんだが」

「先輩。実は大神が弾いたんです」

「へえ。見事な演奏だったな」

「……………」

大神はそっぽを向いた。すると、桜がニヤニヤと笑いながら言った。

「いえいえ先輩。大神は人見先輩殿にコテンパンにやられたのが悔しくて、弾いたんですよ。さっきのピアノには尋常じゃない殺気が感じられたでしょう？」

確かに、優と違って大神と刻は一足早く人見と接触している。その時に戦闘もしたが、大神は手も足も出なかった。先ほどのピアノにはその時の無念が込められたのだろう。

しかし、優は殺気がこもった理由よりも桜のある言葉が気になった。

「桜小路。人見先輩殿ってなんだ」

「え？ 人見先輩殿は『コード：01』、みんなの先輩だったのでしょう？」

キョトンとした顔で言う桜。すると、優は桜から視線を外し殺気が灯った目をした。

「先輩じゃない。今の人見は悪。俺たち『コード：ブレイカー』が裁くべき悪だ」

「せ、先輩……?」

先ほどのピアノ以上の殺気を放つ優。それに驚く桜だったが、刻が気にせず横槍を入れた。

「そんなことはわかってるっつーの。悪になった以上、オレが裁く。お前がいても役に立たねーだろうガ。対異能者戦が苦手なお前に人見は倒せない。大人しく帰って寝てればいいのニ」

「……足は引つ張らない」

優に突つかかった後、刻は藤原総理の傍にまで寄った。ちなみに、今の総理は気絶している。

「しかし、こんな奴を護るためだけに二人の『コード：ブレイカー』、そして犬野郎を呼ぶとはナ」

「刻君。こんな奴などと言ってはいかんぞ。お父上であろう」

「……………」

桜の言葉に刻は黙った。桜の言う通り、刻と藤原総理は親子関係にある。ただ、『コード：ブレイカー』である刻にしてみれば親子関係などすでに関係ないのだろう。だが、彼の様子からはそれだけではない何かを感じるようだった。

「あまりしやべつてると敵に見つかる。気をつけろ」

優が二人の会話を止めた。大神が窓から外の様子を見ているため、異変があればすぐわかるが相手を考えると警戒を怠るのは危険だった。

すると突然、音楽室の扉が開いた。彼らは一斉に扉の方を見て構えた。だが、そこにいたのはよく知る味方の顔があった。

「神田先生！」

そこには、今は人見のアジトにいるはずの神田がいた。入ってきたのが神田ということで大神たちは構えるのを止めた。そして、桜が神田に歩み寄っていった。

「神田先生、何かあったのですか？ とりあえず中に……」

続きを言おうとしたその時。桜の目の前で信じられないことが起こった。

「ッ!? 神田先生!?!」

神田が桜に銃を向けた。さらに、彼女の後ろからはスーツを着て銃を持った男たちが現れた。

「先生、何をしているのですか!?!」

「人見か……!?!」

「ダナ」

「異能で操られているな」

状況が理解できぬ桜とは対照的に、大神たちは瞬時に何があったのかを理解した。そして、迅速に行動を開始した。

「ピアノの後ろ移動するぞ。桜小路さんはオレが引つ張つてきますが総理は？」

「オレが移動させる」

「弾はオレが止める！ 早くしろ！」

その後、大神が桜の手を引つ張つてピアノの陰に移動させると神田たちは発砲してきた。刻が『磁力』でそれを無効化している間に優が藤原総理をピアノの陰に移動させた。

「こ、これが人見先輩殿の異能？ 確か先輩殿の異能は『電力』では……」

「知っていたのか。なら話は早い。人見は脳の特定部分に電気刺激を与えることで人格を麻痺させて操ることができる。今の神田たちは人見の操り人形つてわけだ」

神田たちが敵対した理由を説明する優。すると、『脳』という単語を聞いたことで桜が優の事を見た。

「先輩！ 『脳』の異能を持つ先輩なら神田先生たちを元に戻せるのでは!？」

「……無理だ。オレが異能を使つても、彼らの脳から人見の異能である『電力』は消えない。オレに異能を消すなんて芸当はできないからな」

「そんな……」

見つけたと思つた希望が否定された。こうなつた以上、総理を護らなければならぬ

彼ら『コード：ブレイカー』がすべきことは決まっていた。

「……ッ！ 桜小路！」

「え……？」

「チツ……！」

優が声を荒げた。桜の後ろに、いつの間にか近づいてきたエージエントが刃物を構えていたからだ。大神は、エージエントの刃物を持った手を殴り、その手から武器を落とさせた。そして、大神は手袋を外した左手でエージエントの顔を掴んだ。

「……燃え散」

「やめろ大神！ 仲間だろう！」

『青い炎』で燃え散らそうとすると、桜がその手を無理やりひっぺがした。

「バカが！ ふせろ！」

「ぬお！」

大神が桜の頭を床に押し付けた。すると……

「……！！」

「な……！！ 味方を……！！」

桜を襲ったエージエントは、他のエージエントが放った銃弾により蜂の巣になった。

「彼らにはもう敵味方の区別すらついていない。あいつらを殺さなければオレたちが

……総理が死ぬ。だから殺すしかないんです」

「だが……!」

「心配いりません。エージェントは『コード・ブレイカー』に関わる者。彼らも死ぬ覚悟はできています。たとえば死んでも『存在しない者』だから死んだことにすらなりませんから」

大神が冷静に、残酷な現実を桜に突き付けた。すると、桜はとんでもない行動を起こした。

「ふざけるな! そんなことは……絶対にさせーん!!」

「な……!」

「ハア!?」

「正気か……!?!」

なんと桜は、藤原総理をおぶって窓から外に飛び出した。普通ならばただの自殺行為。しかし、桜は下の階のベランダの手すりを上手く使いあつという間に地面に着地した。

「神田先生たちを殺さずとも藤原総理は私が護る! なにが『死ぬ覚悟はできてる』だ

! カッコつけるな、大神!」

着地した桜はそのまま走り去った。桜に武道の心得があつて体を鍛えていることは

大神たちもわかっていが、大人の男をおぶった状態とは思えないほどの速さだった。すると、神田たちは桜を追って音楽室を出た。

「あのバカ珍がー!!」

「ナイスネーミングだな」

「言ってる場合カ!」

「相変わらず読めない行動ですね」

「関心すんナー!!」

その後、彼らも桜の後を追って音楽室を出ていった。

「だめだあー!!」

桜が叫びながら神田にハグした。すると、桜から光が放たれた。あの時、春人を燃え散らそうとした大神の『青い炎』を打ち消したあの時と同じ光だ。

桜が藤原総理と共に音楽室を脱出した後、二人の元には神田がいち早く追いついた。そこに大神たちも合流し、大神が主人として神田を殺そうとした。桜は、それを止める



ために神田にハグしたのだ。

桜から放たれた光が治まると、神田が頭を押さえて起き上がった。

「いたた……。さ、桜小路さん？ いきなり抱きついたりしてきたりしてどうしたの？」

そこには、いつもの神田がいた。先ほどまでのような操り人形の感じはしない。

「おお！ 元に戻ったのですね！ 先生の大神に対する忠誠心……。いや！ 忠義の勝利です！」

「えー!？」

再びハグする桜に神田は意味がわからずに戸惑っていた。その様子を、大神たちはただ傍観していた。そして、大神たち三人は小声で話し出した。

「『忠義』だってヨ……。あれだけ珍種の力を炸裂させたくせ二」

「珍種の力は俺の『青い炎』以外の異能も打ち消せるんですね。面白い」

「触れられた状態だと異能が使えなくなるのは知っていたがな。まあ、面白かどうかは置いといて、勝機は見えな」

優が言うのと、未だ人見に操られている神田以外のエージェントたちがこちらに向かってきた。

「ダナ。あいつらも桜ちゃんの珍種ハグ攻撃で……」

その瞬間、エージェントたちの頭が一瞬で黒焦げになった。

「……脳に与える電気刺激を強くして感電死させたか」

刻が冷静に判断した。すると、外から敵である男の声が出た。

「使えなくなつたオモチャは敵に戻る前に処分しないとね」

「人見……!」

大神たちがいた場所の窓から見える場所、校舎と校舎をつなぐ外階段に人見がいた。だが正確には……人見たちがいた。そのことには大神たちもすぐに気付いた。

「誰かいるな……」

「アア。6……いや7人だな」

「ご名答。さあ、こつちのオモチャは珍種が助ける前に死んじやうと思うよ?」

そこにいたのは、あおばやツボミ、紅葉といった大神と桜のクラスメイトたちがいた。その手にカッターやナイフなどの武器を持ち、それを自分に向けながら。

「あおば! みんなー!!」

「驚いたかい? 神田から得た情報を元に、神田に連絡させたんだよ。ここに来るよ  
うにね。……大切な友人なんだろう?」

人見が人差し指でこめかみをトントンと叩いた。昔からの人見の癖だ。その癖がで  
きるほど、人見は余裕ということなのだろう。だが、それはその通りで状況的には大神

たちが圧倒的に不利だった。

「どうだい？ エージェントの死はなんとか目を瞑れても、一般人……しかも友人が死ぬのは見過ごせるかな？ 総理と友人……。交換といかないかい？ 大神君」

一難去ってまた一難。人見は究極の選択を彼らに突き付けた。

## code : 09 続く危機

「さあ、どうする？　総理を渡せばお友達は無傷で返そう。さもなくて全員死んでもらうけどね」

深夜の輝望高校の外階段。人見から藤原総理を護るために集結した大神たち。現在の状況は、人見が異能『電力』で操った大神と桜のクラスメイトを人質にとり総理との交換を要求している。彼らの手には、ハサミや包丁といった武器がそれぞれある。人見の交渉に応じなければ、操られた彼らはその武器で自ら命を絶つだろう。

「と、とりあえず作戦を立てよう。みんなを救う方法を……」

桜が大神たちに提案する。だが、それに同意するものは現れなかった。

「ムリだよ。総理は渡せない。残念だけど人質には死んでもらうしかナイ」

「刻君！　なんてことを言うのだ！」

煙草の煙を吐きながら冷静に言う刻に、桜は掴みかかる勢いで反論する。

「もし人質が寧々音先輩でも同じことが言えるのか！」

「ッ………！」

桜に弱いところを突かれ、刻の表情が歪む。『コード：ブレイカー』になったことで、

姉弟として接することができなくなった姉・寧々音。だが、それでも刻は彼女のことをいつも気にしていた。今日の昼だって、刻はわざわざ輝望高校の制服を着て潜り込み彼女の様子を探ろうとしていた。そんな刻にしてみれば、その質問は酷なものだった。しかし、刻は表情の歪みをすぐに消して桜に煙草の煙を吹きつけた。

「オレたちは神様じゃネエ。二つのものを同時に護るなんてことはできねえんだヨ。このバカ『珍種』が」

「刻さん！ そんな言い方しなくても！」

吹きつけられた煙で咳き込む桜。そんな桜を神田は支えて刻に意見する。彼女の立場上、あまり強くは言えないが。

すると、優が桜と刻の間に入った。

「刻の言う通りだ。オレたちが護るべきは藤原総理。誰が犠牲になっても護らなければならぬ。それに、こうなったのはこいつらが操られた神田からの連絡を疑いもせずにもココノコやってきたから。……自業自得だ」

「優さんまでやめてください！ あの子たちは悪くありません！」

優の冷酷な言葉に、神田が声を荒げる。しかし、優はそれを無視して考え始めた。先ほど、桜に煙を吹きつけた刻も同様だ。

（……仮にだ。桜小路をあいっらのところに送り込んで『珍種』ハグ攻撃で元に戻させ

るとする。だが、それでは全員は救えない。せいぜい一人……多くて二人だ）

（人見に隙でもない限り、全員救うなんてのはムリな話だ。……どうやったって）  
優と刻が、それぞれ頭の中で考えて結論を出す。二人の考えは間違っていないかった。  
何をどうしても、彼らを救う方法はない。

「早く決めてくれないかな？ 私、眠くなつてきちゃったよ。このままだと、寝ぼけて  
殺しちゃうかもしれないよ？」

人見が穏やかに決断を急がせる。すると、一人の少女が前に出た。

「たのもー！ 人見先輩殿！ あおぼたちの代わりに私を人質にしてくれー！」

「な、何を言ってるんですか！ 桜小路さん！ ダメよ！」

「止めないでください！ 神田先生！」

無茶苦茶な申し出をした桜を神田が止める。しかし、桜は構わずに人見の元に向かおうとする。すると、今まで黙っていた大神が口を開いた。

「なぜ……、なぜそこまでするんですか？ 彼らのためにそこまでのことをする理由

は何ですか？」

大神の問いを聞くと、神田に止められて暴れていた桜はピタリと大人しくなった。そのまま俯き、両手をギュツと握った。

「……お前も知っているだろう。あおばたちが、みんながどんなにいい奴らか。いつでも、誰が相手でも親身になって気遣える優しさを持っている。転入生のお前にだってあんなに優しくしてくれたではないか……！ 大事な友達なんだ……！ 失いたくないんだ、絶対に……！ もう二度と誰も失いたくない！」

「……くだらない」

桜の必死の思いを、大神は冷たい言葉で一蹴した。

「総理とそこのガキ共を交換？ あり得ませんね。俺は悪クズの言いなりにはなりませんよ。なので人見。あなたはここで燃え散らします」

大神が左手から『青い炎』を出して人見に向かう。その顔は、悪を裁く時の冷酷な顔だった。

「そうかい。じゃあ交渉決裂。彼らには死んでもらう」

人見が『電力』をまとった右手を出した。その手は指を鳴らそうとしていた。おそらく指を鳴らすと同時に彼らは自ら命を絶つだろう。

「やめろー!!」

桜が叫んだ。しかし、人見の指は止まらない。人見の指にグツと力が込められた。そして……

「ようやく隙を見せてくれましたか」

「……!」

「平家先輩?!」

人見が指を鳴らそうとしたその瞬間だった。突然、平家がどこから現れて人見の右手を光るムチで縛った。そのせいで、人見の右手は指一つ動かせない。

「燃え散れ。」

「とっ……!」

平家の突然の登場で人見に隙が生まれ、大神はそれを見逃さなかった。『青い炎』で人見を燃え散らすため、人見の頭を掴もうとする。人見はその攻撃を首を動かすことで避けた。だが、完全に避けることはできず頬に軽い火傷を負った。

「踊りなさい」

すると、平家が右手を縛った状態でムチを引いた。人見は逆らうことができずにその場に倒れる。ムチを引いたことで、人見の右手は自由になった。しかしそこに、大神の休むことのない追撃が来る。

「おっと」



人見は右手の指を鳴らした。その瞬間、目が眩むような光が放たれた。大神も思わず目を瞑る。その隙に、人見は大神から距離を取った。

「現役『コード・ブレイカー』の二人と戦えるとは光栄だよ。でも、残念だったね。人質は助からないよ」

人見が再び右手の指を鳴らす。すると、操られているクラスメイトたちはそれぞれが持つている武器で命を絶った……動作をした。

「残念なのはアンタだヨ、人見サン。さっきの間に、武器はオレの『磁力』で没収させてもらったヨ。だが、大神。人質救うのはオレたちの仕事じゃねえだろうガ。そういうところマジでウゼエワ」

「刻君！」

刻の手の上には、クラスメイトたちが持つていたそれぞれの武器が浮かんでいた。武器は全て刃物だったので『磁力』で操ることができたのだ。

「なら、私が直接殺すまでだ！」

人見が動いた。『電力』をまとった手をクラスメイトたちがいる方に向けて、手から『電力』を放出した。しかし、『電力』は誰にも当たることなく空中で消えた。

「な………！ 一体どこに………!?!」

「あいつらならこつちでハグされている」

優が少し前に出て言った。その後ろでは、桜がクラスメイトたちにハグをして人見の異能を打ち消していた。

「そうか……。私が平家と大神君と戦っている間に刻が『磁力』で彼らから武器を取り上げる。そして優が『脳』で脚力を上昇させて珍種……桜ちゃんのところに移動させたのか。これはやられたなあ。……けど」

人見が困ったような笑みを浮かべながら解析していく。しかし、最後の言葉を言う頃には笑みは消えていた。それどころか、何かをやりきったような顔をしている。

「それはお互い様だよ」

「そ、総理ー」

神田が叫んだ方向を見ると、総理が捕まっていた。先ほど人見の手によって焦げ死んだはずのエージェントたちによって。神田も同様で身動きが取れない。

「死んで脳機能が使えなくても私の『電力』の呪縛からは逃れられない。筋肉から直接刺激を与えれば操れるからね」

人見がこめかみをトントンと叩いた。すると、人見の声のトーンが少し低くなった。

「私が欲しいのは藤原総理の死。それこそが誰しもの忘れられない記憶になる」

操られたエージェントの死体が総理を連れて人見のそばまで移動した。そして人見は右手を挙げ、その手に『電力』をまとった。

「それじゃあ、バイバイ」

どうやら逃げるために『電力』で目くらましをするつもりらしい。

「待ちやがれ、人見！ そんな奴でも必要としている家族がいるんだヨ！」

刻が人見に向かって走る。しかし、それを止める声が響いた。

「来るな！」

「ッ！」

声を出したのは藤原総理だった。その声に、刻はその場に立ち止った。そして、総理は刻に向かって微笑んだ。

「お姉ちゃんを、寧々音を頼んだよ……」

「な……！」

次の瞬間、光がその場を支配した。光が消えると、人見と総理は消えていた。逃げられたのだ。総理を奪われて。

すると、刻が苛立ち気大神の胸ぐらをつかんだ。

「テメエが……テメエが人質に余計な情かけたりすつから……！ あいつに何かあつ

てみる……！ テメエ、ただじゃおかねえからな……！」

「それに乗ったのは自分の責任でしよう？ 私も優君も。そして刻君、あなたもね」

「……チッ！」

刻が大きな舌打ちをして大神から離れる。大神はしばらく黙った後、これからのことを話し出した。

「人見がただ総理を殺すだけが目的なら、捕らえた時点で殺している。それをしないということは、人見は総理を使って何かをしようとしているということだ。……まだ時間はある。それまでに必ず、総理を助け出す」

「あの、マイ・マスター……」

大神が話し終わると、神田が小さく手を挙げた。大神は視線だけを動かしてそれに応じた。

「何だ」

「桜小路さんと『子犬』が見当たらないのですが……」

「「……………え？」」

神田の言葉を聞いて、大神と刻、そして優はポカンとした。そして、ある考えにたどり着いた。

「まさかあいつ……。人見と総理にくっついていったんじゃ……」

「……………おそらく、というよりそれしかないですね」

「おや、今頃気づいたんですか？」

「あの……………バカ『珍種』がー!!」

刻の叫びが夜空に響いた。

「汚ったねービル。本当にここが人見のアジトかヨ？」

「間違いありませんよ」

人見が総理を、ついでに勝手にくつついてきた桜と『子犬』と共に消えた後、大神たちは「演劇の練習をしていてその成果を見てもらいたくて呼んだ」とクラスメイトたちに説明して何とかその場をごまかした。その後、平家が異能を使って「エデン」のメインコンピュータと通信して、神田たちが探し当てた人見のアジトの場所の情報をダウンロードした。そして彼らは、今まさにそのアジトに侵入しようとしている。

「ただの廃ビルにしては周囲の電線の量が多すぎます。さしずめここは『電力要塞』と叫ぶところでしょうか」

「人見のアジトとしては最高だな」

「関係ねーヨ。その『要塞』、このオレがぶっ壊してやるヨ」

刻が『磁力』で入口を塞ぐ鉄製の扉を引きはがし、四人は中に入った。だが、中は明かりもなく真っ暗だった。

「……んだよ。拍子抜け。『電力』使えるんだから電気ぐらい点け……」

一瞬、バチツと明かりが点いた。天井にはではない。目の前にだ。四人は目を凝らした。そして、そこにいる大勢の死体を確認した。

「……………」

死体たちは言葉を発することなく銃を撃ってきた。だが、死体が撃ってきた銃弾を刻が『磁力』で送り返す。

「また死体操ってんのかヨ、芸のない奴。こんな手でオレたちを斃せるとでも……」  
刻が銃弾を送り返していると、死体の一人が刻の体を後ろから抑えて動けなくした。

「オオ?」

瞬間、大勢の死体が刻に襲いかかる。

「燃え散れ。」

「邪魔だ」

それを救ったのは大神と優だった。大神が刻を抑えていた死体を燃え散らし、襲いかかってきた死体を優が『脳』でリミッターを外した状態で蹴散らした。

「下がっている、刻。銃弾を送り返しても体に穴が開く程度……。完全に消滅させないといつらは動き続ける。お前の『磁力』じゃ不利だ」

「俺の『脳』もせいぜい時間稼ぎ程度だな」

「たく、メンドクせ」

次々と襲ってくる死体を大神は燃え散らし、刻と優は殴る蹴るなどして近づくのを防いでいる。だが、このままでは危険だった。

「……人見はオレたちがロストするのを狙ってるな」

「そうだな……」

大神と優が死体を相手にしながら言葉を交わす。大勢の死体を相手にすることで大神たちの異能を消費させロストさせるのが人見の目的らしい。

「くそ……。このままじゃ本当にロストしちまうぜ」

「どうすれば……」

万事休す。そう思った時だった。

「!?!」

突然、死体たちの体に光るムチが巻き付いた。そのムチの持ち主は、平家だ。

「すでに死相です」

そして、平家はムチを引いた。

「目には目を 歯には歯を 死者には永久とわの眠りを」

瞬間、死体たちの体はバラバラになった。光るムチによって切り裂かれたのだ。

「……死者でよかった。私は生者を殺めるのは好まないの」

平家は優しく微笑んだ。だが、そこから感じるのは優しさというよりは不気味さである。そんな平家を刻はジト目で見ていた。

「あんだだけコマ切れにしといて何言つてんだ、あのヘンタイ……。あれはただのムチじゃねーな」

刻はバラバラになった死体に視線を移した。死体の切断面は、血が一滴も出ないほど滑らかだった。このように切断するのはどんなに鋭い刃物でも無理だ。

「さっきのコンピュータとの通信に今の光るムチ……。そこから考えれば、おそらく平家は『光』を操る『コード・ブレイカー』。光通信網での通信や『光』を物質化させムチのように使ったり、集束させることで切り刻むのもお手の物つてことカ」

「グレートアンサーですよ、刻君。私の異能を言い当てたご褒美として、あなたも縛つてあげましょうか？」

「いや、結構デス……」

平家の異能を見事言い当てた刻に、平家が『光』のムチを出しながら迫る。刻は後ずさりながら平家の「ご褒美」を拒否した。

すると、部屋の壁に何かが映し出された。それも一つではない。全方位に小さい何かが映し出されている。

「な、何だ……!?!」



大神たちの正面に移し出されたものに映っているのは、少しずつ小さくなっていく数字。おそらく何かのタイマーだろう。そして、そのタイマーの上にはこう書かれていた。

『藤原総理の公開処刑まで』……だと?』

優が書かれていた文字をそのまま読み上げた。そして、別の映し出されたものを見てみると、そこにはあの人物が映っていた。

「くそ……!」

刻が眉間にしわを寄せ、拳を強く握りしめた。それもそのはずだった。そこに映っていたのは、ロープで拘束され椅子に固定された藤原総理だった。

## code : 10 通じぬ力

『藤原総理の公開処刑まで、あと二十八分……』

「い、これは……!?!」

先ほどまで人見に操られた死体がうごめいていた部屋に無機質な声が響く。それと同時に、部屋の壁に映し出された映像に映るタイマーの数字がそれぞれ減っていく。

「マイ・マスター！ 大変です！」

声が出た方を見ると、遅れてやってきた神田がいた。その顔はひどく慌てている。

「街中に藤原総理の公開処刑のカウントダウンが！ 他のエージェントたちからの情報によると、国中が同様の状況だそうです！」

「……電波ジャックして、国民の前で藤原総理の公開処刑。これが人見のしたかったことですか。しかし、一体何のために……」

神田の報告で人見の狙いがわかった一同。それでも人見の真意が見えないことに悩んでいると、平家が口を開いた。

「ふむ……。どうやらそれだけではないようですよ。よく見てください」

「あ？」

刻が煙草をふかしながら、平家の言葉通りにモニターをよく見る。そして、ある事に気付いた。

「……総理の姿が映っている場所と数字だけの場所があるナ。しかも数字だけの場所、残り時間が少なくて？」

「なにか仕掛けがあるのか……？」

優が考えていると、突然誰かの足音が部屋に響いた。音がした方を見るとスーツを着た若い男がいた。

「『コード：ブレイカー』の皆さんですね。人見様がお待ちです。こちらへどうぞ」  
「……………」

どうやら人見に操られた人間らしい。大神たちは警戒しながらも男の案内に従った。

「『コード：ブレイカー』なんて所詮は『エデン』の飼犬。使い捨ての道具さ。どんな特権を与えられてもね。決して報われなし、人と関われぬ孤独の中で人知れず死んでいく。誰一人例外なく。だからもうこんなこと終わらせるべきなんだ。……そうは思わないかい？ 大神君」

「大神……！ みんな！」

男に案内された部屋には、人見とロープで拘束されて宙づりになっている桜がいた。ちなみに『子犬』は大神の足元で泣いている。

その部屋にはテレビがいくつもあり、止まった時計が壁一面に飾られていた。

「時計嫌いのクセに思い出集めとは歳を取りましたね。人見」

「思い出集め、か。だが、彼らのことを思えば当然のことだと思うけどね」

彼らというのは過去の『コード：ブレイカー』のこと。大神たちが部屋に入る少し前、人見は桜に壁の時計の意味を話していた。その意味とは、『存在しない者』である『コード：ブレイカー』は墓標を立てることさえ許されない。だから人見は、彼らが死んだ時間止まった時計を墓標代わりとしていたのだ。大神の言葉からして、大神たちも人見がこの話をしていたのが聞こえたのだろう。

「それにしても年寄り扱いされるのはなんだか複雑だなあ。まあ、いいけどね。それじゃあ、そんな年寄りの話にもう少し付き合っておくれよ」

「な、何を言ってる……」

人見の言葉に桜が疑問符を浮かべた。そして……

「！」

平家と優が何かに気付いた。そして、二人は動いた。

「グツ!？」

「チツ!」

平家は大神を蹴り飛ばし、優は驚異的な脚力でその場から離れた。

「平家……!?! 何を……」

その瞬間、先ほどまで大神と優が、今も平家と刻がいる場所を囲むように箱が落ちてきた。

「くそ! ふざけやがつ……」

「無駄ですよ。これは耐火強化プラスチックの鏡面立方体。プラスチックに『磁力』は作用しませんし、『光』は反射して切断できません。耐火強化ですから大神君でも燃え散らせない。優君が外から破壊するしかありませんね」

平家が冷静に状況を説明する。平家の説明を聞いた刻は、一度舌打ちをしてから大声を出した。

「チツ! おい、優! さっさとこの箱ぶっ壊せ! テメーの異能使えば簡単だろうガ!」

「言われなくても……!」

箱から逃げた優は、空中に浮いた状態で刻の言葉を聞いた。そして、床に異物がないことを確認して着地しようとした。

〔『東脳・反転』で腕力を強化すればこの程度……〕

次の行動を考えながら優は着地した。その瞬間、人見が独り言のようにつぶやいた。

「予想通りだ」

「なに……？」

人見の言葉の意味がわからない優。そして次の瞬間、優の足元から電撃が放出された。

「ぐわあああああ!!」

「夜原先輩!」

突然のことに対処しきれず、優は大量の電撃を浴びた。肌の数か所が黒く焦げ、優は力なくその場に倒れた。

「君たち『コード：ブレイカー』とはかつて共に戦った仲だ。君たちの異能の特性もちゃんと理解している。だから、大神君、刻、平家の異能が通じない罫を用意した」

「ツ……!」だが、それだと優への罫にはならない。現に優は避けた」

大神が人見を睨みつける。人見は笑顔のまま言葉を続けた。

「昔から優は、バイト中は常にリミッターを外す。だからこの箱が落ちてくるのに気づいて避けるということはわかっていた。そして、さっきも言ったが共に戦った仲だ。異能を使った彼がどれほどの身体能力になるかはわかる。だから、避けた優が着地する

「おおよその地点を予想するのはそう難しいことじゃないんだよ」

「そ、そこに……、『電力』を、帯電させていたのか……」

「正解。しかし運がいいね。君が着地したのは帯電地点から少し離れた場所だった。予想地点に着地したら間違ひなく黒焦げだったよ。でも、君を戦闘不能にするという最低限の目的は果たせた。そこで見ているといいよ」

「ふざ、けるな……!」

優は倒れた状態から右手を前に出した。そして、その右手を支点にして前に進んだ。這つて移動しているため、そのスピードはかなり遅い。さらに、体中に力を入れているせいで進む度に傷口から血が飛び出す。

「へえ……。まだ動く力が残っていたか」

「夜原先輩! 動いてはダメです!」

人見が余裕の表情で優を見下す。対照的に、桜は必死で優を止めようとする。本当なら力づくで止めたいが、未だ宙ぶり状態のためそれができない。

大神が軽く舌打ちをしてから神田を見た。神田は、傷だらけになりながら人見に向かっていく優を驚愕の表情で見ていた。

「神田! 優を止めろ!」

「は、はい! マイ・マスター!」

大神の言葉で我に返った神田は優の元に走って行った。

神田は優の傍に着くと、優の隣にしゃがんで優の両肩を掴んだ。

「優さん！ その体では無理です！ やめてください！」

「邪魔を……するな！」

「きゃあー！」

優は前を向いたまま神田を突き飛ばした。異能によってリミッターを外しているため神田は壁に背中を打ち付けた。

「オレは……人見を、斃す……！絶対に……！」

「そんな……。なぜ、なぜそこまで……！」

桜はわからなかった。優が人見によって傷だらけになり、仲間である神田の制止を振り払い、それでも人見を斃そうとする理由が。

そうしている間に、優は人見の近くまで辿り着いた。

「人見……、お前は、ここで……！」

「変わらないね、優。君は昔から何があってもあきらめようとしなかった。君のその覚悟。そして君の力。本当なら君は『コード：07』なんてものに縛られるような存在じゃない」

「だま、れ……！」



優が人見の足に向かって手を伸ばした。しかし、その手が人見の足を掴むことはなかった。

「だけど、今の君は邪魔なだけだ。大人しく寝ていなよ」

「がはっ！」

人見が優の顎を蹴り上げた。優はそのまま人見からどんどん離れていった。

「夜原先輩！」

「優さん！」

桜と神田が叫んだ。神田は再び優の傍に急いだ。優は力なく仰向けに倒れている。しかし、優はすぐに肘でバランスを取りながら上半身を起こした。その眼には、未だに強い意志を感じられた。

「ま、まだだ……！」

「優さん！ それ以上動いては駄目です！ 本当に死んでしまいます！」  
神田が涙を流しながら説得する。しかし、優は止まらない。

「絶対に、斃す……！ オレ……が……！」

それ以上、優の言葉は続かなかった。優の上半身は、さっきのように床と背中を合わせている。強い意志を宿していた眼も、力なく閉じられている。

「優さん！ しっかりしてください！ 優さん！」

神田が優の体を揺さぶる。しかし、優が目覚める気配はない。

「そんな……。夜原先輩……？　嘘、ですよね……。う？　夜原先輩！」

桜が信じられないという顔で叫んだ。その目からは大粒の涙が流れていた。

「落ち着け！　神田！」

「ツ………！　はい！　マイ・マスターー！」

大神の言葉で冷静さを取り戻した神田が優の呼吸や心音を確認する。

「………よかった。気を失っているだけのようです………」

「………そうか」

「よ、よかった……。本当に………！」

神田の言葉で大神も安堵の表情を浮かべていた。桜も同様だ。

「なーんダ。やっと死んだと思ったのニ」

「フフフ……。素直じゃないですねえ、刻君。素直に生きててくれて嬉しい、と言ったらどうですか？」

「ハア!?　なんでオレがそんなこと言わなきゃいけないんだヨー！」

「しかし、状況の悪さは変わりません。私たちはここから出られませんし、優君も戦闘不能。大神君一人でどうするつもりなんでしょうねえ。ゾクゾクしてしまいます」

「なに楽しんでやがんだ！　この変態！」

箱の中では刻と平家がもめていた。箱の外の状況は見えないが、聞こえてくる音や声で状況を把握することはできるのだろう。

「私の攻撃を受けて気を失う程度で済むとはね。さすがは優といったところか。でも、これで邪魔者はいなくなりましたことだし、私と少し話をしようじゃないか。大神君」「……なら、はぐらかすのはやめていい加減本当のことを言ったらどうですか?」

大神が人見と対峙し、神田も桜の救出に向かった。その時、優の意識は闇へと沈んでいた。

(オレは……どうなったんだ……?)

優がいた場所は闇だった。自分以外誰も存在しない、闇以外の色もない孤独な世界にいた。優は、そこで仰向けに倒れていた。

(そうだ……。人見の攻撃を受けて、それでも向かっていったらまた攻撃されたんだ。くそ……。思いきり人の顎蹴りやがって……)

徐々に思い出して、自分の状況を把握した優。すると、どこからか声が聞こえてきた。だが、それは鮮明なものではなくどこか聞き取りづらかった。

(なんだ……？ 聞いたことがある声だ……)

声が見た方を見ると、そこには二人の人物がいた。その二人の周りだけ、闇以外の色があつた。その顔と周りの色は、優がよく知るものだった。

(あれは、昔のオレ……。そして、人見……。いや。この時はまだ……。人見さんだった) そこにいたのは優と人見だった。服装は違うが、顔はほとんど今と同じだ。これは、優の記憶だった。

(懐かしい……。あの頃、よく人見さんの昼寝に付き合ってたっけ……)

優が彼らの声に耳を傾けた。すると、その声は徐々に鮮明なものとなっていった。

「いつもすまないねえ、優。私の昼寝に付き合ってもらって」

「構いませんよ。オレも昼寝は嫌いではないですし」

川原の近くにある草むらで横になる二人の男。一人は長い髪を後ろで団子のよう

束ねていて優男という印象を受ける顔立ちをしている。もう一人はそこまで髪は長くない黒髪で優男と比べるとまだ幼さが残る顔立ちだった。

「嫌いじゃないってことは好きってことだろう？　素直にそう言ったらどうだい？　優」

「意味が変わらなければどっちでもいいでしょう。ていうか、ちよつといいですか？」

「ん？　なんだい？」

優と呼ばれる男が上半身を起こした。そして、優男の方を見る。

「なんで呼び捨てなんですか？　大神は君付けなのに。ナンバーはオレの方が下なんですから大神が君付けならオレも君付けになるんじゃないんですか？」

大神というのは彼らの仕事仲間だ。優男は仕事仲間の中で彼だけは君付けで呼ぶ。その理由を問われた優男は、寝転んだまま答えた。

「彼がまだ私を超えてないから、だよ。それに、君の場合はナンバーの上下なんてそんなに関係ないだろう？」

「それはそうですけど……」

ナンバーというのとは彼らの仕事で大きな意味を持つものだ。それは簡単に言うならちよつとした上下関係を表すものだが、優の場合は少し特殊なのだ。

「だとしても、オレは自分が大神より上だなんて思わないですよ。本気で戦ったらオ

レは負けます」

「……『あの力』を使ってもかい？」

「ッ……!!」

『あの力』。その言葉を聞いた瞬間、優は優男から目をそらした。優にとって、それは触れられたくないものだった。しかし、優男はそのまま話を続ける。

「君が『あの力』を使えば、私を斃すこともできるだろう？」

「……過大評価しすぎですよ。それはありえませんが」

「うん。私もそうだと思うよ」

「ハア……。あなたって人は……」

ため息をつくくと、優は再び横になった。少しの間、二人の間に沈黙が流れた。すると、優男が優の方に顔を向けた。

「そういえば、優。『彼女』は元気かい？」

「『彼女』？ ……ああ。あいつのことですか」

優男が言う『彼女』が誰だか理解した優は、急に眉をひそめて目を閉じた。

「……知りませんよ。最近は連絡してないですし」

「嘘はいけないな、優。二日前、君は誰に電話してたのかな」

「な!?! 聞いていたんですか!?!」

「さあ、どうかな？」

再び優が上半身を起こして優男を見た。目を見開き驚愕の表情を浮かべている。対して優男は笑顔を浮かべている。

「まったく……。あなたにはやっぱり敵いません」

「改めて言わなくてもわかっているくせに。なんてね」

「……元気ですよ、あいつは。相変わらずうるさいですけど」

優男の軽口に付き合っつてられなくなったのか、優は前を向いて簡潔にさっきの質問の答えを述べた。

「君は本当に優しいね。毎月『彼女』に電話しているんだから」

「それは……別にオレがあいつを気にしているとかじゃなくてですね……」

「まあ、深くは聞かないよ。それに関しては君たちの問題だ」

そう言うと、優男は優同様に上半身を起こした。そして、真剣な表情になり優を見た。

「だけどね、優。その優しさが仇になる時が来たら、君はどうする？」

「……なんですか、急に」

「例えばだ。もし私が敵の異能者の手に堕ちて君たちの敵になったら、君は私を殺せるかい？」

そんなことはあり得ない。優はそう言おうとしたが、優男の真剣な眼を見てやめた。これは真剣な問いかけだと理解して、優も真剣な表情になって答えた。

「……殺しますよ。容赦なく。たとえ『あの力』を使つても」

「……………」

「……………」

二人の男の間に再び沈黙が流れた。それを打ち破つたのは、また優男だった。

「よろしい。それが正解だよ。やはり君はもう一人前だよ」

「ありがとうございます。まあ、そういう訳ですから悪に堕ちるときは遠慮なく堕ちてください」

「私が悪になるの前提はやめてくれないかなあ。悲しくなつてくるよ」

「冗談ですよ、人見さん」

その後、優と優男……人見は再び横になって眠つた。



そして、この日から数日後。人見は『悪』となった。自らの意志で……彼は墮ちていった。

「う……」

少しずつ視界が大きくなっていった。最初はぼやけていたが、徐々にはつきり見えてきた。そこに映ったのは二つのよく知る顔だった。

「優さん！ 目が覚めたんですね！」

「夜原先輩！ 大丈夫ですか!?!」

「ッ！ 近い！ 離れろ！」

優は慌てて顔をそらした。それも、女性と目を合わせ続けると倒れるという彼の特性のせいだ。

「あ、すみません……」

「すっかり忘れていました。すみません」

声をかけた二つの顔。神田と桜が謝罪した。すると、遠くから別の声が出た。

「おはよう、優。ちようどいい時に目を覚ましたね」

「この声……そうだ！ 人見！」

優は思い出した。自分は大神たちと共に人見のアジトに乗り込み、人見と戦っていたということを。優は急いで上半身を起こした。

「優さん！ 無理をしては……」

「心配ない。……『束脳・反転』」

優が起き上がりながら異能を発動させた。すると、優の体にあつたかすり傷などが少しずつ消えていった。

「ッ……！ 自己回復能力の強化、ですか……」

神田が驚愕の表情を浮かべる。しかし、次の瞬間には優がその表情を浮かべていた。

「大神！」

上半身を起こした優が見たのは、人見の前で倒れた大神だった。その体は小刻みに震えている。

「ついさつき大神君がロストしたところだよ。刻と平家もまだ箱の中だ」

「な……!?」

人見の口から語られたのは最悪としか言えない状況だった。さらに、人見の言葉が終

わるのとほぼ同時に優の耳にある音が響いた。

「この音は……爆発!?」

「ああ、君は気を失ってたから聞いていなかったか。この爆発は、私が全国に仕掛けた爆弾だよ」

「何!?!」

「私は君たち『コード・ブレイカー』を使い捨てのコマのように扱って来た藤原総理を処刑する。それと同時に、5万人の一般人にも死んでもらうことにしたんだ」

人見が語った驚愕の真実。その事実を聞いた優は、人見を睨みつけて大声を出した。

「ふざけるな!　なんでそんなことをする!」

「……恐怖だよ。恐怖は人の記憶に最も強く残る。だから私は彼らに恐怖を刻みつけ、求めさせる。悪を裁く存在を……君たち『コード・ブレイカー』を!　私は『コード・ブレイカー』を『存在しない者』ではなく、『存在する者』にする!　もう誰も!　孤独に死なせないために!」

「な……!?!　そのために悪に堕ちたって言うのか……!」

まさかの答えに優は目を見開いた。だが、人見の答えはあまりにも彼らしかつた。彼の裏切りは、彼の優しさ故だったのだ。

「ふざ、けるな……!」

「大神……！」

突然、大神が口を開いた。震える体を何とか立たせようとしている。

「優……！ オレたちは、『コード・ブレイカー』だ……！ オレたちは自ら望んで、『存在しない者』となった……！ そんなオレたちに……そんな救いは必要ない！」

「大神……！」

大神の言葉に優は何も言えなかった。大神の言葉に間違いはない。それは優も理解できていた。それでも、優の心は揺れていた。人見の言葉と大神の言葉の間で優は揺れていた。

「大神君……。君は本当に真っ直ぐだね。本当に真っ直ぐな眼をしている。……正直イライラするんだよ。君のその眼は。君だって本当は気付いているんだろう？ 『コード・ブレイカー』がいくら悪を裁いたところで意味はないって。……その未だにギラギラし続ける眼。そろそろ消しズミとなってもらおう！」

「ツ！ 大神！」

「マイ・マスター！」

人見の手が『電力』をまとい大神に向かつていった。優は迷っていたことで反応が遅れ、ただ大神の名を叫ぶことしかできなかった。

人見の『電力』が大神に迫る——！

「……なに?」

しかし、次の瞬間には人見の手から『電力』は消えていた。

「……………」

原因は桜だった。桜がいつの間にか人見の後ろまで移動し、人見に後ろからハグしているのだ。珍種に触れられたため、異能である『電力』が消えたのだろう。

すると、桜は人見の背中の匂いを嗅ぎ始めた。

「人見先輩殿は原っぱの匂いがするぞ!」

桜が叫んだ。その顔は真っ直ぐと人見に向けられ、その目も真剣な眼差しで人見を見ていた。

「神田先生はマシユマロみたいに柔らかくて、甘くていい匂いがするぞ! 刻君は指先はいつも冷たいけど首筋とほっぺはぽかぽかしていて生まれたてのヒナ鳥みたいなんだぞ! 夜原先輩はいつも硬い感じだけどプニプニの肌をしていてすごくあつたかいんだぞ!」

「え……!？」

「ヒナ……」

「プニプニつて……」

神田、刻、優の三人はあ然とした。構わず桜の言葉は続く。

「大神は……あいつは、口は悪いし冷たい……。いつも能面みたいな笑顔をしている。……けど！ あいつの体は……心はいつも熱くて、太陽みたいにキラキラ輝いているんだぞー！」

「……………」

大神が驚いたような顔で桜を見る。彼女の言葉が、あまりにも意外すぎたのだろう。桜は人見の服をギュツと掴んで続けた。

「本当の名前とか何をしてきたとか、そんなこと私は知らん！ でも！ 私はみんなの熱さや匂いを知っている！ それなのに存在していないなんて、悲しいことを言うのだ……！ 私にはみんなのことを忘れないぞ！ 絶対に忘れてやるもんかー!!」

桜がハグしている両腕に力を込めた。人見は何も言わない。ただ、背中越しに感じる桜の心臓の音を感じていた。

「人見先輩殿も大神に負けないくらい熱いぞ！ それは総理も町の人々も同じです！ だからもうこんなことは……」

「だから何だ……………」

桜の体が宙に浮かんだ。人見に首を絞められながら持ち上げられたのだ。

「ッ……………」

空中のため、桜は何の抵抗もできずに人見に首を絞められていた。人見は異能もかたりのものだが体術もかなりのレベルだ。その人見に首を絞められ、桜の表情は苦しみによって支配されていた。

「桜小路さん！」

「くそ……………」

神田が叫んだ。そして、優が人見に向かって走った。まだ完全に回復しきっていない

かったが、そんなことはまったく気にしていなかった。

「君も死んで忘れ去られるがいい……!」

——その時。人見の手で苦しむ桜を目の前で見た『彼』の中にある声が響き、目に映る光景が変化した。

『滅せ!!』

声が響いた。

『滅せ……』

耳に聞こえたのではない。

『悪を滅せ……』

頭の中に直接響いている。

『その手ですべて……』

ほとんど無意識だった。



『燃やし尽くせ!!』

『彼』の左手から、その枷が外された。

「ッ!」

優の目の前に、今まで見えなかった色が広がった。さつきまでなかった『青』が人見の足元から現れた。

「なっ……!」

突然のことに人見も驚愕の表情を浮かべた。すぐに桜を放し、その場から離れた。さつきまで桜の首を絞めていた手の指からは、チリチリと火傷による痛みが感じられた。

「Eye for eye Tooth for tooth EVIL」  
L<sub>悪</sub> f<sub>に</sub> o<sub>は</sub> r<sub>悪</sub> E V I L

『彼』……大神は静かに立ち上がり、その声を響かせた。

## code:11 人見の最期

「お、大神……？」

優は目の前に立つ仲間の名前を確認するかのようには呼んだ。それほど、目の前に立つ彼の姿は異常だった。

「……………」

無言で佇み、左手から静かに『青い炎』を出す大神。そんな彼から発せられる雰囲気は穏やかながらかなり危険なものだった。普段の大神とは明らかに違う。そして、注意深く大神を見ていた優はあることに気が付いた。

「左手の指輪がない……？」

大神が『青い炎』を発する左手。その親指にはいつも指輪があつたが今は見当たらない。かかった。

「いやあ、驚いたよ。大神君」

人見が『青い炎』を受けた手をプラプラと振りながら言った。驚いた、と言っているが、彼は未だに笑顔を浮かべていた。

「だけど、なんでロストしたはずの君が『青い炎』を使えるんだい？ それに、君の『青

い炎』は触れた物体しか燃え散らせないはず……。だが、さつき君は離れた場所にいた私に『青い炎』で攻撃した。……一体、君は何者だい？」

人見の言葉に大神は何も答えない。ただ静かに佇んでいるだけだ。

「まあ、どうでもいいけどね。どつちにしろ……」

瞬間、人見が大神の背後を取り大神の肩を掴んだ。洗練された無駄のない動きで、あたかも一瞬で移動したかのようだった。

「元エースの私は斃せない！」

「大神！」

「マイ・マスター！」

肩を掴んだ人見の手から『電力』が放出された。大神の体を『電力』が流れる。普通の人間なら感電死する威力だ。

大神の体が痺れ、そのまま斃れる……。はずだった。

「ッ!？」

突然、人見が大神の肩から手を放した。しかし、それは人見の意志で行ったのではない。外部からの衝撃でそうなったのだ。その衝撃を与えたのは他ならぬ、大神だった。

「……フラッシュオーバー 空中放電」

大神の体を大量の『電力』が襲った。それは今までの比ではなく、雷のように巨大な

『電力』となっていた。

「な……!!? まだこんな力が……!!」

「優。君が気を失ってる間にこの部屋一带に帯電網を張りつめたんだ。もちろん、それは触れたものしか燃え散らせない大神君を近づけさせないため。それともう一つ。雷並みの『フラッシュオーバー』を起こすためさ」

「くそ！ 大神！」

幾重にも仕掛けられた人見の罠と策略。今まさにその術中にいる者の名を優は叫んだ。しかし、大神はただ人見の攻撃を受け続けていた。

しばらくすると、彼は動いた。

ゆっくりと自分の背後にいる人見の方を向き、『青い炎』をまとった左手で……払った。

「なに!？」

先ほどまで大神の体を攻撃していた人見の『電力』は跡形もなく消えていた。人見の意志ではない。掻き消されたのだ。

「なぜだ!?! 私の電力が掻き消されるなんて……!!」

「……………」

それをやったと思われる大神は静かに笑みを浮かべた。邪気もなく柔らかな物腰

だったが、相変わらず危険な雰囲気<sup>アツク・テンシヨク</sup>が漂っている。

「ならば、これでどうだ！ 鉄をも溶かす『高熱電流』で消し去ってやる！」

人見が両手を自らの胸の前に出し力を溜め始めた。『電力』を一点に集中させることで高熱を発生させており、人見から離れた場所にいる優と神田でもまるで砂漠の真ん中にいるような熱さを感じていた。

「まだだ……！ まだなんだ！ 私が、私が為さねばならない！ 誰も！ 私を止めることはできない！ うおおおおお!!」

人見が走った。その手に高熱を発する『電力』を携えて。大神に向かつて、ただ一直線に走った。しかし、大神は動かない。

「マイ・マスターー！」

「大神！ 逃げろ！」

神田と優の言葉など聞こえてないかのよう<sup>よう</sup>に、大神は左手を前に出した。

次の瞬間、大神の左手から『青い炎』が消えた。それとほぼ同時に、人見の目の前に『青い炎』が浮かんだ。

「な……！」

人見が身を引いた。しかし、『青い炎』は人見を逃がそうとはせず、人見を追っていた。

（炎が……！ 『青い炎』が私に纏わりついて離れない!?!）

人見は何度も『青い炎』を避けた。しかし、『青い炎』の追撃は止まらず人見の体に纏わり続ける。

「……………」

大神が人見に背中を見せた。そして、あたかも「地獄に堕ちろ」と言っているかのよう  
うに右手を握りこぶしの状態から親指を立て、親指で地面を指差した。

「Flame 燃え away. 散れ。」

その瞬間、人見に纏わりついていた『青い炎』が輝き業火と化した。

「ああああああ!!」

人見の体が燃え散らされていく。服は焦げ、肉は焼け、痛みを伴いながら人見の体を  
炎が包んでいく。

「Destroy 悪を滅せ Evil……………」

「マイ・マスター!?!」

突然、大神の姿勢が崩れた。その体を神田が支える。それと同時に、人見を燃え散らしていた『青い炎』が消えた。

「や、夜原先輩……。今のは一体、何だったのですか……。？」

「……オレにもわからないな。だが、大神のあの指輪……」

桜の問いを受け、優はチラリと視線だけを動かして大神を見た。彼の目に映ったのは、力なく倒れている大神。そして、大神の体を支える神田。神田は大神の左手の親指にあの指輪をはめていた。どうやら神田はあの指輪が大神にとつてどんなものか知っているようだ。

「何か意味があるようだな。まあ、別にどうでもいいが」

「……………」

仲間である大神のことなのにどうでもいいと言う。それは、やはり彼が『コード：ブレイカー』だからなのだろう。そんな優に複雑な感情を抱き、桜はそれ以上話そうとはしなかった。

「……どうやら大神君の『青い炎』は特別なようだね」

「……人見」

優が声が出た方を見ると、人見が床に転がっているテレビを背もたれにして座っていた。どうやら立つ体力も残っていないらしい。それを裏付けるかのように、その呼吸も

ひどく荒かった。

「私を上回る異能を操るとは……。正直、驚いたよ。でも、残念だったね」

その言葉を聞いて、その場にいた全員がハツとした。まだ終わっていないかった。国中に仕掛けられた爆弾。そして囚われている藤原総理。優はすぐに部屋のテレビに映るカウントダウンを確認したが、その残り時間はあと十秒もない。

「残りのタイマーが総理の処刑と共に爆発する！ 5万人の死が！ 恐怖が！

『コード：ブレイカー』の力による裁きを請い求め、『コード：ブレイカー』が報われる公平な世界が訪れる！ 私の勝ちだ!!」

そして、タイマーがゼロとなった。

止めることは……できなかつた。

「……平家さん。治療、終わりました」

「ありがとうございます、優君」



人見のアジトの一室。大量のテレビが置かれ、先ほどまで大神たちと元エースである人見が激闘を繰り広げた場所。そこで、優は平家の手に包帯を巻いていた。

「だけど無茶すぎですよ。いくら抜け出すためとはいえ」

「まんまと人見の罠にはまった優君のせいですよ」

「……すみません」

「まあ、私も同じ身分ですから強くは言いませんが。それに、そんな暗い顔はやめましょう。無事に終わったのですから」

そう。すべては無事だった。爆弾も爆発せず、藤原総理も救出された。そうなったのは、箱の中にいたはずの平家と刻。そして、『コード：03』のおかげだった。

まず、平家が箱の壁一面に色付きの液体を塗ることで反射を防ぎ『光』のムチで箱を縛り斬る。そして、刻の『磁力』から微弱ながら電波を発生させることで、外にいる『コード：03』に状況を伝え爆弾を処理させたのだ。ちなみに、平家が壁一面に塗った色付きの液体とは平家の血だった。優が平家の手に包帯を巻いていたのはそのためである。

「ところで、優君の方は大丈夫なんですか？ 聞こえた限りでは随分ひどそうでしたが」

「大丈夫です。だいぶ回復しました。ただ、結構な量の異能を使ったのでロストが心配ですが」

「ふむ。なら、もう異能を使うのはやめた方がいいでしょう。仕事も終わったのですから構わないでしょう?」

「……そうですね」

平家に言われて優は目を瞑った。そして、短く息を吐き出した。異能を完全に解除したらしい。わかりやすく言えば、『凡人』になった。

「……………」

優はチラリと人見の方を見た。人見は桜と何やら話しているようだった。異能を使っていたら聞こえていたかもしれないが、異能を解いた彼には会話の内容は聞こえていない。

「……桜ちゃん。君には知っておいてもらおうかな。私が『コード・ブレイカー』を辞めたワケを」

「人見先輩殿が『コード・ブレイカー』を辞めたワケ……」

自分が斃されただけでなく、爆発も止められ、総理の処刑すら行えなかった。現役『コード・ブレイカー』によって自分の計画が失敗に終わった人見は、テレビを背もたれにした状態のまま桜に話しかけた。その顔は微笑を浮かべてはいるが、その呼吸は荒い

ままだった。

「知りたいかい？」

「……はい」

人見の問いかけに、桜は真剣な眼差しで答えた。彼女としても知りたいのだ。人見がここまでのことをした根本にあるもの……彼が『コード・ブレイカー』を辞めたワケを。

「じゃあ、おいで。もう首を絞めたりしないからさ」

「む……。では、失礼して」

桜を手招きする人見。桜にとって先ほど首を絞められた相手なので少なからず警戒心はあったが、人見の言葉を信じて彼のすぐ傍まで近寄った。こういうところを見ると、彼女は非常に勇気があると感じてしまう。大神たちにしてみれば「素直なバカ」なのかもしれないが。

そして、人見は傍まで近寄った桜の耳元でそつと囁いた。

「……君は、自分の闇と闘う強さがあるかい？」

「ぬ？」

すると、人見の手が静かに動いた。そして、桜のスカートのポケットのポケットキに向かった。その手にあったのは——タグに「渋谷」と書かれた一本の鍵キだった。

「——12月32日だよ」

「……ええ？」

桜にしか聞こえないように人見は呟いた。当の桜はその言葉の意味がわからないよ  
うだが、人見は微笑みを浮かべていた。

「……で、なんで『コード：ブレイカー』やめたワケ？ あんたに正義のヒーローは似  
合ってたと思うケド？」

人見が桜から離れると、刻が煙草が入った箱を差し出しながら言った。見てみると、  
ちやつかり自分も吸っている。人見は箱から煙草を一本取り出し、そのまま口に咥え  
た。刻がライターを用意し、慣れた手つきで煙草に火を点ける。

「……刻。君がまだ知らないこともあるんだよ」

「ええ？」

「……ぐっ！」

次の瞬間、人見の体に『電力』が纏わりついた。それは人見の意志で出しているものではないようで、その顔は苦痛の色を示している。

「な……ロスト!？」

「……違いますよ」

刻が慌てて人見から離れた。すると、平家がゆっくりと口を開いた。

「これは『コード：エンド』。異能の終わりです」

『コード：エンド』。それは異能を使い続けた者の末路。異能者の終着点。異能を使い続けると、異能が異能者自身を死ぬまで喰う現象のことだ。そして、人見が『悪』になった原因の一つでもあった。

『コード：ブレイカー』は異能を使って『悪』を裁く。たとえ裁くべき『悪』に殺されようとも、異能を使い続けることで『コード：エンド』を迎えて死んでも、『存在しない者』である彼らの存在は闇から闇へと葬り去られる。だから“エデン”にしてみれば『コード：ブレイカー』というのは使い捨てができる都合のいい存在。人見はそれが許せ

なかった。

法で裁けぬ悪を裁くという大義名分の元、多くの『コード：ブレイカー』たちが死んでいった。誰にも知られることなく。誰の記憶にも残ることなく。ただ一人で孤独に死んでいった。それを知っていた人見は、自らに『コード：エンド』の予兆が見え始めたことに恐怖した。孤独に死ぬことが怖かった。そして思った。「もう誰にもこんな思いはさせたくない」と。そのための裏切り。そのための行動。そのための罪。彼は『コード：ブレイカー』だけではない。異能を持つ全ての者のために一人で戦っていた。もしかしたら他に方法があったかもしれない。しかし、彼には時間がなかった。時間がない彼にできたのが、今回の事件だったというわけだ。

「……………これが、私が今回の事件を起こした理由の全てだよ」

「……………」

「『コード：ブレイカー』が……………大神たちが使い捨てなんて……………」

『コード：エンド』の事実と『コード：ブレイカー』の存在について。そして、人見が今回の事件を起こした理由が彼の口から語られた。

人見の言葉に大神は黙り込み、桜は驚きを隠せないようだった。だが、桜の中にはある疑問が残っていた。

「しかし、なぜ総理を？ 話を聞く限り、総理は関係ないのでは？」

「それは大きな間違いだよ、桜ちゃん。『エデン』のトップに立ち、『コード：ブレイカー』たちを使い捨てにしてきた男……。それが藤原総理なんだから」

「え!？」

「……………」

再び人見の口から語られた驚愕の事実。日本の代表として政界をまとめている総理が、『エデン』のトップとして『コード：ブレイカー』を使い捨てにしてきたというのだ。

桜は驚いて目を見開き、藤原総理は慌てる様子も見せず壁に寄りかかっていた。そして、人見は藤原総理を睨みつけた。

「藤原……。今まで『コード：ブレイカー』が何を思っただか貴様にわかるか？ ……愛する者に思いを伝えることもできず、墓標を立てることさえも許されない……………！ そんな彼らの思いを……………！ 私は……………貴様を許さない！」

すでに限界に近い体で必死に叫ぶ人見。彼は大神の攻撃でボロボロとなった体で、ふらつきながらもゆっくりと立ち上がった。

「貴様だけでも……！　貴様だけは道連れに——！」

その瞬間、大神が人見を殴り飛ばした。

「……………ふざけるな！」

人見を殴り飛ばした大神が叫んだ。殴り飛ばされたことで人見の体は倒れ、大神は怒りの表情を浮かべて人見を睨みつけた。

「そのために何の罪もない人々を殺したのか!?　それがオレたちのためだということのか！　何の罪もない人間が死ぬっていうのは、あんたが一番嫌っていたことだろうか！」

「……………だから君はガキなんだよ。……………大神君！」

人見は倒れた状態から立ち上がり、大神を殴り返した。大神は倒れることなくその拳を受けた。

「人の記憶に残らない……………人との繋がりを持たないなんていうのは生きているとは言



わない！ 家族や友人と共に穏やかに過ごす！ そんな当たり前が『コード：ブレイカー』にも必要なんだ！ 私はその当たり前を何一つ手に入れることができなかつた！ このままだと君たちも同じ目に遭うことになる！ それを止めようとする私の気持ちになぜわからない！ 大神君！」

攻撃と共に繰り出されていく人見の思い。大神は人見の拳を避けようともせず、ただ黙って拳を受け続けた。だが、その目には強固な意志が感じられた。

「私にはもう時間がないんだよ！ だから、何としてでも止めなくてはならない！ 私はもう……！ 誰にもこんな思いはさせたくないんだ！」

その時、大神の脳裏にある光景が浮かんだ。かつて、共に『コード：ブレイカー』として過ごしてきた頃の記憶が。

とある川原の近くにある草むら。そこに二人の男が座っていた。いや、二人のうち一人は草むらに寝転んで微笑を浮かべていた。それはまだ『コード：ブレイカー』であつ

た頃の人見。隣で座っているのは大神だ。

「すまないね、大神君。私の昼寝に付き合ってもらつて。昨日は優に付き合ってもらつて、今日も付き合ってもらおうと思つたんだけど彼はバイトでね。代わりと言つたら聞こえが悪いけど、たまには時間も気にせずのんびりするのでもいいだろう？　大神君」

横になったままやんわりと話す人見。対する大神は無表情のまま黙つて前を見ていた。しかし、人見の「大神君」という単語を聞くとかすかに眉がピクリと動いた。

「……君付け、いい加減やめてください」

「私に君が一人前だと認めさせることができたらやめてあげるよ、大神君」

「……半人前で悪かったですね」

人見の言葉にかすかに苛立ちを見せる大神。しかし、人見は相変わらず横になつたま微笑を浮かべていた。彼は近くにあつた草を摘み取り、指を使つてくるくと回した。

「ねえ、大神君。もし明日死ぬことがわかつていたら……君ならどうする？」

微笑を浮かべながらも物騒な問いかけをする人見。それを受けた大神は、こちらも相変わらず前を向いたまま無愛想に答えた。

「僕は……僕は最期の一分一秒まで悪を燃え散らします」

「最期の一分一秒まで……か。でも、本当に最期までその覚悟を貫き通せるかな？」  
「……………」

まるで大神を試すかのような口ぶり。こうして、のらりくらりとした様子で話すのは人見の特徴でもある。大神はその態度が気に入らないのか、再び黙り込んでしまった。

「そう機嫌を損ねないでくれよ、大神君。……ふわああ」

ゆつくりとあくびをする人見。すると、静かに彼の両目が開いた。その目は大神のようにならぬ向いていた。ただ彼の場合は、やんわりな雰囲気を感じながらも強い意志が感じられた。

「大神君。私はね、最期の一分一秒まで『コード：ブレイカー』でありたいと思うんだ。どんなにこの手が血に染まっても、私に救える命があるのなら最期の最期までその命を救いたい。そして、『存在しない者』として人知れず消えていく。……そんな死に様でいい。これまでの全ての『コード：ブレイカー』たちがそうだったように」

「……そこまでして人のために生きたいと？」

「そんな大それたもんじゃないよ」

そう言うと、人見はゆつくりと起き上った。そして、大神の方を見て照れくさそうに笑った。

「そういう性分なだけさ」

「あんな……あんな御託並べていたのに………勝手に決めつけんなよ！」

大神の拳に一際力が入り、人見を再び殴り飛ばした。人見は再び倒れ、大神も限界が近いのか肩で息をして前のめりになっていた。

「惨めだとか報われないとか………そんなことはどうでもいい。……オレは、生まれてくる場所を選べないが死に場所は自分で決める。だからオレは『コード・ブレイカー』になった。オレは生きている限り悪を燃え散らす……。最期の一分一秒まで………それだけだ！」

「大神………君」

倒れた状態で、人見は大神を見た。そして、彼の脳裏にもまた『コード・ブレイカー』として共に過ごした日々の記憶が蘇り、大神の覚悟が何一つ変わらず決して揺るがないものだと実感した。

「相変わらずギラギラして………イライラさせてくれる。……ぐっ！」

まるで安心したかのように微笑む人見。しかし、彼の体は『コード：エンド』によって確実に終わりを迎えようとしていた。彼の体に纏わりつく『電力』が次第に大きくなっていく。

人見はゆつくりと立ち上がり、大神の横を歩いていった。そして、そつと呟いた。

「……『エデン』に気を付けろ。それと……桜小路さんを奴らに渡すな。……絶対  
に」

そして、微笑みを浮かべながら大神を通り過ぎた。

「押し通してみせろ、その覚悟。君の生き様、地獄から見ているよ……」

——大神。

かすかに、だが確実に。人見は大神に向けて最期の言葉をかけた。

「無駄ですよ。……もう」

自分より大きい人見の体を、大神は一人で支えていた。その体からは、もう彼の温かさは感じられなかった。

裏切りの元『コード：01』、人見は……死んだ。

「う、うう……」

神田が泣き崩れる。人見と彼女には、他人とは違う深い関わりがあった。それ故に、感じる悲しみも大きいのだろう。

人見が大神を認めた直後。彼は残った全ての『電力』を放出し、藤原総理を道連れにしようとした。しかし、大神たち『コード：ブレイカー』がそれを阻止した。『電力』の放出により崩れた天井の破片を刻が『磁力』で止め、総理に向かっていく人見の体を平家が『光』のムチで止め、『脳』でリミッターを外した優が総理の前に移動し人見の頭を掴み、大神がロストして『青い炎』が出ない左手で総理に向かって伸ばされた人見の手を止めた。あなたのことを絶対に忘れない……。そう静かに告げて。それを聞いた人

見は、安らかな顔で逝った。

「最期の最期までのらりくらりと……。そんなあなたが本当に大嫌いでしたよ……」  
人見の遺体を支えながら、大神は呟いた。そして、ゆっくりと床に寝かした。そんな大神の後ろに立った人物は心から呆れた顔で言った。

「まったく……。人間とは愚かな生き物だねえ」

藤原総理だった。人見に捕まり拘束されていたため着ていたスーツは乱れ、人見の最期の一撃に畏怖の表情を浮かべていた彼だったが、今は何事もなかったかのように言葉が続ける。

「エースにまで昇りつめた人間でさえ『悪』に堕ちる時は早いものだ。まったく驚いたなあ。だが、その『悪』も滅せられた。これでめでたしめでたしというわけだ」

「……ッ！ てめえ！」

「待て」

総理の非情な言葉に刻が殴りかかった。しかし、優が後ろから羽交い絞めすることで止めた。

「邪魔すんな、優！ こいつだけは……！ こいつだけは一発殴らねーと気が済まねえ！」

「オレたちの仕事は藤原総理の護衛だ。そのお前が藤原総理に怪我を負わせてどうす

る」

『脳』で身体能力が強化されたままの優に止められていても、刻は藤原総理を殴ろうと暴れた。そんな刻を落ち着かせるためなのか、優は冷静な態度で刻を止め続けた。

「てめえは悔しくねえのかよ！ 人見が……人見サンが！ ここまでやったつーの二！ こいつは何事もなかったみてーに事を片付けやがった！」

「……どんな理由があろうと、人見は罪を犯して『悪』になった。当然の報いだ」

「てめえはこんな時までこいつの味方しやがるのかよ！ そんなに拾われたのが嬉しいか!? そこまでしてこいつの犬になっていてーのかよ！ 今まで人見サンに散々世話になったくせに……！ このクズヤローが！」

「ッ……！」

刻の言葉に優の表情が歪んだ。すると次の瞬間。優は刻の襟元を掴んで壁に向かって投げつけた。背中から激痛が走り、刻の顔が苦痛に歪む。そして、すぐに優に対する怒りの表情に変わる。

「痛ッ……！ 何すんだ！」

「……そうだ。オレは犬だ。だがな、それはお前だつて同じだ。犬が飼い主に噛みついたところで何も変わらない。むしろ様々なものが悪化するだけだ。……総理を殴ったところで無駄だつていうのは、お前だつて本当はわかってるだろ」



「ぐ……………」

優の言葉に刻は反論することができなかった。すると、今まで二人のやり取りを見ていた総理が呆れ顔で口を開いた。その隣には平家が神妙な顔で立っていた。

「……………気が済んだかい？」

「刻君。優君の言う通り、護衛対象に手出しは厳禁ですよ。……………未遂ですし、時間としてもバイト終了後とみなして減点はしないでお願いします。……………さて。参りましょう、総理」

平家は総理と一緒に部屋から出した。おそらく国会まで護衛として付き添うのだろう。

「……………忘れんなよ。オレはねーちゃんのためにやってるんだ。ねーちゃんのことが無ければ、オレはいつでもためえを殺せるってことを忘れんな」

「……………楽しみにしてるよ」

総理と平家が部屋を出る直前。刻が総理を睨みつけながら言った。彼の言葉を聞いた総理は静かに微笑み、平家と共に部屋を出ていった。しばらくすると、外から車の発信音が聞こえた。どうやら車が用意されていたようだ。

沈黙が支配する部屋の中、桜は一人で壁の近くに立つ優の方を見た。

「夜原先輩……………」夜原先輩が刻君に言ったことは確かに正しいかもしれませんが。しか

し、夜原先輩は悔しくないのですか……？ 人見先輩殿が命を賭けてまで行ったことをあつさり否定されて……」

「……悔しくないのか、だと？」

——ふざけるな」

その瞬間、優の目の前にあつた壁がなくなり轟音が響いた。よく見てみると、優の右手が前に出されており、その手は血で紅く染まっていた。どうやら、彼が殴ることで壁を粉砕したようだ。

「悔しいに決まってるだろ……。オレが今こうして『コード・ブレイカー』でいられるのはあの人のおかげだ。オレはあの人を……『コード・ブレイカー』としてだけじゃない。一人の人間のもとも尊敬していた。その人の思いをあんな言葉で済まされたんだ……。悔しくないわけないだろ……！ だが、しょうがないんだ……。オレたちは

……犬でしかないんだから」

「夜原先輩……」

ギョツと拳を握りしめる優。その力の強さに、指の間から新たに血が流れた。

優によって外の空気と繋がった場所から静かな風が流れ込んだ。その風は、静かに横たわった人見の髪を揺らした。

「まだ、原っぱの匂いがするぞ……」

桜が遺体となった人見の胸に顔を埋める。しばらくすると、ゆっくりと顔を離れた。

「大神……。結局、何が一番悪かったのだ？ 私には人見先輩だけが悪かったとはとても……」

「善悪の基準なんて人それぞれですよ。そして皆、自分こそが正しいと思っています。でなければ争いなんて起こらない。でも、あなたは知っているはずですよ。人が決して犯してはならない罪を」

「……………」

桜の頭に浮かんだのは部屋にあったテレビに映された爆発に巻き込まれる人々。桜はグツと手を握りしめた。

「罪なき者を殺める……。その一線を越えた罪人には死という罰が相応しい……」

「……………」

桜の目は、ただ哀しみに暮れていた。

「……………」

すると、優が人見の遺体を挟んで桜の向かい側に立ち、ゆっくりとしゃがんだ。そして、人見の顔を見てポツリと呟いた。

「まったく……。オレが殺すって言ったのに、こんなにあつさりと……」

「夜原先輩……。なぜですか？　なぜ、そこまで人見先輩殿を……？」

桜が尋ねると優は数秒黙ってから、ゆっくりと口を開いた。

「昔……約束したんだ。人見さんが『悪』に堕ちたらオレが殺す、ってな……。人見にしてみれば冗談だったかもしれない。だが、約束は約束だ。オレは……。それを果たせなかった。人見さんとした……。最後の約束を」

「夜原先輩……」

優は人見の額に手を置いた。そして、向かいにいる桜にも聞こえないほど小さな声で呟いた。

「あなたが遺したものの……。大事にします。……………人見さん」

優は立ち上がり部屋を出た。人見が遺したものを、その胸で確かに感じながら。

## 番外篇

## code : extra 1 バレンタインデー

本日は2月14日。バレンタインデーである。

「桜きゅん！ 今日にはバレンタインデー！ 桜きゅんは誰にチョコを渡すのかな？」

ユキちゃん、楽しみ！」

「ゴフツ……！ さ、桜ちゃんはパパにだけだからね……！」

桜小路家では、娘である桜のチョコの行方を母であるユキは楽しそうに、父である剛徳は血を吐き泣きながら気にしていた。

「うむ！ 行つて参る！」

桜は強い覚悟をその目に宿し、家を後にした。そして、いつものように大神と共に学校へと向かった。……大神を睨みながら。

「……どうしたんですか？ いつも以上に怖い顔をして……」

さすがの大神も桜の迫力に少し引いている。冬だというのに大神の顔には汗が流れた。

桜がここまでの覚悟でやろうとしていることは二つあった。その一つが……

「……………」

学校に着くと、桜は大神の前で両手を広げていた。それはまるで、大神にチョコを渡すな、とジエスチャーで周囲に伝えているようだった。これが桜のやろうとしていたことのひとつ。大神にチョコを渡させない、だ。

これには理由がある。以前、大神がラブレターをもらった時に彼はそのラブレターを何の躊躇もなく捨てた。他人の気持ちを平気で踏みにする大神の悪魔のような顔を知っていた桜は、チョコをもらっても大神はまた捨てると予想したのだ。つまり、この行動は大神にチョコを渡そうと考える者たちのためを思つてのことだった。

だが、何も知らない他人から見ればその行動は誤解を生む。

「やだ、桜ったら。ヤキモチ？」

「桜つて、意外と独占欲強いよね〜」

そう。ツボミとおおぼと同じようなことを周囲の人たちは思った。桜のファンである男子たちも「そこまで大神のことを……！」と泣きまくっている。もちろん桜本人にそんな気は一切ない。

「大神君。ちよつと寂しい？」

「いえ。僕にチョコをくれる人なんていませんよ。モテませんから」

おおぼの言葉に大神は笑顔で返した。大神としてはもらったところで捨てるだけだ

から桜の行動は願ったり叶ったりだろう。

しかし、大神のこの発言を聞いて周りの男子たちはかなりムカついていた。

(ちくしよー！ 大神！ どうせお前はその後、最高級のチョコレートを味わうんだろ！)

この時、男子たちの頭の中に浮かんでいた光景はこんな光景である。

「きよ、今日は……甘くてとろけるぞ……」

「では、いただきます」

自分の体にラッピング用のリボンを巻いた桜が大神によつて食される、というものだ。男子たちはそれを勝手に想像して勝手に絶望していた。

「えー！ チョコ貰ったの？」

「見せて、見せて！」

桜と大神が教室に入ると、女子たちのはしゃぐような声があった。声の方を見ると、クラスメイトであるタッキーこと武田<sup>ただ</sup>、剣道部の沖田<sup>おきた</sup>、上杉が何個ものチョコを持って女子に囲まれていた。

「ま、日頃の根回しの成果ってやつ？」

「こ、これは、部活の先輩たちが……」

「……っす」

その後ろでは、パソコン少年の島津しまづとマエシユンこと前田まえだが何やら言い争っていた。

「わ、私は、チョコレート会社の戦略になど乗るつもりは……」

「おいおい、島津！ 強がんなよ！ 手が震えてるぜー！」

「マエシユン！ あなただつて、母親と妹にしかもらつてないくせに！」

「イテテ！ 鼻掴むなよ！」

「まったく見苦しいわね〜」

二人の会話を聞いていたあおばが前田に歩み寄った。そして、チョコが入った袋を差し出した。

「勘違いしないでよね。幼馴染のよしみだゾ」

「あ、あおば……」

一方の前田は、チョコの袋についているタグの「おっばい型チョコ」というのを目の前のあおばの胸を何度も見て嬉しいような残念なようなよくわからない顔をしていた。

すると、突然教室のドアが開いた。そこにいたのは、大量のチョコを袋に入れてサンタのように担ぐ刻だった。



「ちーっす」

「刻君。また勝手に入ってきたのか？」

刻の訪問を桜は特に気にしていなかったが、周囲のクラスメイト（特に男子）が刻の持つチョコレートのに驚いていた。

刻は大神を見つけると、ニヤニヤしながら近づいていった。

「あつれー？ さみしー！ 大神君、手ぶら〜？ 意外とモテないんだね〜」

大神は刻を無視して自分の席に行こうとしたが、刻が後ろから肩に手をかけてきた。

「カワイソ〜。間違いなくチョコゲット数ナンバーワンのオレが分けてあげようか？」

「……僕、甘い物苦手なんで。それに……」

「ン？」

大神が視線を動かしたので刻もそれを追った。その視線の先にあるのは桜の机……の上に大量に置いてあるチョコだった。

「数なら今の所、桜小路さんの方が多いいみたいですよ」

「逆チョコかヨ！」

「む？」

「ダー！ クソ！」

「何を怒ってるんですか？ 自称ナンバーワンの刻」

「うるせー!!」

朝のやり取りから時間が過ぎ、今は昼休みとなった。昼休みになっても輝望高校にいる刻を見ると、通っている閉成学院はチョコを貰うだけ貰つといてさぼつたらしい。その刻に大神と桜を加えた三人は、校舎の外を歩きながらある場所に向かっていた。

「桜ちゃんは女の子だから勝負の相手には入んネー！ 男同士だったら間違いないくオレがナンバーワンだつっの！」

「それで優の所に行つて確認するんですか……」

彼らは今、優の元に向かっている。これは刻が提案し、大神と桜はそれに付き合わざれてる形だった。

「女嫌いのあいつなら、どーせ学校でも女の子を遠ざけてんだロ！ それが原因で女の子から嫌われて0個だナ！ アッハッハ！ ……てか、桜ちゃん。本当にこつちにいるワケ？」

「うむ。間違いないのだ」

刻が歩きながら桜に尋ねた。桜は絶対に自信があるかのように力強く頷いた。

「夜原先輩のクラスメイトの方に聞いたら、夜原先輩は昼休みになったらいつもこの先のベンチにいらっしゃるらしいのだ」

「いつ聞いてきたんですか……」

「さっきだ」

桜の行動力に大神が呆れていると、校舎の角となつているところで刻が突然止まった。

「いたぜ！ 優、発見！」

「おお！ 本当なのだ！」

校舎の角から顔を出してこつそり確認すると、確かに優がいた。ベンチに座つて読書をしている。角から顔を半分出して確認している状況なので、周囲全部は見えないが見える範囲にチョコらしきものはなかった。

「おし！ やつぱりあいつは0個だな！ んじゃあ、さつそく笑つて……」

「夜原君！」

満面の笑みを浮かべて出ていこうとする刻。その時、一人の女子生徒が刻たちの横を通り過ぎ、優の前に立った。見たことない顔で、優を君付けしているあたりから同学年だろう。一方の優は少し視線を動かして相手を確認すると、再び本に視線を戻した。

「あ、あの……。これ、昨日作ったの。受け取って……くれる？」  
そう言つて、女子生徒は丁寧にラッピングされた箱を差し出した。

「……ありがとう。必ず食べてお返しするから。そこに置いといて」  
「う、うん！」

優の素っ気ない返答を聞いて、笑顔を浮かべた女子生徒は「そこ」に箱を置いた。刻たちから見ると校舎の角のせいで死角となつていた場所だつたため、彼らは少し身を乗り出した。そして、「そこ」を見た瞬間、刻は絶句し、大神は「ざまあみろ」とでも言っているかのような笑顔を浮かべ、桜は目を輝かせていた。

「な……!?!」

「フツ……」

「おおー！」

「そこ」……優が座っているベンチの空きスペース。そこには大量のチョコが置かれていた。さらに、ベンチの下にははみ出すほどチョコが入った鞆が置かれていた。

「あれ？ 桜じゃない。何してるの？」

「おお、あおぼ」

後ろから声をかけられた桜が振り向くと、親友のあおぼがいた。

「なにになに？ 誰かいるの？」

あおばが小走りで桜の横に立ち、桜たちが見ていた「それ」を見た。

「ああ、夜原先輩ね。やっぱりいっぱいチョコ貰ってるね」

「やっぱり、って……。あおば、夜原先輩はあんなにチョコを貰ってもおかしくないのか？」

「知らないの、桜!? 夜原先輩はね、困った人を見ると文句の一つも言わずに助けてくれるんだよ。重い教材を運んでいる時とか、何か落とした時とか。知り合いはもちろん、見知らぬ後輩でも手を貸すんだって」

「そうなのか？」

「うん。で、手伝った後は見返りも何も求めずに去っていく。その優しさとクールさで女子から人気あるんだよ。紅葉も渡すって言ってたし」

「紅葉が？」

クラスメイトである紅葉の名が出たので桜は少し驚いた。あおばは思い出すかのようになんか少し指を顎に添えた。

「なんか少し前に先生に頼まれて資料を運んだんだって。で、その時に転んで廊下で資料をばら撒いちゃったらしいの。みんなが無視して通り過ぎていく中、夜原先輩だけは手を貸してくれたからその時のお礼だって。だから本命かどうかはわかんないかな」

「そうなのか……」

「あ、ヤバ！ 私、ツボミに呼ばれてるんだった！ じゃーね、桜！」

あおばは手を振りながら校舎に戻っていった。それとほぼ同時に、刻が優の元にすごい形相で向かっていった。

「おい、優！ 『コード：07』で女嫌いのお前がなんでそんなにチョコ貰ってたんだよ！ 納得できねえ！」

「オレはお前がここにいることが納得できないがな。学校サボるな」

軽く興奮状態の刻に対して、優は相変わらず読書しながら話している。これはただ単にめんどくさいからだ。

「刻君。あおばの話聞いていただろう。きつとみんな先輩に助けてもらったお礼なのだ。な、大神」

「さあ、どうでもいいです」

刻に続いて桜と大神も優の元に来た。そして、桜は笑顔を浮かべながら言った。

「それにしても先輩！ あおばから聞きました！ 先輩はとても優しい方なのです！ 見ず知らずの者を見返りを求めることなく助ける！ 素晴らしいです！」

「別に。大したことじゃないだろ」

「ところで、優。こんなに大量のチョコ、食べられるんですか？」

大神に聞かれて、優はやつと本から目を放して大神を見た。

「ああ。『束脳・反転』で胃の消化機能を強化すればいくらでも食えるからな」

「ああ、なるほど」

「異能の無駄遣いしてんじゃネー!!」

「まーくん、まーくん。今日バレンタインデーなの〜」

時を同じくして校舎内の廊下。平家がいつものように廊下でのティータイムを楽しんでいると、寧々音がチョコが何個も入った少し大きめの箱を差し出してきた。

「これはどうも、藤原さん。では一つ」

平家が笑顔で礼を言い、チョコの一つを取った。すると、そのチョコを何故か寧々音が食べた。平家がそのままの体勢で止まっていると、寧々音が平家の指をくわえたまま言った。

「甘くておいしいの」

子どものように純粹にチョコを味わった寧々音を見て、平家は優しげな笑みを浮かべた。

すると、一人の人物が彼らの元に走ってきた。

「ねーちゃん！ そいつに近づくな！」

刻だった。平家の性格をよく知っているため、姉である寧々音に変なことを吹き込まないか心配で来たようだ。

「そいつは変態——な!？」

しかし、刻は言葉の途中で何かに体を縛られた。それは、平家の光るムチだった。

「悪い子です……」

「ヒエエエ!!」

平家は立ち上がり、どこからか「ある物」を取り出した。

「そんな悪い子には、私特製のマイチョコを差し上げましょう。きっとステキな気持ちになれますよ」

「やめろー!!」

平家を取り出したのは女性型のチョコ。それだけでも異常だが、リボンによつて平家ご自慢の束縛がなされているため、さらに異常な雰囲気を出している。どれくらい異常かという、それを見た男子生徒が「何か毒的なものが入っている」と思うほどだ。



「きゃああああー！」

家庭科室に女性の声が響いた。そこにいたのはドジで有名な神田だった。

「痛あ……。んも〜！ また失敗しちやった〜！」

神田の体にはいたるところに液状のチョコレートが付着していた。おそらくチョコを作っていたら転んだのだろう。いつもならなんてことはない光景なのだが、チョコが胸やら足にも付いているので男子生徒から見ると少々刺激的な光景となっていた。

「でも、諦めません……。マイ・マスター、『コード：ブレイカー』の皆さん、クラスのみんな……。お世話になった皆さんに、絶対に今日中にチョコを渡すんです！」

……。つて、キャアー！」

声を張り上げて神田は立ち上がり、床にこぼれたチョコに足を滑らせてまた転んだ。マイ・マスター、『コード：ブレイカー』といった知られてはいけない部分は小声で言っていたため周りの生徒に聞こえなかったから問題はなかったが、ここまで来ると神田の体を心配してしまう。

その光景を見ていた桜と大神。すると、桜は何かを思い出したかのように手をポンと叩いた。そして、大神の方を見た。

「そうだ。大神」

「何ですか」

「はい、これ。お前にだ」

「……………え？」

桜が差し出したのはリボンでラッピングされている袋。そして、巻物だった。桜が大神にそれらを渡すのを見て、桜のファンたちは再び絶望する。

大神はその二つを受け取ると、袋の方を開けた。そこにはデフォルメ化したかのような桜の顔が中心にデザインされた丸型のチョコが入っていた。

「これは、桜小路さんの顔ですか？」

「そうだ。母上の手作りだ。母上から渡すよう頼まれてな」

（自分の顔入り手作りチョコ……………！ 羨ましすぎる……………！）

桜のファンたちは母の手作りという部分を聞きのがしているようで、大量の涙を流していた。次に、大神は巻物を広げた。その内容を見ると、大神はほくそ笑むような微妙な笑みを浮かべた。

「これは……………」

「父上からの手紙だぞ」

剛徳からの手紙である巻物には「殺」と大きく書かれていた。しかし、その内容を知っているのは大神だけで周りの生徒から見ればそれは桜から大神に宛ててのものにしか見えなかった。

(巻物につづる大神への思い……!! 深い! 深すぎる!)

もはや桜のファンたちは大多数が撃沈していた。そんなことを知るよしもなく、桜は大神に一応の注意をする。

「いいか。絶対に食べるんだぞ。捨てるなよ」

「わかってますよ。後でちゃんと食べます」

「……そうはいかん」

「え?」

大神がチョコを袋にしまおうとしたその時。桜が大神の手からチョコを奪い取り、もう片方の手で大神の顔を掴んだ。

「今ここで食べるのだ。ほら、遠慮せずに口を開けろ」

「ちよ、待ってください……うわっ!」

顔を掴んだまま大神の口にチョコを押し付けようとする桜。その結果、大神を押すような形になり、バランスを崩した大神は倒れた。

「痛……。つて、ちよつと!」

痛みに耐える大神だったが、次の瞬間には桜が大神に馬乗りしてきた。

「さあ、もう逃げられないぞ。ほら、大神。遠慮するな。あーんしろ、あーんを」

逃げ場がなくなった大神。だが、大神はわからなかった。桜がここまでして自分に

チヨコを食べさせようとする理由が。桜のチヨコ押し付けをかわした大神は、桜から目を逸らして尋ねた。

「なんでそんなに今、僕に食べさせたいんですか……!」

すると、桜はチヨコを押し付けるのをやめた。そして、ポツリと言った。

「物が残るのは嫌なのだろうか?」

「え? ……ッ!」

桜の言葉に大神はハツとした。それは、1—Bのクラスメイトたちが大神の歓迎会をした日のことだった。歓迎会の後、屋上でクラスメイトの名簿を燃やそうとした大神が言ったある言葉。

「物は嫌いです。人が死んでも物は残るから。だから先に片付けておきたいんですよ」

桜はこれを憶えていた。だから、このような行動に出たのだ。

「今、食べてしまえばバレンタインもまた、忘れられぬ良い思い出になるだろう」

桜は満面の笑みを浮かべた。実は、これが桜が今日やろうとしたことの二つ目だった。桜の意図を理解した大神は微笑んだ。

「まったく……。あなたって人は」

お互い笑顔で見つめ合った。そして、また戦いが始まった。

「ほら大神！ 早く口を開けろ！」

「自分で食べますから！ 早くそこをどいてください！」

周囲から見れば、それはただの痴話喧嘩にしか見えなかった。この日、桜のファンたちの目から涙が止まることはなかったという。

平家がティータイムをしていた廊下。そこにはいつの間にか神田と優が合流して寧々音と共にティータイムに参加していた。今回のお茶菓子は平家のマイチョコだ。

「あら、これおいしい」

「最高級のカカオ豆を使用しておりますので」

「お〜」

「さすがです、平家さん」

ちなみに、今回のバレンタインで一番多くチョコを貰ったのは誰かと言うと……。

「ワフツ」

「お前かヨ！」

『子犬』だった。

## code:extra 2 ホワイトデー

本日は3月14日。ホワイトデーである。

「で、大神。父上と母上へのお返しは決めたのか?」

「無理矢理連れてきたと思っただら……。まったく」

大神と桜がいるのは喫茶店。桜は大神を無理矢理そこに連れ出してきたのだ。それというのも……

「だからお返しだ。よいか? 相手が喜ぶ物を送るのが一番だぞ。相談に乗るから早く決めるのだ」

ホワイトデーのお返しがあるからだ。バレンタインの日、桜が渡したのはあくまでユキが作ったチョコと剛徳が書いた手紙なので、大神は二人にお返しをする必要があるということだ。

「ハア……。とりあえず注文しましょう」

「おお、そうだな」

大神の話題を逸らすための提案に桜は簡単に応じた。メニューに載った料理の写真を見て目を輝かせた桜だったが、すぐに表情が曇った。

「このハンバーグは絶品なのだ！ コーヒーはもちろんケーキやフロートスパゲツテイも！ ……だが、今日はお小遣いがピンチなのだ」

「なんでそんなに食べたいものが……あ」

言葉の途中で大神はハツとした。そして、目を瞑って言った。

「……食べたいただけ食べるといいです。今日はおごりますから」

「本当か！ 相談には乗ってみるものだな！」

大神の言葉で桜は再び目を輝かせた。そして、意気揚々と店員を呼んだ。

「うむ。では、コレとアレと……」

「オレはコレと……って、冷てえ！」

「ここは禁煙席です」

いつの間にか大神の隣に座って煙草をふかす刻に、大神はテーブルにあつた水をかけて煙草を消した。刻はもちろんびしょ濡れである。

「刻君。いつの間に」

桜も気付いたようで少し驚いていた。刻は二、三回頭を振って水気を飛ばすと大神を見た。

「大神さ。ホワイトデーのお返しなら、執事かホストになってユキちゃんに心よりのご奉仕しろよ。って、イテテテテ！」



黒い笑顔を浮かべて刻の両頬を引っ張る大神。すると、桜がポンと手を叩いた。

「刻君の言う通りだぞ、大神。ご奉仕だ。『旦那様、奥様。ご用件はこの大神にお申しつけくださいませ』」

「桜小路さん。それは丁稚ていぢです」

その後、大神の手から解放された刻は近くのカウンター席に座って店員から借りたタオルで髪を拭いていた。

「そういえば、刻君はお返しに何をあげたのだ?」

「オレ? 決まってんジャン」

そう言うと、刻はシャツを少しめくり自分の腹筋をあらわにして微笑を浮かべた。

「オレを……ア・ゲ・ル」

「大神。スープも頼んでよいか?」

「どうぞ」

「聞けヨ!」

そんなやり取りをしていると、彼らのよく知る人物が来店してきた。

「なんだ。いたのか」

「夜原先輩」

入ってきたのは優だった。優は桜たちに気付くと、刻の隣のカウンター席に座った。

「そういえば夜原先輩。ホワイトデーのお返しは何にしたんですか？」

「人数が多かったからな。全員クッキーだ。一応、手作りな」

「……女性が苦手なのによく渡せましたね」

「そこは工夫した。貰った時に目を合わせないように顔を見て顔を覚えて、教師に『生徒会で使う』と言って全生徒の顔写真付きの名簿を借りた。そして、自分の記憶と照らし合わせて一致したやつ住所をメモして朝のうちに家のポストとかに置いてきた」

「いや、それ軽く職権乱用！ てか、くれた相手の顔を全部覚えるとかありえねーだろ！」

隣のカウンター席にいる刻が瞬時にツツコンだ。すると、優は平然と答えた。

「ばれなきやいい。それに、記憶に関してはオレの異能を使えば簡単だ」

「やつぱり使ったのかヨ！ バレンタインデーの時といい異能の無駄遣いしすぎだろ！」

優が刻のツツコミを受けていると、大神が尋ねた。

「しかし、人数が多いからポストに入れるだけでも大変じゃないんですか。それに、家に行けば顔を合わせる可能性もありますよね？」

「問題ない。朝と言ってもやったのは午前1時からだ。1時から異能で脚力を強化して回っていったら1時間後の2時には全員に渡し終わった」

「だから！ 異能の無駄遣いすんな！ あと午前1時は朝じゃねー！ 深夜だ！」

「お店でそんな大声を出すとは。おしおきしますよ？ 刻君」

「ドワア!!」

いつの間にか背後にいた平家に驚いた刻は、思わず席から落ちそうになった。平家の手には、明らかに束縛を意識した巻き方がされた箱があった。

「平家先輩。先輩は藤原先輩にお返しですよ。何をお返しするんですか？」

「キャンディーですよ」

「……わりと普通ですね」

大神の言葉に平家は目を細めた。そして、制服のボタンを一つずつ外しながら言った。

「ただのキャンディーではありません。スーパー・スウィーティー・シースルー・キャンディーですよ」

「やめろー!! ねーちゃんに何する気だ！ このド変態！」

「悪い子です」

「ギヤアアア!!」

顔を真っ赤にして平家を止める刻だったが、すぐに平家の光るムチに拘束された。

そんな彼らの様子を一人のウェイトレスが店内にある植物の陰から見ていた。

「マイ・マスター……。まずは桜小路さんにお返ししないといけないのでは……」

神田だった。どうやら大神が桜にお返しをちゃんとするのか気になっているらしい。おそらく、そのためにだけにウエイトレスとして侵入したのだろう。神田の後ろでは――Bの男子メンバーが顔を真つ赤にしていた。それというのも神田が来ているウエイトレスの服は胸部分がいぶ開いており、丈も短くほとんど足を出しているからだった。

「いやあ。本当に美味だなあ」

そんなことに気付くこともなく、桜は料理をおいしそうに食べていた。ちなみに、大神はコーヒーのみだ。

「なら、もう一つ頼んだらどうです?」

「いいのか!? しかし、大神。なぜ相談に乗っただけでこんなに気前よくおごってくれるのだ?」

すると、大神は少し固まり、桜からスツと視線を外した。

「別にどうだつていいでしょう。あなたは黙つて好きなものを、好きなだけ食べていればいいんです」

「あ………! まさか、ここのおごりつて……」

大神の言葉を聞いて、神田は理解した。この喫茶店でのおごりが、大神から桜へのお返しなのだということを。

「そうか？ よくわからんが、ありがたく頂戴するぞ」

当の本人である桜はわかっているまいやうだったが大神としてはどうでもいいのだらう。平然とコーヒーを口にした。

一方、平家に呼ばれて喫茶店に来た寧々音は平家ご自慢『スーパー・スウィーティー・シースルー・キャンディー』を堪能していた。

「まーくん、まーくん。すけすけなの〜」

「今度はイチゴ味です」

「お〜」

「……副生徒会長。オレの頭と体にくつつけるのはやめてもらえませんか」

ちなみに『スーパー・スウィーティー・シースルー・キャンディー』とは、お祭りの屋台でよく見かけるアレである。

「『スーパー・スウィーティー・シースルー・キャンディー』って綿あめかヨ！」

ちなみに、同時刻の桜小路家には大神からのお返しが宅配便で届けられていた。

『ユキ様へ』と書かれた真つ赤なバラの花束。

「きゅんきゅんきゅん」

そして、『剛徳様へ』と書かれた真つ白なアレ。

「菊の……花……！」

code:extra 3 在りし日の記憶 ～刻～

それは、『コード：01』の称号を名乗る者が悪に堕ちる前の話——

その日、『コード：04』こと刻はすこぶるご機嫌だった。

「そーなんですヨ〜！ オレ、嬉しいナ〜！ 先輩たちみたいな綺麗な人に共感してもらってー！」

「やだ、刻クン。お世辞が上手いんだから〜」

「ホント、ホント。そうやって今まで女の子を口説いてきたんでしょ。年下なのに悪い子だね」

「嫌だナ〜。オレってそんな悪い子に見えるんですカ？」

ちよつと探せば見つかりそうな、どこにでもある喫茶店。そのテラスで制服を着た

女子生徒二人と仲好さげに話しているのは、彼女たちとは違う制服を着たオッドアイの少年……刻だ。なぜこのようになったのか。それは状況から判断できる通りの経緯だった。

女子生徒二人が家に帰ろうと歩いていたら、いきなり現れた刻に話しかけられた。そのまま彼の口車に乗せられ、こうして喫茶店で話し込んでいるというわけだ。傍から見たらただのナンパである。

「そりゃ、見えるでしょ。中学生のくせに年上の私たちをナンパしてるんだから。ま、年上と言っても一つ学年が上ってただけけどね」

「最近の子ってみんなそんな感じなの？ ……ちよつとおばさん臭い質問だけどき」

「大人の雰囲気が出てて素敵ですヨ、先輩。そーですネー。オレみたいに実行に移す奴はあんまりないかナ」

会話からもわかる通り、彼女たちは刻から見えて一つ上の先輩にあたる。違う制服……つまり違う学校なのでほとんど無関係のようなものだが。

「ケド、実行に移さずに陰でこつそり妄想とかしてるムツツリ野郎がいるんですよ。もう、そいつのムツツリ度がハンパなくテ！ そいつ、オレたちの間では『エロ神』って呼ばれてるんですヨ〜！」

「やだ〜！」



「よー！ 青春真つ盛りだね、エロ神くん！」

この「エロ神」なる人物が誰の事なのか。わかっている人はわかっていると思うので詳しくは踏み込まない。ちなみに、後日談によるとエロ神の話が出たのとほぼ同時刻に、左手に手袋をした一人の少年が妙に苛立ちを覚えたという。

「それにしても、刻クンの交友関係はユニークだね。話聞いているだけでも面白いもん。他には誰か面白い人いないの？」

「そうですね。ムツツリなエロ神とは違ってすっげーオープンな奴がいますネ。人がある前で堂々とエロ小説とか読みまくるんですヨ」

「うわ……。オープンにも程があるでしょ、それ」

これは言わずと知れたあの人のことである。どうやら、彼女たちと話しながら日ごろの憂さ晴らしを考えているようだった。

「あと、すっげームカつく奴がいるんですよ。そいつ、たいした力もねーくせに権力者に尻尾だけはバカみてーに振るような奴なんです。ホント、犬みてーなクソヤローなんすヨ……」

「ああ、わかる。うちのクラスにもいるよ。生徒には素っ気なくせに先生とかとはすっごい親しい奴とか。ああいうのは、本当にムカつくよね」

「そうなんすよネ」

ここまで来たなら、もはや何も言うまい。言えるのは、これまで彼が話してきた知り合いというのと同じバイトをする者たちであるということだけだ。彼の素性を知っている者から見れば、いつも通りの彼だった。特に疑問を浮かべるような行動ではなかった。

しかし、今日の彼はいつもの彼とは少しだけ違っていた。

「つていうか、オレの事だけじゃなくて先輩たちのことも話してくださいヨ！先輩たちの知り合いには面白い人いないんですカ？正直なところ、オレもそろそろネタ切れなんすヨ。後はせいぜい、すっごい天然ボケな不思議ちゃんがいることぐらいですネ。先輩たちの知り合いに、そういう人はいないんですカ？」

「不思議ちゃんか。誰かいたっけ？」

刻の急なフリを受け、女子生徒は必死に記憶を辿っていた。それでも浮かばなかったらしく、隣の女子生徒に尋ねる。

「うちのクラスにはいなかった気がするけど。……あ」

「どしたの？誰かいた？」

尋ねられたことで、顎に手を添えて考えていた女子生徒がハツとした。それを見て、彼女に尋ねた女子生徒は彼女に詰め寄った。

「クラスは違うけどいるじゃん。我が校きつての不思議ちゃんが。えっと名前は確か

……、

藤原 寧々音さん」

「……………」

その名前が出た瞬間、刻の表情が変わった。見た目に変化はないが、確かに変わった。外見的なものではなく、内面的な何か。

「あー、いたね。確かにあの人は不思議ちゃんだ」

寧々音の名前を出した女子生徒の意見に賛同するもう一人の女子生徒。二人とも知っていると見ると、寧々音はかなりの有名人らしい。

「……………その人ってどんな人なんですカ？」

刻から女子生徒たちに向けられた質問だったが、先ほどまでのようなチャラチャラとした雰囲気はなかった。むしろ、どこか真剣さを感じさせるようなものだった。

「変わった人だよ。いつも裸足だし、女子なのに虫とか大好きだし。喋り方もほんとしてるしね」

「けど、すつごく頭いいんだよね。テストでも常にトップクラスだもん。能ある鷹は爪を隠す……つてやつだね」

刻の雰囲気に気づくことなく、女子生徒たちは刻の質問に平然と答えていた。

「……オレの知り合いの不思議ちゃんはいつも怪我とかしてんですヨ。ポケーつてしてつカラ。……藤原さんもそんな感じですか？」

「うーん……。あの人が怪我したとかって話は聞いたことないよ。周りが上手くサポートしてるみたいだし」

「……そうですか」

そう言うのと、刻は空を仰いだ。その表情は、どこか安心したようだった。

そんな刻を見て、女子生徒はニヤリと笑った。

「なに？ 藤原さんが気になるの？」

「違いますヨ。先輩みたいな素敵な人が目の前にいるんだから他の人なんて目に入らませ〜ん」

両手をひらひらと振っておどけてみせる刻。すると、刻は「さてと」と言ってお立ち上がった。

「残念ですケド、オレそろそろ帰らなきやいけないんです。今日は楽しかったデス！」  
「ああ、そうなんだ。まあ、私たちも楽しかったし。ね？」

「うん。君のかわい顔に免じて許してあげよう」

「光栄だナ。じゃ、この喫茶店はオレがせめてものお礼つてことで奢るンデ。支払いは置いておきますカラ」

刻は財布から千円札を二枚ほど出すとテーブルの上に置いた。彼らは飲み物くらいしか注文しなかったので、刻が出した金額は多すぎるくらいである。

「そんな悪いよ。それに、これ多すぎでしょ」

「いいんですッテ。余った分は先輩たちにあげるンデ。最後までかつこつけさせてくださいヨ。じゃ」

そう言つて刻は片手を振りながら喫茶店を出た。空を見ると、すでに夕陽によって赤く染まっていた。

「あ、楽しかった。んじゃ、今日もバイトに精を出すとしますカ」

喫茶店から出た刻は伸びをしながら土手を歩いていった。バイトというのは、もちろん『コード・ブレイカー』としての仕事だ。先ほどまで喫茶店で話していた彼女たちからしてみれば、この刻が悪人を裁く存在などとは想像すらできないだろう。

「とりあえずの目的は達成したシ。今日のバイトは張り切っちゃおうかナ」  
片方の腕をぐるぐると回し、やる気を見せる刻。  
すると、背後から聞き慣れた声があった。

「やる気があるのは何よりだけど、油断してたら危ないよ？」 刻

「……人見サン！」

刻はすぐに振り向き、背後にいた人物……人見に声をかけた。人見は「やあ」と言つて片手をひらひらと振った。背後にいたのが人見だとわかると、刻はどつと安堵の息を漏らした。

「びつくりさせないでくださいヨ……。てか、こんなところで何してんすか？」

「んー？ ここは私の昼寝スポットの一つ、とだけ言っておこうか。……ふわあ」

口を大きく開けてあくびをする人見。そんな彼を見て、刻は呆れたような顔になった。

「またいつもの昼寝ですか。『コード：01』のあんたがそんなんでいいんすかねエ……」

「そんな顔しないでくれよ。よかつたら君もどうだい？」

「オレ、これからバイトなんすヨ。知ってるクセに。……さつきだって、人のこと油断してるとか言ってたじゃないすカ」

油断してると言われたことが気に入らなかつたのか、声音を低くする刻。その目もスツと細くなっていた。しかし、そんな刻を前にしていても人見はまったく動じていなかった。

「注意したまでき。私たちの仕事はいつ何が起こるかわからない。ちよつとした気持ちの緩みが死に繋がることだってあるんだ。……それで死んだ『コード：ブレイカー』だっているからね」

「そりや、ドーも。ケド、オレは油断なんかしていないですカラ」

「まあ、君は冷静だからね。仕事になれば気持ちが悪むことはないと思ってるよ」

真正面から褒められたことが照れ臭かつたのか、刻は頬をかいてそっぽを向いた。よく見ると、その頬は少し赤みがかっていた。人見はそれを口に出さなかつたが、静かに

微笑んだ。

すると、人見はもう沈みかけている夕陽を見て眩くように言った。

「……今日も陽が沈むね」

「そーですネ。ま、オレたちのバイトは夜にやるんだからそんな気にする必要はないじゃないですか」

「そうだね……」

人見の隣で、刻も一緒に沈んでいく夕陽を見た。すると、人見が急にポツリと眩いた。

「お姉さんの様子はどうだった？」

「ッー！」

人見の突然の問いに、刻は目を見開いて固まった。

数秒の沈黙の後、刻はニヤリと笑いながら人見の方を向いた。

「……ここで昼寝してたんじゃなかったっけ？ 人見サン」

「ここは私の昼寝スポットの一つって言っただけさ。それに、私はここで昼寝してたなんて一言も言っていないよ」

ニツコリと笑う人見。それを見て、刻はため息をつきながら頭をかいた。

「ハア……。あんたには敵わねーワ」

「それは光栄だね」



刻は頭をかくのをやめると、人見の方ではなく夕陽を真っ直ぐ見た。夕陽の赤い陽のせい、刻の目が遠くを見るように細くなった。

「人から聞いたただけなんで詳しくはわからないケド、元氣みたいデス。ちゃんと学校にも行つてるみたいだシ」

「そつか。それはよかつたね。しかし、君のやり方には感心したよ。お姉さんの様子を知るために本人ではなく彼女と同じ学校の同級生に近づく。そして、話の腰を折らずに自然な形で君が最も知りたい話題に誘導したんだからね」

「オレを誰だと思つてんすか？ それくらい余裕ですヨ」  
グツと親指を立てて自分を指差す刻。それを見て、人見は思わず吹き出した。

「ハハ。頼もしいね」

「そりゃ、どーも……」

「……………」

二人の間に再び沈黙が流れた。すると、刻がポツリと呟き沈黙を破った。

「人見サン……。聞きたいことがあるんですケド」

「………何かな？」

「あんたも……平家と同じで知ってるんじゃないんすか？ あの日……寧々ねーちゃん音に何が  
あつたのか」

「……………」

「……………」

二人の間に重い沈黙が流れた。刻は真剣な眼差しで人見を見て、人見は黙ったまま夕陽の方を見ていた。人見の顔の角度や夕陽の影響で、人見がどのような表情をしているのかは見えなかった。

しばらくすると、人見が口を開いた。

「私も平家も、彼女のかつての同志だったからね。……知っているよ」

「ッ！ じゃあ……………」

身を乗り出す刻。すると、人見は刻の方を向いて刻の頭に自分の手を置いた。

「刻。私はその答えを言うのは簡単だ。でも、物事には知るタイミングっていうものがある。時間に縛られることが嫌いな私が言っても説得力はないかもしれないが、今は

まだその時じゃない」

「……………」

刻は何も言えなかった。言えるはずがなかった。刻に言い聞かせる彼の……人見の顔は、ひどく悲しそうだったからだ。

「でもね。君はいつか必ず真実を知る。その時、君だったら正しい選択……行動をしてくれると、私は信じてるよ」

言いながら刻の頭を優しく撫でる人見。彼の言葉が終わってしばらくすると、刻は人見の手を振り払った。

「オレ、もう子どもじゃねーんだから撫でるのはやめてくださいヨ。どうせ撫でられるなら、女の子の方がいいシ。じゃ、オレはバイトに行くンデ」

「……気を付けて」

「だから、子どもじゃねーってば」

そう言うと、刻は人見に背を向け歩き出した。その刻の背中を、人見は黙って見続けた。

すると、刻が急にぴたりと立ち止った。そして、そのまま振り向くと人見に向かって銃を構えた手を向けた。

「オレ、決めたわ。あの日のこと、あんたや平家に頭下げて聞くのはもうやめる。その

代わり、いつか必ず力づくで聞き出す。それまで何があつたか忘れないでヨ。人見サ  
ン」

バンと手で銃を撃つ動作をする刻。その後、彼は再び振り向いて歩き出した。片手を  
ひらひらと振りながら。

刻の姿が小石くらいになつた頃、人見はポツリと呟いた。

「それでいいよ、刻。全ては君自身の手で掴み取るんだ。君が私から力づくで真実を  
聞き出せるかどうか……君が私を斃せるかどうか。楽しみにしてるよ」

そう言つて、人見は刻とは真逆の方に振り向いた。すると……

「おっと」

「わぶ」

後ろにいた誰かとぶつかつてしまった。相手の体重が軽かつたのか、人見はよろける  
ことなく無事だった。しかし、相手は後ろに倒れそうになつていた。

「危ない！」

人見は瞬時に手を伸ばし、相手の腕を掴んで支えた。そのおかげで、相手は倒れるこ  
とはなかつた。

相手が無事だったことに人見は安堵の息を漏らし、優しく相手を引っ張つてその体勢  
を整えさせた。そして、改めて相手を見た。

「ふう……。すまない、私の不注意だった。怪我は無い——」  
人見の言葉はそこで途切れた。なぜなら、自分の目の前に立っている人物は彼がよく知る人物だったからだ。

人見と比べたらあまりにも小柄で華奢な体、ただでさえ若々しい見た目をさらに若く見せるような眼鏡をかけた幼い顔、どこかふんわりとした印象を与える雰囲気。それは、先ほどまで人見と刻の話題の中心であった人物。刻と同じ金髪で、彼と同じ髪型をした少女。

「ありがとうなのー」

——藤原 寧々音だった。

「ッ……………」

彼女の姿を見たまま固まる人見。神の悪戯としか言いようがないこの状況に、彼も戸惑っているのだ。

「ぶつかっちゃつてごめんなさいなのー。大丈夫だった？」

そんな人見に対して、寧々音は普段通りのゆつくりとした口調で人見に話しかけていた。それもそのはずだった。

なぜなら、今の彼女はまだ知らない彼女なのだから。

「……………私は大丈夫だよ。君は大丈夫だったかい？」

人見は優しく微笑み、寧々音の頭に優しく手を置いた。そのまましゃがみこみ、彼女より目線を低くした。

「寧々音も大丈夫なの。おにーさんが助けてくれたから」

「……………なら、よかった」

人見は微笑んだ。すると、その顔を見て寧々音が首を傾げた。

「……………おにーさん？」

「なんだい？」

「どーして、そんな悲しそうなお顔してるの？」

微笑んだ人見の顔。口元は確かに笑っていた。しかし、その目はひどく悲しそうだった。

た。

すると、寧々音は人見の頭に自分の手をポンと置いた。

「いい子、いい子なのー」

「ツ……………」

そのまま人見は俯いた。それはまるで、彼女を見ていられなくなったかのようなだった。その後、寧々音は人見の頭を撫で続け、人見は俯いたままだった。

しばらくすると、人見は顔を上げて寧々音を見た。

「……………ありがとう。君は優しいね」

その時、彼の目からは悲しみはまったく感じられなかった。

「バイバイなのー」  
ぶんぶんと手を振る寧々音。人見は微笑みながらそれに応えて手を振った。そして、寧々音は人見に背を向けてゆったりと歩き出した。それを見て、人見も彼女に背を向けた。

「さようなら、寧々音。……かつて、共に戦った私の同志<sup>とも</sup>」  
人見はそのまま歩き続けた。

その後、彼が振り返ることはなかった。



code:extra 4 在りし日の記憶 ～平家

将臣く

それは、『コード：ブレイカー』に彼の同志と呼べる者がいた頃の話――

都市部から離れた場所に建てられた廃ビル。廃ビルというだけで不気味な雰囲気を感じられるが、太陽が落ちて夜となった今はその不気味さも一層増している。そのためか、昼夜を通して周囲の人通りは皆無と言っていいほどだった。

だから、そんな廃ビルの中の一室にいるその男は異常であると言える。

「……………」

男は黙って目の前にあるもの……壁を見ていた。いや、正確には壁に掛けられた大量の時計だ。だが、その時計のほとんどは止まっており本来の役割を果たしていない。そ

の中で唯一、本来の役割を全うしている時計があった。ちょうど男の視線の先にある時計だ。その時計は時計として刻々と時を刻み続けていた。男がだまつているその部屋の中で、その時計が時を刻む音だけが唯一の音となっていた。時計の現在の時刻は午後11時をすでに過ぎていた。

すると、男はゆっくりと右手を前に伸ばした。まるで、目の前にある時計を掴もうとしているかのように。しかし、男の手は時計には程遠い。

その瞬間、男の右手に『電力』が纏われた。

轟音と閃光の後、部屋は完全な沈黙によつて支配された。先ほどまで唯一の音であった時計の時を刻む音すら聞こえない。男の目の前には、他の時計同様にその活動を停止した時計があった。時計には数か所の焼け焦げた跡があり、よく見ると煙が出ていた。時計は壊れていた。よつて、その時計は「時計の『今』の時刻を刻んだ存在」となった。

それを男……人見は悲しげな目で見ていた。

「……『コード：06』。君が存在した証は、ここに刻まれているからね」

人見の頭の中には昨日の出来事が浮かんでいた。過去に「悪」の手から救い出し、今では自分たち『コード：ブレイカー』をサポートするエージェントとして共に行動する神田。彼女は人見の手から離れ、新たに一人の『コード：ブレイカー』を「主人」として献身的にサポートすることとなった。それは彼女が一人前となったことを表し、彼女のサポートを受けながら彼女を育ててきた人見にしてみれば嬉しいことだった。

しかし、その朗報の裏には悲しむべきことが存在していた。

神田が「主人」とするのは、新たな『コード：06』。つまり、人見が「今」の『コード：06』として共に行動してきた者がすでに存在しない……死んだということだ。彼は『コード：ブレイカー』だったが、それ以前に17歳という年若い少年だった。

「だから、安心して眠るといい……。たとえ逝き着く先は地獄だとしても……」

逝ってしまった彼を安心させるかのように微笑んだ。しかし、その笑みはとても悲しげな笑みだった。その時、それを指摘する声が入り込んで来た。人見の後ろから響いた。

「あなたがそのような顔をしていては、彼も安心できませんよ。エース」

「平家……」

「やはりこちらでしたか。あなたは『コード・ブレイカー』が亡くなると、いつもここに来るのでもしやと思ってきてみたのですが」

学ランのような服を着てどこか怪しい雰囲気を漂わせる男……平家 将臣が相変わらぬの微笑を浮かべながら人見に歩み寄っていった。その手には大きめの封筒と「束縛の時間」というタイトルの本があつたが、本に関しては気にしないことにする。

「参ったね。君には全てお見通しというわけか」

「あなたとは長年の付き合いというものがありませんから。あなたの行動の予想なんて簡単ですよ」

微笑みを浮かべながら平家は人見の隣に立った。そして、先ほど止まった時計を人見と共に見た。

『『コード・ブレイカー』が死ぬ度に、あなたはこうして彼らが死んだ時間を刻む……。墓標代わりだと以前は言っていましたね』

「それは今でも変わらないよ。本来は許されないことだけだね」

トントンと指でこめかみを叩く人見。平家の言う通り、彼は墓標代わりとして『コード・ブレイカー』たちが死んだ時間を時計に刻む。しかし、『コード・ブレイカー』は『存在しない者』としてその存在の証を残すことなど許されない。それでも、人見は彼らの証を刻み続けてきた。このことを平家は知っていた。だから、この場所も知っていた。しかし、行為を知っている平家でもわからないことがあった。それは、時間の刻み方だった。

「しかし、一つ聞いてもよろしいですか？」

「なんだい？」

「なぜわざわざ異能を使うのですか？ 微量とはいえ、その積み重ねが大事な局面でのロストに繋がるかもしれませんよ」

平家の疑問は尤もだった。人見が時計を止めた時、彼は自らの異能である『電力』を放出した。彼が放出した『電力』は時計に向かつていき、時計に広がっていく。そして、『電力』の電圧で時計の中の機器が狂い、その時計は止まってしまおうというわけだ。しかし、時計を止めるだけなら手動でも簡単にできる。むしろ、彼のやり方は手間がかかりすぎていふ何より人見自身に負担がかかる。効率を考えれば良い方法とは言えなかった。だからこそ、彼はその疑問を口にした。すると、人見は手をズボンのポケット

に入れて天井を見上げた。

「……驢、だよ」

「驢……ですか？」

「彼らは異能を使つて悪人を裁いてきた。それこそ、昨日の『コード・06』のよう  
ロストして死んでいった者も多くいる。だから、私はそんな彼らに自らの異能を捧げ  
るんだよ。この程度、彼らが今まで悪人を裁くために使つてきた異能に比べればちよ  
つとしたものだしね」

「……あなたらしいですね」

優しすぎる。微笑みながら、平家は言葉にせずに自らの胸の中で人見の性格をそう表

した。この人見という男は、昔からそうだった。自分の事よりも他人。『コード：ブレイカー』にとつて「死」は自己責任だが、彼は死んでいった『コード：ブレイカー』たちのことを思い、こうして自らの異能を捧げている。それは自らの寿命を縮める行為に近いものだというのに。

「……そうだ。平家、私に何か用事があるんじゃないやなかったのかい？」

「ああ、そうでした。こちらを」

人見に言われて、彼を訪れた理由を思い出した平家は手にしていた大き目の封筒を人見に差し出した。人見が中を見てみると、そこには何十枚という量の紙が入ったファイルが入っていた。紙の内容を見てみると、顔写真と具体的な情報が載っていた。それは、裁くべき「悪」のデータだった。

「昨日あなたに言われた通り、危険な人物を中心にリストアップしました。思ったよりも多くなりましたが、よろしいですか？」

「行動が早いね、平家。ありがとう。これで『コード：ブレイカー』たちが死ぬ可能性は低くなる」

「言っておきますが、あなたとて死ぬ可能性はあります。ですから気を付けてください。あなたが死んでは元も子もありませんから」

釘を刺す平家。彼自身、人見がそう簡単に死ぬことは無いとわかっているが、注意し

て損はないというものだ。例えば、敵の前でロストしてしまえばいくら人見でも危険が高まる。早い話、世の中何が起こるか分からない。

しかし、そんな心配をしている平家に対して人見は微笑んでいた。そして、再び自分のこめかみを指でトントンと叩いた。

「心配いらないよ、平家。私は死なない。……まだ死ぬわけにはいかないからね」

微笑みながらも、その目には強い意志が灯っていた。その言葉だけで、彼の覚悟が伝わってきた。彼は死なない。平家は改めてそう確信し、フツと微笑んだ。

「そうですね。無用な心配でした」

「心配してくれるのは嬉しいけどね」

ハハ、と声にして笑う人見。その後、二人は黙って目の前の墓標を見ていた。すると突然、平家がポツリと呟いた。

「……祈りを」

「え？」

「彼らのために、祈ってもよろしいですか？ 私の異能を捧げては彼らの墓標が壊れてしまいますから、せめて祈るだけでもしたいのです」

「平家……」

人見は目を見開いて驚きを示した。祈るということは、目の前の時計を『コード：ブ



レイカー』の墓標として認めたということ。ジャッジとして『コード：ブレイカー』が守るべきことには人一倍厳しい平家だったが、そんな彼が本来なら許されない『コード：ブレイカー』の墓標の存在を認めた。人見は平家のことを真つ直ぐ見た。平家は微笑みを浮かべながらそれに応えた。二人の間に無言の空間が流れた。そして数秒後、それは静かに破られた。

「……ありがとう。頼むよ、平家」

「では……」

目を瞑り、軽く頭を下げる平家。日本で言う黙禱の形だ。人見は『コード：ブレイカー』たちのために祈る平家を見て、何やら真剣な顔をしていた。数秒後、平家はスツと目を開けて人見の方を見た。

「ありがとうございます。これで彼らが浮かばれるといいのですが」

「君に祈られたならきつと浮かばれるさ。私自身が浮かばれた気分だ」

「そうですか。それは何よりです」

再び微笑みを浮かべる平家。すると、人見は真剣な表情で平家のことを見た。

「……平家」

「なんですか？」

「昨日に続いて悪いが……頼みがある」

「……なんでしょう？」

いつになく真剣な物言いに、平家の顔から微笑みが消えた。そして、平家も真剣な表情となつて人見のことは見た。その平家を見て、人見は真剣な表情を崩すことなく「頼み」を口にした。

「もし私が死んだら……その時は、私の意志を継いで『コード・ブレイカー』たちが存在した証を刻み続けてほしい」

「エース……！」

平家は目を見開いた。『コード：01』として、いつも『コード：ブレイカー』たちを先導してきた人見のいつになく弱気な発言に。当の人見は、口にしたことで耐えられな

なくなったのか、平家から視線を外した。

「さっきあんなことを言った手前、情けなく聞こえるかもしれない。でも、私だつていずれ死ぬ。そうしたら、『コード・ブレイカー』たちの存在した証を刻む者がいなくなる。……だが、彼らのために祈りを捧げてくれた君を見て、君ならば頼めると……そう思つたんだ」

「……………」

人見をジツと見る平家と平家から視線を外して俯く人見。二人の間に重い沈黙が流れた。先ほどよりも長い時間が経つた後、平家が覚悟を決めたかのようにその口を開いた。

「……………わかりました。私にお任せください。……………人見」

そつと胸に手を当て、彼の称号ではなく名前を呼ぶ平家。彼は人見の言葉を、「エース」の言葉としてではなく、一人の「人見」という人間の言葉として平家は彼の言葉を受け入れた。

「……………」

平家はただ一人、目を瞑ってかつて今立っている場所と同じ場所であったの同志と交わした言葉の数々を思い出していた。平家はそつと目を開け、かつて墓標が存在していた壁を見た。

「人見との戦いで大神君が燃え散らしたというのはわかっていましたが、相変わらず無茶をしますね。大神君らしいと言えましょうが」

平家の言う通り、人見が用意した墓標は人見と大神たちとの戦いの過程で大神の『青い炎』によって燃え散らされた。彼は「『悪』を裁く自分たち『コード・ブレイカー』も『悪』同然。救われる必要はない」と言つて墓標を燃え散らした。そのため、今となつては死んでいった『コード・ブレイカー』たちの存在を刻むものは一つとして残っていない。

「こうなった以上、あなたとの約束を守り続けることは立場上でできませんね」

そうやって、平家は腕にしていた腕時計を外した。そして、かつて墓標が存在していた壁の前にそつと置いた。時計を見ると、ある時間でピタリと止まっていた。

「最初で最後になりますが、約束を果たさせてもらいます。ただ、あの時の言葉にあな自身のごとは含まれていないでしょう。あなたは何より時間に縛られることを嫌っていましたから」

そこに刻まれたのは死の時間。彼の同志が消えた時間。人見という存在が、『コード・ブレイカー』たちの中に刻まれた時間。

「勝手を許してください。……そして、安らかに眠ってください。………人見」

## code : extra 5 在りし日の記憶 夜原

優

陽が落ち、月のみが照らす闇に支配された夜の世界。その中でも特に闇の支配を受ける場所がある。それは山だ。木々に生い茂った葉によつて月光は遮られ、ただでさえ淡い唯一の明かりがほとんど届かなくなる。この時間、そんな場所に「人」などいるわけがない。

いとすれば、この世の道理から外れた「悪」だけだ。

「くそー」

闇に支配された山中を下に向かって自動車で疾走する男。無精ひげを生やしており、その見た目から中年だと判断できる。

彼は逃げていた。自分の場所を襲ってきた敵から。車に木の枝がかすろうが関係ない。ただ木と正面衝突して止まらなければいい。男はそう考えながら山を降りていた。

「一体、どこから情報が洩れやがった！ ……ええい！ 今はそんなことはいいいー」

男は自分の場所を襲ってきた敵がどうやって場所を突き止めたのか考えたが、軽く興奮状態にあるため正常な思考ができなかった。男はすぐに考えるのを諦め、全神経を運

転に集中させた。

そして、それから数分が経った。

「ハア、ハア……。ここまで来て追ってくる車もねえ……」

時間の経過と周囲に追っ手と思われるものが無い状況に男は安心した。そして、安心することによって興奮状態も落ち着き、男は敵に襲われた時のことを思い出していた。敵のシルエットに敵の声。そして、敵の準備の悪さを。

「しかし、あいつは誰の命令で来やがった……。？ 顔は暗くて見えなかったが、声の感じからして男だろう……。だが……。とんだ馬鹿のようだ。逃げる時に見てみたが、辺りにはオレの車しかなかった。てことは、あいつは徒歩でここまで来た。だが、こっちは車。……。ハハ！ なんだ、慌てることなかったな！」

逃走……。つまりその場での勝利を確信して大笑いする男。車などの移動手段を持っていなかった敵に、自分が今まで移動した時間が彼の勝利を後押ししていった。

しかし、その勝利は一瞬で遠いものとなる。

「どわあー！」

急に車体が揺れた。まるで外から強い衝撃が加わったかのように。男は気づかぬうちに木にぶつかったと思い、急いでブレーキペダルを踏んだ。急ブレーキをかけたことにより、タイヤが下の土を勢いよく後ろに放つ。数秒後、ガクンと軽く車体が揺れ車は

止まった。男はすぐに車から降りて原因を調べる。ボンネットや前輪がある前方部分に異常は見られない。男は後方部分に移動した。すると、左後輪に異常を見つけた。

「な、なんだこれは!？」

男が見たのは変わり果てた左後輪。握り拳ほどの大きさの石がタイヤにめり込んでいるのだ。それは明らかに側面からぶつかったようだったが、男の理解が追いつかない。

「一体どうなってんだ! 誰がこんなこと——!」

「教えてやろうか?」

瞬間、*「悪魔」*の囁きが男の耳に響いた。

「う、うわあああ!」

男は突然背後に現れた人物に驚き、その場で向きを反転させ尻餅をついた。向きを変えたことで背後に立った人物が目の前に見えるが、月光を背に立っているため顔が見えない。



「ち、近づくんじゃねえ!」

男は咄嗟に内ポケットに手を入れた。そして、中から闇に紛れるほど黒い物体を取り出し、目の前に立つ人物に向けた。そして、黒い物体……拳銃の引き金を夢中で引いた。

「死ね! 死ね! 死ねええええ!!」

しかし、男の銃弾は一発として当たることは無かった。的外れな方向に向かつていったわけではない。ただ、目の前に立つ人物が全て避けているのだ。人とは思えないほど素早く、的確に。人の目ではとらえることすら難しいスピードの銃弾を、少しもかすることなく。そして、目の前に立つ人物にかすり傷一つ負わせることなく、男の銃弾は底を尽いた。

「な、なんだ! なんだ、お前は!」

男の体はガクガクと震え、次々と冷や汗が噴き出ていた。圧倒的な恐怖により、男の体も異常を示していた。それに対して、何事もなかったかのように落ち着いた様子を見せる目の前の人物。彼はゆっくりと右手を伸ばし、男の頭部を掴んだ。そして、ただ冷酷に告げた。

「生憎だが、<sup>クズ</sup>悪に名乗るような名前は持っていない。だが、これだけは教えてやる。オレはお前のような法で裁けぬ悪を裁く『存在しない者』……『コード：ブレイカー』。そして、もう一つ。お前の行動は全て無駄だ。車で逃げようがオレは簡単に

追いつけるし、石をぶつけて止めることも造作もない。……銃弾だって、オレには止まって見えるんだよ」

「ば、化け物があああ!!」

「化け物で結構だ。もう……楽になれ」

そう言うと、男の頭部を掴む彼の手に力が込められた。瞬間、男の頭がい骨がミシミシと音を立て始めた。

「目には目を 歯には歯を 悪には無慈悲なる裁きを」

彼……夜原 優による裁きの完了を祝うかのように、割られた男の頭部から鮮血が溢れ出た。

「……………」

血でベツタリと汚れた自分の右手を見ながら立ち尽くす優。彼の足元には先ほどまで恐怖で怯えていた男の死体が転がっており、彼が殺したというのは明らかだった。まあ、実際にそうだからいいかもしれないが。優は足元に転がる男の死体を見下ろした。そして――

「おっと」

体の位置をずらし、後ろから現れた男をやり過ぎした。

男は避けられたことで体勢を崩すが、すぐにバランスを取り二本足でその場にしっかりと

りと立った。

「ひどいなあ、優。避けるなんて」

「後ろから気配消した人が近づけば避けるに決まってるでしょう。……人見さん」

優は目の前に立つ男……人見を呆れた表情で見た。人見は頭をかきながら「ハハハ」と笑う。

「それもそうだね。じゃ、後始末は“エデン”のエージェントがやるだろうから帰ろうか」

「そうですね。行きま——え？」

人見に言われ、歩き出す優。すると、人見が笑いながら右手を挙げていた。彼が求めていることを理解すると、優は自分の右手を見てから言った。

「……汚いですよ?」

「構わないよ」

「はあ……」

優はため息をつくとき、人見と同じように右手を挙げた。

そして、二人は互いの右手を叩いた。

「お疲れ様、優」

「ありがとうございます、人見さん」

「どういたしま——」

その瞬間、人見は倒れた。あまりにも急すぎる展開に優は心配して人見に駆け寄る。

「人見さん!?! 急にどうし——!」

しかし、彼の心配は徒労だったとすぐにわかった。

「……ZZZZ」

「ロストかよ!」

その後、優は人見を背負って山を降りていった。異能を使っているため苦勞することはなかった。その道中、優は少し首を動かして人見の顔を見た。涎を垂らしながら幸せそうに寝ており、その姿を見て優はフツと微笑んだ。

「……まったく。頼れるんだか、頼りないんだか。……けど、そんなあなただから『01』なんでしょうね。……おやすみなさい、人見さん」

それは、まだ彼らが共に戦っていた頃の話——

「人見さん、神田です。入ってもよろしいでしょうか？」

「ん？ ああ、構わないよ」

「エデン」が管理するビルの一室に二人のやり取りが響いた。人見が許可すると、  
「エデン」のエージェントである神田は「失礼します」と言ってから部屋に入った。

「人見さん、言われた通り優さんのデータを持ってきました」

「ありがとう、神田」

人見は神田から一枚の紙を貰い受けた。そこには、優の顔写真と彼の詳細な情報が載っていた。「エデン」が管理している『コード・ブレイカー』個人のデータだ。今まで行った裁きや異能について載っている。人見は優のデータを見ながら何やら考えていた。すると、神田が人見に尋ねた。

「人見さん、なぜ急に優さんのデータを見たいなんて仰ったのですか？ 何か気になることでも？」

「いや、そういうわけじゃないんだ。ただ、彼の異能についてね」

『脳』……ですか？」

首を傾げた神田に、人見は「そう」と言っただデータを神田に返した。そして、その場で指を組んでその上に自分の顎を乗せた。

「データを見て確信したよ。彼の異能は非常に癖が強い。だが、彼はそれを見事に使いこなしているってことがね」

『脳』は有効な相手が限られている分、その有効な相手に対する効果は絶大ですからね。……「エデン」は対異能者戦も対応できるように思っているようですが」

「対異能者戦……か」

神田の言葉に人見はスッと目を細めた。そして、彼の脳内にはある映像が浮かんだ。それは、優が『コード：ブレイカー』として特別に認められた日から数日経ったある日のこと。

『あの力』について優自身から話された時のことだ。

(データにも『あの力』のことは載っていない。となると、やはり『あの力』について知っているのは優と私だけ……か)

「人見さん……？」

急に黙ってしまった人見を心配して、神田は人見の肩を軽く揺すった。揺すられたこ

とで人見は正気に戻り、笑顔で神田の方を見た。

「ああ、ゴメン。今日は助かったよ、神田」

「当然のことをしましたまです。あ、それと人見さん」

「なんだい？」

「もうすぐ優さんとの仕事の時間です。そろそろ向かわれた方がいいですよ」

「もうそんな時間か。ありがとう」

人見は神田に礼を言うと、その場から立ち上がった。すると、神田はクスクスと笑いながら人見に話しかけた。

「時計を持っていないからですよ。時間に縛られるのが嫌いと言わず、今後のためにも持っておいた方がいいですよ」

神田の言葉を聞くと、人見はその動きをピタリと止めた。人見は自分の時計を一つとして持たない。その理由は、彼自身と彼の同志しか知らない。もちろん神田の言う通り、時間に縛られるのが嫌いというのもある。だが、それ以上に大きい理由があった。

「……神田」

「はい」

「君にとつて……時計とは何だい？」

「え？」

人見の急な問いかけに神田は目を丸くした。神田は頭の中で試行錯誤して答えをまとめると、自分の右腕にあるデジタル式の時計……幼い頃に人見から貰った時計にそつと手を添えた。

「時計自体は時間を教えてくれる便利なものだと思ってます。……これに関しては、私にとっては便利なだけでなく、特別なものですし」

「神田……」

何年も前に自分があげた時計。それを未だに身に着けてくれている神田。彼女の思いを身に染み込ませながら、人見はドアノブに手をかけた。

「……ありがとう、神田。でも、私にはまだ必要ないんだ。私は……まだ死ぬわけにはいかないからね」

「人見さん……?」

人見はそれ以上語ることはなく、ゆっくりと部屋の外へ出てドアを閉めた。

「よし、ハイで待つとしよう」



「わかりました」

夜となった森の中で、人見と優は一本の木の木の上で待機していた。森というのも山と状況は似ており、生い茂った木々の葉のせいで月光が差し込みにくい。そんな視界が悪い中、二人は前方に建っている木製の小屋を注意深く見ていた。

「今回のターゲットはあの小屋を本拠地として今まで何人もの人を殺害している。小屋は元々、森に迷った人のために建てられたものらしい。……今となつては森以上に恐怖を感じる場だろうけどね」

「そうですね……ん？」

「来たか……」

人見との会話の途中で優は下に気配を感じた。見てみると、ターゲットである男が辺りを注意深く見ながら歩いていた。よく見ると、口が縛られた袋を肩に担いでいる。

「何か持ってますね……」

「それなりに大きいな……。おそらく生活のための食料や水だろう」

人見の予想は的を得ていて、このように人里から離れた場所を本拠地にするには食料と水の補給が不可欠だ。定期的に大量にそれらを用意するというのは、このような犯罪者にとっては普通のことだ。

「行きますか？」

「いや、少し待とう。彼が小屋に入って十秒ほど経ったら行こう。油断させれば成功率は上がる」

「人見さんがいる時点で成功は確実だと思うんですけどね……」

「ハハ……」

ターゲットを前にしながら談笑する二人。しかし、その間もターゲットから目は離さない。辺りを注意深く何度も見渡す男。何度も辺りを確認しながら小屋の扉を開ける男。そして、男は小屋の中に入ろうとした。

その瞬間、『脳』の異能によって視力が強化された優には男の顔がしっかりと見えた。

ボタンという音と共に扉を閉める男。それを見て、人見はスツと目を細める。

「よし。十秒経ったら突入しよう。いいかい？ 絶対に油断せずに……優？」

人見は気づいた。優の様子が何やらおかしいことに。目は見開かれ、小屋の扉をただ

ジツと見ていた。その時、優の頭の中では先ほどの男の顔が浮かんでいた。狂気染みたま……歪んだ笑顔。

(なぜだ……？ なぜ、あいつは笑っていた……？ 何かあるのか？ 何か……)

瞬間、優の頭の中には男が持っていた袋が思い浮かんだ。それなりの大きさを持った袋。食料と水が入っているならば一週間は確実に過ごせるほどの量が入るほどだった。

人に例えるなら……子供がすっぽり入るような。

「——ッ！」

「優!？」

最悪の予想が浮かんだ瞬間、優は体に電撃が走ったような衝撃を覚えた。そして、人見の指示を待つことなく木から飛び降り、小屋に向かっていった。上で人見が叫んでいるが優は止まらない。

そして、優は小屋の扉を乱暴に開けた。

瞬間、優の視界に鮮血が映った。

「ああ……？　なんだよ、人がせつかく楽しんでたのに……」

突然入ってきた優に驚くような素振りは見せず、ゆつくりと優の方を向く男。その手には、真新しい血に染まるナイフが握られていた。

「優！　一体何が……ッ！」

優の後ろから人見が走ってきた。そして、目の前の惨状を目の当たりにした。目の前にいるのは血に染まったナイフを持つターゲットである男。その足元には……体中に刺された跡をつけられた幼い子供がいた。

「まさか……あの袋の中に……」

「そうだよ……。本当は食い物と水を盗りに行ったのに、指名手配か何かでオレの顔を見てやがったのか、このガキが騒ぎ出してよ。うるせえから殺すことにしたんだ」

「そんな理由で……！」

怒りに震える人見。それに対して男はニヤリと笑い、言葉が続けた。

「もちろん理由はそれだけじゃないぜ？　最近ガキを殺すのはご無沙汰だったんだ。このガキもオレのストレス解消に協力できたんだからいいんじゃない？　このガキは天国に行けてオレはスッキリだ！　みんな幸せだろーが！」

「貴様！ それ以上——！」

声を荒げる人見。しかし——

「……はあ！」

その言葉が向けられた男は人見の言葉の途中で消えた。

いや、消された。

「優……」

一瞬で男の目の前まで移動し、男を壁の向こうまで殴り飛ばした……優によって。

「ガ……ハ……」

優に殴り飛ばされたことで、男はすでに虫の息となっていた。しかし、優はゆっくりと男に近づいていく。その途中、殴り飛ばしたことで壊れた壁の残骸から、先が鋭く尖った木材を見つけて手にした。そのまま倒れた男の目の前まで移動した。



まるで呪文のように「死ね」と繰り返す優。その姿はまさに、「狂気」そのものだった。

「やめろ！」

人見は優に止めようと彼の腕を掴んだ。しかし、それはあっ気なく破られた。

「ぐあー！」

優に勢いよく振り払われたことで人見は飛ばされた。後ろにあつた木に背中が叩きつけられ、体中に激痛が走った。

(振り払われただけでこれほど……！　なんて力だ……！)

痛みによつて狭まった視界の中、未だに男の死体を潰し続ける優が映った。その彼の姿を見て、人見は覚悟を決めた。

次の瞬間、彼らがいた場所に雷が落ち轟音が響いた。

「迷惑をかけて……申し訳ありません」

「いや、構わないよ」

都内でも有名な病院の個室。そこには患者用の服を着てベッドに座る優と頭部に包帯を巻いた人見が立っていた。あの時、人見は『電力』によって優の脳に衝撃を与えて気絶させた。そうすることで、彼を止めることができなかったからだ。その結果、脳に異常ないか調べるため一時的に入院となったのだ。人見はというと頭部と背中に少し傷を負った程度だった。見ただけではわからないが、実は背中にも包帯を巻いているのだ。

「体に異常はないかい？ 検査で問題なかったから大丈夫だとは思うけど……」

「特に問題はありません……。人見さんは……？」

「私は大丈夫だよ」

につこりと微笑む人見。しかし、優の表情は暗いままだった。当然だ。自分の暴走のせいで人見に怪我を負わせてしまったのだから。

そんな優を見て、人見は近くにあった椅子に腰かけた。そして、優の事を真っ直ぐと見た。



「ところで、優。聞いてもいいかな? ……どうして、ああなってしまったのか」  
その瞬間、優の体は固まった。しかし、人見は言葉が続ける。

「今度こそ話してもらおうよ。君がこうなったのは……これで四度目だからね」

人見の言葉に周囲の空気が凍りついた。実は、優がこのように暴走するのは今回が初めてではない。人見は過去に三回、優の暴走を見ている。幸いにも、優が暴走した時は人見と一緒に仕事をしていた時ばかりで、このことを知るのは優と人見しかない。

「はつきり言つて、ここまで来たら放つておくわけにはいかない。いずれ君は私以外の『コード：ブレイカー』とも仕事をするようになるだろう。だが、今の君と彼らを組ませる気なんて私は無い。あまりにも危険すぎる。彼らにとつても、君にとつても。ここで理由をはつきりさせる必要がある」

「……………」

俯いて何も話そうとしない優。人見はため息をつくと、少し声を穏やかにして話しかけた。

「話したくないなら頷いてくれるだけでいい。私の中で予想は出来ているんだ。それならいいかい?」

「……………」

優はゆっくりと頷いた。すると、人見はゆっくりと自分の予想を話し始めた。

「君が暴走した状況には共通していることがある。それは、『コード：ブレイカー』の仕事中であるということと、私と共にいること。……そして最も重要なのが」

人見はスツと目を細め、その声も鋭さを増した。そのまま、彼の口はゆつくりと続けた。

「ターゲットが愉快犯であるということ——」

「……………」

人見の言葉に優は黙ったままだった。ただ黙って、彼の予想を聞いていた。人見もそれをわかつているのか、言葉が続ける。

「それに君が暴走している時の眼。私はね、あの眼をよく知っているんだよ。なぜなら、私が最も嫌いな眼だからね」

「……………」

人見が言葉を放つたび、部屋の気温が少しずつ下がっていくようだった。優はそれをひしひしと感じているのか、ベッドのシーツをギュツと握った。

そして、人見は自分の予想の核心部分を言い放った。

「あれは復讐する者の眼……。君は愉快犯に個人的な恨みを持っている。……違うか  
い？」

「——はい」

ぼそりと力無く人見の言葉に頷く優。すると、優はゆっくりと人見の方を見た。

「申し訳ありませんが、これ以上は人見さんでも話したくないんです。……ここからは、オレが『コード：ブレイカー』になった理由にも関わってきますし」

「……そうか」

二人の間を沈黙が支配した。すると、人見は両手をポケットに入れて急に立ち上がった。

「……仕事ですか？」

「ああ。でも、これは私一人でやる仕事だから君はゆっくりと休むといい」

そう言うと、人見はポケットから手を出して優の頭を優しく撫でた。全てを包み込むように大きな手から伝わる暖かな体温を感じ、優は少し安心した。

「自分の目的を達成しようというのは素晴らしいことだ。だけどね、その過程で暴走

しては元も子も無いよ。……『彼女』だって悲しむだろうしね」

「……………」

「じゃあね」

人見は手を振りながら病室を後にした。余談だが、この日から優が暴走したという話は人見の耳に入ることには無かった。

死ぬわけにはいかない。彼は以前、エージェントにそう言った。その言葉に偽りは無く、彼は死ぬわけにはいかない。まだ彼には育てなければいけない仲間がいる。共に戦えると信じている仲間がいる。失いたくない仲間がいる。護らなければならぬ仲間がいる。

だから、彼には時計標準はいらない。

「目には目を」

時間を知る必要はない。

「歯には歯を」

なぜなら……

「——悪には厳正の閃電を」

仲間と過ごした時間は消えることなく彼らの中に刻まれ続けるのだから——

## 『捜シ者』 篇 序

## code : 12 つかの間の休息

人見の事件から数日後。人見の事件は“エデン”の情報操作によって隠蔽された。総理処刑の映像はハッカー集団の仕業でそのハッカー集団は全員逮捕。爆発はガス管の破裂と報道された。

そして、今の季節は夏。大神たちの通う輝望高校でも夏服に衣替えとなった。しかし、それでも変わらないものはある。その一つがここにあった。

「グレート☆シャイニングですねぇ」

「そうですね」

輝望高校の屋上。そこでティーセット一式を広げてお茶を楽しんでいるのは、夏だというのにガツチリと冬服の学ランを着た平家。そして、平家に対してちゃんと夏服を着ている優だった。

今はちょうど昼休み。二人は屋上で優雅にお茶会を楽しんでいた。

「しかし、こうして優君とお茶をするのは久しぶりですね」

「確かにそうですね。大神が休みの分、オレにも仕事が多く回ってくるので」

優の言う通り、大神は人見の事件の後は休養をもらっていた。その分、大神が担当するはずだった仕事が他の『コード：ブレイカー』に回っているというのが今の状況だ。

「オレとしては構わないんですが、平家さんとお茶をする回数が少なくなっているのは残念です」

「おや。嬉しいことを言ってくれますね、優君。照れてしまいます」

「ハハッ。本心ですよ」

微笑みを浮かべながら紅茶を飲む優。普段の彼なら、まずこんな表情は見せない。学校でも仕事でも彼は無表情でいることが多い。そんな優が笑っているのだから、優が持つ平家への信頼の高さがよくわかる光景だった。

平家も優と同じように微笑みを浮かべながら愛読書である官能小説を読みつつ紅茶を楽しんでいた。しかし、急にティーカップを置き本も閉じた。そして、ゆっくりと優のこのことを見た。

「ところで優君。少し聞きたいことがあるんですが」

「……なんですか？」

平家の様子を見て、優も持っていたティーカップを置き平家を真っ直ぐと見た。先ほどまでとは違い、真剣な雰囲気周囲に漂い始めた。そして、平家はゆっくりとその口を開いた。

「『あの力』についてです」

「！」

『あの力』。そう聞いた瞬間、優は目を見開いた。平家はそんな優に構わずに話を続けた。

「ふと気になったのですが、『あの力』はもしかして人見にも？」

「……ええ。彼がまだ『コード：ブレイカー』だった頃に」

「そうですか。では、人見は知っていたんですね。『あの力』の存在を」

「……『あの力』について初めて話したのは人見さんだったので。人見さんが『コード：ブレイカー』を離反してしまったので、平家さんにもお話しましたが」

「なるほど。そういうことでしたか」

そう言うと、平家は再び本を広げティーカップを口にしました。どうやら『あの力』につ



いての話はもう終わりらしい。優もティーカップを口にする。すると、再び平家が口を開いた。今度は本を読んだままだ。

「そういうえば、『彼女』には伝えたんですか？ 人見のことを」

『彼女』と聞いて、優の眉間に少ししわが寄った。しかし、平家の前だからかすぐに元に戻った。

「……伝えましたよ。あの日のうちに」

あの日、というのは人見の事件があった日のこと。そのことを思い出したからか、優の表情が少し暗くなった。

「そうですか。『彼女』はなんと？」

「『残念だったね』、と」

「『彼女』らしいですね」

「……そうですね」

その瞬間、突然携帯のバイブ音が聞こえてきた。そして、優が内ポケットから携帯を取り出した。

「すみません」

「いえ、大丈夫ですよ。誰からですか？」

優が画面を見て相手を確認する。画面に表示された番号を見て、優は少し驚いた。

「この番号は……大神からです」

「ほう。大神君から優君に電話とは珍しいですね」

「そうですね。では、少し失礼します」

「ええ」

優は小走りで屋上に入るドアの所に行きドアの向こうへと消えた。平家は優が行った方向を見ながらポツリと呟いた。

「優君……。やはり君はタイミングさえ合っていれば、人見の跡を継いでいたかもしれないですね」

人見の跡を継ぐ。それは『コード：01』になる、つまりエースになるということを意味している。しかし、それを信じる者は誰もいないだろう。おそらく当の本人である優も否定する。それでも、平家はそう思っていた。その根拠は不明だが。

すると、優がドアを開いて平家の所に戻ってきた。

「すみませんでした」

「大丈夫ですよ。それで、大神君はなんと?」

眩きの時とは違い、柔らかな笑顔を見せる平家。彼に対して、優は淡々と内容を告げた。

「遊騎ゆうきが見つかったみたいです」

「おや、そうですか」

遊騎、というのは彼ら『コード・ブレイカー』にとって仲間……同じ同業者のこと。大神、刻、平家、優以外の『コード・ブレイカー』だ。

「それで、遊騎が腹をすかしているみたいだから奢つてやつてほしい、だそうですね」

「そうですね。では、行つてくるといいでしょう」

「いいんですか?」

「構いませんよ。『エデン』には私から連絡しましょうか?」

平家の言葉に優はしばらく顎に手を当てて考えた。そして、考えがまとまると再び平家のことを見た。

「いえ。遊騎に話を聞いて必要そうだったらオレから連絡します」

「そうですね。ではお願ひします」

そして、優は携帯を内ポケットにしまい、平家に向かって頭を下げた。

「それじゃあ失礼します」

優は再びドアの向こうに消えた。階段を降りる音が段々小さくなっていく。その後、平家は一人で紅茶と読書を楽しんだ。

「……か……」

平家と別れた後、優は遊園地に行った。大神の話ではここに大神、桜、刻、遊騎がいるらしい。経緯としては、刻が大神を訪ねて来たため、大神となぜか桜も一緒に早速そこで偶然にも遊騎を見つけた、ということらしい。ちなみに、異能を使ったのでそんなに時間は経っていない。

「しかし、広いから探すのも一苦労だな……」

優は周囲を見渡しながら言った。平日の昼なので人はそんなに多くはないがなにぶん広い。そのため、探すだけでもそれなりの労力を要する。

「まあ、まずは行動だな。まずは向こうに……ッ!？」

優が行動を始めた瞬間、いきなり体が重くなった。いや、体が重くなったというよりは何か負荷がかかった。それも、何かが乗ったかたというよりは何かには何かに掴まれている感覚。視線を自分の腹部に落とすと、誰かの腕が自分の腹部をがちりと掴んでいた。優は警戒しながら後ろを見た。

最初に目に入ったのは燃えるような赤い髪。そして、だらしなく伸ばされた足。うつ伏せ状態のため顔は見えないが優はその特徴だけで誰だかすぐに理解した。そして、その人物の名前を呼んだ。

「重いぞ、遊騎」

「……ななばん、遅いねん。腹減ったわ。早よなんかおごつて」

優に名前を呼ばれた人物……天<sup>てん</sup>宝<sup>ほう</sup>院<sup>いん</sup> 遊<sup>ゆう</sup>騎<sup>き</sup>は体勢を崩さずに顔を上げながら言った。

「それで遊騎。何日食べてなかったんだ？」

「3日」

「『エデン』から支給された家は？」

「どこだか忘れた」

「サイフは？」

「どっかいった」

「携帯は？」

「欲しい言うおっちゃんにあげた」

遊園地の売店の前にあるテーブル。そこに大量の食べ物置き、その食べ物を食べまくる遊騎に優は連続で質問した。遊騎は食べながらではあるがちゃんと答えた。すると、大神が仕方なさそうな顔で口を開いた。

「……遊騎。どうしてそんな状態なのに最後の100円までクレイゲームに使ったんですか？」

実は、大神は優に電話した後、優が来るまで遊騎にある質問をしていた。それは「所持金はないのか」というものだった。それに対する遊騎の返答が「クレイゲームに使った」というものだったのだ。

大神の問いに、遊騎は大神の方を見ずにまるで遠くを見ているかのように呟いた。

「……だって、『にやんまる』好きやし」

それを聞いた刻が頭をかきむしり始めた。そして、座っていたベンチから立ち上がって遊騎を見た。ちなみに、今の刻は閉成学院の夏服を着ているが子供の姿。つまり、口

ストしているのだ。

「お前！ やっぱり頭のネジ一本抜けてんじやねーの!? あんな所で寝るとかありえねーし！ お前がオレより上なんてサギだろサギ！」

実は大神たちが遊騎を見つけた時、遊園地のゲームコーナーの床でキャラクターのぬいぐるみの山に頭を突っ込んで寝ていたのだ。それを桜が助けようとしたのが遊騎を見つけるきっかけになったのである。

そして、刻が言ったように遊騎のナンバーは刻より上だった。遊騎は『コード：03』、『コード：02』である平家、元『コード：01』の人見などを見ると、ナンバーが上の『コード：ブレイカー』はどこか威厳のようなものが感じられる。しかし、当の『コード：03』遊騎は……。

「……………」

「ネジを探すな！ 比喻表現だつーの！」

「……………」

「大神にも優にもねーから！ ホントお前わけわかんねー！」

自分の髪をかき上げて頭のネジを探し、当然ながら見つからなかったので大神と優の頭を調べ始めていた。威厳の欠片もない行動である。

大神と優の頭を一通り調べて満足したのか、遊騎は腹をかきながらライオン型の置物

に座り、そのまま横になった。

「うん。ハラいっぱい。おやすみ」

「だからこんな所で寝るなって!」

刻が短い腕を振り上げて怒鳴った。しかし、遊騎はあっさりと熟睡してしまった。そんな遊騎を見ていた優は大神の方を見た。

「ところで、なんで刻はお前を訪ねてきたんだ? ロストしてるし」

「さあ、知りませんね。ロストに関してはバイトの量が増えたからだそうですが」

「……なるほど。その文句を言いに来たってことか。しかし、大神。お前だって金はあるだろ。なんでわざわざオレを呼んだ?」

「あいにく持ち合わせが少なかったの。なにぶん学生ですから」

「オレだってそうなんだが……。まあ、いい」

頭をかきながら優は立ち上がった。そして、内ポケットから携帯を取り出した。

「“エデン”に連絡ですか?」

「ああ。見事に全部無くしてるみたいだからな。まあ、5分もあれば全部揃う——」

「今はバイトはしーひん」

突然、遊騎が起き上がった。そして優の手から携帯を取り電源を切った。

「今日はろくばんの家に泊まる」



優に携帯を返すと大神を見ながら遊騎は言った。それを見て、優は携帯を内ポケットにしまい、大神はため息をついた。

「……わかりました。あなたの好きにするといいですよ、遊騎」

それを聞いて、遊騎は万歳していた。その様子を見て、桜は驚きを隠せないようだった。

「珍しいな。大神が人の言うことを聞くなんて」

確かに大神の性格を考えると、彼が人の言うことに素直に従うというのは珍しい。行動からは感じられないが、大神は大神なりに遊騎から威厳を感じているのかもしれない。

すると、再び座った優が遊騎に話しかけた。

「なあ、遊騎。何で大神の家なんだ？ 別にオレの家でもオレは構わないぞ」

「……ななばんの家じゃダメやねん。オレ、ろくばんが一番欲しいお土産持ってきてん。楽しみにしててな。……ZZZZ」

「目を開けたまま寝るなー!!」

「……………」

言いたいことを言った遊騎はそのまま寝息を立て始めた。それを見た刻がまた怒鳴り、桜は遊騎を不思議そうに見ていた。

（バイトをしたくないとは……。大神、刻君、平家先輩、夜原先輩と個性は違えど各々偽りの生活をキチンと維持し最優先でバイトをこなしている。なのに遊騎君はみんなより年下のようなだが学校にも行っていないようだし……。本当に『コード・ブレイカー』なのだろうか……）

「あげる」

「え？」

桜の考えはそこで中断された。いつの間にか起きた遊騎が目の前に立ってぬいぐるみを差し出してきたからだ。それは、遊騎が最初に頭を突っ込んでいたあのキャラクターのものだった。

「さつきオレのこと本気で心配してくれたやん。だから『にやんまる』あげる」

猫のようにピンと立った耳、赤を主としたシンプルな服、「にやんまる」と書かれた旗を背中に掲げ、右手には猫じやらしのようなものを持っている。これは今、子供を中心に大人気のキャラクター「にやんまる」である。先ほどから遊騎が言っている「にやんまる」とはこのキャラクターのことで、遊騎は「にやんまる」が大好きだった。桜はこの『にやんまる』のことは詳しく知らなかったが、笑顔でそれを受け取ろうとした。

「おお。では、ありがたく頂戴す——」

しかし、突然現れた不良たちによってそれは叶わなかった。

「遊騎君！」

後ろから歩いてきた不良たちの一人の肩にぶつかった遊騎は、バランスを取れず倒れた。桜は助けようと遊騎に駆け寄る。

「熱っちいい！ なにしやがんだコノ野郎！」

「マサさんのコーヒー代弁償しろよな！ 5万円だコラー！」

不良たちが遊騎を睨みつける。肩がぶつかった不良の顔には、コーヒーがほんの少し付いていた。どうやら持っていたコーヒーがぶつかった衝撃でこぼれたようだ。

「5万円だど!? そんなバカな！」

「ああ!? 全部こぼれちまったんだ！ 払いな！」

遊騎に代わって必死で不良たちに抗議する桜。一方、遊騎は倒れたまま、地面に落ちてコーヒーがかかった「にやんまる」を呆然と見ていた。

「にやん……まる……」

ポツリと、力なく遊騎は呟いた。

「ゴチャゴチャうっぜえんだよ！ このアマア！」

こちらはこちらで、不良が桜に殴りかかろうとしていた。桜の武道の腕を考えると問題はないだろう。しかし……

「大神？」

大神はそれを止めた。その顔に一筋の冷や汗を流しながら。

「んだテメエ！ 邪魔するとテメエから先に地獄見して——」

「死にたくなければ早く逃げてください」

「あ？」

次の瞬間、不良が大神と桜の前から消えた。地面に殴りつけられたのだ。それをやっと思われる少年はどす黒いオーラを放ちながら地の底から唸るような声を出した。

「お前ら全員そこに一列にならべ……。はじから順番に、ブチ殺ス。」

やったのは他でもない遊騎だった。先ほどまでのどこかのほほんとした雰囲気は一切なく、殺気を溢れさせえていた。

「ブチ殺ス!!」

「ギヤアアア!!」

残った不良たちが殴られて気絶している不良を抱えて逃げた。さらに、逃げたのは不良たちだけではない。大神、刻、優、わけがわからない桜も逃げていた。

「大神、あれは一体……?」

「遊騎の地雷を踏んでは駄目です。ああなると誰にも止められません。しかも……」  
「てっ」

桜に尋ねられた大神が説明していると刻が転んだ。子供の体だとやはりいつものようには動けないようだ。その時の背後にいた遊騎がゆつくりと刻を見下ろした。

「まずはお前からか……。このクサレ『磁力』野郎」

「ま……。や、やめて遊騎く……。ボクは味方……」

「殺!!<sup>サツ</sup>」

「きゃああああ!!」

遊騎の容赦ないアッパーを受け、刻はお星様になった。

「無差別に攻撃を仕掛ける……。ある意味、遊騎は最凶の『コード・ブレイカー』かと」

「だな」

「おお!!」

空港。そこは各国へと人を送り、各国から来る人が最初に来る場所である。そこに、異様な雰囲気をもとう3人がいた。

一人はチャイナ服のような服を着た女性。服の上からでも彼女が抜群のスタイルを持つているということがわかった。

もう一人は長袖でフード付きの服をフードまでしつかり被っている褐色の肌をした男性。そんな厚着をしていて、日本の季節は夏だというのにまったく汗をかいていない。

最後の一人は帽子とフードをまとった男性。その身長と体格は、二人より一回り大きいと言つても過言ではない。

「相変わらず湿気臭い所だね。この国は」  
チャイナ服の女性が呟いた。そして、彼らは目的地に向けて歩き出した。

「遊騎。あれだけ食べたのにファミレスに入るなんて。まだ足りないんですか？」  
「ちやう。ここで『にやんまる』フェアやってな。応募券2枚で『にやんまる』シール。応募券5枚で走る『にやんまる』くん。10枚でゴールデン『にやんまる』が当たるんや」

遊騎が指差す先。会計脇の棚の上には黄金に輝く巨大な「にやんまる」があつた。

「い、いらねー!!」

「心配せんといてな。ゴールデン『にやんまる』は絶対に当ててよんばんにあげるわ」

「いらねーつつてんだろ!」

「ろくばんは6番やからシールで堪忍な」

「……………」

「ななばんもシールやな」

「……………」

自由奔放に行動する遊騎。刻にゴールデン「にやんまる」をあげると宣言し、大神と優の顔にシールを貼り、再び食事に戻った。そもそも彼らがファミレスに移動したのはこの遊騎の奔放さが原因だった。キレて刻をお星様にした遊騎はどこかへ消えてしま

い、なんとか戻って来た刻と一緒に大神たちは遊騎を探していた。そして、「にやんま  
る」フェアをやっているこのファミレスで食事をしているのを見つけたというわけだ。  
それを特に気にすることもなく食事を続ける遊騎を見て、桜は難しい顔をしていた。

「むう……。なあ、大神。遊騎君は本当に『コード・ブレイカー』なのか？ とてもそ  
うは見えないのだが……」

「遊騎は自由奔放。誰にもコントロールできないんです。その性格も異能も『コード・  
ブレイカー』で唯一の存在ですから」

「大神。その顔で語ってもピンとこないと思うぞ」

「ほつといってください。というより、あなたに言われたくありません」

桜の質問に答えた大神だったが、いつの間にか顔にシールを貼られた者同士である大  
神と優の言い合いになっていた。大神に聞くのを諦めた桜は遊騎本人に話を聞くこと  
にした。

「なあ遊騎君。さつき『バイトはしーひん』と言っていたな。あれはなぜだ？」

「だって『エデン』が嫌いやし」

予想外の答えが返ってきた。『コード・ブレイカー』にとって『エデン』は上層部。そ  
の『エデン』が嫌いだと言うのだ。

「『エデン』が嫌いなのに『コード・ブレイカー』をやっているのか？ やはり遊騎君



にも目的があるのか？ ……その、言いたくなければ別にいいが」

「『エデン』が嫌いやから『エデン』の下についてるとるんやし」

「え？ それはどういう……」

「おめでとうございます！ ゴールデン『にやんまる』！ 最後の一つでした！」

桜の言葉は突然の大声によって阻まれた。どうやら誰かがゴールデン「にやんまる」をゲットしたらしい。ゲットしたのは妊婦と小さい子供共だったが遊騎は彼らに対してブチギレし、桜、刻、優によって止められた。

「そや、ろくぼん。思い出したわ。ろくぼんへのお土産。お土産話や」

あの後、何とか遊騎をなだめた大神たちはファミレスでくつろいでいた。和やかで平和な雰囲気だったが、遊騎の言葉によってそれは一変した。

「あいつが、『捜シ者』がココに戻って来とるよ」

「！」

『捜シ者』。それは大神が『コード・ブレイカー』になった理由とも言える男だった。遊

騎の話では、その『捜シ者』が日本に戻ってきたというのだ。多くの危険分子を引き連れて。実はこのことは刻も優も知っていた。というより、大神を除く『コード：ブレイカー』は全員知っていた。大神に知らせなかった理由は「見境がなくなる」からだ。実際、大神の前で『捜シ者』の名前を出すと大神からは尋常じやない殺気を感じる。だから「エデン」は大神の耳には入れないようにしていたのだが、遊騎にしてみればそんなのは関係ないようだ。

「あくあ。言っちゃまいやがった。どこまで遊騎は奔放なんだヨ」

「まあ、こうなった以上仕方ないだろ」

「刻君!? 夜原先輩も知っていたのですか!?!」

「仕方ないでシヨ。大神は『捜シ者』のこととなると見境なくなるし」

「……………」

大神は反論するでもなく、ただ黙ったままだった。すると、遊騎が再び喋り出した。

「そうはいかへんのや。今回は」

「はっ。」

「あのな。今回の『捜シ者』の『獲物』サガシモノはろくばん。お前や」

「……………」

大神が目を見開いた。優と刻もそれは知らなかったようで表情が硬くなった。

「あらあら、驚いて声も出ないとは驚きねえ……。これで『コード・ブレイカー』だといふのだからリリイの方が驚きよ？ 大神 零」

「な……!？」

大神の背後の席。そこにいた女性からの言葉に桜は席を立ちあがる。女性はチャイナ服のような服を着たスタイルの良い女性だった。大神は目だけ動かして尋ねた。

「……誰だ、キサマ」

「あら……。随分かわい顔してるわねえ、大神 零。殺しちゃうの惜しいなあ……。でも、『捜シ者』の命令だから仕方ないか」

すると、大神は彼女の胸倉を強引に掴んだ。その勢いで女性の服の胸の部分のボタンが外れる。

「『捜シ者』はどこだ」

「せつかちね。そんなに焦っちゃダメ・よ？」

リリイが指を鳴らした。その瞬間、店内にいた大神たち以外の人間全員が銃を大神に向けて構えた。店員も客も関係なしだ。おそらく全員リリイの部下だろう。

「遊ぶんならたくさんで遊ぼうよ。ねえ、大神。このリリイのために死んでくれる？」  
その瞬間、彼らの平和な時間は終了し新たな戦いの幕が開こうとしていた。

## code : 13 護るべきもの

「大神 零。このリリイのために死んでくれる?」

遊騎を追ってファミレスに入った大神たち。大神はそこで『捜シ者』が日本に来たことを遊騎から聞いた。そんな彼の前に現れたのはリリイと名乗る『捜シ者』を知る女性。今、そのリリイによって大神はピンチを迎えていた。リリイの部下たちに囲まれ銃を突きつけられており、少しでも敵意を見せれば体中に穴が開くだろう。

「ククク……。どうした、小僧? ビビって声も出ないか?」

リリイの部下の中の一人、店員の制服を着た強面の男が大神をあざ笑うかのように話しかけた。明らかに人を殺すことのためにためらいを感じないということを感じさせる男の態度。一般人だったらそれだけで恐怖を感じるだろう。しかし……

「店員さん。コーヒー二つ追加で」

「な!」

大神は何事もなかったかのように近くの席に座り、場違いな台詞を男に向けて言った。とてもじゃないが、丸腰の状態で大勢の人間に銃を向けられている人間の台詞とは思えない。

「こうなったら仕方がない。ゆっくり話を聞かせてもらいましょう。『捜シ者』の居場所を」

「ふざけるな！」

男が大神の頭に銃口を近づけた。それと同時に大神の周囲にいた他の部下たちも同様に銃口を大神の頭に銃を向け、重工と大神の頭を密着させている。それでも大神の態度は変わらなかった。それどころか余裕を感じさせるような笑顔を浮かべていた。

「奴はどこにいるんです？ 教えてくださいよ、リリイさん。なんならケーキもう一ついかがですか？」

「イキがるなよ！ ガキが！」

強面の男が大神の目の前に立ちふさがった。ナイフを取り出して大神の頬を軽く傷つける。傷口から一筋の血が流れた。

「俺はな、中東では『赫あかき死神』って呼ばれてるんだ。なんならその目ん玉からくりぬいてやっても——」

「ゴチャゴチャ言ってるねーでさつきとコーヒー持ってこい」

「こ、このガキ……！」

大神の言葉に男は震えていた。恐怖ではない。純粋な怒りだ。しかし、男はすぐに冷静さを取り戻してニヤリと笑った。

「……わかった。なら、俺の恐ろしさを教えてやるよ。これを見な！ テメエもこうされてえか！」

男が大神から離れるとスタッフ用の部屋の扉が開かれた。そこにあつたのは夥しい数の死体。店員の制服を着ている者もいれば私服を着ている者もいる。

「……全員殺してなりすましたのか」

「一般人でも関係なし……か」

「……………」

「な、なんとということ……」

刻と優が独り言のように状況を把握し、遊騎は黙ったままで、桜は震えながらその光景を見ていた。桜のその震えは恐怖というよりも怒りに近かったが、桜は必死で自分の拳を押さえた。今、自分が出ていってもどうにもならない。むしろ状況が悪化するだけだからだ。

すると、男が床に何かを見つけた。

「おおっと。まだ二人残っていたか？ ……妊婦とガキか。ガキは結構殺してきた

が、妊婦を殺すのは何年ぶりだ？」

そこにいたのは、まだ店内が平和だと思われていた時に、キャンペーンの商品である「ゴールデン」に「やんまる」を手に入れた親子だった。薬を飲まされているのかどうかは

わからないが苦しそうに目を閉じている。男は母親の髪を乱暴に掴み、新しい命が宿っているであろう腹部に向かってナイフを構えた。

「この腹を搔つ捌く時がまた最高なんだ……よな！」

「や、やめろー!!」

男のナイフが腹部に向かって振り下ろされた。桜は我慢できず、男に殴りかかろうとしたが距離があるので止めることはできそうにない。しかし、男のナイフは寸での所で止まった。周囲の異状によって。

「な、なんだ!?!」

突然、部屋中に水がふりまかれた。天井を見るとスプリングラーが発動していた。その原因はある席から発せられる炎。おそらく炎がスプリングラーまで届き、その炎にスプリングラーが反応したのでだろう。だが、その席には違和感があった。なぜなら、そこには先ほどまで大神がいたはずなのだが、今は大神の姿はどこにもない。

「おい! ターゲットはどこに——」

「余所見とは余裕だな」

「なに!?!」

男の腕が何者かに掴まれた。腕を掴んだ人間は……優。

「テメエはターゲットと一緒にいた奴か。この俺を止められるとでも……」

「……その口ぶりだと、大神に関する情報しかもらってないようだな」

「ああ？ 何を言ってる——」

「もういい。黙れ」

男の言葉を遮って優は動いた。男のナイフを持った方の手をひねりナイフを床に落とさせ、そのまま男の背中に押し付けた。

「ぐあー！」

男はそのまま床にたたきつけられた。男は自由だった首を動かして優を睨みつける。

「テメエ！ ただのガキじゃ——」

「黙れと言った」

次の瞬間、店内に鈍い音が響き渡った。優が掴んでいた男の腕の骨を握力で握りつぶしたのだ。

「ぎゃあああああ!!」

「苦しいか。なら……楽にしてやる！」

苦痛に耐えきれず叫ぶ男を見て優はもう片方の手を出し、男の頭を床に思い切りたたきつけた。周囲に血が飛び散り、先ほどまで苦痛で歪んでいた男の顔は完全に床に埋まっていた。

「キ、キサマ！」



今まで呆然としていた他の部下たちがハツとして優に銃を構える。しかし、そのうちの一人の頭が驚掴みにされた。それは、親指に指輪をつけた「悪魔」の左手……大神だった。

「全員燃え散りな」

次の瞬間、大神の左手から『青い炎』が発せられ、リリーの部下たちを次々と燃え散らした。

「目には目を 歯には歯を 悪には悪を」

「ゴミが……。コーヒー一つまともにも運べねえなら店員も失格だな」  
そうして、一分と経たないうちにリリーの部下は全滅した。

「スプリンクラーなんて使わなくてもオレは間に合ったぞ」

「誰が手を貸せと言った。余計なことをするな」

「オレが勝手にやったことだ。妊婦を殺そうとする 悪<sup>クズ</sup>など生きる価値が無い」  
 「相変わらず子供が関わると必死だな」

全身が濡れている状態で言い合う大神と優。ちなみに、優は最初に強面の男を裁いた後、ただ傍観に徹していた。彼にしてみれば、妊婦と子供を助けられればそれでよかったのだろう。

「アハハ！ やつぱり強いよね、大神。それと、優だったかしら？ あんたのことは特に何も聞いてないけどあなたも中々ね。どっちも普通の人間じゃ太刀打ちできないわでも、『捜シ者』には敵わない」

大神たち同様、スプリングクラーで全身が濡れたりリイが微笑を浮かべながら大神の前に立つ。そして、クスリと笑った。

「わかってるでしょ？ 異能者が『コード・ブレイカー』だけじゃないってことは、『捜シ者』の下には多くの異能者が集まっている。こんな光景が今にそこら中で見れるようになるわ。『捜シ者』がこの国を戦場に変える」

「な………！ 一体何のために………!?!」

リイの言葉に桜が驚く。そんな桜の言葉を聞いてもリイは笑みを絶やさない。

「クスツ。さあねえ、知らないわ。そんなことどうだっていいし。楽しきやいの。リイはね。……ねえ、大神。『捜シ者』からは殺せって言われたけど、あんたも一緒に

やらない？ あんた結構カワイイからさ、殺すの惜しいのよ」

言いながらリリイは大神の左手を自分の胸に押し当てた。それは傍から見れば非常に大胆な行動。しかし……

「なんならリリイが『捜シ者』にとりなおしてやっても——」

それは同時に非常に危険な行動だった。

「断る。燃え散れ、<sup>クソ</sup>悪が」

大神がリリイの胸に押し当てられた左手から『青い炎』を放った。元から密着していたため、リリイの体は一瞬で『青い炎』に包まれた。しかし、燃え散ったのは彼女の服だけだった。

「フフツ！」

いつの間にか空中にいたりリリイが笑いながら大神に向かって踵落としをした。どうやら大神が『青い炎』を発した瞬間に服を脱ぎ空中に跳んだのだろう。その証拠に、今のリリイは先いほどまでとは違い露出が多い服装となっている。

大神は両腕でリリイの一撃を防いだ。しかし、リリイはもう片方の足を振り下ろし、大神の両腕を足場にしてジャンプした。その勢いを利用して背中であみだの窓を割り、リリイは外に出た。その時、リリイの手元には一つのスイッチが握られていた。

「それじゃあバイバイ♪」

リリイが手に持ったスイッチを躊躇することなく押した。その瞬間、ファミレスは店内から爆発を起こし、周囲に爆音が響いた。リリイは爆発に巻き込まれることなく、地面に華麗に着地した。

「あくあ、残念。リリイの誘いを断るからよ？　リリイはね、強い男が好きなの。ウフフフ、アハハハハハ！」

「う……………ん……………」

呆然とした意識の中で、桜はゆっくりと目を開けた。徐々に司会を広げながら、自分の置かれている状況を整理した。リリイと大神の戦闘があった後、リリイは店外に逃走した。そして、それとほぼ同時に店内で爆発が起こったのだ。命を落としてもおかしくないような状況だが、桜は確かに自分の心臓の鼓動を感じていた。なら、自分はどうやって助かったのか。その答えは、今まさに桜を抱えている人物だった。

「ゆ、遊騎君!？」

桜を抱えていたのは遊騎だった。桜だけではない。リリイの部下に殺されかけた妊

婦と子供、そして刻。さらにゴールデン『にやんまる』も無事だった。

「ちよつと重たいからギリギリやったわ」

そう言いながら順番に降ろしていく遊騎。どうやら、遊騎が店内にいた生存者全員を一瞬のうちに救ったようだ。しかし、そんなことは常識的に考えて不可能。

なら、答えは一つしかなかった。

「まさか遊騎君……。異能を使つて皆を助けてくれたのか？」

微笑みを浮かべる遊騎。それが肯定なのかはわからないが、その表情を見て桜も安心する。しかし、その隣では刻が怯えていた。その理由は……。 「にやんまる」だった。

（ヤベエ！ ゴールデン『にやんまる』が壊れてる！ キレる！ あいつ絶対キレる！）

刻の視線の先には、見事に首と体が離れたゴールデン「にやんまる」があった。「にやんまる」大好きな遊騎なら絶対に怒りを爆発させると予想したのだろう。しかし、遊騎はゴールデン「にやんまる」に構わず妊婦と子供の所に歩み寄り、妊婦のお腹と子供の頭をそつと撫でた。

「（こどももあかんばも無事でよかつたなあ……）」

「遊騎君……」

自分の好きな「にやんまる」よりも人の命を心配する遊騎。その姿を見て、桜は微笑

みを浮かべた。

しかしその後、遊騎は刻に『磁力』でゴールデン「にやんまる」の首と体を繋げるよう少しキレながら言った。やはり許せないらしい。

さらに、桜がふと気づいた。

「……遊騎君。大神と夜原先輩はどこなのだ？」

「重かったから置いてきたわ」

ケロツと言う遊騎。その言葉を聞いて途端、桜は慌てだした。

「遊騎君！　なんでそんな平然と！　大変なのだ！　大神と夜原先輩を救出せねば！」

「いや、別に良いんじゃない？　てか、オレとしては死んでくれた方がスッキリするし」  
遊騎同様ケロツと言う刻。しかし、そんな刻に桜は猛反発する。

「何を言っているのだ、刻君！　いくら大神と夜原先輩でも爆発の直撃を受けては危険だ！　大神！　夜原先輩！　今すぐ救出し、痛！」

桜は高らかに宣言し、すでに瓦礫と化したファミレスへと向かっていった。すると、その桜の頭を何者かがスパンと叩いた。

「人を勝手に救助対象にするな」

「夜原先輩！　ご無事だったのですね！」

叩いたのは桜が救出しようとした優だった。優は気怠そうに腕を回しながら言った。「まったく……。脚力を強化すればあんな爆発は簡単に避けられる。オレの異能を知っているならすぐわかるだろ」

「そ、そうでした……。いやあ、うっかり……。つて、そうだ！ 大神！ 先輩！ 大神はどこに!？」

桜は優に掴みかかった。優は目を合わせないように顔をずらした。

「大神も無事だろう。あいつの『青い炎』は普通の炎すら燃え散らす。おそらくリリイを追っていったんだろう。『捜シ者』の居場所を吐かせるために」

「では今すぐ大神を追いましょう！ 大神はリリイに命を狙われてた……。一人では危険です！ 助けに行きましょう！」

「その必要はないよ、桜チャン」

刻が平然と言った。その後ろでは、遊騎はゴールデン「にやんまる」の頭を被りながら「にやんまる」の歌を歌うことで自分の世界に浸っていた。

『捜シ者』の件はともかく、大神が誰に命を狙われてようと護んなきやいけねー理由はねーヨ。同じ『コード：ブレイカー』だとしても、バイトでもない限り互いに助け合う必要もないし。それに大神が死んだところで他の異能者が新しい『コード：06』になるだけだし。あ、優以外のネー」

「……………」

刻の言葉に優はただ黙っていた。しかし、桜は刻に向かって叫んだ。

「大神が命を狙われているのだぞ!? 『コード：ブレイカー』の考える命の重みとはその程度のものなのか!?!」

桜のその言葉を聞いた瞬間、遊騎が歌うのをやめた。そして、ゴールデン「にやんま」を頭から外すと言いかう桜と刻を見た。

どこを探すどう探すと言いかいをしていた刻と桜だったが、ついに桜は一人で探しに行こうと歩き出した。そんな桜を、遊騎は髪を引っ張って止めた。

「遊騎君! 急いでいるのだ! こうしてる間にも大神が——」

「待ってって」

「え?」

遊騎がまるで耳を澄ますかのように両耳の後ろに両手をあてた。しばらくすると、一つの方角を指差した。

「ろくばんの居場所わかったで。あっちゃ」



「理由などどうだっていい！ 助けたいから助ける！ それだけだ！」

大神を助けるために飛び込んだ桜が力強く大神に宣言した。「助けられる理由がない」と言い放った大神だったが、桜の力強い言葉に何も言えないようだった。

遊騎によって大神の居場所を突き止めた桜たち。大神の所に駆けつけると動けなくなっている大神とそれを見下ろすリリイ、そして褐色の肌をした男がいた。どうやらリリイと同じ、『捜シ者』の仲間のようだ。

「……………」

なぜか刻だけでなくゴールデン「にやんまる」を脇に抱えてきた遊騎は桜のその言葉を聞いてあるものを思い出した。それは「にやんまる」の絵本にあったシーン。「にやんまる」が敵である「かげまる」を助けるといふシーンだ。「かげまる」に自分を助けた理由を聞かれた「にやんまる」はしばらく悩んだ後、自信満々にこう言い放つのだ。

「それは明日考えるにやん！ にやんまる、助けたいからたすけるにやん！」

それはまさに桜がさっき言ったこととそっくりだった。その時、遊騎の中で「にやんまる」と桜の姿が重なった。

「にゃん……まる……が、おった……」

まるで宝物を見つけたかのように遊騎は呟いた。そしてこの時、遊騎の中でやるべきことが生まれた。

「なによ、この女。うざいわね」

リリイは大神を護るように自分に立ちふさがる桜を見ながら、小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。すると、一人の人物が二人の間に割って入った。

「まったくだな。それに、大神も情けない」

「夜原先輩!？」

優だった。優はリリイと目を合わせないように注意しながらリリイと褐色の肌をした男の方を見た。すると、自信を感じさせるような笑みを浮かべた。

「いくら知らなかったとはいえ、リリイの異能『分泌』によって生成された毒を受けて動けなくなるとは。その雪比奈って男も内心呆れてるんじゃないのか？」

「……ふん」

「へえ？」

リリーの異能と褐色肌の男の名を言い当てた優。実は大神の元に向かう途中、優は聴力を強化して大神たちの会話を少しだけではあるが聞いていた。そのため大神の状況、リリーの異能が皮膚線から様々な代謝物質を分泌する『分泌』だということや雪比奈と呼ばれる者がそこにいるということをいち早くわかっていたので。

「……名前を知ったところで関係ないだろう。『コード：07』夜原 優」

褐色肌の男……雪比奈が特に興味もなさそうに言った。すると、リリーが一步前に出た。

「ふうん。あんた耳が良いのね。さっきのパワーのことも考えると身体能力をパワーアップさせる異能ってどこかしら？ まあ、どうでもいいわ。知ったところでどうにかなるものじゃないし」

リリーが自分の左手を舐めた。すると、左手からドロリとした液体が分泌された。

「この濃硫酸で、その女もろともグチャグチャにしてあげる！」

左手を前に出して優たちに向かっていった。それに対し、優は構えた。そして、リリーの左手は付着させた。……地面に。

「!？」

音を上げてドロドロに溶ける地面。さっきまでそこにいたはずの大神、桜、優の姿は

影も形もない。彼らはリリイの後ろにいた。遊騎に抱えられて。

『にやんまる』の言う通りや。ろくばんもななばんも『にやんまる』もオレが護るし  
遊騎は大神たちを降ろしてリリイの方を向くと片方のつま先で地面を「トン」と叩いた。

次の瞬間、遊騎はリリイの背後に移動していた。

「な!？」

「あかん……。行きすぎたし」

「フフツッ! 目障りなネズミは、骨まで溶かしちゃうわよ!」

リリイが毒を『分泌』した右手を遊騎に向かって伸ばした。しかし、次の瞬間には遊騎は目の前から消え背後に移動していた。

「は……。速い! なんなのこの異能!? ……ううん。そんなことどうでもいいわ。

だつてリリイには誰も触れられないわ！ 触れなきや倒せないでしょ!? アハハハ！

「触れたりせえへん……よ！」

「！」

次の瞬間、リリイが後ろに吹っ飛んだ。しかし、遊騎は特別なことは何もしていない。ただ声を出しただけだ。

「な……!? 大神、遊騎君の異能って……？」

「『音』ですよ。あらゆる音を遠距離からでも聞きわけ、音波が生み出す衝撃波さえも操り、音速で一瞬の内に移動することが出来る唯一無二の異能」

「その聴力、速度といった能力は俺が『束脳・反転』を使った時よりも高い」

「人間の限界を超える『束脳・反転』を使った夜原先輩以上ですか!？」

「まあ、異能自体が人間を超えた力だからな」

桜に遊騎の異能について説明する大神と優。そこにリリイの相手を終えた遊騎が歩いてきた。

「遊騎君。ありがとうなのだ」

「……『にゃんまる』」

「？」

二人は固い握手を交わした。当の桜は遊騎の言葉の意味を理解してないようだが、こ

の際どうでもいいだろう。

「なんかあいつスゲー大きな勘違いしてねえ？」

「してるな」

いつの間にか大神たちの所に移動した刻が遊騎を見ながら言い、優もそれに同意した。どうやら遊騎の中で桜は「にゃんまる」になったらしい。

すると、リリイが立ち上がった。

「ガキが！ 面白いじゃない！ リリイを本気に——」

リリイの言葉が途切れた。首に雪比奈の手刀を受けて気絶したからだ。気絶したりリイの体を雪比奈は支え、木材のように担ぎ上げた。

「味方を気絶させた……!?!」

「これ以上、戦う気はないんだろう」

雪比奈の行動に戸惑う桜。対して、優は冷静にその行動の意味を理解した。

「あいつ……めっちゃ強いわ」

遊騎が雪比奈を見ながら呟いた。雪比奈は振り返ることなく、リリイを担いだまま歩き出した。

「待て……雪比奈。『捜シ者』はどこにいる……!?! あいつはなにをしようとしている

……!?!」

「大神……。お前が『コード・ブレイカー』などに成り下がるとはな。オレたちの邪魔はするな。次に会った時はオレがお前を殺す」

「……………」

いまだリリーの毒が抜けない大神は、この場から立ち去る雪比奈の背中を睨みつけることしかできなかつた。

## code : 14 大神宅にぐ訪問

「なんであの雪比奈とかいう奴、逃がしちやっただんだヨ。あいつ『捜シ者』の部下なんダロ？」

「『捜シ者』の部下なんだから安易に手を出せないだろ。下手に手を出したら何をするかわからないからな」

「ななばんの言う通りや。それに、ろくばんが無事やったんやからそれでええやん」

「そうだ！ それに、大神は『捜シ者』たちに命を狙われているのだろう？ ひとまず護るのだ！ 一人にしてはおけん！」

「……リリーの毒もほぼ抜けたんでほつといて頂いてかまわないんですが。ところで……」

大神を狙い日本に帰ってきた『捜シ者』の部下であるリリーと雪比奈をなんとか退けた大神たち。彼らは今、とある場所に向かっていた。その場所とは……

「なんで全員で僕の家に来なきやならないんですか？」

大神の家だった。何の変哲もない普通の二階建てのアパート。その前に大神たちはいた。遊騎は「ついたー」と言いながら万歳している。未だロストしている刻に結局



持ってきたゴールデン『にゃんまる』の頭をかぶせて。

「まあ、僕はかまいませんが桜小路さんは帰った方がいいのでは？ きつとご両親が心配されるでしょうし……」

大神がそう言うと、桜は携帯を出して笑顔を浮かべていた。

「母上から了解は取っておいた。皆によろしく、と」

「……そうですか。ん？」

桜の行動の速さに感心していた大神の携帯が突然鳴った。見てみると、一通のメールが届いていた。差出人は、桜小路 剛徳。その内容は……

「桜に手を出したら殺す!!」

物騒極まりないものだった。

「お前ってあの人からの信頼ゼロだな」

「……ほつといてください」

いつの間にか自分の隣に立ってメールを見た優の言葉を流して、大神は階段を上り始めた。どうやら大神の部屋は二階にあるらしい。

「しかし意外と普通だな。『エデン』から支給されたものなのだろう？ もつとすごいものか……」

「平凡な高校生の一人暮らしなんてこんなものですから」

「無駄に豪華だと怪しまれるからな。普通が一番だ。オレの家もこんな感じだしな」  
階段を上りながら話していると、桜が優の方を見た。

「そうですねですか。では、いつか夜原先輩の家にも——」

「断る」

「うう……やはりまだ冷たい……」

そんなことを話していると、入口のドアの前に着いた。大神は鍵を出し、部屋を片付けるから待つよう言つて中に入ろうとした。しかし、刻がその鍵を奪つた。

「そうはいくか！ お前の●●●●●●や●●●●●●！ ハズカシイ部分ばつちり暴かせてもらうぜ！」 ※不適切な表現があったため一部音声を変えてお送りしています。

刻はそのままドアを開け、中に入つていった。

「そのすましたツラも今日限り——」

次の瞬間、刻に向かつてナイフが飛んできた。

「ふおー!!」

飛んできたナイフは勢いよくドアに突き刺さった。ナイフは刻にかすりもしなかったが、刻はかなりビビっていた。

「ちよ、ナニが……ひゃああああ!!」

ナイフから離れようと動いた刻が宙に浮かんだ。もちろん本当に浮かんだのではなく、ロープが足に巻きつきそのまま吊るされただけだ。

「ハア……だから片付けるまで待てと言ったでしょう?」

「……………」

「おー」

「対侵入者用のトラップか。それにしても見事に引っかけたな、刻」

刻の惨状に大神はため息をつき、桜は驚きのあまり何も言えず、遊騎は拍手し、優は大神に感心していた。

「いいからはやく降ろせー!!」

「わかった。ほら」

「んぎゃー!」

優が手刀で刻を吊るしているロープを切り、刻はそのまま床に頭から落ちた。

「やり方が乱暴なんだヨ!」

「わざわざ異能を使って助けてやったんだぞ?」

「普通にほどけばいいだろうガ!」

「やめるのだ、刻君。それにしてもトラップなんて……」

「ここから先のトラップは解除しておきました。どうぞ入ってください」

刻と優の言い合いを桜が止めると、大神が中に入った。土足で。

「大神。なんで靴を脱がぬ?」

「ガラス飛散時にも移動可能なようにです」

「電気が点かぬが?」

「暗闇に慣れないと夜目がきかなくなりますから」

「あの窓の目張りは?」

「隙間からの偵察防止です」

「……………」

「どうしました?」

見た目はいたって普通だった大神の家。しかし、中に入ってみればトラップはあるわ必要以上に用心されているわで明らかに普通ではなかった。やはりここは『コード：ブレイカー』という「非常識」的な者の家なんだと感じる。

「普通そこまでする力? ……って、オイオイ。なんでベッドが膨らんでんダヨ。エッチなものでも隠して——」

大神がランタンを用意して明るくなった部屋を見渡していた刻が、大神が使っていると思われるベッドが膨らんでいることに気がついた。そして、布団を乱暴にめくった。そこにあった、というよりいたものを見て刻は絶叫した。

「きゃあああ! 死体ー!?!」

布団の下にいたのは不気味に笑う黒人の男、の人形だった。下半身は棒になっていて持ち運びできるようになっている。

「寝込みを襲われた時の身代わり人型模型チャーリー4号です。ちなみに僕はベッドの下の寝袋で寝ます」

「お、お前は軍事マニアか何かかよ?!」

「大丈夫だぞ、刻君。よしよし」

平然と説明する大神。しかし、今の刻は完全にビビって桜に頭を撫でてもらっているため頭に入っていないだろう。

「なあなあ、ろくばん。1号は？」

「1号と2号は殉職。3号は対狙撃用です」

「遊騎！ お前は順応しすぎだ！」

刻と違って遊騎は普通に馴染んでいた。それどころか、大神の言葉を聞くと1号と2号のお墓を作り始めた。

「なあ、『コード：ブレイカー』ってみんなこんな……」

「なわけねーし！」

「最低限の防犯はしているが……大神ほどの対策はしてないな」

「あ、そうそう……」

桜の疑問を刻と優が否定していると、大神が何かを探し始めた。そして出てきたのは、大量の缶詰だった。

「食料はたくさんあるので食べたいだけどうぞ」

「しよ、食料って……ソレ？」

「……大神。お前、まさかいつもこれを……？」

「ええ」

刻と桜が少し引きながら質問すると、大神は平然と答えた。一方、遊騎と優は……

「缶詰でジャグリングやし」

「上手いな、遊騎。お、カレーの缶詰。オレはこれにするか」

「ななばん、カレー好きやしな」

遊騎は缶詰でジャグリングを始め、優は缶詰をあさって自分が食べる缶詰を決めた。  
た。

「テメーら二人はどんだけ順応してんだヨ！」

「「ええやん（いいだろ）、別に」」

刻のツツコミもスルーだった。すると、それを黙って見ていた桜が勢いよく制服の裾をまくった。

「よい！ 食事は私が作ろう！」

「ええ!? いやいや！ それはそれでヤバいデシヨ！ 台所ぶつ壊すとガス爆発……

！ マジで食事どころじゃなくなるカラ！ やめてくれー!!」

「母上直伝の肉じゃがだぞ」

「……………」

桜が作った肉じゃがに、大神と刻と優は言葉を失っていた。悲惨な出来だったからではない。むしろその逆だった。その肉じゃがは見た目は完璧な出来だったのだ。ちなみに、遊騎は「にやんまる」が敵に自分の食糧を分け与えるシーンを思い出し、桜が「にやんまる」であると改めて認識していた。

「まあ、台所ぶつ壊さなかったのは褒めてやるヨ。それにしても、肉じゃがとはまたベタな……。もしかしてユキちゃんの入れ知恵？」

「よくわからんが母上がこれだけは覚えておくようにと」

「なるほどな」

「でも大事なものは見た目より味！ オレのセレブ舌はそう簡単には——」

「なくなるぞ」

「な！ 待て、この野郎！」

「食うしー」

「……………いただきます」

そして、男性陣は肉じゃがを口にした。すると、文字通り目が点になった。



「うま……」

「だな……」

刻と優が思わず声を漏らした。それだけ桜が作った肉じやがは絶品だったのだ。

「オレも一人暮らしだから料理はするが、ここまでのものは作れないな……」

「本当ですか、夜原先輩！ 喜んでいただけただけなら嬉しいです！」

「近い。離れろ」

「……はい」

優から評価を得たのが嬉しかったのか、桜は優に近づき、また拒絶された。

桜はため息をつきながら大神にも感想を聞きに行った。

「大神。美味しいとは言えないかもしれないが、作り立ての分缶詰よりはマシだろう？」

「ええ、とても美味しいですね」

大神は学校で見せるような好青年の笑顔で答えた。対して桜は、不服そうな顔をしていた。

「ケツ」

「……なんですか？」

「お前のその顔はウソをつく時の顔だぞ。不味かったならばつきり言え」

「ウソじゃないですよ」

「いや！ 今のはウソをつく時の顔だ！ そうでない時のお前の顔は——」

桜が大神の顔について説明を始めると、大神はため息をついて箸を置いた。そして、どこか遠くを見るように言った。

「ウマいとかマズいとか……そんなこと、どうでもいいじゃないですか。食事なんて要はエネルギー摂取。腹が満たされればそれでいいんです」

「大神……」

大神の言葉を聞いて、桜は改めて部屋の中を見渡した。そして、遊騎が作ったチャーリー1号・2号のお墓が目に入った。

（殉職ってことは、命を狙われたってことだよな……）

身代わりのために用意した1号・2号が殉職したということは実際に大神を狙った者がいるということを表している。

さらに部屋を見渡すと、驚くほど何も無い。驚くほど……殺風景な部屋。

（大神って、どんな風に育ってきたんだろうか……）

そんなことを思っていると、『子犬』が何かしていることに気付いた。見てみると、壁に刺さったナイフにかけてある制服を落とそうとしているようだった。そして、よく見ると壁に刺さったナイフが壁以外の何かを刺していることに気付いた。

（写真……?）

それは写真のようだった。今いる位置からは何の写真かわからないので、桜はその写真を撮ろうとした。すると……

「……………」

「お、大神?」

大神に止められた。写真に向かって伸ばした手を、大神に掴まれた。その力は強く、

振りほどけなかった。しかし、次の瞬間には力が緩んだ。原因は……遊騎だ。

「このろくばん、ちっちゃいなあ」

遊騎がいつの間にか写真を撮っていた。おそらく異能を使い音速で移動したのだろう。遊騎の言葉で力が緩んだ大神の手を振りほどき、桜は遊騎の隣に移動した。

「どれ？」

「ちよ……！」

大神の言葉を見無視し、桜は写真を見た。そこに映っていたのは二人の男と一人の女、そして大神の顔をそのまま幼くしたような顔をした少年だった。大神以外の人物の顔は写真が破れたりしているため見えない。

「おお！ なかなか可愛いではないか！ しかも今と違ってとても素直そうだ！」

「せやな。……あれ？」

遊騎がふと何かに気がついた。そして、幼い大神の隣にいる一人の若い男を指差し、驚愕の言葉を口にした。

「これ、『捜シ者』やん」

「え？」

「……………」

遊騎が指差した男は口元に右手を当て、その手の甲には特徴的な刺青があった。よく見ると、その男の顔のあたりは特にポロポロだった。

「どういうことだ、大神？　なんでお前と『捜シ者』が……」

「……………そっか。そうやったな」

遊騎は目を閉じた。そして、さらに衝撃的な事実を口にした。

「ろくばんは『捜シ者』に育てられたんやったなあ」

「……………え？」

「……………」

遊騎の言葉に桜は意味がわからないようでその場で固まり、刻と優は黙って大神を見ていた。大神は遊騎と桜に背を向けている。

「この部屋見ればわかるわ。よう訓練されとるし」

「ほ、本当なのか？ 大神。だから、こんな生活を……」

「……だから何なんです？」

大神は桜に背を向けたまま答えた。そして続けた。

「その通りですよ。たしかに闘いの技術、戦場で生き残る術、異能の扱い方、……人の殺し方。オレはすべてをあいつに教わった」

そう言うと、大神はナイフを投げた。ナイフは遊騎の方に飛んでいき、遊騎が持っていた写真のちょうど『捜シ者』がいる部分を貫き、そのまま床に刺さった。

「だからあいつは必ずオレの手で殺す」

「お、大神……」

冷たく、殺気に満ちた大神の言葉。その迫力に、桜は息を呑んだ。すると、刻が突然口を開いた。

「それはどーかね？ 『捜シ者』に育てられて、『捜シ者』の部下の雪比奈がお前を見逃した……。こうなるとお前の言ってること何一つ信用できないんだケド？ ……むしろ、お前は『捜シ者』が『エデン』に送り込んだスパイだったりして」

「何を言うのだ、刻君！ 夜原先輩！ 先輩からも言ってるやってくださいー！」

「……悪いが、大神をフオローする気はないな。刻の言う通り、大神が『捜シ者』が送

り込んだスパイという可能性は十分にある。まあ、そうだったら容赦なく殺すけどな」

「夜原先輩！」

刻と優の言葉に桜はただ一人反論する。それを見ていた大神は二人の方を向いた。

「別にお前らに信用しろと言った覚えはない。さっさと帰れ」

「お前のためにいるんじゃないよ。遊騎がワガママ言わなきやテメーの家なんか来ねーっつの」

「おい！ 二人とも——」

大神と刻が一触即発の雰囲気になってきて、桜が間に入ろうとする。すると、遊騎が突然口を開いた。

「無理や。ろくばん一人じゃ『捜シ者』は殺せへん。前に『捜シ者』が暴れた時にオレらの前の世代の『コード・ブレイカー』がツブシにかかったんやけどな。『捜シ者』にはすんでのところで逃げられ、『コード・ブレイカー』の大半は再起不能か死亡だったらしいわ」

「オレたちの前の世代ってことは……人見さんたちのことか」

「せや。もといちが<sup>人</sup>い<sup>見</sup>ても『捜シ者』は殺せへんかった。『捜シ者』はホンマ、メンドウな相手やって」

「そ、そんな……」

遊騎の言葉にショックを隠せない桜。すると、大神の携帯が鳴った。見てみると、エージェントである神田からだった。

「神田か。どうした？ ……何？」

「な、なにがあつたのだ？」

桜が尋ねると、大神は携帯を耳から離した。

「ウランやプルトニウムなどの放射性物質を保有する研究所が正体不明の集団に占拠された」

「な……………!？」

正体不明の集団……………。大神たち『コード：ブレイカー』はそれが誰の仕業なのかすぐにわかった。

「……………」

原子力物質を保有する研究所。その屋上で一人の男が外の世界を見下ろしていた。男は黒い帽子を目深にかぶり黒いコートを着ていた。



男の背後に色黒の男が立った。それは、昼に大神達の前に現れた雪比奈だった。

「すべての手筈は時間通りに整いました。……あとは彼だけ」

雪比奈が話しかけている男をよく見てみると、右手を口元に当て右手の甲には特徴的な刺青があった。

「大神が来るのを待つだけです。……『捜シ者』」

彼らの足元には、武装した兵士の死体が大量に転がっていた。

## code : 15 地獄

そこはとある場所にある普通のアパートの2階の一室。その中は普通なら感じることのないほどの緊張感に包まれていた。

「放射性物質を保有する研究所が占拠された!？」

神田からの連絡を受けた大神の言葉を桜はオウム返しした。そして、顎に手を当てて考え出した。

「一体誰がそんなことを……」

「おそらく『捜シ者』だろうネ。なんでそこを占拠したかはわからないケド」

桜と違い、刻は犯人が誰かわかっていた。いや、彼だけでない。『コード：ブレイカー』の全員がわかっていた。

「ま、最悪のパターンだけどこのまま……」

「どっかーん!」

刻の言葉を遮って大声を出す遊騎。あまりの音量に、刻は歯を食いしばりながら耳を塞いでいた。

「……とでもなったら近くの地域一帯が放射性物質に汚染されるでしょうね」

「そんな……！」

冷静な大神の言葉に桜は衝撃を受ける。このまま放っておいたら、学校の友人たちや家族にまで危険に晒されるというのだ。桜は放射性物質に詳しいわけではないが、それがどれほど危険なものかはわかつているつもりだった。

すると、刻がポケットに両手を入れて歩き出した。まるで行楽地へ行くかのように簡単に、素っ気ない言葉を口にしながら。

「面白くなってきたジャン？　じゃあ、先に行かせてもらいますカ」

「……………」

それに続いて、大神が制服の上着を着ながら歩き出した。それを見て刻は立ち止まる。

「ナニ？　お前も行く気なの？　でも『捜シ者』絡みである以上、バイトの依頼は遊騎に来たんダロ？　勝手に動くなよ」

「……ロストしてるお前こそバイトどころかただの足手まといだ」

「うっせーよ！　『捜シ者』に育てられたお前なんか信用できねーよ！」

「二人とも！　やめるのだ！」

険悪な雰囲気になる二人を桜が止める。『捜シ者』が起こしたと思われる事件の連絡を神田から受ける前に出た、大神と『捜シ者』に関する話。それにより、大神は『捜シ

者』が送り込んだスパイだという可能性が生まれた。二人が険悪な雰囲気なのはそれが原因だった。ちなみに、話に出てきた遊騎は部屋にあるベッドで目を開けたまま寝ていた。

「まあ、この状況だと刻が行くのが妥当だな。遊騎は寝てるし。……大神はなにかと危険だからな」

「夜原先輩！ 先輩までそのようなことを！」

優にしてみれば客観的に状況を見た結果なのだろう。桜もそれは理解しているのかもしれない。だが、理解していたとしても納得はできない。桜の心情を表すならそれが最も近いはずだ。

「へえ？ わかつてんジャン、優。そんなじゃ、お前も大神と一緒に遊騎のお守りでもしてろヨ。お前がいても役に立たねーだろうからサ」

桜とは正反対にあっさり優の言葉を認められた刻。しかし、彼の言葉を認めても彼の同行までは認めようとはしなかった。

すると、刻の言葉を聞いた桜は決心したかのように拳を握りしめ、力強く言い放った。

「……よし、わかった！ では、遊騎君は寝かせといて四人で参ろう！ ロストしている刻君は私が護って——」

「そもそもなぜあなたは来る気マンマンなんですか？ あなたもここにいてください

い

「なぬ!？」

自分の提案をあつさり大神に否定され、桜は信じられないというように目を丸くした。

「あー! どのつてもこいつも!」

そんな二人のやり取りを見ていて苛立ちを覚えたのか、刻は大声を出してそのやり取りを止めさせた。

「悪いけどお前らなんかよりロスト中でもオレの方がよっぽど役に立つんだよね。んなら競争でもする? クズども何人殺せるか、とかサ」

「刻君! 人の命をそのような……」

「へーへー。とにかくオレは行くヨ。そもそも『捜シ者』の集団に用があるのは大神ダケじゃねーし」

「え? 刻君も因縁が——」

あくまでも一人で行こうとする刻。刻の言葉に反応する桜だったが、その言葉は刻による次の言葉……というより、行動によって途切れた。

「ヘクチツ!」

刻が突然くしゃみをした。見てみると、かすかに頬が赤くなっている。

「刻君！ まさか風邪をひいたのか!？」

「スプリングラーで濡れたままでしたからね」

「子供の体だから免疫力も低下してるのかもな」

「ほ、ほっとけ！ クチンッ！」

どうやら昼にリリーの部下の注意を惹くために作動させたスプリングラーが原因のようだった。桜は心配しているが、大神と優にそんな様子は全くない。ただ冷静に原因について自分の考えを口にしていった。当の刻は、お構いなしに一人で行こうとしていた。

すると、桜が思わぬ行動に出た。

「ふむ。それでは私のベストを貸そう。ロストしている今ならサイズも問題なからう」

「いや、別にイイって言っ——」

「な……………」

「ちよ……………」

「ZZZZ……………」

遊騎以外の男性陣が固まった理由。それは桜だった。刻に貸すためにベストを脱いだ桜。ベスト自体には問題があるわけではない。ベストはすでに乾いているため風邪

をひいている刻に貸すのは正しい判断と言える。しかし、その下に着ていた彼女のシャツはまだ濡れていた。そのため、シャツが透けて下着が見えてしまっているの。それを見て彼らは固まったというわけだ。

「さ、桜小路さん……!?! ベストの中、まだ乾いてないようですが……」

「心配いらん！ 私は大丈夫だ！」

「いや、そうではなくて……」

大神としては下着が見えているということのを伝えたかったのだろうが、桜が気付く様子は全くない。そして、桜は下着を透けさせたまま刻にベストを差し出した。

「ほら刻君。あつたかくしような。まだ外は寒いからな」

「うん！ ぜひ喜んで！」

大神と違い、刻は間違いないくこの状況を楽しんでいた。その証拠に、彼の視線は桜の下着に釘づけだった。

言葉ではこの場を何とかできない。そう思った大神は言葉ではなく行動をすることにした。

「桜小路さんはまず風呂に入って服を乾かしてきてください！」

そう言つて桜を脱衣所に押し込みドアを閉めた。そして、一緒に入ろうとした刻の頭を踏みつけ、桜が出てこないように大神はドアを押さえた。桜も「私は大丈夫。それよ

り刻が心配」と言い張る桜に、刻の服はエージェントに用意させると言った大神。すると桜は納得し、素直に風呂を頂くことを決めた。

「まったく……。大丈夫ですか？　優」

「……なんとかな」

桜が風呂に入ったのを扉の向こうから聞こえる音で確認した大神は、顔を押しえて床に突っ伏している優に声をかけた。女性が苦手な優にとって、桜のあれはかなり効いたらしい。

「さて、それじゃあ行きますか」

「ケツ！　命令すんな」

「いいから出るぞ……。というか早く出たい」

そう言つて、三人は遊騎と桜を置いて外に出た。

「では研究所に向かいますか」

「おい、大神。さつさと神田チャンに連絡してオレの服用意しろよな」

そんなことを言いながら歩く大神と刻。階段を下り、道路に出た。すると突然、優が



立ち止まった。

「……………」

「どうしました？ 優」

「ナニ？ 怖気づいたワケ？」

急に立ち止まった優に気付いて大神と刻もその場に立ち止まる。すると、優の口がゆつくりと開いた。

「悪いが先に行つててくれ。相手がああ『捜シ者』とその部下となると……少し準備が必要だからな」

「心配性ですね。まあ、僕は構いませんが」

「ヘッ。お前がどんな準備しても役に立たねーのは変わらねーヨ」

「悪いな」

そう言うのと、優はその場から跳んだ。そして屋根の上を跳びながら自宅へと向かい、大神と刻は研究所へと向かった。

場所は変わって大神の家。大神に言われて風呂に入った桜は温まった体に乾いた制服を着て、勢いよくリビングへと続くドアを開けた。

「待たせたな！ さあ、みんなで『捜シ者』のところに……って、あれ？」

部屋には風呂呂に入る前まではいたはずの大神、刻、優の姿はなかった。いた人物といえは……

「なんであいつらいねえんだよ……」

寝ていたはずの遊騎ただ一人。彼は黒いオーラを出しながら部屋の壁に拳をめり込ませて怒りを表現していた。この時、桜は悟った。自分は騙され、置いていかれたのだと。

「おのれ大神イイイイイイ!!」

「ふう……」

某所にあるアパートの一室。その中で一人の少年が息を深く吐いた。八畳ほどの広さで奥にある木製の棚としわ一つ無い布団が敷かれてある以外に何も無いすつきりし

たりビングに、そのリビングに隣接されたキッチン。どちらも綺麗に整頓されていて部屋の持ち主である少年の性格がよくわかる。

少年はリビングの奥にある棚の一番下の扉を開いた。そして、そこにあったものをゆつくりと手に取った。

「……これを使うことになるとはな」

ポツリと呟いた少年は覚悟を決め、静かに部屋を出た。

「よし！ 共にみんなを『捜シ者』より護ろうぞ！」

『にやんまる』、ついで」

「なんでお前らがいるんだヨ!？」

放射性物質を保有する研究所。神田からの連絡を受けて乗り込んだ大神と刻。敷地内にいた『捜シ者』の部下と思われる普通のテロリストを制したことで研究所内に乗り込もうとした二人。だが、そこに本来なら大神の家にいるはずの桜と遊騎が来たことでそれができなくなっていた。遊騎はなぜかゴールドデン『にやんまる』も持っている。

「遊騎！ どーせヤル気ねーんだから帰れヨ！」

「……………あ？ なんか言ったか？」

「い、いえ……………ん？」

遊騎と刻が結果が見えている言い合いをしていると、刻が何かに気付いた。

すると、大勢の人間が建物の陰から出てきて大神たちを囲んだ。防弾チョッキを着て銃を構えている様子を見ると『捜シ者』の部下のテロリストのようだ。

「まだいたんですか」

「チツ。次から次へと……………」

大神と刻が一步前に出た。そして大神は左手から『青い炎』を出し、刻は銃を二丁構えた。ロストしている間の武器なのだろう。

「待て！ 大神！ 刻君！」

桜がそれを止めるために前に出ようとすると、遊騎がポツリと呟いた。

「……………来る」

「え？」

桜が振り向いた次の瞬間、何かは彼らの前に降ってきた。

「なっ!?!」

「新しい敵かヨ!?!」

「ぬう……………」

降ってきた衝撃で辺りは土埃に包まれた。しばらくして土埃が晴れると、そこには先ほどまでいなかった人物が立っていた。

「……………」

「や、夜原先輩……………」

桜は目の前に現れた人物の名を呼んだ。だが、桜は違和感を感じていた。目の前にいる彼はどこか違うと感じた。いつもとはどこか雰囲気が違うのだ。学校での雰囲気とはもちろん違う。しかし、桜が今まで見てきた『コード：ブレイカー』としての雰囲気とも違った。

「んだよ、優。別に来なくてもよかつたのによ。どいてろ。テメーは銃持ってる奴の相手なんかできねーんだ——」

「心配ない。遅れた詫びとして、こいつらの相手はオレがする」  
そう言うのと優はゆつくりと前に出た。それを見て、優の前にいた男が銃を優に向けた。

「それ以上近づくな！ 頭撃ち抜かれないか！」

男にそう言われると優は立ち止った。そして、男の顔をゆつくりと見た。

「……なあ、なんであんたはこんなことしてるんだ？」

「はあ？」

優の問いに男が顔をしかめた。しかし、すぐにその表情はニヤリと下品に歪み、男は大笑いを始めた。

「ギヤハハハ！ 何を言うかと思えばそんなことか！ 決まってるだろ！ どうせ人間は『捜シ者』によって殺される！ ガキもジジイもババアも関係ねえ！ だが『捜シ者』に味方すれば生き残れる！ それだけじゃねえ！ 『捜シ者』と共にこの世を支配できるんだ！」

「……………」

優は黙った。そして、ゆつくりと腰のあたりに右手を伸ばした。

「動くな！ テメー、状況がわかって——」

次の瞬間、男が構えていた銃の先端が銃から離れた。

「な……!?!」

男は状況が理解できずに後ずさった。しかし、何か背中に当たった。何かを確かめようと振り向いた男は再び理解できない状況を目にする。なぜなら、そこにいたのは目の前にいたはずの優だったからだ。

「テ、テメエ!? いつの間に——」

男の言葉はそこで途切れた。優が右手を腰の左側から右上に動かした瞬間、男の体は上半身と下半身に分かれていた。男の後ろに移動した優の手に握られていたのは、月明かりを反射して妖しく光る日本刀。男は日本刀により真つ二つにされたのだ。

「テメエ!」

「死にやがれ!」

「伏せろ!」

他の男たちが優に向けて銃を構え、一斉に発砲した。大神の指示により桜たちは弾丸を受けることはなく、弾丸はすべて優に向かつていった。

「なに!?!」

しかし、優に傷がつくことは無かった。どの弾丸も、彼に届く前にその威力を無くしてしまふのだ。その理由は、優が持っていた日本刀だ。

「クソ!」

男たちは優に向かって発砲を続けた。しかし、いくらやっても優に当たらない。その理由だが、肉眼で見るのは難しかった。しかし、スロー映像で見れば一目瞭然だろう。

男たちの銃弾が優に届かない理由……それは、彼が自らの日本刀で銃弾を斬っているからだった。

「なんだ!?! 一体こいつは何者なんだ!?!」

男の一人が追いつめられたように叫んだ。その言葉を聞くと、優は冷淡にポツリと呟いた。

「お前らが知る必要はない。死ね」

次の瞬間、優が男たちの視界から消えた。正確には、視認できないほどのスピードで移動したのだ。そして、男たちの体は次々に二つに分かれていった。



「目には目を 齒には齒を 悪には無慈悲なる裁きを」

優がその言葉を言い終わることには、大神たちを囲んでいた男たちはただの肉塊になつていた。

しかし、まだ戦いは終わっていない。

「フッ！」

優が短く息を吐き出すのと同時に日本刀を振るつた。一つの金属音が響き、優の足元に真つ二つに分かれた銃弾が転がった。優の周囲にいた男たちは全滅したため、おそらく遠距離からの発砲だろう。

「このクソが！」

遠くの物陰から数人の男が体の半分だけ露わにして発砲した。日本刀は完全な近接用武器。距離を取ることで優の攻撃を無効化しようとしたのだろう。

しかし、それは無駄だった。

「ぐはー！」

「な!？」

突然、発砲をしていた男の一人が銃を手放した。見てみると、露わになつていた部分の肩を押さえて座り込んでいた。肩を押さえている手には血が付着している。どうやら肩を撃たれたらしい。それは見ればわかる簡単な事実。しかし、ここで一つの疑問が浮かぶ。誰がやったのか、というものだ。男たちにとつて敵である優は日本刀を装備しているため、距離を取っている男の肩を撃つのは不可能。仲間の誤射という可能性もあるが、彼らは仮にも『捜シ者』の部下だ。そのような初歩的なミスはまずないだろう。じゃあ、誰がやったのか。答えは簡単だった。

「テ、テメエ……!」

男の一人が見つめる先で、優が静かに構えて立っていた。それはさつきまでと特に変わらない様子だと思えるだろう。しかし、違っていた。構えているものが違った。先ほどまで彼が装備していた日本刀は鞘に納められている。今、彼が構えているのは……月夜を反射して光る拳銃だった。以前、桜の護衛のバイトの時に『壱49』と戦った時に使ったものだ。

「死ね」

まるでおもちゃのボタンを押すように引き金を引く優。彼が引き金を一回引く度、男

たちが一人ずつ倒れた。今度は肩ではない。彼らの脳天を撃ち抜いている。先ほど肩を撃ち抜かれた男もすでに額に穴が開いている。こうして、優を無力化したはずの男たちは一分と経たないうちに全滅した。

すると、一発の銃弾が優の耳元を後ろからかすった。優はすぐに振り向いて銃を構えた。そして、遠距離狙撃用のスコープ付きの銃を構えている男がビルの中にいるのをビルのガラス越しに確認した。優はガラスを破ろうと発砲したが、優が撃った銃弾はガラスによつて弾かれた。どうやら防弾ガラスらしい。

「ハハハ！　ここなら何もできねえだろ！　さつさと死ね！　さつきのガキみてえなことなんてそうホイホイとできるわけがねえ！」

ビルの中にいる男が愉快そうに言った。圧倒的な距離に防弾ガラスという防御手段。男は優が自分を殺せないかと確信していた。そして、絶対の余裕の中で優を討とうと引き金に手をかけ、容赦なく優に向かって発砲した。

瞬間、二発の銃声が宙に響いた。

「なっ！」

銃声が響いてすぐ、金属と金属がぶつかり合う音が響いた。そして、優と男の間に二つの銃弾が転がった。それは優が『巻49』と戦った時にもやってみせた「銃弾で銃弾を撃ち落とす」という技だった。しかし、それだけでは終わらなかつた。

「そんなバカな！ こいつもあのガキと——！」

男が驚愕の言葉を言い終わるより前、男の持っていた銃が爆発した。彼が持っていた銃の銃口に銃弾が吸い込まれるように入っけいき、銃が暴発したのだ。人ですらボールほどの大きさに見えるほど離れた相手が持つてゐる銃の銃口を狙つて銃弾を放つ。そんな普通なら考えられないことを彼はやつてみせた。男の銃の爆発を確認し、彼はゆつくりと口を開いた。

「ま、ラクシヨーだね」

「……刻」

彼……刻は右目に装着した眼帯を外しながら挑発するかのように舌を出した。優は自分の後ろにいた刻を見て、自分が構えていた銃を下ろした。

「二発目はお前が撃つたのか。それに、その眼帯は……」

「オレは左目の視力は8.0あるんだヨ。だから遠くのモノを狙う時は左目だけの方がいいってワケ。ていうか、お前が手こずってから手伝ってやったんだっつ。つか自慢げにしてるとこ悪いケド、銃弾で銃弾を撃ち落とすぐらいオレでもできんだから偉そうにすんじゃないゾ」

「銃口を狙ったお前相手にできるわけないだろ」

「へっ」

「どうやら銃弾を撃ち落としたのは優で銃口を狙ったのは刻らしい。優は刻に「助かった」と言うのと、大神たちのところに歩いていった。」

「待たせたな」

「せ、先輩……。まさか、先輩も日本刀を扱うとは……」

「も?」

「大神も剣術を心得ているのです」

「嗜む程度だと言ったでしょう」

「優が使った武器について話し出す大神たち。すると、刻が頭の後ろに両手を組みながら言った。」

「つーか、お前って刀使うんだっけ。使つてるとこ見たことないんだけど」

「今まで使う機会がなかったからな。今回は必要だと思つて持つてきた」

「しかし、さっきのには驚きました。全ての銃弾を斬るなんて」

感心したかのように大神が言った。先ほどの技も見事なものだが、大神が言うように日本刀で銃弾を斬り捨てるといいうのも規格外の技と言える。大神の言葉を聞くと、優は腰にある日本刀の柄に手を添えた。

「ま、『束脳・反転』を使って腕力を強化していたしな。そこにこの『斬空刀』<sup>ざんくうとう</sup>の切れ味が揃えば銃弾を斬るなんて簡単だ」

「『束脳・反転』？」

優の口から出た聞き慣れない技名に桜は首を傾げた。優はため息をつく、簡潔に説明を始めた。

「通常時以上のリミッターをかけてリミッターをかけた能力のついでになる能力を限界以上に強化させる技……それが『束脳・反転』だ。銃弾を斬り捨てたのは脚力にリミッターをかけて腕力を強化し、銃弾を撃ち落とした時は聴力にリミッターをかけて視力を強化したというわけだ」

「ようするにギブ&テイクということですね！」

「……それは違うと思いますよ。しかし『斬空刀』ですか。空を斬る刀とは随分な名前ですね」

「こいつの切れ味は相当なものだからな。その鋭さは空気さえも切り裂く」

「やるなあ、ななぼん」

五人が談笑していると、突然気配がした。それにいち早く反応したのは大神だった。「ッー！」

大神が建物を見上げた。他の四人も大神が見上げたのを見て同じところを見上げる。そこにいたのは、昼間に大神たちを襲った雪比奈と帽子を目深にかぶり甲に特徴的な刺青がある右手を口元に当てた男――

「……『捜シ者』!!」

大神は歯を食いしばり、その眼に殺気を纏わせた。

## code : 16 『捜シ者』

『捜シ者』に占拠されたと思われる放射性物質の研究所。乗り込んだ大神たちを出迎えたテロリストを蹴散らした彼らの前に、今回の事件の主要人物である者が現れた。

「……………『捜シ者』!!」

「……………」

照明を背にして研究所の屋上に佇む目深に帽子をかぶった細身の男。大神の部屋で見た『捜シ者』の写真と同じく口元に右手を当て、その右手の甲には特徴的な刺青が見えた。帽子を目深にかぶっていることと彼の後ろから当てられている照明のせいで見えないが、見える限りの仕草と容姿だけで彼が『捜シ者』だということはすぐにはわかった。よく見ると、彼の隣には昼に大神を襲った雪比奈が立っている。

「あれが、『捜シ者』……………」

目の前に現れた『捜シ者』に驚く桜。それもそうだ。彼女にとって、『捜シ者』とはずっと気になっていた人物の一人だった。大神が『コード：ブレイカー』になってまで殺したい相手であり、大神の育ての親だという『捜シ者』。それがどのような人物なのか、彼女はずっと知りたかった。



(どんな顔をしているのだ？ どんな顔を……どんな眼を……)

何とかして『捜シ者』の顔を見ようとする桜。彼の顔……眼を見ようとする桜は意識を集  
中させ――

「……………」

「ぬお……」

そうして見えたのは横から顔をのぞかせる遊騎の顔。今まで写っていた『捜シ者』に  
重なるように桜の目と鼻の先に顔を出したのだ。

「遊ぼーや。『にやんまる』もみんなも」

「お前ツ！ 今、どういう状況かわかって――」

「あかん」

場違いな遊騎の言葉に腹を立てる刻。しかし、その刻の言葉を遮って遊騎は桜に注意

を促した。

「あいつと眼合わせたらあかん。合わせた瞬間魂持ってかれるで」

「ゆ、遊騎君……」

最初の場違いな台詞を言った時とは違い真剣さを感じさせる遊騎の表情。遊騎とて曲がりなりにも『コード・ブレイカー』の一人だ。『捜シ者』の脅威も痛いほど知っているのだろう。だからこそ彼は桜を止めた。それが彼女のためだから。

「なあ、ろくばんも——」

そして、『捜シ者』を前にして冷静さを保っていられるか不安である大神にも声をかける遊騎。だが、遊騎の言葉はすでに遅かった。

「……………」

「……………」

無言で『捜シ者』を睨む大神と微笑を浮かべたままそれを受ける『捜シ者』。彼らの間には張りつめたような緊張感があり、遊騎もそれ以上に大神を止めることはできなかった。

「……………大神。これが最後のチャンスだ。戻ってこい、『捜シ者』の元へ」

「何！」

『捜シ者』の隣にいた雪比奈が一步前に出て大神に言葉をかける。反抗の態度を見せ

る大神だったが、雪比奈は構わず言葉が続ける。

『コード：ブレイカー』になって正義になったつもりか？ 無駄なことだ。人は変われぬよ、大神」

「ッ……………」

雪比奈の言葉に黙り込む大神。『悪』である『捜シ者』ではなく、その『悪』を裁く『コード：ブレイカー』になることで自分は正義の立場にある。だが、それは立場だけであり本質は変わらない。雪比奈はそう言いたいのだろう。

しかし、それは大神自身がよくわかっていた。

「……………だからと言って、オレの死に場所はもうお前らの元じゃない」

悪には悪を。自らを『悪』として『悪』を裁き続けてきた大神にとって、自分が『悪』だということは百も承知だった。それは今までの彼の言葉からもわかる。彼は決して自分を正義などとは思っていない。

「どけよ、大神。おしゃべりは……………終わりだヨ！」

大神と『捜シ者』の間に割って入る刻。未だロストしているため、『磁力』ではなく二丁の拳銃で『捜シ者』に攻撃を仕掛けた。しかし、それは意外な形で止められた。

「……………」

「銃弾を素手で……………!?!」

突然、『捜シ者』の前に現れた大柄な人物。その者は刻が放った三発の銃弾を素手で……それも片手でも簡単に止めた。すると、大柄な人物は刻を見て呟いた。

「ほう、知った顔だな」

「……………」

その言葉が終わった瞬間、その人物は止めた銃弾を片手で潰し始めた。そして、細かい鉄となった銃弾を大神たちに向け指の力だけで放った。

「ッー」

指の力だけとは思えない速度で迫ってくるバラバラになった銃弾。当たればそれなりのダメージを受けるだろう。しかし、『磁力』を操って銃弾を止めることができる刻はロストしており大神の『青い炎』は触れたものしか燃やせない。遊騎が『音』の異能で避けさせるか、優が『脳』で強化した力と刀を使って斬り刻むくらいしか方法が無かったが、銃弾はすでにそれすら間に合わない位置に――

「キャッチ・アンド・リリース・アンド……デス・リアクションですよ」

「平家先輩！」

銃弾が大神たちに届く寸前、平家がさつそうと現れ『光』のムチで銃弾を斬り刻んだ。銃弾は威力を失い無機質な音を立てて地面に落ちた。すると、屋上にいた『捜シ者』たちは大神たちに背を向け照明の光の中に進んでいった。

「大神。我々を葬ると言うのなら、この最上階まで来るがいい。その時がお前の最期だ」

雪比奈の言葉が終わると『捜シ者』たちの姿は完全に光に吞まれた。しばらくして照明が消えると、そこには『捜シ者』たちの姿は欠片もなかった。

「くそー！」

瞬間、大神は研究所の中へと通じる扉を乱暴に開いた。そこに普段見せるような冷静さは無く、ただ感情の赴くままに動こうとしていた。

「お、大神……」

「やめておけ。今のあいつには何を言っても無駄だ」

「しかし……」

あまりの迫力に止めようとする桜の言葉にも力はない。優はそんな桜を止めたが、桜

自身もわかつているのだろう。今の大神を止めることはできない、と。だが、それでも見過ごすことはできなかった。だからこそ彼女は迷っている。何とかして止めることはできないかと思っている。しかし、こうしている間に大神は一人で歩を進めた。すると……

「……………」

「……………」

敵ではない。それは確かだ。ただ……異常だった。

歩き始めた大神の前に現れたのは、『ゴルデン』にやんまる』の頭を被った状態でしゃがんでいる遊騎だった。大神は遊騎を避けて進もうとするが、遊騎も同じ方に体を移動させてそれを遮る。逆の方に移動してもまた遮られる。ならばと大神は足早に遊騎の横を少し乱暴に通り返した。すると、遊騎は被っていた『ゴルデン』にやんまる』の頭を取り大神に被らせ走り出した。

「今度はろくばんが鬼やで〜」

「お、おい！　今のあいつにそんなことしたら何するかわかんねーダロー！」

奔放すぎる遊騎の行動に刻は怒鳴り散らした。『捜シ者』のこととなると大神が周りを見ないということは刻もよく知っている。だからこそ、彼は今の遊騎の行動がどれほど危険なことかわかっていた。わかりやすくいうなら、火に油を注いだようなものだ。

そして、大神はゴールデン『にゃんまる』の頭を外し構わず進もうと――

「……今度はどんな遊びを思いついたんですか？ 遊騎」

「ア、アレ……？」

予想と違い、大神はいつもの落ち着いた様子を見せていた。彼はそれ以上進もうとはせず、その場で遊騎と談笑を交わしていた。

「遊騎君……まさか、今のは大神を落ち着かせるために……？」

遊騎の思わぬ形の処置に驚く桜。子供のように見えて、『コード・03』という上の立場にいる者という自覚を持っているのかもしれない。

「いつまで遊んでいるのですか？ 遊騎君」

すると、いつの間にかティーセットを広げていた平家が割り込んだ。なぜか遊騎が持つて来ていたチャャーリー4号が相席していた。

「今回のバイトはあなたに依頼したはず。事態は急を要するんです。勝手についてきた大神君や刻君、もちろん優君とも遊んでいる時間はないんですよ」

「……………」

「遊騎君」

「バイトはしーひん」

黙ったままの遊騎。平家が語尾を少し強くすると遊騎は悪びれる様子もなく我儘を

言った。こういうところを見ると子供なのだから不思議に感じる。

「悪い子ですね。ならば『コード・ブレイカー』をおやめなさい。同時にそれは死を意味し——」

平家の言葉が途中で止まった。原因は遊騎の奔放すぎる行動……では済まないことをしてかしたから。ティーポットに入った紅茶を平家の頭にかけて始めたのだ。

「いやや言うとするやろ。一個上やからつてえらそうやわ。この『眉無し』が」

「バ、バカ！」

ド直球過ぎる言葉を放つ遊騎。平家の恐ろしさをよく知っている刻はガタガタと体を震わせていた。

「ジーザス！」

しかし時すでに遅し。微笑みを浮かべながらだったが、平家は『光』のムチを遊騎を縛り上げた……はずだった。

「つて、コラ！ オレを盾にするナー！」

「音速でかわしましたか」

縛られたのは遊騎ではなく刻だった。大神の言う通り、遊騎は縛られる寸前に音速で刻と入れ替わったのだ。刻にしてはこの上なく迷惑な話であるが。

当の遊騎はというと、平家から視線を外して眉をしかめていた。そして、心から嫌悪



しているような声で言った。

「嫌いや……。にばんも……………エデンも」

そう言うと、遊騎は平家たちに背を向けて走り去っていった。まるでその場から逃げ出すかのように。そんな遊騎を見て桜は心配そうに声を上げた。

「遊騎君！」

「心配いりませんよ、桜小路さん。我々は『捜シ者』のいる最上階を目指しましょう」  
遊騎を心配した桜を平家が制し、彼は視線の先にあつた階段へと足を進めた。……遊騎にかけられた紅茶を滴らせながら。

「……………」

平家の言葉から一同が階段に向かっていく中、優だけはその場から動かずにいた。遊騎が走り去っていった方向をじっと見つめながら。

「何をしているのですか、優君。行きますよ」

それに気付いた平家が彼を呼んだ。これまでの二人の関係を見る限り、優はすぐにこの言葉に従うはずだった。しかし、彼が次に発した言葉は意外なものだった。

「……遊騎と一緒に行って二手に分かれます。そのほうが効率がいいですから」

平家に背を向けたままそう言うと、優は遊騎と同じ方向へ走っていった。逆らつたのだ。今まで誰よりも従っていたはずの平家の言葉を。二人のやり取りを見て、桜はボソ

りと呟いた。

「夜原先輩……やはり遊騎君が心配で……」

「それはありえませんが、桜小路さん」

「え？」

桜の言葉をすぐさま否定する平家。その顔は変わらず微笑みを浮かべており、彼はその表情を崩すことなく空を見上げた。

「優君もわかつているのです。遊騎君は悪い子ですが、『コード：03』の称号を持つ『コード：ブレイカー』だということを」

電灯の明かりのみが照らす薄暗い研究所の廊下。研究所だというのに、その廊下には絵画や銅像が多く飾られていた。いくら明かりがあるとはいえ、薄暗い場所だと気分すら暗くなってくる。さらに場違いさを醸し出している絵画と銅像が気味悪ささえ感じさせる。すると、そんな暗い雰囲気はそぐわないような明るい歌が響いた。

「♪にやんにやんにやんまるみんなのなかま♪こころやさしい——」

「にゃんこのみかた……だろ？」

「……ななぼん」

遊騎の歌っていた歌の歌詞を口にしながら優は遊騎の前に姿を現した。彼の姿を見ると、遊騎は気まずそうに彼を独自の呼び名で呼んだ。優もそれを感じたのか、両手を挙げながら遊騎に声をかけた。

「心配するな。お前を連れ戻しに来たわけじゃない。お前は何をすべきかちゃんとわかってる。あくまで平家さんたちとオレたちで二手に分かれることになっただけだ」

「……そっか」

安心したのか、スツと上を見上げる遊騎。すると突然、何かを思い出したかのように遊騎は手をポンと合わせた。そして、優の目の前まで移動するとポケットからある物を取り出して優に渡した。

「なら、シール貼るの手伝ってや。チャーリー5号、6号、7号……」

ある物……『にゃんまる』のシールを近くにあった銅像に貼りながら奥へと進んでいく遊騎。よく見ると、廊下の壁や絵画にも多くのシールが貼られていた。

「大神の家にあった人形の仲間ってことか。まったく……ん？」

自分が来るまで好き勝手やっていたであろう遊騎の姿を想像してため息をつく優。

そしてシール貼りに参加することなく遊騎について行っていたが、そこで優はある違和感を感じた。遊騎がシールを貼っていった銅像から発せられる、何やら不気味な違和感を。

「8号、9号、10号……ん？」

そして、その違和感は遊騎も感じ取った。いや、感じ取ったというよりは見たのだ。10号としてシールを貼ろうとした銅像。それが小刻みに動いているということに。

「う……」

「おっちゃん、どうしたん？」

「遊騎、これは——」

小刻みに動くどころか声を発する銅像。いや、銅像ではない。一足早くそれに気付いた優は注意を促すよう遊騎に忠告しようとした。しかし、それとほぼ同時に彼女は現れた。

「フフフ……それもすぐに固まるわ。どう？ リリイの特製ドール、いい出来でしょ？ ここの用無し研究員たちを神経毒でカチカチに硬直させてみたの」

「……………」

「……昼間の女か」

「久しぶり、つてわけでもないか。あの時はどうも♪」

遊騎と優の視線の先に現れた女性は、二人にとって忘れるはずもない人物だった。昼間に大神たちを襲撃し、異能『分泌』を操る『捜シ者』の部下の一人であるリリイ。彼女は不敵な笑みを浮かべて銅像……彼女の『分泌』によって硬直させられた研究員に囲まれた状態で、その中の一人に抱きついていた。

すると、彼女を囲んでいた研究員の中の一人の腕がピクピクと小刻みに動いた。さらに、それに合わせて弱々しいうめき声も聞こえてきた。

「う……………く……………」

「あら？ あなた、どうしたの？ ……そつか。リリイの毒がもつと欲しいのね。いわよ。骨の髄まで染み渡らせてア・ゲ・ル♪」

彼に気付いたリリイが、手から『分泌』した毒を未だ小刻みに動く彼の手にかけた。すると……………

「……………」

小刻みに動いていた彼の手から一切の動きが無くなり、それと同時にうめき声も消えた。彼は完全に硬直してしまった。彼もまた、リリイの言うドールにされてしまったのだ。

「フツッ！ 出来上がり！ やっぱリアルなドールのほうが抱きしめ甲斐があるもんね！ アハハ！」

「……ずいぶんと悪趣味なことだ」

「……………」

外道、という言葉がこの上なく相応しいリリーの振る舞いに嫌悪感を示す優と黙り込む遊騎。すると、リリーは笑みを浮かべたまま優と遊騎の方を向き、全身から毒を『分泌』させながらゆつくりと彼らに近づいていった。

「心配しなくても、次はあなたたちの番よ。特にその赤毛のボーヤ。あの時はよくもリリーに恥をかかせてくれたわね。お礼に気持ちよく殺して——」

瞬間、リリーの額に『にやんまる』のシールが貼られた。見てみると、いつの間にか遊騎がリリーの目の前まで移動して彼女の額に手を伸ばしていた。直接皮膚に触れているわけではないので毒を受けてはいないだろう。

「な……!?!」

「……………お前」

「……………」

そして、ようやく口を開く遊騎。それと同時に彼はゆつくりと顔を上げ、リリーの顔を正面から見た。何の興味もないような、そんな冷たい視線で。正反対とも言える煮えたぎるような感情を心の内に秘めながら、彼はストレートな言葉を口にした。

「ウザいわ。やっぱ嫌いや」

## code : 17 遊騎の本気

研究所という場所に似つかない像……リリイによつて作られたドールに囲まれた部屋で今、二人の男女が互いを見合っていた。しかし、それは決して甘く平和的なものではない。二人の間で交わされているのは……もつと刺激的なものだ。

「……………」

「あら、ガキのくせに結構いい顔するのね。シール遊びなんかよりリリイともつと楽しい遊びしましょうよ」

黙つたままりリイを睨みつける遊騎を茶化すリリイ。微笑を浮かべながら遊騎によつて貼られたシールを剥がす。その様子からは何やら余裕が感じられた。

「あかん。お前、せつかんや」

瞬間、遊騎がその場にいる者の視界から消え、辺りに「パン！」という破裂音染みだ音が響く。遊騎が『音』を使って音速移動をしている証拠だ。だが、それがわかつていたところで音速で動く人間の攻撃は止めることは難しい。そして、遊騎は昼の時のようにリリイの後ろを取ろうと――

「――ッ！」

瞬間、遊騎に異常が起きた。全身から力が抜け、酷い目眩に襲われた。それにより移動する先が定まらず、遊騎はリリーの横を通り過ぎてそのまま後ろの壁に激突した。

「遊騎!？」

「……………ん？ なんや、コレ」

遊騎が起こした異常な行動に優は目を見開いた。一方の遊騎は頭から音速で壁にぶつかつたため頭から血を流し、フラフラと体を揺らしながら起き上つた。

「遊騎の攻撃が外れた……………？ いくらなんでもこの距離でそれは……………」

他の『コード：ブレイカー』と比べればまだまだ遊騎と共に過ごした時間は少ない方の優。それでも、遊騎の実力はちやんとわかっている。だからこそ、目の前の現実が信じられなかった。彼が知っている遊騎はこんなミスを犯すような者ではないのだ。いくら普段ふざけていても「悪」を裁く時の態度は真剣そのもの。だから、これは決して自分でやったのではない。優は何があつたのか考え始めた。

それと同時に、遊騎の体には間違ひなく異常が起こつていた。遊騎の視界に映るもの……………そのすべてがかき混ぜた液体のようにグニヤリと曲がっているのだ。目の前にいるリリーも、とても人とは思えないほど体が曲がっているように見える。

「……………なんや、あいつ体やらかい……………な!」

リリーに向かつて口から音波を放つ遊騎。しかし、不安定な視界のせいかな音波は思わ



ぬ方向に向かっていった。

「な……!?!? くそー!」

音波が向かった先にいたのは……味方である優。遊騎に起きた異常について考えてながらも戦いを見ていた優は瞬時に反応し、それを回避しようとして――

「ツ――!?!?」

回避しようと足を一步踏み出した瞬間、優にも遊騎と同じ異常が起きた。視界がドロロに溶け始め、全身から力が抜ける。それにより、優の回避は間に合わなかった。

「ぐあー!」

「ななばん!?!」

遊騎の音波を真正面から浴びて吹っ飛ぶ優。そのまま後ろの壁に打ち付けられ、全身に激痛が走る。遊騎は頼りにならない視界の代わりに耳から聞こえた優の声で彼に何かあったことを悟った。すると、今までずっとただ立ち尽くしたままだったリリイがクスクス笑いながら口を開いた。

「あらあら、どうしたの? 上手く歩けないようね。……フフ、それもそうよね」

「お前の、異能か……」

余裕染みたりリリイの態度。彼女の言葉を聞き、優は自分たちに起きた異常がリリイの異能『分泌』によるものと把握した。すると、リリイは優の方を見て話を続けた。

「正解よ。この密室にはすでにリリーの神経毒で満たされている。リリーの『分泌』は液体だけじゃない。気体もイけるのよ？　ボーヤの異能『音』も、その優の異能の『脳』も素晴らしい異能だわ。けど、こうなったら意味ないわね」

「どうして、オレの異能を……」

「『捜シ者』から聞いたわ。ボーヤの『音』同様、厄介な異能よね。だけど、コントロールを奪ってしまえば能無しの無能玉と同じ」

「誰が……無能玉や！」

「遊騎！　やめろ！」

リリーの言葉に怒りを感じた遊騎は再び音速で移動しようとする。しかし、やはりコントロールできないらしく優が打ち付けられた壁に突っ込んでいった。幸いにも優には当たらなかったが、遊騎にかかるダメージは確実に蓄積される。

「まだや！」

諦めずにリリーへの攻撃を続ける遊騎。しかしその攻撃は全て外れ、そのほとんどが遊騎へのダメージとなった。すでに遊騎は全身が傷つき、体の至る所から血を流している。

「アハハ！　思った通りに動けないってイライラするわよね！　リリーに恥をかかせたバツよ！　じわじわとなぶり殺してあげる！」

「——ッ！」

「遊騎！」

余裕の笑みを浮かべ、リリイは遊騎を蹴り上げた。そして、そのまま隙ができた遊騎に抱きついた。瞬間、遊騎は焼けつくような痛みを感じ、どンドン血が流れていった。おそらくリリイは全身から毒を『分泌』させているのだろう。その痛みは想像を超えるもののはずだ。

絶望的な状況。遊騎はリリイの攻撃で確実に傷つき、優は未だ動けずにいる。そんな中、ある変化が起きた。突然、「ドンドン！」という音が聞こえてきた。

「……？」

それを聞き取った優は音がした方向に視線を向けて意識を集中させた。見ると、そこには意外な人物がいた。

「遊騎君！ 夜原先輩！」

「……桜小路か。無理言っつてこっちに来たのか」

優の視線の先……優たちがいる部屋をちょうど見下ろせる部屋の中には桜と『子犬』がいた。優の予想通り、桜は大神たちに無理を言っつて遊騎と優に合流してきたのだ。その理由は遊騎の気持ちを持ったからだ。ここに来る前、桜は大神にこう言った。「バイトはしないと申していた遊騎が大神の前に現れ、この研究所にまでやってきたのか考え

たことがあるか」……と。

(どうやらあそこには強化ガラスがある。桜小路に毒がいく心配はないだろう。……いや。珍種だから関係ないか。しかし、どうするか……)

桜の思いなど現時点では知る由もない優は冷静に状況を把握した。桜の力でも割れない透明な壁……それが強化ガラスだと考え、とりあえず桜の安全を確認した。その上でこの状況をどうするか考えようとしたその時。リリイが遊騎を優とは反対側の壁に思いきり蹴り飛ばした。

「遊騎！」

「フフ……。とりあえずボーヤは一旦お預け。それじゃ、次はあなたの番よ？ 夜原

優」

「……………」

相変わらずドロドロに溶けたような視界でリリイを睨みつける優。正常ではない視界では彼の女性が苦手という弱点も関係ないようだ。そう考えると優にとっては都合とも言える。

「あなた、大神ほどではないけど結構いい男だったから気に入ってるのよ。だから、一番のドールにしてあげる」

微笑を浮かべ、両腕を広げながらリリイはゆっくりと優に近づく。一步、また一步と

二人の距離が縮まっていき、どんどん逃げるのが絶望的になってくる。しかし、負けじと優は強気な言葉を口にする。

「……フン。女のドールなんてお断りだ」

「あらあら、強がっちゃって。怖いのか？ フフ、大丈夫よ。すぐに気持ちよくなつて――」

「お前、なんでこんなひどいことすんねん」

リリーの言葉を遮って聞こえてきた言葉。それは向こうの壁で上下逆転している状態で倒れている遊騎によるものだった。すると、今まで優の方を向いていたリリーがゆっくりと遊騎の方を向いた。まるで彼の言葉が何かのスイッチになったかのように。

「……酷い？ こんなクズども、どうなったっていいじゃない。それに、酷いっていうのはこういうことを言うんだよ」

そう言うと、リリーは身に着けていたチャイナ服風の服を脱ぎ捨て肌の露出を多くした。そこで彼らの目に飛び込んできたのは、リリーの全身に刻まれた様々な傷。昼に見た時は無かったはずの傷が、しっかりと彼女の全身を支配していた。

「今までリリーを化けもの扱いしてきたクズどもにつけられた傷さ。普段は皮膚を保護する分泌液で隠しているけど全身にあるよ。……子供の頃からずっと。ずっと痛めつけられてきた。親にさえね！」

「……………」

リリーの言葉を聞き、優は目を見開いた。そして、それと同時に彼の過去の記憶が逆流したかのように鮮明にフラッシュバックされた。彼にとつて忘れたい、捨て去りたい過去の記憶が。

——この化け物！

——お前なんかあっち行け！

——信じられない。この子は人間じゃない。正真正銘の化け物よ。

——息子に近づくな！ この悪魔め！

同じ年頃の子供からも、周囲の大人からも、誰からも認められず遠ざけられる。決して望んで得たわけではないこの異能という力。そのせいで、彼は何年も苦しみ続けてきた。そんな吐き気のする記憶が次々と頭に浮かび、優はすぐさま自らの顔を押しさえた。全身を震わせ、過去の記憶に耐えていた。

——お前なんかゴミだ！ 早く死んじやえよ！

——気味が悪い！ 早く私の視界から消えろ！

——私は……………と思うよ。

「……………」

——私は格好いいと思うよ。人よりちよつと強いだけだもん。大丈夫、私が傍にいるから。

「ツー！」

忌々しい記憶の中にふと浮かんだ一筋の光。それは、彼が何度も救われた言葉。彼にとつて唯一の存在である……………『彼女』の言葉——

「そ、そのようなことが……………。しかし、だからつてこのようなことをしていいわけでは……………」

優がフラッシュバックから解き放たれたのとほぼ同時、桜が驚きの表情を浮かべてい

た。リリイによつて語られた彼女の苦痛な過去。桜の性格を考えると、彼女は純粋に悲しく感じただろう。いくら異能があるからといって、そのようなことをしていいはずがない。しかし、だからといってリリイの行動が正当化されるわけではない。桜はそんな葛藤を感じていた。すると、リリイは先ほどまでと違いポツリポツリと言葉を続けた。溢れてくるものから耐えるかのように天井を見上げて。

『毒グモ』、『へび女』、『トリカブト』……。全部リリイのあだ名だよ。『消毒だ』つて言われて頭から漂白剤をかけられたこともある」

「……………えっ？」

明らかに先ほどまでとトーンが違うリリイの言葉。そして、彼女はゆっくりと桜の方を向き、絞り出すように言葉を続けた。

「言葉一つ、行動一つがどれだけ人を傷つけるか。そんなこともわからないクズどもが『悪』じゃないっていうなら何が『悪』なのさ。この世の人間なんて全員死んじまえばいいのさ……………」



その時のリリイの眼は、この上なく哀しい眼をしていた。ひどく、深く……哀しみに溺れた眼を。

「……………」

「……………」

遊騎と優は黙ってリリイの言葉を聞いていた。何を思うでもなく、ただ無表情のまま。すると、リリイは打って変わって心底嬉しそうな表情をした。そして、彼女の前に現れた『救い』について話し出した。

「でも『捜シ者』は違う！ リリイの毒を恐れただけじゃない！ 『素晴らしい』つてキスしてくれたんだ！ この唇に！ だから『捜シ者』の邪魔をする奴はリリイが全員毒漬けにしてやるのさ！ こいつらも！ あんたたちも！ 気が変わったよ！ ボーヤから始末してやる！ ドールになんてしない！ グチャグチャに溶かしてやるよ！」

リリイの右手からドロリとした液体が『分泌』される。彼女は走り、遊騎との距離を

どンドン縮める。そして、自分を見る遊騎の顔を溶かそうと右手を顔に――

「ッ……………」

「なっ!？」

リリーの右手は遊騎の顔を溶かすことは無かった。だが、それは避けたからではない。止められた。遊騎によって、彼の両手によって。リリーの右手が遊騎の顔に触れる直前、遊騎は自らの両手でリリーの右手を止めた。しかし、それは一種の自殺行為だった。その証拠に、リリーの右手に振れている両手の皮膚は溶け、ボタボタと血が流れている。すると、遊騎はまるで何事もないかのように口を開いた。

『怪物』、『生ゴミ』、『親無しミトコンドリア』。それがオレのガキの頃のあだ名や。まだまだあるで。せやから……………」

遊騎から語られる彼の過去。彼もリリー同様、異能のせいで辛い目に遭ってきたのだ。その過去を思い出してから、リリーに怒りを感じてか。彼女の右手を掴む両手に力がかもる。それと同時に出血も多くなるが彼は離そうとしない。そして、彼は強い意志を込めた眼でリリーを睨みつけた。

「めっちゃ痛い思いした分、オレはめっちゃ優しくなったで」

「遊騎君……………」

「う……………うるさい！ 離しなさいよ！ あんたにリリーの何がわかるって……………」

遊騎の言葉を否定し彼の顔を踏みつぶそうとするリリイ。しかし、彼女が踏んだのはただの床。標的である遊騎はいなかった。だが、彼はいた。リリイの後ろに。彼となつて。

(お、音速移動で残像が……)

リリイの後ろ……そこには速さのあまり残像を残す遊騎の姿があつた。どこを見ても遊騎しかない。最早、どれが残像でどれが本物かなどわかるはずがない。

「かましたる。」

「バ、バカな！ こんなことが——ああつ！」

そう言うと、遊騎たちは一斉に殴る蹴るなどの攻撃をした。数はすでに十、二十を超えていた。そして、その中の一つが見事にリリイの顔に命中した。リリイはその一撃で倒れ、遊騎は静かに着地した。

「これだけかましたらどれかは当たんねん」

その瞬間、彼の身に纏っていた服の一部が切り刻まれたかのようにボロボロになつた。それを見て、桜は心配の声を上げる。

「遊騎君！」

「あー、やつぱりや。これかますと衝撃でこうなるから嫌やねん。……けど」

気怠そうに言う遊騎。しかし、彼はすぐに笑みを浮かべた。何かをやり遂げたような

清々しい笑みを。

「ま、えーか」

「う……………く……………！」

「リリイ、気が付いたのだな」

「あ、あんたは……………」

遊騎の一撃で気を失っていたリリイ。彼女が目覚めると、目の前には先ほどまで強化ガラスの向こうにいたはずの桜がいた。遊騎とリリイの戦いが終わった後、桜はすぐ近くに遊騎たちのいる部屋へと通じる階段があることに気付いて降りてきたのだ。またその時、『子犬』が何やらショックを受けていたのは余談である。

「おはようや、『コロまる』」

「い、『コロまる』……………」

「お前の新しいあだ名、だそうだ」

目覚めたリリイを呼ぶ遊騎。しかし、今まで呼ばれたことの無い名前と呼ばれたため

リリイは困惑していた。そんなリリイを見て、優は簡単に説明した。

「あんたはコロコロ笑うから『コロまる』がええと思うし」

「その通りだ。リリイの良いところは異能以外にもたくさんある。これからは『コロまる』をあだ名にしたほうがよいと思うぞ」

「さすが『にやんまる』や。わかってるな」

「おう！」

「にやんち！」と意気投合する桜と遊騎。ちなみに、「にやんち！」というのは「にやんまる」の挨拶のようなものらしい（遊騎曰く）。

「……………」

そんな二人を黙って見ているリリイ。信じられないというように目を見開き、ただ呆然としている。彼女にとって初めてだったのだろう。こんな優しいあだ名は。

すると、遊騎と談笑していた桜がくるりとリリイの方を向いた。気合十分というように勢いよく手を叩きながら。

「さて！ では、リリイ。研究員殿たちを元に戻してほしいのだ。お願いできるか？」

「……………そうね。そうする……………わ！」

そう言つてリリイは近くにあったレバーを動かした。その瞬間、最悪の結果が目の前に映った。

「け………研究員殿たちが！」

リリイによって固められた研究員たちがいた床が突然開き、身動きの取れない研究員たちは一人残らず落ちていった。底も見えず、落下音も聞こえないほど深い穴に。

「アーツハハハハ！ やめるわけないだろ！ そこは20mほど掘り下げてあるゴミ箱！ 研究員なんてペチャンコさ！ リリイは『捜シ者』さえ喜んでくれればいいんだ！ 人なんてどうでもいいんだよ！」

「リ………リリイ！ お前は！」

愉快そうに笑うリリイ。それを見た桜は怒りに身を任せて彼女に殴りかかった。しかし、ある人物によってそれは阻止された。いや………阻まれた。

「この……<sup>クズ</sup>悪<sup>ガ</sup>が」

「マズイ！」

「え……？」

桜が完全に状況を理解する前、目にも止まらぬ速さで遊騎がリリイの目の前まで移動した。そして――

「カハッ！」

まるで万力のような力でリリイの首を絞め、その体をゆっくりと宙に浮かせた。

「……………」

「あ、が……！」

あまりの力にリリイは目を見開き、苦しみに顔を歪ませる。しかし、遊騎が手に込める力は弱まるどころかどんどん強くなっていく。

「<sup>クズ</sup>悪が……！ 目には目を」

しかし、それだけではない。遊騎の体にはある変化が起きていた。体中の血管が浮き出て、どんどん体が赫く染まっていくのだ。まるで彼の怒りを体現するかのよう。

「歯には歯を」

遊騎に掴まれているリリーの首がどんどん蒼く変色していく。もう呻き声も上げられない。こうなると後はこのまま呼吸が止まるのを待つか、遊騎に首をへし折られるかだ。どちらを狙ってかは不明だが、これで終わりとも言うかのように遊騎は力を強め、高々とリリーを持ち上げる。

「悪には——」

「だ、ダメだ！」

今まで驚きで固まっていた桜が動いた。遊騎の腕を振り払い、リリーを苦しみから解放させる。その瞬間、リリーが酸素を取り込もうと何度も咳き込む。どうやらあと一歩のところまで助かったらしい。だが、まだ問題は残っている。目の前にいる……遊騎だ。

（一体、なんなのだ……。遊騎君の体が赫く……。いや、それだけではない。近づくものすべてを手にかけてしまいそうなほどの怒気……。これが、本当に遊騎君なのか……？）

「……………」



ただ無言で桜に背を向ける遊騎。だが、ゆっくりとその顔を桜の方に向ける。おそろく、まだリリイを狙っているはずだ。それを感じ取り、桜も拳を構える。

「……………」

そして、怒気に塗れた遊騎の眼が彼女たちを捉え――

「あかん」

「…………え？」

何が起こったのかわからなかった。ただわかっていることが一つ。体が赫く染まり、怒気に塗れた遊騎はどこにもおらず、代わりに現れたのは――

「ロストしてもーた」

「猫ー!？」

「どうやらここに放射性物質はないようですね」

「大神！」

「研究員たちの無事も確認できました。もう大丈夫です」

「平家先輩……よかったです」

「まったく、とんだ寄り道だな」

「刻君、なんてことを言うのだ」

「へーんだ」

遊騎がロストして猫になった後、先に行ったはずの大神たちと合流した。平家により研究員たちも全員無事となり、リレイも殺されなかった。桜にとってはこの上ないほど満足のいく結果となった。

「大丈夫ですか、優」

「……まだ、毒は抜けきってないがな。なんとか動ける」

大神の言葉を受け、優はふらふらとした足取りで立ち上がる。すると、ロストした遊騎が猫特有の脚力で優の方に乗った。そして、肉球のある手で優の頭をポンと叩いた。

「心配すんなや、ななばん。オレがななばん助けたるし」

「……それはありがたいな」

遊騎の言葉に優は微笑み、軽く遊騎の頭を撫でた。遊騎はそれを払うことなく受け入れている。

「ロストしているくせに何言っているんですか」

「ええやんか」

冷静な大神のツツコミに対して適当な答えを返す遊騎。やはりロストしても遊騎は遊騎らしい。それを見て、大神はため息をつきながら後ろにいる平家に声をかける。

「ハア……平家。このあたりに放射性物質の存在は？」

「感じませんねえ」

「なんで光るんだヨ！」

なぜか光を発しながら答える平家。おそらく辺りを照らすことで放射性物質があるか確認しているんだろうが、はつきり言つて不気味である。

「どこにも何の痕跡がないとは……。『捜シ者』はなぜここを占拠したんでしょうか？ まさかここは——」

大神がある考えを口にしようとした瞬間、上から何かが崩れるような音が響いた。見ると、鉄骨や鉄パイプなど建物を構築しているであろう物が上空から落ちてきたのだ。

「あ、危ない！」

それを口にしたところで落下は止まらない。それどころか落下によってどんどん速くなる。不規則に並び、部屋全体に降り注ぐそれらを避けることなど不可能だと距離が縮むたびに鮮明な絶望となつていく。

「ツ——！」

これから自分を襲うであろう痛みに耐えようと目を瞑る桜。それと同時に大神は左

手から『青い炎』を出し、平家は『光』のムチを構える。そして、徐々に加速していく金属から発せられる音が大きくなることを感じ、それらは地面に落下した――

「……………」

しかし、桜の体には一向に衝撃が訪れない。落下音も聞こえないし、体にも異常はない。恐怖を感じながらも、桜はそつと目を開けた。そこには、自分を見下ろすオッドアイの輝きが見えた。

「正義のヒーローはここに一番のピンチで活躍しないとネ」

「刻君！」

そこに立っていたのはロストから戻った刻。『磁力』で落下してきた鉄骨の類を操り、何も無い場所にまとめて移動させた。すると、刻はポケットから煙草の箱を取り出し一本取りだした。

「やつと戻れたヨ。ま、ちようどよかったかな。……その奴にはちよつとした因縁があつてネ。そいつはオレが斃す」

そう言つて刻は取り出した煙草を啜えた。その刻のはるか上……部分部分が欠損した鉄骨の上に立ち刻たちを見下ろす一人の男。その男に対し、刻は敵意を露わにする。

安心するのも束の間、新たな戦いの幕が開こうとしていた。

## code : 18 リリイの傷

「あんたさ、オレの『顔』に見覚えがあんだって？ そのことについて……詳しく聞かせてもらいたいんだケド」

そう言つて刻は啞えた煙草に火を点けた。それとほぼ同時に、今まで刻たちを鉄骨の上から見下ろしていた男が刻の前に飛び降りてきた。

つい先ほどまで、遊騎とリリイが激闘を繰り広げていた研究所の一室。大神たちと合流して安堵したのも束の間、今度は刻による戦いが始まろうとしていた。その相手である男は、刻より一回り体が大きく、帽子とサングラスで顔を隠している。すると、男はポツリと口を開いた。

「……弱き者に語る言葉など無い」

「ッ——！」

男の言葉を聞いた瞬間、刻の表情が険しく歪んだ。そして、彼は動いた。

「な……………！ と、刻君?!」

突然、先ほど落下してきた鉄骨が男に向かつていった。桜は驚きながらもそれにより起こった衝撃から自分の身を護った。

「……………」

それを行った者……刻は静かにその場に立っていた。片手をポケットに突っ込み、もう片方の手を前に出している。その姿こそ、彼が『磁力』で鉄骨を男に向かつて飛ばしたことの証拠だった。そして、刻は前に出していた手もポケットに入れ男を潰したであろう鉄骨を睨みつけた。

「悪いけどサ、オレはその『弱き者』とかつて言葉が嫌いなんだヨ。ホントはいろいろ聞きたかったケド……まあ、いいや。オレに舐めた口を利いたこと、あの世で後悔しろヨ。……………」

冷たく言い捨てる刻。だが、彼は見逃さなかった。男に向かつていった鉄骨。その中に、一つの人影が立っていることに。

「そのような攻撃……………この仙堂せんどうには通じぬ」

そこに立っていたのは巨大な体格に似合わぬサイズのパーカーを着た強面の男。パーカーのサイズが小さいため腹筋、胸筋といった部分が露出しているが、鍛えているということが一目でわかるほどのものだった。強面の顔に鍛え抜かれた筋肉。この二つだけで彼がかなりの実力者だとわかる。

「へえ、傷一つつかないとはネ。カッチカチな異能ってワケ？ まあ、どんな異能にしろオレの敵じゃあ——」

『暗転』

刻の言葉を遮り、仙堂がそう呟いた瞬間——仙堂が消えた。

「は？ あいつどこに——」

刻が状況を理解しようとし、一瞬だけ無防備となった。その時——

「ガハツ!？」

突然、刻が殴られたかのように身を怯ませ、口から血を流した。

「な、なんだよ、コレ!? クソ! 出てこ——ぐはっ!」

「刻君! 一体どうなっているのだ!?!」

消えた仙堂に見えないところからの攻撃。対抗策が浮かばない刻はただ謎の攻撃を受け続けた。そうしてどんどん傷ついていく刻を見て、桜は慌てて彼が傷つく理由を探ろうとする。しかし、どんなに考えてもさっぱりわからない。

「そうだ! みんなで一緒に刻君を助ける方法を考えるのだ!」

考えた挙句、彼女が出した答えは協力して刻を助けるという実に彼女らしい答えだった。

「大神! 平家先輩! 夜原先輩! 何とかして刻君を——」

ロストしている遊騎を除いた面々の間を呼ぶ桜。しかし、そこで彼女が見たのは予想だにしない光景だった。

「やはり平家さんの淹れる紅茶は絶品です」

「おや、優君。嬉しいですねえ。大神君はどうですか? たまには紅茶もいいでしょう」

「そうですね。いつもはコーヒーなので新鮮です」

「なぬ!?!」



そこで彼女が見たのは、平家のテーブルでティータイムを楽しむ大神たちの姿だった。

「あのー……おくつろぎのところ申し訳ないのですが、刻君が……」

『コード・ブレイカー』たるもの、安易に他人に助けを求めてはいけません。それに、刻君が受けている攻撃の謎もすでに見当はついていきます」

「なんとー」

桜の意見も疑問も一気に解消するような平家の言葉。彼の言葉を聞き、桜は大袈裟なポーズで驚いた。そんな桜とは対照的に、平家は冷静に自分の考えを述べた。

「おそらくあれは仙堂の異能でしょう。わかりやすく言うなら……『表皮』<sup>ひょうひ</sup>、といったところでしょうか。皮膚の表面の色素を周囲と同化させているのでしょう。最初の刻君の攻撃が効かなかったのは皮膚の表面を硬化させたのでしょう。『磁力』を金属に作用させて戦う刻君とは相性がよくありませんね」

「……あいつは自分の異能を過信するあまり相手をナメてかかる癖がある。この程度の相手にやられるのなら、あいつもその程度の男だったということですよ」

「心配せんでも、よんばんがやられたらオレがあいつ斃したるし」

「頼もしいな、遊騎」

冷静に仙堂の異能を分析する平家に刻を冷たく言い捨てる大神。遊騎と優は呑気に

雑談染みた話をしていた。そんな彼らの姿を見て、桜は不満げな顔をした。仮にも同じ『コード・ブレイカー』という同じ境遇の人間がピンチなのだ。助けるのが普通……それが桜の考えだった。だが、『コード・ブレイカー』である彼らにしてみればそれは甘い考えでしかないのだろう。死は自己責任……それが彼らの世界なのだ。

「クソが！」

「……当たらんな」

「ガッ！」

ちやうどその時も刻は変わらず仙堂の攻撃を受けていた。『暗転』により刻の後ろを取り、力の差を見せつけるかのように仙堂はわざわざ姿を見せてから刻を殴り飛ばした。仙堂の攻撃をまともに受け、刻は体を床に擦らせる。力無く地面に倒れる刻。仙堂はそんな彼を冷たく見下ろした。

「他愛もない……。『コード・ブレイカー』とはこの程度のものか」

その時、彼の後ろから声がした。ひどく弱々しい、乞うような声が。

「……せ、仙堂」

「……リリイか」

首だけを動かして声の出元を確認した仙堂の目に映ったのは、倒れた状態で彼に助けを乞わんと手を伸ばすリリイの姿だった。彼女は過去に刻まれた傷を露わにしたままだった。普段やっていると言った皮膚を保護する分泌液すら『分泌』できないほど弱っているのだろう。

「手を……手を貸しておくれよ。リリイはまだ頑張れる……。『捜シ者』が褒めてくれたリリイの『分泌』は誰よりも役に立つ……」

彼女の状態を見ると、その言葉は嘘だろう。今の彼女に戦う力が残っているはずもない。それでも、彼女は戦いたかったのだ。それだけ彼女にとって『捜シ者』という存在は大木のだろう。やっと巡り会えた自分を認めてくれる存在。それが彼女にとっての『捜シ者』なのだ。だからこそ、彼女はどんなになっても『捜シ者』のために戦おうとしている。

「……リリイ」

その気持ちを感じたのか、仙堂はゆっくりとリリイに近づいていった。そして、そのまま彼女の手を取ろうと――

「その汚い手をこつちに向けるな」

「……え？」

仙堂の口から出た言葉……それはあまりにも冷たい言葉だった。リリイは彼の言葉をすぐに理解できず固まる。そして、仙堂はリリイをさらに追い詰めるかのように冷たい行動に出る。

「手に向けるなど言っている、この虫ケラが」

「ああつ！」

『捜シ者』のために戦いたい……そう願って伸ばしたりリリイの手を仙堂は容赦なく踏んだ。そのまま彼女を見下ろし、さらに冷たい言葉をかける。彼女の手を踏む足に力を込めながら。

「貴様の『分泌』など『捜シ者』は時間稼ぎ程度にしか思っていない。お前の処遇は『捜シ者』から一任されているが……」

次の瞬間、仙堂はリリイにとって信じられない……いや、信じたくない言葉を口にした。

『捜シ者』が言う通り、所詮はただの『毒女』か。死んでも困らんな」

その時、リリイの頭の中で過去の記憶がフラッシュバックした。「毒女」と罵られ、傷つけられてきた日々というマイナスの記憶。そして、『捜シ者』からかけられた優しい言葉。だが、そんなプラスの記憶が仙堂の言葉により次々とマイナスに変わっていく。

「う……嘘だ。『捜シ者』が……人間あいつらと同じことを……言う、はずが……」

プラスの記憶がマイナスと変わっていく中、藁にも縋る思いで自らの希望を口にするリリイ。しかし、それはすぐに切り捨てられることとなった。

「貴様はもはや弱くて汚い『毒女』！ 生きている価値も無い貴様など、この仙堂が駆除してやる！ せめてもの慈悲！ 鉄より硬く硬化させたこの拳で、醜い死に顔が残らんようにしてやる！」

仙堂から浴びせられ続ける冷たい言葉。さらに止めと言わんばかりに、彼は鉄のように光を反射する拳をリリイに向けた。そして、彼はその拳を容赦なくリリイに向かつて振りかぶった。

(……ああ)

仙堂の拳が自分を殴る寸前。その一瞬であるはずの時間が、リリイにはひどく長く感じた。その間、彼女の心はある感情に支配されかけていた。

(やっぱり……私は……)

『哀しみ』……という名の感情に――

(いらぬ人間……なん……だ……)

「リリイ――！」

刹那、リリイは自分を呼ぶ声を聞いた気がした。

——それは一瞬だった。しかし、その者の動きは決して速いものではない。ましてや、その者の近くにいた彼らならば簡単に気付き、止めることができるだろう。しかし、彼らがそれをできなかつたのは目の前で起こっているやり取りに意識を奪われていたから。彼らなりに思うところ、感じたところがあつたのかもしれない。

しかし、彼は違つた。彼は気付いた。そして察した。その者がしようとしている行為を。それがどれだけ無謀な行為かを。彼は立場上、それを止めなくてはならなかつた。止めるだけなら簡単だ。その者を止めればいい。腕の一つでも掴めばいい。

だが、彼の選択は違つていた。

「はあー！」

仙堂がリリイに向けて拳を振り下ろされた瞬間、周囲に鉄で鉄を殴つたような轟音が

響いた。その威力がよほど凄まじかったのか、彼が殴った場所の床が大きくへこんだ。今まで床の一部となっていた鉄が仙堂の拳により粉末と化し辺りに舞い上がった。それにより彼の周りの景色が隠れる。だが、それは決して長い時間ではなかった。少しずつ明らかになっていく景色。そして、そこには仙堂の拳によって討たれたリリーの姿が

「……………」

「あ、あんた……!?!」

少しずつ露わになっていく景色の中、リリーの前に座り込む一人の人間がいた。その者を見て、大神は驚きに目を見開きながら、その人物の名を呼んだ。

「桜小路さん……!?!」

リリーの目の前にいる人物……それは桜だった。まるでリリーを庇うかのようにその場に座り込んでいる。大神の声でそれが桜だと気付いた平家と遊騎も彼女の行動に驚いた。彼女は敵であるはずのリリーを庇った。『コード・ブレイカー』ではない彼女にとって敵かどうかはそれほど関係ないのかもしれないが、彼女にとってもリリーは許せるような存在ではないはずなのだ。リリーが研究員を落下させた時も怒りに身を震わせていた。彼女はそんな相手を助けたのだ。

「一体どういうつもりよ！　なんでリリーを！」



リリイが桜を怒鳴り散らす。彼女としても助けられる筋合いが無いのだろう。自分は桜にとつて敵……憎まれて当然の存在。そんな自分を助けるなど、桜の意図がわからなかった。

「……………」

だが、何かがおかしかった。桜がリリイを庇ったということとは、リリイを狙った仙堂の拳は桜が受けているはず。しかし、桜は身構えてもいないし怪我もしていない。ただその場に座り込んでいるだけだ。仙堂とリリイの距離から攻撃が外れたということは無いだろう。そうになると、何があつたのかますますわからない。

「あ……………」

すると、桜は途切れ途切れに口を開いた。目を見開き、目の前の光景が信じられないかのように。それと同時に、今まで周囲を覆っていた粉末が完全に無くなり周囲の光景が鮮明となった。そこでようやく映った真の光景に、その場にいる者のほとんどは目を見開いた。

「……………」

リリイを庇う桜の前に彼はいた。衝撃を防ぐかのように構えた両腕は皮膚のほとんどが裂けて血を流しており、彼が受けた衝撃の強さを表している。

「や……………夜原先輩!」

やっと発する言葉がまとまったかのように、桜は自分とリリイを護った彼……………夜原優の名を呼んだ。

「ななばん!」

遊騎が思わず駆け寄ろうとする。しかし、大神がそれを止めた。ロストしている状態であの場に行けば無事では済まないからだ。だが、彼自身もそれが精一杯だった。同業者（優）が起こした意外すぎる行動に、ただただ驚いていた。

「先輩! 夜原先輩! なぜ……………なぜ先輩が!」

ようやく頭が正常に働きたし、桜は見るからに重症の優の横に移動した。当の優は傷を負った両腕を下げ、荒い息でその痛みに耐えている。しかし、桜に気付くと不機嫌そ

うな視線を彼女に向けた。

「……お前がリリイを助けに行こうとしているのが見えたからな。大体、異能を使う人間相手に無作為に突っ込むな。それにこいつらはオレたちの敵だ。その内輪もめに関わる理由なんてないんだ。この馬鹿が」

「ぬうー！」

優の言葉がストレートに胸に刺さる桜。思わず胸を押さえて俯いた。しかし、そうした時間は短く、彼女はすぐに顔を上げた。……満面の笑顔で。

「……でも、夜原先輩が助けてくれました。私も……リリイも。本当にありがとうございます」

「……ふん」

桜から視線を外し、優は下を向いた。相変わらずな桜に愛想を尽かしたのか照れ臭く感じたのか。それはわからないが、お互いに無事だということが確認できた。

しかし、忘れてはいけない。彼らがいるのは敵の目の前だということに。

「ぐあー！」

「ッ！ 桜小路！」

「桜小路さん！」

「にやんまるん！」

突然、桜が横に吹っ飛んだ。優が彼女の名を呼んだ時には、すでに彼女の体は床に体を擦らせていた。すぐに大神たちが桜の下に向かう。それを行ったのは言うまでもない。仙堂だ。

「『コード：ブレイカー』が助け合いをするとはな。しかもそんな『毒女』を助けるとはまさに愚の骨頂。愚かな『コード：ブレイカー』もいたものだ」

「……桜小路に死なれたら迷惑がかかる。だから桜小路を護った。それだけだ。その女は偶然助けた結果になっただけだ」

桜を殴り飛ばし自分を見下ろす仙堂を、優は不敵な笑みを浮かべながら見上げた。すると、仙堂はニヤリと笑い、再び硬化させた拳を構えた。

「まあいい。お前の屁理屈に付き合う気はない。お前ごと後ろの『毒女』を始末すればいいだけ。役立たずと『コード：ブレイカー』を同時に始末できるなら願ってもないこ

とだ」

「チツ……」

仙堂の言葉に優は小さく舌打ちをした。それは、次の仙堂の攻撃を防ぐ術がないからだ。だが、避けることはできるだろう。両腕はボロボロだが脚はまだ無傷だ。しかし、彼がそれを行おうとはしない。その理由は不明だが、とにかく彼の中には「避ける」という選択肢はないようだった。

「……………」

その様子を煙草を吸いながら横から見ている刻。彼は今、とある光景が頭に浮かんでいた。それは彼の過去。彼が仙堂と戦おうとした理由。……彼が『捜シ者』が関わる今回の件に自ら関わった理由。

それは、まだ刻が幼い子供だったころ。場所はどこかの廃墟。そこにいるのは自分ともう一人。自分と似た顔、似た髪型をした一人の少女。彼女は何かから刻を護るかのようにな腕を広げ、刻を見下ろしている。まるで見守っているかのように。彼女をただただ見上げる刻。そんな刻の頬に、赤い液体がぼたぼたと滴る。それは血。目の前にいる彼女から流れる血。彼女の胸を貫く刃物から滴る……彼女の命。

——見捨てることなんてできない……

——自分を大事にして……

それは彼女からかけられた言葉。彼女の口から発せられた最後の言葉。そして、その先の光景が頭に広がろうとした。しかし……

「——な……」

「ドコ見てやがる。テメーの相手はオレだろーがよ」

仙堂の前に立ち、拳を構えた彼の顔に刻は両手をポケットに突っ込んだままその足をつけた。つまり、彼の顔を踏むように蹴った。突然のことに仙堂は効果も解いてたじろぐ。刻は不敵な笑みを浮かべ、仙堂の前に立ちはだかる。

そして、彼はニヤリと口角を上げた。

「ギヤハハハ！ んだよ、この茶番はサ！ 桜チャンはともかく優のアホは何やってんだっつもの！ 自分で勝手に割って入っという勝手に怪我するとか、ホントトにバカだな！ しかも桜チャンと一緒に敵も助けるとか、そんなだからテメーは下っ端の『コード・07』なんだヨ！ 桜チャンもマジになり過ぎ！ ホントにバツカじゃねーの!?!」

「な………」

仙堂の前で刻は大笑いを始めた。あまりに場違いな行動とその内容に、平家から手当てを受けていた桜は驚く。優は彼の後ろでただその言葉を聞いていた。

しかし、刻の大笑いはそれで終わった。間を置くかのように刻は息を吸い、呟くよう

に言った。

「……ケド、バカもここまで来ると上等だな」

「……………え？」

刻から出た自分を認めるかのような言葉を聞き、桜は思わず呆然とする。すると、刻はポケットに突っ込んでいた手をゆっくりと出した。よく見ると、その手には何かの液体が入った携帯サイズの酒入れのような透明のケースが握られていた。

「だからヨ、仙堂……………」

刻はそれを仙堂に見せつけるかのように前に出した。そして……

「テメエはそろそろ沈みなヨ？」

その両の眼に闘志を込め、刻はケースを握力のみで割った。

「『汞』<sup>コウ</sup>ですか。どうやら、ようやく刻君も少しは本気になったみたいですね」

桜の手当てをしながら平家が眩いた。大神は腕を組みながらその様子をジツと見る。平家が『汞』と呼んだケースに入っていた液体。それはケースの残骸と共に床に落ちていた。すると、刻が自らの手をゆっくりと近づけ、その手から『磁力』を発した。瞬間、『汞』が宙に浮いた。刻の手の上を、まるで無重力状態のように浮いていた。

「コイツで、テメエに似合いの地獄を見してやるヨ」



## code : 19 正義の鉄槌

圧倒的。手も足も出ない。

今の彼の状態を表すならそれらの言葉が妥当だった。彼が絶対の自信を持っていたであろう技は無効化され、為す術も無くただ相手の攻撃を受け入れるのみであった。

しかし、本来ならそれは違うはずだった。今の彼の状態は、本来なら彼が相手に与えるはずのものだった。むしろ先ほどまでは与えることができていた。だが、今となってはそれを破られ彼自身がそれを与えられている。相手が出したたった一手により、彼らの形勢は逆転していた。

彼……仙堂はそれをひしひしと感じていた。

「ほらほら、どうした？ さっきからアンヨが止まってるぜ？」

「ぐ……！」

彼の相手である刻が出した『汞』と呼ばれる液体。刻はそれを操り、まるで水遊びをしているかのように楽しげに闘っていた。それとは対照的に、仙堂の顔は苦痛に歪んでいた。今、仙堂はただ刻の攻撃を受けるしかなかった。

先ほどまで刻に攻撃を与え続けることができた『暗転』。刻が出した『汞』はただの液

体。『暗転』で姿を消した攻撃を攻略することなど不可能に見えた。しかし、実際は違った。刻は『汞』を自分の周囲の床に広げ、少量の『汞』を仙堂の体に付着させていた。すると、不思議なことに刻の周囲に広がる『汞』には『暗転』で姿を消した仙堂の足跡がしっかりと残されていた。まるで雪の中を移動したかのようにはつきりと、彼の位置を示す目印が残っていた。さらに仙堂の体に付着させた『汞』によつて、刻は完全に見えないはずの仙堂の攻撃を読んでいた。

さらに今、仙堂に傷を刻んでいるのも『汞』だ。雪のように仙堂の足跡を残したと思えば今度はまるで金属のように固く鋭くなり、刻はそれを仙堂に向かっていくつも発射した。そして、それに混じつて体に纏わりつく『汞』が彼の動きを制限している。

遊んでいるように見えながらも、刻は仙堂をまるで近寄らせず圧倒的な強さを見せつけていた。

「ええい！ こんなもので……！ オレ様が斃せるかー！」

しかし、さすが『捜シ者』の部下と言うべきか仙堂もそのままではなかった。体に纏わりつく『汞』が届いていなかった左拳を硬化させ刻目掛けて思いきり放った。刻は余裕ぶつているのか仙堂の目の前で立っている。命中する。誰もがそう思っていた。

だが、仙堂の拳は刻の顔に届く前にピタリと止まった。

「おやおや、止まっちゃつタ？ これじゃあ、自慢のパンチも形無しだネ」

「バ、バカな……！ 体が、動かん……!?!」

見ると、仙堂は拳を放った状態の体勢で固まっていた。もちろんそれは彼の意志ではない。彼の意志通りに動いているならば、今ごろ刻の顔は彼の拳で碎けている。しかし、彼の拳は刻に届く前に止まっている。動けないのだ。他から見ればわかりにくいかもしれないが、それは『汞』が原因だった。先ほどの攻撃と同様、仙堂の体に纏わりついていた『汞』が突然金属のような硬度になり彼の動きを制限したのだ。

「くそ……！ なんなんだ、この液体は……！ 一体、貴様は何を……！」

動きを封じられながらも仙堂は刻を睨みつける。そんな仙堂を刻のオツドアイが捉え、口が開き淡々と仙堂が抱いた疑問に答えた。

「言つたろ？ 『汞』だよ。またの名を『汞』みずかね。あんたには『水銀』つて言つた方がわかりやすいかな。オレの『磁力』で形も硬度も自由自在つてワケだよ」

金属の性質を持つという金属元素の一つである水銀。それこそが『汞』の正体だった。最初に刻の周囲に広がっていた『汞』は足跡が残るよう雪ほどの硬度で、仙堂に向けた攻撃はそれこそ金属と同じほどの硬度にしたのだろう。そして、今は仙堂の体に纏わりついている『汞』は攻撃同様に金属のような硬度にして動きを封じたのだ。

刻の『汞』によつて完全に動きを封じられた仙堂。なんとか逃れようと体に入力を入れがびくともしない。すると、刻が眼光を鋭くしながら動けない仙堂にゆつくりと近づ

いた。

「さて、今のオレにはあんたをそのまま絞め殺すことも可能……。でもオレの質問に正直に答えたら助けてやるヨ」

「なに……？」

そうして刻が口にしたのは彼のものとは思えない言葉だった。以前、大神と優と共に行った田畑邸でのバイト。そこでの言葉や普段の彼の態度を見る限り、彼は「悪」である相手には容赦しない。情けなど一片もかけずに裁きを与える。

そんな彼が「悪」である仙堂に対し、条件付きとはいえ「助ける」という言葉を口にしたのだ。意外という言葉しか出てこない。

しかし、当の刻はそんなことを気にする様子も無い。その証拠に、彼はその言葉を訂正しようともせずに話を続けた。

「あんたは言ったよナ？ オレのこの『顔』に見覚えがあるつて。オレと同じ『顔』……いや」

「オレと同じ『金銀妖眼』<sup>ヘテロクロミア</sup>を持つ者を。そんな人は一人しかいねえ……。元『コード・ブレイカー』藤原 寧々音……。さあ、どこでその女<sup>ヒト</sup>を見たか教えてもらおうか」

「……………」

リリイはただ俯いていた。それ以外は何もせず、ただ自分の眼下を見つめていた。すでに流れきってしまったのか、涙も出てこなければ涙ぐんだ声も出てくることはなかった。

——めっちゃ痛い思いした分、オレはめっちゃ優しくなったで任された使命を果たせなかった自分が悔しかった。

——その女は偶然助けた結果になっただけだ敵に命を救われた自分が情けなかった。

——『捜シ者』の言う通り、所詮はただの『毒女』か。死んでも困らんな信じていた人に裏切られたのが哀しかった。

今のリリイの中には、それら負の感情が渦巻いていた。なんの力も無く、失態を晒し、誰から必要とされない自分。そんな自分の存在が無意味だと感じていた。

しかし、まるでそれを否定するかのように同時に浮かぶことがある。それは助けられた後、自分を真つ先に助けに来たと言う桜の言葉だった。

「……リリイ。私はさつき、お前がしたことが心から許せなかった。罪もない研究員殿たちを死なせようとしたのだからな。だが、だからと言ってリリイが死んでいいはずがないのだ。リリイは今、生きている。見捨てられるはずがない。リリイはもつと自分を大切にするべきなのだ。そうすればもつと人に優しくできるし優しくされるのだと私は思うぞ」

「ツ……………」

桜の言葉が頭の中で繰り返され、リリイはキュツと唇を噛み拳を震わせた。今までかけられてきた自分を罵る声は人間がほとんどだった。だから人間が憎くて仕方なかった。だが、彼女は人間だというのに優しい言葉をかけてくれた。信じない。信じられるはずがない。その言葉だけで過去が癒されることなどあるはずがない。しかし、その言葉聞いた時、リリイの目からはまるで溢れるかのように涙が流れた。自分を否定された時に流した冷たい涙とは違い、その涙は温かかった。かつて『捜シ者』に受け入れてもらえた時と同じ……歓喜の涙だった。

「……………」

リリイは視線を動かして真実を突きつけた仙堂を見た。刻によって動きを封じられ、大人しく彼の質問に答えている。刻が言った藤原 寧々音という元『コード：ブレイカー』は以前に『捜シ者』と『コード：ブレイカー』が闘った戦場で一人の少年を庇って殺された、と。

ふと桜の方を見てみると、刻の言葉を聞いた桜が信じられないというような顔をしていた。当然だ。リリイは知らないが、桜にとってその言葉は矛盾していた。彼女はこれまで生きていく寧々音と何度も見ているし言葉も交わしている。寧々音が元『コード：ブレイカー』だということも驚きだったが、何より寧々音が「死んだ」ということが桜

にとつて衝撃だった。だったら今まで自分が話してきた寧々音は何者だったのか。桜の中に新たな疑問が生まれ、リリイはそれを黙って見ていた。

すると、リリイの隣に彼が立った。結果的にとはいえ自分を助けた……夜原 優が。

「そんなに桜小路が気になるか？」

「……そんなことあるわけないじゃないか。気持ち悪いこと言うんじゃないよ」

リリイが答えると、優は大きく息を吐きながら彼女の隣に座った。チラリと見ると、優の両腕にはしっかりと包帯が巻かれていた。桜の治療を終えた平家によつて巻かれたのだ。リリイはそれを見て、改めて自分が優に救われたのだということを感じた。悔しさと情けなさで体が震えた。その震えた体で、彼女は絞り出すように彼に言葉を投げかけた。

「なんで……なんだい」

「……なにがだ」

「あいつだけを助けたいんだったら、最初から止めておけばいいじゃないか……。あいつが動いたのがわかってたんだたらなおさらそうだよ……。なんで……。あんたは……」

震えに耐えるかのようにリリイは両方の拳に力を入れた。それでも体の震えは止まらない。一方、彼女に言葉を投げかけられた優はすぐには答えなかった。しばらく黙り



込み……ポツリと眩いた。

「……都合がよかった、からかもしれないな」

「……都合？」

優から返ってきたのはあまりにも意味不明な答えだった。リリイは思わず俯いていた顔を上げた。見ると優は顔を逸らしたまま……不愛想な態度で続けた。

「完全に、というわけじゃないがお前が過去に受けた傷は……理解できる。だからこそお前に言いたいことがあった。それだけだ」

「……ハッ。『コード：ブレイカー』ともあろう者が『悪』に同情かい？ 『コード：ブレイカー』とは思えない言葉だね。ああ……あんたは正式な『コード：ブレイカー』じゃないんだっけ」

「……………」

リリイの言葉に優は何も言わなかった。すでに何十回、何百回と言われた言葉。彼は黙ってそれを受け入れていた。それとは対照的に、リリイは自分が同情されているというだけでさらに自分が情けなく感じたのか、まるでせき止められた水が一斉に流れだしたかのように言葉を溢れさせた。

「リリイに同情なんかいらぬよ……。というより、できるはずがないんだよ。リリイの気持ちなんて誰にもわからない……。あんたにわかるのかい？ 実の親にも存

在を否定され、信じていた人にも裏切られた……。そんなリリーの気持ちが……。あんなにかにわかるっていうのかい!? あんたなんか——!」

瞬間、リリーの言葉が途切れた。理由は簡単だった。リリーの隣に座る優……。彼がリリーの顔を鷲掴みにしたのだ。突然のことに混乱したりリイだったが、今の自分の状況が彼女の中の記憶と重なった。昼、ファミレスで大神を襲撃した時に部下の一人を容赦なく裁いた優。頭を鷲掴みにし、容赦なく床にその顔をめり込ませたその姿が浮かび、リリーは思わず息を呑んだ。それに呼応したかのように、体の震えがどんどん強くなっていく。

すると、優は相変わらず顔を逸らしたまま、声のトーンを一層低くして言った。

「勘違いするな。『悪』に同情するような腐った心は持ち合わせていない。お前は……裁くべき『悪』でしかない。そんなお前に誰が同情なんてするか……」

「——ッ……!」

そう言うとう優はリリーの顔を鷲掴みにしていた手を離れた。リリーは再び力無く俯き、一層強くなつた体の震えに耐えていた。

優はそんなリリーに目もくれずに立ち上がった。そして、彼女の隣を立ち去——

「……………だが」

「……………え？」

立ち去った。そう思った。しかし違った。立ち上がり、リリーの横を通って立ち去っていく。そうすると思われた優だったが、実際の行動はそれとはまるで違っていた。

今の彼は、リリーの横に立ち……………彼女の頭に優しく手を置いていた。そして、彼女にしか聞こえないほど小さな声で呟いた。

「今までよく耐えた……………それだけ言っておく」

その声は先ほどまでとは違い、ひどく優しさを感じさせる温かな声だった。

「な……なん、で……」

リリーの声が震えた。いくら平常を装うとしてもできなかつた。何かが中から溢れてきそうだった。それを押し止めているかのように、彼女の声も体も震えていた。優はリリーの頭に手を置いたまま、ゆつくりと言葉を続けた。

「……オレが子供の頃、たった一人だけオレを受け入れてくれる奴がいた。オレはそいつに何度も言われてきた。『よく頑張ったね』ってな……。オレはお前に同情なんてしないし許す気はない。だが、お前が今まで必死に生き抜いてきたことは否定しない。だから、オレはお前にこれを言いたかつた。……それだけだ」

くしゃくしゃと少し乱暴にリリーの頭を撫でる優の手。その時間はとても短かつたが、リリーには全てがスローモーションに感じた。そして、優の手が離れ優の足音が耳に響くと、今まで押し止められていたものが一気に溢れだした。まるで洪水のように……彼女の目から涙が溢れ出た。

(なんで……)

顔がぐしゃぐしゃになった。いくら止めようとしても止まらなかつた。しかし不快な感覚は無かつた。むしろ、何か清々しさに似たものを感じる気がした。

(なんで……その言葉を最初に言ってくれたのがあんたなんだよ……！)  
声にならない泣き声を上げるリリイ。体の震えは……いつの間にか止まっていた。

「そうかヨ……。テメエの話聞いて大体のことはわかったぜ」

『汞』で動きを封じた仙堂を前にし、刻は眩いた。その眼光はこれまでに無いほど鋭く、揺るぐことない覚悟が感じられた。

「ガキのオレを庇ったあの女を殺したあの癡痕の男……。そいつは『捜シ者』直属の親衛隊である『Re—CODE』の03……。『捜シ者』に力を認められた異能のスペシャリストらしいが……。そんなことは関係ネエ……。必ず……。この手でブツ殺す……。！」  
ギリツと歯を噛み締める刻。もはや彼の眼光は目の前の仙堂に向けられたものでは

ない。寧々音を殺したという癍痕の『Re—CODE』03に向けられていた。

しかし、それが油断に繋がったのか状況は一変した。

「クク……残念だがそれは無理だ。なぜなら……お前はここでオレに殺されるのだからな！」

仙堂がそう叫んだ瞬間、今まで『汞』によつて動かすことができなかつたはずの右腕が大きく振りかざされた。それとほぼ同時に大量の気体が仙堂の体を包み、その中から現れた彼の左手が刻の首を掴んだ。

「ハハハハ！ オレがわざわざ長話に付き合つてやつたのは全てこのためだ！ どんなに硬度を高めたとしても所詮はただの『水銀』！ 『熱化<sup>ねっか</sup>』させた『表皮』の前ではただただ気化して消えるのみ！ そして……貴様もな！」

次にそこにあつた光景……。それはあまりにも簡単で、あまりにも信じられない光景。

仙堂の右拳に貫かれ、力無く俯く刻の姿だった。

「と、刻君！」

桜が驚きに目を見開き叫んだ。しかし、いつもの憎まれ口は返つてこない。先ほどあんなに自分を笑つたその口から声が聞こえてこない。聞こえてきたのは、勝利を確信した仙堂の言葉だった。

「ハハハ！ やはり『コード・ブレイカー』はクズだな！ あの女も貴様も下らん正義の名の下、弱者を護って死んだクズでしかない！ この世は強気こそが正義！ 勝者こそが掟！ 待っている！ 今すぐ貴様の仲間も皆殺しにしてやる！ そしてオレも『Re-CODE』の称号を手にするのだ！」

豪快な笑い声を部屋に響かせる仙堂。目の前の光景に桜は震え、大神たちは黙ってそれを見ていた。そして、『熱化』された『表皮』によって刻の体はみるみるうちに消え――

「……………そいつは聞き捨てならないナア。誰が……………クズだつて？」

「なに!？」

「刻君！」

仙堂の後ろ……最初に刻が放った鉄骨の上には新しい煙草を唾える刻の姿があった。それに気付くと同時に、仙堂が拳を貫かせていた刻が『水銀』の塊へと変わった。彼は仙堂の突然の反撃を『水銀』の変わり身を使うことで回避した。拳が完全に貫いているため、仙堂は再び動きを封じられた。

「おのれ……！　だがこんなまぐれは続かんぞ！」

「ああ、そうだな。だって……もうアンタ死んじやつてんだもんネ、仙堂サン」  
「な……!?!」

その瞬間、仙堂の顔の一部が盛り上がった。そして、その部分のみ皮膚が裂け血が飛び散り、そこから小さな粒が出てきた。自分の体に起きた異常に、仙堂は訳がわからずただ目を見開いていた。

「さつきアンタが気化させてたつぷりと吸い込んだ『水銀』だよ。トリツクは簡単。ア  
ンタの体の中にある『水銀』を、オレが『磁力』で操って中から外に出すだけ。外側は  
ご立派な『表皮』で防げてても内側は無理みたいだね」

「あ……あ……」

淡々と語られる刻の言葉に仙堂は目を見開いたまま恐怖していた。いつ来るかわからずどうすることもできない自分の体の中からの攻撃。仙堂はそれに恐怖し、大きな体



を震えさせながら刻に尋ねた。

「お、おい……。お前、さっきオレに言ったよな？ 正直に言えば助けるって……」  
それは刻が言ったとは思えないほど珍しい言葉。仙堂はそれを最後の望みと思つたらしい。そんな仙堂に対し、刻は啞えた煙草を口から離して大きく煙を空中に吹き出した。

「……ハッ」

そして笑顔で……冷酷に告げた。

「嘘に決まってんジャン……。オレが『悪』を許すワケねーだろ」

そう言つて刻はゆつくりと右手を前に出し、そこから『磁力』を発生させる。その『磁力』は仙堂の体の中にある『水銀』にあつという間に伝わり――

「目には目を」

仙堂の顔を――

「歯には歯を」

仙堂の体を奇形に変化させ――

「悪には正義の鉄槌を」

刻が手を握った瞬間、一齐に『水銀』が仙堂の全身を突き破った。

「姉ちゃんを侮辱する奴は絶対に許さねえ……。瘢痕の『Re—CODE』03……。必ずお前を沈めてやるヨ……。！」

「よんばん……」

仙堂の無残な死体を背に、明確になった標的を斃す覚悟を改めて固める刻。そんな刻を遊騎はジツと見上げていた。そして、彼に勝利を祝う言葉を――

「はよせーや。もうみんな上の階行ったで」

「ハ!? ちよ……! 薄情者オオオオオオ!!」

「やかましいわ」

——かける者は誰一人としていなかったとき。

## code : 20 優の過去

— 無い

— あって当然のものが

— そこには無かった

そこには音が無かった。そこにあるもの、起こったことを考えればそこは音があるはずだった。だが、それは決して自然的な音ではない。そこにあるべきなのは、  
“悲鳴”  
という名の人工的な音だ。

そんな環境の中、少年はそこにいた。

少年はただ見つめていた。目の前の光景を。……惨状という名の光景を。

少年はただ感じていた。今、自分がいる空間の全てを。……むせ返るような血の匂いの中で。

「……………」

今の彼から見れば、そこにいたのは二人と一つだった。二人はもちろん彼を含めた人。一つというのは、元は人だったもの。今、彼の目の前で力無く横になっている女性。それがこの空間にいる一つだ。

なぜ女性は力無く横になっているのか。なぜ目の前に見える彼の掌は血に染まり、その体の至る所に返り血を浴びているのか。

なぜ……女性の首に少年の手と同じほどの大きさの血の手形が残っているのか。

「……………心配はいらない。大丈夫さ」

何も言わず血に染まった自分の掌と女性を見る少年の肩にもう一人の人間が優しく手を置く。彼を包み込むかのように優しく、ただ優しく。

思えばそれで少しは救われたのかもしれない。救いを感じたのかもしれない。その人は少年にとってそれだけ温かい存在だったから。それを感じ取ってか、もう一人は優しく言葉をかけ続けた。

「お前にはオレがついてる……」

少年の方に置かれたもう一人の手。その甲に刻まれていたのは十字架のようなタトゥーだった。

そこで少年……現在の大神　零の意識は現実へと引き戻された。

「大神！　聞いているのか、大神！」

「……え？」

今の自分が置かれている状況の影響なのか、過去の記憶が頭の中で繰り広げられていた大神を現実に呼び戻したのは彼を呼ぶ桜の声だった。それに気付いた大神は頭の中

で繰り広げられた過去の記憶を振り払い、声が出た方を向いた。そこで彼が見たのは、何とも奇妙な光景だった。

「頼む！ ちょっと助けてほしいのだ！」

大神の目に映ったのは、手足だけでなく体の至る所を包帯でぐるぐる巻きにされ身動きが取れず、平家に運ばれている桜の姿だった。よく見ると、胸元にはさながらラッピングのようなリボン結びがされていた。一体誰がこんなことを……などという質問は野暮というものだ。こんなことをするのは一人しかいなかった。桜は、今度はその人物に対して口を開いた。

「平家先輩！ 私はもう痛いところはありません！ どうか包帯を解いてください！」

「いえいえ、まだまだ安静が必要です。それにこうでもしないと、あなたは真っ先に刻君を止めに行つてしまうでしょう？」

「ぬう……！」

桜を縛つた張本人……平家は桜の言葉を完全に論破した。平家の言う通り、まだ包帯を取るのには実際の所早いのだ。

そもそも、桜が包帯をした理由は先ほどの仙堂による攻撃のせいだ。リリイを助けようと仙堂とリリイの間に飛び込んだ桜。その時は優によって無傷で済んだ。ただその

後、彼女は仙堂の攻撃によって吹っ飛ばされた。吹っ飛ばされた衝撃と肌を擦る硬い床。それらが原因となり、桜は少しとは言え怪我を負ったのだ。その包帯はそのためだ。まあ、怪我をしたのは実際のところ細部の切り傷や擦傷程度なので桜の包帯のほとんどは治療ではなく個人の趣味で縛られたと思つていいだろう。縛つた本人にしてみれば桜の勝手な行動を制限することができるので一石二鳥だろうが。

これだけでも十分なくらい奇妙な光景だったが、それ以外にも奇妙に見える理由は他にあつた。

「と、ところで先輩。そろそろ解いてあげてほしいのですが……」

——ガン！

「我儘ですね、桜小路さん。あなたの包帯はまだ解きませんよ」

——ゴン！

「いえ、私ではなくてですね……」

——ガッ！

会話の所々に入る何か体がぶつかるとかのような音。それこそが大神の目の前に映る光景を奇妙に感じさせるもう一つの理由だった。桜を運ぶためにそつと彼女の体を支える平家の手。その二つある手の内、一つからはある物が伸びていた。それは彼の肩を通し、彼の背後へと繋がっている。その正体は……光り輝く『光』のムチであつた。背後



まで伸びるムチの先……そこには桜以外の人物が縛られていた。その人物とは……

「先ほどから平家先輩が引きずったりしていろんな物にぶつかってしまっている夜原先輩の方を……」

——ゴチン！

今の状況を簡潔に説明するところだ。刻と遊騎を下に置いて上へと向かったのは大神、桜、『子犬』、平家、優の四人と一匹だ。大神は一人で黙って歩いており、『子犬』はその大神の後についてきていた。問題はここからだ。怪我をしており、刻を止めに行く心配があった桜を治療に乗じて趣味が混じった束縛をして丁寧に運ぶのは平家。残った一人である優は、その平家によって『光』のムチで運ばれていた。きちんと抱きかかえられた桜と違い、優は直接床に体をつけ引きずられている。そのため、平家が歩く度にその体には汚れがつくし、何かと物にぶつかる。さらに、今彼らがいるのは上へ

と登る階段。平家が登る度に優は何段か下の段にその体をぶつける羽目になっていた。先ほどから続く音はその時の音だ。

「優君なら大丈夫ですよ。なにせ『コード：ブレイカー』ですから」

優を心配する桜に対して答えになつてないような答えを返す平家。その間にも平家は階段を上り、その度に優はその体をぶつけていた。

「それに、優君がこうなつたのは自業自得と言える部分があります。言つてみればこれはそれに対するおしおきなんですよ」

「……私は、そう思いません」

何かと慕つてきた優を無下に扱い、さらに冷たくあしらうような平家の言葉に桜は目を伏せた。それと同時に、彼女の頭の中にはある出来事が再生された。今から数分前……まだ刻が仙堂と戦っていた刻の事である。

そして、その時に起こつたある出来事が優をこのような状態にさせた。

「ああ、そうだな。だって……もうアンタ死んじゃつてんだもんネ、仙堂サン」

対峙する仙堂の死を告げる刻。この後、彼は仙堂の『熱化』させた『表皮』の影響で気体と化し、仙堂が気付かぬ内に吸い込んだことで内側への侵入を許した『汞』によって彼への止めを刺す。これはその少し前の話だ。

「刻君……大丈夫だろうか」

「もう彼の勝利は決まったようなものですよ、桜小路さん。だから心配することはありません。……それよりも、今はこっちの方が大事ですから」

刻の心配をする桜に対し、平家は冷静な態度ですべきことを進めていた。今、彼らは刻と仙堂が戦っている場所から少し離れた彼らから見て陰になっている場所にいた。そこにいたのは戦っている刻とそれを見守る遊騎を除いた大神たち。そして、嚴重な防護服を着た二人と彼らによって手錠をかけられるリレイがいた。

刻と仙堂の戦いの途中、平家は「エデン」に連絡をしてリレイを連行する準備を進めていた。本来なら仙堂によって殺されていたであろう彼女だが、桜と優によってその命は救われた。だが、それで終わりかというところではない。生きている以上、彼女には罰を与えなくてはならない。彼女は『コード：ブレイカー』が裁くべき「悪」の一人なのだ。さらに『捜シ者』の一味の一人ともなれば内部情報を聞き出すことも可能かもしれない。そのためにも、彼女は「エデン」に連行する必要があるのだ。

そうして平家が連絡して数分後、リレイの異能を警戒したのか防護服を着た「エデン

“のエージェントが到着した。つまり、今はリリイを連行する真つ最中というわけだ。

「……………」

手錠をかけられたリリイは沈んだ表情をしていた。無理もない。これから自分の身に起こるのか。それを考えるだけで恐ろしいだろう。

「では、お願いします」

手錠をかけたことを確認した平家がエージェント二人に話しかける。するとエージェント二人は黙って頭を下げ、リリイを外に連行しようとした。すると……

「ま、待つとくれよ！」

突然、リリイが大声を上げた。その声に彼女を連行しようとしたエージェント二人は止まり、大神たちもリリイに視線を向けた。リリイは誰とも視線を合わせることなく黙っており、顔を少し赤らめていた。そして、唐突に口を開いた。

「逃げようなんて思っていない……。でもその前に……夜原 優と話をさせておくれよ」

「……………」

あまりにも唐突なリリイの提案。その提案にほとんどの人物が目丸くしていた。名を呼ばれた優も同様だ。だが、そんなことが許されるはずが無かった。普通の犯罪者ならまだしも、彼女は異能を用いる危険な人物だ。そんな彼女を手錠付きとはいえ自由

にさせることなどできるわけがない。

しかし、思わぬ人物が彼女を支援し始めた。

「うむ！ 思う存分話すがいい！」

「桜小路さん！」

桜だった。何の決定権も無い彼女が、真つ先にリリーの提案を受け入れていた。だが、彼女らしいと言えば彼女らしい。そのためか、彼女を止める大神の言葉もかなり早かった。

「なに勝手に許可してるんですか。あなたにはそんな権利なんてありません。無視して早く連行するべきなんですよ」

「馬鹿者！」

「ッ!?!」

彼女を止めようと言葉を並べる大神。そんな大神の言葉は、桜の一際大きい声によって一瞬で力を無くした。その迫力に、大神たちも思わず怯んでいた。

少しの静寂の後、桜はポツリと呟くように口を開いた。

「リリーは……夜原先輩にお礼を言おうとしているのだ。『助けてくれてありがとう』、とな。リリーは変わろうとしているのだ。他人に優しい自分に。そのリリーを止める権利は誰にもないはずだぞ」

「……………」

真つ直ぐすぎる桜の言葉に、大神は何も言えなかった。彼女は信じていた。自分の言葉聞いた彼女が早くもその通りに変わろうと努力しているのだと。そんな保証はどこにもないはずなのに、彼女はリリイを少しも疑っていなかった。

「ハア……。なんであなたはそう簡単に人を信じられるんだか……」

そんな桜に内心呆れながら、大神は大きいため息をついた。そして、面倒事を押し付けるかのように平家に尋ねた。

「どうしますか、平家」

「……………桜小路さんの熱意に免じて、一分だけ許しましょう」

「ありがとうございます！ 平家先輩！ ほら、リリイ！ 早く夜原先輩のところに行くのだ！」

リリイの提案を受け入れた平家に、桜はリリイ以上に感謝を示していた。そして、リリイを優のところに行くよう催促した。

「ふん……………」

そんな桜に対し、リリイは鼻を鳴らしながらさつきと歩いていった。以外にも後押しされたことが照れ臭かったのか、その顔を赤く染めながら。

「……………」

「……………」

大神たちから少し離れた場所。そこで優とリリイは互いに無言を貫き通していた。優としてはすでに言いたいことは言い終えたため特に話すことはないから仕方ないとも言える。だが、それに対してリリイはどう言おうか迷っている様子だった。だが、一分という制限時間があるためそう長く考えることはできない。それを改めて感じたのか。リリイはゆつくりと優を見上げ、彼にしか聞こえないような声で呟いた。

「驚いたかい？ 最後に話があるなんて言われてさ」

「…………オレたちは急いでいるんだ。言いたいことがあるなら早く済ませろ」

「フフツ…………。会った時から思ってたけど、随分とぶつきらぼうな男だよ」

少し前に優からかけられた言葉のおかげか柔らかい態度で話すリリイと相変わらずぶつきらぼうな優。そんな対照的な二人の会話は、そこで一時中断した。話が続かないのだろう。片方は話がしたい者でもう片方は話などしたくなさそうな者だ。そううまく続くわけがない。しかし、その間にも刻々と制限時間は終了に迫っている。

「…………耳」

「なに？」

「耳……貸してほしいんだよ。他の奴らには、ちよつと聞かれたくないからさ……」

そう言うとりリイは目を逸らし、頬を赤らめた。彼女の言葉を聞いた優は、眉をしかめて小さく息を吐いた。断られる……。そう思つた瞬間だった。

「……早くしろ」

ぶつきらばうな態度を崩さず、優はリイの要求に応じた。顔は真横を向き、片耳だけをリイに向けていた。彼女が言いやすいよう、わざわざ腰まで屈めている。

「……フフ。あんたって、不器用な男だね」

「生まれつきだ」

否定的な様子を見せながらも優しさを見せる優。そんな優を見て、リイは思わず小さな笑みを浮かべていた。それに対し、優は不機嫌そうに目を閉じていた。まあ、彼の場合は目を合わせないためでもあるだろうが。

「面倒な要求を聞いたんだ。話はこれで終わりに——」

瞬間、柔らかいものが優の頬に当たり、彼の言葉はそこで途切れた。



「——でも、そういうところは嫌いじゃないよ」

優の頬……そこに当てられたリリイの唇はそつと離れ、彼の耳元でそう囁いた。

「い、言つとくけど勘違いするんじゃないよ！ これはあくまでさつき助けてくれたことへの礼みみたいなもんなんだ！ 別に個人的な感情なんてないからね！」

囁いたと思つたら顔を赤くしながらリリイはそそくさと離れていった。一方の優はというと、後ずさるるように腰を伸ばし、目を見開いた状態で先ほどまでリリイの唇が触れていた頬を押さえていた。彼はまるで固まっているようで、その視線は目の前にいるリリイに向けられていた。それに対し、リリイは照れているのか視線を合わせようとはしなかった。

「……でも」

すると、リリイはその状態でポツリと呟いた。優は相変わらず固まっていた。それでも構わないのか気付いていないのかわからないが、リリイはそのまま続けた。

「リ、リリイが自分からこういふことしたのは……あんたが初めてだけどさ」

「『捜シ者』の時は向こうからしてくれた」とリリイは続けたが優の耳には届いていなかった。いや、もしかしたら最初の言葉も届いていなかったかもしれない。

その証拠に、優にあの症状が現れ始めた。体は相変わらず固まったままだったが、その顔は赤くなり始めていた。

「お、おま……今、キ、キ、キキキキキキキ……いー」

キス、と言いたいのだろうが今の優には難しかった。呂律が回らず、その間にも彼の顔は真っ赤になっていく。そう、これは以前に田畑邸であったことと同じ。それを周囲が理解する前に……

「ゆ、優!?!」

「夜原先輩!?!」

優はまるで電池が切れた玩具のようにそのままの体勢で後ろに倒れた。もちろん受け身など取っているわけもない。目の前にいたリリイと遠くで見ていた桜が駆け寄っ

たが、優は完全に気絶していた。

そこで桜の回想は終了し、意識は現実へと戻る。桜にしてみればリリイと優の会話は聞き取れなかったため二人に何があったのかはわからない。当の本人であるリリイは連行され、優は未だに気絶している。何があったか聞こうにも聞ける相手がないのだ。そのため、桜は自分が知る限りの状況から何があったか予想するしかなかった。

そして、彼女の頭に浮かんだ予想というのは……

「信じたくないが、リリイは最初から夜原先輩を斃すつもりだったのかも……。だから二人だけの状況を作って何らかの方法で先輩に毒を……！」

「……………」

俯き、悔しそうに拳に力を入れる桜。ちなみに、彼女が回想している間に平家が包帯による拘束を解いたので今は自分で歩いている。包帯も必要部分にしか巻かれてない。自由になった体全体で自分の感情を表現する桜を、大神は呆れた目で見ていた。実を言う、彼にはわかっていて。いや、正確には彼と平家にはわかっていて。優が気絶した

本当の理由を。

（真つ赤に赤面した顔にあの倒れ方……。間違いなくあれだな）

（何かの拍子に目を合わせたのか、それとも別の何かか……。本当のことを聞くのが楽しみですね）

少しとはいえ優との付き合ひがある彼らにしてみれば当然のことと思える。二人は何があつたかまではわからずとも、優が氣絶した理由は彼の女性に対する苦手意識のせいでとしつかりわかつていた。だが、それを桜に言おうとはしない。その理由は以下のとおりだ。

（まあ、面倒だしいいか）

（面白いのでいいでしょう）

と、何とも彼ららしい答えだった。そんな二人の心中を察することも無く、桜は架空の真実に対して悔しさを示していた。

すると、桜はハツとしたように目を見開き、唐突に平家の方を向き尋ねた。

「先輩！ やはりリリーの罪は重くなるのですか!? まさか死刑なんてことは……

！」

「桜小路さん、落ち着いてください。リリーの罪に關しては『エデン』に委ねましたので私にはわかりません。……ただ、研究員たちの体から毒を抜けば多少は罪が軽くな

るかもしれませんが」

「そうですか……」

落ち着いた平家の回答を聞き、桜は俯いた。わからないという不安が残る回答にシヨツクを感じたのだろう。……そう思った瞬間だった。

「でも、きつと……きつとリリイは毒を抜いてくれるのだ。研究員殿たちからも、夜原先輩からも」

「……………」

優に毒を仕込んだ（と桜は思っている）リリイを信頼しているような言葉を口にする桜。まだ彼女は信じていた。そんな彼女を見て、大神は小さくため息をついた。なぜそこまで信じられるのか……そう思いながら。

「……で行き止まりだな……」

その後、大神たちは階段を上り上を目指した。そして、扉が設置された踊り場に到着

した。さらに上へと続く階段はないため、そこが今の時点で最も上の場所だと言える。ちなみに、優は未だに平家に引きずられたままだ。どうやら本当にこれが彼に対してのおしおきらしい。桜は何度も止めようとしたが、その度に平家に論破されて現在に至っていた。

「やはり、この先にも『捜シ者』の手先がいるのだろうか」

「関係ありませんよ。誰が来ようとオレが燃え散らします」

大神はそう言うと、一歩前に出て扉のドアノブに手をかけた。そして、そのまま一気にドアノブを回して中に入って――

「ぐっ!？」

「ぬう!」

大神が扉を開けた瞬間、突然の突風が彼らを襲った。あまりにも突然のことに大神たちは一方的に守りの姿勢に入った。

数秒ほど続いただろうか。突風は徐々に勢いを弱らせ、何事も無かったかのように止んだ。そして、風が止んだのとほぼ同時。若い男の声が大神たちの耳に届いた。

「待つてたぜ……『コード・ブレイカー』」

そこで大神たちの視界に映ったのは、部屋中央に立つ見知らぬ男。真つ白なシャツに真つ黒な上着を羽織り、ベルトの所々にチェーンが付けられたジーパンを着ていた。

男にしては長いサイドから覗く耳にはピアスを付け、首には黒いチョーカーを付けている。

『捜シ者』が占拠した研究室の一室にいる見知らぬ男。今の状況を考えれば、少なくとも彼が味方ではないことは安易に予想できた。現に……

「……………」

大神は無言で部屋に入り、左手にしていた手袋を外した。それは彼にとつて戦闘態勢に入った証拠。その大神の後を追って桜と平家（に引きずられる優）も部屋に入る。

中に入ると、桜は警戒心を表に出し目の前の男に意識を集中させ、平家は優を縛っていたムチを解き手元にたぐい寄せた。ただ……

——ゴキー！

「や、夜原先輩……」

突然、解放された優は体のバランスを崩し頭から床に体を崩し危険を感じさせる音を立てた。心配した桜が彼に寄り添ったが、彼女以外は目の前の男に集中していた。

そんな彼らに対し、男はキョロキョロと視線を動かして大神たちを見ていた。そして、唐突に片手を出し人差し指を彼らに向け、その口を開いた。

「ひー、ふー、みー……四人か。確か乗り込んできたのは女一人と『コード：ブレイカー』五人だったはずだが……あと二人はもうやられたか？」

「残念ですが、あとの二人はしっかりと生きていますよ。むしろ、彼らを撃退しようとしたあなたの仲間二人の内、一人は「エデン」へ連行し、もう一人はすでに息絶えているでしょう。つまり、戦力を二人失ったのはあなたたちの方というわけです」

挑発染みた男の言葉に、微笑を浮かべた平家がさらに挑発染みた言葉で応戦する。平家の言葉を聞いた男は、驚いたように目を見開き、バツが悪そうに視線を泳がせて頭をかき始めた。

「二人……というとりりいと仙堂か。そうか……。あいつらはやられたか」

大きく息を吐く男。やはり異能者である彼らを失ったのは痛手なのだろう。それに、今は男の前に三人の『コード：ブレイカー』がおり、今はいない二人も生きているということはいずれ合流する。そうなると一対五だ。『コード：ブレイカー』には傷ついた者もいるが、逆に全く傷を負っていない平家もいる。戦力差は圧倒的なものだろう。『コード：ブレイカー』は基本的に一対一で戦うが、たとえそうだとしても男にしてみれば連戦となる。どちらにしる男が不利なのは一目瞭然だった。

「……ハア」

それを感じ取ったのか、男は俯いてもう一度息を吐いた。そして、気怠そうに次の言葉をついた。



「やつば……ゴミはゴミか」

「な……!?」

突然、男の口から出たリリイたちを罵倒するかのような言葉に、桜は目を見開いた。そんな桜に構うことなく、男は言葉が続ける。

「まあ、あいつらには最初から期待していなかったけどな……。大した異能カも持って  
いないゴミのくせに『捜シ者』のために」とか『Re—CODE』になる」とか大それたことを言う……。あいつらゴミにはな」

次々と男の口から吐かれる罵倒の言葉。それは、彼らの戦いの現場に居合わせた桜にとつて衝撃的な言葉だった。それと同時に、決して許せない言葉だった。リリイを救おうとした……。桜にとつては。

リリイは多くの者を殺してきた。桜が知る限りでも、昼のファミレスに来ていた何の関係もない一般人たち。そしてこの研究所に勤める研究員たちを毒でドールにした挙

句、殺そうとした。それ以外にも、彼女には多くの罪があるだろう。それでも、彼女が『捜シ者』を慕う気持ちは本物だった。今まで他人に否定され続けてきた自分の存在を初めて認めてくれた存在……それが『捜シ者』だった。彼の存在により、リリイがどんなに救われたのか桜にはわからない。だが、彼女にとって『捜シ者』は生きる希望とも言える存在だったに違いない。方法は間違っていたとしても、その思いだけは本物だとわかる。

そんなリリイの思いと上の存在を指した仙堂をあざ笑うかのような男の言葉に、桜の中では沸々と怒りが沸き上がってきた。

「き、貴様……！　今すぐ取り消せ！　リリイはゴミなんかじゃない！」

「……はあ？」

桜の言葉に、男は全くわからないというように眉をしかめた。そして、そのままフツと鼻で笑い、やれやれといったように両手を広げて続けた。

「ゴミをゴミと言って何が悪い。考えてもみろ。あいつは一人で舞い上がってただけだ。『捜シ者』にとつては戦力の一つでしかないくせに、まるで自分は『捜シ者』にとつて特別な存在だと勝手に思ってたんだ。勘違いも甚だしいだろ。そのくせ、今回に至つては何一つ成果がない。まさにゴミだ」

「黙れ！　それ以上言うならば許さん！」

「ハッ！ お前みたいなの女に何ができる。何もできなくせに偉そうなことを言うな。いいか？ 何度でも言ってるよ」

桜の言葉を見殺して罵倒を続ける男。怒りが沸点を超えた桜は思わず一歩前に出て一際大きい声で反論したが、男はその桜の言葉すら一蹴する。そして、さらなる罵倒を続けようとした。

——しかし

「あいつは任された仕事もこなせなければ……」

男は気付かなかった

「誰からも必要とされていない……」

何気なく続けたその言葉が

「この世の害悪でしかないゴミ……いや」

男のその言葉が

「ゴミ、グズ」でしかな——

——ある男の怒りも呼び起こしたことを

「ッ!?!」

突然のことに、桜は目を見開くことしかできなかつた。一瞬、何が起こつたのかわからなかつた。自分のすぐ隣を突風と風を切るような音が通り過ぎたと思つた次の瞬間。目の前に立つ男の顔の横を何かが通り過ぎ、男が背を向ける壁にその何か<sup>か</sup>が当たつた。よほど威力があつたのか、当たつた何かは粉々に砕け散り、辺りに破片をばらまかせた。さらに、何か<sup>か</sup>が当たつた壁にはくつきりと何か<sup>か</sup>が当たつた跡が残つていた。

「……………」

それだけではない。何か<sup>か</sup>が顔の横を通り過ぎた男の頬を見ると、一線の傷が刻まれて

いた。どうやら何かが通り過ぎた時に刻まれたようだ。しかし、男は驚く様子も無くその傷から流れる血に触れ、指に付着したそれを見る。

そして、男はニヤリと笑った。

「……やるな。ちゃんと頭を狙われていたら間違いなく頭が割れていた。だが、不意打ちとは感心しないな。お前だって少し後悔してるんじゃないか？　なあ……」

そう言うと、男は視線を血が付着した指から離し、ゆつくりと前を見る。その視界に映るのは、自分に傷を刻んだ張本人。男は不敵な笑みを浮かべながらその者の名を呼んだ。

『コード：ブレイカー』・『コード：07』……夜原 優』

「……………」

その者……優は片手を前に出した状態で座り、黙ってその場で俯いていた。

「や、夜原先輩！ 気が付かれたのですね！」

優が目覚めたことに歓喜した桜が彼に寄り添う。彼の肩に触れながら、怪我は無いか全身を見た。

「どこか怪我はしていませんか？ 何かおかしなところは……先輩？」

心配の言葉を並べる桜だったが、ふと気付く。自分の目の前にいる優からは今まで感じたことの無いような雰囲気を感じることを。よく見ると、『子犬』は震えて部屋の隅で丸くなっている。本能が優れている分、そういつたものに敏感なのだろう。なら、果たして何がそこまでの雰囲気を感じさせるのか。桜がそれを理解する前に、優はゆっくりと立ち上がり歩き出した。

「先輩！ 先輩は安静にされたほうが……！」

「そうですね。病み上がりみたいなものなんですから邪魔なだけです。だからさつきと——」

「——黙れ」

「ッ——！」

たった一言。それだけで彼はこの空間を支配した。彼が言葉を発した瞬間、言い表せぬほどの緊迫感が部屋中に蔓延した。桜は心臓を掴まれたような感覚に襲われ、幾多の戦いを潜り抜けてきた大神も思わず冷や汗を流す。

「……いつは……オレが斃す」

静かにそう告げ、優は目の前の男を睨みつけた。その姿を見て、桜は気付いた。今の彼を支配しているものを。

それは……怒りだ。リリイとの戦いで遊騎から感じたものよりもはるかに強い怒気。それが今の優を支配し、この空間を包み込んでいた。桜はそれをひしひしと感じていた。

そんな桜に対し、優の目の前に立つ男は頬に刻まれた傷を擦り手に付いた血を舐め、余裕の態度を見せつけていた。そして、それはすぐに言葉となつて放たれた。

「何をそんなに怒ってるんだよ。お前にとっては敵の内輪揉めだろう。なのに……」

んなデカいレンガを投げつけるなんてな。何か気に障ったか？」

「……………」

言葉を放ちながら、後ろの壁の近くまで移動し辺りに散らばった破片を拾う男。よく見てみると、それはレンガだとすぐにわかった。だが、男の言葉に優は何も答えない。ただ黙って男を睨みつけているだけだ。

「無視か……。まあ、いいさ。その方がオレもやりやすい。しかし、随分と上手くいったもんだ。はつきり言つて、この状況は願つたり叶つたりだ」

「……………なに？」

「聞こえなかったか？ オレにとつてこの状況はちようどいいって言つたんだよ。なぜなら、オレのターゲットは最初からお前だからな。『コード：07』……………夜原 優」

「……………」

男の言葉に優は再び黙り込んだ。警戒心とかではなく、ただ理解できなかった。すると、男はお構いなしに続けた。

「オレの一番の任務はお前を斃すこと……………いや、任務というより運命と言つた方がいいな。なぜなら、オレはそのために今のオレでいられるんだからな」

一方的に続く男の言葉。また理解できない言葉を言つたかと思うと、男はゆつくりと右手を挙げた。そして、優に向かって人差し指を突き出し、衝撃の言葉を口にした。



「『コード・07』夜原 優……。お前はこのオレ……。『Re—CODE・07』の風牙が斃す」

「り、『Re—CODE : 07』!?!」

風牙と名乗った男の口から出た『Re—CODE』という言葉に桜は驚きを隠せなかった。それは、つい先ほど耳にしたばかりの単語だった。仙堂が言っていた『捜シ者』直属の親衛隊。その一人を名乗る男が目の前に現れたのだ。

「覚悟しな、夜原 優。お前の命は……。ここでTHE ENDDだ」  
瞬間、優の体から鮮血が流れた。

それは始まり。絶望から始まる新たな戦いの幕開けだった。

## code : 21 『Re—CODE』現る

「あー！ ムカつくー！」

眉間にしわを寄せ、苛立ち気に階段を上る刻。彼は仙堂との戦いを終え、いつの間にか先に行っていた大神たちに追いつこうとしていた。

「さつきから何回言ってるねん。ほんとやかましーわ」

刻が上がっている階段の先の踊り場で遊騎が顔を洗いながら文句を言う。顔を洗っているというのはロストして猫になっているためだ。どうやらロストしている間は趣向や動きも完全に本物の猫と同じになるようだ。

「うっせーヨ！ ロストしたテーマは黙ってるっつーの！」

「……あ？」

「な、なーんて。冗談だヨー……」

文句を言った遊騎に苛立ちをぶつけようとした刻だったが、遊騎がキレかかったのを見てすぐにはぐらかした。趣向が猫と言っても中身は遊騎なので人間の時同様、キレたらとても恐ろしいのだ。

「てゆーか、なんでそんなキレてるねん。なんか落としたんか？」

「わかるだろ！ アレだよ、アレ！ オレたちが部屋から出る時のアレだよ！」

「ああ、アレか。そんなに怒ることなん？」

「テメーはいいだろーがオレはよくねー！　すぐに追いついて文句言つて倍返しにしてやる！」

「どーでもええけど着いたみたいやで」

「あ？」

階段を上りながらやり場のない怒りを爆発させる刻。どうやら仙堂との戦いが終わり部屋から出た後に何かがあつたようだ。だが、そんな彼の怒りは彼の前を歩く遊騎の言葉によつて意識の外へ行き、彼の意識は目前へと向けられた。

彼の目に映つたのは一つの扉。周囲を見渡すと先ほどまで自分が上つていた階段以外の階段も無い。ここまで上つてくる間に他の扉を見かけなかったため、先に行った大神たちもおそらくこの先だろう。

「サテサテ、敵がいたら大神たちが戦つてるだろーナ。そんな時はお手並み拝見しつつアレの文句言うカ」

「ええからはよ開けろや」

「わかつてるっつの」

遊騎に急かされ、刻は扉の取っ手を握つた。そして、そのまま勢いよく扉を開け放つ

た。

次の瞬間、突然の突風が彼らを襲った。

「ぶわー！」

あまりにも突然の突風に刻はその場で必死に踏み止まった。そんな刻とは逆に……

「はにゃー」

「つとー！」

猫の姿のため体重が軽いのだろう。遊騎は踏ん張りこそしたがすぐに体が宙に舞った。刻がすぐに背中を掴んだためそのまま吹き飛ばされることはなく、刻に掴まれた状態でしばらく突風を受けていた。

数秒ほど経つと突風は徐々に弱くなっていった。刻は踏ん張りを解くと同時に遊騎を手放し、遊騎は慌てることなく華麗に着地した。そして二人の視線は目の前へと向け

られ、彼らは驚きの光景を目にした。

「優!?!」

「ななばん!」

扉の先に広がる部屋の中央部。そこで彼らの同業者である優が血を流して膝を突いていた。優を呼んだ彼らの声を聞き、そこにいた他の者たちは彼らの存在に気付いた。

「刻君! 遊騎君!」

「おや」

「……遅かったな」

桜、平家、大神の三人が刻と遊騎に視線を向ける。そして……

『コード・ブレイカー』残り二人が到着……って、よく見たら片方は猫かよ。まあ、どうせロストしたただけだろうがな」

膝を突く優の前に立つ男……風牙が余裕の表情で刻たちを見た。それを見て、刻と遊騎は警戒心を高めた。

「敵がいるカモって思ってたら本当にいるとはネ。あんたも『捜シ者』の部下か」

「いや、刻君。あいつはただの敵ではないのだ」

『「にやんまる」、それどういことや?」

桜の言葉に遊騎は首を傾げた。そして、桜は刻にとって重要な言葉を口にした。

「あいつは……風牙は『Re—CODE』の一人なのだ」

「ッ！」

刻が目を見開き硬直する。今の彼にとって『Re—CODE』という存在は大きい。かつて『コード：ブレイカー』だった姉……寧々音を殺した癡痕の男が『Re—CODE』の03だと知ったためだ。つまり刻にとって風牙は敵であると同時に、仇である癡痕の男の情報を知るであろう男なのだ。

「……そうか。あいつが……『Re—CODE』。だったら、勝負が終わった時に聞きてえこと全部……オレが納得いくまで聞かせてもらおうぜ」

「刻君……」

彼にしてみれば今すぐにでも風牙に癡痕の男について聞きたいはずだ。しかし彼は今の状況を見て、なんとかそれを抑えているのだ。

そして、刻は気を紛らわせる意味も込めて目の前の状況について尋ねた。優が血を流して膝を突いているという状況について。

「ところで、なんで優はあーなってるワケ？」

「うむ……。あの風牙のせいだということはわかっているのだが……何があったのかは私もわからないのだ」

「わからないって……ずっと見てたんダロ？」

「そうなんだが……」

刻の問いに答えられず口ごもる桜。すると、横から助け舟が出た。

「簡単な話ですよ。風牙の攻撃が見えない攻撃だというだけです」

「……いや、先輩。そんなこと言われてもまったくわからないんだケド？」

「なら自分の目で確かめるといいでしょう。見てください」

「あ？」

平家に言われて刻は視線を平家と同じ方向に向けた。彼の視界に映ったのは相変わらず血を流して膝を突いている優。

しかし、よく見ると彼は立ち上がろうとしていた。全身に力を入れているのか体は小刻みに震え、傷口からはさらに血が流れていた。

「なんだ？ まだやるのか？」

優が立ち上がろうとしていることに気付き、風牙が声をかける。彼は両手をポケットに入れ、余裕の態度だった。それとは対照的に優は出血のせいで立つことも辛いようだった。それでも優は体に鞭を打つかのように立ち上がり、目の前に立つ風牙を睨みつけた。

「……生憎、諦めが悪い性格だな」

口元の血を拭いながら強気な言葉を口にする優。そんな優を見て風牙は気怠そうに

ため息をつき、気怠そうな目で優を見た。

「じゃあ……諦めるまでやるまでだ」

そう言つて風牙は片手をポケットから出し前に出した。それを見て優はその場から移動しようとして体を動かした。しかし――

「ぐっ!」

次の瞬間、優の体に新たな傷が刻まれ大量の血を流した。

「なっ……!?!」

目の前で起こったことを見て刻は目を見開いた。桜の言うように、何があつたのかわからなかつた。風牙が手を出したと思つたら、次の瞬間には優が傷ついていた。平



家は自分の目で確かめろと言っていたが、見たところで何があったのか理解することはできなかった。

「いの……い！」

風牙の謎の攻撃で傷を受けた優は倒れることなく風牙に向かっていった。『脳』によつて人間の限界まで力が高められた拳を振りかざし反撃を試みる。

「……無駄だ」

手を前に出した状態のまま風牙が呟く。そして風牙の言葉が優に届くのとほぼ同時、優の体は彼の背後にある壁まで飛ばされていた。

「ガハ——！」

「夜原先輩！」

「ななばん！」

壁に打ち付けられた優を心配する桜と遊騎。その隣では刻が新しい煙草を出して啜っていた。

「おいおい。触れずに攻撃したり吹っ飛ばしたりとか……あいつの異能は『念力』か何かだよ。こりや優は何やっても勝てな……ん？」

煙草に火を点けようとして刻は違和感に気付いた。煙草に火を点けるためにライターのスイッチを入れて火を灯したのだが、その火が急に消えたのだ。まるで風が吹い

たかのように。しかし、今彼らがいる部屋は天井付近にある小窓以外は壁に囲まれていたため風など吹くわけがない。

「なんだコリヤ。どこから風が——」

瞬間、刻の頭の中にある可能性が浮かんた。そして、その可能性を真実として考えてみると今までであったこと全ての説明が見ついた。なぜ急にライターの火が消えたのか、なぜ優は触られることなく傷ついたのでか、なぜ風が吹くはずのないこの部屋に入った時に強風に襲われたのか。

「——『風』<sup>かぜ</sup>か」

「『風』……?」

隣で刻が呟いた言葉に桜は疑問符を浮かべる。何の意図があつてその言葉を口にし

たのか、桜がそれを聞こうとした時、風牙の言葉によりそれは遮られた。

「正解だ、『コード：ブレイカー』。オレの異能は風牙という名の通り『風』。オレは風を操ることができるんだ。だからこんな風が吹くはずもない部屋の中でも突風を起こすこともできるし、触れずに相手を吹き飛ばしたり傷をつけることもできる」

自分の異能について余裕の表情で語りだす風牙。その説明によりこの部屋に入ってから起こっていた謎の現象の原因がわかった。しかし、一つだけわからないことが桜にはあった。

「な、何を言っているのだ。風で人が傷つくわけが……」

それは彼女が目の前で何度も見た現象。仮に優の傷の全てが風牙の『風』のせいだとしても、風で人が傷つくなど聞いたことが無い。すると、今まで黙っていた大神が壁に背を預けた状態で呟いた。

「……かまいたち鎌鼬」

「えっ？」

「日本に伝わる妖怪……またはそれが起こす現象のことです。つむじ風に乗って表れて鎌のように鋭い両手の爪で人を傷つける。言い伝えだと鋭い傷を受けるが痛みはないらしいですが……そこまで優しくはないようですね」

「鎌鼬……。確かに聞いたことがあるが……はっ！ まさか風牙の正体は妖怪なのか

!？」

「……………」

鎌鼬について詳しく説明した大神だったが、突拍子過ぎる桜の勘違いを訂正しようとはしなかった。そこまで面倒は見れないということだろう。

「……ま、その『コード・ブレイカー』の言う通りだ。オレの手にかかればただの風でも人を傷つける立派な刃物になる」

大神の言葉を受けてあっさりと自分の攻撃の正体を話す風牙。ここまで話すということは、「知られても構わない」という余裕の表れなのかもしれない。

「やはり……………そうですか」

風牙の言葉を聞き、平家は顎に手を添えながら呟いた。それを聞いて、改めて煙草に火を点けた刻が眉をひそめて突っかかってきた。

「しっかし先輩も性格が悪いっすネ。あいつの異能わかってたくせに何にも言わないんで。あんだけ優に懷かれてたくせに自分は何もしないなんてサ」

『『コード・ブレイカー』であるからには簡単に助けを求めてはいけません。それは刻君もわかっているでしょう？ 優君も同じです。だから私は特に悪いことをしたとは思っていませんよ』

「あー、そうデスカ」

皮肉染みた自分の言葉を正論で返され、刻はつまらなさそうに煙草を動かした。すると、平家は独り言のように言葉を続けた。

「しかし、これは厄介ですね。『風』の異能はとにかく相手を近づけさせない。その上、離れた状態で攻撃する術も持っている。それに対して優君は近づかなければ攻撃ができない。風牙は優君にとって最も戦いにくい敵と言えるでしょう。こうなると、最初に風牙が言った言葉も納得できません」

「んあ？ あいつ何か言ったの？」

平家の言葉に刻が反応を示した。最初に風牙が名乗った時に彼はいなかった。疑問に思うのも当然だろう。すると、その様子を見ていた大神が口を挟んだ。

「確か、風牙が優を斃すことは一番の任務であり運命とも言える……でしたか。そして、風牙はそのために今の風牙でいられる……でしたね」

「なんだよソレ。わけわかんねーナ」

「つまり、あいつにとつてななばんは『かげまる』ってことやろ。あいつ全然『にやんまる』ばくないけどな」

「いや、まったくワカンナイ」

大神から風牙が言ったことを聞いた刻だったが、その意味はまるでわからない。遊騎が自己流の解釈で補足したが、やはり自己流ということではわからない。そんな彼らを見

て、平家は淡々と話し始めた。

「これは私の推測ですが、風牙は『捜シ者』が用意した優君を確実に斃すための人材かもしれません。そして、風牙は優君を斃す者の証として『Re—CODE：07』の称号を任命された。なぜ『捜シ者』がそこまで優君を危険視しているのかは……わかりませんがね」

「いや、せっかくの推論だけどサ、それはありえねーつて。優なんてその気になれば誰にでも斃せるデシヨ。何よりあいつ、お情けで『コード：ブレイカー』になったような奴だシ」

「自分の物差しで他人の思惑を計らない方がいいですよ、刻君。人の価値観なんて経験や知識、立場によっても変わります。優君はあなたにとつてはその程度でしょうが、他から見れば脅威な存在かもしれませんよ？ なにぶん『脳』の異能は謎の多い異能です。『エデン』は異能の研究を行っていますが『脳』の異能については未だ不明瞭な部分が多い。まあ、『脳』の根源である人間の脳についても完全に解明されていないので仕方ないですが」

「そっかネエ……」

平家の推測をいくら聞いても、刻はその推測を受け入れようとはしなかった。改めて刻の優に対する評価がわかる。

だが、刻は認めようとしなくても平家の推論は的を得ていた。仮に平家の推論が正解だとしたら風牙の言葉の真意も説明がつく。すると、風牙の声が彼らの耳に届いた。

「お前ら、さつきから何をコソコソ言ってるんだ？　夜原　優が斃れたから次は誰が戦うのかの相談か？」

相変わらずポケットに両手を入れた状態でその場に立ち余裕を見せる風牙。それもそうだろう。現に先ほど風牙に吹き飛ばされた優は未だに壁にもたれかかったままだ。

「まあ相談していてもオレは構わないが、乱入するのはやめてくれよ。まだ最後の仕上げが残っているからな」

「仕上げ……だと？」

意味深な風牙の言葉に桜は危機感を覚えた。そして、その危機感は的中する。

「オレの任務は最初に言った通り夜原　優を斃すこと。だがな、それはただ戦闘不能にするだけじゃ達成されない。もう二度と戦うことも、立つことも、目を開けることすらできないほど完膚なきまでに斃す。早い話……殺すってことだ」

言い終わるとほぼ同時に風牙は片手を前に出した。その先には、壁にもたれかかっている優の姿があった。さらに彼の言葉が本気とする裏付けのように風牙の周りに風が集まり始めた。揺れる彼の髪や服、そして風特有の音がそれを物語っている。

「やめろ！　そんなことは——！」

優を庇おうと走り出す桜。しかし、彼がそれを止めた。

「お、大神……!?!」

「……………」

走り出した桜の腕を掴むことで彼女を止めたのは大神だった。彼はバイトの時に見せる冷ややかな目で桜を見ていた。桜はその目を見て少し怯んだが、すぐに彼を睨み返した。

「放せ、大神!　夜原先輩が危険なのだぞ!」

「……………あなたはさつき、優に何と言われました?　異能を使うもの相手に無作為に突っ込むのは止めろと言われていましたよね」

「そ、それは……………」

リリイを助けようと仙堂の前に出た時に自分を庇った優からの言葉を思い出し桜は口ごもる。優からの言葉を守ろうと思う気持ちと彼を護ろうとする気持ちが彼女のなかでぶつかっているのだ。そんな葛藤の中にいる桜に向かって大神は続けた。

「オレとしても観察対象であるあんたに死なれるのは困るんです。もつと考えて行動してください」

「だが!」

大神の言葉に桜は再び激昂した。すると、それとほぼ同時に彼が動いた。



「——まだだ」

決意を改めるかのようにその言葉を口にした彼……優はゆつくりと立ち上がった。

「夜原先輩！」

ゆつくりであるが動き出した優を見て、桜は歓喜の声を上げた。しかし、当の優は不機嫌そうに顔を拭った。そして、明らかに不機嫌な声を出した。

「桜小路……。オレはお前に護られるほど落ちぶれちゃいない。ていうか、オレが言ったことをもう忘れてるとはどういうことだ」

「う！」

痛いところを突かれた桜。一方の優は桜に言いたいことを言う意識を完全に前に

立つ風牙に向けた。それに対し風牙は、優が立ち上がったことで前に出していた手を再びポケットに入れた。

「なんだ、まだ立つのか」

「……諦めが悪いって言っただろ」

「強がるな。大方、自己回復能力の強化でもして持ちこたえてるんだろう。だが、そんなのは付け焼刃でしかない」

「どうだかな……」

優にしてみれば凶星だろう。むしろそうしないと戦えない。この戦いで彼が受けた傷はそれほどのものだった。しかし、彼はそんな状態でありながら立ち上がり再び風牙に向かっていこうとしていた。

「……チツ。無駄な足掻きしてねーで早く諦めろつつの。どうせ勝てねーんだからサ」

「おや、それはどうでしょうね」

諦めない優を見て苛立ち気に舌打ちする刻の横で平家は意味深な言葉を口にした。そして、妖しげな微笑みを浮かべたまま続けた。

「優君の眼を見てください。彼はまだ勝機を感じている。おそらく、彼には勝つための秘策があるのでしよう」

平家の視線の先には強い意志を眼に秘めた優の姿があった。言われて刻はサツと優を見たが、すぐに鼻を鳴らして「無理」と言った。しかし、刻がいくら言おうと平家は微笑みを崩そうとはしなかった。

そして、平家の笑み同様に優の体は崩れることなくその場に立っている。彼は数回呼吸を繰り返すとその背筋を凜と伸ばし、風牙を睨みつけ眼に宿った強い意志を乗せた言葉を口にした。

「お前は……必ずオレが裁く」

「悪いがそれは無理だ。お前はオレに斃されるしかないんだからな」

睨み合う二人の異能者。二人の間に張り詰める緊張感は部屋全体を支配し、決着が近いことを暗示しているようだった。

そして——緊張感を揺らしながら彼は動いた。

## code : 22 絶望的な終焉

昔から悪いことが嫌いだった。だからこそ、こんな力を持つ自分が醜く見えてしょうがなかった。

他人からは煙たがれ、一種の習慣のように罵られる毎日。誰からもそうだった。同年代はもちろん、周りの大人も同じ。唯一違ったのは彼女と……家族だけだった。

彼女と出会うまで心を支えてくれたのは家族だった。だからこそ、その家族から教えられることはまるでスポンジが水を吸うように吸収した。その中に「悪いことをしてはいけない」というものがあつた。

家族から教えられたことというのもあり、彼は悪いこと……「悪」を嫌つた。それは立派な正義感として彼の心に在り続けた。

しかし、その正義感は徐々に変わる。「悪いことをしてはいけない」……ならば、自分はどうなのだろうか。自分が持つ力は存在しているだけで「悪」なのではないだろうか。そんな考えが彼の頭を支配し、彼の正義感は自らを卑下し続けた。

そして……全てはあの日に変わった。あの日を境に、彼の考えは別のものへと変化した。彼にとって「悪」とは嫌うべき対象ではなくなつた。嫌うのではない……憎むべ

き対象へと変わった。そして、彼は卑下していた自分の力を憎らしい「悪」を滅すための手段として受け入れた。

そして彼……夜原 優は今まさに憎むべき「悪」を裁くため力を振るおうとしていた。

「シッ！」

短く息を吐いて優は動いた。大量の出血によりほとんど力が残っていない体にその残った力を込め、敵である風牙との距離を詰める。しかし、出血の影響かそのスピード

は異能を使った彼のそれではない。それが限界だった。今の彼に出せるのは、異能を使った全力ではなく普通の状態での全力だった。

そして、風牙はそれを見逃さなかった。

「おいおい、『脳』の異能はどうした？ オレにやられすぎて使えなくなつたか？ だとしても……容赦はしないけどな。『向かい風』」

「ッー」

その言葉と共に風牙は右手を前に出した。その瞬間、突風が優を真正面から襲う。気を抜けば体を持っていかれそうになるほどの風を受け、優は顔をしかめながら両の足をしっかりと地に着ける。しかし、それは彼の動きが止まることを意味する。

「……『鎌鼬』」

そう呟いた風牙は右手を前に出した状態で左手を掲げて指を鳴らした。そして……

「ぐあー」

優の体から新しい血が流れる。流れた血は風牙の風に乗り地と壁に付着し徐々に潤いを無くしていく。新たに傷を負った優は思わず前屈みになる。

「ただ突っ込んできただけか……。そろそろ、ラクにさせてやるよ」

風牙が次の攻撃を始めようと再び指を構えその無情な音を鳴らす。

その時、優が動いた。

「な——！」

「……………」

指を鳴らし『鎌鼬』を発動させた風牙。しかし、優の体に新たに傷は刻まれなかった。風牙の目の前には、部屋の明かりを受けて輝く刀を手にした優の姿があった。

優の手に握られたその刀は、桜にとって見覚えがあるものだった。それは研究所に入る前、彼らを襲ったテロリストを一瞬で斃した彼の武器だった。

「あれは……先輩の『斬空刀』！」

「お前、オレの『鎌鼬』を……！」

「オレの刀……『斬空刀』は空気さえも切り裂く。そして風は簡単に言えば勢いを持つ

た空気だ。『鎌鼬』も同じ。それは「鋭い」風でしかないからな」

驚きに目を見開く風牙を前に優は冷静に答えた。そして、すぐに次の行動に移った。

「そして風牙。『鎌鼬』を破られたことで隙ができたな。自慢の『風』が止んでるぞ」

「ッ！」

優の言葉を聞き風牙は気付いた。『鎌鼬』を斬られたことに驚き、思わず『向かい風』を解いていたことに。

だが、気付いた時にはすでに遅かった。

「——後ろがガラ空きだ」

再び『向かい風』を発動しようとした風牙だったが、すでに目の前から優はいなくなっていた。そして、彼の声が聞こえたのは背後。そこには、今まさに刀を振り切ろうとしている優の姿があった。

「あれ、あいつまだあんなに動けたんだ」

「おそらく最初の動きはフェイクでしょうね。あえて『脳』の異能を使わないことで風牙に『傷のせいで使えない』と思込ませ、一瞬の隙を突いて『脳』の異能を発動させる。さすが優君ですね」

圧倒的に不利と思われた状況から背後を取るといふ有利な状況へと一転させた優を見て、平家が分析しながら賞賛する。一方、疑問を口にした刻はつまらなさそうに煙草



をふかしていた。

「チツ——！」

平家の分析を聞き流しつつも風牙の判断は早かった。彼は短く舌打ちをすると今まで前に向けていた右手を下に向けた。そして次の瞬間、優の目の前から風牙は消え再び強風が優を襲った。

「——つと。危ねえ」

強風が優を襲った後、風牙は優から少し離れた場所に立った。いや、正確に言うところ地した。風牙は服に付いた埃を払うと、優に向かってニヤリと笑った。

「残念。せつかくのチャンスだったのにな」

「……なるほど。地面に強風をぶつけて、その反動で避けたのか」

「状況判断が早いな。おかげで説明する手間が省けた」

やれやれといったようなジェスチャーをしておどける風牙に対し、優は真剣な表情を一切崩すことなく風牙を睨みつけていた。そんな二人を大神は相変わらず背中を壁に預けたまま見ていた。そして、静かに呟いた。

「……まずいですね」

「え？」

「ああ、まずいな」

「まずいですね」

「激まずやし」

「な、何がなのだ？」

唐突な大神の呟きに桜が疑問符を浮かべていると、刻たちが次々と大神と同じ言葉を繰り返した。それを見て、桜は自分だけがわかっていないという状況に少し慌てながら答えを尋ねた。すると、最初に言いだした大神が静かに答えた。

「このままじゃ優は負けます」

「え……？」

それは、あまりにも唐突で残酷で……あまりにも信じられない答えだった。

「な、何を言っているのだ、大神！ 夜原先輩が負けるなどありえん！ それに、負けるということはつまり……先輩が——」

「そ。死ぬってことだよ。桜チャン正解く」

『コード・ブレイカー』と『捜シ者』の一派による戦い。その敗者に訪れるであろう結末を桜は今までの戦いでわかっていった。だが、それは桜にとって最も恐ろしい結末だった。

「ふ、ふざけないでくれ刻君！ そんなことが……！」

故に彼女はすぐにその事実を否定した。心のどこかではわかっていたのかもしれない。自分では助けることも何もできない。それでも、彼女は目の前で起こるかもしれない最悪の結末を否定した。

すると、平家が先ほどのように淡々と語り始めた。

「まず、優君の体力の限界が近いこと。出血によつて彼は体力を相当奪われているはずです。その状態で『脳』で身体能力を上げて攻撃したのですからその負担は大きいでしょう。そして……」

平家の次の言葉まで一瞬間の間が生まれた。瞬間、平家はスツと目を細めた。その視線の先には、立っているのもやっとなに見える優と対照的にまだまだ余裕を見せる風牙がいた。

二人の現状を改めて見て、平家は言葉が続けた。

「先ほどの優君の攻撃は言ってみれば不意打ち。そして、『Re—CODE』である風牙は同じ手が何度も通用する相手ではないでしょう。つまり、もう優君にはどうすることもできません」

「そ、そんな……」

淡々と語られる言葉に桜が愕然とした。平家の言葉はあまりにも淡々としており、それがかえって彼の言葉の真実味を増しているように感じた。

そんな絶望を感じながらも、桜は何とか酷な真実を否定しようと頭を抱えた。そして、一つの希望を見出した。

「……そうだ。『斬空刀』！ 夜原先輩は『斬空刀』を使えば風牙の『鎌鼬』を無効化できる！ どうすることもできないのは風牙も同じなのだ！」

桜が見出した希望……それは先ほどの不意打ちによってわかった唯一の反抗手段。今まで防ぎようがないと思われた風牙の『鎌鼬』を無効化する手段を思い出し、桜は顔を輝かせた。

しかし、その言葉を耳にした刻は独り言のようにポツリと呟いた。

「サテサテ……それはどーカナ」

「しかし、『鎌鼬』を斬るとは思わなかった。良い刀……いや、どちらかといえば良い腕をしているだな」

「……………」

「オレの『鎌鼬』は言ってみれば収縮された鋭い風だ。だが、元が形を持たない風だからさつきみたいに高速で刀を振るわれたりしたらあつという間にその威力は無くなる。それをお前は一撃でやってみせやがった。今までの攻撃を見て真正面からくることはわかっていただろうが、ぶつつけ本番で一撃で決めたんだからな。いやはや、良い腕だぜ」

『鎌鼬』の説明をしながら優を称賛する風牙。その様子からは最初と同じ余裕が感じられた。『鎌鼬』を破られた時こそ驚いていたが、すでに対処した今となつては脅威ではないのだろう。平家の言う通り、やはり同じ手を通じることにはなさそうだ。

「良いのが刀だろうが腕だろうがどうでもいいだろう。それより……次こそ決める」  
風牙からの賞賛を流し、優はゆっくりと刀を構えた。優が再び刀で向かってくると気

付いた風牙は、ニヤリと口角を上げた。

「なめられたもんだな。続けて同じ手で来られるとは。次は上手くやる……つてことか？」

「ああ」

「……ハッ」

間を一切置くことなく言った優の答えを聞き、風牙は眉をしかめて短く息を吐いた。そして……

「ハハ、ハハハ……。ハハハハハハハハハ！」

右手で顔を覆いながら風牙は声を大にして笑い出した。突然、笑い出した風牙に桜は驚いていたが、彼の前にいる優は構えを一切解くことなく立っていた。

「ハハハハ！ ハハハハハハハハ！ ……ハア」

そして一通り笑った後、風牙は大きく息を吐いた。その後、風牙の態度は一変した。

「——ふうげんなよ」

「ッー！」

風牙の眼は鋭く優を捉え、ヒリヒリとした殺気が部屋を覆った。殺気を真正面から受けた優は改めて気を引き締め、全身に力を入れた。

『『卷<sup>ケ</sup>き風』』

スツと前に出された風牙の右手から風が放たれた。しかし、それはさっきまでのような強風ではない。まるでそよ風のような心地よい強さの風だった。それでも優は警戒心を解くことなく構え続けた。

そして、ある違和感に気付いた。だが、動こうとした時にはすでに遅かった。

——ビュオ！

今まで心地よい強さを保っていた風牙の『風』が突然勢いを増した。そして、そのまま優を中心に渦を巻くように吹き続け……

「これ……！」

風の檻となつて優をその場に閉じ込めた。風は最初とは比べ物にならないほどの威

力となっており、少し離れた場所にいる桜たちも気を抜けば体を持つていかれそうになるほどだった。

「はにゃー」

「つて、またかヨー！」

部屋に入った時と同じように飛ばされそうになった遊騎を刻が捕まえる。それ以外の者たちは何とか自力で耐えている。

「や、夜原先輩は……!?!」

風に耐えながら桜は閉じ込められた優の安否を確認しようと目を開けた。しかし、風の影響ではつきり目を開けられないので確認することができない。

「——ハッ！」

その頃、優は風の中で出来る限りの抵抗を行っていた。『脳』で強化した身体能力を駆使して勢いよく刀を振るうが、状況の改善は見られない。唯一の救いと言えればそれほど風の影響が強くないということだった。少しばかり風を感じるが、威力としてはその程度だ。そのため外の桜たちよりは自由に動くことができた。しかし、だからこそ優は警戒心を研ぎ澄ませてなんとか風から抜け出そうとしていた。自分を閉じ込めている風が風牙の仕業である以上、何か仕掛けてくる危険が十分にあった。

そして、その危険はすぐに現実となった。



「……………」

優を捕えた風の檻を前にし、風牙は前に出していた右手を胸元に寄せた。そのまま握り拳を作り親指を立て、親指が下を向くように手の上下を逆転させた。

そうして、風牙は親指で地面を指差すように右手を下げた。

「——『鎌鼬かまいたちの舞まい』」

その瞬間、優を捕えた風の内側から『鎌鼬』が放たれた。方向は——優の背後。

「ぐあー！ ……くそー！」

突然、自分を襲った背後からの激痛に優は眉をしかめた。すぐに背後に向かつて刀を振るうが、何も手ごたえが無い。それどころか、今度は両腕に新たな傷が刻まれた。

「ッ——！」

優は何とか声を抑え痛みに耐える。どこからの攻撃か見極めるために意識を集中させようとするが、そうしている間にもどんどん新たな傷が刻まれていった。

「…………辛そうだな、夜原 優」

痛みを苦しむ優の耳に風牙の聲が届いた。優が声の方向に目を向けると、ぼんやりと人影が見えた。おそらくそれが風牙だろう。優は風越しに睨んだが、風牙は構わず言葉が続けた。

「お前を閉じ込めたのは『巻き風ケージ』…………その名の通り檻だ。そして、今お前を攻撃して

いるのはさつきまでと同じく『鎌鼬』だ。ただ、今回ののは『巻き風』で相手を閉じ込めたことで初めて発動できる『鎌鼬』の応用技……『鎌鼬の舞』だがな」

「応用技……？」

「普通の『鎌鼬』はオレの手から飛ばすことしかできないが、『鎌鼬の舞』は相手を閉じ込める『巻き風』の風から『鎌鼬』を飛ばすことができる。普通、風つていうのは視認することはできない。お前はさつきオレの手から飛ばした『鎌鼬』を斬ることはできたが、それはどこを斬ればいいのかおおよその判断ができたからだ。考えれば簡単な話だよな。オレの手の延長線上をタイミングよく斬ればいいだけだ。タイミングなんて何度も『鎌鼬』を受けたお前だったらわかってもおかしくないしな」

ハハハ、と笑う風牙。優は『巻き風』の中で風牙の話聞いていたが、その間にも容赦なく『鎌鼬』が襲ってくるのでどんどん傷は増えていった。風牙もおそらくそれはわかっているだろう。その上でやっているのかはわからないが、風牙はさらに話を続ける。

「だがな、この『鎌鼬の舞』は違う。『鎌鼬』を飛ばすのが一か所だけじゃない。周囲一帯360度全てがランダムに飛ばしてくる。さらに数も完全にランダム。防ぐのは……100%不可能だ」

風牙の話が終わったのとほぼ同時。五つの『鎌鼬』が放たれ優の全身を切り刻んだ。

「ぐあああああー！」

「ッ！ 夜原先輩!？」

同時に五つもの『鎌鼬』を受けたことで限界を超えたのか、優の悲痛な叫び声が部屋に響いた。その声は『巻<sup>ケ</sup>き風<sup>ジ</sup>』の外側で耐えている桜たちの耳にも聞こえ、桜は優を呼んだ。しかし、それに応える声は返ってこない。代わりに、今まで自分たちが耐えていた風が突然止んだ。今まで風が吹いていたせいで部屋の中にあつた塵や埃が舞い上がっており、あまり視界はクリアではなかった。桜は吸い込まぬよう口元を押さえ、薄目を開けて状況を確認しようとした。少しずつ塵や埃が拡散していき、徐々に視界もクリアになっていった。

そして……見た。

「や……夜原先輩!」

全身に新たな傷を刻まれ、痛々しいほどの血を流しながら刀を支えにして膝を突く……優の姿を。

「ななばん！」

「あゝあ。予想はしてたケド、まさかピッタリその通りとはネ」

「ど、どういうことなのだ、刻君！」

桜同様、今まで以上に傷ついた優を見て驚愕の表情を浮かべる遊騎と意味深なことを言う刻。刻の言葉を耳にした桜はすぐに彼を問い詰めようとした。

刻は慌てることなく、先ほどの風で飛ばされたのか新しい煙草を啜えながら話し始めた。

「相手は仮にも『Re-CODE』だぜ？ そんなやつは攻撃があんな自分の前に見えない攻撃飛ばすだけとは思えねえ。だからもつと効果的な攻撃があると思っただけだヨ。見た感じだと、あの風の中で全方位から攻撃を受けたみてーだな」

「そ、そんな……」

風牙の攻撃は防げる……桜がそう考えた矢先に起こったそれを全否定する現実。桜の表情には先ほど以上に絶望の色が見えており、もはや希望を見出すことができないよ

うだった。

そして、その絶望を突きつけた張本人である風牙は優がまだ斃れていないことに気がつき、残念そうに息を吐いた。

「なんだ……。派手な叫び声上げたからもう終わったかと思つて解いたんだが……。少し早かったか。まあ、いいか」

心から残念そうに言葉を並べる風牙。すると、再び右手を前に伸ばした。その先にいるのは、もちろん優だ。

「オレが直接止めを刺せばいいだけだ」

「や、やめろー！」

優に止めを刺そうとする風牙を見て、桜は叫びながらその足を前に出した。しかし、ただでさえ距離が離れているため間に合うわけがない。それに間に合つたとしても桜には風牙を止める力などない。止める力があるであろう大神たちはまず動かない。優を救うことはどう考えても不可能だった。

そして、桜が走り出してすぐ。飛び散る紅い鮮血が彼女の視界に映った。

「——な……」

「——え？」

桜の視界に映ったのは間違いなく鮮血だった。傷つき肉が露わになった皮膚から、血管が裂けたことにより外界に飛び散った紅い液体。それは間違いなかった。

だが、その液体の持ち主は予想とは大きく違った。

桜の視界に映っている一人の人物。その人物は俯き、膝を突いていることでひどく小さく見える。その手には支えとして地に突き刺した刀。そして……

「……油断したな」

硝煙をゆらゆらと揺らす拳銃を目の前の敵に向けていた。ボソリと呟いた後、その人物……優はゆつくりと顔を上げた。

「お前——！」

頬から走る激痛と鼻につくような硝煙の臭い。風牙はそれらを感じながら、突然のことにすっかり体勢を崩していた。前に伸ばしていた右手も下げ、反射的に彼の足はその場から離れようと後ずさりを始めていた。しかし、彼はそうしながらも目の前の状況を理解しようとした。先ほどまで力無く膝を突いていた優。止めを刺そうとしたところ、一瞬のうちにどこからか拳銃を取り出し正確に自分の頬を撃たれていた。どこに拳銃を隠していたのか。どこにそんなことをする力が残っていたのか。風牙の頭の中では様々な疑問が溢れ出ていた。

（いや……今はそんなことどうでもいい！ さっさとこいつに止めを——！）

しかし、風牙は自分の中で溢れる小さな疑問よりも自分が果たすべきことを優先させようとした。思わず下げた右手を再び前に伸ばし、『鎌鼬』で優に止めを刺そうとした。だが、すでに彼の視界に優は映っていなかった。代わりに……

「……これで、完全に形勢逆転だ」

「ツ——！」

目の前にいたはずの優の声が背後から聞こえ、その優によって頭を鷲掴みにされていた。ほんの一瞬のうちに、優と風牙の有利不利は完全に入れ替わっていた。

「夜原先輩！ 無事だったのですね！」

「勝利を確信した風牙の隙を突いて拳銃で攻撃ですか。続けて不意打ちというのはどうかと思いますが……まあ、いいでしょう」

桜は優の無事を喜び、平家はまたも淡々と状況把握を行っていた。優の勝利を確信したのか、大神は興味なさげに目を瞑った。近くでは刻がつまらなさそうに煙草をふかし、刻の足元では遊騎が「さすががなばんやし」と呟いた。

そんな彼らの言葉を耳に受けながら、優は風牙に裁きを下すべく彼の頭を掴む手に力を込めた。

「目には目を 歯には歯を 悪には——」

「——遅え」



瞬間、突風が部屋を駆け抜け、轟音が部屋に響いた。

「ガハ——！」

「夜原先輩!？」

何が起こったのかわからなかった。止めを刺されようとした優が一瞬で形勢を逆転した次の瞬間。風牙の背後を取った優はいなくなり、突風が駆け抜け、轟音が鼓膜に響いた。

そして桜の目に映ったのは……

「遅え……遅えんだよ……。オレの後ろを取って余裕か？ オレの隙を突いたから余裕か？ ……ふざけてんじやねえぞ！」

今までの常に余裕を漂わせていた雰囲気とは違い、まるで荒ぶる獣のように殺気をむき出しにする「豹変」した風牙の姿だった。

「ぐ……！」

その風牙の背後にいた優は壁に背中を打ち付けており、顔を歪ませて激痛に耐えている。風牙はゆっくりと体の向きを優に向け、彼を睨みつけた。

「悠長に決め台詞言ってるじゃねえよ。だからお前も隙を突かれて吹っ飛ばされんだよ」

「『向かい風』か……」

「オレは何も手だけで『風』を操ってるじゃねえ……全身で操ってるんだ！ 体中から突風出すくらいなんてことないんだよ！」

おそらく、優が風牙の頭を砕こうとした時に全身から突風を放ったのだろう。それにより優は吹き飛ばされたというわけだ。

「しかしムカつくな……。オレをここまでムカつかせたのは久しぶりだ。こうなったら決めたぜ。お前は……徹底的に殺す。腕や足なんてもんじゃねえ。肉片ひとつも残らねえくらいバラバラにしてやる！」

風牙が激高した途端、部屋の中に再び突風が吹き始めた。だが、それは今までの突風とは違う。今までの突風は向かい風だったのに対し、今吹いているのは明らかに引き寄せる追い風だった。いや、正確に言えば違う。風牙を中心として大きな風の渦が部屋の中で渦巻いているのだ。

そして、風牙はゆっくりと右手を広げ掌を上に向けた。その瞬間、風牙の掌の上で渦

が形成されていった。それはまるで、よく映像で見る台風のようだった。

『ハリケーン・アイ台風の目』……。オレの技の中で最強の技だ。オレを中心とした風の渦を発生させ、そのエネルギーを一点に凝縮することであらゆるものを貫く槍と化す。手始めに……テメエの体にデケエ風穴開けてやるよ!」

「くっ……!」

あれを受ければ間違いなく死ぬ。すぐにそれを悟った優は体に入れたが思うように動かない。大量の出血、体力の限界が近い状態での『脳』の使用により、彼の体はすでに限界を迎えていたのだ。自分の視線の先でそんな絶望を感じている優を見た風牙は、大きく右手を振りかぶった。

「死ねえええええええ!」

そして——ハリケーン・アイ台風の目は風牙の右手から放たれた。

轟音と、凝縮された風が拡散したのか一瞬だけ吹き抜ける突風。それを体で感じなが

ら風牙は静かに俯いていた。荒ぶった呼吸を整え、少しずつ気持ちいを落ち着かせていく。ふと、自然のものと思われる冷たい風が風牙の頬をなぞった。その風を受け冷静になつた風牙はゆつくりと顔を上げ目の前を見た。

顔を上げた彼の目が映したのは外界……研究所の外。どうやら『台風ハリケーンの目』で壁も砕けたらしい。そう考えると放つた先が偶然とはいえ外側の壁だったというのは幸いだった。もし壁の先に支柱でもあつたらこの研究所は崩れていただろう。その景色と己の幸運を認識しながら、彼はゆつくりと右手を伸ばしそれを指差し宣言した。

それ……全身を血で紅く染め上げ体の中心に巨大な風穴が開き呼吸も何も聞こえない無音と化した存在。

「『コード：07』夜原 優……THE END」  
 かつて夜原 優と呼ばれた死体に対し風牙は自分の勝利を宣言した。

「や、や……夜原先ばああああい!!」

背後から桜が喉が裂けそうなほど悲痛な叫び声を上げる。しかし、その叫び声は風牙の鼓膜にとつてただの心地よい振動でしかなかった。

## code:23 終わっていた戦い

『Re—CODE:07』風牙が『Re—CODE』を名乗ることを許されたのは最近のことだった。『捜シ者』が日本に降り立ち、これから起こる戦いの準備を進めていた時のこと。まだリイと仙堂同様ただの部下でしかなかった風牙は『捜シ者』に呼び出された。突然の呼び出しに風牙はこの上ないほど緊張していた。無理もない。主とも言える存在から急に呼び出されれば誰でも不安に思うだろう。ましてや彼はまだ数ある部下の一人。その不安は計り知れない。

緊張で体を強張らせながら、風牙は『捜シ者』に指定された場所に向かった。そこには、奥に鎮座した『捜シ者』の他に風牙たちの間では六聖人とまで呼ばれる『Re—CODE』が何人かいた。自分とはあまりにも格が違う者たちが集っているのを見て、風牙の緊張は最高潮に達していた。そんな風牙の緊張を察したのか、『捜シ者』は柔和な微笑みを浮かべ用件を口にした。

——風牙に『Re—CODE』の新たなナンバーを授ける、と。

「わ、私に『Re—CODE』のナンバーを授けるって……本当ですか、『捜シ者』！」  
「ああ」

驚きのあまり『捜シ者』の言葉をそのまま繰り返して用件を確認する風牙。対して『捜シ者』は変わらさず微笑みを浮かべたまま、自分の言葉が真実であると告げた。しかし、それでも風牙は信じられないように戸惑いの表情を浮かべている。すると、『捜シ者』が言葉が続けた。

「君が務めるナンバーはこれから戦いを始める上で必要になる新しいナンバー。……今の『コード：ブレイカー』に対抗するための手段だ」

「『コード：ブレイカー』に……ですか？」

「その通りだ」

『捜シ者』の言葉を聞いていた風牙だったが、突然別の者が話に入ってきた。声の方向を見ると、そこにいたのは真冬日にするような厚着をした褐色色の肌をした男……雪比奈だった。

「お前も事前には得た情報でわかっていると思うが……今の『コード：ブレイカー』には今までいかなかったはずの『コード：07』が存在する。そして、その異能者は少し厄介な異能を持っている」

「厄介な異能……？」

「奴は『脳』の異能を操り、人間でありながら人間の限界を超えることができる。どれほどの力を持っているのかはわからないが……野放しにしておくには少し危険だと『捜

シ者』は考えた」

「そこで、君の力が必要になった」

雪比奈の言葉に続けて『捜シ者』が口を開いた。風牙は反射的に『捜シ者』の方を見た。見ると、『捜シ者』は立ち上がり、ゆっくりと風牙のところまで向かってきていた。それを見た風牙は改めて姿勢を正し、『捜シ者』を真っ直ぐ見た。

『コード：07』の『脳』の異能は情報によると近距離戦に特化している。彼を完膚なきまでに斃すのなら、相手を務めるのは相手を近づけさせないことに特化した者に任せる必要がある。そして、その役目を務めることができ実力・思想ともに申し分ないのが……君だよ、風牙」

歩きながら言葉が続けた『捜シ者』は話が終わると同時に風牙の目の前に立った。相変わらず柔和の微笑みを浮かべているが、目の前にしたこと風牙はびりびりとしたプレッシャーを感じ思わず目を逸らした。

「で、ですが……そういうことでしたら私よりもあの方の方が確実かと思いますが……」

口ごもりながら風牙は視線をあの方に向けた。壁に背を預けた状態で腕を組み、目を瞑りやや顔を下げた状態でその場に佇む……『Re—CODE』の一人に。

風牙の視線が動いたことで、『捜シ者』は彼と同じ方を見た。そして、その視線の先に



誰を捕えたのか理解すると『捜シ者』はゆっくりと目を瞑った。

「……なるほど。君の言いたいことはわかるよ。確かに、より確実さを求めるなら君の意見は正しい。……だけど」

風牙の意見を受け入れているかのように『捜シ者』はゆっくりと話した。そして一呼吸置いたかと思うと、瞑っていた目を開けて風牙の手を握った。突然のことに風牙は目を見開き、『捜シ者』の顔を真正面から見た。

「それでも私は君に任せたい。さつきも言った通り、私には君の力が必要なんだ」  
「……ッ！」

その言葉が最後だった。その日、『捜シ者』からかけられた言葉はそれが最後だった。その後、風牙が覚えているのは新たなナンバー……『Re—CODE：07』を名乗ることを決めた自分を歓迎する彼の笑顔だけだった。

その日から、風牙は『コード：07』夜原 優を斃すことを目的としてきた。『捜シ者』

の期待に応えるため、自分が他の部下たちとは違うことを証明するために、何より自分が『Re—CODE』で在り続けるために。

「ハハハハ！ ハハハハハハハハ！ これで！ これで証明された！ オレが新たな『Re—CODE』の一人だ！ ハハハハハハ！」

大量の血を流し、体の中心に風穴が開いた優の向こう……破壊された壁から見える外から入ってくる風を感じながら、感情を爆発させたかのように笑う風牙。その声は壁の穴から外に流れたが虚空に消え、彼と同じ部屋にいる桜たちは呆然とした様子でそれを見ていた。

「急にぶつ壊れやがった……」

「感情があまりに高ぶり理性を忘れているようですね」

風牙の変貌ぶりに刻は不気味そうに眩き、平家は変わららず冷静にその場に立っていた。すると、今まで風を背を預けていた大神が壁から離れ、風牙の方を向いた。

「それより、今の言葉はどういうことだ？　今の戦いでお前が新たな『Re—CODE E』であると証明された……というのは」

「……ハッ」

大神の問いを聞き、感情のままに笑っていた風牙は笑い声をピタリと止め、短く息を吐き捨てた。そして、未だ先ほどの笑いの余韻が残っているのか、ニヤリと口角が上がった顔を大神たちに向けた。

「言葉の通りだよ……。この戦いで、オレは名実ともに真の『Re—CODE』として認められたんだ」

「おかしな話だな。お前は最初に名乗った時、自ら『Re—CODE:07』と名乗った。今のお前の言葉を聞くと、今までは違っていたように聞こえる。それは矛盾じゃないのか？」

「……矛盾？」

矛盾、という大神の指摘を受けた風牙はボソリと呟いた。すると、途端に俯き表情が見えなくなった。しかし、それは決して長い時間ではなく風牙はすぐに顔を上げ始めた。ただ、彼にはある変化が生じていた。

「——矛盾なんかしてねえさ」

消えていた。先ほどとは打って変わり、笑みが一切消え無表情となった顔を浮かべて

いた。そして、風牙はその表情のまま語りだした。

「オレが『Re—CODE：07』を任命されたのはついこの間のこと。『捜シ者』の考えつてことで他の『Re—CODE』も含めたほとんどの奴が反対もせずにおレを認めた。だが、中には上辺だけの連中が少なからずいた。まあ、考えてみればそうだよな。今まで名も知られてないような部下の一人が急に幹部クラスに昇格したんだからな」

「つまり……あなたはその者たちに自分が『Re—CODE』を名乗るにふさわしいということを証明しようとしたというわけですか」

風牙の話聞き、平家が予想を口にした。自分を認めない他の者たちに自分の力を認めさせる……それがこの戦いにおいての風牙の目的であると。それを聞いた風牙は、フツと鼻で笑った。

「そうだ。オレが『Re—CODE：07』を任命することになった理由でもある……夜原 優を斃すことだな」

「どういうことや。ななばん関係あらへんやろ」

「残念ながら関係あるんだよ。そもそも、オレのナンバー『Re—CODE：07』は他の『Re—CODE』とは少し違う。これは『捜シ者』の親衛隊である証と同時に一人の敵を斃すことを使命としたナンバー。そう……」

『コード：07』夜原 優って言う一人の『コード：ブレイカー』を斃す……っという  
な」

その言葉を聞き、大神たちに衝撃が走った。風牙が今言ったことは、大神たちがついさつき平家から聞いた話とほとんど一致していたからだ。風牙は優を斃すために用意された者であり、そのために彼は『R e | C O D E : 0 7』を名乗っている……という平家の推測と。

「オイオイ……！　なんで『捜シ者』はわざわざ一番苦手な相手を用意するくらい優のこと警戒してんだヨ……！　あいつはお情けで『コード：ブレイカー』になったような奴だぜ？　つーかヨ、そんだけ重要な奴だったら「エデン」の連中がもつと良い待遇してらっつッ」

自分が否定した平家の推測が当たっていたことに驚きを隠せない刻は目を見開きながら風牙に理由を尋ねた。しかし、風牙から返ってきた答えは望んだ答えとはかけ離れていた。

「オレが知るか。オレは夜原 優を斃すことが使命としか言われていない。どうせ元から理由には興味なかったしな。オレは自分の力が『捜シ者』に認められ、信頼されているっていうことがわかっただけで十分だった。そして何が何でも『Re—CODE：07』としての使命を果たそうと思った。それだけだ」

「……となれば、直接『捜シ者』に聞くしかありませんね。素直に話すとは思えません」

風牙の答えを聞き、平家はこれからするべきことを冷静に呟いた。最後の部分は憂いているようにも聞こえたが、その眼には強い闘志が宿っていた。言葉として出したことで、『捜シ者』との戦いを改めて意識したのだろう。

すると、再び風牙に変化が起きた。

「おいおい……おいおいおいおい……」

ぶつぶつと同じ言葉を繰り返して、徐々にその顔を俯かせていく。そして、表情が見えなくなるまで俯いたかと思うと、再びあの歪んだ表情を見せた。

「何勝手に話進めてんだ！　まずはオレをどうにかするんだな！　まあ、結局は無駄

な相談だかな！ お前らが『捜シ者』にたどり着く前にオレがお前らを全滅させる！  
真の『Ree-CODE』の仲間入りをしたこのオレがな！ さあ！ 次は誰がオレの相  
手をするんだ！」

再び殺気を爆発させた風牙が構えた。そして、それを見た大神たちも構え――

「ハ？ なんで？」

「意味がわかりませんね」

「謎です」

「頭ぶつ壊れたんか？」

――ることはなく、ただその場で首を傾げていた。

「……はあ？ お前ら……何言ってるんだ？」

「イヤ、それこっちのセリフなんだケド。なんでオレたちがテメーと戦うんだヨ」

大神たちの態度に風牙は意味がわからないという反応をしたが、一向に大神たちは動こうとしない。

「なんでって……次はお前らだろ！ お前ら以外に誰が戦うんだよ！」

「……だからなんですか？ 理解に苦しむんですが」

呆れたように言う大神を見て、風牙は眉をしかめた。そして、彼らに対し怒りを爆発させた。

「ふざけるな！ 理解に苦しむのはオレの方だ！ さっきまでオレと戦っていた夜原優はもう死んだんだ！ オレが斃した！ だったら次は残ったお前らだろうが！」

怒りに任せて彼が自らの目で確認した事実を次々と告げた。そして、それを聞いた大神たちは――

「……驚きましたね。あれで終わらせるとは。『Re—CODE』っていうのはずいぶん優しい心の持ち主なんですわね」

「はあ!？」

大神の言葉に風牙は声を荒げる。すると、今まで黙っていた桜がゆつくりと口を開いた。



「一体……さつきから何を言っているのだ？ 先輩は……」

夜原先輩なら……さつきからずっとそこにいらっしやるではないか」

瞬間、指を鳴らす音が部屋に響き風牙の鼓膜を揺らした。

「……は？」

変わった。目に見えるもの、景色が変わった。破壊された壁の向こうに見える外の景色。それは変わっていない。変わらず闇に支配された夜だった。変わったのはそのすぐ前。

「死体が……消えただと!？」

破壊され一部しか残っていない壁のその一部を背もたれにしてなんとか落ちずにいた優の死体。見続ければ目が痛くなるほど大量の血が流れており、体の中心には風穴が開いている。それは誰が見ても死体だとわかるものだった。

しかし、今の風牙の目に映る景色にそんなものは影も形も無い。あるのは破壊された壁の瓦礫だけで、あれだけ大量に流れていた血はまるで残っていない。もちろん優の死体も。

「どういうことだ! 確かにあいつはオレが殺したはずだ! さっきまでそこに死体があつたらう!」

「いい、いい加減にしろ! さっき言っただろう! 夜原先輩ならそこにいると!」

そう言いながら桜はある一点を指差した。風牙は混乱しつつも桜が指差した方向を見た。

そして……見た。ありえるはずがない、いるはずのない……彼の姿を。

「……………」

「夜原……優……!?!」

桜が指差した方向には、『鎌鼬の舞』による大量の傷を残っているが血はすっかり止まっており、風穴などどこに開いていない体でその場に立つ夜原 優の姿だった。

「ど、どういうことだ！ お前はさつき……オレの『台風の目』ハリケーン・アイで体を貫かれて死んだはずだ！ それが……なんで……！」

意味がわからない。今の風牙の思考を支配していたのはそれだけだった。自分の中に存在するあらゆる知識をどう使っても目の前の状況が説明できない。そのことに恐怖も感じたのか、風牙は無意識のうちに優との間に距離を取っていた。そして、風牙を混乱させている優は静かな表情でそれを見ており、ゆつくりと口を開いた。

「オレはあの時、お前の技を受ける前に移動した。つまり、本当のオレはあの技を完全に避けていた」

「何言ってるやがる！ じゃあ、さつきまでそこにあつた死体は何だ！ あの一瞬で別の場所から死体を持つて来たっていうのか！」

平然とあり得ないことを言う優を見て風牙はさらに声を荒げて、さらにあり得ないことを口にする。もはや冷静な判断ができないほど興奮状態にあるのだろう。それに対して、優は何事も無かつたかのように冷静さを保ちながら風牙の問いに答えた。

「そんなことは『脳』の異能を使つても不可能だ。お前が見ていたのは……間違いなくオレの死体だ」

「な、何を言っている！ 今度は自分が生きていることを否定するのか！」

矛盾している優の言葉に風牙はさらに混乱する。そんな風牙に構わず、優は大きく息

を吐きある事実を告げた。

「簡単な話だ。オレの死体がお前にだけは見えていた……それだけだ」

「オレにだけだと……!?! あれは幻覚とでも言うつもりか!」

「……確かにそうだな。言ってみればあれは幻覚かもな」

「何……!?!」

優が告げた事実を聞き、風牙の頭の中が少しクリアになった。幻覚という一つの可能性を見出したからだ。

「あ、あの……夜原先輩」

「……なんだ」

すると、桜がおそろおそろ手を挙げた。優は視線のみ動かすと用件を聞いた。そして、桜は少し申し訳なきように尋ねた。

「その、よく状況がわからないので教えてください。一体、先輩は何をしたのですか?」

「……まあ、もうそろそろ説明しようと思ったところだ。お前でもわかるように工夫はしてやる」

「は、はい!」

桜が返事を返すと、優は風牙の顔を見た。少しの間とはいえ黙っていたので、少し

落ち着きを取り戻したようだった。それを確認し、優は少しずつ話し始めた。

「まず、桜小路たちに言っておく。今の今まで、風牙にはオレが死んだと思っていた。なぜなら、こいつの目にはオレが竜巻を受けて体を貫かれた姿が見えていたんだからな」

「え!?! しかし先輩はずっと——」

「ああ。実際のオレは竜巻を避けてずっと部屋の角で体を回復させていた。それは桜小路たちが見ているはずだ」

優の言葉を聞き、風牙は桜たちの方を向いた。その迫力に桜は少し驚いたが、すぐに落ち着きを取り戻して口を開いた。

「は、はい。私の記憶だと先輩は風牙の技を避けて、ずっと角で休まれました。それしたら急に風牙が笑い出して『Re—CODE：07』について聞きました」

「バカな……じゃあ、オレが見ていたのは幻覚……? だが、一体どうやって……」  
驚愕の事実には風牙は頭を抱えた。自分がいつから幻覚を見ていたのか。そしてその方法は何なのか。風牙はそれがわからなかった。

すると、優がポツリと呟いた。

「オレはお前に吹き飛ばされる前、一瞬の隙を突いてお前の背後に回って頭を掴んだ。そこでお前たちに聞くが、オレは頭を掴むことで何をしようとしたと思う?」

「……頭を潰そうとした、と答えておきましよう」

まるで何か含みがあるかのように大神が答えた。おそらく、大神の答えはその場にしたほとんどの者と同じ内容だろう。今まで優の裁きを見てきた『コード・ブレイカー』と桜はもちろん、事前に情報収集を行っていた風牙も優がどのような裁きを行うか知っている可能性はある。なにより、身体能力を上げる『脳』の異能を使う相手に頭を掴まれたら誰でもその可能性を考えるだろう。

「そうだな。オレも戦いが始まった時はそうやって終わらせようと思っていた。……だが、戦っているうちに一筋縄でいかないことに気付き、オレはそれをやめた。つまりオレはあの時、砕こうとして頭を掴んだんじゃない」

「面倒くせーな。素直にアレ使ったって言えヨ。ぶっちゃけオレたちはわかってるシ」

「と、刻君？ 何か知っているのか？」

「ま、すぐわかんじやナイ？」

まるで優が何か知っているかのような口振りの刻。桜が疑問に思い尋ねたが、刻は答えようとしなかった。すると、優は周りを見て、答えようとする者がいないことを確認すると右手を前に出して掌を上に向けた。

「なあ、刻。オレの異能はなんだ？」

「テメーの異能は『脳』。自分の脳のリミッターを外して身体能力を上げて頭砕くだけっていうオレの『磁力』の足元にも及ばねー異能だ」

優の質問に答えつつも自分の株を上げようとする刻。しかし、優は特に文句を言わずに「そうだ」と正解を告げ、そのまま続けた。

「オレは自分の脳を操りリミッターを外すことができる。それは今までやって見せた通り正解だ。……だがな」

途端、優は右手に力を込めて握り拳を作った。そして、スツと目を細めて風牙を視界に捉えた。

「オレが操れるのは自分の脳だけ……とは今まで一度も言っていないよな？」



静止した。優の言葉を聞いた瞬間、まるで空気が凍ったかのように静寂が訪れた。原因は衝撃。物理的なものではない。精神的なものだ。しかし、その衝撃を受けたのは『コード：ブレイカー』以外の者たちだった。『コード：ブレイカー』たちは最初からわかっていたかのようにただ黙っていた。

その衝撃を与えた張本人である優は右手を下ろすことで一呼吸置き、再び話し始めた。

「オレは自分の脳だけじゃない。他人の脳を操ることもできる。さつきみたいに……頭を掴んだ状態だったらな。脳っていうのは感覚器官にとつて核みたいなものだ。目は見たものを脳が処理することによって初めてそれを視覚で認識することができ、耳は鼓膜の振動を脳が処理することで初めてその音を認識することができる」

両手をズボンのポケットに入れて説明を続ける優。その主な内容は脳事態に関するものだったが、一通りの説明を終えると、再び一呼吸置いて間を作った。そして、ゆっくりと口を開いた。

「……だったら、だ。脳がわざと誤認するように操れば、他人とは違う景色を見せたり他人とは違う音を聞かせることも可能だと思わないか？」

「——ッ！」

その言葉を聞き、風牙はハツとした。自分が何をされたのか……彼はそれを完全に理

解した。そして、風牙が気付いたことに気付いた優は風牙の方を向き言い放った。

『壊脳』相手の頭に触れることで相手の脳を操作し、幻覚や幻聴……その他にもあらゆる身体の異常を発生させることができる技だ。……まあ、相手の異エネルギーに左右される制限時間付きだけどな」

優の口から語られた優の力。その内容と自分の身に起きた出来事を重ね合わせ、風牙は目を見開いた。

「ま、まさか……！」

「ああ。……風牙。お前の脳はもう壊れた」

風牙を指差し優は宣言した。それは風牙にとって絶対的に自分が不利な立場にあり、自分の負け……死を宣言されたのと同じに聞こえた。優の説明の全てが本当なら、自分にはどうすることもできない。脳を狂わされ続け、わけもわからず気付いた時には絶命しているかもしれない。

「つーか、桜チャンはとづくに知ってると思っただぜ。一回、優が『壊脳』使うところ見てるわけだし」

「そ、そうなのか？ 一体いつ……」

「田畑邸に侵入した時ですよ。あの時、優は田畑の娘を眠らせましたよね？ あれは優が『壊脳』で脳を操って強制的に脳を睡眠状態にしたんです」

「あの時か！　そうか、だからちさちゃんも眠ってしまったんだな。つまり、夜原先輩は頭に触っていれば相手を自由自在にできるのだな……」

かつての出来事を通して桜は『壊脳』を理解した。それを確認すると、優は風牙を指差していた手を下げた。すると、今まで黙って説明を聞いていた大神が納得したような顔で口を開いた。

「ま、正直なことを言うと途中からそんな予感はしましたよ。あなたがずっと角で休んでいるのに『使命を果たした』と豪語することに違和感を感じていたのですが、『壊脳』を使ったというなら納得です。一体どんな幻を見せていたんですか？」

「あの竜巻に貫かれて体に穴が開いたオレの死体と……それを見て叫ぶ桜小路くらいだな。最初はオレの死体だけでいいと思ったが、リアリティを出すために叫び声を追加した」

「なるほど、想像できます」

風牙になす術がないと全員が理解したからか、談笑を始める優たち。平家と遊騎もそれを見ながら安堵の表情を浮かべている。桜も風牙を無力化したということを理解し、どこか安堵を感じていた。

しかし、そんな彼らとは正反対の感情を抱く者が一人。

「ふ、ふ……ふぎけるなああああああー」

風牙が激高し『風』を発動させ、部屋の中に再び突風が吹き荒れた。それは今までこの部屋で感じたものの比ではない。全力で踏ん張っていないとあつという間に体を持って行かれそうだった。

「やっべ！ 遊騎は!?!」

「ご安心を……！ 私の手の中です」

「おー」

遊騎は平家に掴まれているため何とか無事だった。桜は自慢の身体能力のおかげで一人でも十分に耐えていた。

だが、一番心配すべきは優だった。最も風牙の近くにいるため風の威力を誰よりも強く受けているからだ。すると、吹き荒れていた突風が風牙の掌に集まりだし、巨大な竜巻を作り出した。

「なにが『脳を壊した』だ！ オレは『Re-CODE・07』風牙！ お前を斃すために選ばれた存在だ！ そのオレが……！ テメーに負けるわけねえええええ！」

風牙はその手に『台風ハリケーン・アイの目』を構え、優に向かって突つ込んでいった。意表を突かれた優は反応できず立ち尽くしており、風牙はニヤリと笑った。

「感覚器官を狂わせるっていうんだったら簡単だ！ 狂わされていない間にテメーを殺せばいい！ 大方もう制限時間になったんだろう！ オレとテメーだったら間違



「な……………」

肉を斬り裂く風牙の鼓膜を揺らし、腹から胸にかけて違和感を感じた。そして、風牙の目には自分の足が真正面から見えた。上下全てが逆転し、落下しているのか下から抵抗の風を感じる。そんな今まで感じたことの無い感覚を感じていると、上から優の声が聞こえた。

「残念だが、さつきまでお前の感覚器官が正常だったのはオレが一時的に正常に戻っていただけだ。お前が異能を発動してからは全て幻。……これは「エデン」の研究結果だが、異能っていうのも体と同じで脳に支配されているらしい。脳が『使う』と処理したからこそ身体は反応して異能を発動する。だから、異能者には異能者特有の異能を使う細胞や器官が存在する。お前に幻覚を見せるついでに脳を通してそれも操り、異能を使えなくした。つまり、お前はただオレに突っ込んできただけだ」

上下が逆転した視界に、優と胸から上が無い誰かの体が映った。下からの風を受けながら優の言葉を聞いていたが、どうにも頭に入ってこない。それどころか、だんだん考えることすらできなくなってきたことに気付いた。

それに気付いているのかはわからないが、優は言葉が続けた。それはおそらく、優と風牙にしか聞こえないほど小さく、風牙もよく聞き取れなかった。

「一つ言っておくが、まだ『壊脳』の制限時間には余裕があった。時間にして約十分。

つまり、オレとお前の異エネルギーを比べるとオレの方が上ってことだ」

そう言うのと、優は胸から上が無い誰かの体を足で押し、壁の外に蹴り出した。それを見てようやく風牙は気付いた。今、自分は壁の外に出て地面に落下しており、胸から上と下で体が分かれているのだということに。

「ッ——！」

薄れゆく意識の中、風牙は歯を食いしばった。そして、残った力を全て出すつもりで叫んだ。

「これも幻か！ だとしたらくだらないな！ 待っている！ 制限時間が切れたらすぐにオレがぶつ殺してやる！ 何もかもバラバラにしてな！ ハハ！ ハハハハハハハハハハハハ！！」

せめて自分を救おうとしたのか、今の状況を『壊脳』による幻だと言いながら風牙は落ちていった。そして、風牙は完全に夜の闇に消えた。風牙を斬り捨てる時、『脳』で身体能力を強化していた優の耳には地面に落下した音も聞こえ、戦いの終わりを感じた。優は刀を鞘に納め、風牙が落ちていった方を見下ろした。

「どうやら…… THE END だったのは『コード：07』じゃなく、『Re—CODE：07』<sup>前</sup>だったようだな」

そして、優は外に背を向け戻っていった。斃した敵が言い続けた勝利の言葉とともに

に。

「——  
『R e — C O D E : 0 7』  
『……  
T<sub>ジ</sub>  
H<sub>ハ</sub>  
E<sub>エ</sub>  
E<sub>ン</sub>  
N<sub>ン</sub>  
D<sub>ド</sub>』  
「



## code : 24 憎しみの爆発

「ッ——！」

「や、夜原先輩?!」

風牙を斃し戻ってきた優だったが、突然糸が切れた人形のように膝を突いた。無理もない。風牙との戦いで彼が受けた負担はかなりのものだ。大量に血を流し、限界が近い体を異能で酷使し続けた彼の体はもう限界だろう。

「夜原先輩！ 大丈夫ですか!?! あまり無理はなさらない方が……!」

「……こんなの、歩いていけるうちに回復させる。それより……あまり近づくな」

「あ……」

優を心配して駆け寄った桜だったが、受け入れられることなくあっさりを受け流された。そして、優は鞘に納めた刀を支えにしながら歩き出した。桜は思わず手を伸ばしたが、断られるだろうと思いつぐに手は止まった。

刀を支えにしながら腰を丸くし、よろよろと歩く優。そんな優の前に、彼とは対照的に凛と背筋を伸ばして立つ平家が立ちふさがった。何か思うことがあるのか、その目は鋭く優のことを捉えていた。

「いけますか?」

一言。平家から発せられた言葉はそれだけだった。ここから先、自分たちと共に行く気はあるか……という意思の確認なのだろう。優は体力の限界を感じているのか、荒くなった呼吸を何度も繰り返しながら平家の目を見ていた。そして、ゆつくりと目を閉じて呼吸を整える。少し呼吸が落ち着きを取り戻すと、優は大きく息を吐きスツと目を開けて平家を見た。

「……はい」

同じく一言。自分には共に行く意思があることを伝えた。優の言葉を聞いた平家はただ黙って優の目を見て、優も同じように平家の目を見た。

「……ならば行きましょうか。ですが、優君は極力戦闘をしないように。いいですね?」

「……はい!」

共に行くこうとする優の意志を認め、これ以上の戦闘をしないと誓わせた平家は優に背を向けて歩き出した。進もうとする平家を見て、優はボロボロの体で進みだした。

しかし、誰かに足をかけられ優はその場で派手に転んだ。

「な——!?!」

前のめりに転び、思いきり顔を床に打ち付けた優。そんな彼を見下ろす、足をかけた張本人が冷たく言葉をかける。

「情けねーナ……。今のテメーなんていたところで何の役にも立たねーんだヨ。さつさと帰りナ」

「……………」

口に啜えた煙草から濛々と出る煙越しに優を見下ろす刻。彼による冷たい視線と言葉を受けながら、優は床に打ち付け汚れがついた顔を拭った。鋭い視線で彼を見上げながら。

「ア? なに、その目。オレに文句あるワケ?」

「…………正直に言ったらどうだ? 『聞きたいことがあった相手を斃された腹いせに八

つ当たりさせろ』……つてな」

「アア!？」

優の目に刻は苛立ちを覚えると、優はほくそ笑みながら刻を挑発した。すると、刻は眉をしかめ殺気に似た怒りをこめた視線を優にぶつけた。優も目を逸らすことなくそれを迎え撃つ。戦いは終わつたが、二人の間には不協和音が生まれつつあった。

「刻君! 夜原先輩! やめるのだ!」

それを見ていた桜が直ちに止めようとする。彼女の言葉を聞いて萎えたのか、刻は舌打ちをしながら先に進みだした。刻が離れると、優も立ち上がり再び進みだす。桜は心配そうに二人の背中を見ていたが、かける言葉が見つからずただ黙っていた。大神と遊騎も傍観に徹している。

なにやら不穏な空気が漂ってきた一行。すると、平家が唐突に振り返り口を開いた。

「刻君、あまり幼稚なことはしないでください。優君も、戦いの後で気が立っているのはわかりますが落ち着くように」

「ケツ」

「……すみません」

平家の言葉を聞き、刻は不機嫌そうに顔を逸らし、優は申し訳なさそうに目を伏せた。優と違い反省の色を見せない刻を見て、平家は仕方なさそうにため息をついた。そし

て、ポツリと呟いた。

「心配いりませんよ、刻君。あなたの知りたいことは、もう一人の『Re—CODE』に聞きましょう」

「……ハ？」

平家の言葉に、刻は立ち止まり鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。言葉の意味を刻は問いただそうとしたが、その前に桜が聞き始めた。

「へ、平家先輩！ もう一人とはどういうことですか!? この研究所にはもう一人『Re—CODE』がいるのですか!？」

「ええ。すでにあなた方も見えています」

「そうなのですか!？」

淡々と語られる言葉に桜は目を丸くした。しかし、思い当たる人物がないのか桜は頭を抱えた。

「しかし、一体誰が……? まったく見当が——」

「——雪比奈」

「え？」

大神の口から出た名を聞き、桜は首を傾げる。しかし、大神は構わず続けた。

「雪比奈のことでしょう？ あなただっただけなら知っていてもおかしくありませんしね」

「……さすが大神君。気付いていましたか」

「ど、どういふことなのだ、大神！ なぜ平家先輩が知っているとわかったのだ!？」

まるで最初から平家が知っていることに気付いていたような大神の口ぶりに、桜は大神を問い詰める。すると、大神は再び淡々と話し始めた。

「さつき仙堂が言っていたでしょう。以前、『コード：ブレイカー』と『捜シ者』の勢力が戦ったことがあると。それはオレたちの一世代前……人見がいた頃の『コード：ブレイカー』のこと。そして、平家はその頃からすでに『コード：02』だったはずですよ」

「グレートアンサーですよ、大神君。まさにその通りですよ」

「な、なんと！」

大神から語られた事実には桜はこの上ないほど目を丸くした。しかし、すぐにハツとしたように刻の顔を見た。思ったのだ。平家が『Re-CODE』のことを知っているなら、敵に聞くよりも平家に聞く方が確実ではないか、と。刻はそんな桜の視線に気付いたが、すぐに顔を逸らして煙を吐いた。

「いいんだヨ、桜ちゃん。オレは平家からは何も聞かねえ。どうせはぐらかされるし、なにより決めてんだヨ。あのことを聞くんだったら力づくで、つてナ。だからいいだ」

「刻君……」

目の前にある楽な道ではなく、あえて遠くにある茨の道を行く。何が彼をそうさせるのかはわからないが、桜はそんな刻の覚悟を受け止めそれ以上何も言わなかった。

「……ケド」

すると、刻は急にポツリと呟いた。そして次の瞬間、彼は怒りを露わにしながら平家に詰め寄った。

「アレだけは別だ！ さっさと説明なり言い訳してもらおうか、先輩！」

「おやおや」

「『おやおや』、じゃねーつつノ！」

突然、平家に対し怒りを爆発させる刻。平家は平然と構えていたが、逆にそれが刻の

怒りを増幅させているようだった。その様子を見て、桜は慌てながら事情を聞こうとした。

「ど、どうしたのだ、刻君。アレとは一体なんのことなのだ？」

「オレが教えたるし」

「遊騎君？」

慌てている桜の足元で、遊騎が尻尾を揺らしながら言った。桜が気付くと、遊騎は思いつくような口調で話し始めた。

それは刻が仙堂を斃し、大神たちの後を追おうとした時のこと。置いていかれたことに腹を立てていた刻は文句を言いながら進もうとしていた。

「つたく、ふざけんよナ！ オレが必死こいて戦つてんのに無視して先行くとか何考えてやがんだ、あいつら！」

「さつきから何回同じこと言つとんねん。……あ、あれや。ろくばんたちはあのドア



の先行ったで」

遊騎が示した方向……そこには先へと進むためのドアがあった。刻はそれを見つけると、大股歩きでドアに近付いていった。

「ったく。あいつら、追いついたらゼッター文句言っ——」

そう言いながら刻がドアノブに手をかけようとした。まさにその瞬間——

「てやああああああ?!」

「おー」

刻は身動きが取れなくなった。そこかしこから放たれた……荒縄に体中を縛られたことよって。

「荒縄のトラップの犯人なんてアンタ以外にいるわけねーダロ！ 人を置いていつた上にトラップ仕掛けるとかどんだけ性格ひねくれてんだよ！」

「あれは敵が追ってきた時用ですよ。そうですか。刻君が引つ掛かってしまいましたか。だから遅かったわけですね」

「アンタのせいだナ！」

「ななばん、大丈夫か？」

「ああ。心配するな、遊騎」

「大神の家なら行つたぞ。ちよつとシャワーを借りたりしたが」

「ちよ……！！ 代わつてください！」

場所は変わり階段。一刻も早く先に進むべきなので、話しながら進むことにしたのだ。

刻は平家に文句を言いながら、優は遊騎を肩に乗せて励まされながら進んでいた。そんな中、桜は携帯にかかってきたクラスメイトからの電話に対応しており、誤解しか生まない桜を見かねて大神が携帯を奪って代わりに電話していた。

とてもじゃないが、これから敵のいるところに向かおうとしているようには見えな  
い。大神と電話しているクラスメイトたちも、大神たちがそんな危険な場所にいるとは

思っていないだろう。

「いや、違うんです……！　今のは言葉のアヤでして皆さんが思ってるようなことは……！」

興奮気味のクラスメイトからの言葉に大神は苦闘していた。そんな大神を見て原因を作った桜は「大神がみんなと仲良く話している」と思い込み笑顔を浮かべていた。

そうこうしているうちに階段が終わり、彼らは長い廊下を歩いていた。大神は未だ誤解を解けずに電話を続けている。そうしてしばらく歩いていると、大きな扉の前に着いた。他にそれらしいものもなく、桜は特に躊躇することなくその扉を開けた。

しかし、そうして開けた扉の先には意外な人物が立っていた。

「……………」

扉の先……ロビーのような内装の部屋の中央に佇む一人の男。その姿に、桜は見覚えがあった。

「や、『捜シ者』——！」

「ッ——！」

桜の言葉に大神は電話を無視して扉の先に進んだ。

そして、背後からの攻撃を受けた。

「……避けたか」

「雪比奈——！」

開いた扉の陰に隠れ、大神の背後から攻撃を仕掛けた雪比奈。彼の攻撃である手刀は大神目掛けて放たれたが、紙一重で大神はそれに気付き避けた。だが、完全には避けきれず桜の携帯が真つ二つに裂けた。

「燃え散れ！」

そこからの大神の行動は早かった。すぐに真つ二つになった携帯を捨てて左手の手袋を外し、その手に『青い炎』を灯す。そして、雪比奈を燃え散らそうと彼に向かって手を伸ばした。

しかし、雪比奈はそれを避けることなく右手で組むように受け止めた。

「お、大神の『青い炎』で燃え散らない!？」

「……オレの異能はお前の異能を相殺できることを忘れたか？」

「チツ！」

すぐに左手を振り払い組み込まれた手を解放し距離を取る大神。雪比奈も手が解放されると、すぐに『捜シ者』の隣へと移動した。

「『青い炎』を相殺……!? 一体、どんな異能なのだ……」

「……さすがは『Re—CODE』が一人、雪比奈さんですね」

大神の『青い炎』をたやすく無効化させた雪比奈の異能に桜は驚き、平家は薄ら笑いを浮かべながら見ていた。すると、『捜シ者』の隣に立った雪比奈が眉をひそめた。

「黙れ。本当ならお前から殺してやりたいが……今回は『捜シ者』から止められている。そこで黙って見ている。お前の声を聞いていると反吐が出る」

「……………」

「せ、先輩……?？」

異様な雰囲気を漂わせる平家と雪比奈。まるで因縁に似た何かを感じた桜はただ戸惑っていた。

しかし、その雰囲気は大神の言葉により消えた。

「言え。なぜ放射性物質が無い(こ)を占拠した」

「……もはや知っても意味はない。我々の真の目的はすでに達せられた。しかし……」

平家と対峙した時は違い無表情で話す雪比奈。すると、急に先ほど大神と組んだ右手を見つめだし、ポツリと呟いた。

「……やはり、本当の力を出した時の記憶が無いのか。記憶があればすでに使っているはずだからな」

「何を言っている……?」

雪比奈の口から出た意味深な言葉に、大神は意味がわからないらしく眉をひそめた。しかし、桜は違った。「本当の力」という言葉を聞き、桜の中にはある光景が浮かんだ。それは人見と対峙した時。左手の指輪を外した時の大神だった。その時の彼の力はすさまじく、人見を完全に沈黙させた。これは桜もあの後に知ったことだが、大神にはこの時の記憶が無い。ほとんど無意識のうちに発動したのか、それとも何か理由があるのかはわからない。だが、桜にとって大神の「本当の力」とはそれ以外に思いつかなかった。

「まあいい。だが大神。お前はなぜ『捜シ者』を憎む? 『捜シ者』はお前にとって人のはず。親を失い路頭に迷っていたお前にあらゆることを教え込んだ。生きるために必要なことをな。その恩を仇で返すつもりか?」

「……………」

雪比奈の言葉が鍵となり、大神の中で過去の記憶が溢れた。それは、かつて『捜シ者』と共に過ごした記憶。

彼の笑顔が輝いていた時の記憶――

親を失い一人になった時、隣にいてくれた

言葉や勉強など、あらゆることを教えてくれた

何度も食事を共にした

大切なことを教え、大切なものをくれた

――いいかい、約束だ。人殺しはダメだ。お前が死ぬのもダメだ。だから、この手袋は人を傷つけないための“お守り”だよ。

——  
違う

——  
そこに優しさなんて存在していなかった

——  
ただ、彼は……



「だが、その全てはオレを利用するためだった——！」

震える。体がではない。それは指輪。左手の指輪がカタカタと震えていた。しかし、大神は構うことなく手を伸ばした。そうして、かつて『捜シ者』からもらった“お守り”<sup>手袋</sup>を手にした。

「だからオレは貴様がくれたこの手袋を捨てたりしない。貴様への憎しみを忘れないために——！」

「お、大神……」

手袋を手にして『捜シ者』を睨みつける大神。桜はその迫力にただ圧倒されていた。大神は自分を育ててくれた『捜シ者』に利用された……それが真実ならば、大神は『捜シ者』に裏切られたことになる。そこに一体何があったのか。桜にはまるでわからない。

「貴様だけは……貴様だけは許さない！ 『捜シ者』！」

そして、その間に大神は動いた。手袋を投げ捨て、『捜シ者』に向かって『青い炎』が灯った左手を伸ばす。左手は止められることも無く『捜シ者』の頭に向かっていき、そして――

「燃え散れ。」

『青い炎』は巨大な業火となり、『捜シ者』の顔を焼き尽くした。

「……無駄だ」

雪比奈が呟く。そして、大神は気付いた。

自分が燃え散らした『捜シ者』の顔は……彼が知るものとはまるで違うことに。

「……偽物か!」

「に、偽物?!」

『捜シ者』を燃え散らした大神の口から出た言葉に桜は目を見開いた。一瞬、信じられなかった。しかし、かつて共に過ごした大神が言うのだ。それに、これで終わりではあまりにもあつげなさすぎる。これで終わるのならばとうの昔に『捜シ者』は斃されているはずだ。

「……真の目的はすでに達せられたと言っただろう」

大神の隣で雪比奈が呟く。彼が動かないところを見ると、やはりここにいた『捜シ者』は偽物で間違いない。なら、本物はどこに行つたのか。それを問いただすため、大神は呟えた。

「雪比奈ア……! アイツは……『捜シ者』はどこにいる! 言え!」

「大神……!」

学校でもバイトでも、大神は基本的に静かだった。しかし、今の大神は激昂し、今までに無いほど荒々しい雰囲気を漂わせている。それを敏感に感じ取つたのか、『子犬』が桜の足元で小さくなって震えている。

怒鳴り散らす大神に対し、雪比奈は静かな顔で、静かな声を発した。

「わからんな……。そこまで必死になる理由が。あの人……『捜シ者』はお前の——」

同時刻、ある事件が国会議事堂で起きていた。

「そ、総理……」

「お逃げ、ください……」

普段、政治家が集まり意見を交わす国会の一室。そこで大量の人間が血を流し倒れていた。そんな死臭にまみれた場所で、椅子に座りながら対談を交わす者たちがいた。

「まったく……君にはしてやられたよ。『コード：ブレイカー』のほとんどが出払っている時に私を直接狙つてくるとはね」

一人は藤原総理。この異常な状況の中でも煙草を啜え、手と足をそれぞれ組んで何事も無かったかのように平然と言葉を発している。自分を守るエージェントは全て死体へと姿を変えた今でも、普段と変わらない様子だった。

そして、その藤原総理と向かい合うように座るもう一人の人物。藤原総理は平然としているが、その人物の姿は驚愕の一言に尽きるものだった。

「……さて、今度は何をお捜しなのかな？」

その姿はあまりにも白く、あまりにも静かで、あまりにも――

「――『捜シ者』」

その全てが大神と同じだった。

「お前の兄だろう、『捜シ者』は……」

「な……!?!」

フツと笑みを浮かべる雪比奈。それは驚きで顔を染める桜を、認めたくないであろう事実を改めて感じている大神に対する嘲笑のようにも見えた。

そんな雪比奈を前にし、大神はただ黙って彼を睨みつけていた。

## code : 25 本物

「私の可愛い弟はどうしてる？」

夜の国会議事堂。本来なら人などいるはずのないそこには椅子に腰掛ける二つの人影と地に伏せるいくつもの死体があつた。そんな状況の中、人影のうちの一つである『捜シ者』が微笑みを浮かべながらも一つの人影である藤原総理に尋ねる。彼と同じ容姿をした弟……大神のことについて。

「……元気にしているよ。それより、今回は何を捜しているのか教えてくれないかい？ 『捜シ者』」

肘掛けに肘を当て胸の前で指を組む藤原総理。啞えた煙草から出る煙が濛々と国会議事堂に漂う血の臭いの中に消えていく。彼は『捜シ者』からの問いに最低限の答えを返すと、すぐに尋ねる立場に回つた。

すると、『捜シ者』は伸ばしていた膝を折り椅子に深く腰掛けた。体育座りを連想させる座り方をしたかと思うと、彼は自分の真上を見上げた。そうした彼の目に映つたのは外の月光を国会議事堂内に迎える天窓。だが今日は月だけではない。数えるのも億劫になるほど数のある星の光も天窓は迎え入れて下にいる彼らを照らしていた。

「……星。星が綺麗だ。まるで宇宙そらの中うちにいるみたいだ」

「フウ……。この国会議事堂の天窓は——」

眩しそうに眼前に手をかざす『捜シ者』。問いに答えず星の感想を言っている彼を見  
た藤原総理は自分の問いに対する答えを聞くのを諦め、彼が興味を持つている天窓の説  
明を始める。

「鍵キが欲しいんだ。あの鍵キ……。どこにあるか知っているんだろう？ 藤原総理」

しかし、唐突に目前に立つた『捜シ者』の言葉がそれを途切れさせた。今まで膝を折つ  
て座っていたはずの彼は藤原総理の前に立ち、座っている総理を見下ろしている。

「……鍵キ? はて、なんのことかな。それに、たとえ知っていたとしても私が君に教え  
ると思っているのかい？」

『捜シ者』が急に移動したことに最初は驚いていた総理だったが、すぐに微笑みを浮か  
べた顔で強気な眼を『捜シ者』に向けた。二人の間にしばしの沈黙が流れた。それによ  
り、彼らの周りに散らばる死体から滴る血の音が国会議事堂に響き渡っていった。一滴  
……また一滴と響く血の音を聞きながら総理は目の前の『捜シ者』を見続けた。瞬まきす  
ら忘れ、視線も意識も彼に集中させる。

そして、総理の耳がもう何回目になるかわからない血の音を聞き次の音が来るであろ  
うと思った時、彼の耳には指を弾く乾いた音が聞こえた。

「——ッ！」

思わず総理は瞬きを繰り返した。消えた。目の前にいたはずの『捜シ者』が。視線を上げてみると、彼はいた。総理が座っている椅子がある場所より高い位置にある机の上に座っていた。いつ移動したのか、何が起こったのか。様々な疑問が浮かぶが総理はそれら疑問を声には出さず心の中に仕舞った。

すると、『捜シ者』は再び膝を折って背もたれなど無い机の上で大きく反り返り、眼前に手をかざした状態で天窓を見上げた。

「……そうか。元『コード・01』の人見が奪い、今はあの娘が持っているのか。桜小路 桜という娘が」

まるで知っていて当然のこのように『捜シ者』は呟いた。それは、その場にいる者の中では総理しか知らないはずのこと。もちろん、『捜シ者』だって同じだ。何より、彼は先ほどそのことを聞いてきたのだ。しかし、今の彼はそれを知っている。

「……どうやって人の心の中を覗き見たんだい？」

目の前で起こっているあり得ないことに総理は目を見開いたが、先ほどのように笑みを浮かべて何をしたのか『捜シ者』に尋ねる。しかし、彼の笑みは先ほどと全てが同じではなく、その中には明らかに警戒心が混ざっていた。

だが、『捜シ者』はそんな総理の言葉など耳に入っていないのか相も変わらず天窓越し



に夜空を見上げている。そして、まるで夜空にある星を掴もうとしているかのようにかざしていた手を天窓に向かって伸ばした。

「本当に星が綺麗だ……あの天窓が無ければもつと……。いつそ天井ごと無くしてしまおうか……」

「なっ！ 待——！」

静かに呟いた『捜シ者』の言葉に総理は思わず立ち上がったが遅かった。次の瞬間、天窓は次々とひび割れていき目を瞑りたくなるほど眩い爆発が起こった。

「さ、『捜シ者』が大神の兄上——!?!」

自分たちが追った『捜シ者』は偽物だった、という衝撃の事実の後に敵である雪比奈から語られた二つ目の衝撃の事実を桜は思わず繰り返す。大神の家で、大神が『捜シ者』に育てられたということは聞いていた。そんな相手を殺したいほど憎む大神のことがわからなかった桜だったが、今はますますわからない。大神にとって『捜シ者』はただ

の育ててくれた人ではない。彼の肉親だというのだから。

「ふーん……中々面白い話ジャン？」

「大神……」

「ろくばん……」

興味、驚愕、心配……。大神以外の『コード：ブレイカー』たちはそれぞれ抱いた感情は違えど、桜と同じように雪比奈から語られた事実を意識を向けていた。

そして、当の大神は――

「……オレに兄などいない！」

はつきりと断言し、雪比奈に殺気をぶつける。しかし、雪比奈は表情一つ変えずその場に立っていた。そして、何事も無かったかのように話し始めた。

「どうやら本気で恩を仇で返すらしいな。お前は『捜シ者』の行動の真意を理解していると思っていたが違っていらしい。今のお前は『捜シ者』にとって障害でしかない……始末させてもらう」

「……ハッ」

静かながら殺気を感じる雪比奈の言葉を受け、反応を示したのは大神ではなく刻だった。それも、どこか小馬鹿にしたような反応だったため、その場にいる全員が刻に意識を向けた。

「偉そうなこと言ってるんじゃないヨ。テメーらの真の目的が何かは知らねえが、今のテメーらが結構ヤバい状況にあるってわかってんノ？」

「……どういう意味だ」

挑発染みた刻の言葉に雪比奈は表情こそ変えないものの反応した。すると、刻は新しい煙草を出し啜えて火を点けた。そして、ニヤリと笑いながら話し始めた。

「ここにいたテロリスト連中は全員斃して、異能者の部下も一人は“エデン”に連行されて一人は斃された。しかも、末端だったとはいえテメーら『Re—CODE』の一人を斃したオレたちが相手なんだ。わかるか？ オレたちとテメーらの力はそんなに差はねえってことがヨ」

「末端……風牙のことか」

刻の言葉で新たに同じ称号を得た者のことが浮かんた雪比奈は、続けて彼の使命を思い出したのか優のを見た。優は体中が傷つき一目で重傷だとわかる。雪比奈の視線に気付いた優が警戒するが、雪比奈はすぐに視線を外し刻へと戻した。そして、静かに呟いた。

「まさかお前たち……『Re—CODE』の実力が風牙と同じだと思ってるのか？」  
「全員があだとは思ってねえヨ。ケド、その気になればすぐに追いつけられんダロ」  
雪比奈の言葉を聞いても強気な姿勢を崩さない刻。しかし、その表情は次の雪比奈の

言葉ですぐに崩れ去った。

「……………だとしたら愚かでしかないな。奴は本来なら異能も信念も何もかも……………我々『Re—CODE』には遠く及ばない存在だからな」

「……………ハ？」

自分の耳に届いた言葉を刻は疑った。先ほど自分たちの前に現れ、『Re—CODE』と名乗って優と戦った風牙が本来なら『Re—CODE』に及ばない存在という雪比奈の言葉を脳は処理することができなかつた。

「て、てことは何か？ あいつが言っていたことは全部嘘つてことかヨ？ 『Re—CODE：07』っていうのも、優を斃すために選ばれたってのも……………」

「言ったはずだ、『コード：04』。本来ならとな。奴が『Ree-CODE：07』だったことは否定しない。奴は特例だったというだけだ」

「特例……？」

雪比奈の口から出た「特例」という言葉に刻は引つ掛かった。何か特別な力があるのか、何か特別な理由があるのか。予想がいくつも浮かぶ刻だったが、真実はまるで違っていた。

「風牙を『Ree-CODE：07』としたのは『捜シ者』にしてみればただの遊び……。お前たち『コード：ブレイカー』のナンバーに合わせただけの数合わせに過ぎない。『コード：07』を斃すという使命もそのための方便にすぎない。『捜シ者』にしてみれば、『コード：07』もお前たちと同じただの異能者。何の脅威にもなりはしない。……。全て、余興というわけだ」

「な……なんや、それ！　ふざけてんのかい！」

先ほどの戦い全てを否定するかのような真実に遊騎が叫んだ。対照的に雪比奈は冷静な態度を崩さず、遊騎の叫びも静かに受け流しているようだった。しかし、遊騎は構わずに言葉をぶつけた。

「ななばんとあいつの勝負が余興やと!?　ななばんは必死こいて勝ったんや！　その勝負バカにする言うんか!?!」

「そ、そうだ！　それに風牙だつて『捜シ者』から任された使命を果たそうとしていたのだ！　お前たちはその風牙の気持ちすら弄んだというのか!?!」

「……あいつの実力はリリィたちと比べれば確かに上。だが、我々真の『Re—COD E』には及ばないというだけ。その風牙相手に手こずったというなら、『コード：07』の実力がその程度だったというだけだろう。それに……結局のところ気付かない奴が悪い」

遊騎と桜の言葉を平然と受け流す雪比奈。そして、彼の言葉が終わるのと同時にそれは突然起こった。

(あれは……!)

それにいち早く気付いたのは大神だった。雪比奈の周囲に、突然煙のようなものが現れ始めた。そして、その煙が出たところに氷が生成されていき……一斉に大神たちに襲い掛かった。

「な!? これ……氷や!」

「遊騎! オレの腕の中にいる——痛ッ!」

「桜小路さんは下がってください! 優君!」

「は、はい!」

「オレは大丈夫です!」

「チッ!」

雪比奈の周囲から放たれた氷から守るため刻は遊騎を抱える。平家は桜を守り、優は一人で耐えようと構える。大神は軽く舌打ちをしてから左手に『青い炎』を灯して自分に向かって飛んでくる氷を何とか溶かしていく。しかし、第一波を燃え散らしたと思ったらすぐに第二波が来て大神を傷つける。

「無駄だ。触れたものしか燃え散らせないお前の『青い炎』ではオレの攻撃を防ぐことはできない。全員……雪のように、静かに消え逝け」

瞬間、今まで雪比奈の周囲から放たれていた氷が部屋の至る場所から放たれた。前、横、背後、上空……それこそ全方位からだ。

（くそ……！　まるで全員、氷の渦の中に捕らわれたみてえだ……！　これが真の『R e—CODE』雪比奈……！　確かに風牙とは比べ物にならねえくらい強え……！）

手も足も出ない……今の彼らの状況はまさにそうだった。攻撃することも、近づくこともできない。さらに、こうしている間にもどんどん体は傷つけられていき寒さで体力も奪われていく。まさに風牙とは別格の強さだった。

「ッ！　まずいです、大神君が！」

雪比奈の攻撃から桜を守る平家がハツとしたように叫んだ。見ると、大神の足元に氷が張っており大神の足にも氷を伸ばしていた。大神も周囲から飛んでくる氷を相殺するのに気を取られていたのか、平家の言葉でようやく気付いた。

「しま——！」

そして、氷はそのまま大神の体を凍らせようと——

「大丈夫か、大神！」

「な……!?　何しているんですか！」

「ここは一旦引くのだ！　死んでは元も子もない！　待っている！　今すぐこの氷を砕くのだ！」

突然、桜が立札らしき物を持って大神の傍まで来た。そして、手に持ったそれを使って大神の足の氷を砕こうとした。平家のおかげで氷による傷は無い桜だったが、寒さが



力を奪っているらしく思うように砕くことができていない。さらに、持っている物を持っている部分が円ではなく平たい長方形のため、力を入れれば入れるほど指の皮膚に食い込み桜の手を傷つけていた。

そして、それを見た大神は歯を食いしばり怒鳴った。

「いい加減にしろ！」

「ッ！」

「ろくばんが怒鳴った……」

突然、怒鳴った大神に桜は驚き、他の『コード：ブレイカー』たちは信じられないという顔をした。大神は『捜シ者』の話題を聞くと殺気を振り撒くことはあったが、怒鳴るということはほとんどしない。しかし、今の大神は思いきり桜を怒鳴りつけている。それは長い間彼と共に『コード：ブレイカー』をやっている刻たちにとつても珍しい光景だったのだ。

「リリイの時といい、今といい……どうしてあなたはオレたち『悪』<sup>クズ</sup>同士の戦いに首を突っ込もうとする！ 関係ないあんたが命を懸ける必要なんてないだろ！」

「嫌なのだ！」

「なっ!?!」

戦いの最中で高揚しているのか、頭の中に今まであった疑問をぶつけるかのように言

葉をぶつけ続ける大神。すると、桜はその大神に負けないほどの大声で自分の思いをぶつけ始めた。

「私は誰かが……大神が死ぬなど！ 私の前からいなくなるのが嫌なのだ！」

「ツ——！」

大神にとつて、桜の言葉はまるで予想していない言葉だった。衝撃のあまり目を見開き、脳内の全ての思考が停止したようだった。その間にも桜は大神を助けようと氷を砕こうとする。しかし、一瞬とはいえ思考が停止したおかげで冷静になった大神の言葉がそれを止める。

「……ふざけるな。オレほどの『悪』<sup>クズ</sup>がそう簡単に死ぬわけがない。あんたはそんなオレに命の大切さとやらを教え……悪人殺しをやめさせるために生きなきゃいけないんじゃないのか？」

まだ諦めていない……そう聞こえるようにほくそ笑む大神からかけられた言葉。その言葉を聞いた桜は驚きながらも、強い意志を秘めた眼を大神に向け自分の指を大神の指と組ませた。家族と絆の証として行うという指組みだ。

「では、約束しろ。私がお前の悪人殺しを止めさせるまでお前は絶対に死なぬと。それまで私も絶対に死なぬことを私も約束する」

氷が飛び交い気温が下がった部屋の中……指が組まれた二人の手からは心地の良い

温かさを感じた。

「……へえ。あの死にたがりの大神君から出たとは思えない随分と前向きな言葉だね」

飛び交う氷の中、刻は大神の口から出た言葉に関心を抱いていた。大神は人見の時のように、突っ込んでいき無理をすることが多々ある。そのため、刻にしてみれば大神は「死にたがり」なのだ。その大神が「自分は簡単に死なない」と言ったのだ。関心も向くだろう。

その時、大神自身も不思議に感じていた。自分の言葉にはない。桜の死に対する思いの強さにだ。明らかに普通の者とは違う執着心。気付けば、大神はその疑問を口にしていた。

「……なぜ、あんたはそこまで——」

なぜそこまでする……大神がそう言おうとした時、静かな呟きが「死」を告げた。

「……エタニティゼロ  
永久凍結」

瞬間、部屋全体が凍り、吹雪が大神たちを襲った。

「やっべ……！」

「このまま我々を建物ごと凍らせるつもりですか……！」

吹雪がどンドン刻たちの体に纏わりついていく。刻の腕の中の遊騎も、いつの間にか平家が掴んでいた『子犬』も。そして、大神も。

「お、大神！」

「く……！！ 雪比奈、どこまで面倒な技を……！」

全てが支配されていく。吹雪の「白」に支配されていく。人も、空気も……何もかも。

そんな中、〃白〃の中で抗う〃黒〃が存在した。

「ツ……………！」

「……………油断したな」

〃黒〃の、決死の一太刀が雪比奈に命中した。

「よ、弱まった……………!?!」

突然、大神たちを襲った吹雪が弱まった。そのおかげで少しは動けるようになった彼らは体の雪を落としていく。

「あく、さつむ……………！ 凍え死ぬかと思ったぜ……………！」

「一体何があったんや……………?」

「おそらく雪比奈さんに何かが——」

平家があつたのか把握しようと雪比奈を見た時、彼の目には意外な光景が映つた。それは、本来ならそうすることなど不可能な者による光景……

「夜原……優……！」

「……………」

そこに立つのは、頬に小さな傷を負つた雪比奈と……彼の前で刀を振り抜いている優の姿だった。

「お前……なぜ動ける。あの吹雪の中で……」

「悪いが……敵に教える気は無い！」

そう言うと、優は片足を軸にして体を回転させた。そうして勢いをつけ、今度は確実に雪比奈の胸を捉えた一太刀を繰り出した。

「チツ……………」

しかし、雪比奈はそれに反応してみせた。すぐに刀が来る方向に手を出して巨大な氷を生成し、優の刀を防いだ。だが、優はその反動を利用して後ろに跳び距離を取った。

「優！ 邪魔するな！ こいつはオレが斃す！ お前はもう戦うなど言われただろう！」

「…………ああ、そうだな。罰は受けるさ。でもな、黙ってやられるのは嫌なんだ。お前が動けないなら…………オレが行く」

そう言うと、優は再び雪比奈に向かっていき刀を振るう。雪比奈はそれを避け、時には氷で防御しながら受けていた。

「夜原先輩、もう体は大丈夫なのか…………？」

「…………確かに優は『脳』で人間の自己回復能力を強化して傷を早く治療することはできるが、こんな短時間であそこまで回復するはずはない。…………あいつはかなり無茶をしているはずだ」

「そ、そんな！」

「だが、それ以上に不思議なのはこの吹雪の中であそこまでの動きができるということこ

と……。まるで寒さなんて感じていないみたいだ……」

そう。威力が弱まったとはいえ今は雪比奈によって吹雪が部屋を支配している。何より、吹雪の威力が弱まったのが優が攻撃をしたおかげだとしたら、先ほどの吹雪の中で彼はどうやって雪比奈に近づいたのか。それは大神たちにもわからなかった。

「ハア！」

吹雪の音に乗って金属で硬い物を打った時のような音が響く。見ると、優の刀が防御のために生成した雪比奈の氷にめり込んでいた。どうやら力づくで氷ごと雪比奈を斬ろうとしているらしい。しかし、雪比奈も守ってばかりではない。

「消え逝け」

「ッ——！」

優の周囲に先ほどの氷が現れて優に標準を合わせ、間髪入れずに優に向かって放たれた。優は後ろに跳んでそれを避け、すぐに刀を構えた。吹雪が彼の体に纏わりつくも、彼の体は何事もなにかのように立ち続ける。その証拠に、彼の体には雪がまるで付いていなかった。

「……なるほど。そういうことか」

すると、雪比奈が何かに気付いたように呟いた。それと同時に優が雪比奈に向かって跳ぶ。しかし、雪比奈は変わらず回避と防御に専念した。



「怖気づいたか!」

「慣れない挑発などするな。その様子を見る限りだと……もう時間切れのようだな」

「お前——!」

優が何か言おうとした……その瞬間、それは起こった。

「ぐっ!」

優の中で彼の心臓がドクンと跳ね、優は胸を押さえてその場から離れた。

その表情は……この上ないほど苦痛に歪んでいた。

「ぐ、く……!　ぐああああ!」

「夜原先輩!」

突然、胸を押さえて苦しみだす優。あまりの痛みに立ってられないのか、優はその

場に倒れ込んだ。すると、雪比奈が静かに告げた。

「正直驚いた。まさかお前がこのような無茶をするとはな」

「優が何をしたのか知っているのか!」

「正確には戦いの最中で悟ったのだが……。まあいい。本人が話せる状態ではないからオレが話してやろう」

大神の言葉を受け、雪比奈はそのまま静かに答え始めた。優が冒した無茶を。

「奴は『脳』の異能を使い、自分の体の中で熱エネルギーを大量に生成した。そうすることで自分の体温を人間にとって危険なレベルの一步手前……つまり、体温を限界までに高くした。だがその反面、奴の中では体温を下げる発汗作用の機能が弱くなり、体温を下げられなくなった。そんな状態が長く続けば人間の体は必ず壊れる……奴は自らの熱でオーバーヒートしたというわけだ」

「そ、そんな……!」

まさに命懸けの方法だった。先ほどの自分の戦いを穢されたからか、身を挺して皆を救おうとしたのかはわからない。どちらにしろ、彼は自分の命を挺して雪比奈を斃そうとした。

「だが、これでもう邪魔できまい。あとは……そのまま消え逝け」

「ぐっ!」

再び部屋の中を強力な吹雪が支配し始めた。刻も、遊騎も、平家も、『子犬』も、今まで戦っていた優も……そして大神も。全てが再び凍り始めていた。

——大神の体温が、どんどん下がっていく

——前にも、こんなことがあったような気がする

——ダメだ。

——もう誰も、あの時のように死んではダメなんだ

絶対にダメなのだ——!!

瞬間、眩い光が部屋の中を支配した。

「な……………!!?」

「……………アレ!?!」

消えた。今まで部屋を支配していた吹雪が、大神たちを冷たくしていった雪も、何も

かもが。信じられない現象に、雪比奈は思わず口を開け驚きに顔を染めた。

（オレの異能が消し飛んだ……!? あの子女の異能……いや、これはもつと異質な——）

その瞬間、彼の体に異常が起こった。

「ぐっ！」

体の中に何か冷たいものを感じた。まるで体の奥から冷えていくような感覚。彼はこの感覚が意味することを知っていた。

（ロストが近い……。『コード：ブレイカー』相手に異能を使いすぎたか……）

自らのロストが近いことを感じ、雪比奈は自分の体を氷のように小さく拡散させ始めた。それは、誰が見ても明らかに「逃走」だった。

「待て！ 雪比奈——え？」

大神はまだ寒さが残る体を動かし、雪比奈を追おうとする。しかし、足に何か引つ掛かり思わず足を止めて視線を下に向ける。そこには大神にとってあまり見慣れないもの……女性特有の下着があった。

「うーむ。なぜ雪比奈殿を撃退できたかはわからんが、何はともあれ助かったな」

そして、どこか違和感を感じる聞き慣れた声。なんだか声がいともより高く……聞こえる位置が低かった。大神は声が出た方向を目で追った。その過程で、彼は様々な物を

見た。

ローファー、長い靴下、スカート……女子の制服……そして……

「ところで皆はなぜ大きいのだ？ さては新たな異能か？」

制服の首部分にすっぽり収まるほど小さい……裸の桜小路 桜の姿だった。

「な、なななななな!?!」

「『にやんまる』めつちやめんこいわー」

突然起こった意味不明の現象にこの世の終わりのような顔をする刻とこんな時でもマイペースな遊騎。そして、大神は慌てながらもこの現象に思い当たることを考えていた。自分たちが能力を使いすぎると体に起こる化学や常識を逸脱した現象……そう――

「ま、まさか……ロスト!？」

「いえ、ロストは異能者に起こる現象です。彼女の場合は……珍種特有の何かでしょう」

「ん?」

慌てふためく大神たちと違い年長者らしい振る舞いを見せる平家と自分に何が起こったのか理解していない桜。戦いは終わったが、新たな問題が彼らに降りかかった。

「とりあえず、小さくなった桜小路さんは大神君に預けました。すでにお家の方には連絡しているようなので心配はないでしょう。刻君と遊騎君も心配はいりません。……それより心配なのはあなたですよ、優君」

「……………」

敵も味方もいなくなった、雪比奈と激闘を繰り広げた部屋。そこにいるのは平家と優

の二人だけだった。平家はいつものように立ち、優は顔を俯かせて座っていた。その雰囲気は……明らかに険悪。

「私は戦闘をしないように言いましたよね？ それに、まだ風牙との戦いで負った傷も完全に回復していないでしょう。その状態であのような無茶をするなど……死に行くのと同じですよ」

「……はい」

風牙との戦いの後とは違い、弱々しい返事をする優。見ると、その体は小刻みに震えている。おそらく先ほどのオーバーヒートの後遺症だろう。

そんな彼に上位の者として厳しい言葉をかける平家だったが、彼は尻目に優の姿を見ると仕方なさそうに長いため息をついた。

「まあ、あなたのおかげで少しは活路が見出せたというのも確かです。桜小路さんのアレは本人も意識してやったことではないので偶然としか言えませんし。我々も帰りましょう」

そう言いながら部屋の入口へと向かう平家。しかし、一向に優からの返事は聞こえてこない。弱つているとはいえ、二人の距離を考えると声が聞こえないということはないはずだった。

「……優君？」



平家が振り向くのとほぼ同時……優は力無くその場に倒れた。

「優君！」

優が倒れ彼に駆け寄る平家。起き上らせようと体に触れると、体が異常に熱いことに気が付いた。さらに呼吸もひどく荒い。おそらく、先ほど体温を上げたせいで熱を出したのだろう。一人で帰るのは無理だと思った平家は優を送っていくことを決めた。すると、平家はあることに気が付いた。熱を出した優が……頭を抱えるようにうづくまろうとしていることに。まるで、頭でも痛いかのように。

「——ッ！」

それを見て平家は気が付いた。優の体に起こっている異常は熱だけではない。これはある現象の前兆。その現象は……

「ロスト……ですか」

平家の眩きに返す言葉なく、ただ荒くなった呼吸が聞こえるだけだった。

## code : 26 ミニとロスト (前篇)

とある場所に建つ、どこにでもあるような普通のアパート。外はまだ暗く、月明かりが外装を照らしていた。外から見れば、そこは他と大差の無い普通のアパート。しかし、それは外見上だけであり、実際はある一室だけ部屋の主が普通ではないことから普通から完全に逸脱していた。

その部屋は、他の部屋には無い完全な防音機能を備えているのだ。そのため、中でのようなことがあってもそれを外に知らせるような音が漏れることはない。

だから、その部屋で今何が起きているのか……外から見ているだけの者にはわかるはずもなかった。

「ハア………！ ハア………！」

部屋の奥……八畳ほどのスペースがあるリビングに敷かれた布団から、かなり荒い呼吸が漏れる。それを聞けば、今寝ている人物が不調であると誰でもわかるだろう。

「う………！ ぐううう………！」

その人物は苦しそうに寝返りを打った。体中から大量の汗を流し、布団はその水分を吸ってすっかりシミになっている。さらに、その人物は頭を抱えており明らかに頭痛を

訴えていた。

「ぐ、あ……………！ ああ……………！」

何度も寝返りを繰り返しているうちに頭を抱えていた手は、押さえているかのように両目を塞いだ。まるで、自分の身にこれから起こるであろう変化から目を逸らすかのよう。

「あぐ……………！ ツ——！ うあああああああ!!」

そして、外には決して届かない叫びが部屋の中で響いた。

朝の駅……そこは時間帯によつては戦場とも化す場所。特に危険なのは朝だ。通学・通勤ラッシュと重なれば無傷で済むことは難しい。だが、今は少し早めなせいか人は少ない。おそらくラッシュの一つ手前なのだろう。

そんな駅で、何やら不審な動きを見せる学生が一人。

「……なんでこんな時まで学校に行かなきゃいけないんですか？」

顔にいくつかの傷痕があり、小言でぼそぼそと呟く学生。周りに人はいないのでそれは明らかに独り言……のはずだが、疑問形であるその言葉は明らかに誰かに向けられた言葉だった。その学生は、周りに人がいないのに誰かと会話しているのだ。

しかし、それは学生を見ている者たちから見ればだ。実際は、ちゃんと相手が存在していた。ただその相手は……

「決まっているだろ。私もお前も普通の高校生だからだ！」

学生……大神が着る制服の襟部分にある人形。いや、正確に言えば人形サイズになった……桜だ。

「せやなー。めっちゃ普通やし」

「ワ、ワフ……モゴモゴ」

さらに、その肩にはロストして猫になった遊騎を乗せ、鞆の中からはなぜか口を押えている『子犬』が顔を覗かせており、今の大神の姿は桜たちが言う普通の高校生とは大きく逸脱していた。

昨日の一件の後、大神は小さくなった桜をとりあえず家に連れて帰った。いくら常識から外れた世界にいる彼女の家族でも今回のことを受け止めることは難しいからだ。家に帰った大神は、エージェントである神田に連絡して桜が着る服を用意させた。と

言っても、おもちゃの人形用の服を適当に集めただけだ。ちなみに、今の桜は神田が急遽作成した制服を着用している。

大神にしてみれば、面倒を避けたいので元に戻るまで大人しくしていたかったのだが、桜が「学校に行く」の一点張りを決め込んだので仕方なく登校しているというわけだ。そして今……

「ママ、あのお兄ちゃんお人形さんとお話してるよー」

「しっ！ 見ちゃいけません！」

「なに、あいつ……学校に犬とか猫連れてく気なの？」

「キモ……」

「……………」

物の見事に大神は周囲の人々から非難の目で見られていた。まあ、それもそうだろう。朝の駅に、顔に傷痕がある学生が犬と猫を連れて人形を襟に潜ませ、その人形と話をしているのだ。常識人としては当然の反応だろう。

すると、そんな大神に二人の学生が近づいていった。それは、彼の事情を知る唯一の存在……刻と平家だった。

「おーおー。案の定、面白いことになってるジャン？」

「おはようございます」

「刻君！ 平家先輩！ おはようございませうなのだ！」  
やって来た刻と平家に対し普通に挨拶を交わす桜。しかし、急に首を傾げて尋ねだした。

「む……？ そういえば刻君の学校はこっちの方面ではないはずでは？」

「早起きして様子見だヨ、桜ちゃん。こんな面白いイベントほっとけないシ〜」

わざわざ早起きして、さらに自分の学校とは別方向に来てまで様子を見に来たと言う刻。だが、実際のところは大神をからかいに来たのだろう。現に刻は大神の肩を組んでちよつかいを出している。

すると、桜が急に意味のわからないことを言い出した。

「そうか？ 平家先輩から聞いたが、人が小型化するのはよくあることなのだろう？ 私は初めてだったから最初は驚いたが……今はすっかり慣れて楽しいぞ。『子犬』に乗ることができるとだぞ。参るぞ、『子犬』〜！」

もちろんそれは真つ赤な嘘だ。そんなことがあるわけない。一般人だったら誰も信じないだろう。しかし、桜は自分がそれを経験していることと持ち前の素直さで信じ込んでいた。

小さくなった今を満喫している桜が『子犬』を呼び、『子犬』は鞆から出た。そして、桜は『子犬』に乗って駅を移動し始めた。その間に、大神と刻は桜に嘘を吹き込んだ張

本人のことをジトリと見た。すると、その張本人は悪気など一切無いという顔で話し始めた。

「悪気はありませんよ。桜小路さんを混乱させないように言ったことですから。ですが、異能者でもない者がロストと同じような状態……。これは「エデン」のデータベースにもない、まさにヴァージン・ロストタイム。さすが珍種ですね」

「……ま、桜チャンの場合はオレたちと同じ24時間で元に戻るか……がポイントだろうネ」

「仮にそうでなかったとしても……あの人は不安がるとかそういうことはなさそうですし」

大神のその言葉で、彼らはほぼ同時に視線を動かして桜を見た。今の彼女は『子犬』に乗り元気に駆け回っている。確かにその様子からは不安などのマイナス的感情は一切感じられない。当面の心配は無いことを改めて感じた大神は、桜から視線を外して平家の方を見た。あることを確認するためだ。

「ところで、平家。神田から聞いたんですが、本物の『捜シ者』が国会を……総理を襲ったというのは本当ですか？ 本当だとしたら『捜シ者』の居場所と総理の安否は？」

「……総理は『コード：05』が守りました。『捜シ者』は雪比奈同様で居場所は掴めていません。また、『捜シ者』が総理と交わした会話や彼の目的についても不明です」

そう、これこそが雪比奈が言っていた真の目的。『捜シ者』の偽物と雪比奈が研究所を占拠し大神たち『コード：ブレイカー』を集め、その間に本物の『捜シ者』が国会に乗り込むというものだ。だが、平家の言うように総理は研究所にいなかった唯一の『コード：ブレイカー』である『コード：05』のおかげで無事だった。また、『捜シ者』は逃げる際に国会を大きく破損させたが、それは国会に落ちた落雷のせいと一般的には報道されている。

総理の無事と『捜シ者』の行方などは一切不明という大神にとつては後者の方が大きい意味を持つ報告を聞き、大神は大きいため息をついた。すると、今度は平家が尋ねてきた。

「ところで大神君。あなたは昨日、桜小路さんの制服も持ち帰りましたよね？」

「……………ええ。一応」

「でしたら、桜小路さんのスカートのポケットに何か入っていませんでしたか？」

……………鍵とかそういうった物が」

何か……………というわりにはかなりの的を絞った言葉だった。それもそのはず。なぜなら、その鍵こそが『捜シ者』が求める物だからだ。『捜シ者』と総理の会話や『捜シ者』の目的を知らないと言った平家だったが、実は総理から全て聞いていた。『捜シ者』は桜が人見から託された鍵を捜している、ということ。



「……昨日、桜小路さんに頼まれたので制服やスカートを整えましたけど、そんなものは入っていませんでしたよ?」

「……そうですか。なら良いのです」

大神も平家の言葉に疑問を持ったのだろう。少し腑に落ちないような顔をしながら問いに答えた。大神の返答に、平家は特に表情を変えることなく了承した。

しかし、彼らがその問答をしていたのとほぼ同時……『子犬』にある異変が起こっていた。

「モゴ、モゴ……」

「む? どうしたのだ、『子犬』。昨晚からずっと口を押えているが……変なものでも食べたか?」

実は桜が言うように、『子犬』は昨晚からずっとこの調子だった。ずっと口を押さえ、何かを我慢しているような様子をしていた。

すると、口を押さえていた手の隙間からある物が顔を出した。今しがた話題に出た……例のあれが。

「!? ワ、ワフウ! モゴモゴ……」

「?」

ほんの一瞬だったが、『子犬』の口から出てきた物……それは「渋谷」と書かれたネー

ムプレート付きの鍵キだった。あの時……人見が桜に託した鍵キが。『子犬』はすぐに鍵キを口に入れ直し、再び口を押さえ始めた。一瞬のことだったため、桜はそれが鍵キだとはわからなかった。

『子犬』の様子に疑問を抱きつつも、桜は大神たちのところへ戻った。そこで、彼女はふと浮かんだある疑問を口にした。

「そういえば……夜原先輩は来ていらつしやらないのか？」

桜の言葉を聞き、大神たちは思い出したかのようにハツとした。本来ならここにいるはずの優の姿がどこにも無い……ということに。

「確かに来ていませんね」

「まだ寝てんじゃねーノ？ あいつバカみてーにやられてたし」

「それかロストしたのかもしれないね。あいつ、昨日はかなり異能を使っていたで」

「ロスト……」

大神の口から出た「ロスト」という単語を聞き、桜の中にある疑問が浮かんだ。そして、彼女は特に物怖じせずその疑問を口にした。

「なあ、夜原先輩はロストするとうなるのだ？」

同じ『コード：ブレイカー』なら知っていて当然と思われる質問。一体どんな答えが

返ってくるのか桜は心のどこかで楽しみにしていると、意外な答えが返って来た。

「知りません」

「オレも」

「オレも知らん」

「え、ええ!!? 同じ『コード：ブレイカー』なのに知らないのか!?!」

まさかの「知らない」だった。今までのことを思い出してみると、大神、刻、遊騎がロストした時、他の『コード：ブレイカー』はその人物のロストがどのようなものか把握していた。だからこそ、優のロストも知っている……と思っていたが、答えはノーだった。

「別に興味ありませんしね。それにあいつ、ロストが近くなると姿を見せなくなりま  
すから」

「そーそー。意地でも見せねーんだヨ。よっぽど恥ずかしーロストなんじゃねーノ  
?」

「『脳』やから脳みそ丸出しになるんちゃう?」

「なにソレ、キモ過ぎ」

本当に知らないらしく、彼らはそんな談笑を始めた。しかし、なぜか諦めきれない桜はまだ答えを聞いていない人物に聞くことにした。

「平家先輩、夜原先輩と仲の良い先輩もご存じありませんか？」

「優君のロストですか？　そうですねえ……そんなになりますか？」

「はい！　あと先輩のロストも気になります！」

「私のロストは置いておきましょう。運が良ければいずれ見れますよ。まあ……」

いつもの微笑みを浮かべながら話す平家。自分のロストから話を逸らすと、急に桜から視線を外して前を見てポツリと呟いた。

「優君のロストについては……すぐにわかりますよ」

「え？」

どういう意味か桜が尋ねようとしたその瞬間、急に背後が騒がしくなった。

その人物の存在は、ある意味では洗脳のようなものだ。

一度、視界に入ったかと思うと、どうしても視界から外すことができない。頭ではわかっているけど、目が追いついてしまっているのだ。

しかし、体は近づこうとしない。その人物の歩く先にいた者は視線を向けながらも道を開けていた。おそらく、その人物の雰囲気がそうさせるのだろう。凜とした高貴さを漂わせ、見合う者しか近付けさせないような……そんな雰囲気だ。

その人物が歩を進める先……。そこには、周りから見れば異常に見える学生たちがいた。

「ッ……………」

「オオ……………」

その学生……大神と刻は思わず目を見開き、その人物を視界全体に入れようとした。朝日を浴びて艶めく腰まで伸びた黒髪、モデル顔負けの長身とバランスの良いスタイル、絹のように繊細で白い肌、桜色をした瑞々しい唇、見るものを魅了するかのような瞳……そんな美しい要素を詰め込んだかのような容姿をした、輝望高校の制服を着た女子生徒を。

「なんと、お美しい方なのだ……」

その美しさは、同性である桜も思わず見とれてしまうほどだった。一度見れば一生心に残つてもおかしくない……桜はそう感じていた。しかし、同時に疑問を感じた。彼女が着ているのは間違いなく輝望高校の制服。だが、桜は彼女のような人物を見たことが無い。ここまで美しい人物なら自然と噂が流れそうだが、そんな噂は聞いたことが無い。

すると、その女子生徒は大神たちに気付いたのか、笑顔を浮かべて近づいてきた。近づいてきたことに驚いた桜は思わず『子犬』の陰に隠れた。また、この時『子犬』も見とれていたというのは余談である。

「おはようございませう」

ニツコリと微笑み朝の挨拶を述べる女子生徒。軽く顔を斜めに動かして肩をすくめるといふ動作一つ一つが流れるようで、思わず見とれてしまうほどだった。

「…………お、おはようございませう」

「ドーマ…………」

あまり女性を意識するようなことはな大神だったが、今回ばかりは彼も見とれていたらしく少し遅れて挨拶を返す。刻に閉じては少しだらしない顔になっている。すると、女子生徒は周囲を見渡し、小首を傾げながら尋ねた。

「…………桜ちゃんは？」

「え…………？」

女子生徒の言葉に大神は思わず言葉に詰まる。まるで面識が無い生徒が突然桜のこ  
とを聞いてくるなどまるで予想していなかったからだ。

「その、桜小路さんは……………今日は体調が悪いので休みですが」

大神は少し慌てながらも、教師やクラスメイトに対しての嘘を口にした。まさかこの  
嘘を最初に言う相手が名も知らない初対面の人物になるとは思っていなかっただろう。  
だが、大神の言葉を聞いた女子生徒はクスリと笑い、笑みを浮かべながら口を開いた。

「嘘はダメだよ。…………小さくなった桜ちゃん、連れてきてるんでしょ？」 『コード：0

6』…………大神 零君」

「な…………!？」

女子生徒のその言葉は、一瞬にして大神たちの警戒心を引き出した。

「な、何言ってるん？ 小さくなったとか、『コード』とか……オレたち全然わかんないんだケド？」

「嘘はダメって言ったでしょ？ お姉さんの寧々音ちゃんに怒られちゃっても知らないよ。『コード：04』の刻君」

「テ、テメー……！」

彼女が言葉を発する度、大神たちの中で警戒心が強くなっていく。初対面のはずの人物が、桜が小さくなったことや大神たちが『コード：ブレイカー』だということを知っている……それが導き出す答えは……

「お前、『捜シ者』の部下か……！」

「……」

敵、以外には考えられない。大神と刻はスツと目を細め、殺気を女子生徒にぶつけ――

「そろそろ本当のことを言ったらどうですか？ あまり騒ぎになるようなことはやめてください、優子さん」

「平家……!!? お前、こいつが誰だか知っているのか……!!?」



今まで黙っていた平家が突然、親しげに女子生徒に話しかけ始めた。大神と刻が意味がわからず固まっていると、彼女はクスクスと笑い始めた。

「ふふ……ゴメン、ゴメン。二人は初めてだったからちよつと遊んじやった。けど、いきなり敵になつちやうとはね。真面目な大神君らしいけど」

「……平家。こいつは一体……何者なんですか?」

「おや、まだ気づきませんか? 名前を聞けばわかると思つたのですが」

「ハア? 名前? 名前でわかるんだつたら顔も知つてるつノ。大体、優子なんて知り合いオレには……優?」

平家のはつきりしない言葉を聞き、先ほど平家が口にした女子生徒の名前を口にする刻。そして、その中に聞き慣れた単語があることに気付いた。ある可能性が浮かんだ刻は信じられないのか、体を震えさせながら女子生徒を指差した。

「ま、まさか、コイツって……!」

「……ええ」

「彼女の名は夜原やはら優子ゆうこ。優君が異能をロストしたことで表に出てきた優君のもう一つの人格です」

「う……嘘ダアアアアアア!!」

信じられない驚愕の事実。それを知った刻の叫びが、すっかり人が集まり始めた駅のホームに響き渡った。

「ま、まさか……優のロストって『女になる』なんですか……!?!」

「正確に言えば違います。優君の場合、身体が女性のものになるだけでなく、その中身……人格も優子さんという女性のものとなります。ですから優君のロストは……『身体と心が女性になる』が正しいですね」

「嘘ダアアアアアア!」

愉快そうに説明する平家と驚きに顔を染める大神と刻。目を合わせただけで気を失

うほど女性が苦手な優のロストが『身体と心が女性になる』など、微塵も予想していなかったからだ。……刻に関しては個人的な感情も入っているかもしれないが。

「ななばん、ロストすると女になるんかー。だから今までロストしそうになると隠れてたんやな」

「うん、正解。まあ、ロストしている間は完全に私が表の人格だから優が隠れたくても無駄なんだけどね。今までだってロストしてからは自由に過ごしてたし」

大神と刻と違い、そんなに驚いた様子を見せない遊騎の頭を撫でながら優子は笑みを浮かべていた。すると、今の優子の言葉を聞いた大神が尋ねた。

「表の人格ということは……ロストしている間、優の人格はどうなっているんですか？」

「うーん……。普段の私と同じと考えると……寝てるんじゃない？ 私もさ、優がロストするまではずっと寝てるみたいなものだから。だから、よく漫画で見るような人格同士の会話なんてできないし。私たちができるのは記憶の共有ぐらい」

「記憶の共有……そうか。だから『コード・ブレイカー』のことや桜小路さんのことを……」

思わず敵と思い込んだほど自分たちのことを知っている優子。その種明かしを聞かされ、大神は安堵の表情を浮かべた。しかし、大神とは逆に優子はキョロキョロと周囲

に視線を動かして落ち着きが無くなっていった。そして、先ほどもした質問を再び投げかけた。

「ところで桜ちゃんは？ 私、桜ちゃんにも直接会いたいの」

「桜小路さんですか……？ でしたら、ついさつきまでこの辺に——」

と、大神は桜がいると思われる自分の足元に視線を落とそうとした。すると、耳元で威勢の良い声が聞こえてきた。

「私ならここです！ 夜原先輩……いえ、優子さん！ お会いできて嬉しいのだ！」

「ツ——！ 桜小路さん、耳元で叫ぶのはやめてください」

「……すまぬ」

小さいながらも元気の良い挨拶をする桜だったが、大神の注意を受け照れ臭そうに頭をかいた。だが、すぐに優子の方を向き両手をパタパタさせながら話しかけた。

「しかし、すごいです！ 先輩はロストするところなにもお美しい優子さんになるなんて！ 同じ女性としても羨ましいです！」

大神の耳元で優子に会ったことに対する感動を表現する桜。また叫んでいるため大神は少し迷惑そうだが、言っても無駄だと思ったのか何も言わずに耐えていた。

そしてもう一人、何やら耐えている人物が一人。

「ツ——！ ツツ——！」

あれだけ桜に会いたいと言っていた優子だったが、今は口元を押さえて驚いているの  
か目を見開いて桜をただ凝視していた。その口元から優子のもものと思われる声が聞こ  
えるが、それはどう聞いても言葉とは受け止められなかった。

「……………？ あの、優子さ——」

それに気付いた桜が声をかけようと短くなった手を伸ばす。しかし、それとほぼ同時  
に桜は大神の耳元から消えた。

「もう無理！ 我慢できない！ 小っちゃくなつた桜ちゃん可愛すぎる〜！」

「え、ええ!？」

溜まっていたものが爆発したのか……周囲のことなど気にせず、優子は小さくなつた  
桜を抱きしめ頬ずりを始めた。

「うーん、お肌スベスベでぷにぷに！ この可愛さは反則だよ、桜ちゃん！ ね？  
ね？ チューしていい!? いいよね!? 断られてもやっちゃうけど！」

「ゆ、優子さん!!? く、くすぐりたいのだ〜！」

「……………」

「……………」

あまりにも激しすぎる優子のスキンシップに桜は戸惑い、大神と刻は呆然としていた。もう一度言っておこう。ロストすると人格が変わるとはいえ、この優子はあの優なのだ。

「ま、マジかよ……………これ、優なの？ いくら人格変わったって言っても、アイツは女嫌いで……………」

「……………どうやら、ロストしたら女性も大丈夫みたいですね。しかし、先ほど彼女が言った通り本当に記憶が共有されるんだとしたら……………」

「優……………死ぬナ」

「……………そうですね」

ロストが終わった後、こうして桜と戯れる記憶を思い出した優がどんな反応をするか……………二人は考えただけで優が可哀想に思えてきた。

そうこうしていると、平家が優子の手から桜を取り上げた。優子の激しすぎるスキンシップに、桜はすっかり目を回していた。

「あー！ 返してよ、平家！ まだ桜ちゃんと遊びたいのにー！」

「すでに桜小路さんは疲れ切っていますよ。それに、あなたも無理はしないでください。あなたの体は病み上がりも同然なんですから」

「病み上がり……？ 平家、病み上がりとはどういうことですか？」

軽く暴走しかけている優子を止める平家の言葉。その中であつた「病み上がり」という単語に大神が反応を示した。そのことに対し尋ねた大神に対し、平家は桜を渡してから答えた。

「昨日の戦い中、優君は自らの体温を上げましたよね？ 実はその後遺症で、優君は高い熱を出したのです。風牙との戦いで負った傷もあり、優君は自分で動けないほどでした」

「そ、そうなのですか!? 優子さん！ 体は大丈夫なのですか!?!」

いつの間にか復活した桜が優子を心配する。すると、優子は満面の笑みを浮かべて桜の頭を撫でた。

「心配しなくても大丈夫。優がロストする直前まで発汗機能を高めてたっぷり汗かいてたし、平家からもらった“エデン”特製の薬も飲んだしね。今はすっかり大丈夫」

「だとしても無理は禁物です。……ところで、制服を着ているところを見ると授業を受ける気なんですか？」

平家が念を押し、優子の格好を見ながら尋ねた。それに対し、優子は平然と答えた。「もちろん。私にとつては学校の授業も滅多に経験できないことだからね。できるようにはしてくれているんでしょ？」

「ま、その点に関して抜かりはありません」

「何をしたんだヨ……」

「変なことではありませんよ。ただ、優子さんは優君の姉として優君の代わりに授業が受けられるようにしているというだけですよ」

「十分変だワ！」

あまりにも無茶苦茶な平家の言葉に刻は思いきり怒鳴った。しかし、平家は特に気にせず怒鳴った刻をスルーしていた。そして、唐突に口を開いた。

「……おや。どうやら電車が来たみたいです」

見ると、輝望高校の方向へと向かう電車が来た。電車は徐々にスピードを抑えていき、ゆっくりと停止した。扉が開くと、降りる者と乗る者がそれぞれ扉を過ぎる。

「……つたく。んじゃ、オレもそろそろ学校行くワ。とりあえず、夜になったらもっかい様子見に行くから」



「うむ！ またな！」

「ね、電車に乗ってる間は桜ちゃんと遊んでいいでしょ？」

「……大神君に任せます」

「オレも知りません」

そう言うのと、刻はひらひらと手を振りながら駅から去っていった。桜も小さい腕をめいっぱい振ってそれに応えた。一方、まだ桜とのスキンシップを続けようとする優子の対応に平家と大神はかなり手を焼いていた。そうしながら、大神たちは輝望高校へ向かうために電車に乗った。

小さくなった桜とロストした優……いつもとは違う二人の一日が始まろうとしていた。

## code : 27 ミニとロスト (後篇)

桜小路 桜は変わっている。それは彼女を知る者なら一度は思うことだろう。

学校中で噂になるほど美しい容姿でありながら、まるで武士のような口調で話し、人並み以上に正義感が強い。彼女と親しい者が見る姿だと、格闘技の心得があり熱い戦いを格闘系の雑誌で読んでは感動の涙を流す硬派。さらに、昼には自分の握り拳をはるかに超えるポリウームの握り飯を何個も平らげてしまうほどよく食べる。まさに、知れば知るほど驚いてしまうような人間だった。

そんな彼女自身、最近は驚きの連続だった。『コード：ブレイカー』である大神と関わったことから今まで見てこなかった社会の闇に触れ、何度も危険な目に遭った。だが、彼女はその度に類まれなる身体能力と、本人は自覚していない珍種の力でなんとか生き延びてきた。そして、どんな経験をしようとも桜は自ら何度もその危険な世界に向かつていく。大神に人殺しを止めさせる……というたった一つの目的を持って、彼女は挫けることなく進んできた。そんな彼女は今……

「……………きゆう」

かつてないほどダウンしていた。

「あれ？ 桜ちゃん寝ちゃった？ ダメじゃん、大神君。ちゃんと寝かせないと」

「寝てましたよ、すっかりと。はつきり言つて原因はあなたです」

「ナンノコト々？」

輝望高校に通う学生を多く乗せた電車の中、比較的人がいない場所に大神たちはいた。大神と優子は座り、平家はご愛読の官能所説を片手に立ち吊革でバランスを取つていた。ちなみに、その近くには窓の外を見つめる遊騎（ロスト）と口を押さえた状態で見ると、彼らがいる場所には人がいないのではなく人が寄らないのではないかと思えてくる。

「まったく……電車に乗るや否や桜小路さんを奪い取つて、そんな状態になるまで弄り倒したくせによく恍けられますね」

「弄り倒すなんて人間きが悪いなあ。ちよつと頬ずりしたりチューしたりしただけでしよ」

（体力が化け物染みている桜小路さんをダウンさせるレベルがちよつと……ですか）  
まったく悪びれる気が無い優子を見て、大神はほとんど呆れていた。

そう思うのも当然である。大神の言う通り、優子は電車に乗つたまさにその瞬間に桜を奪い取り、あの手この手で愛で始めた。最初は桜も「くすぐりたい」と笑つて済まし

ていたが、時間が経つにつれ激しきは増していった。桜も途中、何度か止めようとしたがすっかり興奮状態になった優子の耳には届かず、現在に至るといわけだ。どれだけ激しかったかという、彼女たちが乗る車両にいたほとんどの人が別車両か車両の端に移動してしまうほどだ。

女性である桜とそこまでのスキンシップを行い、まるで悪びれない適当な性格。大神は呆れながらも、そんな優子を観察するかののようにジッと見た。

「……？ どうしたの、大神君。そんなに見ても桜ちゃんは学校に着くまで返さないよ。……あ。それとも、私の魅力に悩殺されちゃった？」

取られまいと桜を乗せた手を軽く握り桜を隠したかと思うと、小悪魔的な笑みを浮かべて腕を組む形で胸を圧迫し強調しだす優子。同年代の女性と比べると大きめと思われる双山は、圧迫されたことで制服越しにその豊かな形を見せた。

そんな刺激的な光景を目の前にしながらも、大神は大きいため息をついた。そして、呆れた目で優子を見ながら口を開いた。

「……ほんと、まるで違いますね。性別も、性格も、趣向も……何もかも。あの優とは正反対です」

「せやなー。女のななばんも嫌いやないんやけど……やっぱ男のななばんと違うって思うなー」

その時、大神と遊騎の頭の中にはいつもの優の姿を描いていた。男で、真面目で、女性が悪手で、自分の命を犠牲にするかのように戦う……そんな優の姿が。

「……まーね。私は私。優は優だからね。違つて当然。別に意識してるわけじゃないんだけどさ。いつの間にか正反対になっちゃったんだよね」

すると、大神の言葉を聞いた優子はどこかしおらしく答えた。桜をそつと席に座らせ、顔を動かして窓の外の景色を見る。朝日を浴びた優子は目を少し細め、日光を遮るように手を顔の横にかざした。

「ロストする度……表の人格が私になる度、私は優の時の記憶を思い出しながらずつと思つてた。『優はもう一人の私で、私はもう一人の優なんだ』って。それってさ、言つてみれば一人で二人分の人生を経験できるってことでしょ？ だから、私が表の人格の時は優ができないことをやろう……って、無意識に思つていたのかもしれない。……それに、私が自由になれるのはロストしている一日だけ。だからその一日を精一杯楽しみたい、つて思つてるんだ」

「……………」

先ほどまでとは違い、寂しげな表情を浮かべる優子。彼女に許された自由は不定期に訪れる一日だけ。彼女がどんなに強く願つても、それを覆すことはできない。だからこそ、彼女はここまで自分のやりたいうようにやるのだろうか……大神がそう思っている

と、優子は未だダウンしている桜の頭をそつと撫でながら続けた。

「それに、平気そうに見えるけど桜ちゃんはずごく不安だと思う。その不安を無くすることはできないけど……誰かと関わっていれば少しでも楽になると思うし」

桜を起こさないよう、最低限の動きで彼女を慰めるかのように優子は頭を撫で続けた。その様子を、大神と遊騎は黙って見つめ、平家も読書をやめて見守るかのように見つめていた。

すると、遊騎がポツリと呟いた。

「……やっぱ、女になってもななばんはななばんやし」

「……そうですね」

優と優子は体を共にした別の人間……今までの話からそれを感じていた。しかし、根底にある部分……不器用な優しきは同じなのだ二人は感じていた。それを見ていた平家も、まるで安堵したかのように笑みを浮かべた。

「……と言つても」

「？」

ふと、優子が呟いた。そして、満面の笑みを浮かべて彼女は言った。

「それを大義名分にしてとことん桜ちゃんで遊びたいだけだけどね。それに私って女好きの気があるし、学校に行くのだから女子高生に囲まれたスクールライフを満喫したいからだし何よりそれを思い出して優がショック受けるのが楽しくて楽しくて……！」

言いながら、優子はどんどん顔がだらしなくなり、頬が赤くなるのと同時に息が荒くなっていった。よほど興奮しているのか、桜を撫でる手にも勢いが出てきた。

その様子を見て、再び遊騎はポツリと呟いた。

「……………やっぱ違うわ」

「……………そうですね」

「……………う、うん。頭が熱いのだ」

あまりの激しさに摩擦が生まれたのか、桜は目をこすりながらダウン状態から復活し

た。しかし、復活するにはあまりにもタイミングが悪かった。

「あ、マズイ……なんかまた興奮してきた……！　桜ちゃん、おはようのチューー！」  
「うわー！」

こうして、学校に着くまでに桜は再びダウンするまで優子のスキンシップを受け続けた。さらに、優子の興奮状態にあやかって平家が読んでいた官能小説を音読し始め、まさにカオスな状態となっていた。そんな彼らがいた車両から人がいなくなったということはいまでもない。

学校に着くと、大神は優子から桜を引き離れた。別れを惜しむ優子を平家に任せ、『子犬』と遊騎を神田がいる体育準備室に預けてから教室に向かった。ダウンから復活した桜を襟部分に潜ませ、念入りに動かないことと喋らないこと……大人しくすることを約束させると、大神は爽やかな笑顔で教室へと入っていった。

「おはようございます」

「おつはよー、大神君。あれ？　桜は一緒じゃないの？」



「今日は風邪で休みだそうです」

教室に入ると、桜の親友であるあおばが挨拶を返した。見ると、ツボミと紅葉が近くにいるので三人で雑談でもしていたのだろう。大神はいつも一緒にいる桜がいないことに疑問を感じたあおばに対し、優子には通じなかった嘘を口にした。

「嘘！　桜が風邪とか初めてじゃん！」

「桜ちゃん、大丈夫かな……」

「心配いりませんよ。放課後になったらリングゴでも買ってお見舞いに行くので」

「うわー好青年。さすが大神君」

元々桜は休むこと自体が無いため、彼女の突然の欠席にあおばたちは驚いていた。まあ、本当のことを言えばそっちの方が驚くだろうが。

大神はそんなあおばたちに対し満面の優等生スマイルを向けて席に着こうとした。しかしその時、大神の後ろには何やら悪い笑みを浮かべるクラスメイトたち（男）の姿があった。

「おい、大神！　昨日は桜小路さんと何してたんだよ！　ナニか、コラー！」

「洗いざらい吐いてもらうぜ！」

「ちよ……！」

突然、前田に羽交い絞めにされ武田に詰め寄られる。おそらく、彼らは昨日の電話の

ことを言っているのだろう。あの時は雪比奈に携帯を壊されたことで話が途中で終わったため、彼らの誤解を完全に解けずに終わっていたせいだ。大神はおおぼたちとの話に集中していたこともありされるがまだまだだったが、適当に誤解を解いてさっさと席に座ろうと思いいどうするか考え始めていた。

しかし、そこで思わぬ事態が起きた。

「あれ？　大神君、襟から何か出てるよ？」

「え——？」

おおぼから指摘を受けてすぐ、それは突然現れた……現れてしまった。

(あ……)

『……え？』

大神の襟から出てきたそれ……桜は重力に従い、そのまま机の上に落ちていった。それを見て、クラスメイトたちは目を点にし一気に教室内は静まり返った。

『さ……桜人形?!』

目の前に出てきた小さな桜を見て静まり返った教室内に、クラスメイトたちの驚きの声が響いた。それもそうだ。いくら付き合っている(勘違い)とはいえ、大神の制服から小さな桜が出てきたのだから。驚かないはずがない。せめてもの救いなのが、それを桜の人形だと勘違いしていることだろう。だが、現実はある意味ではさらに最悪な方向へと向かっていった。

「お、おい! マジかよ! ちよーソツクリじゃん! 大神はどんだけ桜小路さん好きなんだよ!」

「何だ、この素材! 肌とか本物みてーに柔らかいぜ! 大神の体温で生温けーし!」  
「ちよー!」

机に落ちた桜を、前田たちが面白がつて一斉に触りだしたのだ。桜に似ているため罪悪感があるのか、触っているのは腕や顔だけだが桜本人にしたらたまったものではないだろう。ちなみに、その桜本人はというと……

(お、大人しく……)

今の自分の状況に戸惑いながらも、必死に大神との約束を守り大人しくしていた。くすぐったいのか、よく見ると全身が小刻みに震えていた。朝の優子とのスキンシップのおかげで耐性がついたらしく、なんとか反応することを耐えていた。

「いいから返してください！」

「うるせー！ もつと遊ばせ……あ」

大神がなんとかして桜を取り返そうと、ちょうど桜を持っていた武田に詰め寄ると、取り替えさせまいと武田は桜を持った手を勢いよく大神とは反対方向に引つ込めた。しかし、勢いをつけすぎたのか手に持っていた桜をすっぽかし、桜は教室の宙を舞った。そんな時でも桜は約束を守って大人しくしており、ただただ重力に身を任せていた。

その光景を見た大神の中に、ある言葉が浮かんだ。それは、学校に着いて桜を優子から取り返してすぐに平家から言われた言葉だった。その内容は……

「今のは例外としますが、桜小路さんの取り扱いには十分に気を付けてください。体が小さくなっている分、受ける衝撃は人の何百倍になるかもしれませんから」

「さ、桜小路さん！」

「うお?!」

大神は思わず桜を呼び、ヘッドスライディングで飛び込んでいった。そして、地面に着くギリギリのところでなんとか桜をキャッチすることに成功した。瞬時に怪我が無いかチェックし桜が無事だということを確認すると、大神は安堵の息を漏らした。

だが、大神は忘れていた。クラスメイトはこの桜を……人形だと思っているということ。

「必死だ」

「人形相手にあんなに必死になるとは……」

「今、『桜小路さん』って呼んでなかった？」

人形をまるで本物のように扱う変人……今の大神はそうに見えるだろう。しかし、さらに最悪なことが起こった。

「危ないではないか！ スカートがめくれてしまうと思ったぞー！」

「ちよ……………」

堪忍袋の緒が切れたのか、桜がとうとう声を出してしまったのだ。大神は顔を真っ青にして立ち上がると、すぐにクラスメイトたちのことを見た。そこで彼が見たのは、予想通りの最悪な光景だった。

「……………え？　今、喋った？」

「桜小路さんの声……………だったよな？」

そんな都合よく桜の声が聞こえなかったということはなく、クラスメイトたちの顔は驚きに染まっていた。彼らの顔を見て、大神はなんとかしようと考えた。そして、思いついたのは苦肉の策だった。

「いいやだな……………。今のは流行りのアレですよ。ほら、ボイスメツセージ機能。聞きたい台詞を録音して何度も聞けるアレです。ほら」

今の精神状態でできる最大限の爽やかな笑顔を浮かべながら、大神は桜を持った手前に出した。それと同時に、桜にしか聞こえないくらいの小声で「何か喋ってください」と言った。しかし……………

「……………す、スカートめくられるのは嫌なのだ！」

「な?」

桜が口にしたのはまさかの言葉だった。大神はすぐに桜を引っ込め、小声で問い詰め

た。

(何言ってるんですか！　なんでこの状況でその言葉が出るんですか！)

(い、いや……さっき思わずスカートのことを言ったからつい……)

変なところで律儀な桜の性格を思い知り、大神は頭を痛めた。だが、この事件はこれ以上続くことはなかった。クラスメイトたちも桜で遊ぼうとはしなかった。そう……桜の人形を持ち歩き、「スカートめくらられるのは嫌だ」という台詞を録音している大神のことを、彼らはこう結論づけた。

「エロ神、超キモ……」

この日、大神のあだ名は晴れて「エロ神」となった。

大神たちのクラスでそんな事件が起こっているとはいざ知らず、優のクラスでもとある事件が起きていた。元々、平家が準備をしていたとはいえ、こうして優子が学校に来るのは初めてのことなのだ。そのため、担任から優のクラスメイトたちに対して説明が行われていた。

「えー、夜原君は具合が悪いらしく今日は休みだ。そこで、彼の姉である優子さんが代わりに授業を受けるそうだ。彼女は大学に通っているのだが、今日は通っている大学が休みらしいので復習も兼ねて……だそうだ。まあ、本来ならこういったことは認められないのだが、校長が認めていてな。戸惑うかもしれないが、一日だけよろしく頼む。じゃ、形だけでも自己紹介を頼む」

「はい！ いつも優君がお世話になってます！ 姉の優子です！ 今日一日だけが、よろしく願います！」

「では、あの窓際の一番後ろの席が夜原の席だ。あそこに座ってくれ」  
「はー」

担任の紹介に優子は元気よく、良い姉ぶつて答えた。人懐っこい笑顔を浮かべて自己紹介を終えると、担任に指定された席に優子は移動した。優本人がその場にいたら大変なことになるかもしれないが、クラスメイトたちの反応はそれとはまったく逆のもの



だった。

(可愛い!)

(美人!)

こうして、優子は一瞬にしてクラスメイトたち(主に男子)の心を鷲掴みにした。だが、これはある意味では始まりに過ぎなかった。本当の事件は休み時間に始まるのだつた――

「あ、あの……優子さん。ちよつといいですか?」

「ん〜? どうしたの?」

休み時間になり、優子の周りにはクラスメイトの女子が集まっていた。だが、よく見るとそれは優子の周囲にであり、離れたところからは男子が、教室の出入り口には噂を聞きつけた別のクラスの男子が優子のことを見ていた。だが、優子は男子の視線に気付くことなく女子との会話に花を咲かせていた。しかし、その会話の内容こそが事件であつた。それは、以下の通りだ。

「家では夜原君ってどんな感じなんですか？」

「うーん、基本的に私にベツタリ！ 頭とか撫でてあげると喜ぶんだ！ 可愛いよー！」

「仲良いんですね！」

「たまに一緒に寝てるしね！」

「夜原君が好きな食べ物って!？」

「私の手料理！ でも、女の子が作った物だったら何でも嬉しいって！」

今、優がいたら間違いなく発狂する……そう思わざるを得ないほど、優子は優の私生活について嘘をかましていた。また見てわかると思うが、優子に罪悪感というものは一切無い。むしろ、彼女が抱いている感情はその真逆だった。

（可愛い女子高生に囲まれて優の本性をでっち上げる……最高！）

思いつきり今の状況を楽しんでいた。そして、この日を境に学校内にある噂が流れるようになった。それは……

「夜原君ってシスコンで、本当はいろんな女の子と話したいんだけどお姉さん以外とは恥ずかしくて上手く話せないんだって！」

「可愛い〜！」

という優にとつて害にしかないものだった。

放課後。多くの生徒は部活に励み、それ以外の生徒は帰路に就く。夕陽が風景を赤く染める中、一人の生徒がベンチに座ってぐったりとしていた。その隣には、水に浮くラグビーボールに乗る小さな人影が一つあり、足元には口元を押さえている子犬がいた。

「……………」

「元気が無いぞ、大神。小さい私だって元気なのだから元気を出すのだ」

案の定、ぐったりしているのは大神で小さな人影は桜だ。そして、子犬は『子犬』だ。ちなみに、遊騎はどこかに行ってしまった。大神がくたびれている理由は、朝の一件のせいですっかり人形好きな変人という評価が定着してしまっただけでなく、他にも色々

と問題があつたからだ。隠れて食事を摂らせ、授業を受けようとする桜のサポート。一番大変だったのはトイレだったが、これについては大神は深く思い出したくないらしく頭の隅に追いやつた。そんな苦労におそらく気付いていない桜は、構わず自分の元気の良さをアピールしていた。

「確かに今日はいつともと違つたから大変だつたぞ？　でも、私はこの通り乗り越えた！　だから大神も心配するな！　大神は少し苦労性すぎるのだ」

桜の何気ない一言。大神を元気づけるために言つた言葉だつた。しかし、それに対する大神の返答は重苦しい雰囲気を纏つていた。

「……オレの苦労なんてどうでもいいんですよ」

「？」

大神の態度に桜が首を傾げた。すると、少し離れたところからあおばたちが来るのに気が付いた。桜はすぐにベンチの下に降り、ベンチの死角に隠れた。

「あ、大神君お疲れ！　桜に風邪治つたらカラオケ行こうって誘つといてね！」

「……あんま人形遊びばつかすんなよ」

「じゃあね、大神君」

「……ええ、さようなら」

朝負つた傷を抉るような言葉があつたが、大神は笑顔で彼女たちに手を振つた。する

と、あおばたちは桜のことについて話し始めた。

「さっき電話してみたんだけど、桜に電話繋がらないんだよね。すごく心配」

「そんなに風邪ひどいのかなあ？」

「こんなこと初めてだからね。ホントどーしたんだろ」

「……………」

ベンチの死角に隠れながら、桜は自分を心配するあおばたちの言葉を聞いていた。自分を心から心配してくれる親友の言葉を。

そして、桜は居ても立っても居られなくなった。

「……………あおば！ みんな！ 私はここに——」

——スッ

元気な姿を見せたい……………その一心であおばたちの前に飛び出した桜。しかし、あおばたちは誰一人として桜に気付かず、その場から去っていった。

「……………」

存在に気付いてもらえなかった……いや、今の状態で気付かれるとまずいのは分かっていた。しかし、それも桜にとつてはシヨックだった。自分の存在を認識してもらえないことがひどく寂しく、自分の体に穴が開いたかのような虚脱感に襲われた。

「……桜小路さんの携帯、壊れていますからオレの携帯でよければ使いますか？ 一応、あの人たちのアドレスも入っているのでメール送れますよ。アップにして顔だけ映せば写メを載せてもおかしくはありませんし」

「……いや、いいのだ。ありがとう、大神」

元気づけようと微笑む大神からの優しい言葉。そこに込められた自分を気遣ってくれているという大神の思いを感じながら、桜は笑顔を大神に向けた。自分は大丈夫、と伝えているかのように――

そして夜になり、誰もいなくなった体育準備室に『コード・ブレイカー』たちが集まっていた。部屋の主とも言える神田は「エデン」の仕事ではない。そのため、そこにいるのは『コード・ブレイカー』五人と小さい桜と『子犬』のみだ。ちなみに、すでに24時間経つたらしく遊騎はロストから戻っていった。

「まあ、どつちでもえーねんけど」

「急になんだヨ……。もしかしてロストのこと言ってるん？ 猫と人間比べるなんて片腹痛いっつもんだぜ？」

「片腹痛い？ よんばん、腹痛いんか？」

「痛くねーよ！」

「テメー……なに人が心配してるのにふざけてんだよ……！」

「ふ、ふざけてないヨ!? 遊騎君は優しいナー、って思ってただけ！」

相変わらずマイペースな遊騎に対し、刻はツツコンでいた。そうして遊騎がキレルと、刻は必死で彼のご機嫌を取ろうとしていた。

「優子さん、学校生活はどうでした？」

「もう最高！ 可愛い女子高生に囲まれるし色々できたし！」

「そうですか、よかったです！ ……ところで、なぜ私を膝の上に乗せているのですか？」

「桜ちゃんが元に戻った時、ハグするため……なんちゃって！」

「優子さん、もしものことがあるので時間が近くなったら降りしてください」

「ちえー」

学校生活について尋ねる桜を膝に乗せ、満面の笑みを浮かべる優子。一見、微笑ましい光景だが彼女が行った色々の内容を知ればそうは思えなくなるだろう。そして、平家から注意されて優子が桜を膝から降ろした。何かあった時のため、桜を中央にしてその周りを『コード：ブレイカー』たちが囲む形を取った。そうして数分が経ち、ついにその時は訪れた。

「そろそろです。桜小路さんが小さくなって24時間……」

腕時計を見て平家が呟くと、反射的にその場にいた全員が黙った。「カチ、カチ」と時を刻む時計の音のみが部屋に響く。全員がその音に耳を傾けながら、目は桜に集中させる。

そして、変化の無い時計の音の中、桜に変化が見られた。

「む……！」

桜が急に顔を俯かせた。一同はより一層強く桜に注目した。桜が元に戻るであろう



瞬間をその目に納めようと――

「――くちん！」

『……………』

桜がくしやみをして数秒、再び沈黙が支配する。その後、いくら待っても変化らしい変化は現れなかった。

「ちよ……………！ 珍種つてのはどーなってんだヨ！ これじゃ、一生小さいままつてもあり得るゾ!!」

「『くちん』だって……………！ 桜ちゃんたらくしやみも可愛い……………！」

「言ってる場合か！ 真面目に考えろヨ！」

桜が元に戻らないということに刻は顔を真っ青にして慌てだし、優子は呑気にくしゃみの感想を述べていた。一方、当の桜も元に戻らないことに驚いていた。しばらく呆然としたまま遠くを見ていた。

しかし、急に笑顔を見せて勢いよく両手を挙げてみせた。

「私は構わぬぞ！ この小さい姿も中々に便利なのだ！ 今の私は言ってみれば特別な存在だからな！」

だから自分は大丈夫——そう言いたげな桜の言葉を聞き、刻は冷や汗を流しながら反論した。

「いや、桜チャンこれはマジでヤバいって！ もう少し現実見ないとダメだ！ だつて、このままじゃ桜チャン一人でまともな生活も送れな——」

「テメー……水差してんじやねーぞ……？」

「桜ちゃんが良いつて言つてんでしょ……？」

「ふ、二人!? いや、僕は心配して言つてるワケでしテ……！」

状況を見れば正論である刻の反論に対し、遊騎と優子の二人は不穏なオーラを放ちながら反対した。刻は二人のあまりの迫力にたじろんでおり、今の自分の身に危険を感じていた。

「……それに」

と、刻が二人に迫られていると、桜がポツリと呟いた。彼女は顔を俯かせ、自分の胸元に手を添えていた。そして、そのまま静かに続けた。

『存在コード：ブレイカーしない者』の気持ちがあつてもわかつてよかつた』

「え……？」

予想していなかつた桜の言葉に、刻たちは思わず硬直した。そして、桜の言葉に耳を傾けた。

「……特別になつても、どんなにすごい力を入れても……本当の自分を知つても  
らえぬのはとても辛い。私は……今まで本当の意味で理解していなかつたのかもしれない  
ぬ——」

この時、桜の中ではあおばたちとの出来事が流れていた。自分はここにいる……でも、誰もそのことに気付いてくれない。今まで経験したことも無いような感情に襲われたあの時を。彼女はその時に痛感したのだ。自分の身を通して、『コード彼：ブレイカーら』  
のことを……そう——

「存在しないということとはとても……とても悲しいことなのだな」  
そう言って桜は顔を上げた。その表情は、溢れ出る感情に耐えているかのような悲しい笑顔だった。

「——すみません」

「……大神？」

突然、大神が謝罪の言葉の口にした。突然のことに桜が戸惑っていると、大神は悔しさを噛み締めているかのように左手で握り拳を作り力を入れていた。

「あなたをそんな姿にしたのはオレのせいだ……。オレがもつと強ければこんなことにはならなかったはずです……。……。オレのせいだ——！」

「大……神……。責任を、感じてたのか……。う？」

「あなたを『存在しない者』なんかには絶対にしない……。絶対に……。元の姿に戻します……。！」

まるで自分に言い聞かせるように呟く大神。桜は大神の思いを感じながら、彼のこと

を見続けた。そんな二人の様子を、他の『コード・ブレイカー』たちは静かに見ていた。その目に強い意志を秘めながら……大神と同じ思いを刻み付けているかのように。

「……仕方ありませんね。では、参りませうか」

「え？ 平家先輩、一体どこに……？」

すると、平家が突然立ち上がった。どこかに向かおうとする彼の言葉に、桜は首を傾げた。

「現代科学の最先端をいく『エデン』のデータベースにない桜小路さんの身に起こったこの現象……。それを解決するにはノット・サイエンス、バット・ブラックアーツ・イリユージョンです」

そう言うと、平家はこれから向かう場所を口にした。『エデン』も解決できない現象を解決するため、彼らが向かうべき場所は……

「というわけで、この学校の生徒会室に行きましょう」

『は？』

平家の言葉に、彼以外の全ての者が目を点にした。こうして、なぜか彼らは輝望高校生徒会室を目指すことになった。

## code : 28 生徒会室へ

すっかり辺りは暗くなり、静けさが支配している夜の校舎。そこにはもう徘徊する警備員もおらず、人一人いなくなっていた。先ほどまで大神たちがいた体育準備室にも人の影は無い。

だが、彼らは別に帰ったわけではなかった。

「ヒヤ、全部木だぜ。見た感じはキレーだけど中身はボロボロだな。……崩れたりしねーよナ？」

「ご安心ください。ここはあの関東大震災も無傷で乗り切ったほどですから。この……輝望高校旧校舎は」

電灯は無く月明かりのみで照らされた廊下、窓の縁も天井も、全てが木製の輝望高校に存在するもう一つの校舎……旧校舎に大神たちはいた。先ほどの誰もいないという話はあくまで新校舎にというわけだ。

そこを進むのは小さくなった桜を制服の襟部分に潜ませた大神、気怠そうに煙草をふかす刻、好奇心を刺激されたのかキョロキョロ周囲を見回す遊騎、相変わらずの薄ら笑いを浮かべる平家。そして……

「……………」

眉をひそめて頬を膨らますという不機嫌全開の優子だ。

「優子さん、いい加減に機嫌を直してください。これは仕方のないことなんですから」

「っーん」

「……ハア」

大神が呆れながら話しかけるが、優子は効果音を口にしながら顔を逸らした。その態度を見て、大神は本人が目の前にも関わらず大きなため息をついた。

優子が不機嫌になっている理由……それは旧校舎に移動する前に起こったある出来事のせいだった。

「いゝやゝだゝ！」

「我儘を言わないでください！ 恥ずかしくないんですか！」

「恥なんて捨てる！ なんだったら今すぐ裸になるから見逃して！」

「やめてくださいー！」

新校舎の体育準備室。そこではとある一悶着が起きていた。どういう状況かという  
と、優子が窓の開いている部分の縁にしがみついて離れようとしないので。大神は何と  
か引き剥がそうと彼女の服を引っ張るが、見事にびくともしない。ちなみに、刻たちは  
ただ黙ってその様子を傍観していた。

なぜこのようになっていたのか。その原因は、はつきり言って優子の我儘だっ  
た。

「いいじゃん！　桜ちゃんだって戻らなくなつていいって言ってるんだから！　私は  
もつとこの小つちやい桜ちゃんと遊びたいの！」

「駄目です！　早く桜小路さんを返してください！」

「やくめ〜て〜！」

つまり、優子はまだ小さくなった桜をまだ可愛がりたいのだ。そのため、桜を元に戻  
すために向かうことになった目的地向かわせまいとしているのだ。はつきり言つて  
迷惑な話である。ちなみに、その原因とも言える桜はというと……

「むぐ……ぐ、苦しい……」

そこは言い表すなら女性の中でも一部の者にしか使えないであろう特有の場所。感  
触としては柔らかい部類のため体が固定されることはなさそうだが、おそらくかなり苦



しい二つの山に挟まれた場所。……まあ、つまり胸の谷間である。優子が同年代の他の女子生徒と比べれば豊かなその体を駆使した、大神たちは決して直接桜を奪い取ることができない究極の場所というわけだ。大神が何とか優子を窓から引き剥がそうとしているのはそういうわけだ。

そうしたやり取りが始まってから数分が経ち、とうとうそこに変化が生じた。

「この……いい加減に、しろ！」

「キヤア！」

「ぬお！」

やつとこのことで大神が優子を窓から引き剥がし、優子は思いきり背中を打ち付けた。さらに、その反動で桜が優子の胸から解放された。こうして、彼らが起こした騒動は沈静化した。

ちなみに、この後は桜を取られた優子が大神の足にしがみついて桜を返すよう懇願したのだが、もちろん聞き入れてもらえずあえなく諦める結果となった。そして、彼らは改めて旧校舎に向かっていった。

「しかし、なんつーかさつきまでの大神は傍から見ると服を脱がそうとしてる変態だよナ」

「じゃあ手伝え！」

「まったく。黙りこくのはいいですけど隙を見て桜小路さんを奪って逃走、なんていうのはやめてくださいね」

「ふん！ ここまで来たんだからもう諦めたよ！ 別にいいし！ 元に戻った桜ちゃんと遊ぶから！」

「そうですか……」

まるで子供のように叫び散らす優子。大神は呆れながらもしつかりと諦めている優子に安堵感を感じ、肩の荷を下ろすかのように声を漏らした。

「つーか、さっきのやり取りは優だったら考えらんねーナ。なんていうか、優子ちゃん はちよつとめんどくさい性格してるネ」

今まで傍観に徹していた刻が頭をかきながら言った。似たような言葉を今朝の電車の中で大神たちから言われていたこともあつてか、優子は少しムツとしたような表情になつて言い返した。

「私なんかより優の方がもつとめんどくさいよ！ 助けた敵に嘘をつくような奴なんだからさー！」

「嘘……？ 嘘とはどういうことですか？」

優子が口にした「嘘」という単語を聞き、桜は大神の襟から顔を出して尋ねた。すると、優子は桜が優のことに興味を持っているのが面白くないのか、相変わらずムツとした表情で答え始めた。

「あいつはあのリリイって敵に嘘をついたわけ！ 『オレには理解してくれる人が一人いた』って！ でも、それは嘘！ あいつ、ちゃんと家族には異能とかについては理解されてたし！」

それは先日の戦いの中、優がリリイに対して言った言葉だった。異能を持った自分が普通の人間の中で生きていくことで受けた心の傷を癒してくれた人がいたと、だからこそ自分はリリイが今まで必死に生きてきたことを否定しないと。このことは話をした優とリリイしか知らないことだが、記憶を共有しているため優子も内容を知っているのだろう。

「夜原先輩が……リリイにそんなことを……？」

優がリリイと交わっていた話の内容の一端を聞き、桜は少し驚いていた。だが、それは二人がしていた話の内容を知らなかったからであり、決して優の性格について驚いて

いるのではない。それに、その真意は少し考えればわかる。

「とうとうより、それは家族にすら見捨てられたリリイに気を遣ったんでしよう。〃悪に気を遣うなんてオレは理解できませんがね」

「……バレタ」

「……やっぱめんどくさいのは優子ちゃんだったテ」

見事に大神から真意を指摘された優子は悔しそうに口を尖らせた。それを見て、刻は苦笑を浮かべて優子の肩を叩いた。

すると、桜が小さな手を精一杯に挙げて尋ねた。

「あの……優子さん。夜原先輩がリリイに言った『理解してくれる人』とは一体誰ですか？」

それは、優が家族に理解されていたことを隠していたことについてではなく、言葉の中にあった一人の人物についてだった。優が隠していた家族という集団よりも、優が口にしたというたった一人の人物の方が気になったのだろう。

「……あー、そつち？ それはねー、何というか……」

桜からの問いに優子はすぐ答えると思ったが、何やら優子は頬をかきながら口ごもり始めた。言いにくいことなのか、それとも言えない理由があるのか。どちらにせよ、優子のこの態度は桜の「気になる」という感情を増幅させるようなものだった。

「優子さん、その人は夜原先輩とはどのような関係なのですか？ ご家族とは違うんですよね？」

大神の襟から身を乗り出して質問をぶつける桜。優子は気まずそうに頬をかきながら目を逸らし、どうしようかと悩んでいた。

すると、今まで黙っていた平家が唐突に口を開いた。

「さて、皆さん。見えてきましたよ。あそこが生徒会室です」

平家が手で示す先……そこには取っ手部分の空洞に鉄の板が差し込まれ、さらにそれを南京錠と鎖で固定している巨大な扉があった。さらに天井と扉の間には旧漢字で「室会徒生」と右から書かれた看板があり、改めてこの建物が古くに建てられたのだということを実感した。そんな外観だからか、その部屋からは異様な雰囲気がかもし出されていた。

「……ここに桜小路さんを元に戻す方法が？」

「ええ。正確に言えば、この場所ではなくここにいる人こそがそうなんです」

平家の「人」という言葉に大神たちは疑問符を浮かべる。そして、平家は凜と人差し指を立てて大神たちを見渡し、その桜を元に戻せるという「人」の正体を明かした。

「我が輝望高校の生徒会長に不可能はありません。彼は『現代の魔法使い』と呼ばれる偉大な御方なのです」

「生徒会長……?」

「そういえば、入学してから一度もお見かけしたことないのだ」

「え? そーなの? オレのとは普通に入学式で挨拶したケド。つか、普通そーだ  
口」

平家が口にした「生徒会長」という人物。それは輝望高校の生徒である大神と桜ですら見たことがない人物だという。刻の言う通り、普通ならば行事などで必ずと言っていいほど挨拶をする人物のはず。そう考えると、なんだか怪しさが増してくる。

「へー、優が好きそうな雰囲気。中はどんな感じなんだろ」

興味が出たのか、先ほどとは打って変わって表情を明るくする優子。すると、大神は

ため息をついて優子のことを見た。

「別にそんな演技しなくていいですよ。どうせあなたは知っているでしょう」

「何が？」

「優は生徒会の会計です。つまり生徒会役員。だったらこの部屋の存在は知っているでしょう。記憶を共有しているから、あなたも知っているのは当然です」

そう、大神の言う通り優は生徒会の会計を務めている。生徒会室とは生徒会役員が使うからこそ生徒会室と呼べる。ならば、生徒会役員である優だつてこの部屋の存在を知っているのは当然だ。優と記憶を共有している優子もそれは同じというわけだ。

しかし、大神の言葉に優子はきよとんとしていた。そして、意外な事実を口にした。

「いや、私も優もこんな部屋があるなんてこと知らなかったよ？」

「……………え？」

「というより、私も優もこの旧校舎に入った記憶すらないし。その生徒会長ついでにも会った記憶ないしね。優がそのことについて疑問に思った記憶ならあるけど」

「……平家。どういうことですか？」

優子の「知らない」という言葉を聞き、大神はこのことについて何か知っていると思われるであろう平家に声をかけた。そして、平家は数秒ほど黙っていると静かに呟いた。

「……確かに優君は生徒会室の存在を知りません。何かこの部屋に集まる機会があれば、それに合わせて私が優君にバイトをお願いしていましたから」

「なぜそこまでするんですか？ ……優がこの部屋に來ると何かまずいことがあるんですか？」

「その理由は……後にお話ししましょう」

そう言うと、平家は大神たちから背を向けた。これで話を打ち切るかのように。

平家の言葉を効く限りだと、明らかに平家は故意に優を生徒会室から遠ざけていた。いや、もしかしたら生徒会長という人物から遠ざけていたのかもしれない。どちらにせよ、この部屋と生徒会長についてさらに不信任が増した。



「なーなー。ここ、入るんやろ？ けど鍵かかっとるで」

すると、今まで会話に入ってこなかった遊騎が唐突に口を開いた。見ると、遊騎は扉の前でしゃがみ込んで南京錠をつついていている。この扉は構造を見る限り、取っ手部分にある鉄の板を抜けば簡単に開く。だが、鉄の板を抜こうにも南京錠と鎖で固定されているため、まずはそれらを外さなければならぬ。

となれば、方法は一つだ。

「任せとけヨ。この刻様が『磁力』でぶっ壊してやる」

そう言つて刻が意気揚々と扉に近づこうと歩き出した。すると……

「ちよつと待った！ 一番乗りは私！」

「どわっ！」

突然、優子が刻を突きとばして扉に向かつていった。鍵を破壊しようとしただけなのだが、どうやら中に入ろうとしていると勘違いしているらしい。よっぽど生徒会室に対して興味があるらしい。そして、優子が扉の取っ手に手をかけようと手を伸ばし――

「え？」

『…………え？』

優子が取っ手に手をかける寸前。優子の足には踏むべき床が無くなっており、彼女はそのまま落ちていった。

「きゃー！ ちよ、痛！ た、助けて〜！」

優子が落ちたのは、生徒会室の扉の前にある穴。穴の近くには穴とほぼ同じサイズの石があるので、普段はそれで隠しているのだろう。中を覗いてみると階段のようになっている。どうやら優子は落ちた勢いそのまま転がり落ちていったようだ。

「おやおや、優子さん。よく入り口がわかりましたね」

「おー」

「感心してる場合かヨ！ つか、なんでこんなところに入り口があんだよ！」

こうして、優子の犠牲（？）によって生徒会室の入口を見つけた一行は謎の場所である生徒会室へと足を踏み入れた。

生徒会室という部屋にはある程度のイメージというものが存在する。机があり、重要なことを書くためのボードや多くの資料。物が多くあるようでした。つかりと整理されている部屋。だが、彼らが足を踏み入れた場所はそんなイメージとはかけ離れていた。

「着ぐるみがいっぱいなのだ。もう文化祭の準備を始めているのだな」

「本が大量にありますね。錬金術、超常現象、それにツチノコ？ あとこれは……平家のですね」

「なんで鍋あるんや？」

以上が輝望高校生徒会室の現状だ。着ぐるみが無造作に床に転がり、壁一面を覆い尽くすほどの巨大な本棚にはぎっしりと本が置かれている。さらに、なぜか部屋の隅にはぐつぐつと何かを煮ている鍋があった。

中は思ったより広く、普通の教室よりも天井が高い。おそらく一階と二階を繋げているのだろう。二階部分には人が通るスペースの他には一階同様に本が大量に置かれて

いる。

「この絵は……」

と、ふいに立ち止まった刻の目に入ったのは床に描かれた虫の絵だった。蝶や蜻蛉など、様々な虫の姿が描かれていた。すると、平家が刻の横に立ち静かに呟いた。

「寧々音さんの絵です。彼女は今でも地球の本が好きでよく読んでいますよ。……あの頃と同じように」

「……聞いてねーシ」

同じ生徒会役員である寧々音のことを弟である刻に話す……それだけのことなのだが、二人の間には何かそれ以上のものを感じるようだった。あの頃という意味深な言葉がそれを如実に語っていた。

「あーあ。しっかし散らかってんナ。足の踏み場が少ねーぜ。……つーか」

煙草をふかしながら生徒会室を見渡す刻。そして、刻はある場所に目をやった。生徒会室の一角……何やら薄暗い雰囲気が増える場所に。

そして、そこにはその薄暗い雰囲気を溢れさせている原因がいた。

「テメーはいつまでそこで引き籠ってんだヨ……」

「……………」

優子……ではなく、優である。中に入ると同時に戻つたらしい。彼は体育座りの状態

で一角を陣取り、薄暗い雰囲気を含れさせていた。一応持つてきていたのか、優子が着ていた女子用の制服から男子用の制服に着替えている。まあ、彼がこうなっている原因は一つしかない。

「もう終わりだ……学校に来ることがもうできない……。ここは学校じゃない、地獄でしかない……。あと忌まわしき優子<sup>アイツ</sup>の記憶は全て消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ……」

「ダメだ、こりゃ」

念仏のように同じ言葉を繰り返す優を見て、刻はやれやれと呆れていた。すると、遊騎が何やら着ぐるみを持って優の近くに向かっていった。

「ななばん、元気出すんや。ほら、『にやんまる』持つてきたで」

「ロストなんかしない、絶対しない、してたまるか……」

見ると、それは輝望高校の男子用の制服を羽織った『にやんまる』だった。おそらく文化祭で使うのだろう。だが、優は特に『にやんまる』が好きというわけでもないのだから状況は変わらずだった。すると……

「痛ッ!?!」

突然、優が大声を出した。大神たちが視線を向けると、優は頭を押さえて悶えていた。どうやら頭を殴られたらしい。もしや遊騎がキレたのではと不安に思う一行だったが、

次の瞬間にそれは間違いと知る。

「いかにも、いかにも。思わず喝を入れてしまったよ」

生徒会室に声が響いた。大神たちが知らない声が。

声など出るはずのない物から。

「そんな情けない姿は生徒会役員として許さないよ？ この生徒会長である私はね」  
そう言つて、『にやんまる』はゆっくりと立ち上がった。

「か、会長!？」

「いかにも、私が生徒会長だよ」

「ハア!？」

意味不明だった。突然、『にゃんまる』の着ぐるみが動き出し、生徒会長だと名乗った。生徒会長は今まで姿を見せなかったというのだから、ある程度おかしい人物かもしれないという予想はあつたかもしれない。だが、これは完全に予想外だ。誰が着ぐるみが生徒会長だと思うだろうか。

「いかにも、これは着ぐるみじゃないよ。私はまさに裸一貫！　これが生まれたままの姿だからね！」

「誰と話してるんですか……？」

「メタ発言というやつだから気にしないでほしいんだな。ほむほむ」

「さすがです、会長」

意味不明な発言を繰り返す会長になぜか彼を称賛する平家。大神たちの理解はほとんど追いつかなくなっていた。しかし、こんな時でも平常心を保っているのが一人。

「背中にチャックついで。『にせまる』や」

「ち、違うよ！　いかにも、これはバックホーンだよ！」

「汚れたシャツ出とつたし」

「それもバックホーンさ！」

平常心を保っている遊騎と会長のやり取り。とりあえずこれで会長の裸一貫発言は覆された。

こんな状況の中、大神たちは何とか本題に入ることを決めた。

「ふんふん。1年B組の桜小路さんが小つちやくなくなつちやつたと。うん。私もよく小つちやくなるから人間の小型化は直せるよ」

「嘘（け）け！」

本題を話した途端、会長はあっさりとは解決できると言い、刻は思いつきり反論した。人間が小型化するという話自体あり得ないのに自分もよく小さくなると言うのだけはつきり言つてこんな話を信じているのは桜だけだった。

「一体何なんだヨ、こいつは……。おい、大神。こんな奴に任せてもいいのかよ」

「だが、他に頼れる方法も無い。不安は感じるが……」

「平家さんが言うんだから安心できるとは思うんだがな」

「へッ。お前としては戻らねー方が嬉しいんじゃねーノ？」

「殺すぞ」

会長から離れ、ひそひそと疑いの言葉を交わす大神たち。一応、優もいつもの調子に



戻ったらしくそれに参加している。まあ、それもそうだろう。はっきり言って今の状況は不安だらけだ。意味がわからない人物に桜の意味がわからない現象の解決を任せようとしているのだから。

すると、彼らを生徒会室じゅくかいしつに連れてきた平家が急に口を開いた。

「みなさん疑っていますねえ。では、ここで面白いものをお見せしましょう」  
「はっ。」

平家はそう言うと、その手に『光』のムチを握りしめた。そして、体の向きを遊騎と桜に鍋を振る舞おうとする会長の方に向けた。

そして、平家は容赦することなく『光』のムチで会長を縛り上げた。

「な、何をやって——!」

刻が思わず目を見開く。しかし、平家は構わず会長をさらに縛り上げようとする。すると——

「ッ!?!」

突然、会長から思わず目を瞑ってしまったほど眩しい光が放たれた。

そして次の瞬間、驚きの光景がそこにはあった。

「これはもつ鍋だよ。さあ、みんなで食べようか」

そこには、平然と鍋を小皿に取り分けている傷一つ無い会長の姿があった。

「い、異能が消し飛んだ!」

「オイオイ……！……これって桜ちゃんの——！！」

「そうです。会長も桜小路さんと同じ……珍種という存在です。やはり珍種のことならば同じ珍種に聞くのが一番ですからね」

「な!？」

平家から語られた事実には、大神たちはこの上ないほど驚愕の表情を浮かべていた。今まで桜だけと思われていた珍種が他にもいたということと、会長がその珍種の一人ということに。大神たちがそんな予想外の事実には驚く中、平家はそのまま言葉を続けた。

「実は優君を今まで生徒会室と会長から遠ざけていたのはこれが理由です。優君を信頼していないわけではないのですが、珍種である会長の存在を多くの人間に知られるわけにはいかないのです。知る時が来るとすれば、今回のように大神君たちと一緒にと考えていました」

「……そうですか。わかりました。となると、会長が小さくなるという話も本当のようですね。ですが平家さん」

「何ですか?」

会長が珍種という事実を隠すために優を遠ざけていたという平家の言葉を、優は素直に受け入れた。しかし、彼はこれまでの話からふと浮かんだ疑問を平家に投げかけた。

「珍種という存在はそんなにも多くいるものなんですか? 会長や桜小路の他にも

……」

今まで桜一人だと思われていた珍種は他にも会長という存在がいた。ならば、その他に存在してもおかしくないと考えたのだろう。

優のこの問いに対して、平家はスツと人差し指を立てながら答えた。

「それはまだトップ・シークレットです。ただ、これだけは言っておきます。会長は私が見つけた最初の珍種。今までに確認されている珍種は会長と桜小路さんの二人だけです。そして……会長は我々『コード：ブレイカー』の存在を知る立場にある方です」

「何者だヨ、あの着ぐるみ……」

「……なんでもいい。今は桜小路さんだ」

平家の言葉に会長に対する疑問が増す大神たちだったが、大神はそれを後回しにして桜のことを解決させようと動いた。

「会長。本当に桜小路さんを元に戻していただけるんですか？」

「ん？ いかにも、いかにも」

大神は小皿に分けられた鍋を食べる会長の近くに座り、改めて桜を元に戻せるのか確認した。すると、会長は返事をしながら懐から液体が入った瓶を取り出した。

「私に不可能はないからね。桜小路さん、目を瞑って」

「むっ？」

そして、瓶の蓋を開けて中の液体を一滴だけ桜にかけた。その瞬間、眩い光が広がり、それから変化が起きるまでそれほど長い時間はかからなかった。

「お、おお？　なんだか少し大きくなってきたぞ？」

「な……!?!」

一日経つても戻らなかった桜の体。しかし、会長が出した液体を一滴浴びた途端、桜の体は少しではあるが大きくなっていった。その証拠に、小さくなった桜が今まで着ていた服が少しくつそうだった。

「これは『珍鎮水』。私の血を基に精製した血清のようなもの。世界広しと言えど人間の小型化を治せる『珍鎮水』を作れるのは私だけだろうね」

「『にせまる』すげー」

「いかにも。生徒会長だからね」

会長……つまり珍種の血を基にして作られたという『珍鎮水』。どうやら珍種特有の問題を解決するために珍種である会長を尋ねたという平家の目論見は大成功らしい。しかし、まだ桜は完全に元に戻っていない。最初と比べると少し大きくなった程度だ。

「では会長。早く桜小路さんを元の大きさに戻してください。もう少し量を増やせば戻りますよね？　お願いします」

「うーん、そうしたいのは山々なんだけどねえ……」

大神が早く桜を元に戻すよう頭を下げるが、肝心の会長は困ったように頭をかき始めた。そして、少し申し訳なさそうに続けた。

「この『珍鎮水』を作るのはすごく大変なんだよ。まさに血と涙の結晶だからね。だから……使うにはそれ相応の対価つてもものが欲しいんだよ」

「対価……？」

会長の言葉に首を傾げる大神に対し、会長は「そう」と言う到着ぐるみの山の中からある物を取り出して高々と掲げ、対価を口にした。

「大神君がこの羊の着ぐるみを着てお願いしてくれたらこの『珍鎮水』をあげちゃうよ？」

「な……!!？」

会長の手には顔を出せるタイプの羊の着ぐるみがあり、大神はそれを見て驚きの表情を浮かべた。

「ハア!? いくらなんでもそんなハズいことできるワケねーダロ!」

「ましてや大神だから……」

「ですがこの上ない好条件ですよ。さすが会長、太っ腹です」

確かに、着ぐるみを着てお願いするだけなど普通に考えれば簡単なことかもしれないが、これはあまりにも恥ずかしい。しかもやるのはあの大神だ。いくら桜を元に戻したいとしても、あのクールな大神がやるはずがない、と刻たちは思っていた。

「うんうん。大神君、桜小路さんを本当に元に戻したいのならできるよねえ?」

「ツ……!」

しかし、会長は構わずに大神に詰め寄る。そんな会長に対し、大神は苦悶の表情を浮かべる。

「バ、バカバカしい……」

そう、確かに桜を元に戻してはやりたい。だが、彼にはそこまでするほどの義理はない。

「そうですよ……あり得ません」

なぜなら、大神にとって桜とはただの観察対象でしかない。今まで助けたのだから、彼女が観察対象であるからだ。

「いくらなんでもそんなバカげたことできるわけが——！」

だが、彼の頭の中には体育準備室で聞いた桜の言葉が響いた。自分たち『存在しない者』の気持ち少しはわかかってよかった、という桜の言葉が。他社に存在を感じてもらえないことに何とも言えない寂しさを感じた彼女の言葉が。

「お、お願いしま……」

数分後、生徒会室には顔を真っ赤にしながら羊の着ぐるみを身に纏う大神の姿があった。



「ギャハハハハ！ これ傑作！ 写メろうぜ！」

「ろくばん、めっちゃ似合ってるわー」

「……南無」

「おやおや」

大神の痴態とも言える姿に刻は大笑いし、遊騎は尻尾などを引つ張つて遊び、優は「ご愁傷様」とでも言いたげに手を合わせ、平家は顎に手を当てて笑みを浮かべていた。ちなみに桜は……

「ありがとう、大神！ 私のためにそこまでしてくれるとは感激なのだ！ お前の勇姿は決して忘れないからな！ 心に刻みつけて生涯決して忘れない！」

「いえ、すぐに忘れてください……」

「ぬ？」

自分を元に戻すために体を張る大神の姿に感動の涙を流していたが、大神としては感動されても困惑するだけだった。そして、大神は約束通り会長から『珍鎮水』を受け取ろうと……

「あの、大神君？ 盛り上がってるところ悪いんだけど、実はさっきの一滴で桜小路さんは元に戻っちゃってるんだよね。少しずつ戻るんだ、コレ」

「……………え？」

見てみると、会長の隣にはすっかり元のサイズに戻って布を体に纏っている桜の姿があった。

「いや、まさか本当にやるとは思わなくてさ。すぐ戻るってこと言ったら盛り上がりに欠けると思ったんだよ。早い話……………着ぐるみのことは冗談だったんだよ、冗談。てへ☆」

……………空気が、止まった。

「……………そうですか。それはよかった」

「静けさが支配した生徒会室で大神が穏やかな声を上げる。身に纏っていた羊の着ぐるみを脱ぎながら。」

「でしたら、この着ぐるみはもう必要ありませんね」

「そう言いながら羊の着ぐるみを完全に脱いだ大神。そして……」

「テメエもろとも燃えるゴミにしてやるよ……!」

「憤怒に塗れた表情で左手の手袋を外した。」

「燃え散れ!!」

「いかにも〜!」

生徒会室に巨大な『青い炎』が出現し、会長の悲鳴に似た声が旧校舎全体に響いた。

## code : 29 訪れぬ平穩

深夜の生徒会室。そこにはまるでお祝いのように鍋を囲む者たちの姿があった。

「うむ。元に戻っても会長のもつ鍋は絶品なのだ」

その中には、いつも着ている女子用の制服を身に纏った桜の姿もあった。雪比奈との戦いの中で、小さくなるという謎の現象に陥った彼女だったが、元に戻った今となってはその時に感じていた不安も無くなったのだろう。すっかりいつもの笑顔を浮かべて鍋を味わっている。

「いかにも、もつ鍋だからね。ところで刻君は食べないのかい？」

「イヤ……もつって内臓ダロ？ オレってそういうの苦手……。噛み切れねーシ」

「何を言ってる。その噛み応えがいいんだろ？」

「そうですね。そもそも、もつとは主に牛の腸を……」

「説明しなくていいっつー！」

談笑しながら鍋に具材を足していく相変わらざる着ぐるみの会長、もつが苦手らしく手を付けようとしないう刻、そんな刻を理解できないという目で見る優と悠長にもつの説明を始める平家と、彼らも各々に鍋を楽しんでいた。それに、会話にこそ加わっていない

が遊騎も鍋を堪能していた。……なぜか着ぐるみを着て。

しかし、ただ一人……大神だけがその輪の中に加わろうとはしなかった。彼らに背を向け、項垂れるように視線を下に向けて座り込んでいた。すると、そんな大神が視界に入った桜が彼に声をかけた。

「大神、お前も食べるのだ。みんなで囲んで食べているから美味しいぞ」

「フフ……次は羊のもつなんてどうです？」

「プ……羊か！ それって着ぐるみじゃなくて生きてる方だよナ？」

「ろくばんももつ食おーや。一緒にこれ着てな」

「いかにも、優君も何か言ってあげたら？」

「触らぬ神に祟りなし、です」

桜以外に『コード：ブレイカー』たちも大神を誘うが、どこか棘を感じる言葉だった。ちなみに、遊騎が言っているこれとは彼が着ている羊の着ぐるみのことだ。まあ、彼にしてみれば他の者たちと違って悪意はないかもしれないが。

大神自身も彼が意図していることがわかっていられるらしく、彼らが声をかける度にその体を震わせた。そして、彼はゆっくりと桜たちの方を向いた。

「……何のことですか？」

輝くような優等生スマイルで。

(コイツ、さっきの件を無かつたことにしようとしてやがる……)

大神のその笑顔から、会長が何気なく言った一言により起こった一騒動のことを無かつたことにしようとしている大神の意図を感じ取った刻。見る限りだとこの上なく面白いことなのだが、自分が同じ立場でも同様のことをすると思うので刻はそれ以上何も言わなかつた。

「まー、桜小路さんも元に戻ったことだし万事解決！ みんなよかつたね！」

その原因である会長は呑気に喜んでいた。よく見ると、頭の部分には大神に燃え散らされた形跡である焦げがあつた。完全に燃え散らなかつたのは彼が珍種だからなのだろう。

「……チツ」

そんな会長に背を向け、大神は小さく舌打ちをした。それと同時に、近くにあつた何本かのボールペンを握力だけで折つた。それだけで彼の怒りが相当なものであることがわかる。

「ま、桜ちゃんも元に戻ったワケだしこれで全部解決。じゃ、オレはこれで帰るワ。おつかれさ——」

すると、刻が鞆を持って立ち上がった。そもそも、彼がここに来たのは小さくなつた桜のその後が気になつたからだ。桜が元に戻つたからここに意味も無いというわ

けだ。

そうして、刻は生徒会室から出ようと扉に向かい――

「まだ終わってはいませんかよ」

「ハ？」

部屋から出ようとしたまさにその時、いつの間にか扉の横まで移動した平家が彼を制した。そして、まだ終わっていないとはどういうことか説明を始めた。

「引き続き、大神君・刻君・遊騎君・優君の四人には桜小路さんの護衛のバイトをお願いします。……どうやら『捜シ者』のターゲットは桜小路さんらしいので」

「わ、私か!? なぜですか、平家先輩……」

それは驚きの内容だった。かつて『コード：ブレイカー』と互角以上の戦いを繰り広げた『捜シ者』が桜のことを狙っているというのだ。以前、始末屋である春人に命を狙われたことはあるが、その時はヤクザの子供が狙われているという情報があったため自分が狙われる理由に納得することはできた。だが、今回に関しては見当がつかない。桜にしてみれば、自分は『コード：ブレイカー』である大神たちと関わっていることや実家がヤクザであること以外は普通の学生と変わらないと思っているからだ。

しかし、大神たちにしてみれば思いつく理由はある。それは、彼女が珍種であるからだ。異能が効かない珍種という存在に『捜シ者』が興味を持ったとしても不思議ではな

いからだ。

それぞれが考える中、平家は目を瞑って淡々と桜が狙われる理由について答えた。

「それは『エデン』のパーフェクト・トップ・シークレットですので言えませんが……そのパーフェクト・トップ・シークレットはたとえ『コード：ブレイカー』全員の命を失つても護らなければならないものです」

「お、大神たち全員の命を失つても……!? そんなものあるワケが……」

何よりも命を大切にす桜にとって、平家の言葉は衝撃的だったかもしれない。しかし、平家にとって……いや、『エデン』にしてみればその通りなことなのだ。大神たちや桜は知らないが、雪比奈が『捜シ者』の偽物と共に研究所を占拠していた時、本物の『捜シ者』は単独で総理と対談していた。彼が捜すある物の在処を聞くために。

そのある物こそ、かつての人見との戦いで桜が託された鍵キ（今は『子犬』が口の中に入れていた）。しかし、どうやらそのことを大神たちに言う気は無いらしく、彼らの中で疑問が膨らんでいく。

「……どうせ言つても教えないでしょうから詳しく聞きませんが、それが本当だとしたらすでに『捜シ者』と『Re—CODE』は動き出しているでしょうね」

どんなに気になつても平家が教えないと思つた大神は聞くことを諦め、『捜シ者』たちの動きについて考え始めた。確かに大神の言う通り、すでに『捜シ者』たちは目的のた



めに動き出していると見て間違いないだろう。となれば、桜を隠したり逃がすのではなく、守ることが彼らがすべきことと言える。

「なあなあ、『にせまる』『にやんまる』助けたってや」

「お、ナイスアイディア！ コイツ、結構役に立ちそうだしナ！ どうせすぐに『いかにも』ってOKして——」

すると、遊騎は会長に協力を申し出た。桜を元に戻すなど、自分たちが解決できなかった問題を簡単に解決した彼を頼りに思っているのだろう。その意見には刻も賛成らしく、笑顔で会長の方を向いた。しかし——

「……悪いが手は貸せぬ」

「エ？」

会長の口から出たのは拒否の一言だった。さらに、その声色も先ほどまでとは違い重さを感じるようだった。そして、その声色のまま会長は続けた。

「『エデン』と『捜シ者』……かつての戦いを経て、私はどちらとも組まぬと誓った。

今まで通り中立の立場に立たせてもらおうよ」

「か……会長？」

そんな意味深な言葉を最後にし、桜と平家を除く『コード：ブレイカー』たちは護衛のバイトのために生徒会室を後にした。

「あの会長といい平家といい……絶対何か隠してんだろ!! 何がパーフェクト・トツプ・シークレットだヨー！」

「……とにかく、桜小路さんを護らなければならぬのは事実。それは後で考えればいい」

「そうだな。オレたちは与えられたバイトをこなしていればいい」

「へッ、相変わらず見事な犬っぷりで感心するぜ」

旧校舎から出た大神たちは、これからのことを考えるため適当に道を歩いていった。その道中、刻は『子犬』をボールのように手の上でバウンドさせながら文句を言い続け、大神と優がなんとか刻をなだめていた。ちなみに遊騎は棒で様々な物を叩いていた。

すると、彼らの話を聞いていた桜が勢いよく宣言を始めた。

「いや、心配はいらん！　こうして体が元に戻った以上、自分の身は自分で護るのだ！」

闘志を瞳に宿して宣言する桜。はつきり言つて、彼女とそれなりの時間を過ごしてきた大神たちはこうなることを予想しただろう。思えば、春人の時もそうだった。彼女は断固として大神たちに自分を護らせようとはせず、自分で自分を護ろうとしていた。

だが、彼はそれを許さなかった。いや、許せるはずが無かった。

「だから——にやわ?!」

「まったく、懲りない人ですね。でもダメですよ」

大神だ。力説する桜の頬を引つ張り、彼女の言葉を中断させた。突然のことに両手をパタパタと振る桜だったが、大神は構わず彼女の頬を引つ張り続けた。しばらくすると、大神はその手を離して桜に背を向けた。そして、視線だけを彼女に向けて今度は大

神が宣言した。

「……今度はちゃんと護ります。あなたを小さくした時のようなハマは二度としません」

「お、大神……」

今日一日、桜は大神の姿をより身近で見えてきた。だからこそ、彼がどれだけ自分のことに対して必死になっていたか、どれだけ責任を感じていたかわかった。そんな彼からの言葉は、この上なく強い覚悟を感じるようなものだった。そこに込められた覚悟を感じ取ったのか、桜はそれ以上言葉を続けようとはしなかった。

すると、代わりに刻が口を開きさっさと歩き始めた。

「あ、じゃあ大神に任せるワ。オレは一回帰って——」

「帰ったらあかん。みんなで『にやんまる』護るし」

しかし、遊騎がそれを許さなかった。刻の服の端を掴み、彼を帰そうとはしなかった。だが、刻もどうしても帰りたいらしく、遊騎を追い払おうとした。

「あのな、お前は大神の家とかで寝てたからいいケド、オレは連日連夜働きづめなワケ。だからいい加減、ベッドで寝たい——」

「……あ？」

「しつかりと『にやんまる』様をお護りさせていただきます……」

キレた遊騎の前に、刻は潔く諦めて護衛のバイトをすることに決めた。というより、決めるしかなかったというのが正しい。

すると、遊騎は元に戻って桜の前まで移動して彼女を安心させようと話し始めた。

『『にやんまる』、心配いらんで。オレたちがしつかり護つたるし』

「遊騎君……」

ただ純粋な遊騎の言葉に桜は感銘を受け、何も言わずに受け入れていた。だが、刻がそこに入り横槍を入れてきた。

「オイオイ、お前は家も財布も無いだろガ。そのくせに何を言ってるんだヨ」

確かに、遊騎が大神たちと合流した時に彼は優との問答の中でそう言っていた。財布

は無くし、家の場所は忘れ、携帯も他人にあげたと。本来ならすぐエージェントに連絡して用意させるが、今回は遊騎が断つたためまだ用意されていない。そう考えると、遊騎の言葉は少し無責任なように感じる。

しかし、遊騎は意外な言葉を口にした。

「家は無いで。でも住むトコはあんねん」

「ハア？」

言葉としては矛盾しているとしか思えない言葉。家は住む場所でしかないのに、その家は無くて住むところはあると言うのだ。思わず眉をしかめた刻の気持ちもわかるというものだ。

すると、遊騎はトコトコと歩き出してある場所を指差した。

「この奥や」

「奥って……公園かヨ!？」

遊騎が指差した先には、柵の向こうに広がる木々があった。見る限りだと、かなり大きめの公園のように見える。その公園の中にあると言っているかのような遊騎の言葉に刻が驚いていると、遊騎はさつきと柵を乗り越えて公園の中に入っていった。仕方ないので、刻たちもそれに続いて中に入っていく。

「も、もしかして野宿とか？ それは勘弁してほしいっつーか……」

「それはない……と言いたいが遊騎だからな」

自由奔放な性格のため、遊騎は一般的に場違いと言えるようなことを平然とやってのける。さらに彼はどこでも寝てしまうので、野宿というのは十分にあり得ることだった。それを心配する刻と優だったが、遊騎は構わず進み……急に立ち止まった。

「( )や、( )や。ほら、鳥の巣あんねん」

「……そうか」

枝の上にある鳥の巣を指差す遊騎。それから再びしばらく歩くと……また立ち止まった。

「( )や、( )や。ほら、噴水あんねん」

「……あつそ」

噴水を指差した遊騎は三度進み始めた。さすがに心配になったのか、大神が声をかける。

「遊騎、あなたの住むところはまだなんですか？」

「もう少しやで」

振り返らず、進みながら大神の問いに答える遊騎。それからしばらくし、また遊騎が立ち止まってある場所を指差した。

「( )や、( )や」

三度目の正直……であることを信じて、大神たちは遊騎が指差した先を見た。そこにあつたのは……像の形をした滑り台などの遊具だった。

「やっぱ予想通りじゃねーかヨ！」

最初に心配した通りの結果になったことで我慢の限界を迎えたらしく、刻は声を大にして遊騎に詰め寄り始めた。

「いい加減にしろヨ！　『エデン』の保護無しでお前みたいなお子様が一人で暮らせるワケが——」

刻に詰め寄られる遊騎だったが、彼は動じることなく指差し続けた。そして、彼は平然と言った。

「この先のアレや」

「ハア!?　この先に何が——」

遊騎の言葉に、刻は怒りを感じながらも彼が指差す方向を再び見た。そうした彼の目に入ったのは、あまりにも衝撃的なものだった。



「これがオレのすみかやし」

遊騎が指差しているのは、まさに豪邸としか呼べないほど立派で巨大な建物だった。そして次の瞬間、豪邸の中から何人も執事とメイドが現れ綺麗に並び、彼を迎えた。

「お帰りなさいませ、社長！」

「天寶院社長！」

「うん、帰ったわ」

呼ばれた彼……遊騎は平然と彼らに対し返事をした。

「ゆ、遊騎が社長オオオオ!?」

あまりにも意外な事実<sup>が</sup>に遊騎以外の全員<sup>が</sup>目を点にして驚き、その場でただただ硬直していた。

情報化などにより、現代社会では様々な場所で機械が溢れている。そのためか、特に都内では夜になつても明るい。もちろん自然のものではなく人口のものだが、昼と大して変わらぬように見える。さらにそこを歩く者たちも酔っ払いや腕を組む男女、客を呼び込むバーの店員など様々だ。

「……………」

その灯りの中、雪比奈は相変わらず厚着でフードを被っているという異様な姿でそこにいた。壁に背を預け、ただ眼前を見つめていた。感情など無いかのように冷たい目で。

そんな彼に、同じように異様な姿をした二人組が近づいていった。そして、その内の一人が親しげに彼に声をかけた。

「ヤッホー雪！ 久しぶり！ 会いたかったYO！」

「……………」

「日和に時雨……………」

話しかけてきたのは特徴的な喋り方をする赤寄りの桃色の髪色をした日和と呼ばれたツインテールの少女。髪型を保たせている左右それぞれのリボンと制服のような服

装。外見は年相応の格好をしていると思われるが、場所が場所だけにそれが逆に不似合いだ。

そして、もう一人は少女と違つて寡黙な少年。彼は白と銀の中間のような髪色をしており、しわ一つ無いスーツを着用している。ゴーグルのような形をした眼鏡が目と眉を完全に隠しているため、いまいち表情が読めない。おそらく彼が時雨だ。

「でも久しぶりの再会がこんな人混みの中なんてヤボ過ぎるYO！ それに他のみんなはまだ来てないじゃん！ 相変わらず気まぐれNE！ 日和は雪に会えただけで嬉しいけど！」

そう言うのと、日和は人懐っこそうな笑顔を浮かべて雪比奈に抱きついた。一方の雪比奈はそれを拒もうとはせず、何も言わずに受け止めていた。

その横で、時雨はしやがみ込んで細い路地に視線を向けていた。その視線の先には、ボロボロになった子猫が何匹もおり、か細い鳴き声を上げていた。すると、時雨は懐からサンドウィッチを取り出して小さくちぎり、掌に乗せて子猫たちの前に差し出した。子猫たちは最初こそ警戒していたが、一匹が口をつけると次々に集まり出し、感謝の言葉を述べているかのように鳴きながらサンドウィッチを口にしていた。

「へへへ」

「ああ？ この酔っ払いが！ うぜえんだよ！」

「ぎゃあー！」

すると、彼らの後ろで一騒動が起きていた。どうやら酔っぱらった男性が誤つて若者にぶつかつてしまつたらしい。若者は怒りに任せて男性を殴り飛ばした。さらに、地べたに倒れた男性を仲間と共に囲んで何度も蹴り始めた。男性は何とか許してもらおうと謝るが、若者たちはやめようとはしない。

「やだ、ケンカ？」

「関わない方がいい、ほつとけよ」

通行人のほとんどが似たようなことを言い、誰も彼らを止めようとはしなかつた。それは雪比奈たちも同様である。日和は雪比奈に抱きついたままその様子を見ており、時雨は子猫にサンドウィッチを与えている。

しかし、若者が男性を蹴る音が恐怖に感じたのか、子猫たちは震えながら時雨から離れていった。時雨は離れていく子猫の後ろ姿を黙つて見ていたが、その間も若者は男性を攻め続ける。

「このクズが！ 死ね！」

「すみません、すみません！ どうか許して——」

「うっせえ！」

すっかり酔いも覚めて謝罪の言葉を並べる男性だったが、若者は聞き入れずに拳を構

えて殴りかかる。しかし、その拳は男性に届かなかつた。突然、割つて入つて来た……時雨に止められたことで。

「ああ!?　なんだ、テメエは！　邪魔するとテメエから殺すぞ！」

「た、助けて……助けてください……」

時雨は前から若者に胸倉を掴まれ、後ろから男性に縋り付くように服の端を掴まれた。だが、時雨はそのどちらの言葉にも答えなかつた。ただ、静かに一言だけ言つた。

「猫のエサの邪魔だ」

「あ?　何言つて——」

瞬間、若者たちの体が細切れにされたかのようにバラバラになつた。

「……………え？」

突然、目の前で起こった出来事に、男性は意味がわからず呆然とする。そして、何かあつたか理解すると震えた手で時雨を指差した。

「あ、あんた……………今、殺し——」

男性の言葉の途中、時雨を指差していた男性の手の手首から先が男性の体から離れた。そんな男性を背に、時雨は眼鏡を外しながら再び口を開いた。

「……………言つたはずだ」

時雨が口を開いている間に、男性の体中が徐々にずれていった。男性は恐怖を感じて声にならない悲鳴を上げていたがすでに遅かった。

「邪魔だ」

深く刻まれた隈に鋭く冷たい眼。左の眉は途中で途切れ、バーコードが刻まれている。その時雨の冷たい眼が男性を射抜いたのとほぼ同時、男性の体は一瞬で若者たちと同様にバラバラになり血の雨となって時雨の体に降り注いだ。

「い、いやあああああ！」

「人殺しいい！！」

男性をバラバラにした方法は謎だ。しかし、誰が見てもそれを時雨がやったというのは明らかだった。そのため、それを見ていた多くの一般人は恐怖を感じて一斉に逃げ出した。しかし、その中で唯一逃げ出さない者が二人。日和と雪比奈だ。彼らは何もなかったかのようにその場にいた。

「やだMO〜！ 時雨！ 服に返り血ついちゃったじゃない！」

それどころか、日和は服に血がついたことに文句を言い始めた。だが、そこには慌てる様子などまったくない。つまり、彼らにとっては今のような光景が珍しいことではないということ。その証拠に、男性の返り血を最も浴びた時雨はその返り血を拭おうともせず、再び子猫たちのところへ向かい、サンドウィッチを与えた。

子猫たちは音が無くなったからか再び集まり出し、時雨の手からサンドウィッチを食していた。時雨は返り血が甲についた手で子猫の頭を撫でる。しかし、その眼は変わら

ず冷たく鋭いままだった。

「……行くぞ、時雨」

背後から彼を雪比奈が時雨を呼んだ。時雨はサンドウィッチを道に置くと、立ち上がった。子猫たちに背を向けた。そして、雪比奈と日和と共に歩き始めた。

『捜シ者』が我々を待っている。捜し求めたものを手に入れるために」

「……わかつている」

雪比奈の言葉に時雨は淡々と答える。そして、時雨は足早に歩き出して二人の前を歩き始め、自分たちの目的を口にした。

「桜小路 桜が持つ鍵<sup>キ</sup>は、『捜シ者』の忠実なる戦士である我々『R e — C O D E』が頂戴する」



夜の街に悲鳴が響き渡る。それは確実に、これから起こるであろう戦いの始まりを知らせる鐘となった。

## 番外篇

## code : extra 6 If stories

もしも大神の異能が『変換』だったら

桜「刻君、大神の異能とは何なのだ？」

刻「大神の異能？ んん、口で説明すつとメンドクせーんだよな」

桜「説明が難しい異能なのか？ では、百聞は一見に如かず！ 実際に見てみるのだ」  
刻「……後悔しないといいケド」

桜「？」

く夜く

零「オラオラア！ あんだけ偉そうにしてたくせに何だ、その逃げ腰はあ！ もっと

抵抗してみろよお！」

悪「ひいひいひい！」

零「さくで、問題です。このオレ、大神 零は……はたして何をやっているでしょう

！ 答えは……ベクトル『変換』だ、クソ野郎オオオ！」

刻「大神の異能は『変換』。力の向きであるベクトルを『変換』することで、ちよつと触っただけでもトンデモナー威力になるし、どんな攻撃も跳ね返せる。そう考えると万全の異能だが……」

零「さあ！ スクラップにしてやるぜえ！ ハハハアア！」

刻「異能を使いだすとなぜか狂暴になるのが唯一にして最大の問題なんだよナ……」

零「オラア！ まだ終わらねえぜ！」

桜「やめるのだ！ 大神！」

零「ああ？ 誰かと思えば珍種じゃねえか。オレの邪魔すんじゃねえよ！」

桜「やめぬ！ お前のはただの暴力だ！ 私の拳で目を覚ませ！ 大神！」

零「ハハハ！ テメエなんかオレに勝てるわけ——ぐはあ！」

桜「痛みを感じ！ 心を入れ替えろ！ 大神イ！ 今のお前を見る！ お前は強いが、弱いのだ！」

零「くそおお！ 異能が使えねえええええええ！」

刻「ナルホド……異能が効かなくて腕つぶしが強い桜チャンは大神にとって最悪の敵ってワケだ」

零「ちくしよおおお！」

もしも桜が生徒会長だったら

零「おはようございます、桜小路さん。今日は先に行っていたんですね。何か急な用事でも——」

桜「違う！」

零「は？」

桜「この腕章が目に入らぬか、大神！　今の私はただの桜小路　桜ではない！　生徒会長の桜小路　桜だ！」

零「急にどうしたんですか？　また刻に騙されたんですか？」

桜「刻君は関係ない！　実は昨日……」

く回想く

桜「む？　私の下駄箱に封筒が入っているぞ。何々？」

『桜小路くんへ　突然ですまないけど、明日一日だけ私の代わりに生徒会長をやってもらいたいんだな。急用ができてしまって明日はどうしても学校にすることができない』

んだ。封筒の中に腕章が入っているから明日一日、それを着けて生徒会長として活動してね！ いかにも、生徒会長より」

く終わりく

桜「というわけだ」

零（学校にいたところで姿見せなくせに何言ってるんだ……）

桜「だから大神。今日一日は私のことは『会長』と呼ぶのだ」

零「わかりましたよ、会長。とりあえず教室に行きましょう」

桜「いや、私はここで生徒たちの服装をチェックしているのだ。生徒たちの服装をチェックして校則に沿った服装に直させるのも生徒会の仕事だと平家先輩から教わった」

零（余計なことを……）

平「フッフ……」コツソリ

桜「だから私はここにいる。心配せずとも授業には遅れない。それに——ん？」

零「いや、オレはそんな心配をしているのではなく——」

桜「大神イ！」

零「な、なんですか？」

桜「なんだ、その制服の着方は！ ちゃんと上までボタンを閉めろ！」

零「今更ですね……。上まで閉めると苦しいんですよ。別にいいじゃないですか」

桜「よくない！ 私を見ろ！ そのような着崩しは一切していいぞ！ なぜなら私は！」

零「生徒会長だから、でしょう。もうそれはいいですから——」

桜「締まりの悪い女とは思われたくないからな！」

零「……は？」

桜「む、またか。どうもこの腕章を着けてから上手く言葉が出ないな。大神の言う通り生徒会長だからと言おうと思ったのに」

零「今すぐ外してください！」

もしも刻が正義感溢れる少年だったら

悪「ヒヤッハー！ どんどんぶっ壊してやるぜ！」

桜「ヤクザが暴れているのだ！ 大神！ 早く止めるのだ！」

零「止める必要はありません。全員、燃え散らします」

刻「やめろ！」

零「刻……？」

刻「奴らを燃え散らしたら奴らの仲間が仕返しに来る！ そうやって戦火は広がっていくんだ！ そうまでして戦争がしたいのか！ アンタたちは！」

桜「おお！ 刻君が正義に目覚めたのだ！ 大神も見習え！」

零「どうしたんですか？ 刻。桜小路さんのバカが移りましたか？」

桜「なんだと！」

刻「そうやって人をバカにして！ お前にその権利があるのか！ こうなったら意地でもお前にわからせてやる！ お前自身の愚かしさを！ 今！ ここで！」

零「フ、面白い。後悔するなよ、刻！」

刻「オレの『磁力』なら、どんな奴が相手でも！」

零「燃え散れ！」

桜「あー！ なぜいつもこうなるのだ！ 二人とも！ やめるのだ！」

ギヤー ギヤー

悪「あの……オレたち無視？」

もしも遊騎がもつさりしてたら

遊「……………」

刻「相変わらず遊騎は何考えてつかわかんねーナ。少しは何か喋れよ」

遊「……めんどい」

桜「むう、遊騎君がこんな調子だと話が広がりづらいのだ」

零「桜小路さん。その発言は危ういのでやめてください」

桜「む？」

刻「ま、話が広がらねーなら質問とかけて広げればいいシ。つーワケで大神君よろしく」

零「桜小路さんに任せます」

桜「私か？ では……遊騎君、今の生活は楽しいか？」

遊「別に……。楽しい必要ないと思うし……。めんどいこともあるけど」

桜「そんなことはないぞ。楽しい方がいいに決まっている。大神だって学生生活を楽しんでるからな」

零「誰がですか。勝手なこと言わないでください」



刻「そーか？ 案外、楽しんでんじゃねーノ？ エロ神クン」

零「燃え散れ！」

刻「ギヤハハハ！」

桜「こら！ 二人とも！」

遊「……シャワー浴びたい」

もしも平家がオレ様だったら

刻「グハア！」

零「刻！」

桜「顔が真っ青だ！ 一体、何があったのだ!？」

刻「へ、平家が……！」

零「平家!？ またか！」

平「これはこれは。大神君と桜小路さんではないですか。ちようどよかったです。あなた方も刻君と同じように、私に漫画を献上してください」

桜「漫画……ですか？」

零「なぜオレたちがあなたのために自分の物を献上しなければならいんですか？」

平「決まっています。なぜなら私は『コード・02』。私より下であるあなたは私の支配下。つまり、私の物は私の物。あなた方の物も私の物なのです」

遊「めちやくちややし」

平「もちろんお礼はしますよ？ 私を心を込めて作ったスペシャル☆シチュー、さらに私のパーフェクト☆ライブに無料で招待しましょう。ちなみに刻君にはすでにお礼はしました」

零「まさか、刻がこんな状態になっているのは……！」

平「ああ、忘れていました。優君も、でしたね」

優「グツタリ」

桜「夜原先輩が向こうで倒れている！」

平「刻君は途中で倒れてしまいました。優君はシチューは完食しライブも全て聞いてきました。だからあんなに感極まって失神しているのです」

遊「あかん。ななばんの心音がどンドン弱くなつとるし」

桜「大変だ！ 早く治療を！」

平「ならば私がエキセントリックなハード☆ライブを！ ミュージック☆スタートで

す！」

零「やめろおおおお！」

もしも人見がとてつもなく偉そうだったら

零「お待たせしました」

人「遅い。主を待たせるとは何事か」

零「あなたはいつオレの主になったんですか」

人「そうだな、この世に生を受けてから……と言ったところか」

零「……それで？ 今日のパイトの内容は？」

人「いつもと同じ、下賤な輩を滅するだけだ。私はここにいる。突撃するのはお前に任せる」

神「ひ、人見さん。仮にも『コード：01』なんですからもう少しやる気を……」

人「ふむ……姫が望むのであれば、私も華麗に参戦してもよいが」

神「いい加減、私のことを姫と呼ぶのはやめてください！」

零「なんでもいいから動いてください。エージェントである神田も迷惑しています」  
人「ではしようがない。行くぞ、家来よ。今から姫のために！」

零「誰が家来だ、誰が！」

くバイト中く

悪「オラア！」

零「燃え散れ！」

悪「ヒヤハハハ！」

人「なんたる混沌。私には相応しくない場所だな。やはり家来であるお前に任せる」

零「はあ!？」

人「では私は姫と共にお茶を楽しむとしよう。さらば」

零「人見イイイ！」

もしも優が熱血野郎だったら

桜「うう、授業でわからないところがあつたのだ。大神、教えてくれ」

零「嫌です。優にでも聞けばいいでしょう」

桜「おお、その手があったな。……って、お前が面倒くさいだけだろう！」

零「どうでしょうね」

桜「もういい！ 夜原先輩を呼んで叱ってもらおうのだ！」

零「目的変わってませんか？」

「数分後」

優「大神イ！」

零「なんですか？」

優「歯あ食いしばれえええええ!!」ドゴオ

零「ぐはっ！」

優「……目え覚めたか？ オレも昔、迷って他人に当たったりした。けど殴られて目が覚めた。今ならまだやり直せる。間違いなら正せばいい。そうだろう？」

零「急に来て人のこと殴るような人の話なんて聞く気はありませんよ……。桜小路さん、あなた一体どんな説明をしたんですか」

桜「う、ぐす……」

零「なんで泣いてるんですか！」

桜「泣かずにいられるか！ 今の夜原先輩の言葉は私の胸に突き刺さった！ 先輩！」

私が今後、迷うことがあれば私のことも殴ってください！」

優「当然だ！ だから失敗を恐れず、思いきりやれ！」

桜「はい！ あ、ところで先輩。授業でわからないところがあるのですが」

零「話題転換が急すぎませんか？」

優「勉強なんて簡単だ！ お前に勉強をする上で大切なことを教えてやる！ よく聞

け！」

桜「はい！」

優「『気合』だ！」

桜「『気合』!？」

優「そうだ！ 『気合』があればどんな壁も乗り越えられる！ いや！ ぶっ壊せる！

オレは今まで、そうやって困難をブチ破ってきた！」

桜「おお！ さすが夜原先輩です！」

優「当たり前だろう！ オレを誰だと思っている！ 無理を通して道理をブツ飛ばす

！ 『コード：07』の夜原 優だ！」

桜「うおおおおお！」

零「……オレ、帰っていいですか？」

もしもCODE: BREAKERのジャンルが違っていたら

平「というわけで、『もしもCODE: BREAKERのジャンルが違っていたらどうなるか』という話をしていきましよう」

刻「ハ？ 急にナニ？」

平「質問は受け付けません。受け付けるのはこのテーマに対する答えだけです」

刻「いや、意味わかんネエ！」

零「下手に反抗せず、適当に答えた方がいいですよ。平家の場合、何をするかわかったもんじゃありませんから」

刻「ぐ……！！」

平「刻君も納得したようですね。では、どなたからでも、自由に意見を述べてください」

桜「はい！」

平「おお、早いですね。では、桜小路さん」

桜「熱血格闘モノ！」

零「そこに対応できるのはあなたと優しかいません」

優「オレとこいつを一緒にくくりにするな」

遊『「にやんまる」』

刻「そんなジャンルねーヨ！」

平「やはり、私が考えるアダルト——」

零・刻『却下！』

桜「じゃあ、二人は何が良いと思うのだ」

零「……普通に学園モノでいいんじゃないんですか？

ラブに所属している……とかよくあるじゃないですか」

く想像中く

零「準備は良いですか？」

刻「バツチシつしよ」

遊「いけるし」

優「いつでもいい」

平「パーフェクトです」

桜「大丈夫だ！」

零「……では、行きましょう」

全員、生徒会だったり同じク



ワアアアアア

全『けいおん——』

零「アウトです！」

く強制終了く

桜「何をするのだ、大神」

零「いや、今のは危ないですよ。大体、この中で関係あるの桜小路さんだけじゃないですか」

桜「む？」

遊「じゃあ、よんばんはどうや？」

刻「ああ？ そーだな……じゃあ、今の状況に合ったヤツを」

く想像中く

桜「両親の仕事の都合で私はこの町に引っ越してきた。そして、新しく通うことになった高校で出会ったのは……」

クールなおれ様 大神 零

零「あなたは黙ってオレに観察されていればいいんです」

お調子者のアイドル的存在 刻

刻「オレ、君と一緒にいるとステージ楽しいんだよね」

マイペースな天才 天寺院 遊騎

遊「心配いらんし。オレが絶対に護つたる」

ミステリアスな先輩 平家 将臣

平「あなたがいるからでしようか……。今日のお茶は絶品ですね」

女性嫌いな不器用男 夜原 優

優「お前が初めてだよ。こんなに長い間、一緒にいるのは」

——あなたは、誰と恋しますか？

（終了）

刻「ももちろん、一番人気はオレ！ 最高だ口！」

零「あれだけ引つ張っておいてただの恋愛系ですか。くだらない」

優「吐き気がする」

遊「オレも帰るし」

平「特にいい答えは見つかりませんでしたね」

桜「おお、今日は用事があるのだった」

刻「おい！ なんだよ、その冷たい態度は！ つか、これで終わりかヨ！ ふざけん

なー！！」

code:extra 7 夜原 優子の一日

これは、大神たちが桜と出会う少し前の物語――

「ん……」

小さく、喉を鳴らしたような声が自然に出る。それをきっかけに、少しずつ黒に染まっていた視界が晴れていく。はつきりとは見えない。まだぼやけている。だが、少しずつはつきりした景色へと変わっていった。そうして見えた景色は、とても見慣れた天井だった。

「……………」

意識はまだ覚醒していないのか、天井を見つめたまま呆ける。放っておいたら再び目を閉じてしまうのではないかと思われたが、外から聞こえてくる鳥のさえずりと窓から

差し込んでくる日光の眩しさのおかげでそうならずにはいた。さらに、それらは意識を徐々に覚醒へと導いていき、どんどん頭がクリアになっていった。

「……………」

意識が覚醒してきたことで自分の状況がわかってきたのか、スツと自分の手を視界に入るように動かしした。視界に映ったのは、しわなど一つも無いきめ細やかな肌、意識に従ってしなやかに動く細い指、そして日光を反射しているように輝く爪だった。

「……………」

すると、ハツとしたようにその手を自分の胸まで移動させる。そして、確かめるようにそこにある柔らかな双山に触れる。特有の柔らかさ、触れることでそこから感じる独特な感覚。

彼——いや、彼女は自分の状況を理解した。

「い……………やったー！ 久しぶりのロストだー！」

「思わず歓喜の声を上げる。それも当然だった。なぜなら彼女にとっては数か月ぶりの世界。たった一日だけ許された自由な世界なのだから。」

こうして彼女……夜原 優子の貴重な一日が始まっていく。

自分が表に出てきた喜びに浸っていた優子だったが、自身から発せられた空腹を告げる音を聞き台所へと向かった。ここは便宜上、優の部屋であるため全ての部屋を普段使っているのは優だ。それはこの台所も例外ではない。男が使う台所、というところちやごちやしているイメージが浮かぶ人が多いだろう。しかし、優子の目の前にある台所は綺麗に片付いており、優の主“夫”度の高さが表れている。

「うんうん、綺麗に使ってある。さすが、この優子さんの半身(?)というだけあるね。さつとと、やっぱ朝は美味しい朝ごはんから始まらないとね。んじや、久々の料理といきますか」

近くにあつた迷彩柄のエプロンと三角巾を華麗に身に纏う優子。やる気十分らしく、生き生きとした表情で両方の袖をまくる。

「それじゃあ、夜原 優子！ 作りまーす！」

数分後、夜原 優の部屋から小さな爆発音と真っ黒な煙が出たという。(証言者：近隣の人)

「ゲホ……。ひ、酷い目に遭った……」

完全防音という壁の機能を上回るほどの爆音と火事を思わせる真っ黒な煙を出した張本人と思われる優子は、所々が炭に触れたかのように黒くなっており、その髪の毛もボサボサとなっていた。

「うーん、おかしいな……。なんで普通に料理していた爆発が起きたのか。まさか優が台所にトラップを仕掛けたとか？ いや、だったら私も覚えてるはずだしな」

自問自答を続ける優子。しかし、「自分の料理スキル」については触れる様子は無く、

最終的には「優が台所の整備をサボった」という自分勝手な結論を出した。

「美味しー!」

さらに数分後の夜原宅では、風呂で汚れを綺麗に流した優子が朝食を食べていた。だが、それは彼女が作った物ではなく、優が作り置きしておいたものだった。実は優子、優と記憶を共有しておきながらこのことをすっかり忘れており、風呂上がりに何か飲もうと冷蔵庫を見た時に偶然見つけたのだ。

「いや、さすが優。男なのにこんな美味しいご飯が作れるとは。主“夫”の鏡だよ、鏡。女としては自信無くすけどさ」

そう言いつつ、優が作った食事に箸を伸ばす優子。先ほどは自分勝手な結論で優を悪く言っていたが、今となってはまさに正反対で食事の合間に彼を褒め続けていた。

「うゝん、今日も外は快晴だゝ」

朝食を食べ終わり、食器を片付けた（流しにぐちゃぐちゃに置いただけ）優子は外に出て日光を体全体で浴びた。ちなみに、服は以前ロストした時に買っておいた服があるのでそれを着ている。ピンクのワンピースという明らかに女性ものの服だが、女性嫌いの優にとつて家にこのような服があるというのはかなり辛いことだろう。

余談だが、優は一度だけ優子を買った服を全て捨てたことがある。もちろん、その環境が耐えられなかったからだ。だが、そうして迎えた次のロストの時、優子は優の部屋に女性アイドルのポスターを貼りまくり、部屋中にプロマイドをばら撒くという優にとつては地獄のような環境にしたことがある。ロストから戻った優はもちろん悶絶した。それ以降、優はあまり優子に逆らえなくなった。また、その部屋の処理は「エデン」のエージェントが行った。

「今日は休日だから……学校は無理か。じゃあ、適当に街を歩くかなゝ」

体をほぐしながらこれからの予定を口にする優子。優としては大人しく家にいてほしいだろうが、届かぬ願いだ。仮に届いたとしても、優子の性格を考えると届く確率はほとんどゼロだろう。

「……おや」



すると、そんな優子に一人の人物が近づいていった。休日だというのに制服を身に纏う、優が尊敬してやまない人物が。

「おはようございます、優子さん」

「ん？ あ、平家か」

そこには、お気に入りの官能小説を手にして笑顔を振りまく平家の姿があった。挨拶をしながらこちらに来る平家を見て、優子はふと首を傾げた。

「珍しいね？ 平家がここら辺を通るなんて」

「そうですか？ まあ、そうかもしれないですね」

独特の言い回しをして答えをはぐらかす平家。その様子に優子はますます首を傾げた。こういう時の平家とはかく徹底的に答えをはぐらかす。どんなに追及してものらりくらりとかわしてしまう。それは優子も優の記憶を通して知っていた。だから諦めるべきかと考えていると――

「……まあ、答えは簡単です。あなたに会うためですよ、優子さん」

「……え？」

優子は思わず瞬きを繰り返す。平家が素直に答えたことと、その答えの内容に。そして、それはほとんど無意識に言葉として出ていた。

「……平家って素直だったんだ」

「たまにはそういう日もありますよ」

皮肉とも受け取れる優子の言葉だったが、平家は笑顔で対応した。優子は平家の対応に「そっか」と返すと、今度は先ほどの答えの内容についての質問をした。優子にはなく、優子に会うために来たという意味深な答えについて。

「それで？　なんで優じゃなくて私に会いに来たの？　っていうか、優がロストするのわかってたの？」

「もちろんです。私は『コード：02』ですからね」

よく意味がわからないが、要約すると「上司(?)としてメンバーの状態を把握している」ということなのだろう。当の優子はこの意味が伝わらず疑問符を浮かべていたが、疲れたのか「まあ、いいや」と考えるのをやめた。そして、再び質問を繰り返す。

「もう一回聞けど、なんで私に会いに来たの？」

「個人的に心配になっただけです。あなたは優君と違って何をしでかすかわかりませんからね。今はあなたのもものとはいえ、それは優君の体でもあるわけですからね。エデンの上層部は『コード：07』という本来なら存在しないナンバーなど消えても構わないのですが、私個人としては戦力は多いに越したことはありませんからね」

「むう……」

正論の言葉を並べる平家を前に、優子は何も言えずただ頬を膨らませた。

いや、正確に言えば彼女が何も言えないのは正論だからではない。わかっているからだ。優がどのような立場にあり、自分が危険を冒せばどのような結果になるかを。

だが――

「……………わかってるよ。でも、そんなの優が勝手に決めたことじゃん。私は確かに優の中にいるもう一つの人格で、優と同じだってことはわかってる。……………でもさ、『夜原 優子』っていう一人の人間の人格であることには変わりないでしょ？ 私の意見を聞くこともしないで、優が勝手に決めたことに私が従わなきゃいけないなんておかしいじゃん……………」

「……………」

目を伏せながら胸の内にある思いをぶつける優子。平家は一切言葉を返そうとはせず、ただ黙って優子の言葉を聞いていた。哀しみを込めた眼をしながら。ただ、優子の言葉を受け止めていた。

優子の言葉が終わると、二人の間には数秒の沈黙があった。すると、平家は目を閉じて小さく息を吐いた。そして、少し優しげな声で口を開いた。

「確かに、あなたの意見も正しいです。あなたにしてみれば、今の状況はただ押し付けられただけに過ぎないのですからね。ですが、あなたもわかっているでしょう？ 優君がそこまでして『コード：ブレイカー』となったのは――」

と、なんとか優子を説得しようと思った平家が目を開ける。しかし——  
「What?」

思わず目を見開く平家。それもそのはず、今まで目の前にいたはずの優子だったが、その姿がきれいさっぱり消えていた。すると、彼のはるか背後から声が聞こえてきた。

「なーんちゃってねー! 平家に指図はされんないよ! 私は一日だけの自由を楽しむの! それじゃーねー!」

見ると、優子が手をぶんぶん振りながら笑顔を浮かべていた。そしてすぐ、彼女は走りだしてその場を後にした。平家は一瞬だけ手を伸ばしたが、無駄だと考えすぐに手を引いた。そして、軽いため息をつくとき歩き出した。すると——

「アレ? 先輩ジャン。こんなところで何やってるワケ?」

タイミングよく刻が通りかかった。休日のため制服ではなく、Tシャツにジーンズというラフな格好をしていた。

刻は平家がここにいる理由が気になるのか、平家をジロジロと見る。対して平家は特に態度を崩すことも無く、平然としていた。そして、当然のように呟いた。

「何でもありませんよ。ただ、女性と会っていただけです」

「お、女ア!」

その後、詳しく話を聞こうとした刻はいつものように平家に縛られ、彼の絶叫が響い

た。

「ねえ、君。ファッション雑誌の取材なんだけど、ちよつと写真撮らせてくれないかな？」

「私？」

カメラを持った若い男が笑顔で優子に話しかける。優子は突然のことにキョトンとしていた。

平家と別れた後、優子は人通りの多い駅前に向かった。何をしてもなく、ただ歩いているだけの優子だったが、道行く全ての人が優子のことを見ていた。多くの人物がただ見ているだけだったが、中には話しかけてくる者もいた。今、優子と話している男のように「雑誌の取材」というのがほとんどだった。

「……はい、オーケー！ この写真は来月号の特集に載せるから！」

「ありがとうございます。絶対、買いますね」

満足そうな男に、優子は笑顔で一礼をした。そして、軽やかな足取りでその場を後にする。彼女にとつて、このようなことはすでに慣れたものなのだろう。だから、必要以上に居座ることもせず、すぐにその場を後にできる。そうして、優子は再び道行く人の中に消えていった。

ちなみに優子が取材を受けている間、間接的に助かった人物が一人いた。

「ふむ。今日は一回も雑誌の取材を受けなかったのだ。ここを通ると、いつも話しかけられるからな。今日はラッキーかもしれないのだ」

「ありがとうございます」

「こちらこそ」

大量のメロンパンを抱えて優子はコンビニを出る。すでに時間は正午を過ぎていて、昼食として買ったのだ。もちろん、優が『コード：ブレイカー』として稼いだ金で。余談だが、優は必要最低限以外の物は買わない。だが、貯蓄はそんなに多くはない。原因は当然のことながら優子だ。彼女が今回のように思い切った金の使い方をするの

で、優がどんなに貯めようとしてもロストした途端にすべては水の泡となるのだ。もしかしたら、優はこういったことも踏まえてロストを嫌がっているのかもしれない。

「ん〜、美味！ やっぱメロンパンは最高だね！ もう三食ずつとメロンパンでいいな。で、おやつはショートケーキ。……ま、和風マニアで主食が米の優には理解できないだろうけどさ」

小さいことだが、こういったところも優と優子は正反対だった。優は和風の物が好きということもあり米や和食などを好んで食べるが、優子はどちらかというとパンやケーキなどの洋食を好む。女性なので当然とも思えるが、優子の場合には優を意識してのことかもしれない。

「…………ん？」

メロンパンを口にしていた優子の目に、不思議なものが映る。いや、不思議なものというより不思議な人だった。

「…………ZZZZ」

説明が難しいが、その不思議な人はベンチの背もたれにもたれかかっており、ベンチの後ろにある植え込みに顔を突っ込んでいる。かすかに寝息が聞こえるので、おそらく寝ているのだろう。体つきからおそらく少年。その異様ぶりは相当なものであり、周囲を歩く人々もかなりの距離を取って不思議そうな目で見ていた。

「……………」

優子はメロンパンを口にしながら、黙ってその少年を見ていた。なぜなら、彼女はその少年を知っていた。だが、直接会ったことはない。でも、知っていた。だから、彼女のその後の行動は彼女の中では決まっていた。

「……………これでよし。じゃあね」

ポン、と少年の背中を優子は軽く叩く。そして、そのまま少年に背を向けて歩き出した。

それからしばらくして、優子の姿がその場から見えなくなった頃——  
「……………なんや?」

少年はゆっくりと植え込みから顔を上げ、キョロキョロと辺りを見渡す。どうやら優子に背中を叩かれたことで目覚め始めたらしい。だが、すでに優子の姿はなく、あるのは遠巻きに自分を見る人々だけだった。気のせいか、と思った少年は改めてベンチに座ろうと体の向きを変える。すると、自分の周辺に変化が起きていることに気付いた。



「これ……メロンパン?」

先ほどまで何もなかったベンチ。だが今は、袋に入った大量のメロンパンが置かれていた。さすがに不思議に思ったらしく、少年はさらに袋の中をかき回す。すると、一枚の紙切れが入っていることに気付いた。少年はその紙切れを出し、紙切れに目を通す。見ると、紙切れには手書きの文字が書かれていた。少年はその文字を読むと、フツと口角を上げた。

「……ありがとな」

ポツリと呟くと、少年はメロンパンを一つ手に取り一口で食べた。さらに一つ、さらに一つとメロンパンを次々に一口で平らげていく少年。そうしていくうちに、大量にあったメロンパンはあっという間に無くなった。少年は袖で口元を拭うと、空を見上げた。そして、改めて礼を口にした。紙切れに書かれていた人物に向けて。優しげな笑みを浮かべながら。

「ありがとな……『ななばん』」

「ななばん」と書かれた紙切れ。ふと吹いた風に乗る、少年の気持ちを届けるかのよう  
に空に舞った。

時間は進み、午後3時頃となった。休日だからか、見回してみればカップルが喫茶店などで仲良さげに談笑をしている。それ自体はおかしなことではないが、一組だけカップルとは思えない組み合わせの二人がいた。

「はい、あ〜ん」

「あ〜ん」

その二人はカップルと言うより、どちらかかという友達のように見えた。なぜなら――

「う〜ん、美味しく！ アキちゃんが食べさせてくれるからかな〜！」

「もう、優子さんったら〜！」

女性同士だったから。

「だけど最初に優子さんから声をかけられた時はビックリしました。急に『彼女、お茶しない？』でしたから」

「ナンパの常套句ってそれでしょ？」

「女が女にナンパするとは普通考えないじゃないですか〜」

彼女たちの会話からわかるように、二人の関係は「ナンパした者とされた者」だ。もちろん優子が「した者」でもう一人が「された者」である。

少年にメロンパンをあげた後、優子は適当に歩いていった。そうしているうちに退屈になり、同性である女性に対するナンパを始めた。相手にされないかと思うかもしれないが、ほとんどの女性が笑って応じているのだ。おそらく同性であるため、警戒されていないのだろう。

「んふふ……でも女同士も中々いいものだよ？ アキちゃんがOKだったら今すぐにも——」

「ダメ、です。もうすぐ彼氏も来ると思うので、そろそろ行きますね。ありがとうございます。待ってる間、話し相手になってくれて」

「本意はそこじゃないんだけどね。まあ、いいけど。じゃあね〜」

とまあ、大体このような形で別れて次の女性を探す。もはやその辺にいるチャラチャラした男と変わらない思考をしているようにしか思えない。優だったら考えられないだろうし、何を言ってもやらないだろう。というより、まず不可能だろう。

そうして優子は同性に対するナンパを繰り返し、自由に楽しく過ごした。

「……へへ。イイ女、見つけ」

自分がターゲットにされているとも知らずに。

「んん、今日は楽しかったー」

優子がナンパをやめて帰り始めたのは深夜だった。といっても、これは珍しいことではない。優子はロストの度に深夜に家に帰る。その理由は簡単なもので、文字通り一日を満喫したいから、だ。今までの経験から優がロストするのは彼が家にいる夜中なので、それに合わせて家に着くようにしているというわけだ。

「今日の収穫としてはミカちゃんの連絡先をゲットしたことかな。次にロストした時はすぐに連絡してそのまま……えへへ」

想像していくうちにどんどん顔がだらしなくなってくる優子。もはや完全に気が緩んでいた。だから、気付けなかった。

自分に迫っている危機に。

「その姉ねちゃん」

「えへへへ——え？」

背後から声をかけられ、優子は振り向く。見ると、そこには下品な笑みを浮かべた若い男が三人いた。男たちはそれぞれ品定めでもしているかのような視線で優子の全身を見ていた。その視線に不快感を感じた優子は、眉をしかめて男たちから一步距離を取った。

「……道だったら交番のお巡りさんの方が詳しいと思いますよ？」

「いやいや、お巡りさんよりも姉ちゃんの方が詳しいだろ？ 特に自分の家とかさ。

まあ、それが嫌だったらオレたちが穴場スポットとかホテルに連れてってやるけどな」

一層下品な笑みを浮かべる男たち。見た瞬間に男たちの目的はいくつか予想したが、よりにもよって最悪な予想が当たってしまった。まさか先ほどまでナンパをした側だった自分がナンパされる側になるうとは、と優子は自らの運勢を悔やんだ。

「しっかし、見れば見るほどキレーでナイスバデーな姉ちゃんだぜ。そんな体してんだったら女同士より男相手にした方が楽しめるってのによ」

「私の楽しみ覗いてたの？ 除き趣味とか救えないわね。それに、楽しいかどうかなんて私が決めることなんだからあなたに関係ないでしょ」

男に負けじと強い口調で優子は対抗した。しかし、数の違いからか男たちにまったく怯まない。それどころか、どんどん距離を詰めてきた。

「その強気な口もいつまで聞けるかな。安心しな。こつちは三人だから退屈しねーだろうし、それなりにテクには自信あるんだぜ？　だから大人しく……オレたちの相手しやがれ！」

「つたく！　楽しい一日の最後を邪魔しないでよね！」

男たちが一気に距離を詰めてきたのを見て、優子はすぐに走り出した。やはり異能が使えないことと女性の体であるがために力づくで追い払うということは難しい。となれば、今できるのは逃げることだけだった。

「へへへ！　待てよ、姉ちゃん！　それとも姉ちゃんのオススメスポットに案内してくれんのかー!？」

「ホント下品ね……！　同じ変態でも物腰柔らかい分、平家の方がまだマシ……！」  
ぶつぶつと文句を言いながら男たちから逃げる優子。なんとか男たちとの距離は開き始めているが、逃げ切れたとは言えない。

「くっ……！」

優子は逃げ切ろうと、曲がり角を曲がりまくった。最初はそのまま自宅まで逃げようと考えたが、下品な男たちに家を知られるのが不快に感じたこともありやめた。そこで

考えたのが、適当に逃げることに、だった。男たちから逃げきることさえできれば、後はどうとでもなる。そう思い実行した作戦だったが――

思わぬ形でそれが仇となった。

「い、行き止まり!?!」

何十回と曲がった曲がり角。しかし、とうとう曲がった先が行き止まりという最悪の結果となつてしまった。急いで引き返そうと踵を返す優子。しかし――

「残念! 行き止まりです!」

「く……!」

男たちが唯一の退路を塞ぐ。三人が横に広がるように塞いでいるので、逃げることは

まず不可能となつていた。そして、男たちはじりじりと優子に近づき、優子は後ずさりをする。

「へへ……もう逃げられねえぜ？」

「もう最悪……！　これだったら平家の言う通りにした方がよかつたかも……」

今更ながら優子に重くのしかかる平家の言葉。彼の言う通り、大人しくしていればこうなることはなかつただろう。だが、すでに後の祭りである。

そうこうしているうちに男たちはさらに近づき、優子はさらに後ずさる。同時に、優子と道を塞ぐ壁との距離も近くなる。徐々に、そして確実に優子の退路は無くなつていった。すると――

「――ッ!？」

優子の体にある異変が起き始めた。

「ま、マズ……今はマズイって……！　ッ、ああ……!？」

「あ?！」

突然、優子は自らの体を押さえ始めた。顔は赤面し、小刻みに震えている。まるで内側からくる何かを押し止めるかのように。突然、様子が変わった優子を前にして、男たちは思わず呆然とした。しかし、その間にも優子の異変は止まらない。

「あ……体、熱い……！　頭、おかしくなる……!？」



「おいおい！ この女、興奮してんじやねーの!?」

「マジかよ、おい！ 本当は待つてました、つてか!?」

「そ、そんなこと……な、い……!」

優子の様子を見て下品な笑みが止まらない男たちと必死に反論する優子。だが、声の様子も何もかも弱々しいため効果など皆無だった。先ほどと比べると、息も荒くなり、舌もだらしく出てしまい唾液を垂れ流している。そんな恍惚とした表情を浮かべながら、優子はとうとう背中を壁に預けた。完全に逃げ場を失い、止まらない体の異変。そしてついに――

「あ、ああ……! ダメ、頭……イッ……! あ、あ、ああああああ!!」

我慢できない、と伝えているかのように優子は大声を出し、優子は座り込んで蹲った。そして、それが男たちに残っていた最後の理性を外させた。

「も、もう我慢できねえ！ 最初はオレから行くからな!」

「あ！ テメエ!」

他の二人を出し抜く形で一人の男が優子に近づく。その顔は限りなく下品で、だらしくなくなっていた。まさに、獲物を目の前にした獣同然に。

「へ、へへ……! こんな女を目の前にして我慢できるかっての。じっくり堪能させてもらうぜ!」

そして、男は優子の胸に手をかけ、その感触を楽しもうとした。何とも言えない……硬く平らかな感触を。

「……へ？ 硬い？ あれ？ まな板、さん？」

男は手を動かして何度も確認する。しかし、無い。先ほどまでは確かにあつたはずの豊かな双山が。綺麗さっぱり無くなっていた。そして、その代わりというにはあまりに酷な声が聞こえた。

「……おい。お前……なに人の体、触ってんだ……？」

「あ、あれ……？ も、もしかして君、お、おと——」

「オレは男だ！ このクズ共がああああ!!」

優子……ではなく、優の怒りの叫びが響き渡り、『脳』によって強化された腕力から繰り出される怒りの拳が男たちに制裁を与えた。

「……………くそ、戻って早々最悪だ」

ぶつぶつと文句を言いながら、優は汚れを落とすように手を叩く。ちなみに、男たちはすでに逃けている。本当なら警察に突き出してやりたかったが、色々と面倒なのでめた。

「つたく、今回も好き勝手やりやがって。爆発起こすわ、平家さんを無視するわ、女のくせに女をナンパするわ……挙句の果てが男に襲われるとかトラブルメーカーにも程がある」

ロストしている間のことを思い出し、優は苛立ちを募らせていった。自分では考えられない行動や正反対のことをやってのけるので、その苛立ちは相当なものだろう。それを表に出すかのように、自分の頭をぐしゃぐしゃと乱暴に搔く。しかし――

「…………まあ」

ふと、優は手を止めて空を見上げる。偶然にも満月だったらしく、白い月光が程よく夜の世界を照らしていた。直視しているのに、目が眩むこともない優しい光。その光景を目に焼き付けながら、優の口元は優しく弧を描くように口角が上がる。

（二日くらいは…………我慢しないと。あいつはオレと同じだけど…………オレじゃあないからな）

フツ、と思わず息が漏れる。仕方なさげに、でも優しげに。優子のことを思って吐いた息はすぐに空気の中に溶けていった。

そして、また優としての日々に戻ろうと歩き出す。それを後押しするかのように、優しい風が後ろから優の背中を――

「…………スースーする」

下半身を感じる違和感が、優の歩みを止める。そして思い出す。今の自分の格好は…………優子の格好と同じということを。

「が、我慢…………がま、ん……………できるかあああああ!!」

こうして夜原 優子の一日がまた終わり、夜原 優の日々がまた始まる。

## code : extra 8 あの日の実

「夜原先輩、お願いします！」

「何度でも言う……断る」

「そこをなんとか！」

「絶対に嫌だ」

このやり取り……すでに十二回目である。

輝望高校の近くには放課後の学生をターゲットにした店が少なくない。学生の身なりや制服の着方などに対する校則も少なく、わりと自由な校風である輝望高校では放課後の買い食いなどに対しても寛大である。そのため、近くに設置してある店では放課後に制服でも気軽に立ち寄れるように様々な工夫をしている。例を挙げるなら、学生料金として値段を安くしたり、ちようど授業が終わる時間辺りにちよつとしたタイムセール

をしたりなどだ。

その当人である輝望高校の学生たちだが、もちろんその恩恵を満喫している。彼らは間違っても現代を生きる年若い学生だ。そのようなサービスに飛びつかないわけがない。特に喫茶店などは学校ではできない話をする際にも、少ない料金で気軽に立ち寄れるのでかなり人気だ。

そして、今日もそんな学校ではできない話をする数人の若者がいた。

「三度目の正直……ならぬ十三度目の正直！ 先輩、お願いします！」

「……………」

「ついに無視を!?!」

「いい加減疲れた」

輝望高校1—B所属の桜小路 桜。その向かい側に座るのは輝望高校3—A所属の

夜原 優。さらに、その周りには……

「……………」

「くあく……………」

「ZZZZ」

桜と同じ1—B所属の大神 零に閉成学院高校一年の刻、彼らより年下の天宝库 遊騎。この三人がそれぞれの時間を過ごしていた。

今の状況はというと、彼らは輝望高校近くの喫茶店に入り隅の方にある机を挟んで三対三で座れるソファアタイプの席に座っていた。ちなみに席順としては、一列は奥から桜、刻、遊騎の三人、もう片方の列は奥から優、大神の二人となっている。そんな中、桜は必死に優に何かを頼み込み、優はことごとく断っている。それを見ている大神は一人でコーヒーを飲み、刻は退屈そうに欠伸をし、遊騎は目を開けたまま寝ていた。

この状況を見ればわかるが、彼らが集まっている原因は桜だ。桜が優に質問するため喫茶店に集まったのだ。そして、わざわざ喫茶店を選んだということは学校関係の話ではない。彼らのバイトに関することだ。

「先輩……なぜなんですか。なぜ教えてくれないんですか……！」

「……………」

桜は俯き、ぐっと拳を握る。その姿は真剣そのものであり、質問の内容も彼女にとつて真面目なものであると伺える。しかし、優は相変わらず不愛想なままで、とても質問に答える様子は見えない。

そして、優の態度に我慢できなくなつたのか、桜は今一度、質問の内容を繰り返した。「私はただあの時リリイに何をされたのか聞いていただけではないですか！ なぜ教えてくれないのですか！ 夜原先輩！」

「ツ……………」



ドン、と机を叩いて身を乗り出す桜に対し、優は眉間にしわを寄せて片手で頭を抱えた。

なぜ、こうなったのか。事の発端は、数時間前の昼休みまで遡る。

「いやあ、相変わらず平家先輩のお茶は絶品なのだ」

「それには同意する」

「ありがとうございます。桜小路さん、優君」

「……………」

輝望高校の屋上では、大神、桜、優、平家の四人によるお茶会が開かれていた。まあ、

お茶会と言つてもいつものように平家が勝手に用意をして大神たちはそれに付き合はされた形である（優に関しては自分から参加）。いつものように大神たちは平家の用意したお茶や菓子を食べ、平家は官能小説愛読書を読むという平和なものだった。

そんな中、平家がポツリと口を開いた。

「ところで優君。一つ聞きたいことがあるのですが、いいですか？」

「……？ 構いませんが……」

突然の質問。優も思わず首を傾げたが特に何も考えず応じる。しかし、その質問によつて彼らの間に流れてた平和な空気が一変した。

「あの時、リリイに何をされたんですか？」

「ブフツ！」

「ぬお!? 夜原先輩、大丈夫ですか!？」

「へ、平k——ゴホゴホ! 平、気だ——ゴホゴホ!」

「……全然、平気に見えませんかよ」

平家の質問の内容に思わず飲んでいたお茶を噴き出した優。桜は慌てて優の背中をさすり、大神は平然とお茶を飲みながら優の強がりな発言にツツコんでいた。

それから数分後。優が落ち着いたところで話は再開した。

「……ゴホン。平家さん、なぜ今その質問をしたんですか?」

「ふと気になったからです」

「……そうですか」

あまりにもフリーダムな平家の発言。平家以外の人間に同様の質問をされれば優は即座に答えるのを断っていただろう。しかし、普段から尊敬している平家から質問されるのは断ることが難しい。だからこそ、優は「そうですか」など弱気な返答をしたのだ。

すると、桜が真剣な表情で二人の間に入ってきた。

「平家先輩、夜原先輩はリリイから毒を受けたのでしょうか? だから夜原先輩は倒れ

て……」

グツと手を握る桜。その様子からは、その時に何もできなかった自分に対する怒りの

ようなものを感じられた。

しかし、当の優はというと……

（なあ、大神。毒って何のことだ？）

（あの人が勝手に勘違いしてるんですよ。気になるなら本当のことを言ったらどうですか？ どうせ話していたら目が合った、くらいのことなんでしょう）

（……ノーコメントだ。まあ、勘違いしているならそういうことでもいい）

大神とココソコと桜の勘違いについて把握していた。そして、桜が勘違いしていると知った優はそれであることを済ませようとした。しかし――

「いえいえ、よく考えてみてください。もし毒を受けていたとしたら起きてすぐに風牙と戦えるわけがありません。何かしらの後遺症が残っているはずですよ。ですが、優君はすぐに戦うことができた。つまり優君は毒を受けてはいなかったのです」

「な……！」

「そ、そうだったのですか！」

ペラペラと桜の勘違いを訂正する平家。突然のことに優は思わず固まった。そして、桜は驚愕の事実を目を見開いていた。さらに、桜は身を乗り出して優に向かっていた。

「夜原先輩！ 毒を受けたのでなければなぜ倒れたのですか!? リリイに何をされた

のですか!」

「へ、平家さん!」

「おや、もうこんな時間ですか。それでは私はこれで。優君、質問の答えはまた後日に聞きますからよろしくお願いします」

「ま、待つてください!」

「夜原先輩! 教えてください!」

「来るなああああ!」

(悪魔だな……)

その後、優は昼休み中ずっと桜から質問され続けた。昼休みが終わって一件落着したかに思えたが、放課後になった途端に桜に捕まり、喫茶店に連行されたのだった(ちなみに、刻と遊騎は途中で会ってそのままついてきた)。

そして、現在に至る。早い話、元凶は平家というわけだ。

「というか、あの時のことなんて終わったことだ。今となつては関係ない」

「ですが、気になるのです！ 身を挺して私とリリイを助けてくれた夜原先輩が倒れるなんてよっぽどのことです！ 拘束された状態のリリイが何をしたのか……ぜひ教えてください！」

（駄目だな……。こうなつたら答えを聞くまで絶対に引かない。気の毒としか言えないな）

いい加減、面倒くさくなり話を切り上げようとする優だったが、完全にスイッチが入った桜の前では無意味なことだった。今の桜のしぶとさをよく知る大神は悟つたかのようにため息をついた。

すると、今まで会話に入つてこなかった人物が口を開いた。

「つーかさ、ちよつと考えればわかることじゃん。優ユウがぶつ倒れる理由なんて」

刻である。気怠そうにソファアーに寄りかかつて、口には棒付きの飴を啜えている（禁

煙席のため煙草の代わり)。突然の言葉に、桜は疑問符を浮かべる。

「刻君、知っているのか？　だが、刻君はあの時まで戦っていたはずだが……」

「あのネー桜チャン。言つたでシヨ？　ちよつと考えればわかるつて。ココを使うんだヨ、ココ」

「??」

そう言つて、親指で頭を指差す刻。しかし、桜は腕を組んで眉間にしわを寄せるだけだつた。そんな桜を見て、刻を仕方なさそうにため息をついた。

「桜チャンも知つてるでシヨ？　優が女の子と目を合わせるとどうなるか」

「む……？　………そ、そういえばあ！」

大袈裟なりアクションで驚く桜。そして、今となつては懐かしい事実を口にした。

「夜原先輩は女性と目を合わせると顔が真っ赤になつて倒れてしまうのだ！　そしてリリイはもちろん女性だ！　やつとわかつたのだ！」

「……桜小路。周りの目を気にしろ」

桜は自ら(?) 辿り着いた真実に感動し、立ち上がりながら喜びの声を上げた。一方の優は、知られたくない事実を知られた気恥ずかしさに耐えながら桜に注意を促した。

その後、桜は周囲に頭を下げながら再び席に座り、一度落ち着いてから話を再開した。「なるほど……。二人で話していたら偶然、リリイの目を見てしまったのですね。で

は、不慮の事故ということですね。リリイを疑ってしまった私はなんと愚かだったのだ……！」

「……………」

桜はリリイを疑ったことを反省しながら真実を噛み締めていた。ちなみに、優はどこか遠くを見つめるような目で窓の外を見ていた。おそらく、気恥ずかしさからの現実逃避だろう。そして、大神と刻は桜たちのやり取りを終わって気が抜けたのか、大きくため息をついた。

「つか、桜チャンが優の奴を引っ張ってつかから何事かと思つてついでにきたらコレだもんなア。なんか損した気分だぜ」

「し、仕方ないだろう、刻君。気になるものは気になるのだ」

「まあ、それも解決したんですからもういいじゃないですか」

「オレはそうでもないがな……」

談笑する大神たちに対し、優は疲れたように言葉をかける。彼としてもやつと質問攻めから逃れることができたので気が抜けたのだろう。

しかし、彼にしてみればこれでよかつたのかもしれない。なぜなら本当の真実は違うからだ。あの時、優が倒れたのはリリイと目を合わせたからではない。目を合わせたのではなく、リリイから感謝の意味を込められたキスをされたからだ。キスと言つても頬



にされたため、軽い方だ。もつと言うならアメリカなどの外国なら挨拶と同レベルのことだ。

だが、女性が苦手な優にとってはその程度では済まない。だからこそあの時、物の見事に彼は倒れた。優の弱点を知らなかったリイにしてみれば、はた迷惑な話でもあるが。

まあ、優にしてみればその真実に辿りつかれる前に話が終わったのはよいことだった。もし真実を知られば、何かと追及されるに決まっているからだ。

「とにかく話は終わりだ。オレはもう——」

とりあえず話は終わったため、優は帰ろうと立ち上がった。しかし、思わぬ人物の邪魔が入った。

「……ほんまにそうなん？」

「ゆ、遊騎……!」

見ると、今まで眠っていた遊騎がすっかりと優の方を見ていた。どうやら、いつの間にか起きていたらしい。帰ろうとした瞬間にかけられた思わぬ言葉に優は完全に硬直した。おそらく、今日は優にとって厄日に違いない。

「どうしたのだ、遊騎君。何か気になることがあるのか？」

「だって、おかしいやろ」

「あー、おかしいナ。女の子と目を合わせてぶっ倒れるなんて男として終わってるも同じだからナ」

遊騎の言葉に桜も首を傾げ、刻はひらひらと手を振って軽口を言った。彼にしてみれば、遊騎の疑問はいつもと同じ意味不明な発言と同じなのだろう。

しかし、遊騎は的確で鋭い指摘を何気ない様子で口にした。

「そうやないねん。確かにななばんは目エ合わせると倒れるけど、ずっと合わせてたらやろ？ 捕まってたんなら話は別やけど、『コロまる』は手エ捕まっとったからななばんを捕まえるのは無理ちやうん？」

「アレ……そういやそうだな」

「そうなのだ！ 私と目を合わせた時もすぐには倒れなかったのだ！」

「ツ……………!!」

遊騎の言葉に納得している刻と桜を見て、優は思わず頭を抱え込んだ。ようやく終わったかと思えた尋問がまた始まろうとしているからだ。さらに……

「ということは、目を合わせる以上のことをリリースにされた……………ということですね」

「お、大神！ テメエ！」

「フツ、なにか？」

ここぞとばかりにDSな笑みを浮かべる大神。どうやら、ここからは彼も敵に回るつもりらしい。ただ聞いていることに嫌気がさしたのか、あるいは話を早く終わらせようとしているのかは不明だが。

「サテ、優……………」

「一体なにがあつたのか……………」

「はよ詳しく……………」

「教えてほしいのだ！」

「ぐ……………！」

あまりにも最悪な状況に冷や汗が流れる。場所は喫茶店で目立たない隅の席。近く  
の席に客も座っていないため他人に聞かれるということはない。これは不幸中の幸い

だ。しかし、席順が最悪だった。通路側なら逃げられたが、優が座っているのは奥の窓側の席で隣には大神がいる。まずこの時点で逃げるのは難しい。異能を使って身体能力を上げれば逃げられるが、そんなことをすれば喫茶店のどこかしらを破壊することになってしまう。自分が逃げるためだけに店を破壊するのはさすがに気が引ける。

(ダ、ダメだ……)

何を選んで、どう選んでもいい結果は生まれそうになかった。いや、正確に言えば一つだけある。何事も無く、穏便に済ます方法が。それは……

(話すしか……ないのか……)

それは優にとつて最も避けたいことであり、最も知られたくないこと。そして、この場で最も有効なこと。おそらく今の優は、普段の様子からは考えられないほど弱気になっていくだろう。弱点を突かれると人はここまで弱くなってしまうのかと恐ろしくなってしまう。

「……オ、オレは、あの時……」

グツと、何か痛みに耐えるかのように優は口を開く。感覚としては古傷を抉る感覚に似ているような気がする。しかし、優はそれに耐えて続ける。

「あの時、リリースに——」

当時のことを思い出して卒倒しそうになるのを我慢しながら、優は隠してきた真実を

—

—  
ぐ  
ぐ  
ぐ

「あ?」

『え?』

突然響いたその音は、あまりにも気が抜ける音だった。まるで魔法にでもかかったかのように、強張っていたからだから力が抜ける。声を揃えて反応した辺りを見ると、音の出所は大神、刻、遊騎の三人ではない。ましてや優のわけがない。となれば、考えられるのは……

「あ、あはは……。声を出し過ぎてお腹が減ってしまったのだ……。先輩、お話の前に

何か注文してもいいですか？」

「……あ、ああ」

「おお！　ありがとうございます！」

照れ臭そうに笑って優に尋ねたのは桜だった。つまり、先ほどの音は彼女の腹の音だ。桜は優から許可が出ると、満面の笑みでメニューを開き財布を取り出していった。

一見すると、これは優にとつてチャンスのように思える。しかし、覚悟を決めた今の優にとつてはその覚悟を鈍らせる魔の時間である。俗に言う「生殺し」というものに近い。

（つたく、どこまでもマイペースな奴だ……）

そんなことも知らず鼻歌を歌いながら財布を開く桜の前に、優は大きくため息をついた。彼女のおかげで話す決心が鈍った優だったが、状況は大して変わらないため再び話す覚悟を固めて――

「ああああああ!!」

「ちよ……！　どうしたんですか、桜小路さん！」

「『にゃんまる』？」

突然の悲鳴に似た桜の声。大神は慌てた表情で桜を見て、遊騎も心配そうに顔を覗かせる。当の桜はというと……

「……………」

真つ白に固まったまま涙を流していた。その手に、小銭しか入っていない財布を持つて。

「お金が……お金が無いのだ……。これじゃあ、何も注文できないのだ〜！」

「……………なんつーか、やっぱ桜ちゃんは桜ちゃんだわ」

おいおいと嘆く桜の隣で、呆れた表情を浮かべる刻。同様に、大神と優も呆れた表情をしており、遊騎はポーツと桜を見ていた。

「はあ……。つたく、コイツは……」

その呆れを隠そうともせず、優はため息をつく。自分は今まで彼女に追いつめられていたのだと考えると情けなくなってくる。どうやって桜をなだめるか考えたその時……

「……………」

優の中で妙案が浮かんだ。そして、彼はそれを実行に移した。

「おかわりなのだ！」

「あ、オネーサン。オレもおかわりで」

「オレもや」

「僕もコーヒーのおかわりお願いします」

「お前ら、少しは遠慮つてもんを——いや、言うだけ無駄か」

優が考えた妙案……それは「質問をやめたら食事を奢る」というものだった。それを提案した瞬間、桜は物の見事に承諾し、次々と注文をし始めた。誤算だったのは、他の三人も好き勝手に注文し始めたことくらいだが……彼らからの追及を逃れることのできるので結果オーライと言えるだろう。元凶である平家だが……彼にとって何があつたかなど本当は興味が無いだろう。おそらく、桜を上手く誘導して優を困らせようとしたに違いない。だから、今日一日優を悩ませた質問攻めに関する問題はこれですべて解決した。

後の問題といえば……

「おかわりなのだー！」

「オレもー！」

「なあ、ななばん。『にやんまる』グッズ買ってきてええ？」



「最近、缶詰のストックが減ってきてたんですよ。お願いできますか？」  
彼らの食欲と我儘に優の財布がどれだけ耐えられるかということだ。

「……すみません。ここっつてカード使えますか？」

code : extra 9 在りし日の記憶く天宝库

遊騎く

「——死ね」

消えない

「死ね……………死ね……………」

彼の姿が

「死ね……………死ね……………」

彼の声が

「死ね……死ね死ね死ね死ね死ね——」

彼の狂気が

「——シネ」

消えない

それは、まだ彼らが同じ場所で仲間を思っていた頃の話――

「……………」

パッと、人見は唐突に目を開いた。先ほどまで頭の中で鮮明に流れていた過去の映像記憶を見ないために。

「ツ――」

急に目を開いたためか、外界を照らす日光がひどく眩しい。人見は右手を眼前にかざし、日光を遮る。そして、人見は少しでも眩しくなくなるように体を起こす。起きてみると、土手下の川が日光を反射してキラキラと輝いている。

今、彼がいるのは彼が昼寝をする際に来る土手。しかし今日、人見は昼寝を一切していなかった。目を閉じれば、あの映像記憶が蘇ってくるから。だから彼ができるのは、目を

瞑ることで集中してそのことについて考えることだけだった。

(いったい、どうすれば……)

だが、それは起きている時も同じだった。先ほどそれを見たせい、頭の中を支配するのは先ほどと同じだった。人見は今日、何度もこうして目を閉じては起きるを繰り返していた。

そして、またその繰り返しに入ろうとした瞬間――

「どないしたんや? いちばん」

背後からの声。反射的に振り向くと、彼がよく知る顔と燃えるような赤毛が目映つた。

「……遊騎」

「なんや歩つとつたら難しい顔してるいちばんが見えたんや。どないしたん？」

「そうか……。いや、なんでもないよ」

人見の隣まで歩いてきた遊騎はストンと座って人見の方を見た。しかし、人見は心配をかけまいと微笑を浮かべて遊騎から視線を逸らした。

彼は知られたくなかった。今、自分の頭の中を支配していることについて。当人ならまだしも、それ以外の者に知られたくない。たとえ、信頼できる仲間だとしても。

しかし、次の瞬間。遊騎は思わぬ言葉を口にした。

「……心配なんやろ。ななばんのことか」

「ツ——!？」

突然の遊騎の言葉に、人見の顔から微笑が消えた。ただただ、凶星ということを表すかのように目を見開いていた。

「……遊騎、それは勘違いだよ。彼はもう一人前の『コード・ブレイカー』だ。心配す

ることなんてもう何もいんだよ」

しかし、表情が崩れたのは一瞬だけだった。次の瞬間には、平然と感じさせる表情となっていた。ただそれは表向きだ。パツと見は表情の通り平然としているように見えるが、じつくりと見ると先ほどまでとは何か違った。

もちろん人見自身、それを気付かれないように気を付けてはいるだろう。なにより目の前の遊騎に気付かれないために。しかし――

「隠してもわかるで、オレには。いちばんはななばんが心配なんやろ」

「ッ……………」

無駄だった。気付かれないように気を付けていたことが、ではない。おそらく、遊騎にしてみれば隠そうとしたこと自体が無駄に感じられるだろう。

彼は確信していた。自分が出した答えに絶対の自信を持っていたのだ。彼の目が……………そう語っている。

「……………」

「……………」

そうして、人見と遊騎は真正面から向かい合った。二人とも、傍から見ると落ち着いた目で向かい合っているだろう。しかし、彼らにしてみればそんな生易しいものではない。

言ってみれば、これは「意志」のぶつかり合い。真実を隠したい者と真実を解こうとする者。この両者の強い「意志」が視線に乗ってぶつかり合っていた。

その後、その決着がつくのは決して長くなかった。数秒の間、ぶつかり合った二人だったが、片方が折れたことで決着はついた。そして、折れた者が「降参」の意を表して両手を挙げた。

「……私の負けだよ、遊騎。やはり君に嘘はつけないな」

折れた者……人見は苦笑いを浮かべながら負けを認めた。

「当たり前や。いちばん、嘘つくの下手やし」

「今のは君の「意志」が強い、って意味で言ったんだけどなあ……。まあ、確かに嘘は好きじゃないけどね」

ハハハ、と笑みを浮かべる人見。すでに隠す必要が無いからとわかつて気が抜けたの



か、人見はその場で寝そべった。遊騎はそんな人見を見下ろした後、座ったまま正面を向いて口を開いた。

「なんでそんなにななばんが心配なんや?」

「——それは……………」

口を開こうとした人見だったが、言葉が出ない。迷っているのだ。今、自分が悩んでいること…………優の暴走について。

優が『コード：ブレイカー』となつた日、人見は“エデン”の者たちにこう宣言した。「自分が優の面倒を見る」と。ここで遊騎に話しては、その宣言を破ることになる。……いや、そんなことはどうでもいい。迷いの原因はそれではない。迷っている本当の原因は、優が、『コード：ブレイカー』が抱える不安要素を同じ『コード：ブレイカー』に話しているのか、ということだ。

だが、このまま自分だけが抱えて解決することでもない。だが、彼はそうしなければならぬ。なぜなら、それが『コード：01』の……エースの務め——

「…………何悩んでるかわからんけど、いちばんが心配する必要はないと思うで?」

「…………え?」

遊騎の言葉に人見は呆然とする。対して遊騎はスツと立ち上がり、人見に背を向けて土手を上った。

「ついてきいや」

「ついてくつて、どこに——」

「決まっとる」

突然のことに戸惑う人見。疑問を口にするも遊騎の言葉がそれを遮る。立ち上がる  
と、遊騎はピタリと立ち止まって振り向き、行き先を告げた。

「ななばんのどこや」

『コード・ブレイカー』には忘れてはならない決まりがある。破ったからと言って罰を  
受けるわけではないが、できるのならば守らなければならぬ決まりが。

それは、彼らが「悪」を滅する時に口にするあの言葉……「目には目を 齒には齒を」が大きく関係している。彼ら『コード：ブレイカー』は「法では裁ききれない悪」を裁く存在。裁きとは法あってこそ与えられるもの。つまり彼らには、彼らなりの方が存在する。彼らはそれに基づき、「悪」に裁きを与えているのだ。

そこで忘れてはならないもの。それこそが『コード：ブレイカー』の決まりだ。独自の法を司る彼らだからこそ存在するルールが。それは……

「必要以上の罰を与えたらあかん」

「え？」

自分の前を歩く遊騎の突然の呟きに人見は瞬きを繰り返す。彼らは今、とある山奥の道なき道を進んでいる。木々が生い茂り進路を塞ぐが、彼らはそれを払っては進み払っては進みを繰り返している。道中、二人はほとんど無口だった。遊騎は相変わらずとして、人見としては言いたいことを我慢している感じだった。いろいろ聞きたいことがあったが、聞いたところで遊騎が答えるとは思っていなかったからだ。彼の性格を考え

れば、何を聞いても「行けばわかる」の一言で済ませるだろう。

そんな中で突然出てきた彼の一言。それは人見にとつて理解できない言葉ではなかったが状況が状況だ。もちろん、「なぜ今、それを言ったのか」という疑問が生まれる。それを感じ取ったのか、遊騎は進みながら言葉が続けた。

「オレら『コード・ブレイカー』が守るべきルールや。オレらは“悪”を裁く存在であり、“悪”を殺す存在ではない。そうやる？ いちばん」

「……ああ、そうだね」

まるで確認するかのようには話す遊騎。人見は遊騎の真意がつかめず、ただ遊騎の言葉に返答をするだけだった。

「もちろん、何人も殺したり反省の色が無いようなどうしようもない“悪”<sup>クズ</sup>は容赦なく殺すしかない。せやけど、その罪の程度によつてはチャンスを与える必要がある。殺すんやなくて、捕まつてやり直すつていうな」

「……ああ」

その時、人見の頭にはある光景が浮かぶ。最近、『コード・06』となつた新人……大神 零。優が現れるまで、人見は大神を育てていた。その時に見た、ルールを全うする彼の姿が。

『選ばせてやる。自ら出頭して法の裁きを受けるか、それともここで死ぬか。どっち

「がいい？」

大体の「悪」はこの挑発染みた大神の発言に怒り、反抗して大神の『青い炎』で燃え散らされる。しかし、これは彼なりにルールを守っているのだ。言葉は悪いにしろ、しつかりとチャンスを与えている。それを選ぶかどうかは相手の「悪」次第だ。

そのことは理解できる。なぜなら人見自身も先輩の『コード：ブレイカー』に教えられ、後輩である遊騎、刻、大神、優に教えたことであるからだ。しかし、話は理解できても状況の理解はできない。なぜそのことを今になって話したのか。すると、遊騎は先ほどまでと変わらぬトーンでその答えを口にした。

「いちばんが悩んでんのは……ななばんがこのルールを無視しまくってるってことやろ」

「……ッ！」

遊騎の言葉を人見は……否定することができなかった。

最初に気付いたのは優が『コード：07』となつて間もない頃……人見と優が共にバ

イトを行っていた時。その時の標的は、俗に言う快樂殺人者だった。人見が最初に違和感を感じたのは二人で標的の資料を確認した時だ。読み進めていく内に、優は口数を減らしていき、優から殺気が溢れだし、そして……優の目は憎しみに染まっていった。その後、実際に標的と対峙して言葉を交わした瞬間……人見は優の暴走を初めて目にするこことなった。その姿を見て人見は直感した。このままでは危険である、と。そこから、人見の苦悩の日々は始まった。

「……情けないね。彼のことを一人前と認めていても、心のどこかではまだ彼を心配してしまう。それに、彼をちゃんと育てるって言ったのは……他ならぬ私自身だというのに」

遊騎の言葉を聞いた人見は過去の記憶……優の暴走について思い出しながら、初めて弱音を口にした。本来なら『コード：01』として『コード：ブレイカー』を支える立場にある人見。だからこそ、自分より下の『ナンバー』の者に対して弱気などを見せることはほとんどない。見せるとしたら長年の付き合いである平家くらいだ。しか

し、今の人見は遊騎に対して弱気な自分を見せている。思わず表に出てきてしまう……それくらい今の人見は深く悩んでいるのだ。

「けど、私だつてわかつているんだ。このことは優自身が解決しないと始まらない、と。他人の私がいくら悩んでも真の解決には繋がらないってこともね……」

「……………」

まるで、自分のやっていることに意味はない、とでも言うかのように目を伏せて眩く人見。その目には深い深い悲しみが宿っていた。

今まで見たことが無い弱気な人見を見て、遊騎は静かに告げた。

「そりゃな。いちばんのやつとること、意味ないわ」

「う……………」

遊騎の言葉がぐざりと人見の胸に刺さった。状況を考えれば、たとえそう思っているも何か励ましの言葉をかけるのが普通だろう。しかし、遊騎は何気ない顔でさらりと心無い言葉を口にした。

「ゆ、遊騎……。そこはそう思っても励ましの言葉が欲しかったかな……」

「なんでや？ 別に必要あらへんやん」

「ぐは……………」

遊騎の言葉に思ったより傷ついたらしく、ぎこちない笑顔を見せて思わず本音を口に

する人見。だが、遊騎はそんなことお構いなしに言葉を続け、人見の傷はより深くなつていった。

すると、ここで遊騎の足がピタリと止まった。それに合わせて人見も歩みを止める。どうやら目的地……優のところに着いたらしいが、先ほどまでと変わらない鬱蒼とした山奥だった。特徴といえば、彼らの目の前には芝生が生い茂り、行き止まりとなっていることと、近くに滝があるのだろう。水が流れ落ちる轟音がするくらいだ。優はどこにいるのか、人見がそう聞こうとした瞬間……

「だって、さっき言ったやろ。『ななばんを一人前と認めてる』って。それって、ななばんは自分でその問題を解決できるってわかったからやろ。だから、そんな風に思うんやろ」

「ッ………」

その言葉に、思わずハツとする人見。すると、遊騎は目の前の芝生をかき分け、小さな穴を作った。そして人見を手招きし、自分の隣へと誘導した。疑問を浮かべながらも人見はそれに従い、遊騎の隣に立ち穴を覗いた。そうして映った景色に、彼は目を見開いた。

「ハ、ハ、ハは………」

背の高い木々が日光の侵入を遮っているのか、薄暗くジメジメとした場所。正面には



轟音を立てる巨大な滝があった。人見はその滝に見覚えがあった。すると、遊騎が再び口を開いた。

「……罰白ばっはくの滝たき。まだ “エデン” ができて数十年の頃、重要な情報を握ってる “悪”

から情報を吐かせるために使われた激流の滝や。そんな時はまだ自白剤とかの技術も高くなかったから、ここで激流を受けさせながら罰を与え情報を聞き出したらしいで」

「ああ、知っているよ。その激流の強さから、ほとんどの “悪” は情報を吐き出す前に水圧で潰される『死の滝』とも呼ばれている、と。……でも遊騎、なぜ私をここに？」

「あそこ見ればわかる」

そう言った遊騎はある一点を指差した。人見はその先を見るが、そこには滝しかない。しばらく目を凝らして見ていると、あることに気付いた。

「あ、あれは……」

滝の中……大量の水が重力に従い流れ落ちた先に一つの人影があった。先ほど、人見が言った通りこの滝の水圧は平気で人を潰せるほどのものだ。そんな滝の中にいるというのほぼ自殺行為に近い。なら、そんな自殺行為を行うのは誰なのか。さらに目を凝らして、その姿を見ようとすると人見。そして、ついにその姿が明確に彼の目に映り、彼はその名を口にした。

「優……!?!」

「……………」

人見の視線の先……滝の中で優は静かに目を閉じ座禅を組んでいた。

「な、なにをやっているんだ、優は！早く止めないと——!」

「必要あらへん。これはななばんが自分から始めたことやし」

『死の滝』の異名を持つ滝に打たれる優の姿を見て慌てだす人見に対し、遊騎は相も変わらず平然とした様子で人見をなだめた。だが、人見は遊騎の言葉を無視して止めに入ろうとした。

「だとしてもだ！いくら『脳』で身体能力が強化できても限界はある！もしあの中でロストでもしたらそれこそ死んでしまう！」

「……多分ななばんは、それもわかっててあそこにいるんやと思うんで？」

「え……？」

遊騎の言葉に人見は思わず固まる。そして、遊騎は滝に打たれ続ける優のことを真っ直ぐ見ながら言葉を続けた。

「滝に打たれて心を強くする、って日本人が昔からやってきたことやろ。ななばんは、ああやって自分の中の弱さと戦ってるんやと思うで。多分……いちばんがいなくても戦えるように」

「ッ……！」

思わず目を見開く人見。そして、思い出した。夜原 優という人間が……どんな人間であるかを。

（そうだ……。暴走し続けて一番辛いのは他ならない優自身だ。ただ一時の感情に任せて異能を使い、人を殺めるといふ「悪」となら変わりないことをして傷つかないわけがない。なぜなら彼は、どんなに否定されようとも『コード：ブレイカー』になろうとしたんだから。その自分が「悪」と変わらない部分があるのなら……どんなことをしてでも自ら正そうとする。彼はそんな……不器用な正義を貫く男だ）

自分でも本当はわかっていた。だからこそ、自分は彼を一人前と認めて手元から手放した。しかし、いつの間にか全てを背負い込もうとしていた。解決しようとしていた。

自分が踏み込むべきではない彼自身の問題に対してまで。

(どうやら……私が子離れできていなかったようだね)

自分に対しての嘲笑なのか、クスリと微笑む人見。遊騎はそれを黙って見つめていた。すると、人見は遊騎へと視線を向けスツと右手を差し出した。

「目が覚めたよ。ありがとう、遊騎」

「……どーいたしましたよ、や」

人見の右手に応える遊騎の右手。二人の男の右手は固く、強く……二人の信頼の証であるかのように繋がっていた。

「来るなあ！ 来るんじやねえ！」

人里から少し離れた平原に男の怒鳴るような声が響く。男はその腕にあるものを抱えながら、刃渡り9cmほどのナイフを持って逃げていた。ナイフを持っていることから考えると、逃げているのは警察か何かに対してだと普通は考えるだろう。しかし、実

際は違った。彼が逃げていたのは……赤髪の少年と黒髪の少年の二人からだった。

「来るな言われてホントに出来ない奴なんかおるんか？」

「ナイフを持っているんだから、一般人ならまず寄つてこないと思うがな」

二人の少年……遊騎と優は日常の会話のように平然と話していた。それに対して、男は追いつめられて錯乱しているのか、冷や汗が大量に吹き出し全身がガタガタと震えている。

「おつちゃん、もう逃げるのはやめたほうがええで。……その重いもんも置いていき  
いや」

「う、うるせええ！」

遊騎の言葉に男は激昂し、腕に抱えたもの……小学生と思われる少年にナイフを突きつけた。ここで、普通の少年だったら怯えて叫び声の一つも上げるだろう。しかし、男の腕の中にいる少年からは何の反応も無い。眠っていたり、意識を失っているわけではない。少年の目は開いている。しかし……

「……………」

少年の目には光が灯っていなかった。焦点が定まっておらず、生気も感じられない目。だらしなく開かれた口元には唾液の後がある。それどころか、全身に力が入っていないのか全体的にだらりとしていた。遊騎と優はその様子を観察しながら、考えられる

あらゆる可能性を考えていた。

（あの様子……明らかに普通じゃない。だが、それ以前になぜ奴はあの子を連れて逃げた？ あの子の様子からして人質としては明らかに不向き。なのになぜ……）

（もしかしたら、連れていかなアカンのか？ オレらがあいつを保護でもしたらマズイことでもあるんか……）

（保護したらあの子の周辺の調査や検査が行われる……。それが奴にとつては不都合なのか？ そして、その不都合なことはあの子の様子に関係しているはず。……まさか——！）

逃げるのに不都合な状態の少年をわざわざ連れて逃げる男、少年の異常とも言える様子……ここから導き出せることは……たった一つだった。

「薬物、か……？」

「ななばん？」

「お前……その子に薬物を投与したのか……！」

信じられない、信じたくない最悪の可能性の一つを優は口にした。全身から力が抜けた少年、これは薬物を投与されたことで放心状態となっているため。男が少年を連れて逃げた理由、おそらく少年に薬物を投与したことを隠すためだ。男が捕まるか、少年が保護されれば少年は検査を受け、薬物の投与が確認されるはず。男はそれを恐れたの

だ。

「黙れえ！ オレは悪くねえぞ！ オレは欲しくなかつたのに、仲間が勝手に裏ルト使つて取り寄せやがったんだ！ 最初は自分で使うだけだと思つたがアイツ……オレにも使えつて言つてよこしやがったんだ！ オレは薬物<sup>ヤク</sup>なんて使つたことねえから怖くて……どんなふうになるかわかんねえから、だから！」

「だから………そいつ使つてどうなるか試した言うんか？ そないなこと………許されるわけがないやろ。この『悪』<sup>クズ</sup>が」

「う、うるせええええ!!」

精神的にも追いつめられたらしく、どんどん隠された事実を話し出す男。そんな男の言葉に対し、遊騎は鋭い殺気を乗せた言葉を返す。すると、男は激昂してナイフを少年に向けて振りかざした。どうやら少年を殺して逃げ延びることを選んだらしい。

「うわああああ!!」

「させへん——!!」

男のナイフの切っ先が少年の顔に突き刺さる直前、遊騎が動いた。『音』の異能を使う彼が音速で近づけばすぐに男からナイフを奪うことはできる。遊騎はナイフを奪うため、音速で男に近づこうと——

「……黙っている、<sup>クズ</sup>悪<sup>クズ</sup>が」

しかし、それよりも先に彼……優の拳が男の顔を捉えた。

「ぐはあー！」

『脳』の異能で強化された優の力を受け、男は派手に吹き飛び平原に倒れた。それに対し優は、男の腕から解放された少年をしつかりと抱き、堂々と立っていた。

「ななばん……」

そんな優を見て、遊騎はその場で立ち止まった。彼の頭の中では、優がしたことは自分がするはずだったこと。しかし、現実には優がそれをやってみせた。音速の速さを持つ遊騎を超えて。

（オレよりも早く動いとったんか……。『脳』の異能は感覚器官も強化する……そう考



えればオレよりも早く気付けて当然やな……)

「壊脳……」

少年を助けた優は壊脳を使い、少年を眠らせた。そして、優は少年をその場にそっと寝かせた。寶石を扱うように、大切に。

そして、優は男と対峙した。

「……………」

「ッ、あ…………」

優の全身から怒気が発せられ、そのあまりの迫力に男はすっかり言葉を失う。その異常なまでの怒気を発し続けながら、優は男との距離を縮める。

(……………あかん)

その様子を見ていた遊騎は危険を感じていた。直感で感じたのだ。これこそ、人見が悩んでいた優の問題なのだ、と。

「……………死ね」

「ひい……………」

遊騎が考えている間に、優と男の距離は互いに目前と言える距離となっていた。さらに、優は右手で拳を作り、男に向かって振り下ろそうとしていた。今の彼は……………憎しみのみで男を殺そうとしていた。

（あかんで、ななばん……。あいつは悪<sup>クズ</sup>やけど、まだやり直す可能性がある。そのまま殺したら……。ただの悪<sup>クズ</sup>と同じや）

遊騎はそんな優をただ見守っていた。本当なら止めるべきだ。だが、遊騎はそれをしなかった。ただ一つの思いを胸に秘め、静かに見守り続けた。

「……………」

そして優は……

「た、助け——」

自分の拳を……

「死ね——！」

——力の限り男に向かって突き出した。

「——選べ」

「……ええ？」

「自ら全ての罪を認めて法の裁きを受けるか、ここでオレに殺されるか……どちらかを選べ」

優の拳は……男の頬をかすって土にめり込んでいた。

「じゃあ、よろしく頼むわ」

「はい、ご苦勞様です」

その後、男は自ら法の裁きを受けることを選び、彼は“エデン”のエージェントに連行された。また、薬物を投与された少年も“エデン”に保護され、治療を行ってから家族のもとに帰すこととなった。もちろんその場合、優の壊脳による記憶操作が必要だが、優は進んで行うだろう。

「……………」

エージェントと話していた遊騎に対し、優は彼らに背を向けて空を見上げていた。遊騎も見ると、月が明るく輝いていた。満月とまではいかないが、それなりに満ちた月だった。改めて優のことは見てみると、月光が彼の背中を照らしている。まるで彼を称賛しているかのよう。

「……………信じとつたで、ななばん」

ボソリと呟きながら優に背を向ける遊騎。そう、彼は最後まで信じていた。優ならば

乗り越えられる、と。だから彼は止めなかった。ただ信じて……見守り続けたのだ。

「……ありがとな、遊騎」

同じように呟く優。その言葉に遊騎は何も返さず、ただ笑みを浮かべながら歩き続けた。

## code : extra 10 風に消えた牙

『捜シ者』の一味と先代『コード・ブレイカー』との戦いが終わってから数か月の時が経った頃。とある国で妙な噂が立った。

魔法で強者を襲う化け物がある——と。

最初はただの噂だったが、被害者の数が増えていくほどに噂を信じる者が増えていき、少しずつ自ら戦いを申し込もうとする力自慢も現れ始めた。しかし、どんなに強い者が挑んでいっても結果は全て同じ……返り討ちだった。それにより、噂はどんどん広がっていった。

ちやうどその頃。近い場所でもう一つの噂が立ち始めた。妙な風貌をした謎の集団が現れた、というものだ。そして、これはほんの一部が言った小さな噂。

その集団は……魔法で人を殺す悪魔——であると。

「どうした？ お前の強さはこんなものか？」

「ぐうう……！」

そこには何もなかった。いや、正確にはある。枯れた木々や巨大な岩……俗に言う荒野という場所だった。そして、そんな荒野にいる二人の男。一人はズボンのポケットに両手を入れて余裕の表情で立っている若い男。対してもう一人の男は、右肩から出血し左手でなんとか止めようとしている風格のある初老の男。かなりの量を出血しているのか、初老の男の顔は少し青ざめていた。

「まさか噂は本当だとはな……。だが、魔法などという可愛いものではないな……。その力……もはや妖術の類だ……！」

「……ふん。噂を頼りにわざわざ日本から来て出た言葉がそれか。まあ、なんでもいいさ。ずっとそうやっているのも疲れただろう。そろそろ……終わりだ」

若い男はそう言うと、初老の男の前に右手を差し出した。その動作に初老の男は目を見開き、なんとか避けようと横に動いた。しかし――

『鎌鼬』

「ぐわああああー！」

若い男が呟いた瞬間、初老の男の体から鮮血が流れた。そして初老の男は力無く斃れ、若い男のみが残った。若い男は先ほどまで相対していた初老の男の死体をつまらな

さそうに見下ろした。

「わざわざ日本から来たと言うから期待したが……やはり異能を持たない相手じゃこの程度か」

死体を見下ろしながら呟くと、男はその場を立ち去ろうとした。用が済んだこの場から。

初老の男の言葉から察する者もいるだろうが、この男はもちろん只者ではない。噂、魔法……このキーワードを聞けばわかるだろう。この男こそ噂になつてゐる魔法を使って強者を襲う化け物である。自らは異能と呼び、他者からは魔法と呼ぶ力を使って強者を斃す謎の男。それが彼だ。

おそらく初老の男も噂を頼りに彼を斃しに来た一人なのだろう。しかし、彼の力の前にあえなく敗れてしまったのだ。初老の男にしてみれば、まさかここまでの力の差があるとは思わなかつただろう。

だが、男にしてみればどれも同じだった。力の差しか感じられない者たち。自分からしてみれば弱者でしかない者たち。誰にしても……同じだった。

「まったく。やはり戦うとしたら同じく異能を使う奴と戦つた方がいいか。……待てよ」

去りながら呟く男。これからのことについて考えていると、ふと一つの話が浮かんで



きた。最近、聞くようになった……ある噂を。

「魔法で人を殺す悪魔の集団……ていうのがいたな。まさかそいつらもオレと同じ……? ……だったら話は早いな」

ふと立ち止まってただの噂から自分なりの推理を始める男。そして、一つの結論にたどり着いた時、男はニヤリと笑った。

「ちようど普通の人間相手にも飽きてきたところだ。そいつらを見つけ出して少しは暇つぶしを——」

「その必要はない」

「ッ!？」

突然、後方から聞こえた冷やかな声。そのあまりの冷やかさに男は思わず振り返りながら距離をとった。そして、再び驚愕した。

「な……………!?!」

そこにいたのは異常な者たち。明らかに一般人ではない姿をしていた。一人はフードを被りダウンベストを身につけた褐色肌の男で、もう一人は真っ黒な布を身に纏っていた。だが、最も異常さを感じさせる存在は別にいた。

「……………」

それは二人の一步奥にいる人物。フードもしていなければ布を身に纏っているわけではないため顔ははっきりと見える。その顔から判断するに、かなり若い男。だが、彼はあまりにも白すぎた。髪も、顔も、服も……………何もかも。彼は全てが白かった。

「……………なんだ、お前らは」

その異常な姿から、男は警戒心をむき出しにして集団に尋ねた。しかし、彼らはすぐに答えようとしめない。布を纏った男はもちろん、白い男は薄ら笑いを浮かべている。すると、褐色肌の男が口を開いた。

「先ほどお前が口にしていただろう。お前が次の標的にしている集団だ」

「な……………!」

まさかの展開だった。自分が会おうとした噂の集団が、口にした次の瞬間には自分の

背後にいた。奇跡……というよりは奇怪だ。だが、男にしてみればまたとないチャンスだった。

「そうか……。だったらちよいどいい。こんな外国に旅立って力試しをしてきた甲斐があつたつてもんだ。大方、お前らも異能者なんだろう？」

「やはりお前も異能者か。だが、なぜ力試しなんてする？ それも異能の力を使ってまで」

男の質問に再び褐色肌の男が答える。その後の質問を聞くと、男は「くく……」と笑つた。

「決まってるだろ。こんな力を持って生まれたんだ。強い奴らを斃して頂点に立とうとしても不思議じゃないだろ。しかしお前らもバカだな。話しかけなければ……。こうしてオレにやられることもなかったのになあ！」

叫んだ瞬間、男は右手を前に伸ばした。先ほど初老の男を斃したように異能を使おうとしているのだ。すると、異常な集団たちにも動きがあつた。

「……………」

今まで何も言わなかつた布を纏つた男が一步前に出た。その姿に、褐色肌の男は少し意外そうな顔をした。

「……………まさか、あなたがやる気ですか？ わざわざ相手をする必要も無いと思います

が

「……………」

褐色肌の男の言葉に、布を纏った男は何も答えない。ただ黙って、自分たちに右手を伸ばす男の方を見た。

「最初はお前か！ 言っておくが手加減なんてすると思うなよ！」

「……………心配は無い」

そこで、布を纏った男が初めて口を開いた。瞬間、彼らの周囲に突風が巻き起こり、彼が纏っていた布を吹き飛ばし全身が露わになった。そこで男が見たものは……

「どうしようも結果は変わらん」

「ガ、ハ……………」

顔に、左目の周囲に刻まれた……………瘢痕。しかし、それをじっくりと見る前に男は地に倒れた。

「バ、バカな……！ まさかお前、オレと同じ——」

「否。オレの力とお前の力は似ても似つかぬ。なにより、質が違いすぎる」

「なに——ぐう……！」

癢痕の男の言葉に男は向かっていこうとするが、たつた今つけられた傷のせいで動けなかった。癢痕の男はそれ以上の追撃をしようとはせず、ただ静かに佇んでいた。すると、褐色肌の男が近づいてきた。

「哀れだな。お前は自分が最強だと信じていたらしいが、しよせん井の中の蛙でしかなかった」

「く……！」

褐色肌の男の言葉に男は決死に睨みつけることで対抗する。だが、心のどこかでは相手の言葉に納得してしまう自分を感じていた。それほど、あの癢痕の男の力は圧倒的だった。自分が何をされたのかわからないほどに。

「殺すなら殺せ……！ 憐れみを受ける気は無い……！」

力の差を感じたこともあってか、男は潔く殺すように言った。今まで自分も遠慮なく

手にかけてきた経験から覚悟はしていたのか、その眼に恐怖は感じられなかった。

しかし、男たちは一向にそうしようとはしなかった。ただ黙って男を見下ろすだけだ。その様子に男が不振に感じていると、今まで奥にいた白い男が近づいてきた。そして、男の前に膝を突いた。

「殺しはしない。なぜなら私たちは君を殺すためではなく、迎え入れるために来たのだから」

「なに……?」

その言葉を聞いた瞬間、男は理解できなかった。目の前の男が何を言っているのか、まったくわからなかった。しかし、白い男は構わず微笑を浮かべたまま手を差し出した。

「私の名は『捜シ者』。私なら君にもっと大きな力を与えることができる。私と一緒に来ないか?」

それが『捜シ者』と……後に彼から風牙の名をもらうこととなる男の出会いだった。

それからかなりの時間が過ぎ、再び『捜シ者』が日本にやって来た。

彼らは今、『捜シ者』の計画のために動いている。ここには『Re-code』である褐色肌の男……雪比奈が率いる『捜シ者』に心酔するリリイ、仙堂……そして新たに『Re-code:07』となった風牙の四人がいた。彼らは都内から少し外れた場所にある廃工場にいた。これから起こるであろう『コード:ブレイカー』との戦いに備え、それぞれが調子を整えていた。

「くらいな、風牙！ リリイの『分泌』でドロドロに溶けちゃいな！」

「相変わらず甘いな、リリイ！ 『向かい風』！」

「くっ！」

調子を整えるだけ……のはずだったが、いつの間にか模擬戦になってしまっていた。しかし、模擬戦と言っても異能を使っているため、ほとんど実戦と変わらない。

現にリリイは右手から『分泌』した毒を風牙に向けて放ち、風牙はそれに対して全身

から突風を放出して毒を全て吹き飛ばした。さらに、突風のあまりの威力にリリイは耐えられず毒と一緒に吹き飛んだ。

「痛ッ……！　ちよいと、風牙！　今、本気でやっただろ！　リリイの肌に傷がついたらどうするんだい！」

「うるせえよ。勝負つてのはいつでも本気でやるもんだ。それに、手加減しててもお前じゃオレには勝てねえよ」

吹き飛ばされて壁に背中をぶつけ激昂するリリイに対し、風牙は面倒くさそうに頭をかいた。そして、力の差を見せつけるかのようにニヤリと笑いながらリリイを見た。その姿を見て、リリイは悔しそうに目を伏せた。

「くそ……！」

「まあ、仕方あるまい。リリイがどんなに毒を出そうと風牙の『風』の前では全て吹き飛ばされる。液体も気体も関係なく。だが、風牙。オレはリリイのようにはいかんぞ？」

当事者である二人の代わりに、横で見ていた仙堂が二人の力の差を口にする。その時の彼の言葉にリリイは「余計なことを言うな」とでも言いたいのか、ジロリと仙堂を睨んだ。が、仙堂は特に気にせず「今度は自分の番だ」と前に出た。

それを見たリリイは何も言わず、巻き込まれないように移動した。何も言わずに見物



している雪比奈の隣に。

「はあ……。やつば、新米とはいえあいつも『Reecode』の一人。リリイじゃ敵わなくて当然かもね。なにより、『捜シ者』に実力を認められたんだから」

「……そうだな」

「相変わらずクールだねえ。まあ、いいさ。仙堂ー！ リリイの代わりにやつちやつとくれよー！」

どこか冷めている雪比奈に「やれやれ」と首を振ると、リリイは仙堂に対して声援を送った。仙堂はそれに軽く手を挙げて応えると、そのまま風牙の前に立った。

「次は仙堂か。言っておくが、模擬戦で勝ったところで『Reecode』にはなれねえぜ？」

「どうだかな。模擬戦とはいえお前を斃せばオレの実力が認められる。つまり、お前を斃せばオレが新たな『Reecode』となる日も近くなるということだ。悪いが風牙……オレの踏み台になってもらおう。——『暗転』」

二人が向かい合い言葉を交わすと、仙堂の姿がその場から消えた。否、見えなくなつた。彼の『暗転』は自分の皮膚を周囲の景色と同化させることで相手の視界から逃れることができる。つまり、今の彼はカメレオンと同じ。周囲に潜み、隙を待つ狩人。しかし……

「相変わらず、『暗転』を使わなきゃビビって攻撃できないのか？ そんなビビり症でよく『Re—code』になるなんて言えたもんだ」

「——黙れ！」

「つと」

「チィー！」

姿が消えたことで不利になったと思われた風牙だったが、余裕の態度は一向に崩れない。さらにその余裕を証明するかのように、風牙は見えないはずの仙堂の攻撃をいとも簡単に避けてみせた。仙堂は軽く舌打ちをした後、さらに攻撃を続けたが風牙に当たることはなかった。

その光景を見て、戦っている仙堂……ではなく見物しているリリイの表情は驚きに染まっていた。

「嘘だろ……。『暗転』で見えないはずの仙堂の攻撃をあんな簡単に……。一体どうやって……」

驚きのあまり、リリイは無意識に浮かんだ疑問を口にしていった。隣にいる雪比奈は黙ってそれを見ていたが、急にポツリと呟き始めた。

「……『風』を使っているだけだ。自分の周りにそよ風にも満たないほど僅かな『風』を均一に漂わせる。仙堂が近づけば『風』は乱れるから、姿が見えなくてもどこから攻

撃がくるかはわかる」

「あ、あいつ……いつの間にそんな技術身につけたんだい？ ……くそ。これじゃ、ま  
すます差が開いちゃうじゃないか……」

雪比奈の解説を聞き、リリイは風牙の強さに目を見開くと同時に悔しさを感じてか唇  
を噛んだ。彼女にしてみれば、つい先日まで同等の地位にいた人間が憧れの存在を守護  
する存在の一員となった。守護する一員<sup>立場</sup>……というより、守護する対象に人一倍強い憧  
れを持つ彼女にしてみれば「自分も同じところに」と思っているのだろう。しかし、目  
の前には自分との差がどんどん開いていくという現実。もどかしいものだ。

「……………」

そんなリリイに対し、雪比奈は二人の戦い……特に風牙の戦い方をどこか遠くを見る  
ような目で見ていた。まるで、過去の記憶を呼び起こすかのように。

「ガハ……………」

「……………」

『捜シ者』が日本に攻め込もうとする数日前。風牙はボロボロの状態で膝を突いていた。全身の至る所に切り傷が刻まれ、何度吐血したかもわからない。それに対し、彼の前に立つ相手はまったくの無傷だった。まさに対照的……圧倒的だった。

「風牙……もうやめろ。今のお前じゃ、この人には勝てん」

その様子を傍で見ていた雪比奈は容赦なく現実を言葉にして突きつける。優しさなど一切込められていない冷たい言葉。それにより、変えようのない現実であるということがより強く感じられる。

「……………わかつ、てるさ」

しかし、風牙はその言葉を聞いても立ち上がった。そして、彼にとって一番の技を發動させた。

『『台風の目』……………！ くらええええええええええ！』  
ハリケン・アイ

周囲に強風を発生させるほど風牙の手の中で強く渦巻く『風』台風。残った力全てを込めたのか風牙の背丈を超えるほど巨大になり、そのサイズが最大になった時。それは一本の巨大な槍となって相手に向かって放たれた。

しかし——

「甘こ」

「ぐああああー！」

一振り。相手の右手が一振りされた瞬間に『台風ハリケーンの目』は真つ二つに裂かれ、風牙の体に新たな傷が刻まれた。そして、受けた瞬間に感じた圧力で風牙の体は一気に吹っ飛んだ。

「……………く、くこそ」

吹っ飛ばされ、完全に倒れた風牙。しかし、その目に宿った闘志が消えることはなく、未だ力強く相手に向けられていた。

「まだ……………まだ、オレは——」

——ポソッ

瞬間、空気が抜けたような音がしたかと思うと、風牙の体に変化が訪れた。傷だらけだった肌色の皮膚は茶色の毛に覆われ、年相応に成長していた手足は産まれたての赤子のように小さくなり、『風』が一切出なくなった。彼の体に起こった変化……それは、彼の体が童話などによく出てくるようなまんまと太った小さい狸となったというものだった。……ロストである。

「……勝負あつたな」

「くそ……！」

雪比奈の無情な言葉を聞き、風牙は悔しそうに地面を叩いた。それと同時に、彼が今まで戦っていた相手はサツと背を向けてどこかに行こうとしていた。

「ま、待て——！」

風牙は咄嗟に引き止めようと声をかけた。しかし、それを打ち消すかのように相手……左目周囲に癍痕が刻まれた男が呟いた。

「……本当の強者と相反した時、力技だけでは勝てん。常に冷静に場を見る眼を育てろ。そして、自らの異能を器用に使うことだ」

「ツ……！」

「いずれ日本に発つことになるだろう。それまで、しっかりと体を休めておけ」

瞬間、彼は一瞬で消えた。風牙は癍痕の男の言葉を噛み締めているのか、しばらく俯

いたままだった。

雪比奈は傍に近寄り、立ったまま……見下ろしたまま声をかけた。

「……戻るぞ。ロストのまま単独で動くようなことはしないでらう?」

「……………」

雪比奈に話しかけられても風牙は俯いたままだった。傷のせいで動けないのか、はたまた考えすぎて言葉すら聞こえていないのか。どちらにせよ、戻ろうと考えている雪比奈は構わず風牙の首元に向かって手を伸ばした。すると……

「……初めてだ」

「なに?」

ポツリと、風牙が呟いた。よく見ると、その体は小刻みに震えているように見えた。

「初めて、オレに言葉をくれた。少しずつ……少しずつだが、認められてきている。最初に会った時とは違う……。オレは強くなり始めているんだ!」

噛み締めるように呟いたかと思うと、声を荒げると同時に顔を上げて雪比奈を見上げた。ロストして狸の顔になっているため確信は持てないが、その顔はどこか満足気に見えた。

「……………そうだな」

雪比奈は目を瞑って応えると、風牙の首元を掴んでそのまま運んだ。ロストした風牙

のサイズは人間でいうと産まれたての赤子とほぼ同じのため、特に苦勞はない。

「雪比奈……。運んでくれるのはありがたいが、その運び方はどうにかならないかポン？ 戻った時、バカにされそうで嫌だポン」

「……ロストした状態で気が抜けると出てくるその妙な口癖をどうにかすればバカにされないんじゃないのか？ それに、この運び方が一番楽だ」

そんな軽口を叩きながら、彼らは戻るべき場所に戻っていった。守護するべき者のいる場所へ。彼らが共に歩く存在……。『捜シ者』の元へ。

「はあああああ！」

雪比奈の回想が終わったのとほぼ同時。風牙に動きがあった。身構えたかと思うと、自分に対して『巻き風』を発動させた。わざと自らを『風』の檻に閉じ込めたのだ。

「なんだ!？」

突然のことに仙堂も身構える。しかし、そこからの展開は一瞬だった。



「……………」  
『暴風』<sup>ストーム</sup>」

瞬間、風牙を閉じ込めていた『巻き風』<sup>ケージ</sup>が四散し、全方向に無数の『鎌鼬』となつて放たれた。一瞬の出来事に、仙堂は自らを硬化させて防御することもできず――

「ぐあー！」

『鎌鼬』が体の所々に傷を刻み、あつという間に仙堂に膝を突かせた。仙堂が膝を突いたことを確認すると、風牙はニヤリと笑つて仙堂を指差した。

「オレの勝ちだ」

「く……………」

勝利を確信した風牙の言葉。仙堂もそれに言い返せず、苦虫を噛み潰したような顔で俯いた。その時点で、この模擬戦は風牙の勝利で終わった。

「……………」  
「やっぱなり立てでも『Re-code』の一人つてわけかあ。仙堂、大丈夫かい？」

勝負がつき改めて風牙の強さを思い知つたりリイは、少しとはいえ怪我をした仙堂の元へ駆け寄つた。一方、仙堂は傷口を抑えて立ち上がり、治療して体を休めるために移動を始めた。

そして、風牙は……………」

「どうだ？ それなりに成長はしただろ？」

「……………」

雪比奈の隣に移動し、自分の成長ぶりを尋ねた。雪比奈はそれに答えようとはせず、黙って視線を前に向けていた。それを見て、風牙は答えを聞くことを諦め移動しようとした。それとほぼ同時……

「……………実戦でも、今回のように冷静な判断ができればマシになった証拠だろうな。実戦だと頭に血が上りやすいのがお前の欠点だからな」

「……………了解。まだまだだつてことだな」

雪比奈の言葉に風牙が反応すると、雪比奈はそのまま歩き出した。どこに行くのか、など聞いても応えるとは思えないので誰も聞かない。風牙も黙って見送るだけだ。

すると、雪比奈はふと立ち止まり、風牙に背を向けたまま言った。

「だが、お前の言う通り少しは成長した。その調子でやれば……届くかもしれないな」

「ッ……………」

風牙の成長を認める発言。しかし、雪比奈はすぐにまた歩き出し、すぐにその姿は見えなくなつた。それでも、風牙は答えた。右手を突き出し、新たに決意の言葉を口にした。

「……………当たり前だ。オレはあの人を斃し、あの日の借りを返すんだからな。待つてろ

……………  
瘢痕の……………『Re-code』03」

それは誓い。一度負けた相手に対するリベンジの誓い。風牙はその思いを嘯み締め、戦いに向けて準備を始めていった。

時は流れ、『コード：ブレイカー』と『捜シ者』の戦いが始まった頃。研究所を占拠し、『コード：ブレイカー』を一か所に集めて藤原総理のもとに『捜シ者』が向かうという作戦が決行された。研究所で『コード：ブレイカー』たちを待ち構えた部下……リリイと仙堂はすでに『コード：ブレイカー』たちにより無力化された。そして、彼らは最上階近くで待ち構えていた雪比奈と戦っていた。現状としては、雪比奈以外の戦力は無力化という状態だった。

そう……『Re-code』07である風牙も含めて。

「くそ……！ 夜原 優の野郎……！ ふざけた真似を……！」

彼は今、研究所の外……研究所脇の地面で倒れていた。強気な口調とは裏腹に、その姿はあまりにも無力だった。彼が戦った優により真つ二つに切断された体、さらに落下

した衝撃でよりダメージを負っており全身がボロボロだった。それでも意識を保っているのは、彼の信念が強い証拠なのかもしれない。

「待つてろ……！ この忌々しい幻が終われば、すぐにお前を殺しに行つてやる……！ 必ず……！」

風牙は、優が最後に使つた相手の脳を操り様々なマイナス効果を与えるという『壊脳』による幻が未だ続いていると錯覚していた。今の自分の状態を幻だと思おうとしたのだ。しかし、それは幻ではなく間違いなく現実。もはや彼は優を負うことはできない。

「必ず……オレが——」

上半身だけとなった自分の体を、這うことで動かす風牙。すると、その前に一つの人影が立ちふさがった。風牙は顔を見上げ、人影の顔を確認した。そして、人影の顔を確認した瞬間、彼の中で何かが完全に切れた。

「あ、の野郎……。こんな幻まで見せやがつて……。！ ふざけんあ！ 幻のこいつにすら負けるほどオレは落ちぶれちやいねえ！ 消してやる！ こんな幻！ 跡形も無く消してやる！ うらあああああああ！」

激高した風牙は左手から『風』を発生させて地面にぶつけ、その反動を利用して風牙の体は人影に向かつていった。そして、右手にも『風』を纏い、人影に向かつて伸ばされた。

「消えろオオオオ！」

——瞬間

「無用」

風牙の首と体が完全に分離した。

「う、そだ……。オレが、幻ごときに……。オレは、『R e — c o d e』07の……。風

牙、だ……」

その言葉を最後に、風牙は完全に最期を迎えた。彼に止めを刺した人影は、最期まで自ら全てを幻と思ひ込もうとした風牙を見下ろすと何事も無かつたかのようにその場から歩き出した。彼に対する、叱責の言葉とともに。

「現実と幻の区別を放棄するなど愚か。……そのような弱き者の牙などオレには届かん」

人影を月明かりが照らされ、左目周囲に刻まれた癍痕が一瞬だけ見えた。その後、一筋の風が吹きその姿は消えた。その場には、最期まで己の強さを疑わなかつた哀れな牙の無残な姿しか残らなかつた。

## 『捜シ者』篇 中

## code : 30 動き出す敵

「きやああああああ！ 人殺しいい！」

「と、通り魔か?! 逃げろ！」

まだ人が往来する夜の街に悲鳴が響き渡る。怯える人々の視線の先は、細切れにされた腕や体と夥しいほどの血にまみれていた。何があつたのかはわからない。だが、わからないからこそ「次は自分かもしれない」という不確かな恐怖が人々を支配していた。

しかし、そんな異常な状況でも騒動の中心人物たち……犯人たちに向かう者たちがいた。

「待て、お前たち！ 殺人罪で現行犯逮捕する！ 逃げようとすれば撃つぞ！」

拳銃を手に犯人たちを取り囲む者たち。ちょうど近くを巡回していた警察官たちだ。彼らは犯人たちを全方向から取り囲み、全員が一齐に銃口を向けていた。その様子を見て、逃げていた人々から少しづつ歓喜や希望の声が上がる。状況は犯人たちにとって圧倒的に不利。「自分たちは助かる」という安心感が生まれつつあるのだ。

だが、当の犯人たちかというと――

「雪比奈。時間はあるのか？」

「……あまり無いな」

「じゃあ、アレしYO？　アレで決めちゃO」

犯人たちは自分たちに大量の銃口が向けられているというのに平然と相談し合っていた。彼らの表情に焦りや恐れは一切感じられない。まるで拳銃などまったくの無力とでも言いたげに。

「おい！　何を話し合っている！　どんなにあがいても逃げることなんて——」

「せゝNO」

詳しい会話の内容までは聞き取れなかった警察官たちは逃げるための相談をしていると判断し、大声と共に改めて拳銃を構える。すると、そんな警察官たちとは打って変わって調子の良い声が響き、犯人たちは一斉に動いた。

「ジャーンケン……PON！」

「……は？」

突然のことに警察官たちは言葉を見失う。はつきり言って意味がわからない。犯人たちは逃げ道を塞がれ、拳銃を向けられているというのに……「じゃんけん」をしまったのだ。そして……

「……グーだ」



「……オレもだ」

「日和はPAA。だから……YATTA〜！ 日和の勝ちー！」

「……どうでもいい。早く済ませろよ」

勝敗は一回でついたらしく、一人勝ちした犯人の一人である少女は両腕をぶんぶん振って喜びを表していた。それに対してあとの二人は悔しがる様子も無く、静かにその場で腕組みをした。

警察官たちは意味がわからず、拳銃を構えたまま彼らに問いかけた。

「お、おい……。さつきから何をやっているんだ？」

「E？ そんなの決まってるでSYO？」

警察官からの問いを聞き、少女はポカンとした表情をしたかと思うと、笑顔で答えを口にした。異常な答えを。

「おջさんたちを誰が殺すか決めてたNO！ 日和CHANゲットだYO☆」

「な……!!？」

思わず耳を疑った。「この少女は何を言っているのだろうか」というのが本心だ。完全に追い詰められ、よく見るとまったくの丸腰である目の前の少女は、平然と「自分たちを殺す」と言ってきた。そして、少女はスツと左手を警察官の一人に向かって伸ばした。

「大丈夫！　心配いらぬY O？　ちゃんと痛い思いするようになしてあげることから

S A！」

瞬間、少女の周りに無数の球体が現れた。警察官たちは何が何だかわからず、次々と怯えた表情に変わっていく。そして、まるで自分の身を守るかのように拳銃を前に出す。

「と、止まれ！　抵抗したら撃つぞ！　おど、脅しじゃないぞ！」

「……あ。最後におぢさんたちに教えてあげるNE？　何もできないくせに日和たちの邪魔しちゃダメなんだY O。だって日和たちは……」

「待——」

『捜シ者』を守る……『Re-code』なんだから」

「な……なんだコリヤアアアアアアア！」

「だから言ってるやろ。ここがオレの住処やし」

一方、大神たち（特に刻）は衝撃の事実にただただ驚いていた。マイペース、自由奔放、何を考えているかわからないという超自由人の遊騎。その彼が……

「社長！ もうすぐお食事の準備ができます！」

「あんがとな。けどもつ食ったからそんな食わんかも」

「ガチなのかヨ……。ガチで……遊騎が社長なのかヨオオオオオ！」

刻の悲鳴に似た叫びが遊騎の住処に木霊する。信じられないような豪邸を住処と言

い、何十人というメイドや召使に「社長」と呼ばれる現実。もはや信じるしかなかった。遊騎は……真正正銘の社長である。

「し、しかもコレ……ただの中小企業の社長とかじゃねーよナ。遊騎の名前聞いた時にもしやと思つたケド……まさか、遊騎が社長やつてるのつて……」

「そのまさかのようなですよ。玄関にマークがありました。どうやら遊騎が社長を務めているのはその名の通り「天宝库グループ」。玩具からIT関連、株などの投資事業までこなすかなり大手の複合企業コンツェルンです」

「嘘々……」

想像はしていたが、信じたくないほど大企業の名前が出てきたことで刻は完全に言葉を失つた。だが、彼はこれからさらに遊騎の意外な一面……驚異の社長っぷりを経験することになる。

## (1) 食事

「ま、松坂牛にフランス産フォアグラ!? 幻の鮭の鮭児に……ロシア産ベルーガのキャビア!? と、とんでもねー高級品ばかり……。味は……う、美味過ぎる……。間違った違いなく最高品質……!」

「たかがチョウザメの卵の缶詰で何を感動してるんですか。こんなものいくら食べても腹の足しになりません」

「むう……。美味しいのだが、少しくせのある味なのだ」

「所詮、オレたち庶民にはわからん味ってことだ」

「これとりゆふやったつけ？ 美味いけど匂うわ。やっぱ腐つとるで、コレ。まー、もつもとりゆふも同じくらい美味いわ」

(2) 仕事 (アイデア)

「……あ、思いついたわ。加齢臭が気になる中年キノコの『とりゆふ鳥布さん』。48歳や」

「おお！ 社長がキャラクターグッズの新企画を！ 他にないシニールさ……ヒット間違いなしだ！ 大至急社員を集めるんだ！」

「オモチャ部門はアイデア一つでここまで動くんですね」

「それだけ実績があるってことだろう」

「遊騎君はすごいのだ」

「……へ、へっ。しょ、所詮は思いつきだ口？ それくらいで社長なんか務まるわけねーヨ……」

## (3) 仕事(株)

「ちなみに株もオレがやんねん」

「十台以上の画面を同時に見て一度に取引するんですか」

「しかも画面一つ見ても稼ぎ方が尋常じゃないな」

「株はよくわからんが……とにかく遊騎君はすごいのだな！ 遊騎君、パソコンはやり過ぎると目に悪いから気を付けるのだぞ」

「か、株なんて運だシ……。 たまたま……。 たまたま運が良かっただけだつて……」

(4) 止め 知識

「やつぱ必要なのは頭脳！ 本当に頭が良い奴は偏差値70越えの閉成学院高校に余裕で入つちやつたりするワケよ！」

「家が近いから入つたのではなかったのか？」

「……そういえば天本院グループの天才社長は弱冠12歳でイギリスの名門であるケンブリッジ大学を飛び級で卒業したはず。それつて遊騎のことですか？」

「だとしたらここ数年の話だが……。そうなのか？ 遊騎」  
 「だって……勉強キライやし。はよう卒業したかってん」

（結果）惨敗

「せやけど……『にゃんまる』にはまだまだ追いつけんのや」

「あなたは一体、何を目指しているんですか」

「もはや遊騎の中の『にゃんまる』は神と同等なんだろうな……」

「……ワフ」

「ほら、刻君。『子犬』も肩を叩いて応援してくれているぞ。心配いらん。刻君には刻君の良いところがあるのだ。私はそれをたくさん知っているぞ」

「慰めるなヨ！ 余計に悲しくなんだろうガ！ そして『子犬』！ テメーに応援される筋合いなんてこれっぽっちもねーからナ！」

プライドがいたく傷付けられた刻の叫びが夜の空に消えていく。よく見ると、空には今の刻のプライドのように欠けた三日月が夜道をほんのりと照らしていた。

「ZZZZ……」

それから数時間後。大神たちは体を休めるため少し広めのリビングルームに移動した。遊騎は壁を背に座り、頭を床につけ大股開きの状態で眠っていた。大股開きのため両足の間から、目を開けたまま寝息を立てる遊騎の顔がしつかりと見えていた。ちなみに、他のメンバーはソファアに座ったり窓から外を見るなど自由に過ごしていた。

そんな中、桜は浮かんだ疑問について大神に尋ねた。

「……しかし、遊騎君が社長をやっているとは驚いたな。『コード・ブレイカー』は『存在しない者』と聞かされていたから、皆、人目につかないように生活しているのだと思っていたが」

『コード・ブレイカー』だということがバレなければ何をしても構わないんですよ」

「だとしても、社長っていうのは意外だがな」

『コード・ブレイカー』の意外な事実について話す桜と大神、優も視線を外に向けながらその会話に入ってくる。だが、桜の中では驚きよりも感心の方が強かつたらしく、遊騎に視線を向けて彼に賞賛の声をかけた。



「そうですね。でも、社員の皆さんも遊騎君を信頼しているようでした。遊騎君、社長と『コード：ブレイカー』の仕事と一緒にやるのは大変だろうが、頑張つて——」

と、言葉の途中で桜は思わず目をパチクリさせる。目の前に見える異様な光景を目にしたことで。

「テメーをブツ倒してオレのアイドルの座を死守してやる……！」

「と、刻君？」

先ほどの出来事でプライドを傷つけられた刻が、『磁力』で部屋にあつた像などを操り遊騎にぶつけようとしていた。その姿からはかなり本気の殺気が感じられ、無防備に眠っている遊騎に容赦なくその殺気をぶつけていた。

すると……

「は……つくしゅんっ！」

「ドワアアアア！」

遊騎がふいに出したくしゅみや『音』の異能により音波と化し、『磁力』で操っていた

物もろとも刻を反対側の壁まで吹き飛ばした。

「まったく……。遊騎、そんなところで寝てるからだ。寝冷えするぞ」

「仕方ないですね。このシーツでもかけてやってください」

「少しはオレの心配もしろヨ！　そして遊騎！　寝ながら異能使つてんじゃネー！」

吹き飛ばされ刻よりもくしやみをした遊騎の心配をする優と大神。自分に対する扱いの雑さと遊騎の滅茶苦茶っぷりに刻は怒りを露わにしたが、優と大神には無視され、肝心の遊騎はまだ寝ていた。その様子を見て無駄だと悟ったのか、刻の感情は怒りから諦めへと変わった。その証拠に、彼はため息をつくとポケットから煙草を取り出して火を点けると、近くにあるソファに深々と腰かけて呟いた。

「まったく、そーいうところらしいっちゃらしいけどナ。金・地位・才能・運・学歴……何の苦勞も無しに何でも手に入れる……。ホント遊騎らしいぜ。ただのワガママ大王のクセによ……」

大企業の社長としての財力、その地位を失わないほどに備わっている知識と技量、

『コード・ブレイカー』としては唯一無二の異能。誰もが羨むほど恵まれた環境に囲まれており、本人もそれをほどほどに享受している。遊騎のような生活こそ「幸福」と呼べるのだろう。そんな何でも叶う環境だからこそ、遊騎のワガママも出てくる。まさに羨ましい限りである。

「……もつとらん」

しかし、他人がいくらそう思っているからと言って――

「遊騎君？ いつの間にか起きて――」

本人もそう思っているとは限らない。

「……本当に欲しいものは何ももつとらん。友達もおらん」

「……遊騎？」

いつの間にか起きており、今までとはどこか雰囲気が違う遊騎の言葉に思わず刻は「どうかしたのか」と言わんばかりに彼の名を呼んだ。大神と優も遊騎の言葉に思うところがあるのか、神妙な表情になっている。すると、桜がいつもの笑顔を浮かべて遊騎の傍に寄った。

「何を言う。私と遊騎君はもう友達ではないか。水臭いではないか、遊騎君」

桜はそう言うのと、遊騎に向かって手を伸ばした。しかし、桜の手が遊騎の体に触れる直前に遊騎は急に前転を繰り返して桜と距離を置いた。それなりに離れると遊騎はピ

タリと止まり、どこか遠いところを見るような目をして呟いた。

「……友達やない。『にゃんまる』は『にゃんまる』や。もう……友達なんていらんし」  
その顔に悲しみは感じられない。だが、その言葉には悲しみに近い何かを感じられた。

「遊騎君……？ それはどういう——って、遊騎君!? 待つのだ! 危ないぞ!」  
遊騎の言葉から感じた何か……その正体を探ろうとしたのか、桜が遊騎に声をかける。しかし、桜の言葉が終わるより前に遊騎は再び前転を繰り返してその場から離れた。その独特な移動方法を見てか、遊騎の心情を心配してか……桜は遊騎を追いかけていった。

「桜小路さ——ん？」

今の『コード：ブレイカー』が任せられているバイトでは護衛対象である桜。その彼女を一人にさせまいと大神が桜を追おうとしたまさにその時。大神の携帯が鳴った。画面を見ると非通知の見慣れた番号。神田からだ。何かバイトに関する情報だろうと思い、大神はすぐに通話ボタンを押して電話に出た。

「神田、何か——」

「大神 “君” ですか？」

しかし、電話越しに聞こえてきたのは予想していた声ではなかった。落ち着いた声に丁寧な口調、そして大神を君付けすることから考えると……考えられるのは一人だけだった。

「平家です。急を要するので直接連絡しました。してやられました。どうやら『Re-code』がひと暴れたようです。……一般人を巻き込んで」

「ッ——!？」

平家が「急を要する」と言うほどの事態……彼の最後の言葉を聞いて大神は納得した。そして、その言葉に言い知れぬ危機感を感じた大神は刻と優にもこの話を伝えるため、二人にアイコンタクトで「緊急事態」ということだけ伝えたと携帯を操作してスピーカーの状態にした。

『Re-code』がひと暴れ……ですか。状況は？ 死者は出ていますか？」

「……それが、よく分からないのです」

「ハ？」

大神の言葉で何があつたか察した刻と優。しかし、その後にスピーカー越しに聞こえた言葉を聞いて刻は眉をひそめた。優も顎に手を当てて何か考え込んでいる。すると、平家は言葉を続けて今あるだけの情報を伝えた。

「場所は新宿の繁華街。かなりの人がいたと思われませんが……現場には人っ子ひとりおらず完全に無人状態。また、その付近の地面や建物には奇妙な無数の虫食いのような穴があいているのです。何があつたのかまるで判断がつかない状況です」

「……それが『Re-code』の仕業なら、以前『Re-code』と戦つたことのある平家あなたならある程度の予測はできるんじゃないですか？」

「どうやら今の『Re-code』には風牙のように私の知らない異能者が加わつたようです。彼らはすでに桜小路さんを狙いにそちらに向かっていると思われます。いいですか。必ず桜小路さんを護ってください。相手の異能が分からない以上、私も急いで向かいますので」

そう言うとき平家との通話は切られた。平家の言葉を聞き、三人はこれから来るであろう『Re-code』に向けてか、鋭い目つきへと変わった。

寂しい、というのが正直な感想だった。建物の構造や設置された家具はとても立派だ。大企業の社長の住まいということを考えてと当然だろう。しかし、彼のぬくもりは無かった。部屋にも、家具にも、どこからも。似たようなところを知っている。侵入者を警戒して幾重にもトラップを張り巡らせ、寝る時すら命を狙われる生活を送っている男。そう、ここは彼の家と同じ……人の住む匂いのしない寂しい場所だった。

それが、遊騎を探しに家の中を歩き回った桜が抱いた感想だった。

「遊騎君……」

彼を憂いてか、彼の名前をポツリと呟く桜。しかし、それに答える者はいない。他に誰もいない……というより、答えられる者がいないのだ。桜以外にいる者といえば、彼女に抱かれている『子犬』くらいだ。

そんな不安が膨らむような状況の中、桜はどんどん進み始めた。すると、背後から聞き慣れた声があった。

「……こちらにいらつしやいましたか、桜小路さん」

「平家先輩!?!」

振り向くと、愛読書の官能小説を手にして佇む平家の姿があった。自分たちとは別行動をとっていたことを考えると不審だが、顔見知りであり常に神出鬼没なためだろう。そこまで危機感を感じず、桜は彼の傍に行つた。

「いらつしやつていたのでですね。でしたら連絡してくださいればよかつたのに」

「……………」

桜の言葉に対して平家は沈黙を続ける。すると、彼は不敵な笑みを浮かべてポツリと口を開く。

「……………」無事で何よりです。さあ、桜小路さん。私と一緒に……………安全な場所へ行きましょう……………」

平家の手が桜に向かって伸びる。不敵な笑みを浮かべ……………ゆつくりと。手が桜に近づくとつれ、徐々に手が開いていく。二人の身長差のせいか、平家の真つ直ぐ伸びた手が桜の首と重なる。しかし、平家は気にすることなく桜に向かって手を――!

「待てや」

平家の手が桜に届こうとしたその時……………平家の手が止まった。いや、止められた。先ほどまで行方を眩ませていたこの家の主……………遊騎によつて。



「…………ゆ、遊騎君?」

目の前で起こっていることへの整理がつかない桜。平家が現れ、自分をどこかに連れていこうと手を伸ばし、その手を遊騎が止めている。仲間のはずの二人の間に流れる言いかねぬ雰囲気には桜は不安感を覚える。

すると、遊騎がその不安感がさらに膨らむ一言を口にした。まるで……“敵”を目の前にしたかのように鋭い眼をしながら。

「お前…………誰や」

「…………え?」

「……………」

疑心に満ちた遊騎の言葉。その言葉を受けてなお、平家は不敵な笑みを崩さず桜を視界に捉えていた。

## code : 31 束縛の拘束衣

味方しかないはずの遊騎の住処。現に彼らは住処に入ってから味方側の人間しか見ていない。それは今、遊騎と桜の目の前にいる者も同じ……はずだった。

『にやんまる』、騙されたらアカン。こいつは平家やない。ニセモノや」

「二、ニセモノ……?」

「……………」

いつもと変わらぬ微笑みを浮かべて二人の前に立つ平家。彼は桜を「一緒に安全な場所に行く」と言つて彼女に手を伸ばしたところを遊騎に止められている。しかし、彼はそれに構わず止められている方の腕に力を込め、桜に向かって手を伸ばそうとした。

「私は平家ですよ? 桜小路さん。さあ、早く私と一緒に行きましょう……」

「ッ……………」

桜は明らかに警戒の表情を浮かべていたが、平家の手を避けようとはしなかった。「もしかしたら」とは感じているが、確信が得られないのだろう。同じく仲間である遊騎と平家。それぞれへの信頼感の間で桜は揺れていた。

すると、遊騎は平家を止めようと彼に向かって拳を放とうとした。

「このニセモノ！ ええ加減に——」

瞬間、遊騎の背中に何かが転がってきて遊騎は衝撃でその場に倒れた。

「ゆ、遊騎君！ 大丈夫か……って、え？」

突然、倒れた遊騎を心配して声をかける桜。しかし、そこで彼女が見たものは予想だにしなかったものだった。

「……………」

「……………」

桜の視線の先で倒れる二人。その二人は髪型も顔も服装も何もかもそっくり……と  
いうより同じだった。

「ゆ、遊騎君が二人!？」

「なんだ平家、もう来てたのかヨ。ま、同時に敵サンも来たみたいだけどナ」

「桜小路さんも一緒ですか。探す手間が省けて助かりました」

「今度は遊騎が面倒なことになっているがな」

遊騎に起きた異常に続いて、大神たちが集まった。とりあえず今わかることは敵が来ていることと、その敵が二人の遊騎のどちらかに化けているということである。結局、平家は本物だったということだ。

「すみません、平家先輩！ 思わず疑ってしまいました！」

「いえいえ、いいんですよ」

「ソーソー。そもそもこいつは得体が知れねーんだからしよーがないシ」

桜は平家に疑ってしまったことを詫びたが、当の平家はいつものように微笑みながら答えた。どうやら本当に気にしてないようだ。そのため、刻のフォロー（？）も大きな効果は無かった。

遊騎が二人に増えたことで、平家がニセモノであるという可能性は否定された。しかし、それと同時にニセモノがいるということは確実となった。ニセモノが化けているのは平家ではなく……遊騎ということだ。

「ふむ……二人の遊騎君のうち、どちらかがニセモノか。見た目はまったくもって一

緒だし、どうすれば……」

「こういう場合、無難なのは……本人しか知らないことを質問したり、つていうのがあ  
る。今のところはこれが最も有効だろう」

「おお、さすが夜原先輩です」

桜の悩める声で全員の意識が二人の遊騎に集まった。桜の言う通り、二人の遊騎は見  
た目がまったくもつて一緒のため見た目による判断は心もとない。ならば判断材料と  
なるのは優の言う通り内面ということになる。そこで、桜たちはそれを確かめる方法を  
考えた。

「では、遊騎君しか知らない質問か……。大神、何かいい案はあるか？」

遊騎しか知らないこと……。それを知っている者がいるとすれば、彼と付き合いの長い  
『コード：ブレイカー』の面々だと判断した桜は大神に意見を求めた。しかし……

「知りません」

「生憎、オレも知らない」

「つーか、遊騎にそんな興味ないシ」

「この薄情者共が！」

『コード：ブレイカー』<sup>業者</sup>たちの冷たさに桜は思わず怒鳴った。ならばどうしようかと  
桜が再び考え始めた。すると、今まで黙っていた遊騎が口を開いた。

「心配すんなや、『にやんまる』。遊騎はオレやし」

「え？ そうなのか？」

「嘘言うなや。オレが本物の遊騎やし」

「え？ え？」

二人の遊騎の「自分が本物」発言をそれぞれ真に受けた桜は、余計に頭の中がこんがらがってしまっていた。そんな桜に対し、二人の遊騎はまだ「自分が本物」と言い合っていた。

「うるさいわ、ニセモノ。遊騎はオレや」

「お前こそうるさいわ。遊騎はオレやって」

『……………』

似たような問答が数回続くと、二人は黙って互いを見合った。すると、お互いにまったく同じポーズを始めた。おそらく、自分本物ならではのポーズをしているのだろう。しかし、ニセモノはそれも完璧にわかっているらしく、互いのポーズに大きな違いはない。そして、何度かポーズを繰り返すと二人の遊騎は声を揃えて結論を言った。

『別に両方、遊騎でええやん』

「いいワケあるカー！」

なんとも遊騎らしい結論に刻は思いつきり叫んだ。どうやらニセモノは遊騎の内面

すら完璧に真似ているらしい。遊騎の結論に呆れながらも、大神たちは改めてニセモノを見つけ出すことが困難だと思い知った。

「ここまで遊騎にそっくりだと判断は相当難しいな」

「……ダナ。どうやって見分けりゃいいんだか」

優と刻が困り顔で弱気な言葉を洩らす。もはや手は無い……そう思った時だった。

「わかつたのだ！ 本物の遊騎君はこっちなのだ！」

ふと桜の声が響いた。見ると、桜は片方の遊騎をハグしていた。どうやら、そのハグでその勇気が本物だと判断したらしい。そして、その根拠はというと……

「こうしてハグしているとわかるぞ！ こっちの遊騎君からは遊騎君のあつたかミルクの匂いがするのだ！」

「おー。『にゃんまる』すげー」

匂い。それが桜が本物と確信した証拠だった。そして、今までの彼女を知る者たちにとって、それはほぼ確定的と言ってもいいほど有力な証拠であった。

「いやいや、そんなんでわかるわけないやろ。本物はオレやし」

「残念でしたね。桜小路さんの匂いに対する嗅覚は異常なんです」

「つーわけで、ニセモノさん？ さっさと正体言った方がいいぜ」

「アドバイスするなら、次からは匂いも真似た方がいい。真似られるなら、な」

ニセモノと判断された遊騎は桜の言葉を否定したが、大神たちは構わずニセモノの遊騎の前に立ちはだかった。この状況を見て、これ以上続けるのは難しいと判断したのか、ニセモノの遊騎に異常が起きた。

「う、ぐ……。こ、こんな……こんな当て方反則ー！」

「なっ!?!」

ニセモノの遊騎の口調が変わった瞬間、彼の体が風船のように膨らみだした。突然のことに大神たちは驚きながらも、一気に戦闘態勢に入った。そして、限界まで膨らんだのかニセモノの遊騎の体が勢いよく割れ、ニセモノの正体が現れた。

「Y A H H Oー!」 『Ree-cod e』の日和CH A N<sup>ちゃ</sup>登場ー!」

「女!?!」

「なんかわれたし」

「やはり『Ree-cod e』でしたか……」

姿を現したのはどこかの女子用制服と思われる服装に身を包んだツインテールの少女……日和。大神たちはまだ知らないが、新宿で警察官たちを……というよりは繁華街全体を手にかけてと思われる張本人。『Ree-cod e』と名乗った彼女に対し、大神たちは少女とはいえ警戒心を高まらせる。唯一、遊騎だけは先ほどまで自分と同じ姿をしていた割れたなんかに対して興味を持っており、自分の方に飛んできたなんかの一部を



弄っていた。

「遊騎に化けてたトコを見る限り、変形系トランスフォームの異能ダナ。てーことは大した戦闘力もねーだろうし、さっさと終わらせよーぜ」

「Nー、それはどうかNAな?」

冷静に日和の異能を分析した刻は余裕の態度でいた。しかし、日和は特に不安を感じていたり焦っているような雰囲気は無い。むしろ、彼女の方が余裕に感じられた。

「実は……もうみーんな、日和の手の内なのだ!」

「ハ?」

無邪気な表情で堂々と自分の遊里を宣言する日和。状況と矛盾した言葉に刻は頭に疑問符を浮かべていたが、異常に気付いた遊騎がいち早く動いた。

「『にやんまる』! ろくばん!」

「うわ!」

「遊騎?!」

突然、遊騎に突き飛ばされた桜と大神。その次の瞬間……

——ぶくんっ

「ハ!？」

「これは……」

「なんかふくれたし」

遊騎が先ほどまで弄っていたなんかが一瞬で球状になるまで膨らみ、刻、優、遊騎の三人を中に捕えた。

「三人かー。みんな捕まえられなかったのは残念だったけど、まーいつか。用があるのは桜小路 桜が持つてる鍵キだけだしNねE」

刻たちを捕えた日和は理想の結果に届かなかったことを残念がりながらも、遊騎のおかげで罫から逃れた大神と桜の前に立ちほだかる。そして、無邪気で屈託の無い笑顔で桜に話しかける。

「ほらほら、早く鍵キ出しちゃいなよ。そうすれば……ちゃんと痛い思いさせて殺して

アゲルからっ！」

「キ、鍵だど？ 何を言っているのだ……」

日和の言う鍵の意味が理解できない桜。無理もない。この場で鍵について把握しているのは日和と平家しかない。桜自身は鍵の意味どころか、自分が鍵を持っていることすらわかっていない。と言っても、鍵は桜に抱かれている『子犬』が今も口の中に入れて守っているのだが。

「このヤロ！ 鍵だかなんだか知らねーが、桜チャンをやらせるかヨ！ こんな膜、すぐに破って——」

桜を助けようと、刻は運良く足元に転がっていた鉄製の置物を『磁力』で飛ばし膜を破ろうとした。しかし……膜は破れることなく置物を包むように伸びていき、反動で刻に向かって飛んできた。

「痛ってえ！ なんだよ、コレ！ 止まらねーし！」

「どこいつてもトランポリンみたいに飛んでくるんや。おもしろいなー」

「面白がってる場合カー！」

刻が飛ばした置物は刻に当たった後も膜の中で飛び続けた。遊騎の言うように、膜に当たるとトランポリンのように勢いがつくので刻は自分で自分の首を絞めたような結果になってしまった。とりあえず、刻はもう一度『磁力』で置物を操って動きを止めよ

うとした時……

——グシャァ!

「優……!」

「これぐらいで騒いでる場合じゃない。……見ろ」

今まで黙っていた優が飛び続けていた置物を片手で握り潰し、その場で捨てた。そして、大神たちがいる方向を指差した。言われた通りに見てみると、状況が動いていた。

「その前に、私をニセモノ呼ばわりした罪をきつちりお仕置きしてあげましょう。大神君、ここは私に任せて桜小路さんを安全な場所にお連れしてください。生徒会室でも言つた通り、今の桜小路さんは我々『コード：ブレイカー』全員の命を失つてでも護らねばなりません。それに、あまり人が多いと私も闘いづらいので」

「平家……」

平家が『光』のムチを手にし、桜を庇うように日和の前に立ちはだかつた。彼は大神に桜を連れて逃げるよう言うと、手にした『光』のムチをピンと伸ばした。

「……………」

一方、大神は桜を護らねばならない理由や鍵<sup>†</sup>のことなど様々な疑問を抱いていたためか動くことを躊躇っているようだった。しかし、自分が『コード：ブレイカー』として何をすべきなのか……その答えが出ると彼は行動に移した。

「平家先輩……みんなの命を失ってもなどと言っては——って、大神!？」

「黙って来てください……! 平家、ここは任せました!」

大神はあらゆる疑問を内に仕舞いこみ、『コード・ブレイカー』として任された仕事を全うすることを選んだ。桜の手を引き、日和から離れるために走り出した。それと同時に、平家は一步前に出て日和との距離を詰めた。

「ろくばん、『にゃんまる』護ってな—」

「平家か……。未知の異能者である『Re—code』相手に『コード:02』がどう闘うか……見させてもらおうじゃね—カ」

(例えば、平家さんが闘うところを見るのはこれが初めて……。かつての『Re—code』とも闘った実力者の力……見逃すわけにはいかない)

遊騎は声援を送ることで大神の背中を押し、刻と優はこれから始まるであろう平家と日和の闘いを見届けようと二人の方に視線を集中させた。

そして、対峙した平家と日和。日和はジロジロと平家を見ると、面白くなさそうな顔をした。

「あんた、日和の邪魔するんだ。ふん……」

すると、日和は右手の人差し指と親指の指先同士を合わせて円を作り、自らの口元に円の部分が合わさるように構えた。まるでシャボン玉を作る時のように。そして……

「じゃあ……ちよつと遊んでアゲルYO!」

そう言うのと、日和は思いきり息を円に向かつて吐き出した。すると、次々とシャボン玉が放たれ、平家に向かつていった。

「シャ、シャボン玉!? 本当に遊ぶ気かヨ!」

「おやおや、なんとも可愛らしい……」

日和の意外な攻撃方法に刻は目を見開いたが、平家は冷静に『光』のムチを操り次々とシャボン玉を真つ二つにしていった。だが……

「——ツ!? これは……」

「お、オイ! なんかシャボン玉、増えてねーカ!」

「まさか……この膜みたいに一部分でも残つていれば、そこからシャボン玉を作れるのか? だとしたら無暗にシャボン玉を攻撃しても数を増やすだけ……」

平家がムチで真つ二つにしたシャボン玉……しかし、それは割れて地面に落ちることにはなかった。それどころか、真つ二つにされたことで二つに分かれた後、それぞれが膨らんでシャボン玉となっていた。優の言う通り、考え無しの攻撃は自分を不利にするだけだった。さらに、日和のシャボン玉はそれだけで終わらなかつた。

「切つても増えるシャボン玉ですか……。さて、どうすれば……」

「ツ——! 平家! 体にシャボン玉が!」

「！」

増えることへの対策に気を取られていた平家。その間に、いくつかのシャボン玉が平家の体にくっ付いていた。刻の言葉でそれに気付いた平家は振り払おうとしたが、次の瞬間――

「ぐっ！」

シャボン玉はくっ付いた部分の制服を溶かしていき、平家の皮膚に触れる。その瞬間、シャボン玉は勢いよく破裂し、火傷のような痛みが広がり体からは勢いよく血が飛び出た。

「ただのシャボン玉じゃねーのか！」

「刻！ 周りを見る！ シャボン玉が触れた部分の壁に穴が開いている！」

「ムシクイやし」

「虫食い……それって新宿の繁華街と同じ状況じゃねーか！ てことは、新宿で暴れたのもアイツつてことかヨ！」

平家が傷を負ったことで日和の放ったシャボン玉が危険だと理解した刻たち。さらに、周囲を見るとシャボン玉が触れた部分の壁に穴が開いており、虫食い状態になっていた。その状態から新宿での被害は日和によるものだと判明し、改めて彼女の危険性を知った。やはり彼女も『Re-code』の一人としてかなりの実力を持っているのだ。さらに、絶望的なことにシャボン玉は消そうとして攻撃しても増え続けてしまう。現に、平家の周りには無数のシャボン玉が浮いていた。

「シャボン玉に触れた部分は溶かされ、まるでシャボン玉に喰われたみてーに消えちまう……。しかもあの量のシャボン玉に囲まれたんじや何もできねーじゃねーか……」

「『光』のムチで日和を攻撃しようとしても、あんな自由に動けない状態じゃそれも難しい……。一体どうすれば……」

「……大丈夫や」

絶望的な状況に刻と優は弱気な声を洩らす。しかし、それに対して遊騎は平然とした顔で「大丈夫」と呟いた。そして、確信に満ちた顔で言った。



「なんでにばんが『コード：02』なのか……すぐわかるし」

遊騎は知っていた。平家の強さがこんなものではないということ。一方、当の平家はというと出血と痛みを耐えながら、いつものように背筋を伸ばし口を開いた。

「……日和さん。状況を見る限り、新宿で暴れたのはあなたのようなのです。そこで質問です。あなたは新宿で罪なき者を何人殺しましたか？」

「え？ えつとお……ひー、ふー………つて、わかるわけないじゃん！ だって日和は指十本しかないから十までしか数えられないYO！ つていうか、そんなのどうだつていいじゃん！ だって日和の知らない奴が何人死んだつて日和には関係ないMON！」

平家の問いに対し日和は、無邪気に両腕を振り回し唇を尖らせながら悪びれもせず答えた。まるで、自分が知らない人間ならば何人殺してもよい………とでも言いたげに。すると、平家は若干の微笑を浮かべて日和のことを真つ直ぐ見て、再び口を開いた。

「……そうですね。所詮、人は自分に親しい者しか大事にしない生き物です。ですが、日和さん。だからこそ、常人には無い異能を持った我々は己を制縛し、全ての人々を大切にすべきだと思いませんか？」

「何言ってるの？ 日和はちゃんと大切にしているもん。そう、大切に……」

殺してるYO?」

——その答えは、彼の前では言っていけない言葉だと後に知る。そう、彼は……………

「——悪<sup>クズ</sup>が……………」

平家は笑っていた。その眼に明らかな殺気を込めながら。彼は……………大きな怒りを感じていた。そして、彼は制服のボタンに手をかけ、一つずつゆっくりと外していった。

「どうやら、あなたの性格は普通のお仕置きじゃダメそうですね、日和さん。いいでしょう。なぜ私が『コード：02』でありながら、なぜ先陣を切つて闘わないのか。その理由を……教えて差し上げましょう……」

そう言うのと、平家はボタンを全て外し終えた制服を脱ぎ、手を離れた。すると……

——ドゴオオオ!!

制服は……落ちていき轟音を立てて床に小さなクレーターを作った。

「ハ、ハア!? 嘘だろ! なんだよ、あの制服! 重いなんてもんじゃねーゾ!」

「にばんは上手く異能をコントロールできへんのや。『光』の異能は強すぎて何もせんと体から『光』がうまくつてすぐロストしてしまうんや。せやから、いつもあの特別性の制服で束縛して押し止めてるんや。にばんがあれを脱ぐのはキレた時……。そして、あれを脱いだら——」

遊騎が答えを言うより早く、平家の体から徐々に『光』が放たれた。それは微々たる

ものだったが、少しずつ……少しずつ強くなっていた。そして……

「もう、私を拘束し縛るものは何も無い……。まさに……グレート☆オープン・ザ・マインド！」

——カツ!!

「な、なにこれ!? KYAA<sup>キャ</sup>AA<sup>ア</sup>AA<sup>ア</sup>AA<sup>ア</sup>AA<sup>ア</sup>AA<sup>ア</sup>!

瞬間、平家から目を開けていられないほどの『光』が放たれ、シャボン玉も、日和も、床も、壁も……何もかも吹き飛ばしていった。

「ちよ、待て! これってオレたちも危な——どわあああああああ!」

……もちろん、膜に捕らわれていた刻たちも。

「……生きてるか？」

「ナ、ナントカ……。つか、今のって一体……」

「あーあ、やっぱりや」

平家が全身から放った『光』によりできた瓦礫の山。その中から、優、刻、遊騎が顔を出す。優の生死の確認に対し、刻は訳がわからないといった様子で答え、遊騎は瓦礫の上でも構わず寝転んで特に高く積まれた瓦礫の山を見ていた。

「にばんは嫌いやけど……やっぱめっちゃ強いなあ」

遊騎の視線の先……瓦礫の山の頂上に一つの人影があつた。自分を制縛する制服という名の拘束衣を片手で持ち、風にたなびかせながら瓦礫の山を見下ろす……  
平家ゴード将臣ドだった。

「どんなに強大な力を持っていたとしても、真に斃すべき者を斃さねば意味はありま

せんがね……」

「……やはり、平家さんはすごい。尊敬します」

「オレはせーへん」

憂うような表情でつぶやく平家。彼を見つけた優は尊敬の意を込めた拍手を送り、遊騎はつまらなそうに顔をそむけた。ちなみに、刻はというと……

「オイ、平家……。なんでもいいケド……これはやり過ぎだろーガ！」

思いつき怒鳴り散らしていた。無理もない。なぜなら、平家の攻撃により生まれた被害は尋常ではない。それは周囲を見ればわかった。遊騎のすみかである大豪邸……その半分ほどが完全に瓦礫の山と化していたのだ。それだけで先ほどの攻撃の威力がわかる。

「危うくオレたちも死ぬトコだったろーガ！」

「私の『光』の奔流は私自身も上手くコントロールできませんからね。ですが、結果的に膜からも脱出できたのですから良いではないですか。遊騎君、あなたのすみかを壊してしまい申し訳ありません」

「そういえば……まさかとは思いますが、社員の人たちは巻き込まれてないよな？ 大神たちは逆方向に逃げてたから心配は無いと思うが……」

「心配あらへん。社員たち、とつくに帰つとるし。それより、斃したんか？」

自分たちの安全を考慮しなかったことに怒りを露わにする刻に対し、制服を着直しながらいつも通りの対応をする平家。一方、優は被害の大きさを見て一般人である天宝院グループの社員たちの安否が気になってしたが、遊騎の言葉が彼らの安全を保障していた。

そして、遊騎は敵である日和を斃せたかどうかを尋ねた。生憎、日和が吹き飛ばされたと思われる場所には土埃が蔓延しており、すぐに確認はできない。攻撃した平家の手ごたえを感じたか尋ねているのだろう。すると、急に突風が吹き、辺りに蔓延していた土埃を吹き飛ばしていった。それと同時に、平家は答えを返した。

「それが……まだです」

「……………」

土埃が晴れた先には、左眉にバーコードを刻んだ仮面のような表情をした男……繁華街では時雨と呼ばれた男が右手を前に出した状態で立っていた。脇に服と髪がポロポロになった日和を抱えて。

「WA—N! 時雨エ!あのピカピカ野郎のせいで服がボロボロだよ! 日和の可愛い髪型だつてボサボサだYO!」

「……油断するなど言つただらう。あの人は……とても強い」

バンバンと瓦礫を叩いて文句を言う日和に対し、時雨は眉一つ動かさず平家を見ていた。突然、現れた日和の味方に刻たちは警戒心を濃くする。しかし、一人だけ彼らとは違つた感情を抱いている者がいた。

「……時雨?」

「どうした? 遊騎」

遊騎だつた。彼はボソリと日和が口にした名前を呟くと、時雨のことをジツと見た。そして、今度は確信を持つたかのように時雨の顔を見ながら繰り返した。

「時雨……!」

遊騎はおそらく知っている。この男が誰なのか……知っている。一方、時雨は先ほどまでと変わらない冷たい眼を遊騎に向けていた。



闘いは……まだ終わりそうになかった。

「さっきの音と光はなんだったのだろう。大神、わかるか？」

「おそらく、平家が何かしたんでしよう。それより、今は身の安全が第一です」

その頃、大神と桜は身を隠そうと走り回っていた。今のところ、他の『Re-code』と出会ってもいないため無事に済んでいる。しかし、日和たちを撃退し、平家たちと合流するまでは安全とは言い切れない。体力と周りに気を遣いながら大神たちは移動を続けた。

「……………」

ふと、大神が急に立ち止まって周りを見渡した。強い警戒心は感じないため敵の気配を感じたわけではなく、何か気になることがある程度なのだろう。しかし、突然のことに桜は少し驚き、彼に声をかけた。

「大神？ どうかしたのか？」

「何か……誰かに、見られているような気が」

「え？　そ、そうか？」

「……いえ、杞憂ですね。忘れてください」

大神に言われて周囲を見渡す桜だったが、誰の姿も無い。大神も同じなのだろう。すぐに首を振って杞憂と判断した。

「……………」

しかし、ここで気付くべきだった。それが杞憂ではないことに。大神たちよりはるか上……月光が差し込む窓辺。そこに静かに微笑む白い影がいることを。

「……………見つけた」

白い影……『捜シ者』が静かに呟く。その眼は、確実に大神と桜を捉えていた。

## code : 32 黒と白の対峙

「時雨……！」

「……………」

平家と日和による鬪いで半壊状態となった遊騎のすみか。半壊状態のため瓦礫の山となった場所で、四人の『コード：ブレイカー』と二人の『Re-code』が対峙していた。そのうちの二人……遊騎と時雨の間には初対面とは思えない異質な雰囲気が漂っていた。

「時雨、オレは——！」

「真理は死んだ。お前が……真理を殺した」

「ッ……………」

時雨が口にした「真理」という名を聞き、遊騎は言葉を詰まらせた。時雨は表情一つ変えることなく、さらに畳みかけるように言葉を続ける。

「あいつはもう帰ってこない。今度はオレがお前を殺す。今のオレには……それだけの实力がある」

「……………」

「……遊騎！ お前『Reecode』に知り合いがいるってどういことだヨ！」  
 明らかな殺意が込められた時雨の言葉。遊騎は彼の言葉になんの反論もせず、ただただ黙っていた。どうやら遊騎と時雨は因縁があるらしい。そして、それには真理という人物が深く関わっている。

二人のやり取りから二人の関係性を察した他の『コード：ブレイカー』たち。その中でも特に『Reecode』を意識している刻は、遊騎の知り合いが『Reecode』にいるという事実を知り彼を問い詰めようとしていた。

「……日和、帰ろう」

「N<sup>ん</sup>」

すると、先ほどまで遊騎に殺気に向けていた時雨から殺気が消えた。それどころか遊騎たちに背中を向け、日和を連れて去ろうとしていた。日和も時雨の言葉に逆らうことなく、服についた土埃を払いながらそれに応じた。

「オイオイ、待てヨ！ そう簡単に逃がすワケねーダロ！ ブツ斃すついでに、オレが知りたいことを洗いざらい話してもらおうぜ！」

しかし刻がそれを許そうとはしなかった。彼にしてみれば姉である寧々音の仇……瘢痕の『Reecode:03』に関する情報を手でできる絶好の機会なのだ。さらに、その情報源であると同時に『捜シ者』一派の戦力の中枢でもある彼らを素直に返すわけ

にはいけないのだ。

だが、それが不可能であると彼らは思い知る。そして……今その場にいることが誤りであるということ。

「オレと日和の仕事はここでキサマらを足止めすること。そして、すでに『捜シ者』は桜小路 桜と鍵<sup>キ</sup>を手に入れているだろう」

「……ハ？」

時雨の言葉が鼓膜を通して脳内に響き渡る。瞬間、刻たちの全身に悪寒が走り冷や汗が流れた。

「——!!?」

「ぬお!? ど、どうしたのだ、『子犬』! 待て! 暴れるな!」

「何やってるんですか! 静かにしてください!」

ちようどその頃。大神と桜にも異常が起きていた。今まで桜の腕の中で大人しくしていた『子犬』がジタバタと暴れ出したのだ。突然のことに桜も思わず大声を上げてしまい、大神もそれを叱る。彼らは今、桜を『Recode』から護るために身を隠そうとしている。それが大声を出してしまつては場所を教えていることと同義であるため意味が無い。

「——!!」

「痛っ!」

桜はなんとか『子犬』を落ち着かせようとしたが一向に落ち着く気配はなく、とうとう『子犬』は桜の顔に蹴りを入れて桜から離れた。そして、そのまま大神たちが向かうとした方向とは逆方向に走っていつてしまった。

「『子犬』! どこに行くのだ!」

「桜小路さん……! 今は『子犬』と遊んでいる場合じゃ——」

——  
チンッ

——  
カ……チンッ

「……………」

小さく、だがハッキリと聞こえる金属音。金属が指で弾かれ、重力に引かれて戻り金属同士でぶつかる音。それが聞こえた瞬間、大神の耳には他の音は一切入らなくなり、言葉も続かなくなった。

「……………む？ なにやら音が——え？」

『子犬』を追いかけようとした桜だったが、大神と同じように彼女の耳にも金属音が届く。不審に思った桜は音が聞こえてくる方向を見た。見ると、そこにあつたのは二回へと続く踊り場付きの階段。よくテレビで見る豪邸のような、踊り場からさらに左右に分かれた階段があるタイプだ。音の出所はその踊り場のはるか上……月光が差し込む窓だった。そして見えたのは……窓辺に座る一つの人影。それも、ただの人影ではなかった。

「……………」

——カ……チンツ

「あれは……」

そこにいたのは、真つ白な髪に真つ白な肌……さらには輝望高校の学ランと同じタイプの真つ白な服に身を包む白い者。その手には刀を持ち、親指で鐳を弾いては戻ってきた鐳が鯉口とぶつかり金属音を響かせていた。だが、そんなことは気にならなかった。なぜなら、最も気になったのは……



「大……神？」

その者の容姿が……完全に大神と同じということだった。

——カッ！

桜が驚きの声を出し呆然とした直後、白い者は先ほどまでよりも強く鐔を弾いた。その分、鯉口に戻ってくるまでの時間も長くなる。すると、鐔が鯉口に戻るよりも前に彼は柄を握る。そして、そのまま刀を鞘に納めようと……

「桜小路さん！」

—— チンツ

「ぐああああ!!」

「……………ツ！ お、大神?！」

白い者が刀を鞘に納めた瞬間……先ほどまでと同じく鍔が鯉口にぶつかる音がした瞬間だった。桜を突き飛ばし、桜が立っていた場所に立った大神の全身に無数の切り傷が刻み込まれ、大量の出血が流れ大神は体を支えきれず倒れた。突き飛ばされたことと大神の血を見たことで、呆然としていた桜も正気を取り戻す。だが、一体何があったのかわからなかった。というより、何があったかまるでわからなかった。

（いつだ……………? いつ、刀を抜いたのだ? いや、それよりも……………）

桜は驚愕の表情をしながら、改めて白い者を見る。いや、正確には彼との距離を、だ。彼は階段の先にある踊り場の上に設置されている窓の窓辺。明らかに刀が届く距離ではなかった。それだけではない。彼は……………座っているのだ。

（なぜ……………なぜ届いた!? あの者はあんな離れた場所において……………座っているというのに……………!）

刀を抜いたタイミング、届くはずがないのに届いた斬撃。多くの謎が頭の中で渦巻く桜に対し、白い者は平然とした態度で未だ窓辺に座っていた。そして、彼は右手を右頬に添え、不思議そうに口を開いた。

「人を庇って傷つく……。そんな風に育てた覚えは無いけどなあ」

彼の右頬に添えられた右手……。その甲には十字架のような特徴的な刺青が刻まれていた。桜も見覚えがある……。「彼」と同じ刺青が。

『捜シ者』……!」

『捜シ者』……この者が、本物の——!」

全身に力を入れて起き上がりとする大神。彼は今までにも何度か見せてきた異常なほどの殺気を込めた眼で白い者……。『捜シ者』を睨みつけた。大神の言葉を聞き、桜も自分の前にいる人物が『捜シ者』であることを理解した。『捜シ者』は窓辺から降り、軽やかに踊り場に着地した。そして、手すりに右手を添えながら一段ずつ階段を下りてきた

（大神と同じ姿をした白き者……。大神は否定していたが、雪比奈殿の言う通り兄……。なのか？ それもあそこまで似ているということは……。双子、か？）

少しずつ近づいてくる『捜シ者』。その姿はどう見ても大神と瓜二つだった。違うところといえば、黒髪と黒の学生服である大神とは真逆の白髪に白の学生服。そして、大神と比べると顔がかすかに大人びているということだった。

大神と瓜二つな『捜シ者』を見て、桜は雪比奈が言っていた「『捜シ者』が大神の兄」という言葉が本当は事実なのではないかと感じた。それに対し、『捜シ者』はゆっくりと

階段を下りながら自らの目的を口にした。

「……鍵<sup>キ</sup>が欲しいんだ。元『コード・01』の人見が『エデン』から盗み出し、桜小路に託した鍵<sup>キ</sup>が」

「キ、鍵<sup>キ</sup>だと？ 人見先輩殿が、つて……私はそんなもの託された覚えは——」

「……ねえ」

「ツ——!？」

託された覚えは無い……そう言おうとした時だった。今まで桜の前にいたはずの『捜シ者』が桜の隣に移動していた。彼女の肩に手を乗せており、もう片方の手を桜の頬に触れていた。その手のあまりの冷たさに桜の言葉はそれ以上、続かなくなった。

（い、一体いつの間に……！　そ、それに、まるで陶器のように冷たい手……！　眼も……人の心を騙るようで、死人のような冷たさしか感じない……！）

手も、眼も、何もかも。全てが冷たい『捜シ者』に触れられた桜は全身に強い寒気を覚え、その体はカタカタと震えだした。しかし、それは恐怖もあつた。何か言わなければ死ぬ……そんな恐怖を全身に感じた。

「キ、鍵など……知ら、ぬ……」

それが精一杯だった。震えて上手く動かない口をなんとか動かし、桜は『捜シ者』の問いに答えた。しかし、それでも震えは止まらない。『捜シ者』は桜が鍵キを持っていることを知っている。ならば、その張本人である桜が「知らない」と言つたところで信じる可能性は高くはないだろう。嘘と判断され、そのまま殺されることもあり得ることだ。大神はまだ倒れている。仮にそうなつたら助かる可能性は無かつた。

「……あれ？」

『捜シ者』は冷たい眼で桜の眼をジツと見る。桜の言葉が偽りであるかどうか確かめるかのよう。そして……

「本当に何も知らないんだ、桜小路　桜。……悪かつたね」

桜の言葉が本当であると判断した『捜シ者』は桜から離れ、謝罪の言葉を述べると彼女の頭に手を置いた。普通なら安心する行為だが、それでも桜の震えは止まらない。

そして、『捜シ者』は手を桜の頭から離し……刀の柄に手をかけた。

「じゃあ……もういらぬいな」

「ッ——！」

殺される……そう桜が確信した……その時。

「燃え散れ！」

立ち上がった大神が左手に『青い炎』を纏い、『捜シ者』の後ろから奇襲をかけた。刀は主として前方への攻撃が最速。言い換えれば、後方への攻撃は前方への攻撃に比べ少しばかり遅くなる。そのわずかな時間の間に大神は『青い炎』で『捜シ者』を燃え散らそうとしたのだった。そして、左手が『捜シ者』の肩に届——

「邪魔」

—— チンツ

「がっ！」

「大神！」

隙を突いたはずの大神の攻撃。しかし、攻撃が届く直前に『捜シ者』から金属音が響き、大神の体に傷が刻まれる。先ほどまでと同様、太刀筋も何も見えない攻撃により。

（また何も見えない……！ 居合なのか……？ いや、いくら居合でも早すぎる……。

ということとは……これが『捜シ者』の異能……？）

目の前で起こる見えない攻撃という理不尽に対し、桜はその理不尽を説明することができる唯一の結論にたどり着いた。そう、異能という結論にだ。この世には存在しないはずの大神の『青い炎』、普段は発揮できないほどの力を発揮できる優の『脳』など、今まで経験した中で理不尽なことは全て異能だった。ならば『捜シ者』が起こしている理不尽も異能だと考え付いたのだ。だが――

「違うよ、桜小路 桜」

「え……？」

柄に手を添えている『捜シ者』。その状態で視線を動かし、死者のように冷たい眼を再び桜に向けた。そして、その視界に彼女を捉えながら口を開いた。

「これは異能じゃない。そもそも、異能を使うまでもないしね」

「……え？」

(まさか、今……)

そんなことはあり得ない。自分は何も口にしていないはず。だから、わかるはずがなかった。しかし、現に『捜シ者』は桜の考えを否定した。冷たい眼で桜を捉えながら。まるで、その眼で全てを見透かしたかのように。

(心を読まれた、のか……?)

桜の全身に悪寒が走る。触れられた時とは違う。もつと直感的な理由でだ。見えないう攻撃、圧倒的な力の差、全てを見透かす読心術。目の前にただ立っているだけのはずの男に、絶望的とも言える力の差を感じたのだ。これでは追い返すどころか、まず彼から逃げることもすらできない。無意識のうちにそう考えていた。

しかし、最も力の差を感じているはずの男の背中が桜の前に再び現れた。

「逃げろ……早く……!」

「お、大神……」

後ろ姿を見ただけでも重症だとわかるほど傷つけられた体。足元を見れば全身から流れる血がぼたぼたと零れ落ちていた。そのせいかな、その左手で揺らめく『青い炎』もひどく不安定に見えた。その姿を見たいせいでだろう。桜の正義感がここぞとばかりに燃



える。

「バカを言うな！ そんな傷だらけのお前を置いていけるわけが——！」

「いいから逃げろ！」

自らの正義感を貫こうとする桜に対し、大神は彼女の言葉を遮るように言い、さらに力づくで彼女を逃がそうと右手で彼女を後ろに押した。だが、その間にも『捜シ者』は彼らの近くまで迫っていた。

「そ……どいて」

——チンツ

「ぐあー！」

容赦しない……とでも言いたげに眉一つ動かさずに大神を攻撃する『捜シ者』。大神は彼の攻撃を避けることなく、全てその体で受けた。先ほどまでと同じように。

だが、先ほどまでとは違うところがあった。

「ま……まだ、だ……！」

大神は『捜シ者』の攻撃をまともに受けながらも、倒れることなく立ち続けた。そして、強い意志を込めた眼を『捜シ者』に向けていた。しかし……

「……聞こえなかった？ どいてよ」

——チンツ

「ッ——！」

『捜シ者』はそれでも容赦なく、攻撃を続ける。しかも、今回は一回だけではない。最初の金属音以外はまるで聞こえない。聞こえず見えないが、彼は連続で攻撃している。そのため、大神の体には傷が刻まれ続けている。しかし、それでも大神は倒れようとはしない。それどころか、意地でも桜の前から動こうとしなかった。

「ぐ……………」

しかし、とうとう膝を突いた大神。すると、『捜シ者』が止めと言わんばかりに再び攻撃を繰り出す。だが、大神は逃げない。膝を突いても桜を庇うように腕を広げ、再び全身で攻撃を受けた。

「は、早く……………早く、逃げろ……………」

「お、大神……………」

自分の傷に構おうともせず、大神は桜に対して逃げるよう言い続けていた。桜はわからなかった。なぜ彼がここまでして自分を護ろうとしているのかが。

(いくら『コード・ブレイカー』の仕事だからと言って……………平家先輩の言うように命を失つても護ろうとしているとでもいうのか……………!? だからと言って、こんな——！)

その時、桜の中にはあるビジョンが浮かぶ。数時間前の彼の姿を。決意が込められた……………彼の言葉を。

……今度はちゃんと護ります。あなたを小さくした時のようなヘマは二度としません。

「大神……お前は——」

「ぐうっ！」

自分の目の前で今なお傷つく大神。だがそれは、仕事だからではない。それは……誓い。彼が自分に、そして彼自身へ誓った約束。何があっても……彼女を絶対に護るという自らに課した絶対遵守の誓いだった。

「……………」

どんなに傷つけても、どんなに血を流しても立ち続ける目の前の男。わからなかった。なぜそこまでしようとしているのか。なぜそこまで自分を犠牲にできるのか。なぜ……

「どうしたの？ 一体、いつからだい？」

なぜ彼は……彼の眼は……………」

「いつからそんな眼をするようになった？」

「……………」

ここまで強い意志が込められているのか……まるで理解できなかつた。ただ、わかるのは……今の彼がどうにも気に入らないということだつた。

「……醜いな、人臭い。そんなお前……」

ゆっくりと鞘から刀が抜かれ、その刀身を自らの目線と重ねる。窓から差し込む月光が刀身に反射し、妖しく光つた。そして……

「見たくない」

大神の体を、頭を裂こうと刀を容赦なく振り下ろした——！

「お、大神イイイイイイ!!」

——カッ！

「な、何だ!？」

「桜小路さん——!」

『捜シ者』の刃が大神に届こうとしたまさにその時。突然、目が眩むほどの光と何かが壊れていくような轟音が響いた。突然のことに『捜シ者』の刃も止まる。だが、桜も咄嗟に動くことができなかった。すると、大神が彼女を光から庇おうと光を背に覆いかぶさる。それに対し、『捜シ者』は刃を止めた状態のまま動かない。避けようとも防ごうともせず、ただその場に立っていた。

そうしているうちに、光と轟音は三人を飲み込んだ。

周辺の住民にとって、そこは一つの観光スポットのようなものだった。世界を股にかける大企業の社長が住んでいる大豪邸なのだから、それも当然とも言える。しかし、今は別の意味で観光スポットになりそうだった。大豪邸があつたはずのその土地には家一つ建つておらず、大量の瓦礫の山が出来ていた。

「ん、この……バカ平家ー！」

突然、瓦礫の中から怒りを露わにした刻が顔を出した。よく見ると、その近くには遊騎が瓦礫の上で横になっていた。なぜ彼が怒っているのかというと……

「いくら間に合わねーからって屋敷ごとブツ飛ばすことはねーだろーガ！」  
一体何があつたのか。数分前の彼らはどうと……

『捜シ者』が桜小路のところ……!? 遊騎、何か聞こえるか?」

「……聞こえるわ。ろくばんと『にやんまる』、そしてもう一人……たぶん『捜シ者』やな。……ヤバいで。ろくばん、やられとる。間に合わへん」

「でしたら一か八かお任せを。ここから『光』で全てを破壊し、『捜シ者』ごと吹き飛ばします!」

「ハア!? それだと大神と桜チャンも吹っ飛ぶだろうガ! って、オイ! 脱いでんじゃネ——ギヤアアアアアアアア!!」

……つまり、原因は平家ということであり、刻が怒っているのはそのためだ。

「オイ、コラ平家! お前、聞いてんのかヨ——!」

さすがに今回ばかりは退く気が無いらしく、刻は平家を探し出そうと振り向いて——

「……………」

「……ハ？」

振り向いた刻の視線の先……そこには制服の上着を持った鎧が立っていた。

「え？ 鎧つて、え？」

意味がわからず混乱しだす刻。すると、鎧は平然とした様子で喋り始めた。

「刻君、私です。平家ですよ」

「平家エ!?!」

衝撃の答えに思わず叫ぶ刻。一方、そんな刻に構うことなく平家（鎧）は話を続ける。「さっきの『光』でロストしてしまいましたね。『人前に出られない姿』になってしまったので遊騎君の家に飾ってあった甲冑をお借りしたのです」



「え？ それって、まさか——」

なんとロストしてしまったと言う平家。その言葉を聞き、刻は特に深く考えずに顔部を開き、中にいる人物の状態を確認する。

「……………」

すると、数秒の沈黙が生まれ、刻は無言で顔部分を戻した。そして……

「ロストしてやがるううううう！」

「だから言ったではないですか」

「よんばん、ズルい。オレも、オレも。にばんのロストめっちゃ見たいねん」

「おい、無事か……って、平家さんロストしたんですか」

まだ敵がいるかもしれないというのに賑やかに騒ぐ刻たち。優も合流し、彼らは大神と桜を探すため行動を開始した。

「う……………」

轟音が止んだため、大神はゆっくりと目を開いて周囲の状況を確認する。今まで月光だけが明かりだった薄暗い廊下とは打って変わり、広々とした場所だった。と言つても、瓦礫が周囲に転がっているだけなので良い場所とは言えない。

「あの光……平家か。助かったといえれば助かったが、荒っぽいにもほどがある……」  
状況判断を簡潔に済ませながら文句を垂れる大神。だが、先ほどまで目の前で自分に攻撃していた『捜シ者』の姿は見えなくなっていたため、平家の荒っぽい助けも効果はあつたらしい。

「……そうだ。桜小路さん、大丈夫で——」

敵の姿が見えなくなつたことに一先ず安心し、次に彼は護衛対象である桜の無事を確認しようとした。桜を光から護ろうと覆いかぶさつたので、おそらく後ろにいるだろうと思ひ、大神は後ろを向いた。

すると……

「鍵キは無いようだから私はそろそろお暇するよ」

そこにいたのは消えたと思つていた『捜シ者』。彼は平家の『光』を受けたはずだが、衣服もまるで乱れておらず、体のどこを見ても傷一つ無かつた。そして、もう一人……

「ああ、それとコレ。なんだか大事そうだからもらつていくことにするよ」

「な……！」

氣を失っているのか目を瞑り、まるでモノのように『捜シ者』に担がれている彼女……  
桜小路 桜の姿がそこにはあった。護らなければならぬ彼女。今度こそ護ろうと決  
めた彼女。その彼女が今……『捜シ者』<sup>敵</sup>の手の中にいることに、大神はただただ目を見開  
くことしかできなかつた。

## code : 33 切り裂かれた誓い

都内の中でも特に人も建造物も密集している中心地。人と建造物が密集しているため、そこには自然と様々な企業が集まっていき、企業同士の激戦区ともなっている。

そんな争いを見下ろすかのように建てられた超高層ホテル。実際、このようなホテルに来れる者たちにしてみれば密集している企業同士の激戦など小競り合い程度にしか感じないだろう。つまり、ここにいる者たちはそのような戦いなど痛くも痒くもないと感じるほど大企業の人間であつたり、そのような戦いとはもはや無縁の大金持ちばかりということだ。そんな一般人とは程遠い階級の者ばかりがいるホテルのはるか上……最上階近くの一部屋に、そのような階級の者とも違う異様な雰囲気が集団がいた。

「……………」

その内の一人である青年は、人一人は余裕で座れるほどのスペースがある窓辺に座り外の景色を眺めていた。彼の容姿は、窓から見える雲のように白かった。髪も、肌も、服も……何もかも。彼を知る者は彼をこう呼ぶ。『捜シ者』と。

そう、この部屋は『捜シ者』の拠点だつた。その証拠に、部屋の中には彼以外の人間も数人いる。これまで大神たちの前に立ちはだかつてきた……『Re-code』たち

が。

「『捜シ者』！ 朝ごはん、食べないでございますKA？ 美味しいですYO」

「日和、ソーセージに砂糖かけない」

先日、『捜シ者』と共に大神たちを襲った日和と時雨。彼らはテーブルに座り、朝食を食べていた。と言つても、時雨は新聞を読んでいるだけのため食べているのは日和だけである。しかも、その食べ方もかなり独特のようだ。

「てつきり鍵カギの入手と弟君……大神を御自分で連れ戻すために出向かれたのだと思つていました。わざわざ日和と時雨も連れていったので」

そのテーブルの近くで静かに立つ雪比奈。彼は視線を『捜シ者』に向けながら、先日の『捜シ者』の動きについて自分の予想を口にしていた。だが、これは彼にしてみれば質問の意図もあつたのだろう。なぜなら、『捜シ者』がした行動には予想だにしなかつたものが含まれていた。誰も予想していなかつたであろう行動が。

「しかし、驚きました。まさか……桜小路 桜を連れてこられるとは」

部屋の隅に設置されている二人は余裕で入れるほど大きなベッド。そこに横たわつて眠る少女……桜小路 桜。彼女こそが予想だにしなかつた行動である。連れ帰ってくるのが大神というのならまだわかる。兄として弟を自らの元へ連れてくるというのはすぐ考えられる心理だ。現に、雪比奈もそのように予想していた。しかし、桜を連れ

帰ってくることは予想できなかった。なぜなら、彼らにしてみればメリットはほとんど無いらだ。

確かに、鍵キを持っていてという情報を持っていた彼らにしてみれば桜も標的に一人には違いない。だが、桜は鍵キについて何も知らない。となれば、彼らにしてみれば標的でもなんでもない。そんな彼女を連れてきたところで邪魔になるだけである。ならば、なぜ連れてきたのか。『捜シ者』は景色を眺めながら答えた。

「弟は反抗期みたいだから……。羨。彼女は……特別だから連れてきただけ」

「それってどーゆーことですKA!? 鍵キの在処もわからないんだから殺しちやえよ  
かつたんですYOー!」

「日和、牛乳にオレンジジュース入れない」

『捜シ者』の言う理由に納得がいかず、日和は椅子の上で両手をバタバタと振り始めた。時雨はそこまで桜に興味が無いのか、理由について言及しようとはしない。

すると、雪比奈はスツと目を細くし、未だベッドの上で安らかな顔をして眠る桜を視界に捉える。そして、彼の中で浮かんだその特別の意味を口にした。

「それは……彼女が珍種だからですか?」

珍種……それは異能者にとって最も厄介な相手だろう。なにせ、珍種には異能が効かない。これまでの桜を見てもわかるように、どのような異能も一瞬で無効化してしま

う。ならば、考えられるのは彼女が持つ珍種の特性を利用すること。珍種の力を使って大神たちの異能を無効化すれば優位に立つどころの話ではない。しかし……

「……違う。それも特別だけど……もつと違う特別」

「……？」

雪比奈の言葉を否定する『捜シ者』。先ほどと同じく真意が掴めない返答に、雪比奈も思わず首を傾げる。すると、『捜シ者』はベッドの端に腰かけて桜の隣に座った。そして、彼女の長い黒髪をすくい上げると自分の口元まで持って来て軽くキスをし、彼女に話しかける。

「……もう高校一年生か。大きくなったね、桜小路 桜」

「E<sup>え</sup>? 『捜シ者』、その娘<sup>ご</sup>のこと知ってるんでございますKA<sup>か</sup>?」

その口調は……知っていた。『捜シ者』は桜のことを。そういう口調だった。『捜シ者』のこの口調にはそこにいた全ての『Reecode』が注目した。『捜シ者』と桜の関係、そして桜が持つ珍種以外の特別について。様々なことについて各自が考え始めた時……

——ガチャ

「誰!？」

突然、聞こえてきた扉を開く音に『Re-code』たちは一斉に警戒する。当然だ。彼らがいる部屋は彼らの拠点であり、突然の来客となれば敵の可能性もある。となれば、『捜シ者』を守護する者たちである『Re-code』が動くのは当然である。

だが、扉を開けて来たのはそのような警戒心が消えてしまうような者だった。

「うっそ……!」

「なに……?」

「……………」

その姿を見て、『Re-code』の三人は思わず固まる。だが、『捜シ者』だけは違った。彼だけは特に驚く様子も無く、ベッドに座ったまま視線を動かし、客人と目を合わせた。



「やあ、久しぶり……。そろそろ来る頃だと思っていたよ」  
「……………」

『さ、桜小路さ——』

『邪魔』

『ぐああああー！』

『……………弱いお前が悪い』

『ぐ……………ま、待て……………行くなああ!!』

頭の中で繰り返される昨日の言葉と惨めな自分の姿。桜をさらおうとする『捜シ者』を止めようとするも見えない斬撃を受け、近づくことすらできないまま彼は消えていった。どんなに叫んでも返ってくる言葉は無く、ただ虚空に消え去るだけだった。

「……………」

すでに放課後となつて夕焼け空に包まれた輝望高校のグラウンド。一角に設置されているベンチに、大神は静かに座つていた。昨日の『捜シ者』との闘いで受けた傷の手当として所々にガーゼや包帯がされており、彼がどれだけ重傷だったかわかる。

その傷からも予想できるが、大神は本来なら学校に来るはずはなかった。当然だ。これだけの重傷を負つた状態なのだから、学校に来るより療養していた方がいい。だが、彼は学校に来た。他の誰でもない自らの意志で。そして、それは他の『コード：ブレイカー』も同じらしい。

「まさか今日、あなたが学校に来るとはね。傷は大丈夫ですか、大神君」

「…………それはお互い様でしょう、平家先輩。ロストして鎧姿のあなたが平然と学校に来るとは思いませんでしたよ」

「私はこれでも生徒会の人間ですから。この程度で休むわけにはいきません」

大神が座るベンチの隣に設置された西洋の鎧の像…………のように座る平家。まだロストしているため、昨日と同じく鎧を身に纏っている。彼は官能小説を手にしながら平然

と座っているが、何も知らない一般生徒から見れば「突然、現れた官能小説を読む鎧の像」なのでとても怪しい。

「そんなことより、『捜シ者』の居場所は特定できたんですか？ 特定できたのなら教えてください。今度は確実に燃え散らします」

そんな異様な光景を気にすることなく、大神は『捜シ者』のことについて尋ねる。昨日のことなど関係ない、とでも言いたげに。彼の中で、『捜シ者』は斃すべき標的ではないのだ。

すると、そんな冷静な大神に近づく者が一人。彼は大神の問いに対する答えを口にしながらか大神に近づいていった。

「……エージェントたちも力を尽くしているが、まだ何もわからないそうだ」

「優……。……そうですか」

優から答えを聞いた大神は、軽くため息をつきながらも納得しているようだった。おそらく、そんな簡単に見つからないというのは彼もわかっているのだろう。居場所を特定されるという初歩的なミスを『捜シ者』がするわけがない。それでも、「もしも」という場合がある。彼はその「もしも」に懸けたが……今の段階では空しい結果だった。

「……神田にも連絡してみます」

そう言って、大神は手元にあつた物を耳に近づけて、彼のエージェントである神田に

連絡を取ろうとした。しかし、何も聞こえない。彼女の声も、コール音も。それはそう  
だ。なぜなら、彼が持っているのは……

「大神君、それは携帯ではありませんよ。缶コーヒーです」

「……そうですね。気付きませんでした」

「普通、気付くだろうが……」

携帯と缶コーヒーの間違いについて指摘する平家。大神は特に表情を変えることな  
く間違いに気づき、優はその様子を見てため息をついた。一見するとギャグのようにも  
見えるが……大神にしてみれば一切ふざけていない。ただ、間違いに気付けないほど気  
が散っていたのだ。それは、彼の今日一日の行動を思い返してみてもわかることだっ  
た。

「朝は寝巻のまま学ランを着て登校して、鞆には教科書じゃなくて大量の缶詰。それ  
以外にも、違う教科の教科書を読むわ、男子トイレと女子トイレを間違えるわ、実験で  
変な調合するわ……平家さんに言われて見ていたが、気もそぞろつてレベルじゃない  
ぞ。いくら『捜シ者』との間に力の差があつたからって、お前らしくない」

優から語られる大神の異常。ほとんどのことに集中できていない証拠だ。そんな彼  
をなんとか支えたのは彼のクラスメイトたちである。彼らは今まで見せてきた大神の  
様々な姿から傷だらけなことについては言及しなかった。ただ、彼の異常な行動につい

ては手を貸さざるを得ない。というのも、彼らは大神の異常が桜がいけないことが原因だと解釈しているからである。もちろん彼らは桜がさらわれたことなど知らない。まだ風邪が治っていないということになっている。

「……そんなことありませんよ」

そんな経緯があつて放課後を迎えた大神。今日一日の行動が『捜シ者』との力の差にあるという優の私的だったが、大神は静かに否定した。そして、自分がこんな状態になつている原因を思い浮かべ、決意に満ちた顔をして拳を握りしめた。

「力の差は関係ありません。ただ……早く『捜シ者』を見つけ出さなくては……。バイトに失敗したんです。気もそぞろになりますよ」

「……………」

あくまでバイトに失敗したことが気になるだけだと言う大神。そんな彼を見て、平家は視線を本に向けたままポツリと呟く。

「本当にバイトのためだけ……ですか？」

「……どういう意味ですか？ 他に理由なんてあるわけが——」

平家の呟きに大神は意味がわからないという顔をする。すると、彼の足元にのそりのそりと近づいてくる者がいた。大神はそれに気付くと、視線を下に向けた。

「クーン……」

『子犬』……？ 顔色が悪いぞ」

見ると、『子犬』が顔を真っ青にしていた。口元を押さえて、何かを我慢しているようだった。

「腹でも下したか？ 吐きそうなのか？ 一体、何を食べたならそうなるんだ……」

「クーン……」

とりあえず見たままの状態を確認する大神だったが、もちろん『子犬』は犬のため言葉を喋るはずもない。具合が悪いためか、頷く元気も無いらしい。ならば仕方ないと、大神は視線を上げ原因を知っているであろう者を呼んだ。

「……参ったな。桜小路さん、こいつ今朝は何を食べ——」

「——」  
ほとんど無意識に呼んだ彼女の名前。だが、それに答える声も姿も……そこにはなかった。

「ッ……………」

無意識に彼女の名前を呼んだことに気付いた大神は、思わず顔を伏せた。だが、彼自身わかつていなかった。なぜ、彼女の名前を呼んだのか。いないことはわかっていたはずなのに。なぜ当然のように名前を読んでしまったのだろうか、と。

(なぜ…………なぜ、オレは…………)

「……………たく、なんつー顔してんだヨ。桜チャンならいねーだろーガ」

「ろくぼん、大丈夫か？」

「刻……………それに遊騎まで……………」

自分の行動がわからず自問する大神に対し、今しがたやってきた時と遊騎が声をかける。呼びかけもせず二人が来たことに驚き、優は思わず二人の名を呼んだ。

刻は軽く煙草をふかすと、近くに設置されていた物置に寄りかかりながら口を開いた。

「ま、でも仕方ねーカ。あのバカ珍種、いつでもお前にくっついてたんだ。……………いつの間にか、そこにいるのが当たり前になっちまったんだもんナ」

「当たり前……」

刻の言葉を繰り返す大神。確かに桜は何かがあると必ず大神の傍にいた。他の誰でもない、彼女自身の意志でそこにいた。大神自身はそれを望んでいなかったとしても、何があっても傍にいる彼女の存在は当たり前になっていったのだ。

そして、それは彼らも同じだった。

『「にゃんまる」おらんとオレも寂しーわ」

「あのバカ珍、いちいち突つかかってきてウゼーんだヨ。……いねーと物足りなく感じつからマジでタチ悪いぜ」

「そうだな……。いても騒々しいが、いないと静かすぎて気味が悪い」

「色々と面白い方ですからね、桜小路さんは」

それぞれが、それぞれの言葉で桜への思いを口にする『コード・ブレイカー』たち。彼らの言葉を聞きながら、大神はふと視線を動かす。それと同時に、先ほどの時の言葉が頭の中で繰り返される。



——いつの間にか、そこにいるのが当たり前になっちまったんだもんナ。

『大神……!』

動かした視線の先……そこには一瞬、いつもの笑顔を浮かべる桜の姿が見えた気がした。

「……はっ、バカバカしい。揃いも揃って何を言ってるんですか」

一瞬だけ見えないはずの桜の姿。それを振り払おうとしてか、大神は『コード：ブレイカー』たちの言葉を鼻で笑った。そして、そのまま自分にとっての桜という存在について口にした。

「アレはただの観察対象に過ぎません。大体、オレは『存在しない者』……人との関わりを断った者です。たとえ誰が目の前からいなくなろうと気に病むことなんてないですよ」

桜はあくまで観察対象、自分は自ら望んで人との関わりを断った者、今まで幾度となく自ら手を下すことで人との決別を成してきた者。つまり自分にとって桜とは他の者

と何ら変わりない……ただの他人でしかない。そう言った……そう、口にした。そう……

「今更……今更、気に病むことなど……無——」  
自分に……言い聞かせていた。

「……ろくばん、大丈夫や。『にやんまる』は絶対、戻ってくるで」  
「……そうだな」

「遊騎、優。テキトーなこと言ってんじやねーヨ。気休めにもならねー」  
大神のそんな姿を見てか、優しい言葉をかける遊騎と優。だが、刻はそれが無駄であるとかわかっていてか彼らに背を向けながら一蹴した。だが、次に聞こえてきた言葉には

思わず反応した。

「いいえ、適当ではありませんよ」

「ほれ、見てみい」

「ハ？」

確信に満ちている平家の言葉。さらに続く遊騎の言葉に刻も思わず振り返った。見ると、遊騎は一つの法学を指差していた。そこには大神が立っている場所から少し離れた場所……彼が先ほどまで座っていたベンチの後ろにある木々があった。そして、その中に……

「いかにも、あの表情はベストショットなんだな」

ガラケー片手に大神の表情を写真に収める会長。そして……

「むぐむぐ……」

会長に口元を押さえられ、黙ってその様子を見守る……桜の姿があった。

「ハア!? 会長に……桜チャン!? ど、どーいうことだヨー!」

「……ッ!!」

『捜シ者』にさらわれたはずの桜に普段は姿を見ない会長。そんな二人の姿を見て、刻と大神は素直に驚きを表情に出していた。自分がいたことがばれたため、会長は堂々としてきて堂々とまた写真を撮り始めた。

「うんうん。いかにも、その驚き顔はレアなんだな」

「てめえは何をしてやがる……!」

まったくもって空気を読まない会長の行動に大神は怒りを露わにした表情で会長を睨みつけた。だが、これは単に会長の行動のせいではないだろう。彼の中で、怒りを表に出せるだけの余裕が生まれたということだ。そして、その余裕が生まれた理由は……

「大神!」

「……」

いつものように目の前に立ち、いつものように自分の名を呼ぶ彼女。先ほどのような幻とは違う。確かに存在している。桜小路 桜は……またそこに戻ってきた。

「……………」

「……………」

お互いに顔を見合わせ、瞬きを繰り返す二人。何を話せばいいのか、何を言えばいいのかわからないのだろう。そして……

「ぬう……………」

「な!?! ちよ、どうしたんですか!?!」

急に桜は電池が切れた玩具のようにへなへたと座り込んでしまった。突然のことに大神は慌てるが、桜はすぐにいつもの笑顔を浮かべた。

「いや……………いつもと変わらないお前やみんなの顔を見たら安心したのだ……………。ようやく、いつもの場所に戻ってこられた、と……………」

「桜、小路さん……………」

自分の…………『存在しない者』の傍を「いつもの場所」という桜。先ほどの話を聞いていただけなのかもしれないが、たとえそうだとしても桜のその言葉は本心からのものだと大神は強く感じた。そして、それは一つの安心となつて彼の表情にも柔らかさを取り戻させた。

「うん、今のもいかにもベストショットだよ」

「てめえはさつきから何をやってんだ……………!」

「え、せつかく桜小路さんが帰ってきたのに大神君ったらご機嫌ななめ？」  
「誰のせいだと思つてやがる……！」

表情に柔らかさが戻つてきたからか、会長に対する怒りもより鮮明になつてきた。一方、会長はそんなことは関係ないとしても言いたげに自由に発言しだした。

「いやね、桜小路さんがいなくて大神君も寂しがつてるだろうな〜つて思つて、私も急いで連れ帰つてきたんだよ。そしたら大神君が落ち込んでたからそつとしておこうと思つたんだ。あ、写メは暇だったから撮つただけだから」

「そういうのを……余計な気遣いつて言うんだらうが！」

「いかにも〜！」

「こら、大神！ やめぬか！」

行動としては評価されるべき会長だったが、余計な気遣いが全てを無駄にしていた。大神はどうとう怒りを我慢できず、会長に手を出す。桜は持ち前の正義感でそれを止め、なんとかその場は収まった。

すると、刻が慌てた様子で会長を問い詰めていった。

「つか、待てヨ！ 連れ帰つたつて言うケド、相手はあの『捜シ者』だぜ!? 一体、どんな手を使つたつていうんだヨ！」

「いかにも、なんの手も使つてないよ。ただ、久々『捜シ者』とお茶してきたのだよ。

ホテルのケーキセットも奢ってもらっちゃったし」

「ハア!？」

刻の問いに対して、会長はさも当然のように言葉を返す。言葉の内容を考えると、とても簡単なことに感じるが相手が『捜シ者』と考えるとその難易度は跳ね上がる。本当に言葉通りのことがあったのだとしたら、それが可能なのはほんの一部の人間だけだろう。

「だって桜小路さんは病気でもないんだから何日もお休みさせるわけにはいかないでしょ。だから連れ帰ってきたんだよ」

「ずる休みはあかんからな。『にせまる』真面目やし」

「いかにも、生徒会長だからね」

「そんな話を通じる相手かヨ！」

連れ帰った理由としては筋が通っているようにも感じる会長の言葉。だが、肝心の「どうやって」連れ帰ってきたのかは詳しくは語られなかった。となれば、考えられるのは本当にそんな話し合いだけで解決させたということ。そして、会長はそれが可能な数少ない人物であるということである。

「桜小路以外の珍種であるだけでなく、あの『捜シ者』とも対等に話し合いができる会長……。平家さん、会長は何者なんですか……?」

「会長は会長ですよ、優君。それに、私も今回のことは予想外です。まさか会長自らが動かれるとは」

「いかにも、いかにも」

会長の正体について疑問を感じずにはいられない優の問いに対し、平家は簡潔な言葉だけを返す。彼自身、会長が桜を連れ帰ってくるなどは予想しなかったので、彼も驚きを感じているのだろう。会長は変わらず陽気な対応をするが、ふと呟くように言葉を続けた。

「……しかし、仕方がなかったとはいえ『捜シ者』とんでもない『約束』をしてしまつたよ。まあ、あの鍵キが見つからなければなんの問題も無いから一先ずは安心かな」

「『約束』……?」

今までとは違い、なにやら重みを感じる会長の言葉に平家は首を傾げる。すると、珍しく優が桜の元まで歩いていった。その手に、相変わらず具合が悪そうな『子犬』を抱えて。

「ところで桜小路。『子犬』の調子が悪そうなんだが、何か変なものでも食べさせたのか?」

「ええ!! 私断じて変なものは食べさせてませんぞ! どこかで拾い食いでもしたのだろうか……」



優に指摘されて『子犬』の不調に気付いた桜は慌てて原因を探ろうとする。だが、彼女は今までペットを多く飼ってきたわけではないので思いつく対処が無いのだろう。ただ慌てるだけだった。

「落ち着け。とりあえず、こういう時は背中をさすることだ。それか、こうして軽く背中を叩けば吐き出すこともある」

「ムグムグ……ぶぺっ!」

「ほらな。さて、一体なにを食べ——」

桜と違い、冷静に対処する優。二、三回『子犬』の背中をさすると、軽く背中を叩いた。よく応急処置として習う異物の吐き出させ方を実践しているのだろう。すると、そのおかげか『子犬』が何かを吐き出した。一体、何を食べたのか確認しようと吐き出したものを見る。だが、それを見た優は驚愕する。

「な……! か、鍵……!?!」

「鍵!? お、おい……鍵って、まさか……!」

「もしかして、これが……?」

「『捜シ者』が捜している……鍵キ、なのか……?」

『捜シ者』が捜す捜し物。つまり桜が狙われる原因となつた物。闘いを呼ぶ存在であり、見つからなければ安心とした会長の思いも空しく……鍵キは思わぬ形で発見された。

そして、この鍵キが新たな闘キいを招くであろうと誰もが予想していた。

## code : 34 嘘から始まる幾重の謎

「へ、これが『捜シ者』が捜していた鍵……?」

夕焼けに染まる放課後の輝望高校。『捜シ者』にさらわれた桜も会長の活躍で戻り、そのおかげで大神の調子も戻ったので彼らが抱えていた当面の問題は解決したかに見えた。だが、そう思ったのも束の間。『子犬』が今まで口の中に隠していた、『捜シ者』が捜す鍵<sup>キ</sup>が見つかったのだ。

一見どこにでもある形の鍵<sup>キ</sup>。特徴といえばタグに書かれた「渋谷」という文字のみ。特徴は少ない鍵<sup>キ</sup>だったが、桜はそれを手に入れた時のことを少しづつ思い出していった。

「そ、そういうえば……人見先輩殿が私に『コード：ブレイカー』をやめた理由を話した時に、この鍵<sup>キ</sup>をもらったような……。これが『捜シ者』が捜している鍵<sup>キ</sup>だったのか!」

「人見が……!?!」

「その通りです」

かつて「エデン」に反旗を翻し、大神たちと敵対した人見の名が出たことに『コード：ブレイカー』たちは驚きを隠せない様子だった。ただ一人、冷静に桜の言葉を肯定した平家を除いて。

「ですが、その鍵は元々『エデン』の物。人見が『エデン』を抜ける際、無断で持って行ったのです。桜小路さん、返していただけますか？」

「返すって……『エデン』に、ですか？」

「はい」

鍵は元々『エデン』の物であるため、『エデン』に属する者として鍵を回収しようとする平家。桜は鍵を返そうとしたが……ふと、その手が止まった。平家が口にした「『エデン』」という言葉が……彼女の中にあつた人見の姿を呼び起こし、桜の中で鮮明に流れ始めた。

『愛する者に思いを伝えることもできず、墓標を立てることさえも許されない……！』

そんな彼らの思いを……！ 私は……貴様を許さない！！』

人見は……たとえ孤独な闘いだとしても、かつての仲間たちと闘うことになるうとも『コード・ブレイカー』のために『エデン』と闘おうとした。そこまでの覚悟を持つていた男が、意味も無く鍵を持ち出し、意味も無く桜に託すとは思えない。ならば、この鍵には大きな意味がある。それも、桜にも関係があると思われる意味が。

そう考えると、このまま平家に返すことは躊躇われる。だが、あるべきところに返すべきだとも思っている。どちらの行動を選択するべきなのか、桜は顔をしかめながら考え……決断した。

「わかったのだ。返すのだ」

「ありがとうございます」

「……ん？」

平家に言われた通り、鍵キを返す桜。だが、その様子を見ていた他の『コード：ブレイカー』たちは違和感を感じていた。その正体は……桜の表情。彼女が見せる表情は……彼女が見せる特有の「嘘の顔」だった。

「……ところで会長。先ほど仰っていた桜小路を解放する連れ戻す代わりに『捜シ者』とした約束というのは何ですか？」

「あれ？ 聞こえてたの？」

「言つとくが、優だけじゃなくてオレらにも聞こえてたからナ」

桜から感じた違和感を一先ず放つておくことにしたのか、優は会長が言っていた『捜シ者』との約束について聞き返した。会長はとぼけてみせたが、そこに刻も参加してきただため逃げ道は無くなつていった。

「オラ、早いと言えヨ。どんな約束してきたんだ？」

「いかにも、いかにも……その件に関してはまったく記憶がございません！」

「堂々とシラ切つてんじやネーヨ！」

「まあ、いいじゃないの。鍵<sup>キ</sup>がちやんと『エデン』にあれば。じゃ〜ね〜」

「待て、コラー！」

刻に迫られる会長だったが、あえて堂々と誤魔化すことで話を逸らし堂々と逃げていった。刻は口でこそ「待て」と言ったが、追いかけて捕まえても無駄だと悟つたのだろう。無理に追おうとはしなかった。

「そういえば大神、よく私がいなくても学校に来たな。偉いぞ」

一方、鍵<sup>キ</sup>を返した(?)桜は大神に話しかけに行っていた。自分がいなくても、大神がきちんと学校に来ていることを喜ばしく感じたようだ。

「……………」

だが、対して大神は黙ったままだった。子ども扱いにも似た桜の言葉に苛立ちを感じ

たのか、他に何か思うところがあるのか。それはわからないが、彼は俯いたままで桜に言葉を返そうとはしなかった。

「……大神？ どこか具合でも——」

大神の黙秘が体調の不調が原因かと感じた桜。『捜シ者』にやられた傷が目に見えて残っている今の大神のことを考えれば、推理としては妥当なものだろう。

そして、大神を気遣って何も考えずに手を伸ばす桜。しかし、それに対しての彼の行動は誰もが予想しなかったものだった。

「脱げ」

「え」

「は」

大神が放った一言に……空間が一瞬で固まった。

「お、大神……？ 何を——」

「いいから早く脱げ！」

「う、うわあ！」

「ちよ！ 大神?!」

大神が口にした突然の言葉に、言われた当人である桜は言葉の真意が全く理解できていなかった(彼女だけでなくここにいる全員がそうだが)。しかし、桜がその真意を理解するより前。大神は急に桜に掴みかかり、あろうことかそのまま彼女の服を脱がし始めたのだった。突然のことに刻も顔を真っ赤にして慌てる。

制服をめくり、靴も靴下も脱がせ、腕もまくらせ……どんどん彼女の肌を露わにしていく大神。桜も抵抗するが、突然のことに力が入らないのだろう。そして、力が入らなくなったのもう一人。

「げ……限界、だ……」

「ななばんが倒れた」

「優君には少し刺激が強かったみたいですね」

顔を真っ赤にして倒れた優。女性が苦手な彼にとって今の状況は、平家が言うように



刺激が強かった。だが、年下である遊騎が平然としているところを見ると何とも言えなくなる。

「大神………！ もう、やめ——！」

「——ッ！」

そんなことも無視して桜の皮膚を晒す大神。桜も必死にやめさせようとするが、大神は止まらない。しかし、大神の行動はいきなり止まった。ある場所……首の後ろを見たこと。

そこには……『捜シ者』の右手に刻まれていた刺青とまったく同じ刻印<sup>マーク</sup>が刻まれていた。

「お、おい！ これって『捜シ者』と同じ刻印<sup>マーク</sup>じゃねーか!？」

「え？ な、なんなのだ?」

大神が止まったことで、刻たちの視線も桜に刻まれたマークに集まる。こうなると、大神の行動の意味よりも桜にこのマークが刻まれている意味の方が重要となってくる。

自分の首の後ろのこのため、いまいち状況を把握できていない桜に簡単に何があつたか伝える。マークが刻まれていることを知った桜が首の後ろを擦るが、消えるはずもなかった。すると、そのマークを見てから黙っていた大神がボソリと呟いた。

「………いつだ」

「え？」

「いつ『捜シ者』にその刻印をつけられたんだ？」

「おい、大神!？」

呟いたかと思ったら、今度は先ほど以上の勢いで桜に掴みかかっていった。おそらく、大神はこの刻印の意味を知っている。そして、それが桜に刻まれているかもしれないと予想していたのかもしれない。そう考えれば先ほどの行動も、この刻印が刻まれているか確認するためだったんだだろう。

しかし、当の桜はというと……

「わ、わからぬ……。情けないことだが、ずっと気絶していたから……」

「くそ……!？」

まだ現状が呑み込めておらず、ただ自分が気絶していたということを話す。それを聞いた大神は、桜に刻印を刻んだ『捜シ者』を憎んでか、それとも桜に刻印を刻ませてしまった原因をつくってしまった自分を許せなくてか。大神は歯が砕けてしまうほど強い力で歯を噛み締めた。

「……大神。私には、わからぬことがある……」

歯を噛み締める大神を目の前にし、桜は驚いた様子を見せていた。が、彼女の中にあつた疑問を口にし始めた。

「お前の兄上殿である『捜シ者』はどんな人なのだ？ ……悪、なのか？ たしかに兄上殿はとても怖くて、陶器のように冷たい体をしていた。けど……なんだかとても、懐かしい匂いがした気がするのだ」

「……………」

「さ、桜ちゃん……………」

桜が抱いた疑問…………それは『捜シ者』は悪なのか？』というまさかの疑問だった。彼が纏う独特で異常な雰囲気を実際に感じていた桜だったが、それでも彼女はわからなかった。彼が悪なのか、悪ではないのか。彼女にそんなことを思わせてしまうほど…………彼女が感じた「懐かしい匂い」は印象深いものだったのだろう。

「…………すみません。少し一人にしてください」

「え？ 大神…………？」

桜が抱いた疑問を聞いた大神。そこに何か思うところがあつたのか…………彼は桜たちに背を向け、静かに歩きだした。桜も一瞬、追おうとしたが大神の神妙な雰囲気を感じ、その足はすぐに止まった。

すると、大神はピタリと立ち止り、桜の方を振り向いた。

「大丈夫です。悪は…………人は殺しませんから」

「大神…………」

それだけ言うと再び歩き出す大神。彼がわざわざ誰も殺さないと言い、去っていった。そこには自分たちが知り得ない深い理由がある……そう感じた桜はただ彼の名を呟くことしかできなかった。

その後、ひとまず鍵の回収と桜の安全の確保もできたため、『コード・ブレイカー』たちの長い護衛も打ち切られることになった。そのため、『コード・ブレイカー』たちも一時的に解散することになり、そこには桜と『子犬』のみが残った。

「……さて、行くぞ『子犬』」

「わふ?」

「決まっているだろう……」

一人と一匹となった桜たち。そんな中、桜は『子犬』に向かって何かを決意したかのように呟く。しかし、『子犬』はもちろんわかっておらず、首を傾げている。すると、桜は自分の懐からある物を取り出そうとした。そして、彼女はある物を取り出した。

「この鍵がなんの鍵か探るのだ!」

「わふ!?!」

それは平家に渡したはずの……『捜シ者』が狙っている「渋谷」のタグがつけられている鍵だった。まさかの現実に『子犬』は慌てふためいていた。

(この鍵は人見先輩殿が存在した唯一の証……。それを私に託したということは、こ

の先には人見先輩殿が伝えたい何かがあるはず。なら私は、それを知りたい……)

桜は自分に鍵を託した人見の思いを感じながら、決意を新たにして鍵で開けるであろう先を目指しに行った。……偽物を渡した平家に心の中で謝りながら。

「……さて、この鍵はしかるべき場所に置かねばなりませんね。さて………ん？」

平家が渡された鍵。他の者と別れた後、改めて本物が確認すると、つけられていたタグには「I—B 桜小路 桜 下駄箱」と書かれていた。

「……………」

その後、輝望高校では「放課後、女子生徒の下駄箱を開ける西洋の鎧」の噂が流れた。

夜の渋谷。そこはなんとも都会らしく建物の灯りが全てを照らしており、夜とは思えないほどだった。また、仕事や学校帰りの人たちも多いため、人の賑わいに関しても夜とは思えない。そんな中、一人の少女が渋谷中を駆け巡っていた。一匹の小犬を連れ、その手に「渋谷」と書かれたタグがついた鍵を持って。

「……な、無いぞ。渋谷中を探したのに、開けられる物が何一つ無いぞ……」

「くう〜ん……」

少女……桜は肩で息をしながらベンチに座り込んでいた。その隣では、『子犬』も疲れ果てた様子でへたり込んでいる。

彼女たちは大神たちと別れた後、渋谷に向かいロッカーがある場所をしらみつぶしに回っていった。理由はもちろん、鍵がなんの鍵なのか探るためだ。しかし、「渋谷」のタグがつけられているため渋谷にあるはず……と推理して来てみたものの、結果は惨敗だったというわけだ。

「ぬう……でも渋谷に関係しているのは間違いないはずなのだ。よし、どこか見落としがあるかもしれん。もう一度、渋谷中を回って……」

ベンチに座りながら、また途方もないことを言う桜。彼女自身のやる気は十分だが、隣の『子犬』はその無茶な言葉に声にならない悲鳴を上げていた。すると、そんな彼女たちに声をかける男たちがいた。

「まったく、何やってんだカ。こりや、桜チャン一人じゃ一生かかっても見つけれんねーっつの」

「非効率的にもほどがあるな」

「と、刻君！ 夜原先輩まで！」

聞き慣れた声がした方向……そこには私服に着替えた刻と優がいた。刻は煙草をふかしながら、優は極端な呆れ顔を浮かべながら。

「桜チャン……平家に渡した鍵<sup>キ</sup>って偽物ダロ？」

「そ、そんなことは……」

「桜小路……オレたちがお前の嘘顔を見抜けないと思っているのか？」

「うぐ……」

『コード・ブレイカー』二人を相手に誤魔化そうとした桜だったが、あつという間に論破されてしまった。だが、論破されたからと言って大人しく鍵を彼らに渡しては平家に嘘をついてまでこの鍵を持った意味が無い。

「わ、渡さぬぞ！ たとえ “エデン” のものであつても——」

「バーカ、とらネーヨ。仕事じゃねーシ」

「大体、後からそんなことするんだつたら嘘だとわかつた時点で止めてる」

「えっ……!?!」

慌てながら鍵を渡すことを拒否した桜だったが、意外にも二人からは鍵をとり返す気は無いとの返答が来た。そもそも、刻はなんとなくわかる。そこまで “エデン” のために動くはずもない。だが、優に関しては意外だった。彼は最初に『コード・ブレイカー』としての自分を見せた時、自分は “エデン” に従う、とまで言っていた。刻たちが言うようにお情けで『コード・ブレイカー』になったということを考えれば、彼の “エデン” への忠誠心は強いものだと思える。だが、現状はこれだ。二人とも、 “エデン” など関係なく動こうとしていた。桜はその真意がわからなかった。

「ふ、二人とも……じゃあ、なぜ今ここに来たのだ……?」

「……んなもん決まってるだろ」



桜の問いに、刻たちは真剣な雰囲気や霧を漂わせる。それと同時に、携帯型の灰皿に吸っていた煙草を押し込み、桜に向かってかすかに微笑んだ。

「人見が何を遺したのか知りたい……ってのが理由じゃダメなのかヨ」

「人見さんが危険を冒してまで手に入れた鍵キをお前に託した。そこには必ず、何かしらの意図がある。なら、オレはそれを確かめる。それだけだ」

「刻君……夜原先輩……」

そうだ。考えるまでもなかったのかもかもしれない。二人はただ、「エデン」のためにと思う気持ちよりも人見のためだと思う気持ちの方が強かった。ただ、それだけのことだった。自分とてそうだったというのに、と桜は見抜けなかった自分が情けなく感じた。

「……ありがとう。刻君、夜原先輩」

「桜チャンが礼を言うことでもないデシヨ。……さてと、ちよつとその鍵キ貸してみ」

「うむー」

二人の気持ちを知り、改めて礼を言う桜。刻は悪戯な笑みを浮かべながら、桜から鍵キを貸してもらおう。なんの躊躇もなく渡すところを見ても、完全に桜の警戒心は解かれていた。

「早い話、この鍵キがびつたりハマる鉄材……鍵穴を見つけりゃいいんだロ？ そんな

こと、オレ様の『磁力』をもつてすれば簡単だヨ」

そう言うのと、刻は鍵<sup>キ</sup>を手にして『磁力』を発動させた。刻は『磁力』を使えば、ある程度の範囲の金属を探知することができる。以前、始末屋が桜小路家を襲った際、大神にどの方向から敵の攻撃が来るか伝えたのもその能力を使ったからだ。この能力、その気になれば範囲にある鉄材の細かな形まで把握することができる。刻は今、その能力を使って鍵<sup>キ</sup>が入る鍵穴を探していたのだ。

「……見つけたぜ。ここからそんなに遠くもない」

「おお！ ありがとう、刻君！ では、さっそく行こう！」

「オツケー。つーわけで優、よろしく」

「……は？」

見事、鍵穴を見つけ出した刻とその報告に歓喜する桜。いざ向かおうとすると、刻は優に意味深な笑みを向けていた。

「いや、オレ様ちよつと異能使ったら疲れちゃったんだよね。ぶつちやけ遠くないつてもちかくもないわけだシ。優だったらオレたち抱えて走つても異能使えば余裕だろうけどオレ様にそんな体力残ってないしな。桜チャンも今までずっと一人で渋谷中を探してたんだから疲れてるだろうナ」

「……お前、珍しくオレがいても文句を言わないと思つたら、そういうことか」

おそらく、刻は「自分は疲れたからお前が連れていけ」と言っているのだろう。その刻の言葉を聞き、優は勝手に任せられていた自分の役割を思い知った。しかし、一人だけそれを飲み込めていないのがいるのだった。

「え？ 別に私は大丈夫だぞ、刻君。まだピンピンして——」  
「うっせ」

「ぬお！ い、痛いのだ……」

「ほくら、桜チャンも体が痛いってよ〜」

状況を飲み込めていない桜に思いきりチョップをかました刻。うずくまる桜をよそに、まだ優に対して意味深な笑みを向けていた。

そして、何を言っても無駄だとわかったのか、優はため息をつきながら答えた。

「……わかった。確かに『脳』を使えばお前らを担いで行くことは可能だ。案内は任せただぞ、刻」

「うっせーよ。言われるまでもねーシ」

その後、彼らは人目につかない場所まで移動し、優は二人と『子犬』を担いだ状態でビルの屋上や電柱の上などを足場に移動を始めた。

そんな規格外な移動をした三人と一匹は、ついに鍵<sup>キ</sup>がハマる鍵穴がある場所に着いた。その場所とは……

「なんと、墓地とは……。確かに私では一生見つけられなかったぞ」

「ハ、ハハ……。オレもビツクリ……」

「意外だが、確かに鍵穴はあるからな」

三人と一匹が辿り着いた場所は……。まさかの墓地。夜というのもあり、その場に漂う  
雰囲気、怪しさはとんでもないものだった。

「あー、でも鍵穴はコレだぜ！ 早いとこ開けちまおう！」

「そうだな、お墓に入っている方には申し訳ないが」

「……ある意味、墓荒らしだな」

「そういうこと言うなっつーの！」

とりあえず早く済ませようと思ったのか、刻は一つの墓の下部にある小さな扉の鍵穴を指差して鍵を取り出す。桜もそれを了承したが、優はボソリと不吉なことを言う。刻は即座に文句を言うと、改めて鍵穴に視線を戻した。

「ここに『捜シ者』が求めている『エデン』のトップシークレットがある……！ この眼

で、確かめさせてもらうぜ！」

勢いよく鍵キを鍵穴に差し込み、そのまま鍵を開ける刻。そして、その勢いのまま小さな扉を開ける。そこに隠されていたのは……

『ハズレ。残念でした。 by 人見』

人見のイラスト付きでそう書かれた紙と、少し大きなアヒルのオモチャがあっただけ、だった。

「人見イイイイ!! アイツ、人のことバカにしてんのカ！」

「お前、見事にハマられたな……」

「うるせー！ テメーも一緒だ、ボケ！」

まさかの事実にはステリックに叫ぶ刻。自ら頭を掻き毟り、イライラは最高潮だとわかる。そんな刻を見て、何も言えない桜と優。すると、また聞き慣れた声が彼らの元に届いた。

「めっちゃもといちらしいやん。いつものらりくらりで本当のことは何も言わん。それがもといちやつたし」

「遊騎君！」

見ると、遊騎が見知らぬ人の墓に両手を合わせている。相変わらずなマイペースさだが、それよりも今は遊騎がここにいることが不思議だった。

「遊騎、どうしてここに来たんだ？」

「にばんに鍵渡す時、『にやんまる』が変な顔しとったから気になってな。『音』で『にやんまる』の声見つけて、ここ来たんや」

「私を心配して来てくれたのか……。ありがとう、遊騎君。優しいのだな」

「『にやんまる』には負けるわ」

優の問いに遊騎は平然と答えると、桜とハイタッチを交わす。先ほどまでとは打って変わり、和やかな雰囲気になったが、約一名これでさらにイライラを募らせていた。

「んなことしてる場合じゃねーつつの！ どーすんだよ、この鍵！」

「んー、なんで『渋谷』って書いてあんのかな」

「聞けよ！」

和やかな雰囲気にはステリックをぶつける刻。しかし、それでもマイペースを貫く遊騎。鍵キを持つて眺めている。そんな遊騎を見て刻はさらに叫ぶが効果は無い。

「わけわからん。こんなタグ……もういらんわっ」

「イテ！」

すると、遊騎は急に「渋谷」のタグを取り外して刻に向かって投げた。急なことは刻は反応できず、タグの直撃を受けた。刻はやり返そうと、落ちたタグを拾って遊騎に向かっていった。

「人見のすることなんてオレが知るワケねーダロ！ オレに当たるんじや——  
ア、レ？」

「……？ どうした、刻」

急に刻の動きが止まった。ただ黙ってタグを見つめている。おそらく、タグになにか違和感を感じたのだろう。優が首を傾げるが、何の反応も無い。

「これは……磁気シートが入ってやがる！ これ、カードキーだぜ！」

「つてことは……そっちが本物の鍵キだった、つてことか」

「もといち、きつとよんばんやったら気付くと思ったんやないか？」

「ハ、ハア？ なんだよ、その回りくどい方法……。大体、なんでこんな墓地にダミーを

置く必要があるんだヨ、わけわかんない……」

刻がタグに触れた瞬間、彼の『磁力』が無意識にタグの中にあつた磁気シートに反応したのだろう。磁気シートの存在から、タグがカードキーであり、それこそが本物の鍵だと判明した。この鍵自体の謎はほとんど刻の異能によって判明したことを考えると、遊騎の言う通りこれも人見の意図だったとも思える。刻は急に照れ臭くなつたのか、一気に大人しくなつていた。

しかし、もう一人だけ様子が変わった者がいた。その者はタグがカードキーだと判明した時から、墓地のある一点を見つめていた。そして、ボソリと呟いた。

「……………」

「……………桜、チャン？」

「私……………小さい時にここに来たことがある」

桜だった。墓と墓が向かい合う訪問者が通るスペース。彼女はそこを静かに見つめていた。そして、彼女はゆっくりと振り返り、刻が持つカードキーを手に取る。

「この鍵……………そうだ。あの時、ここで……………」

カードキーを手に取り、改めて過去に来たことがあるという場所を見つめる。瞬間、彼女の中で霧がかかっていた過去の記憶が次第に晴れていく。そして、彼女の頭の中でその記憶が再生された。



「、」

「」

今、彼女たちがいる場所……そこに存在する二つの影。一つは幼き少女、もう一つは若い青年。青年は膝を突いて少女と向かい合い、何かを誓うかのように右手を胸に当て、左手を差し出す。少女はそれを見て、静かにある物を差し出す。あのカードキーを。

これは彼女の記憶。ならば少女は彼女に違いない。だが、青年は違った。彼のごとはここに在る全ての者が知っている。今の彼女も知っている。見間違えるはずがない。彼は………今は『捜シ者』と呼ばれる白き青年だった。

「……そうだ。ここで『捜シ者』と会ったんだ。そして、この鍵は私が『捜シ者』に渡したんだ」

「ハ、ハア!?!」

突然の話に刻は信じられないという顔をする。当然だ。"エデン"の物とされていた鍵が実は自分が『捜シ者』に渡したと話されたのだ。混乱するのは当然だ。だが、なぜ『捜シ者』の手に渡った物が"エデン"の物とされ、再び『捜シ者』が狙っているのか。いや、今はそれよりも注目すべき点があった。

「ちよつと待てよ! ってことは、その鍵は元々、桜チャンの物だったってことかヨ!?!」

「……のような気がする」

「どつちだー!」

まさかの事実を確かめようとしたが、当の桜から不安な言葉が出る。再び、刻の叫びが夜空に木霊するのだった。

「なんだと!？」

時を同じくして桜小路家。組員がいない桜小路家の家に剛徳の声が響き渡る。受話器を握り、この上なく緊迫した表情を見せる。

「……………わかった。……………ああ、もちろん。……………失礼する」

ガチャリ、と重苦しく受話器を置く。それと同時に、彼の後ろから弱々しい声が届く。

「剛徳くん、電話……………あの人？」

「……………ユキちゃん」

「桜のこと……………よね？」

「……………」

振り返ると、ユキが不安そうに覗いていた。だが、電話の内容を聞いていないにしろ、彼女もわかっていた。今の電話が誰からのもので、その内容がどんなものだったのか。不安に染められている彼女を安心させようと、剛徳は静かに彼女を抱き寄せた。

「桜がウチに来てくれてから11年余り……………。来るべき時が来たのかもしれない

……………」

「剛徳くん……………」

「桜の記憶が蘇る時が……」

## code : 35 力の高みと謎の深みを目指して

「うおおおおー！」

空は黒に染まり、月と星が世界を照らす。時刻はすっかり夜となっていた。人も動物も徐々に静かな眠りにつく頃である中、都市部から少し離れた場所にある森では夜には不似合いな叫びが木霊した。

「はあっー！」

そこにいたのは大神。彼は左手に『青い炎』を灯し、周囲にある木々を次々と焼き切っていく。よく見ると、彼の背後には何十本という木の幹が残っていた。いつから、どれだけの動きをしてきたのだろう。彼が体中に行っていた包帯は解け始め、塞がろうとしていた傷口からは血がにじみ出ている。

「くそ……まだだ……。こんな炎じゃ、まだ『捜シ者』には……！」

肩で息をしながら、それでも強い意志をその眼に秘めながら大神は延々と目の前に広がる木々を見る。感じていた。こんなんじや、まだ足りない。『捜シ者』を斃すにはまったく言っていないほど。だが、それを悲観している時間すら惜しい。『捜シ者』を斃すため……彼は再び『青い炎』を灯して周囲の木々を焼き切った……はずだった。

「ツ!? なんだ!? 燃えない……!?」

一本、最後に焼き切ろうとした木に触れた瞬間、奇妙な感触が左手から伝わった。木というには柔らかすぎるものであり、なにより不思議だったのは『青い炎』が触れたというのに燃えないということだった。そこまで自分の異能が弱っているのか、それともロストの前兆なのか……。様々な考えが浮かんだが、それらはすぐに否定された。他ならぬ、その燃えなかった“モノ”によつて。

「あちちっ! ダメだよ、大神君。そんなに燃やしたら火傷しちゃうよ」

「せ、生徒会長!」

聞き間違えようのないその声、そして忘れられるはずがないその姿。そこにいたのは生徒会室で会った時と同様、『にやんまる』の着ぐるみを着た生徒会長だった。ならば彼が燃えなかったことには納得がいく。彼は桜と同じ、異能が効かない珍種。異能である『青い炎』で燃えないのは当然である。

会長は体中をパンパンと叩き、体についていた炭を叩き落しながら大神に声をかける。

「まったく、やっぱり一人で修業してたんだね。『捜シ者』にボコられて動くのも難しいくらいの大怪我をしているのに無茶するよ。あんなに『捜シ者』にボコられたのにサ!」  
「……その言い回しはワザとやってると思つていいんだよな……!?」

少し、どころかかなり棘がある会長の言い回しに大神は怒りを露わにする。今すぐにも亡き者にしてやろうと考えたが、大神は小さく息を吐くと落ち着きを取り戻し、静かに会長に告げた。

「……まあいい。あなたには関係の無いことだ。さつさと帰ってくれ」

「いかにも、そうはいかないよ」

「なに？」

さつさと会長を帰らせ、修行を続けようとした大神。だが、会長はそれを否定する。わけがわからない大神に対し、会長は移動を始めながら言葉を続ける。

「今の修業を続けたところで強くはなれないよ。こんなの、イジケ虫が地団太踏んでるのと同じだからね。それこそ『捜シ者』を斃すどころか、桜小路君だって護れない」

「ッ………」

遠慮も何もなく、確信を突いた発言をする会長。大神も心のどこかでそれを感じていたのか、言い返せずに言葉が詰まった。だが、それでもやるしかなかった。思いつく限りの方法で強くなるしかなかった。そう思ったからこそ、彼はここで修業していたのだから。

移動して、今まで大神が焼き切ってきた木々を背にして立つ会長。大神は彼に向かって再び突き放す言葉をかけた。

「あんたには、関係ないと……」

「……これを見てもそう思うかい？」

しかし、会長はその言葉を無視して一本の刀を取り出した。柄の形が『にゃんまる』という奇妙な刀だったが、会長は静かにその刀を腰に添えて構えた。そして……

——チンツ

「……!?」

一瞬のうちに刀を少し抜き、また一瞬で鞘に納める。瞬間、大神の体を一筋の風が通り抜けていった。ただ刀を抜いて納めただけでは起こるはずが無いほどの風。そして、次の瞬間……

——ズウウウンツ!

「な……!?」

何かが倒れるような音が響き渡る。大神はすぐに音の出所である背後を振り向く。すると、そこには信じられない光景が広がっていた。

「……これは……」

大神の背後にあつた木々が何本も見事に切り倒されていた。それも、まるで扇形に広がるように。それだけ広範囲の攻撃があつたということだ。そして、その攻撃をした人物は一人しかいない。さらに、大神はこの技を知っていた。忘れるはずもない、自分が



何度も受けた技だからだった。

「あんた……なぜ『捜シ者』と同じ技を使える……!?」

あの時、遊騎邸で『捜シ者』と対峙した時に嫌というほど受けたあの謎の技。ただ刀を納めただけで無数の斬撃を受け、太刀筋も何も読めない攻撃。会長がしたのはそれと同じだった。

「ま。ちよつと飲もうか、大神君。大丈夫、ジューズだから」

「……………」

目の前のことに驚く大神に対し、会長は平然と座り込んで一本のピンを取り出す。今までなら、「ふぎけるな」とでも言つて一蹴していた。しかし、会長の今の技を見て、それもできなくなっていた。大神も感じていた。この人……会長は強くなる術を知っている、と。

一方、それと同じ頃。桜たちも驚きの事実に向き合っていた。

「ちよ、ちよつと待てヨ！ 今の桜ちゃんの話からすると、その鍵は元々桜チャンの  
で、昔ココでそれを『捜シ者』に渡した……！ そして、それが今じゃ『エデン』のトッ  
プシークレットトつて……桜チャン、あんた一体何者なんだヨ!?」

桜がこつそりと持ち帰っていた鍵の謎を解くため、刻が異能で探し当てた鍵の鍵穴が  
ある墓場に桜、刻、遊騎、優の四人。鍵穴の向こうにあつたものは人見からの「ハズレ」  
というメツセージとオモチャのアヒル。その後、偶然にもタグだと思つていたものが  
カードキーであり、それこそが本当の鍵だとわかり、それに続いて桜が思い出した驚き  
の事実。

その昔、まだ桜が子どもの頃に桜はこの墓場で『捜シ者』に会い、桜自身の手からカ  
ドキーを手渡したというものだった。

しかし、当の桜はというと……

「す、すまぬ。これ以上はなにも思い出せないのだ。『捜シ者』は今と同じ姿だし、ど  
うにも記憶が曖昧で定かではないのだ」

「ワー！ イライラする！」

「……そうイライラしても始まらないだろ」

「そーやで。子どもの頃の記憶なんてそんなもんやし」

どうにも記憶がまだ曖昧なものらしく、確信を持ってないようだった。わかりそうでわ

からないという現状に刻は苛立つが、優と遊騎は「仕方ない」といったような感じで話を進めた。

「とりあえず、情報を整理するぞ。つまりのこのカードキーは最初、桜小路の物で、ある時とある理由で桜小路は『捜シ者』にそれを渡した。その後、何かしらの経緯があつてキーは『エデン』の物になり、人見さんがキーを奪つて『コード：ブレイカー』を抜けた。そして、人見さんの手から桜小路に渡つて、『子犬』がそれを隠していて、今では『捜シ者』も『エデン』もとり返そうとしている、つてとこか。どうにも謎が多いな」

「メンドクセー！ メンドクセーよ！ イライラするー！」

「よんばんは細かいなあ。とにかく大事なもんちゅーことでえーやん」

優は改めてカードキーがどういった物か情報を整理する。しかし、整理したところではわからない部分が浮き出てくるだけで、解決には繋がりそうにない。遊騎の言う通り、今は「大事なもの」という認識をするので精一杯だ。

「……すまぬ、みんな。だが、これ以上は本当になにも思い出せぬのだ」

「『にやんまる』、気にすることあらへんで。わからんかったら調べればえーんやし」

「遊騎の言う通りだ。それに、記憶なんて何がきつかけで思い出すかわからないからな。刻も、今は細かいことは置いといていいだろ？」

「……あー、ウルセーな。『コード：07』如きがオレに指図すんじやねーヨ。大体、言

われるまでもねー。とりあえず、わかりそうなことから解決すればいいんだろ」

大事なことを思い出せず、迷惑をかけたことを謝罪する桜。しかし、『コード・ブレイカー』たちは誰一人としてそれを気にする者はおらず、目の前のことから順に解決していくことになった。

「しつかし、どーすつかな。カードキーは複雑すぎるからオレの『磁力』じゃ探索できねーしヨ」

「そうなのか……。やはり異能を使っても難しいことはあるのだな」

「ま、異能も万能じゃないからネ」

まずどうするかを考え始めた四人だったが、最初にやったような『磁力』を用いての探索は不可能と早々に刻からギブアップが出た。現時点でそれが最も手っ取り早い方法だとされたが、不可能ではどうしようもない。刻たちは考えを巡らせるが、どうにもいい案は出てこない。一方、遊騎は人見のメッセージとともに入っていたオモチャのアヒルを弄っていた。

「おい、遊騎。遊んでないでお前も少しは考えろヨ」

「なあなあ、よんばん」

「あ？　なんだよ」

「なんか開いたで」

「ハア!？」

突拍子の無いことを言う遊騎の周りに刻たちは一斉に集まった。見ると、アヒルの胴部分でパツクリと開いていた。さらに、中には機械のような物があり、よく見ると脇にはゼンマイが仕掛けてあった。

「……開いた状態で横から見ると。パツ○マンだな」

「オツサンみてーなこと言つてんじやねーヨ。こりやオルゴールだな。人見のヤツ、オルゴールの曲に何かヒントを隠したつてことか」

優の思わず出た呟きにツツコむと、刻はアヒルがオルゴールだと見抜いた。そこから流れるであろう曲にヒントがあると考え、刻はアヒルを閉じてからゼンマイを回し、改めて開けて曲を流した。

「よっし、スタート」

「……………」

「……………」

——シーン

「アレ？」

まったくの無音だった。ゼンマイはしつかりと回っているが、音はまったくと言っていいほど出ていない。刻は首を傾げた。

「壊れてんのか、コレ？」

とてもじゃないが、最新式とは言えない代物だ。すでに壊れているのかもしれない、と刻は考えアヒルを閉じようとした。すると……

「……壊れてへん」

「あ？」

「遊騎……？」

遊騎がボソリと刻の言葉を否定した。見ると、彼は両耳に手を添えて耳を澄ませている。これは明らかに何かを聞いている状態。つまり、彼には聞こえているのだった。

「音はちゃんとしとるわ……。ただ、よんばんたちは聞こえなくてもしやーない。こ

れは人の聴覚で聞き取れる音の領域を超えた高周波……オレの異能『音』でしてか聞き取れん音やし」

「ワン！」

「おお、『子犬』も聞こえておるのか？ ……そうか、人間には聞こえない高周波の音というた犬笛のような物だからな」

「……なるほど。刻が『磁力』でこの場所を突き止め、遊騎が『音』で次のヒントを知る、か。人見さんらしいな」

『音』でしか聞き取れない高周波。それがオルゴールから出ていた音の正体だった。遊騎は耳を澄ませて高周波の音に意識を集中させる。その姿を見て、優は人見の思惑を察し、一人で笑みを浮かべていた。そして、ようやく曲が終わったらしく遊騎は両耳から手を離れた。それを確認すると、刻は遊騎に声をかけて内容を確認しようとした。

「遊騎、何の曲だったんだヨ。……おい、遊騎！」

「ツー、トントントン、トントン。ツー、ツー、トン、ツー……」

「なんだよ、ソレ！ 曲でもなんでもねーじゃねーか！」

しかし、遊騎の口から出たのはとても曲とは思えない「ツー」と「トン」という音の不規則な羅列。まったくもって意味がわからない時は思いつきりツツコむが、優は何かを感じていた。

「……いや、これはまさか——」

「せや、ななばん。これ、曲やないねん。これは……」

『モールス信号』や」

「『モールス信号』……暗号などでたまに使われたりするものだな。ドラマで見たことがあるぞ」

モールス符号と呼ばれるものを用いた信号である『モールス信号』。オルゴールから出ていた謎の音の正体はそれだと言いついて当たった遊騎。さらに……

「内容は住所を表しとる。多分、そこにカードキーが使える何かがあるはずや」

遊騎は内容の解読も済ませていた。つまり、人見は遊騎が『音』でオルゴールを聞く



だけでなく、そこから出る『モールス信号』まで解読できることまで計算していたということだ。とてもじゃないが、彼らのことを深く知っていないとできない芸当だ。

「マジかよ……。ホントにこんなアヒルがヒントだったのかヨ……」

「うむ……。しかし、遊騎君は本当にすごいな。『モールス信号』まで解読できるのだから」

「……………」

「……遊騎?」

アヒルを含め、実は人見の悪戯だと心のどこかで感じていた刻。まさか本当にアヒルがヒントだとは思ってなかったらしく、アヒルを見つめてただただ驚いていた。桜は『モールス信号』を解読した遊騎に感心していたが、当の遊騎は急に黙り込んでしまった。優が心配して声をかけるが、反応は無い。

その時、遊騎の中にあっただのは過去の記憶。忘れるはずもない、はつきりと残った記憶。忌まわしくもありながら、大切な記憶だった。

「寄るな、『音』の化け物！」

「お前が喋ると物が壊れるんだ！ だから一生、喋るな！」

「公害だ！ どっか行っちゃえ！」

「……………」

自分の中にある他人には無い強い力。それを制御する力も術もわからず、苦しんだ日々。周囲からは非難的になり、誰とも関わる事が許されない孤独な日々。言い返すこともしない。言い返すどころか、自分が口を開けばまた何かが傷つく。そうすれば余計に一人になる。彼は子どもながら、それを強く感じていた。

「……………遊騎、大丈夫か？」

「……………」

——コクン

そんな中、自分を心配する少年の言葉に無言で頷く。彼は、数少ない特別だった。自分のことを恐れもせず、対等に接してくれる唯一の存在だった。

「そっか、遊騎は強いね。じゃあ、遊騎にはとっておきを教えるよ」

「……………」

「話さなくても伝わるすごい言葉だ。ほくたちだけの秘密だよ——」

笑顔で接し、笑顔で自分が知らないことを教えてくれる。彼は……………遊騎の友達だっ

た。

「……真理が教えてくれたんや。話さなくても伝わる言葉、『モールス信号』……」

「え……？」

誰かを思うように、静かに、そしてどこか悲しげに呟く遊騎。その姿に、桜たちは言葉を失う。遊騎は顔を伏せたまま、真っ直ぐ歩き出す。今、自分がすべきことをするた  
めに。

「住所のどこ、はよ行こうや」

遊騎が『音』を使い、『モールス信号』を解読して知ったある住所。桜たちは、ようや

くその住所まで辿り着くことができた。そして、そこにあった建物を見て、言葉を失っていた。

「……ココ、なのかヨ？」

「そのはず……なのだが」

「だが、これは……」

言葉を失い、ただ呆然と立ち尽くす四人。それほど、目の前にある建物は予想の斜め上をいつていた。そこにあった建物は大きく、そして薄暗く、とてつもない歴史を感じさせる……

「ボロ家やし」

とてもボロボロで古びた木造の建物だった。

「人見イイイイ！ また騙しやがったな、あのヤロー！ どう考えても、こんなボロ家にカードキーなんてハイテクが関係あるワケねーダロ！」

今、刻の目の前には人見が悪びれもせず欠伸をしている姿でも映っているのだろう。再び人見に対しての怒りを露わにしていた。優もこればかりには何も言えず、どうするかと悩んでいた。すると、再び遊騎が気付いた。

「なあ、見てみい。この表札。『渋谷』って書いてあるで」

「ハア!? そんなわけ——」

遊騎の発言に刻は怒りを露わにしたまま反応し、遊騎が指差した表札とやらを見た。内心、遊騎の勘違いだろうと考えていた刻。どんな文句を言つてやろうかと考えていた……のだが。

「『渋谷荘』……つて『渋谷』!? どーゆーことだよ!?」

彼の視線の先にある少し斜めになっている表札。そこには確かにはつきりと『渋谷荘』と書かれていたのだった。

「『渋谷荘』つてことはアパートみたいなものか。そして、おそらく『渋谷』つていうのはこのアパートの管理人か何か……つてところか」

「なるほど、カードキーの『渋谷』とは地名ではなく人名だったのか」

「マ、マジで……!?! マジでこんなボロ家にこのカードキーが関係してるとのかヨ……!」

徐々に明らかになっていく真実に、納得する者もいれば納得できない者もいた。すると、そんな彼らに近づく一つの人影。それは四人の姿を発見すると、何食わぬ顔で声をかける。

「おや、みんな一緒にどうしたんだい?」

「え……?」

声をかけられ、四人は一斉に声の方を向く。そして、そこにいた人物を見て、さらに

驚くことになってしまった。

「か、会長!？」

「いかにも、いかにも」

そこにいたのは、食材が入った買い物袋を持ちエプロンをつけた会長だった。彼は相変わらずの『にやんまる』姿のまま、何食わぬ顔で四人に挨拶した。

「ア、アンタ……こんなところで何やってんだヨ……」

「私は夕飯に食べる鍋の材料の買い出しから帰ってきたところだよ」

「では、会長のご自宅はこの近くにあるのですか?」

「ん? 近くも何も、ここが私の家だよ?」

「ハア!？」

平然と続く会話の中で、さらに続く驚き。ここで会長と会うだけでも驚いたというのに、あろうことか彼は『渋谷荘』が自宅だと話し始めた。

「ま、待てよ……。つてことは、アンタが『渋谷』さん!？」

「いかにも、私は『渋谷』だが? あれ、まだ言つてなかつたつけ」

「ハアアアアア!？」

あまりにも連続で意外すぎる真実に、刻は声を大にして驚く。カードキーが関係しているのがポロポロのアパートで、そこは会長の家であり、さらに会長は「渋谷さん」だという。もう何が何だかわからなくなってきたもおかしくない。

「いやいやいや! あり得ねー! だつて、この鍵キは『エデン』のトップシークレツトで、人見が奪つて、『捜シ者』も狙つてて——!」

「ああ、あの二人ね。いかにも、みんなヤンチャな悪ガキだつたよ」

「ハ、ハア? あんた、何言つて……」

どういふことかわからなくなり、刻が情報を整理しようとするとう会長は懐かしむように頷いた。何を懐かしがっているかはわからないが、明らかにそれは人見と『捜シ者』という人物を懐かしんでいた。刻が呆けていると、会長はゆつくりと歩きだし、『渋谷荘』の扉を開いた。

「懐かしいなあ……。人見も、そして『捜シ者』も……。以前、ここで暮らしていたことがあるんだよ」

「……う、嘘ダロ!?!」

「人見さんと『捜シ者』が、ここで……!?!」

「そ、それはどういうことですか!?! 渋谷会長殿!」

会長の口から出た言葉に、今度は優と桜も反応を示す。かつて人見と『捜シ者』が会長と共に暮らしていた、そこからは「会長が何者なのか」という疑問も当然のことながら生まれるが、それよりも注目すべきは「人見と『捜シ者』が」というところだ。人見は『コード・ブレイカー』であり、『捜シ者』は「エデン」と敵対する者。つまり、二人は敵同士のはずなのだ。それが同じ家で暮らしていたなどあり得ないことだ。

刻たちはそれを問い詰めようとしたが、突然、ある人物の姿が視界に入った。

「つて、アレ……。……お、大神!?!」

「……………」

扉が開いた『渋谷荘』。玄関口であるそこには、大神の姿があつた。今まで完全に別行動をしていた彼がいることは不思議だったが、大神は彼らに構うことなく動き出した。

——スウ……………

大神は静かにその場に膝を突いた。無意識ではなく、明らかに自分の意志で。そして



……

「……し、師匠。お、お帰りなさいま、せ……」

会長に向かつて頭を下げる大神。その時の表情と声から、かなり不満だということがわかる。しかし、彼はやらなければならなかった。なぜなら……

「いかにも、大神君は今日からここで私と一緒に暮らすことになったんだ」

『はあ!?!』

今度ばかりは全員が声を揃えて驚いた。今までの話の流れや今日の出来事を考えても、彼らの中では大神が会長に弟子入りするという形にはどうしたって持つて行けなかった。

しかし、会長はさも当然のように「うん、うん」と頷きながら話を続けた。

「これは基本の礼儀作法だけ……まあ、点数は65点つてところかな」

「オイオイ！ 何を言つて——！」

平然と大神の作法に点数をつける会長に対し、刻は大声を張り上げて説明を求める。すると、会長は静かに真実を告げた。

「大神君はかつての人見や『捜シ者』と同じく、私に弟子入りして最強の異能者になるための修業を始めることになったんだよ」

こうして、刻たちの理解が追い付かぬまま、彼らが知らないところで決まっていた……大神の渋谷会長への弟子入りが告げられた。

## code : 36 小さき一歩

『捜シ者』と『Re—CODE』との対決と『捜シ者』による桜の誘拐、そして鍵ギを巡る謎と大神の会長への弟子入りなど、怒涛の嵐のように次々と起こった出来事から約三週間が経った。あれから、『捜シ者』一派からの追撃もなく、大神たちはすっかり落ち着いた生活を取り戻していた。

季節は……もう梅雨に入っていた。

「うむ、今日もたくさん雨が降って良いことだ。お米や作物も嬉しいだろう」

「……とても現代の女子高生の言葉とは思えませんね」

「そうか？ 昔から父上と母上とは雨が降るとこういった話をするのだが」

梅雨というだけあって、ここ数日は雨が降っていた。そんな中、大神と桜は傘を差し、雑談を交わしながら下校していた。話の内容としては雑談に変わりないのだが、大神が言うように桜の発言ははつきり言って女子高生がするような話とは思えない。まあ、これも彼女の実家が『鬼桜組』という仁義に熱き任侠組織だからかもしれない。一般的なものとは違うものがあってもおかしくはない。

そんな桜に普通の人は違和感を覚えるだろうが、彼女からしてみれば最近の大神に強

い違和感を感じていた。それは、彼が会長に弟子入りして『渋谷荘』に住むという話を聞いてからだった。

「ところで大神、今日もずっと居眠りしておったな。休み時間の時も授業中も……ちゃんと夜、寝ているのか？」

「……寝ていますよ。言つたでしよう？ あれからずっと、バイトは休みをもらつているんです。バイトが無ければ夜は寝るだけですよ」

「それはわかつているのだが……」

「大丈夫ですよ。ちゃんと時間を見つけて予習と復習もしてますから、勉強の方は問題ありません」

もはや勉強だけに限つた問題ではない……と桜は言おうと思つたがやめた。どうせ言つても上手いこと言つてかわされるだけだと思つたのだ。現に、今もなぜ居眠りをしてしまうのかについては一切触れていない。

大神が会長に弟子入りしたことで、特にこれといって大きな変化は無かつた。あると言つても、今の話にもあつたように大神がずっと居眠りをするようになったことだ。あおばたちクラスメイトも、急に居眠りが多くなつた大神を気にかけているのを桜は知つていた。だが、どんなに言つてもはぐらかされてしまう。そして、彼女にはもう一つ気になることがあつた。

「それじゃあ、さようなら。また明日」

「う、うむ。いつもすまんな」

「いえ、これも観察ですから」

着いたのは桜の自宅。二人が別れるのは必ずここだ。まあ、その理由は大神が言うように「観察」のためだ。その逆に、登校の際には必ずここで合流する。と言っても、桜が出る大神がすでにいるのだが。だが、それは大神と知り合ってからずっと続いていることであるため不思議ではない。気になるのは、三週間前から別れる際に必ず言うてくるこの言葉だった。

「桜小路さん、絶対に『渋谷荘』には来ないでくださいね。では、失礼します」

「……………」

これだ。いつもの優等生スマイルで「絶対に『渋谷荘』に来るな」と言つて彼は帰っていく。彼が会長に弟子入りしてから、これが毎日続いている。彼にしてみれば本当に来てほしくないため、念を押しているのだろうが……桜の性格上、それは逆効果と言つてもいいものだった。

「ええい！ 毎日、ああも言われると嫌でも気になつてしまふではないか！ 『子犬』

！ 今日こそ大神が『渋谷荘』で何をしているか突き止めるぞ！」

「ワン！」

大神の姿が見えなくなったのを確認すると、桜は拳を握りしめて覚悟を決めた。その覚悟に応じるかのように、『子犬』も大きく鳴く。その後、彼女は合羽を着てこつそりと『渋谷荘』へと向かった。

『渋谷荘』への道はなんとか覚えていたため、桜は特に苦勞せずに通りに着くことができた。周囲に人の気配は無いが、桜は細心の注意を払いながら徐々に『渋谷荘』へと近づいていった。

「よし、なんとか表札のところまでは来れたな。しかし、改めて見てみてもボロボロだな……。雨漏りしていてもおかしくなさそうだな……」

表札が飾つてある扉の陰に隠れて『渋谷荘』を見る桜。見たままならどつしりと建っているが、細部を見ると壁の木材がひび割れていたり、天井部分の瓦がずれていたりとかなりボロボロだとわかる。だが、今はそんなことを気にしている場合ではなかった。桜はどうしてもこの『渋谷荘』で確かめたいことがあった。大神のことはもちろんだが、

何よりも……

「……本当にここに鍵キを使う場所があるのだろうか。以前は聞けずじまいだったからな。今度こそ会長から聞いてみなくては」

そう、彼女が気になってるのは鍵キのことだった。あの日、刻たちと『渋谷荘』に始めて行った日、大神の弟子入りを告げられた後、桜は鍵キについて会長に質問した。しかし、その時の返答は……

「……いかに、鍵キのことはいずれわかるよ」

これではわかるはずもない。上手いことかわされたということだ。ちなみに、鍵キはまだ桜が持っている。平家が「エデン」に返すためにまた来るかも……と警戒していたが、この三週間の間、平家が桜に接触することは無かった。そう不安に思うのも、三週間前に『渋谷荘』から帰った桜の自宅にはある届け物がされていたのだ。それは、桜が平家に渡したニセモノの鍵キ。彼女の下駄箱の鍵だ。その鍵が返されたということは、平家はすでにニセモノだと知っているということ。桜が不安に感じるのはそのためだ。

だが、先ほども言ったがこの三週間、平家とは一回も会ってない。そのため、桜は無事に鍵キを持っていられるというわけだ。返さなくてはとわかつてはいるが、蘇りかけた記憶の件もある。可能ならば自分で持っていたいと桜は考えていた。

「む……いかん、いかん。鍵キのことも大事だが、今は目の前のことに集中せねば」

つい鍵のことを考えすぎた桜は、首を振って雑念を払う。今、彼女がすべきはここで試行錯誤することではない。鍵のことも含め、全ての謎を解くために動くことである。

「よし、この『渋谷荘』がなんなのか……それを何としても突き止——」

「……………」

「め、る……」

改めて覚悟を決めた桜が前を見た瞬間、目の前に見知った顔があつた。突然、あるとも思っていない顔が目の中にある。その顔とは……

「ヤ、桜ちゃん」

「刻君!?!」

まさかの刻だつた。雨の中、傘を差して煙草をふかしており、何食わぬ顔で片手を挙げて挨拶をする。桜は思わず彼の名を叫んだが、すぐに刻から人差し指で自身の口元を押さえて「静かに」とジェスチャーで伝えられ、桜はハツとして口を押さえる。刻はそれを確認すると、小声で話を始めた。

「どうせ考えてることは一緒だろ? 大神の奴が何やつてんのか、鍵のこと……それ全部ひつくるめて調べるために、とりあえず『渋谷荘』に忍び込む。行こうぜ」

「——!——!——!」

刻の言葉に、桜は口を押さえたまま勢いよく頷いた。偶然にも同じ時に忍び込もうと



した二人は、ゆっくりと『渋谷荘』の玄関を開いた。

「た、たのもー……。誰かおりませぬか……。？」

「シー……。忍び込んでんだからそーゆーのいいつつノ」

『渋谷荘』に無事、忍び込んだ桜と刻。桜は心のどこかで罪悪感を感じたのか、小声ながら最低限の礼儀を通す。一方、刻はそういったものを気にする様子は無く、ずかずかと靴を脱いで上がっていった。その後、桜も中に入り、二人は一階の搜索を始めた。

「……どこもかしこもボロボロだし、とても暗いな。台風でも来たら壊れてしまいうだ」

「大神の奴、よくこんなトコに住んでられるぜ。オレだったらゼッター無理だワ」

どんなに力を抜いて歩いてもきしむ床、閉まっているはずなのに水が滴る蛇口、点いているわけでもなく丸出しで吊られている電球。外装も中々のものだったが、内装はそれ以上の状態だった。はつきり言って、少し力を込めて暴れば普通の大人でも壊せそ

うな状態に近い。

そんな『渋谷荘』の一階部分を一通り見てみた二人だが、特にこれと言って重要そうなものは見つからなかった。そこで、二人は二階に続く階段を見つけて二階へと足を踏み入れていった。

「うわ……二階はもつと暗いな……。やっぱ、こんなボロ家じゃタダでも住みたくな  
いぜ」

「そういうえば、会長の話ではここは戦前に建てられたらしい。そう考えると、当然かも  
しれんな」

構造上の関係か、刻の言うように二階は一階よりも暗く、歩くだけでも一苦勞だった。  
そんな中、桜はいつの間にか会長から聞いていたらしく、『渋谷荘』が建てられた時代  
について口にする。よく戦争中に壊れなかったものだ、と内心で感心しながら。

そして、二人が二階を慎重に回っていると、様々な物を発見することができた。水道  
と思われる場所には複数の歯ブラシ、廊下のところどころには洗濯物と、人が住んでい  
るという証拠が確認できた。

「今思うと、玄関には靴もいくつかあったな。ということは、大神の他にも住んでいる  
者がいるということか……」

そんな中、桜がふと気付く。歯ブラシを含めた生活用品が複数あった。それはつま

り、住んでいる者が数人いるということ。まあ、ここはアパートだ。ここ二階部分をよく見てみると、「○號室」と番号順に書かれた扉がいくつもあつた。おそらく、二階は居住スペースなのだろう。

「む……？」

すると、桜と刻はふと違和感を感じる。自分たちがいる地点より少し前……そこに何かがあるという気配を感じたのだ。

「だ、誰かおるのか？」

——カッ！

桜はおそろおそろの気配に尋ねた。その瞬間、外では雨雲に紛れた雷雲から大きな雷が落ち、閃光と轟音が『渋谷荘』に響いた。

そして……その閃光は桜たちの前にいた気配の姿を照らし出した。



「バ、バ……化け猫だアアアア！」

そこにいたのは、猫のような顔をしていながら二足歩行で立つ、ぼんやりとした二つの奇妙な存在。その存在を目にした瞬間、刻の叫びが『渋谷荘』中に響き渡った。

——カチツ

「おお、点いたね。いかにも、ブレーカーが落ちただけだったんだな」

「か、会長!？」

「はや、早く逃げ——! ……え?」

刻が一目散に逃げようとした時、スイッチを押すような音がしたと思ったら一気に『渋谷荘』内が明るくなった。見ると、刻が化け猫だと思った存在は会長だった。『にやんまる』の着ぐるみのため、そう見えただけだったのだろう。桜は安心するが、ふと気付く。そこには……もう一人の『にやんまる』がいるということに。

「会長……その『にやんまる』は誰なのですか?」

「——!」

「あ、待て！」

桜がもう一人の『にやんまる』を指差して会長に尋ねると、もう一人の『にやんまる』は急に桜たちに背を向けて逃げ出そうとした。しかし、そのスピードはかなり遅く、瞬時に反応した桜から逃げられるはずもなかった。もう一人の『にやんまる』はあっけなく桜に押し倒された。

「どうした！　なぜ逃げる必要が……って、あれ？」

もう一人の『にやんまる』に馬乗りになつて逃げようとした理由を言及しようとする桜。すると、彼女はあることに気付く。見た目こそ『にやんまる』だが、そこからかすかに感じるあるもの……それは、彼女が良く知るものだった。桜はその感覚を信じ、『にやんまる』の正体を口にした。

「この匂い……お前、大神か！」

「——！！」

「いかにも、その中身は大神君だよ」

桜の言葉を聞き、『にやんまる』は大きく体を反応させる。それだけでもわかるものが、会長の口から堂々と正解を宣言される。どうやら本当に正解だったらしい。桜が着ぐるみ越しに嗅ぎ取った大神の匂い……彼女が持つ異常なまでの嗅覚への執着がもたらした結果だった。以前はそれで救われたこともあるが、今ばかりは大神にとって迷惑なものに感じているだろう。

「ギャハハハハ！ そーゆーことかヨ！ そりや見られたくねーよな！ どんだけ遊ばれてんだヨ、テメーヨー！ おい、顔見せるヨ！ 写メ撮ってやつからさ！」

「——！」

『にやんまる』の中身が大神だとわかった瞬間、さつきまで化け猫だと騒ぎ立てていた刻は大笑いを始めた。相変わらず調子の良い性格で、笑いながら大神が被っている『にやんまる』の頭を外そうとする姿は先ほどまで怯えていたとは思えない。一方、大神はそれを拒否し、頭を押さえながら刻から離れようとするが、やはり遅いので離れられない。

「!?」

「うわ! お前、急になに——ぐはっ!」

すると、大神の足元に少し出っ張った木材があり、刻から逃げるのに夢中だった大神はそれに足を取られて……刻を押しつぶすように倒れた。だが、あくまで細身の高校生と着ぐるみ。衝撃こそあれど大した重さは無い……はずだった。

「お、重……! 死ぬ……!」

ミシミシと刻の体中から不吉な音が鳴る。見ると、二人が倒れ込んだ部分の床はクレーターのようにへこんでいる。刻は大神を上からどかさうとするが、ピクリともしない。結果、二人を心配した桜が自慢の怪力で大神を起こしたため、大事には至らなかった。

「……これでよし。大丈夫か? 刻君」

「アガガ……。ク、クソネコ……。なんだよ、このクソ重い着ぐるみは……」

「いかにも、ただの着ぐるみじゃないよ。生命力を上げる基礎力アップ用パワースーツさ。スーツの中には珍種である私の血がたっぷりと塗り込まれているから、このスーツを着ている間は異能は絶対に使えない。『渋谷荘』内では昼夜問わずスーツは着たまま、異能が使えない状態で異常なほどの重さに耐えることで気力と体力を向上させる。これは長い間、異能の研究をした私が導き出した最良の方法なんだよ」

つまり、会長の話を簡略化するならば一種の拘束具ということだ。異能が使えないということはある意味、不正などが行えない状態。生身の状態で苦しみに耐えねばならない。確かに、こんなことを続けていけば気力も体力も嫌でも向上するだろう。『にやんまる』型なのは……おそらく会長の悪戯心だろう。

「そうか……。だから唯一スーツを着ていない学校では疲れて眠ってしまうのだな」

意外なところで大神の居眠りの謎が解けた桜。会長の話から、おそらく大神は『渋谷荘』で寝る時もスーツを着たままのはず。こんなスーツを着ていては安眠などできるはずもなく、その分の睡眠を体が楽な状態になる学校で補っていたのだろう。

「さて、大神君。次は屋根の修理お願いね。雨漏りひどいから」

「……！——！——！」

「……やつぱアイツ、いいようにこき使われてるだけジャネ？」

桜たちが納得したところで、会長は大神に次の仕事を言いつけた。大神は動きにくいスーツの状態で、必死に一步步進んでいった。その後ろ姿は、刻の言うようにただ遊ばれている哀れさを感じた。

二人がいなくなった二階の廊下。すると、刻は呆れた様子で深いため息をついた。

「つたく、こんなトコに籠ってどんなスゴイ修業してんかと思つたらふざけたスーツ着せられての体力強化……。こんな遊んでるのと同じじゃねーか。なんか拍子抜け。



桜チャン、オレ先に帰るワ」

「刻君……」

どうやら大神が行っている修業の内容に呆れ果て、調べる気も失せたらしい。彼は會長たちが言った方向に背を向け、そのまま帰ろうとする。桜は止めようとするが、どうにも言葉が見当たらない。彼を止められずにいた。すると……

——ガチャリ

「ア？」

ふと、扉が開く音が二人の耳に届く。刻は不審に思い、振り返ってみる。そこにいたのは……

『……………』

「またかヨオオオオオ！　つか、今度は三匹イイイイ！」

部屋の中から出てきたのは、『にゃんまる』の頭を被った三つの人影。なぜか周囲の電機は消えているため、不気味さは倍増されている。刻は恐怖のあまり後ずさる。すると、背中に違和感を覚えた。

——ドン！

何かにぶつかつた。まるでホラー映画さながらの展開に、刻はまさか、と思いつつも振り返ってしまった。そして……見た。

「……………」

「ギヤアアアアアア！」

そこにいたのは、前の三人と同じように『にやんまる』の頭を被った謎の人影だった。恐怖の連続に、刻はその場に倒れた。

だから、彼らの正体をすぐに知ったのは桜だけとなった。

「…………さて、皆さん。『にやんまる』ごっこはそろそろ終わりますよ」

「えー、つまらんわ」

「寧々音、もつとやりたいのー」

「平家先輩！ 遊騎君に寧々音先輩まで！ じゃあ、こっちは……」

「…………まさか、ここまで驚くとはな」

「夜原先輩！」

次々と『にやんまる』の頭を脱いでいくのは平家を始めとする知り合いの面々。その後、刻が起きるまで桜たちは彼らがここに来た経緯を聞いていったのだった。

「ナルホド……遊騎はこの前の戦いで家が壊れたから、こここの『参號室』さんごうしつに住んでる。ねーちゃー——藤原サンは生徒会の副会長だからつてことで平家に誘われてきた……つてコトか。で、優はいつもの如く平家に金魚のフンみてーについてきたと」

「オレにだけ棘があるな」

「うるせー！ 紛らわしい登場しやがつて！ 一生恨んでやつからな！」

刻が目覚めると、桜は刻に平家たちがなぜ『渋谷荘』に来たのかを説明した。まあ、彼にしてみれば一番気になるのは寧々音のため、彼女以外がいる理由への関心は少ないだろうが。一方、当の寧々音は遊騎とまだ『にやんまる』ごっこをしている。

それを横目で確認すると、刻は平家に対してある疑問をぶつけ始めた。

「オイ、平家。お前だったら何か知ってんだろ？ このアパートってなんなんだよ。クソネコの家だつーし、遊騎と大神……『コード：ブレイカー』を二人も住まわせるなんてどう考えても普通じゃねー」

「それは当然です。なぜなら、この『渋谷荘』と我々『コード：ブレイカー』は切つて

も切れない関係なんですから」

「……どういふことだよ」

刻の疑問に対し、平家は意味深な言葉を最初に返す。刻はその言い回しにイラつきを覚えるが、平家は構わずに言葉を続けた。

「ここは……かつて『コード・ブレイカー』を育成するために建てられた養成所だったんです」

「養成、所……？」

「ええ。ですが、『ある事件』をきっかけに封鎖されました。以降、会長はここをアパートにし、会長の許可が出た者しか出入りができない『渋谷荘』となったのです」

「……マジかよ」

平家の話を聞いて、刻はそれしか言葉にできなかった。桜曰く戦前に建てられたというところが養成所だった、そんな場所を管理している会長は「エデン」とどんな関係があるのか……浮かぶのは疑問ばかりだが、それを全部ぶつけても答えは返ってこないと感じたのだろう。刻は驚きを表す言葉を口にするので精一杯だった。

しかし、平家の話を考えれば寧々音がここにいるのも不思議ではない。彼女自身、忘れていた彼女は元『コード・ブレイカー』。もしかしたら、彼女も現役だった頃には『渋谷荘』と関係があったのかもしれない。一方、その寧々音はというと……

「あー、大神君だー」

窓にへばりつき、外にいる大神（『にゃんまる』スーツ）を眺めていた。刻は一瞬、彼女の傍に行こうとしたが、やはり気持ちの整理がつかないらしく足が止まる。それを見た桜は、静かに寧々音の傍に移動する。自分が代わりに話を引き出そうとするかのよう

に。  
「寧々音先輩、大神が気になるのですか？」

「あ、桜ちゃん。あのね、寧々音は知ってるのー。大神君、最初はあれ着てる時ね、よちよち歩きしかできなかったの。でも、今は暗くなつてくると一人で外に走りに行つてるの。じゃんぶもね、ちよつとはできるようになったんだよ。……大神君、きつと強くなりたいの。すつごく、すつごく強くなりたいの。だから寧々音は応援してるのー」

そう言うのと、寧々音は再び窓の外を見て「頑張れ、頑張れ」と大神を応援し始めた。その姿を見たからか、それとも耳に自然と入ってきた寧々音の話を聞いたからか。刻はいつの間にか窓の傍に立ち、寧々音と同じように外にいる大神を眺めていた。

雨が強く降りしきる中、工具を手に持った状態で外を走る大神。すると、泥に足を取られて勢いよく転ぶ。スーツは汚れ、工具も散乱する。しかし、それでも大神はすぐに起き上つて工具を集める。そして、再び走り出していった。刻は見たことが無かった。ここまでする大神の姿を。彼が今まで見てきたのは……いや、見せられてきたのは、今

とは真逆の姿だったから。

「皆さん、彼が新しい『コード：06』です」

「……………」

「……………イラつくな」

彼が入った当初の偽名なんて覚えていない。なぜなら、どうしようもなく気に入らなかつたから。何も映っていないかのような眼、他人に無関心な態度、何をされても眉一つ動かさない表情……………その全てが。だから、特に深い理由もなく彼に洗礼を浴びせた。

「オレはな、テメーみたいに生気のねー野郎が一番キライなんだヨ……………」

「……………」

どんなに傷つけても、その表情は変わらなかつた。変わらず、死んだ眼をしていた。彼のその眼が……………どうしようもなく自分の心をかき乱した。

今の彼は……………その頃とは比べようもない変化をしようとしているように見えた。

「気になりますか？ 彼は入った当初、死んだ魚のような眼をしてましたからね。それが今ではここまで一生懸命に強くなろうとしている。……彼はこれから、どんな眼をするようになるのでしょうかね」

「……………」

回想に浸っていた刻の後ろから、平家が腕を組みながら話しかけてくる。刻は彼の言葉に応えようとはせず、ただ窓の外を眺めていた。しかし、それは急に終わりを迎えた。……ハツ、関係ねーよ。それに、あいつはまだ『コード：06』……下っ端だ。少しはやる気になって強くなってもらわねーとつまらねー。それに……」

そう言うと、刻は窓の傍から離れて歩き出した。平家の横を通り過ぎ、そして数歩進んだところで止まった。すると、刻はそのままの状態で、しかし強い意志を込めて言い放った。

「アイツがどんな眼に変わろうと、どんなに強くなろうと、何度闘<sup>や</sup>りあおうと……勝つ

のはオレだ」

彼はどうしようもなく気に入らない。だからこそ負けられない。彼が強くなると言うならば、自分はさらなる高みを目指す。『コード：04』として……絶対に。

「さて、それでは三週間も頑張った大神君の修業の成果を確かめてみようか」

「頑張れー、ろくばん」

「頑張るのだ、大神！ スーツ脱げてよかったな！」

「大神君、頑張るのー」

「……………」

その後、大神が屋根の修理から戻ると、会長はスーツを脱ぐように言った。修業の成果を確かめるためだ。しかし、当の大神は燃え尽きたボクサーのように俯いて座り込んでいる。無理もない。自分が『にゃんまる』スーツで修業していたことも知られ、それを脱ぐところもバッチリ見られたのだから。恥ずかしさは生徒会室であった羊事件以



上かもしれない。

(ププ……！ アイツ、今死ぬほど恥ずかしいんだろうナ……！)

「くつくつく……」

(……あとで何か奢ってやるか)

それを察してか、刻と平家は思いきりクスクス笑っていた。その様子を横で見ていた優は、さすがに大神が気の毒になったのか、彼に対する優しさが自然と浮かんでいた。

そんな中、会長は懐からメモリが書かれた計りのような物を取り出した。なぜか先端が『にゃんまる』の形をしているが、これで大神の修業の成果を確かめるのだろう。

「じゃーん、異能メーター。この目盛りが上がれば上がるほど、私の血が濃く塗ってある代物だよ。つまり、異能のパワーが強いほど、上の方に印を残せるということさ。ハイ、大神君」

「面白そーじゃん。それ、オレにもやらせろヨ」

「オレもやるし」

「では私も」

会長は取り出した異能メーターの説明を済ますと、大神に渡した。すると、刻たちもそれに参加し始めた。面白がっているようだが、彼らもこの機会に自らの異能のパワーを知っておこうと思ったのだろう。……ただ一人を除いて。

「あれ？ 優君はやらないの？ メーカーはたくさんあるから、やっても構わないよ？」

「……いえ、オレはやったところで弱いのは目に見えているので」

「トーゼンだな。『コード：07』のテメーなんてオレ様の足元に及ばねーだろうぜ。やるだけ無駄つてコト」

「……悪かったな」

ただ一人、不参加だった優に会長も声をかけるが、優は珍しくネガティブな発言で参加を断った。刻が嫌味を言いながら優の肩を組むが、優はそれを振り払って彼らから離れていった。

「じゃ、優君は藤原さんの目隠し係で。一瞬とはいえ異能を使うから一応ね」

「テメー、変なことしたらタダじゃおかねーからナ」

「するわけないだろ……。副会長、失礼します」

「んー、ゆう君の手で何も見えないのー」

唯一、不参加の優は寧々音に異能の存在を知らせないための目隠し係となった。彼女が元『コード：ブレイカー』とはいえ、今はただの女子高生。異能の存在を知らせる必要はないというわけだ。

「さて、と。それじゃ準備もできたし始めようか。メーカーを握ったら、握ってる手に

異能を集中させてね。それじゃ……スタート！」

「……………」

会長がスタートの合図をしてすぐ、四人は一斉に異能を出す。メーターには会長の血が塗られているため、異能を受けても損傷はなく、きちんと量られていた。終わったのを確認すると優は寧々音の顔から手を離し、結果が見れるようにした。その結果は……

「……………お、大神が一番下!？」

結果を見た桜が思わず眩く。メーターを見てみると、大神は「15」、刻は「24」、遊騎は「30」、平家は「36」と『コード・ナンバー』順に並んでいた。この結果を見て、刻はまた笑い始めた。

「ハハハ！ やっぱ『コード・06』は下っ端だな！ これじゃ修業の意味も無しつか！」

「…………いや、意味はあるよ」

「ハハ…………ハ？」

大神が一番下という結果に、刻は修業の意味すら否定する。だが、確かに三週間という期間、死に物狂いで修業を行っても、異能のパワーはどう見ても一番下。これでは修業は失敗したと思っても不思議ではない。だが、会長は大神のメーターを見て、その言葉を否定した。その証拠に彼はある物を取り出した。

「これは三週間前に大神君が使ったメーター。こつちの目盛りは『14』。でも今回は『15』…………ちやんと『1』上がってるんだよ。つまり、修業の成果はあったということ」

「う、嘘ダロ…………!? あんな体力強化ごときで…………!?」

「いかにも、私の研究に間違いはないのだよ」

三週間前に計ったという大神のメーター。見ると、確かにそれは「14」となっていた。つまり、会長の言うようにこの三週間の修業によって大神の異能のパワーは「1」上がったということになる。刻は信じられないという顔をしていたが、会長は「どうだ」と言わんばかりに胸を張っていた。

だが、それでも大喜びできるほどのことでもないように感じる。それは平家も感じていたらしく、それを疑問として口にした。

「しかし会長、『I』ですよ？ パワーアップとは言えないのでは？」

そう、「I」なのだ。いくら上がったといつてもたつたの「I」。とてもじゃないが、平家の言う通りパワーアップというには程遠く感じる。だが、会長は動じることなく言葉を返してきた。

「平家君、君もまだまだだね。たかが『I』……されど『I』なんだよ。この『I』こそが、大きな大きな異能パワーアップへの小さき一歩なんだよ」

「……………」

会長の言葉を聞きながら、大神は左手にグツと力を込めて握りしめる。そこから確かに感じる自分の成長を確かめるかのように、自らが歩み始めた強くなるための道を確信したように。

「さて、大神君。これで基礎は終了だよ。そろそろ次の段階を始めよう。……私も、本気を出させてもらうよ。先に言っておくけど、手加減はしない」

「……望むところだ」

「良い覚悟だね。なら、さっそくいこう……」

基礎を終え、ようやく本格的な修業を始められる段階に入った大神。会長は自らも本

気を出すということを伝えるが、大神も臆することなくそれに答える。基礎が終わったばかりでも関係ない。時間は限られている。会長は休む間もなく、その本気を見せてきた――！

「はい！ 今日石狩鍋だよ！ 手加減無しの本格派だから美味しいよ！」

「飯かよ……！」

修業に入るかと思いきや、いつの間にか用意していた鍋を披露する会長。鍋の登場に一部の者は盛り上がるが、すっかり修業する気だった大神は苛立ちを露わにしながら会長を睨みつけた。盛り上がる者たちと文句を口にする者……それぞれ違えど、『渋谷荘』では盛り上がった食事が開こうとしていた。

「……………」

だから、彼らは気付いていなかった。『渋谷荘』の外……塀の外側に彼がいることを。敵……『Re—CODE』が一人である雪比奈がいることに。

雨は……まだ上がる気配は無い。

## code : 37 癡痕に刻む

降り止まぬ雨の中、『渋谷荘』では会長特製の鍋が振る舞われていた。

「いかにも、完成したよ。石狩鍋エビ天入り」

「なんで石狩鍋にエビ天が入ってんだヨ……」

「……ま、会長流のアレンジなんだろう」

刻の呆れたツツコミに対し、優が悟ったように呟いた。そんな彼らに対し……

「うむ、やはり会長の鍋は最高なのだ」

「鍋にうどん……そしてエビ天。さすが会長、デリシャス☆コラボレーションです」

「石狩うまいわー」

それぞれ鍋を口にしながら感想を口にする桜たち。彼らにしてみれば、そんなことはどうでもよいことらしい。それを見て、刻たちも気にしてもしようがないと感じ、鍋について気にするのをやめた。

しかし、彼らは別のことが気になり始めた。鍋ではなく、その周りにいる者についてだった。

「……んで、テメーはいつまで沈んでんだヨ」

「……………」

刻の視線の先……そこには桜たちと少し距離を置いて俯いている大神がいた。どうやら、まだ『にやんまる』スーツの件が頭にこびりついているらしい。

「つたく、メンドクせ。気にしすぎだっつ」

「お前、あれだけ笑つといてよく言えるな」

「知ーらね」

優の言葉に対し、刻は平然と顔を背ける。その様子を見て、優はため息をついてから他の者たちと同様に鍋を口に始めた。

「ねーねー、ゆー君。寧々音、おうどん欲しーの」

「ああ、わかりました。……はい、どうぞ」

「ありがとーなのー」

優が鍋を口にしてしていると、急に寧々音が隣にきた。そして、服の裾を引つ張ったかと思ふと優に用事を頼み始めた。優は特に気にする様子も無く、素直に応じた。

寧々音は取り皿を受け取ると、夢中でうどんを食べ始めた。

「……………」

ふと、その様子を遠くから眺める刻。その眼には、どこか悲しそうな色が宿っていた。歳相応とは思えない幼い様子の寧々音。今の彼女は知らないが、彼女は刻にとって大切



な姉。そして、かつての『コード：ブレイカー』である。  
そんな彼女との悲しき思い出が、刻の中では繰り返されていた。

「ね、寧々音ええええ！」

目の前で飛び散る真っ赤な鮮血。その鮮血の元は彼にとって良く知る人物。自分とよく似た顔つき、同じ髪色と金銀妖眼ヘテロクロミアの眼。まだ幼き彼……刻の姉である寧々音だった。

「おい、寧々音……！ しっかりしろよ、オイ……！」

「……………」

揺すつても、呼びかけても寧々音は答えない。口元は動かず、眼は閉じられ、彼女から流れる鮮血は嫌な温かさを感じさせた。しかし、それに対して彼女の身体はどんどん冷たくなっていった。

そして、それ以上に冷たい眼を彼らに向ける者がいた。

「……………」

顔はフードを被っているため見えない。見えるのは近くに癍痕が刻まれている眼。その者はなにも言わず、ただ彼らを見下ろしていた。

「…………お、お前ー！ お前が、お前がああー！」

刻は身体を震わせながらも自分を見下ろす者に向かっていった。込められるだけの力を込め、握り拳を振るう。しかし、幼い子どもである彼の拳はあまりにも無力だった。

「うわー！」

その無力な拳が何度か振るわれた後、癍痕の人物が刻を払いのける。刻はそれに耐えられず、勢いよく倒れる。全身から痛みを感じるが、彼はそれに屈するわけにはいかなかった。

「く、くそ……………」

刻は痛みを耐えながら、再び立ち上がろうと全身に力を込める。すると、彼の頭上から無情な声が降り注いだ。

「この女はお前の代わりに死んだ。…………お前は殺さん。弱き者は殺す価値なし」

「……………」

無力だった。その時の彼は、斃れる姉を救うことも、姉の仇を討つこともできないほど無力だった。そして、彼の中では癍痕の人物の言葉が何度も繰り返され、彼はそこか

ら動くことができなくなった。

この時、彼は最愛の姉を失い、自らの無力を感じ、命を懸けても斃すべき敵を見つけた。

「……………」

目の前で無邪気に振る舞う寧々音<sup>姉</sup>。しかし、その姿は彼女の過去を知る者にしてみれば、どうしてもかかつての彼女と比べてしまう。それほど、今の彼女とかかつての彼女は違っていた。

「ちよつと一服してくるワ。灰皿、借りてくぜ」

自分の中で蘇った悲しき記憶を振り払うためか、それとも寧々音から少し離れて冷静になりたかったのか。どちらかはわからないが、刻は灰皿を持って部屋を出ようとした。

だが、それと同時に『コード：ブレイカー』全員の表情が変わった。

『――！』

感じた。

その場にいた『コード：ブレイカー』全員がある気配を感じ、部屋の雰囲気はがらりと変わった。今までの平和な雰囲気とは違い、敵を前にしたかのような静けさに包まれた。

そう、彼らが感じたのは敵の気配。それも、生半可な実力の相手じゃない。相当の実力を持つ敵が近くにいるということを、彼らは感じていた。

(この感じ……間違いねエ……！)

その中で一人、刻のみが確信に似た何かを感じていた。彼はかつて感じたことがあった。この敵が発する気配を。その記憶が言っていた。斃すべき敵がすぐそこにいる、と。

「……オレが行く。誰も手エ出すなヨ」

「と、刻君？ それにみんなまで……一体どうしたのだ？」

刻は灰皿を置き、簡潔に言葉を済ませるとそのまま外に向かつていった。未だ状況がわからない桜は頭に疑問符を浮かべているが、その疑問に答えを差し伸べようとする者はいない。彼女のことだ。敵がいるなど教えたら戦わないよう説得するはずだ。しかし、状況を考えればそうはいかない。特に、刻にしてみれば。彼以外の『コード：ブレ

イカー』たちもそれを察し、あえて何も言わないのだ。

「マグネス、お出かけなの？　いってらっしゃいな。早く帰ってきてね」

そんな中、寧々音のみが刻に近寄って声をかける。闘いに赴く彼を鼓舞するような、彼の安全を願うような……彼女にしてみれば、深い意味は無いと思われる言葉。しかし、刻にしてみればその言葉は、何よりも力になるものだった。

「……ハイ、藤原サン」

彼女に微笑み、刻は改めて覚悟を決めた。そして、未だ雨が降る『渋谷荘』の外へと歩き出した。

「……………」

雨の中、傘もささずに『渋谷荘』を眺める男。しっかりと被られたフードから覗く褐色色の肌。『Re—CODE』が一人である雪比奈……彼はただ黙って『渋谷荘』を眺めていた。攻撃する様子も無く、ただただ黙って。

「…………雪」

そんな彼に近寄り、愛称で彼を呼ぶ一人の人影。瞬間、今まで雨に濡れていた雪比奈に雨が降らなくなった。止んだのではない。雪比奈と人影の周囲にだけ雨が全く降らなくなった。見ると、人影の周囲に見えない膜のような物があり、それが雨を弾いていた。

声をかけられた雪比奈は、特に表情を崩すことなく淡々と口を開いた。

「なぜ、あなたがここに？ 癡痕の『Re—CODE・03』……破壊神と呼ばれるあなたか」

「……………」

癡痕の『Re—CODE・03』。それは、刻にとつて宿命の相手。かつて、寧々音を殺した……彼女の仇。癡痕の『Re—CODE・03』と呼ばれた人影はコートのフードを深く被り、顔を見ることはできない。しかし、その左目周囲に刻まれた癡痕はしっかりと確認できた。彼は黙って雪比奈を見ると、静かに口を開いた。

「『捜シ者』が『渋谷荘』にはまだ手を出すな、と」

「それを伝えるただけに、あなたがわざわざ？ あなたらしくない。あなたはもう『コード：ブレイカー』にも『渋谷』（着ぐるみ）にも興味がなかったのでは？」

「……………ただの散歩だ。帰るぞ、雪」

あくまで散歩のついでに『捜シ者』からの伝言を伝えたという癡痕の『Re—COD

E:03』。それを彼らしくないと雪比奈は言うが、彼は真意を語らずにそのまま歩き出した。

瞬間、周囲の鉄材が小さく揺れ、一人の少年が彼らに声をかけた。

「待てヨ。ようやく会えたんだ。そう簡単に帰すわけにはいかないヨ……癡痕の『Re—CODE:03』サン」

雨の中、塀に寄り添って立つ刻。彼は探し続けてきた敵を目の前にし、猛る気持ちを抑えてその場にいた。しかし、そんな彼に対して癡痕の『Re—CODE:03』は静かに答える。

「……誰だ。初対面の相手に名も名乗らぬとは無礼な奴だな」

「な……」

刻に背を向けたまま、自分と刻は初対面だと言う癡痕の『Re—CODE:03』。その言葉は、確実に刻が抑え込んでいた気持ちの蓋を開き始めた。

「デメエ……しらばつくてんじやねーぞ！ オレと同じ眼をした『コード:ブレイカー』を殺したこと……忘れたとは言わせねえぞ！」

「……悪いが、覚えがないな」

最初に比べ、荒さが増した刻の言葉を受け、癡痕の『Re—CODE:03』は足を止めた。しかし、彼は変わらず静かに「覚えがない」と言う。そして、彼は首のみを動

かし、その癍痕が刻まれた鋭き左目で刻を見た。

「自分より弱き者に興味はない」

「——！」

その言葉が、刻の気持ちの蓋を完全にこじ開けた。

「ふざけんな！」

——ゴォー！

今まで押し止めてきた感情を全てぶつけるかのように、怒号と共に刻は異能を解放した。『磁力』で周囲の鉄材を操り、何の容赦もなく背中を見せている癍痕の『R e — C O D E : 0 3』にぶつける。だが……



——バキィ!

「なに!？」

勢いよく放たれた鉄材は癡痕の『Re—CODE:03』の身体に届くより前に、音を立てて折れ曲がっていった。というより、彼の周囲に何かがあり、その硬さに耐えられずに変形しているようだった。おそらく、それこそが癡痕の『Re—CODE:03』の異能であり、自分の周囲をあらゆるものからガードしている。降りしきる雨も、自分に向かつて放たれた鉄材も。

「……下らん遊びに付き合うつもりは無い」

「遊びかどうかは……コイツを喰らってから考えな—」

瞬間、癡痕の『Re—CODE:03』の足元から何かが現れた。銀色に輝く液体状の何かは、癡痕の『Re—CODE:03』をあつという間に包み込んだ。一瞬のことだったが、雪比奈はその何かの正体についてすぐに結論を出していた。

（あれが仙堂を斃したという、水銀を用いて自由自在に操る『コード:04』の最強兵器……汞か）

そう、刻が使用していたのは仙堂を斃した際に使用した汞だった。仙堂と戦った時は最後の最後まで使わなかった汞を最初から使ったということは、それだけ彼が本気だということが伺える。

「いくぜ……！ テメエはこれで……ねじ切つてやる！」

そう言うと、刻は癩痕の『Re—CODE：03』を包み込んだ汞を操り、硬度を上げてその面積を一気に小さくした。これは、自分を取り囲む360度の鉄の壁が一気に迫りくるようなものであり、普通ならば押しつぶされるなり全身がねじ切れてしまう。

しかし……

——パァン！

「なっ!？」

勝負がついた、と刻が思った瞬間だった。突然、破裂音が響いたかと思うと汞が弾け飛んだ。突然のことに刻は眼を見開くと、驚くべき光景がそこにはあった。

「……………」

「無傷……だと……!？」

そこには、自分が着ていたコートもろとも汞を弾き飛ばしたのか、素顔が明らかに なった癩痕の『Re—CODE：03』の姿があった。そして、だからこそわかる。彼

が……まったく傷を負っていないと。

癍痕の『Re—CODE：03』の姿は、まさに静かな実力者という印象だった。白シャツに黒の上着とズボン、ライオンの鬚たごみを思わせるような髪型、そして……獣の如き鋭き目と左目に刻まれた癍痕。ついに明かされた寧々音の仇の正体だが、刻はそれよりも汞を使っても傷つかない彼の實力に圧巻されていた。そして、それはすぐに自らの身体でも味わうことになった。

「遊びは終わりだ」

——ビュオ！

「ぐああー！」

一言、それが刻の耳に届くと同時に身体に激痛が走った。何をされたかはわからない。だが、激痛と溢れ出る血でわかる。自分は……攻撃されたのだと。

（嘘ダロ……。いつだ、いつ攻撃された……。？ いや、それよりどうやって攻撃した

……。？ 見えないガードに見えない攻撃……。アイツの異能は何なんだよ……。!?）

防御も攻撃も、何もかもわからない癡痕の『Re—CODE：03』の異能に思案を巡らせる刻だったが、どうしてもわからない。異能がわからなければ対策や戦い方も考えようがなく、わかっている時と比べると戦いやすさはまったく違ってくる。ただでさえ実力に差がある相手のため、異能の正体を知れば少しは勝機が見えるはずだった。しかし、その相手から無情な言葉がかけられた。

「これで力の差はわかつたはずだ。早く去れ。力の差をはき違えれば待っているのは死のみ」

「ふ、ざけんなよ……誰が、この程度で……」  
「……わからんか」

諦めるような言葉をかけても、刻は諦める様子を見せない。当然だ。長年追い続けてきた因縁の相手なのだ。一度や二度、攻撃を受けたり攻撃が通じなかっただけで諦められるはずもない。しかし、それに対して癡痕の『Re—CODE：03』はもう刻のことは見ていなかった。刻を見ることも無く、静かに現実を突きつけた。

「もう終わった、お前は殺さない。……弱き者は殺す価値なし」

「——ッ！」

それは、かつて寧々音を殺された時にもかけられた言葉。自らの無力さを噛み締めさせられた……あの時と同じ。

「黙れ！」

過去に受けたものと同じ言葉に激昂する刻。鉄材を放ちながら癡痕の『Re—CODE・03』に向かっていく。全身の痛みも何もかもを無視して。しかし、現実には冷たかった。

「無駄だ」

「ぐはっ！」

鉄材もろとも、刻は正面から見えない攻撃を受ける。鉄材はバラバラになり、刻は攻撃に耐えられず後方に飛ばされた。飛ばされた先にあつた壁にぶつかったものと全身のものという二つの激痛が刻を襲う。しかし、それでも彼は諦めようとはしなかった。

「うう……うおおおおお！」

三度、癡痕の『Re—CODE : 03』に向かっていく刻。しかし、結果は同じだった。見えない攻撃を受け、全身に激痛が走り、大量の鮮血が流れる。

だが、それでも彼は諦めなかった。

「ま、まだだ！」

何度も

「うらあああ！」

何度も

「ハア、ハア……うあああああ！」  
何度でも……向かっていった

「がは……………」

何度も攻撃を続けては攻撃を受けていた刻だったが、とうとう続いていた攻撃が止まった。彼はおびただしいほどの血を流しており、もはや意識を失っても不思議ではないレベルだ。一方、癡痕の『Re—CODE:03』はまったくの無傷。傷どころか、服には汚れ一つついていない。刻は今まで、彼に触れることさえできていなかった。

「……………いい加減にしろ。勝機が無い相手に向かったところで命を縮めるだけだ。ましてや、お前のように無作為に突っ込むだけならなおさらだ」

攻撃の手が止んだ刻に対し、癡痕の『Re—CODE:03』は振り返ることも無く言葉をかける。彼にしてみれば、本当に殺す気は無いのだろう。ただ、向かってくる以上は相手をしているだけにすぎないのだ。でなければ、ここまで諦めさせようとはしないはずだ。

「……………」

一方、刻もとうとう精神的にも限界が来ているのか俯いたまま言葉が発しようとしていない。二人の間には、未だ降りしきる雨の音だけが響いた。

そして、刻からの返事が無いことを感じると、癡痕の『Re—CODE:03』は再

び歩き出した。それに合わせて雪比奈も歩き出す。これで終わり……誰もがそう感じた。

「……『風』、だろ？」

「なに……？」

ポツリと呟かれた刻の言葉に、癍痕の『Re—CODE：03』はその足を止めて刻の方を見た。すると、彼は密かに笑みを浮かべていた。希望を見つけた……そう言いたげに。

「ずっと見覚えがあつたんだ……アンタの見えない攻撃。何度も喰らってようやくわかったぜ……。あの時に見た……『Re—CODE：07』の風牙と同じ攻撃だつてな」



風牙……優が研究所で斃した『Re—CODE:07』の異能は『風』。彼は『風』を凝縮させて刃の如き破壊力を持った『風』をぶつける『鎌鼬』という技を使って優を苦しめた。それをずっと見ていた刻は覚えていた。そして、癡痕の『Re—CODE:03』の攻撃がそれと同じものだと感じたのだ。

「……ま、同じ『風』だとは思っちゃいないさ。同じ異能を持つなんて普通はあり得ねーからナ。それでも、似たような異能だつてことはわかつたんだ。今まで通りには——」

「愚かだな」

その言葉は、癡痕の『Re—CODE:03』からではなかった。彼の傍にいた雪比奈……彼からの言葉だった。彼は相変わらずの無表情だったが、その目からは愚か者を見下ろす冷たい感情が見えた。

「この人の異能があつた風牙と同列だとしても言うつもりか？ 勘違いも甚だしいな。異能の特性上、似ていると思う部分はあるだろう。だが、この人と風牙では比べ物にならない。別格などという言葉も生ぬるい。言うなれば、別次元の異能だ」

「別次元、だと……」

淡々と語られる雪比奈の言葉を聞きながら、刻は雪比奈を睨みつける。自分としても絶対の自信は無かつた考えだったが、ここまで否定されればいい気はしない。

すると、雪比奈は決定的な一言を時に向かって告げた。その氷のような視線を向けながら。

「元々、異能力の差も大きい。だが奴の……風牙の異能など、所詮はこの人の劣化版に過ぎん」

「な……………」

風牙の『風』を劣化版と言い切る雪比奈。異能の相性が悪かったとはいえ、優をギリギリまで追い詰めた風牙の異能をそこまで言うということは、それだけ癍痕の『Re—CODE:03』の実力は圧倒的だということだ。その事実には、刻は思わず目を見開く。すると、今まで黙っていた癍痕の『Re—CODE:03』が口を開いた。

「もうやめろ、雪。確かに奴は『捜シ者』が余興として選んだ仮初の同志。真の同志ではなかったとはいえ……これ以上、死者を愚弄する必要はないだろう」

「……………」

その言葉を受け、雪比奈はその口を閉じた。癍痕の『Re—CODE:03』は風牙を「仮初の同志」と言ったが、それでも彼にとつては「同志」には違いないのだろう。戦いに死んだ風牙に敬意を表している。だからこそ、雪比奈の言葉を止めたのだ。

「見苦しいところを見せたな。だが、もうわかったはずだ。お前はオレには勝てん。……お前にも親や兄弟がいるだろう。その者たちを大事にして暮らせ。そんな生き方

もいいものだ」

「……………」

その言葉に、刻の中で今までのことが次々と浮かび上がってきた。

『コード・ブレイカー』になり、父親は父親から主になり、自分はそれを守る番犬となった。

『コード・ブレイカー』になり、姉の中から自分の存在は消えた。

『コード・ブレイカー』になり、本当の名前も捨てた。

『コード・ブレイカー』になったからこそ……全てを捨てた。そうなることを覚悟していた。

だが、それはずっと一つのことを目指したからこそ。たった一つ――

「この女はお前の代わりに死んだ。……お前は殺さん。弱き者は殺す価値なし」  
——全ては

「……つぎけんな。今のオレには、そんな生き方なんて残っちゃいねーよ……。全て捨てたんだ……。何もかも全て……。ただ一つ……。……。テメエをぶつ殺すためにだアアアア！」

思いの全てを乗せた刻の拳が放たれ……。止まった。  
「ぐ、が……」

瘢痕の『Re—CODE・03』に届くより前……。彼の異能によって刻の全身が止まった。『風』に似た何かは刻の全身を押さえつけ、ミシミシと骨を軋ませる。その状態の刻

に対し、癡痕の『Re—CODE : 03』は振り向きもせず、静かに言葉を告げた。

「……………何度も言ったはずだ。死ぬ、と。なぜ、そこまでする?」

「……………ひと、つ」

癡痕の『Re—CODE : 03』の問いに、刻は全身の軋みを感じながらも声を振り絞った。そして、その思いの丈をぶつけた。

「キズ一つ……………テメエの、身体に刻み込まなきゃ……………オレの中で、次は無エ……………。例えば死ぬことになったとしても……………命なんて、とうの昔に捨てた……………」

「……………お前、名は?」

「……………今の、オレの名は……………刻むと書いて……………『刻』だ」

「……………」

刻の、文字通り命懸けの言葉を受け……………彼はついに動いた。

「憶えておこう。オレの名は虹次<sup>こうじ</sup>。お前の覚悟に応え、オレの本気で滅してやろう」

癡痕の『Re—CODE : 03』……………虹次は振り向き、その手を刻に向けた。同時に、

刻を自らの異能から解放し、彼の覚悟に、自らも応えたと宣言した。

「バカ、だな……。まだ……。終わってねえって言っただろうが！」

「あ……………」

「……………見事だ。その姿でまだ立ち上がってこられるとは天晴れ」

刻の首を片手で掴み、彼の身体を空中で支える虹次。すでに、刻は力を使い果たして  
いた。

刻の最後の攻撃……………敵の頭部を両手で挟み、両手から強力な『磁力』を発して頭の血液を加速し爆発させる必殺の技である『高磁界』。どんな人間でも生き残れはしないこの技を虹次に使った刻だった。しかし、それすらも虹次には通用しなかった。

「お前の最後の技……………確かに普通の人間なら死んでいた。だが、オレには通じぬ」

もはや絶望的だった。何をして、どんな技を使っても……………虹次には勝てない。それどころか、傷一つすら刻み込むことはできない。彼の強さは……………もはや別次元だった。刻は力を使い果たし、首を掴まれている以上、いつでも命を摘まれる。何もできない。

そう感じていた……はずだった。

「——プツ！」

突然、刻が何かを口から吐き出した。見ると、それは歯だった。おそらく、虹次の攻撃を受けていた中で取れたのだろう。しかし、よく見るとその歯には微量の血液がついていた。刻のもの……かとも思ったが、口に含んでいた時に血など舌に付着して取れてしまふだろう。なら、この血は誰のものか。

答えは、簡単だった。

——っ……………

虹次の頬に血が流れる。見ると、彼の頬には真新しく刻まれた……一筋の傷。それは間違いなく、刻が刻みつけた傷だった。

「へへへ……キズ、一つ……目」

「……いいな。良い覚悟だ、刻。オレが滅すに値する男だ——！」

瞬間、虹次の手刀が刻の身体を切り裂いた。

## code : 38 真の主

「ええかげんにせえ！」

『渋谷荘』の中に遊騎の怒号が響く。その視線は目の前にいる一人の人間に向けられていたが、突然の怒号に対象以外の者たちも彼らに視線を向ける。

「なんで、よんばん助けに行つたらあかんねん……！ にばん……お前はどんだけ冷たいんや！」

「……………」

視線と怒号を向けられている対象……平家は遊騎の迫力を前にしても、静かに目を伏せていた。事の発端は少し前の出来事だった。

桜や寧々音など普段は戦うことなど無い二人を除いた、『コード・ブレイカー』と会長は外で何が起こっているのが心配で感じる事ができた。つまり、彼らは知っていた。今、この『渋谷荘』の外で刻がどのような状態であるのか。

だからこそ、遊騎は刻を助けに向かおうとした。だが、平家がそれを断固として止めた。彼らがいがみ合っている原因はそこだ。

「なんとか言えや！ よんばんが死んでもええんか!？」



我慢できない、と言いたげに遊騎は平家の胸倉を掴んで壁に押し付けた。すると、今まで目を伏せていた平家は視線を上げ、鋭い視線を遊騎に向けた。

「……あなたもわかつているはずです。刻君も我々も『コード：ブレイカー』。ならば、自分で裁くと決めた『悪』は自分一人で裁くべき。我々が手を出していいことではありません。……それに、もし刻君が死んだとしても、代わりを補充するまで。今までの『コード：ブレイカー』と同じように」

それは、刻が仙堂と戦った時も、優が風牙と戦った時にも聞いたこと。『コード：ブレイカー』である以上、他者の助けは借りない。ましてや、自らが裁くと宣言した相手ならばなおさら。非情と感じる平家の言葉だが、それこそが『コード：ブレイカー』である者の宿命ということなのだ。

「にばん……やっぱお前、大嫌いや……い」

「それは残念ですね」

そして、それは遊騎として心のどこかでわかっていることだった。自分たちは、それが承知で『コード：ブレイカー』となる道を選んだ。だから、もし平家の言うように自分が死んで変わりが補充されたとしても文句は言えない。言えるはずもない。それは、彼らの言葉を聞いている大神と優も同じこと。だからこそ、彼らは二人を止めたりしない。

しかし、その中においても状況が理解できていない者もいる。

「ふ、二人とも……さつきから何を物騒なことを……」

桜である。彼女は今まで結果的に多くの戦いに巻き込まれてきたとはいえ、気配で外  
の状況を察することができず、『コード・ブレイカー』の宿命も完全にわかっ  
ているわけでもない。だから、彼女は目の前で起こっている遊騎と平家のやり取りに不  
安を感じることにできず、いなかっただけ。

「なぜ急に刻君が死ぬなどと……刻君はただ外に行っただけで——」

ふと、彼女の視線が窓の外に向けられる。そして彼女は……見た。

「——ツ!？」

気配で判断することはできない。だが、その眼で見たことならば誰でも判断はでき  
る。外を見たことで彼女も知った。今の刻の状況……状態を。

「と、刻君!」

ほとんど反射に近い行動だったのだろう。彼女は瞬間的にその場を離れ、玄関まで向  
かかっていった。そして、彼女が離れたことで他の者たちも動かざるを得なくなる。

「『にゃんまる』！ オレも行くぞ！」

「桜小路さん!」

「……優君」

「わかっていきます……！」

桜に続くように遊騎と大神、優も平家の言葉を受けながら向かっていく。遊騎は純粹に刻を助けようとしたにすぎないだろう。だが、大神と優は少し違う。『渋谷荘』の鍵キを巡るいざこざは一段落したとはいえ、桜が鍵キを持っている以上、桜を護衛するという仕事は行わなければならない。大神は珍種の観察のため、と言うだろうが、少なくとも優はそのために動いていた。

「——刻君！」

そして、そんな事情は知らずに単身で外に向かった桜は……残酷な現実を目の前にした。

「……………」

「……………あ、う……………」

そこにあつたのは、虹次敵に首を掴まれ、全身からおびただしいほどの血を流し、声にならない声を出そうとする刻の変わり果てた姿だった。

「う、う……うわああああ!!」

勝機など無かった。自分一人でどうこうできるなどとは思ってもしなかった。それでも、身体が勝手に動いていた。心が「行け」と警鐘を鳴らしていた。桜は、拳を握りしめて虹次に向かっていった。

「……ふん」

——ブン!

「——ッ! 刻君——ぐっ!」

虹次は横目に桜の姿を確認すると、その桜に向かって刻を放り投げた。桜は反射的に拳を開き、全身で刻を受け止める。勢いと刻の重みで泥の上に尻餅をつき、刻の血が自らの身体にも付いたが彼女はまったく気にしない。すぐに刻の意識を確認し始めた。

「刻君! しつかりするのだ、刻君! 刻君!」

「よんばん……」

「あいつ、こんなになるまで……」

遅れてやってきた遊騎たちは、気配で感じていたとはいえ実際に見るのとはやはり違う。予想以上にボロボロの刻の姿を見て、思わず立ち尽くしていた。

「ななばん……異能使ったら傷治すの早くできるんやろ？ 早くよんばんに——」

「……無理だ。あそこまで重症だと、『東脳・反転』レベルの強化をしないと焼け石に水だ。『東脳・反転』レベルの強化はオレ自身ならなんとかなるが、他人に行うのは危険すぎる。最悪の場合、脳細胞が完全に死滅するかもしれない……。これはもう、刻の気力の問題だ……！」

遊騎は優に刻を助けるよう言うが、優は自らが行える治療を危険と判断してそれを断念していた。自らの無力さを噛み締めるように、その拳を握りながら。桜の護衛のために出てきたとはいえ、彼自身が刻に何の感情も抱いていないわけではない。表に出さなかったとはいえ、やはり彼も刻のことをずっと気にしていたのだろう。

だが、たった一人だけ違っていた。たった一人……大神は刻を見下ろしながら静かに口を開いた。

「……生命よりも大事な覚悟。そのために死ぬるんだとしたら本望だろう」

生命よりも大事な覚悟……それはかつて、大神が人見に向かって言った言葉を桜の中に甦らせた。

「……オレは、生まれてくる場所は選べないが死に場所は自分で決める。だからオレは『コード：ブレイカー』になった。オレは生きている限り悪を燃え散らす……。最期の一分一秒まで……」

大神にとつて、「悪を燃え散らすこと」こそ生命よりも大事な覚悟であり、自分が死ぬその瞬間までその覚悟を貫こうとしている。それが、刻にとつての今であった。全てを捨てても、寧々音の仇を斃す。その仇と対峙し、圧倒的な力の差の中で傷を刻んだ。刻が……覚悟を貫き通した証である。

だが、だからといって死んでもいい、などという理論は桜の中には存在しなかった。

「……違う。死に急ぐことが覚悟ではないだろう！」

「……………」

刻を受け止めながら、真つ直ぐな眼で大神を睨む桜。だが、それに対して大神は彼女の眼を見ようとはしない。ただ変わらず……その伏せられた視線は刻に向けられていた。そして……

「……だがな、刻！」

「なっ!?!」

突然、大神は刻のネクタイを引つ張り、その体を無理やり起こさせた。全身に力が入っていない刻はネクタイ一本で支えられ、反り返ったような状態になっている。しかし、大神はそんなことに構おうとはせず、そのまま言葉が続けた。

「オレはテメエにボコられた借りを百倍にして返さなきゃならない……！ わかったら、こんなところで死んでないでさっさと起きろ！ どうせ死ぬんだったら……オレが借りを返してから死ね」

「ろくばん……」

（大神……お前、本当は刻のことを……）

珍種の観察、桜の護衛……彼が出てきたのはそのためだけだと思っていた。だが、今の言葉を聞いて優は確信した。彼も自分と同じように、表に出さなかつただけで刻に何の感情も抱いていないわけではなかつた。やり方や言葉は乱暴だとしても……彼の言葉は刻に「生きろ」と言っているのと同じだつた。

そして、その乱暴な言葉はゆっくりと彼を動かすことになった。

「…………う、るせえぞ、『コード：006』 下っ端……………！ また、ボコられてーか……………！」

「と、刻君！」

傷ついて動かない手を動かして強気に大神を指差し、限界が近いというのに普段と変わらない挑発染みた笑みを浮かべる。刻は、いつもと変わらぬ強気な姿を再び見せた。

「…………ふつ。どいつもこいつも身勝手に粗暴…………その信条は十人十色ということか」  
すると、今まで黙っていた虹次が静かに口を開く。彼はそのまま大神たち『コード：ブレイカー』を見渡し、その口元に笑みを浮かべる。

「なるほど、中々に面白い連中だ。お前ら二人…………最近の『コード：ブレイカー』も捨



てたものではないということか。……だが、まだまだだ。昔の『コード・ブレイカー』はもつと強かった」

「ふざけんな……！ オレはまだ……！」

「刻君！ もうやめるのだ！」

もう戦う気は無いとでも言いたげに悟ったような言葉を口にする虹次に対し、刻は再び立ち向かおうと闘志を燃やす。だが、桜は彼を押さえ、それを阻止しようとする。その姿を見て、虹次はさらに言葉を続ける。

「……刻。その娘の言う通り、死に急ぐことが覚悟ではない。いいか、これだけはよく覚えておけ。若き『コード・ブレイカー』たち」

そう言うのと虹次は大神たちを見渡し、まるで彼ら全員に言い聞かせるように言った。

「覚悟とは生きてこそ貫き通せるもの。……強くなれ、刻。お前はまだまだ青い。その生命、次に会う時まで預けておく」

「待てや！」

「オレたちが逃がすとしても——！」

刻に、『コード・ブレイカー』に言葉をかけた虹次に対し、大神と遊騎は彼を逃がすまいと戦闘態勢に入る。だが……

「やめろ」

「ななばん!？」

「いかにも、君もだよ」

「会長……!？」

刻の代わりに戦おうとした二人を、優といつの間にか外に出てきた会長が止める。それを見ると、虹次は彼らに背を向けて歩き出した。それに続きながら、今まで黙っていた雪比奈が静かに眩く。

「賢明ですね、『渋谷』<sup>着ぐるみ</sup>、そして『コード：07』」

「今日の散歩はお終いだ。そして、来るべき時が来るまでお前たちにもう手は出ささん……それと、最後に一つだけ教えてやる」

瞬間、虹次と雪比奈の姿が大神たちの前から消えた。巨大な風が二人を包んだかと思うと、次の瞬間には二人の姿は無かった。代わりに、虹次の声が空間に響いた。

「オレの異能は『風』ではなく、『空』<sup>くう</sup>。全てを切り裂き、全てを潰す」

『空』……それが虹次の異能。だが、それがわかったからといって、肝心の虹次の姿はもう無い。彼の言葉を信じるならば、再び彼と対峙するのは「来るべき時」だけ。つまり……それまで刻は仇を討つ機会は無いいことになる。

「ふぎ、ふぎけんなテメエ！ 戻ってこい……！ オレはテメエを——！」

「マグネス……」

「ツ……………！ 藤原、サン……………」

仇を討つ機会を逃した……………そのことに激高した刻だったが、救急箱を抱えて外に出てきた寧々音の姿を見て、一気にその勢いは無くなっていく。彼女に今の傷だらけの姿を見られて心配された以上、これ以上の心配をさせるわけにはいかないのだろう。そして、刻が落ち着いたところで会長が安心したように息を洩らす。

「……………引いてくれてよかったよ。はつきり言つて、ここにいる中では平家君しか『Re | CODE』相手に勝機を見出せないだろうからね」

「お、大神たちでは勝機を見出せない……………？ そこまで強いのですか……………？」

「……………強えよ」

無情な現実を告げる会長の言葉に息を呑む桜。すると、その強さを垣間見た刻が噛み締めるようにボソリと呟く。そして、彼が感じた絶対的な壁についても口にした。

「そして、アイツは本気じゃなかった……………。本気なんかじゃ……………」

自分は本気で戦った。だからこそわかった。彼が本気でなかったことが。彼はまだほんの一部の片鱗しか見せていない。そして自分は……………それに負けた。その現実に、刻はその場に俯く。

すると、その隣で寧々音が急に眉をしかめ、叱るように口を開いた。

「マグネスはもつと自分のこと、大事にしないとダメなの」

「…………ツ！」

『自分を……………大事にして……………』

それは、かつて幼い自分を護った時に言った言葉。今の彼女にあの時の記憶はない。それでも、彼女はあの時と同じ言葉を言った。それは……………自分があの時と何も変わっていないということを感じさせた。

「……………めん。ごめん、ねーちゃん……………。オレ、あの時と同じ……………何もできずに、アイツに生かされただけだった……………！」

「くそおおおお!!」

いつの間にか強くなった雨。その雨音に包まれる中、刻の叫びは周囲の者たちの鼓膜を震わせた。

次の日、刻の姿はいつの間にか消えており、大神の修業（という名の雑用）が始まるうとした。それと同時に、治療を済ませた刻が戻り、そのまま会長に頭を下げて弟子入りを志願した。強くなって虹次を斃すまで煙草をやめる、という覚悟と共に。その姿勢を認めた会長は刻の弟子入りと『肆號室』への入居を認め、新たに大神たちの修業生活が始まった。

また、自分が持つ鍵キの謎を解明するため、ということでも桜も前の日に入居していた。これは大神も知らなかったが、なんでも会長と剛徳が知り合いだとかで家族からも許しを得ているらしい。会長の謎が増えたが、桜は皆で同じ時間を過ごせることを嬉しく感じており、その様子を見た大神はもう何も言わなかった。

このように、住人が増えた『渋谷荘』だったが、実はまだ大神たちが知らない住人がいた。その住人というのは、『渋谷荘』のあらゆる場所に専用スペースがあり、家主であるはずの会長も怯えてしまうほどの人物。その正体は……今まで一度も姿を見せていない謎の存在。

その名も……『コード：05』。

「ルイルイ王子<sup>おうじ</sup>？」

「ゆ、遊騎はたまに、そう呼んでるぜ……。オレとか大神は普通に王子<sup>おうじ</sup>って呼んでるけど……」

「王子……よほど凛々しい方なのだな」

「いや、別に凛々しいから王子<sup>おうじ</sup>って呼んでるわけじゃ……」

刻の『渋谷荘』入りも済み、改めて修業が始まった。そんな中、刻と桜は『伍號室<sup>ごごうしつ</sup>』の住人である『コード：05』について話していた。会話だけを聞けば、特に何の変哲もない会話。だが、二人を見ている周りの人々に聞けば、二人は異常と映るだろう。その理由と言うのは……

「……つつか、桜チャン？ この食材……買い過ぎじゃね？」

「人が増えたから仕方ないのだ。それに、今日は王子殿のために美味しい肉じゃがを作ろうと思っていたから、つい張り切ってしまったのだ」

「いやあ、それはいいんだけど……オレ、まだ傷だって治ってないし……それに、この

『にやんまる』スーツ着てるせいで、余計に……重……い！」

一人は食材が限界まで行った段ボールを山のように持つ少女、もう一人は『にやんまる』の着ぐるみを着て同じように食材を運ぶ少年。これこそが二人が異常に見える理由だった。というより、これを見て異常に見えない者こそ異常だろう。

刻は弟子入りした後、大神と同じように基礎体力をつけるための修業に入った。つまり、『にやんまる』スーツを着ての日常生活である。そこに桜が買い物に行くということが重なり、スーツを着たまま付き合わされたということだ。桜に関しては……いつものことである。

「頑張るのだ、刻君。それも修行だ。ガッツなのだ！」

「ぐぬぬ……… 傷だらけの身体にこれはキツイ………ん？」

笑顔で刻にエールを送る桜に対し、刻はふと何かに気付く。それは、一つの音。それなりの速さで、しかも自分たちに近づいてくる音。そして……

「いただきー！」

「ぬっ!?! ひ、ひったくり!?!」

二人の横を一台のスクーターが走り去り、一瞬の隙を突いて財布が入った桜のバッグをひったくっていった。運悪く道路側の手にバッグを持っていたため、絶好の獲物だったのだらう。

「この野郎！ この刻様の前で悪行たあいい度胸——のわあ！」

『コード・ブレイカー』たる自分の前で“悪”は許すわけにはいかない。すぐに追おうとした刻だったが、スーツの重みで盛大に転んでしまった。持っていた食材は全て落とし、食材の一つである卵が割れて中身が散乱した。

「私に任せるのだ、刻君！ 待て——！」

桜は刻に一声かけると、食材をその場に置いて走り出した。しかし、いくら彼女の身体能力が優れているからといって走ってスクーターに追いつくことなどできるわけではない。両者の距離はどんどん開いていった。

「く、くそ……！ このままじゃ逃げられ——！」

どんどん小さくなっていくスクーター。桜が思わず諦めかけた……その時だった。

——ピシイ……！

「な……！?! う、動けねえ……！」

「な、なんだ……!?!」

突然、何かがスクーターに乗っている男を絡め取った。それは目を凝らさなければ見えないほど細く、だがしつかりと男を捉えて離さないほど丈夫だった。それは……釣り糸テグスだった。



「今日のエモノは小せえな……。エサにもなんねー雑魚か」  
釣り糸の出所……。すぐ近くの建物の上にいたのは、鮮やかな蒼色の艶髪に右眼下の泣きボクロ、黒の革ジャンにズボン、携帯タイプのボトルを片手に持った人物だった。その人物は、そのまま建物から飛び降りてきた。

「こ、この野郎！　ぶっ殺して——！」

「ふん！」

「ぐはあ!？」

「……チツ。酒のサカナにもなんねーな」

ひったくりの傍に降り立ったその人物は、問答無用でひったくりに頭突きを喰らわせて気絶させた。その後、ひったくられたバッグを奪い取ると、それを桜に投げつけた。

「ほら、『渋谷荘』に帰るぞ、新入り共」

「え？ え？ 『渋谷荘』に、つて……？」

「……やっぱりお前かヨ」

急すぎる展開についていけない桜に対し、ようやく追いついた刻はそこにいた人物に声をかけた。彼は知っていた。その人物が誰なのか、どのような人物であるかも。

「王子……！ 『伍號室』の住人つてのはヨ！ 『コード・05』のくせにオレ様に命令してんじゃねーぞ！ この下っP——ぐお!？」

「うるせえ……。あと、卵割るんじゃねえ」

「王子……？ まさか、この方が王子殿……？」

怪我をしていようと関係ない。卵を割った刻にも頭突きを喰らわせる。そう、この人物こそが噂の『コード・05』……王子である。急な出会いに困惑した桜だったが、とりあえず王子に続いて『渋谷荘』に帰ることにした。

「『渋谷』 ああ！ よくもオレの『渋谷荘』を汚しやがったな！」

「ヒイイイ！ お、王子様!？」

買い物から帰った桜が最初に見たもの……それは汚れきった『渋谷荘』の現状にブチ切れる王子の姿と王子に怯える会長の姿だった。そして……

「痛いわ……ゲホゲホ」

「なんで、オレまで……」

見事に王子の頭突きを喰らった遊騎と大神。二人はほとんど巻き添えという形で頭突きを喰らっていたが、王子にしてみれば『渋谷荘』を汚した罪は住人全員の責任ということなのだろう。

「言っておくぜ、『渋谷』。もし、また同じことやったらテメエの正体バラすぜ……?」「き、肝に銘じておきます〜!」

鋭い視線を会長に向ける王子。内容は明らかな脅しであり、会長は完全に怯えてしまっている。

(王子殿は会長の正体を知っているのか……? だから会長はあんなに王子殿に怯えて……)

まさに、王子こそが『渋谷荘』の真の主。会長が持つ家主という権利を完全に暴力で掌握する。まさに最強……というより最恐である。

「おい、零……。お前もコイツラに染まってんじゃねーぞ。……つたく、少し休む。テメーら、騒いだらぶつ殺す。あと『渋谷』、オレのボトル持ってこい」

そう言うのと、王子は自室に入っただけだった。すると、スーツを脱いだ刻は顔を真っ赤にしてグチグチ文句を言いながら外に走っていった。おそらく、外で王子に聞こえないように文句を言うつもりだろう。そして、会長はいそいそとボトルを用意し始めた。その様子を見て、桜は残念そうに顔を沈めた。

「王子殿と皆はあんまり仲良くないのだな……。せつかく会えたというのに……。なんと話しかけたらいいのか」

「……王子が苦手なんですか？　桜小路さんにもそんなことがあるんですね」

「い、いや！　違うぞ！　ただ私は……！」

「まあ、王子がどんな奴かは、すぐに……。わかりますよ」

王子との関係に悩む桜に対し、意味深な言葉を口にする大神。その後、王子は自室から出ることは無く日付は変わった。

次の日、目が覚めた桜が見たのは驚くべきものだった。

「庭いっぱい干された洗濯物にピカピカの床……リビングにはご飯まで用意されているのだ！」

昨日まで大量に溜まっていた洗濯物は外に全て干され、床は埃が一切無く、さらにリビングには四人分の食事が用意されていた。

「ん〜、『にゃんまる』おはよ〜」

「おはようございます」

「……んあ？ 美味そーだな、オイ」

すると、ちょうどよく大神たちも起きてきた。彼らは食事に気付くと、それぞれ席に着いた。席に着いてみると、さらに驚くべきことがあった。

「これは……！ オムライスに『ようこそ SAKURA』とケチャップで書かれているのだ！ それに『子犬』には骨まで！」

「ワン！」

「オレには禁煙グッズときましたカ。アー、クソツ。してやられたわー」

「廊下のホコリ無くなったから咳も止まったわ。にしても、いつ気付いたんやろうなー」

「正直、助かりました。もう替えのシャツが無かったので。しかし、いつも通り完敗ですぬ」

それぞれ食事に手を付けながら、感嘆の声を洩らす。この様子を見る限り、これらをやったのは大神たちではない。ましてや桜でもない。ならば、これは誰がやったのか。

「むう、会長はまだ寝ていらっしやる時間だし……では、まさかこれは王子殿が？」

「起きたか、このノロマ共」

「王子殿！」

桜が気付いたのと同時に、王子が姿を現した。昨日と変わらずの革ジャンとズボン姿で鋭い眼光を向けている。すると、王子はリビングの壁に巨大な紙を張り出して全員に見せた。見ると、「当番表」と書かれていた。

「炊事、洗濯、ゴミ捨て、掃除……これをそれぞれ一週間、ローテーションで組んだ。テメーら、今日からこの当番表通りに働けよ。ちなみに、『渋谷』の奴は毎日全部やらせる」

「ハア!? クソネコの分はいいとして、なんでオレたちがやらねーといけないんだヨ！ テメーの言うことなんて聞かぬ——ぐへっ！」

「うるせえ。愚民は黙って言うことを聞け」

「誰が愚民だ、コノヤロー！」

「あ、あわわ……。ちよ、ケンカは……」

王子の急な決定に刻が反発し、二人の間に争いが起こる。と言っても、一方的に刻がやられているが。そして、数回ほど二人の言い合いが続くと……

「……チツ、しゃーねーな。いい加減、飽きたしキツチリ働いてやる力……」

「当番かー。面倒やけどしゃーないなー」

「まったく……どうせやるしか選択肢は無いんですから、無駄な抵抗しなければいいものを」

「み、皆……?」

急に、仕方なさそうではあるが大人しく従い始めた。というより、了承したように見える。突然のことに桜は一人、状況を飲み込めないでいると王子がフツと微笑んだ。

「……死ぬまでこき使ってやるから覚悟しとけよ、お前ら」

「ハイハイ……望むところだっつの」

笑顔で向かい合う王子と三人。そのやり取りからは……彼らなりの信頼関係が感じられた。そして、それを見たことで、桜はようやく理解した。自分ほとんど勘違いをしていたということ。

「そうか……本当は皆、王子殿のことが大好きで仲良しなのだな！　そして王子殿は口下手なだけで、本当はとつてもとつても素敵で優しい方なのだ！」

ようやく知ることができた王子の一面。桜はそれが嬉しく、満面の笑みで王子にそれを伝えた。彼女なりの感謝の意味を込めて。そのおかげで、その場は一気に和やかに……

「バカ珍！ それはダメだ！」

「しまった……！」

「え？」

急に慌てだした大神たち。意味がわからず首を傾げた桜だったが、ふと隣で起きていた違和感に気付いた。

「そ、そそそ……そんなこと、ね……し。す、素敵、とか……やさ、やさし、とか……そんな……」

「……え？」

徐々に赤くなっていく王子の顔。ほんのりと湯気がたつほど高揚し、顔はどんどん真っ赤に染まって……



「そんな、こと……ね……。——ぬがああああ!!」

王子は、周囲のものを頭突きで次々に破壊し始めた。

「ぬお?! これは一体、どういうことなのだ!」

「すみません……事前と言っておくべきでした。王子のことは……褒めちゃダメなんです。アイツは想像を超えるシヤイなんです」

「悠長に説明している場合じゃ——ギヤアアアアアア!!」

その後、王子の頭突きで吹っ飛ばされた刻が戻ってくると、全員で『渋谷荘』の修復作業を行う羽目になった。そんな中、桜は自室に籠ってしまった王子を心配して部屋を訪ねていた。

「王子殿、お茶を淹れたのだ。皆で一緒に飲みませんか?」

「桜小路さん、何をやっているんですか? 早く作業を手伝ってください」

「おお、大神。ちょうどよかった。王子殿の様子を見てきてくれぬか? 私が行くよ、同じ男が行った方がいいだろう」

「……すみません、桜小路さん。もう一つ、言い忘れていました。王子は……」  
「ぬ？ 扉が開いた……？」

扉をノックしていた桜だったが、完全に閉められていなかったのか扉が動いていた。扉が動いていったことで、少しずつ部屋の中が露わになっていき……見えた。

着替えるために上の服を脱いだ王子の……豊かな双山を。

「……………ご、ご、ご婦人なのだあああああ！」

「そうです。アイツは八王子はちおうじ 泪るいという女の『コード・ブレイカー』で……って！ なんで開けてるんですか！」

「零……テメエ、堂々と覗いてんじゃねーぞおおおおお!!」

その後、さらに王子が暴れて修復箇所と怪我人が増えたのは余談である。

## code : 39 決裂

「うおおおー！」

「まだまだ……！……もつと来いヨー！」

大神と刻……二人の修業が始まってから数日が経った。刻も第一段階の体力強化をクリアし、今では二人とも『渋谷荘』の地下で行われている修業を行っていた。その修業内容とは……

「さつきからチマチマと……まとめて燃え散れ！」

「おっと、かなりデカいのが来たナ。一気に沈みなヨー！」

二人がいる修業場の四方から次々と飛び出してくる小型、中型、大型の『にゃんまる』型の人形。二人はそれを異能で次々と破壊していった。その様子を、会長、桜、王子は上から見守っていた。

「うんうん……二人とも、かなり早くカラクリ珍種を壊せるようになったね」

「カラクリ珍種……あの『にゃんまる』のことですか？」

「いかにも、そうだよ。あのカラクリの表面には私の珍種血清が薄く塗ってあってね。フルパワーの異能でないと破壊できないように調整してあるカラクリ……というより、

ロボットなんだ。二人とも、最初は小型を数体壊すだけでやつとだったんだよ」

見てみると、確かに二人とも修業を初めて数分だというのに大量の汗をかいている。異能をフルパワーで使い続けている証拠だ。最初は小型でやつとと言っていたが、今では大型のものも壊せるようになってきている。しかし、そんな二人の様子を見た桜の中には、一つの大きな不安が残っていた。

「会長……こんな風に異能を使い続けていたら、すぐにロストしてしまうのではないですか？」

「いかにも。それこそが修行の目的だからね」

「ロストが目的……ですか？」

「……超回復、って知ってるかい？」

超回復……それは筋力トレーニングなどで筋肉に強い負担をかけた後に休息を入れると、負荷に負けまいと筋量・筋力がトレーニング前より増えることである。よく言われるのは、筋肉痛というのはこの超回復が起こっている証拠である、ということである。

「異能も同じなんだ。フルパワーで異能を使うことが異能のハードトレーニングとなり、その後に迎えるロストが休息の時間。これを繰り返していき、超回復させることで異エネルギーをアップさせるんだよ」

トレーニングとロストを繰り返す……異能のことを詳しくは知らない桜だったが、そ

れがもたらす結果が一つあることを彼女は知っていた。そして、それこそが彼女の中にある大きな不安の正体でもある。

「しかし、そんなにロストを何度も繰り返しては……『コード：エンド』が近づいてしまうのではないですか……？」

「……いかにも、それがこの修業のデメリットさ。でもね、仕方がないことなんだ。そうしなければ、強くはなれない。……それに」

会長は静かに呟くと、一歩前に出て大神と刻を見た。二人は人見の死を目の前にした。おそらく、説明を受けなくても理解しているだろう。この修業が自分の寿命を縮めていると。だが、彼らは……彼らの眼には「恐れ」など欠片も無かった。彼らの眼にあるのは……

「これが、大神君と刻君の決意……『覚悟』なのだよ」

「『覚悟』……」

たとえ自分の寿命を縮めることになったとしても、成し遂げたいことがある。大神が言った「生命よりも大事な覚悟」……それを成し遂げるためののだろう。そのために、二人は自らの寿命を少しずつ削っている。

「……茶番だな」

「王子殿……?」

思わず出たような王子の呟き。王子の方を見ると、彼女はどこか悲しげな顔で二人を見ており、そのまま言葉を続け始めた。

「こんなことやっても『捜シ者』に勝てるわけがない。……『捜シ者』はバケモンさ。それに、虹次だって半端な強さじゃない。こんなことでアイツらの強さに追いつくことができないなんてこと、あの二人が一番よくわかつてると思うんだがな」

「……王子殿は、『捜シ者』たちのことをよく御存知なのですか?」

「……………」

桜の問いに、王子は答えようとはしなかった。王子の言葉……それは『捜シ者』たちの実力を全て知っている、と言っているようにも感じられた。でなければ、大神と刻を

見て「追いつけない」とハッキリ口に出すことはしないはずだ。

『捜シ者』たちに関する質問には答えてもらえない。そう感じた桜は、別の質問を彼女に投げかけた。

「あの……そもそも王子殿はどうして『コード：ブレイカー』に？」

思えば、『コード：ブレイカー』のほとんどにしている質問。ほとんど真面目に答えてもらった試しはないが……王子は静かに桜の方を向き、しっかりと眼を見て答えた。

「さあ……なんでだろうな」

「王子、殿……」

その時の王子の表情は、微笑んでいて、優しく……悲しく儚げだった。



「ぐ……………」

「ッ！ 大神!？」

王子と話し込んでいると……大神の苦しげな声が下から届いた。桜は思わず身を乗り出して様子を見ると、左手から『青い炎』が消えていて膝を突いていた。これはどう見ても……ロストだ。

「大神君、ロスト！ 今日はそのままでだよ！ 刻君はそのまま続行してね！」

「……大神」

桜の眩きに、答える声はどこからも無かった。

「ハア……………！ ハア……………！」

（こんなにも身体が冷たい……。こんな思いをしてまで、大神は……）

修業が終わった後、桜は大神に肩を貸して部屋まで連れていくことにした。大神は断ったが、王子から「ロストした奴は黙って言うこと聞け」と頭突き付きで怒られたた

め、仕方なく了承した。大神のロストは体温が急激に下がること……桜は大神に触れている部分から感じる彼の冷たい体温を感じながら、ずっと考えていた。なぜ、ここまでするのか。ロストという辛い体験を何度もするだけでなく、自分の生命すら犠牲にしている。大神たちがそこまでする理由が……桜にはわからなかった。

「……………ありがとう、ごさいます。後は大丈夫ですから……………」

桜が一人で考えていると、いつの間にか大神の部屋である『陸號室』の扉の前に着いていた。大神は桜から離れると、かすかに震えながら桜に笑顔を向けた。

桜は、その笑顔が学校で使う仮面の笑みと同じ、偽りの笑みであると知っている。自分の辛さを悟らせないための嘘の笑顔であると。そんな嘘の笑顔を浮かべた大神が扉を開け、部屋に入ろうとした……その時。

「……………そこまでして、やらねばならないこと……………なのか？」

それが限界だった。彼女は、知りたいことを相手に悟られないように聞きだす知識も技術もない。しかし、正面からの問いが相手を傷つけることもある。今回のように、深刻なことである場合はなおさらだ。怒られるかもしれない、嫌われるかもしれない。それでも……彼女にはこの問いを投げかけることしかできなかつた。

「……………」

大神は扉に手を触れたまま黙っていた。怒りを感じているのか、それとも失望してい

るのか。どちらともとれる大神の様子に、桜は少し怯えていた。だからだろう。どうしても大神の顔が見れない。

すると、大神は静かに、力強く答えた。真っ直ぐ、桜のことを見て。

「……………ええ」

「……………そうか」

満足だった。大神の覚悟は、決して揺るがない。彼の中で、この覚悟はそれほどのものなのだ。それがわかったただけで、桜は十分だった。それがわかれば、自分ができることは一つしかない。

「頑張れよ、大神」

「……………はい」

そう言って大神は扉を閉じ、桜も自分の部屋へと戻っていった。

その夜、事件が起こった。

「キヤアアアアア！」

「ぬお!! な、なんだ?！」

夕食も済み、布団に入っていた桜の耳に響いたのは誰かの叫び声だった。眠気も何もかも一気に覚め、桜は声の出所を探るべく部屋の外に出ていった。

「だ、誰なのだ?！」

「なんなんだよ……。遊騎の騒音子守唄の次は叫び声かヨ……。ロストして疲れてるんだから早く寝かせてくれヨ！」

「オレはよんぼんが頑張ってるから応援しとるだけやで。けど、あの声は『にせまる』やな」

「会長?！」

「まったく……。ロストの時くらい静かに過ごさせてほしいものです」

見ると、大神たちも声を聞いたらしく部屋から出てきていた。遊騎はいつも通りだが、大神と刻はロストしている。もしも何者かが侵入していたのだとしたら、戦う力はかなり限られている。遊騎のおかげで声の出所が会長とわかった四人は会長を探した

め、管理人室がある一階へと向かっていった。

すると、一階階段前にある玄関にて四人がよく知る人物同士が対峙していた。

「王子殿！ それに平家先輩！」

「……一応、オレもいるんだが」

「夜原先輩まで!?! いや、それよりも何があつたのですか!?!」

見ると、平家が『光』のムチで王子の手を縛っており、明らかな殺気を放っていた。その傍には、優が神妙な顔つきで佇んでいた。よく見ると、廊下の真ん中には足に釣り糸が絡まっている会長の姿もあつた。

「……ん？ なんだ、コレ」

「ああ！ それ、見ちゃダメー」

何があつたのかが全くわからない桜が困惑していると、刻があるものを見つけた。見ると、会長の傍に落ちている箱から数枚の写真が出てきており、刻はその中の一枚を何気なく手に取った。会長はそれを止めようとしたが、時すでに遅し。その写真は刻たちの視界に完全に入った。

「なんだよ、コレ……」

その写真に写っていたのは、『Re—CODE』である雪比奈と虹次。そして、髪が長いが見間違えるわけがない。その二人と肩を並べて写真に写っていたのは……八王子  
泣だった。

「この写真は一体……」

「見ての通りです。その八王子 泣はかつて、『捜シ者』直属の部下である『Re—CODE』のメンバー。つまり……我々の敵だった女です」

「お、王子殿が元『Re—CODE』!? それは本当なのですか!?!」  
「……ああ、本当だ」

平家の言葉に思わず大声出す桜。すると、王子が静かにその言葉が真実であることを告げる。本人からの肯定……それは何よりも有力な証拠である。彼女は認めたのだ。自分は……かつて『コード：ブレイカー』の敵であったと。

「許せませんね、『悪』である『Re—CODE』だったあなたが『コード・ブレイカー』を名乗ることが。今すぐ消えていたいただきたい……」

「お前……コイツと、一緒にいたつてののかよ。……仲間だったつてののかよ。寧々ねーちゃん音を殺した虹次コイツと……！」

元『Re—CODE』……それが知られた瞬間、平家の殺気が濃くなり、その眼も鋭く王子を捉えている。さらに、刻も写真を握りしめながら真剣な顔つきで王子に敵意を向け始める。王子は、その敵意から逃げようとはせず、真つ直ぐ刻の顔を見ながら口を開いた。

「虹次はかつて同じ志を持った仲間。そして……最も信頼した同志だった」

「ふざけんなー！」

「やめろ、刻……！」

「離せ！ 許せるワケねーだろ！ こんな奴を庇つてんじゃねーよ！」

王子の言葉に、刻は我を忘れて掴みかかろうとする。たまたま近くにいた大神はそれを止める。ロストしているとはいえ、刻もロストして子どもの姿だ。身体が上手く動かなくても体格差を利用すれば止められる。

だが、今の刻はそれでも止まろうとはしない。それどころか、大神にも無情な言葉をかけ始めた。

「それともなにか!? 大神、テメエはアイツの気持ちかわかるつてか!? そーだよな  
 ! だつてお前は同じ『悪』! 親殺しの——!」

「ツ! テメエ——!」

興奮しきつた刻の言葉に、思わず大神も激昂して刻に向かって拳を振りかざす。その拳が刻に届くより前……二人の間に一人が割つて入つていった。

「……ええ加減にしろや」

「遊、騎……」

大神の拳を止め、刻の頭を押さえつける遊騎。遊騎に拳を止められたことで、大神の頭が少しずつ冷え始める。すると、遊騎は眉をひそめ苛立ち気に口を開いた。

「どいつもこいつもガタガタやかましいわ。今のオレらは『捜シ者』と『R e e | C O D E』を斃すつちゅー目的が同じやから一緒にいるだけや。それぞれがどんな奴かなんて関係ないやろ。友達でもないのに……私情挟んで喧嘩する必要なんてないやろ、アホらし」

「……………」

「……………」

遊騎の言葉に、大神と刻は完全に沈黙した。同時に、平家も王子から『光』のムチを外し解放する。すると、遊騎は平家の方にも向かつていき、言葉を続けた。



「にばんもや。ごばんにばつか当たり強すぎやで、いつもいつも。全部、お前の大好きな『エデン』が決めたことやろ。ルール守れてオレのこと叱る前に、そのルールの中のごばんをいびつてる自分のこと叱りや」

「言い過ぎだ、遊騎。平家さんは『エデン』に忠実な機械じゃない。個人の思いや考えがある以上、納得できないこともある」

「……………」

遊騎は平家に言い詰めたが、平家は何も言わなかった。代わりに、優が平家を庇うように遊騎に反論した。二人の間に不穏な空気が流れたが、優が顔を逸らし、遊騎が部屋に戻ったことでその空気は打ち切られた。同時に、平家も『渋谷荘』の奥へと消えていった。

「オイ、大神と王子。テメーら二人、二度とオレにツラ見せんよ」

「テメーのツラなんて命令されても見る気はねえよ」

「二人とも、いい加減に……………おい！」

「桜小路、あんたには関係の無いことだ。あまり首を突つ込むな」

それぞれがまるで別の方向に進んでいった『コード：ブレイカー』たち。たった一枚の写真……………それが彼らをバラバラにしてしまった。桜は、落ちていた例の写真を拾い上げてよく見てみた。

よく見ると、雪比奈、虹次と王子の間には明らかに破った跡があった。今はテープで繋いであるが、これが意味するのは、この写真は一度破ってまた繋げられた写真。なぜ、王子と虹次たちの間で破られているのか。もしかしたら、一度は彼らと決別したが、心のどこかで彼らを思っていたのかもしれない。

「……………もういいだろう。個人の物は持ち主のところにあるべきだ」

唯一、桜と共に玄関に残っていた優が桜の手から写真を取り上げ、箱の中にしまう。それを見ながら、桜はボソリと呟いた。

「なぜ、王子殿は『Re—CODE』を抜けて『コード：ブレイカー』になったのでしょうか……………」

「……………さあな。だが、王子だってバカじゃない。自分が『Re—CODE』を抜けて『コード：ブレイカー』になった時……………こうなることは覚悟していただろうさ。そして、たとえ『コード：ブレイカー』の中で孤立したとしても、『Re—CODE』かつての同志とも闘うつてな。……………どちらからも敵とみなされるであろう行為と知っていながら王子はそれを選び、それだけの覚悟があつた。それだけだ」

「……………」

その時、桜の頭に浮かんでいたのは『コード：ブレイカー』になった理由を聞いた時の王子の表情だった。彼女も、大神たちとは違うタイプの覚悟をその胸に秘めていた。

だからこそ、あんな悲しい表情を浮かべながらも『コード：ブレイカー』であり続けるのだろう。

「む……？ あれは、刻君?！」

ふと、桜が外に目をやると刻が外に出ていた。おそらく、裏口から外に出ていったのだろう。

「子どもの姿なのに……！ 着替えて、追いかけます!」

そう言うと、桜は急いで二階に上がっていった。いくら夜とはいえ、寝間着で外に出るわけにはいかない。玄関には、優と会長のみが残った。

「……この写真は私が戻しておくよ。元々、この写真を持ちだしてしまったのは私だからね。申し訳ないことをしたよ……」

「……………」

会長は優から写真が入った箱を受け取ると、大事そうに抱えて歩き出した。優はその後ろ姿を見ながら立ち尽くしていたが、ふと何かを決意したように会長を真っ直ぐ見て、声をかけようとした。

「あの、会ちよ——!」

「せつかくだから、管理人室においでよ。生徒会同士、親睦を深めようじゃないか」

「あ………はい」

言葉を遮られた優だったが、会長の提案には大人しく賛同した。そして、二人はそのまま管理人室へと移動した。

「いかにも、お茶でいいかな？　まあ、お茶しかないけど」

「あ、いただきます……」

管理人室に招待された優はどこか落ち着かない様子だった。先ほど言いかけたことを気にしているのだろう。そして、おそらくそれが彼の……

「はい、お茶。それで、優君。いかにも、私にどんな用事があるのかな？」

「……お見通しでしたか」

「いかにも、生徒会長だからね」

ほむ、と自慢げに胸を叩く会長。それに対し、優は何度か呼吸を繰り返して気持ちを落ち着かせた。そして、改めて会長の前に座り、真正面から真剣な眼差しを向けた。

「……『渋谷』生徒会長」

真剣な表情を会長に向ける優。そして、彼はその真剣な表情のまま……会長に頭を下げた。

「お願いします。オレも……会長のもとで修業させてください」

## code : 40 誰が為に

「……クソッ！」

足元にあった缶を蹴り飛ばすが、気持ちなんて晴れるはずもない。異能さえ使えれば、視界から消えるほどの威力で吹っ飛ばしたいほど、今の刻は苛立っていた。

(オレは……あんな奴にいいようにされてたのかよ。アイツを……虹次を同志なんて呼ぶ奴のことを。自分に腹が立つ……！)

周りの繁華街のきらびやかな様子など目に入らないほど、刻の苛立ちは大きかった。外に出てから、彼の中にあるのは元『Re-CODE』であり姉の仇を同志と呼ぶ王子への嫌悪、その王子と馴れ合っていた自分への怒りだった。

どこにも向けようがない感情。彼の中で決めていたのは、大神と王子の顔を見ないために『渋谷荘』に帰らないということだった。だが、そうなるとどこに行けばいいのか。いつそのこと、子どもの姿を利用して適当な女性の家に泊まらせてもらうか……そんな考えがよぎった時。

「刻くんー！」

もはや聞き慣れた声が刻の耳に届いた。振り向くと、私服に着替えた桜が『子犬』を

連れてこちらに向かってきていた。彼女の性格を知っている時は、すぐに彼女が自分を心配して追ってきたのだと察した。

「うわー、桜ちゃんったら心配して来てくれたの？ オレ、嬉しーなー。桜ちゃんが添い寝とかしてくれたらオレ、すぐに元気になっちゃうなー」

「ワンワン！」

「なんかうつせーけど、桜ちゃんがいてくれたら気になんないなー」

コロツと態度を変えて桜に擦り寄る刻。桜自身はそれを拒もうとはしないが、珍しく強気な『子犬』が思いきり反抗していた。だが、刻はまったく気にしていなかった。

すると、彼らの傍にその様子を気だるげに見守る一人の人影があった。

「あ、大神」

「アア？ 大g——グエー！」

刻が振り向こうとした瞬間、大神は容赦なく刻の頭を踏みつけた。それを見た桜は「外出のお仕置きはそれくらいにしておけ」と珍しくやんわりと止めていた。

その後、刻は起き上がると再び苛立ちを表に出して大神にぶつけ始めた。

「オイ、二度とツラ見せん言って言った口！」

「テメーのツラ見に来たんじゃねえよ、自意識過剰が……」

「コラ、もうケンカはやめるのだ」

再び睨み合う二人だったが、今度は桜が仲裁に入って止めようとする。彼女の性格をよく知る二人は彼女を目の前にして言い争う気は無いらしく、お互いに顔をそむけた。そして、大神の方はそのまま桜に小言を言い始めた。

「ところで桜小路さん。こんな夜に外出なんてしないでください。ロスト中は歩くのもままならないんですから……。珍種の観察をしなければならぬオレの身にもなつてください……」

「す、すまん……」

大神の小言に言い返せず、素直に頭を下げる桜。彼女は頭を下げながら、ここからどうしようか考えていた。刻を置いていくわけにはいかない。だが、今のままでは連れて帰るのは難しい。何かいい方法は無いか……そう考えた瞬間だった。

——チリツ

「え——？」

——ゴオ！

「うわ！ きゅ、急に火が！」

桜たちの周囲が小さく光ったかと思うと、光った場所が急に火に包まれた。突然のことに周囲の一般人たちはパニックを起こし始める。

「大変だ！ なんとかしなくては！」



「ほっとけよ。どーせボヤだろ？ オレは関係ないからこのまま行かせて——」

刻が歩きだした瞬間……近くの飲食店の傍にあったガスボンベの口の辺りが光り

……

「刻君！ 危ない！」

——ドオオオオン！！

突然、現れた火はガスの効果で巨大な爆発となって刻たちを包んだ。ロストしていなければ、いくらでも対処の仕方はあった。だが、今の彼らにその手段は無い。彼らはなんの抵抗もできずに爆風に飲まれていった。

「……………うう、助かった……………のか？」

自分たちのすぐそばで爆発が起こり、その時の衝撃のせいだろう。桜は少しだけ気を失っていた。そして、気が付いた彼女が周囲を見渡すと……………信じられず目を見開いた。

「こ、これは……………この黒い空間にだけなんともないぞ?！」

気が付いた桜が見たものは……自分たちの周囲の空間が黒くなっており、その空間より外はすっかり爆発による炎に包まれているが、空間の中は爆風も炎も無かった。ふと後ろを見てみると、巻き込まれた一般人たちが気を失っていた。彼らもこの空間に護られている。

目の前で起こっている不可思議なことだが、桜はこれを説明できる唯一の言葉を知っている。

「まさか……異能か？ この私たちを護っている黒い空間は……」

「……それだけじゃありません。ボヤも爆発も、全ては異能の仕業です」

「ボ、ボヤも爆発も!？」

そう言われてみると、ボヤも爆発もあまりに出来過ぎていた。同時に二か所でボヤが起こつたり、ガスボンベの傍で発火するなど自然現象ではあり得ない。それを考えれば、全ては異能によるものだということにも納得できる。

「だが、誰がなんのために……。『Re—CODE』は手を出してこないのでは……」

「おそらく、そんなことを知る由も無いほど末端の異能者でしょう。命令も何もなく、勝手な判断でオレたちを襲ってきた。……お前だつてわかつてんだろ、刻。狙われているのはお前だ」

「と、刻君が!？」

「……チツ！」

『捜シ者』側の異能者が襲ってきて、その狙いは刻である……大神の予想に桜は驚愕する。だが、少し考えれば予想できることでもある。最初のボヤは大神たちの傍だったから全員を狙っているとも考えられるが、爆発は違う。明らかに刻の近くにあるガスボンベを狙っていた。

自分が狙われている……その事実を認識した刻は火の手が少ない空間に向かって走り出した。

「……くそ、しくじったか。まさか誰一人死んでねえとはな……」

ちょうど爆発があった場所を見下ろせるビルの屋上。そこで一人の男がぶつぶつと言葉を洩らしながら人々を見下ろしていた。

「それに、なによりも刻が死んでねえ。ロストしているとはいえ、兄である仙堂リゅういち 竜一を斃しただけはあるってことか。だが、オレ様は違えぞ……！ 少し見失っちゃまった

が、この竜二様りゅうじが必ず刻をぶつ殺して『Re—CODE』となってやる！」

高々と宣言する男。彼の言葉を解釈するなら、彼は研究所で刻が斃した『表皮』を使う仙堂の弟で、彼こそが刻を狙っていた張本人である、ということだ。兄の敵討ち……とも取れる行為だが、彼にしてみれば最後に言った『Re—CODE』になる」ということこそ本音なのだろう。

「しかし、刻はどこに隠れやがった……？　面倒だな、手当たり次第にボンベを爆発させて——」

堂々と宣言した後、竜二は改めて刻を探そうと下を見るが、やはり見当たらない。刻を斃すためなら何を犠牲にしても構わない、彼の発言は明らかにそう言っていた。

そのように刻に執着していたからこそ、彼は気付かなかった。いや、気付かなかった。

「……なんだ、仙堂とやら。お前は『Re—CODE』になりたいのか」  
自らの背後に佇む……王子の気配に。

「いい、いつの間に!? 何者だ!」

「お前が狙う刻と同じ……『コード：ブレイカー』だよ。お前を裁きに来た。……だが、その前に一つだけ聞かせてもらおうか。なぜ刻を斃したら『Re—CODE』になれると考えた?」

王子の声を聞いたことで、ようやく存在に気付いた竜二は振り向いて王子と対峙する。王子は近くの壁に寄りかかり、携帯型のボトルで酒を飲みながら竜二に言葉をかけた。

すると、竜二はニヤリと笑い、大声で王子からの問いに答え始めた。

「ハハハ! 同じ『コード：ブレイカー』なのに知らないのか! あの癍痕の『Re—CODE』……虹次が刻を斃し損ねたんだ! 『Re—CODE』が斃せなかった男を斃せば、『捜シ者』はオレを『Re—CODE』として認めて——!」

「無理だな」

聞いていられない、と言いたげな表情で竜二の言葉に割って入る王子。ボトルの口を閉め、竜二の方に視線を向ける。

『Re—CODE』はその所業に確固たる覚悟を持っている。お前如きには荷が重すぎる……諦めるんだな」

元『Re—CODE』だからこそ、彼女は知っている。その所業と覚悟を。だからハッキリと言える。目の前の男にとつて……それらはあまりにも重すぎると、と。これは、彼女なりの忠告だったのかもしれない。

だが、そのような言葉で諦めるほど竜二は大人しくなかった。むしろ、にじみ出していた野心をむき出しにし始めた。

「知った風な口を！　こうなったらキサマも殺してやる！　『引火』！」

「ッ——！」

——ドオオン！

竜二が手をかざした瞬間、王子の革ジャンやボトルが光り、そのまま爆発した。轟音と爆風が周囲に広がっていき、王子の姿は爆炎の中に消えた。

「ハハハハ！　オレ様の『引火』はあらゆる場所を燃やし爆発させる！　ガスの近くで『引火』してガス爆発を起こすことも、零距离で爆発を喰らわせることも可能！　終わりだ！　『コード：ブレイカー』！」

大笑いと共に自らの異能の正体を話す竜二。死人に口なし……斃した相手になら何を聞かれても構わないということなのだろう。爆炎が揺らめき、その威力を表現する。

王子は確かにほとんど零距离で竜二の『引火』を受けていた。普通に考えれば、そのまま焼死体になっただけでもおかしくない。

だが……

「やめておけ。この程度の異能しか使えないお前に……私は斃せない」  
爆炎の中……王子は自らを中心とした黒い空間の中に凜然と立っていた。

「な!! オレ様の『引火』が遮られた……!!? キサマの異能か……!!? なんだ、その異能は!」

「知りたければ……教えてやるさ」

瞬間、王子を包んでいた黒い空間は彼女の足元へと消えた。さらに、その足元から細

長く黒い物体が伸びてきたかと思うと、王子はそれを手に取った。すると、その先端が鎌のように形を変えていった。

「私の異能は『影』。時に『遮影』となつてあらゆる攻撃を遮り、時に『斬影』となつてあらゆるものを截断する。……『捜シ者』の部下であるお前なら、一度は聞いたことがあるんじゃないか？」

「か、『影』だと……!? まさかキサマ、かつて鉄壁の護りを誇つていたという守護神……麗艶の『Re—CODE』か!」

麗艶の『Re—CODE』……それこそが、かつての王子の名だった。刻たちを爆発から護つた黒い空間も、零距离の爆発を防いだのも全ては『影』の力。あらゆる攻撃から全てを護る……まさに守護神と呼ぶに相応しいものだった。

だが、竜二の言葉に王子はフツと懐かしむような笑みを浮かべた。

「……そんな風に呼ばれていた頃もあった。だが、私の護るべきものはもう『Re—CODE』には無い——ハア！」

「ぐっ……!」

まるで何かを思うように呟く王子。そして、彼女はその思いを振り切るかのように……『影』の鎌を振り抜いた。

「……ん? な、なんともない……?」



王子の攻撃を防ごうと構えていた竜二だったが、まったく痛みを感じなかった。確かに斬られたはずだった。だが、何も感じない。ふと、王子の武器を見る。それは確かに鎌の形をしている……黒き『影』。竜二はあることに気付き、ニヤリと口角を上げる。

「ハ……ハハハハ！ 驚かせやがって！ 『影』は所詮、実体を持たない！ そんなもので斬ったところで痛くも痒くもないな！」

竜二の言葉は何も間違いではなかった。そもそも、『影』とは実体を持つものより生まれる実体を持たないもの。ただ見えるだけの存在に過ぎない。

「終わりだ、裏切り者！ こうなればキサマの首を『捜シ者』に差し出し、オレ様は『Re—CODE』に——！」

王子が元『Re—CODE』……裏切り者であると知った竜二は、今度は彼女を斃すことで『Re—CODE』になろうと考えていた。王子の忠告など無視し、その野心のままに行動しようと王子に向かって手を伸ばし——

——ズズズ……………

「は……？ オレ様の『影』が斬れ——？」  
瞬間、竜二の腕から先は音を立てて地面に落ちた。

「な、なんだこれはああああ!?!」

腕から感じる痛みと理解できない現実、竜二は声を荒げて慌てだす。だが、無理もない。王子に向かっていった瞬間、自らの『影』の腕が鈍い音を立てて斬れていった。すると、それに呼応するかのように実体である自らの腕も同じように斬れてしまった。混乱している竜二に対し、王子は静かに背を向けて言葉をかけた。

「『影』と『実体』……この二つは常に表裏一体。つまり、『影』を截断すれば『実体』も截断される。私の『影』を防げるものはない」

『実体』が動けば当然のことながら『影』も動く。彼女の攻撃は……まさにその逆。『影』を動かして『実体』を動かすのと同様だった。現実には『影』が動くことなどあり得ないが、彼女の異能はそれを可能にする異能。鉄壁の護り、防御不可の攻撃……これこそが彼女の『影』だ。

「ま、待て……。じゃあ、オレは……。この、『影』みたいに——！」  
王子の言葉を聞いた途端、震えだす竜二。無理もない。彼の『影』は……。さらに音を  
立てて、バラバラに崩れようとしていた。

「目には目を」  
身体に痛みが走る

「歯には歯を」  
身体のあらゆる位置がずれていく

「悪には報いの遺影を」

そして、『実体』は『影』と共に崩れ去る

「私は、自分の所業を無かったことにしようなどとは思わない。私もお前と同じ。悪  
“ …… どうか必ず報いを受ける。だからこそ、せめてその瞬間<sup>最</sup>までは……この眼に映る  
全ての人を『影』となって護る。私は……そのために『コード：ブレイカー』となつた  
のだから」

その言葉が、自分に言い聞かせた言葉なのか、誰かに向けての言葉なのか……それは  
王子にしかわからない。だが……

「……………」

たとえ誰に向けられた言葉だとしても、その言葉こそが王子の覚悟である……全てを見ていた刻たちは静かに感じていた。

夜は……もうすぐ明けようとしていた。

「オレも……会長のもとで修業させてください」

王子と竜二の決着がつくより前の『渋谷荘』……その管理人室では優が会長に向かって深々と頭を下げていた。平家と共に『渋谷荘』にやってきた優だったが決してただついでといったのではなく、彼は「会長への弟子入り」という自らの目的を持って足を運んでいた。

その優の言葉と姿勢を目の前にし、会長は一息つくようにお茶を一口飲んだ。そして……

「まあ、そんなことだろうとは思っていたよ。君からは、大神君たち以上に強さを求める雰囲気を感じられたからね」

「……全てお見通し、でしたか」

「いかにも、生徒会長だからね」

お決まりの台詞を堂々と言うと、会長はそのまま立ち上がり窓の傍まで移動した。そして、視線を窓の外に向けたまま、優への言葉が続けた。

「だからこそ、私は君の弟子入りを拒むつもりは無いよ。君は大神君たちと違って礼儀とかもバツチりだからね。ただ……一つだけ確認させてもらっていいかな？」

「確認……？」

意外と前向きな答えが返ってきたことに、優は少し驚きながらも会長が口にした「確認」という言葉が気になった。すると、会長は身体の向きを変えて優の眼を真っ直ぐと見据えた。

「君が強くなりたいのは君自身のためかい？ それとも……『彼女』のためかい？」

「ッ……！」

『彼女』……その言葉に、優は大きく目を見開いた。

「……会長も、御存知だったんですか？」

「いや、会ったことも話したことも無いよ。ただ平家君とかから聞いたことがあるだけなんだな。……それで、どうなんだい？ その答えによつて……君の弟子入りを認めよう」

「……………」

会長の言葉に優の全身が強張つていく。これは面接と同じで……試されている。ここで答えを間違えれば、おそらく二度と弟子入りの機会は無い。だが、そんな都合よく正しい答えが浮かぶはずもない。なにより、ここで聞くとは思つてもいなかった『彼女』という言葉が優の中でぐるぐると渦巻き、冷静な思考を奪つていく。しかし、だからといって黙つていては話にならない。

優は……呼吸を整えるとゆっくりと口を開き始めた。

「オレは……ある目的のために『コード・ブレイカー』になりました。その目的は、強くなくちや成し遂げることはできません。ですから……オレが強くなるのはオレ自身

のため、というのは間違いありません」

ゆつくり、言葉を選びながら紡いでいく優。その眼は真剣そのものであり、会長を見据えて離さない。だが、ここまでの言葉では「自分のためだけに強くなる」と言っているようなものだ。わざわざ『彼女』の名を出した以上、それを無視した回答が正しいとは思えない。

すると、優はさらに言葉と続けた。

「……ですが、オレに『コード：ブレイカー』の道を示してくれたのは他でもない……『彼女』なんです。『彼女』は全てを知っていました。『コード：ブレイカー』は過去を全て捨てた者……。オレが『コード：ブレイカー』になれば、『彼女』が知っている過去のオレは消え、『彼女』の前からオレが消える……。『彼女』は……全てを覚悟した上で、オレに『コード：ブレイカー』としての道を示してくれた。……オレが目的を成し遂げるために」

話しながら、優の顔はどんどん俯いていく。『彼女』の覚悟を……思いを話すことで、様々な感情が渦巻いているのだろう。だが、それでも止まるわけにはいかなかった。優は……最後の言葉を会長に伝えるため、頭を上げて今まで以上に真剣な顔つきを会長に向けた。

「だからこそ、オレは目的を成し遂げなくてはならないんです。オレ自身のためだけ



じゃない……全てを覚悟してくれた『彼女』のためにも……。オレは何を犠牲にしても、強くならなくてはいけないんです。オレは……自分自身のため、そして『彼女』のためにも絶対に強くなりたいんです……！ じゃないと……『彼女』に会わせる顔が無い」

「……………」

自分のためでもあり、『彼女』のためでもある……それこそが優が強くなる理由だった。心のまま、全てを伝えた優は会長から目を逸らそうとはしない。会長もそれに応えるように真つ直ぐ優を見据える。

そして、彼はゆつくりと歩きだし……

「そんなことは……自分勝手な解釈でしかないよ」

「——！」

優の横を……通り過ぎた。

「自分が目的を達成することが『彼女』のため？ 本当にそう思っているのかい？ 君に道を示してくれた『彼女』に報いるためというのは立派だと思うけど、だからといって強くなる理由に『彼女』が含まれているとは思えない。だって、強くなった君が成し遂げようとしているのはあくまで君自身の目的なんだからね」

「……………」

会長の言葉に、優は何も言えなかつた。会長の言う通り、彼の言葉は単純に解釈すれ

ば「強くなるのは自分の目的を達成するため」と受け取れる。『彼女』も無関係ではないと言ったが、会長にしてみれば薄い関係であると感じたのかもしれない。

「……返す言葉も、ありません。オレは結局、『彼女』から離れて『コード・ブレイカー』になったに過ぎない……。『彼女』を護るためとか、助けるためなんて綺麗な理由じゃなく……オレ自身の目的のためだけに」

自分を責めるように、拳を握りしめながら言葉を絞り出す優。背後にいる会長が聞いているとは限らないし、もう何を言っても無駄かもしれない。だが、それでも諦めることはできなかつた。

優は全てをぶつけようと、声を荒げて振り向きながら立ち上がった。

「でも……それでもオレは！ 強くならなきゃいけないんです！ だからオレは

『コード・ブレイカー』に——！」

「いかにも、君の弟子入りを認めよう」

「——え？」

振り向いた優が見たもの……それは、自分に向かって鍵を差し出す会長の姿だった。

「こ、この鍵は……？ いや、それより本当に弟子入りを……？」

「いかにも、いかにも。最初に言っただよ、私は君の弟子入りを拒むつもりは無い、と。ただ私はどうしても確かめたかったんだよ。君が……『彼女』の覚悟を理解しているかどうか」

「『彼女』の……覚悟……」

再び歩き出して最初の位置に戻る会長の言葉に、優は呆然とする。会長が何を言いたいのか理解しようとしているが、上手く頭が回らないのだろう。会長は再び口を開いた。

「君は言ったよね？ 『彼女』は君が全てを捨てることも覚悟していた、と。自分の大事な人にそんな手段を伝えるなんていうのは生半可な覚悟じゃできない。……その全ての中に、自分自身が含まれているならなおさらね」

「……………」

まるで全てを察していたかのように話し出す会長。そして、その言葉一つひとつが優にとつて身に染みる言葉だった。彼自身も、それを察していたから。

「君はその全てを理解していた。だつたら、十分だよ。夜原 優君……君を三人目の弟子として、『渋谷荘』に迎えよう。かつて人見が使っていた……『老號室』の鍵こそがその証だよ」

「ひ、人見さんが……!?!」

全てを踏まえて優の弟子入りを正式に認めた会長は、改めて鍵を優に渡す。それも、『老號室』という人見がかつて使っていた部屋の鍵を。突然のことに、優は再び慌てだす。

「ま、待つてくださいい！ なぜ人見さんの部屋にオレを……!?! オレは——!」

「それが、人見の願いだからさ」

「え……?」

人見の願ひ……その言葉に、優は思わず固まる。そして、会長は静かに語り始めた。「実は、君が『コード・ブレイカー』となつてから数日後……一度だけ人見が私のもとに尋ねてきたんだ。そして、その時……」

「もし、あなたが『コード：07』を……優を認めて『渋谷荘』に迎える時が来たら、彼に僕の部屋を与えてください。彼ならいつか……その意味がわかるはずですから」

「人見さんが……オレのために？」

予想していなかった真実に、優は目を見開いたまま固まる。会長は「うむ」と頷くと、言葉を続ける。

「彼がそこまでする理由は私にはわからない。けど、彼は君を信じて自らの部屋を君に託した。そこにどんな意味が込められているのか……ゆっくり探してみるといい」

「……………」

人見が何らかの意味を込めて、自らが使っていた部屋を優に託した。そこにどんな意

味があるのか、今はわかるはずもない。なにより、あの人見のことだ。すぐに見つけられたり、理解できるようなことではないだろう。だが、それでも託されたからには意味がある。優はそれを託された者として……見つけなくてはならない。彼の思いを受け止めて。

「まあ、人見が使っていた部屋といつても、彼が『渋谷荘』を出た時に整理したから何も残っていないと思うけど。だから特に気負いする必要はないよ」

そう言つて、会長はゆつくりと優に近づいていく。優は『壺號室』の鍵をじつと見つめていたが、近づいてきた会長に肩を叩かれて思わず顔を上げ、両者の目が合った。そして……

「『彼女』の覚悟に人見の思い……どちらもしつかり受け止めるんだよ」

「……はいー」

こうして、『渋谷荘』にまた新たな住人が増えることになった。  
同時に……夜は明けようとしていた。

## code : 41 強さに隠れた脆さ

「とゆーわけで、今日から優君も私に弟子入りして一緒に暮らすことになったからよろしくね。部屋は『壱號室』だから間違えないようにね」

「よろしく頼む」

夜が明け、外に出ている大神たちも帰ってきた後、改めて弟子入りが決まった優を会長が紹介した。優が頭を下げると、先住者たちはそれぞれの反応を返してきた。

「夜原先輩まで来てくださるとは！ これでもっと賑やかになるのだ！」

「あなたまで弟子入りするとは……まあ、理由は聞きませんがね」

「言っておくが、兄弟子様の言うことはちゃんと聞けヨ？」

「ななばんなのに『壱號室』なんやなー」

「ローテーション組み直さなきゃか……面倒くせえ」

それぞれが思い思いの反応をしたが、明らかに歓迎しているとわかるのは桜のみだった。『コード・ブレイカー』はほとんど興味が無さそうだったが、拒否の姿勢は見せない。彼らなりに歓迎しているのだろう。

紹介が済んで解散すると、優はすぐに遊騎に声をかけた。内容は……昨日のことだ。



「遊騎……昨日はすまなかつたな。あんな言い方しちまつて」

「かまへんわ。オレも頭に血イのぼつてたからな。おあいこやし」

「そうか……ありがとな、遊騎」

「こつちのセリフやし」

ガツ、と拳を合わせる二人。どうやら、この二人のいざこざは解消したようだ。そこはよかつた点だったが……一番の問題は違つた。

「……………」

「……………」

刻と王子……二人の間には明らかな溝ができていた。無理もない。王子は元『Re—CODE』で、刻にとって寧々音姉の仇である虹次の同志だつた者。簡単に埋まるような溝ではない。優は二人の様子を横目にしながらも、何かしようとはせず部屋に戻ろうとした。

「優、待ちやがれ」

「王子……？ 何か用——」

突然、王子に呼び止められた。優は何事かと思ひ、振り向いた……その瞬間。

「和食、魚、五品以上」

「……………」

三つの単語を淡々と口にする王子。一見すると意味がわからないが、優はその意味がわかつたらしく真剣な目つきに変わる。そして、彼はスツと目を閉じた。

「久しぶりだからつて容赦はしないってことか……。条件はわかつた。やつてやる」  
「それでいい。言っておくが、腕が落ちてたりしたらぶつ殺すぜ？」

「わかつてる」

そう言うと、優はリビングに戻っていった。二人の様子を偶然、見ていた桜は王子の物騒な発言が気になり、こっそりと王子に尋ねた。

「お、王子殿……？ 一体、なんの話をしていたんですか……？」

「ん？ 深い意味は無いさ。それに、少し待てばいいことだ。そうだな……一時間も待てばわかるさ」

「はあ……」

意味深なことを言うと、王子はリビングを後にした。桜は意味がわからず、ふと時計を見上げた。今は午前六時前。普通に起きたとしたらかなり早い時間だ。だが、時間を見て何ががあるのかはさっぱりわからない。桜は考え込もうとしたが、上手く考えがまとまらないため部屋で休むことにした。

そして、きつちり一時間後……

「りよ、料亭なのだああああー！」

一時間が経ち、再びリビングに向かった桜が見たものはなんとも豪華な和食の数々だった。ふつくと炊き上げられた白米、わかめと豆腐の味噌汁、こんがり焼かれた焼き魚、綺麗に盛り付けられたホウレンソウのおひたし、きんぴらごぼう、ふんわりとした卵焼き……まさに一流料亭で出てきそうな食事だった。まだ見ただけだというのに、桜の口からは涎が溢れそうだった。

「いい匂いがしたと思っただら食事ですか」

「あー、腹減った。思えば帰ってから何も食ってないもんナ」

「なんや今日は気合入つとるなー」

すると、匂いに釣られて大神たちもやってきた。四人はいそいそと席に着くと、一斉に食べ始めた。

「美味しい！ この味噌汁……ダシが絶品なのだ！」

「きんぴらごぼうとか久しぶりだぜ。……はー、ちょうどいい味付け」

「この卵焼きも美味いで。ふわふわやし」

それぞれ食事を絶賛する桜たち。しばらく食事を堪能していると、これを作った人物についての話になった。

「しかし、王子も頑張りましたね。帰ってすぐだというのに、こんな食事を作るなんて」

「やはりこれは王子殿か……。やっぱり王子殿は料理が上手なのだな！」

「料理が上手くても、作った人間はクソヤローだけだな」

「まだ言つとるんかい。さつきみたいに素直に褒めたらえーやん」

「うるせえ！」

『渋谷荘』にいる者たちの中で、ここまでの食事を用意できる人物……それは彼らが知る限りでは王子しかいなかった。だからこそ、思いもしなかった。その予想が……間違っていると。

「おっと、少し出遅れたか」

「あ、王子殿！ 今日の朝食、とても美味しいです！」

「はあ？ 何言ってるんだ、桜小路。これ作ったのはオレじゃないぞ」

「え？」

王子の言葉に桜は目をパチクリさせる。すると、王子は平然と言葉を続けていく。

「オレはずっと『渋谷』に昨日の落とし前をつけてたからな。料理する暇なんてなかったぞ」

「い、いか……にも……」

よく見てみると、王子の後ろには釣り糸テグスで全身をグルグル巻きにされ、ボロボロになった会長の姿があった。何をされたのかは……想像するのも恐ろしい。

「そ、そうなのですか……？ では、これは誰が……」

桜が考え始めた、その瞬間……答えが部屋に顔を出してきた。

「オレじゃあ不満か？」

「や、夜原先輩イイイイ!」

桜の眼に映ったのは、エプロンを身に纏った優。驚愕の事実には、桜は声を大にして叫び散らした。

「夜原先輩……料理ができたのですか!」

「いや、前に言っただろ。一人暮らしてから自炊はするって」

「こんなにお上手だとは聞いていません!」

「自分から『オレは料理が上手い』なんて言うわけないだろ……」

驚きすぎて慌てふためく桜に対し、優は呆れたような表情で言葉を返していく。そんな二人をよそに、王子は自分の分の卵焼きを手に取り、口に運んだ。しっかりと味わってから飲み込むと、何食わぬ顔で口を開いた。

「和食で、魚も使つてて、品数も五品以上……味も前より上がってるな。……やるじゃねえか、優」

「当たり前だろ。下手なもの作って、ぶつ殺されたくないからな」

王子にしては珍しく肯定的な評価を受けても、平然としている優。桜は完全に置いていかれていたが、王子が最初に呟いた言葉聞いて、ようやく一時間前の謎が解けた。

「も、もしかして王子殿が言っていたあれは……料理の条件だったのですか!？」

「そうだ。優の料理の腕はオレといい勝負だからな。たまに、お互いに条件を出し合って料理を作るのさ。特に和食は優の得意分野だ。オレが本気出しても、和食だと優には敵わない」

「よく言うさ。逆にオレは王子の洋食には勝てないからな。あんまり作らないとはいえ、あそこまで差があるとは思ってなかった」

意外なところで、意外な優の特技が判明した。王子が完全に認めるほどの腕前という事実に、桜は完全に呆然としてしまっていた。

その後、彼らは優が用意した食事を一気に平らげ、それぞれがやるべきことへと向かっていった。

「さて、今日も修業を始めようか」

「ちよつと待て！」

食事も終わり、ロストから戻ったため地下室での修業に向かった大神たち。いざ修業を始めようと会長が声をかけると、今度は刻が声を大にして叫んだ。会長はわけがわからず、首を傾げながら尋ねた。

「どうしたんだい？ もしかして刻君、疲れて修業できない？」

「違ーよ！ オレが聞きたいのはそこじゃねえ！ なんでコイツがここにいんだヨ  
！」

「……優、誰のことかわかります？」

「わからん」

「お前だ、お前！ 一番新入りの弟弟子！」

直接ツッコまれても知らん顔をする優。そう、刻が騒いでいるのは……なぜ優がもう地下室に来れるのか、ということである。

「オレだって最初はあの恥ずかしいスーツ着て体力強化してたから、すぐに来れなかつたんだゾ！ お前も覚悟決めて『にやんまる』スーツ着て買物にでも行ってこい  
！」

「と、言われてもな……」



困ったようにため息をつく優に対し、刻はその様子がさらに鼻につくようであり、それを募らせていた。すると、今まで黙っていた会長が二人の間に割って入ってきた。

「まあまあ、刻君。そのことについては私が説明しよう。答えは単純。優君には体力強化は必要ない、って私が判断したまでだよ」

「ハア!?!」

会長が簡単に理由を説明したが、とても納得できる内容ではない。現に、刻は先ほどよりも苛立っているのが見ただけですぐわかる。

「ダ・カ・ラ！　なんでコイツには必要ねーんだヨ！　納得できるように説明しろ！」  
「そこに関してはオレも同意ですね。人が嫌々ながら通ったステップを無視して同じ位置に来られるというのは、刻じゃなくても不満は感じます」

刻が会長に詰め寄ると、大神もそれに続いてきた。知らん顔をしていたが、彼も『にやんまる』スーツをしっかりと着た一人だ。それを勝手に免除と決めたからには、相応の理由が無いと彼も納得できないのだろう。

すると、会長はやれやれとため息をつくと、二人に背を向けて歩き出した。そして、背を向けた状態で話し始めた。

「……………そうだね。それじゃ、今日の修業は中止して、一つ話をしようか」

「話……………」

「そう、なぜ優君に体力強化が必要なのかね。その前に……」

修業を免除した理由を話そうとした会長だったが、くるりと体の向きを変えて優の方を見る。そして、真剣な雰囲気を漂わせながら彼に尋ねた。

「優君……全て話していいね？」

「……ええ。そうしないと、納得はしてもらえないでしょうから」

会長の質問に、優は静かに目を閉じて答えた。わざわざ優に聞いたということは、その理由を説明するには優個人の事情にまで踏み込む必要があるということ。そして、優はそれを了承した。認めてもらうために、己を晒すことを決めたのだ。

「わかった。では、話すでしょう。まず、二人とも……異能を持つ者は生まれつき異能を持っているということは理解しているかな？」

「ハ？ なんの話だよ……」

「いかにも、これが最初のポイントなんだよ」

「……まあ、知っていますよ。異能は先天的なもので、持つ者と持たない者がいますから」

そう、大神の言う通り、異能者は生まれた時から異能を持っている。ある程度、成長してから発言したり、誰かから与えられるということは普通ならあり得ない。それは、全ての異能者に通じることだ。

「その通りだね。そして、それは優君も同じことだ。彼も生まれつき『脳』という異能を持つて生まれてきた。……だが、この『脳』が厄介だったんだ」

「どういうことですか？」

「優君の『脳』の異能は、自らの『脳』のリミッターを外して身体能力を向上させる異能。そして、この向上した身体能力というのは普段はリミッターによつて隠されている。……でも、これつてなぜだと思おう？ ハイ、刻君！」

「学校の授業かよ……。えーっと、確か人間の身体が壊れないように、ダロ？ もしリミッターがなくて常にフルパワーだったら、人間の身体はあつという間に壊れちゃうらしいカラな。だから人間はどんなに頑張つても『脳』全体の三割程度の力しか出せねー」

「いかに、その通りだよ」

刻の答えに会長は拍手を送る。刻の答えは正しく、人間の『脳』にかけられているリミッターというのは、その身体を守るためにかけられている。本来持つ力に耐えられるほど、人間の身体は丈夫ではない。リミッターを外した人間の力がどれほどのものか……優の力を間近で見ている大神たちはよくわかっていた。

「ここで異能の話に戻るけど、いくら生まれつき異能を持っているからと言って、それを完全にコントロールするには時間がかかる。自分たちにも覚えがあるんじゃないかい？ 幼い頃、上手く異能を扱えなかったことが。それか、それゆえに虐げられた異

能者の話とかね」

「……………」

「……………」

会長の言葉に、大神と刻は何かを思い出したように黙ってしまった。会長の言うように、彼らにもあるのだろう。異能を上手く扱えなかったことも、虐げられた異能者の話も。虐げられた異能者に関しては、記憶に新しい者としてリライなどがある。彼女も『分泌』という異能を扱えず、多くの人から虐げられてきた。その他にも、遊騎や優も同様の経験がある者たちである。

「そして優君も同じだったんだ。彼は幼い頃、異能を上手く扱うことができず……何度死にかけてきたんだ」

「死にかけてきた……………」

「どういう、ことダヨ……………」

「……………」

急な話の展開に二人は呆然とし、優は何かを思い出したように静かに目を瞑っている。すると、会長は重苦しい様子で言葉を続けた。

「簡単な話だよ……。幼い頃の優君は異能が上手く扱えなかったゆえ、常にリミッターが解除された状態で日々を過ごしてきた。まだ身体が出来上がってもいないほど子どもだった彼は……。一步、歩くだけでも足は折れ、拳を握っただけで指の骨が全て折れるなど想像を絶する過酷な日々を送っていったんだ」

「……………」

「な……………」

今まで知るはずもなかった優の隠された過去。だが、それは予想のはるか上をいくものだった。

「ちよ、ちよつと待てヨ！ 確かにガキの頃は異能を上手く使えねーかもしれねーが……………それはさすがに盛りすぎダロ!？」

「第一、そんなことが続いたらすぐに死んでしまいますよ。話を盛るにしても、もう少し

しリアルな内容を——」

「事実だ」

会長の言葉が信じられず、嘘であると主張する大神たちに対し、優は冷静な顔つきで端的に告げた。その端的な言葉が、冷静な顔が……紛れもない真実であると物語っていた。

「オレは子どもの頃、何十回と入院を繰り返した。全身の骨も筋肉も……全てが数えきれないほど壊れていった。何度、死にかけたかも覚えていない。それに、被害があるのはオレの身体だけじゃない。力の制御ができないオレの行動は周囲をどんどん傷つけていき……オレは孤立するしかなかった」

「……マジ、なのかよ」

「……………」

優本人からの重苦しい雰囲気という言葉……それは何よりも重みを感じるものであり、刻と大神はほとんど言葉を失った。そして、優はそのまま続きを話し始めた。

「だが、今のオレが戦えるのはその子ども時代のおかげだ」

「……どういうことですか？」

「いかにも、それこそまさに超回復ってことさ」

急に話の中に割って入ってきた会長。修行に関することとなれば自分が説明するつ

もりらしく、そのまま言葉が続ける。

「優君は幼い頃、全身の骨や筋肉が壊れては治り、壊れては治りを繰り返し、その度に優君の身体は負荷に負けまいと強くなっていた。……つまり、優君の身体はすでに体力強化も必要ないほどハイスペックということさ」

「ッ……！」

ようやく大神たちは理解した。優が体力強化を免除された理由……それは最初に会長が言った通り、まったくと言っていいほど必要ないからである。というより、すでに身体が出来上がっている状態なのだ。そして、優の身体に隠されたもう一つの事実を会長は告げる。

「まあ、ハイスペックなんてものは超えてるかもね。現に優君の身体は、どんなに『脳』のリミッターを解除した状態を続けても、ほとんど無害になっているからね」

「……それは当然でしょう？ 『脳』のリミッターが解除されれば身体能力が強化される。身体の丈夫さだって——」

「——されないさ」

ポツリ、と優が呟く。小さく、静かなはずのその声は確実に二人の鼓膜に届き、知られざる真実を伝えた。

「オレが『脳』を使ってリミッターを解除したとしても、強化されるのは身体能力だけ。

……身体の丈夫さに関しては何れも強化なんてされちゃいない。じゃなかったら、子ども頃に何度も死にかけるわけないだろう」

「ちよ、ちよと待てヨ！　じゃあ、何か!?　優の身体は、リミッターを外して強化された力にも耐えられるくらい強えつての力!？」

「いくらなんでも、そんなのはあり得ませんよ……。それこそ人間の限界を超えていく」

力は強化されても身体の強さは強化されない……。その言葉に刻と大神は一斉に反論する。それが真実だとするならば、優はすでに人間を超えるレベルの身体を持っているということになる。だが、今までの話を全て考えれば、真実であると思えるしかない。だとしても、彼らは納得できなかつた。

「そうだ……。証拠でもあるつてのかヨ！　自分の身体は限界を超えてるつてヨ！」

「……あいにく、証拠はない」

「ほらな！　だつたら信じるわけには——！」

「だが、証拠は無くても……。確信していることはある」

そう言うのと、優は静かに掌を自分の胸に当てて、二人のことを真つ直ぐと見据えた。



「オレの身体はもうとつくに限界を迎えている……。もし今後、一回でも身体が壊れれば……。二度と元には戻らない。完全に壊れるだけだ」

『ッ……………！』

その言葉に、二人は息を呑んだ。あと一回でも身体が壊れば元には戻らない……。それは、二度と戦えないということの意味する。つまり、彼にとつて闘いとは一つひとつがギリギリのものであるということであり、少しでも油断して壊されれば次は無い。彼は常に……。生命を懸けて闘っていた。

「オレは今までの闘い……。かなりの傷を負ってきたが、それでも身体が壊れるほどのものじゃなかった。だが、今回は違う。最悪の場合、この修業だって無理をしたら身体

が一気に壊れるかもしれない。だが、オレはそれでも構わない。全て承知の上で会長に弟子入りしたんだからな」

「……生命よりも大事な覚悟、というわけですか」

「そうだ」

大神の問いに、優は真つ直ぐな眼を向けて答える。その姿は、彼は覚悟している者であるということを感じさせるものだった。

「……ケツ。『コード：07』のくせに……言ってくれるじゃねーか」

「……………」

優の真実を知った刻は、少しずつ普段の調子を取り戻した様子で言葉をかける。すると、刻は優に向かって人差し指を突き立てた。優が意味を考えるよりも先に、刻が声を荒げて宣言した。

「指一本だ！ 指一本分くらいはテメーが生命懸けてるって認めてやるヨ！ だが、絶対に忘れんじゃねーぞ。生命懸けてんのはテメーだけじゃねー。オレと大神だつてそうなんだからナ！」

「……当然だ」

やり方は乱暴で、素直とは思えない言い方だったが、刻は確かに「認める」と口にした。それは、今まで優のことを「犬」と扱っていた頃と比べたら大きな変化と呼べるも

のだった。

「まったく、面倒な言い回しですね。普通に言えないんですか」

「アア!? うるせーぞ、大神!」

「いかにも、貴重なシーンを見れちゃったんだな」

「クソネコはもつと黙ってる!」

大神の文句を発端に、いつもの調子を取り戻していった大神たち。そして、その様子を上から見守る者たちもいた。

「ななばん……大変やったんやな」

「……大変なのは皆、同じだ。それに、生命懸けてんのだつてな」

「……………」

そこにいたのは、遊騎と王子、そして平家だった。三人は大神たちの修業の様子を見に来ていたため、彼らも優の過去について聞いて聞いていた。彼らも話が続くことで驚いていたが、今の彼らを見て安心を感じているように見える。

「まあ、いいわ。いざとなったら、オレがななばん助けるし」

「大丈夫ですよ。優君はスペシャル☆ボデイですから。そう簡単に遅れは取りませ  
ん」

「……………」

安心したからか、その場を後にして上に戻る三人。遊騎と平家が先に戻ると、王子は再び優のことをジツと見つめた。瞬間、ある思いが頭をよぎった。

（死ぬ気でやれよ、優。半端にやったら最後……。『捜シ者』たちにその身体……。壊し尽されるぞ）

『捜シ者』<sup>敵</sup>たちの強さを知る王子だからこそ感じる重い……。それが現実となるかどうかは、まだわからなかった。

「優、今朝の味噌汁のダシを教えてくださいませんか？ 参考にしたい」

「ああ。報酬は……。夕食に出たハンバーグのソースの作り方でどうだ？」

「仕方ねえな……。よし、交渉成立だ」

優からの告白も終わった後、修業は中止のはずだったが、やる気を出した大神たちの希望で短時間だけ行うことになった。短時間だったため誰もロストすることは無く、すぐに夕食の時間になった。その夕食も終わったかと思うと、キッチンでは王子と優がお

互いに料理の腕を高めるための意見交換会を行っていた。

「二人とも、とても仲良しなのだ。やはり趣味が合うと仲良くなれるのだなあ」

その様子を、桜はリビングで椅子に座りながら見ていた。それぞれが実際に材料を手に取りながら、ポイントを紙にまとめている。お互いに切磋琢磨するその姿は、桜の心をじんわりと温かくさせた。

「なあ、『子犬』。見えるか？ 夜原先輩と王子殿のあんな楽しそうな顔、見たことが無いのだ」

「ワン！」

自分では気付けなかった部分や意外なポイントの発見、互いに軽口を交えながらの意見交換会は自然と二人を笑顔にさせ、和やかな雰囲気を漂わせていた。『子犬』もそれを見て、桜と同じようにほっこりとした表情を見せる。

「あんな風に笑顔で話す姿、とても貴重………ん？」

ふと、ある違和感に気付く。急に、何か大切なことを見落としているという考えが桜を支配する。それが果たして何なのか。桜は必死に考え込むがわからない。ならば、と桜は違和感を感じた時に見ていた王子と優の姿をもう一度見る。だが、やはりわからない。二人は普通に話しているだけだ。時に笑い、時に驚き、時々目も合わせながら話して

「あ、れ……？」

二人の姿を見て、桜の中で違和感が少しずつ形作られていく。少しずつ……彼女は自分の頭の中で情報を整理していく。

（夜原先輩と王子殿が話している……。楽しそうに、目を合わせながら。……そういえば、夜原先輩は女性とだけは目を合わせられない……。そして王子殿は……。……女性！）

桜の中で違和感が確信に変わった。間違いない。優は今……。女性である王子と目を合わせている。しかも、どんなに目を合わせても倒れることも無く。桜は、自分の身体に冷や汗が流れるのを感じた。

「こ、この二人……。ただの仲良しさんではない気がしてきたのだ……。い」

思わず真剣な顔つきになる桜。その眼は、しっかりと王子と優の二人に疑惑の視線を送っていた。

## code : 42 “特別” な君

「王子殿！ おはようございます！」

「おう、桜小路。いつも早いな」

優が新たに会長の弟子となり、衝撃の過去が語られた日の翌日。『渋谷荘』のリビングには王子の手によって綺麗に配膳された朝食が用意されていた。そこに一番乗りでやってきた桜は、満面の笑みで王子と挨拶を交わした。

「おお！ 今日の朝食は和食なのだ！」

用意された朝食を見ると、なんとも体に良さそうな和食の数々が並んでいた。作ったのが料理上手の王子ということもあり、桜は思わず顔がゆるんだ。そんな桜を見て、王子は調理用具の片づけをしながら声をかける。

「今日のオススメは味噌汁だな。優からダシの取り方を聞いて、それを参考にして作った。だから、いつもより少しは美味しいはずだぜ」

「それは楽しみです！ では、さっそく……！」

「朝から元気な奴だな、お前は」

作った張本人である王子の口から出たオススメの言葉に、桜は意気揚々と席に着い

た。いざ食べようとした、まさにその時……呆れが入った声が桜の耳に届き、桜の動きはピタリと止まった。そして、反射的に声の方向を向き、その者の名を呼んだ。

「夜原先輩！ おはようございませす！」

「ああ、おはよう……。ホントに元気な奴だな……」

桜は王子の時と同じように挨拶をすると、優は相も変わらず目を合わせようとはせず、桜の元気に圧倒された様子で挨拶を返してきた。

すると、王子は片づけを中断して優のところへ歩いてきて、優の分の味噌汁を指差した。

「優、ちょうどよかった。今日の味噌汁、昨日聞いたダシの取り方を参考にしてみたんだ。お前の意見を聞きたい」

「わかった」

王子の頼みに優は簡潔に返事を返すと、味噌汁を少し口の中に注ぎ込む。集中しているのか、口に含んでいる時は目を瞑ってよく味わっている。だが、その時間は大して長くはなく、優は飲み込むと王子の方に向き直ってから意見を口にした。

「十分、美味しい……が、少し薄めを感じるな。材料の量を調整してみたらどうだ？」

「やっぱり少し薄いか……。オレも味見した時はそう思ったんだ。少し味噌を多めにしてみるか……」



味噌汁一つに対して、真剣な雰囲気話し合いを始める二人。桜は二人を横目に朝食を食べ始め、王子の料理を堪能していた。その出来栄は素晴らしく、味噌汁も二人が言うように薄いなどとは特に感じなかった。

(お二人とも、料理に関しては強いこだわりがあるのだな……)

自分では感じられない些細な違いについて議論する二人の姿はまさに真剣そのものであり、その姿を見るだけで桜は二人が料理に持つ「こだわり」を強く感じた。

と、そんなことを思いながらも桜の中には、昨日も感じた一つの疑問が浮かんできた。

(やはりだ……。夜原先輩、王子殿と普通に目を合わせて話しておられる)

目の前で話す優と王子。二人の視線は互いの眼を正面から捉えていた。先ほど自分が挨拶した時には一瞬たりとも眼を合わせることは無かったというのに、と桜はついさっきの出来事を思い出しながら疑問を膨らませていく。

そして、疑問をこのままにしておけないという彼女の生真面目さが、彼女に一つの決断をさせた。

(この二人の関係……調べてみる必要があるのだ！)

だが、桜は気付いていなかった。その決意が……とんでもない結果を引き出してしま  
うということに。

「はあああー！」

「まだまだあー！」

地下の修業場では今日も大神たちの修業が行われていた。無数のカラクリ珍種を相  
手に、大神は『青い炎』で全て燃え散らせ、刻は『磁力』で粉々に粉碎していった。そ  
して、彼らと同じく……

「はあっ！」

目にも止まらぬ速さの蹴りで周囲のカラクリ珍種を次々と破壊していく優。その勢  
いは大神と刻にも引けを取らない。ほとんど同等だ。

「……つたく、本当に限りなく出てくるな」

「なんだよ、優。もうへばったのかヨ。じゃあ、邪魔にならねーように引っ込んでナ！」

「そうですね。なんだつたらロストして早めに切り上げてもいいですよ」

「舐めるなよ、お前ら……。まだまだ余裕に決まってるだろ！」

いきなり自分たちと同じ修業に入ること大神と刻は最初こそ納得していなかったが、優の過去を知ったこともあり二人はすでに了承していた。しかし、だからといって優しくするつもりなど無く、あくまで対等の存在として互いに切磋琢磨していた。

「なんだか、夜原先輩が修業に参加してから大神も刻君も張り切っていますね」

「うん、その通りなんだな。競い合う相手が増えるということは、それだけでやる気の向上につながるからね。それに、みんな負けず嫌いだから効果はさらに上々だし」

大神たちがいる修業場を見下ろせるギャラリーで修業の様子を見守る桜と会長。非難などせず互いに互いを意識しながら自分を高めていこうとしている三人の姿を見て桜は思わず安堵の息を洩らし、会長も安心した様子で三人を見守っていた。

「……ところで会長、一つだけ聞いていよろしいですか？」

だが、桜の中には一つの謎があった。どれだけ自分で考えても解決できそうにない大きな謎が。それを解明すべく、隣にいる会長に向かって神妙な顔を向けた。

「いかにも、なにかかな？ 私に答えられることなら答えてあげるよ」

「ありがとうございます……。実は、夜原先輩のことなのですが……」  
「……………ふむ」

優のことについて聞きたい、という桜の言葉に会長は少し考え込む。だが、すぐに顔を上げて再び桜の顔を真っ直ぐと見る。

「いかにも、構わないよ。言ってみるといい」

「は、はい……」

緊張のせいか、桜の頬を汗が流れる。だが、桜はそれを拭おうともせず、自分の中にある謎を会長にぶつけた。

「夜原先輩が頭に着けているアレは……いったいなんなのですか？」  
『アレ』。そう言って桜が指差した先には、カラクリ珍種を破壊し続ける優……の頭に  
ある『にゃんまる』の顔と耳があるヘルメットがあった。

「ああ、アレ？ アレはいかにも、私特製『にやんまる』ヘルメットなんだな。優君のために緊急で作ったんだよ」

ぼむ、と自信満々に腹を叩く会長。心なしか、その表情も明るく見える。（注・着ぐるみ）

「おお、なるほど。『にやんまる』ヘルメットですか。しかし、夜原先輩のためとはどういうことですか？」

優が着けている物の正体がわかった桜だったが、今度はその理由について尋ねる。遊騎ならまだしも優が何の意味も無くあんなものを着けるはずはない……桜はそう感じていたからだ。

「実はね、このカラクリ珍種を壊す修業を普通にやっても優君にはあまり効果が無いんだ。『脳』はあくまで優君の『脳』に作用して身体能力を上げるだけで、カラクリ珍種も物理攻撃に対する耐久は強くはない。だから少し異能を使うだけでも優君は簡単にカラクリ珍種を壊せちゃうんだ。でも、この修業の目的はあくまでロストを繰り返すことで起こる超回復。だから、優君には異能を出しにくくさせる必要があったんだ。ここまではいいかい？」

「う、ううむ……。要するに、夜原先輩の『脳』は特別だから大神たちとは違ったことをする必要がある、ということですか……?」

「いかにも、それがわかっていれば問題ないよ」

今にも知恵熱を起しそうなほど考え込んだ桜。完全に理解はできていないようだが、大まかなことは理解できていたのだろう。会長はそのまま話を続けた。

「そして、その異能を出しにくくする方法として私が考えたのが、あの『にやんまる』ヘルメット。あの中には私の珍種血清が塗り込まれている。それを頭に被ることで、優君の『脳』に異能が伝わりにくくしているんだよ。今の優君は普段の倍近い異能を使わないと普段通りの力は発揮できないはずさ」

「倍……」

異能が作用する『脳』がある頭に珍種血清が中に塗り込まれているヘルメットを被り、異能を伝わりにくくして結果的に異能の消費を大きくする。つまり、今の優はとんでもなく燃費が悪い。会長の言うように、普段の倍近い異能を出してやつと普段と同じ力を出せるのだ。異能の消費量や疲労感は普段の比ではないだろう。

だが、こうすることで大神たちと同じ条件で修業することができ、強くなる道歩くことができると言える。見た目はともかくとして、強くなることを目指す優にとつてはありがたいことだろう。現に、優は『にやんまる』ヘルメットを被って修行をしている。

こうして、大神たち三人の修業は順調に進んでいった。

「しかし、会長。なぜまた『にやんまる』型なのですか？」

「いかにも、優君が喜ぶと思っただからだよ」

（できれば別のデザインが良かった……）

優の心の声は、会長には届きそうにも無かった。

「ふう……」

「夜原先輩、お疲れ様です。よければ、こちらを」

「ああ、悪いな」

ひとまず修業が終わると、桜は優にタオルと水を差し出した。優は目こそ合わせない

ものの拒否することなく素直に受け取った。ちなみに、修業が終わると同時に『にやんまる』ヘルメットは外している。

「しかし、夜原先輩はやはりすごいです。大神たちだつて修業を始めた頃は何度もロストしていたのに夜原先輩はまったくロストする心配がないのですから」

そう、この修行は異能をとんでもなく消費する。まあ、異能の超回復が目的のため異能を消費してロストすることこそが望ましいことなのだろう。だが、今の優からはロストする心配は微塵も感じない。普段の倍近い異能を使っているということを見ると、桜のように感心するのもわかる。

「……まあ、そう何度も優子<sup>アイツ</sup>に変わりがたくないからな。それに、異エネルギーには少し自信がある」

タオルで顔を拭いながら答える優。最初に話してくるあたりを考えると、本当に優子とは変わりたくないようだ。そう考えると、異エネルギーに自信があるというのも優子に変わらないうちに努力した結果なのかもしれない。

「だが、今はそれだけが理由じゃないがな」

「え？」

ボソリと呟いた優の言葉を桜は聞き逃さなかつた。優子に変わりがたくない、異エネルギーに自信がある。この二つの他にもロストしない理由があるという。しかも、今だからこそ



ある理由。桜はそれについて聞こうとしたが、それより前に優が自ら口にした。

「はつきり言つて……王子がいる『渋谷荘』でロストはしたくない。だからなのかな」

「お、王子殿が理由なのですか!？」

フツと笑みを浮かべながら呟く優。その中に出てきた人物の名を聞いて、桜は驚きを隠せなかった。

ずっと傍で護ってきた。なんのことはない、ただ彼のために。しかし、傍にいたからこそ知っている。彼の途方もない強さを。自分を含め、普通の異能者がどう足掻こうと

埋められるはずもない力の差を。それを知る彼女にとって、今の護るべき者たちの行いは茶番としか言えなかつた。

彼——『捜シ者』には誰であろうと勝てない。かつて守護神であつた自分ですらも。それが彼女——八王子 泪の持つ答えである。

「……………」

『渋谷荘』地下の修業場まで続く階段を、王子は一人で下つていた。行き先はおそらく修業場だろう。以前、そこで行っている大神たちの修業を「茶番」と言つたが、決して無関心というわけではない。隠れてではあるが、時々こうして様子を見に来ているのだ。

だが、今日に関しては少し違つていた。修業の様子を見に来たのに変わりはないが、今回は特に見ておきたい人物がいる。そうまで思うことは今までなかつたが、今回は違つた。

そうなつたいきさつを、王子は歩を進めながら脳内で再生し始めた。

それは、まさに昨日の夜のことである。優の身体の秘密について語られ、王子はそのことについて管理人室で会長と話をしていた。

「しかし、意外だったな。まさか優もお前に弟子入りするとは」

「いかにも、世の中は意外なことではいっぱいなんだな」

壁に寄りかかって立つ王子と対照的に、会長は座りながらいそいそと例の『にやんま』ヘルメットの製作に取りかかっていた。王子は会長の製作物については気にせず、そのまま話を続けた。

「だが、どうする気だ？ 優の身体のことについてはオレと遊騎、平家も含めて『コード・ブレイカー』全員が知った。だからといって何をするということはないが、修業の内容については考えた方がいいんじゃないか？」

「ん？ どうしてだい？」

「……無茶をして『捜シ者』との闘いの前に身体をぶっ壊したら元も子もねえだろうが。それに、そんなことになったら優は『コード・ブレイカー』でいらなくなる。そしたら——」

「いかにも、私は修業でとことんやるつもりだよ。それこそ、彼の身体が壊れるまでね」

「な——！」

優の修行に関する王子の提案を、会長は製作を続けながら一蹴した。王子の提案は妥当なものだ。これからに控えている『捜シ者』、『Re—CODE』との闘い。彼らの修業はそれに向けてのものである。それなのに、その前の修業の段階で身体が壊れてしまえば何の意味も無い。

だが、会長はいつも通りの様子で言った。「とことんやる」と。その言葉に王子は思わず言葉を失ったが、会長は言葉を続けた。

「それが優君自身の願いでもある。彼は『身体を氣遣つての加減は必要ない、この身体を壊す勢いで鍛えてほしい』と言っていた。なら、私は彼の願い通り、とことんまでやるよ。そうしないと失礼というものだしね」

会長が語った優の本心。それは、強さを求める彼らしい言葉だった。そして、もし修業で彼の身体が壊れてしまったとしても、彼は「自分の力量不足」とでも言つて潔く受け入れる……そんな思いも感じられる言葉でもあった。

しかし、それでも納得するかどうかは別である。

「……だが、それでも——！」

「王子」

顔をしかめる王子の言葉を、会長は強めの言葉で制した。同時に、製作していた手も

止め、ゆっくりと王子の方に向き直った。そして、互いに視線が合った状態で会長は真剣な様子で言った。

「君と同じ……優君にも全てを捨てるだけの覚悟があるということだよ」

「ッ——！」

会長のその言葉を最後に、その日の二人の話は終了した。いや、終了せざるを得なかった。会長の言葉に、王子は完全に言葉を失った。「全てを捨てる覚悟」……どんな言葉も、その言葉の前では何の意味も持たないことを王子は知っている。

だが、悔しさか情けなさか、王子は強く拳を握った。

（優……）

そう、特定の人物とは優のことだった。会長との話から、彼の覚悟を改めて知った王子。彼の覚悟を知った以上、今の王子に彼の修行についてとやかく言う気は無かった。だが、それでも気にはなるようで、こうして様子を見に来たというわけだ。

そして、気付くとちようど修行場についていた。王子はギャラリーに足を踏み入れるが、どうにも修業をしているような音がしない。下を見てみると、どうやら休憩中のようにだった。王子は自分のタイミングの悪さを呪いながら、ギャラリーを出て再び階段を下った。

(しょうがねえ……。一発、気合いだけでも入れてやるか)

そんなことを考えながら、王子は階段を下つていき、修業場への入り口が見えた。そのまま中に入ろうとした……。まさにその時。

「お、王子殿が理由なのですか!？」

「は?」

突然、桜の叫び声が聞こえた。桜が修業場にいることについては、単純に様子を見て来ただけだと納得できる。だが、自分の名前を口にしながら叫んでいることについては納得できるはずもない。王子は話の内容を知ろうと、入るのをやめて聞き耳を立てた。

すると、桜の話し相手が応じ始めた。

「…………お前、少しは声のポリュームを下げろ」

(優…………?)

話し相手の声を聞き、それが優であると悟った王子。だが、ますますわからない。な

ぜ、桜と優が話すことで自分の名前が出るのか。そして、自分が何の理由なのか。王子は聞き耳を立て続けた。

「す、すみません……。驚いてしまって、つい……。ですが、なぜ王子殿が理由なので  
すか?」

「話す気は無い」

「そ、そうですね……」

一方、桜と優は王子が聞いているとは知らず、話を続けていた。優は王子がいるところでロストしたくないということを知ることができたが、それがなぜかはわかりそうもなかった。しかし、桜の中では優と王子の関係についての謎が膨らむばかりだった。

(ううむ……。どうすれば知ることができるのだ……。答えじやなくても、せめてヒントだけでも……)

優が「話す気は無い」と言ったからには、まず話さないというのは桜も学習している。しかし、ダメだから諦める、という考えは桜の中には残念ながらほとんどない。現に、彼女は大神の人殺しをやめさせようと奮闘しているし、鍵キの謎を解くために『渋谷荘』に住んでいる。

思い立ったら行動。この精神で彼女は突き進んできた。そして、まさに今も。

「夜原先輩!」

「なんだ」

「夜原先輩は王子殿のことをどう思っているのですか!？」

「は?」

(はああああ!?)

桜の直球な質問に、優は小首を傾げ、王子は顔を真つ赤に染め始めた。一方、桜は真つ直ぐと真剣な視線を優に向けていた。優は目こそ合わせないが、その真剣さは感じ取ったのだろう。頭をかきながら一つだけ尋ねた。

「なんで、そんなことを聞く?」

「気になるからです!」

清々しいくらいシンプルな返答だった。そして、優は悟っていた。こうなった桜は手ごわい。いくら話さないとと言っても食いついてきて、最終的には周りを巻き込んでくる。つまり、話さざるを得なくなる状況を作り出してくる。そうなった際の精神的ダメージはかなり大きい。

また、優は桜が王子とのかたまりをここまで聞いてくることに対しては自業自得であるとも感じていた。

(さつき、バカ正直に王子を出したから……気になるのもしようがないか)

今の手ごわさ、そして自業自得ということもあり、優は深くため息をついてから呟い



た。

「……今回だけだからな」

「は、はい！」

優の言葉に桜は表情を明るくする。すると、優は言葉をまとめようと腕を組んで考え始めたが、そんな優を珍しがる人物が一人。

(……桜小路の質問には驚いたが、こつちにも驚いたな。あの優が素直にあんな質問に答えるなんて。だが、あいつのことだ。答えなんてたかが知れてる。オレと同じ、ただの同業者仲間としか——)

と、冷静な様子で答えを予想する王子。しかし、その冷静さも長くは続かなかつた。次の瞬間に発せられた……優の答えによつて。

「女としては“特別”な存在……とでも言えばいいのかもな」

(ほらな、女としては“特別”な………え?)

優の答えに、王子は状況が理解できずに二、三度瞬きを繰り返した。

「女性としては『特別』な存在……ですか？」

「ああ。王子本人に言ったら『女扱いすんな』とでも言われそうだから言うなよ。じゃあ、オレは修業に戻るからな」

「は、はい！ お気をつけて！」

実は聞いていた……などとは知る由もなく、優は修業に戻るべく『にやんまる』ヘルメットを取りに行った。見てみると、大神と刻も改めてウオーミングアップを始めている。桜は素直に言うことを聞き、入り口から戻ろうとした。

すると、意外な人物を発見した。

「お、王子殿!？」

「……………」

入り口の傍で静かに立つ王子の姿を発見した桜は、思わず声を上げた。しかし、王子

からは何の反応も見られない。優の答えの意外さに思考がショートしているようだった。それを知らず、桜は恐る恐るといった様子で王子に近づいていく。

「お、王子殿ー……？」

「……………」

王子の目の前で手を振ってみるが、やはり反応はない。どうしたものかと桜は考え始めた。それと同時に、ショートしていた王子の思考が徐々に動き始める。

（お、女として “特別” ……？ それって、つまり……つまり……………）

この時、王子の脳内では以前テレビで見たドラマの記憶が蘇った。ドラマ自体はベタな恋愛ドラマで、探せばどこにでもあるようなものである。そして、その最終回で放送されたあるワンシーンが脳内で再放送された。

「僕にとつて君という存在は “特別” ……！ そう、 “好き” という “特別” な感情を抱くことができる唯一の人なんだ！」

「 “好き” ……この単語が王子の脳内で何度も反響され……………爆発した。」

「あ、が……………○※★◇#\$\$?!?」

「お、王子殿!」

突然、王子の顔がタコのように真っ赤になり、湯が沸いたやかんののように勢いよく湯気が出てきた。桜は照れた王子を見たことがあるが、これはどう見てもその比ではない。大丈夫かと声をかけようとした桜だったが、それよりも早くに王子が動いた。

「うがああああああ!」

「ぬおっ!」

遊騎の音速並ではないかと思える動きで王子は桜に頭突きをお見舞いする。さらに、それだけでは止まらず、王子は頭突きで周囲を破壊しながら故障した機関車のように暴走し始めた。

「んん? なんだか入り口が騒がしいね」

「桜小路さんが何かやってるんでしょう。気にする必要はないと思いますが」

「いや、桜ちゃんにしては妙ジャネ? 何かをぶっ壊してるヨーナ……」

修業を始めようとした大神たちだったが、破壊音を耳にして違和感を覚える。それが音の出所である入り口を凝視する。そして……地獄を目にした。

——ドガアアアア!

「キヤアアアアアア!」

「お、王子!?!」

「なんで急に暴走してんだヨ!?!」

「桜小路の奴が何か言ったのか……!?!」

原因はあなたです……など言えるはずもなく、王子は勢いのままに突進していき……

「いかにもっ!?!」

「ぐあっ!」

「イデエ!」

会長、大神、刻の三人にも頭突きを喰らわせた。そして、暴走して見境がなくなった王子は残った一人である優を視界に捉え……

——ドゴオ!

「またも頭突きを喰らわせた……はずだった。」

「い………つてええええええ!」

優に頭突きをした瞬間、額を押さえて悶絶し始める王子。一方、優は額に少し跡が

残っているもののダメージは少しだけのようで平然と立っていた。

「あー……王子、大丈夫か？ オレは身体がかなり頑丈だから、オレにだけは頭突きしない方がいいぞ……って今さらか」

申し訳なさそうに頬をかく優。しかし、当の王子は痛みで悶絶してそれどころではない。しかし、いくら『脳』の影響で数えきれないほどの超回復を繰り返してきたとはいえ、あの王子の頭突きをものともしないと恐ろしいものである。

「あ、頭が……！」

「……ほら、立てるか？」

「あ、ああ……。すまな——」

悶絶する王子を見ていられなくなり、優は王子に手を貸そうとする。同時に、痛みのおかげで王子の暴走も少しずつ収まってきていた。そして、王子は痛みを耐えながらも差し出された手を取ろうと、身体を向き直しながら手を伸ばした。すると……

「……？」

「あ、な……ゆ、優……？」

どうやら、痛みのせいで手を差し出しているのが優だと気付いていなかったらしく、優の顔をバッチリと真正面から見てしまった。瞬間、やっと静まってきた感情が再び蘇り……

「う、うるせえ！ 嬉しくねーぞ、バカヤロー！」

「はっ。」

優が理解するより早く、王子はダツシユで修業場を後にした。この日、死屍累々と化した修業場ではこれ以上、修業が行われることがなかったという。

## code : 43 不協和音と夏の夜

『渋谷荘』で迎える平日の朝は、入居者である五人が洗面所に揃ったところで賑やかさを増していく。

「おい、遊騎。それはオレの歯磨き粉——つて、ギャアアアア！ オレの眉毛がアアアア！」

「ほんのちよつとだろ。それくらいで騒ぐなよ」

「よんぼんは元氣や、な……………ZZZ」

「見てくれ、大神！ 卑弥呼！」

「ああ、それならわかります。ですが、それよりも早く準備した方がいいですよ」

ある者はキツチリと身だしなみを整え（今回は失敗しているが）、ある者はそんなことには無関心な様子で淡々と洗面所を後にし、ある者は眠気に勝てずに立ったまま寝始める。そして、またある者は自らの長い髪を活かした物まねを披露し、それを見ている者は反応を返しながらも準備するように言う。

常に同じやり取りというわけではないが、彼らはいつもこのようにして朝の準備を進めていく。だが、もし少しでも何かに気を取られて遅くなるものなら……



「オラ！ さっさと準備しろ、ノロマ共！ オレがいる限り、遅刻なんて許さねーからな！」

「痛え！」

「……あ。目え覚めたわ」

「王子殿、いつてきますなのだ」

「なんでオレまでこんな目に……」

『渋谷荘』の主直々のお叱りが待っているため、できるだけ遅くならないように努めている。しかし、お叱りが来るタイミングに居合わせないほど遅く来れば結果的に何もない……そう考えている者もいる。

「いや、良かった良かった。あと一歩の差で屍にならずに済——」

「テメーはさっさと起きろ！」

「いかにも!？」

柱に隠れてやり過ぎそうとした会長だったが、すぐに王子主に見つかりお叱りを受けた。世の中そう上手くはいかないのだ。

「ちくしよ〜！ オレの眉が〜！ 歯磨き粉も遊騎に使われるしヨ〜！」

一方、刻は眉のセットを失敗したことで歯磨き粉を勝手に使われたことを嘆いていた。そんな刻を見た桜はなんとか元気づけようと声をかける。

「刻君、心配しなくていいぞ。眉なんてすぐに生えるし、皆の日用品は王子殿が買い置きしてくれているのだから」

「……知らねー。別に頼んでねーし」

しかし、王子の名前が出た瞬間に刻の様子は一気に冷めたものとなった。王子の過去が判明した一件以来、二人の距離感はかなり遠いものとなっている。かつて自らの姉を手にかけて男を同志と呼ぶ王子のことを、刻はどうしても許すことができないのだろう。王子の方も言い訳も何もしようとはせず、ただ刻の態度を受け入れている。

さらに、平家もあれ以来『渋谷荘』に来なくなっていた。また、あの時は間に入った遊騎だったが今はまるで興味が無いようだった。大神も然りである。そして、一人残った優はといえば……

「王子、今日は何か大量に買っておく物はあるか？ あるんだつたら帰りに買ってくるが」

「……や、な……も、ね……」

「え？」

「う、うるせえ！ とつとと行け、バカヤロー！」

「??？」

一人先に準備を終えていた優が王子に買い物について聞くが、王子は声をかけられた

瞬間から顔が赤く染まっていき、最終的には噴火した火山のような勢いで怒鳴った。その様子を見た優は、頭の上に疑問符をいくつも浮かべながらも素直に従い玄関に向かつていった。

どこを見ても不協和音ばかりの『コード：ブレイカー』たち。その様子に、桜はただ一人で心を痛めていた。

（王子殿と刻君の問題はとても簡単に解決できることではない……。一体、どうすればいいのだ……。しかも、いつの間にか夜原先輩とも仲が悪くなっているのだ……。）

過去や生死が深く関わった刻との問題は、桜の感じている通り簡単に解決できることではない。さらに自分が知らぬ間に優と王子の間にもおかしな空気が漂っており、桜はますます頭を悩ませていた。

「……桜小路君、あせってはいけないよ。時間が解決することだってあるんだから」  
「……………」

会長の重い雰囲気をつらった言葉に、桜は何も言えなくなつた。本当に待つことしかできないのか……。そんな無念に似た思いを感じながら、桜は通学するため歩きだした。

「燃え散れ。」

「沈みなヨー！」

「ハアツ！」

後日、カラクリ珍種を用いての修行が繰り返される地下の修業場。かつては大神と刻の二人のみで行われていたが、優が加わってから数日も経っているので見慣れたものとなっている。そして、彼ら自身も修業に慣れてきたのか、三人とも余裕の表情で次々とカラクリ珍種を破壊していく。

「これで……最後だぜ！」

そして、あっという間に今日の分として用意されたカラクリ珍種をすべて破壊した。三人からは変わらず余裕が見られ、ロストする様子など微塵もない。三人はギャラリイから見ている会長に声をかける。

「おーい、会長。この程度じゃ全然ロストしなくなっちゃったヨー」

「オレもですね。なんだったら残った分も全部燃え散らしますよ」

「同じく問題ありません」

異能を常に全力で使い、ロストを繰り返すことで異能の超回復を起こし異能力の強化

を目指す修業。大神と刻は最初、何度もロストを繰り返していたが、今では修業の成果でかなり異エネルギーが強化されているようだった。しかし、残った一人に関して少し違っていた。

「……つか、優。お前、修業してから一回もロストしてなくネ？」

「そうだな」

「デメエ！ 優子ちゃんに変わりがたくネーからってイカサマしてんじやネーだろうナ！ オレだつて何度もロストしたのに、『コード・07』のお前がロストしないとかあり得ねー！」

そう、途中参加の優だったか、修業を始めてから一回もロストをしていないのだ。會長が作った『にやんまる』ヘルメットで条件は大神たちと同じはずで、すでに何日も行っているはずだが、まるでロストする気配がない。刻が怪しむのも無理はないというわけだ。

「いかにも、少し落ち着こうか」

すると、ギャラリーにいた會長がいつの間にか下りてきていた。刻をなだめると、會長は三人に向かって話し始めた。

「とりあえず今日の修業はここまで。そして、そろそろ修業の成果を形にしようか」

「形に……ですか？」

「いかにも、コレを使うんだな」

そう言つて会長が取りだしたのは、最初に『渋谷荘』に集まつた時に使つた異能メーターだった。目盛りが上に行くごとに珍種である会長の血が濃く塗られており、手に持つて異能を込めることで異能の総量を量ることができるといふものだ。以前、使つた時は優を除く『コード：ブレイカー』たちが使い、見事に『コード：ナンバー』順に並んでいた。

「これを使えば全部わかるよ。君たちの今の強さも……そして、優君がロストしない理由もね」

「ハア……?」

会長の言葉に、刻は顔をしかめる。自分たちの強さがわかるのは理解できるが、優がロストしない理由もわかるというのは理解しがたかつたからだ。

「まあ、まあ。論より証拠だよ。ハイ、二人とも」

「……わかりましたよ」

「じゃ、もらうぜ」

「優君は頭にくつ付けながら使つてね、はいコレ」

「はい」

急かすようにメーターを三人に渡す会長。三人はそれぞれメーターを受け取ると、それ

ぞれ意識を集中させる。会長は三人の用意ができたのを確認すると、声をかける。

「前回は大神君が15で刻君が24だね。それじゃあ……スタート!」

——カッ!

会長の掛け声とほぼ同時に一齐に異能を込める大神たち。それに呼応するかのよう  
に、それぞれのメーターは上へ上へと昇っていき……

「……40オーバー!? メーター振り切っちゃったぜ!」

「……オレもです」

見ると、大神と刻のメーターは上限である40を超えていた。以前、量った時は誰も  
超えることができなかった40を、彼らは一気に超えることができた。これは修業の成  
果としか言えないだろう。

「ヨッシャー! これってオレたち、遊騎も平家も超えちゃってるってことジャン!

これなら『Ree-CODE』なんてチョロ——」

「このオモチャ、もういらぬ」

「あー! テメエ! つか、オモチャってどーゆーことだよ!」

だが、会長は二人のメーターを確認すると、「オモチャ」と切り捨てすぐに捨ててし  
まった。自分たちが必死に修業した成果を軽んじられたように感じ、刻は会長に詰め  
寄った。

「40までのメーターなんてオモチャと同じだよ。この前の平家君は力を制御していたし、遊騎君だって本来の姿じゃなかった」

「本来の姿……!?!」

次々と驚きの事実を述べる会長。おそらく、平家も遊騎も全力ならば40など軽く超えてしまうのだろう。つまり、40を振り切れたくらいではまだまだということ。会長がオモチャと言うのも納得である。

「まあ、そのことについてはいざれわかんと思うよ。そういえば、優君はどうだったかな?」

「……アー! そうだ、優! テメーはどうだったんだヨ! 『コード:07』のテメーのことだから40越えなんて夢のまた夢——」

話を逸らすかのように優の名前を出す会長。すると、刻は思い出したように優のところに行き、からかう気満々で優のメーターを覗き込んだ。だが、結果は意外なものだった。



「……残念だが、振り切っている」

「ハアアアアアア!？」

優のメーターは大神と刻同様、完全に40を超えて振り切っていた。ロストによる超回復をしていない優が自分たちと同じ結果ということに、刻は絶叫せざるを得なかった。

「どーゆーことだよ！　なんで『コード：07』のお前が全然ロストしてなくせよメーター振り切ってんだよ！」

「なんでと言われても困るんだが」

「いかにも、簡単な話さ」

予想外の結果に今度は優に詰め寄る刻。一方、優は「困る」と言いながらも平然としていた。すると、会長がポツリと口を開き、説明を始めた。

「優君の異エネルギーは修業を始める前から振り切るくらいだったこと。ロストしない理由もそういうことだよ」

「うがああああ！ 納得できねええええ！」

会長の簡潔な説明に刻は悶絶する。ただ言葉で言うだけなら納得できないが、こうしてメーターで形になっている。つまり、納得するしかない。すると、大神が率直な疑問を優に投げかけた。

「優……最初に量つた時は『弱いから』と言つて参加しませんでしたよね？ なのに量つてみたらこの結果……。何か理由があつたんですか？」

「……何も無いさ。異エネルギーなんて普通にしていたら誰だつてわからない。オレは本当に自分の異エネルギーは弱いと思つていたし、この結果には驚いている」

「………そうですか」

「随分と消極的な優の返答に、大神はとりあえず納得した。実際、優の言っていることは的を得ている。こうして会長に会つてメーターを渡されなければ、異エネルギーが自らの異エネルギーを量ることはできない。さらに自分に『07』という末端の『ナンバー』が付いているなら、弱いと考へても仕方はないだろう。」

「会長、お返しします」

「うん、ありがとう。と言つても捨てちゃうけどね」

大神との話を終えた優はメーターを会長に返していた。会長の言うように結局は捨ててしまうので意味は無いが、優なりの礼儀なのだろう。

すると、メーターを受け取った会長はメーターを見ながら言葉を続けた。

「しかし、初日の段階でロストしないから高い方だと思つてたけど……まさかいきな振り振り切っちゃうとはね。……これも過去の影響ということかな」

「……そうですね。『脳』を使いこなさないと命が無かつたですし。それに……鍛えてくれる人もいましたから」

「ふむ……なるほど」

それだけ話すと、優は一礼して会長に背を向けた。すると、会長は再び優のメーターに視線を戻す。どう見ても振り切っている。だが、これは本来ならあり得ないはずだった。なぜなら、実は優のメーターにはある細工があつたから。

（優君のメーター……試しにと思つて血の濃さを倍にしたというのに、軽々と振り切つてしまつている。彼の異エネルギー……少なくとも大神君と刻君は完全に超えている。やはり彼はただ者ではないようだね……）

血の濃さを倍……それは同じ40でも到達するには倍の異エネルギーが必要ということ。つまり、メーターだけ見れば優は大神たちと同等に見えるが、実際は倍の差があるということになる。そして、修業中全くロストしなかつたことを考えると、もしかしたら倍ではすまない異エネルギーを優は持っているのかもしれない。

そんな事実は知らず、大神と刻と談笑する優。穏やかな様子だが、メーターの真実を

知る会長から見るとどこか末恐ろしいものを感じる。だが、『ReeCODE』と戦う上では頼りにもなる。今は何も言うまい、と会長は自らの感情を胸の内にしまいこんだ。

そして、気を新たに三人にこれからの修業について話し始めた。

「さて、今のでわかったけど三人とも基礎は十分。そろそろ私が君たちの相手をしようじゃないか」

「……！」

会長の口から、自分が相手をするという言葉を聞き、大神たちの表情が一気に引き締まる。今まで高みの見物を行っていた会長が自ら相手をするということは、いよいよ修業も佳境ということだ。

「ヨッシャー！　じゃあオレからやるぜ！」

「ふざけんな。兄弟子が最初に決まってるんだろ」

「アア!? 『コード：ナンバー』が上のオレからに決まってるんだろ！」

「……別に誰からでもいいだろ」

だが、相も変わらず協調性の無い刻たち。修業の順番でもめており、優はため息をつきながら呆れていた。すると、会長が話を続けた。

「でも、今日はダメだよ。大神君と刻君は今のペースでロストを繰り返したら本当に身体を壊しちゃうからね。優君だってロストしてはいないとはいえ、確実に疲れは溜まっ

てるんだから」

大神たちの体調を気遣つての言葉。どうやら今日のところは修業を行わないらしい。ならば残りは自由に過ごさせる……と思つた時、会長がある物を取り出して大神たちに見せた。

「だから、今日はちよつと別なことをしようか」

「はあ？」

そう言つて会長が取り出した物は……夏祭りのチラシだった。しかも、開催日は今日である。

「みんなでお祭りなのだ！ これで見んな、仲良くなれるのだ！」

「おー」

大神たちに夏祭りに行く提案をした会長は、残ったメンバーにも声をかけた。元からそういつたイベントが好きな桜は「これで仲良くなれる」と、見ての通り行くことに大

賛成。遊騎も祭りに興味があるらしく、行く気満々である。しかし……

「いやいや、ありえねー」

「オレもパスだ」

「どうぞ、いつてらっしやい」

「なにい!？」

刻、王子、大神は完全に行く気が無い。どこまでも協調性がない彼らだったが、桜も学習していないわけではない。彼女の中には、彼らを行く気にさせる秘策があった。

「刻君、刻君。寧々音先輩も来ると言っていたぞ」

「ぐ……………」

「よいのかな？　大神よ。珍種の観察とやらを怠っても」

「……………」

「『渋谷荘』の主にはぜひとも同行していただきたいのだ!」

「…………ハア」

桜が今までのことから学んだ秘策の言葉を次々にかけていく。その結果……

「し、しよーねーから行ってやるヨ…………」

「…………どこまで必死なんだか」

「仕方ねえな…………」

「やった！ お祭りでみんな仲良くなるのだ！」

見事、三人を参加させることができた。そして、桜は残った一人も参加させるために『子犬』を連れてその人物の自室へと向かった。

「夜原先輩！ 先輩も一緒にお祭りに行きましょう！」

「ワン！」

残った一人……優がいる『壺號室』の扉の前で『子犬』と共に優を呼ぶ桜。しかし、扉の向こうからの返答は一切無い。『渋谷荘』の古さを考えると、扉のせいで聞こえないということはない。聞こえているが反応しようとしていないだけだ。ならば、と桜は大神たち同様に秘策の言葉を投げかけることにした。

「いくぞ、『子犬』よ。大神からの情報だと、夜原先輩は昔のものが好きらしいのだ。そして、祭りというのも昔ながらの伝統だ。そこを責めるのだ」

「ワン！」

ボソボソと確認すると、桜は改めて呼吸を整えた。そして、再び扉を見据えて声を発

した。

「夜原先輩！ 祭りは昔から伝わる日本の伝統行事です！ 昔ながらのものを愛する夜原先輩にはぜひとも参加していただき、みんなと一緒に古き良き日本の伝統を楽しみましょう！」

「ワン、ワン！」

「……………」

「そうだ、そうだ」とでも言わんばかりに『子犬』も続くが、やはり返答はない。しかし、王子との微妙な空気のこともあるため、優だけ参加できないではダメだった。桜は「こうなったら」と、最後の手段を取ろうとする。

「仕方がない…………。こうなったら部屋に突撃するぞ、『子犬』よ！ 実際に顔を合わせ話せば夜原先輩もわかってくれるのだ！」

「ワフ!?!」

とうとう武力行使に出ようとする桜。『子犬』は慌てて止めようとするが、残念ながら止められるはずもない。桜は呼吸を整えていき…………走り出した。

「ぬおおおお！ お邪魔し m——」

「うるさい」

——ゴッ！



「ぬわっ!」

桜が突撃しようとした時、優の端的な言葉とともに扉が開き、桜の額に扉が直撃した。かなり見事なカウンターが決まってしまい、桜は突撃の勢いのまま倒れた。

「い、痛いのだ……」

「クーン……」

「だ、大丈夫だぞ……『子犬』」

ズキズキと痛む額を押さえながら涙目になる桜。『子犬』が心配そうに駆け寄るが、桜はゆっくりと立ち上がった。そして、再び当初の目的を果たそうとした。

「私は諦めないのだ……。夜原先輩! 一緒にお祭りに——!」

行きましょう……そう言おうとした桜の眼に映ったのは、黒を基調としたシンプルな浴衣に身を包む優の姿だった。桜が思わず呆然としてみると、優が平然と口を開いた。

「祭りには最初から行くつもりだ。お前もさっさと準備してこい」

「は、はい!」

優の言葉に、桜は満面の笑みを返して準備に向かった。

「古い物好きのあなたのことだから参加するとは思ってましたが……浴衣まで用意しているとはね」

「それだったら刻の方が不思議だろ。あいつだつて浴衣着てノリノリだぞ」

「ウルセーな！ オレはやるからにはTPOに合わせるタイプなんだつーの！」

「ごぼんは浴衣着ーひんの？」

「桜小路の着付け手伝っただけでもいいだろ」

「いかにも、みんな行く気満々なんだな」

『お前が言うな』

その後、『渋谷荘』の玄関先にはそれぞれ思い思いの格好で集まっていた。私服や普段通りの格好なのは大神、王子の二人。浴衣を着ているのは優、刻、遊騎、会長である。まあ、会長に関しては着ぐるみのためどちらかというと法被に近いが。

「す、すまぬ！ 少し遅れたのだ！」

そして、桜柄の浴衣に身を包んだ桜が到着し、『渋谷荘』のメンバーが全員揃った。そして、桜の掛け声とともに彼らは夏祭りに向けて出発した。

「いざ、親睦の夏祭りに向けてレッツゴーなのだ！」

## code : 44 揺れる心と大火の花

異能力を上げるための異能の成果も現れ、着実に大神たちが力をつけてきた今日この頃。彼らは会長の提案によって地元の夏祭りへと向かっていた。自ら行こうとする者、仕方なく行く者と思うところは違うが、とりあえず全員揃って行くことはできていた。

……そのはずだった。

「なぜ夜原先輩がいなくなっているのだ！」

「知りませんよ……。オレに聞かないでください……」

祭囃子も聞こえてきて、いよいよ開催場所に近づいてきた桜たち。テンションが上がってきた桜だったが、そこで一つの違和感を感じた。明らかに数が足りなかった。そして、優がいつの間にかいなくなっていることに気がついた。彼は最初から祭りに行くことには賛成派だったため安心してしたが、見事に隙を突かれた。

桜にとって、この祭りはただの娯楽ではない。この数日の間、様々なことがあり彼らの人間関係ははつきり言って最悪な状態となっていた。それを何とかするためにも、この祭りをきっかけに親睦を深められればと彼女は考えていた。つまり、「祭りに参加する」ことではなく「揃って一つのことに参加する」ことが大事なのだ。

だが、優がいなくなったことで、桜の考えは一瞬で水の泡となった。桜は悔しさなのか怒りなのか、わなわなと拳を震わせる。

「ぬうう……！ 初めから行く気であったと言っていたから、すっかり油断していたのだ……！ これでは夜原先輩だけ皆と親睦を深めることができないではないか……！」

「いなくなった人間に文句を言っても無駄ですよ。それに、優はここにいないだけで祭りには参加する気なんでしょうか？ だったら、あなたも祭りに参加して優を探せばいいじゃないですか」

「おお！ その通りだ！ よし、そうと決まれば善は急げなのだ！」

拳を震わせていた桜だったが、大神の言葉を聞いた瞬間、目を輝かせて祭りへと向かっていった。残った大神たちはため息をつきながらも、桜の後を追って賑やかな祭りへと向かっていった。

「すごいぞ！ とつても賑やかなのだ！」

祭りの開催場所は『渋谷荘』から少し歩いた場所にある広場だった。広さもかなりのものであり、通り道に沿って様々な出店が並び、所々に設置された照明のおかげもあり昼間以上の賑わいを見せていた。

「かき氷、たこ焼き、大判焼きに焼きそば……美味しそうな食べ物もたくさんなのだ！  
おお！ あつちには射的やくじ引きもあるのだ！」

「射的とか……二丁銃使いのオレにしてみればお遊びだな」

「あのくじ引き……『にやんまる』グッズがたくさんやし！ オレ、全部とってきたる  
！」

「……とりあえず、あのくじ引き屋は全部を遊騎に持つてかれるな」

「天寶院グループの現社長ですからね。まず金が足りないということになりません  
し」

周囲に漂う祭りの雰囲気の影響か、普段見るものより数段は食欲をそそられる数々の食べ物に、遊び心をくすぐる出店の数々。そのうちの一つであるくじ引き屋に遊騎は真つ先に飛び込み、子どもに混じつてくじ引きをやり始めた。こうして見ると微笑ましい光景だが、これでもし他の子どもが『にやんまる』グッズを当ててしまつたら恐ろしいことになるだろう。以前、ファミレスでもあったが、遊騎はキレると子どもだろうと容赦なく敵意を向ける。そうならないためにも、彼らはひとまずこの辺りで楽しむこと

にした。

すると、数ある出店の中でも一際目を引くものが桜の眼に映った。思わず、大神たちにも見せようと声をかけた。

「おお！ 皆、見てくれ！ とても綺麗な飴細工なのだ！」

「いくら綺麗でも結局は飴でしょう？ 口にいれればただの塊……に……」

桜と呼ばれて向かった大神は、それを見て完全に言葉を失った。それは確かに飴細工だった。桜の言う通り、とても綺麗に形作られており、技術の高さを表している。だが、そのデザインは明らかに問題だと察した。

それは……明らかに女性の身体をモチーフにした飴だった。さらに、まるで身体を縛るかのようになりボンが巻かれていた。これだけでも相当な驚きだが、彼らはさらに驚くことになる。彼らに話しかけてきた……出店の主によって。

「これは、これは。皆さん、お揃いですね。平家のビューティフル☆セクシー☆キャンデー☆シヨップによるこそ」

「へ、平家!？」

そこにいたのは、何食わぬ笑顔を振りまく平家だった。その姿は、制服の上に着物を着るといふなんとも独特な姿だった。

「なんでアンタが店を出してんだヨ！　つか、絶対アウトだろ、コレ！」

「実は会長から『渋谷荘』からも出店するようにと言われてましてね。そこで、私が最近マイブームの飴細工を披露しているというわけです」

予想していなかった平家との遭遇に、刻は反射的にツツコミを行う。それに対し、平家は一切動じることなく平然と説明しだした。肝心の飴のデザインに対してのツツコミはスルーしたが。

「なるほど、『渋谷荘』からですか……。でしたら、私たちも手伝わなければ。先輩、なにかお手伝いできることはありませんか？」

「ふふ……お気持ちではありますが、もう手伝いの手は十分ですよ。一人、優秀な『渋谷荘』の住人に手伝ってもらっているのです」



「それってヨオ……」

『渋谷荘』からの出店ということで、住人である自分たちも手伝うべきだと考えた桜は平家の手伝いをしようとするが、平家はそれを優しく止める。「すでに一人、住人が手伝っているから」と。その住人に覚えがあるらしく、刻は呆れたような表情を浮かべる。すると、タイミングよく手伝っている住人がやってきた。飴細工の原料やら道具が入った段ボールを大量に抱えながら。

「……よつと。平家さん、これで全部です」

「ありがとうございます、優君」

「やっぱテメーかよ！ だったら最初から『手伝うから先に行く』とか言えばいいダローが！」

「夜原先輩！ なるほど、先輩はお手伝いのために先に行っていたのですね！」

予想通り、いつの間にかいなくなっていた優だった。どうやら、平家を手伝うために抜け出していたらしい。見た限り、手伝いと言っても荷物運びくらいのようなのだが。そして、その荷物も今運んできた分で最後のようで、平家が優に声をかける。

「さて、後は私がやるので、優君は桜小路さんたちと一緒に回ってきたらどうですか？ ついでに、遊騎君が他の方に迷惑をかけないか私が見ておきましょう」

「……ありがとうございます」

「ありがとうございます、平家先輩！」

平家に言われ、優は改めて桜たちと行動することになった。平家の提案に、桜は当の本人である優以上に感謝を示した。すると、その感謝を形にしようと思ったのか、「せっかくだから」と言葉が続けた。

「平家先輩の飴細工をください！ 王子殿の分も！」

「は？ いや、オレは別に……」

「では、桜小路さんにはコレ。……八王子にはコレを」

なぜか王子の分まで頼んだ桜。王子は断ろうとしたが、仕事が早い平家はあつという間に飴細工を仕上げた。桜に渡されたのは他の商品同様、リボンによって縛られた飴。しかし、王子に渡されたのはデザインこそ他と同じだが、有刺鉄線が巻かれていた。とてもじゃないが、食べられる状態ではない。明らかに桜と王子とで扱いが違っていた。しかし……

「へえ……すげえ綺麗だ。中々やるじゃねえか、平家」

王子は有刺鉄線など気にせず、平家の飴細工の技術の高さを素直に賞賛した。それは決して冗談などではなく、本心から言っているのだろう。彼女の眼はとも真っ直ぐだった。

「……褒められたところで、私はあなたを『コード・ブレイカー』だとは認めません。

フフフ……」

「なんだか先輩、嬉しそうではないか？」

「桜チャン、放つといてさつきと行こうぜ……」

それを平家自身も感じたのか、言葉こそ厳しいが心なしか嬉しそうな様子で次の飴細工を作り始めた。だが、そろそろ耐えられなくなった刻に連れられ、桜たちは祭りを回り始めた。

優も合流したことで、改めて祭りを楽しもうとした『渋谷荘』組。しかし、何やら優がキヨロキヨロと辺りを見渡し始めた。何かを探しているような行動に、桜は小首を傾げて尋ねた。

「夜原先輩？何かお探しののですか？」

「……さつきまで副会長がこの辺りにいたはずなんだがな」

どうやら探しているのは寧々音のようだった。桜が刻を祭りに行かせるために「寧々

音も来る」と言っていたので、いるのは何らおかしいことではない。だが、普段の行動からもわかる通り、彼女は遊騎に負けず劣らずの自由奔放な性格をしている。いつの間にかいなくなっていたのだろう。

すると、咄嗟に刻が必死な形相で優に詰め寄った。

「ハア!? テメエ、なに見失つてんだヨ! ねーちゃんに何かあつたら許さねーゾ!」  
「わかつてる……。つい、さつき見かけたからそう遠くへは……。あ、いたな」

刻の糾弾を受けながらも、寧々音を探す優。そして、ある出店に目が止まった彼はようやく寧々音を見つけることに成功した。その出店は……。型抜き屋。

「また失敗しちゃったの〜」

「副会長……。勝手にどこかに行かないでください、と言つたでしょう」

「あー、ゆーくん。あと、桜ちゃんに大神君にマグネスもいるのー。あと……。おねーさん、誰なの?」

「……。八王子 泪だ」

「じゃあ泪々なのー」

「……。好きに呼んでくれ。……。ん?」

優が声をかけたことで存在に気付いたらしく、寧々音は桜たちにも声をかけていく。その手元をよく見ると、『にゃんまる』型の型抜きが真つ二つに割れていた。さらに、そ

の近くには同じように割れている型抜きが二、三個あった。どうやら結構な回数の失敗をしているようだった。

「つたく、乱暴な娘だな。おい、貸してみな」

「な!? テメエ……………」

失敗した型抜きの惨状を見て、王子は仕方なさそうに寧々音の隣に座る。急に寧々音自分の姉を乱暴な娘扱いされ、刻は眉をひそめる。しかし、王子はそれを気にせず、寧々音に新しい型抜きを渡してアドバイスを始めた。

「いいか? あまり力を入れ過ぎないで、ここを押さえるんだ。そして、急がずゆつくりと……………」

「……………」

「そう。そしたら次は……………」

最初の言葉こそ乱暴だったが、一つひとつ優しくアドバイスする王子。寧々音も王子のアドバイスに従い、少しずつ手を進めていく。そして……………」

「わあ! 初めてできたのー!」

「……………」

見事、初めて型抜きを成功することができた寧々音。『にゃんまる』型に抜かれた型抜きを持って嬉しそうに飛び跳ねた。その様子を見て、王子も笑顔を浮かべていた。

「……チツ」

寧々音が嬉しそうにしている。しかし、それが王子のおかげということが気に入らないらしく、刻は舌打ちをすると二人から視線を外し、そのまま歩き始めた。

しかし、その足はすぐに戻ってくることになる。なぜなら……

「泪々、とっても優しいの。寧々音、泪々のこと大好きなのー」

「あ」

寧々音の素直な感謝の言葉に、思わず桜は目を点にして反応する。そして、その後の展開はもはや見慣れた、いつも通りの展開となった。

「バ、バカヤロ……！ こ、こ（こ）こ……こんなこと、くら、くらいで……！」

「ねーちゃん、逃げろー!」

「わー」

「巻き添えを喰らったらたまりません。行きましょう、桜小路さん」

「ええ!?」だが、放っておいたらもっと危な——お、おい! 離せ、大神——」

どんだん顔が赤面していく王子を見て、危険と察した刻はすぐに戻り寧々音を抱えて走り出した。さらに、大神も巻き込まれまいと桜を連れて離れていった。そうしている間にも王子の顔はどんだん真っ赤になっていき、ついに——

「ほら」

「冷たっ!」

いよいよ暴れ出すかと思った王子だったが、急に額に冷たいものが当たり、こみ上げてきた照れが一瞬で引っ込んだ。一体、何事かと思った王子が顔を上げると、冷えていた証拠にまだ水滴がついている缶ジュースがあった。そして、それを差し出す者の姿も。

「優……」

「ああ。とりあえず、これ飲んで落ち着いてくれ」

「……悪い。迷惑をかけた」

「いや、気にしなくていい」

それぞれ別れた『渋谷荘』組。その原因である王子の暴走は優のおかげですっかり落ち着き、今は二人でベンチに座って祭りを眺めていた。優は特に何事も無かったように平然としているが、王子はとうとうとそうでもなかった。

(な、情けねえ……! つか、なんで優なんだよ……! ここ、この前のアレがあるから、まともに話なんてできねえぞ!?)

アレとは、まさに王子が優との距離感を滅茶苦茶にしている原因……以前、修行場で優が口にした「王子は女としては「特別」という発言のことだ。あれ以来、王子は優と顔を合わせる度に照れが込み上げてきて、まともに話せていない。現に、今も優から渡された缶ジュースを常に額に当ててなんとか暴れるのを堪えている。だが、長い時間当てていたせいか、それとも王子が熱いのか、すっかり缶ジュースもぬるくなってきた……その時だった。

「うわああああん!」



突然、幼い子どもの鳴き声が響いた。見ると、『にゃんまる』のお面に『にゃんまる』の風船を持った浴衣姿の男の子が一人で大泣きしていた。ここが祭りの会場で、子どもが一人でいるということを見ると、おそらく迷子だろう。しかし、周囲の大人は冷たいもので声をかけようとする者はいない。その様子に苛立ちを覚えた王子は子どもに声をかけようとベンチから腰を上げた。すると……

「どうした、僕。お母さんとはぐれちゃったか？」

「優……？」

見ると、いつの間にか優が男の子の傍にしゃがみ込んで声をかけていた。その姿は、王子も今まで見たことがないくらい優しく、安心感があるものだった。それを子どもも感じたのか、涙を流しながらも少しずつ話し始めた。

「お、お母さんと、歩いてたら、お金、落として……。拾ったら、お母さん……。いなくて」

「……そっか。お金は大切だからな。でも、急にお母さんがいなくなったら悲しいよな」

「ぐす……うん」

くしゃくしゃ、と男の子の頭を優しく撫でる優。はぐれた原因、男の子の悲しいという感情も全て受け入れると、優は「そうだ」と男の子に提案した。

「ここには迷子センターみたいなどころがある。困ったらここに来てください、つていうところが。お兄ちゃんと一緒にそこに行こうか。そこなら、お母さんを探してくれる」

優が言っているのはおそらく祭りを取り仕切る本部のことだろう。祭りという不特定多数の人が集まるイベントでは、トラブルへの対処のために設置されている場所だ。

だが、男の子はどこか不安そうな顔で優を見続け、ポツリと呟いた。

「……お、お母さんが知らない人についていっちゃダメ、つて」

本音を言えば、今すぐにでもすがりつきたいだろう。しかし、男の子の中にはそれ以上「お母さんとの約束」が強く残っていた。これでは男の子を連れていきたくても連れていけない。これには優も頭を抱えるかと思っていた王子は思った。しかし……

「……偉いな。お母さんとはぐれても、ちゃんとお母さんとの約束を守るんだな。

それは、中々できることじゃないぞ。……お兄ちゃんは夜原 優つて名前だ。君は？」

「………幸一」

「幸一君だな。はい、これでお兄ちゃんと幸一君は知らない人じゃなくなつた。……大丈夫。お母さんが見つかるまでオレと一緒にいるよ。約束する」

「………うん！」

男の子……幸一の言葉を否定して説得するのではなく、受け入れた上で彼を安心させるべく言葉をかける優。そして、ついに信頼を得た優は幸一を肩車すると本部まで向かっていった。

「……………」

そんな優の後ろ姿を、王子は黙って目で追っていた。

「本当にありがとうございます！」

「優お兄ちゃん、ありがとう！」

「どういたしまして」

本部についた優と幸一だったが、幸運にも本部には幸一の搜索を申し出る母親の姿があつた。無事、幸一を母親のもとに送り届けた優は二人からお礼を受けながら、見えなくなるまで手を振り続けた。二人が少しづつ離れて見えなくなると、優は振り続けた手を下ろして満足気に息を吐いた。すると、後ろから聞き慣れた声をかけられた。

「見事なもんだな」

「……王子か。そうでもないさ」

「謙遜すんなよ。オレだつたら、たぶん途中でどうしようか悩んでた」

賞賛する王子の言葉に、優は齒痒そうに肩をすくめた。そして照れ隠しからか、近くにあつた人家の無い林に向かつて優は歩きだした。王子もそれに続くと、優がボソリと呟いた。

「まあ、子どもは嫌いじゃないからな」

「嫌いじゃない、つてことは好きつてことだろ?」

「……人見さんと同じことを言わないでくれよ」

「降参」とでも言いたげに両手を挙げる優。その姿を見て、王子は思わず口元を緩める。優の過去の部分については初めて知ったが、今回のことで確信した。彼……優はその名の通り、とても優しい男だと。そして、同時に覚悟した。その優しい男とのわだかまりは、早々に決着をつけるべきだと。

「……なあ、優。一つだけ、いいか?」

「そんな改まつてどうした?」

王子に声をかけられ、立ち止まる優。先ほどまでいた祭りの会場とは違い、林の中は照明など無く、月光の身で照らされていたため薄暗かった。しかし、人もおらず、月光

のみの薄暗い雰囲気は、二人の間に静けさと心地いいひんやりとした空気を運んできた。

「その、前に……お前が言っていたことなんだが……」

「前に言ったこと……？ 何か言っていたか？」

「いや……オレに直接つてことじゃなくてだな、たまたま桜小路と話しているのを聞いてしまったというか、そんなことになってしまったというか……」

歯切れが悪くなってきた王子の言葉はどんどん小さくなっていき、優は首を傾げる。だが、こうも歯切れが悪いのは姉御肌である王子の性に合わない。覚悟を決めた王子は、声を大にして真正面から言葉をぶつけた。

「お、お前がオレのことを『女として“特別”』つて言ったことについてだよ！」

「な!? き、聞いてたのか!? まさか、女扱したこと怒つてたのか……?」

「話を聞いたのはたまたまだ！ あと、女扱いしたことなんざどうでもいい！ 聞きたいのは、その……“特別”つてことについてだ！」

言葉をぶつけながら、王子は自分の顔がどんどん熱くなっているのを感じていた。普段なら、とつくに暴走してもおかしくない。だが、今だけは理性を失うわけにはいかなかった。ここまで来たら最後まで解決しなければならぬ……王子は強くそう感じていた。

「……参つたな」

そんな王子に対し、優は聞かれているとは思わなかつたらしく困つたように頭をかいていた。すると、王子はいったん呼吸を整え、今度は静かに尋ねた。

「……生真面目なお前のことだ。本当のこと……なんだろう？ ……いや、冗談だつたらそれでいいんだ。早とちりしたオレが悪かつたつてことだからな……」

「……いや、お察しの通りだ。少なくとも、冗談じゃない」

「ツ——！」

冗談じゃない……その言葉に、王子は思わずビクリと身体を震わせた。つまり、優の言葉は嘘偽りない本心ということ。彼が真に思っていることだということだ。すると、今度は優が呼吸を整え始め、覚悟を決めたように呟いた。

「まあ、こうして本人に聞かれたんだ。本当のことを言うよ」

「……ツ！」

話す覚悟を決めた優の言葉に、王子は思わず唇を噛む。なぜなら、彼女の中では一つだけ確かなことがあつた。もし、優の言葉が本心からのものだった場合……それは受け入れられないことだということ。その理由こそ本人のみぞ知るだが、彼らは存在しない者である『コード：ブレイカー』。さらに、『捜シ者』との闘いも控えている。いつ命を落とすかわからない存在。下手な私情の入れ込みは死へと繋がりがりやすくなる。もしかし

たら、そういった理由からなのかもしれない。

ならば、謝らねばならない。それが礼儀というものだ、と王子は改めて覚悟を決め、全身から感じる熱さに耐えながら言葉を絞り出した。

「……優！ 悪いがその気持ちには応えられん——！」

「王子！ すまない！」

「——え？」

自身の謝罪よりも大きな声で響いたのは、他ならぬ優からの謝罪だった。まさかの事態に、王子はまばたきを繰り返す。

「実は、情けない話だから王子にはずっと隠していたんだが、オレは女が苦手なんだ。

それこそ、少しでも長く目を合わせれば倒れちまうくらいな

「え？　え？　そんなのか？」

大神たちと桜は知っていた優の女が苦手という事実。しかし、どうやら王子は知らなかったらしく、状況が理解できていない王子は驚きと困惑で訳がわからなくなっていた。しかし、ここで一つの事実にはつとめる。他でもない……八王子　泪という自分はその「女」である、と。

「ちよ、ちよつと待て……。オレ……普通に優と話してるよな？」

「……そうだ。王子だけは平気なんだ。他は桜小路だろうと神田だろうと無理だ」

そして、優はついに口にした。「女として『特別』」……その言葉に込められた真実を。

「実は……女に見えないんだ」

「は？」

優の言葉に一瞬、周囲の空気が固まったような気がした。

「いや、王子が女だつてことはわかっている。けど、あまりにも王子が男っぽいからか、女というより同じ『コード：ブレイカー』だつていう意識が強いのか……どつちかはわからないが、どうしても王子を女として意識することができないんだ」

「……てことは、お前がオレのことを『女として『特別』』つて言ったのは——」



「ああ。女なのに女って意識することができない、唯一の存在ってことだ」

その言葉が届いた瞬間、王子の中で落雷が落ち、彼女の中で何かが切れた。

「でも正直、助かってるんだ。同じ『コード・ブレイカー』として、顔もロクに合わせられないんじゃない仕事にならないからな。本当、王子が男っぽくてよかった」

「……ああ、そうだな。仕事にならないもんな。そりゃ、**“特別”**とも言いたくなるよなあ……！」

「そう、だから助k——って、王子？　なんで『影』なんか出して……」

まるで王子の中に渦巻く感情のように湧き出てくる『影』。俯く王子を取り囲むように動く『影』は、どんどん湧き出てくる。そして……

「紛らわしい言い方してんじゃないやねえぞ！　クソ野郎！　テメエはいっぺん地獄に墮ちろや、ゴラアア！」

「どわ！　ちよつと待て、王子！　何をそんなに怒って——！　うわああああ!!」

その後、林の中からこの世のものとは思えない破壊音と叫び声が聞こえ、「祭りに来た悪魔」として噂が流れることになった。

「皆、最初はそうでもなかったが、楽しんでるようだな」

そう呟く視線の先……そこには『コード・ブレイカー』たちが集まって談笑していた。なぜか優の姿は無いし、王子から心なしか殺気のようなものを感じるが、桜はそれよりも彼らが楽しんでいるということが嬉しいらしく、笑みをこぼした。そんな桜を見て、大神は興味なさげに呟く。

「……物珍しいんでしよう。皆、祭りになんて来たことないでしょうから」

「……え？」

大神の口から聞こえた事実。確かに、そう何度もあるようなものではないが、日本人ならば一度は行く機会はあるであろう祭りに『コード・ブレイカー』の面々は一度も着たことが無いという。その言葉に、桜は思わず瞬きを繰り返し、大神の方を改めて見た。

「必要ないでしょう？ 『存在コード・ブレイカーしない者』に祭りなんて」

——ドオン！

瞬間、打ち上げ花火が上がり、夜空に大輪の花を咲かせる。それを見て、『コード・ブレイカー』たちは各々の感想を述べる。

「なんやあれ。派手な照明弾やな」

「あれは花火つつーらしいぜ。実物はデケエな」

「花火……音と光の組み合わせですよ」

「音デケーよ！」

その感想は、まるで花火を始めて見たかのような言葉。だが、大神の言葉から考えてもそれは間違っていない。彼らは祭りにも、花火にも無縁の生活を送ってきた。そんな光り輝く表世界とは逆の裏世界に、『コード・ブレイカー』として足を踏み入れた時から。だが、それでも……

「きれいやな……」

夜空を彩る大輪の花を、美しいと感じる心は桜たち表世界の人間と変わらない。思わず眩いた遊騎の言葉と同じことを、『コード・ブレイカー』たちはそれぞれ心の中で感じていた。

「……オレ、先に帰ります。桜小路さんは皆と一緒に——」

「……………」

花火を見て、何か思うところがあつたのか、大神は先に一人で帰ろうとした。すると、桜からの返事がない。気になって見てみると、彼女は今まで見たことないような表情で完全に固まっていた。

「……………どうしたんですか？」

「き、嫌いなのだ……あの音。そ、それに、あのでつかい丸が大きな目みたいで怖いのだ……………」

——ドオン！

「ううっ！　む、むうう……………」

銃を使う敵だけでなく、異能を使う敵にすら立ち向かっていく桜。しかし、今の彼女はどうかろう。その時の強気な感じは一切感じられず、涙を浮かべながらびくびくと身体を震わせていた。まるで、巨大な敵に怯える小動物のように。すると、そんな桜の眼にあるものが映った。

「……ハハッ！ あなたにも苦手なものがあったのか。意外だな」

「……え？」

そこには、教室で見せる能面のような笑顔ではなく、心の底から出てくるような……そんな大神の笑顔だった。

「祭りも……悪くないかもしれませぬね。桜小路さん」

「……う、うむ！ そうなのだ！」

もしかしたら、一瞬の幻だったかもしれない。だが、ハッキリと見ることができた大神の心からの笑顔。それが見れただけでも、大神の温かな部分を見ることができただけでも、桜は強い満足感を得ていた。その証拠に、大神の言葉に応じた彼女の顔は、花火に負けないくらい輝いていた。

「夜原先ばーい！ どこにいらつしやるのですかー!?」

花火が終わつた後、会長からの提案で皆で写真を撮ることになった。だが、未だに優の姿がなかったたので、まずは優を探すことになった。

「王子殿、たしか夜原先輩と一緒にいたのですよね？ 先輩がどこに行つたか——」

「……知らねえ」

まるで関わりたくないかのようにそつぽを向く王子。彼女と優の間に何があつたのかを知らない桜は小首を傾げるが、そのことについて聞くよりも今は優を探す方が先である。再び探し始めると……

——ガサ！

突然、近くにあつた茂みが大きく揺れた。突然のことに桜は驚くが、「もしかしたら優なのでは」と考えた桜は恐る恐るその茂みに近づいていく。そして……見た。

「王子様——！」

「ぐはっ！」

一瞬、もしかしたら遊騎の音速並みの速さで飛び出す何かがあった。それは、一直線に王子に飛びかかっけいき、王子は勢いに耐えられずに倒れた。何事かと思つた桜が王子に近寄ると、飛びかかつた何かの正体が判明した。

「ゆ、優子さん!?!」

「ヤッホー、桜ちゃん。小っちゃくなつた時ぶりだね」

それは、探していた対象であつて対象でない者……夜原 優子もといロストした優  
だつた。

「優子さんがいるということ……夜原先輩はロストしてしまったのか?」

「うくん、どうやら別行動している間にかかなりの異能を使ったようだね。修業で消耗  
した分もあつたから仕方ないね」

優子がいることから、優のロストを察した桜。さらに、会長はその原因を平然と予想  
し、「仕方ない」と切り捨てた。会長が言う「かなりの異能を使った」というのは、おそ

らく王子から逃げた時にだろう。『影』を使った王子から逃げるには、『脳』を全力で使わないと危険すぎる。一方、その王子はというと……

「お、おい！ 優子、テメエ離れろ！」

飛びかかってきたのが優子だと判明すると、王子はなんとか離れさせようと優子の頭を鷲掴みにする。しかし、優子はそれをもともせず、王子に擦り寄ってきた。

「王子様だったら、久し振りの再会なのに素っ気ないのね……。大丈夫！ 優のバカはあんなこと言ってたけど、私にとつての『特別』は『愛』だから！ 『LOVE』だから安心してね！」

あんなこと……。おそらく先ほど優から話された『特別』発言の真相のことだろう。記憶を共有しているため、話の内容も知っているということだ。

「ほら、受け取って王子様！ 再会と、『愛』の証拠のチューー！」

「や、やめろおおおお！」

王子に飛びかかったまま、王子の唇を奪おうとする優子。王子はそれを止めようと尽力するが、軽く暴走している優子の力はとても強く、王子は叫び声を上げた。

「こ、これは一体……。もしかして、これが夜原先輩が王子殿の前でロストしたくない理由？」

「グレートアンサーですよ、桜小路さん。見ての通り、優子さんは八王子 涙をいたく



気に入っておりました。ロストした時に八王子に会う度、ご覧のようにつけて離れないのです。フフフ……私としては八王子が困る姿を見ることができるのでいいのですが、記憶を共有している優君としては辛いものがあるようなので、なるべくロストしないようにしているのです」

心から愉快そうな笑みを浮かべながら説明をする平家。その説明を聞いた桜は、優が王子の前でロストしたくない、と言った時の心情を理解できたような気がした。しかし、ロストの件といい、「特別」発言の件といい、優と王子の間には色々と紛らわしいことがあったが、どうやらこの祭りでもそれも全て解決したようだった。まあ、ほとんど優の言い回しなどが原因だが。

今回の祭りで、一気に『コード：ブレイカー』たちの間のわだかまりがなくなるということは無いだろう。だが、それでも少しづつ、たとえゆっくりでも。いつか全員が心から笑える日が来る。桜は、最後に皆で撮った写真を眺めながら確かにそう感じてい

た。

「いかにも、お疲れ様。優子君を振りほどくのは大変だったでしょ」

「……………わかってるなら聞くな」

祭りから戻ってきた大神たちは、それぞれの時間を過ごし始めていた。その中で、なんとか優子を振りほどいた王子は、会長と共に管理人室にいた。今日の祭りの中で、彼女の中に渦巻いていた問題は解決した。それによりクリアになった頭の中では、これらの状況について冷静に考えることができた。王子が管理人室にいるのは、その話をするためである。

「ところで『渋谷』……………もうすぐ、そして確実に『捜シ者』と『Re—CODE』との闘いが始まる。そうしたら、桜小路の記憶が戻るのだから時間の問題だろう……………。その時、お前は どうする気だ？」

「……………いかにも、遅かれ早かれ記憶は戻るだろうね。でも、大丈夫だよ。桜小路君には

大神君含め皆がいるじゃないか」

桜の記憶が戻ることと『捜シ者』たちとの闘い。王子の言葉は、その二つが密接に係していることを示していた。そして、その言葉を受けた会長もそれがわかつているらしく、動じることなく言葉を返す。大神たちへの信頼を現す言葉とともに。

しかし、それでも王子の中から不安は取り除けないらしく、何か思うところがあるように続ける。

「だが、『渋谷』……そしたらお前は……」

「ふむ……いかに、このままというわけにはいかないね」

そう言うと、会長は両手を自らの顔に添えた。そして、そのままゆっくりと……持ち上げた。

「……相変わらずムカつくツラしてやがんな」

「いかに、桜小路君の記憶が戻ったら私もやるべきことをやるだけだよ」

着ぐるみの下……『渋谷』の素顔は微笑みながらも、覚悟が込められた言葉を発した。その姿に、王子はそれ以上、何も言わなかった。

## code : 45 ミニミニ事件簿

「ふわああ……。やっぱ早起きは気持ちがいいもんだナ……」

色々と騒動もあつた祭りの翌日の『渋谷荘』。王子という主が規則正しい生活をさせている（主に強制的に）おかげか、すっかり早起きが習慣になった刻は大きく欠伸をしながら廊下を歩いていた。

「まだ朝飯には早いからナ……。軽く走りにも行ってくるカ」

そう言うと、腕を伸ばしてストレッチを始める刻。こうして朝食までの空いた時間も自らを鍛えるために使おうとする刻の姿勢は、彼の強くなるうという意思を明確に表していた。簡単なストレッチを済ませると、刻はそのまま玄関に向かおうとした。だが、その瞬間……

——ドゴオオ！

「のわっ！」

突然、何かの刻の目の前を横切った。それも、目にも止まらぬほどのスピードで。それは思いきり廊下の壁にぶつかり、壁に大きなクレーターを作った。一体、何が横ぎってきたのか。確かめようと壁に視線を動かした刻が見たのは、『渋谷荘』の住人の一人

だった。

「ゆ、遊騎?! お前、何やってんだヨ?!」

そこには、遊騎がひっくり返ったような状態になっていた。どうやら音速のスピードで転がり、そのまま壁に突っ込んだようだ。だが、そうなる気になるのはそんなことをした理由。意味も無くこんなことをしても、なんの意味も無い。刻は遊騎に理由を尋ねると、遊騎はなんとも不快そうな声で答えた。

「……カサカサすんねん」

「カサカサ……つて、なにがだヨ?」

「耳の奥がカサカサして気持ち悪いねーん!!」

「ドワアア! バカ! 音速で暴れんなー!」

カサカサする、という遊騎の言葉が理解できず、刻は疑問符を浮かべる。だが、答えにたどり着くよりも先に遊騎は再び音速で転がりだし、壁にぶつかっては破壊し、ぶつかっては破壊しを繰り返した。ただでさえ古い『渋谷荘』は所々がどんどん穴だらけになっていき、遊騎はどうとう食堂にまで突っ込んだ。

「あ……」

「……………ばん、カサカサすんねん」

食堂に突っ込んだ遊騎と、遊騎を止めようと追いかけた刻の視界に映ったのは、まさ

に食事の準備をしていた王子の姿だった。いつもの黒の革ジャンではなくエプロンを着け、出来上がった食事を取り分けている最中だった。その後の展開は……いつものことである。

「じゅ……準備中に覗き見してんじゃねー!」

——ゴッ! ガッ!

「な、なんで朝からこんな目に……」

「……カサカサとズキズキすんねん」

「ど、どうしたのだ——って、刻君に遊騎君! 何があつたのだ!」

「朝から勘弁してくださいよ……」

見事、王子の頭突きを喰らった刻と遊騎。今までの騒ぎを聞きつけて飛び起きたのだろう。桜と大神が急いで食堂までやってきた。だが、そんなことは気にせず、『渋谷荘』の主は遊騎の胸倉を掴んだ。

「オラ、遊騎! よくもオレの『渋谷荘』をぶつ壊してくれたな! こつち来い!」

「ぶつ壊し……じゃあ、この穴は遊騎君が……。じゃなくて、王子殿! ちよつと待—

—!」

王子の言葉から、何があつたのかをおおよそ理解した桜。一瞬、そのことに気を取られたが、これから遊騎に下されるであろう制裁を予感し、それを止めようとする。

だが、王子が止まるはずもなく、制裁のための道具を手にして——！

「……………、こより？」

制裁をするかと思われた王子が手にしたのは、ティツシユの先端をねじって作ったこよりだった。そして、遊騎の頭を自分の膝の上に置くと、そのままこよりを遊騎の耳の中に入れた。

「ぴくっ——！ ……カサカサ、治ったわ」

「ほらな。見ろ、先端が濡れてるだろ。カサカサしたのは水が耳の中に入ってたからだ。遊騎、お前は『音』の異能で常人の何十倍も耳がいいんだから、髪洗う時は耳に水が入らねえように気を付けろって前に言っただろ」

「んー、そういえば言うたった」

「次からは気を付けろよ。……………ほら、逆」

「んー」

そう言つて顔の向きを逆にする遊騎。どうやら、遊騎が暴れていたのは水が耳の中に入ったことによる異音と不快感のせいだったらしい。それを王子は一瞬で見抜いたというわけだ。朝からの大騒動のあっけない幕切れに、巻き込まれた刻は何も言えなくなっていた。その横では大神も飽きれていたが、桜は「やはり王子殿は優しいのだ」と王子に聞こえないようにこっそりと言っていた。

だが、どうやら朝の大騒動はこれで終わらないようだった。

「カサカサ全部、治ったし。ごぼん、ありがとな」

「礼はいらねえよ。ただ、ぶつ壊したところは自分で直せよ。さて、早いとこ準備を――」

「ずるい!」

耳の中に入った水が無くなったらしく、遊騎は王子の膝から起き上った。王子は遊騎に壊したところを直しておくように言うと、食事の準備に戻ろうとした。その瞬間、もう一人の住人の唐突な声が響いた。

「げっ! 優子!」

「ずるい、王子様! 朝から遊騎君に膝枕なんて! まだ私は一度もされたことないのに!」

「あ、あのな……これは仕方ないことで……」

「じゃあ、私にも膝枕して! もちろん私の気が済むまで!」

「うわああああ!」

もう一人の住人……優子は来て早々、滅茶苦茶な理論を展開し始め、そのまま王子に向かつて飛び込んでいった。優がロストしたのは祭りの最中なので、元に戻るのも今日の夜。それまではずっと、このような感じだろう。そして、その間の主な犠牲者は王子



であると誰もが思った。

「皆、おはよう」

「会長！ おはようございます！」

そんな大騒動が全て終わった頃になって会長が現れて挨拶を交わす。もう慣れたものなのか、会長は周囲の惨状を見ても特に慌てる様子は無く、大神と刻に向かつて声をかける。

「さて、優君は優子君になっちゃったから今日はお休みだね。食事が終わったら二人とも始めようか」

「んあ？ なんの話だよ？」

突然の言葉に、理解が追いつかない刻は首を傾げる。すると、会長はどこに隠していたのか、柄が『にゃんまる』型の刀を取り出し、二人に向けて差し出した。

「もちろん修業さ。言った通り、私が直々に君たちの相手をしよう」

『……………！』

会長のその言葉に、二人の顔つきは一瞬で真剣なものとなる。会長が直々に相手をしての修業……その言葉に、修業が佳境に入っているということを感じて二人はひしひしと感じていた。

「さて、それじゃ説明を始めようか」

あの後、なんとか優子を押さえつけてから朝食を済ませた大神たちは、地下の修業場に集まった。本当は優子に見学だけでもしてもらおうと会長は考えていたが、王子からそう簡単に離れるはずもなく、仕方なく本人の好きにさせた。よって、修業場には大神、刻、会長の三人のみ。そして、会長は二人の準備ができたことを確認すると、説明を始めた。

「まず、修業の内容だけ……最初は二人一緒にやるからね」

「ハア!? そこは実力が上のオレとマンツーマンだろ!」

「ふざけんな。兄弟子の方が先に決まってるんだろ」

「まあまあ、話は最後まで聞いて」

二人同時に行う修業と聞いた瞬間、不満を口にする刻。だが、大神も負けじとオレ様つぷりを発揮し始めた。また喧嘩が始まるかと思つたが、会長はすぐに止めたため何とか収まった。

「マンツーマンの修業は次の段階。まずは……この『にやんまるコケシ』を私から取ることだよ。ちなみに、私はここから一步も動かないでおかきでも食べてるから。先に取った方から相手をしてあげよう」

そう言うと、会長はどこからか座布団とおかきの袋を取り出した。座布団を敷いてその上にあぐらをかいて座ると、膝の上に顔の部分が『にやんまる』の『にやんまるコケシ』を置いておかきを食べ始めた。これは言ってみれば、二人に対する挑発。たとえ全力の二人を相手にしても、自分ならば座っておかきを食べたままで余裕だという、とてもわかりやすいものだった。

そして、その挑発にプライドが高い二人が乗らないはずもなく、二人は一斉に己の異能を解放した。

「このクソネコが……！ あんま舐めてんじやネーヨ！」

「ズタボロになっても知らねえからな！ 後悔すんなよ！」

まず先行したのは大神。『青い炎』を纏った左手を構え、一直線に会長に向かっていった。修業の目的である『にやんまるコケシ』を取るより先に会長を戦闘不能にすることを選んだようで、左手は会長に向かって伸びていった。

「ほい」

だが、会長は『青い炎』を纏っていないギリギリの場所を狙って片足を伸ばした。座つ

ている姿勢からの足技だというのにその力は凄まじく、大神の左手は完全に止められた。

「チィ……!」

「甘いよ」

ならばと大神は右手を『にやんまるコケシ』に向かって伸ばす。しかし、会長は『にやんまるコケシ』を乗せている膝を器用に動かして『にやんまるコケシ』を膝の上から自らの頭上に乗せた。

「ほらほら、早くおかきを食べる暇が無くなっちゃうくらい私を忙しくしてよ」

「じゃないと太っちゃうなく」と軽口を続ける会長。その様子は余裕そのもの。その言葉でさらにイラつきが増した大神は『青い炎』を纏った左手で会長の顔を狙って何度も攻撃を繰り返す。

「やつ、ほっ」

「ちよこまかと……!」

しかし、その連続攻撃すらも会長は素早く身体を動かして避け続ける。左手はもちろん、『青い炎』すらかすっていないらしく、会長の着ぐるみは焦げてすらいない。

「大神! どいてろ!」

瞬間、背後から刻の音が響く。反射的に反応した大神は大きく後ろに跳んだ。する

と、会長の頭上から鉄骨が何本も降ってきた。おそらく、刻が最初から攻撃に参加しなかったのはこの下準備のためだったのだろう。座っている状態で突然の頭上からの攻撃は対処しづらい、そう考えた刻の攻撃だったが……

「よいしょつと。はい、邪魔邪魔」

会長はその場でごろりと肘をついて寝そべると、片足で鉄骨を全て弾いた。またいつの間にか用意していたのか、肘の部分にはクツションが置いてあった。頭上からの攻撃すら簡単にかわす会長。だが、刻の攻撃はそれだけでは終わらない。

「背後いただき！ コケシはもらったぜ！」

会長が鉄骨を弾いている間に背後に忍び寄っていた刻。寝転んだ直後という隙を突いて、頭に乗っていた『にやんまるコケシ』に手を伸ばして掴んだ。自分の手に感じる確かな感触を感じ、刻は改めて自分の実力の高さを示そうと……

「——アレ？ これ、おかきの袋……」

「それ捨てといてね〜」

『にやんまるコケシ』だと思って取ったのはおかきの袋だった。一瞬のうちに入れ替えられたのだろうが、その早業は目にも止まらぬものだった。刻は相変わらずの軽口に眉間にしわを寄せながら、いったん会長から距離をとって大神と並んだ。

「うおおおおー！」

「舐めんよ、クソネコが！」

今度は大神と刻、同時に二人がかりで会長に向かつていく。『青い炎』と『磁力』を放ちながら、二人はどんどん会長との距離を詰めていく。すると、今までおかきを食べるだけだった会長の手元がゆっくりと動いた。

——スッ

その手にあるのは二枚のおかき。それを食べる様子は無く、二人に見せつけるように持っている。まるで、「これで止める」とでも言いたげに。

「ハッ！ バカかよ、アンタ！ そんなおかき如きでオレたちが止められるとでも——！」

そんな会長の意図を察した刻は会長に不敵な笑みを向ける。確かに、会長自身は強くともおかきはおかき。ただのお菓子でしかない。そんなものを使ったところで『コード：ブレイカー』二人を止められるはずがない……はずだった。

——ピン！

「消え——!?!」

だが、会長が二枚のおかきを持っている手だけで器用に弾き飛ばした。そのスピードは凄まじく、二人の視界からは完全におかきが消えていた。そして、次の瞬間……

——パァン！

「ぐあつー！」

「つうー！」

「あくあ、割れちゃった。最後のおかきだったのに」

二枚のおかきはそれぞれ、大神と刻の眉間に直撃して粉々に粉碎した。ただのおかきだったため、ダメージはほとんど無いが二人の動きはそこで止まってしまった。今までの動きやおかきで二人の動きを止めたことも驚きだが、さらに驚くべきは最初の宣言通り、会長は最初に座った場所から一步も動いていないということである。寝転ぶなどしたが、身体の位置は動いていない。

（嘘ダロ……？ コケシが取れねえどころか、立たせることすらできなかった……）

（ただ者じゃないことはわかっていたが……コイツ、とんでもなく強い——！）

「ふう……。いかにも、こんなんじや虹次君にも『捜シ者』にも勝てないよね」

ただ座っているだけの人間を相手にする。それだけのはずなのに、立たせることも動かすこともできなかつた。それに、『にやんまるコケシ』を取ろうにもかすりもしなかつた。会長の強さを改めて実感する刻と大神に対し、会長は座り直しながら厳しい言葉をかける。

「大神君はバカ正直すぎるし、刻君は色々と考えすぎだよ。二人とも、正反対過ぎてちよつと笑えちゃうよねー」

「ザ、ザケンナ！ もう一回やらせろ！」

「ええ。今日はおかきも無くなつちやつたからお終い。新しいの買つといてね」

会長がクスクスと笑いながら二人に言葉をかけると、刻はリベンジしようと思つて声を荒げ  
る。しかし、会長はおかきの買い置きを頼むと二人に背を向けて歩き出した。

「オ、オイ！ まだ何にも教わつてねえんだゾ!? このまま終われるカ！」

それでも刻は引き下がろうとはせず、講義を続ける。すると、会長はピタリと足を止  
め、背を向けたままの状態で静かに声をかけた。

「……私が二人に、どうやったら強くなれるかを手とり足とり教えると思つているの  
かい？ だとしたらそれは間違いだよ。人の成長に教科書は存在しない……どうやっ  
たら自分は強くなるかができるのか、自分で考えてみることだよ。いかにも、修業の  
相手はいつでもしてあげるからさ」

「……………」

「くつ……………」

会長の言葉に、二人は何も言えなくなつた。今までのやり方から見ても、会長が教科  
書のように丁寧に教えるとは考えられない。どうやったら対等に戦うことができるの  
か、どうやったら勝つことができるのか、どうやったら強くなれるのか……それを考え  
ることも修業の一環なのだろう。会長はそのまま修業場を後にした。



「うーん、しかし遊騎君も派手にやったね。そろそろ『渋谷荘』も修理してるだけじゃ限界かな」

修業場から出た会長は、今朝の遊騎が残した爪跡である多くの損害を見ながら呟いた。幸いなことに、今は大神や刻といった弟子（という名の働き手）も多くいるため修理でもなんとかなったが、この惨状を見るとそうも言っていられない。

（いつそのこと、このまま『渋谷荘』を改築して……憧れのおしゃれマンションにしちゃおっかなー）

そんなことを夢見て心を躍らせていく会長。とりあえず一息ついたら『渋谷荘』改築計画でも立てようかと考えていた……その時。

——コッソ

「……おや？」

突然、目の前に立ち塞がった何かにぶつかった。だが、おかしい。会長がいたのは『渋谷

谷荘』の廊下。廊下にはそこまで大きいものは置かれていない。会長は何にぶつかったのかと思い、ぶつかった何かをジツと見つめる。果たして、それが何だったのか。それを理解した瞬間、会長は全てを理解した。

「いかにも、これは……」

会長の目の前に立ちふさがった何か……それは、『にゃんち』というラベルが巻かれていて、中にはオレンジジュースが入っているペットボトルだった。

「会長、すまないがもう一度だけ修業を——」

ちようどよく、大神と刻が修業場から会長を呼びに来た。そして、彼らも会長に何が起きたのかを理解した。それは、彼らも一度だけ見たことがある現象。自分たち異能者とは違う……例のアレを。

「てへっ☆ いかにも、無理なんだな」

そこにいたのは、ペットボトルと同じくらいサイズの着ぐるみごと小型化した会長だった。目の前で起こっている信じられないことに、大神は思わず大声で叫んだ。

「お……お前もかー!!」

「いかにも、珍種は時々小つちやくなるって言ったでしょ?」

「マ、マジかよ……!」

「おお、会長! 私と同じなのだ!」

小つちやくなっても動じず、平然としている会長。さらに、大神の大声に反応して桜たちも集まってきた。桜はかつての自分と同じ状態の会長に親近感を覚えるが、大神は突然のことに全身から力が抜けて座り込んでいた。

「ああ、大神君……。そんなに気に病むことは無いよ。これは君や刻君のせいじゃない。桜小路君の時のように慌てることも——」

「んなこと、誰も気にしてねーヨ……」

座り込んだ大神を見て、会長は「気にする必要はない」と声をかけるが、同時に刻の悪意に満ちた声が頭上から響いた。見ると、刻がこの上なく悪い顔をして会長を見下しており、ボキボキと拳を鳴らしていた。

「覚悟しろヨ、クソネコ……！ 日頃のお返しさせてもらうぜ……！」

「ええ!? ちょっと大神君！ 助け——！」

「羊の借り……ここできつちり返させてもらうぞ……！」

「……い、いかにもおとおお!?」

あまり人の恨みは買うものではない……その教訓とばかりに復讐の標的とされた會長。大神と刻から逃げるため、必死で『渋谷荘』内を駆け巡っていった。また余談だが、数年ぶりに命の危機を感じたと會長は後に語る……

「オラオラー！ クソネコ、どこ行きやがった！」

「このパチンコで『にせまる』捕まえたるしー」

「こら、遊騎。パチンコ使ったら他の奴にも当たるだろうが。つか、優子はさつさと離れるー！」

「そんなー！ 會長よりも私を見て、王子様！」

「会長ー！ 私の小っちゃくなった時の服を着てみてほしいのー！」

「おやおや、皆さん。ずいぶん賑やかですねえ。今日は何の遊びを？」

いつの間にか平家まで参加しており、『コード・ブレイカー』全員（+桜）による会長捜しが始まっていた。ドタドタと『渋谷荘』内を走り回る『コード・ブレイカー』たち。まるで子どものように会長を捜していた。一方、その標的である会長はというと……

「ふう……。いかにも、屋根の上に登ってしまえば安全なんだな」

なんとか『渋谷荘』の外に出て、屋根の上という安全地帯に陣取っていた。眼下では、『コード・ブレイカー』たちが走り回る様子が見える。どうやら、自分の居場所がわかるまではしばらくかかきりそうだった。

「さてさて、皆の気が済むまでここでこうしていようかな。ここだったらいくらでも逃げられるし、いざという時は——」

「ワンー！」

「うひゃあ！ ……つて、『子犬』君？」

「アンー！」

突然、背後から聞こえた声に、油断しきっていた会長は大きく身体を震わせる。反射的に後ろを見てみると、そこには『子犬』がいた。大神たちならまだしも、『子犬』は犬だ。会長の匂いを追ってここまで来たのだろう。それに、見たところ『子犬』からは刻

のような悪意は感じない。会長はそのまま一緒にいることにした。

「しかし、本当に騒がしいことだね。毎日毎日、何かしら事件が起きている気がするよ」

「ワン、ワン」

「遊騎君は乱暴、刻君は神経質で扱っても面倒、大神君は堅物だし、桜小路君はマイペース、優君は色々と特殊で、平家君は傍観するだけだし、八王子君は言うに及ばず……。ここまで濃いメンバーも珍しいけどね」

言葉を話さない『子犬』だからか、心の内をポツリポツリと話し出す会長。そんな会長の言葉に、『子犬』は静かに鳴いて答える。

「一体どこに行つ……ッ！ 見つけ——！」

先ほどの会長の言葉がちょうど終わった頃、外を捜していた大神が屋根の上に会長の姿を発見した。すぐに捕まえようとしたが、隣に『子犬』がいることや、何かを話している様子を見て、ひとまず様子を見ることにした。

一方、会長はそんなことには気づかず、そのまま話を続けた。

「あーあ、本当に厄介者ばかりだよ。八王子君と二人だけの静かな時に戻りたいな——」

グツと背中を伸ばして愚痴をこぼす会長。自分たちを厄介者呼ばわりする会長に対

し、大神は眉間にしわを寄せる。

「…………でも」

だが、急に会長の雰囲気が変わった。ただ愚痴をこぼしていた時とは違い、もつと深い感情が込められているようだった。どこか悲しげで、どこか名残惜しそうな……そんな雰囲気を纏いながら、会長は遠くを見るように呟いた。

「皆がいるとそれだけで、私はとてもウキウキと楽しい気分になっちゃうんだよなあ…………。私のような珍種は人を不幸にする種…………。本来なら人と暮らすべきではない…………でも、闘いが始まるその時まで、私は…………」

「……………」

会長のその言葉は、珍種である自分にはこうして人と笑い合うことすら許されない…………そんな言葉にも聞こえるようだった。それは、会長の自身に対する戒めなのか、自らの覚悟を再確認するための言葉なのか…………それはわからない。だが、その言葉に込められた深い感情を察した大神は一瞬、言葉を失った。

「あー！ テメエ、クソネコ！ やつと見つけたゾ！」

「観念しーや」

「会長ー！」

すると、刻たちも外に出て会長を見つけたらしく、大声を張り上げる。刻と遊騎は虫網を持っており、完全に捕まえる気満々である。それを見て、会長は先ほどまでの雰囲気振り払い、堂々と胸を張ってみせた。

「いかにも、甘いよ刻君。私にはこれがあるんだ。……『珍鎮水』くー！」

これまたどこに隠していたのか、会長は桜の小型化を戻した道具である『珍鎮水』を取り出した。珍種である会長の血を基にした血清のようなその液体を使って元に返ろうと、会長は栓を開けようとして――

——ツルンツ

「あ」

『あ』



——ガシャアアーン!

栓を開けようとした……まさにその時。不運にも手元が滑ってしまい、『珍鎮水』が入った容器は会長のすぐ傍に落下し、粉々に割れてしまった。さらに、中身の『珍鎮水』は外気に触れた瞬間、音を立てて蒸発してしまった。

「イ、イヤアアアアアアア!!」

まさかの事態に叫び声を上げる会長。誰がどう見ても自業自得なその光景に、『コード・ブレイカー』たちは完全に言葉を失って呆れていた。最後の手段である『珍鎮水』が使えなくなり、会長は顔を真っ青にして焦りに焦っていた。

(ど、どうしよう……!?! 『珍鎮水』は今ので最後なのに! これじゃあ、元に戻れない! 新しく作ろうにも、今の私の血じゃ『珍鎮水』は作れない! いや、そもそもアレがないと……!?)

「と、とりあえず戦略的撤退! 行くよ、『子犬』君!」

「ワン!」

「あ! 待て、コラー!」

予想外の大ピンチに会長は試行錯誤を繰り返す。とりあえず捕まることだけは避けようと、会長は『子犬』の背中に乗って『子犬』と共に再び逃亡劇を繰り広げた。それを見て、刻たちは再び会長を追いかけ始める。

時間はそのまま過ぎ去っていき……そのまま夜になっていくのだった。

「会長……結局、ご飯になっても戻ってこなかったのだ。『子犬』も帰ってきておらんし……どこに行ってしまったのだろうか」

夜になった桜の自室。パジャマに着替えながら、行方知れずの会長のことを案じていた。だが、すぐにそれは杞憂だと桜は感じ始めた。

「だが、会長はすごいお人だからな。きっと明日になれば元に戻って——」

「あ」

——プチ!

「ん?」

会長のすごさを信じて、明日には元に戻っているだろうと考えた桜が布団の中に入った時だった。腰を下ろした辺りに何やら違和感を感じた。さらに、何者かの声があった。気になって見てみると、そこには意外な人物がいた。

「か、会長!? まだ小さいままだったのですか!？」

「い、いかにも……」

そこには、桜の体重が乗ったことでペラペラになってしまった会長（ミニ）の姿があった。会長に気付いた桜が布団から出ると、会長は何か自力で薄くなった身体を元に戻した。そして、会長はここにいる理由を話し始めた。

「実は、恥ずかしい話なんだけど『珍鎮水』はあの落としてしまった分が最後だったんだ。そこで、君の力を借りたいんだよ、桜小路君」

「私の……ですか?」

桜の力が必要だという会長だったが、当の桜は自分が何の役に立てるのかさっぱりわからなかった。すると、会長は力強く桜のことを指差しながら、彼女にもわかるように言葉を添えた。

「いかにも、私が元に戻るには、君が持っているあのカードキーと君の血が必要なんだよ」

「えっ?」

（そう……。人見が君に託したカードキーと、もう一人の珍種である君の血がね……）  
自分が珍種であることを知らない桜にとって、なぜ会長が自分の血を求めるのかはわからなかった。だが、一つだけ感じたことがあった。今まで明かされなかった鍵の謎

……いよいよそれが明かされようとしているのかもしれない。桜は、心の中でそう強く感じていた。

## code : 46 開かれし扉

気分転換のはずが結果的に色々と事件が起こった祭り、鬨いに向けて本格的に始まった修行、そして会長の小型化。騒動続きの『渋谷荘』の夜は、一人の男の謝罪によつて始まる。

「王子……いつものことながら、本当に迷惑をかけた……。申し訳ない……」

「……わかつたから、もう気にすんな。一日だけ我慢すればいいことだからな」

深々と頭を下げる優に対し、少し困り気味な様子で対応する王子。先ほどまでロストしていた優……もとい優子は王子にくっ付いて離れなかった。昨日、ロストしてから一日中そんな状態だったことや、くっ付いた状態のまま元に戻ったこともあり、優は必死に謝っているというわけだ。

だが、当の王子は本当に気にしていないらしく、励ますように優の肩を叩いた。

「昨日の話も、優子のこととももう終わりだ。今は他にやるべきことがあるからな」

「……そう言ってもらえると助かる」

どうやら、昨日の祭りで話した勘違いの件も王子は吹っ切った様子だった。王子からの優しい言葉に、優もようやく顔を上げた。だが、ここで少し余計な言葉が彼の口から

出てしまった。

「優子の行動に関してはおれはどうしようもないし……昨日の話についても結局、あそこまで王子を怒らせた理由もわからないままだったからな。そうやって許してもらえると本当に助かる」

「デメエ……やっぱマジで死んどくか……!?!」

「すまない。ちゃんと反省する」

しつかりと罰を受けたはずの優だったが、なぜ自分が王子を怒らせてしまったのか……その理由まではしつかり理解していないようだった。それを耳にした王子はあの時と同様の殺気を醸し出し、優はほぼ反射的に再び頭を下げた。

「つたく、何コントやってんだヨ。さっさと会長捜さねーと修業できねーんだから真面目にやれよナ」

二人の間に何があったかまでは知らないが、明らかに今やるべきこと以外のことをやっている二人に対して刻が不機嫌そうに声をかける。そう、今彼らが行っているのは小さくなってしまった会長捜し。『珍鎮水』を落としてしまうという会長の自業自得な失態の後、ぱったりと姿を消してしまった会長。彼がいないと刻たちの修業もできない。そのため、こうして夜になっても捜しているというわけだ。

「しかし、もう一通り捜したと思うんですけどね」

「確かに隠れられそうなどころは全部捜したナ……。じゃあ、遊騎。お前の『音』で会長の声とか何かを聞いて居場所を——」

「ZZZ」

「目を開けたまま寝ているようですね。では、代わりに私が隠れ場所すら照らし出す『光』で……」

「脱ぐナー!!」

ほぼ昼間からずつと捜している大神たちは、もう『渋谷荘』中のあらゆる場所を捜し終えていた。それでも見つからなかったため、刻は遊騎に『音』で捜させようと声をかけるが目を開けたまま見事なまでの寝息を立てていた。すると、平家が制服を脱ぎ始めて『光』を放とうとしたため刻は必死に止めた。その様子を見て、大神と王子は「もはや平家はただ脱ぎたいだけじゃないのか」と思っていた。

そのように呆れながらも、大神は気になったことがあった。それを解決しようと、平家に声をかけた。ちなみに、刻に止められたため制服はちゃんと着ている。

「ところで平家、オレはもうあなたは『渋谷荘』には来ないと思っていました。それがこんな夜中まで付き合うなんて……何かあるんですか？」

大神がこのように感じている理由は王子である。元『Re—CODE』であった王子を快く思っていない平家は、王子の過去が暴かれたあの日から『渋谷荘』にはほとんど

姿を見せていない。だが、今は会長捜しという面倒なことにも付き合っている。何か狙いがあると思つても不思議ではない。

すると、平家は特に後ろめたいような様子も無く、いつも通りの微笑みを浮かべながら答えた。

「帰れないのは当然ですよ、大神君。あの会長が小さくなつて、『珍鎮水』も落としてしまつたんですよ？ 会長がどうやって元に戻るのか……大神君はわかりますか？」

「それは……わかりませんけど」

「ふふ……きつと今夜は、最高に素敵なもの見られると思いますよ。私が『渋谷荘』にいるのもそのためです」

そう言つて、大神に背を向ける平家。どうやら話はひとまずここで終わりらしいが、結局のところ詳しい理由は語られていない。ただ、何かが起こるだろうと平家は感じているようだった。一方、大神も平家の性格を知っているため、それ以上は何も聞かなかつた。

「そういうえば、大神。桜小路はどうした？」

すると、キョロキョロと辺りを見渡した優から疑問の声が上がつた。確かに、どこにも桜の姿が無い。彼女の性格を考えると、会長を心配して一緒に捜していそうなものだが。



「あの人、明日は日直で早めに出なきゃいけないので先に寝てもらいました」

「そりゃナイスだわ。あのバカ珍、こういうことに首突っ込んだら絶対に何かトンデモねえことやらかさ——」

——ズル……………

「…………ハ？」

「んあ…………？」

刻の言葉が終わろうとした瞬間、何かを引きずるような不気味な音が彼らの耳に届いた。突然、響いた音に、眠っていた遊騎も目覚めてしまった。そして、その音は少しずつ大きくなっていく。つまり、近づいてきていた。少しずつ、少しずつ……………大神たちがいる部屋に近づいていた。

そして、ちょうど開いてある扉部分から見える廊下にトンデモないものが現れた。

——ズル、ズル……………

『……………』

彼らの眼に映ったのは、明らかに不自然な動きで移動する段ボールたちだった。一つは人一人がギリギリ隠れられそうなサイズで、もう一つはその上に乗っかっており動物の尻尾のようなものが出ていた。

それは、確実に何かトンデモないことをやっている最中だと彼らは一瞬で悟った。

「会長、なんとか皆に見つからずに地下に來れました！」

「いかにも、ありがとう！ 皆に気付かれる前にさっさと済ませてしまおうか」

段ボールで姿を隠して移動していた人物たち……桜と会長、そして『子犬』は『渋谷荘』の地下へと降りていく階段……修業場がある階層も過ぎ、今まで立ち入ったことが無い地下の『拾伍階層』へと降りるところまで來ていた。桜は自分の肩に乗り、会長に報告しながら、邪魔にならないように段ボールを積み始めた。ちなみに、会長は両手でカードキーを抱え、背中には桜の血が入った小瓶を背負っていた。元に戻るのに必要だという二つのアイテムを、桜は特に疑いもせず渡したようだ。

すると、ちょうど段ボールを畳み終わった彼女は会長にある疑問を投げかけた。

「ところで会長……なぜ大神たちには内緒にするのですか？ 皆も心配しているのに……」

会長に協力して、大神たちに見つからぬように手を貸した桜だったが、その真意まではまだ知らされていなかった。効率や大神たちの心配している様子を考えると、堂々と協力してもらった方がいいと桜は感じているのだろう。客観的に見てもそうだ。（大神たちが本当に会長を心配しているかはさておき）

すると、会長はカードキーを強く握りしめながら静かに呟いた。

「……これから向かう部屋のこととは異能者たちに知られるわけにはいかないんだ。特に……大神君にはね」

「大神には……？ それはいつたい——」

何やら意味深な発言をする会長。その言葉に、桜はますます疑問が膨らむばかりだった。詳しく話を聞こうとした桜だったが、急に会長が桜の肩から飛び降りた。

「いかにも、着いたようだね。ここが目的地だよ」

そう言われて、桜はハッと視線を上げた。すると、そこには異様な光景が広がっていた。階層一面が工場のように金属で構築されており、中央には巨大な鉄製の扉があった。

扉の横にはカードキーを認証するものと思われる部分があり、扉の周囲には立ち入りを制するように黄色と黒の縞模様のラインがあった。また、扉の上部には「い」と書かれており、とてもじゃないが普通の扉とは違っていた。それを桜も感じたらしく、しばらく言葉が出てこなかった。

「あのカードキーはこの鍵キだったのですか……」

「そう、ここを開けられるのはこのカードキーだけ。そして、『珍鎮水』を精製できるのはこの部屋の中だけだから、こうしてカードキーが必要だったというわけさ」

(桜小路君……私と同じ珍種である君の血もね)

まだ自分が珍種であるということを感じていない桜のことを考え、最後の言葉は自分の胸の内ですらすらと伝わる。一方、桜は今まで捜し求めてきた鍵キの謎がいよいよ解かれようとしている現実には、いささか緊張しているようだった。

(ここに、『捜シ者』が求める「エデン」のトップシークレットがある……。おそらく、

人見先輩殿は私が私自身の眼でそれを見るように、と考えて私に鍵キを託したのだろう) 『捜シ者』が求める何か……それを手に入れるために必要なカードキーによって開かれる扉。それはつまり、その何かがここにあるという意味に他ならない。また、桜は覚えていないようだが人見が桜に鍵キを託した時に口にした言葉……『12月32日』に關する何かがある。今まで桜の中に渦巻いていた疑問の数々の答えがこの先にある。そ

の答えから目を逸らすまい……そう強く決心した桜は会長と共に扉を開けようと前へ

「じゃ、ここから先は『子犬』君と二人で行くから。桜小路君は留守番ね」

「ワンツ！」

「なぬ!?!」

いつの間にか『子犬』の背に乗った会長からの思わぬ言葉に、桜は思わず大声を上げる。ここまで協力して、自分が求めてきた答えも得られる絶好の機会だというのに、その直前で切り離されたことにショックを隠せない桜は、会長に向けて震える手を伸ばしながら理由を尋ねようとする。

「か、会長……! ……ここまで来て、私だけ留守番なんて……! 私にもお供をさせて――

――」

「絶対に駄目だ」

「え……?」

「君をこの部屋に入れるわけにはいかない。……もう一度言うよ。絶対に、駄目だ」  
「か、会長……？」

その時の会長は、今まで見たことも無いほど真剣で……思わず言葉が詰まってしまふ  
雰囲気にも包まれていた。何が彼にそこまでさせるのか……桜はそう感じざるを得な  
かった。

「さ、よろしく『子犬』君」

「ワン！」

すると、会長は『子犬』の背中から頭に移動し、『子犬』を頭をポンポンと叩く。それ  
が合図だったのか、『子犬』は勢いよく首を上には振った。その瞬間、会長はその振りに合  
わせてジャンプし、カードキーを扉横の部分にかざした。すると、そこにあった小さな  
モニターに「認証」の二文字が浮かぶ。どうやら内蔵されたセンサーがカードキーが本  
物だと認証したらしい。

——ガシヤア！

瞬間、勢いよく扉が横にスライドしていった。さらに驚くべきことに、扉の中にはさらに同じような扉があり、それが延々と続いていった。よく見ると、扉上部にある文字が「い」「ろ」「は」「に」と続いているため、何重と連続している仕組みなのだろう。その果てしなく、どこまで奥に続いていく景色に圧倒されていると、会長と『子犬』がピツと片手を挙げて歩きだした。

「それじゃあ行つてくるよ。桜小路君は大人しくここで待つてね」

「あ……か、会長！」

目の前の光景に気を取られ、反応が遅れた桜が叫んだが、すでに『子犬』は会長を乗せて走っていつてしまった。その姿が見えなくなるのに時間はかからず、二人の姿はすぐに見えなくなった。桜一人だけが残った空間を静寂が包む。桜が中に入るのを止めた時の会長の真剣な姿……それが桜に「無視して進む」という選択肢を選ばせようとしなかった。

だが、このまま素直に待つ桜ではなかった。

(……会長、申し訳ありません！ ですが、私はここに何かあるのか見届けなければならぬのです！)

心の中で会長に向かって頭を下げる桜。強い罪悪感を感じながらも、桜は意を決して部屋の中を見届けようと、その足を前に伸ばして――

「ちよつと待った、桜チャン。行くんだったら、オレたちも一緒に行かせてもらうヨ」  
「と、刻君!? それに皆も!?!」

部屋の中に足を踏み入れようとした桜だったが、背後から聞こえた声に振り向いた。そこには、声の主である刻だけでなく、『コード・ブレイカー』全員が揃っていた。わかつていたことだが、桜の隠密行動は失敗に終わった。

「い、いつからそこに……」

「着いたのは今ダヨ。ま、話の内容は遊騎が最初から全部聞いてたからわかつてるケド」

「あの鍵、ここで使うやつやったんやなー」

どうやら、遊騎の『音』のおかげで桜たちがどこに向かっているのか、その話の内容も全てお見通しだったようだ。今までそんな素振りなど見せていなかったが、おそらく遊騎自身も鍵の使い道が気になっていたのだろう。その視線はずっと開かれた扉に向けられている。

「……………」

すると、大神が無言でその一步を踏み出した。行き先はもちろん、あの部屋だ。そんな大神を見て、会長の言葉を思い出した桜は思わず止めようとした。

「お、大神! 勝手に入っては——!」



「知らねえな」

「な……………」

だが、そんな桜の言葉を大神は冷たい一言で切り捨てる。さらに、その視線は桜のことを欠片も見えておらず、真つ直ぐと部屋の中に向けられていた。どうやら、今の大神には言葉による制止は無駄なようだった。何が彼にそこまでさせるのか……それは考えれば簡単なことでもあった。

「『捜シ者』の目的……………この眼で確かめさせてもらおう」

『捜シ者』が目的である何か、それを確かめる。今の大神を動かしているのはその気持ちだけだった。そして、大神はその気持ちのままに扉の前に引かれたラインを超えた。

——「ビー！　ビー！」

その瞬間、大音量の警報が大神たちの鼓膜を震わせた。だが、ここまで嚴重な場所だったのだ。大神たちもある程度、予想していたのだろう。大神はラインを超えた足を戻し、周囲を警戒していく。

「サテ、ただの脅しか、何かが出てくるのか……。ま、何か出てきたとしても会長が出してくるのなんて『にやんまる』ぐら——」

——カツーン、ガラガラ……

「ア？」

——カツーン、ガラガラ……

警報が鳴り止んだ直後、どこからか足音とキヤスター付きの何かが動く音が一定のリズムで彼らのもとに届き始めた。一定のリズムで響き、音の出所もわからないため、ひどく不気味に感じる。大神たちはそれぞれ警戒を高めると……大神があることに気付いた。

「……部屋の中から何か来るぞ」

——カツーン、ガラガラ……

大神の言葉を聞くと、刻たちも部屋の中に眼を向ける。すると、少しずつであるが何かが動いているということがわかった。暗闇の中から一定のリズムで移動し、ようやく見えてきたそれは……明らかに人の形をしていた。

「境界を超えたのは誰？」

現れたのは、薄い緑の短髪に整った端正な顔立ち、黒を基調としながら首元の短いネクタイやスカートなど所々にチェック柄のある服装、左手には年代物と思われるシツク

な感じのキャスター付きのキャリーケースを持つ少女だった。

少女は一定のリズムで歩いていき、ラインの一步手前で止まった。

「ひ、人……？ あなたは一体……」

「私は境界のガーディアン、『いゐの壺』」

突然、現れた『いゐの壺』と名乗る少女は自らをガーディアン……守護者と言った。境界、というのは扉の前に引かれたラインのことだろう。すると、その『いゐの壺』を見て平家がポツリと呟いた。

「ほう……これがガーディアンですか。なるほど……」

「……………」

まるでガーディアンの存在を知っていたかのような平家の言葉。それを言わなかったということは気になるが、彼の性格を考えると「いつものこと」と納得してしまう。そう感じたのだろう、大神と王子は平家の言葉を特に追及しようとはしなかった。

「へえ、君って超カワイイね。オレは刻。『いゐの壺』なんて変わった名前だね。いつ

もはなんて呼ばれてんの？」

すると、刻はあろうことか『ゐの壺』をナンパし始めた。彼女が部屋の中から出てきたことやガーディアンと名乗ったことより、気に入った女性に声をかけることの方が彼の中では重要なのだろう。

「『ゐの壺』だから……『ゐいつちゃん』とかカナ？ オレにはなんて呼んでほしい？」

言葉をかけながら『ゐの壺』との距離を詰めていく刻。その足はいつの間にか、ライン……境界を完全に超えていた。

「境界を越えた者、確認」

「エ？」

突然、ポツリと呟いた『ゐの壺』の言葉を刻が完全に理解するより早く、『ゐの壺』が動いた。

「排除します」

——ドゴォ！

素早く、そして容赦なく刻の腹部に拳が叩きこまれた。それをやったのは他でもない……『ゐの壺』だった。その威力に、刻は数歩後ずさつて境界の外に出た。

「は、はが……!」

「と、刻君? 大丈夫か……?」

突然のことに理解が追いつかず、悶えるように腹部を押さえる刻。桜も同様らしく、意味がわからないという顔をしながら刻を心配していた。すると、その様子を見ていた遊騎が刻の隣に座り、ゆっくりと手を伸ばしていき……境界に触れた。

「排除」

「ゆ、遊騎君!」

刻に続いて遊騎にも拳をお見舞いする『ゐの壺』。桜は殴られたことで吹っ飛んだ遊騎を追いかける。すると、『ゐの壺』は拳を構えながら無表情のまま言葉を続けた。

「私は境界のガーディアン。この境界を越えた者は誰であろうと完璧に排除します」

(一)、怖……!)

どう見てもただの華奢な少女だというのに、『コード・ブレイカー』二人を撃沈させるほどの威力を持つ拳を放つ姿に、刻たちは『ゐの壺』に対する警戒を最大にした。だが、彼女の言葉が本当だとすると、もう一人だけ排除しなければならぬ人間がいる。殴られた腹いせだろう。刻がその人物を差し出した。

「待て待て！　そもそも最初に境界を超えたのはコイツ！　殴るんだつたらコイツを殴れ！」

「お、おい！」

最初に境界を越えた者……大神を『ゐの壺』の前に差し出す刻。今まで流れから、大神も『ゐの壺』によって排除されるのは当然の流れ。それを感じた大神は軽く抵抗しようとしたが、『ゐの壺』は容赦なく拳を構える。

「そうか、最初に超えたのは君か。ならば、君も排除——」

排除する対象を見据えようと、大神ののこを見る『ゐの壺』。だが、その瞬間、『ゐの壺』の動きが一瞬だけ止まり、目の前の大神にしか聞こえないほど小さい声で呟いた。

「……パンドラ」

「え……？」

以前、雪比奈も口にしていた「パンドラ」という言葉。なぜ自分ののこを見て、その言葉が出てきたのか。大神がそれを理解する前に、『ゐの壺』はくると大神に背を向け

た。

「君は許可」

「何い!？」

意外なことに『ゐの壺』は大神には何もせず、あろうことか通行を許可した。自分は少し超えただけで容赦なく殴られたというのに、と刻は納得できないように叫んだ。

「それじゃあ、皆さん。お先に失礼します」

「フツザけんな！　なんで下つ端のテーマだけ！　オレも——！」

「君は排除」

「はぐう！」

完全に勝ち誇っている笑顔を刻たちに向け、大神は悠々と境界を超えて進んでいった。納得できない刻は追いかけてようとすが、再び『ゐの壺』に止められる。一方、大神は知らん顔で奥へと進んでいく。そして、中にある何かをその眼で確かめようとした——その時。

——ぼむっ

「これ以上、奥に入っちゃダメだよ？　大神君」

「会長！」

何か柔らかい物に当たり、大神の歩が止まった。一体、何にぶつかったのかを大神が

確認するよりも先に、ぶつかつた物……会長が大神に声をかけた。その姿は、学ランこそ着ていないが完全に元のサイズに戻っていた。ちなみに、片手にはなぜか放心状態の『子犬』を抱えていた。会長の思わぬ登場に、大神は思わず乱暴な呼び方が出てしまつていた。

「おお、会長！ 元に戻ることができたのですね！」

「いかにも、桜小路君の協力のおかげだよ」

「本当にここで『珍鎮水』が作られているんですね。フッフ、興味深い……」

それに対し、桜は純粹に会長が元に戻つたことを喜んでいた。その隣では平家が何やら怪しい笑みを浮かべていたが、純粹な興味によるものだろう。

「だから、もう心配しなくていいから！ 早く出てつて、出てつて！」

「テメーの心配なんか最初からしてねーよ！ さっさと中に入れてろ！」

「大神の言う通りダ！ 遊騎、オレたちも加勢するゾ！」

「おー」

心配いらない、と言つて大神を境界の外まで押し出した会長。しかし、大神がそんなことで引くわけはなく、真正面から突破しようと会長に突撃した。さらに、刻と遊騎も大神に加勢してきたため、会長は戻つて早々に三対一という理不尽な状況に置かれてしまった。



「入れろ」「ダメ」のワンパターンな言い合いと争いを続ける大神たち。その様子を、平家はいつものように傍観し、王子と優は呆れた様子でため息をつき、桜はどうすればいいのかわからず目を点にしていた。

「静いさか」

すると、急に『ゐの壺』が反応を示した。だが、会長が必死に防いでいるため、誰かが境界を超えたことによる反応ではないだろう。それがどのような意味なのか、誰かが理解するよりも先に『ゐの壺』は動き出した。

「全て排除」

——ドゴオオオオオオ!!

「ドワアアア!」

『ゐの壺』は大神たちと会長の間に割って入り、その拳を思いきり床に放った。瞬間、拳を受けた地点を中心にして巨大な亀裂が生まれていく。今までの行動から考えて、普通ではないことはなんとなく感じられたが、ここまでくるとほぼ確定である。

「皆さん……」

ゆらりと拳を放った状態から立ち上がろうとする『ゐの壺』。また殴り始めるのではないかと誰もが感じていた。そして、そんな『ゐの壺』が次に発した言葉は……

「『隣の家に塀で囲いができたってね』。『塀、へい 囲いカッコいい』（笑）』」

「……ハ？」

『あの壺』が発した言葉……それは聞き間違いではない。彼女が口にした言葉は……ダジャレだった。だが、それを周りが理解するよりも先に、理解が追いつかないことによる間が発生した。

「……おかしい、笑いが起きない。静いは怒り、怒りを笑いに、笑いは楽しい。そうなる予定だった。しかし、皆さんに笑いはなし」

「……い、今のナニ？」

「知るわけがないでしょう……」

笑いが起きるはずだったのに、誰も笑わない。目の前の現実を見て、疑問を口にする

『ゐの壺』だったが、対する刻たちはまるで意味がわからないといった様子だった。そのまま数秒の間、沈黙が流れると、『ゐの壺』は何かを理解したのか大神たちに背を向けた。

「私は『ゐの壺』。全てが完璧なガーディアン……」

「……なんか、落ち込んでねえ？」

大神たちに背を向けた『ゐの壺』は少し俯き気味に呟いた。その様子や声のトーンから、刻はなんとなくだったが彼女が笑いが起きなかつたことに対して落ち込んでいるのでは、と察した。すると、そのことをようやく理解した桜が『ゐの壺』の隣に移動して声をかけた。

「そうか……。『ゐの壺』殿は皆に諍いをやめて、一緒に笑い合おうとしたのだな。『ゐの壺』殿はとても優しくて偉い人なのだ」

若干、桜の性善説染みた主観が入っているようだが、これでとりあえず場が収まるだろうと思い、誰も何も言わなかつた。すると、桜から褒められているはずの『ゐの壺』は何やら不思議そうな顔を桜に向けていた。

「『偉い』……人を褒める言葉。疑問、なぜ『ゐの壺』を褒める？」

「なぜって、それは……ああ！」

なぜ自分が褒められているのかが理解できないのか、『ゐの壺』は疑問の言葉を桜に投げかけた。桜は理由を答えようとするが、突然、驚きの声を上げた。その視線の先にあ

るのは……ぐしゃぐしゃに折れ曲がった『ゐの壺』の片腕だった。

「た、大変だ！ さっきので骨折したのではないか!? 早く手当しないと！」

『ゐの壺』のことを心配して慌てふためく桜。しかし、それに対して怪我をしている当人である『ゐの壺』は痛がる様子も無く、ただただ平然としていた。痛みに耐えるように顔をしかめるわけでもなく、痛みに耐えるように涙を流すわけでもない。ただ立っているだけだ。

「心配不必要」

すると、『ゐの壺』はなんの躊躇もせずに折れ曲がった腕を掴んだ。そして……

「替えはいくらでもある」

——ぱかっ

折れ曲がった腕を……取り外した。

「……?!?!」

目の前の異様な光景に、桜は声にならない悲鳴を上げる。謎の部屋から現れたガーディアンを名乗る少女。境界を越えた者に鉄槌を下し、諍いをやめさせようと拳を振るう彼女。その腕が骨折したように折れ曲がったかと思うと、いとも簡単にそれを取り外したのだ。どう考えても人間業ではない。

「替えはこの中にある」

だが、当の本人は当然のこゝろのように、替えがあるというキャリアケースを開いた。だが次の瞬間、さらに信じられない光景が桜たちを襲うことになる。

「たしかここに……………あ」

替えを取り出そうとしやがんだ『みの壺』。キャリアケースの中を捜そうとした、まさにその瞬間――

——ポロ

「あら」

『みの壺』の頭が……………身体から離れて、落ちていった。信じられないであろうが、わかりやすく言えば……………取れた。頭が取れてしまった。

「い、いやああああああ!!」

「く、首……！　生首に、なった……！」

「失礼」

——かぼつ

「戻ったああああ!!」

明らかに人間離れした光景に、最大級の悲鳴を上げた刻。すると、『ゐの壺』は何事も無かったかのように取れた頭を戻した。よく見ると、先ほどまで折れ曲がっていた腕も元に戻っていた。だが、治ったというわけではない。その足元には、未だ折れ曲がっている彼女の片腕があった。

「こ、これは一体……!?　あれじゃあ、まるで人形……！」

「え?　いかにも、『ゐの壺』君はカラクリ人形だけど?」

「当然のコトみてーに言ってるじゃネーヨ!　わかるわけねーダローガ!」

今までの『ゐの壺』の行動や今の様子をまとめ、「人形」という言葉を発した桜。すると、会長がしれつと真実を明かした。彼女……『ゐの壺』がカラクリ人形である、という。あまりに適当な会長に、刻は半泣きの状態ながら抗議を始めた。

「ふふふ……実に面白いですね」

「……平家、あなた知っていましたね?　あの部屋のことも、『ゐの壺』のことも。一

「体、この奥に何かあるっていうんですか……?」

桜たちのやり取りを見て、愉快そうな笑みを浮かべる平家を見て、大神は彼が最初から全てを知っていたという結論にたどり着いた。そう考えると、確かに最初から平家の反応には驚きよりも感心の色が強く出ていた。知識はあるが実物を見るのは初めて……そういつた感じである。

「さて、何でしょうねえ」

「……まで来て、まだ隠すんですか?」

「ふふふ……ただ、確実なことが一つ」

大神からの指摘を受けても怪しい笑みが絶えることの無い平家。その姿は、明らかにまだ何かを隠しているようだった。それが何なのか知るよりも先に……平家の眼がゆっくりと開かれていった。

「扉は開かれました……。つまり、賽は投げられたということですよ」

「……開いた」

都内にある超高層ビル。その最上階に近い一室にて、一人の白き青年が呟いた。窓辺に座り、視線を窓の外に向けて、その手を窓に添えながら。白き青年……『捜シ者』の突然の呟きに、周囲の『Re—CODE』たちは反応する。

「開いた、つて何がですK.A.？」

「扉が開いた」

『捜シ者』の言葉が何を意味するのか、理解できなかった日和が率直な問いを述べる。すると、『捜シ者』は端的に言葉を返した。だが、彼らに伝えるにはそれだけで十分だったらしい。『捜シ者』の言葉に『Re—CODE』たちの間にピリツとした緊張感が広がる。

「あの扉が……ですか？」

「……時が満ちた、ということか」

「……………」

それぞれの言葉と反応を見せる雪比奈、虹次、時雨。すると、『捜シ者』は窓辺から離れ、その歩を進めていった。その後ろに『Re—CODE』を引き連れ、妖しい微笑みを浮かべながら。

「さあ……闘いの準備を始めよう」



## code : 47 Memory to revive

「境界を越えた者は全て排除します」

無機質な言葉で何度も繰り返した言葉を発する『みの壺』。どう見ても生身の人間にしか見えないが、会長曰く彼女はカラクリ人形であるという。そう考えると、彼女が腕を取り替えたり頭が取れたりするのも納得である。そんな彼女がガーディアンを務める『渋谷荘』最下層に存在する謎の部屋。人見が桜に託したカードキーでのみ開けられ、『捜シ者』が求める物があるというその場所にいったい何があるというのか。大神たちの疑問は膨らむばかりであった。

「かくなる上は……行け、大神！」

「会長、申し訳ありません……！」

「止めるし」

「さ、三人がかりはズルいよ〜！」

「君は許可」

「それじゃあ、失礼します」

なんとか部屋の秘密を暴こうと、刻、桜、遊騎の三人は部屋に入れまいとしている会

長を止める。そして、唯一『ゐの壺』に境界を超えることを許されている大神に全てを託した。障害が無くなった部屋に、大神はそのまま入ろうと――

「いかにも、大神君。もう修業はいいのかな?」

「……………」

「私たちの師弟関係はこんなことで壊れたりしないよね? あんなに頑張ってきたんだから」

「……………」

「わかってるよね? 大神君」

「ッ――!」

連続して大神に突き刺さっていく会長の言葉。大神の身体はまるで見えない何かに止められているように動かなくなり、そして……

「こ、これからもよろしくお願いいたします……………」

「いかにも」

「バカヤロー! 上手く丸め込まれてんじやネー!」

会長の前まで戻って、震える身体と声で深々と頭を下げた。その様子には会長は満足気に胸に手を置き、刻は怒りを露わにしていた。どうやら、今はどうやっても部屋の中には入れないようだ。

「しかし、本当にこの部屋はなんなのだ……。カードキーに『あの壺』殿……。こんなに嚴重にして、何を護っているのだ……。？」

桜が思わず疑問を口にする。確かに、色々と複雑な経緯を辿って「エデン」に保管されていたカードキーや、容赦ないカラクリ人形『あの壺』の存在などを見る限り、部屋の中にある物は生半可な物だとは思えない。いったい何が隠されているのか、想像もつかない桜だったが、その秘密は意外な人物から唐突に明かされた。

「……箱さ」

「え？」

「パンドラの箱ボックスだよ。この中にあるのは」

嚴重な警備によって隠されていた部屋の秘密。その秘密は明かしたのは、今まで傍観していた『渋谷荘』の真の主……。王子だった。

「は、八王子君！ 秘密だつて言つたでしょ！」

「……まできたら隠し通せるものじゃねえだろうが。大体、零たちにだつて知る権利ぐらいいはある」

会長にしてみれば、それは裏切りに近い行為だつただろう。だが、王子は客観的に状況をみて話そうとしたらしく、見事に会長を論破してみせた。

そして、大神たちに説明を始めた。

『捜シ者』はこの中にあるパンドラの箱ボックスを捜している。何が入っているのかはオレも知らねえが、開いた者は遺伝子コードの先にある最強の異能者になれると言われている

「それじゃあ、『捜シ者』の目的はそのパンドラボックスの箱を使って最強の異能者になることなのか……？」

「最強になつて何をしようつてんだヨ……！」

「やはり知つていましたか。さすが元『Re—CODE』、そういつた機密情報についてはよく御存知のようで」

王子から語られたパンドラボックスの箱なる謎の物体。開けば最強の異能者になれる、という

王子の言葉に、『捜シ者』の真の目的はそこにあると感じる優と刻。一方、平家は王子がそれを知っていることが気に入らないのか、嫌味が混じったような言葉をかける。

「パンドラの箱……<sup>ボックス</sup>。それが『捜シ者』が求める物……」

一度、大神と共に『捜シ者』に対峙したことがある桜。圧倒的な力で大神を斃し、自分をさらっていった男。そして、幼き頃にカードキーを託した男。リリイや『Re—C ODE』など、様々な異能者を使つて闘いを起こしてまで彼が求めていた物が『箱』であるという事実には、桜は少し拍子抜けしていた。しかし、それは同時にその『箱』がそれだけ危険な物であるということの意味している。拍子抜けと同時に、桜は言い知れぬ不安を感じていた。

この部屋の中にそんな物が隠されている。そう考えると、部屋の見方も先ほどまでとは変わってくる。桜は真剣な表情になり、改めて部屋を視界に捉え――

「はい！… もうおしまい！」

『あー！』

――ようとしたその時、会長が俊敏に動いて扉を閉めてしまった。オートロック式らしく、閉めた瞬間に「ガチャン」と鍵が閉まる音がした。突然のことに桜は口を開けたまま呆然としてしまったが、他の者たちは一斉に会長に詰め寄った。

「テメエ、クソネコ！」

「この野郎！ その鍵よこしやがれ！」

明らかな怒りをぶつけながら、会長を追いつめていく大神、刻、遊騎。もう一度、扉を開けようと会長から鍵を奪おうとするが、会長は意外な方法でそれを回避した。

「いかにもっ」

「うお!？」

なんと、会長は自ら着ぐるみの頭をわずかに浮かせて、その中にカードキーを放り込んだ。こうなってしまうと、会長を戦闘不能にして着ぐるみの中からカードキーを取り出すしかない。だが、それがどれだけ難しいことか大神と刻はわかっていた。彼の強さは底知れない。彼が本気を出してしまえば、それこそ一瞬で終わってしまうだろう。つまり、今は諦めるしかないということだ。

「ち、ちくしよおおお……!」

「ふう、よかった。これで全部、元通りに……」

「……………」

「……………あ」

しっかりと扉を閉め、カードキーの安全も確保して元通りになったと胸をなで下ろした会長。だが、その目の前に立つのは……本来なら部屋の中にいるはずのガーディアン『みの壺』。彼女が戻る前に扉を閉めてしまったため、全てが元通りとはならなかった。

「境界を越えた者は『ゐの壺』が全て排除します」

そう言つて、『ゐの壺』は境界の傍に直立不動の姿勢で立っていた。どうやら、部屋に戻れなくなったとしても特に問題ないようだった。その様子を見て安心したのか、会長はさつさと上へと戻つていつてしまった。こうなると、もう部屋に入る方法は無いため大神たちも諦めがついたのか、自分たちも上に戻ろうとした。

だが、こうなると『ゐの壺』をただ一人だけ置いていくというのは少し気が引けたのだろう。一緒に上に行こうと『ゐの壺』に大神が声をかけた。

『ゐの壺』さん、そこで一人でいるよりは上に行きませんか？」

「……………」

しかし、見事に反応が無い。彼女は境界を越えた者を排除することが仕事のカラクリ人形のため、おそらくこの場所からはテコでも動かないだろう。それを察し、大神たちは諦めて上に戻つていった。

「むう……『ゐの壺』殿！　そこで一人は寂しいのだ！　一緒に上に行こう！」

「桜小路……どうせ無駄だ。明日、早いんだろ？　さっさと行こうぜ」

しかし、桜はどうしても『ゐの壺』が気になるらしく、再び『ゐの壺』に声をかける。先ほどの反応からしても無駄だとわかっていた王子は、早く来るよう桜に声をかける。だが、テコでも動かないほど意固地なのは桜も同じ。これは放っておいたら、二人の意地合戦になると誰もが予想していた。しかし……

「はい、了解しました。最優先事項です」

「……え？」

なんと、すんなりと桜の言葉を受け入れて移動してきた『ゐの壺』。話しかけても反応すら返ってこなかった大神は、意味がわからず呆然とする。そんな大神を見て、「これが人徳というやつだな、大神」と桜は勝ち誇った様子でニヤニヤしていた。そのまま、『ゐの壺』を連れた桜たちは上へと戻っていった。



とりあえず上へと戻ってきた一同は、一息つくためにお茶を飲んでいた。カラクリ人形のため飲めるかどうかはわからないが、一応『ゐの壺』の分も用意された。

「お茶・葉を加工したもの、またはその飲み物。カップ&ソーサー・飲み物を入れる物、そしてその受け皿」

「よー知つとるなー」

「まるで歩く辞書だな」

用意されたお茶を見ると、『ゐの壺』はすらすらとそれらの説明を始めた。その博識ぶりに遊騎と優はいたく感心していた。しかし、彼らの隣にいる刻からは何やら変な汗が出ていた。

「…………いや、確かにそうなんだけどサ。そうやって大人しくしてれば可愛いもんなんだヨ…………」

どこか歯切れの悪い刻の言葉。そんな刻の視線はゆっくりと『ゐの壺』から…………文字通りその目前にいる者に向けられた。

「ただ……そうやって桜ちゃんをずっと膝の上に乗っけてるのはおかしいダロ！」  
「お、おほ……」

『ゐの壺』の膝の上……そこには、自分でもどうしたらいいのかわからずに目を丸くしている桜の姿があった。一方、『ゐの壺』はというと……

「お茶の温度、確認。……87℃のため火傷の危険あり。消去します」

——ガチャン！

刻の言葉など気にせず、お茶に指を突っ込んで温度を確認したかと思っただけ座にカップを壁に投げつけた。もちろん、カップは木端微塵になり、中身のお茶も壁にしっかりと付着していた。

「い、『ゐの壺』殿……私もお茶が飲みたいのだ。そろそろ失礼しても……」  
「最優先事項です」

桜が降りたい意志を示しても、『ゐの壺』は「最優先事項」と繰り返して降ろそうとしない。人を膝の上に乗せたままお茶を飲もうとし、あげくそのお茶を壁に投げつけるな

ど、お世辞にも行儀がいいとは言えない『ゐの壺』の行動に、『渋谷荘』の主がとうとう動いた。

「オラ！ 本人が言っただからさつきと桜小路を降ろしな！ 大体、さつきから行儀が悪いんだよ！」

「さつきと『ゐの壺』に詰め寄り、力づくで桜を『ゐの壺』の膝から降ろした王子。そして、そのままの勢いで『ゐの壺』に必殺の頭突きを喰らわせた。普通の人間ならば、その痛みに悶絶するだろう。しかし、相手は普通の人間ではない。カラクリ人形である。」

「あら」

「きやあ!!」

王子の頭突きを受けた『ゐの壺』の頭はポロリと外れ、ゴロゴロと転がっていった。知っていたこととはいえ、目の前で頭が取れたことに動揺した王子は甲高い声で悲鳴を上げた。一方、外れた『ゐの壺』の頭は頭突きの際のまま転がっていき、優の足元まで移動した。優は自分の足に当たる前に、その頭をキャッチしてみた。

「よつと。結構、簡単に外れるもんなんだな。いや、王子の頭突きだから仕方ないのか？」

「う、うるせえ……!」

キャッチした『ゐの壺』の頭を見ながら、改めて王子の頭突きの威力に関心する優。強

気な言葉を返す王子だったが、驚いてそれどころではないのだろう。言葉に力はなく、落ち着かせようと胸に手を当てていた。すると、『ゐの壺』の頭を持った優を見て、遊騎が小首を傾げながら言った。

「そーいえば、ななばんって女の顔が見れんけど、それやつたらどーなん？　人形やからいけるんやないか？」

「……………と、言われてもな」

それ、と言つて『ゐの壺』の頭を指差す遊騎。一応、『ゐの壺』も女性の格好をしたカラクリ人形だ。しかし、元を辿ればカラクリ人形。人間ではない。遊騎の言うようにもしかしたら大丈夫かもしれない。すると、自分でも気になったのか、優が『ゐの壺』の頭を動かして顔の部分を自分と向かい合わせた。そして、そのままジツと目を合わせてみた。

（これは人形、これは人形、これは人形、これは人形、これは人形……）  
『ゐの壺』と目を合わせながら、ただひたすらに同じことを頭の中で繰り返す優。すると、意外にも何事も無く数秒が過ぎようとしていた。

「……………オ？　意外にもイケる感じじゃネ？　これを機に優の女嫌いもマシに——」

「……………無理、だ……………」

「優——！」

「ありがとうございます」

しかし、やはり『ゐの壺』が精巧すぎたせいか、顔を真っ赤にして湯気を放ちながら倒れていった。倒れる際に思わず投げってしまった『ゐの壺』の頭は、上手いこと本体の方に向かっていき、そのまま本体にキヤツチされ『ゐの壺』は戻してくれたことに對して礼を言った。

「博識で礼儀正しい。さらに人間と変わらないほど精巧な出来栄え。まさに完璧ですね」

「私は完璧なガーディアン」

「……頭、前後が逆になっていますが」

優曰く歩く辞書とも言えるほど博識で、どんな時でも崩れることが無い礼儀正しい口調。そして、優の女性嫌いが生じるほど精巧な出来栄え。平家は官能小説愛読書を読みながら『ゐの壺』に感心していた。『ゐの壺』本人も、同意するように自身を完璧と口にしていた。……顔の部分が背後にくるように頭を取りつけながら。見事に頭の前後が逆になつており、思わず大神がツッコんでいた。

「……あ、もうこんな時間か。明日は早いから私はそろそろ寝よう。王子殿、少し汗をかいてしまったのでお風呂借ります」

「ああ、好きにしな」

そんな中、桜がふと時計を確認して立ち上がる。大神も言っていたが、彼女は明日、日直のため早く登校する必要がある。そのために早く休ませたというのに、結果として遅くなってしまった。まあ、全ては本人が会長と共に動いた結果なのだが。

「さて、では失礼します」

「失礼します」

「……ん？」

部屋を出る際、軽く一礼した桜。すると、いつの間にか『あの壺』がその隣に立っていた。なぜ同じタイミングで出るのか、と少し疑問に感じた桜だったが、偶然だろうと考えてそのまま部屋を出た。だが、それは偶然ではない、とすぐに知ることになった。

——廊下

「最優先事項です」

「んん……？」

——部屋

「最優先事項です」

「お、おお……?」

——トイレ

「最優先事項です」

「こ、ここはちよつと!」

——風呂

「最優先事項です」

「ええ!」

桜が行くところ全て……というより、完全に『あの壺』は桜についていつていた。ここまで来ると、さすがの桜でも気付いていた。『あの壺』は故意に桜の傍にいて、と。

「最優先事項です」

入浴も済ませ、ようやく布団に入った桜だったが、なぜかその桜を見下ろすように『あ

の壺』が枕元に座っていた。目を閉じれば見えないとはいえ、こうも近くには気になつて眠れない。それは桜も同じらしく、とうとう『ゐの壺』に声をかけた。

「い、『ゐの壺』殿……もう夜も遅い。そろそろ寝所に帰られたらどうだろう……？」

「疑問、なぜ帰る？ あなたの側が最優先事項」

（い、意味がわからぬ……！）

やんわりと帰ることを促した桜だったが、『ゐの壺』にしてみれば帰ることこそおかしいことらしい。その場から動こうとしない。しかし、桜にしてみれば『ゐの壺』がそこにいることがおかしいことなのですっかり困惑してしまった。

そして、そのまま時間は過ぎていき……

「お、大神いい……」

「……随分とお疲れのようですね」

桜と大神の部屋の間にある壁……そこに開けられた穴から桜は顔を覗かせた。実はこの穴、少し前に桜が寝ぼけて暴れた結果、開いてしまったものである。大まかな部分は直してあるが、下のちよつとしたスペースだけ桜の意向で開けられたままなのである。理由は、大神に何かあつてもすぐに気付いて便利だから、だそうだが。

そういつた経緯で開けられた穴だが、明らかに今は桜が助けを求めていた。また、その隣には『ゐの壺』の頭もあった。おそらく、自分で頭を外して覗いているのだろう。ど



こまでも桜と同じことをするカラクリ人形だった。

「あなたにつきまとわれているオレの気持ちがあ少しはわかりましたか？」

「ぬ……！ それとこれとは別だろう……！」

珍しく困っている桜を見て、意地悪な言葉をかける大神。痛いところを突かれたからか、桜は少し顔を赤らめながら抗議したが言葉に力はなかった。そんな桜を見て、大神は「フフフ」と笑みを浮かべた。

「というより、オレには無理ですよ。オレが言ったところで『ゐの壺』は聞かないでしょうし」

「これが最優先——移動します」

「……いい、『ゐの壺』殿？」

大神もお手上げの状態だったが、『ゐの壺』が急に頭を元に戻して立ち上がってそのまま桜の部屋を出ていった。離れてくれたのはありがたいが、あまりにも突然なことに桜は一種の違和感を感じた。それは大神も同じだったらしく、二人は『ゐの壺』のあとを追うことにした。

「排除します」

「ほっ」

——ドガア！

『渋谷荘』の地下拾伍階……パンドラの箱ボックスがある部屋の前では、侵入者遊騎とガーディアンゐの壱が対峙していた。『ゐの壱』が桜の側から離れたのはこのためである。彼女はこの部屋を守るガーディアン。異常があれば戻るのは当然である。

「邪魔せんというや。この扉、オレの『音』でも壊れへんけど中身メツチャ気になんねん」

どうやら、遊騎は『音』の衝撃波を使って扉を壊そうとしたが失敗に終わったらしい。『ゐの壱』が感じた異常とは扉が攻撃を受けていることだったのだろう。扉を壊そうとした遊騎は、『ゐの壱』にとつて紛れもない敵である。

「おい、遊騎！ お前、いないと思つたらここにいたのかヨ！」

「相変わらず自由奔放ですなえ」

すると、『ゐの壱』を追ってきた大神と桜から事情を聞いて合流した刻たちも到着した。来て早々、遊騎と『ゐの壱』が対峙していることに驚いた彼らだったが、遊騎の性

格と現状からおおよそのことはすぐに理解した。

「せやかて、鍵キないんやからしやーないやん。オレは……諦めへんで！」

瞬間、遊騎は『音』の衝撃波を『ゐの壱』に向けて放った。しかし、『ゐの壱』を壊す気は無いらしく狙いは彼女の一步手前で、その動きを牽制するためだった。すると、『ゐの壱』も動き出した。

「異能確認、処理します」

遊騎が『音』の衝撃波を放ったのを確認すると、『ゐの壱』はすぐさま動き出した。身体を横に移動させ、そのまま遊騎との距離を詰めていく。そのスピードはかなりのもので、遊騎は衝撃波を放った際の際を完全に突かれた。そのまま遊騎の背後を取り、そして……

「喰う」

「ッ!？」

「ハ、ハア!？」

『ゐの壱』は何の躊躇もなく遊騎の首に思いきり噛みついた。突然のことに、遊騎だけでなく見ていた刻たちも驚きを隠せない。だが、驚きはそれだけでは終わらなかつた。

「な、なんや……!!? あかん、力が抜け——!」

——ポソツ

「ロ、ロストー!?!」

なんと、遊騎はそのままロストしてしまった。理解が追い付かないことの連続に、一同はすっかり困惑してしまった。

「ゆ、遊騎……。あなた、いったい何をされたんですか……。?」

「なんか異能喰われたわ」

「く、喰われたあ!?! 何言ってるんだヨ!」

何があつたのか把握しようと、事の当人である遊騎に何があつたか大神が尋ねると、遊騎は平然と「異能を喰われた」と証言した。しかし、それでも納得できないらしく、刻は声を張り上げる。

「いかにも、驚いたかな？ 実は『ゐの壺』はただのカラクリ人形じゃないんだな」

「見りやわかるっつーの！」

会長のあつけらかなとした言葉に、刻はまたも声を張り上げる。そして、会長はそのまま『ゐの壺』の正体について説明を始めた。

「『ゐの壺』はある異能によって造られた対異能者用のカラクリ人形なんだ。そのパワーもスピードも見事なものだけど、一番の特徴は……ズバリ！ 異能を食べちゃうんだな！」

対異能者用に造られたという『ゐの壺』。だが、考えてみれば異能者に力を与えるパンボックスドラの箱を守る存在なのだ。異能者に対抗できる力がなければ務まらない。そう考えると、この上なく適任なガーディアンである。

「喰うって、マジなのかヨ……」

「カラクリ人形を造る異能、ってことか……？」

「確かに、これならどんな異能が相手でも問題ないな」

『ゐの壺』の力に驚きを隠せない刻と、感心する優。一方、大神はそんな『ゐの壺』を造った異能について関心が向いていた。少なくとも、彼の周囲にはそんなことができる者はいない。どうやら、まだ『ゐの壺』には多くの謎がありそうだ。

ちなみに、その『ゐの壺』はというと……

「最優先事項です」

「ま、またなのか……」

遊騎の異能を喰ったことで仕事を終えたのだろう。再び桜の側に立って「最優先事項」と繰り返した。桜は試しにと階段の途中まで歩いてみたが、やはりついてくる。このまま戻っても、『ゐの壱』は再び部屋までついてくるだろう。

「『ゐの壱』殿……一緒にいてくれるのは嬉しいのだが、少し休む時間をくれないか？  
たくさんくつつかれたから、疲れてしまったのだ……。また明日、一緒に遊ぼう」

そう言って、桜は再び歩き出した。この階段は平面な通路もあり、ギャラリ―としての役割もある。桜はその通路を一人で歩いていき、部屋に戻ろうとした——その瞬間。

——ガゴオ！

「なっ!？」

「さ、桜小路さん!!」

突然、桜が歩いていた通路が音を立てて崩れ始めた。どうやら、支えていた金具が限界を迎えたのか外れたらしい。思わぬところで『渋谷荘』の老朽化が害となり、一同は戸惑いを隠せない。

「このオンボロアパートが！ オレの『磁力』で止めて——！」

——ガク、ン……

「と、止まった……?」

階段も通路も鉄でできていたため、上とは違って刻の『磁力』が作用する。刻は今まさに桜を巻き込んで崩れようとしている通路を止めようと構える。瞬間、崩れようとしていた通路はなんとか止まり、桜も手すりに掴まって耐えていた。誰もが刻の『磁力』が作用したためだと思っていた。

しかし、それは間違いだった。いくら修行によつて異エネルギーが上がったとはいえ、対象が大きければ大きいほど『磁力』が作用するには時間がかかる。ましてや、階段として設置された通路だ。その質量はかなりのものだ。すぐに作用するわけがない。ならば、なぜ止まっているのか。なんとか目を開けた桜は、その理由を目にした。

「い、『るの壱』!」

なんと、崩れようとした通路を止めたのは『るの壱』だった。崩壊に巻き込まれなかった部分の手すりに掴まった状態で通路の手すりを掴んで止めているのだ。普通ならあ

り得ないことだが、ガーディアンとしての力のおかげでそれを可能としてみせた。しかし、いくら力が強くてもその身体はカラクリ人形。その両腕は……今にも引き千切れそうなほどボロボロだった。

「手を……手を離すのだ！ このままでは……！」

「……………」

『ゐの壺』の身を案じ、手を離すよう桜は大声を出す。しかし、『ゐの壺』は聞こうとはせず、手を離さない。そうしている間にも、彼女の腕はブチブチと音を立てて千切れようとしている。

『『ゐの壺』!! やめろ!!』

そんな彼女の姿を見ていられず、思わずらしくもない乱暴な言葉をぶつける桜。すると、『ゐの壺』は表情一つ崩すことなく、真つ直ぐと桜をその視界に捉えて言った。

「あなたを護ること、最優先事項。そのための『ゐの壺』」

「え……………」



その言葉を聞いた瞬間、桜の頭の中で小さな爆発が起こった。遠い昔、今の言葉と同じ言葉を……同じ人物から聞いた時の記憶が呼び起こされ、桜の意識は一瞬だけその過去に飛んだ。

「あなたを護ること、最優先事項。そのための『ゐの壺』。あなたのために造られたカラクリ人形。いつまでもあなたの側に——」

幼い桜を庇うように座り込む『ゐの壺』。だが、その顔は半分ほど消し飛び、腕もほとんど千切れてしまっている。その他にも、数えきれないほどの損傷があった。それでも、彼女は残った眼で桜を見て、残った身体を全て使って桜を護ろうとしていた。

そして、それを引き金にして別の記憶も蘇る。幼い桜を膝の上に乗せて座る『ゐの壺』、布団に入った幼い桜を見守るように枕元に座る『ゐの壺』。その時の桜が感じていた感情は他でもない……“安心”だった。

「い、『ゐの壺』……いつ、どこでかはわからぬが、私は……遠い昔にお前と会って……」  
次々と蘇る『ゐの壺』との記憶。突然のことに戸惑いながらも、確かにそれはあつたのだと本能的に察した桜は、それを受け入れていた。そして、『ゐの壺』も……

「動いている限り、あなたを護る。いつまでも、ずっと」

そう、彼女はずっと護ろうとしただけだった。どんな時も側に立ち、あらゆる敵から護り、『安心』をもたらす存在。膝の上に乗せたのも、枕元に座っていたのも過去に行っていたこと。それが『安心』につながると知っていたから。目の前の少女……桜  
小路 桜のために。

——キイイン

「おし、止めた！ 優！」

「任せろ！」

刻の『磁力』が崩れかけた通路に作用して崩壊を止めると、すぐに優が『脳』で身体能力を強化して桜のところに跳んだ。優は桜を抱えると、すぐに『ゐの壺』のところに

移動して彼女も抱えた。二人を助けたことを確認すると、刻はゆっくりと通路を床に移動させた。ズン、という重低音が響き、若干の揺れがあったが気になるほどではない。そして、優は再び跳んで大神たちのところまで二人を運んだ。

「怪我は無いか？」

「わ、私は大丈夫です……。ただ、『ゐの壺』が……」

優が桜の無事を確認するが、桜の意識は自分よりも『ゐの壺』に向けられていた。自分を護るために、その身を犠牲にした少女。桜は『ゐの壺』の方に視線を向けた。その姿は酷いもので、片方の腕は取れ、もう片方の腕は力無くぶら下がっているだけで使い物にならない。カラクリ人形のため痛みを感じないのか、その表情は無表情のままだったが、その姿はとても痛々しかった。

「すまない、『ゐの壺』……。お前がずっと側にいたのは、あの時のように私を護るため……。すまない、『ゐの壺』……。！ 本当に……。！」

「疑問、なぜ『ゐの壺』に謝る？ あなたを護ること、最優先事項」

「グス……。そう、だな。こういう時は、謝るんじゃないな」

『ゐの壺』の思いに気付けなかった自分を戒めるように、『ゐの壺』のボロボロになった手を握りながら謝罪の言葉を口にする桜。その眼からは、かすかに涙が流れていた。しかし、当の『ゐの壺』は桜が誤っているのが理解できず、自分はやるべきことをやつ

ただけと言いたげに首を傾げていた。そんな『ゐの壺』を見て、桜は涙を拭いながら『ゐの壺』の手をより強く握った。

「ありがとう……『ゐの壺』」

「最優先事項です」

真つ直ぐと『ゐの壺』を見てお礼を言う桜。同じ言葉を繰り返す『ゐの壺』だったが、桜にはそれが彼女なりの「どういたしまして」だと感じ、心がじんわりと温かくなった。

「……桜小路君の記憶が戻り始めているね」

「記憶が……?」

そんな桜と『ゐの壺』の様子を見て、会長がポツリと呟いた。その呟きは、たまたま隣にいた大神に聞こえていたが、会長は承知の上だったのか言葉が続ける。

「扉が開いた今、『捜シ者』はじきにやってくる。もう……運命の歯車は止められない」  
ジツと桜の顔を見る会長。その視線には言い知れない悲しみが込められているように、その思いは会長の言葉にも強く込められていた。そのせいか、会長の言葉一つひとつが大神には強く残った。

「彼女もそう、普通の女子高生に戻ることはもうできない……」

その言葉には、悲しみだけではない。まるで後悔や自責の念が込められているように大神は感じ、その思いの大きさに、言葉の真意を問いただすことはできなかった。一つ

だけ言えることがあるのならば、もう自分たちは逃げられない運命の中にいる。桜も含めて、ここにいる全員が例外ではない……大神はそう感じていた。

## code : 48 『脳』の真髓

「ただいまなのだ！」

「ただいま帰りました」

会長の小型化から始まり、最下層に隠されたパンドラの箱や『ゐの壺』についてなど様々なことが明かされた一連の騒動はひとまず終わりを告げて夜が明けた。桜と大神はいつものように学校から帰ってくると、他の者たちがいるであろうリビングへと向かっていく。

「おう、帰ったか。ちゃんと手、洗っとけよ」

「待機中です」

リビングでは、ほつれた衣類を縫う王子と背筋をピンと伸ばした姿勢で椅子に座る『ゐの壺』の姿があった。一連の騒動の中では、『ゐの壺』はどんな時でも桜の側から離れようとはしなかった。そうなると心配になるのは、学校にもついてくるのではないかと、ということだ。しかし今朝、学校に行く前に桜が物は試しに「待っていてほしい」と頼んでみたところ、『ゐの壺』は素直に応じてくれた。まだ詳細は不明だが、『ゐの壺』はかつて桜と共に過ごした彼女を護るためのカラクリ人形。桜を護るといふ最優先事項

もあるが、桜本人の意向も可能な限り受け入れられるようにできているのだろう。

「おお、『ゐの壺』！ ちゃんと待っていてくれたのだな、偉いぞ！」

「疑問、なぜ『ゐの壺』を褒める？」

「『ゐの壺』が偉いからだ！」

「??？」

なんとも不思議なりズムで会話を続ける桜と『ゐの壺』。だが、本人たちが良しとしているならそれでいいのだろう。

「……………」

桜と『ゐの壺』のやり取りを見ながら、大神は真剣な表情で考え始める。内容はもちろん、これから行われる修業についてだ。昨日から会長を相手にした修業を行っているが、昨日の結果としては惨敗。文字通り、手も足も出ない状況だった。

（正面から行ったところでアイツには全て避けられる……。だが、修業の目的はコケシを取ることだ。決してアイツを斃すことじゃない……。が、斃すつもりで行かないとコケシにはかすりもしない。何か方法は……）

昨日の修業で会長との力の差を思い知った大神は、学校にいる間もこのように強くなる方法を考え込んでいた。会長から言われた「バカ正直すぎる」という言葉。ただ正面からぶつかるだけでなく、刻のように頭を使った戦い方を知る必要がある、と実感させ

られた。

だが、今まではどんな敵も『青い炎』で燃え散らしてきた大神。全てを燃え散らす『青い炎』の威力に頼っていたのは事実だ。だからこそ、ほとんどが正面からぶつかるとなっている。今まではまるで違う戦い方を考えろというのは思ったよりも難しく、学校が終わった今でも答えは出ない。

(……仕方ない。答えが出ないなら、動くしかない。修業を繰り返すことで、必ず何か突破口が見えるはずだ)

改めて覚悟を決めるように大神は左手に力を込める。そして、少しでも強くなるべく彼は歩きだした。こうした前向きな姿勢こそ、強くなるための条件だと信じて……

「お前ら、手を洗えつつつてんだろ!!」

「ぐあつ!」

「あうつ!」

強くなれる……はず、である。



「いかにも、今日も修業を始めようか。今日からは優君も参加ね」

「昨日はロストしてて優子ちゃんだったから参加できなかったもんナ〜」

「……………うるさい」

しばらくして、刻と優が帰ってきた時点で今日も修業が始まった。優が参加することに対して刻はいつものように軽口を叩くが、彼も大神と同じで修業の突破口について考えたのだろう。その眼はおちやらけつつも鋭さがあつた。

「優君は昨日いなかったから改めて説明するけど、私が直接相手をしての修業になる。昨日から大神君と刻君には、この『にやんまるコケシ』を座っている私から取ることを目的とした修業をやってもらっている。まあ、二人とも全然だったんだけどね」

「最後の方、言う必要ねーダロ！」

嫌味なのか天然なのか、二人の修業の結果をいびる会長に刻は声を荒げて掴みかかった。そんな刻の手を軽々しく避けると、会長は「いかにも〜」と口癖を言いながら逃げ

始める。そのまま二人の鬼ごっこが始まってしまい、大神と優は完全に置いていかれた。

「……まあ、今こそあんな感じだが実際に戦ってみるとわかる。アイツの身のこなしは想像以上だ」

「実力はかなりのものってことか。後は……実際にやってみないとだな」

そう言うと、優はその場でストレッチを始めて身体をほぐしていった。そして、一通りストレッチを終えると、優は一歩前に出た。

「会長、最初はオレからお願ひします」

「うん？　いかにも、一日出遅れてるからね。構わないよ」

「優……一人でやる気か？」

「ああ」

優が修業の相手を申し込むと、刻と取っ組み合っていた会長は平然とOKを出した。会長の実力の高さを教えたばかりだというのに一人でやろうとする優を見て、大神は意外そうに声をかけた。

「さつきも言ったが、あのクソネコの実力はかなりのもの。普段のアイツを相手にする気で行ったら返り討ちに……」

「イイじゃねーか、大神。やらせてやれヨ。つか、自分で体験しないと納得しねーっ

て。オレたちだつてそうだったんだからナ」

優に忠告をする大神だったが、急に刻が肩を組んで割つて入つてきた。確かに、普段の会長の印象がどうしても強いので言葉で「実は強い」と言われても納得はしづらい。刻の言うように実際に体験しないとわからないだろう。

「……じゃ、先にやらせてもらおう」

軽く二人に手を挙げると、そのまま会長の近くまで向かう優。今の彼の中にあるのは油断か警戒か、わかるのは彼だけである。一方、会長は「よっこいしょ」と言つて座ると、昨日のように『にやんまるコケシ』を膝の上に置き、おかきを食べ始めた。

「さて、それじゃ私は昨日同様おかきでも食べながら座っているよ。『にやんまるコケシ』を取るか、私をここから動かしたらクリアだから」

「あのヤロ……相変わらず舐めやがって」

完全に余裕たつぷりの会長に、刻は再び怒りが沸き上がつていた。だが、当の優は表情を崩すことなく真つ直ぐ会長を見ている。会長も優のことをしっかりと視界に捉えている。一見、隙だらけに見えるが、おそろくどこから攻撃しても見事に捌かれるだろう。

「それじゃ、どこからでもかかつて——」

会長が次のおかきを取ろうと袋に手を入れた瞬間——動いた。

「——昨日も食べたんだったら、今日は我慢しませんか？　会長」

『……ッ！』

さつきまで何も無かったはずの優の手……そこには、まだ大量のおかきが入ったおかきの袋があった。そして、袋を持っていたはずの会長の手には膝の上にあったはずの『にゃんまるコケシ』があった。

「……いかにも、してやられたね。やはり、君相手に油断は禁物のようだ」

「大神から散々言われましたからね。最初から本気でいきます」

油断しきっていたことを反省するように、頭をかく会長。それに対し、優はおかきの袋の口を丁寧に折って床に置いた。あまりの急展開に、大神と刻は目を見開いたまま言

葉を失っていた。

「い、今……何が起こったんだ？　これが『脳』の……優の本気だったことかヨ……」

「……少なくとも、優はあの一瞬でこの修業をクリアする余裕があった。会長から袋を奪い、コケシを移動させるくらいいな」

自分たちがどんなにやっても届かなかったクリアまで一瞬で届いた優。いくら大神の忠告を素直に聞いていて、相手の会長が油断していたとはいえ、並大抵の実力でできることではない。それだけ『脳』によって身体能力を強化した優の実力が高いということだ。だが、会長もまだ本気というわけじゃない。ここから二人がどう動くのか……大神たちは二人の動きに意識を集中させた。

「本気となると……私も座りっぱなしじゃ厳しいね。優君、『私をここから動かしたら勝ち』っていう条件は無しにしてもいいかな？」

「構いませんよ。むしろ、その方がコケシを取ることに集中できますから」

「ふむ……それじゃあ、私も少し本気を出そう！」

「ツ！」

その場から動かない、という制約を解除した瞬間、『にやんまるコケシ』を頭に乗せてから目にも止まらぬスピードで優との距離を一気に詰める会長。意識を集中していたため、大神と刻もなんとか目で追うことができたがそれで精一杯だった。だが、優は完

全にその姿を捉えていて自身も構えた。

「やつ！ はっ！」

会長は左右の拳を次々に繰り出していった。一発一発がかなりのスピードで、空気を裂くような音から威力も相当なものだとわかる。しかし、優はそれを完全に見切つて完璧に避けており、かすりもしていなかった。

「やあっ！」

「ふっ！」

会長の攻撃を避け続けていた優だったが、一瞬の隙を見つけて攻勢に出た。会長が放つた一発を片腕で捌き、懐をガラ空きにする。そこに渾身の蹴りを間髪入れずに放つた。

「おっと！」

だが、会長も優の動きを見切っているらしい。優が蹴りを放つよりも一瞬早く後ろに跳んだ。渾身の蹴りを避けられたため、優には大きな隙が生まれる。その隙を会長が見逃すはずもなく、着地と同時に開いた距離を詰めていく。

「もらったよ、優君！」

「そう簡単には！」

隙を突かれた優だったが、決して慌てることなく放つた蹴りの軸足に力を込める。普

通なら片足に力を込めたところであつたかが知れているが、『脳』によつて身体能力が強化されている優にとつては片足だけでも十分だつた。彼は片足だけで真上に跳躍し、あつという間に会長を見下ろした。

「た、高え！ 片足だけでクソネコを超えるくらい跳びやがつた！」

「そして、後ろじゃなく真上に跳んだということはそのまま攻撃する気か……！」

異能を使つているとはいえ、優の身体能力の高さに驚く刻。大神は優の行動から次の攻撃を予想する。その予想は当たつており、優は空中で体勢を整え、会長を眼下に捉えた。そして、そのまま勢いよく踵落としを繰り出した。

「決める！」

「ぐう！」

さすがの会長も隙を突いた一撃の後だつたため、先ほどのように避けることはできず両腕を目前で交差させて防御の姿勢をとつた。だが、優の攻撃は振り下ろした際に重力も加わつたことで威力は単純な彼の力以上のものとなつた。あまりの威力に会長の表情も一瞬歪むが、押し負けるどころか防御のために交差させた両腕を押し出して優の攻撃を弾いた。優はそのまま空中で回転しながら後ろに跳んでいき、軽々と着地した。

「次はこちらの番だよ！」

「そうはいきません！」

優が着地したのと同時に距離を詰めようと会長は動くが、同時に優も会長と距離を詰めようと動く。真正面から互いに向かつていく二人。その時間は一秒未満と言つても過言ではないほど一瞬で、すぐに二人の距離は詰められ、怒涛のラツシユが始まつた。

「はあああ!」

「まだまだ!」

叫びの勢いのままに拳によるラツシユを繰り出す優。だが、会長も負けてはいない。同じ勢いのラツシユを繰り出して完全に相殺している。見ている側も思わず呼吸をするのも忘れるほどのラツシユの打ち合いに、大神と刻は完全に言葉を失つていた。このラツシユで勝敗が分かれる……ただそれだけを感じていた。

そして、それは唐突に起こつた。

「そこだよつ!」

「ッ! しまつ——!」

ラツシユの打ち合いをしながら、その一瞬の隙を突いて会長が動いた。瞬時に体勢を崩し、優に足払いをかけた。突然のことに優は対応できず、足払いを受けて身体が浮く。

そして、次の瞬間——!



「いかにも、私の勝ちだよ」

「……そうみたいですな」

優の目前で拳を止める会長。これは、実戦ならば確実に拳で顔面を捉えられている。完全に優の負けだった。優が負けを認めたのを確認すると、会長はゆっくりと拳を戻し、汗を拭った。

「ふう……ここまで思いつきり身体を動かしたのは久し振りだよ。昨日、大神君と刻君から逃げた時以来かな」

「それって久し振りって言えなくないですか？」

「そう？」と優のツツコミを受け流す会長。すると、今まで完全に言葉を失っていた大神と刻からポツリと言葉が漏れた。

「ス、スゲエ……」

「オレたちの時は、ほとんど本気じゃなかったのか……」

目の前で起こっていた戦いにただ圧巻される二人。ここまできると、優と会長の戦いはまるで別次元のものである。二人は圧巻されながらも、戦いが終わった優と会長のもとに向かつていった。

「大神、お前の言う通りだった。会長の実力は……半端なものじゃない」

「イヤ……それと互角にやり合ったお前も半端ネーだろうガ……」

「まったくくだ」

会長の実力を体験し、「参った」とでも言いたげに両手を挙げる優だったが、互角に戦っていたくせに何を言う、と刻と大神は呆れていた。すると、会長が「ぼむ」と胸を叩いた。

「いかにも、大人気なく本気を出してしまったよ。修業だつてことも途中から忘れちゃつてたし」

「つか、あんな風に戦つてたらコケシどころじゃねーダロ……」

ポリポリと照れくさそうに頭をかく会長。修業だということのを忘れていたと言うが、刻の言うようにあんな戦いをしていたら忘れて当然である。むしろ、あの中で修業の目的を達成しろというのが無理な話である。

「ホントだよ。壊れてないといんだけど……」

激しい戦いの後だったため、『にやんまる』コケシの無事を案ずる会長は、自分の頭に手を伸ばす。すると……

「ああ、コケシだったらもう取らせていただきました」

『はあ!?!』

「ええ!?! あ! な、無い!」

平然と言う優の手には、会長の頭にあつたはずの『にやんまるコケシ』がしつかりと握られていた。あまりの驚きに、大神と刻は開いた口が塞がらなくなり、会長は『にやんまるコケシ』が無くなっていることに動揺しきっていた。

「お、お前いつの間に!? どこにそんな余裕があつたんだヨ!」

「会長が足払いを仕掛けた時にな。まあ、イタチ馳の最後つ屁つてやつだな」

「抜け目のない奴……」

ついさつき、「あんな戦いの中じゃ無理」という話をしたばかりだというのに、その無理を実現していた優。どこまでも想像以上の彼の實力に、刻はただ驚き、大神は驚きを通り越して呆れてしまっていた。

だが、プライドが高いオレ様な二人。すぐにいつもの調子を取り戻し始めた。

「テメー！ 一番、後に入った弟弟子が真つ先にクリアしてんじやネーヨー！」

「出遅れのクセにいい度胸だ……！」

「なんで文句言われなきやいけないんだ……」

「まあ、まあ。二人とも落ち着いて」

理不尽な形で二人に文句を言われる優だったが、会長がなんとかそれをなだめる。二人が落ち着くと、会長はこれからの修業の予定について説明を始めた。

「とりあえず、優君はコケシを取ったからこの修業は終わり。次からは私とマンツーマンの修業に入るからね。さて、次は大神君と刻君がやろうか。心配しなくても、二人の時は座ってるから安心してね」

「ウガー！ ムカつく！」

「上等だ、このクソネコ……！」

会長の言葉に、完全に自分たちは舐められていると悟った二人は完全にキレていた。そして、会長が準備をするよりも早くに会長に挑んでいった。

「すぐに本気出させてやるヨ！」

「ブツ斃す！」

「……切り替えの早いやつら」

『青い炎』と『磁力』、それぞれの異能を構えながら大神と刻は昨日のリベンジにと会長に向かつていった。その切り替えの早さに、優はすっかり感心していた。

「ア〜！ 今日もダメかヨ！」

「完全に優に先を行かれたな……」

あの後、昨日のように会長に向かつていった大神と刻だったが、ほとんど昨日と同じ結果だった。さらに、会長は事前に言った通りに座ったままで終わった。優と会長の修業を見た後だと、その屈辱感は相当なものである。

「そうは言っても、今回はたまたま相性が良かっただけだ。オレの『脳』の真骨頂はああいいう格闘戦だからな。それに、結果としてはオレも負けだしな」

「……まあ、確かにそうだな。異能者が相手だとかなり不利だが、ただの格闘戦だったら『脳』ほど適した異能はない」

そう、今までの優の戦いはほとんどが相性が悪い相手だった。始末屋の『壺49』も弾で弾を撃ち落とすという防御しかできず、実際の裁きは平家が行った。人見、リリイ、風牙など異能を使うものが相手だとその異能によって劣勢に立たされてばかりだった。だが、今回のように小細工のない格闘戦なら『脳』によって強化された身体能力が何よりも生きる。

今までの相手が不利な異能者が相手だったから目立たなかったが、優の実力は異能者としてはかなり高い位置にいることが今回のことで証明された。

「苦手なのが多い分、得意なやつのは半端ネーってことカ……。けど、勝ち誇んなヨ！　すぐにあのクソネコからコケシを取ってお前に追いつくからナ！」

「ハッ、兄弟子のオレが先に決まってるだろ」

「イーヤ！　オレが先だね、『コード：06』下っ端野郎」

それでも、『コード：04』としてのプライドからか堂々と宣言する刻。さらに、大神もそれに負けじと追いつく意志を見せる。その後はいつも通り、二人の睨み合いに発展

してしまつたが、優はそんな光景を見て静かにフツと笑つた。

「……まあ、オレのおかげで少し本気の会長が見れたんだ。あの時の動きと比べたら、お前たちの相手をしている時の動きなんて余裕で見切れるだろ。少しは突破口が見えてきたんじゃないか？」

「テ、テメー！ 一番、下つ端の『コード・07』のくせに偉そうにしてんじゃない！」  
「あまり調子に乗るんじゃないぞ……！」

珍しく勝ち誇つたような言葉をかける優だったが、その言葉のせいで笑みすらも勝ち誇つたものに見えてしまい、二人の怒りを買つてしまった。その後、優を巻き込んだの壮絶な言い合いに発展してしまつたが、その時の状況を偶然通りかかった者たちはこう語る。

「うむ、二人とも夜原先輩ととても仲良くなつているのだ」

「待機中です」

「オレの『渋谷荘』でギャーギャー騒いでんじゃないねー！」

「つたく……ちよつと先に行つてからつて調子に乗りやがつて……」

数時間後、夜になったことで『渋谷荘』の住人たちもそれぞれの時間を過ごしていた。そんな中、刻と大神、そして遊騎はリビングでくつろいでいた。まあ、実際のところ愚痴の言い合いに近いが。

「だが、優がオレたちよりも上に行つているのは事実。気に入らないなら……」

「わーつてるつつの。この天才刻様がすぐに追い越してやるヨ」

大神の言葉に、グツと拳に力を込めて闘志を燃え上がらせる刻。そんな二人を見て、遊騎はパソコンのキーボードを打ちながら口を開いた。

「なんや、ろくばんとよんばん……さつきからななばんの話ばかりやな」

「んあ？　そうか？」

「特に意識はしていませんが……」

「じゃあ、無意識のうちに意識してんだろ」

遊騎からの指摘に首を傾げる刻と大神。当の本人たちはわかつていないようだが、リビングに入ってきた王子はハッキリと答えを言い放った。王子は携帯型のボトルに入ったウイスキーを口にすると、そのまま言葉を続けた。

「優の過去、優の身体が限界に近いこと……そして、優の本当の実力。『渋谷荘』に来



てから、一気にアイツの隠された部分を知ったからな。意識しても仕方ない」

「優の身体のこと……知ってたんですか？」

「お前らと同じ日に知ったさ。オレだけじゃなく、遊騎も平家もな」

「上で聞いとつたし」

自分と刻、そして会長だけが知っていると思われた優の過去や彼の身体について知っている口振りの王子の言葉に、大神は疑問を感じるが、平然と答えた遊騎の言葉に納得する。それにしても、上手い具合に『コード：ブレイカー』全員で知ることができたものである。

そして、四人の話題はそのまま優に関することに移っていく。

「……子どもの頃から何回も死にかけて、ようやく生きられるようになったんだよ。なのに、アイツはわざわざ死と隣り合わせの『コード：ブレイカー』に自分から志願した」

「オレも詳しくは知らないが、『エデン』の連中は最初の頃、ともに話も聞かなかつたらしい。それでも認められたのは、人見さんが優を推薦したからだと聞いたことがある」

「いちばん……よくななばんのこと心配しとつたからな。一緒に昼寝しとつたし」

「……………」

会話の中に出てきた元『コード：01』人見。その名前を聞いた瞬間、大神は反射的に彼が『コード：ブレイカー』だった頃のことを思い出していた。彼が、優のことを話す時のことを。

(思えば……人見はすぐに優のことを呼び捨てにしていた。人見は優の実力を知っていた、ということか。だが、あの身体能力の高さだけを見て優のことを認めたのか……?)

あの人見がそれだけで『コード：ブレイカー』になって間もない人間を認めるのか……大神はそのことが気がかりだった。もしかしたら優には、まだ何か秘密があるのではないか……そんな考えが浮かぶ。

すると、作業が終わったのかパソコンを閉じた遊騎が、呆然と上を見上げながらポツリと呟いた。

「ななばん……なんで『コード：ブレイカー』なんかになったんやろ……」  
『……………』

その疑問に答える声はない。その点については本人しか知る者がいない、というのもあるが、彼ら『コード：ブレイカー』にとつて過去の詮索は不要。自分から話してもしない限り、触れることはない部分である。遊騎もそれはわかっているのだろう。答える声がないことに怒りはせず、そのまま沈黙した。そうして、夜の『渋谷荘』のリビング

ではしばらく沈黙の時間が流れていった。

「ハア……ハア……」

同時刻の『渋谷荘』地下の修業場。数時間前まで大神たちの修業が行われており、普段なら夜には無人となるこの場所。だが、今日は珍しく人影があった。数は二つ。一つは息を荒げて膝を突き、もう一つは堂々とした姿勢で立っている。

「……やはり、全力の私には歯が立たないみたいだね。けど、だからといって手加減する気は無いよ。だって、こうでもしないと修業にならないからね」

修業場に設置されているライトが堂々と立つ方の影を照らす。それは、相変わらず着ぐるみ姿の会長だった。だが、普段のひょうひょうとした様子は一切無く、容赦なく敵を討つピリピリとした重苦しい雰囲気を纏っていた。今まで見せたことないような雰囲気。会長の会長を前に膝を突く人影……点滅を繰り返していたライトがようやくやく安定し、

パツとその人影を照らした。

「ぐ、う……………」

そこにあつたのは、身体中に傷が刻まれ、おびただしいほどの血を流す優の姿だった。よほど思い攻撃を受け続けたのか、身に纏う服もボロボロで、口の中も切っているのだろう。口元には血が流れた跡がいくつもあつた。修業場にいる人影が二つということを考えて、優をここまで追い詰めたのは会長としか考えられない。だが、会長は優の身体があと一度でも身体が壊れれば再起不能ということを知っている。それでも、彼は王子に「壊すつもりで鍛える」と宣言している。何より、優自身がそれを望んでいる。だが、ここまで来るとやり過ぎだとも感じられる。

「くそ…………… まだまだ……………」

もはや限界に近い身体を気力で動かし、構える優。しかし……

「遅いよ」

「ぐはっ！」

会長の容赦ない一撃が優を襲う。そのスピードは優と戦った時に見せたもの以上で、身体能力を強化しているはずの優でも捉え切れていなかった。会長の一撃を受けた優は、胃からこみ上げてくる大量の血を口から吐き出し、その場に背中から倒れる。そんな優を冷静に見下ろし、会長は静かに声をかける。

「優君……『捜シ者』との闘いでは、君の『あの力』が必要になるだろう。だから、使  
いこなしてもらおうよ。『あの力』……異能者にとって禁忌とも呼べる力をね」

「ッ……！」

会長の言葉を受けて、優の眼に鋭さが戻る。そして、誰も気がつくことがない夜の修  
業は続いていく。いくら傷つこうと、どんなに辛くても……深い夜に染まっていく『澁  
谷荘』には何一つ届くことはなかった。

## code : 49 迎えし時間

「……ほら、終わったぞ」

「いつもすまない、王子」

会長との本格的な修業が始まってから数日が過ぎ、大神たち弟子たちは生傷が耐えない生活を続けていた。その中でも、優が抱える傷は他の二人とは比べ物にならないものだった。最初はどんな修業を行っているのかと周囲を心配させたが、秘密の修業とのことで明かされることは無かった。わかっているのは、こうして王子に手当されるのがいつものこと、ということだ。

「前と比べてだいぶ怪我の数も減ってきたが、無理は禁物だ。せめて学校では大人しくしてろよ」

「言われなくてもそうしてるさ。だが、クラスメイトから心配された時だけはどうしようもない。言い訳を考えるのに精一杯だ」

今の時間は早朝。まだ日が昇って間もない頃だ。理由は説明されていないが、優と会長のマンツーマンでの修業は夜中に修業場を完全に封鎖して行われる。気になった大神と刻がなんとか覗こうとしたが、無数のカラクリ珍種に押し出されて無理だったとい

う話だ。唯一わかるのは、朝になるとボロボロになった優の姿がリビングにあるということだけだ。

「つうか、お前クラスメイトにはなんて言ってるんだ？ そんな格好してたんじゃ、下手な嘘は通らないだろ」

今の優の格好……それは、普段なら素肌として晒している部分のほとんどが包帯で隠れており、顔も湿布や絆創膏が大量に貼られている。これはどう見ても、高校生が日常生活で負うような怪我ではない。それを見たクラスメイトにしてみれば、怪我の理由を知りたがるのも当然のことである。そして、彼らにも常識はある。ある程度の嘘は確実に見破られる。王子は、優がどんな嘘で通しているのかふと気になっていた。

「ああ、それは……」

王子からの質問に、優は数日前のことを思い出しながら答える。それは、会長とマンツーマンの修業が始まった日の翌日のことだった。

「おはよう」

「あ、夜原君。おはよ——つて、その怪我どうしたの!？」

「うわ! 優、お前ポロポロじゃねーか! 一体なにがあつたんだよ!」

優がクラスに入った瞬間、包帯だらけのその姿を見て先に来ていたクラスメイトたちが一斉に集まってくる。ある程度、予想していたこととはいえ実際に体験すると圧倒されるものである。「誰にやられた」だの「虐待」だの様々な言葉が飛び交うが、優はなんとか彼らを落ち着かせると理由を口にした。

「今、修業してるんだ」

「馬鹿か、お前! 何、正直に白状してんだよ!」

「待て! 落ち着け、王子! 傷に響く!」

まさかの「修業」という答えに、王子は怪我など構わず優の胸倉を掴んで揺さぶる。優は揺さぶられる度に全身に広がる痛みに耐えながらも王子を落ち着かせる。しばらくして、王子が落ち着いたところで続きを話し始める。

「もちろん、何もかも本当のことを言つたわけじゃない。最近、武道を習い始めて、



コーチをお願いした人が怪我なんてお構いなしの超スパルタ人間なだけと言ってある。事故に遭っただけの、不良に絡まれたよりは、修業の方が怪我が耐えなくても不思議じゃないだろう？」

「それはそうだが………ハア。まあ、いい。お前のことだから上手いことやってんだろ」

とりあえず説得力はある優の言葉に、王子は大きくため息をつきながらも納得した。彼の性格や、特に問題も無さそうなところを見て、上手くやっていると判断したのでらう。

その後、怪我の治療が終わった朝の準備に入る二人。今日もまた、『渋谷荘』の一日が始まろうとしていた。

「ごきげんよう、桜小路さん」

「平家先輩！ 遊びに来てくれたのですね！」

数時間が過ぎ、学校も終わって大神たち学生組が戻ってしばらくすると、平家が『渋谷荘』を訪れてきた。以前、会長が小型化した時に訪れてから実に数日ぶりの来訪に、桜は満面の笑みで出迎えていた。それに応えようと、平家も爽やかな笑みを浮かべる。

「フフフ……遊びに来たかどうかはさておき、『ゐの壺』とは上手くやっているそうですね、桜小路さん」

「ええ。『ゐの壺』は言えばわかってくれますから。な？ 『ゐの壺』」

「待機中です」

「おー」

『ゐの壺』のことを気にかけて平家の言葉に、桜は『ゐの壺』のことを見ながら答えた。一方、『ゐの壺』は返答しながら首を180度回し、遊騎は興味津々な表情でそれを見ていた。すると、遊騎は突然ハツとしたようにどこからかホワイトボードを用意し、一心不乱に何かを書き始めた。しばらくすると、そこには今の『ゐの壺』のように首が180度回っている、頭が栗、身体がランドセルを背負った子どものキャラクターが描かれていた。

「と……とん後ろ向きなカラクリ人形『空栗くん』。決め台詞は『もう前を向いて歩いていけない』や」

『さすがです、社長！』

すると、いつの間にか天宝院グループの社員とモニター通信が繋がっていたらしく、画面の向こうから賞賛の声が届く。おそらく、以前の『鳥布さん』のように社員総出でオモチャ部門の新企画として動いていくのだろう。ちなみに余談だが、『鳥布さん』の企画は大成功であり、今ではぬいぐるみ、キーホルダーなど商品化も順調とか。また、『鳥布さんキノコ』というキノコも全国的に有名になっていているらしい。

「どうやら他の皆さんとも問題はないみたいですね」

「そうですね。すっかり皆と仲良しさんなのだ」

桜以外の住人とも問題なく過ごしている『ぬの壺』を見て、とりあえず『ぬの壺』については安心したのでだろう。平家は「ところで」と話題を変えた。

「大神君たちはもう修業中ですか？ さつき帰ったばかりだと思うのですが」

「あ、はい。帰つてすぐ修業に行きました。大神と刻君は生傷が耐えないし、夜原先輩も酷い怪我をしているから心配なのですが……修業中は立ち入り禁止になってしまったので何もできず……」

何もできず、ただ三人の傷が増えていくのを黙って見ているだけの自分の無力さを感じて思わず目を伏せる桜。そんな桜を見て、平家はいつもよりも優しい声で声をかける。

「……桜小路さんが気に病むことはないでしょう。大神君たちが自分たちで決めたこ

とです。それに、彼らは大丈夫ですよ。きつと、ね」

「平家先輩……。ありがとうございます」

平家の言葉に少なからず救われたのか、少し明るさが戻った桜は、ふと窓の外に視線を向けた。その視線は上を向いており、空に浮かぶ雲よりもはるか上に向けられているようだった。まるで、神に願いを届けるかのように。それが、今の自分にできる精一杯のことだと感じながら。

「おらあー！」

一方、その頃の修業場では刻と会長の一対一での修業が行われていた。だが、修業の内容は以前から行っている『にやんまるコケシ』を取るもの。たまたま、刻が一人の時に申し込んだというわけだ。

刻は『磁力』で操った鉄材を会長に向かって一斉に飛ばす。これまでの修業の成果か、そのスピードもかなりのものとなっている。

「ほいほいつ」

「チツ……！　なら、コイツだ！」

だが、会長にしてみれば無力なもので、片足で全て弾き飛ばしてしまった。刻は防御の体勢をとるが、すぐに次の攻撃へと移った。一度、手を広げて『磁力』を作用させてからギョツと拳をつくる。それと同時に、『磁力』が作用された会長のちようど真下にある修業場の鉄製の床板が音を立ててめくれ上がっていった。床板は会長の周囲を完全に囲み、逃げ場をなくした……かに思えた。

「頭を使いすぎだつて、刻君。ほいつ」

「ぐっ！」

またも片足だけで周囲の床板を弾き飛ばした会長。自分のアドバイスが全く生かされていけないことのため息をつくとき、そのままおかきを口にする。

「やれやれ……これだけやって何も見出せないようじゃ、いつまで経っても強くなれないよ」

「……そうかヨ」

厳しい会長の言葉に、刻は力無く言葉を返す。これで終わってしまうのか、と思われたが……違う。彼はまだ諦めていない。まだ手があるのか、その表情には確かに笑みが浮かんでいた。

「じゃあ……これならどうヨ!!」

「——ッ!」

瞬間、修業場中に爆音と砂埃が広がった。爆音が修業場の壁に反響して響いていき、少しずつ小さくなっていく。同時に、広がった砂埃も少しずつ治まっていく。すると、そこには刻と……先ほどまでいた場所から移動している会長の姿があった。

「おお……これは驚いた。やるね、刻君。あと少し動くのが遅かったら……こんな傷じゃ済まなかったよ」

よく見ると、会長の頭頂部分には今の刻の攻撃によるものだと思われる傷があった。傷の程度としてはこすれた程度だが、会長を移動させただけでなく少しでも当てることのできたという確かな事実がそこにはあった。だが……

「……連発はできねーケドな。一発でこのザマだ」

刻と比べればそんな傷は無いも同然だった。彼の右腕は、先ほどの攻撃の影響で大怪我をしていた。血が噴き出す無数の傷痕、服の袖までボロボロで、今の攻撃の反動の強さを表している。しかし、今の攻撃にはその反動があるだけの効果があった。

「でも、ま……一応カタチにはできたみてーだな」

刻が向いている方向の先……つまり、攻撃を放った先の壁。そこには天井にも届きそうなほど巨大な穴が開けられていた。この修業場は異能を用いての修業を行うことを考えて、普通よりも頑丈な造りとなっている。だが、刻の攻撃はその頑丈さをはるかに超えた攻撃であったというのがわかる。

「いかにも、良い工夫だよ。『磁力』の性質をよく理解している。これを修得するためにはどれだけの時間考えて、一人で練習してきたんだい？」

「練習？ 知ーらねっ。だってオレ、超天才だからサ。コケシもゲットだぜ」

刻が隠れて行ってきたであろう一人での努力の時間について尋ねる会長だったが、刻は「天才だから最初からできた」とでも言いたげに余裕たっぷりの表情を見せた。その手に、会長が移動した際に転がってきた『にゃんまるコケシ』をしつかり握りながら。これで、刻の修業も終わりを迎えた。

「うおっしやー！ 優には後れをとったが、少なくともこれでオレが大神よりも上だつてことは証明されたナ！ もう兄弟子ヅラはさせねーぜ！」

『にやんまるコケシ』が取つて修業を終えられたことを喜び、ガッツポーズを見せる刻。優には目の前で先に修業を終えられたが、少なくとも大神よりも先に終えることができて嬉しいようだ。普段から兄弟子として偉そうにされたため、ここで彼のプライドはようやく守られた……はずだった。

「え？ 大神君ならもうコケシ取っちゃったよ？ それ、『にやんまるコケシ』3號ごうだし」

「なにー!？」

刻の中で保てたはずのプライドが、会長が語つた真実によつて音を立てて崩れていった。まさかと思つて『にやんまるコケシ』の底を見ると、確かに「3號」と書かれていた。どうやら、刻が知らぬ間に大神も修業を負えていたようだった。先ほどまで喜んでいたこともあり、刻の心には虚しい風が吹いた。

「おい、クソネコ！ 大神の奴、どこだヨ！ 一発、文句を言わねーと気が済まねー！」  
「大神君ならそつちの部屋で修業してるはずだよ。あつちはこだわりの部屋でね、なんと道場みたいな内装に仕上がってるんだ」

「そんなことドーデモイイんだヨ！」



ぬか喜びだったことが恥ずかしかつたのか、大神に理不尽な怒りをぶつけようとする刻。会長が指差した修業場に隣接している部屋の扉に向かつてズカズカと大股で歩いていった。そして、ノックもすることなく勢いよく扉を開けた。

「テメー、大神！ いつの間にコケシ取ってやが——！」

——ガキイイイン！

「——なっ!？」

刻の視線の先で弾ける火花。その正体は、刀身と刀身がぶつかり合うことで生まれるものだった。思わず息を呑むほどの激しいぶつかり合いに、刻は思わず目を細めた。そして、刀を用いてそこまで激しいぶつかり合いをしている者たちを見て、刻はその名を叫ぶ。

「大神！ それに……優！」

そこは、道場のような内装になっていると言うだけあり、床は木製の床板で、壁も昔ながらの装飾に仕上がっていた。だが、今はそんなことよりも部屋の中心で刀をぶつけ合っている二人に意識が向く。一人はいつの間にか修業を終えていた大神。そして、もう一人は最初に修業を終わらせた優だった。なぜ、この二人が刀を使って戦っているのか。その答えを知るよりも先に、二人の動きが変わった。

「おおっ！」

「ぐ………！ はあっ！」

『脳』で身体能力を上げているのだろう、優が一步踏み込んで大神を圧倒する。大神は自分の刀にかかってくる大きな力に耐え、身体を横に移動させながら刀を下方に動かして攻撃を流した。攻撃を流されたことで優は大神に背後を見せるが、すぐに反応して大神の方に向き直った。そこで再び刀を構えるが、それよりも先に大神が刀を構えて距離を詰めた。

——キーン！ キーン！

大神の連続攻撃に、優は防御に徹するしかなかった。刀がぶつかる度、激しい金属音が部屋中に響いて鼓膜を震わせる。

——ギイン！

一際、激しい金属音が響いたかと思うと、大神が振り下ろした刀を優が刀を横に構えて防御している。上からの攻撃という重力も加わった攻撃に、下からの防御という重力に逆らう形の圧倒的に不利な姿勢に優の額に冷や汗が流れる。

「——まだだ！」

しかし、『脳』で上げられた優の身体能力は半端ではない。不利な姿勢にもかかわらず、力づくで大神を押し返した。その力に大神は後方に飛ばされるが、しゃがんだ体勢で膝と片手を使ってその勢いを止めていく。そうして大神が止まったのと同時に、優が大神に斬りかかろうと距離を詰めていく。そして、次の瞬間——！

——カチ……ン

一瞬、全ての音が止み、静寂が空間を包む。そのすぐ後、刀が床に落ちたことで生まれた金属音によって静寂が破られた。そこには、しゃがんだ体勢で大きく刀を振り抜いた大神と……刀を振り下ろした体勢の優の姿。刀が握られていないのは……優。

「……参つた。どうやら完成したらしいな、大神」

「付き合わせてすみませんね、優。……で、何か用ですか？ 刻」

大神の一撃で刀を吹き飛ばされたことで負けを認めた優。潔く両手を挙げると、大神は礼を言つて刀を鞘に納めた。そして、部屋に入ってきた刻を見て大神が声をかける  
と、刻はハツとして自分がここに来た目的を思い出し、二人に近づいていく。

「な、何が『何か用ですか？』だ！ 大神！ お前、いつの間にコケシ取つてんだヨ！  
しかもオレより先に！」

「ハツ、ようやく取れたのか。なら、わかつてんな？ お前はとことん出来の悪い弟弟  
子つてわけだ」

「デメエー！」

気が立っている刻に対し、乱暴な言葉遣いと見下ろした黒い笑みを向ける大神。それが刻の神経を逆撫でし、二人の睨み合いが始まった。そんな二人を見て、優は吹き飛ばされた刀を鞘に納めながらため息をついた。止めに入ろうとしたが、先に会長が二人の

間に入っていった。

「はいはい、ケンカしない。どうやら大神君の剣術も完成したみたいだし、刻君も新たな力を手にすることができた。優君の修業も仕上がってるし……ひとまず三人とも大丈夫みたいだね」

うんうん、と満足気に頷く会長。すると、会長の言葉を聞いた刻が思い出したように口を開いた。

「そーいや、優の刀は前に使ってたからご自慢の『斬空刀』だつてすぐわかったけど、大神はなんの刀を使ってたんだヨ」

刀を持っていないはずの大神がなんの刀を使っていたのか、それが気になった刻は視線を動かして大神が持つ刀を見る。すると、大神の手には会長が使っていた、柄が『にやんまる』の顔の形をした刀が握られていた。

「ブー！ お前、なんで会長の恥ずかしー刀なんて使ってたんだヨ！ ギャハハハ！ お似合いですよ、兄弟子様〜！」

「殺す……！」

あんな激しい戦いを繰り広げた刀が、『にやんまる』型の柄という真剣でありながら一見するとオモチャのような刀だったと知り、大爆笑する刻。大神はもちろん怒りを感じ、殺気を放ちながら刀に手をかけた。だが、すぐに会長の言葉がそれを止めた。

「悪いけど、そんな風に遊んでいる暇はもう無いんだ。君たちにも伝えておかねばならないことがあるんだ」

「……………」

会長の真剣な言葉に、大神たちは笑いも殺気も忘れて会長の言葉に耳を傾けた。そして、彼らは動き始めた。

「え？ 四人でキャンプに？」

数分後、リビングに戻った大神たちから桜が聞いたのは、大神、刻、優、会長の四人で山に行くという話だった。

「違いますよ、キャンプではなく山に籠って修業です」

「いかにも、修業の仕上げというわけだよ」

「まあ、修業といえは昔から山に籠るものだからな」

「アー…………山ってキモイ虫とかイツパイいそうでホント気が滅入るわ…………」

あくまで修業が目的の四人。今はそれぞれ山に行くための準備をしている。大神はランタンや鍋など必要最低限な道具一式、優は大神と分担して大きめの道具を、刻は虫よけスプレーや蚊取り線香などありとあらゆる防虫グッズをリュックに詰めていた。

「キャンプ……」

修業が目的、と聞かされても桜の中では「山に行く $\parallel$ キャンプ」という方程式が成り立っていた。そして、彼女の頭の中に広がるのはキャンプで繰り広げられるであろう楽しい光景。全員で協力して食材を獲って食事の準備をし、夜は一つの炎を囲んで過ごし、満天の星空の下で全員揃って寝袋で眠る。今の季節は夏。さらに、幸運なことに明日は休みである。絶好のキャンプ日和というわけだ。

「……わ、私も行こうかな。人数が多い方が楽しいし、手伝えることもあるだろう。今は季節も良いことだし……他の皆も一緒に行けたらとても良い思い出に……」

ギョツとスカートを握りながらチラチラと後ろでくつろぐ他の『コード・ブレイカー』たちを見る桜。これはもしかしなくても「一緒に行こう」と誘っているのだ。以前、祭りに行ったことから全員でどこかに行くことに希望を見出したのだろう。少なくとも、以前の祭りでは真っ先に断った大神と刻はいくことが決定しているため、以前より希望はある。すると、以前は真っ先に断ったグループの最後の一人がポツリと呟いた。

「久々に溪流釣りもいいかもな」

「オレは山びこしたいし」

「山頂から見る朝日と光の素晴らしきコラボレーションも良いでしょう」

王子、遊騎、平家……それぞれの言葉は違ったとはいえ、そこに込められた意思は同じ。それは他でもない……「OK」のサインだった。

「や……やったー！ 皆でキャンプなのだー!!」

「お、大神……。明日が楽しみで眠れないのだ……」

「何やってるんですか、あなたは……。というか、また『ゐの壺』も一緒ですか」

「最優先事項です」



「ワフ……」

『子犬』もですか……。変なところが桜小路さんに似てきましたね」

その夜、それぞれ寝室に戻った大神たちだったが、桜は気持ちが高ぶって寝付けずにいた。まるで遠足前の小学生というベタな比喻表現がそっくりそのまま当てはまっているというわけだ。桜は気を紛らわせようと、壁の穴から顔を覗かせて隣の大神に話しかけた。以前のように、『ゐの壺』も頭を取って覗かせている。ちなみに、大神は部屋の電気を消してデスクライトの灯りのみで読書をしていた。

「えとな、大神。明日の天気はどこかのテレビ局でも晴れだと言っていたのだ。修業も晴れの方が気持ちいいから嬉しいだろう」

「……そうですね」

桜の言葉に、大神は本から視線を外すことなく答える。いつもの桜なら文句を言いそうなものだが、今はとても気分がいいのだろう。そのまま笑顔で言葉を続ける。

「それにしても、皆でキャンプか……。ふふふ。楽しみだな、大神。また皆で写真を撮ろうな。前に撮った時は優子さんと撮ったから、今度は夜原先輩とも写真を撮ろう。大神も——」

「桜小路さん」

「ん?」

嬉しそうにキャンプについて話す桜。すると、大神が急に彼女のことを呼び、その言葉を中断させた。桜は急なことに小首を傾げるが、大神は呼んだつきりで何も言わない。聞き間違いだったかと桜が思っていると、大神はゆつくりと顔を上げてその顔を桜の方に向けた。

「……いえ、何でもありません。明日は早いので、もう寝た方がいいですよ」

「あ、ああ！ そうだな！」

デスクライトの灯りでほんのりと照らされる大神の笑顔。その表情を見て、桜は自分と同じく楽しみなのだと感じ、満面の笑みで応える。そして、桜は大神に向かって手を振り、自分の布団へと戻っていった。

「また明日！ おやすみ、大神！」

「快晴なのだ！」

「いかにも、いかにも」

「天気：晴れ、気温・湿度共に良好。外出に最適と判断」

「ワン！」

翌日、桜、会長、『ゐの壺』、『子犬』の三人と一匹は一足先に目的地である山に到着していた。桜としては最初から全員揃って行きたかったが、準備に時間がかかるので仕方なく先に行つたのだ。行く過程を全員で楽しめなかったのは残念だが、桜は気を取り直して山の中にあるキャンプ場へと向かつていった。その途中に見る多くの物が、桜をより楽しませていった。

——空に浮かぶ雲

「あの雲、『にゃんまる』にそっくりなのだ。遊騎君が気に入りそうだなあ」

——木に生える毒々しい色のキノコ

「大神はこのキノコでも気にせず食べてしまいそうだ」

——カサカサと動く虫たち

「刻君が顔を真っ青にして嫌がりそうなのだ」

——道に沿って設置されている小さなお地藏様

「夜原先輩が思わず祈つていそうなのだ。……天氣が崩れないようにお願いしておう」

——底が見えるほど澄んだ川

「この機会に王子殿から釣りを教わつてみたいなあ」

——人のような形をした木に絡まるツル

「縛るのが得意な平家先輩の感想を聞きたいのだ」

そうして様々な物を見ながら移動する桜たち。その途中、小腹が空いたので道に腰かけて昼食として持つてきたおにぎりを食べることにした。このおにぎり、桜が早起きして作ったのだがあまりに張り切りすぎた結果、リュックが自分の倍以上の幅になるほどの量となつてしまった。まあ、人よりかなり食べる桜にとつては問題ないだろうが。

「それにしても皆、遅いなあ。この調子だと日が暮れてしまうのではないか？ ……よし、ならば先に夕食を作つておいて皆が来た時にびっくりさせて——」

「ごめんよ、桜小路君」

いつまで経つても追いついてくる気配の無い大神たちを心配する桜。ならばと手荷物の中からお玉を取り出して夕食を作る意気込みを見せる。そんな桜を見て、耐えられないかのように会長は何を思つてか……謝罪の言葉を口にした。そして……

「皆は……( )には来ないよ」

「……………え？」

会長の言葉に、お玉を振る桜の手がピタリと止まる。会長の言葉の意味がわからず、しばらくその場で止まる。すると、何かに気付いてハッと会長の方を見る。

「ま、まさか修業のボイコットですか！　なんと往生際の悪いことを——」

「違うよ。……そもそも、これは修業なんかじゃあない」

修業が目的であるキャンプに来ない、ということからボイコットだと理解した桜。大神たちの往生際の悪さに眉間にしわを寄せる桜だったが、その言葉すら会長は否定する。さらに、これは修業が目的ではないと言う。そして、会長は驚きの言葉を口にする。

「今日、大神君たちは彼らとの闘いがある。迎え撃つためにまだ『渋谷荘』に残っているんだよ。……桜小路君、君を闘いに巻き込みたくないからなんだ。少しでも『渋谷荘』から遠ざけるため、キャンプだなんて嘘をついたんだ」

会長の口から語られた真実。それは、桜の予想などはるかに超えたものだった。いつ

たい会長は何を言っているのか、どこまでが嘘でどこからが真実なのか……桜はわからなくなっていた。

「……………う、そだ」

桜の全身が「ひやり」と冷たくなる。その瞬間、冷静になった頭が昨日の記憶を呼び起こし、一つひとつの記憶を分析し始める。

(今、思えば……………皆、妙に積極的で……………)

嫌がる兆し一つすら見せない『コード：ブレイカー』たち。昨日は声を大にして喜んだが、今思えばおかしい。なぜ、急に仲良く出かけることを了承したのか。今までそんなことは無かったのに。

(大神も、あんなに笑顔で……………)

夜に見た大神の笑顔。あの時は、彼も自分と同じく楽しみなのだと理解した。だが、桜は今になってようやくやく気付いた。呼び起こされた記憶の中の大神の笑顔。その笑顔は……………

(あの笑顔は……能面ウツの笑顔だった——!)

その瞬間、全てを理解した。だが、もう遅い。今いる場所は『渋谷荘』からはるかに離れた山の中。思えば、その全てを見抜けるはずだった。しかし、見抜けなかった。これから始まるであろう良き思い出作りに気を取られ、何一つ見抜けなかった。

しかし、その後悔すらすでに遅かった——

「ひとまず成功……つてところか」

「ええ。とても楽しそうでしたからね」

「……これでいいんだな? 零」

「あのバカ珍なことだからナ。ずっと待つてるぜ? オレらのこと」

「……構わない」

一人ひとりからかけられる言葉。会長から今日のことを聞いた時、自分が彼らに頼ん

だ大きな嘘。彼らは嫌な顔一つせずに協力してくれた。だからこそ後悔はない。彼は……左手の手袋を深く着ける。

「もう巻き込まないと……最初から決めていた」

「……せやな、ここにいるんはオレらだけでええ。じゃあ……行こうや」

ゆつくりと開く、『渋谷荘』の扉。外の光が中に差し込み、彼らは歩き出す。

そして……彼らはいかに対峙する。

「……………」

揺るがぬ意志を持ち、限界の身体で闘う『コード：07』……夜原 優。



「お前たち……」

かつての同志と対峙する、孤高の守護神『コード：05』……八王子 泪。

「HAN」

無邪気な笑顔で人を殺める、若き『Re—CODE』……日和。

「時雨……」

かつての友を思い、過去と対峙する『コード：03』……天宝库 遊騎。

「……」

鋭き眼で友を殺めた敵を射抜く、寡黙の『Re—CODE』……時雨。

「……来ましたか」

若き者たちを静かに見守る、妖しき実力者『コード：02』……平家 将臣。

「ふん……」

氷のように冷たく敵を消す、冷血の『Re—CODE』……雪比奈。

「虹次……！」

かつての姉の仇を討つため、その全てを懸ける『コード：04』……刻。

「ふっ……」

全てを見据えて全てを破壊する破壊神、癍痕の『Re—CODE』……虹次。

「……………」

今度こそ誓いを果たすため、斃すべき敵の前に立つ漆黒の『コード：06』……大神  
零。

「もらいにきたよ。私の……パンドラの箱<sup>ボックス</sup>を」

その胸中の目的を果たすため、不敵に微笑む白き者……『捜シ者』。

『コード・ブレイカー』、そして『捜シ者』と彼が率いる『ReeCODE』……今ここに集いし十一人の異能者たち。それぞれの思いを胸に、パンドラの箱ボックスを巡る闘いの火蓋が切られようとしていた。

## 番外篇

code : extra 11 在りし日の記憶く八王子  
涙く

それは、彼らが新たな同志となつて間もない頃の話――

「今ここに、正義エデンの名の下にこの者を『コード：05』とする」  
無機質な声が場に響く。感情など無く、ただの通過儀礼であるかのように簡単に終わった。自らを神々しいものでもしたのか、彼らは後方から発せられる強い光でその顔は見えない。それが余計に無機質な感じを誇張させた。

「……ありがとうございます」

一方、そんな彼らに跪くように頭を下げる一人の女性。短い蒼色の艶髪に、革ジャンとジーパンを着る一見すると端麗な顔立ちをした男性にも見える風貌だった。彼女もまた、無機質な声で形だけの感謝の言葉を述べると、ゆっくりと顔を上げてその場を後にした。

その後、彼女は八王子 泪という一人の『コード：ブレイカー』となった。

本来、『コード：ブレイカー』は『コード：06』から始まる。しかし、王子も含めた最近『コード：ブレイカー』となったメンバーはそれらを一切無視している。『コード：03』である天寺院 遊騎に『コード：04』の刻。彼らは『コード：ブレイカー』と

なった時からそのナンバーを所有している。もちろん王子も然りだ。おかしな話にも聞こえるが、それには正当な理由があった。

「圧倒的な人手不足」――

わかりやすく言うならばこれである。『コード：ブレイカー』にはとにかく人手が不足していた。遊騎が『コード：03』となるまで、『コード：ブレイカー』は『コード：01』と『コード：02』の二人のみだったという。もちろん、それ以外のメンバーもいたはずだった。だが、彼らはいなくなった。消えたといった方が適切かもしれない。その理由は――

「あなたたちのせいですよ……八王子 泪」

「……………」

人など一人も歩いていない深夜の路地裏。そこで一組の男女がどこか殺気だった雰囲気に向かい合っていた。一人は『コード：05』である王子。もう一人は……『コー

ド・02』の平家 将臣だった。彼は隠すことなく王子を殺気のままに睨みつけていた。「わかっているのでしょうか、あなたも。ここまで『コード・ブレイカー』が痛手を受けたのはあなたたちのせいであると。自分たちで半壊状態にした『コード・ブレイカー』に自ら志願するなど……虫唾が走りますね」

平家の言葉には明らかな殺気が込められており、一つひとつがナイフのように鋭さを持つているようだった。本来、平家はジャッジとして『コード・ブレイカー』たちを守る者。だが、今の彼からはそんな雰囲気は微塵も感じられない。言うならば、裁くべき「悪」に対峙した時のようだった。なぜ彼がここまで王子を目の敵にするのか……その理由は王子の過去にあった。

「黙っていないでなんとか言ったらどうですか？ 元「悪」……元『Re—CODE』の八王子 泪」

「……………」

『Re—CODE』。それは、『コード：ブレイカー』に敵対している異能者である『捜シ者』を守護する存在の異能者たちのこと。その力は強力で、たとえ普通の異能者が百人揃っていても傷一つつけることすらできないと思われるほどである。そして、王子はかつて『Re—CODE』にて『守護神』とまで称された存在だった。その強力な力を駆使し、他の『Re—CODE』とともに『コード：ブレイカー』の前に立ちはだかったこともある。

そして、平家が言う「『コード：ブレイカー』がここまで人数が減った原因」というのは……この『Re—CODE』との闘いにあった。

「数か月前に起こった『Re—CODE』との闘い……そこで生き残ったのは私と『コード：01』のみです。……つまり、他の者たちはあなた方に殺されたんですよ」

そう、遊騎たち新参加者が『コード06』ではなく上位のナンバーから始まった理由はこれだった。数か月前、『捜シ者』と『Re—CODE』を迎え撃つために闘った『コード：ブレイカー』たち。だが、その中で当時の『コード：03』から『コード：06』は死亡、もしくは戦闘不能の状態となっていた。そのため、今の『コード：ブレイカー』に



はこの穴を埋める必要があった。その原因である王子を迎え入れてでも。

「なぜあなたが『コード：ブレイカー』に志願したかは知りません。知りたくもない。ですが、もし不審な動きがあれば私は容赦することなくあなたを殺します。それを覚えておいてください」

そう言うのと、平家は王子に背を向けて歩き出した。終始、嫌悪感を纏っていた彼だったが無理もない。彼の目の前にいたのは、自分が開けた穴を後になって自分から埋めようとしてきた元敵である。もちろん王子はその時、『Re—CODE』をやめた、と言った。その後、“エデン”の調査からもそれが立証されたため『コード：ブレイカー』となることができた。

だが、その胸の内は誰にもわからない。たとえやめたとしても、その気になれば戻ることがができる。下手をすれば内通者の恐れもある。だが、そんな危険よりも“エデン”は彼女の實力と『コード：ブレイカー』の存続を選んだ。

平家もそれは理解している。だが、実際に『Re—CODE』と闘って同志を奪われた彼の心中は決して穏やかではない。そして、それを誰よりもわかっているのは……王子自身である。

「……わかっているさ。恨んでくれて構わない。何をしようと……オレが元“悪”だった過去は消せはしないのだから」

視界から平家の姿が消え、一人残された王子が眩く。彼女は覚悟していた。孤独も、叱責も、憎悪すら向けられることを。だが、それでも彼女は選んだ。『コード：ブレイカー』としての道を。その胸の内に秘めた目的のために。

彼女は静かに歩きだし、夜の闇の中に消えていった。

「目には目を 齒には齒を 悪には報いの遺影を」

自らの異能である『影』を駆使し、目の前の「悪」を裁く王子。バイトが終わったことを確認し、「エデン」への報告のために携帯の電源を入れた。

「仕事は終了した。後は頼む」

『そんなことはお前に言われるまでもない。元「悪」の分際で偉そうな口を利くな』  
「……失礼する」

ただの報告でも、このような言葉を聞くのは王子にとつては「いつものこと」といえた。動揺もせず、言い返そうという素振りも見せずに静かに電話を切る。その後、軽く

息を吐くとその場を後にしようと思きだした。すると、一つの人影が彼女に向かつてきた。その人影は親しげな様子で右手を挙げ、王子に言葉をかけた。

「やあ、お疲れ。さすが、見事な腕前だね」

「……人見」

その人影は『コード：01』の称号を持つ『コード：ブレイカー』のエース……人見だった。声をかけられたことで彼の存在に気付いた王子は、歩みを止めて視線を向けた。その様子は、先ほどの電話の影響なのか、ひどく冷ややかなものだった。だが、無視する気は無いらしく、王子は視線を向けたまま軽く頭を下げた。

「別に褒められるほどのものじゃない。バイトも終わったからオレは帰る」

そう言って、王子は人見に背を向けて再び歩き出した。本音を言えば、なぜ彼がここにいるのか、なぜ声をかけてきたのかなど疑問はあった。だが、はつきり言って王子は人見と関わろうという気にはなれなかった。

なぜなら彼も平家と同じく、かつて『Re—CODE』として闘った相手の一人だからだ。彼は当時から『コード：01』の名を有しており、その実力に自分も含めた同志たちがひどく手こずったことを覚えていた。だが、それが理由ではない。重要なのは、敵対していた頃の自分を知っているということだ。

あの闘いの後に『コード：ブレイカー』となった遊騎と刻は、王子がかつて『Re—

CODE』だったことを知らない。しかし、人見と平家は違う。彼らは自分たちを裁くべき「悪」として迎え撃ち、自分たちは彼らを敵としてぶつかっていった。そして、平家が言うように多くの『コード：ブレイカー』の命を奪った。平家の同志は人見にとつても同志だ。つまり、彼から見ても自分は憎むべき「悪」である。侮蔑の言葉が恐ろしいわけではない。ただ、進んで話そうとは思わないだけだ。そういつた理由から、王子は呼ばれでもしない限り人見も含めた他の『コード：ブレイカー』たちとは距離をとっていた。自分には馴れ合う必要も、資格すらないので言い聞かせて。

それは今回も同じだと考え、王子は振り返ることもせずその場を後に――

「ああ、ちよつと待ってくれよ。悪いんだけど、少し付き合ってくれないかな？」

「……………」

人見の言葉に歩みを止める王子。再び人見に視線を向け、無言でその場に立ち続けた。

「――で、そうしたら遊騎がその場で寝始めちゃってね。起こすのが大変だったよ」

「そうか、大変だったな」

あれから人見は、何気ない話をしながらどこかに向かっていた。王子は人見の話に対し、目も合わせることなく空返事ばかりだった。「付き合ってほしい」と言われて付いてきたものの、特に行き先も告げられずに歩く現状に、王子は少しずつ苛立ちを覚えていた。何が目的なのか、何をしたいのか……王子には人見の思惑が何一つわからなかった。

「そして、今度は刻なんだけど……」

一方、人見は相変わらず何気ない話を続ける。その表情からは悪意の類はまるで感じられない。ただ純粹に、「話したいから話している」という感じだ。しかし、それが王子にしてみればかえって不気味だった。彼にとつて、自分はそう思えるような相手ではない。かつての同志を奪った仇であり、憎むべき対象である。

自分の過去を知りながらも友好的にする者はここにはいない。敵から仲間になった者をすぐに信じられるはずもない。もし、自分が『Re—CODE』の時に元『コード：ブレイカー』だという人間が『Re—CODE』に加わったらどうだ。少なくとも、警戒心がなくなるにはかなりの時間がかかる。たとえ『捜シ者』が認めたのだとしても。

目の前で話す人見に關してもそうだ。いくら『エデン』が認めたとはいえ、元敵が同志となることを良く思ってるわけがない。ならば、なぜこんな無駄な時間を過ごさせる

のか……いい加減はつきりさせようと思った王子はピタリと立ち止まり、人見に向かつて鋭い視線を飛ばした。

「……いい加減にしろ。いったい何が目的だ？ 何か言いたいことがあるのならはつきり言えばいい。オレは何を言われようとかまわない。もちろん、傷だつて受け入れる。だから、さつさと用件を言え」

「……………」

たとえどんな暴言や仕打ちを受けようとも構わない……王子は真つ直ぐと人見を睨みながら言った。その姿は震えなど一切見せず、堂々と立っていた。傷つくことに恐怖はない、全ては覚悟していたことだと彼女の眼は語っていた。そして、その王子の刺さるような視線と思いを、人見は一瞬も逸らすことなく真正面から受け入れる。そうして数秒の沈黙があつたかと思うと、人見が静かにその眼を閉じた。

「……そうだね。何も言わずに付き合せて悪かつたよ」

人見はそう言うと、少しずつ王子との距離を詰めていった。これから起こるであろうことを予想し、王子は静かに目を閉じた。まるで、何をされても抵抗しないという意味表示のように。

暗闇に染まつた王子の視界。王子の頭に響くのは人見の足音のみ。見えなくてもわかつた。近づいている。一步、また一步と距離を詰めている。だが、王子は逃げない。

その場から離れようとは一切しない。それだけ彼女の意志と覚悟は強かった。

そして数秒……人見の足音が止まった。足音が止み、かすかに吹く風の音だけが聞こえる。人見と王子は互いに動かない。だが、決してその時間は長くない。目を瞑り、堂々と立つ王子の姿を視界に捉える人見。彼が――動いた。

「……………すまない、王子」

「……………え？」

予想していなかった人見からの言葉に、思わず目を開いた王子。すると、そこに映っていたのは深々と頭を下げた人見の姿だった。

意味がわからない、というのが本心だった。なぜ、目の前のこの男は自分に頭を下げているのだろう。仮にも『コード：01』の称号を持ち、エースと称される男が。なぜ元敵である自分に対して謝罪をする必要があるのだろう。

「なんで……オレに……」

次々と湧いてくる疑問の波に吞まれ、それが精一杯の返答だった王子。すると、人見が頭を下げたままの状態でその理由を話し始めた。

「君が平家や一部の『エデン』から不当な扱いを受けていた時……私は君を守ることができなかった。……気付くことができなかった。私は『コード：01』失格だ……」

「ッ……」

その言葉に、王子は思わず目を見開く。人見は、王子に向けられていた周囲の厳しい言葉や扱いから守れなかったことを悔い、そのことを謝罪している。強い後悔の念が今の彼を支配しているのか、その手は強く握られて小刻みに震えている。

そんな人見の姿に驚きの表情を見せた王子だったが、少しずつ冷静さが戻ってくる。そして、落ち着いた様子で頭を下げたままの人見に声をかける。

「……それはあんたが頭を下げることじゃない。それに、オレは最初から覚悟していた。オレは元々、お前たちの敵……『Re—CODE』だったんだからな」



「けど、今は私たちの仲間であり同志だ」

「ッ……」

自分は元々、敵だから気にすることは無い。そう言った王子だったが、人見の言葉に再び驚きを隠せない。自分に頭を下げ、間髪入れずに「同志」と言う目の前の男に……王子はどうしようもなく心を乱された。

すると、人見はゆつくりと頭を上げて、後悔の念が込められた眼を王子に向けた。

「……そもそも『コード：ブレイカー』は過去を全て捨てて『存在しない者』となった者たち。過去は問うべきじゃない。……それに、過去は過去で今は今だ。少なくとも、私は君のことを頼りにしてるよ。一人の『コード：ブレイカー』<sup>同</sup>としてね」

「……………」

人見の言葉に、王子は思わず言葉を失う。目の前に立つこの男は、かつて自分が敵だったことをただの「過去」とし、「今」は違うと言った。今まで受けた侮蔑の言葉という経験からも信じられなかったが、なにより信じられなかったのは、それを言ったのがエースである「コード：01」ということだった。

……だが、この一回の言葉で崩れるほど彼女の意志は弱くなかった。

「……それでも、オレがお前たちから見て「悪」だったことは変わらない。過去は変えられないんだからな」

「強情だね……。まあ、そういうところも頼もしいけどね。……さ、着いたよ」  
「……………」

あくまで自分の意志を崩そうとはしない王子の姿に、人見は小さく息を吐いて少し困ったような笑みを見せた。すると、彼は急に立ち止まって、紹介するように前方に手を差し出した。どうやら目的地に着いたらしい。王子が数歩前に出ると、その視界に映ったのは意外なものだった。

「……………川原？」

そこは、人見がよく昼寝をしている川原だった。すでに深夜のため、普段から少ない人通りは皆無になっており、ただ空からの月光を流れる川の水面が反射していた。そのせいか、周囲と比べると少しだけ明るく見えた。

「そう。ここは私が昼寝をする時によく来るんだ。こうやってね」

そう言うと、人見は草が生い茂った土手にゴロンと寝転がってみせた。その姿は隙だらけで、今まさに敵が現れたら対処が遅れるだろうことは明白だった。

それは、無言の信頼だった。自分にとつて王子という人間はここまで隙だらけの姿を見せても構わない人間だということを、彼は平然と寝転がることで伝えていた。さらに、彼はそれを言葉でも伝える。

「もし君のことを少しでも『悪』だと思っっているなら……………こんな隙だらけの姿は見せ

ないだろ？ これで少しは信じてもらえて——」

瞬間、夜の闇よりもはるかに深い「黒」が人見の視界に映る。「黒」は鎌の形状をとり、その刃は人見の首元にそつと当てられていた。その「黒」の正体は「影」。寝転んだ人見を静かに見下ろす彼の同志……王子の異能。

「……………」  
「……………」

二人の間に静寂の時間が生まれる。「影」は相手の影を斬ることで実体も斬ることが

できる防禦不能の異能。人見は寝転がっている状態で月光を受けているため、その影は自身の位置とほぼ同じ位置にある。つまり、今の状態で王子が手を動かせば人見の首はいとも簡単に截断される。人見の命は文字通り、王子の手にかかっているということだ。

「……もし他の奴らなら、すぐに抵抗なり敵意を見せている。それこそ、『やつぱり裏切ったか』とでも言つてな。……あんたは、なぜ抵抗しない」

自分でもらしくないことだとすぐに感じた。だが、遅かった。気づいた時には体が勝手に動いていた。それだけ彼の言葉は王子の心を乱していた。もちろん、この行動に敵意や殺意はない。その手を動かそうなどとは微塵も考えていなかった。ただ、信じられなかった。心のどこかで「彼もほかの連中と同じ」という考えが存在していた。

しかし、眼下にいる人見は動かなかつた。優しく微笑みながら、真つ直ぐと王子のことを見ている。そして、彼はそのままの体勢で答えた。

「言つただろう？　今の君は私の同志なんだ。君はその手を決して振り下ろさない……信じている」

人見の声には恐怖などまるで感じられなかつた。本当に何事も無いかのよう。その様子は、彼の王子に対する信頼と、彼の言葉が本心からのものであると物語っていた。

「……………」

「……………」

その後、二人の間には再び沈黙が流れる。一人は異能を振り下ろそうと構え、もう一人はその者を同志として信頼している。だが、その緊迫した体勢が変わることはなく、少しずつ時間が過ぎていった。

そして……

「——プツ、ハハハハ！ 甘い奴だな！ とても『コード・ブレイカー』のエース、『コード：01』とは思えない！」

王子が耐えきれなくなったように吹き出した。そのまま笑い始めた王子からは、先ほどまで感じていた緊迫感は完全に消えていた。突然、吹き出したことに人見は驚いていたが、自分の言葉が届いたことを感じてすぐに笑顔に戻った。

そして、王子は『影』を消すとそのまま人見の隣まで移動し、改めて座り直した。人見から見た王子の横顔はどこか清々しきを感じ、風が優しく彼女の髪をなびかせていた。王子は前を見て、月がかすかに映った川を見ながら言葉を続けた。

「完敗だよ。あんたの意志の強さは尋常じゃない。……いや、頑固さって言った方がいいか？」

「ハハハ。そこは意思の強さと言ってもらった方が格好いいかな」

軽口を交えて笑い合う二人。とてもじゃないが、先ほどまで命を奪いかねないやり取

りをしていたとは思えない。すると、王子は大きく息を吐いて落ち着くと、静かに今までの自分を思い返し始めた。

「……思えば、本当のところは自分から壁を作ってたのかもな。オレは元々、敵だった存在。馴れ合う必要はないし、できないと思つていた。……突つ張つていじけてただけだな」

今まで受け入れられなかった王子だったが、それ以前に自分が周囲に壁を作つていたと知つた。今までは、彼女は過去を知る平家ならまだしも、過去を知らない遊騎と刻とも関わろうとはしなかった。それは他でもない、彼女自身が周囲に対して壁を作つていただけに過ぎなかった。

すると、人見は大きく口を開けて呑気にあくびをしながら言葉を返した。

「ふわああ……。私からするとおかしいことだっただけどね」

「？」

「いじけてる暇があつたら寝ればいいのに、って思うだけさ」

「……ハハハ！ アンタらしいな、人見さん！」

冗談交じりのように笑う人見を見て、王子は再び吹き出した。互いに笑い合う二人の間には、すでに王子の心に作られていた壁は存在していなかった。だからだろう。王子の人見に対する呼び名も、いつの間にか敬意が籠ったものへと変わっていた。

「オ？ 珍しい組み合わせジャン」

「いちばんとごばんもバイト終わったんか？」

「……………」

「やあ、三人とも。お疲れ様」

すると、奇遇にも刻、遊騎、平家の三人が通りかかった。ここまで見事に巡り合うなど奇妙に感じてしまうが、今の状況を考えると幸運だった。これを機会に王子と他のメンバーとの距離を縮めていければいい、と考えた人見は、起き上って三人に向かって手を挙げた。

「アーア、今日も正義の味方らしく、悪<sup>ワズ</sup>を対峙したはいいケド、疲れちまうぜ」

「よんぼん、もうちよい体力つけた方がえーで」

「バーカ。冗談に決まってんだロ。これくらい刻様は余裕だつての」

「……ふっ、頼もしいな」

「なんだヨ、王子。今さら刻様の實力を思い知つたみてーだな」

「ごぼんの笑つたとこ初めて見たわー」

人見と王子の姿を見つけた刻と遊騎は、そのまま二人の近くに座つて談笑をし始めた。二人の談笑に、王子も自分から入っていき、三人の間には穏やかな空気が流れ始めた。

「……………」

しかし、そんな三人の様子を平家だけは氣に入らない様子で見ている。彼だけは座ることはなく、腕を組んで立っていた。どうやら、彼と王子が上手くやるには相当の時間が必要なようだ。

「平家、君の意志や信念は私も理解している。けど、王子だつて今は私たちの仲間だ。だから少しずつでもいい。彼女への接し方を考えてみてくれないか？」

「……いくらあなたからの言葉とはいえ、私はまだ彼女を認める氣はありません」

人見は平家の隣に立ち、彼の肩に手を置きながら王子への接し方について話す。普段の彼ならば人見に対しては他の者には見せない柔らかさを見せる。彼らの信頼関係が



あるからこそだろうが、今回ばかりはそうもいかなかった。平家は厳しい視線と言葉を返すと、「失礼します」とだけ言つて歩き出した。どうやら、彼が内側に持つ「悪」に対する厳しさもかなり強固なもので、人見はやれやれとため息をついた。

「アレ？ 人見さん、平家のヤローは先に帰つたワケ？」

「ああ。彼はジャツジだから色々忙しいらしくてね」

平家がいけないことに気付いた刻が人見に声をかけると、人見は再び笑顔を見せて三人のところに戻つていった。平家のことはこれからも考えていくべきだが、少なくとも遊騎と刻に関しては問題はない。それだけでも大きな進歩である。

「ジャツジつて言つても、オレらのバイトを上から眺めて「エデン」にチクるだけダロ？ そんなで、低かつたらあのヤロー、『おしおきです』とか言つて縛つてくるから嫌になるぜ……」

「オレはそんなこと言われへんけどなあ。それつて、よんばんだけやないか？」

「う、うっせー！」

平家からのおしおきについて思い出した刻は、その恐ろしさに顔を真っ青にしていたが、遊騎は小首を傾げていた。そのように呑気にしている遊騎を見て、刻は意地になつて大声を張り上げた。しかし、この後……彼が不用意に放つた一言で、平家のおしおきにも引けを取らないほどの恐ろしい事態に巻き込まれることとなつた。

刻はその一言を、軽くため息をつきながら言ってしまった。

「ハア……。どうせおしおきされるんだつたら、王子くらい美人にしてもらった方が気持ち的にも楽だつてノ。あんな気色悪い変態よりナ」

「……は？　今、なんて……？」

刻の言葉に、王子の動きがピタリと止まる。パチパチと瞬きを繰り返し、思わず刻に何と言ったか聞き返す。すると、刻は聞かれたままに同じ言葉を繰り返した。

「え？　だから、どうせおしおきされるんだつたら、王子くらいの美人にもらいたいって……」

——美人。今度はしっかりとその言葉を聞いた王子。その瞬間、王子の様子に大きな変化があつた。

「……ば、バカヤロ……。び、びびび、美人とか、オレが、んなワケ……！」  
「お、王子……？」

急激に顔が紅潮していつて湯気まで出てきた王子。耳まで真っ赤になっていき、言葉

も途切れ途切れになっていく。この時、彼らはまだ知らなかった。そして、初めて学習した。

「う、うがあああ!!」

「ガッ!」

「ッ!」

「うわ!」

王子を褒めてはいけない……その事実には。

「い、痛ってええええ!!」

「……星が目の前、回つとるわ」

「ど、どうしたんだい? 王子……」

突然、王子から頭突きを喰らった三人はその痛みに耐えられず、その場に倒れる。一方、王子は三人に頭突きをしたおかげで少しずつ落ち着き始めていた。その様子を見て人見が声をかけると、王子はハツとして再び顔を赤く染めて慌て始めた。

「わ、わわ悪い！ その、あまり人から褒められることに慣れてなくてな……。きゅ、急に褒められるとわけわかなくなかって、辺りの物とかをぶっ壊しちゃうんだ……」

「……………ごぼんは照れ屋なんやな」

「いや、もう照れ屋ってレベル越してるっつの……」

「は、はは……」

平謝りの王子に対し、三人は痛みを耐えながら言葉を返す。そんな中、思わず苦笑いを浮かべる人見だったが、彼は嬉しさを感じていた。こうして素の部分を出せるほど、彼女の中にあつた周囲への壁は無くなっていったのだと。この痛みがその代償ならば、と考えると、自然と人見の心には清々しさがあつた。

彼女は、もう『捜シ者』を護る存在ではない。

今の彼女は、闇から多くの人々を護る大きな『影』。全てを護る……『コード：05』である。

## code:extra 12 それぞれの夏の夜

『捜シ者』たちとの闘いに備え、己を高めようと修行に励む大神たち。そんな中、会長の提案から行くことになった夏祭り。元々、大神など一部の者は行く気はなかったが、桜がそれぞれの弱点を的確についた言葉をかけたことで見事に全員参加となった。その場になかった平家も、『渋谷荘』からの出店という出店を任されており、現地で合流することとなった。

さらに、寧々音とも合流した一行だったが、寧々音の純粋な感謝を向けられた王子がいつものように暴走しようとした。巻き込まれるのを恐れた一同は近くににいる者と離れていき、それぞれの夏の夜を過ごしていった。

「ゼエ、ゼエ……！　こ、ここのまで来れば大丈夫、ダロ……！」

「お〜」

暴走した王子による頭突きを回避しようと、寧々音を抱えて全力疾走した刻。修業で体力は以前より上がっている上に抱えている寧々音が小柄でとても軽いとはいえ、やはり一人一人を抱えての全力疾走は辛いものがある。見事に肩で息をしていた。そんな刻に抱えられたまま、現状をあまり理解していないであろう寧々音は刻に向かって拍手を送っていた。

すると、刻が懐に入れていた携帯が急に鳴り出した。確認するために、刻は寧々音を近くにあつたベンチに座らせ、自分もその隣に座る。

「こんな時に誰だつての……。……。ア？ 優からメール？」

携帯を見ると、優からメールが来ていた。しかも、刻、大神、桜の三人に向けた一斉送信のメールだった。『コード：ブレイカー』同士でメールなど珍しいことだったため少し驚いた刻だったが、とりあえずその内容を確認することにした。

見ると、そこには端的な言葉の羅列が数行だけ並んでいた。

王子、鎮静

被害状況……自他ともに0

以上

「なんの業務連絡だったの……」

事実だけを述べたその内容に、頭をかきながら呆れる刻。もちろん彼も、優が「みんな大丈夫？　こっちはなんとか大丈夫だよ（◇）ゞ」みたいなメールを送ると思っていない。そう考えると彼らしい内容だったが、ここまで端的なものかどうかと思う。

とりあえず、返信の必要はないと考えた刻はそのまま携帯を閉じた。そして隣に座る寧々音に視線を向けた……が、隣にいるはずの寧々音の姿は無く、ベンチに座っていたのは刻だけだった。

「ね、寧々音？」

突然のことに大声を出して立ち上がる刻。思い返せば、最初にこの夏祭りで寧々音を見つけた時も、優から「勝手にどこかに行かないように」と言われていたにも関わらず

一人で型抜き屋にいたのだ。少し目を離れた間に何かに気を取られてどこかに行ってしまうのも理解できる。

だが、それでも刻にとっては一大事なのだ。年齢はれっきとした高校生とはいえ、その自由奔放さからわかる通り、その精神年齢はかなり幼い。つまり、ほとんど子どもと変わらない。そして、この夏祭りのようなイベントにはどこに魔の手が潜んでいるかわからない。それを考えただけで、刻の身体からは嫌な汗が止まらなくなる。

「寧々音！……どこに行つたんだヨ！……」

何度も周囲を見渡し、大声で叫ぶ刻。しかし、視界に映るのは名前も知らない赤の人ばかりで、肝心の寧々音の姿はどこにも無い。それを感じる度に焦りが募っていく刻は、とりあえず寧々音が興味を持ちそうな出店がないか探すことにした。目を離していたのはメールを確認した数秒だったため、そう遠くに行っていないのは明らかだったため、まずは近くにある出店を確認しようと――

「マグネス、何かお探し物なの？」

「ね——藤原サン！」

突然、背後から聞こえた聞き慣れた声……というより聞きたかった声。勢いよく振り返ると、そこには両手にかき氷を持つて首を傾げる寧々音の姿があった。その姿を見たことで冷静さを少し取り戻した刻は彼女に対する呼び方を他人行儀に戻す。今の自分



と彼女はあくまで他人。それは自分が『コード：ブレイカー』として過去を捨てた時から承知していた。と言つても、さっきのような緊急事態だとそんなことに構つていられないのだが。

「ぶ、無事でよかつた……！ もう勝手にどこかに行かないでくださいヨ……」

寧々音の安全を確認したことにより全身の力が抜けたのか、刻はその場にしゃがみ込んだ。王子の時も慌てたが、今回もかなり心臓が悪い。楽しめるはずの夏祭りでここまですぐに気が疲れるとは、と刻は自分の不運さを呪つた。

だが、不運の後には幸運がやってくるものだ。そして、それはこの刻も例外ではなかつた。

「はい、マグネス。いっぱい走つて暑いと思つたから買つてきたの。一緒に食べるのー」

「……………」

視線を合わせるようにしゃがみ、「はい」とかき氷を差し出す寧々音。そう、彼女はなにも興味を引かれたから勝手にいなくなつたわけではなかつた。自分を抱えて、息を切らして汗まみれになりながら走る刻。そうする理由はわからなくても、彼が自分のためにと考えて行動しているということがわかつたのだろう。だから彼女は、そんな刻の労を労おうと思つてかき氷を買つてきたのだ。

「……ありがとうございます、藤原サン」

そんな彼女の優しさを、刻は微笑みながら受け入れた。差し出されたかき氷を受け取り、改めて二人揃ってベンチに座る。かき氷は二人とも、黄色——レモンのシロップがかけられている。備え付けのストローを使ってかき氷を口にする、口中に甘酸っぱさと冷たさが広がる。冷たさは口の中だけにはとどまらず、頭に「キーン」と独特の刺激を与える。いつもなら遠慮したいものだが、今回だけはその刺激すら心地よいものを感じる。

かき氷の物理的な冷たさか、寧々音の純粹な優しさか。刻の心身ともに心地よさを感じながら、寧々音と共に夏の夜を過ごしていった。

「お待たせしました。こちらがビューティ・クラッシュになります」

「うわー！ すごい！」

「食べるのもったいなーい！ ありがとうございます！」

「いえいえ、ありがとうございます。それでは次の方、ご注文をどうぞ」

精巧に形作られた女性のモチーフの飴に、リボンによる丁寧なラッピングという名の束縛を行う。完成したそれを手渡すと、客である若い女性の二人組は目を輝かせて絶賛する。自分の店の商品を買っていった客に頭を下げると、次の客の対応へと移る。その後ろには、延々と並ぶ長蛇の列ができていた。

『渋谷荘』出店である「平家のビューティフル☆セクシー☆キャンディー☆ショップ」は、今回の夏祭りで一、二を争うほどの売り上げを見せていた。

「……………ふう。ようやく落ち着きましたか」

数十分後、長蛇の列を構成していた最後の一人への対応を終えた平家は軽く息を吐いた。飴細工ということで、作業自体に体力はそこまで使わないが労働力が少なすぎた。材料の準備は優が全てやってもらったが、それ以外の作業は全て自分一人で行っている。たった一人で何十人という客を対応してきたのだ。疲れが溜まるのも当然のことと言える。

休憩の意味も込めて、平家は店先に「ただいま準備中」の看板を立てかけた。と言っても、もう材料も残り少ないので再開してもすぐに終了になるだろう。だが、そんなことは気にせずに平家は店頭に置く飴の準備に入った。すると、そんな彼に話しかける声が屋台の真横から聞こえた。

「なんや忙しそうやなあ、にばん」

「私が作った飴細工ですから当然ですよ、遊騎君」

話しかけてきたのは遊騎だった。『にやんまる』のお面を顔が見えるようにずらして着け、その手には『にやんまる』のイラストが描かれたわたあめの袋や『にやんまる』型の飴など、祭り関連の『にやんまる』グッズが大量にあった。どうやら、彼は彼なりに夏祭りを楽しんでいるようだった。

「それはそうと遊騎君。大神君たちと合流しなくていいんですか？」

「今はいいわ。みんなバラバラに動いとるし、集まり始めたら行くわ」

「そうですか。では、私もその時に行くとしましよう」

それだけ言葉を交わすと、平家は飴細工を再開し始め、遊騎は手に持った『にやんまる』グッズを眺めながら『にやんまる』の歌を口座み始めた。数えるのも億劫になるほどの人たちが目の前を横切っていく中、それぞれの時間を過ごす二人。元々、この二人は相性が良いとは言えない。時には仲間を見捨てるような「エデン」の掟や命令を重

視する平家に対し、遊騎は仲間のために自ら動くタイプだ。そんな真逆な思考のため、二人はこれまでも幾度となくぶつかってきた。

しかし、そんな二人にも共通していることはある。それは、二人とも上の『コード：ナンバー』を持つ者として下の『コード：ナンバー』を持つ者たちを思う気持ちである。

「そういえば、刻君は虹次に勝つために禁煙を始めたそうですね。ちゃんと続けられていますか？」

「心配ないわ。よんばんは決めたら死んでもやり切る。それは、にばんだってよくわかっているやろ」

唐突に口を開いた平家が出した話題は、誰から聞いたのか刻についてだった。平家の言う通り、刻は虹次に負けた日から禁煙を宣言している。本人なりの覚悟の証として周囲は受け取り、会長もその真摯な姿を見て彼の弟子入りを決めたのだ。

だが、平家にしてみれば少し心配だったようで、そのまま言葉を続けた。

「そうですが……私がいくら言っても止めなかつたものを急にやめたのです。心配もしてしまいうものですよ」

「確かに、よく止める言つとつたもんな。煙草と……あと、ろくばんとのケンカも」

ろくばん大神とのケンカ……それは、かつて『コード：ブレイカー』内で起こっていた問題の一つであった。大神が『コード：06』となった直後、刻と大神は互いの異能を使つ

ての大喧嘩を始めた。喧嘩の原因は単純なもので、刻が一方的に仕掛けたのだ。触れた物しか燃え散らせない『青い炎』では四方八方から向かつてくる『磁力』で操られた鉄材をかわせるはずもなく、結果は刻の圧勝で終わった。

だが、それは一回では終わらなかつた。その後、大神と刻はよく組んで仕事をするこゝとがあつた。『ナンバー』も年齢も近いから仕方のないことだつたが、仕事が終わる度に刻が難癖をつけて大神といがみ合うのだ。ようやく人数が揃つたというのに、繰り返される内輪揉めという問題に平家は頭を悩ませたものだつた。(彼自身、人のことは言えないが)

「……あれは刻君にしてみればただの同族嫌悪。まあ、周囲に当たり散らす分、大神君より始末が悪いですが。それに、そもそも煙草だつてその証。本当は好きでもないくせに吸い続けていたのは自暴自棄になつてゐる証拠ですからね」

「あの頃のろくばんも死んだ目をしとつたけど、よんばんも似たようなもんやつたしな。いつ死んでも構わへん……そんな感じやつたわ」

一方はジャッジ、もう一方は大企業の社長……周囲を見る眼は確かな二人の意見が同じならば、それはもう真実といつても過言ではない。事実、『コード・ブレイカー』になつた頃の大神は何事にも無関心であつたし、刻も寧々音のことがあるためか無茶をして突つ込むことが多かつた。その頃から考えると、今の二人は当時では考えられない姿に

見えるだろう。

「ほんま変わったわ。ろくばんも……よんばんも」

「……ええ、そうですね。ふふふ、珍しく意見が合いましたね？ 遊騎君」

「……せやな」

いつもは反発し合う二人の意見が珍しく合ったことがおかしかったのか、小さく笑う平家だったが、遊騎も「ふっ」と小さく笑ってからそれに同意した。夏祭りに充満する皆の楽しげで仲良さげな雰囲気の後押ししたのか、二人の間にも穏やかな空気が流れ始める。

すると、遊騎は急に立ち上がり、浴衣についた土埃を払い始めた。

「さて、と。そろそろ行かへんか？」

「おや、もう皆さん集まり始めたのですか？ 随分と早いですね」

「ちやう」

移動を提案してきた遊騎に対し、意外にも早く移動することに少し驚く平家。すると、遊騎は短く否定の言葉を述べ、平家に対して『にやんまる』のお面を差し出した。

「せっかく祭りに来たんや。にばんも色々見なきゃ損やろ。はよ行こうや」

「……ありがとうございます、遊騎君。では、すぐに店仕舞いとしましょう」

遊騎の気遣いに、平家は感謝の言葉を述べると早急に店仕舞いを始めた。数分後、と

りあえず簡単に店仕舞いの準備までは終わらせた二人は、改めて夏祭りを楽しむことにした。

「にばん、作つとつた飴はどうすんのや?」

「捨ててはもつたいないので、『渋谷荘』に持つて帰つてもらいますよ。あそこは色々なところに置くことができますからねえ」

その後、『渋谷荘』ではそこかしこに平家の飴細工（束縛済）が置かれており、住民たちは気が休まらない日々を数日送つたというのはまた別の話。

刻と寧々音、遊騎と平家。それぞれが平和な時間を過ごす中、この二人……というより、彼は平和とは無縁の時間を送っていた。

「おらあー!」

「うおっ!」

完全に自分を狙つて振り下ろされた黒い鎌を勢いよく前に跳んで避ける。瞬間、周囲



にあった木の数本が「ズズズ」と重低音を立ててずれていき、「バキバキ」と枝と枝がぶつかっては折れながら切り倒されていった。幸い、そこまで大木ではなかったので賑わっている祭りの会場には何も聞こえないだろう。

だが、狙われた本人にしてみれば今はどうでもよかった。そんなことを考えているのは確実に自分が命を落とすからである。現に、さっきの攻撃は完全に避けきれなかったらしく、髪が何本か切れてしまい空中に散った。

「か、かすつた……！　今かすつたぞ、王子！」

「……チツ！　かすつただけかよ……！」

「な、なんで残念そうなんだよ……！」

「決まってるんだろ……。今のオレはテメエを殺す気でやつてるからだよ、優！！」

黒い鎌……『斬影』となった『影』を再び振りかざす王子と、『脳』で脚力を強化して後ろに跳ぶ優。他の者たちが平和な時間を過ごしている中、この二人だけは完全に命の取り合いを……というより、王子が一方的に優を殺す気で攻撃するという地獄の時間を送っていた。

「ちよこまかと……逃げてんじゃねえ！」

「逃げるに決まってるだろ！」

なぜこんなことになったのか……というのが優の正直な思いである。だが、これまで

の経緯を知る第三者から見れば、全員がこう言うだろう。「完全に優が悪い」と。

修業中、優と王子の仲を探ろうとした桜から「王子のことをどう思っているのか」と聞かれた際、優は「女として『特別』な存在」とはつきり答えた。男が女に対して「特別」という単語を使ったのだ。それは「友人として」ではなく「一人の女として」と解釈するのがふつうである。まあ、それを聞いた桜はよほど色恋沙汰に無縁なのか、まったく気付かなかったが。だが、彼女は気付いてしまった。偶然だが優の答えを聞いてしまった……王子本人は。

その後、王子は優を見るだけで照れてしまい、ほとんど会話にならない状態が続いた。その原因が自分にあるなど気付きもしない優だったが、今回の夏祭りではそれは変わった。寧々音の一言で暴走の兆しを見せた王子を落ち着かせ、二人で話をした。その中で、王子が桜と話していたことを聞いていたということを知った。だが、そこで優が語った真実がいけなかった。彼が言う「特別」というのは、確かに「一人の女として」だった。しかし、それは「弱点が機能しない唯一の女」という意味だった。目を合わせただけで倒れるほど女性が苦手な優だったが、王子ならば大丈夫……だから「特別」なのだ、と彼は王子に向かって悪びれもせずと言ってしまったのだ。

そして、今に至るといふわけだ。王子自身、恋愛沙汰だったとしても断るつもりだった。だが、彼女が真剣に考えてきたのも事実だ。優の言葉はその苦悩の日々を完全に碎

いたのと同じだった。その怒りは計り知れない。つまり何が言いたいかというところ……

「死ね、コラアアアアア!!」

「なんで祭りでこんな目に……! や、厄日だああああああ!!」

今の状況は厄日でもなんでもなく、ただの自業自得、ということである。

「ん?」

「どうしたんですか、桜小路さん」

「いや、どこかで木が倒れた音がしたような……。大神は聞こえなかったか?」

「何か作業でもやっているんでしょう。祭りの日までご苦労なことです」

「ふむ? なにやら『厄日だ』と嘆く声も聞こえたような……」

「気のせいですよ」

一方その頃、大神と桜はどこかから聞こえる謎の音と声に首を傾げながらも祭りを満喫していた。と言っても、大神はただ聞いていつているだけで、本当の意味で満喫して

いるのは桜であり、そして……

「キヤア! 『にゃんまる』のお祭りバージョンだ!」

「あの! 写真撮ってもいいですか!」

「いかにも、別に構わんよー」

(クソネゴは本当にどこでも楽しそうだな……)

会長の二人だった。会長に関しては、このように写真をせがまれるなどして自他共に満喫させているので中々のものだ。だが、大神からすれば普段とまったく変わらなく見えるので興味もなければ感心もしなかった。

「いや、今日は一生分の写真を撮られたかもしれないんだ」

「会長は人気者なのですね」

「桜小路さん……会長ではなく『にゃんまる』が人気なだけだと思いますが」

「む?」

ほくほくと満足気な会長とその人気ぶりに素直に感心する桜。それに対し、大神は客観的な意見を述べており、完全に冷め切っていた。

すると、そんな大神を見た会長はいつもの悪い癖なのか、大神にしつこく近寄っていった。

「ねえねえ、大神君。そんな仏頂面してないでさ、一緒に遊ぼうよ」

「オレはいいです。どうぞ、桜小路さんと楽しんでください」

「そう言わずにさ〜」

「結構です」

「遊ぼうよ〜」

「……しつこいですよ」

何度断つても執拗に誘ってくる会長に、大神の我慢も限界が近づいてきたのだろう。大神は足早に物陰に移動して会長と距離をとった。物陰に移動したため、二人の間にある物が障害物になっている。だが、なぜか一点だけぼつかり穴が開いていたため、会長はそこから顔を覗かせて誘い続けた。

「ねえ、大神君ったら〜」

「だから、オレはいいって何度も言ってるでしょう……!」

そろそろ限界なのか、大神の言葉に苛立ちが感じられた。しかし、そんなことで会長が止めるはずもなく、さらに誘い続ける……かと思われた。

「そんなこと言って、本当は——うわ!」

「会長!」

「ッ!?! どうし——!」

突然、穴から覗いていた会長の姿が消えた。それと同時に、穴の向こうから驚いて会

長を呼ぶ桜の声が聞こえ、何かあったのだということをお大神に伝える。突然のことに、大神は今まで感じていた苛立ちも忘れて会長が覗いていた穴から向こうの様子を見ようとする。意外と穴は大きく、人の顔がすっぽりと入るくらいだった。そう、まるで……

「あ、シャッターチャンス」

「おお。意外と似合っているぞ、大神」

「」

遊園地にある顔出し看板のように……というより、まさにそのものだった。大神が顔を出した部分は羊ガールとでも言うべきか、羊の白い毛を水着にして頭には羊の被り物をしていた女性の顔部分。倒れていた会長はその瞬間を見逃さずに携帯のカメラで撮影し、会長を起き上がらせようと駆け寄る桜もバツチリとそれを見ていた。ハメられた……そう理解した大神は完全に言葉を失った。

「いかにも、本当はやりたかつたんでしょ？ 大神君」

「テメエが転んだからだろーが……！ ワザと転ぶとかしよーもないマネしやがつて……！」

「いやいや、浴衣着てると足の運びが難しいからね。事故だつたんだな」

「着ぐるみがどうでもいいこと気にしてんじゃねーよ……！」

再び羊の屈辱が蘇ったのか、怒りを露わにして乱暴な口調で会長に詰め寄る大神。だが、会長は特に悪びれもせず、平然としていた。すると、そんな会長の態度がさらに大神の神経を逆撫でし、彼はついに左手の手袋に手をかけた。

「テメエ……！！ こうなつたらここで燃え散らして……！！」

「おっと。いかにも、逃げるんだな〜」

「あ！ テメエ、待ちやがれ！」

そのまま怒りに任せて『青い炎』を出すかと思われた大神だったが、会長がそそくさとして逃げ出したためそれは避けられた。そして、会長が逃げ出したことで行き場の無くなった大神の怒りだったが、その怒りを逃がすように大神は大きく息を吐いて落ち着い

た。

「……ハア。くそ、逃げ足だけは早い……」

「フフフ……」

「……なに笑ってるんですか、桜小路さん」

すると、今まで大神と会長のやり取りを見ているだけだった桜が声にながら笑い始めた。一瞬、先ほどのことを笑われているのかと思つた大神だったが、桜の顔を見てそれは違ふと判断する。彼女の表情は何かを馬鹿にするような悪意は感じられず、ただ純粹なものに見えた。一体今のどこにそんな笑みを浮かべるところがあるのか……疑問に感じた大神は率直な言葉で桜に尋ねた。すると、桜は純粹な笑みを浮かべたまま答えた。

「楽しいな！　大神！」

「は……？」

思わず瞬きを繰り返す大神。今のどこに楽しめる要素があつたのか……大神にはわからなかつた。しかし不思議なもので、桜の満足そうなその笑顔を見ると、本当にそうだと思えてくる。そして、いつの間にか会長に感じていた怒りは完全に消え、大神の表情も柔らかいものへと変わっていった。

「……まったく、あなたは相変わらなすね」



「それはお互い様だろう？ さあ、大神！ まだまだ祭りを楽しむのだ！」

「楽しむのはあなたに任せますよ」

「ダメだ！ お前も楽しくなければな！ 私が祭りの楽しみ方というのを教えてやろう！」

「……やれやれ」

どこまでもいっても変わらない桜の性格に苦笑を浮かべながらも、悪い気はしない大神。二人は肩を並べて歩き始め、残った時間を楽しむべく賑わう人の中に向かっていった。

「……………、……………なら安全か」

それから数十分後、優はなんとか王子の前から姿を眩ませることに成功して、茂みの中に身を潜ませていた。時間的にはもう祭りも終わりのため、そろそろ大神たちも集まっている頃だと思っていたが、そこに王子もいると考えると安易に合流するわけには

いかなかった。だが、いつまでもここに居るわけにもいかなかった。

「……覚悟を決めないとか」

それが逃げ続ける覚悟なのか、命を散らす覚悟なのか……それは本人にしかわからないが、優は意を決して歩きだした。すると……

——ドオオオン！

「……………ん？」

突然、鼓膜をビリビリと震わせる轟音が辺り一帯に響いた。だが、それは初めて聞く音ではなかった。優は音の正体を見るべく、音がした方向へ歩いていった。歩いている間にも轟音は鳴り響き、同時に赤や緑などの光が周囲を一時的に照らす。そして、少し開けた場所に出ると、音の正体が優の眼に映った。

——ドオオオン！

「花火……………か」

すっかり深くなった夜の闇にも負けず、色とりどりの光を放つ夏の風物詩に、優は思わず見とれる。同じ頃、集まっていた『コード：ブレイカー』たちは花火を始めて見たことに感動していたが、この優だけは少し違った。彼にとつて、花火は始めて見るものではない。幼い頃……………家族や『彼女』と見た覚えがあった。

「……………なんだか、あの頃より小さく見えるな。……………ま、成長したんだから当然か」

幼い頃の自分から見た花火というのは、とてつもなく巨大な物に見えた。それこそ、自分の両手を精一杯伸ばしても足りないくらい。しかし、恐怖は感じなかった。ただ、その美しさに子どもながら感動していた。一筋の光として地上から上がっていき、空中で轟音と共に巨大な光の花を咲かせる。それを見るだけで見る者全てを笑顔にする……まるで魔法だと母親に訴えたのを覚えている。そして――

「――ねえ、――ちゃん」

「どーしたの？――くん」

「僕ね、――ちゃんのこと――」

「……子どもの頃の話、だな。さて、今なら王子の機嫌も良くなってるかもしれないし、行くか」

自然と脳内に浮かび上がってきた過去の記憶を振り払うかのように頭を振る優。そして、王子の機嫌が良くなっていることを祈りながら花火に背を向けて歩き出した。だが、その瞬間だった。

「——ぐっ!?!」

突然、頭の中で「ズキン!」と重い痛みが響いた。彼はこの感覚を知っていた。そして、同時に彼は今までの自分の行いを酷く後悔した。

「くそ……!」 王子から逃げるのに異能を使いすぎたか……!」

命が危なかったとはいえ、連日の修業で消耗しているのに異能を大胆に使ったのだ。その代償はとて大きい。

「あ、ぐ……!」 ああ……!」

だが、そうしている間にも頭の中から響く痛みは激しさを増す。痛みの間隔もどんどん縮まっていき、身体全体が熱くなる。気持ち悪さを感じても、嫌な汗が次から次へと流れてくる。そして、その時はやってきた。

「ぐう……うあああああ!!」

——ドオオオオン!!

優の悲痛な叫びは、ラストを飾る大玉の花火によって完全にかき消された。

「…………ふう！　今回は結構、早かったなー。やっぱり修業の影響が少なからず出てるみたい。…………ま、私には関係ないからいいけど」

先ほどまで優がいた場所に、優と同じ浴衣を着て座る女性。彼女がいるということ、一つの現象が起こったことの何よりの証拠だった。

ロスト…………今の優が何よりも避けたい異能者の宿命である。優がロストしたことで表に出てくる優子だったが、今の彼女は表に出てこれた喜びよりも先に怒りが飛び出した。

「それにしても…………優のアホが！　私の王子様に向かってあんなこと言うなんて…………！　怒って当然でしょーが！　ああ、早く王子様のところに行かないと！　優に傷つけられた心を私が癒さないと！　待っててね！　王子様ー！」

鬼のような顔をして怒りを露わにしたかと思うと、まるで恋する乙女のように恍惚と

した表情に変わる優子。そして、『脳』で強化したのではないかと思えるほどのスピードで走り出していった。

その数分後、彼女はめでたく彼女の「王子様」と感動の再会を果たせたという。めでたし、めでたし。

「めでたくねーよ!」

「王子様ー!」

「近寄るんじゃねえええええ!!」

code:extra 13 『捜シ者』たちの日常生活

この物語は、日本に滞在する『捜シ者』と彼に付き従う者たちの日常生活を描いたものである。

①技術だけは世界一

「これ！ これなんてどうだい!？」  
『……………』

唯一の女性であるリリイが目を輝かせて差し出した物を見て、残った男性陣は揃って無言を貫いた。だが、その態度は一人ひとり違うものだった。

「ぬ、うう……………」

まず一人。仙堂はどう言葉を返していいのかわからないのか、ただでさえ強面の顔をさらに強張らせていた。よく見ると、その額には汗が流れている。おそらく彼自身、それを嫌な汗だと認識していることだろう。

「……ハア」

もう一人、新たな『Re—CODE』である風牙は完全に呆れた様子だった。ほとんど半開きの目からは「早く帰りたい」という彼の思いが強く伝わってくるようで、開いたままの口からは面倒くさそうにため息が漏れていた。

「……………」

そして最後の一人、『Re—CODE』の一人である雪比奈は完全に無反応だった。仙堂のように困っているわけでもなく、ましてや風牙のように呆れているわけでもなかった。あえて彼の様子を言葉にするなら……「どうでもいい」というのが正解だろう。

そんな三者三様な態度を見たリリイは、先ほどまで輝かせていた目をスツと細め、三人に対して怒りを露わにし始めた。

「ちよいと、アンタら！　いくらなんでもその反応はないんじゃないのかい!?　ファッションとかに詳しくなくても似合うか似合わないかくらいはわかるだろ!?!」

三人に差し出した物……かなり布の面積が少ない水着を握りしめながら怒るリリイ。しかし、それを見ても三人の反応は特に変わらなかった。



「い、いや……オレはそういうのはよくわからん……」

「すげー寒そう」

「……………」

「あーもう！ アンタらに聞いたリリイがバカだったよ！」

今、彼らがいるのは都内にある服などの専門店。時期が時期だけに、店内の一角は水着関係の品が所狭しと並べられている。彼らはまさにその一角にいるわけなのだが、見事にリリイ以外は興味が無さそうだった。近年は色々とこだわる男も多くなってきたが、やはりこういうったファッション関係の店に在ることを苦痛に感じる男も少なからずいるようだ。少なくとも、ここに三人。

そんな彼らに意見を求めても無駄だと悟ったリリイは水着を戻し、頬を膨らませて三人背を向けた。どうやらかなりご立腹らしい。そんなリリイを見て、仙堂は咳払いを一つしてから口を開いた。

「だ、だがリリイ……なにも無理に買う必要はないだろう。どうせすぐにターゲットのところに出向くことになる。大体、お前は日本はそこまで好きではないだろう？ 来た時も『湿気臭い所』だと……」

「日本は確かに湿気臭い所さ！ けど日本の技術とかはトップレベルなんだから欲しがってもいいじゃないか！ どうせターゲットを消したらすぐに帰ることになるんだ

から少しくらいはいいだろ！」

「……面倒臭い奴」

「お黙り、風牙！」

ギヤーギヤーと騒ぎ立てるリリイたち。その騒ぎに参加せず傍観していた雪比奈だったが、軽く息を吐いてから静かに手を伸ばした。そうして手に取ったのは……リリイが最初に手に取った水着だった。そして……

「……ゆ、雪比奈？」

そのままそれをリリイに手渡した。突然のことに瞬きを繰り返すリリイ。すると、雪比奈は相変わらずの無表情のまま今まで閉じていた口を開いた。

「……お前が気に入ったのなら好きにすればいい。お前は元がいいから、大体の物は着こなせるんだから心配する必要もないだろう」

「雪比奈……」

どこかぶつきらぼうしながら、リリイを褒めちぎる言葉。急にそんなことを言われたリリイは思わず頬を赤く染めたが、すぐに気を良くしたようで満面の笑みに変わった。

「わかっているじゃないか！ さすが雪比奈だよ！ じゃあ、これ買ってくるから待っていておくれよ！」

水着を手に満面の笑みを浮かべたまま足早に会計に向かうリリイ。その様子を黙っ

て見ていた雪比奈だったが、そんな雪比奈を風牙は呆れたような目で見ていた。

「……………よくああいふ台詞が出てくるな。まあ、おかげで早く帰れるからいいが」

「オレには……………無理だな」

風牙と違い、感心するように頷く仙堂。すると、二人の様子に優越感を感じたのか、雪比奈は珍しく口元を緩ませて静かに笑みを浮かべた。

「……………お前たちは女心がわかってないだけ」

『お前には言われたくねえ（ない）』

優越感たつぷりな雪比奈の言葉に対し、即答でその言葉を否定する二人。見ると、会計を済ませたりリイが笑顔で戻ってくるのが見えた。こうして日本に来てすぐの買い物は終え、四人は目的に向けて歩き出した。

……………ただ心残りがあるとすれば、その後“エデン”に捕えられたリイはこの水着を着る機会が完全に無くなってしまった、ということである。

## ②これもまた一興

瘢痕の『Re—CODE：03』である虹次のプライベートは謎に包まれている。元々、多くを語らない男であるため、謎は明かされるどころか深まっていくばかりである。

「……『捜シ者』、虹次の姿が見えないようですが」

『捜シ者』たちが過ごすホテルの一室にて、同志の姿が見当たらないことに疑問を抱いた時雨が窓辺に座る『捜シ者』に声をかける。すると、『捜シ者』は柔らかな笑みを浮かべて時雨の方を向き、優しい口調でその疑問に答えた。

「虹次はいつものアレをしに行っただけ。夜には帰ってくる」

「アレ？」

「『捜シ者』！ アレってなんでございますかA!？」

『捜シ者』の発言を聞き、日和も興味が湧いたのか会話に参加してきた。時雨と日和の二人が首を傾げる中、『捜シ者』はその視線を再び窓の向こうに向けて静かに呟いた。

「それは秘密。虹次との約束だから」

「そんなー！ 気になるじゃないですかAー！」

「日和、埃が立つから暴れるな」

『捜シ者』の言葉に納得できないらしく、日和は両手をバタバタと振って地団太を踏んだ。それに対して、時雨はそれ以上の追及はしようとせず隣で暴れる日和を止めた。

そんな彼らを横目に、『捜シ者』はただ窓の向こうを見続けた。窓の向こうでは、青い空がどこまでも広がっていき、雲が静かに風に吹かれていた。

世間的に今日は休日であり、天気も快晴。さらに時間が昼過ぎという人通りが自然と多くなるであろう条件下にもかかわらず、そこには人の気配など微塵もなかった。

正確に言えば、人はいる。ただ、その唯一の人が感じるような人の気配がないのだ。だが、それも当然である。その人がいるのは山の中。それもかなり奥だった。整地された場所ならば、ちよつとしたレジャー気分登る者もいるだろう。しかし、そこは尋常ではないほど生い茂った草木のさらに向こうであるため、滅多なことが無い限りそこに行こうとする者はいなかった。

そんな場所に……彼はいた。

「……………」

尋常ではない量の木々があるため、その葉が日光を遮断して薄暗さを作り出し、とても今が昼間とは思えなかった。さらにその薄暗さに加担するように、ジメジメとした湿気が籠<sup>ぼっく</sup>っていた。そして、それらと同時に感じる、思わず耳を塞ぎたくなるような轟音。そこは、罰白<sup>ばっはく</sup>の滝《たき》と呼ばれる場所だった。昔、とある組織が罪人に正しい罰を与えるために、その罪人に全ての情報を吐くように強いるために利用した激流の滝である。しかし、ほとんどの罪人はその強すぎる激流に耐えることはできず、その水圧に潰されて死んでいった。そのため、ここは『死の滝』の異名を持っている。

だが、考えてみればそこまでの激流だ。観念して何か言おうとしても滝の轟音にかき消されて何も伝わらないだろう。そう考えると、これは単なる処刑に近いものだったのではないかとも思えてくる。あまり気持ちの良い場所とは言えない。

しかし、そのいわくつきの場所で彼は……ただ静かに滝に打たれていた。

「……………」

何人もの命を潰してきた激流の水圧が、休むことなく上から全身を押し潰そうとのかかってくる。しかし、彼はその姿勢を微塵も崩すことなく打たれ続けた。まるで僧が修業するように禪のみを身に纏っているため、その激流のほとんどは素肌に直接打たれているにもかかわらず。

「……………そろそろ頃合いか」

ボソリと呟いたその瞬間、今まで彼の素肌に届いていた激流が届かなくなつた。まるで彼の周囲に見えない壁があるように、激流を完全に遮断していた。そして……

「無用」

——パアアンツ!!

再び呟いた瞬間、一筋の何かが滝の中心を切り裂いた。切り裂かれたことで、一瞬だけ中心の激流が弾け飛び、水圧がゼロとなつた。その一瞬の間に彼は立ち上がり、その場から跳んだ。そして、彼が滝の周囲に着地すると同時に、罰白の滝はいつも通りの激流を取り戻した。その様子を見て、彼はすっかり濡れた自分の髪をかき上げながら、満足そうに笑みをこぼした。

「やはり、この滝はいつ来てもいい。身が引き締まる」

そう言うと、水辺から離れていき用意していたタオルで身体を拭き始めた。それにしても、かつて何人も命を奪つていった激流の滝を「身が引き締まる」程度に感じてしまふ。かつての罪人が軟弱だったのか、それとも彼が強靱すぎるのか……まあ、おそらく後者だろう。

「……さて、行くとするか」

念入りに全身を拭いて水気を取り、服に着替えていく。そして、彼は下山すべく静かに歩き出した。その背中に、響き続けていく滝の轟音を受けながら。

「ふむ……。やはり滝に打たれた後はここに限る」

のんびりと、完全にリラックスした様子で彼は呟いた。今いるのは滝ではないが、同じく水に関する場所。違いといえば、冷水ではなくお湯であり、打たれるのではなく浸かっているということだ。

そう、彼がいるのは……銭湯である。

彼が先ほどまでいた山のふもとには昔ながらの銭湯があり、周囲に住む人々がよく利用している。そして、彼は滝に打たれた後はここに来るといふのがいつものことだった。なんでも、滝に打たれたことで強張った身体をほぐすにはこれが一番だとかなんとか。

「はいはい、失礼しますよ……おっと、旦那。随分といい身体してるじゃねえか。羨ましいねえ」

「……フツ。御老人よ、そちらも中々に引き締まっているように見えますが?」

「ハツハツハ! 口が上手いな、旦那! けど、旦那の身体にや負けちまうよ!」



たまたま近くにいた地元の老人に声をかけられ、楽しみに談笑を交わす。その姿は銭湯でよく見る光景かもしれない。しかし、老人は知らない。そのいい身体をした目の前の男が、先ほどまで殺人級の激流に打たれていたとは。そして彼が、自分たちの生活を脅かすかもしれない存在であることを。

「では、御老人。会って早々で申し訳ないが、先に失礼させていただく」

「おいおい、堅っ苦しい喋り方だなあ。しかし、これも何かの縁だ。名前を聞かせてもらつてもいいかい？」

老人との談笑を切り上げ、一足先に湯船から上がる。すると、老人は名残惜しそうにしながらもそれを見送った。そして、その後ろ姿を見ながら彼の名を尋ねた。

すると、彼はその場で立ち止まり、顔だけを老人の方に振り向いた。その時、老人が見たのは……左目に刻まれた癍痕だった。

「……オレの名は虹次。では、お元気で」

そう言つて、彼……虹次は再び歩き出した。その背中を見て、老人は静かに手を振つていた。

「こうした出会いも、また一興か」

だいぶ下山に時間がかかったため、入る頃には薄暗かったのが、出てみるとすっかり夜になっていた。はるか頭上に輝く月と星々を見上げながら、先ほどの老人との会話を思い出す虹次。彼は一般的な世界とはかけ離れた存在。それでも、こうした出会いに悪い気はしなかった。

湯冷めしないうちに戻ろうと、虹次は静かに歩き出した。その顔はとても満足気で、彼が過ごした一日が充実したものであると物語っていた。

これが、虹次のアレ……日本に来る度に行っている彼なりの過ごし方だった。

③ここが一番いい

その日、『捜シ者』と『Re—CODE』たちは珍しく揃って外出していた。行き先は

……なぜか大型シヨッピングモール。

『捜シ者』、わざわざこんなところに来るとは……何かお捜しで?」

「特にないけど……たまには目的もなく歩いてみるのもいいと思ってるね」

「ハイハイ! 日和CHAN<sup>チャ</sup>、ファミレスとか行きたーい!」

「日和はおかしな食べ方して食欲無くすからダメ」

「そう言うな、雪。趣向は人それぞれ。他人が口を出すことではない」

入って早々、一般人とは違うオーラを醸し出す『捜シ者』たち。その後、彼らは周囲の視線が集まるより前に分かれ、それぞれがそれぞれの時間を過ごすことにした。

「……………」

『捜シ者』は、特に何か商品を見て回ると行ったことはせず、ただ階段の踊り場から買い物する主婦など一般人を眺めていた。

こうして見ているだけでも多くの人があり、それぞれが目的のために動いている。食事のためという目的一つでも、材料一つひとつを吟味する者もいれば、総菜コーナーに

並んでいる者を深く考えもせずにとる者もいる。日常品を買うにしても、詳細を確認する者がいれば、とりあえず買っている者もいる。

何かあれば店員を見つけて聞く者もいれば、店員に頼ることなく自力で目的の物を見つげようとする者もいる。さらには、その店員に文句を言う者もいれば、何かあつても黙っている者。本当に人というのはさまざまである。

そんな彼らを、黙って見続ける『捜シ者』。そして、ボソリと呟いた。

「やっぱり……人って醜いね。そう思うだろう？ 虹次」

「生憎、同じ景色を見ていないオレには答え難いな」

今まで見ていた景色に背を向けて、踊り場の中央にある椅子に向かつて『捜シ者』は口を開いた。見ると、そこには虹次が深々と座っていた。冷たい言葉を言う『捜シ者』に対し、虹次はただ静かに構えていた。

すると、『捜シ者』はそのまま移動し、虹次の近くに座った。そして、二人はそれぞれ前を向いたまま話を続けた。

「答え難くなんかないさ。虹次だつて知っているだろう？ 人の身勝手さや醜さを。だから、ここにいらんでしょう」

「確かに、少なからずそういう人間はいる。だが、オレがここにいる理由には関係ないな」

「……そうだね。虹次がいるのは、もっと別の理由。だから、信頼できる」  
「……フツ」

それぞれ前を見ているため、視線は決して交わらず重なることも無い。だが、二人の間にはそんなものは必要なかった。別の場所を見ている、彼らには関係なかった。それだけの強い信頼が二人の間にはあった。その信頼を感じながら、二人は過ぎ去る人々の中で時間を過ごしていった。

趣味趣向は人それぞれ。そう割り切ってしまうえば世の中とは楽なものである。自分にとつてはあり得ないことでも、自分にとつて信じられないことでも、「人それぞれだから」と割り切ることができれば何も感じない。だが、多くの人は無意識のうちにそれをやっているものである。例えば、飲食店に入った時に近くの席にいた別の客が信じられないような食べ方をしているとする。最初はそれを見て驚愕し、同席者などに一つの話題として口にする程度だろう。だが、それも最初だけであり、いつまでもそれを見てはいない。「変わった人もいるものだ」と無意識に割り切っているのだ。

だが、彼らに関してはそのような無意識も働かなかった。その異常を超えた異常な食べ方を。

「ねえねえ、時雨。本当に一緒にいいN.O.？」

「お前を放つておいて面倒なことになるよりマシだからな。それより日和、オムレツにイチゴジャムかけない」

「ふーん、ならいいけどS.A.でも、せっかくファミレスに来たんだから時雨も色々食べたらいいのN.I.」

「そこまで腹は減ってない。コーヒーで十分だ。それより日和、サラダにリンゴジュース混ぜない」

一見すると普通の会話のようだが、日和の手元と時雨の最後の言葉を聞くと普通の会話などという言葉は一気に通らなくなる。普通に会話しながら、日和は明らかに普通では考えられない食べ合わせをしていた。その一つひとつに時雨は注意するが、聞く気は無いらしい。そして、その異常な食べ合わせは周囲の客も一斉に驚愕していた。

「なんだよ、アレ……。スゲエ……」

「美味しい……。ワケないよね。大丈夫なの？ あの人……」

「なんか、食欲無くなってきた……」

ひそひそと日和たちには聞こえないように話す他の客たち。その食べ合わせにドン

引きしたり、それを堂々とする姿に感心したり、顔を青くして食欲を無くしたりなどその反応は様々である。

しかし、日和はそんなことを気にすることも無く、その後も彼女オリジナルの食べ合わせをして食事を楽しんでいた。

「ちよつと辛いのも食べたいKANNA。カレーちようだい」

「日和、カレーにアイスクリーム入れない」

「辛いのが食べたら甘いものだよNEE！ ケーキ食べよ！」

「日和、ショートケーキにソースかけない」

「うーん……しよっぱいのも食べたいKAMO」

「日和、ショートケーキのイチゴに塩かけない」

「ちよつと、時雨！ コーヒー全然飲んでないJANN！ 飲まないならもうから！」

「日和、コーヒーにコーラ入れない」

「ふう……ご馳走様！」

「よし、それじゃあ行くぞ」

「ハイ！」

それにしても、日和の食べ合わせや味覚も大したものだが、それを目の前にしてもまったく動じない時雨も大したものである。

これは余談だが、日和と時雨がいる時間帯は一部のメニューがまったく注文されなかったという。理由を尋ねたところ、「あの食べ方を見た後に同じ物は食べられない」とのこと。

「お待ちせしませし<sup>た</sup>TAー！」

「遅くなりました」

「そんなに待ってないし、想定内だから気にすることはないよ」

「どうやら有意義な時を過ごせたようだな」

その後、しばらくして『捜シ者』と虹次、日和と時雨は合流した。一応、それぞれが自由に過ごしたので、度合いは違えど満足感はあるようだった。これ以上いる理由もなため、帰る雰囲気になっていた時……日和が周囲を見渡してあることに気付いた。

「……アレ？ 雪比奈<sup>は</sup>HA？」

「確かに姿が見えないな」

最初は確かにいたはずの雪比奈の姿がどこにも無かった。探そうとしたが、ここは都



内の大型ショッピングモール。無数に存在する人の中で目的の人物を一人探すことの難易度はとても高い。それに、雪比奈は元から何を考えているかわからない。どこに行ったか見当のつけようがない……と、日和と時雨は考えていた。しかし、『捜シ者』と虹次は違った。

「じゃあ、行こうか」

「そうだな」

「E!?! 雪比奈は置いてっちゃうNO!?!」

雪比奈がいらないのに移動を始めた『捜シ者』と虹次を見て、日和は驚きながらもその後が続いた。時雨も続いていくと、『捜シ者』はいつもの微笑みを浮かべながら口を開いた。

「心配ない。雪比奈は……そこにいるから」

そうやって『捜シ者』が指差した先には……数多くの家電が並べられていた。そして、その店先に並んだ目玉商品の中のあるスペースの前に彼はいた。

「……………」

「ゆ、雪比奈!」

そこには確かに雪比奈がいた。彼は日和の声を聞いたことで『捜シ者』たちの存在に気づき、そのまま合流した。

「……もしかして、『捜シ者』は事前に雪比奈がどこにいるか聞いていたのですか？」

「いや、どこにいるかは聞いていない。ただ、どこにいるかは大体わかっていた」

「はあ……？」

「フツ、雪比奈のことを考えればすぐわかることよ」

「雪比奈のことを？ ん〜」

『捜シ者』と虹次の言葉に頭を悩ませる時雨と日和。すると、虹次は静かに笑いながら今まで雪比奈がいた場所を指差した。

「答えはアレだ」

そう言つて虹次が指差したのは……店先に並べられた加湿器だった。少し時期外れだからか幾分か安くなつており、何台も並べられている。そして、虹次はそのまま答えを口にした。

「雪比奈は湿度が高い場所を好む。だから奴はこういう場所に来ると加湿器の前から離れない」

「人混みはうざつたい」

「……なるほど」

この日、時雨と日よりは少しだけ雪比奈のことを理解することができた。また、帰りの雪比奈の顔はよく見るといつもより潤つており、その表情も生き生きしていたとい

う。

おまけ 日和と時雨の3分クッキング（台詞のみ）

「ハイ！ 日和CHA<sup>チャ</sup>AN<sup>ン</sup>の3分クッキング始まるYO<sup>よ</sup>！」

「またくだらない遊びを……」

「今日のメニューは肉じゃがだYO<sup>よ</sup>！ まずは、材料を切りながら味付けしちやい  
まーすー！」

「日和、野菜にハチミツかけない。そして滅茶苦茶に切るな」

「次はお肉だYO<sup>よ</sup>！」

「日和、肉にオレンジジュースかけない」

「その後は煮込んだりとか色々して……完成したら最後のひと手間をしちやO<sup>お</sup>ー  
！」

「日和、肉じゃがにカフエオレかけない」

「ハイ！ 日和CH<sup>チャ</sup>AN<sup>ン</sup>特製の肉じゃが完成！

じゃあ、時雨！

召し上がれ！」

「食べない」

## code : extra 14 夢を追う者たち

「……じゃあ、お前ら。準備はいいな？」

静かなトーンで放たれた言葉聞き、周囲の者たちは頷くことで了解の意図を示す。中には頷くことすらしない者もいるが、文句が出てこないためそれも了解の合図だと言葉を放った本人は受け取った。

「わかった。それじゃあ、お前ら……」

全員から了解の意図を得たことを確認し、声の主は続けて言葉を放つ。そして、その手に持った物を高々と振り上げて……

「第十回！ 『リア充大神に学ぶ彼女ゲット講座』を始めるぞー!!」

目の前の机に勢いよく叩きつけて堂々と声の主……輝望高校1—B所属の前田は堂々と宣言した。

「イエーイ！ さすがMCマエシユン！ その調子で頼むぜ！」

「てゆーか、第十回って。これが初めてじゃん」

「多分、本人は気にしてない……っス」

「まあ、マエシユンらしいと言えればいいですね」

前田マエシユンの宣言を受けて、彼の周囲にいた武田、沖田、上杉、島津がそれぞれの反応で盛り上がりを見せる。ちなみに、前田が机に叩きつけたのは丸めた雑誌だったのでそれなりの音がしただけで机に損傷はなかった。だが、そのそれなりの音から始まった盛り上がりは凄まじいものだった。

まさに今どきの高校生が見せるノリノリの集まりの様子。だが、そんな中に彼らと同じ高校生でありながら場違いな雰囲気醸し出す者たちがいた。

「ふふふ……盛り上がってますねえ」

「まあ、元から賑やかなクラスですからね」

「ホーラ、期待されてるぜ？ リア充の大神君？」

「……………」

前田たちの盛り上がりとは別に、静かに微笑みを浮かべる平家。

おしぼりで丁寧に手を拭きながら平家の言葉に続く優。

ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべながら隣の者と肩を組む刻。

刻に肩を組まれながら、呆れと困惑が混ざったような微妙な表情を浮かべる大神。

仮初の高校生活を送る彼ら『コード：ブレイカー』たちは今、平凡な高校生たちの必死な集まりになぜか参加していた。

彼らが今いるのはカラオケボックス。九人という大人数だが、かなり広めの部屋だったため窮屈ということにはなかった。また、カラオケボックスという空間は部屋にいない人間の邪魔が入らない密室であり、防音性能も上々のため周囲を気にせずに騒ぐことができる貴重な場所。前田たちがどれだけ盛り上がるうと他の客に迷惑がかかることもないというわけだ。

さて、それはいいとして、大神たちのことを知る者にしてみればこの状況は理解しがたいものだろう。なぜ彼らは集まっているのか、前田たちのクラスメイトである大神はまだしもなぜ先輩である平家と優がいるのか、なぜ他校の人間である刻までいるのか、大神は修業をしなくていいのか……疑問は尽きない。

そもそも、事の発端は放課後になつた瞬間から始まつた。

「大神、また今日もすぐに帰るのか？」

「いえ、今日はゆっくり帰ろうと思います。根を詰めすぎるとかえつて効率が悪いので今日は修業も休みだと会長から言われましたし」

「おお！ そうなのか！」

一日の授業が終わってそれぞれが帰り支度を始める中、桜と大神は穏やかな雰囲気で放課後の予定について話していた。

普段は学校が終わればすぐに『渋谷荘』に帰って会長との修行に励む大神だったが、大



神たちの体調を気遣ったのか珍しく今日は無条件で修業が休みだった。まあ、何事もオンとオフがあつてこそ上手くいくものである。オンがとてつもなくハードなため、一日くらい完全にオフの日があつても不思議ではない。

その貴重なオフの日をどのようにご過ごすか……桜がそう切り出そうとしたまさにその時、見知つた男子が固まつて現れた。

「お〜い、大神！ 今日こそオレたちに付き合つてもらおうぜ！」

「あ、桜小路さん。もしかして話に割つて入つちやつたかな？ ごめんね」

「いや、構わないのだが……もしかして大神に用事か？」

「……っス」

ようやく授業が終わつたからか、随分とテンションが高い武田。続いて出てきた沖田は申し訳なさそうに桜に対して頭を下げるが、当の桜はまったく気にしていなかった。むしろ何事かと首を傾げており、そのまま疑問を口にしたところ、上杉が頷きながら必要最低限の言葉で答えた。

「え？ あ、あの……オレ、今日は——」

「おいおい！ 用事があるとは言わせねーぞ！ 今、桜小路さんと『今日はゆっくり帰る』って話してたの聞こえたぜ！」

「マエシユン、それを聞いた瞬間に動き出しましたからね。おかげでその後の話の内

容はまったく聞こえませんでした」

突然のことに理解が追い付かない大神はかわそうとしたが、前田が力強く肩を組んだ状態で先ほどの会話の内容で逃げ場をなくす。一瞬、修業について勘付かれたかと身構えたが、その後の島津の言葉でその心配はなくなつた。

「いや、それは確かに言いましたけど……色々と帰り道にやることか——」

「ねえねえ、桜小路さん。悪いんだけど、今日はちよつと大神君のこと借りてもいいかな？」

「うむ、構わんで」

「ちよ！　桜小路さん!?!」

自分の発言を指摘されて逃げ場が無くなつてもなお逃げようとする大神。そんな大神をよそに、沖田が一緒に帰るであろう桜に対して大神を借りる許可をもらおうとしていた。すると、意外にも桜はそれを軽々と了承した。逃げ道を考えていた大神だったが、桜の発言を聞いて一気に驚愕の表情を浮かべた。

すると、桜はジトリと目を細めて大神の方を向くと、釘を刺すように言葉を続けた。

「大神、この機会にクラスメイトとしつかり親睦を深めてくるのだ。私のことなら心配するな。今日はあおばたちと帰るからな。皆、大神のことは頼んだぞ」

「よっしやー！　桜小路さんからオツケーもらつたぜ！　つつーことだ、大神！　今

日は珍しくオレたち全員も予定無しなんだ！ とことんまで付き合ってもらおうぜ！」

「ちよ、ちよっと！ まだオレはいいなんて一言も……！」

「はーい、連行連行〜」

大神本人の意見はどこへやら、桜の許可一つでトントン拍子で話が進んでいった。男子たちに引きずられ、荷物を持ったままの状態で大神は連れていかれた。そんな大神を見て、桜はただ一言。

「うむ、これも青春の一ページなのだ」

「ところでマエシユン、今日はどこに集まんの？いつものファミレス？」

「バーカ！今日は全員がオフなんだ！バッチリ騒げる場所じゃねーとつまんねーだろ!?!」

「つーわけで今日はカラオケだ！団体で安くなるサービス券もバッチリ持つてるぜ！」

「だから、少しはオレの話を……!」

廊下に出ても大神を引きずったまま話を続ける前田たち。大神が何を言っても聞かないふりをし、武田に関しては用意していたサービス券をひらひらと揺らしている。先ほども言っていたが、今日は彼ら全員が完全にオフ。それぞれバイトや部活などがあるため、意図せずして全員の予定が合うというのはちよつとした奇跡である。

すると、その奇跡が引き寄せたのか……珍しい人物たちと鉢合わせした。

「おやおや」

「……何やってんだ、お前ら」

「あー！ 平家先輩に夜原先輩！ こんちは!」

ちやうど帰るところだったのか、平家と優という上級生コンビと鉢合わせとなつた。平家は面白がつて笑みを浮かべているが、優は呆れたような表情を浮かべていた。知つた顔とはいえ急に上級生と鉢合わせたら慌ててしまいそうだが、武田は何食わぬ顔で二人に対してなぜか敬礼した。

「いやー、今日は珍しく全員オフなんですよ! だから大神連れて遊びに行くところす!」

「ああ、なるほどな……。だが、見たところ大神本人は納得していないみたいだが」

「みたいじゃなくてしてないんですよ……!」

武田はそのまま二人に対して状況を説明したところ、優はとりあえず納得した様子で大神を見た。すると、大神はすでに疲れた様子でぐったりとしていた。いくら常日頃、会長から修業を受けているとはいえ今の彼は一般的な高校生を演じている。力任せに振りほどくなどという目立つことは避ける必要がある。つまり、完全に逃げ場はない。それを実感して諦めたのだろう。そんな大神を見る優の視線には、かすかだが哀れみの感情が込められているようだった。

「あー！」

すると、そんな空気を振り払うような大声が突然響いた。見ると、先ほど武田が持っていたサービス券を島津が見ていた。いつの間に渡されたのかはわからないが、島津はある一点を見てその肩をわなわなと震えさせていた。

「島津、急にどうしたんだよ。デケー声出して」

「あの、このサービス券……八人以上じゃないと使えないって書いてあります……」「ハア!?!」

突然の大声に驚いた前田が声をかけると、島津はサービス券の裏面を指差しながらもさかの条件を口にした。見落としていたのか、武田が慌てて確認すると……そこには「ご利用の際の注意」として確かに記載されていた。「このサービス券は八名以上でのご利用でご利用可能」……と。

「うーわ！ 完全に見落としてた！ ヤベー！」

「何やってんだ、バカ野郎！ えーっと、一、二、三……大神入れても六人じゃねーか！」

まさかの事態に慌てだす大神以外の男子たち。完全に置いていかれた大神、優、平家の三人だったが、大神にとっては好都合だった。これで諦めてもらえればいい……そう思っていた。

しかし、世の中はそう簡単にいかないようで、彼らの中の一人が静かに突破口を指し示してしまった。

「……………」

「……………んあ？ どうしたんだよ、デカ杉」

「……………っス」

今まで黙っていた上杉デカ杉が前田の肩をつつき、何かを伝えようとする。それに気付いた前田は彼を愛称で呼ぶと、上杉は静かに目の前を指差した。その先にいたのは……

「……………ん？」

「おや」

そこにいるのは二人の見知った顔の先輩。そして、彼らが求めている人数も……また二人。

「……夜原先輩！ 平家先輩！ 一生のお願い、聞いてください！」

次の瞬間、上杉の言いたいことを理解した前田は目にも止まらぬ速さで頭を下げた。

そして、今に至るといっわけである。ちなみに、なぜ刻がいるのかというところ……

「せっかく高校生組の『コード：ブレイカー』が揃ったのです。刻君も呼んでしまいましょう。それと桜小路さんのことはご心配なく。八王子 涙に護衛させますので」

と言つて平家が呼んだのだ。当の刻は平家から連絡が来たことに身構えていたが、一通りの説明を受けると「面白そう」と言つて参加を決めた。また、最近では表立った襲撃がないとはいえ、桜に何かがあるかはわからない。普段は大神が観察兼護衛をしているがこの状況のため、平家の判断で王子に任せようだ。まあ、というのも大神が桜の護衛を言い訳にして帰るのを防ぐためなのだ。

こうして、1―B男子五人と『コード：ブレイカー』四人……異色の計九人がカラオケボックスに集まったというわけだが、見事に大神たちは五人のテンションとは違う。

大神に至つては冷めていると言つてもいい。まあ、彼に關してはほぼ強制的に連れてこられたため仕方ないとも言えるが。

すると、そんな四人に対してそれぞれ飲み物が置かれた。見ると、沖田と島津がどこか申し訳なさそうな顔を浮かべていた。

「ごめんね、大神君。ほとんど力づくで連れてきちゃつて……。けど、悪気はないんだ。皆、大神君と少しでも仲良くなりたいたいと思つてるんだよ」

「そう。ですから、できれば最後までお付き合ってください。ただ、平家先輩と夜原先輩は完全に巻き込んでしまいましたね……。それに刻君……。ですよ？ 他校なのに、来てもらつてすみません。三人の分は私たちが払つておきますので、もし帰りたくなつたら遠慮しないでください」

申し訳なさそうな顔で頭を下げる沖田と島津。おそらく、彼らと同じ思いを他の三人も持つていることだろう。大神が転入してきたばかりの頃、クラスメイトの名前を覚えないう大神のためにわざわざ名簿を作つたほどだ。冷めた目で見ればお節介であつたりお人好しの行動に見えるが、それだけ彼らが仲間思いというだけなのだ。

そして、結果的に巻き込んでしまった平家たちにもこうして頭を下げる。当然の礼儀とも思えるが、それがわかつているだけでも大したものだろう。

「いえいえ、気にしないでください。それに、提案を受けて参加を決めたのは他ならぬ



自分自身ですから。むしろ場違いな私たちの参加を許してもらえて嬉しいものです」

「平家さんの言う通りだ。自分で考えて参加したんだから、金だって自分で払うさ。まあ、後輩と親睦を深める数少ない機会だと思えば楽しいものだしな」

「そーそー。学校違うケド、同じ高校生なわけだシ。楽しまなきや損デシヨ。ネ、大神君？」

「オレは別に……」

二人から謝罪を受けても、特に気にする様子もなく思い思いの言葉をかける平家たち。大神はあまり乗り気ではないようだが、少なくとも参加することに関しては受け入れたように見えた。

「そう言っていただけだとありがたいです。じゃあ、せつかくの機会ですので僕たちも思いっきり楽しむとしましょう」

「そうだね。じゃあ、大神君。楽しんでね」

四人からの言葉を受けて、安堵の表情を見せる島津と沖田。いったん大神たちから離れた彼らは憂いが無くなったからか、少しテンションが高くなっていくように感じた。

すると、今まで談笑していた前田たちはそれぞれ席に座り始め、マイクを持った前田のみが立つ形となった。そして、彼は最初のテンションを維持したままマイクを通して話し始めた。

「よっし！ それじゃあ僭越ながらMCは前田ことこのオレ、マエシユンが務めさせてもらうぜー！」

「おいおい！ それを言うならマエシユンこと前田だろーが！」

「細かいことは気にすんな！ それじゃあ、さつそく大神！ お前には洗いざらい話してもらおうぜー！」

「…………え？」

一通りの挨拶を済ませると、前田は颯爽とした動きで大神にマイクを渡した。突然のことに大神は理解が追い付かず、思わず首を傾げた。そして、彼はその疑問をそのまま口にした。

「あの…………話すって何を？」

「バーカ、最初に言っただろ!? これは『リア充大神に学ぶ彼女ゲット講座』なんだぜ！ ……まあ、早い話は、だ。どうやって桜小路さんと付き合ったか教えろや、コラア！」

疑問に対する前田の必死な返答に、大神の思考は思わずストップした。はつきり言って、それを大神に聞くのは見当違いというものである。なぜなら、大神と桜が付き合っているという事実はなく、あくまでそう見えてしまうだけだ。一緒にいる理由も先ほど言った通り、観察兼護衛のためだ。言ってしまったえば、大神に聞いたところで前田が望む

ような答えは返ってこない。

「いや、ですからオレと桜小路さんはそういうのじゃ——」

「そんなん決まつてんでシヨク。こいつが桜チャンを暗がりにつれ込んであんなコトやこんなコトをして……そのテクでメロメロにさせたんだヨ！」

「な、なんだとおおおお!?!」

「刻、テメエ……!」

なんとか誤解を解こうとする大神だったが、刻の嘘で固められた発言によつてそれは無理な状況となつた。そんな最悪の状況を作り出した刻に対して大神は怒りを露わにするが、当の刻はゲラゲラと笑つていて悪びれる様子は一切無かつた。

「なるほど……。やはり、そういうたワイルド肉食系がいんですね……」

「ぼ、僕にはちよつと無理かな……」

「ちくしよー! 大人しい顔してやることやつてることかよー!」

そんな刻の発言を真に受けてシヨックを隠しきれない1—B男子たち。だが、少なくともそれをそのまま実践すれば間違いなく最悪の結果で終わるだろう。というより犯罪である。

「つーかさ、皆は彼女作んのに何してるか話そーぜ。んで、テクがご自慢のエロ神君に良いか悪いかジャッジしてもらつてサ」

「お！ それいいな！」

「テメエはいい加減にしろよ……！」

すると、またも突拍子のないことを刻は言い始めた。その提案に周囲は一斉に賛同し始めたが、大神本人は今にも刻に対する怒りが爆発しそうだった。

その後、彼らは話す順番を決めるために大神を抜いた全員でじゃんけんをし、それが彼女を作るために努力していることを話すことになった。

「じゃあ、まず一番手のオレが行かせてもらおうぜ！」

「いけー！ タツキーー！」

武田タツキが勢いよく手を挙げると、周囲の者たちは拍手などをして盛り上げていく。その盛り上がりを受けてか、武田は大袈裟とも言えるほど大きな動きをしながら自らの努力を打ち明けた。

「オレがしてるのはお前らが知つての通りバンド！ けど、全然モテねーんだよ！」

バンドやっつてる奴はモテるって話は都市伝説だからな！ お前らも気を付けろ、バカヤロー！」

「あれ？ でもタツキー、バレンタインとか結構チョコもらってなかったっけ？」

「全部ご丁寧に『義理』って書かれてたよ！ 思い出させんな、ちくしょー！」

大きくエアギターをしながら涙ながらに告白する武田の姿からは、とめどない虚しさが溢れてくるようだった。しかし、そんな武田に追い打ちをかけるような沖田の言葉で彼は完全にダウンしてしまった。そのため、早くも次の者に順番が回っていった。

「よっし！ 次は……沖田！ お前だ！」

「う、うーん……」

続いて話すのは武田をダウンさせた張本人である沖田。しかし、順番が回ってきたものの何を話すか悩んでいるのか、腕を組んで眉間にしわを寄せていた。

「僕、特に努力していることはないんだよ……。剣道部を頑張ったりとか、明るくするようになっている……とか？」

「沖田はアレだろ！ 上手いこと女子の先輩とかをたぶらかす方法を常に考えてんだろ！ バレンタインだって先輩からのばっかだったしな！」

「ちよつと！ 人聞きの悪いこと言わないでよ！」

言われもない前田からの指摘に沖田は顔を真っ赤にして反論した。おそらく、彼が年

上に好かれるのは努力ではなく天性のものなのだろう。なにせ彼は高校生にしては幼く女々しい顔立ちをしている。そこに真面目な性格が合わさることで、女性は母性に似たものを感じてしまうのだろう。

「そ、そういうマエシユンはどうなのさ！ あおばちゃんに好かれるような努力してるの!？」

「ハア!? なんでそこであおばが出てくるんだよ！ アイツは関係ねーだろ！ あんな推定98cmの小悪魔女に!」

「98!? 高校生でそれは反則タロ!」

「なんでお前まで反応してるんだよ……!」

「う、うるせー!」

すると、沖田は負けじと前田に対して幼馴染であるあおばの名前を出して反論した。その効果は絶大だったようで、前田は顔を真っ赤にして慌て出した。その中で出てきた彼女の一際大きい部位の話に思わず反応した刻だったが、完全に呆れている優からの言葉ですぐに引っ込んだ。

「大体オレはな! あおばは関係なしにバスケットを頑張ってたんだよ! スポーツできる奴はモテるってのが昔からの定石だからな!」

「それだったらマエシユンよりデカ杉じゃね? だってマエシユン補欠だけデカ杉

はレギュラーなんだし」

「別にモテるためじゃないっす。バスケットは好きだからやってるだけっす」

「勝ち誇りやがって、コノヤロー！ 一年レギュラーでその身長とか紫〇か、って話だろ！」

「え？ オレ？」

「え？」

なんとか話題を変えようと、バスケットを頑張っていることを胸を張って宣言する前田。しかし、今までダウンしていた武田が容赦なく上杉を比較対象にしてくる。さらに、その上杉から純粹な言葉を聞いてしまったため前田のダメージは計り知れない。その反論も支離滅裂になっていた。なぜ刻が反応したのか……はこの際、置いておくとしよう。

「ふふふ……マエシユン、スポーツマンがモテるといふその考えはもう古いですよ。情報化の時代、モテるのは頭がキレル男です。だから私は常に勉強を——」

「けど島津はムツツリだからなー」

「そうそう。パソコンの中は好きなアイドルのセクシー画像だらけだし」

「ちよつと！ なにもそれを言わなくてもいいでしょう！」

もはや順番など関係なく暴露大会のようになってきた一同。その証拠に島津は勉強

を努力していることよりもあまり明かさたくない秘密をさらつと暴露されてしまった。これでは何を言つても台無しというものである。

「そ、それよりも次の人に聞きましよう！ えーつと……と、刻君はどうなんですか!?! 見たところ結構モテそうですが!」

「んあ? あゝ、オレはな〜」

これ以上、被害に遭うのを避けるため、島津は次の人物への話題転換を促した。そして、たまたま視界に入った時の指名したが、あの刻は飲み物を飲みながら完全にだらけていた。

しかし、島津の「結構モテそう」という言葉に気を良くしたのか、刻はキリツと顔を整えてから堂々と話し始めた。

「オレはもちろん超モテるぜ? 特に努力つつー努力はしてねーケド……言っちゃえば彼女を作らないことが努力って感じだな。もしオレに彼女できたら色んな女の子を悲しませちゃうからサ」

「ス、スゲエ……!」

「なんか別格って感じ……」

指を鳴らしてポーズを決めたまま話を続ける刻の姿からは、溢れるほどの自身が感じられた。事実、彼はとてもモテるのだろう。彼自身がプレイボーイであるということも



あるが、顔も整っているし通っている学校も超エリート校。俗に言う優良物件というやつなのだろう。

「言い方を変えればただの女たらしってことだな」

「そうですね」

「オイ、コラ！ せっかくの美談なのに歪んだ解釈すんな！」

しかし、優と大神のように偏った解釈をすれば酷いものだ。言い方を変えればいくらでも変わってしまうため言葉というものは恐ろしいものである。

「じゃあ、平家先輩はどんな感じっスか？ やっぱそのミステリアスな感じを保つか？」

「おや、私ですか？ そうですすねえ……」

なにやら睨み合っている刻たちを放っておき、武田が話題を変えようと平家に話しかける。いつの間にか出された飲み物ではなく愛用のティーカップで紅茶を飲んでいたが、この際気にしても仕方ない。平家はティーカップをソーサーの上に置き、顎に手を当ててしばらく考えると、ニヤリと口角を上げて口を開いた。

「努力と言うほどではないですが、いつでも意中の女性を縛れるように束縛の技術を上らせていますね。腕前が気になるのですたら、今ここで披露しても……」

「い、いえ！ 大丈夫っス！」

「オイ、変態！ お前の危ない趣味を一般人に見せつけてんじゃねーヨ！」

「……悪い子ですね、刻君。ちよつと外に出ましようか」

「ハア!? お、おい！ ヤメロつて！ お前ら！ 誰でもいいからコイツ止め——

ギヤアアアアアア！」

（やつぱ平家先輩怖え……！）

妖しい笑みを浮かべながら、どこから出したのかわからない荒縄を手に武田に迫る平家。武田は顔を真っ青にしながら遠慮すると、刻が平家を叱り始めた。すると、やはり彼でも変態と呼ばれるのは不名誉なようで、平家はその目を細めて刻を射抜くと、そのまま刻の襟を掴んでカラオケボックスから出ていつてしまった。刻の助けを求めると、そのは聞き入れられず、最終的には防音性能があるはずの壁越しでも聞こえるほどの悲痛な叫びが残った者たちの恐怖心を高めた。

「じゃ、じゃあ気を取り直して……夜原先輩お願いします！」

「……オレか」

数分後、戻ってきた平家と刻が戻ってきたところで話が続行した。刻は真っ白になつて口から魂のようなものが出ていたが、何があつたか聞くような勇者はいなかつた。だが、話が続行したといつても残つたのは優だけだつたため。実質、もう終わりと言つていい。優が何を言えればいいのか考えていると、他の者たちはそれぞれの意見を述べていった。

「やっぱ夜原先輩はウチの女子の反応見てもポイント高いからなあ……」

「大神君の歓迎会と一緒に先輩のおかえり会をやつた時はすごかつたつス」

「オレたちからはよく見えなかつたけど、なんか『可愛い』つてめつちや言つてたな」

「それとアレじゃない？ やっぱり日頃から人に優しくしてるところとか」

「あとはクールなところですかね。対価を求めていないように見えていいんでしょ  
か？」

今までのことや聞いた話から色々と考えていく前田たち。大神の歓迎会にかこつけて巻き込んだこともあつたため、彼らのクラスは他のクラスと比べて優との関わりは少しだけ濃い。そのため、無条件で人に優しくするクールな男という情報以外にも、女子が「可愛い」と評価する彼のとある習性も知っている者も多い。

「で、夜原先輩。実際のところどうなんスか!! 何をやったら、そんなにモテてるんで

すか!？」

「……いや、何をやってると言われてもな」

考えれば考えるほど優のポイントが高くなっていくことで、彼の答えにますます期待が募る一同。身を乗り出して優に詰め寄る前田だったが、一方の優は困ったように頬をかいていた。

そして、彼はそのままポツリと呟いた。

「オレ、そもそも女が苦手だからモテる気は一切無いんだが……」

——ピキィ!

その瞬間、前田たちの中で必死に積み上げてきた何かが一斉に固まり、そのまま音を立てて崩れ去っていった。

「……世の中つて、残酷だよな」

「タツキー、もう言うな……。涙、これで拭けよ……」

「すまねえ……」

暗くなり始めた空を仰ぎながら、武田は涙を流しながらポツリと呟いた。そんな武田の肩に手を置きながらハンカチを渡す前田だったが、彼自身今にも泣き出しそうだった。

優の最後の一言をきっかけに、色々なものが崩れ去った彼らはそのまま解散した。店を出たところで大神たちとは別れたので、今は1―Bの男子たちだけだった。さらに言うなら、今は五人全員が傷心状態となっていた。

「ハア……。オレたち、何やつてもモテねえのにモテてる本人は『女が苦手』って……」

「私たち、今まで何をやってきたんでしょうね……」

「でも、ある意味ベタな展開っス」

「僕、自身無くなってきた……」

トボトボと歩いていく彼らの背中からはなんとも言えぬ哀れさが滲み出していた。ま

あ、青春真つ只中の彼らにしてみれば恋愛関係は大事だ。どれだけモテるかが一種のステータスにもなっているのだろう。そのステータスが高い人間から根本を否定するよな言葉が出たのだ。もはや妬みなどを通り越して諦めが出てしまっていた。

「……ええい！ おい、お前ら！ いつまでもウジウジすんな！ 考えてみる！ 夜原先輩が女が苦手だつてんならオレたちにもチャンスはある！ 敗れた恋に傷つく心を慰めるつていうチャンスがな！」

「そんな上手くいくでしょうか……」

「うるせえ！ プラスに考えりやいいんだよ！ よっし！ 気分晴らすためにゲーセン行こうぜ！ 今日は遊びまくるぜ！」

「調子の良い奴……。けど付き合うぜ、タツキー！ せっかくだ！ 勝負しようぜ！」  
「あ。じゃあ、マエシユンが勝負に負けたらあおぼちゃんに告白するつていうことかどうか？」

「ハア!? 沖田テメエ！」

「……っス」

武田の一言でいつもの調子を取り戻していったA—B男子たち。この日、彼らは色々と傷つく結果となったが、最終的には男同士の友情をより深めることができたという。月が光り始める中、彼らの笑い声はどこまでも響いていった。

## code:extra 15 うら若き乙女の放課後

## ライフ

一般的に青春というのは学生生活を指すことが多い。同年代の友人たちに囲まれて、教室という一つの空間で様々なことを学んでいく。そういつた勉強だけでなく、時期や季節に合わせた行事という非日常的なイベントを友に楽しめることも学生生活が青春と言われる理由だろう。

だが、学生生活で経験するイベントとはなにも行事のみではない。むしろ、イベントなど日常的に潜んでいると言える。例を挙げれば、十分程度の休み時間や放課後などがそれだ。限られた時間とはいえ、多くの友人たちと自由に過ごせるのだ。特に放課後などは学校という学び舎を離れて地域の様々な施設に赴くこともできるため、これを楽しみにしている学生も多いことだろう。

そして、そんな日常的なイベントを満喫しようと集まる学生たちがここにもいた。

「お待たせしました。フライドポテトとサラダ、枝豆でございます」

「ありがとうございますすな。……ふむ、やはり枝豆は美味しいな」

「もう、桜だったら。せっかくのファミレスなのに渋いもの頼んじゃって」

「いーんじやない？ 桜らしいし」

「それに、ファミレスの枝豆って意外に美味しいよ。当たり外れはあるみたいだけど」  
白を基調としたフリフリの制服を着たウエイトレスがなるべく音を立てないように、綺麗に食べ物が盛られた皿を置いていく。最低限の礼儀としてウエイトレスに向かって頭を下げた桜は、現代の女子高生にしては珍しく真っ先に枝豆に手を伸ばして食べ始めた。そんな様子を見て、同席しているあおば、ツボミ、紅葉の三人は現代の女子高生らしくポテトに軽くつまみながら微笑んでいた。

彼女たちがいるのは全国的にチェーン店がある大手ファミレス。お手軽な値段で結構なボリュームが食べられるということもあり、彼女たちのような学生にとってありが



たい場所の一つでもある。さらに言えば、こうして何人かで集まるには絶好の場所とも言える。現に、彼女たちがここに来た目的はまさにそれだ。

「それにしても、桜とファミレス来るなんて久し振りって感じる。最近、学校終わったらずぐに大神君と帰っちゃうもんね」

「それだけ上手くいってるってことでしょ？ いいことじゃん」

「だけど、今日は大丈夫なの？ 大神君と一緒にやなくて」

「うむ、大神は男子の皆と親睦を深めに行つたからな。それを邪魔するわけにはいかん」

そう、彼女たちがこうして集まるのは今となつては珍しいこと。というより、桜がこういった場にいることが珍しいのだ。あおばも言つた通り、最近の桜と大神は学校が終わつたならばさつきと一緒に帰つてしまう。そのため、放課後に桜と一緒に行動すること自体ができなくなつていた。だが、今日は当の大神が男子たちに誘拉致われて不在のため、こうして一緒に放課後をファミレスで過ごすことができたというわけだ。

「あく、なんかマエシユンが張り切つてたね。ゴメンね、迷惑かけちゃつて」

「迷惑などということは無いぞ、あおば。むしろ私は感謝しているくらいだ。大神はもつとクラスメイトと仲良くなるべきだからな」

幼馴染ということもあり、事の主犯である前田の行動について謝罪するあおばだった

が、桜は笑顔で感謝すらしていることを伝えた。

しかし世の中、ある者にとつての幸福は別のある者にとつての不幸とも言う。その証  
拠に、桜と違って感謝どころか迷惑している人物がそこにいた。

「なにが仲良くなるべきだ、つての……。おかげでこっちは急に駆り出されてるつ  
つーのに」

「しゃーないやん。『にやんまる』は守らなあかんし」

桜とおおばたちが座る席から少し離れた席……。そこにはサングラスをかけて頼杖を

つく王子と、向かい側の椅子の上で丸くなっている遊騎（ロスト）がいた。

彼女たちがいるのは簡単な理由だ。観察兼護衛の役割を担っている大神が傍におらず、刻、平家、優の三人もとある事情で動けないため、王子が桜の護衛役として動いたというわけだ。最近は何もないとはいえ、いつ『捜シ者』たちが動きだすかわからない。念には念を、というわけだ。まあ、遊騎に関しては完全に色々と予想外だった。

「つーか、遊騎。お前なんでロストしてんだよ」

「昨日、『あの壺』にリベンジしようとしたんや。そしたら、また異能吸われてもうた」  
「夜中にドタバタやってたと思っただらそういうことかよ……」

いかにも遊騎らしいロストの理由に、王子は呆れた様子でため息をついた。『あの壺』は対異能者用のガーディアンで、異能者に噛みついてしまえばそのまま異能を吸い出してロストさせることができる。以前、『渋谷荘』の地下室に関する一件でも『あの壺』に異能を吸われてロストした遊騎。それを根に持っていたのだろう。

「いつ闘いが起こるかもわからねーんだ。リベンジすんのは諦めろ」

「悔しーなー」

「とにかく今は桜小路の護衛が最優先だ。付いてきたからには、お前も周囲を警戒しとけよ」

「わかっとするし」

簡単に遊騎を説得すると、王子はサングラスを少しずらして桜の方を見た。王子と遊騎がいることに気付いている様子は無く、あおぼたちとの会話を楽しんでいる。その微笑ましい様子に口元を緩めながら、王子は遊騎と共に陰ながらの護衛を再開した。

「そーいえば、ごぼん。なんでサングラスなんてかけてんのや?」

「桜小路に気付かれないようにな。せつかくクラスメイトと楽しんでるんだ。邪魔するわけにもいかねーだろ?」

「はにゃー」

急な護衛に文句を言いながらもこうした気遣いまでする王子の性格に、遊騎は感心したように鳴き声を漏らした。

「……はあ」

「どうしたの？ 紅葉」

「ん……。ちよつと最近、皆が羨ましくて」

「羨ましい？」

一方、桜たちはというと紅葉が唐突に漏らしたため息から新たな話題に移ろうとしていた。その紅葉から出た「羨ましい」という言葉に対し、桜はきよとんとした様子で首を傾げた。

「うん。だって桜ちゃんは可愛いし大神君だっているでしょ？ あおばちゃんはスタイルよくて男子とも仲良いし、ツボミちゃんはモデル体型でスマートだし……。私、ちんちくりんだから自信なくなっちゃって……」

「そんなことないよ、紅葉。男って紅葉みたいな小柄な子の方が割と好きなんだから。それに、男子と仲良くてもいい人には恵まれないし。スケベな奴ばつかで嫌になっちゃう」

「まー、あおばの胸は別格だからな。女の私から見ても……」

「ちよつと、ツボミ！ そんな舐め回すように見ないでよ！」

周りの友人たちと比べて女としての魅力が無いことをコンプレックスに感じているらしい紅葉の言葉。なんとか元気づけようとあおばはフォローに回るが、ツボミの茶々

が入ったことでフォローする流れも途絶えてしまった。

「つーか、スタイルとかでいったら桜が一番ベストなんじゃない？ バランスタイプってゆーか、どこもちょうどいい感じだし」

「む？」

しかし、ツボミもただ茶々を入れただけでなく彼女なりにフォローするつもりだったらしい。自然な流れで、少しずつ話題を暗い方向から逸らそうとしていた。まあ、白羽の矢が立った桜は急なことで首を傾げているが。

「そうなのよね。桜ってば肌もキレイだし、脚だって細いし……。これで何もしてないって言うんだから神様って残酷」

「一応、私も顔を洗う時に洗顔料を使うようにはしているが……。他には特にないな。あおばたちは何かやっているのか？」

「私は寝る前の体操は欠かさないかな。油断するとすぐにお肉ついちゃうからさ」

「私はどつちかという食事かな。なるべく野菜は摂るようにしてるよ」

「やつぱりファッション誌とか読んで勉強したり……。かなあ」

特に特別なことをせず今の状態をキープしている桜を羨ましがるあおばの言葉に對し、桜はきよとんとししながらもあおばたちが行っている隠れた努力について尋ねた。聞いてみると、やはり彼女たちも年頃の女性。普段は表に出ない努力を行っていること

がわかった。

そして、それは彼女たちの会話を意識して聞いていた彼女も同じだった。

（やっぱあの年頃の奴らは気にするよな……。そういうオレも特に何もしていないが……よく銭湯に通うのもそういう努力に入んのかな）

窓の外を見ながらそんなことを考える王子。考えてみれば、王子は『コード：ブレイカー』であるためバイトがあつたからには主に夜に行う。女性にとつて寝不足は最大の敵。そんな生活を続けてきたというのに今の状態を保っているのは見事なものである。だが、もし本人にそんなことを言った日には言った者の命が危なくなるので誰も言わないが。

王子が一人考えていると、友人たちの努力を聞いた桜は優しく微笑みながら紅葉のことをジツと見た。そして、思ったままの言葉をかけた。

「紅葉、私から見ても紅葉はとても可愛らしいと思うぞ。そうやって勉強しているのだからな。だから自信を持つのだ。さっきのように自分を低く見てしまつてはせっかくの魅力も台無しだぞ」

「桜ちゃん……。えへへ、ありがとう」

真つ直ぐな目で紅葉の目を見ながら話す桜の言葉は、下手な慰めの言葉よりも効果があつたようだ。紅葉はほのかに頬を赤く染めながらも微笑んだ。その様子を見て、あお

ばとツボミも優しく微笑んだ。

しかし、紅葉の悩みが解決したことでいつもの調子に戻ったのか、ツボミの微笑みはすぐに優しいものから小悪魔染みたものへと変わって紅葉に向けられた。

「つーか、紅葉……。急にそんなことを気にしちゃうってことは何かあるでしょ。男か？ 男関係なのか？」

「え、ええ!? そ、そんなことは……!」

「えー! 誰、誰!? 私たちも知ってる人!」

「も、もう! 話を聞いてよ〜!」

ツボミのからかうような言葉に慌てる紅葉の姿を見て、興味を持ったあおぼも身を乗り出して会話に入ってきた。二人に迫られたことで逃げ場をなくした紅葉は、パタパタと両手を振りながら初々しい反応を見せていた。

(コンプレックスの話の次は恋恋愛話バナか……。ホント、まさに今どきの女子高生って感じだな)

ベタな流れで変わっていく話題を耳にしながら、王子は微笑ましきからかフツと微笑んだ。それを見ていた遊騎は首を傾げたが、その理由をわざわざ聞こうとはしなかった。

「私は別にそんな人は……。あおぼちゃんとツボミちゃんはどうか? 誰か気にな



る人とか……いるの?」

二人に迫られた紅葉は顔を真っ赤にしながらも、あいまいな答えをすることでひとま  
ずかわした。そして、そのまま迫ってきた二人に対して同様の話題をぶつけた。

「私? うくん……私は特になー。周りにそこまでイイ男もいないし、他人の恋愛事  
情聞いている方がいいわ。まあ、あおばはアレか? やっぱデカ杉? それともまさかの  
前田とか?」

「やだ、ツボミつたら! あの二人はただの幼馴染だからそういう目で見れないって  
! 大体、デカ杉ならともかくマエシユンはないない! 惚れる要素が欠片もないも  
ん!

「うむ。三人の友情は恋愛感情よりも上ということだな、あおば。素晴らしいぞ」

しかし、いざ話題をぶつけられた二人の反応は慣れたもので、二人ともさりとかわ  
してしまった。というより、話題にするような人物がいらないのだろう。桜に関してはあ  
おばの話を聞いて、恋愛にはなく友情に対して感心してしまっていた。

そして、簡単にかわってしまったツボミはそのまま紅葉にカウンターを繰り出してき  
たのだった。

「ほらほら、私らの話聞いてもつままないことだしさ。早いとこ吐いちゃいなよ、紅  
葉。誰が気になってんの?」

「そうそう！ それに紅葉、バレンタインで本命がいるかもみたいな感じだったじゃん！」

「だ、だから私だつてまだそういう人は……」

再び二人に迫られてしまった紅葉。先ほどのようにかわそうとするが、どうにも方法が見つからない。顔を真っ赤にしてなんとか目を逸らすことしかできなかつた。

すると、そんな紅葉の態度に痺れを切らし……ツボミが衝撃的な一言を發した。

「つーか、よくよく考えてみればわかるか。アレでしょ？」

夜原先輩

「え、ええ!？」

「なぬ!？」

「ぶはっ!」

まさかの人物の名前がツボミの口から出た瞬間、ツボミは真つ赤だった顔をさらに赤くさせ、桜は予想していなかった言葉に目を見開き、運悪く聞いてしまった王子は思わず吹き出してしまっていた。

「どないしてん、(ツボミ)ばん」

「い、いや……!?!? ゴホン! な、なんでもない……!」

急な動揺を見せた王子に対し、遊騎はのんびりとした様子で声をかける。すると、王子はひとまず強めの咳払いをして落ち着かせ、そのまま桜たちの会話に意識を向けた。

一方、そんなことは知らない桜たちはというと、それぞれ思い思いの反応をしてなんとか話が續いていた。

「そ、そうなのか? 紅葉は夜原先輩のことが……」

「ちちち、違うよ! ツボミちゃん! なんでそこで夜原先輩の名前が出てくるの!」

桜は興味津々といった様子で紅葉に視線を向けるが、当の紅葉は顔を真つ赤にして両手と一緒に首を横に振っていた。そして、ほとんど逆ギレといった様子でツボミに向き

直るが、ツボミはあつけらんとした様子で優の名前を出した理由を述べ始めた。

「えー？　だつて、たまに廊下で見かけた時とか紅葉は急に大人しくなるし、私たちと話してる時に先輩の名前が出ただけで赤くなってるし」

「そっかー！　じゃあ、夜原先輩に渡したチョコが本命だつたんだ！　助けてもらつたお礼とか言つてごまかしてたわけだね！」

「そ、そんなこと……あわ、あわわわ……」

ペラペラと普段のふとした様子を理由としてツボミが話すと、あおばもそれに便乗し始めた。紅葉はどうすればいいかわからず、ただただ顔を赤くして慌てるだけだった。本人がそんな様子で止められないため、二人の話はますます大きくなっていく。

「あとは一、ホワイトデーでお返しが出来て来た時もめちやくちや顔が緩んでたし、前にたまたま撮つた先輩の写真を暇な時に見てはニヤニヤしたり……」

「ス、ストップ！　最後のは嘘！　私、夜原先輩の写真持つてないし、ニヤニヤもしてない！」

「ふーん。『最後のは』つてことはそれ以外のは認めるんだ」

「あ、う……！　ううう……」

あることないことを口にするツボミの行き過ぎた発言に紅葉が反論すると、ツボミはニヤニヤしながら見事に揚げ足を取つてみせた。完全に言い逃れできなくなった紅葉

はすでに茹蛸のようになってしまった顔を両手で覆い隠し、そのまま俯いてしまった。これはもう確実である。

桜たちは確信を得たところで一齐に目が輝き始めていた。やはりこういつた恋愛関係の話となるとテンションが上がるのだろう。こうして見ると、彼女たちはあくまで一般的な女子高生なのだと強く思う。

「け、けど……まだ好きとかじゃないの。ちよつと気になるっていうか、そういうので……」

「やつぱりアレ？ 前に言ってた夜原先輩に助けてもらったってやつがきつかけとか？」

「……う、うん」

もじもじと指先を指先でつつき合いながら正直な気持ちを白状し始めた紅葉。それを了承と受け取ってか、あおばはより突っ込んだ質問を口にする、少し言いつらそうにながらも紅葉は聞かれたことに対して正直にコクリと頷いた。

「そういうえば、バレンタインの時にあおばが言っていたな……。大体のことは聞いたのだが、実際どんな感じだったのだ？」

「えつとね……」

思い出したことでより興味が湧いたのか、紅葉が今の気持ちを抱いた経緯いきまつについて桜

は尋ねた。白状したことで気が楽になったのか、紅葉も少し落ち着いた様子で話し始めた。

「お、重い……」

運が悪かったというべきか、その日の紅葉は日直だった。先生が生徒に何か頼む時、ほとんどの場合は日直がその対象となる。今回もまさにそれで、職員室で渡された資料を別の教室に運ぶという仕事を任されていた。思えば、ただの資料だと高を括っていたのかもしれない。だが、いざ見てみるとその量は尋常ではなく、はつきり言つて一人で持つには辛い量だった。紅葉は女子の中でも特に小柄のため、先生も最初は「誰か手伝いを呼んでもいい」と言っていたが、紅葉はこう返答してしまった。

「頑張つて運んでみます！」

元々、何事にも一生懸命な生真面目な性格をしている紅葉は、自分ができないからといって他人に何かを頼むことを少し負い目に感じていた。どうしても無理なことは別

だが、この程度ならと考えたのだ。

しかし、現状はこれである。さらに……

「あつー！」

資料のせいで足元がよく見えていなかったせいもあり、紅葉は何かに躓いて転んでしまった。資料は見事なまでにばら撒かれてしまい、彼女の周りが一気に白に染まった。足をさすりながら後ろを見ると、ちょうど防火シャッターが設置されていた場所だったらしい。線を引くように出っ張りがあった。幸い足首を挫くなどはしなかったが、今はそれよりも重要なことが目の前にあった。

「た、大変……！」

視線を前に戻すと今まで束ねられていた資料はバラバラになって廊下に広がっていた。紅葉は恥ずかしさから顔を赤くしながらも必死に資料を集め始めた。しかし、そんな姿を見ても周りにいる生徒は冷たいものだった。クスクスと笑う声や「やつちやつた」などという言葉はあっても、彼女を手伝おうとする者は誰一人としていなかった。

「ツ……！」

そんな現状に心を痛めて目に涙を溜める紅葉だったが、泣いている暇など無い。少しでも早く資料を集めなければ迷惑がかかってしまう。彼女は助けを求めることなく、ただ黙々と資料を一枚一枚拾っていった。

すると、その手は唐突に差し出された。

「ほら」

「え……？」

声をかけられた方向を見ると、目の前には数十枚で束ねられた資料があった。そのさらに奥に視線を向けると、一人の男子生徒が下を向いてもう片方の手で資料を集めていた。その横顔を、紅葉はよく知っていた。

「や、夜原先輩!」

「ああ」

視線を合わせることなく、短い返事をするのは生徒会会計である夜原 優。生徒会役員というだけでも有名なものだが、彼女の場合は少し特殊な事情もあつて彼のことをよく知っていた。少し前に行われた大神の歓迎会である。その時、クラスメイトの提案で近くにいた優も巻き込んだため、学年は違うが少しだけ親しくなっていたのである。

だが、そんな人物が急に目の前に現れたため、紅葉はただ慌ててしまっていた。

「ななな、なんでここに？」

「別に、歩いていただけだ。……ほら、持ってる」

「わ、わわ!」

慌てる紅葉に対して、優は平然とした様子で資料を拾いながら返答していった。そし



て、新しく拾った資料を差しだした分の資料と合わせると、少し強引に紅葉に押しつけた。紅葉がそれを受け取ると、優は再び資料を拾い始めた。呆然とその姿を見ていた紅葉だったが、すぐにハツとして自分も資料を拾い始めた。そして数分後、思ったよりも早く資料を拾い終わることができた。

「すみません！　ありがとうございます！」

「問題はない。しかし結構な量だな。大丈夫か？」

「は、はい！　大丈夫です！　次は転ばないように気を付けますので！」

「……どこに運べばいい？　手伝うぞ」

「え!?!」

拾い終わった資料の一部を大事そうに抱えながら優に頭を下げる紅葉。優は紅葉の倍近い量の資料を持ちながら答えると、このまま渡していいのか悩んでいる様子で大丈夫かどうか尋ねた。紅葉は大丈夫と答えたが、優は少し考えてから手伝いを名乗り出た。意外なその言葉に、紅葉は再び慌て始めた。

「……科学の授業の資料だな。ということは化学室か。よし、行くぞ」

「え!?!　あ、その……は、はい！」

持っていた資料の内容を見て運び先まで言い当てた優はそのまま歩き始めた。紅葉は相変わらず慌てた様子だったが、すぐにその後を追っていった。

「あ、あの……夜原先輩。どうして手伝ってくれたんですか？」

「手伝ったらダメだったか？」

「そんなことはないんですけど、ちよつと不思議で……」

二人で資料を運び始めて少し経った頃、紅葉は自分の中にあつた疑問を優にぶつけた。少し親しいと言つても二人はほとんど他人のようなものだ。いくら困つてはいえ、他人を手伝うというのは中々できることではない。だから優の行動が不思議に見えて仕方なかつた。少なくとも、自分は声をかけるまではできないと感じていた。

すると優は前を向いたまま、さも当然のように答えた。

「困つた奴がいたら放つとけないだけだ。それに、他人と言つても同じ学校の人間なんだ。手を貸すのは当然だろ」

「夜原先輩……」

「それに、お前たち1—Bには色々としてもらったからな。申し訳なく思つてるんだつたら、これはその礼だと考えてくれ」

「……え!? 私のこと覚えてたんですか!？」

「昔から覚えるのは得意なんだ。……さて、着いたな」

困つた人がいたら手を貸す。当たり前のように中々できないことを平然とやってみせる優を見て、紅葉は静かに感心していた。さらに、優のその後の言葉で自分のことを

覚えていたことを知ると、彼の能力の高さにさらに感心してしまった。

そんな風に話していたからか、気付けば目的の化学室まで到着した。二人は化学室に入って資料を置くと、優はそのまますぐに戻ろうと歩きだした。その後ろ姿を見ながら、紅葉はもう一度頭を下げた。

「夜原先輩……その、ありがとうございました。次からは気を付けます……」

「……………」

純粋なお礼のつもりだったが、やはりどこかに迷惑をかけたという認識があったらしい。最後には申し訳なさそうに弱々しい言葉が出てしまった。しかし、撤回する必要は感じなかった。そうして頭を下げた後輩を背に、優はそのまま戻ろうと――

——ポンツ

「う……………」

「気を付けるんじゃないやなくて、次からは素直に誰かに頼め。お前は一人じゃないんだから。オレが言いたいのはそれだけだ。じゃあな、紅葉さん」

下げたままの自分の頭の上を感じるかすかな手の感触。その感触に思わず反応すると、その手の主はそのまま言葉をかけた。そして、最後に二、三度だけ軽めに叩くとその手は離れていき、手の主も静かに背を向けて離れていった。

その後ろ姿を見ながら、今まで手の感触があつた部分に自らの手を置く紅葉。その胸

の中には、今までは感じる事が無かった感情が生まれつつあるように感じた。

「——っっていう感じ、かな」

「天然タラシかよ、先輩」

「それを素でやっちゃうのがスゴイんじゃない」

「うむ。やはり夜原先輩は優しい方なのだな」

（アイツ、学校でもそんな勘違いさせるようなことやってんのかよ……）

紅葉から事の全容を聞くと、ツボミは優の行動に感心を通り越して呆れてしまい、あおばはそれをなだめ、桜は一人でうんうんと感心していた。ちなみに、王子に関しては優の行動に頭を悩ませていた。

「まあ、夜原先輩は誰にでもそんな感じだから人気だしね。他の先輩に聞いたら、家では甘えん坊だとか恥ずかしがり屋だとか可愛い部分もあるから余計に」

「む……？ あおば、それは誰が言っていたのだ？」

「先輩は夜原先輩のお姉さんから聞いたって言ってたよ。少し前に学校に来たんだって」

(ああ、優子優子さんの仕業だだ……)

あおばが口にした優の情報について疑問を抱いた桜だったが、その答えを聞くと桜は心の中で優を憐れんだ。また、同時に王子もそこについてだけは憐れんでいた。

「だけど、夜原先輩って彼女とかいないんでしょ？ ポイント高すぎて誰も行けないのかな？」

「いや、結構いるみたいだけど？ ただ全部断ってるらしいけど」

「そ、そうなの……？ うう……」

人気はある優だったが、特別な関係である女性は一人としていない。堅物なのか恥ずかしがっているのかなど議論を重ねるあおばたち。確かに優の弱点を考えると、女性と付き合うというのは想像できない。だが、彼女たちの中で唯一全てを知る桜は一人だけ悲しげな表情で考えていた。

(先輩が告白を受けない理由……。おそらく、自分が『存コード：ブレイカー在』だからと  
いうのもあるのだろうか……)

自分も一時的にとはいえ味わった『存在しない者』の苦痛と寂しさ。そして、彼ら『コード：ブレイカー』はその苦痛と寂しさの中に自ら身を置く者たち。大神のように自

ら余計な関係を断とうとする者もいれば、刻のようにかつての特別な者と他人にしかない者もいる。彼らはそんな悲しい存在なのだ。

しかし、今の自分には何も言えない。その真実を告げることはできないし、真実を隠しながら諦めさせるような言葉をかけることもできない。彼女にできることと言えば、友人の恋心が散った時にいつまでも傍にいてやることしかない。そんな現実を噛み締めながらも、桜は決心したようにその顔を上げた。

「よし！ 紅葉、食べるのだ！ 何をするにも食べて元気になるばいかんぞ！ すぐに注文だ！」

「ええ!? 私そんなに食べられないよ〜！」

「アハハ！ 桜らしい！」

「カロリーだけは気を付けろよ〜」

桜の急な提案に戸惑いながらも、心から笑い合う友人たち。そんな友人たちの輪の中にいながら、この平和な時が再び訪れるようにと桜は願っていた。

「……やつぱ優しいな、桜小路は」

「『にゃんまる』は『にゃんまる』やし。優しいのは当たり前やん」

「フツ、そうだな」

そして、そんな桜の優しさを感じ取った王子は静かにその場で微笑むと、遊騎も伸び

をしながらそれに答える。桜たちの楽しい笑い声を聞きながら、王子はこれから起るであろう闘いのせいで彼女たちの幸せを壊させまいと強く誓った。

くおまけく

王「おい、優」

優「ん？」

王「お前、もう人に優しくすんな」

優「は？ 急に何を言ってるんだよ……。熱でもあるのか？」

く額に手を当てて診断中く

優「……うん、特に熱は——」

王「お前それ学校で女相手に絶対やるなよ！ 絶対だからな！」

優「??？」

## 『捜シ者』篇 終

## code : 50 罨まみれの開幕戦

「私のパンドラの箱……もらいに来たよ」

「……貴様には絶対に渡さない」

休日の朝というにもかかわらず、そこには通りかかる人など一人もいなかった。そこで対峙する十一人の者たち以外の人間など存在しないかのように。

奪う者たちと守る者たち——

『渋谷荘』の地下に眠るパンドラの箱を巡り、両者は静かに対峙していた。

「そういえば、桜小路 桜はどうしたんだい？ 姿が見えないけれど」

「貴様には関係ない」

「……そうか」

奪う者は目の前に立ちふさがる守る者たちを一瞥して足りない存在を指摘する。こ  
うなる前に、大神たちは全員で協力して「キャンプに行く」という嘘をつき、会長と『あ  
の巻』を連れて桜を避難させた。事実を知った彼女がどれだけ怒るかわからないが、彼  
らは巻き込むことより怒りを受け入れることを選んだのだ。



「そんなことより、『捜シ者』サン？　なんでパンドラの箱ボックスが欲しいのサ。最強の異能者になって世界征服とか？　……ま、アンタは鍵キも持つてないから何を企んでいようと関係ねーケド」

大神の横に立った刻が『捜シ者』に、その目的であるパンドラの箱ボックスについて尋ねる。だが、ここでの目的は彼から返答をもらうことではない。一つの事実を明らかにすることが大切なのだ。『捜シ者』たちは鍵キを持つていない」という事実、つまり「扉が開けられない」という事実を。

「……ハア」

すると、『捜シ者』は急に面倒臭そうにため息をついた。そして、ひどく邪悪な意思の宿った眼を大神たちに向けた。

「やっぱり全員、殺さないダメか……。面倒くさいな」

『——ッ!!』

その眼に射抜かれ、その言葉を聞いた瞬間に『コード・ブレイカー』たちは構えた。何か動きがあればすぐに異能を発動できるよう、警戒心を最大にする。だが、それは『捜シ者』の傍にいる『Re—CODE』たちも同じだった。彼らもほぼ同時に構え、両者の間に重い緊張感が走った。

「……涙、どうしても邪魔するならあなたも殺さなくてはなくなる」

「それが今のオレたちだ、雪比奈」

「死が最も相応しい奴も一人いるがな」

「時雨……」

緊張感の中、それぞれ因縁がある者と言葉を交わしていく。かつての同志である雪比奈と王子に、過去に因縁のある時雨と遊騎。そして……

「……………」

「……………」

互いに無言で向かい合う刻と虹次。二人の間に言葉はなかったが、それでよかった。二人の因縁の中に言葉はいらない。真実という言葉は全てが終わった後でいい。

「……………そうはさせない」

他の者たちを守るように大神が一步前に出た。その眼は鋭く『捜シ者』を射抜いており、その眼に宿った強い覚悟を乗せて大神は宣言した。

「誰も殺させはしない。死ぬのは貴様だ、『捜シ者』」

「……………」

大神の覚悟が込められた眼と言葉を受けても静寂を貫く『捜シ者』。そのまま睨み合いを続けるかと思われたその時……事態は動いた。

「——もう！ ゴチャゴチャとうるさいんだYO！ 『捜シ者』はパンドラの箱が欲し

ボックス

いんだから……邪魔しないでよNE<sup>ね</sup>！」

——ドン！

「ぐ……！ 急に爆発かよ、あのシャボン玉女！」

我慢の限界に達したかのように日和が前に出た。そして、そのまま無数のシャボン玉を大神たちの周りに浮かせると、それらを一齐に爆発させた。爆風から身を守る大神たちだったが、至近距離ではなく少し離れての爆発だったため負傷はほとんど無かった。しかし……

「——しもた！ アイツら、おらへんで！」

「なに!？」

爆発で一瞬だけとはいえ『捜シ者』たちから目を離してしまった大神たち。その一瞬の間に『捜シ者』たちはその場から消えてしまった。急いで振り向くと、閉まっていたはずの『渋谷荘』の扉が開けられていた。どうやら完全にしてやられたらしい。

「追うぞー！」

「遊騎、『捜シ者』たちとはどれくらい離れている？」

「そこそこ離れとるわ。急がんと」

『捜シ者』を追って『渋谷荘』の地下を進む大神たちは、遊騎の『音』で『捜シ者』たちとの距離を確認しながら疾走していた。いくら鍵かぎを持っていないとはいえ、『捜シ者』がどんな手段を使ってくるかわからない以上、最優先すべきは扉のところまで行かせないこと。そして、その考えは大神たちに『渋谷荘』を託した会長も同じだった。

「そこそこだったら心配ねーダロ。出発前にクソネコが『渋谷荘』の対侵入者用トラップを発動させたんだ。それに引つかかればいくら『捜シ者』でも扉のそこn——わあああああ!!？」

「刻?！」

直接的に力になれない会長が発動させたという対侵入者用のトラップ。それを頼りにしようとした矢先に刻が大神たちの目の前から消えた。しかし、視線を下に向けてみるとまだかろうじて無事だった。見ると、刻がいた部分の床のパネルがしつかりと抜けている。刻はなんとか周囲の床にしがみついているが、これがトラップなのだろう。

「マ、マジでビビった……！　けど、これでトラップのすごさは証明され——って、ん？　なんだコレ」

涙目で全身を震えさせる刻が己を犠牲にしてトラップの有能さを証明した……かと思つた矢先、しがみつく刻の前に小さな『にやんまる』が近づいてきた。その手には「うこそ」と書かれたボードを持っており、何かと思つた次の瞬間……

——ドゴオオオオ!!

「ドワアアア!」

「と、刻! なんだよ、この光線は?!」

『にやんまる』の口が開いた瞬間、謎の光線が刻をフツ飛ばしてしまった。突然のことに理解が追いつかない王子が慌てるが、事態はそれを待つてくれなかった。

「これをくらうニヤン!」

「く……この——!」

今度は頭上から江戸時代の火消しのような恰好をしたミニ『にやんまる』が降つてきて、大神に対して謎の液体をかけ始めた。ふざけた攻撃に苛立ったのか、大神はすぐに左手の手袋に手をかけた。しかし、それを隣で見ていた優が一つの違和感を覚えた。

「——! ちよつと待て、この臭いは……! 大神! これはガソリン——!」

——ドガアン!

「大神イイイイ!!」

ミニ『にやんまる』がかけた液体がガソリンだと伝えようとした優だったが時すでに

遅く、大神は『青い炎』を発動せてしまい、ガソリンに発火して爆発していた。だが、これだけでは終わらず、事態はさらに悪化していった。

——バチン！

「暗くなりやがった……。ハッ、『影』の異能を使うオレがこんな暗闇でビビるわけが……」

——シユシユシユシユシユ！

「キヤアアアアア！ 後ろ！ 後ろからは止めてくれえええ!!」

暗くなった瞬間、王子の背後から無数の手裏剣が飛んできた。手裏剣という攻撃よりも、急に後ろから攻撃されたことによる驚きが強かった王子は必死でその場から逃げ出した。

「ごぼん！ つて、これ……。『かげまる』やし！」

王子の叫び声を聞いて助けようと向かう遊騎だったが、王子を攻撃したものが『にやんまる』シリーズの悪役である『かげまる』だと気付くと、目を輝かせて『かげまる』を追いかけ始めた。

「待てや、『かげまる』！ 『にやんまる』のためにもお前を捕まえて——つて、なんや!?!」

しかし、走り出した瞬間に遊騎は身体のバランスを崩した。見ると、彼の足元には先

ほど大神にかけられたガソリンが溜まっており、非常に滑りやすくなっていた。つまり遊騎は滑って転んだわけで、さらにその先には――

――ザクウウ！

『にやんまる』……オレ、『かげまる』捕まえられへんかったわ……』

床のパネルの一枚ほどのスペースに無数の太いトゲが置かれており、遊騎は転んだ勢いのまま突き刺さってしまった。はつきり言って、一番痛々しい。

「くそ、地上は滑るから危険か……。だったら跳んで移動すれば……！」

遊騎の犠牲のおかげで地上の危険さを実感した優は『脳』で身体能力を強化し、力強く床を蹴って跳んだ。そのまま移動をして事態を好転させようとした……が、その目の前に『にやんまる』の顔がデザインされた巨大な鉄球が迫ってきた。

「嘘、だろ……」

その後の優が迎えた展開は……誰もが想像する通りであった。

「まったく、暗闇の中で闇雲に動くからですよ。今、この目障りな闇を私の『光』で払って――」

「目標、発見だニヤン！」

「………What?」

闇雲に動いたことで痛い目に遭った優に呆れながら、平家は制服のボタンを少しずつら

していった。そうして溢れてきた『光』で視界を照らそうとした瞬間、無数に設置された矢を構える『にやんまる』に狙い撃ちされてしまった。暗闇の中で光るものは狙いやすい、というのがよくわかる展開であつた。

この時、彼らは実感した。今まさに自分たちが置かれている状況……これこそがトラップに引つかかっていると言うのだ、と。

「なんで『捜シ者』じゃなくてオレたちが引つかかつてんだヨ!!」

「異能に即したトラップが発動とは、さすが会長ですね」

「平家さん、確かにすごいんですけど褒めてる場合じゃないと思います……」

「あの野郎……! 性格の悪さが良く出てやがる……!」

「クソネコが余計なことしやがって……!」

「てゆーか、『捜シ者』は『渋谷荘』に住んどったんやろ? トラップのかわし方くら

い知つとるとちやうんか?」

『あ』

『捜シ者』の進路を阻むためのトラップのはずが、思いつきり大神たちの進路が阻まれていた。まだ鬨つてすらいないというのに、全員ボロボロになつてしまつており、感心、呆れ、怒りなどそれぞれの感情を吐き出し始めた。そんな中、遊騎が頭に刺さつたトゲを抜きながら『捜シ者』がトラップをかわすことができた理由を言い当ててみせた。少



し考えれば気付くようなものだが、声を揃えて気付くところを見てしまうと間抜けそのものである。

「……足音、どんどん遠のいていくで。これじゃあ『捜シ者』はパンドラに向かって一直線やわ」

「く………！ 早く行——なに?！」

『捜シ者』たちの足音を聞いて距離が開いていることを遊騎が知らせると、大神は急いで先に進もうとした。しかし、運悪くそこでさらなるトラップが発動してしまった。彼らの周囲を取り囲むように現れたのは無数の黒いミニ『にやんまる』。それらは一斉に大神たちに向かって体当たりを繰り返してきた。

「ぐあー！」

「どんだけいるんだヨ?！」

「くそ、すばしっこい………!」

「こ、こいつら………！ 突進してくる奴らと集まって動きを封じる奴らに分かれてるのか………!」

黒いミニ『にやんまる』に苦戦しながら言葉を漏らす大神、刻、王子。その中で優は、それらが体当たりだけでなく動きを封じようとしていることにも気付いた。見ると、彼らの足元には黒い塊のように集まったミニ『にやんまる』がしっかりと彼らの足を掴ん

でいた。

「くそ……！　　こんな……！」

今すぐにも『捜シ者』を追わなければならない。しかし、現実是非常なものでどんな黒い塊に吞まれていく。一つひとつが小さいとはいえ、全てが一斉に力をかけてくるため徐々に押しつぶされそうになってしまふ。どんどん狭くなっていく視界の中、大神は先に進んでいく『捜シ者』たちの幻を見た。自分たちに背を向けて進んでいく『捜シ者』。その先にあるパンドラの箱ボックスを目指していき、そうして待つている未来は……最悪敗の展開北。

「こんな、ところで……！」

そうはさせない。

そのために自分はここにいる。

そのために自分たちはここに残っている。

そのために——彼らは闘う。

「こんなところでもたついている暇、オレたちにはねえんだよ!!」

自分たちを押し潰そうとする黒い塊を、彼らはそれぞれの異能でまとめて打ち破る。

『光』のムチで切り刻み

「悪たる『Re—CODE』の好きにはさせてはいけませんよ、皆さん」

『脳』で強化した脚で破壊し

「もちろんです」

『音』速の蹴りで蹴り飛ばし

「時雨……」

『影』の鎌で截断し

「アイツらは、オレが止める……!!」

『磁力』で粉碎し

「虹次……!! 首洗って待ってろヨ……!!」

『青い炎』で燃え散らしていった

「……………さあ、行くぞ！」

「……………いいね」

「……………どうかされましたか？」

再び進みだした大神たちのはるか先を進む『捜シ者』と『Re—CODE』。ふと『捜シ者』が立ち止まり、何かを見上げる。同じ場所を見る雪比奈だったが、そこには何もない。何かあったのか『捜シ者』に尋ねると、『捜シ者』はその口角を上げて再び歩き出しながら呟いた。

「楽しくなってきた……………」

「……………そうですか」

何が楽しいと感じさせるのかはわからないが、『捜シ者』の表情は確かに楽しそうだった

た。口角は上がり、その眼には先ほど見せたような邪悪さは欠片も無かった。雪比奈は静かに納得の声を放つと、他の『Re—CODE』たちと共に『捜シ者』の後に続いた。そして、目を伏せながら続けた。

「次の手は……もう打ってあります」

「遊騎、どうだ？」

「まだ離れとるけど大丈夫や。アイツら歩いとるからすぐに追いつけるわ」

「よーやくトラップ地獄は終わりカ……」

『捜シ者』たちを全力で走りながら追う大神たちは、遊騎の『音』で距離を確認しながら進んでいた。先ほどのトラップの後もしばらくトラップが続いたが、それらを切り抜けてようやく安心して進めるようになったのだ。また、今回はそこまでロスもしていない。その理由はというと……

「ふふふ、優君が会長から聞いていたトラップの情報を思い出したおかげですね」

「つーか、最初から思い出しとけヨ！ おかげでヒデー目に遭っただろーガ！」

「お前が真つ先に引つかかって泥沼状態になったから思い出せなかつたんだよ。途中から大丈夫だったんだから文句を言うな」

実は前日、会長は優に全トラップの情報を教えていた。優は『脳』のおかげで記憶能力も優れているため、膨大な量のトラップの情報も覚えられると思つてのことだろう。まあ、結果としては最初の方は思い出せずに引つかかってしまったわけだが。

「まったく……こんな時までいつも通りな奴らだな。王子からも何か言つて——王子？」

『捜シ者』を追いかけている最中だというのにケンカ腰の刻と口の減らない優。緊張感のない二人に呆れた大神が王子の方を向くと、一つの異変に気付いた。

「待て！ ……王子は、どこに行つた？」

「ハ!？」

「ほんまや。ごぼん、おらへん」

異変に気付いた大神が一言制して立ち止まった。見ると、黒いミニ『にやんまる』のトラップを抜けた時には確かにいたはずの王子の姿がどこにも無かつた。大神に言われて他の者も気付いたらしく、周囲を見渡してみるが姿は見えない。すると、平家が深いため息をついて言い放つた。

「やはり元『Re—CODE』、きつと寝返る気でしよう。皆さん、次に八王子 泪と会ったら容赦なく攻撃しましょう」

「そう判断するのは早すぎるかと……」

いなくなつた瞬間に心配ではなく疑惑の目を向ける平家。相変わらず王子を嫌っているようで、本当に会つた途端に攻撃しそうな雰囲気纏っている。優が落ち着かせようとしていると、遊騎が「お」と声を漏らした。

「ごぼん、いっぱいおるで」

王子を見つけたように言う遊騎だったが、彼が言った「いっぱい」という単語のせいでその信憑性は薄くなつた。王子は一人だけしかいない。そう何人もいるわけがないのだ。何かと見間違えたのだろうかと大神たちは無視していると、遊騎はさらに続けた。

「よんぼん、ごぼんがいっぱいおんねんで」

「アー、ハイハイ。おるおる、よかつたナ。一杯でも二杯でもいいから真面目に捜さ——」

遊騎に引つ張られた刻が適当に相槌を打つてそれに答える。だが、そう長くは付き合つていられないため、真面目に捜すように言おうと遊騎と同じ方向を向くと……信じられない光景が広がっていた。

『……………』

「ホントにいつぱいおるー!!」

「さつきから言うとするやろ」

そこにいたのは王子、王子、王子……

何人もの王子がそこに立っていた。

「な、なんだこれ……？　こんなトラップは聞いてないぞ……」

「ルイレイ泪々王子が累々やし」

「上手いこと言ってる場合か!」

刻が叫んだことでようやく振り向いた大神たち。その異様な光景に引きつつ、何があつたのか考える。優は驚きながらもトラップである可能性は否定したため、おそらく



トラップではない。仮にトラップだとしても意味がわからない。しかし、そんな中でもフリーダムな発言をする遊騎とそれにツッコむ刻はさすがである。

「……ふむ、これはおそらく『Re-CODE』の一人である日和さんの異能技ダミーバルーン『擬態泡膜』でしょう」

すると、なんとか攻撃せずに待機していた平家が答えを述べてみせた。一度見ていたこともあり、その特殊性から日和の仕業だとすぐに見抜くことができたのだろう。しかし、そうなると問題はここからである。

「それって……遊騎に化したアレか！」

「じゃあ、『にやんまる』が匂いくんくんせえへんとわからんのか。オレらじゃごぼんの匂いわからへんし」

「いや、仮にわかったとしても男がやったらただの変態だろ……」

平家の言葉を聞いてようやく思い出した刻たち。同時に解決策も思い出すが、その解決策ができる唯一の人間がないことにもすぐに気付いた。遊騎は残念がるが、優は顔を引きつらせながら自分たちがその解決策を行うことの問題性を指摘する。

唯一の解決策も使えないとわかると、どうやって見抜くか考え始める一同。すると、また遊騎が勝手に動き始めた。

「考えてもしやーないわ。待つとき、ちよつと一発かまして——」

「バカヤロー！ もし本物に当たったらどうする気だヨ！ マジで殺されるゾ！」

「緊急事態ですし、仕方ないでしょう。それに、殺されるのが嫌でしたらこっちが殺す気でやればいいのでは？」

「テメーは黙つてろ！」

危うく王子の大群に向かって音波を放つところだった遊騎を刻が寸でのところで止めた。確かに一齐に攻撃してしまえば本物以外は消えてしまう。しかし、その後の報復を考えるととてもじゃないがその方法をすることはできない。遊騎に続いて平家もムチを構えるが、刻は必死でそれも止める。どちらにせよ、必要以上に怪我を負ってしまうこのやり方は効率的とは言えないため、却下された。

そして、議論の結果……ある奥の手を使うことが決定した。その方法とは……

「王子！ あなた自覚はしていないんでしょうが、本当に美人ですよ！」

「い、いつもアリガトな？ お前のそういうところ、マジでキュンとくるワ」

「……ま、芸術的センスだけは最高と言っておきます」

「料理は美味しいし、家事もピカイチ。お前みたいな奴を嫁にもらった男は世界一の幸せ者だな」

「ていうか、オレの嫁候補の一人やし」

『泪々つてマジ最高ー!』

褒めて照れたものが本物……これこそ彼らが考え出した奥の手である。結果として自分たちが被害を受けるかもしれないが、いざとなったら優を前に出せば被害は最小限で済むと考えたのである。大神、刻、平家、優、遊騎の順で褒めていき、最後には全員で「最高」とまで言う。普段の王子のことを考えれば、ここまで言えば確実に照れる。そして、その結果はすぐに出た。

『……………』

「……………アレ？」

結論：全員ニセモノ

「まったく、吐き気がする……。褒めて損しました」

「……お疲れ様でした」

「ところで遊騎君……ドサクサに紛れてすごいコト言つてなかった？」

「ん？」

「……お前もな」

その後、五人一斉に王子の『擬態泡膜』ダミーバブルを割り始めた大神たち。最後の一体を割ったところで平家は嫌悪感丸出しの表情で文句を言う、優はフォローする言葉が見つからなかったのかその苦労を労う言葉しか言えなかった。一方、刻は遊騎の発言について尋ねるが当の本人には首を傾げられ、大神からはツツコミをもらおうという五人とも散々な結果だった。

しかし、そうなると問題はシンプルなものになってくる。むしろ、彼らが最初に抱いた疑問である。言いたいことを言い終えると、周囲を見渡しながら大神が呟いた。

「王子は……本物の王子は、どこに……」

まるで迷路のように入り組んだ構造の『渋谷荘』の地下。正式なルートを通ればいいが、少しでもルートから外れると出ることすら難しくなってしまう。彼女たちは今、そんな正規ルートから外れた場所にいた。

「ふふ……残念だったNE、お仲間とはぐれちゃってSA。けど、アンタにはすつごいお似合いだYO？」

「ハア、ハア……」

正規ルートと比べて照明が弱いのか、薄暗いそこに陽気な若々しい声が響いた。しかし、何者かの苦しそうな声もかすかに響く。同時に、何かが滴るような音も。

「なんとか言ったら？ もう限界なんて言わないでSYO……裏切り者の八王子  
涙」

「ツ……！ 日、和……！」

そこにいたのは、優越感に満たされたように立つ『Re—CODE』日和と、全身に深手の傷を負って血を滴らせながら膝を突く王子の二人だった。何をされたのかまではわからないが、ここで二人が闘っていたということは明らかだった。よく見ると、二人の周囲の壁は虫に食われたように穴だらけになっている。

『捜シ者』と『Re—CODE』を裏切るなんてバツカみたい。私、知ってるMON<sup>も</sup>目の前で膝を突く王子を見下ろしながら、日和は言葉が続ける。その口元の前に親指と人差し指の先端を触れさせることで作った小さな丸を構え、話しながらもそこから次々とシャボン玉を作り出しながら。そうして作り出したシャボン玉は二人を取り囲み、どんどん逃げ場をなくしていく。

「アンタみたいな裏切り者は日和が殺すべきだつてコトを……NE<sup>ね</sup>」  
状況は最悪。

味方は自分一人。

王子は……完全に追い詰められていた。

## code : 51 世界で一番闘いにくい敵

「I K K E ー!」  
いっけ

「チツ……!」

日和の号例と共に周囲に浮いていた無数のシャボン玉が一斉に王子に向かっていく。王子はすぐに自らの『影』で形成した鎌を手にする、大きく振りかぶって向かっていくシャボン玉に狙いを定めて振り下ろす。『影』は実体がないが、相手の『影』を截断することで実態を截断することが可能。それは日和の異能であるシャボン玉とて同じであり、『影』を持つものは問題なく攻撃することができる。

しかし……

——スカッ

「くそ……!」

確かにシャボン玉の中心を通ったはずの『影』の鎌。確実に『影』も捉えた攻撃だったが、シャボン玉は截断されることなく王子に向かっていく。そして、王子の間合いに入った瞬間にそれらは一斉に爆発し始めた。

——ドドドドド!

「ぐあー！」

無数のシャボン玉が至近距離で爆発したことで、王子の身体には新たな傷が刻まれていく。しかし、日和の攻撃はそれで終わることはなく第二波のシャボン玉が王子を捉えて向かってきた。

「……のおー！」

それに気付いて再び鎌を振り抜く王子だったが、これもまたシャボン玉になんの影響を与えることなく空を切る。そして、先ほどと同じように至近距離で爆発し、着実にダメージを与えていった。

「ムダムダー！ 日和の異能『泡膜』<sup>バルーン</sup>にかかればどんな泡も作れる！ この泡は『光の透過率が100%』……つまり『影』がないのYO<sup>よ</sup>ー！」

「光の透過率が100%」……それはつまり「光をそのまま通す」と同じ。そもそも『影』とは物体が光の進行を遮った結果、作られる黒い領域。そのため、光をそのまま通してしまうということは光の進行を遮らないことになる。だからそこに『影』が作られることはなく、いくら『影』の鎌で攻撃しようとただ通り抜けるだけなのだ。さらに……」

「くっ……！」

次々と自分に向かってくる『影』が無いシャボン玉。鎌での攻撃を諦めた王子は自分の周囲に『斜影』を展開する。『斜影』は一带を覆うことであらゆる攻撃を防ぐ防御の技。



『影』の中に『影』が入り込むことは不可能であり、『影』によって生まれる影響は実体にそのまま作用する。つまり、あらゆるものの侵入を防ぐ絶対防御が可能なのだ。だが、それすらも「光の透過率100%」の前ではなんの意味も無かった。

——ドオン！

「ッ……………」

「ムダだつて言つてんでSYO！ 物体の『影』を断つアンタにはこの泡を攻撃することも防御することもできない！ 裏切り者は裏切り者らしく……………惨めに殺してA・GE・RU！」

『斜影』は攻撃の『影』が入り込むことを防ぐことであらゆる攻撃を防御する。しかし、『影』を持たない日和のシャボン玉は『斜影』に防がれることなく王子の目の前で爆発する。攻撃して破壊することもできず、防御すらできない。はつきり言つて王子の『影』と日和の『泡膜』の相性は……………最悪だった。

「王子！」

「ッ！ お前ら……………」

日和が繰り出す怒涛の攻撃の前に再び膝を突く王子。すると、背後から彼女を呼ぶ声と足音が響く。見ると、大神たちがこちらに向かつて走ってきていた。おそらく遊騎が『音』で王子の居場所を聞き当てたのだろう。遊騎は耳元に添えていた手を離してその

場で構えた。

「あの泡……『影』があらへん。あれやと何もできへんわ」

「王子との相性は最悪ってことか……」

構えながらも周囲を見渡して瞬時に状況を理解する遊騎。一瞬でシャボン玉に『影』がないことを見抜いてそれを伝えると、優が相性の悪さを口にしながら構える。

「ハの……」

すると、大神が左手の手袋に手をかけながら前に出ようとする。王子の様子を見る限り、相当な傷を負っていることがわかる。ただでさえ相性の悪い相手だというのに、そこまで傷を負わされては勝機は薄くなる一方。そのまま手を貸そうとするが……

「来るな！」

「な?」

手を貸そうと前に出た大神を王子は大声で制した。追いつめられている中、差し出されようとした助けの手を拒否するという不可解な行動に大神は目を見開く。すると、王子は強い意志を込めた眼で大神の顔を見て、力強く言った。

「……手を出すな、零。日和の相手はオレがする。……いや、オレでなければならぬ。だから、お前たちは早く先に行け」

「王子……」

眼と言葉……その両方から感じられる王子の強い意志。それをひしひしと感じた大神の足は先に向かおうとはせず、静かにその場で止まった。

自分の意志を感じ取ってくれた大神に感謝するかのように王子は軽く微笑むと、すぐに真剣な表情になって日和の方を見る。そして、再び強い意志を込めて言葉を紡いでいく。

「もうやめろ、日和。オレは……お前を傷つけないんだ」

「……HA？」

自分に闘う意思のないことを王子は日和に伝える。しかし、彼女の言葉はさながら“上”に立つ人間が放つような言葉。意識してのことかはわからないが、“上”からかけられたような王子の言葉に日和はその眉をしかめた。

「偉そうに……。アンタ、今の自分の立場わかってんNO？ 『捜シ者』と『Re—C ODE』を裏切って『コード：ブレイカー』なんかに落ちぶれたくせにSA」

「……」

「……NE、覚えてる？ 多額の借金の末に一家心中したくせに、一人だけ生き残って路頭に迷っていた日和とアンタが最初に会った時のこと」

全部が消えた。

いや、元から誇れるようなものなど無かった。自分の身なりも家にある物も、何もかもがみすばらしいものばかりだった。他人よりある物といえば、額を聞いただけで億劫になるような借金だけ。家が貧乏で苦しいのはわかっていた。だが、多額の借金があると聞かされたのは直前になってから。

そう、家族と共にこの世から消えることを決める直前に。

「……………」

幸運とは思わなかった。むしろ、何者よりも不幸だと感じた。幼心なりに一家心中を理解し、家族と共に死ぬと決めた。それなのに、自分一人だけ生き残ってしまった。最後の瞬間まで残っていた家族すら、自分は失ってしまったのだ。

家族も何もかも失った年端もいかない少女が一人で暮らしていけるほど世の中は上手くてきていない。彼女に今できるのは捨てられてる物の中から少しでもマシな残飯を漁り、段ボールやポロポロの布で暖をとりながら路地裏で過ごすことだった。何日も洗っていないため体が汚れ、髪もボサボサで無造作に伸びている。残飯を漁ってい

ることもあり、体中からは悪臭としか言えない臭いがするが今となってはどうでもいい。

全てを失った少女は、唯一の形見である前髪に着けている髪留めにそつと寒さで震える手を添えた。

「……見つけた」

すると、耳をつんざくようなエンジン音と共に聞き覚えのない声が届いた。起き上がって見てみると、一昔前に流行ったような力強いフォルムの車の前に立つフードを被った褐色肌の男と、小刻みに震えながら唸るような音を出すバイクに跨る左目に癍痕を刻んだ男。そして、彼らより一歩前に出て自分を見下ろす黒いコートに身を包んで腰まで伸びた蒼色の艶髪をなびかせる右眼の下に泣きボクロがある女。先ほどの声を誰が発したかまでは知らないが、高い声だったためおそらく泣きボクロの女が言ったのだろう。女は少女の顔を見ると、言葉が続けた。

「アンタが逃亡中のちびっこ異能者……だね?」

異能、というのがなんなのか少女はわからなかった。ただ、以前から自分には不思議な力があることには気付いていた。その力のことを言っているのだろうか、と考えていると泣きボクロの女は少しずつ少女に近づいていき、ゆっくりと少女の顔を覗き込んだ。

「どれ、よく顔を見せて——」

「ッ——！ きえ、消えろー!!」

——ドン！

少女に向かって女が手を伸ばすと、少女は何かが爆発したかのように大声を上げながら不思議な力で作った泡を飛ばす。泡が女に触れた瞬間、泡が破裂して女から血が流れる。泡が喰うように、目の前のものを……消すように。

——金目のものは何も残っていないってよ

——一緒に死んでくれればよかったのに

——面倒な存在だな、本当に

少女は知っていた。世の中が自分を見る目を。何も残らず、何も持っていない少女を引き取ろうとするような善人は一人としていない。いるのは、自分を邪魔物のように嫌悪する目を持つ者ばかり。全てを失った幼い少女に取って……その目は他の何者よりも恐怖に感じるものだった。

「消えろ！ 消えろ！ 怖い目！ 全部……消えろおおおお!!」

——ドン！ ドン！ ドオン！

喉が痛くなるほどの大声を発しながら少女は泡をぶつけ続ける。その度に女の身体から血が噴き出し、傷がつけられていく。女は抵抗しない。それどころか、何も言わな

い。傷つけられたことに対する怒りの声も、痛みという苦痛に耐える声も。ただ静かに……

「ハア、ハア……！ 消え——！」

「……頑張ったな。遅くなってしまつて、本当にすまない」  
ただ静かに……優しく少女の身体を抱きしめた。

「それにしても、噂通りの暴れん坊だな。……もう何も心配するな。アンタのことは私が護る」

「あ、ああ……」

全身を通して柔らかな温もりを感じる。長らく忘れていた人の温もりを。なぜ、こん

なにも温かいのだろう。なぜ、こんなにも身体が震えるのだろう。

なぜ、こんなにも……抱き締めながら頭を撫でる手が優しいのだろう。

「私の名は『八王子 泪』。あんたの……家族になりに来た」

「……なにが、なにが家族だよ。嘘だったじゃん。護るとか偉そうなこと言ったくせに……アンタは『Re—C—O—D—E』を裏切った！ アンタは絶対に許さない！ かつての守護神だろうがなんだろうが関係ない！ “エデン”の飼い犬になったアンタは……日和が殺してやる！」

「がはっ！」

かつての思い出である王子との出会いを語った日和。自分を惨めな地獄から救い出してくれた唯一の助け。手を差し伸べてくれた唯一の人間が王子だった。だが、彼女は裏切った。自分たちの元を離れて、あろうことか敵になった。日和は内に秘めた思いのままに、王子に放った泡を無数に爆発させる。



王子は責め立てるような日和の言葉に何も言い返すことなく、ただ彼女の攻撃を受け  
る。だが、出会った頃とは違う。堪えようもない痛みが全身を貫き、王子の顔は苦痛に  
歪んでいった。

「……過去を捨てた存在であるはずの『コード・ブレイカー』だが、王子は『Re—C  
ODE』であつた頃から『八王子 泪』という一人の人間だつたんだな」

「『エデン』にしてみれば戒めだつたんだろう。あえて名前を奪わないことで、王子  
が元敵であるということを忘れさせないために」

日和の過去を聞き、『八王子 泪』という名に刻み付けられた十字架を感じ取る優と大  
神。だが、そこに感じたのは名前が変わっていないという事実だけではない。『Re—  
CODE』で会った頃から、王子は今の王子と何ら変わらない。全てを護ろうとする人  
間だつたと二人は感じていた。

「やれやれ、新旧『Re—CODE』でいがみ合いとは……。これだから『悪』は救い  
ようがありません。皆さん、あの二人は放つておいて『捜シ者』を追いますよ」

すると、呆れたように深いため息をついた平家が王子と日和に背を向けて歩き出し  
た。ここまで冷たくいられるのも、王子が元『Re—CODE』……『悪』であること  
が理由なのだろう。しかし、過去はどうあれ今は『コード・ブレイカー』。こうして『R  
e—CODE』と逃げることなく対峙していることから王子がそれを自覚しているこ

とは感じられる。

それでも王子をないがしろにする平家の意志がわからず、隣でその様子を見ていた刻はその疑問をぶつけた。

「先輩さ、なんでそんなに王子と『Re—CODE』が嫌いなワケ？」

「『悪』だからに決まっているでしょう？」

「いやいや、とてもそれだけには見えねーって。つか、王子はもう『Re—CODE』じゃねーし」

「……本当にそう思っていますか？」

「ハ？」

一時期は平家以上に王子を毛嫌いしていた刻だったが、夏祭り以降から少しずつ元に戻っていった刻。彼自身、王子が元『Re—CODE』であることをまったく気にしていないわけではないが、今となっては平家ほどではない。

そんな平家の『悪』を嫌う徹底ぶりに少し引きながらも王子をフォローしようとするが、平家は鋭い視線を向けて逆に問いかけてきた。

「八王子 泪は先ほどから日和さん自身に対しては一切攻撃していません。元仲間であるというだけで裁くべき『悪』を裁けない……。その程度の人間、私は『コード：ブレイカー』とは絶対に認めません」

「……………」

平家の言葉に刻は何も言い返そうとはしなかった。平家の言う通り、王子は日和が放つ泡を破壊しようとはするものの、それは日和に対しての攻撃とは言えない。はつきり言つて、なんとか間合いを詰めて日和の『影』を截断することも王子ならばできるはず。だが、それをしようとはしない。先ほど日和に言つた言葉の通り、王子は日和を傷つけることを躊躇っている。それは刻も感じていたことだった。

「……………なあ、ろくばん」

「遊騎……………」

話に入つていかなかったものの平家と刻の話聞いていた大神たち。すると、今までジツと王子と日和の戦いを見ていた遊騎がポツリと呟くように大神を呼んだ。大神が振り向くと、相変わらず王子と日和のことは見たまま遊騎は問いかけた。

「あの二人……………知り合いなんやろ？　けど、闘わなアカン。どうすればいいんやろなあ。『にやんまる』やったらどうするかなあ……………。こんな時なんて言うんやろ……………」

「……………」

異能の相性だけではない。二人の過去を考えても、王子にとって日和は最も闘いにくい相手だった。それでも闘わないといけない現実には、あの桜ならどのように動くのか。一体、どんな言葉をかけるのか。考える遊騎の横顔を見ながら、大神は黙つてその

言葉を聞いていた。

「ほらほら！ 少しはやり返してきなYO！ 来ないんだつたら……日和の力をもつと見せつけてあげる！」

「ぐう！」

大神たちが話している間にも、王子はどんどん追い込まれていく。一際大きい泡の爆発が起こると、今まで遠距離攻撃に徹してきた日和は一気に王子との距離を詰める。そして……

「——CHU！<sup>チュ</sup>」

「——ツ!？」

日和は王子に自らの顔を近づけ、反射的に閉じた王子の脛にキスをした。攻撃とは言い難い日和の行動に混乱する王子。だが、異変はすぐに起きた。

「ぐあああああ！」

「王子!？」

突然、両手で両目を押さえる王子。何が起きたのかわからない大神たちは警戒すると、ステップを踏みながら王子から離れた日和が愉快そうに口を開いた。

「日和の異能『泡膜』はあらゆる膜を操ることができるNO<sup>の</sup>。だから、今みたいに眼の『角膜』に作用して……視覚を奪うこともできるのDA<sup>だ</sup>！」

「く、そ………！」

ついに全容が明かされた日和の異能『泡膜』。膜を操って他人に化けたり、光の透過率すら自由自在の泡を作るだけではない。身体の膜に作用すれば動きを制限することすら可能な恐ろしい異能。トリッキーな力だが、真価を發揮すればここまで闘いづらいことはない。

見ると、王子の眼は真つ赤に染まっておりキョロキョロと日和を捜している。本当に視覚を奪われてしまったらしい。攻撃も防御もできず、視界も奪われ、とうとうあと一歩のところまで追い詰められてしまった。

「これでアンタは何もできない……。終わりだYO、<sup>よ</sup>元守護神サン。裏切り者は……

〃死〃あるのみ！」

「ガハ………！」

これで最後と言わんばかりに無数の泡をぶつける日和。視界を奪われた王子がそれに気付けるはずもなく、暗闇の世界で彼女はわが身を貫く衝撃にただただ耐えていた。

(なんで………)

それと同時に胸中を駆け抜ける非情な現実を悔やみながら。

(なんでお前なんだ、日和——！)

「『泡膜弓矢』！」

王子の胸中を知るはずもない日和は、弓型に形成した『泡膜』から大量の矢の『泡膜』を王子に向かって発射した。

「よう」

「……………」

一家心中の末、たった一人生き残った異能者の幼き少女を保護してから数日後の夜。王子はベッドの上で震える少女のところに足を運んだ。保護してから風呂にも入れて身なりを整えたため、会った時のような汚れや纏わりついた悪臭はもう消えていた。だが、中に残っているものはそう簡単に消えず、ずっと少女の身体を震えさせていた。

「眠れないんだって？ 家族が死んだ…………あの火事のことを思い出してしまうのか？」

「……………」

少女のところに来る前、同志である雪比奈から聞いたことだった。少女が保護した日

から一睡もしていない、と。考えてみれば、家族を失ってからまともに寝ていないのだろう。汚れは消えたが、目の下にはよく見ると隈が刻まれている。

事前に入手した情報によると、少女の家族がとつた一家心中の方法は焼身自殺。自宅に火を放つて自らの身を焼いたのだ。その時の記憶が少女を傷ついた心を支配し、眠らせようとしなのだろう。その証拠に、王子が「火事」という単語を言った瞬間だけ少女の身体は一際大きく震えた。

ベッドの上で布にくるまり、虚空を見たまま震える少女。王子は少女の隣で頬杖をつきながら横になると、さらさらになった少女の髪を優しく撫でながら声をかけた。

「アンタは私が護るって言っただろ？ 大丈夫、私はずっとここに……お前の傍にいます。だから安心してお休み」

「……………」

髪を撫でられながら言葉をかけられても、少女は震えるばかりで返事はなかった。それでも王子は何も言わず、ただただ少女の髪を撫で続けた。

「……………♪♪♪、♪♪♪」

静かに目を閉じ、子守唄のように鼻歌を奏でながら王子は少女の傍にいた。少しでも安心するように、少しでも恐怖が薄れるように。ただ、それだけを願いながら。

「……………ん？」

ゆつくりと瞼を上げながら、王子は頭の中を整理する。だが、それよりも先に窓から差し込んでくる朝日を感じ、自分がいつの間にか寝てしまっていたことに気付いた。

「やっべ……………！ 寝ちま——って、痛っ！」

少女を寝かしつけるはずが思いつきり寝てしまつて王子は慌てた。反射的に起き上がろうとするが、そうすると頭に鋭い痛みが走つた。まるで誰かに髪を引つ張られたかのように。何事かと思つて王子は姿勢を戻しながら視線を下に向けた。すると……

「すう……………すう……………」

安らかな顔で寝息を立てる、あの少女の姿があつた。王子の方を向き、その手に王子の髪をしつかりと掴んで。そうして眠る少女の顔は、まるで小春日和に降り注ぐ温かな日光のように穏やかだった。



「……そういえば、名前を決めないと。あんまり得意じゃないんだが……お前にピッタリな名前を思いついた」

起こしてしまわないよう、静かに少女の髪を撫でながら王子は優しく語りかける。考えていたわけではないが、穏やかに眠る少女の顔を見ていたら自然と思いついた……その名を口にしながら。

「これからよろしくな……日和」

気に入ってくれるだろうか、と王子は考えながら静かに目を閉じた。だから見えなかったが、王子が少女の新たな名前を口にしてすぐ……少女は嬉しそうに微笑んでいたように見えた。

——ドオオオオン!!

「……………これで、守護神サンも木端微塵だNE<sup>ね</sup>」

かつて護ると誓った相手の少女が放った矢は爆発の衝撃となり、非情にも自分の名付け親でもある王子を包み込んだ。しかし、日和に心を痛める様子は無く、満足そうに止めをさせたことを確信していた。そして、爆発で舞い上がった粉塵が消え、変わり果てた姿となった王子をその眼に刻もうと——

「あつかんわ……………多すぎて『音』で弾き返しきれへんかった」

「な……………!?!」

「遊騎!」

しかし、そこにあつたのは変わり果てた王子の姿などではなく、その王子を庇うように立つ遊騎の姿だった。日和が放った矢が王子に届くよりも先に遊騎が音速で王子の前に立ち、音波を放って矢を爆発させたのだ。しかし、全て爆発させることはできなかつたらしく、王子を庇うように伸ばした右腕には真新しい傷が刻まれていた。

「ごぼん、なにちんたらやつとんねん。下手したら死ぬで?」

「その声……………遊騎か?! お前がどうして……………!」

王子を叱責するような言葉をかける遊騎の声を聞き、自分の目の前にいるのが遊騎だと気付いた王子。最初に手を出すなど釘を刺しておいたというのに飛び込んできたこ

とを疑問に感じるが、遊騎はそれを気にすることなく言葉を続けた。

「何を迷ってんねん、ごぼん」

「ッ——！」

「オレはごぼんやないから、何を迷ってるかわからへん。アイツと何があつたかも知らん。せやけど、一つだけわかる。このままやったらごぼん、死ぬだけや。オレ、ごぼんが作る飯が食べへんようになるのは嫌やで」

王子に背を向けたまま、それでも心に直接届くような言葉を投げかける遊騎。それはまるで、桜のように「死んではいけない」と訴えかけるような言葉だった。考えてみると、身を挺して誰かを護ろうとするその姿は、かつてリリイを護ろうと飛び出した桜の姿のようだった。桜ならどう動き、どんな言葉を言うのか……それを遊騎なりに考えた答えがこれなのだろう。

——ポタ、ポタ……

「この音……！ 遊騎、お前怪我を……！」

結果として遊騎が右腕に受けた傷から、少量の血が音を立てながら重力に従って落ちていく。すると、見えないながらもその音が聞こえたことで王子は遊騎が負傷していることに気付いた。自分を庇って遊騎が傷を負った……その事実には全身を震わせる王子。そして、王子は目の前に手を伸ばし、自分のために傷まで負った遊騎を——

「テメエ！ 手エ出すんじゃねえって言っただろが！」

「はぐっ！」

「エエエエエ!!？」

普段、叱る時とまったく同じ勢いで、怒号と共に必殺の頭突きを喰らわせた。ご丁寧にも伸ばした手で遊騎の肩を掴み、自分の方に一度振り向かせてから。予想外すぎる王子のその行動に、刻は顔を真っ青にして驚きの声を上げた。

「桜「いんまの」……オレ、やっぱ『にやんまる』にはなれへんかったわ……」

「うるせえ！ これ使って治してもらいやがれ、バカ野郎！」

「鬼ダ、鬼がいる……！」

容赦のない王子の頭突きを受けた遊騎は、『にやんまる』になれなかったことを詫びるかのように倒れていった。そんな遊騎に向かって王子は追撃のように消毒液と包帯を投げつけ、一部始終を見ていた刻たちをその理不尽さで恐怖に震わせた。

そんなことは構わず王子は遊騎たちに背を向け、その手に『影』の鎌を持って立ち上がった。そのまま再び日和に向かっていくのかと誰もが思ったが……違った。

「……すまない、遊騎」

「はにゃ？」

遊騎たちに背を向けたまま、王子は謝罪の言葉と共に深々と俯いた。謝罪し、自らの行いを悔いるかのように。

（オレは、とんだバカ野郎だ……！ 日和との闘いを避けることばかり考えて、大事なことを忘れていた……！）

ギリ、と力のままに王子は齒を食いしぼる。今の彼女を支配していたのは……純粹な怒り。だが、それは遊騎に対してでも、日和に対してでもなかった。かつての仲間との闘いを避け、そのせいで今の仲間を傷つけてしまった、自分自身に対する怒りだった。

（思い出せ……！ 今のオレは誰だ!? かつての同志和と闘うことをためらって、  
 新たな同志遊騎を傷つけるのが今のオレか!? 違う！ オレは……！ オレは——！）

——ブシヤア!

「王子!?!」

自身に対する怒りの中、自問自答を繰り返す王子。そうして彼女が最終的に辿り着いたのは……自身の右肩を、自身の異能である『影』の鎌で斬りつけることだった。

「な、なにやってんのYO!?! どうして自分で自分を……!」

「……これは、遊騎が庇った傷の分だ」

「ハア!?!」

突然の自傷行為に混乱する日和だったが、それに対して王子は冷静そのものだった。そして、冷静なまま自分の行動の意味を語った。それでも日和の混乱は続くが、王子の中ではそれが答えだった。

「そして……礼を言うよ、日和」

「れ、礼……?」

「ああ。お前がここまでやってくれたから、ようやく思い出した。いや、正確に言えば刻み込むことができた」

意味深な言葉を続けながら、王子は血が滲む右肩に左手を添える。掌が赤黒く染まろうとも構わず、むしろ力強く右肩を握りしめることでしつかりと掌を染めていった。

（もう忘れない……。そして、逃げ出さない。この傷はその証明……そして誓いだ。オレは……いや）

そして、彼女は静かに顔を上げる。その眼に決して揺らがないと誓った強固な意志を秘めて。自身で刻んだ傷の痛みと共に、その誓いを言葉として吐き出した。

（私は……もう決して躊躇わない！）

「かかつといで、日和。ここからは遊びじゃなく、本気で相手してあげるよ。お前は『コード：ブレイカー』『コード：05』……八王子 泪が裁くー」

「王子……」

「ようやく、ですか」

ついに日和と闘う覚悟を決めた王子。その視界は未だ遮られていても、彼女の瞳はしつかりと日和を捉えていた。そして、王子の覚悟の言葉を受け取った大神たちはその

覚悟を受け入れるように彼女の背中を見つめていた。唯一、平家だけはやれやれといった様子だったが、それでも王子の覚悟を否定するような様子は無かった。

覚悟を決めた王子を前に、日和は混乱していた頭を一度リセットして再び闘志を燃やす。いくら覚悟を決めようと、優劣で言えば彼女は明らかな優勢。それを再確認して、日和はフツと笑みを浮かべた。

「……言ってくれるJAN<sup>じゃん</sup>。とうとう心まで“エデン”の飼い犬になったってわけNE<sup>ね</sup>。だったら、今度こそわからせてあげる。『コード：ブレイカー』なんか成り下がったアンタに……日和が負けるワケ——！」



——パァン！

「な——!?!」

王子に止めを刺すため、再び透過率が100%の泡を日和は作り出した。しかし、本  
当に次の瞬間だった。今まさに作ったはずの泡は一つ残らず破壊され、破裂音が鼓膜を  
震わせた。さらに、それと同時に頬、腕、脚の表面が切り裂かれ、大量の血が噴き出し  
た。

何もわからなかった。何をされたのか、どんな力を使ったのかすらわからなかった。  
ただ一つわかっているのは……これをしたのが視界の中で不気味に動く黒い何かであ  
るということだけだった。

「なんだ……!?! 今のは一体……!?!」

「……始まりましたか」

どうやら何があつたのかわからないのは大神たちも同じだったらしく、彼らの表情は  
驚きに染まっていた。すると、そんな彼らの中で一人だけ平静を保っている平家がポツ  
リと呟き、ゆつくりとその眼を細めて視線の先に王子を捉えた。

「これこそ、『影』を纏う最強の悪魔。最強攻撃と鉄壁防御を兼ね備えた全てを飲み込  
む貪欲なる姿……『女帝の矛と盾』エンプレス・ブラッドクセスのスタートです」

平家の視線が捉えた王子は、明らかに今までの姿とは違っていた。その全身に黒く蠢

く『影』を纏い、まるで彼女自身が蠢く『影』のように錯覚するような姿だった。彼女の身体を憑代にするかのように、彼女の身体と彼女の周囲を蠢く『影』と共に、その艶髪をなびかせながら女帝の如き凛々しきでそこに立つ王子は……『影』の鎌を手にその場に君臨した。

「これが出た以上、八王子の勝利はほぼ確実でしょう……。しかし、この技……使ったからにはとても大きなリスクがありますかね」

「平家さん……？」

王子の真の力が発動したことで勝利を確信する平家。しかし、最後に言い放った一言は彼の隣で傍観する優の眉をかすかにしかめさせた。

## code : 52 リスクという名のパラドックス

「いくよ、日和。これが私の本気……『女帝の矛と盾』エンプレス・パラドックスさ」

「く……！」

『影』による攻撃を無意味にしてしまう日和の『泡膜』。その相性の悪さだけでなく、かつての同志という過去が合わさって王子は完全な劣勢に立たされた。しかし、危険を承知で王子を護った遊騎の行動と言葉で覚悟を決め、王子は『女帝の矛と盾』エンプレス・パラドックスを発動させた。不気味に蠢く『影』を身に纏いながら、王子は日和と改めて対峙した。

平家曰く、大きなリスクがあるらしいが、そんな不安要素を消すかのように王子は大神たちの方に振り向いて言葉をかけた。

「心配かけてすまなかつた。だが、私はもう大丈夫だ。おそらく日和はただの時間稼ぎ……あとは私に任せて、お前たちは先に進め。……絶対に『捜シ者』にパンドラの箱ボックスを渡すな」

「……へッ、言われるまでもネエ」

「まかしとぎ」

「ふん、あなたに言われる筋合いはありません」

先に進むよう諭す王子の言葉を受けて、刻、遊騎、平家の三人は短く言葉を返すと背中を向けて走っていった。しかし、彼らのようにすぐには動けなかった者たちもいた。

「王子……」

「……………」

優と大神だった。彼らは決して王子が敗れることを心配しているのではない。リスクのある技を発動させて、一人で闘おうとする王子が心配だったのだ。二人ともそれを言葉にはしないが、その眼は真摯にその思いを訴えていた。

すると、それを察してか。王子はフツと微笑みながら、改めて二人に声をかけた。

「…………心配すんな。何があろうと私は絶対に死なない。もし私が死んだら、次に優子と変わった時に大変なことになるだろうしな。それに…………私たちは全てを終わらせたら、キャンプ場に桜小路を迎えに行かなきゃならない。明日にでも、全員でな。お前らがいると邪魔なだけ、さっさと行ってこい」

「…………そうだな。優子の一番の被害者が言うんだから、その未来は確実だな。それが現実にならないように、さっさと片付けて追いついてこいよな！」

「どうせ迎えに行くんだつたら、そのまま本当にキャンプでもして機嫌を取った方がいい。その時、王子の飯が無かつたら味気ないからな。追いつくまでに何を作るか考えておけよ！」

力強い意志が込められた王子の言葉を受け、ようやく決心がついた二人。王子への信頼を言葉にして、二人は先に行った三人に追いつこうと走り出した。

「王子！ これを！」

「零……………？ これは……………」

「終わったら、すぐに知らせろよ！」

「……………そういうことかよ。——ああ！ 任せておけ！」

去り際、一瞬だけ振り返って大神は王子にある物を投げつけた。受け取った王子は何かわからず首を傾げるが、大神の「知らせろ」という言葉で理解したらしく、それをポケットに閉まった。

そうして大神たちが去ったところで再び日和の方を見る王子。すると、今までの時間を使って用意したのだろう。彼女の周囲には新たに大量の泡が浮いていた。泡は日和の意志で王子の周囲に向かって動いていき、王子を取り囲んだ。さらに、日和は再び『泡膜弓矢』<sup>バルーンアロー</sup>を放とうと、その手に弓矢型の『泡膜』を構えていた。

「HA！<sup>ハ</sup> 長々と話して余裕のつもり!? 甘く見ないでYO！<sup>よ</sup> そんな『影』を纏ったところで……………『影』を持たない日和の『泡膜』の前じゃ無力なんだから！ いけ！

『泡膜弓矢』と全方位から向かってくる泡の同時攻撃！ 『泡膜監獄』<sup>バルーンプリズン</sup>！」

敵である自分の前で悠長に仲間と言葉を交わす王子を見て、プライドが傷つけられた

日和は間髪入れずに総攻撃へと移った。『泡膜弓矢』<sup>バルーンアロー</sup>を放つのと同時に、王子の周囲に展開させた泡を一斉に王子に向かわせた。高速で向かう泡と泡の間はどんどん狭くなり、逃げ場を完全に無くしてから王子を飲み込もうとした。

だが、そこから先の光景は日和が思い描いていたものとは正反対のものだった。

——パァン！

『泡膜』が消えた——!?!

王子を飲み込もうと向かっていった泡の大群は、王子の身体に触れたその瞬間に形を保てなくなり次々と破裂していった。『泡膜弓矢』<sup>バルーンアロー</sup>も同じで、先端が触れたと同時に破裂してしまった。

王子の『影』を無意味とするため、日和がこの闘いで使った『泡膜』は全て『影』ができない作りになっていた。それは今の攻撃で使った『泡膜』も同じであるはずなのに、それがまったく通じなくなってしまった。あり得ない事実に警戒心を強める日和だが、そこで一つの現実<sup>リアリティ</sup>に気付いた。

遅かった——という現実<sup>リアリティ</sup>に。

——ズオオオオオ……！

「な、なによ……アレ……！」

目の前の光景が信じられず、日和は目を見開いた。その目に映っていたのは……王子を中心に、自分を飲み込もうと広がっていく真っ黒な『影』だった。

「この……！ 気持ち悪いんだYO！」

少しずつ近づいてくる『影』を打ち消そうと、再び泡を展開する日和。だが、それは無駄な足掻きに等しい行為だった。

——パァン！

「ッ……！」

展開と同時に『影』が泡を貫き、音を立てて破壊した。『影』による攻撃も防御も、何もかもを無意味にするはずの『泡膜』。しかし、現実はどうだ。まったく逆である。どれだけ泡を展開させてもまるで無意味——

——ブシヤア!

「——え」

違った。最初から、何もかも。あの時、飲み込もうとしたのは『泡膜』ではない。『泡膜』は『影』に飲み込まれた側だったのだ。

——グジャァ! ズチャァ!

「なに、これ……」

考えてみれば、『泡膜』が消えたのは王子に触れたからではない。彼女が纏っている『影』に触れたから消えたのだ。いや、今ならばわかる。飲み込むとか消えるとか……そんな生易しい表現ではない。

——グジャ、グジャジャ!

「い、嫌……! 嫌……!」

彼女の『影』は……全てを喰っていた。

——グジャジャジャジャジャジャジャ!!

「嫌アアアア!!」

日和の心を純粹な恐怖が支配していく。王子から広がり、自分に向かってくる『影』。その『影』は纏っている服だろうと、その先にある皮膚だろうと関係ない。触れたもの全てを、気味の悪い音を立てて喰い尽くそうとしていた。自分が『影』に喰われていく



感覚を全身で感じながら、日和は遠くで静かに語りかけてくる王子の声を聞いた。

「……覚悟するんだね、日和。悪いけど、コイツは私自身でも上手く操れない。こうやって……」

——ヒュン！

「引き戻すだけでも精一杯なのさ」

王子が手を前に出してすぐ、日和を喰らおうとしていた『影』は動きを止めて王子の元へと戻っていった。『影』が離れた瞬間に力が抜け、日和は膝を突いた。自分が喰われるという恐怖から抜け出せたということもあるが、一番の理由は全身に負った傷だった。『影』によって喰われた箇所は多く、その全てから突き抜けるような痛みと出血があった。ほんの数秒の間だったというのに、日和の体力は限界近くまで削られてしまった。

「く、う……い！」

全身から感じる痛みを耐えながら、日和は前に立つ王子を見る。すると、ある変化に気付いた。今まで視界を奪われた影響で赤く染まっていたはずの王子の眼が元に戻っていた。時間の経過か、ダメージを受けすぎて効力が弱まったのか……それとも『影』が角膜に作用させた異能すら喰ってしまったのか。どんな理由にせよ、王子の視界は完璧に光を取り戻していた。

——ズシャ、グシャ……

眼に光を取り戻した王子はしつかりと日和を見据えて、凜とした姿で一步ずつその距離を詰めていく。その度に、彼女の周囲で蠢く『影』が床や壁の一部を喰つていった。その美しくも恐ろしい光景に、日和はまったく動けずにその力の大きさを痛感していた。

（これが、かつて『Re—CODE』で『麗艶の守護神』と呼ばれた八王子 泪の本当の力……！ 『女帝の矛と盾』……まるで、全てを喰らい尽す『影』の魔獸——！）

「美しい薔薇には棘がある」とはよく言ったもので、目の前に立つ黒い薔薇も禍々しい黒い棘をその身に纏っている。かつてその背に背負った『麗艶の守護神』という『護り』のイメージが強い二つ名とは裏腹に、今の彼女から感じられるのは圧倒的な『力』。何をしようと無に還され、その全てを喰らわれる……そんなイメージが嫌でも流れ込んできた。

「ぐ……！ ま、まだ……！」

しかし、彼女は『捜シ者』という唯一の者を守護する『Re—CODE』の一人。年若いとはいえ、その心に秘められた覚悟は常人とは比べ物にならないくらい強い。すでに服はボロボロになり、身体中から血が溢れて肌も服も赤黒く染めていく。追い打ちをかけるように全身を貫いているであろう痛みを耐えながら、日和は強い意志で王子を見上げた。

——ヒュン!

しかし、その意志すら喰らおうと『影』が日和に向かって伸びる。まるで野生の肉食獣のように狙いをつけ、一直線に向かっていく。そうして狙いを定めたのは……日和のツインテールを結んでいるリボン。奇跡的にまだ無傷だったが、『影』は無情にも伸びてそのままリボンを喰らおうと——

「やめろ」

『影』がリボンを喰らう直前、黒い手が『影』を掴んで動きを止めた。触れたもの全てを喰らってしまった『影』に触れても無事な者……そんな者はこの場に一人しかいなかった。

「これを喰うことは、私が許さない」

その『影』の使い手である八王子 泪。彼女は『影』を止めながら静かに告げた。視線を横に流し、日和のリボンを……端に「HIYO」と縫われた唯一のリボンを視界に入れる。

無意識に溢れ出ようとする、過去の思い出に包まれながら。

「その髪、そろそろ邪魔にならないか？ 切つてやるからこつち来いよ」

「……嫌だ」

「ハア……」

少女を路頭から救い出し、新たに日和という名前を授けてから数日が過ぎた。王子は頬杖をついた状態で椅子に座りながら、床に座ったままボーっとしている日和に散髪の提案をした。しかし、日和はぶんぶんと首を横に振り、その提案を拒否した。ため息をつく王子だが、実はこうしたり取り取りはすでに何回か行われていた。

路頭にいた時からかなり長めだった日和の髪。しかし、見た限りの印象では「伸ばしている」のではなく「伸ばすしかない」ように感じられた。何かで結んでいたり留めているわけでもなく、ただ無造作に伸びているだけだったからだ。後ろ髪は肩まで伸び、前髪は明らかに視界を遮っていた。それに気付いた王子が切ることを提案し続けている

たのだが、結果はいつも同じ。日和の拒否で終わっていた。

だが、そう何度も拒否されるとその理由が気になってくる。王子は頼杖をついた状態を保ったまま日和に声をかけた。

「なあ、どうしてそんなに髪を切りたくないんだ？ 思い入れでもあるのか？」

「……………」

王子の質問に対し、日和はすぐに答えなかった。いや、答える余裕がないようだった。何かに耐えるように俯き、ギユツと両の手で握り拳をつくった。そうしてしばらくすると、日和はボソボソと何か呟き始めた。

「……………とう……………が、……………つた」

「あ？」

「お父さんが……………長い方が、似合ってるって……………言った」

蚊の鳴くような声に王子が首を傾げると、日和は意を決したように声を張って答えた。どうやら、かつて父親に長い髪を褒められたことが髪を切りたがらない理由らしい。答えるのに時間がかかったのは、父親のことを思い出したことで家族を思い出してしまったのだろう。よく見ると、その目尻にはかすかに涙が溜まっているように見えた。

「……………そうか」

まだ幼いながらも、家族を失った悲しみに耐える日和。だが現実には難しいもので、どんな小さなきっかけでもその悲しみをぶり返させてしまう。そもそも、彼女の年齢を考えればそれが当然だ。むしろ「耐えろ」と言うような人間の神経を疑う。

その当然に抗おうとする少女の顔を見ながら、王子は静かに相槌を打った。

「……………よし、こんなもんか。おーい、日和」

「……………」

次の日、王子は朝から裁縫セットを持ち出してある作業を行っていた。作業を続けて数時間、昼過ぎになったところでその作業は終了。一通りチェックを済ませると、昨日のようにボーっとしている日和に声をかける。突然呼ばれたことに疑問を感じる日和だったが、王子は微笑みながらそれを日和に見せた。

「これ、お前のリボンだ。その証拠に、端の方に『HIYO』って縫つていた」

そう言つて、王子が差し出したのは黒いリボンだった。さらに、王子は言葉が続けながらリボンの端の方を指差す。つられて見てみると、確かにそこには「HIYO」と縫

われていた。

縫われた文字も含め、リボン全体をまじまじと見る日和。少なくとも嫌がっている様子は無い日和を見て、王子はそのまま鏡の前まで移動した。そして、ちょうどいい高さの椅子を鏡の前に用意して日和を手招きした。最初は戸惑った日和だったが、すぐに手招きに応じて鏡の前に座った。

「……………うん。やっぱり前髪は揃えた方がいいか。日和、前髪だけ切ってもいいか？」

「……………嫌」

「心配すんな。前髪のちよつと伸びてるところを切るだけだ。ほんのちよつとだから……………な？」

「……………」

鏡に映る日和の顔を見ながら、王子は手で日和の髪を整える。そして、前髪だけ切ることを提案するがやはり日和は拒否。だが、今回ばかりは引くつもりがないらしい。日和の両肩を掴むと、自らも鏡に映りながら王子は説得を続けた。そして、ようやくその努力が実を結んだ。

「じゃあ、日和。ここを少しだけ……………つてことで、いいな？」

「……………ん」

こくり、と小さく日和は頷いた。了承されると、王子は優しく日和の頭を撫で、散髪

の用意を始めた。といつても前髪を少し切るだけのため、大したものじゃないが。

そうして前髪を揃えた後、王子はリボンで日和の髪を結んでいく。左側、右側と順に結んでいくと、二人の前にある鏡にはツインテールの少女の姿が映った。

「これ……」

「ツインテールだ。これならどんどん伸びても可愛いだろ。それに……うん、やっぱりな」

「？」

「見立て通り、すごく似合ってるぜ」

自分の顔の横で揺れる髪に触れながら、日和は不思議そうな顔をする。そんな日和を見て、王子は髪型の解説をしていく。すると、王子は改めて今の日和を見ながらうんうんと頷く。意味がわからず首を傾げる日和だったが、王子はその頭の上に優しく手を置き、静かに微笑んでみせた。

「……………」

自分に似合ってるかどうかまで日和はわからなかったが、特に悪い気はしなかった。髪型もそうだが、何よりその髪を保っている「HIYO」と縫われたリボンが気になっていた。悪い意味ではなく、良い意味で。すると、それに気付いた王子が再び口を開いた。



「そのリボンな、名前を縫った方は私が昔使ってたんだ」

「……泪、が？」

「ああ、ちょうどお前くらいの時だ。その時は後ろで一つに結んでいたんだが、私もそんな髪型をする歳じゃないしな。お下がりで悪いが、もう一個の方は同じのを見つけてわざわざ買ってきたんだ。それで勘弁してくれ」

「泪の……リボン」

名前を縫った方のリボンについて王子は話し始めた。そのリボンが王子のお下がりで、昔は自分も今の日和のように髪を結んでいた。かつて王子が使っていたリボンに今、自分の名前が縫われて自分の髪を結んでいる。そう考えると、日和はなんだかむずがゆくなった。なぜそうなったのかわからないが、それは決して不快ではなかった。

「……日和？」

小さく呟いた後、鏡に映った姿を黙って見続ける日和。その様子に王子は首を傾げ、声をかける。すると、日和はその顔にある変化を見せてゆつくりと呟いた。

「泪のリボン……可愛い」

「……バーカ。可愛いのはリボンじゃなくて、お前だよ」

今まで起きていた時は何があっても変わらなかつた日和の顔。だが、今は違う。その心を感じる感情が溢れたかのように、その顔には笑顔が浮かんでいた。今まで表情を変えなかつたため、どこかぎこちない笑顔だったが、それが日和にとつての精一杯の笑顔のように見えた。

王子はその笑顔に伝えようと、優しく微笑みながら日和の横にその顔を並べた。

「……日和」

内側からさらに溢れて出てこようとする日和との思い出。それは止めようと思つて止められるものではなく、その数はとてもじゃないが数え切れない。

しかし、忘れてはならない。今の二人は敵同士であり、互いに斃すべき存在。片や “悪”として、片や “裏切り者”として。そしてなにより、王子は自ら刻んだ傷に誓つた。

決して躊躇わない、と。

「ごめんな」

シャキン、と音を立てて『影』の鎌を日和の背後に当てる。このまま引いてしまえば『影』は日和を截断し、勝負はつく。

心が痛まないといえは嘘になる。だが、決して躊躇わないと誓った言葉も嘘ではない。全ては覚悟していた。『Re—CODE』のところから去った時から、こうなることを。

「お前も思っているだろう。『捜シ者』はきつと誰よりも正しい、と。それは私も同じだ。……だが、だからこそ私の手で止めてみせる」

ふと、『捜シ者』を信じていると思わせる言葉が王子からこぼれる。意識してのことか、それとも無意識になのか。それは本人にしかわからない。しかし、それはおそらく彼女の本音。嘘偽りのない言葉なのだろう。そのまま撤回することなく、改めて覚悟が込められた言葉を王子は口にする。

「そう、たとえ……『Re—CODE』を殺すことになっても」

「——ッ！」

冷たく、しかし確かな覚悟が込められた眼が日和を射抜く。かつての同志と完全に袂を分かつことを宣言する言葉と共に。その言葉を受け、日和の眼に今まで見せなかった

涙が溜まる。悔しき、悲しき、やり切れなさ……様々な感情が込められているであろう彼女の涙は、流れる前に押し止められた。耐えるように閉じられた瞼によつて。

「そんなこと、日和がさせない！ そんなことは絶対に——！」

ギョツと目を閉じ、日和は口の前に両手を合わせて作つた丸を持つていく。そして、そこから再び泡を放ち始める。たとえ王子が纏う『影』に喰われようと、次の瞬間には鎌が引かれて截断されようと構わなかつた。最期まで闘う意思を見せる日和。そして

——ポソツ

次の瞬間、日和が放つた泡は全て消え、日和の身体が消えた。そして、代わりに頭リボンをつけた小さな亀が現れた。この突然の現象……もはや言うまでもない。

「ロ、ロスト!? なんてこんな時に——つて、あう！」

突然のロストに動揺する日和。だが、動揺して激しく動いたせいでその身体は後転し、日和は甲羅を背にして倒れてしまった。

「ちつくしよー！ アンタは日和が絶対に殺すのN<sub>1</sub>ー！ 待つてなさいY<sub>0</sub>！ 起き上つたらすぐに殺して……って、起き上がれないー！ これだからロストはー!!」  
ちたばたと手足を暴れさせながら日和は起き上がろうとする。しかし、もちろん甲羅が重いせいで起き上がることはできない。強気な発言を続けるが、それを言っている時の姿があまりにも弱々しい。なんとというか、あまりにも滑稽である。

「……………」

そんな日和を前にして、王子は鎌を消したかと思うと背を向けて歩き出した。ロストして異能が使えなくなり、さらに動きまで制限されている好機としか言えないこの状況。敵ならば利用しない手はない状況だが、王子は背を向けたまま静かに告げた。

「私はロストした者には手は出さない。そもそも、それが異能者同士で闘う時の礼儀というものだ」

共にロストというどうしようもない弱点を抱えている異能者たち。しかし、だからこそ異能者同士で闘う時は守るべき礼儀がある。王子の行動はその礼儀を順守したゆえ

だった。

そうした礼儀を説くと、王子は背を向けたまま視線を動かして日和を見た。そして、はるか上から見下ろしながら最後の言葉をかけた。

「だが、次はその前に決着をつける。一度闘った以上、お前は必ず私が裁く。それが嫌なら、私を斃すんだな。『悪』に身を墮としたお前には……それ以外の道はないのだから」

「くう……！」

悔しそうに声を漏らしながら、王子の言葉を噛みしめる日和。彼女に「逃げる」などという選択肢は存在しない。いや、存在してはならない。逃れたいならば、立ち向かうしかない。立ち向かって闘い、敵を斃すしか道はない。それが、『悪』に墮ちるということなのだ。

「亀や！ めっちゃ亀やし！」

「ダクカクラク！ 亀じゃなくて王子が今どうなってるか知りたいんだってノ！」

「だから亀やし！」

「あー！ メンドクセー！」

一方、『捜シ者』たちに追いつくために先を急ぐ大神たちとはというと、遊騎の突然の「亀」発言にすっかり参っていた。なぜわざわざ遊騎に聞いているのかというと、もちろん彼が『音』の異能を持っているからである。『捜シ者』の足音を聞きつつ、王子の状況を聞いていたのだ。『脳』を使う優も聴力を強化することができるが、それでも遊騎には敵わない。だから彼に頼るしかないのだが、ご覧の有り様だ。刻は頭を勢いよくかいてイライラを表現していた。

「ふふふ、本当に亀がいたりしてねえ……。しかし、亀ですか。亀……。亀甲……。実に素晴らしい響きです」

「そ、そうですかね……。？」

移動しながらも、平家は「亀」というキーワードについて妖しい反応を見せる。さすがの優もそれには付き合えず、苦笑いを浮かべながら言葉を濁らせた。

すると、今まで黙って先頭に立っていた大神が振り返って驚きの言葉を口にした。

「平家の予想は当たりですね。どうやら、日和がロストして亀になったみたいです」

「ハア!? お前、なんでわかるんだヨ!？」

遊騎の言葉を補足するように、詳しい状況を大神が伝えた。なぜそんなことを彼が知っているのか。刻は真つ先にその疑問を大神自身にぶつけた。すると、大神はため息をつきながら自分の耳を指差した。

「……………これだ」

「これって……………ハ？」

どこか嫌そうに見える大神が指差した耳……………ではなく、耳に着けているもの。それは……………どこからどう見ても『にやんまる』だった。

「ギャハハハハ！ アツレ〜!? それってオシヤレですか、兄弟子様〜!? 恥つずかし〜!」

「テメエ、絶対いつか殺す……………!」

「落ち着け、お前ら……………。それで? 大神、それはなんだ?」

耳に『にやんまる』を着けている大神の姿を見て、刻は腹を抱えて大爆笑を始めた。その姿に大神は殺気を溢れさせるが、間に優が入ったことで落ち着きを取り戻す。そして、内ポケットから同じ物を取り出すと、全員が見えるようにしてから説明を始めた。

「……………これは俗に言う通信機つてやつです。見た目はこんなですが、わかっているだけでも無線とGPS機能付き。人数分あるので、仮に散り散りになっても連絡を取れるかと思ひまして。ちなみに、王子には別れる直前に渡しておきました。説明していなくて



も、あの人ならわかるでしょう」

「へえ……かなり年季が入ってるな。こんなのも一体どうしたんだ？」

「以前、クソネコが隠れて処分しようとしているのを見つけてまして。隙を見つけていただいております」

「闘いで使うって正直に言えばいいものを……まあ、いいか」

実は大神が最後に王子に渡した物がこれだった。見た目はただの『にやんまる』だが、性能は優秀な耳にかけるタイプの通信機である。見ると『にやんまる』の右手の先にはマイクがあり、耳にかけるとちようど口の近くにくるようになっていた。

そして、「年季が入っている」という優の言葉通り、全体的に細かい傷があった。おそらく以前、何かの機会に使っていたのだろう。すると、通信機を見た平家が微笑みながら小さく呟いた。

「ほう、これはこれは……。また懐かしい物ですね……」

「……平家？」

懐かしそうに呟きながら、平家は大神が見せた通信機を手にとって自分の耳に着ける。その仕草はとも手馴れていて、まるで以前にも使ったことがあるようだった。大神は詳しく聞こうとすると、その前に邪魔が入った。

「ろくばん！ オレも！ オレも『にやんまる』着けるし！」

「わ、わかりましたよ！ そんなに言わなくても渡しますから！ ほら、優も着けてくださいー！」

「悪いな」

「オイ、大神。この刻様にも寄越せヨ」

「……ハツ、出来の悪い弟弟子にはメスで十分だ」

「アア!? 上等だ、下つ端野郎！」

遊騎に迫られたことで、平家に詳しいことを聞くのを大神は諦めた。そのまま遊騎、優、刻に渡していくが、刻にだけは頭にリボンをつけたメスタイプのものを渡して揉めていた。おそらくさっきの腹いせだろう。

すると、今まで静かだった通信機から何者かの声が聞こえ始めた。

『う………!』

「この声……王子か？ オイ、どうか——」

『あ、ぐ………! ぐああああ!!』

「王子!?!」

突然、聞こえてきた王子の苦しそうな声。勝ったはずの彼女に何が起こっているのか。音でしか判断できない大神たちには何もわからなかった。

「ぐああああ!!」

王子が苦しそうに声を上げた瞬間、彼女が纏っていた『影』が突然動きだした。そして、そのままであろうことか王子自身を喰らい始めたのだ。自ら纏う『影』に喰われ、あらゆるところから血が噴き出す。苦しさに顔を歪めながら、王子はそれに耐えていた。

「がはっ! く、くそ……! 消えろ!!」

—— シュンツ!

「くっ……!」

なんとか苦痛に耐えながら、王子は『影』に消えるよう命令する。すると、纏っていた『影』は音を立てて消え、王子を襲った苦痛は止まった。しかし、負ったダメージはとても大きく、王子はそのまま膝を突いた。

『王子! どうした!?! 無事か!?!』

『つたく、なんなんだヨ! オイ、返事しろッテ!』

膝を突いた拍子に床に落とした通信機から、王子を心配する大神と刻の声が響く。本

当ならずぐにでも返事をしたいが、痛みがひどく思うようにいかなかった。すると、通信機の向こうで平家が口を開いた。

『……どうやらリスクが始まったようですね、八王子 泪。不甲斐ないあなたに変わって、私が説明しておきましょう』

こんな状況だというのに、どこまでも当たりが強い平家。王子が反応を返せずにいると、平家はそのまま説明を始めた。

『最強攻撃と鉄壁防御を誇る『エンプレス・パラドックス女帝の矛と盾』ですが、その強大な力ゆえ自らの肉体すら喰われてしまう恐れがある。大きな力の代償……これこそがまさに大いなるリスク。いいえ、大いなる矛パラドックス盾なのです』

通信機越しに説明される自身が持つ『女帝の矛と盾』大きすぎる力のリスク。当然のことながらそれを承知で使ったわけだが、かなりの痛手あることには違いなかった。なんとか日和に勝つことができたとはいえ、受けたダメージを考えるとほとんど相打ちのようなものだ。

『初戦でここまで痛手を受けるとはな……。王子、アンタはそこで休んでいろ』  
 『へッ、それだけ敵サンもやるってこった。そんな奴らと闘うのに傷持ちは邪魔だぜ。休憩してマシンになってから来いよナ』

『異能の相性が最悪やったからしやーないし。ごぼん、後はオレたちに任せときや』  
 『その通りだな。余計なことは考えず、今は回復に専念しろ』

平家から『女帝の矛と盾』エンブレス・パラドックス

大神たち。王子を気遣い、少しでも身体を休めるよう口々に言い放った。中には乱暴な言葉もあつたが、それくらい強く言わないと王子は素直に聞かないだろう。

「バ、バカ野郎……。すぐに追いつく……。だから、一丁前にオレの心配なんざすんじやねえ……」

しかし、それでも効果は薄いようで、王子は力が入っていない声で強気な言葉を口にした。仮にも彼らがいるのは戦場で闘いの最中だ。本来なら休む暇など存在しない。だから王子の判断は正しいことのようにも聞こえる。だが、彼らはこの闘いでは勝つ以外にもある目的があつた。

『……キャンプ場に桜小路さんを迎えに行くんだろう？ 全員、生きて……な』

「ツ………」

大神の言葉に、王子は思わずハツとする。そう、彼らはただ勝つだけではダメだった。一人も死ぬことなく、生きて勝つ必要があるのだ。今なおキャンプ場で彼らの到着を待っているであろう……。桜のためにも。

『まあ、時間も大分経つたのでもう気付いているから顔を合わせた瞬間に怒鳴られそうだがな。けど、アンタもわかつているだろう？ あの人は……。どんなに怒つていようと、心の底ではオレたちのことを心配している。そんなお人好しだって』

「……………」

ふと、王子の頭の中で桜と過ごした日々の記憶が流れる。自分よりも他人のことを気にかけて、時には当事者以上に心を痛めることもある。祭りに全員揃って行くことにならわっていたのも、自分たちの中を心配して少しでも良くなるようにと考えてのこと。彼女……桜小路　桜はそういう人間だと、王子の中にある記憶全てが語っていた。

だからこそ、わかった。今、桜は……大神の言う通り、怒りながらも自分たちの身を案じている、と。

「……………」

すると、大神たちの中で唯一何も言っていない平家が顎に手を当てて何か考え込んでいた。実は彼の中には、ある疑問が浮かんでいた。王子と日和の闘いが終わり、ひとまず状況が落ち着いたので彼は頭の中に浮かんだ疑問について、思考を巡らせた。

（なぜ『Re—CODE』は裏切り者である八王子のみを拉致したのか……。確かに彼らも『影』の厄介さは知っているから可能なら処理はしておきたいでしょうが、なぜわ

ざわざ……)

彼が考えていたのは、『Re—CODE』が王子一人を狙った理由だった。『影』の異能は本来なら半端な攻撃や物理的な防御すら無意味とする異能。厄介なのは理解できているが、わざわざ大神たちの前に罠を張って拉致までしたのだ。そこには、何かしらの意図があるはずだった。

そう、王子を狙う特別な理由が……

(——まさか……!)

その時、平家は一つの答えに辿り着いた。しかし、同時に彼は敵の術中にはまった時のような気分に似た嫌な気分を全身に感じた。

「……そう、だな。お前の言う通りだ、零……。……悪いが、オレは少し休んでから――」

——キィ……。イィン

「がは……。――」

突然、王子の背中に走る痛み。何かが背中の肉をかき分け、深々と突き刺さった。全身に焼けるような痛みが走る中、身体の芯から凍えてしまうような冷気が身体中に走った。一見、矛盾するような感覚だが、その理由は簡単だった。



なぜなら、彼女の背に突き刺さったのは……水。鋭利な先端と、触れただけで震えてしまいそうになるほどの冷たさを持つ自然の産物。だが、それは当然のことながら自然に生まれたものではない。彼女のはるか後ろに立つ……彼の手から放たれたものだった。

「雪……比、奈」

「……………」

氷を放ち者……『Re—CODE』が一人、雪比奈は眉一つ動かさない冷たい表情のまま、かつての同志を討った。

## code : 53 託す誓い

「がはっ……………！ 雪……………比、奈」

『王子!? どうした！ 何があった！ 王子！』

突如、聞こえた王子の悲痛な声。通信機越しにそれを聞いた大神が返答を求めるように声を繰り返す。しかし、今の王子にそれに答える余裕は無い。いつの間にか背後に立っていた男……………雪比奈から放たれた無数の鋭い氷を背中に受け、意識は完全にそっちに向いていた。

「う、く……………！」

「やったJAN、雪比奈！ 早くその裏切り者、やつちやいなYO！」

背後からの不意打ちを受け、王子はその場に倒れ込む。それに対し、ロストして亀になった日和は相変わらず甲羅を背にして倒れたまま、ちたばたと手足を動かしながら雪比奈の登場に喜んでいた。すると、王子は背中からくる激痛に耐えながら、震える身体を起こして後ろに立つ雪比奈を見上げた。

「雪比奈……………制裁のために、わざわざ来たのか……………。ご苦労なこと、だな……………」

「へへへ、その通り！ 裏切り者を殺すためなら、『Re—CODE』はどこからで

も——」

「……そうやってとぼけるのもそこまでです、泪」

「E?」<sup>え</sup>

わざわざ一人で来てまで制裁をしに来たことについて皮肉染みた言葉を返す王子。日和は皮肉に気付かず、に偉そうにしてみせるが、当の雪比奈はそれを無視して王子に冷やかな言葉をかける。どういふことかわからない日和は倒れたまま首を傾げた。

すると、雪比奈は王子を見下ろしたまま自分がここに来た本当の目的について口を開いた。

「あなたが持っているそのカードキー……渡してもらいましょうか」

「ッ……!?!」

雪比奈の意外な言葉に、王子の身体は一瞬だが強張った。突然のことだったが、実は雪比奈の推理は当たっていた。現に、王子の上着の胸ポケットにはあの『渋谷』と書かれたカードキーがしまわれていた。護りに優れる『影』の異能を持つ王子が持つことで、何があってもカードキーが『捜シ者』の手に渡ることが無いようにしていたのだ。

なぜわかったのか、と疑問が浮かぶが、今はそれはどうでもいい。今の時点で大切なのは、たとえ当たつていようと、それを雪比奈に悟られないようにすることだ。最悪の場合でも、とぼけ続けていれば自分を制裁するだけで済ませられるかもしれない。そう

自分に言い聞かせ、王子は何食わぬ顔で再び雪比奈の方を見た。

「嘘！ こいつカードキー持ってるNO!! 先に言つてYO、雪比奈！ わかつてたらカードキーだけでも奪ったのNI！」

「……何を言っている？ 大体、元『Ree-CODE』の私にカードキーを持たせるわけ……」

「あなたは『影』の守護神。物を護るのにあなたほどの適役はいないでしょう？ それに、一番あり得ない者にそのあり得ないことを押し付ける……あの男がやりそうなことだ」

日和も知らされていなかったのか、王子がカードキーを持っていることに驚いている。王子は構わず、自分が元『Ree-CODE』であることも言つてしらばつくれようとする。しかし、雪比奈は王子が護りに優れた『影』を使うからこそ任されたであろうことを言い当て、さらに思い当たる節があることも口にした。

すると、雪比奈は静かに右手を王子に向け、その手の周りに氷を作り始めた。

「……ハア、もう色々と疲れた。面倒だからさっさと終わらせる。さあ、泪……早く出  
しつ」

—————

「ぐあつー！」

ため息をつき、今まで丁寧だった口調を砕けたものにする雪比奈。そして、そのまま新たに作り出した氷を倒れた王子に向けて放った。瞬間、反射的にカードキーが入っている胸ポケットの辺りを王子は庇った。だが、もはやそんなことは関係ない。雪比奈は加減すること無く、問答無用で氷を放ち続けた。

——ドドド！ ドドドドドドド！

「昔は『流麗の守護神』とか言われてたくせに、情けない。……でも、悪い気はしない」「あぐー！ ぐあ、あああああー！」

——ドドドドドドドドドド！ ドドドドドドドドドド！

「そんな風に苦しんで死んでいく泪を見るのも……面白い」

「あ、ああ……！ ああああああああ！！」

——ヒュ、パアアアン！！

「——そこまでです」

「へ……平、家………」

容赦ない氷の連撃に、確実に死に近づいている感覚を味わっていた王子。その王子を救うように雪比奈に向かって放たれたのは『光』のムチ。肝心の雪比奈には避けられてしまったが、その攻撃をやめさせることには成功した。そうして王子を救った者、そのムチをしならせて戻っていった先にいたのは……最も王子を嫌う者である平家だった。

「Aあ〜！ ピカピカ野郎！」

「……やはり来たか」

平家の登場に、日和は再び手足を動かし始め、雪比奈はかすかに眉をしかめた。平家は『光』のムチを消し、腕を組んだ状態で雪比奈と王子の間に立つ。その構図から見ても、どうやら王子を助けに来たようだ。普段あれだけ毛嫌いしているため妙な凶にも見

えるが、この状況ではかなり頼もしい。

すると、平家は雪比奈を真つ直ぐと見て、自身が気付いた雪比奈の企みについて話し始めた。

「日和さんに八王子のみを拉致させたのはあなたですね？ 異能の相性も悪く、元仲間でもあることから最も闘いにくい者である日和さんをぶつける。そうすることで『女帝の矛と盾』エンプレス・パラドックスを発動させ、弱ったところを襲ってカードキーを奪う。まったく、姑息な男ですね」

「お前に言われる筋合いはない。それに、一番悪いのは引つかかった泪」  
「……ええ、その通りです！」

なんとか気付くことができた雪比奈の企み。その全容を明かしてみせるが、それを行つた雪比奈は苛立ち気に答えた後、あろうことか王子自身に責任転嫁し始めた。それは否定するかと思つたが、なんと平家も強い口調でそれに賛同した。

「元仲間の少女にくだらない同情をし、『コード：ブレイカー』とは思えぬくらい手を焼く！ さらに不意を突かれてカードキー一つ護れない！ 私の完璧なる計画を台無しにした八王子 泪は最低！ いいえ、最低の低です！」

「悪かった、な……」

王子を悪く言う雪比奈に賛同したかと思うと、強い口調のままペラペラと流れるよう

に王子に対する文句を並べる平家。身体的に傷ついている中で数多くの文句を言われ、王子は精神的にも参って弱々しい謝罪の言葉しか出てこなかった。やはり王子が嫌いなのか、と再認識するようだったが……

「……ですが」

休むことなく、続けて平家は口を開く。そして強い口調のまま、その眼に強い「怒り」を込めて雪比奈を睨みつけた。

「その人の優しさと情につけ込み、利用した雪比奈。あなたはそれ以上に……最悪です！」

「平家……」

静かに激昂し、怒りを露わにする平家。その強い思いを彼の背中からも感じながら、王子はその背中に確かな安心感を抱いていた。冷たく言っていたが、彼は王子の中にある優しさと情は否定していない。むしろ、それを弄んだことに対して怒りを感じている。そうして怒りを抱いてくれることが、王子にとって何よりも強い信頼になっていた。

「……何を熱くなっているのやら。それに、そのセリフはお前が言えたことか？ ふざけるのもいい加減にしてほしい……な！」

語尾を強めた瞬間、雪比奈は一瞬のうちに手を伸ばして勢いよく下ろした。すると、



平家の足元から彼を囲むように巨大な氷が何本も現れた。巨大な氷にしたから貫かれたかと思われたが……

——パキイイーン!!

「おやおや、随分と熱くなっていますね。氷のように冷たかったあなたはどこに行ってしまったのでしょうか?」

雪比奈の氷が下から貫いた瞬間、平家は『光』のムチを振るってその全てを砕いてみせた。互いに睨み合いながらも、まるで知り合いのように言葉を交わす二人。その様子を見て、日和は未だ手足を動かしながら口を開いた。

「ちよ、ちよつと! 雪比奈とピカピカ野郎って知り合い!? 日和、置いてけぼりでわかんない〜!」

「……あの二人は、かつての鬪いでも鬪っていた」

「E?」<sup>え</sup>

「かつての鬪い……あの二人は三日三晩不眠不休で鬪い続けた。だが、それでも決着はつかなかった。言ってみればあの二人は、因縁の相手ってわけだ……」

知り合いのように話す雪比奈と平家に動揺する日和だったが、王子がなんとか息を整えながらその疑問に答えた。思い返せば、原子力研究所で会った時も二人の間には何か因縁があるようだった。かつての鬪いから続く因縁というなら納得できそうだが……

(……しかし、どうにもそれだけって感じじゃなさそうだ。あの二人……一体どんな因縁があるって言うんだ……?)

二人の様子から、ただ決着がついていないだけの相手同士とは思えない。もつと強い、もつと根深い何かがあるように王子には見えたが、その疑問について考えるよりも先にその二人が動いた。

「元からお前は殺す気だが、お前と泪が消えれば残りの『コード・ブレイカー』の始末も楽。だから、今度こそ殺してやる」

「そう簡単にはいきません。それと、今の『コード・ブレイカー』をあまり甘く見ない方がいい」

「……どうでもいい。今は厄介な珍種もないし、『捜シ者』からも好きにするよう言われた。もう、邪魔は入らない」

「そうですか、それはなによりです。それでは、そろそろ……私たちの決着をつけましょう!」

——ドオオオン!!

平家の『光』と雪比奈の氷……互いに真正面からぶつかり合い、激しい轟音が部屋中に響いていった。

「……とりあえず、王子は平家さんに任せれば大丈夫そうだな」

場所は変わり、『捜シ者』を追う大神たち。移動しつつも通信機で平家たちの声を聞きながら、優は王子の安全を確信していた。しかし、他の者はというと……

「そうかネエ……。むしろ、平家がドサクサに紛れて王子を始末しそうだケド……」

「さすがにそれはないと思うが……巻き込まれそうではあるな」

「にばん、ごばんのこと嫌いやからなあ」

見事なまでに王子の身を心配していた。決して平家のことを信用していないわけではないが、普段の態度がアレである。心配になるのが当然である。

「おいおい……。確かに平家さんは王子のことを良く思っていないが、それとこれとは別だ。あの人は王子を護りながら闘う。そして勝ってみせるさ」

しかし、その当然が異常であるかのように優は呆れた表情を見せた。刻はそんな優に呆れながら、ふと頭に浮かんだ疑問を優にぶつけた。

「随分と信頼しているようデ……。つーかさ、前から不思議だったケド、なんでそこま

で平家のこと信じてるワケ？ アイツ、ただのヘンタイじゃん」

刻が優にぶつけた疑問……それは、優がそこまで平家のことを信じる理由だった。以前から平家の意見については忠実な優だったが、それを見ている者としては少し異常に見える。まあ、対象である平家自体が異常ということもあるが。

疑問をぶつけられた優はどこか気恥ずかしそうに頬をかくと、その理由を明かし始めた。

「なんとというか……オレはあの人のほど、自分を堂々と出せる人を知らない。内容はどうであれ、オレはあの人のそういうところを尊敬しているんだ」

「まあ……確かに堂々とはしてますね。すごいと思います」

優の答えを聞いた大神の頭には、学校の廊下で堂々と官能小説を読みながらテイタムを楽しむ平家の姿が映っていた。確かに、あそこまで自分のしたいことを堂々とする人間はそういないだろう。優の言う通り、その姿は尊敬できることかもしれない。

とりあえず納得のできる答えを聞いたため話が終わるかと思っていると、ふと優が顔を上げる。そして、どこか遠くを見るような眼をしながら、ボソリと意味深なことを呟いた。

「……そうだな。本当に、あの人はすごい。」

いつまでも自分から逃げているだけのオレなんかと違って……本当に、な」

「……優？」

まるで自分を蔑むような言葉に、どこかいつもと違う雰囲気を感じた。優の名前を呼ぶが、優はそれ以上は何も言おうとせず、ただ前を向いて足を急がせた。言葉ではなく態度で話を切るといふ彼らしくない行動に疑問を抱きながらも、大神は同じ『<sup>過去</sup>コード：<sup>捨て</sup>ブレイカー<sup>者</sup>』として無理に聞こうとはしなかった。

そうしてしばらく進んでいくと、大神たちはある場所に辿り着いた。そこは今まで通っていた廊下と比べると何十倍にも感じるほど広い空間。広さとしてはちようど学校の体育館ほどだが、特に何か置かれているわけでもない。ただ、床と壁を構成する白いパネルが敷き詰められているだけの寂しい空間だった。

「ここは……」

「確か、予備の修業場……だったか？」

「前に通った時もあったケド、無駄に広いトコだよナ」

突然、広い場所に出てきたため大神たちは一度立ち止まって周囲を見渡した。実は彼らがここを通るのは初めてではない。会長が小さくなつた例の騒ぎで桜を追いかけた際、ここもしつかり通つていた。その際、王子からここが予備の修業場であることも聞いていた。異能を用いる修行のため、何があつてもいいように予備を用意していたらしい。今回は特に使われることはなかったが。

「これだけ広いと敵が潜んでいるかと思つたが……それはなさそうだな」

「せやな。ここ、隠れるトコあらへんし」

「じゃ、さつさと行こーぜ。無駄に立ち止まつてる暇は——ん？」

部屋中を見渡しながら敵の有無を確認する大神だったが、幸いにも大神たち以外の人影はなかった。まあ、最初にも行つたがここには何も置かれていない。そのため、遊騎が言うように隠れられる場所などあるはずがないのだ。そのため、不意を突くには適していない。

そうして敵がないことを確信すると、刻がさつさと先に歩いていく。すると、何かを発見したように立ち止まった。その視線は部屋の中央付近に向けられており、それに

気付いた優が声をかけた。

「刻、何かあったのか？」

「……イヤ、単なる汚れだナ。まったく、使わなくても綺麗にはしとけよナ」

「汚れ？ どこだ？」

「ちようど真ん中のトコ。……つて、よく見りやそこら中にあるじゃねーカ。なんだよ、この赤っぽい汚れはヨ……」

優に声をかけられながら中央を凝視する刻。そして、それが汚れであることを伝えた。気になって優も隣に立つて見ると、確かにそこには赤っぽい何かがあった。さらに刻が注意深く周囲を見てみると、どうやら他にもあったらしい。意識しないと気付かなかったが、よく見るとそれは部屋中に点々としていた。

一見すると、どう見てもただの汚れだ。普段から使われていない場所のため、変な汚れがあってもおかしくはない。しかし、優はその汚れから違和感を感じて仕方がなかった。その違和感の正体を掴もうと顎に手を当てて考える優を見て、刻は笑みを浮かべながら軽口を叩いた。

「オイオイ、こんな汚れくらい気にすんなヨ。なんだったら、鬩いが終わった後に掃除すりゃ——」

「——がう」

「ア？」

「違う……。これは、ただの汚れじゃない……」

深刻な顔でそう言い放つ優。その様子を見て、大神と遊騎も近くに來て話に加わった。

「どうした？」

「なんや汚れがどうの話とつたけど」

「あの汚れだヨ。気にしなきゃいいのに、優が無駄に色々と考えてんだ」

「汚れ……あれかいな。そない気になるんやつたら、消せばええねん。よんばん、これ借りるで」

「ア？ つて、遊騎！ それオレのハンカチだろーカ！ 気に入ってるヤツなんだか

らヤメロー！」

大神はわからなくて当然だが、遊騎は自慢の聴力で話だけは聞いていたらしい。刻は簡単に数ある汚れの一つを指差しながら簡単に説明すると、面倒そうに欠伸をした。すると、汚れを発見した遊騎がそれを消そうと、刻のハンカチを（無断で）借りてから近づいていった。刻の怒号を聞き流しながら、遊騎は汚れを拭こうとハンカチを――



——ゴオ!

「ツ——!?!」

「——遊騎! 今すぐそこから離れろ!」

汚れを拭こうとハンカチを近づけたまさにその瞬間、汚れを中心にして謎の黒い空間が広がった。危険を感じた遊騎は、背後から聞こえた優の声を聞いて反射的に後ろに跳んだ。

「遊騎! 大丈夫か!?!」

「ななばんが声かけてくれたから大丈夫や。ありがとな」

「なんだヨ、これは……!」

素早く跳んで戻ってきた遊騎を見て、優は異常がないか確認する。遊騎は目の前への警戒を怠らないまま、札を交えてそれに反応する。突然のことに驚きが隠せない刻が眩

きながら見る先……先ほどまで遊騎がいたその場所には、不気味な黒い空間が生まれていた。

「どうやらただの汚れじゃなかったようだな」

「ああ。……しかも、あれ一つじゃなさそうだ」

警戒心を最大にして構える大神。それに続くように呟いた優の視線の先を見ると、遊騎がいた場所以外でも黒い空間が発生していた。その数はどんどん増えていくが、どれも共通しているのは汚れがあった場所を中心に行っているということだった。どうやら、最初の優の警戒は正解だったらしい。

何が起こるかわからない状態の中、いつでも動けるように四人は構えた。すると、ちようど中央にある黒い空間に変化が起きた。

「……ハハハ。驚いてるな、『コード：ブレイカー』」

「誰だ！」

突然、黒い空間の中から聞こえてきた謎の声。大神が声を大にしていち早く反応すると、謎の声は困ったような口調で話を続けた。

「おっと、そう叫ぶな。警戒しているのがバレバレだ。まあ、仕方ないか。こんな……」

——ズズ、ズズズズ……！

謎の声に続いて、黒い空間は不気味な音を立て始める。すると、黒い空間の中央から何か伸びる。そして……

「……こんな風に現れたらなあ」

『——ッ!』

まさかの事態に、四人は一斉に息を呑んだ。さつきまで誰もいなかった場所に、見慣れぬ男が現れたのだ。オールバックの黒髪に、露わになった額に刻まれた十文字の傷。白衣を纏い、異様な雰囲気を含ませている。だが、さらに驚くべきなのは別のこと。その男は明らかに、あの黒い空間から現れていた。

「……なんだ、お前は」

「名乗るほどのものじゃないさ。そうだな……『捜シ者』に仕える異能者、つて言えば十分だろ?」

「要するに敵ってコトか。マ、この状況じゃそれしかあり得ねーがナ」

黒い空間から現れた男に意識を向ける大神に対し、男はひらひらと手を振っておどけてみせた。そして自分が『捜シ者』側の異能者であることをあっさりと明かした。だが、そんなことは刻が言うようにわかりきったことである。これは、明らかに『捜シ者』たちが仕掛けた罠だった。

「そういうことだ。しっかし、最初の方で見抜かれるとは思わなかったぜ。そこのお

前……確か『コード：07』だったか？ いい勘してるじゃないか」

「そんなもんじゃない。ただ、前にここを通った時は汚れなんて一つも無かった。あれからそんなに経っていいないから、あそこまで汚れるわけがないって思ったただけだ」

「……なるほどな」

早い段階で違和感に気付いた優を称賛するような男の言葉に、優は構えを解かず冷ややかな対応を見せた。以前見た時の記憶から判断したという優の言葉に、男はなんだかつまらなそうに肩を落とした。すると、男は黒い空間から出てきて再び話を続けた。

「先に言っておくと、オレは異能『転移』を使う異能者だ。仕組みは簡単。オレは自分の血がある場所から、他に自分の血がある場所に『転移』することができる空間をつくれる。ま、見りやわかるがああ黒いヤツだな。オレは『Re—CODE』の時雨に自分の血が入った瓶を渡し、別の場所へ出番を待つ。そして、時雨がちょうどいい場所に血を振り撒いておけば……」

「こうして『転移』することで不意を突ける……というわけか」

「そういうことだ」

意外にも、自らの異能である『転移』について男はペラペラと話し始めた。自分の血がある場所同士なら『転移』が可能という男の異能。ということは、部屋中にあつた汚れは男の血だったというわけだ。そして、男の話によれば『Re—CODE』の時雨が

この部屋に血を撒くことで、その『転移』を可能にしたようだ。かなり手が凝った方法だが、不意を突くには適している。

しかし、不意を突くことを考えるとこの状況はどうだろうか。今、男は大神たちの前に出てきてしまっている。これでは不意を突くどころではない。すると、男はため息をつきながらさらに続けた。

「まあ、本当ならお前たちが部屋を出る直前に『転移』して奇襲する予定だったんだがな。『コード：07』が気付きそうだったし、『コード：03』に關しちゃ血を拭こうとしやがった。血を拭かれたら、それだけ『転移』する場所が減る。そうなっちゃたまらないから、こうして出てきたってわけだ」

「なるほどネ。長つたらしい説明をドローモ」

「だが、それももう終わりだ」

「せやな」

計画が狂わされたことを悔やむかのように男はため息をつく。だが、刻、大神、遊騎の三人はそんなことに構わず臨戦態勢に移った。たとえ何をしようと、『捜シ者』側に属する敵は斃す。それが今の彼らがなすべきことだ。

すると、今すぐにでも向かってきそうな大神たちを制すように、男は両手を前に出した。

「おいおい、慌てるなよ。まだ役者は揃つちやいなんだからな」  
「……何を言っている」

男の意味深な発言に、大神は眉をしかめながら反応する。そんな大神に対し、男は二やりと笑みを浮かべながら続けた。

「だから、言つただろ？ オレの『転移』はオレの血がある場所から他に血がある場所に『転移』できる空間をつくること。つまり——

その空間さえ通れば誰でも『転移』できるんだよな、これが」

——ズズズズ！　ズズズズズズズズ！

男の言葉が終わつた瞬間、全ての黒い空間から不気味な音が響く。そして次の瞬間、無数の人間がそこから現れて大神たちを取り囲んだ。

「な……!?!」

「なんだヨ、この数ハ……!?!」

「……あかん。数えんのも嫌になるわ」

「くそ……!?!」

黒い空間から現れ続ける無数の人間たち。どうやら彼らも男が『転移』してきた場所に控えていて、男がつくった『転移』の空間から来たようだ。男が『捜シ者』側の異能者であることを考えると、おそらく彼らも同じだろう。『捜シ者』が日本に来た際、多くの危険分子を引き連れているということは大神たちも最初から聞いていた。しかし、こうして実際に見ると圧倒的な数である。

「ハハハハ！ 言っておくが、こんなもんじゃないぜ!?! 『捜シ者』が集めた人間は異能者以外にも多くいる！ それこそ、ただの人間だが人間離れたイカレ野郎もいる！」  
無数に存在する敵の中で豪語する男。『転移』を使う彼を斃せば、これ以上敵が増えることを防ぐことができる。しかし、少なくとも目に見える範囲に男の姿は無い。おそらく人混みに身を隠しているのだろう。木を隠すなら森の中とはよく言ったものだ。

「さあ、『コード：ブレイカー』！ この異能者全員を相手にして持ちこたえられるかな!?! 仮に突破できたとしても、その間に『捜シ者』は目的を達成してしまうだろうが

な！」

『うおおおおお!!』

どこからか響く男の声に続き、『転移』してきた敵たちはその闘志を見せるように大声を上げた。部屋全体に響き渡るその声を聞きながら、大神たちは嫌な汗を流した。

「おそらく一人ひとりの実力は大したことない。だが……」

「多すぎるわ。何十分かかるかわからん」

「しかも、まだまだいるっばいしな。くそ、面倒くせえ……い！」

大神、遊騎、刻の三人は別々の方向で構えながら、口々に文句を言った。パツと見ただけでも敵の実力がさほど高くないことは見抜けたが、それを埋めるほどの数がいる。さらに、男の口ぶりからして増援の可能性も高い。早く『捜シ者』に追いつかなければいけない大神たちにとって、これは不意打ちを受けるよりも最悪の状況だった。

「……………」

すると、今まで黙って状況を見ていた優が静かに視線を動かした。

左には無数の敵。

右にも無数の敵。

はるか向こうには……先へと続く廊下への入り口が見えた。

それを確認した時、彼は覚悟を決めた。



「……オレがやる。お前たちは先に行け」

「ゆ、優!?!」

一歩前に出て、大神たちを庇うように手を伸ばす優。そして、あろうことか無数の敵を前に、一人で闘うことを宣言した。その言葉に、大神たちは耳を疑った。

「何考えてんだヨ! どんな異能持つてるかもわからねー敵があんだけいるんだ!

お前が闘って勝てるワケねーだろガ!

「あかん! あかんで、ななばん! こんなの一人で勝てる闘いちゃう! 皆で闘うべきや! それが嫌なら、ろくばんとよんばんを先に行かして、オレも残る!」

「王子の時とは違って一対一じゃないんだ! たとえ時間はかかっても、全員で――

!

「黙れ!!」

『——ッ!』

口々に優の言葉に反対する刻、遊騎、大神。いくら一人ひとりが大したことないとはいえ、この数を相手に一人で闘うのは無茶だ。誰かに押しつけるのではなく協力して闘うことを提案するが、優の叱りつけるような怒号で三人は思わず言葉を失った。

そうして数秒の沈黙が生まれると、優は静かに口を開いた。

「これが一番いいんだよ。オレたちの目的は『捜シ者』にパンドラの箱を渡さず、奴を

ボックス

斃すこと。追いかける人間は一人でも多い方がいい。いくら平家さんがいるとはいえ、王子がカードキーを持っていることはすでにバレている。何かの拍子に敵の手に渡るかもしれない。そしたら、何もかも終わりだ。……それに、お前たちにはそれ以外にもやることがあるだろ?」

「やること……?」

諭すように言葉を紡ぐ優。その最後の言葉に大神が反応すると、優は「ああ」と言つて一人ひとりに声をかけた。

「刻……お前はあの虹次を斃すんだろ? そのために煙草もやめて、強くなった。あの虹次は消耗した状態で勝てるような相手じゃない。全開の状態で……アイツに修業

の成果を見せつけてこいよ」

「……………」

「そして、遊騎。お前とあの時雨の間に何かあるかは聞かない。だが、聞かなくてもわかる。お前とアイツは決着をつけなきゃならない。早く追いついて、お前なりの決着をつけてこい。……それに、平家さんがいない今、お前がトップなんだ。二人のこと、任せただぞ」

「ななばん……………」

「最後に、大神。お前と『捜シ者』が兄弟だろうがなんだろうが……………この際、もう関係ない。斃すと決めた以上、絶対にやり切れ。そして……………お前お得意の薄っぺらい笑顔で桜小路と一緒に迎えに行くぞ」

「優……………」

三人それぞれに、彼らのやるべきことを伝える優。本当なら、言われるまでもないことだろう。だが、優はあえてそれを言うことで再確認させた。彼らが内に秘める……………彼らの決して揺るがぬ覚悟を。

そして、優は自分の中にある覚悟を伝えるように、大神と向かい合った。

「大神。これ、お前に預けておく」

「これは……………通信機？ どうして……………」

「それがなきや、お前たちや平家さんたちの状況がわからない。こつちからも何があつたか伝えられない。つまり、めちやくちや困るわけだ。だから、絶対にこれをもらいに行く。お前はオレがもらいに行くまで……大事に預かつてくれ」

自分の分として渡された通信機を大神に預け、必ずもらいに行くと言は宣言した。これはつまり、「必ず生きて合流する」と彼は言っていた。通信機という形に自分の覚悟を乗せた優の誓いを受け、大神は力強く優の通信機を握りしめた。

「……臭えこと言つてんじゃねえよ。あんまり遅えと……握り潰してやるからな？」

「上等」

乱暴な言葉を返す大神だったが、その顔からは優への信頼が感じられた。大神からの言葉を受け、優は敬礼するように手を挙げて再び大神たちに背を向けた。

「ハア、わかつたつつの。ここはお前に任せてやるヨ。思えば、こんな雑魚相手に刻様が出張つても仕方ねえからナ」

「早いとこ終わらせて助けに来るわ。せやから、待つといてや」

大神に続いて、刻と遊騎も優に任せることを受け入れる。優が二人に笑みを返すと、四人はそれぞれのやるべきことをするため、それぞれ背中合わせになるようにその場で構えた。

「……デ？　まずはこの状況をどうするヨ。出口はあるんだろうが、そこまで抜ける

だけで骨が折れそうだぜ」

「ああ、その心配はない。任せておけ」

「オイオイ、何か策でも——って、ドワアアア!？」

優に任せることを決めたはいいが、どうやって先に行くかを聞く刻。すると、優が自信満々の返答をしてきたため、振り向こうとしたその瞬間……刻は物凄い力で後ろに身体を持っていかれた。

何があつたのかと見てみると、右手に刻と遊騎、左手に大神といった具合に優は彼らの襟元を掴んでその身体を持ち上げていた。そして、優はそのまま一歩ずつ前に進んでいく。

「よし、行くぞ」

「あ、あの……優？ まさかとは思いますが……」

「イヤイヤ、嘘ダロ……？ そんなことしないよナ？ ネ？ 優先輩？」

「ゴチャゴチャ言うなや。歯ア食いしばるとき」

『脳』で強化された力でその身体を持ち上げられている大神たち。これから優が行うであろう突破方法に抑えようのない嫌な予感を感じるが、何を言っても優は止まらない。

そして……その時はやってきた。

「じゃあ、お前ら……行くぞー！」

そうして優が叫んだ瞬間、強化した脚で優は走り出した。無数の敵にそのまま突っ込みそうになるが、優はその直前で足をバネのようにして高々と跳んだ。助走の勢いのままに跳んだ彼らは風を切り、無数の敵を見下ろした。そして、優は出口に狙いを定めると、そのまま空中で大神たちの襟元を全て右手で掴み直した。そして……

「オラアアアアア!!」

「ギヤアアアアア!! 死ぬうううう!!」

大きく右腕を振りかぶり、出口に向かって大神たちをぶん投げた。跳躍した勢いに加えて、『脳』で強化された力のままに放り投げられた刻たち。遊園地の絶叫マシン顔負けのスリルと風が全身を切る感覚を味わいながら、一瞬だが走馬灯を見たという。

「※○▼☆&\$@!?!? ……優、テメエエエ!! 覚えとけヨ、ゴラア! 全部終わつたら絶対につつ殺してやるからナ!!」

「クソ野郎が……!」

「あれ? ……あつかんわ。なんや、寝違えたし」

見事に廊下が続く出口のスペースに入った刻たち。声にならない悲鳴を上げたかと思うと、優に対する怨み言を大声で叫んでから走り出した。その際、遊騎の首があらぬ方向に曲がっていたが、なんとか力任せに戻っていた。

「後は……これだな」

——ガシャン!

刻たちを放り投げた優はちようどよく出口の近くに着地する。そして、その近くにあった「非常用」と書かれたボタンを見つけると、間髪入れずにそれを押した。すると、部屋の出口と入り口に鉄製の扉が現れて出入りを完全に封鎖した。これで優をかわして大神たちを追うことができなくなったわけだが、それと同時に優は無数の敵がいる密室の檻に閉じ込められたことになる。

そして、それを好機と見たあの男が再びどこからか口を開いた。

「仲間をぶん投げるなんて、随分と大胆なことをするもんだな。だが、特に意味は無

い。お前をなぶり殺した後で扉を破壊すればいいだけだ」

「そんなことはさせないさ。それより、オレが他の連中と闘っている間に新しい入口を用意しておいた方がいいぞ。……いや、死んだ連中を戻すための出口、かな」

「……ハッ、面白い」

姿を見せずに強気な言葉を口にする男に対し、優は不敵な笑みを浮かべながらわかりやすい挑発を試みさせた。その言葉を聞いた周囲の敵たちの顔が怒りに染まっていくが、男は対照的に鼻を鳴らして感心していた。

自分以外の人間は全て敵。異能すらわからず、その数も増え続ける。味方は来ず、武器は『斬空刀』と懐に潜めている二丁の拳銃。そして、『脳』で強化された己の身体のみ。圧倒的かつ絶望的な差の前に、優は静かに呼吸を整える。

そして……彼は構えた。その拳に「必ず勝つ」という誓いを握りしめながら。目の前で無数に存在する「悪」をその眼に捉えた。

「覚悟決めろよ。お前らは……一人残らずオレが裁く」

その言葉を皮切りに、「悪」はたった一人の男を斃すために一斉に力を振るった。



## code : 54 垣間見る強さ

『捜シ者』が傘下に置く無数の異能者の一人である『転移』を使う男。彼の手により、彼と同じく『捜シ者』に仕える無数の異能者たちが一同に『渋谷荘』の地下に現れていた。だが、そんな圧倒的な数の暴力に対抗するのは……たった一人の強すぎる暴力だった。

「うおおおおお!!」

威勢のいい大声と共に、2 mを超える大男が標的に向かって突進していく。真っ直ぐと伸びた両腕の先を見ると、その手は鉄のように『硬化』している。そのまま『硬化』した両手で標的を押し潰そうとしているのだろう。

しかし、そんな直線的過ぎる力任せの攻撃が彼に届くはずもなかった。

「……………」

——ガシイ!

「なあ?」

2 m以上の巨体から繰り出されるパワーを乗せ、さらに鉄のように『硬化』した手による突進攻撃。常人ならば直撃を受けた時点で死んでいる。大神たち『コード：ブレイ

カー』なら問題ない。だが、それは避けるからであり、いくら彼らでも真正面からこんな攻撃を受ける気は無い。

だが、ここにいる彼らの同業者……優はそれをやってのけた。大男の超パワーの攻撃を、優はしつかりと両の手で受け止めてみせた。受け止められるとは思っていなかった大男は、額から嫌な汗を溢れさせながら驚愕の言葉を漏らした。

「う、嘘だ……！ オレの『硬化』のパワーがこんなガキに……！」

「嘘じゃない。どうしても信じられなければ……この痛みで証明してやる！」

——バキィ！

「ギヤアアアアア!!」

大男の攻撃を受け止めた優は、そのままの体勢で冷ややかに大男の顔を見上げる。そして、自らの両手で受け止めている大男の手をなんの容赦もなく粉々にした。『硬化』していたことが仇になり、跡形も無く砕け散ってしまった大男の手。そこから伝わる激痛を少しでも逃がすように大声を上げるが、その後の優も容赦はない。

「フッ！」

「うぐあ!!」

痛みに悶える大男の腹に向かって重く鋭い蹴りを喰らわせた。そのまま大男は後ろに吹っ飛んでいき、最終的には進路上にいた他の者たちも巻き込んでいった。

「……ふん。会長が手加減した時の攻撃の方がまだマシだな」

「オラア！ よそ見してんじやねえ！」

「まったく、次から次へと！」

他の者たちも巻き込んだまま失神した大男に向かって、優は小さく余裕の言葉をかけた。しかし、彼を襲う敵は大男だけではない。背後から次の敵が襲ってくるが、優は振り向きながらの回し蹴りを繰り返した。だが、そこで感じられるべき手応えは優が考えていたものとは違った。

——ガゴオン！

「ッ!？」

優の蹴りは何の問題も無く敵を無力化した。だが、その敵から感じられる手応えは人にしては硬く、さらにはバラバラに砕けてしまった。砕けた破片を見てみると、大小それぞれ岩だった。だが、問題はそれだけではなかった。

——ゴゴ、ゴゴゴゴゴゴ！

「破片から再生……面倒だな」

優の蹴りでバラバラに砕け散った破片の一つひとつが音を立てて動きだし、それぞれ破片同士でくっ付き始めた。そのサイズはバラバラで、小型のものがほとんどだが中型のものもあった。全身が岩でできており、まるで岩人形だった。おそらく、先ほど優が

砕いたものは大型の岩人形だったのだろう。それが砕かれたことで新たに岩人形を大量に生成したのだ。

岩人形たちは優を取り囲んでいき、その動きを制限しようとした。ちようど子どもくらの大きさだったが、なにぶん数がある。どんどん優の周囲を取り囲んでいく。

だが、それでも優にとっては面倒なだけであつて、問題ではなかった。

——キイイン！

「囲んでくれたのはありがたいな。おかげで、一撃で済んだ」

岩人形全員で優を取り囲んだのとほぼ同時。優は『斬空刀』を一瞬で抜き、そのまま周囲を一閃した。その切れ味の鋭さを物語るように、岩人形たちは真つ二つになつて再び転がり落ちた。

すると、そこで一人の男が口走つた呟きを優は聞き逃さなかつた。

「オ、オレの『岩石』で作つた岩人形をこつとも簡単に……！」

「……この手のは、本体を仕留めれば終わりだな」

自らの異能で生成した岩人形をいとも簡単に無力化された男。その男に狙いを定め、優は足元にあつた岩人形の破片である岩を手に取つた。そして……

——ブン！

「ふんっ！」

空気を切るような音を立てて、岩は男の顔面に直撃した。『脳』によって強化された優の腕力で投げられ、男はそのまま再起不能になった。

「調子に乗りやがって！ オレの『消化』で特別にブレンドされた消化液で骨まで溶けろ！」

仲間がやられても動じることなく、さらに別の男が前に出て優に迫っていく。男は走りながら口をすぼめると、そこから唾を飛ばすように消化液を繰り出した。それに気付いた優が避けると、消化液は地面に付着した。すると、異臭と低音を撒き散らしながら付着した部分を溶かし始めた。

「人に向かって唾を吐くな、って誰かに習わなかったかよ……。その口に蓋してろ！」  
——ズガアアーン！

「う、ぐ……い！」

男の攻撃方法に呆れながら、優はその手に拳銃を構える。そして間髪入れずに発砲すると、銃弾は男のすぼめた口を通って男の喉を貫いた。その正確な射撃の腕に驚く暇もなく、男はその場に斃れた。

「これで三十人目……。だな。あと何人いるのやら」

硝煙を吹き消した優が斃した敵の数を確認する。しかし、目の前に未だ広がる無数の敵を見て、思わずため息をついた。すると、その無数の敵の中から少し前も聞いた声が

響いた。

「まったく恐ろしい奴だな、夜原 優……。これは本気でいかないのかもなあ」

「本気、か。仲間を『転移』させるだけのお前の本気がなんだか知らないが、関係ない。何をしようとオレはここでお前ら全員を斃す」

——ウオオオオオオオオ!!

どこか余裕を感じさせる男の発言に対し、優は改めて強い意志を言葉にしてみせた。そして、未だ目の前に広がる殺気立った無数の敵に向かって、彼は真っ直ぐ突っ込んでいった。

「いくで、にやんまる号令。にやんち03!」

「……にやんち04」

「にや、ん……」

「ろくばん! 声小さいで! ちゃんと確認せなあかん!」

一方、『捜シ者』に追いつくために先に行つた大神たち。緊迫した様子の優とは違い、どこか和やかな雰囲気を漂わせていた。どこから用意したのか、それぞれのナンバーに合わせたゼツケンを一人ひとり着け、遊騎の号令によつて自らの存在を確認していた。だが、やる気になっているのは遊騎だけで、刻と大神は「どうしてこうなつた」とでも言いたげな表情をしながら号令に参加していた。

「ネエ、遊騎クン……。どうして急にこんなやる気になつてるワケ？」

「ななばんに言われたからな。にばんがおらん今、一番上なのはさんばんのオレや。せやから、よんばんとろくばんはオレが守つたるし」

「遊騎クンは責任感が強いんだネ……。……優の奴、余計なことしかしねえナ」

急にやる気を出した理由を刻が尋ねると、遊騎は優と別れる直前に彼から言われた言葉を実行していることを告げた。有言実行していく遊騎の行動力に刻は少し引きながら、誰にも聞こえないほどの声で優への苛立ちを言葉にした。

すると、今まで黙っていた大神が精一杯の笑顔でなだめるように遊騎に声をかけた。

「ええと、そんな無理に番号にこだわらなくても……」

「そーだヨ、遊ゆチャン？ 『よんばん』じゃなくて『刻クン』って呼んでくれれば——」  
「嫌や」

それぞれ話しながら着けているゼツケンを脱ぐ大神と刻。すると、その刻の言葉を遮

るように遊騎はバツサリと否定の言葉を告げた。そして、少しだけ足早になって二人の前を走り出しながら、遊騎はその理由を口にした。

「名前やなくて番号で呼ぶ。……友達やあらへんもん」

「……………」

「…………へいへい、またそれですか」

遊騎が頑なに番号呼びにこだわる理由……それは友達ではないから。遊騎邸で桜に「友達だ」と言われた時も、『渋谷荘』で大神と刻の間に入った時も。彼は自分に友達は無く、『コード：ブレイカー』同士も友達ではないと告げた。この「友達」というのは、遊騎にとつて何か強い意味を持つ言葉なのだろう。それこそ彼の過去が関係してくるような、とてもとても深い理由が。

そのいつも通りの返答に、大神は静かに遊騎を見て、刻は呆れたようにため息をついた。互いの過去を詮索しない無言の掟がある『コード：ブレイカー』<sup>彼</sup>にしてみれば、こうして無理に踏み入っていかないのが普通である。

「せやかてオレは、認めたヤツしか番号で呼ばん。にばんも嫌いやけど認めとるし、ななばんも同じや。だから、にばんがごばんを助けて戻ってくることも、ななばんが敵を斃して戻ってくることも信じとる」

「遊騎……………」



すると、先ほどの言葉に補足するように遊騎は言葉を続けた。友達ではないから名前  
で呼ばない。それでも、番号で呼ぶのは彼が「同業者」として認めた証だという。普段  
から平家とは意見の対立が目立つ遊騎だったが、心の底では彼を認めているようだ。そ  
して、優のことも。

そんな遊騎の仲間に対する信頼を感じ、大神が彼の名を呼んだ……その瞬間。

——ゾクツ!!

『——ッ!』

突然、全身を駆け抜けるような寒気と共に押し潰されるようなプレッシャーを感じ  
た。まるで身体全体が警鐘を鳴らしているかのように、彼らは思わず走っていたその足  
を止めた。

そして、その目の前にはそのプレッシャーを放つ存在が確かに立っていた。

「悪いが、『捜シ者』のところには誰一人として行かせはしない」

「……虹次!」

三人の前に立ちほだかる一人の男……癍痕の『Re—CODE：03』の異名を持つ虹次が重苦しいプレッシャーと共に放ったその一言は、確実に大神たちの警戒心を振り切らせた。

「……刻、よくぞここまで来た。だが、今は前回と違い散歩中などではない。あの時のようにお前と遊んでいる暇はなさそうだ」

「……………」

虹次は大神たちを一瞥すると、刻にその視線を向けて静かに語った。やはり彼も『捜シ者』を守護する存在である『Re—CODE』が一人。『捜シ者』が関わった事態となれば一切の容赦なく敵を討つ。以前、『渋谷荘』で会った時とは違うのだとひしひしと伝わった。刻もそれを感じているのだろう。彼は虹次の言葉を黙って聞いていた。

すると、刻の隣にいた遊騎が一步前に出て、強い意志を込めた眼で虹次を睨みつけた。「遊んでる暇がないのはオレらも同じやし。だからさっさと……そこどけや！」

「燃え散れ！」

自らの足に『音』を纏い、遊騎は音速で虹次に突っ込んでいく。そして、大神も『青い炎』を左手に纏いながらそれに続いた。向こうが本気である以上、こちらも本気で行くしかない。相手にしてみれば多勢に無勢だが、それを無視するほどの力が虹次にはある。先手必勝ではないが、遊騎と大神は少しでも闘いを有利に運ぼうと虹次との距離を詰めていった。

だが――

『無空』

「な――!?!」

瞬間、遊騎が足に纏っていた『音』と、大神が左手に纏っていた『青い炎』が消えた。だが、虹次は目に見えて何かしたわけではない。なぜなら、彼は大神たちの前に現れてからずっと同じ姿勢……両手をポケットに入れたまま一度も出していないのだから。

何をされたのか理解が追い付かない二人に対し、虹次はゆっくりと両手を出した。そして、二人の前にそれぞれ掌を向け、諭すような言葉を向けた。

「……帰れ、生き急ぐな。お前たちはまだ若いのだから」

――ドンツ!

掌から放たれた『空』の衝撃に、大神と遊騎はなす術も無く吹き飛ばされる。背中が床に叩きつけられる前になんとか体勢を整え、二人はそのまま受け身を取ってダメージ

を逃がした。

「遊騎、無事か！」

「大丈夫や。……けど、やばいで。多分やけどアイツ、一瞬だけ自分の周りを真空状態にしたんや。真空状態やったら、空気で振動を伝えるオレの『音』は届かへん。それに、真空やと酸素が少なくなるからろくばんの『青い炎』も消えてまう」

「チツ……！」

虹次に視線を向けたまま遊騎の安否を確認する大神。遊騎はその声に最低限の返答をすると、冷静に先ほどの現象についての考えを述べた。すると、再び両手をポケットにしまった虹次が「そうだ」と口を開いた。

「オレの異能『空』はその名の通り、空気そのものを操る。風を起こすも止ますも、空気を上げるも下げるも自在というわけだ。『無空』はまさに空気を無くす技。この技の前では『青い炎』も『音』も無意味。さあ、どうする？」

自らの異能について説明しながらも、一切の隙を見せない虹次。余裕を感じさせる表情をしているが、実際そうなのだろう。それほどの実力さが彼らの間にはあった。そんな相手を異能を使わずに斃すのははつきり言って至難の業だ。

しかし、だからといって簡単に諦められるようなら、彼らは今ここにはいない。

「……関係ない。異能が効かなくても、邪魔するなら斃すだけだ！」

「せや！ わかったらさっさとそこを——！」

「大神！ 遊騎！ そこをどけえええええ！」

『ツ!?!』

——カッ!!

それまで響いていた全ての音を掻き消すような大声の後、思わず目を瞑ってしまっ  
ほどの眩い光が空間を包んだ。そして次の瞬間、全てが揺れた。

——ドガアアアアアン!!

「……よそ見してんじやねえヨ。アンタの相手はオレだろ」

「刻！」

突然の光と轟音が空間を包んだかと思うと、はるか上方から刻の声が届いた。見ると、彼はいつの間にか廊下の天井の上に立っていた。どのようにして上ったかはわからないが、今はそんなことはどうでもいい。

問題なのは、刻がいる位置から先ほどまで虹次がいた位置への直線上、そこにあつたはずの天井や壁など何もかもが破壊されていることである。特に虹次の背後にあつた壁の損害は最も大きい。まるで巨大な鉄球が高速で突っ込んだかのように粉碎されており、刻が放った攻撃の威力の高さを物語っていた。さらに、その代償か。彼の右腕部分は制服が肩近くまで破れ、露わになった腕もボロボロの状態だった。

「なんつう威力や……!」

『『磁力』でこれを……!?! 刻! お前、修業で何を習得した?!』

一瞬のことだったため、遊騎と大神も何があつたかわからなかつた。そのため、壁などの損害を見て刻が放った技の威力に驚愕するばかりだった。そして、それは虹次も同じである。

「……………」

グツ、と右の頬に刻まれた傷を指でこする。直撃こそしなかつたが、避けきれなかつたのも事実。前回と違って早々に傷を刻まれ、虹次は今まで見せていた余裕を捨てて眼を細めた。そうして鋭い視線を向けた人物……天井から身軽な動きで下りてきた刻は、

真正面から虹次と対峙しながら大神と遊騎に声をかけた。

「オイ、お前から邪魔だ。さっさと先に行つて『捜シ者』を追え。コイツはオレが斃す」  
 「何言うてんのや！ あかんで、よんばん！ アイツ、めっちゃ強いぞ！」

追つ払うかのように手を振りながら、二人に先に行くよう伝える刻。だが、相手はあの虹次であり、刻は一度負けている。それを知っている遊騎は当然のように反対し、一緒に闘おうとした。すると、刻はその言葉を遮るように、ボロボロになつた右手で遊騎の胸を叩いた。

「バーカ。強えから天才のオレ様にしか相手できねえんだろーガ。……早く行け。そんで、絶対『捜シ者』にパンドラの箱ボックスを渡すな。頼んだぜ、遊騎さんばん」

「ツ……………わかつた。任しときー」

気合いを入れるかのように、刻の拳に力が込められる。拳を通して彼の覚悟が伝わるように、遊騎は大きく目を見開いた。そして、自らに向けられた番号呼びを受け、遊騎は力強く頷いた。

「おう。…………ア、つつても下つ端の大神うくばんには期待してないカラ」

「…………ハツ、期待してねえのはオレも同じだ」

遊騎への信頼を感じさせる言葉を言ったかと思うと、いつもの調子で刻は大神に厳しい言葉をかけた。だが、遊騎と同じように番号で呼んでいることから、大神のことも

すっかり信用しているのが伺える。それを受け入れるように、いつもの調子で大神も言葉を返した。

「——だが、死ぬなよ」

「——ハントツ。誰に向かつて言つてやがル」

ただ一言、いつもならば言わない言葉を添えて、大神は遊騎と共に先へと進んでいった。二人分の足音が響いていき、それは少しずつ小さくなる。そうして、最終的に静寂に包まれた空間に残ったのは二人だけ。全てを託して二人を先に行かせた刻と、その二人を黙って素直に行かせた虹次の二人だった。

「……誰一人として通さねえんじやなかったのかヨ。みすみすと二人を通しやがつて」

「ふつ、無粋なことを聞くな。ただ純粋に、強くなったお前と闘うことに集中したかっただけ。お前の強さを見てみたくなつた、という方が正しいかもしれんな」

二人だけの空間の中、刻が口を開いて一つの疑問を投げかける。最初に「誰も通さない」と言っておきながら、大神と遊騎を行かせたことが気になつたらしい。すると、虹次は静かに笑いながらその理由を答える。その返答はまるで、刻を対等の相手と認めているかのように聞こえた。

だが、刻にとっては認めていようといまいと関係なかつた。どちらにしても、やるこ



とは同じ。そのために彼は修業を乗り越えて、強くなった。

「へえ？ そいつは光栄ダナ。けど、残念。そいつは無理な話だ。アンタはオレの強さを目にする前に……ブツ斃す」

「斃す」……その言葉を自らの心に誓うように、刻は自らの胸の前で力強く拳を握った。そして、決意が込められた金銀妖眼ヘテロクローミアで虹次を見据えた。口角を上げ、自信に満ちた力強い表情を浮かべながら。

——ズウウウウン！

全身を震えさせるほどの重低音と共に、部屋全体が大きく揺れた。突然起こった揺れの衝撃に、多くの者が動揺を隠しきれずにいた。だが、そんな中で一人だけ……優だけは何かを察したように、鉄の扉で封された出口の方をチラリと見た。

「……あいつら、派手にやってるみたいだな。まあ、オレも人のこと言えないか」

「うおおおおお!!」

フツと自嘲するように笑みを浮かべる優。それが隙に見えたのか、彼の近くにいた異能者たちがそれぞれの異能を全開にしながら向かってきた。腕を植物のように伸ばす者、溶岩をその手に纏う者とバラバラの攻撃方法で優に迫る。だが、優にとっては何ら問題ではない。

——スパアアアーン！

「……………これで、七十七人だな」

グチャリと剥き出しになった肉が床に倒れる音が響く。先ほどまで生きて動いていたというのに、一瞬で吐き気を催すような肉塊になってしまった。不快感しか感じない音と光景だが、それを気にする者は一人としていない。というのも、そんな肉塊よりもそれを作ってみせた優の方に意識が向いているからだった。

「う、嘘だろ……………」

「こんなの、勝てるワケが……………」

近くにいる者と身を寄せ合い、彼らはただ優を見る。優は手にした刀を風を切るように振って付着した血を払い落とし、冷ややかな眼を動かして次の標的を見定める。そこには先ほど見せたような自嘲の笑みは欠片も残っていない。

すでに闘いが始まってから結構な時間が経っていた。他の者を先に行かせて一人残った優に対し、片や『捜シ者』に従う無数の「悪」。ほとんどが異能者であるにもか

かわらず、その力の差は圧倒的だった。先ほど一人の男を両断した優が呟いたように、彼はすでに七十七人もの「悪」を裁いていた。その間、ほとんど目立つ傷を受けることなく、思わず拍手してしまいそうなほどの闘いをする優に対し、敵である異能者たちはすっかり恐怖を感じていたのだ。

「どうした？ さっきまでの勢いはもう終わりか？」

「ひっ……！」

自分を取り囲むようにしながらも一定の距離をとる者たちの一人に、愛刀である『斬空刀』の切っ先を向ける優。照明が反射してきらりと輝くと、切っ先を向けられた者は顔を真っ青にして全身を震わせた。一步、また一步と距離を詰めていく優。それに合わせて周囲は後ずさっていき、声にならない悲鳴を上げていく。

「——はあ、怖いねえ」

すると、一人の男がその間に割って入った。それは、この部屋に来た時に最初に会った異能者……異能『転移』を操る異能者だった。

「いや、怖い怖い。強さもそうだが、何よりその容赦のなさだ。さすが『コード・ブレイカー』ってところだな」

「自分から前に出てくるとはな。それは降参か？ それとも本気とやらを見せてくれるのか？」

恐れ入った、とても言いたげに両手をひらひらと振る男に対し、優は切っ先を男に向け直す。今のところ、『転移』についてわかつていることは移動専門の異能であること。直接、闘うような異能とは思えないが、何を隠しているかわからない。優は探りを入れながら、いつでも動けるように構えていた。

男はそれを察してか、特に隠す素振りも見せずに首を縦に振った。

「まあな。正直言うと、今ここにいる奴ら以外にまともな戦力はいない。……大したものだよ。たった一人で『捜シ者』に仕える異能者の半数近くを斃しちまうんだからな」  
「なるほど。つまり、この部屋にいる奴らを全員斃せば、『捜シ者』の戦力は間違いない。落ちるってことか。なら、さっさと終わらせてもらおう」

もう別の場所に控えている戦力はいないということを自白する男。こんな状況では特に嘘をつくメリットもないため、おそらく本当のことなのだろう。その告白を受けて、優は早く終わらせようと改めて『斬空刀』を構えた。狙いはもちろん『転移』を使う男。たとえ何かを企んでいようと、それを使われる前に斃す気でいた。

「いい加減、オレも疲れてきたからな。一気に終わらせて——」

——ピキイイイン……!!

「——ッ!？」

瞬間、優の身体がその場で止まり、今まで静かだった表情が驚愕の色に染まった。

「おや、どうした？　なんだか、身体が重そうだな？」

ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべながら優との距離を詰める男。普段ならなんの問題も無く切り捨てられる間合いに入っているにもかかわらず、優はそれが実行できなかつた。いくら身体を動かそうとしても、何か強い力に押さえられているようにピクリとしなかつた。

「これ、が……本気か……」

幸い口の動きまでは押さえられなかつたが、ひどく喋りづらかつた。そんな優とは対照的に、男は軽やかにその口を開いて言葉を続けた。

「その通り。まあ、本気というよりは奥の手って感じだがな。たとえば『コード・ブレイ

カー』全員を相手にしたとしても勝機を見出すことができる……最強の奥の手だ」

明らかに誇張しているような話だったが、優は「誇張だ」と切り捨てようとは思えなかった。実際にその力を自分が体験しているというのもあるが、男の表情は今までにないほど自信に満ちていたのだ。そして、男はその表情のまま指を鳴らした。

「ほら、出てこいよ……奥の手の役立たず」

男はかなり矛盾しているような呼び名で誰かを呼ぶ。すると、優と男を囲むように密集していた「悪」たちをかき分けるように、ある一人の人物が出てきた。その姿を見て、優は思わずその眼を大きく見開いた。

「……………」

「女、の子…………!?!」

無数の「悪」の群れから現れたのは、幼い顔つきと身体つきをしたまだ小学校低学年ほどと思われる少女だった。おずおずと小刻みに震える両手を前に出し、力を緩めまいと荒い呼吸を繰り返しながら、栗色の髪をした少女は優の前に立ちはだかった。

## code : 55 覚悟の一撃、決意の一撃

「お前の強さを目にする前にオレを斃す……か。大きく出たな、刻。よほど今の自分に自信があると見える」

「ああ。オレは絶対に——勝つ」

かつて、そう遠くない過去に完膚なきまでに打ちのめされた相手に向けた強気な言葉。それを受け取った虹次はその胸中に期待の感情を抱いた。ただ純粹に、刻がどこまで上り詰めたか見てみたかった。そのため、虹次は最初の一手を刻に委ねた。彼は両手をポケットに突っ込み、静かにその場で姿勢を正した。

しかし、状況はいったんそこで止まった。刻は決意を表すように握った拳を構えたまま、何一つアクションを起こさそうとしなかった。タイミングを計っているのか、隙を突こうとしているのか。どちらにせよ罅が開かないと感じた虹次は、姿勢を崩さないまま再び口を開いた。

「……どうした、刻。遠慮は無用だ。早くかかって——」

——ゴシヤア！

瞬間、虹次の言葉は強制的に中断させられた。音もなく虹次の周囲に浮かびあがった

多量の鉄骨によって、彼の身体が押し潰されようとしたからである。意表を突いた刻の攻撃により、完全に虹次の姿は鉄骨の中に埋もれた。

だが、それは決して戦闘不能にしたのと同義だとは限らない。

「いいな。中々に『磁力』の異エネルギーを上げた。だが、甘いな」

虹次の身体を押し潰そうとした鉄骨は、その身体に触れるよりも先に動きを止めていた。目には見えないが、おそらく『空』による防御だろう。『渋谷荘』前で闘った時も同じように止められているようだったが、虹次は確かに刻の成長を感じており、それは鉄骨を操る『磁力』の強さからひしひしと伝えられていた。

「こんな鉄屑では、オレに傷一つ刻むことはできない」

——ビュオ！

その言葉と同時に、今まで虹次の身体を守っていた『空』が牙を向いた。まるで包丁で食材を切るかのように鋭い風の刃となって鉄骨を切り刻むと、そのまま全て吹き飛ばしていく。鉄骨はその力に抗えず、虹次から離れていき——ドロリとその形状を変えた。

——キュン！

「……なるほど。鉄屑ではなく、汞だったか」

突如として液体へと姿を変えた鉄骨。だが、それは変えたというより戻したと言った



方が正しいかもしれない。明確なタイミングこそわからないが、刻は最初のうちに汞を使っていた。おそらく気体の状態で虹次の周囲に漂わせ、タイミングを見計らって鉄骨のように固体にさせたのだろう。そして、固体としての攻撃が弾かれた今、元の状態である液体へと姿を戻した。

液体となり無数に分かれた汞はピンポン玉ほどの球状になり、あつという間に虹次を取り囲んだ。そして、一斉にそこから棘のように固体化させた突起を放った。虹次に鉄骨状態の汞を弾かれてからここまでほぼ一瞬……まさに息つく間もない攻撃である。

「その発想や見事。だが、オレには届かん」

並大抵の相手ならこの予想外な攻撃に対応できず、全身を串刺しにされていただろう。だが、虹次はそんな生温い相手ではない。再び『空』による防御でその攻撃を弾いてみせた。

形状が変わったとはいえ、元は同じ汞。威力に大きな変化はないため当然だった。だが、全ての汞を弾いた瞬間、さらなる追撃が迫った。

「くたばれ」

——ガギイ!!

汞に気を取られている間に、使い手である刻本人が間合いを詰めてきた。そして、なんの躊躇いもなくその拳を虹次に向けて振るった。だが、もちろんそれは『空』によつ

て止められる。理論上は空気の壁であるはずなのに、まるで鉄の扉にでも当たったかのような音が響き渡った。

硬いだけでなく鋭さも併せ持つその壁は、完全に刻の拳の侵入を阻んでいた。それに負けじと拳に力を込めるも、鋭い空気の壁が牙となり拳の表面を傷つけていった。

——言つたはずだ。死ぬ、と。なぜ、そこまでする？

脳内で、かつて同じように拳を止められた時にかけられた言葉が繰り返される。放つた拳から伝わる痛みを感じながらも、刻の脳はその信号を処理するよりもその先の言葉を浮かばせた。

——キズ一つ……テメエの、身体に刻み込まなきや……オレの中で、次は無エ……。例え死ぬことになつたとしても……命なんて、とうの昔に捨てた……

拳はそれ以上、動かない。前にも後ろにも。ただ皮膚が裂かれていき、次々と血が流れていくだけ。それでも、彼は決して拳を後ろに動かさない。なぜなら彼は……

『……お前、名は？』

『……………今の、オレの名は……………刻むと書いて……………』

——『刻』だ

「うおおおおお!!」

——ゴォ!!

瞬間、刻の拳が前に動いた。『空』の壁を突き破り、真新しい傷に構うことなく。その拳を虹次の頬に叩き込んだ。虹次は避けることなくそれを受ける。そして……………その口から一筋の赤い線が流れた。

「……………ほう? この短期間に随分と腕を上げたな。この拳だけではない。何より、お前の心の静寂がそれを示している」

プツ、と口内に溜まった血を吐き捨てる虹次。以前は決死の思いでようやく傷を刻んだ刻だったが、今回は違う。まるで今つけられた傷のお返しとでも言うように、虹次に傷を刻んでいた。

明らかな成長を見せる刻だったが、虹次はその希望を払いのけるように「だが」と続けた。

「刻、そのように傷を一つひとつ刻んでいったところでオレには勝てぬ。『磁力』単体の主たる作用は『引力』。引き寄せる力はそもそも攻撃に向かぬ。全てを破壊するオレの『空』と比べれば圧倒的にな」

「……………」

ここで虹次は、刻と自分の決定的な違いを述べた。それは、『攻撃力』。

虹次の言うように、『磁力』とはそもそも物を引き寄せる力。一応、刻は鉄などを自在に操って前方に放つこともできる。だが、問答無用で引き寄せる『引力』の力と比べればその力は弱い。その特性は『攻撃力』というより『応用力』の方が強い。

それに比べ『空』は圧倒的なまでの攻撃力を持つ。鉄骨すら簡単に斬り刻み、触れずして相手を傷つけていく。なにより、虹次が持つ『破壊神』の異名がそれを物語っている。

早い話だが、刻には決め手がなかった。今までは汞がそれだったが、汞も通じない虹

次が相手では完全にお手上げ状態。今のように少しずつダメージを与えたところで勝てる相手でもなく、形勢は明らかに刻の劣勢だった。

「これ以上は無駄だ」

ゴオ、と自分を中心に突風を巻き起こす虹次。寸でのところで刻は距離をとるが、虹次はそれを追おうとはしなかった。余裕、といえば聞こえが悪いが、正確には試しているのだろう。だからこそ無理に追い詰めようとしめない。静かにその場で刻の次の手を待っていた。

そして……それが大きな隙となった。

「なんだ……!?!」

突如、虹次の瞳に驚愕の色が現れる。その視線の先にいるのは刻……いや、正確には刻の前。刻自身は身体だけ横に向けたまま足を広げ、右腕を虹次に向けている。その右手の手前には、周囲にあつた鉄骨などを無理やりくつつけて作り上げたと思われる歪で巨大な球体。刻はその球体を『磁力』で浮かせ、右手の手前に位置させている。

今までとはどこか違う刻の行動だが、その瞳には変わらず強い意志が込められている。そして、驚く虹次に対し、刻は改めて覚悟を決めるかのように静かに瞳を閉じた。

「……………」

時を同じくして、彼らの間にも静寂が生まれていた。だが、それは刻たちのように落ち着いたものではなかった。どちらかという張りつめた緊張感によつて生まれた息苦しい静寂だった。

そんな中、一人の男がその緊張感を無視するように軽快な足取りで前に出てきた。

「いやいや、いい格好だなあ。まるで名のある美術館に飾られてる彫刻みたいだなあ……夜原 優」

「……………」

ポンポン、と目の前で動けなくなっている男……優の頭を軽く叩く『転移』を使う男。そんな屈辱的な状況にもかかわらず、優はその手を払うことも、その場を離れることもできなかった。それというのも、彼の視線の先にいるたった一人の少女が原因であった。

「ッ……………」

優の視線に気付いてか、栗色の髪をした少女はその顔を引き締めた。だが、よく見る

と顔色が青くなっていることがわかる。優に向かつて伸ばされた両の手も、小刻みに震えていた。

「……………これは、あの子の異能か」

「その通り。アイツはまだガキだが、この異能は中々に便利だぜ。触れずして相手の動きを止める…………『念力』ってやつだな」

「『念力』……………」

優の言葉に対し、我が物顔で答える男。自分の動きを止めている原因がわかったところで、優は再び視線を少女に戻した。改めて少女を見ると、確かにその効果は大きなものだが、同時に少女自身にも大きな負荷がかかっているようだった。すると、そんな優の視線に気付いた男がへらへらと笑いながら言葉を続けた。

「中々に使うタイミングが難しいんだぜ？ 動きを完全に止められるつてのほうがいいが、ガキだから長続きはしねえ。だからこいつは奥の手でもあるが、同時に役立たずでもあるんだよ」

「……………」

男の言葉を聞きながら、優は少女の姿を凝視する。一見するとわからないが、白い肌のところどころに殴られた痕が見えた。普段、彼女がどのような扱いを受けているのか…………それを考えただけで優の胸中にはどす黒い怒りが湧き上がってきた。

「……<sup>クセ</sup>悪共が」

思わず、だがそれなりの音量で優の口からその言葉は漏れた。それは確実に優の近くにいた男の耳には届き、そして――

――バキイ！

「ぐっ！」

確実に男の怒りを買ってしまった。

「お前、状況がわかっているのか？　今のお前は動けない。周りも見ろ。今までお前にやられてきただけの人間が何十人といえるんだぜ。まさか、まだ余裕のつもりか？」

間髪入れずに放たれた男の回し蹴りを頬に受け、口内が切れた優の口から血が流れた。今まで何をしようかと傷をつけられなかったというのに、今はいとも簡単に一撃が入った。その現実には男が指し示した『捜シ者』の部下たちの間にざわめきを生み、同時に彼らの間に希望も生み出してしまっていた。

「や、やれるのか……？」

「見てなかったのかよ！　アイツ、本当に動けねえんだぜ！　やれるに決まっている！」

「あ、あの野郎……！　ガキのクセにすかしててずっと気に入らなかったんだ……！」  
口々に強気な言葉を口にしていく『捜シ者』の部下たち。この現実が、今まで彼らが虐げてきたたった一人の少女の功績だということには目もくれず、今まで受けた屈辱を



返すことだけに意識が向いていた。その当の少女は、どこか怯えた表情をしながらも異能を解く気はないようだった。いや、正確には解くことができないのだろう。解いてしまえば最後、何をされるかわかったものではない。

「さあ、どうする？ 今のうちに思いつく限りの謝罪を述べるか？ 泣いて許しを乞うか？ 内容によっては半殺し程度で済ませてやるぜ」

「……………」

視線を動かせば、自分に対する恨みや憎しみを瞳に込めた敵たち。じりじりと距離を縮めてきて、何か一つでもきっかけがあれば飛びかかってきそうだった。逃げ場はないし、なにより逃げるといいう行動ができない。そんな状況の中、優が出した結論は……

「……………ふん、反吐が出るな。やはり『悪』は頭の中まで腐っているのか」

「……上等だ。よーし、お前ら。間違ってもすぐに殺すな。痛めつけて、痛めつけて……殺してくれと懇願させろ。この生意気な『コード：ブレイカー』に……今までの礼をたっぷりしてやれ！」

『ウオオオオオオオオ!!』

それを合図に、何十人という「悪」の群れは雄たけびを上げ、身動き一つできない一人の『コード：ブレイカー』<sup>敵</sup>に向かっていった。

『磁力』が攻撃に向かないことなど、初めからわかっていたことだった。今は鉄などを瞬時に磁化させてから動かしているが、それよりも自分の方に引き寄せられる『引力』の力の方が強いし速い。これを攻撃に転用できれば、とずっと考えていた。そこで、一応は師匠である会長に尋ねてみたのだが、返答は以下の通り。

「大変だねー。難しくってよくわかんけど」

だが、きつかけはそこだった。会長の適当な返答が頭に来て、何も考えずに会長が持っていたものを引き寄せてみせた。引き寄せてから見てみると、それは「ニュートンのゆりかご」と言われるオモチャだった。

A、B、Cと三つの鉄球があり、AをBにぶつけるとCはぶつかった際の力と同じ力で弾かれる。そして、戻ってきたCがBにぶつかるるとまた同じ力でAが弾かれるという「運動量保存の法則」を用いたものだ。すると、会長はどこからか磁石を取り出し、パッとBの鉄球と取り替えた。すると……

——ガチンツ！

「な——!？」

突如として鉄球が弾かれる力が大きくなった。音を聞いてもそうだし、なにより弾かれていく距離が段違いだった。会長曰く、Bを磁石に変えたことにより鉄球がぶつかる力に磁石の『引力』が加わり、もう片方の鉄球はその分だけ強化された力で弾かれる。それを「ガウス加速器の原理」と呼ぶことを刻も知っていた。

そして、彼は答えを見出した。

覚悟はすでにできている。

どんな手を使つても斃すべき敵を斃す。

それが……彼の全てだから。

——カッ！

瞬間、刻は閉じていた目を開いた。それと同時に、虹次に向けた右腕とは逆方向に左腕を伸ばす。そして、その先に右手の手前にある物と同じように鉄骨などで押し固めた歪な球体を作る。前後を鉄の塊によって挟み込んだ刻。そして、彼は動いた。

「はあー！」

——ヴン！

刻が短い言葉を吐き出すと、左腕の先にある鉄塊が動いた。だが、その軌道にいるのは虹次ではない。真つ直ぐに突つ込んでくる鉄塊の先にいるのは……他ならぬ刻自身。

——ゴッ!!

「馬鹿な! 自分に衝突させただど!」

『磁力』の『引力』によって引き寄せられた鉄塊は、強すぎる勢いのまま刻の左手に衝突する。左手を通って左腕へ、そこからさらに全身に広がる思い痛み。突然の自傷行為に虹次は目を見開くが、刻の眼は決して臆してはいなかった。

「ぐ、く……! あああああ!!」

——バキバキ!

強すぎる衝撃を受け、左腕部分の袖が弾け飛んで骨が悲鳴を上げる。だが、それでも逃げはしない。刻は痛みに吞まれそうになる意識の中でも敵である虹次を見据え、右手を彼に向け続けた。

これが、彼が辿り着いた『引力』による攻撃方法。「ニュートンのゆりかご」で言うAとCの鉄球を巨大な鉄塊とし、Bの鉄球部分に『磁力』を使う自身を置くことで「ガウス加速器の原理」による威力の底上げを行う。『引力』と共に自身にぶつかった力をもう片方に乘せて放つ。それが……

「沈みな! 『引力』の最強攻撃! ガウスキャン 磁撃砲!!」

「『空壁』!」

高速で向かってくる巨大な鉄塊に対し、回避が間に合わないと判断した虹次は空気の

壁を作る。鉄骨が突っ込んできても、永に貫かれようとしても防いだ空気の壁。鼓膜が破けるような轟音と共にぶつかり合った。

「ぬ、ぐ……！　これ、は——！」

——ドオオオオオン！！

次の瞬間、大地震を思わせる揺れが『渋谷荘』の地下全体を襲った。

——ズウウン！！

「きゃー！　な、何YOよ！　この揺れ！」

突然、地が唸りを上げるような揺れが起こったことに驚いた日和（亀）が手足をパタパタさせる。まだひっくり返った状態のため、逃げようにも逃げられないのだろう。と、慌てふためく日和に対して、激しい戦いを繰り広げていた平家と雪比奈は冷静に状況を整理した。

「音の出所からすると、刻君のようですね」

「虹次……」

「E!? 虹次君、死んじゃったの!? それとも敵が!? もしかして両方とか!」

「ツ……!」

冷静な二人に対し、相変わらず慌てふためく日和。すると、王子が全身の痛みを耐えながらも横になっていた身体を起こした。そして、目の前に転がる通信機から聞こえる音声に耳を傾けようと身を乗り出した。

「ど……どう、なった……?」

衝撃の強さを表すように、目も開けられないほどのホコリが舞う。まるで霧の中にいるのではと錯覚するほどだ。しかし、それでも互いが向かい合う相手のことはよく見えた。一人は背筋を伸ばし、もう一人は膝を突いている。見上げ見下ろし向かい合い、静寂の中で眼をぶつけ合う。だが、彼はその静寂を口元に浮かんだ微笑と共にやめた。

「——今のはかなり効いた。少々、迂闊だったようだ。心の弛みがお前のことを甘く見ていたようだ」

「……………」

凜とした姿勢で立つ虹次。だが、その左腕は使い物にならなくなっていることは一目瞭然だった。袖も破れ、全体から血が溢れ出ている。よく見ると、腹部にも大きな横一文字の傷が刻まれている。

言うまでもない。刻の磁撃砲は明らかな脅威を持つ必殺の一撃となった。

「よっしゃー！ いけるで、よんばん！ かなり効いてるわ！ あと一発かましたら勝てる！」

刻に虹次を任せ、『捜シ者』を追う大神と遊騎。通信機越しに聞こえる虹次の言葉を聞き、遊騎は刻の優勢を確信していた。走りながら希望を見出した声を張り上げた。

しかし、妙なことに喜んでいるのは遊騎だけだった。一方の大神は、何か考え込むよ



うに目を伏せ、何も言わずに足を進めていた。そして、彼はポツリと告げた。

「……ダメだ」

「はにゃ？」

大神の口から出てきた否定の言葉。いったい何がダメだというのか。遊騎がその疑問を口にするよりも早く、大神は言葉を続けた。

「会長が前に言っていた。刻が修業で見出した技はとてつもない威力を持つ。だが、同時に一発撃つだけで腕に大きな負担がかかる。つまり……」

技が使えるのは左右の腕で一回ずつ。二回が限度」

「……え？　せやかてさつき、オレらを行かすために一発撃つて——」

「今のが……二発目だ」

冷静な表情のまま、静かに告げる大神。その言葉が鼓膜を震わせ、神経を通じて脳が理解した瞬間。遊騎の全身は奈落につき落されたかのような衝撃を感じた。

そう、何よりも彼自身がわかっている。

「……悪いな、刻。オレは何者にも斃されず、殺されぬ。いや、絶対に斃されるわけにはいかない」

わかっていながらも彼は撃った。仲間のために、そして今も。だから、理解している。「闘いの勝利はこの虹次が頂く」

もう磁撃砲ガウスキャノンは撃てない——その現実には、膝を突いた状態の刻の両肩に重くのしかかった。

「オラア！」

「ガ……！」

もう何度目かわからない拳の直撃を受け、優は蚊の鳴くような声を出す。口内には鉄臭い味が蔓延し、全身は『念力』で動かないのか痛みで動けないのかわからないほどだった。

何度、顔に蹴りを入れられたか。

何度、腹を殴られたか。

何度、皮膚を裂かれ、衝撃を受けただろうか。

もう数えるのすら億劫なほどで、先ほど起きた強い揺れすら気にならないほどだった。

「あくあ。酷いツラだなあ、おい」

歪みに歪んだ卑しい笑みを浮かべながら、何十人という敵をけしかけた張本人が声をかける。その後ろには新たに優に殴りかかろうとした男がいたが、手で制されたため物足りなさそうに止まった。話しかけてきた男……『転移』の男の言葉を聞き、優は視線

を男に向けた。

「それにしても、お前も丈夫な奴だ。身体も妙に硬いしよ。やっぱ『脳』で強くなってるのが原因か」

鍛えられた結果だ、と口にしようとしたが止めた。わざわざ言うことでもないし、無駄なことに思えたからだ。すると、男は優の髪を乱暴に掴み、その顔を一人の少女へと向けさせた。

「気の毒にな。あのガキがいなければお前は何事も無くオレたちを斃せただろう。憎たらしいか？ だったら殺してみせろよ。あいつもオレたちと同じ『悪』だ。『コード：ブレイカー』なら、殺しても文句は言われないだろ？」

「ハア、ハア……！ う、うう……！」

力づくで向けられた先には、先ほどよりも顔を真っ青にさせて荒い息を繰り返す栗色の髪をした少女の姿だった。伸ばした両腕は目を見張らなくてもわかるほど大きく振るえ、触れただけで倒れ込みそうなほど足元もおぼつかなかった。

見ただけでわかる。彼女は……このままだと長くない。すでに限界だ。いや、もう限界すら超えているのかもしれない。どちらにせよ、彼女を待っているのは残酷な『死』だけだった。

(……同じ、だ)

死を前にしても、どれだけ苦しくても、変わらず異能を使い続ける少女の姿。その葉かなげな姿が、優の中でデジャヴとなった。あらゆる人に否定され続け、ようやく自分を受け入れる優しい人を見つけた。その人のために力を振るい、その人のために闘った。どんなに傷つこうとも、ただその人のためだけに。

——手を……手を貸しておくれよ。リリイはまだ頑張れる……。『捜シ者』が褒めてくれたリリイの『分泌』は誰よりも役に立つ……

そう言って、傷だらけの身体で仲間に手を伸ばす彼女。そして、目の前で自らの命を削って優の動きを止める少女。その二人の姿が完全に重なり……優は、全てを覚悟した。

「……なあ」

「ツ、う……!?!」

男に向けさせられたからではない。自分の意志で再び少女を見た優。そして、口元から感じる痛みに耐えながらも少女に向かって言葉をかけた。

「お前……名前は？」

「え——」

予想外の言葉に、少女は思わず瞬きを繰り返す。傍で見ていた男にとつても優の言葉は予想外だったらしく、興味深そうに二人の様子を見ている。一方、優は少女から眼を離さない。だが、それは咎めるような眼ではない。むしろ、どこか慈愛を感じるような……そんな眼だった。

「……名前は？」

「あ……さ、咲、です」

「……そうか」

繰り返された問いに怯えながらも、少女……咲は自らの名前を名乗った。名前を聞いた優は静かに口元を緩ませると、優しい声で言葉を続けた。

「咲……君は、なぜ『捜シ者』についてきた？」

「え、あ……」

名前を呼ばれたことに驚いたのか、予想よりも優しい声に驚いたのか。咲は自分ですら聞き取れないほどか細い声を上げた。答えていいのか迷い、咲は男に視線を向けた。だが、男はニヤニヤとした笑みを浮かべたままで合図らしきものはない。しかし、元から期待はしていなかったらしく、すぐに目を伏せながら考え込んでいた。そして、ポツリとその口を開いた。

「わ、私は、ダメなんです。私は、生まれちゃいけない子、だから。お母さん、も、お父さんも……そう言ってた、から。だって、私はこんなことしか、できないから。だから……」

絞り出すように、過去に起こったのであろう出来事も思い出しながら話し出す咲。酷くたどたどしい話し方だったが、それは彼女自身の言葉だった。そして、自分で言った言葉を自分の耳でも聞きながら、頭から溢れてくるであろう過去が合わさって、咲は自分でも意識しないうちに大粒の涙を流し始めた。

「だから……グス、行くしかないんです。わた、わだじは……いらないから……！  
う、うう……！ ホント、は、こんなごどしたくない……！ 傷つけたく、ない……！  
だげど！ 私は——！」

「——わかった」

「——え？」

「今、楽にしてやる」

刹那、優の眼が咲を確かに捉えた。

「あぐ!? あ、ああああ!!」

涙ぐみながらの言葉が続いたと思った瞬間、咲は自分の胸を押さえて苦しみだした。突然のことに男を含めた『捜シ者』の配下の者たちは何事かと身構える。だが、彼らに異常はない。異常があるのは彼女一人のみ。そして……

「ゲホ！ ガフツ！」

咲は大量の血を吐きだし、足元に血溜りを作った。その後、何度か咳き込んだかと思



うと、その足がふらりと浮き……

——ドシヤア

そのまま、前のめりになって倒れた。何が起こったのか、男たちは理解していない。ただ一人……それをしたであろう優を除いて。

「……『念力』っていうのはいわばプレッシャーだ。プレッシャーで相手の動きを封じる。なら、それ以上のプレッシャーを与えれば、解くのは簡単だ。異能を持つだけで人を傷つけたがらない女の子と『コード：ブレイカー』……精神力の強さは比べるまでもない」

「ッー」

その声が耳元で聞こえ、傍にいた男は反射的にその場から引いた。見ると、優の身体がゆっくりと動いているのが見えた。どうやら、本当により強いプレッシャーをぶつけて『念力』を解いたらしい。いや、そもそも異能を使っていた本人が倒れたのだから、解けるのも当然とは言える。

「……ハ、ハハハ。ハハハハハハ！ 恐れ入った！ 恐れ入ったぜ、夜原 優！ まさか本当にあんなガキを殺しちまうとは！ さすが『コード：ブレイカー』！ “悪”には容赦ないな！」

「……………」

咲を殺した優を改めて見て、男は大きく拍手しながら優を称賛した。だが、優はそんな言葉など聞こえていないかのように、鞘に納めた『斬空刀』と懐にしまつていた二丁の拳銃を取り出して……捨てた。

「あ？」

「お前の言う通りだ。あの子……咲はオレが殺した。咲は『捜シ者』の勢力……つまり『悪』。そしてオレたち『コード・ブレイカー』は『悪』を裁く。お前が言うように……容赦はしない」

一つ、また一つと優は制服のボタンを外していった。そして、一歩ずつ男に近づいていく。足元に武器を放置したまま、どんどん武器とは距離をとっていき、男との距離を縮めていく。

「そしてそれは……お前たちも同じだ」

「……言ってくれるねえ」

パチン、と男が指を鳴らす。すると、今まで外野で見ていただけの他の『捜シ者』の部下たちが優を取り囲んだ。人混みの中に混じり、男は再び声高らかに笑い声を上げた。

「ハハハハ！ 威勢がいいのはいいが、自分の身体をよく見てみる！ 今のお前はすでにボロボロ！ なぜかは知らんが武器も捨てた！ 容赦しねえのはオレたちの方だ

！」

取り囲まれたことで歩みを止めた優。だが、それでもボタンを外す手を止めない。視線だけを動かして全方位を囲まれていることを確認すると、優は静かに告げた。

「……一つだけ言っておく。これを使う以上、お前たちはここで死ぬ。生きて帰ることは何があろうとあり得ない。たとえ罪を認めて許しを乞おうと……絶対に」

言い終わるとほぼ同時に……制服のボタンが全て外れた。制服の前が開き、中のワイシャツが晒される。ワイシャツもところどころに血が滲んでいるが、特に気にする様子は無い。そして、優は静かに左手を目の前に掲げた。

「お前たちはここで死ぬ。異能者にとって禁忌とされた……『この力』でな」  
「だから……死ぬのはテメエだ、このヤロオオオオ!!」

「目には目を 齒には齒を 悪には——」  
次の瞬間、優の左手から閃光が放たれ、彼らがいる空間全体を包み込んだ。

## code : 56 牙を向きし破壊神

「闘いの勝利はこの虹次が頂く」

「へッ……。もう勝った気でいるとか、気が早えんじゃねーか？ まだ、ケリはついてないぜ」

磁撃砲ガウスキャンの反動で傷だらけになった両腕を力無く揺らし、刻は挑発的な言葉と共に立ち上がった。だが、それは一種の強がりであると刻は自覚していた。

撃てば腕に強い負担をかける磁撃砲ガウスキャンは左右の腕で一回ずつ……つまり二回までが限界。一回は大神と遊騎を先に行かせるために、残る一回は目の前に立つ虹次を仕留めるために。だが、その二回でも虹次を斃すことはできなかつた。大きな傷を負わせることはできたが、現に虹次は目の前に立っている。そして、「勝利は自分がもらう」と宣言した。状況は刻に圧倒的に不利。

だが、彼は諦めていない。何があるかと最後までくらくらいついて勝つ……そう誓っていた。

「確かに少し気が早い。だが、すぐに終わる。お前には……」  
そんな少年刻に対して破壊神虹次は……

「オレが本当の強さというものを教えてやる」

不敵に笑い、静かにその牙を向いた。

「ア？ 何を言っ——」

——ヒユウ

今まで見せたことの無い笑みを見せた虹次を警戒しながら、彼の言葉の真意を探る刻。すると、柔らかな風が刻の顔を撫でた。刻は特に気にも留めず、目の前に立つ虹次に視線を向けたまま警戒を——

「——遅い」

——ゾク！

瞬間、虹次は刻に飛びかかろうと跳躍していた。それを理解した刻の全身を、今までに感じたことの無いほどの悪寒が走った。

——グシヤア!!

「ぐー」

跳躍した虹次が拳を振り下ろす。なんとか反応することができた刻は反射的に後ろに跳んでそれを避ける。すると、振り下ろされた虹次の拳はそのまま鉄製の床を直撃し、その部分周辺の床をまとめて破壊した。『脳』で腕力が強化された時の優とほぼ同等の威力の拳を眼前で見つつも、刻の頭は状況の理解に全力を注いでいた。

（嘘ダロ……!? オレは一瞬も目を離していなかった）……! なのに、まったく反応できなかつた……!）

一瞬も目を離していない。だが、虹次は刻の反応を超えて近づいてきた。それはつまり、刻の反応速度以上のスピードで近づいたということである。人間の反応速度以上のスピードに、鉄製の床すら破壊するほどのパワー。そのスペックの高さは、次の瞬間にも容赦なく発揮された。

「まだ終わらぬ」

——ドガ! ドゴオ!

「チッ——!」

まだ床が破壊された時の残響が耳に残っている中、刻の耳には確かに虹次の言葉が届いた。さらに、それを脳が理解した瞬間には虹次の身体が刻を覆い隠すように迫っていた。そして、そのまま発もの拳を叩き込み、刻の周囲の床はどんどん形を変えていく。

（は、速え——！ 動きが追い付かぬえし……息つく暇もネエ！）

「ぬん！」

「ぐあー！」

休むことの無い虹次の猛攻を目にしながら、刻はその強さをひしひしと感じる。彼の異能である『空』だけかと思つたが、それは大きな間違いだった。純粹な身体能力だけでも虹次のレベルの高さは圧倒的だった。

その虹次の拳がとうとう刻に向かって放たれた。刻は反射的にガードしていたが、そのガードごと吹っ飛ばされていく。

「まだだー！」

ガードごと刻を吹っ飛ばす虹次の拳。それだけの力が加わったため、刻はかなりの速さでその身体は移動させられてしまう。だが、虹次は殴った次の瞬間にはそのスピードに追いつき、新たに拳を放つ。

「ッ——！」

ガードした腕から伝わる痛みに顔を歪めながらも、虹次の動きから目を離してはいな

かった刻。その追撃にもなんとか気付くことができ、ギリギリといったところでその身を空中で翻らせる。そのまま虹次の拳は再び床を破壊し、轟音が空間中に響く。その中で刻は片足を床につけ、込められるだけの力を込めて床を蹴る。とにかく虹次と距離をとろうと無意識に考えていたのだろう。

だが、破壊神は逃げの一手すら許そうとはしなかった。

——グーン！

突如、刻の身体が空中で止まる。虹次に足を掴まれたかと思い、刻は自らの足に目をやる。しかし、彼の足を掴んでいたのは手よりも厄介なものだった。

(か、風に捕ま——！)

刻の足を掴んで離さなかったのは——風。虹次の『空』により生み出された風の枷が刻の足をしっかりと捕まえていた。風の枷は空中にある刻の身体を軽々と引き戻し、距離をとるつもりが両者の距離は完全に詰められた。

そしてその時、刻は見た。自分を敵として認識し、容赦なくその拳を新たに振るおうとする虹次を。その背後に、さながら「風神」の幻覚（ヴァイブロン）が見えるほどの気迫を持つ破壊神を。



「——破壊れな」

（く、喰われ——！）

『空<sup>くうあつ</sup>庄』！——

刹那、『空』により押し固められた大気と共に振り下ろされた拳が刻の身体を押し潰そうと放たれた。獲物を目の前に、思わず頬を緩める——破壊神の一撃が。

「——ガハッ！——」

（ク、クソが……！——アバラ、いっちゃまった……！——）

口内に溜まり切った鉄臭い赤黒い液体を吐きだす刻。同時に、身体の中から確かに感じる痛みと違和感から受けたダメージの大きさを確認する。おそらく、周囲の床同様に体内の骨も粉碎してしまっているというのがすぐにわかった。それでも斃れるわけにはいかない、なんとか周囲の残骸を支えにして立ちあがろうとする刻。すると、はる

か頭上から心から嬉しそうな声が響く。

「耐えたか……。やはりそうでなくては面白くない。簡単に壊れてくれるな」

「ぐ、く……！」

痛みで気を失いそうになりながらも、刻は声の方向に顔を上げる。そこには、積み上げられた瓦礫の上で今まで見たことが無いほど清々しい笑顔を見せる破壊神の姿があった。まるで今まで見せていた強者としての表情が仮面と思わず感じてしまうほど、その笑顔は彼の本心によるものだど刻は感じた。そうして彼は直感した。これが、本当の彼なのだ。

「強さには、果てしなく上がある」

（もつと静かな男だと思っていたが、大きな間違いだ……。コイツの本性、まるで荒ぶる魔獣……。これが破壊神と呼ばれる由縁かヨ……。！）

自ら前には出ず、静かに向かってくる敵のみを斃す。さながら“静”のタイプだと思っていた刻。しかし、彼の本性は真逆。闘いを、強者を求めてそれを喜びとする荒ぶる獣。間違いなく“動”のタイプだった。

瞬間、刻は思わず彼の上に立つ『捜シ者』について考えた。彼のような制御できそうもないほどの強者の上に立つ存在。どれほどの実力を持っているのか、と。恐怖ではない。ただ、危機感として身体が警鐘を鳴らしたような気がした。

「……ハッ。『捜シ者』の手下のクセに、よく言うぜ」

「そのような立場、意味は無い」

自分の身体が鳴らした警鐘を振り払うかのように、不敵な笑みを浮かべながら刻は強気な言葉を口にした。それに対し、虹次は同じように笑みを返す。そして、さも当然のように言葉を続けた。

「全ては心友である『捜シ者』のためだ」

「心友……だど？」

「そう。そして……」

『捜シ者』を守護する存在である『Re—CODE』。その一人であるはずの虹次の口から出た心友という言葉。あくまで自分と『捜シ者』は上下関係ではなく、対等な関係にあるとも言いたげだった。だが、そのことを刻が言及するよりも先に、虹次は静かにその目を閉じた。

「……行くのか」

「ああ」

ひどく雪が降る夜だった。だが、二人はまるで何事も無いかのように言葉を交わし、それぞれが向かう先へと足を向ける。一人は、その先に同志が待つ方へ。もう一人は、その同志が待つ方とは真逆の方向へと。それぞれ——虹次と王子は向かうべき方を向いていた。

「次に会う時は敵同士だな。つっても、お前らはなんの遠慮もしねーだろうがな」

「無論だ。そして、それはお前も同じだろう？」

「……そうだな」

背中越しに言葉を交わす二人。互いに前を向いているため、互いの表情は見えない。それでも、虹次は王子が同意の言葉と共にフツと笑ったのがわかった。

この時は王子自身もそれができると思っていたのかもしれない。だが、日和と対峙した時を考える。言葉では言えても、やはり実際に体感すると違うのだろう。しかし、それでも彼女は乗り越えた。それだけの覚悟は、この時点で形作られていたのかもしれない。

「……………」

「……………」

そうして、二人の間にはいつの間にか言葉は消えていた。だが、歩を進めようとしなかった。雪が降りしきる中、背中のみ向かい合わせて。静かにその場に立ち尽くしていた。

「……誓いを交わすか」

「あ？」

ふと、虹次がポツリと呟いたことで沈黙が止まる。突然のことに王子は振り向く。すると、虹次もいつの間にか振り返っており、笑みを浮かべて王子のことは見ていた。

「オレたちは袂を分かつ。だが、オレとお前が同志であることに変わりはない。それゆえ、これは『Re—CODE』も『捜シ者』も関係ない。たとえ離れようと志は同じ……そのことを繋ぐ誓いだ」

「……相変わらず小難しい言い方しやがる」

笑みを浮かべながら、強い意志を持って言葉を続ける虹次。その言葉を聞くと、王子は呆れたように頭をポリポリとかいた。そして、虹次と同様にその顔に笑みを浮かべた。

「要するに、誓いと一緒にお前らのこと忘れんたことだろ。死んでも忘れるかよ」

「……ふっ、そうか」

自分の感性で感じた言葉の真意をそのまま王子は口にした。それが正しいことかど

うかはわからない。だが、虹次は王子の言葉を否定しようとはしなかった。そして、二人は互いに拳を前に出し、拳同士をしっかりと合わせた。

「虹次……誰にも負けんなよ。誰が相手だろうと、負けるテメーなんて見たくないからな」

「よかろう、ならば泪よ。お前はその心、決して折れるな。守護神として、強い心を持って全てを護ってみせろ」

「上等！」

そして、二人は別の道を行く。

袂を分かちながらも、決して消えぬ誓いを胸に秘めながら。

「我が同志……八王子 泪と袂を分かつ時に交わした誓いのため。決して誰にも敗北  
んという誓いのな」

「な……!?!」

何かを思い出すように閉じられた虹次の眼が開き、真つ直ぐに刻を見据える。かつて  
王子と交わしたという、「誰にも負けない」という誓いを口にしながら。

刻もそのような誓いがあることは察しがついていた。磁撃砲ガウスキャノンを受けた際、そのよう

なことを言っていたし、何より彼からそれだけ強い意志を感じたからである。だが、そ  
の誓いの相手が王子であることは予想していなかった。彼女が『コード：ブレイカー』  
……敵であるにもかかわらず、なぜ「同志」と呼ぶのか。今の時点では何もわからな  
い。

しかし、一つだけわかることがある。

「悪く思うな。勝利はオレがもらう!」

「……………」

虹次はその誓いのため容赦など欠片もしない……それだけだった。

「離せや、ろくぼん！ よんぼんを助けな！」

「やめろ！ 戻るな、遊騎！」

時を同じくして、『捜シ者』を追うために先に進んだ大神と遊騎の間でぶつかり合いが起きていた。先ほどから通信機越しに聞こえてくる刻と虹次の闘い。そして、もう磁撃砲ガウスキャノンが撃てないという事実。それらを受けて、遊騎は刻を助けようと戻ろうとしており、大神はなんとかそれを止めていたのだ。

「虹次アイツは小手先で勝てるようなレベルの相手やない！ 磁撃砲ガウスキャノン撃てへんのやったら

勝ち目はない！」

すっかり興奮してしまっているが、遊騎の見立ては正しい。現に、磁撃砲ガウスキャノンを撃ち尽くしてからの刻は一方的な劣勢。今までの闘いから見ても、磁撃砲ガウスキャノン以外の攻撃は簡単に



防がれる。戦況は絶望的と言えた。

「刻が」勝つためには助けに戻るのには正しい。だが、「この闘いに」勝つためには間違いだつた。それこそ、平家ならそう言つて遊騎を絶対に止める。そして、それは遊騎も安易に想像ができた。

「ろくばん！ お前もにばんと同じ——！」

「無駄にするな！」

「ツ——！」

同じ……心からそう感じた遊騎の言葉に対し、大神が吐きだした言葉は平家ならば言うはずもないであろう言葉だつた。その言葉を聞き、遊騎は思わず言葉を止めた。

「刻は、二発しか撃てないとわかつていながら最初に一発撃つたんだ。なぜだかわかるか？ オレたちのためにだ。オレたちを信じてアイツは撃つたんだ。その気持ち……無駄にするな」

「ろくばん……」

真つ直ぐと、逸らすことなく遊騎の眼を見る大神。決して逸れることの無いその眼を見るだけで、遊騎は大神の言葉が本心からのものだとわかつた。同時に、刻に任せて先に進むと決めた時に彼からかけられた言葉が遊騎の中で反響した。

『——頼んだぜ、遊騎』

「……そう、やな」

その言葉を改めて胸に刻むように、遊騎は胸の前で強く拳を握った。そして、今まで昂つた気持ちを吐き出すように大きく息を吐くと、遊騎は柔らかな表情を浮かべて大神に向き直った。

「ありがとな、ろくばん。ろくばんはよんばんとケンカばかりやけど、ほんまが一番よんばんのことを信じとるってわかつたわ」

「……悪い冗談だろ。？つきでプライドだけは無駄に高くて、何かあれば絡んでくる。あんなウザイ野郎を誰が好き好んで信じるんだ」

そんな遊騎の言葉に対し、大神は心底嫌そうな表情をして刻に対する酷評を並べた。しかし、それも一種の照れ隠しのように見えて、遊騎は笑みを浮かべながらそれを見守った。そして、大神は最後にボソリと呟いた。

「その上……その上アイツはすこぶるしぶとくて諦めが悪い。他の誰よりも。だから——」

信じているわけではない。ただ、そういう人間だと知っているだけだった。だからこそ彼は振り向かずに進むことができる。その確信を、彼は言葉ではなく胸の内で呟いた。

だから簡単に敗北<sup>まけ</sup>るわけがない、絶対に――

――ドガア！

「ガ――！」

「何度やっても無駄だ。オレには効かぬ」

もはや立つことすら難しい身体が虹次の『空』によつて壁に叩きつけられる。磁撃砲<sup>ガウスキャノン</sup>

で負荷がかかった両腕だけでなく、刻の全身がすでにボロボロだった。だが、それでも彼は膝を折ることなく、再び拳を構える。

――ガッ

「効かぬ」

「ッ——！」

もう声を上げることすらできなくなってきた。それでも、彼は斃れない。何度殴られようと、たとえ効かぬとわかっていても。

「ハア、ハア……」

「もうやめろ、刻。今のお前は見苦しいだけだ」

どんなに見苦しくても、彼はその両足で立って拳を振るい続ける。

——ドッ

一回

——ドッ、ドッ

二回、三回

——ドツ、ドツ………  
何度も、何度でも

——ガシッ！

「刻、お前の敗北まけだ」

たとえ誰にそう宣言されようと、その拳を止められようと関係ない。何があっても、彼の心と拳は折れない。折れるわけにはいかなかった。

「うる、せえ………！ 敗北まけらんねえのは……オレも同じだ!!」

——ゴッ！

「……認められぬか。いいだろう、ならば今一度——」

一撃。それだけ決めて勝負を決しようとして手を開く虹次。そして——

——グラリ

「な——!?!」

突如、全身から力が抜け、その身体が倒れかけた。

「よ、ようやく……全身に回ったか」

突然、自分の身体を襲った謎の現象に、虹次は思わず目元を手で覆い隠す。すると、それを待っていたかのように刻がニヤリと口角を上げる。いったい何をされたのか。その疑問を口にする前に、刻は自らその種明かしを始めた。

「最初に使った汞だよ……。あれからずっと、細かく霧状にして撒いておいた。アンタはそれを吸い込んだってワケ」

「汞……。なるほど、水銀の毒性というわけか。どこまでもしぶとい男だ。だが、この

程度でオレを斃せるとでも？」

最初、鉄屑に擬態させて利用した汞。出鼻を挫くために使われていたと思われる武器だが、時間が経過したところで効果が出るようにまだ利用していた。どこまでも抜け目がない男だが、それでも虹次を斃すほどではない。そのままじわじわと弱っていくのを待ったところで勝てはしないだろう。土壇場で効果を発揮しても、勝利のための決め手とは――

「勝つためじゃねーよ」

――ギシイ!!

「ぬ!？」

(身動きがとれん!?)

刻が右手を虹次にかざした瞬間、まるで身体全体が抑えつけられたように虹次は動けなくなった。動こうと力を込めても、それ以上の力で封じられる。この状況だと、考えられる要因はたった一つ。目の前で不敵に笑みを浮かべる……刻だった。

「汞が全身に回れば少なからず隙ができる。だが、本当の狙いはその隙を突いて、全身に回った汞ごとアンタの動きを封じることさ」

「な……!？」

「そして――」

「アンタをブツ斃すためだ」

刻の後方——そこにはいつ用意されたのか、鉄柱や鉄屑で形作られた巨大な鉄塊が浮かび、鉄塊に向かって伸ばされた刻の左手を狙っていた。この光景から導き出されるのは……あり得ない選択だった。

「磁撃砲だ!? ガウスキャノン まさかその身体で——!」

「ブツ斃されるテメエの心配してろよ!」

「冥土の土産にオレの片腕くれてやる!!」

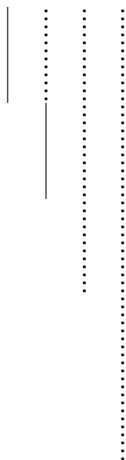
——ゴッ!!

瞬間、鉄塊は刻の左手に向かい、轟音と閃光が二人を包んだ。



静寂。

その空間を支配していたのは、その二文字以外になかった。



肉が焦げるような異臭はある。元の姿がわからないほど変形したり、焼け焦げた死体がある。

一目で致死量とわかるほどの血を流して倒れている人だったものがある。

それでも、その空間を支配している静寂に比べれば、微々たることのように感じた。それほどまでに、その空間は静けさに満ちていた。

「あ、う……」

と、そんな静寂に支配された中で一つの呻き声が生まれる。声の主は、幾重にも積み重ねられた死体の中から這い出すように腕を伸ばし、腕の力だけで身体を動かしていた。

「ハア、ハア……。だ、駄目だ……。早く、知らせなくては……」

ずるり、ずるりと引きずるような音が響き渡る。腕の力だけで進んでいるため、仕方がないのは承知している。いや、そもそも彼はどうして腕の力だけで移動しているのか。とても効率的とは言えない。

だが、その答えは簡単だ。今の彼にとって、唯一の移動手段がそれだったからだ。よく見ると、彼の両脚……もとい、下半身は存在していなかった。よほど強い衝撃で吹き飛ばされたかのように、乱雑な切断面からはボタボタと血が流れている。しかし、それでも彼は進もうとした。自分の命は尽きてもいい。それでも、やるべきことがあるとで

も言いたげに。

「危険、すぎる……。奴の力……。奴は、『捜シ者』の元に行かせては……」

すでに視界もかすんできている。それでも、自分の頭に刻み込まれた恐怖に染まった記憶は消えない。怖いゆえの恐怖ではない。まるで底なしの崖下を見たような、生物としての本能が打ち鳴らす恐怖が残っていた。

かすむ視界の中、彼が目指すのは先へと続く出口。そこに向かって、彼はゆつくりと手を――

「……どこに、行くつもりだ？」

手を伸ばしたその瞬間、背後から聞こえたその声と伸びた手が、彼の動きと頭をしつかりと掴んで離さなくなった。

「あ、ああ……！　ま、待ってくれ……！　わかった、『捜シ者』にも時雨にもお前の力のことと言わない……！」

自分の頭を背後から掴む手と、確かに背後から感じるその手の持ち主に、彼は懇願するように弱腰な言葉を並べ立てる。掴まれている手に力が込められているわけでもない。それでも、ただ触れられているだけでも彼にとつては大きな恐怖だった。

「もう悪事からは手を引く……！　『エデン』に裁かれろというなら大人しく裁かれる……！　だ、だから頼む……！」

思いつく限りの許しの言葉を並べる男。しかし、背後にいる者から言葉は返ってこない。何も言わずに自分の頭を掴んでいるだけ。

奇妙な静寂が何秒か続いたかと思うと、背後にいる者は小さく吐いた息の後に静かに告げた。

「言つたはずだ。『この力』を使う以上、お前たちはここで死ぬ。生きて出ることにはできないし、どんなに許しを乞おうと意味は無い」

瞬間、男の頭を掴んでいた手に少しずつ力が込められていく。五つの指先から伝わり頭がい骨全体に広がる痛み。それはすぐに脳まで伝わり、警鐘のようにじくじくとした痛みに変わる。

「ぐ、く……い！ ふ、ふざけんな！」

すると、痛みとして確かに伝わる死の予感のせいか。枷を外した獣のように男が吠え立てた。しかし、込められる力は緩むことなく、痛みは続いていく。

「あんな『力』……一人の異能者が持つていい力じゃねえ！ ましてや、『エデン』の飼い犬如きを持つているようなものでもない！ お前が本気になれば、それこそ『捜シ者』のように世界を——」

「あいにく、オレは世界をどうしようとは思わない。それに、『悪』である『捜シ者』と同じようになんて死んでもゴメンだな」

指先が当たる場所が変色していく。実感はないが、そこから頭がい骨全体に向かってヒビが入っているように感じる。少しずつ、だが確実に指先がめり込んでいくのがわかった。訪れるであろう死の瞬間までももの数秒と悟り、男は全ての言葉を吐きだそうと激昂した。

「なにが『悪』だ！ そんな『力』を持つてるお前の方が『悪』魔だろうか！ そうだ

ろ！ 夜原 優!!」

「——目には目を 齒には齒を 悪には無慈悲なる裁きを」

そこで、かつて『転移』を用いた異能者の命は摘まれ、再び静寂が空間を支配した。

——ガシヤン

壁に隠されたボタンを押すと、出入口口を封鎖していた扉が音を立てて解除されていった。その音を耳で聞きながら、優は咲と名乗った幼い少女の傍へと歩み寄った。

うつ伏せに倒れた少女の顔は、正直言つて酷いものだった。眼は見開かれ、口からは

信じられない量の血の跡がある。だが、その原因を作ったのは他ならぬ自分自身であることを優は承知している。決して罪滅ぼしでもなければ、許しを乞うつもりもない。ただ、せめて静かに眠らせようと、その目を閉じようと手を――

「ッ……」

ふと、その手を止める。先ほど残った一人の頭を潰し、赤黒い血に染まった手を。優は静かにその手を下げ、もう片方の手で咲の眼を静かに閉ざす。それと同時に、扉の解除も終わったようで、優はそのまま立ち上がる。

そして、『捜シ者』を追うべく先へ進もうとした……その時。

――ザッ

「誰だー！」

背後……入口の方から聞こえた足音に、すぐ戦闘態勢に入る。生き残りがいたのか、新手かはわからない。それでも彼は気を緩めることなく、足音の主を見据える。

だが、その顔を見た瞬間……その眼は大きく見開かれた。

「ッ――！ お、お前は……！」

「……………」

驚く優に対し、足音の主は言葉もなく静かにその場に立ち尽くしていた。

## code : 57 捧げし天使の両翼

「あなた、天使だもん。はね、はえてるよね」

「……ハア？」

——これが、寧々音との出会いだった。

藤原家の家族構成は三人家族であった。まだ一国会議員として動きながらも、後には総理まで上り詰める一家の大黒柱。そんな彼の血を引き、金銀妖眼を持ついたって普通の少年である実子。



そして、数年前に新たな家族として迎えられた異能を持つ少女……藤原 寧々音の三人である。

思えば、藤原家に寧々音が迎えられたのは突然のことだった。ある日、実子の少年の前に現れた幼い少女。教育係として傍にいた父親の部下は、その少女を「姉」と紹介した。

急に姉ができたことにも違和感を感じたが、何より違和感を感じたのは彼女の眼だった。同じ血を引く父親ですら持つていない金銀妖眼を、突然現れた少女は持つていた。それどころか、よく見れば見た目もかなり似ている。それこそ、本当は実の姉弟だったのではないかと疑ってしまいうくらい。だが、それがよかつたのかもしれない。元々、寧々音のつかみどころのない穏やかな性格の影響もあるかもしれないが、少年は寧々音を「姉」とすることを否定せず、すぐに打ち解けていった。

しかし、寧々音の存在をきつかけにして、少年と父親との距離は確実に開いていった。

「寧々音、お前の異能は本当に素晴らしい。私の自慢の娘だよ」

時が過ぎ、少年も寧々音も成長した。その頃には、少年の周りに非日常が渦巻くことが日常となっていた。異能、『コード：ブレイカー』、『エデン』……父親である藤原議員が表立った議員としての仕事以外に行っている、世間にも知られていない裏の仕事として知る機会があった。そして何より、寧々音がその非日常の「『コード：ブレイカー』一員になってからはそれが常だった。

「誇りに思っていないぞ、寧々音。お前は本当に出来の良い子どもだ」

「……………」

愛用の煙草をふかしながら、目の前で自らの異能……『磁力』を見せる娘。それに対し、実子である少年はその光景から目を逸らし、寂しそうに目を伏せていた。それを知ってか知らずか、藤原議員の満足そうな言葉から察せられるように、今の彼にとつて大切なのは寧々音だけだった。その理由はただ一点、異能が使えるというだけである。

「しかし、いつ見ても残念です。本来なら跡を継ぐべき弟君ではなく、寧々音さんの方に異能があるとは。……やはり後継は寧々音さんに、ですか？ 藤原議員」

「さすが平家君。いかにも、後継は寧々音一人いればいい。他は必要ない」

『コード・ブレイカー』のジャツジとして、少年たちの教育係の責任者としてよく藤原家にいた平家の言葉。それに対して藤原議員は悩む素振りも見せず答えた。それはまるで自分にとっての子どもは寧々音だけでも言っているように……

「ツ——！」

ついに耐えられなくなり、少年はその場から逃げるように走り出した。自分の存在を否定されてしまったようで、もうここに自分の居場所はないように感じて。

「ハン、必要ネエならこっちから出て行ってやるヨ」

数十分後、少年は必要最低限の荷物をまとめて家を抜け出した。異能や『コード・ブレイカー』という一般には知られてはならない情報が集まっている藤原家は他の国会議員に比べてセキュリティは固い。だが、それでも長年住んでいる自分の家だ。抜け道くらいはいくらでもある。いや、そもそもそれに引つかかったところで父親はどうもしないだ

ろう。叱りもせず、説得もしない。そんな未来が少年には確実に見えていた。

「……つたく、何が異能だ。あんなの、ただの『磁力』の化物じゃねーか」

その未来を振り払うように、少年は強気な口調で独り言を続ける。自分は普通であり、おかしいのは彼らであると。そう自分に言い聞かせて、少年は家から離れようと――

「化物じゃないものー」

「ドワアアアアア!!」

離れようとした……まさにその瞬間。背後から聞き慣れた声がして、少年は叫び声を上げた。

「ね、寧々音！ ビックリすんだろーガ！」

急に声をかけられたが、やはり姉弟。どんな状況でも声を聞けば誰だかわかるらしい。少年は怒りの言葉を口にしながら振り返った。そんな少年に対し……

「やったのー」

「喜ぶナ！ ったく、相変わらずワケわかんねー！」

寧々音はなぜか万歳して喜びを表現していた。意味がわからない寧々音の行動にツッコむと、寧々音はそれをスルーするように首を傾げて口を開いた。

「ねえ、お家から出ていくの？ まだ子どもなのに」

「う、うるせえ！ 関係ネーだろー！」

「あるよ。だって姉弟だもの」

「……それを、それをヤメテエから出ていくんだろーガ！」

と、そこで寧々音の言葉が止まった。思いの丈を絞り出したような少年の言葉を聞いて。少年は嘘を言っていない。姉弟……もとい家族をやめたいからこうして出ていくとしている。自分を必要としていない、自分の居場所がないここから。

「なんで？」

「え……」

「なんで？」

「ツ——」

すると、寧々音は首を傾げることもせず、真つ直ぐと少年の眼を見て問いかけた。あまりにも真つ直ぐな視線と言葉に、少年は俯くことで目を逸らす。そして、今までのため込んでいたものを吐きだした。

「うるせーナ！ 寧々音はどこまでバカなんだヨ！ この家にはな、異能を持つてる奴しか必要ねーんだヨ！ オレは異能なんて持つてない普通の人間なんだ！ だからこんな化物屋敷、こつちから出てつてやるつってんの！」

今まで誰にも打ち明けようとしなかつた心の内。だが、少年は決壊したダムのような勢いでその全てを吐き出した。家が、父親が自分を求めていないことを。自分が普通という望まれない人間であるということを。

「……わかつたか。お前には関係ねーんだヨ。わかつたら帰れよ、バーカ」

「……ム」

言いたいことを全て出し切ったところで落ち着いたのか、少年は寧々音に帰るよう諭した。もう自分と彼女は無関係とでも言いたげに。

しかし、当の寧々音は少年の「バカ」という発言か、それとも少年の心の内にか。ムツとしたような、おもしろくなさそうな表情をしていた。そして……

「じゃあ、あげる」

「ハ？」

何を言っているのか……と少年が振り返ると、寧々音は静かに自分の額を少年の額に合わせた。

——  
イイイイン

「!?」

瞬間、寧々音の額を通して何かが流れ込んでくるのを少年は感じた。それは脳全体を流れるようで、かつ身体に染み渡るようで。まるで空のグラスに水が注ぎこまれたような、なんとも奇妙な感覚だった。決して不快感はないが、その奇妙な感覚がむず痒さとなり身体全体にはしる。

「や、やめろー！」

奇妙な感覚で力が抜けそうになる自分の身体を支えるように、少年は拳を握って力強く叫んだ。その瞬間……

——ガシャ！

「……………え？」

彼の近くにあつたマンホールの蓋が、突然飛んでいった。誰の手にも触れずに。なぜそうなつたかはわからない。だが、一つだけ確かなのはそれが少年が力を込めた瞬間だったということだけだった。



「い、今のは……」

『磁力』なの」

「ハ……?」

「寧々音の異能、半分あげる。だから姉弟やめないでほしいの」

「ハ、ハア!」

一瞬、なんの冗談だと少年は感じた。だが、先ほどまでとは明らかに違う感覚が自分の中にあるのを感じていた。ほぼ手探りの状態ながら、少年はその感覚を表に出そうと力を込めてみる。

——イイン……

「う、嘘ダロ……?」

すると、先ほど飛んでいったマンホールの蓋がふらふらと浮き上がった。飛んでいった時と同じように誰の手にも触れず。それはまさに、金属類を磁化させて操る……以前に説明された『磁力』の能力そのものだった。

しかし、『磁力』の説明を受けていたように少年は異能についてある程度は知ってい

た。だが、人から人への異能の譲渡など聞いたことが無い。だからどうやったかはわからない。いや、少年が気になっているのはどうやってではなくどうしてだった。

「なんで……なにやっつてんだヨ、寧々音！ こんなことしてどうす——」

「——天使かと思ったの」

「エ……？」

どうして寧々音が自分に異能を分けたのか、問い詰めようとする少年。しかし、そんな少年に対して寧々音は、まるで当然のことをしたかのように口を開いた。

「初めて会った時、寧々音の弟になり……白い羽が生えた天使が来てくれたんだって思ったの」

その言葉を聞いて少年の中で蘇ったのは、初めて会った時の記憶。自分のことを「天使」と無邪気な顔で言い、羽があるのだと話していた。……その羽を確かめようと少年の服を脱がそうとしたが。

当時は意味がわからなかった寧々音の行動と言葉。しかし、今になってわかった。

「寧々音……とつてもとつても嬉しかったの」

「寧々、音……」

彼女は会った時から……天使を愛でるように自分のことを愛していた、ということに。

そうして『磁力』を得た少年は、寧々音の跡を継ぐように『コード：ブレイカー』になり、『コード：04』刻として闘っている。

「うおおおおお!!」

『渋谷荘』地下にて繰り広げられる『コード：ブレイカー』と『捜シ者』勢力の対決。その中で『Re—CODE：03』であると同時に、姉の仇である虹次と対峙する刻。最初は修業にて得た磁撃砲にて優勢に立った刻だったが、本気を出した虹次の反撃によりすでに限界を迎えていた。さらに、腕に強い負荷がかかるため二発が限度である磁撃砲ガウスキャノンも撃ち切ってしまった。

しかし今、刻はその限度を超えて磁撃砲ガウスキャノンを放とうとしていた。汞にて動きを封じた虹次を吹き飛ばそうと。

——ゴッ!!

そして、ついに鉄塊が刻の左腕に直撃した。

「っ、ぐ……!!……!! ぐあ……!!……!!」

「刻……!!……!! お前、本当に腕一本を犠牲にするつもりで——!!」

直撃の瞬間、目の前にいる虹次にも聞こえるほどの音で腕全体が壊れていく。肉は裂け、骨も砕かれようとしている。しかし、刻の眼は死なない。腕を下げようとしめない。『磁力』を弱めようとしめない。ただ一つ、自分の心に誓った覚悟のために。

「テメエは……!!ぜってーブツ斃す!!」

——ドン!

そしてついに、刻の左腕に直撃したエネルギーを加えた『磁力』が虹次の身体を吹き

飛ばした。

「ぐう！ ぬ、おおおお！ 『神風』！」かみかせ

しかし、虹次もただ吹き飛ばされるだけではない。両手から『空』によつて生成された鋭い風を放つて自分にかかるエネルギーを掻き消そうとする。

——ガ！ ガガガ！

だが、磁撃砲ガウスケヤノンのエネルギーは凄まじく、一向に止まる気配は無い。

「く………！ これでも止まらんとは大したパワーだ！ だが刻！ これでもオレは斃せはしないぞ！」

強気な言葉を繰り返す虹次。人によつては一種の強がりのようにも聞こえるが、先ほどまで見せていた圧倒的な強さがそれを物語っている。そして何より、闘いを楽しむように浮かべている笑みがまだ終わらないのだということを実証していた。

「——じゃあ、もう一発ならどうヨ！」

「な!?!」

吹き飛ばされる虹次の延長線上……そこにあつたのは驚きの光景だった。

先ほどの磁撃砲ガウスキャノンで力すら入らなくなった左腕を袖を食い縛ることで支え、すでに一度磁撃砲ガウスキャノンを放っている右腕を後ろに構えている。

その前後には……磁撃砲ガウスキャノンの鉄塊。

「バカな! 連発する気か!?!」

吹き飛ばされるところに同等のエネルギーをもう一撃……単純計算でエネルギーは倍になる。一発でも止められないエネルギーが倍になれば、間違いなく虹次は耐える間もなく吹き飛ぶだろう。

そして同時に刻の右腕も……両腕が壊れることを意味している。

だが、それでも構わなかった。たとえ両腕が壊れようと、全身が壊れようと知ったことではない。寧々<sup>姉</sup>音のためだと言うのなら喜んでその身を捧げる。

とつくの昔に、刻はそれを誓っていた。

「よ……つとー！」

——イイン……

異能を持つ姉から異能を分け与えられた少年は、少しでも『磁力』を上手く扱おうと特訓を始めた。家にある様々な金属をいくつも操ってみせて、少しずつではあるが扱いにも慣れてきていた。

「スゲエ……！　なんてスゲエんだ、異能って！　見てろよ、クソ親父！　これでテーマの鼻をあかして——」

「何もわかっていないようですね、刻君」

「ドワア！」

今まで自分を軽視してきた父親を見返そうと集中する少年。だが、突然背後から声をかけられたことでその集中は途切れた。『磁力』を解いてしまい、ちょうど特訓で使っていた鉄アレイが全て床に落ちて重低音を奏でた。

背後を見ると、平家が壁に持たれた状態でそこに立っていた。相手が平家であるとかつた少年は、眉をひそめながら口を尖らせた。

「ビツクリさせんなよ、ヘンタイ！……テメーがそうやってオレをバカにできんのも今のうちダゼ。今に寧々音以上に『磁力』を使いこなしてみせるんだからナ」

自分を奮い立たせるように少年は強気な言葉を口にする。実は少年は寧々音から異能を貰い受けたことを、平家にだけは話していた。彼も『コード：ブレイカー』ではあるため異能には詳しいし、昔から教育係として接してきたため信頼もしているというわけだ。

「……君は、異能が何であるか本当に理解していますか？」

「ハア……？」

だが、そんな少年の言葉を無視して一つの問いを投げかける平家。あまりに突然の問いに少年が答えられないでいると、平家は冷静な視線を少年に向けて、答えを示した。

「……異能の源は人の生命力。つまりは……命です」

「……命？」



平家が放った答えは、あまりにも重い霧囲気を纏った声によつてもたらされた。その霧囲気に気圧されて、少年は思わず印象に残った単語の身を繰り返す。

すると、平家は「そう」と一言応じてから言葉を続け、衝撃の事実を突きつけた。

「寧々音さんが『磁力』の半分をあなたに与えた。それはつまり、寧々音さんの命を半分あなたに与えたということ。そして、『磁力』の総量が半分になった分、それだけバイト中の死のリスクが高まる。……彼女は、それらを全てわかつた上であなたに異能を与えたのですよ」

——あなたと姉弟であるために。

「そ、そんな……。これが、寧々音の命……」

ふと、異能を分け与えてくれた時の寧々音の笑顔が浮かんだ。あの時、自分の命を縮めるのをわかった上であんな笑顔を浮かべていたのだと、真実を知っても信じられなかった。それくらいあの時の彼女は、いつものように無邪気で、優しい笑みを浮かべていた。

「そこまでして、オレのことを……」

同時に、強い後悔が少年の心を支配した。今までの自分は、異能を使えることにいい気になって無駄に使い続けていた。命を懸けて分け与えてくれた寧々音の……姉の生命力を。

(寧々音——！)

この時、少年は決めた。この身体とこの異能、全てを寧々音のために捧げよう、と。彼女自身が気付かなくてもいい。ただ、彼女のためにその全てを使いたい。

それが命を懸けて自分を引き止めてくれた彼女に対する、唯一の恩返しだから。

——ドン！

右腕全体に衝撃が走る。

左腕と同じように、耳を塞ぎたくなるような音を立てて右腕が壊れていく。

だが、構わない。たとえ二度と両腕が使えなくなろうとも。

寧々姉音の仇を討てるなら。

——無駄にはしない

——この最後の一撃を

「くらえ！ 最後の磁撃砲！！」  
ガウスキャノン

寧々音の、命の一撃を——！！

「『神嵐』  
かみあらし

刹那、全てが風の牙によって噛み砕かれ、刻の身体を吹き飛ばした。

「まさか『神嵐』コイツまで出すことになるとはな。見事に強くなったな、刻。だが——オレの勝ちだ」

(そ……そんな、バカ、な——)

全てを懸けた刻の一撃は——破壊神の前に粉々に砕け散った。

身体全体に力が入らない。

ただ流れるように空中を飛ばされていき、徐々に落下しているのがわかる。

硬い床が近づいている。その先に待っているのはただ一つ。その床に倒れる未来だけ。

そんな現実を虚ろな意識の中で感じながら、刻は静かに眼を閉じた――

――嫌だ！

前もそうだった。

――二度と、地面になんか突っ伏したくねえ!!

姉を失った時も、初めて仇に向かっていった時も。

——たとえ死ぬことになっても！  
もう、十分だった。

——絶対！！

地面を身体で感じるのは、もう——

——ザシヤアアア！！

どう身体を動かしたのかはわからない。だが、刻は空中で無理やり身を起き上げら  
せ、その両足で地面に立った。そして——

——イイン！

周囲にある鉄骨を虹次に向かって勢いよくぶつける。周囲の残骸全てを武器にし、尽

きることなく追撃をする。

——ガン！ ガン！

「……………」

しかし、それは全て無駄だった。鉄骨などを普通にぶつけるだけでは、虹次に対してなんのダメージにもならないことは最初のうちにわかりきっていた。『空』による空気の壁で全て払い落されていった。

——イイン……

それでも刻は攻撃をやめない。斃すまでやめないと言いたげに、自分の周囲に残骸を浮かせ、それを虹次に向かってぶつけ続ける。

彼は……まだ諦めていなかった。

「ほう、まだ向かってくるのか……！ まさに限界をも超える鋼鉄はがねの意志！ いいだろう、刻！ その意志に伝えてオレも——」

だが、そこで虹次は気付いた。今の刻がどのような状態か。その全てを理解した上で……虹次は静かに目を閉じた。



「刻、貴様……立ったまま気絶おちているのか」

「……………」

すでに刻に意識など無かった。だが、それでも彼は地面に立ち、攻撃を続けた。その口元に強い意志を感じさせる笑みを浮かべたまま。

「両腕を犠牲にしただけでなく、気絶おちてもなお立ち向かわんとするこの強い意志。一体どこから……………」

眩き、虹次は再び刻を見る。今もなお彼は残骸をぶつけ続ける。すでに虹次は『空』による防御をやめており、一つひとつが直撃するがほとんどダメージはない。それほど弱い『磁力』で動かしていた。

だが、ここまで来たら力の強さは関係ない。純粋な力ならば虹次は圧倒的に勝ってい

た。しかし、この意志の強さに関しては敗北を認めざるを得ない……虹次は心からそう感じていた。

そして……確信した。

「……刻よ、お前ならなれるかもしれぬ。いずれ来るであろう、オレたちが求める本当の闘い……そこで闘い抜く真の戦士に」

刻に語りかけるように言葉を続ける虹次。気絶している刻に聞こえるはずもないが、虹次は満足そうに彼の元へ歩み寄っていった。

『刻……どうした、何があった!?!』

『返事せーや、よんぼん! よんぼん!』

刻の胸ポケットにしまわれていた通信機から大神、遊騎の声が響く。だが、その通信を向けられている刻は答えられず、通信を聞いていた虹次も答えようとはしなかった。

彼は黙って刻を抱え、担ぎ上げるようにして軽々と持ち上げた。

「……我が心友よ。」

待っている……お前の『捜シ者』を一人見つけた。今、連れていく」

## code : 58 扉の奥に潜む謎

刻が敗北た——

その事実には各通信機を通して大神たちへと届いた。

『フラッシュ・ネバー・ダイ  
光 撃 ！』

『アイス・リフレクション  
氷面反射』

平家の掌から放たれた目も眩むような『光』。それは一つの光線となつて対峙する雪比奈へと向かつていく。しかし、自身を守る盾のように現れた氷によつてその『光』は屈折し、周囲を破壊していく。

『渋谷荘』地下の上層で繰り広げられている、かつての闘いから続いているという因縁の対決はどんどん激しさを増しているようだった。少なくとも——

——ドガア！

「KYA!」<sup>キャ</sup>

「ぐああー！」

両者とも、それぞれの味方の安否すら構っていられないほどに。闘いの中でロストして小さな亀になった日和と、闘いで尋常じやないほどの傷を負った王子。二人は自由に動かない身体を必死に動かし、目の前で繰り広げられる闘いに巻き込まれぬようにしていた。

「ッ——！ 日和！」

「——E?」<sup>え</sup>

だが、いくら巻き込まれぬようにしていても現実は無情なもの。先ほど放たれた『光』によって破壊され、崩れた部分が瓦礫となつて王子と日和に目がけて落ちていく。それにいち早く気付いた王子は、『コード・ブレイカー』にとって裁く対象であるはずの日和を庇うように覆いかぶさつた。

「ぐうー！」

幸いと言うべきか、落ちてきた瓦礫はそこまで大きいものではなかった。だが、ほぼ瀕死状態に近い王子にとっては辛い衝撃だった。

「な、なんで日和を……」

それに対し、日和は精神的な衝撃に駆られていた。自分は王子にとつて裁くべき。悪。かつての同志と闘うことを覚悟した王子がなぜ敵である自分を助けるのか。日和はそれがわからず、ただただ目を見開いて王子を見上げていた。

「……罪人であるお前を裁くのは『コード・ブレイカー』の私だ。それに、お前は自分で勝手に罪を犯したんだ。ロスト中に苦しみなく死なれたら困る」

「……！」

容赦なく負荷をかけてくる瓦礫を押し返した後、王子はフツと笑いながら日和の疑問に答えた。あくまで日和を斃すのは自分だと、罪を犯した者として苦しまずに死ぬのは許されないと。だが、それは言い換えれば今回は護るということ。少なくとも日和がロストから戻るまでは。だが、そこまで闘いが続くとは思えない。どんな結果にしろ、日和がロストから戻る頃には両者とも近くにはいないだろう。

そんな厳しくも優しい王子の言葉を聞きながらも、日和の視線はある一点を捉えていた。

(……あれって)

その視線の先で捉えるもの……それは、王子の革ジャンの内ポケットからはみ出るもの。おそらく今まで彼女が受けた攻撃による影響だろうが、王子自身は気付いていないもの。

『渋谷』と書かれたタグ……地下の扉を開くカードキーだった。

「消え逝け……」  
サウザント・アイス  
『千氷撃』

一方、雪比奈と平家はという息つく間もなく次の攻防に転じていた。雪比奈の掌から生成される無数の鋭利な氷が群れとなり、一斉に平家へと襲い掛かる。

「おっと、怖いですねえ。ならば……全て払い落しましょう！」

——シユパアン！

だが、平家はそれを避けるのではなく真正面から向かっていった。その手に『光』のムチを握り、巧みにその手を振りながら向かってくる氷全てをムチで払い落す……どころか粉々に砕いていった。

両者ともにまったくの互角。現に、二人は闘いが始まってから一切の傷を負っていない。すると、それが気に入らないのか雪比奈の眉間が途端に険しくなっていた。

「……のらりくらりと。以前のようにならば三日三晩と長々続けるつもりか」

「ふふふ、それもいいですね。ならば以前同様、四日目に同時にロストしたいものです。……私は結構好きなんですよ？ あなたのロスト姿」

「ッ——！」

瞬間、雪比奈の表情が一層険しくなる。それが見えたのも束の間、次の瞬間には回し蹴りが平家の顔を捉えていた。しかし、平家もそれを見切り、顔で受ける前に片腕でガードする。不意を突いたはずの一撃が防がれるも、その威力はかなり重い。

その中で、雪比奈は氷のような冷たさを取り戻した瞳で平家を見据えた。

「……お前は『渋谷荘』を壊したくないだけだ」

「……………」

静かに、だが激しい殺気をぶつけ合いながら睨み合う二人。膠着状態に陥り、次の手をどちらが打つかと緊張感が漂う。

しかし、その次の手は彼らとは別の場所で起こることとなった。

「ぐっ！ や、やめろ！」

「ッ——！」



突如、離れた場所にいる王子の声が響く。まさかと思い平家が視線を向けると……

「——イエイ！ 日和チャCHAN、鍵キGETT！」

そこにあつたのは、日和敵に鍵キを奪われたという最悪の光景だった。

「この——！ 逃がすか！」

不意を突かれたのか、自分が護っていたはずの鍵キを奪われてしまった王子。しかし、その現実には悲観するよりも先に鍵キを取り戻そうと『影』を日和に向かつて伸ばす。『女帝エンプレス・パラドックスの矛と盾』の時とは違い、触れても喰われることはないが動きを拘束することくらいはできる。幸いにも今の日よりはロストして亀の状態。亀といえは「鈍い」というのが定説だ。普通に考えれば何の問題も無く拘束はできた。

普通、ならば。

「HAN! 全部の亀がドジで鈍いと思つたら——大間違いだYO!」

「くっ——!」

日和は短い足を高速で動かし、とても亀とは思えないほどのスピードで走り出した。王子の『影』はそこに追いつけず、空しく何も無い床にぶつかるとだけだった。

そして、日和は近くの瓦礫を軽々と跳び移つていき、「ダストシューター」と書かれた引き戸式の小さな扉に辿り着いた。そのまま扉を開け、鍵を抱えたままそこに入つて落ちていった。

「これが『パンドラの箱』の扉への一番の近道だもんNE〜!」

「——くそ〜!」

ダストシューターという細長いトンネル状の空間内で反響しながら、徐々にフェードアウトしていく日和の声。残響すら聞こえなくなると、王子は悔しそうに拳を床に叩きつけた。ダストシューターは言ってみれば全階共通のゴミ捨て場だ。基本的に一番下の階に行きつくようになっていて、確かに一番下に行くには一番の近道だが、あくまでゴミを落すためのものであり人が通るようにはできていない。また、ここのはかなり小さなため小さな亀になっていた日和でもない限り、通るのは無理だろう。

つまり、鍵が『捜シ者』の手に渡るのを阻止するのは王子たちにはほぼ不可能となつ

てしまった。

「……さて、これは参りましたね。おそらく大神君たちが追い付こうとしているでしょうが間に合うかどうか。雪比奈さん、どうかそこをどいてもらえませんか？」

「くだらないことを聞く。あんな『パンドラの箱』ごときのために、オレがお前を殺す機会を逃すと思っているのか」

鍵が敵の手に渡ってしまった現実を嘆くように、やれやれと平家は肩を落とした。ダメ元でといった様子で雪比奈にそこをどくよう提案するが、間髪入れずに却下される。『捜シ者』があらゆる手を使って狙う『パンドラの箱』を、「オモチャ箱」と言い捨てて。すると、平家は深く息を吐き、スツと目を細めて真剣な声音で続けた。

「……いいからそこをどきなさい。あなただって知っているでしょう？ あの『パンドラの箱』には何が入っているか……。そもそもあなたは、なぜそれを知っていないながらアレを開けようとする『捜シ者』に協力するのですか？」

「平家……？」

今まであまり見せたことがないほど真剣な様子で語る平家の言葉に、思わず反応してしまったのは言葉を向けられた雪比奈ではなく王子だった。彼女も『パンドラの箱』の存在は知っている。その中身によってどのような力が得られるかも。

しかし、中身の詳細についてはほとんど知らない。それに対して、平家の言葉から察

するに彼はその詳細を知っている。しかも、彼の目の前にいる雪比奈も。

平家の雰囲気から中途半端なものではないことは伺える。あの様子を見るにかなり重要なものだ。しかし、それを同じく知っているのであろう雪比奈は、冷たく言い放った。

「……簡単な話だ。あの人が『箱』を開ければオレは退屈しない。それに、『箱』が開こうが開かまいが、『箱』を狙えばお前が出てくる。……どつちに転んでも、オレにとつては好都合な話だ」

「あくまで自分自身の目的のため、ですか。目指すもののためなら周囲がどうなろうと構わない……変わりませんね、あなたは」

(……また、だ)

今回の鬪い全てをあざ笑うかのように、自身のために動いているということをかすかす雪比奈。だが、平家はそのような答えが来るのをわかっていたのか、大して驚きもしなかった。真剣な問いかけに対し、このような答えを用意されたというのに。

そんな二人の様子を遠くから見て、王子は確信に似た何かを心の中で感じていた。

(この二人、本当に前の鬪いで鬪っただけなのか？ この二人の雰囲気には……ずつとお互いを知っているような感じがある。いったいこの二人に……何があつたつていうんだ……?)

まるで旧知の仲とでもいうような雰囲気です話す平家と雪比奈。王子の記憶が確かな

ら、この二人の初対面は前に起こった『捜シ者』と『コード：ブレイカー』たちとの闘いのはずだった。だが、二人が闘い始めてからのやり取りなどで、その考えは確かかと疑うようになった。それくらい二人の間には因縁……とても深く強い因縁があるように思えた。

だが、王子がそんなことを考えていることに気付くはずもない雪比奈は、再び氷のような冷たい口調で口を開いた。

「変わらないのはお前も同じだ。結局、お前は何も変わらないようにしようとしているだけ。……今回だってそうなんだろう？ お前は……いや、お前たち“エデン”は大神が今回の件で変わることを防ぼうとしている。『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>がある場所——

あの扉の奥が、大神と『捜シ者』の親が死んだ場所だと知ること、な」

「離せや、ろくばん！ オレはよんばんを助けに行く！」

「いい加減にしろ！ オレたちは優と刻に託されただろう！ ここで『パンドラの箱』ボックスを護るんだ！」

ほぼ同時刻、『渋谷荘』地下最下層に存在する『パンドラの箱』ボックスを護る扉。それを護るように立つ二人の少年……遊騎と大神が必死の表情で言い争っていた。

なんとか扉の前まで辿り着くことができた二人。見ると扉に開けられたような形跡はなく、どうやら『捜シ者』たちより先に到着することができたようだった。『捜シ者』を迎え撃つために周囲を警戒する大神だったが、遊騎はそれよりも刻の安否が心配だった。

通信機越しに、彼が虹次に捕えられていることはわかった。本当ならすぐにでも助けに向かいたかったが、まだ扉につく前だったためそれができなかった。しかし、今は無事に扉の前まで着くことができた。『捜シ者』もまだ辿り着いていないことから考えれば結果は上々。ならばすぐにでも刻を助けに行こうと遊騎は動き出した。しかし、大神がそれを止めていこうというのが現状だった。

「今は無事でもいつ虹次アイツの気が変わるかわからへん！ そしたら、よんばんだって殺

されてまう！　ここは無事やった！　まだ『捜シ者』だつて着かへん！　だつたら、よんぼんを助けるべきや！」

「——遊騎!!」

「ツ——!」

なんとかして刻を助けに行こうとする遊騎だったが、大神の腕が彼の腕をしつかりと掴んでいるためそれができない。彼が本気を出せばそれくらい拘束を解くことはできるが、大神だつて無傷では済まないだろう。仲間を助けるために他の仲間を傷つけることなど意味が無い。

しかし、それでも遊騎の意志は変わらない。どうにかして振りほどこうとするが、大神が一際大きい声で名を呼んだことで一瞬だけその動きが止まる。反射的に声を出した大神の方を見ると、大神は真つ直ぐと遊騎を見ていた。

「駄目だ!」

「……なんで、なんでや。ろくぼんは、そんなのとちやう……。にばんとか、エデンの奴らとは違うつて……思つとつたのに……」

真つ直ぐとした眼で、真つ直ぐに遊騎の行動を否定する大神。それを受けて遊騎が感じたのは、自分が思ったことができないもどかしさよりも、大神にそのような言葉を言われたことへのショックの方が大きいようだった。俯き、震えながら絞り出すように声

を發する。

そして、吐き出すように遊騎は声を荒げさせた。

「やつぱり、ろくばんは『にやんまる』とちやう！ 人の命がどうなつても、人が死んでもなんとも思わん！ ただの人殺しの『かげまる』や!!」

「遊——!」

「離せ!」

怒鳴り散らすように、大神を正義の味方ではなく人殺し『かげまる』と吐き捨てる遊騎。普段から自らを「悪」として行動してきた大神だったが、自分で言うのと他人に言われるのでは違う。予期していない場面ならばなおさら。

遊騎の言葉を受けた瞬間、思わず大神は彼の腕を掴む力を緩めてしまっていた。それを遊騎が見逃すはずもなく、彼はそのまま大神に背を向けて走り出した。そのまま刻を助けに行こうと、勢いよく地に足を——

——ずぶ!

「な!?!」

遊騎が走り出したまさにその瞬間。地に着いた遊騎の足元が嫌な音を立てて砂のようにながらざらとした黒い物質の集まりに変わり、そのまま遊騎の足を飲み込んだ。さらにはその地点を中心として、床全体が音を立てて黒い物質と化していった。



「く、くそー！ なんだ、これは!？」

「身動きが、とれへん……!?!? どんどん沈んでまう……!?!?’

なんとか逃れようとするが、どこに触れても黒い物質のため足場にもできなければ掴むこともできなかった。ただ少しずつ、自らの重みで黒い物質の中に沈んでいくだけだった。まるでアリジゴクのように。

さらに、この黒い物質は少しずつ部屋全体に広がっていき、とうとう『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を護る扉まで到達してしまった。

「しまった!?!? 壁も、扉も崩れる——!?!?’

扉に黒い物質が触れた瞬間、足元が崩れた時のように嫌な音を立てて扉が崩れ始める。その勢いは凄まじく、まるでその扉自体が黒い物質に変わるようで——

「バ、バカな——!?!? 扉が、開いている!?!?’

確かに閉まっていたはずの扉が全て黒い物質へと変わったまさにその時、さつきまで閉じた扉があった場所には完全に開いた扉があった。以前見た時と同じ、奥に行けばい

くほど視認できないほどの闇が包む……一直線の空間が。

「ようやく気付いたか、『コード：ブレイカー』」

「お前は……時雨！」

扉が開いていたことに意識を向けられていたのも束の間、扉のように黒い物質と化した壁から無機質な声が響く。大神が視線を向けると、そこには『Re—CODE』が一人である時雨が冷ややかな眼をしながら立っていた。その腕に、鍵キを持った日和を抱えながら。

「これこそ我が異能『灰塵アッシュ』。『灰塵』によつて創り出された疑似空間にまんまと騙されるとは……愚かだな」

「お前ら……！ 奴は、『捜シ者』はどこだ！」

「バーカ！ 『捜シ者』はこの日和チヤンとHANの活躍で開いた扉の中！ きつと今ごろ、『パンドラ』を手に入れてる頃だYO！」

先ほどまで大神と遊騎が護っていたのは、時雨の異能により創り出された幻だと明か

される。本物の扉は見ての通り、とうの昔に開けられていた。どうやら大神と遊騎が辿り着いた時には鍵キを手に入れた日和と『捜シ者』が合流しており、そのまま『パンドラボックスの箱』を奪いに行つたらしい。

「くっ——！ ぎげんな！」

まるで自分たちが掌の上で踊らされているような感覚を覚えた大神は、すぐにでも『捜シ者』を追おうと左手の手袋を外す。そのまま『青い炎』を煌めかせ、自分たちを飲み込もうとしている黒い物質……『灰塵』を燃え散らす。しかし——

「も、燃えない!？」

確かに『青い炎』が触れたはずの場所は、いつものように『青い炎』が燃え広がることはなく、ぶすぶすと音を立てるだけだった。一向に『青い炎』によって燃える素振りが見えない。すると、それを見ていた時雨がため息交じりに口を開く。

「……『灰塵』とはその名の通り灰。つまりはすでに燃え終わつた物質だ。燃え終わつた物が新たに燃えることなどありはしない。さらに『灰塵』は音も吸収する性質を持つ。だから遊騎の『音』も無効。脱出などお前たちには不可能。『捜シ者』が戻る前に死灰しかいと化すがいい」

燃えることも無く、『音』すらも吸収するという時雨の『灰塵』。こうなると完全に八方塞がり、脱出することなど不可能だと感じてくる。こうしている間にも大神と遊騎の

体はどんどん沈んでいき、タイムリミットが近いことを痛感させる。

「チツ……！……ふざけるな！……こんな所でもたついている暇はねえんだよ！」

それでも、大神は諦めていない。時雨を睨みつけ、その眼に強い意志を込める。脱出する手が浮かんだわけではない。だが、それでも彼は諦めるわけにはいかない。どうかして抜け出そうと――

「――齒あ食いしばりや、ろくばん」

――ヴオ！

「ぐっつ!?!」

瞬間、大神の背中に衝撃が走る。その衝撃の威力は重く、大神の身体は『灰塵』に飲

み込まれるより先にそのまま吹き飛ばされた。その大神の背後にいたのは……遊騎。

「つ——！ 遊騎！ お前、『音』の音波でオレを押し出して——！」

吹き飛ばされたことで『灰塵』から抜け出た大神。そのまま滑るように床に着き、未だ『灰塵』に飲み込まれようとしている遊騎を見る。『音』は『灰塵』には効かない。だが、『灰塵』に飲み込まれようとしている“人間”には当然のごとく効く。『灰塵』が飲み込む力より強く音波をぶつけることで、大神を外に押し出したのだ。

しかし、それが限界だった。『灰塵』が飲み込む範囲は大きく、とてもじゃないが大神が範囲外から手を伸ばしても届かない。つまり……遊騎が助かる可能性は万に一つも無い。

「ろくばん！ オレのことはええ！ 早よ『捜シ者』を追うんやー！」

「だ、だが……！」

遊騎自身もそれをわかっているのか、『捜シ者』を追うよう大神に諭す。しかし、いくら大神でも目の前の仲間を見捨てて目的を達成しようとするほど冷たくはない。その足がすぐに動かない。

すると、遊騎は残った力を振り絞るように大きく口を開き、叫んだ。

「拙者は『かげまる』！ 非常なる悪の忍よ！」

「な……!?!」

何を思ったのか、遊騎が口にしたのは『にやんまる』の敵である『かげまる』のセリフだった。遊騎がどのような意図でそれを口に行っているのか、大神がそれを理解するよりも先に遊騎が続けた。

「……堪忍な、ろくばん。オレ、わかっとな……ろくばんが、本当はよんばんのこと助けに行きたいってこと。それでも行けへんってことも……わかつてたんや。それなのに、オレは……」

俯き、申し訳なきさうに言葉を連ねる遊騎。大神が本当は刻を助けようと思っていたこと、それでも行くわけにはいかない現実があること……それを知っていながら我儘を言った自分のこと。

だが、最期が謝罪だけでは気分が悪い。遊騎は暗い雰囲気をそこで打ち切り、ニツといつものように無邪気な笑みを浮かべた。かつて見た、『にやんまる』のワンシーンを思い浮かべながら。

「拙者は『かげまる』。密命のためならば命は惜しまぬ。たとえそれが友の命だろうと

な」

「じゃ、じゃあ！ どうして『にやんまる』を助けてくれたにやん!？」

「ふ……どうもこうもない。ただの気まぐれよ」

『にやんまる』が正義で『かげまる』が悪。それは誰しも知っていることだ。しかし、それでも遊騎はわかっている。非情な忍と言いながらも、このように彼は『にやんまる』を助けたことがあることを。それを「ただの気まぐれ」と言い捨て、本心を表に出さないうところも。

そんな優しく不器用な悪役が……遊騎の中では大神と重なって見えていた。

「……オレ、『にやんまる』が一番やけど、本当は優しい『かげまる』も大好きやし」  
それは、『かげまる』というキャラクターに向けたものではない。我儘の中で「悪の『かげまる』」と言い捨ててしまった仲間に対する言葉。

その言葉が言えたことに満足し、遊騎は静かに眼を閉じてその顔を『灰塵』の中に沈めた。

「ゆ、遊騎!!」

また飲み込まれても構わない。大神は走って手を伸ばす。自身を切り捨てて自分を助けた仲間を救うために。たとえ他人から「甘い」と罵られようとも。そうして必死に手を伸ばす中――

「駄目だー!!」

「ッ――!?!」

大神は眩い光と共に、誰かの必死な声を聞いた気がした。



「——な!？」

「はにゃ?」

突然現れた眩い光。それが止んだと同時に、驚くべき変化が起こった。先ほどまで遊騎を飲み込もうとしていた『灰塵』が完全に消えていた。現に遊騎は床に座っており、何が起こったのかわからず首を傾げている。

「な、何コレ!? 何が起こったっていうのYO!？」

「『灰塵』が……異能がかき消えたのか!？」

「異能が、かき消えた——!？」

同じく驚く日和と時雨。いや、彼らの方が強い驚きを感じているだろう。特に時雨は、自身が消そうとしたわけでもないのに異能が消えたのだ。その姿を見る限り、ロストしたわけでもないというのに。意味がわからずに声を荒げるが、その中で発した「異能がかき消えた」という言葉で大神はハツとした。

彼はこの現象に覚えがある。異能が効かないどころか、その異能自体をかき消してしまいう力を。その力の持ち主を。だが、その持ち主がここにいるはずがない。そう自分たちが仕組んだのだから。そう思いながらも、大神は周囲を見渡して……見つけた。

「最後の最後に自ら異能を消して思い止まるとはな。殊勝なことだな、時雨。だが——

命を粗末にする者は、この『にやんまる仮面』が許さないのだー!!」

「ワン！」

「!!?」

そこにいたのは珍種である桜……ではなく、『にやんまる』の仮面と唐草模様のマントを着けた『にやんまる仮面』（輝望高校の女子用制服着用）と同じく仮面とマントを着けた子犬という奇妙な一人と一匹だった。そのあまりに衝撃的な人物の登場に、大神は思わず言葉を失った。

「あ、な……何を、いったい……」

「なんでもキャンプ場から走って出勤してきて疲れたらしくてな。しょうがないから

連れてきた」

「優?！」

あまりの衝撃に大神が言葉を失っていると、今度は完全に見知った人物が見知った姿で現れた。かなりの傷を負っているが、それは無数の敵を一人で引き受けた夜原 優だった。ここに来るまでにある程度は回復していたようで、意地の悪そうな笑みを浮かべていた。

すると、『にやんまる仮面』は優の方を見て勢いよく頭を下げた。

「夜原先輩! ここに着くまで、ほんとうにありがとうございました! 壮絶な闘いが終わってすぐだというのに運んでくださって! ……最後には勝手に飛び込んでしまいました」

「ああ、それは構わない。どうせ向かうところは同じだし、結果的に遊騎が助かったんだからな。ところで、オレのことをそう呼ぶのは今日キャンプに行っているはずのどこかの女子高生だけなんだが?」

「ぬお!? や、やや……夜原先輩殿! この『にやんまる仮面』、謹んで御礼申し上げます!」

どうやら優の闘いが終わってすぐに現れた謎の人物……それがこの『にやんまる仮面』だったらしい。本来なら優よりも上にいるはずの王子か平家に会いそうなものだが

……彼らは正規ルートから外れた場所で闘っている。正規ルートを通ったならばまず会わないだろう。

そうして合流してから一緒に来たらしいが、この様子を見る限り優は『にやんまる仮面』の正体に気付いている。その上でからかっているのだ。呑気な二人に呆れる大神だったが、それよりも先にすべきことをすることにした。

「……あの、何をやっているんですか？　桜小路さん」

「うぐ!？」

優のように合わせる素振りも見せず、一言で正体を言い当てる大神。優が突っ込まないことで自信を感じていたのか、あっさりばれてしまったことに動揺する『にやんまる仮面』はダラダラを汗を流しながら誤魔化そうとする。

「さ、桜小路？　し、知らぬぞ？　拙者は、ただの『にやんまる仮面』で……」

「あなた、どこまでバカなんですか？　そんな話、誰が信じるって言うんですか？」

「や、夜原先輩殿が……」

「はあ？　気付いてたに決まってるだろうが。その上で知らない振りをしたんだよ。」

桜小路、やっぱお前は大馬鹿だな」

「なぬ!?!　ひ、酷いのだ!」

しどろもどろになりながらも誤魔化そうとする『にやんまる仮面』……もとい桜。気

付いていないと思っていた優に助けを求めると、その優も問答無用で切り捨てた。まあ、たかが仮面とマントを着けただけのため気付かない方がおかしいのだ。桜を知らない人物ならまだしも、知っている人物なら確実に……

『にやんまる仮面』……!』

「……遊騎はまあ、純粹だからな」

「……とりあえず放っておきましょう。それよりも——」

確實……ではないことは証明されたが、遊騎に関しては例外だと優と大神は目を逸らした。というよりこんな茶番をしている場合ではないのだ。大神は大きいため息をつくと、鬼気迫る表情で桜に詰め寄っていった。

「なんでここに來てるんですか! あんなクソ芝居してまでアンタをここから遠ざけたいというのに、これで全て水の泡ですよ!」

「あう……!」

あまりの迫力に思わず距離をとってしまう桜。確かに大神の今の迫力は凄まじく、言葉遣いこそ丁寧だが完全にブチ切れていることがわかる。それを承知しながらも、桜はビクビクと震えながら言葉を絞り出す。

「い、いや……皆が私のためにそこまでしてくれたのはわかってるぞ……? 感謝もしている……!」

「と、桜小路は言っていた」と桜は最後に付け足した。あくまでまだ『にやんまる仮面』として接するらしい。まあ、この時点で先ほどの「桜小路？ 知らぬぞ？」の発言と矛盾しているのだが……それまで突っ込んででは面倒極まりない。

「し、しかしだな……」

すると、桜は変わらず怯えながらも言葉を続けた。全てを知りながらも、なぜ戻ってきたのか。その理由を話すために。

キャンプ場にて、大神たちが協力して自分を避難させたことを会長から伝えられた桜。それと同時に、会長はある物を桜に手渡していた。それを見て、桜は思わず目を見開く。

「こ、これは……私が『渋谷荘』に持っていつていた荷物？ 会長、どうしてこれ……」

「いかにも、大神君だよ。もう実家に帰って、普通の女子高生として暮らせるように」

て。今ならまだ……今までのような“当たり前”の日常に戻れるだろうってね」

会長によって伝えられた大神の思い。それが彼なりの優しさであり、気を遣った結果だということも桜にはわかった。しかし……

「正直、腹が立った」

「え……？」

予想外の言葉に、大神は思わず開いた口が塞がらなくなる。すると、桜は顔を俯かせて心の内を吐き出すように続けた。

「大神、お前の言う“当たり前”ってなんなの？ ……少なくとも、それは私が考えているものとは違う。私にとつての“当たり前”は……大神と毎日、学校に行く！ なぜ、それがわからぬ！」

「……！」

「いや、それだけではない！ 皆で『渋谷荘』で暮らすことこそが“当たり前”なのだ

！遊騎君がご飯を食べながら寝ていて、遅く起きた刻君も歩きながら食べて、そんな行儀の悪い二人を王子殿が怒って、夜原先輩が仕方なさそうにそれを眺めている。會長だつて騒ぎを聞きつけて起きてきて、私と大神はそれを聞きながら学校に行く……私  
は、またその時が来るまで絶対にここを離れぬぞ!!」

「……………」

思いの丈全てをぶつけたような桜の言葉。彼女にとつての“当たり前”、もはや大神たちもその一員になっているのだ。彼らがいるから桜は日常を過ぐすことができる。彼らの存在こそが日常なのだ、と。その言葉を聞き、大神は口を紡いだまま静かに目を伏せる。

「『にやんまる仮面』……………」

「あー！ えと！ そう桜小路が言っていたぞ！ 私——拙者ではなくてな！ だ、だからな？ こう言っているわけだから、桜小路へのお仕置きはほどほどにしてほしいのだ。ほどほどに……………」

「ワ、ワフツッ！」

遊騎から「『にやんまる仮面』と呼ばれたことで今の自分が『にやんまる仮面』であることを思い出した桜は、慌ててそのフリをした。そのついでに、自分へのお仕置きを軽くするように頼み始めた。先ほどまでと違い、またビクビクと震えながら。」



そんな桜を見て、大神は静かにその距離を詰める。そして――

――ぼんっ

「ぬわ!？」

「――来てくれて助かりましたよ。『にゃんまる仮面』」

「お、大神……」

ピンチに現れた『にゃんまる仮面』として……大神は彼女の肩に手を置き、微笑みながら感謝の気持ち传达了。

「……いいのか？ このまま桜小路がいて」

「あの人は『にゃんまる仮面』だそうだから、問題ないさ。……ああ、それとほら」  
怒りを鎮めた大神を不思議そうに眺める優に対し、大神はやれやれと肩をすくめてみせた。そして、思い出したように内ポケットに手を入れ、そこから一個の通信機を取り出して、そのまま優に投げた。

「確かに返したぞ。人に長い間、荷物を持たせてたんだ。その分の仕事はしろよ」

「……どうも。手負いの状態でも、やれるだけのことはやるさ」

分かれる前に大神に託した通信機。それを改めて自分の耳に着けながら、優はやる気十分とも言いたげに笑みを浮かべた。

優も加わったことで戦力に余裕が出た大神たち。ここからどうするか、迅速に決め始

めた。

「優、お前は知らないだろうが刻が虹次に捕まった。それに、見ての通り扉も開いて『捜シ者』はその中だ」

「刻が……!? ……なるほどな、それに加えて目の前には『R e — C O D E』か。分かる必要があるようだな」

「『捜シ者』はろくばんに任せるわ。ななばん、悪いけどよんばんは任せてええか？ オレは……時雨と闘わなあかん」

最低限の情報を伝え、それぞれがやるべきことを確認する。それが終わったところで、改めて三人の眼に強い闘志が宿る。

「よし、じゃあ——」

「分かれる必要はないさ。どうせ……もうすぐ終わる」

「さ、『捜シ者』！」

いざ分かれようと大神が声をかけた瞬間、扉の中から冷徹な声が響く。見ると、そこには変わらぬ冷たさを漂わせる『捜シ者』。そして、その手にはちようど『捜シ者』の手に収まるほどの大きさの、光り輝く正方形の立方体が浮かんでいた。

「まさか、それが『パンドラの箱』!?」

「くそ！ 遅かったか！」

「あんな小さいんか……？ アレの中に……何が入ってんねん」

話聞いていただけで『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup> 自体を見たことは無い大神たち。だが、この状況で明らかに『箱』と呼べる物質を持っているのだ。十中八九、あれが『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup> だろう。『捜シ者』に奪われるという最悪の展開になってしまったが、まだ逃げたわけではない。とり返すことができれば大逆転となる。

「それを返せ！ 『捜シ者』！」

「……あの時のままだったよ」

「なに!?!」

殺気を込めて『捜シ者』の前に立ちふさがる大神。しかし、『捜シ者』はそんな大神の

言葉を無視して自身の言葉を口にする。まるで遠い過去に思いをはせるように見上げて、そのまま彼は言葉を続けた。

「この扉の中は……私たち兄弟の母さんが死んだ、あの時のままだった……」

「何を、言つて……!」

「——ねえ」

「ぬ!?!」

突然の言葉に、大神は目を見開く。『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>がある扉の中は自分たちの母親が死んだ場所だと言われ、思わず混乱してしまう。だが、それに対して『捜シ者』は何事も無いように視線を動かし、そのまま桜の眼の前まで移動してその顔を覗き込んだ。

視界を遮らないように開けられた仮面の穴越しに、桜と『捜シ者』の視線が交わる。互いにその視線を外すことなく、桜は『捜シ者』の言葉を聞き、『捜シ者』は桜に言葉を続けた。

「君も……そろそろ思い出してよ。」

あの時、  
母さんが死んだ原因は桜小路  
桜……君なんだから」

## code : 59 パンドラ・メモリー

「私が、大神と『捜シ者』の母上が亡くなった原因——？」

時すでに遅く、開かれてしまった扉。暗闇に閉ざされた空間から、『パンドラの箱』ボックスを手にした状態で現れた『捜シ者』からの言葉を、桜は驚愕の表情を浮かべながら繰り返し返した。自らの正体を隠すために着けてきた仮面を、無意識のうちに外しながら。

『おーい！ おーい、みんなー！』

「なんだ……？」

すると、その場の緊張感にそぐわない声が大神たちの通信機から流れた。何かかと思つて大神たちは通信機を耳に着けると、声の主が再び話し始めた。

『いかにも、みんな元気かなー？』

「その声……会長？」

『『にせまる』や』

ここ最近聞き慣れた話し方に、「いかにも」という口癖。優と遊騎は声の正体が会長だと気付くと、通信機越しにさらに話が展開していった。

『おい、渋谷……なんでお前が通信機を持ってんだよ』

『いやだなあ、仲間外れは寂しいでしょ?』

『ふふふ、さすがは会長です』

『そういう問題かよ……。つかお前、今どこにいるんだよ』

『私のことより、今は桜小路君のことだ』

王子と平家も通信機越しに加わり、一時だけ穏やかな空気が流れる。しかし、会長の言葉と同時にそれは打ちきられる。通信機越しでも真剣さが伝わってくる口調で、会長は静かに告げた。

『珍種は “エデン” にとつては最大の脅威……。こうなつた以上、記憶が戻ることも大いにあり得るけれど……。それはやむなしだ。だけど、彼女が自分に特別な力があると……。珍種だと自覚させてはダメだ。もし自覚してしまつたら、もう『桜小路 桜』としては生きられない。私のように着ぐるみで正体を隠して生きる……。『存在しない者』になつてしまう』

——存在しないということとはとても……。とても悲しいことなのだ

瞬間、大神の脳内に浮かんだのはロスト的な何かで小人化した桜の言葉。『存在しない者』の気持ちを味わい、押し潰されそうなほどの悲しみに満ちた笑顔。そして、彼女を『存在しない者』にはしないという彼自身の誓い。

大神は再び誓いを噛み締めるように左腕に力を込め、視線を桜と『捜シ者』に向けた。

その一挙一動に注視し、彼女が「桜小路 桜」として生きられるように。

すると、『捜シ者』は今までと変わらない……柔らかくも冷たい視線を桜に向けたまま、「そう」と口を開いた。

「君がいなければ私たちの母さんは死なずに済んだ。そして、母さんが死ななければ私たち兄弟も今とは違う道を歩めただろう。……わかるかい、桜小路 桜」

悲しむような言葉を並べながらも、特に悲しさを感じさせない陶器のような表情を浮かべながら言葉を続ける『捜シ者』。その中で再び桜の名前を口にする、その手に持ったパンドラの箱ボックスを見せつけるように桜の前に差し出した。

「君さえいなければ、私の弟大神が犬として人殺しをすることもないし、私がこうして闘いを仕掛けることもなかった。何もかも全部——」

——君のせいだよ



「ッ——！」

視界に映る『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>と、平然とした語気にもかかわらず強い衝撃を感じる『捜シ者』の最後の言葉。

その二つが合わさった瞬間、桜の中で何かが弾けた。

逃げて——！！

目の前を染める紅い鮮血。

自分を護るように両手を広げて崩れ去る一人の女性と、その女性を手にかける一人の男。

そして、同じ光景を見ている三人の男女。

『コード：01』と呼ばれ、まだ悪に堕ちる前……若かりし頃の人見。  
両腕をもがれ、顔も半分失い……壊れかけの『ゐの壺』。

そして、幼いながらも今の面影を残す……少年の大神。

幼い大神と桜。二人の視線が交差し、その頬をほぼ同時に鮮血が染める。

その二人の間に割って入り、冷たく桜を見下ろす女性を手に向けた男。

男は何も言わず、ただただ静かに桜を見下ろしながらその手を伸ばして――

やめて——！

「ツ——!? い、今の、は……?」

「少しは思い出した? 君を庇って死んでいただろう、うちの母さん」

「あれ、が……大神と『捜シ者』の母上……? う……!」

まるで栓が外れた水道のように溢れ出たヴィジョンに、桜の表情は驚愕に染まる。

なぜ自分はおそこにいたのか、人見はおそこで何をしていたのか、『あの壺』はどうしてあんなに壊れてしまったのか。

なぜあの女性……大神と『捜シ者』の母親は桜を庇って亡くなったのか。

突然のヴィジョンと『捜シ者』が告げた言葉に、桜の頭の中は疑問で埋まっていた。だが、それが真実であるかどうか思い出そうとしても、頭が痛むだけで何も思い出せない。そして、無意識のうちに桜はもう一人の真実を知るであろう人物のことは見る。

「お、大神……。お前は……覚えてるのか?」

あのヴィジョンの中にいた登場人物の最後の一人である……大神。自分たちは幼い

頃にすでに会っていたのか、という疑問も桜の中に浮かんだが、今はそれを飲み込んだ。それでも、上手く疑問を言葉にできず、短い言葉で絞り出すのが精一杯だった。

「……………」

だが、大神は何も答えようとしなない。それが「覚えていない」という意味なのか、「覚えていない上で話そうとしなない」ということなのか……桜にはわからなかった。

「ど、どうなのだ、大神。覚えていないのか？ お前の母上を手にかけて、あの男のと……」

「……………」

答えようとしなない大神を見て、さらに言葉を続ける桜。大神と『捜シ者』の母親を手にかけて男について尋ねるが、口にしたのと同時に桜の中で男の姿が蘇る。

大きく、有無を言わさぬ威圧感に溢れた姿。ただ立っているだけでも全身を飲み込むほどの恐怖に襲われる……幼い自分が感じた当時の感情を、桜は明確に思い出していた。

それに対し、相も変わらず答えようとしなない大神。すると、そこに『捜シ者』の言葉が割って入ってきた。

「自分の記憶が信じられないのかい？ 君は特別なんだよ。君は異能による命の危機に何度曝されても生きていた。そう、まるで……特別な力でもあるかのように、ね」

「特別な、力……？　　そ、そういえば春人の時も、雪比奈殿の時も……」

はつきりと言われたことで、今まで偶然と思ってきた様々な出来事が偶然ではないと思いはじめた桜。大神の『青い炎』で燃え散ろうとした春人を救ったことも、雪比奈の異能で大神たちが窮地に陥った時も。記憶に新しいもので言えば、ついさつき遊騎を救った時も。

「わ、私は何者なのだ……。その特別な力のせいで二人の母上が……。？　　私はいったい——」

「合気道ですよ」

「……は？」

「だから、合気道です。嗜んでいるんでしょう？」

「ま、まあ、もちろん……」

「ですから、合気道です」

「??？」

緊迫した空気を消し飛ばすかのように、笑顔で「合気道」と繰り返す大神。今まで黙っていた大神が急に話し出し、さらにその内容の意図もつかめず、桜は疑問符を何個も浮かべた。

「合気道とは敵と争うのではなく、敵との和合を真髄としている。つまり、全ての攻撃を受け流し、無効化する武道。あなたは異能での攻撃を受け流して無効化した……まさか合気道そのものじゃありませんか」

「た、確かに……！ 父上から教わった合気道を知らぬ間に極めていたということか。……そうか！ これこそ、まさに無我の境地なのだ！ 父上！ 私はやりましたぞ！」

「おー」

合気道の真髄を語り、無理矢理といった形で異能の無効化と話を繋げると、桜は目を輝かせて納得してしまった。ガッツポーズまでする桜を見て、遊騎も思わずそれに便乗する。

しかし、周囲の（真面な）者たちの反応はというと……

(やつぱアイツは大馬鹿か……)

「ねえ時雨、あいつバカなNO?」

「……………」

『ハハ……。桜小路が素直な子でよかったな、零』

『ククク……』

「……ハア」

片や馬鹿扱いし、片や呆れた目で見つめ、片や笑うしかないという状況だった。説得した張本人である大神ですら、ため息をついてしまうほどである。

すると、大神はそのまま桜に背を向けて、静かに言葉を続けた。

「……あなたの過去や正体なんてどうでもいい。そもそも、あなたが持つている事の善悪すら超えて理屈抜きで命が大事なんていう夢物語な思想……オレは絶対に信じない。オレとあなたは一生、相容れることは無いだろう」

「お、大神……」

先ほどとは打って変わって、冷たさを感じる大神の言葉。自身の思想を否定され、桜の浮かれた気持ちも一気に静まり、真剣な表情に戻る。また来るであろう冷たい言葉を覚悟する。

しかし、現実とは想像とはまるで違っていた。

「だが、あんたは命を懸けてそれを貫いてきた。オレたちがいくら止めようと、何度も何度も。その甘つちよろい夢物語を叶えるために。……オレは、そういうアンタを信じる」

「大神……！」

過去がどうだろうと関係ない。自分が信じるのは、自分が見てきた今の桜であると、振り返って真っ直ぐに桜を見る大神の視線を受け、桜は今まで自分にのしかかってくるだけだった。変えられない過去ではなく、これからの未来に目を向けようと。

だが、過去を含めてその目で見てきた者にしてみれば、そんなことは関係なかった。「過去に縛られない……それはとても素晴らしいことだね。でも、その過去は確かに私が知っている。そして、未来も『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を持つ私のもの。後は、今をどうにかすればいいだけ。といつても、必要なものは手に入ったし……」

「だからもう全員いららないな」



「ッ——お前ら！　今すぐ構え——！」

『流<sup>りゅう</sup>星<sup>せい</sup>霜<sup>そう</sup>』

何かを感じ取った優の言葉が届くよりも先……『捜シ者』の刀から神々しいほどの光が発し、その空間の全てを破壊していった。

「う、く……。な、何が……」

「……無事ですか、桜小路さん」

光と衝撃に吞まれ、一瞬だけ気を失った桜。上手く回らない頭を抱えながら、ゆつくりと顔を上げていく。すると、最初に視界に映ったのは自分を庇うように立つ大神の姿

だった。

「大神……お前が守ってくれたのか？」

「いえ、実際のところオレも無傷です。他の誰かが——」

「オレだよ」

「夜原先輩！」

桜を庇うように大神が立ち、さらにその大神を護るように立つ優の姿を見て、桜の頭は一気に覚醒していく。見ると、周囲はほぼ瓦礫として崩れている中、優は『斬空刀』を構えて凜と立っていた。

「先輩が護ってくれたのですね！　ありがとうございます！」

「余計なことを……とは言いません。助かりましたよ」

「なに、礼を言われるようなことじゃない」

大神たちに背を向けたまま立ち続ける優。リリーの時同様に彼の背中を見ることになり、桜は改めて彼の優しきを感じていた。大神も今回ばかりは皮肉を言わず、素直に礼を言った。それを流すと、優は変わらず二人に背を向けたまま続けた。

「……それに、オレはむしろ謝るべきだ」

「え……？」

——ビシ！

——ブシャア!!

瞬間、優が構えていた『斬空刀』の刀身が粉々に砕け、優の身体に無数の傷が浮かんだ。そこから溢れ出た大量の鮮血は、あつという間に周囲の瓦礫を染めていき、その身体も瓦礫同様に崩れ去った。

「優!!」

「夜原先輩!」

崩れ去った優を案じて取り囲む大神と桜。大神が頭を抱えると、優は荒くなつた息を何とか整えながら自虐のように口を開いた。

「ざまあ、ないな……。あの時……。修行で、大神の一撃を受けた時に……。『斬空刀』に

ヒビが入ったままにしていた報い、か……」

「な——!?!」

優の言葉に大神は静かに衝撃を受ける。剣術の仕上げとして行つた優との修行。その中でついに完成した彼の技だったが、その代償に優の『斬空刀』に大きなダメージを与えていた。だが、それよりも衝撃なのは優がそれを黙つたまま闘つてきたことだった。

「なんで……なんで言わなかつた! 刀にヒビが入つたままわざと放置するような、お前はそんな馬鹿じゃないだろうが!」

「……悪いな。けど、直す時間なんて、なかつただろうが……。それに、オレ自身さっきの闘いで、結構ギリギリだった……。壊れかけのオレと『斬空刀』でも、お前らを護れたんだから十分だ……」

「先輩……!」

自分を犠牲にして二人を護つた優の姿に、桜はわなわなと肩を震わせる。だが、当の優は落ち着いた様子で言葉を続ける。彼らが今すべきことを諭すために。

「行け、大神……『捜シ者』はお前が斃せ。……手を貸せなくなつて、悪いな」

「……うるせえよ」

諭すと同時に、手助けできなくなつたことを謝罪する優に対し、大神は静かに優の胸

に自身の拳を当てた。そして、そのまま強気な言葉を微かな笑みを浮かべながら口にした。

「ハナから手を貸してもらおうなんて思っていない。わかつたらテメエはここで静かに寝てろ。その間に……終わらせる」

「……任せた」

それだけ言葉を交わすと、大神は優の頭をゆつくりと床に下ろした。そして、斃すべき敵を斃すため、そのまま振り向き――

「結局、『脳』を使う彼もその程度か。つまらない」

「――『捜シ者』！」

自身の身体についた埃を払いながら退屈そうに言葉を並べる『捜シ者』に対し、大神はその眼で鋭く睨みつけた。しかし、『捜シ者』は構わずに視線を動かす。

「そう……彼らと同じだね」

彼ら……『捜シ者』の視線の先にいたのは、優と同じように重傷を負って倒れる遊騎と、その遊騎が庇った時雨と日和の姿だった。

「遊騎！」

「く……！」

大神が叫んだ瞬間、時雨がボロボロの身体を動かし始める。優と比べて遊騎は小柄で

武器もない。どうやら完全に時雨たちを護れなかったようだった。現に、時雨の手にいるロストした日和も頬に斬撃を受けただけでなく、飛び散った瓦礫が腹部に深々と刺さっていた。

「日和……！ しっかりしろ、日和！」

時雨は自分の傷など気にせず、ただ一心に日和に呼びかけ続けた。しかし、日和の眼は一向に開く気配がない。それどころか、時雨に向かって『捜シ者』が静かに歩み寄っていき……高々と刀を掲げた。

「私の『捜シ者』は強い異能者だ。この程度で死ぬようなら……もう必要ない」

——ズン！

「ぐあああああ!!」

手負いの、『Re—C—O—D—E』自分の部下であるはずの時雨に向かって、なんの容赦もなく刀を刺す『捜シ者』。あまりに残虐なその光景に、桜は大きく目を見開く。

「じ、自分の配下の者まで殺そうとするなんて……。なんて、なんて酷い……！」

「……アンタは、いつもそうだ」

瞬間、桜とは対照的に冷ややかな声が空間に響く。まるで、『捜シ者』がそうすることをわかつていたかのように。その眼で彼の行為を見て、同じくその眼で彼を睨みつけながら……大神は続けた。

「相手が誰だろうと、アンタは人をモノとしか扱わない。敵はもちろん、自分の部下だってそうだ。そして……」

自分の母親であつても」

「さ、『捜シ者』が母上を!」

大神の口から出た言葉に、桜の表情は再び驚愕に染まる。死んだ原因は桜にあると言いながら、直接母親を手にかけてのは『捜シ者』自身だということに対してもだが、それ以上に信じられない点が一つあった。

(では、あの恐ろしい男は『捜シ者』……!? だが、今の姿とはあまりにも……!)

桜が思い出したヴィジョンの中に出てきた、彼らの母親を殺した謎の男。見ただけで

身体の芯から震えあがるような恐怖感を与える存在。確かに今の『捜シ者』からも陶器に似た冷たさ、類を見ない残酷さを持っている。

しかし、桜はどうしてもヴィジョンの中の男と『捜シ者』が結びつかなかった。考えるほどに、本当にあれが『捜シ者』なのかという疑念が浮かび上がる。

「大神！　今の話は本当なのか!?!」

ならば聞くのが早いと、桜はその言葉を告げた大神へと声をかける。だが、彼は桜に背を向けたまま何も答えようとしない。だが、今回ばかりは引くわけにはいかない。なんとか問い詰めようと、桜は身体をずらして彼の顔を――

「――ッ!!」

その時、彼女は全てを悟った。

「……………」



もう、声は届かない。

彼女はあの眼を知っている。

あの眼は、冷たく激しい『悪』の瞳。

「…………お前は本当に私の若い頃に似ている。でも、いくら覚悟を決めても私の太刀筋は止められないんじゃないかな」

「……………」

——カ…………チンツ、カ…………チンツ

真正面から向かい合い、二度目の対峙を叶えた黒と白<sup>大神『捜シ者』</sup>。その瞬間に一切の音を消え去り、長い静寂が訪れる。聞こえるのは、『捜シ者』が癖のように奏でる金属音のみ。指で

鏢を弾いては鯉口にぶつかる。

それに対し、大神は黙って刀を構える。静かに手を添え、全神経を『捜シ者』の一挙一動に集中させていく。その間も、『捜シ者』が奏でる金属音は続く。一定のリズムで、それは繰り返されていく。

——カ……チンツ、カ……チンツ

ただただ、繰り返されていく。

——カ……チンツ

だが、それは突然に訪れる。

——カ………！

それは突然に、刹那の閃光と化す。

………

——ドツ！

次の瞬間、『捜シ者』の身体に深い傷口が刻まれ、刀身が粉々に砕け散った。

『捜シ者』との一騎打ちを制した大神。だが、彼が放った一撃はこれだけでは終わらなかった。

——ドン!!

「ッ……………」

「き、傷口が燃えた!?!」

彼が『捜シ者』の身に刻んだ傷口から、猛々しく『青い炎』が燃え上がった。『青い炎』は傷口から周辺の肉を焦がしていき、さらなるダメージを『捜シ者』に与えていく。

見ると、大神の刀の刀身には『青い炎』がゆらゆらと刃をゆらめかせていた。会長との修行の中で、彼は『捜シ者』を超える一撃の速さと強さを習得していた。

「今のはよかった。この短期間でここまで仕上げるなんて、渋谷師匠にどんな手解きを受けた?」

「……………」

『捜シ者』は大神が自分を超える一撃を習得したことを素直に認め、賞賛の声をかける。だが、その間も傷口から燃え上がる『青い炎』は身体を燃やし続ける。それを気にも留めずに話す姿は異様で、嫌でも警戒心が前に出てくる。故に、大神も集中を切らさうとはしない。

「…………ふう」

ふと、『捜シ者』が俯いて小さく息を吐いた。気怠そうに、呆れるように。すると、そのまま静かに顔を上げて、平然と続けた。

「もう、このロスト姿にも飽きたなあ」

「な——!？」

『捜シ者』がロスト中…………まさかの真実に桜は思わず声を上げ、闘いがまだ終わらないことを密かに感じた。

## code : 60 傾く天秤の支柱

「私のロストは『時を遡る』。身体はもちろん、心も何年も前に戻ってしまおう」

大神の一撃を受け、その身体を『青い炎』に焼かれていく『捜シ者』。そんな中、彼が明かした「ロスト中」だという事実は、そこにいる者たち全員に衝撃を与えた。

それでも、そのロストの詳細を聞いたところで桜はハツとあることに気付く。

「『時を遡る』……！　そうか、だから『捜シ者』は大神とそっくりな容姿だったのか……」

「その通りだよ。すでに過ぎた姿だというのに、私はこの姿で何年も星の廻るのを見てきたんだ」

「な、何年も……？！」

しかし、気付いた際の清々しい気分は束の間。また新たな疑問が桜の中で浮かぶ。そして、その疑問は『捜シ者』と同じ者……異能者たちも見逃さなかった。

「待て……。ロストが何年も、だと……？　異能のロストは、一日経てば元に戻る……。それが、なんでお前だけ……」

「夜原先輩！　無理をしては——！」

「どうなんだ……？ 答えろ、『捜シ者』……」

「……………」

桜が感じたものと同じ疑問が彼女の背後から『捜シ者』に問いかけられる。見ると、『捜シ者』の攻撃により深手を負った優が瓦礫に寄りかかりながら、荒くなりそうな息を整えながら『捜シ者』を睨みつけていた。心配して駆け寄る桜だったが、優はそんなことを気にせず言葉を続ける。

そんな優に対して、『捜シ者』は眉一つ動かすことなく静かに優を見据える。そして、何かを求めるように『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>に手をかざしながら答えた。

「仕方がないんだ。元に戻るべき異能がこの身体から消えたんだから、ロストは続かない。……あの時、この『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>に私の異能が閉じ込められてからね」

「さ、『捜シ者』の異能が『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>に——!？」

「なるほど……。確かに、それなら最強の異能者になれるって話も、納得だな……」  
 もったいぶるようなことはせず、淡々と答えを用意する『捜シ者』。だが、それは『捜シ者』の異能が『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>に閉じ込められているという予想だにしないものだった。その答えに桜は隠す余裕もない驚きを見せ、優は冷静に情報の整理に徹していた。そして、残った一人も冷静に動きだす。

「……………それがどうした？ その箱に何が入っていようと関係ない」

優と、優に駆け寄る桜を庇うように手をかざしながら大神が前に出た。『捜シ者』が口スト中であり、その『捜シ者』の異能が『パンドラの箱』ボックスに閉じ込められている……この衝撃であるはずの事実にも動揺せず、ただ静かで熱い闘志を『捜シ者』にぶつけていた。

そして、同時に彼も真実を突きつける。

「『パンドラその箱』は珍種の血がないと開かない……。お前が箱を開く前に全てを終わらせればいいだけだ」

「——!?!」

『パンドラボックスの箱』は珍種の血で開く……。今まで聞いたことがなかった言葉に、優は大きく目を見開いた。



「……大神？　なんで、お前はそんなことを知って——」

「へえ、どうやら少しずつつ思い出してきたみたいだね。あの時のシヨックでだいぶ記憶が混濁していたようだけど……まあ、どうでもいいさ」

珍種という単語に疑問符を浮かべる桜をよそに、優は身を乗り出して大神を問いたただそうとする。すると、大神よりも先に『捜シ者』が口を開く。どうやら彼にしてみれば隠すことでもないらしい。そのまま『捜シ者』は自分の手の内で浮かぶ『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を差し出した。

「そう、この『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を開くには珍種の血が必要。そして珍種の血によって開いた時、ここに閉じ込められていたものは放たれる。私の異能も、それ以外に入っているたくさんのものも……もちろん、お前の大切なものもね」

「……さつきも言っただろう。関係ない、と」

隠すことなく『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を開く条件を『捜シ者』は明かした。さらに、『パンドラの箱』には大神に関係あるものも入っているとも口にした。

だが、大神は眼を鋭く光らせて、戯言を切り捨てるように再び刀に手をかけた。

「次で終わらせる」

「……お前は昔からやると決めたことは必ずやり通してきたが、その技をここまで短

期間で仕上げることでやってのけるとはね」

刀を構える大神の前に、『捜シ者』は記憶を辿るように呟く。そして、表情を何一つ崩すことなく平然と続ける。

「でも、もう見切った」

「だからどうした。見切ったところで、ロスト中のアンタじや避けられない」

「……だから、ロストはどうしようもなく憂鬱なんだ」

一方的に傷を負った状態で放った「見切った」という言葉。強がりのようにも聞こえるこの言葉だが、『捜シ者』の眉一つ変わらない表情を見る限り、それが偽りだとは到底思えない。

しかし、彼の言葉が真実か強がりなど気にすることなく、大神は鋭い眼を光らせて意識を集中させる。それに対し、『捜シ者』はひどく憂鬱そうに近くにあつた瓦礫に腰を下ろした。大神の言葉を否定せず、素直に認めているところを見るとおそらく真実なのだろう。勝機を感じた桜は強気に身を乗り出す。

「では、負けを認めるのだ……。このままやっても——」

「あう」

「……ぬ？」

と、緊張感に支配されたはずの空間に明らかに場違いな声が響く。ひどく能天気で、

気を張り詰めた状態で聞けば確実に気が抜けてしまうような声。いや、正確にはその姿が原因かもしれない。

とにかく、先ほどまではいなかったはずの……場違いな人物が確かにそこにいた。

「いかにも、この秘密の抜け穴は超狭くて嫌になっちゃうんだな」

『か、会長!』

「うむ、私は渋谷生徒会長だよ?」

『にやんまる』……ではなく、その着ぐるみを着た渋谷生徒会長であった。よほど狭い場所を通ってきたらしく、尻尾部分の先端が少しばかり切れていた。

だが、そんな部分などに目はいかず、平然としている会長の姿に開いた口が塞がらなくなっていた。

「い、いや……それはおそらく皆わかっていると思うのですが……」

「そう？ あ、優君。この尻尾の部分、縫つといてくれない？」

「……今は、無理です。すみません……」

『おやおや、会長は戻つてきちゃいましたか』

『テメエ、マジで何考えていやがる……』

あまりにもいつも通りな会長の姿に、桜はツツコむにツツコめず、優は思わず謝り、平家は笑みを浮かべ、王子は完全に呆れていた。そして、大神はというと……

「このクソネコが……！ 空気も読まねえで何しに来やがった……！」

「い、いかにも落ち着いてほしいんだな……」

怒りを隠そうともせず、思いきり会長の両頬を引き伸ばしていた。会長もなんとか落ち着かせようとするが、当然のことながら大神は聞く耳を持たない。

「オラ！ 今は珍種の血のことで立て込んでるんだ！ お前はさっさとどこかに行つてろ！」

「えー、仲間外れは寂しいよ」

会長を追い払おうと、「しっしっ」と手で払いのけようとする大神だったが、会長はのらりくらりとかわしていく。その様子にさらに腹を立てる大神は、根本的な問題を突き

つける。

「うるせえ！ 第一、お前は中立だろうが！ なんでわざわざ——」

「中立はもうやめたんだ」

「は——？」

会長はポツリと発したその言葉を完全に理解する前に、大神の顔を一発の拳が殴り抜いた。

「ぐっ!？」

「お、大神！」

そして、殴り抜いた張本人はゆつくりと『捜シ者』の隣に移動し……その肩に触れ、彼の身体を燃やす『青い炎』を完全に消した。

「いかにも、私は『捜シ者』側につくことにしたよ」

そう宣言したのは見間違えるはずもない……中立であるはずの会長そのものだった。

「会長!? そんな……どうして！」

「冗談……なわけないし、それで片付く問題じゃないな……」

あまりに突然の対立宣言に、桜と優は驚きを隠せない。あれだけ中立という立場を守ってきたはずの会長が、こんなにもあつさり『捜シ者』側に寝返ってしまった。信じられない話だが、珍種である彼の力を使って『青い炎』を消したという行為が紛れもなく『捜シ者』に味方するということを表していた。

「それじゃあ、あとはよろしく。……お師匠様」

「いかにもっ」

そのまま会長に後を託す『捜シ者』。会長はそれに答え、『捜シ者』を庇うように一歩前に出た。そして、次の瞬間にはその姿は消え、大神との距離を詰めていた。

——ガッ！ ドツ！ ゴツ！

「ぐー！ がっ！ この、クソネコ……！ 何考えてやがるー！」

「話している暇が……あるのかい！」

「くっ！」

次々と打ち込まれる会長の拳をなんとか耐えながら、大神は会長の真意を問いたただそうとする。だが、当の会長はそれを答えようとはせず、容赦のない拳を振るい続けた。

「もうやめるのだ、会長！ どうして——！」

「君は邪魔しない」

「ッ——!?!」

一向に大神への攻撃をやめようとしないう会長の姿に、桜は居ても立っても居られずといった様子で立ち上がった。しかし、次の瞬間には『捜シ者』が背後まで移動しており、陶器のような冷たさを持つ手が桜の手首を掴み、それを止める。突然のことに桜は息を呑むが、『捜シ者』はまるで嘲笑するかのような眼で大神と会長の闘いを眺める。

「……愛情つて愚かしいものだね。平気で、こんなにも簡単に事の善悪を超えてしま  
う」

「な、何を言つて……」

「ハアツ！」

『捜シ者』の意味深な呟きに気を取られる桜だったが、それを断ち切るように優の斬撃が閃く。桜を巻き込まず、『捜シ者』だけを狙った正確な斬撃だが、『捜シ者』はその場から跳んでそれを避ける。

しかし、同時に桜を掴んでいた手も離れたようで、桜と『捜シ者』の間に距離が生まれる。

「耳を貸すな、桜小路。そして、自分の身くらい自分で守れ」

「す、すみません……」

厳しい言葉をかけつつも、優は桜を庇うようにして『捜シ者』との間に立つ。碎けて短刀ほどの長さになった刃を『捜シ者』に向け、意識も彼に集中させていた。だが、『捜



シ者』は呆れた様子でその姿をジツと見て、ポツリと呟いた。

「……よほど深い傷を受けたんだね。話に聞いていたスピードより、ずっと遅い」

「確かに本調子には程遠い……。だが、人一人くらいは護れる」

「それはなにより。だけど、私は君と闘う気はない。それよりも、彼らを見ている方がいい」

闘志をむき出しにする優に対し、『捜シ者』はゆつくりと視線を動かして大神と会長の方を見る。つられるように優たちも二人の方を見ると、状況は明らかに大神の劣勢だった。

無理もない。会長の強さは日々の修業で体験した通り、大神たちのはるか上をいつている。コケシを取るだけでも精一杯だったことを考えれば、対等に闘うのは難しいだろう。

「この、いい加減に……!」

「ふっ!」

「うぐっ……! おい! なんとか言え、クソネコ!」

「……………」

ただただ一方的な攻撃を続ける会長。大神はその攻撃を受けながら会長に言葉をかけ続ける。しかし、会長はそれに答えようとはしない。表情が変わらない着ぐるみを着

ているため、彼の行動が本心からのものなのか、読むこともできない。

『大神君』

「平家……?!?」

すると、いきなり通信機から聞き慣れた平家の声が響く。耳に着けていた通信機を指で押さえながら、そこから聞こえる彼の声を聞き逃すまいとする。優も『捜シ者』への警戒を解かず、同様に通信機を指で押さえた。

『会長が『捜シ者』に味方したのは……あの『約束』のせいかもしれません』

「『約束』……?!?」

『それって……前に会長が、『捜シ者』に連れ去られた桜小路を連れ帰ってきた時に言っていたことですか?』

『ええ、その通りです』

平家が口にした『約束』という言葉に、同じく通信機を通して優が心当たる記憶を答える。どうやらそれは平家が考えていたことと同じだったようで、同意の言葉に続いて彼の考えが語られた。

『先ほど大神君も言っていた通り、『パンドラの箱』ボックスを開くには珍種の血が不可欠。おそらく『捜シ者』が桜小路さんを連れ去ったのは、箱を開ける際に彼女の血を使うつもりだったのかもしれない』

『あの『捜シ者』の性格を考えると、必要な分の血だけ取って解放……とはいかないはず』

『そう。そして、それに気付いた会長が桜小路さんの身の安全と引き換えに、自分自身が『捜シ者』に協力する。おそらく、これが『約束』の内容でしょう。……わかりやすく、印まであつたわけですからね』

印……という言葉聞いて大神たちが真つ先に思い出したのは、桜の首のちようど後ろ。『捜シ者』の右手の甲に刻まれている、十字の刺青と同じ刻印<sup>マーク</sup>。もしも、あれが『捜シ者』の合図とともに何らかの効果を発揮するものだとしたら、桜の命は文字通り『捜シ者』の掌の上ということになる。

もちろん、あの刻印<sup>マーク</sup>が必ずしもそうだったものだという確信はないが、『捜シ者』と同じというだけでも不吉なものに感じてしまう。刻印<sup>マーク</sup>を見つけた時の、大神の切羽詰まった表情を考えれば余計に。

「……けど、おかしいだろー！」

しかし、当の大神にしてみれば納得できるような内容ではなかった。仮に、本当に桜の命がかかっているととしても、それを救うためにしては対価が大きすぎる。

例え桜の命が助かったとしても、『捜シ者』がそのまま『パンドラの箱<sup>ボックス</sup>』を渡すよう要求するかもしれない。もちろん、協力者として。桜の血を『捜シ者』が手に入れたとし

でも、それを使わせなければいい話。だが、会長が『捜シ者』に協力しては『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を開かせないための条件はかなり厳しくなる。

「いくら桜小路さんの、ためとはいえ……それじゃあ『捜シ者』の言いなりに——！」

『……零、それは仕方がないことなんだ』

新たに通信に入ってきた王子の声。負傷して息が荒い中で発した次の言葉は、大神たちの意識を一瞬で真つ白にさせた。

『……娘、なんだ。桜小路　桜は渋谷の……会長の、正真正銘の實の娘なんだ』

「な——」

以前、桜は大神に「自分は拾われっ子」という事実を明かした。その時は、血の繋がりを無視した桜小路家の絆を感じたくらいで、どこかにいるはずの父の両親についてはなんとも思わなかった。

『……王子、そのことを桜小路は——』

『もちろん知らない。いや、これから知ることもないし……知られてはいけないんだ。……渋谷は娘が五歳の時に、桜小路家に預けたらしい』

『理由は色々あるでしょう。ですが、会長の言葉から考えるなら……珍種としてはない、普通の幸せを娘に願ったのでしよう』

だが、その父の両親の片方がここに存在し、今まさに相対している。全てを隠して、今まで守ってきた自分の立場も何もかも捨てて、娘を助けるために行動している。今、着ぐるみに隠されてみる事ができない彼の顔は……どのような表情に染まっているのだろうか。

「……………」

様々な思いをそれぞれが抱える中、大神は静かに過去の記憶を思い出していた。修業の中で会長が漏らした、あの言葉を——

「——大神君。もし私が中立をやめて『捜シ者』側についたとしたら……君はどうする？」

「はあ……？」

それは、会長と一対一で修業をするようになってから数日が経った日のこと。その日の手合わせも終わり、修業の後始末をしていた時に会長は静かに尋ねた。突然の問いに、大神は思わず顔をしかめるが、内容から考えてふざけているわけではないと悟ったのだろう。

「そんなもん、ぶっ殺すに決まってるだろうが」

「あ、あれ〜？ もうちよつと悩むとかは……」

「ねえよ」

大神は何の遠慮も無しに、ストレートでキツイ言葉を返した。あまりにハッキリしていたため、当の会長も思わず引いていた。

だが、そんな反応も束の間。会長は大神に背中を向け、清々したように続けた。

「……………まあ、それでいいんだよ。大神君、もし私が敵になったら遠慮なく討つてくれ」  
「……………」

その様子に、大神の中で違和感が膨らんでいく。そして、大神はその違和感を隠すことなく会長にぶつける。

「……………さつきから何を訳のわからないことを言っている。アンタは中立。そもそも、どちらかにつくなんていう喩え自体があり得ないだろ」

「たとえそうでも……………君ならば正しい判断ができるはずだ。大神君……………君ならきつと、ね」

その言葉を聞いた時はわかるはずもなかったが、今ならばわかる。会長が言っていたのはまさに今この時のことであり、大神は正しい判断を迫られているのだと。

会長の思いを知ったことで、大神はよりクリアな気持ちで会長を見る。そうして見るとよくわかった。今の会長は修業の時と比べると、あまりに構えが甘く、あまりに拳が大振りで、あまりにも……

「……いつもと違って、隙だらけじゃねえか」

修業の時とあまりに違う会長の動きを見て、大神は覚悟を決めた。そして、静かに眼を細めて会長を捉える。

「さあ、大神君！ これで最期だよ！」

それに気付いてか、会長は大神との距離を詰めていく。一方通行に、ただ真正面から突っ込んでいく。それを迎え撃つ大神の眼は……冷たい「悪」の眼。

「——いい覚悟だ」

——ドッ！

「悪には——悪を」

「か、会長おおお!!」



大神が瓦礫の山から手にした長く鋭い凶器。その先端は確かに会長を捉え、鈍い音を立ててその身体を貫いた。

本人が知らないとはいえ、大神は娘の前で実の父親を——刺した。

「……………い、いかにも、これはどういうことかな?」

「……………え?」

会長は確かに刺された。だが、それは着ぐるみの端つこであり、血も出ていない。だが、貫いた状態で凶器……………「取扱注意」の看板がついた鉄の支柱は後ろの壁に突き刺さっており、会長の動きを完全に封じていた。会長は必死に手を伸ばすが、支柱まではギリギリで届かない。結果、手足をジタバタする標本のようになっていた。

「お、大神……………?」

「——ハッ。笑わせるなよ、お師匠様」

何かを吐き捨てるように呟く大神。わざとらしく「お師匠様」と呼んだかと思うと、そのままニヤリと口角を上げた。

「正しい判断だと？ 悪いな。生憎だが、最初からそんなもの持ち合わせていない。オレは……」  
 「悪」なんてね」

「大神、君……」

「悪には悪を」——大神にとってモットーとも呼べるこの言葉の通り、彼は自身を「悪」とする。そして、「悪」である自分にとって、正解や相手が求める答えなんて関係ない。ただ自分の中に浮かんだ考えや答え、それだけを中心に行動する。

だからこそ、大神は会長に向かつていき、その上で動きを制限させた。迷わず討つ——  
 会長その言葉を完全に無視して。

「そんな……。すまない、大神君……。結局、私は——」

「聞かねえよ」

大神の意図を感じ取った会長は、申し訳なさそうに目を伏せた。すると、大神は会長の言葉を強制的に中断させ、そのまま背中を向けて歩き出した。

「アンタは、アンタにとつて大切なものを護ろうとしただけ。そんなアンタに謝られる筋合いなんて微塵もない。そもそも……『捜シ者』を斃せば全ては終わる。箱だの珍種だの、そんな面倒なことはどうだっていいさ」

「……ありがとう」

会長を責めることはせず、その思いをくみ取った言葉をかける大神。そして、改めて

『捜シ者』を斃すと堂々と宣言する。たとえ桜に刻まれた刻印マークに危険があろうと、それが原因で会長が『捜シ者』に利用されようと関係ない。全ては『捜シ者』を斃せば終わる……大神の言葉に、会長は心からの礼を口にした。

「ところで大神君。キメツキメのところ悪いんだけど、そろそろこれ抜いてほしいんだな。いかにも、まったく動けないし」

「知るか。着ぐるみはそこで見世物にでもなつてろ」

「え〜?! 見捨てないでよ〜!」

しかし、そんな言葉も一瞬、すぐにいつもの調子に戻って呑気な口調になる会長。相変わらず調子が狂う物言いに、大神はバツサリと切り捨てる発言をぶつけ、会長はさらに手足をジタバタさせた。

闘いの最中とはいえ、いつもの日々に戻ったような雰囲気の流れ始める。それを感じ取ってか、今まで隠れていた『子犬』も出てきて、満足そうに後ろ足で頭をかき始めた。

「……そう、こんな面倒なことはもうする必要はない」

だが、それは一時の幻想として儚く散り行く。

「初めから、こうしておけばよかったんだから」

その終わりは突然で、あまりに非情な合図となる。

「これ……」

そして、その終わりがあつてはならない始まりをも告げる。

「この珍種の血で『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>は開く……」

折れた『捜シ者』の刃。荒々しく崩れた刃先は会長の身体を中心に深々と突き刺さり、  
紅い鮮血を刀身に滴らせた。

「か、会長オオオオ!!」

『パンドラの箱』と珍種ボックスの血……揃ってはいけない二つが、ついに『捜シ者』の手に墮ちた。

## code : 61 最恐の復活

「会長オオオオ!!」

『捜シ者』の手で会長が刺されたことで、桜の悲鳴に似た絶叫が響き渡る。その絶叫を耳にしながら、大神もその眼を大きく見開く。

本来、仲間というよりは敵対に似た関係にある会長と『捜シ者』。だが、それでもかつては師弟関係にあった二人。いくら『捜シ者』が非情とはいえ、かつての師を手にかけるようなことになるとは考えられなかったのだろう。

「まさか、君が私を刺すなんて……。君は、本当に……」

そして、それは会長も同じ。自分の身に起こったことが信じられず、痛みに耐えながら『捜シ者』に言葉をかける。しかし、『捜シ者』は用済みとばかりに会長に背を向け、刀身を染める血を指ですくい上げた。

「時が経てば、人は変わる。あなたが見てきた私は……。もう存在しない」

会長が胸に抱えているであろう様々な思いを、『捜シ者』は冷たく切り捨てる。かつての師を利用し、拳句に刃を向ける。その刃も確実に捉えるために、身体を中心に向けて深々と刺していた。

それを悔いる様子も無く、『捜シ者』は指ですくい上げた会長の血を……その手にある『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>へと数滴垂らした。

「でも感謝はしているよ、お師匠様。あなたの珍種の血で、ついに『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>が……開く」

——コオオオオオオオ!!

『捜シ者』が血を垂らした瞬間、『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>が輝き出す。耳が痛くなるような高音と共に、周囲を照らしていく。徐々に音も大きく、光も強くなっていき、その瞬間が近いことを周囲に知らせる。

「だ、駄目だああああ!!」

——ビュオ!

「な——!?!」

しかし、それを遮るように一筋の突風が『捜シ者』を通り抜けて離れた場所に着地する。何事かと思い、桜は突風の正体が着地した場所を見ると、意外な光景がそこにはあった。



「パ、『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>は絶対に開けちゃ駄目！」

そこにいたのは……頭は『にやんまる』、身体は中心に大きな楕円がある細長いフォルムの着ぐるみ。細い身体に大きな頭というあまりにアンバランスな、いつもとはかけ離れた姿をした会長が『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を手にしていた。

「会長、ご無事で！ な、なんだか一回り気持ち悪く——じゃなくて！ 細く(?)なられて!」

「いかにも、思いつきり真ん中刺すからかすつちやつたよ……!! 着ぐるみの中でなんとか身体を捻らせて避けたっていうのにく……!!」

「着ぐるみの中も着ぐるみだったんですか……」

会長の変わり果てた姿に桜すら思わず毒を吐きかけてしまいが、どうやら会長は痛みを意識を取られて聞こえなかったらしい。よく見ると、脇腹の辺りが出血の影響で赤黒く滲んでいた。本来なら心配すべきなのだが、『にやんまる』の着ぐるみの中でも別の着

ぐるみを着ていたという衝撃の事実の方に優は意識を奪われていた。

「ちよつと待つてほしいんだな。すぐに着ちやうから。大神君、終わるまで持つて」

「ツ〜！ いいから、さつさとしやがれ……！」

『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を大神に預け、いそいそと『にやんまる』の着ぐるみを再び着始める会長。真剣なのか疑ってしまうような会長の行動に、大神は声にならない唸りを上げるがそれを飲み込んで言いたいことを簡潔に言った。

すると、ふと会長がその手を止める。そして、そのままの体勢でポツリと呟いた。

「………本当にすまない。こつういう事態にならないように中立という立場を貫いてきたのに………全てが水の泡だ」

「………あんた、何を言つて——」

強い後悔の念を感じる会長の言葉に、大神の中で苛立ちが消える。その言葉の意図を確かめようとするが、その眼に映つた変化がそれを遮らせる。

——パキ、パキ。パキ……

「これは………『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>が、開く——!!」

『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>に付着した会長の血が溶け込むように消え、その場所が小さな音を立てながら開いていく。極小のポリゴン状のピースが抜けていくように、少しずつ中を露

わにしていく『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>に眼を向ける大神だったが、次の瞬間――

「――久し振りだな」

――ドガア!!

「がっ――!!」

「大神! 大丈――」

今まで聞いたことが無い者の声と共に、轟音が空間一帯に響き渡る。刹那、大神の身体が壁まで吹き飛ばされ、手にしていた『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>が瓦礫の山に弾き飛ばされる。

何が起こったのかわからないが、桜は大神に駆け寄ろうとして……見た。

悪魔の魔手が如く大きくたなびく白い髪。

見るもの全てを射抜くような鋭い眼光を放つ眼。

その右眼の中央に沿って額から身体にかけてはつきりと刻まれた一直線の傷。

圧倒的な存在感を持ちながら、今までこの空間にいなかったはずの存在が……そこに  
はいた。

「フ、フフ……。ククツ、クハツ……。ハアーハツハツハ!! ついに! ついに還つたぞ! このオレの異能が! 生命力が! 元の姿が! 全て! オレの元に還つたぞ!!」

低く、地を唸らせるような声が響き渡る。そこには、ロストの影響で大神と瓜二つの姿になった『捜シ者』の姿は無く、驚異的なまでの圧迫感を持つ一人の男がいた。

(一)、これが本物の『捜シ者』……。今まで会ってきたどの異能者とも違う圧倒的な圧迫感……。あまりにも、違いすぎる——!)

(なんだ、この感じ……!? オレの、オレの身体全部が警告を鳴らしている……。こいつは……。危険すぎる!)

今までの姿からはとても想像もできないほど荒々しく残酷性を主張してくるようなその姿に、桜は強く怯える『子犬』を抱えながら、ただただ圧倒される。そして、同時に優もその危険性を本能的に理解していた。同じ異能者として、多くの者と闘ってきた『コード：ブレイカー』として……。より強く感じるものがあつたのかもしれない。

「——最高の気分だ。気に入ったぜ」

だが、当の『捜シ者』はそんなことを気にする様子はなく、本来の姿と力が戻った余韻に浸っていた。しばらくして落ち着くと、ゆっくりと身体を向き直して大神と真正面

から対峙する。どこか邪悪さを感じるような笑みを浮かべる『捜シ者』に対し、大神は目を伏せてその場に立ち尽くしていた。その内側にたぎる感情を表すように、左手の親指にしている指輪が揺れていることも無視して。

「よお。今は……零だったか？ 久しぶりだな。見ないうちにデカくなったじゃねえか」

「……………」

懐かしむように『捜シ者』は話しかけるが、大神は何も答えない。それでも構わないのか、『捜シ者』はそのまま言葉を続ける。

「身体の調子はどうだ？ 学校はどうしてる？ 勉強も上手くやってんのか？ 女はできたか？ 飯はどうしてんだ？」

大神が答えないにもかかわらず、質問を連発していく『捜シ者』。だが、その内容のほとんどは大神を純粋に心配しているかのようなものに思えた。そして、それを証明するかのように『捜シ者』の表情が変わる。

「またバカみたいに缶詰ばかり喰ってんだろ？ ま、そういうところ気に入ってるがな」

「……………」

大きく歯を見せて『捜シ者』が笑う。先ほどまでの笑みと違い、邪悪さなんてものはまったく感じない純粋なものに見えた。その雰囲気の違いを感じ取り、桜は最大限にし

ていた警戒を少し緩める。

「……しかし、『コード：ブレイカー』の『コード：06』か」

純粋な笑みを浮かべながら、言葉を続ける『捜シ者』。今まで大神の私生活についてだったが、急に今の大神の立場についてを話に出す。

そして、空気は一変する。

「——気に入らねえな」

「な……!?!」

「ツ——!」

一層低くなった『捜シ者』の声に、緩んでいた桜の警戒が再び最大限となる。優も感じ取ったのか、反射的に桜を庇うようにして構える。

だが、『捜シ者』は桜たちをまるで気にせず、変わらず大神の方を向き続けていた。

「零、お前だってもうわかっただろう。この世に正義なんてものは一つも存在しない。『エデン』だってそうだ。いいか、結局世の中は『悪』ばかりだ。そして、その『悪』の中でももっとも強い奴こそが正義と呼ばれているだけだ。……そして、その存在にはオレこそが相応しい」

まるで世界の在り方そのものに絶望しているかのような言葉を並べる『捜シ者』から、沸々とどす黒い殺気がにじみ出る。それをより強めるように、『捜シ者』は刺青が刻まれ

た左手をグツと握り、堂々と宣言した。

「まずは殺しだ！ 気に入らねえ奴やオレにたてつく奴は全て殺す！ そしてお前はオレの側で見届けろ……！ 至高の“悪”が絶対の“正義”と呼ばれるその瞬間を！」  
それは、まさに世界征服ともとれる巨大な野望。彼の野望にそぐわない者、邪魔するものを全て殺し、その力をもって自らをルールとする。そのあまりにも非道で、あまりにも単調で……あまりにも確実な野望に、その空間にいた者全てが震撼した。

「な、なんと身勝手なことを……」

「その声……珍種か」

「ッ——！」

『捜シ者』の野望を聞き、思わず桜は声を出す。その声で、『捜シ者』はようやく桜の存在にも気付いた。気付かれたことを感じ、桜は反射的に息を呑むが、それとほぼ同時に目の前にいた優も構える。

「いつでも逃げられる準備をしておけ、桜小路。何が来ようと、逃げるくらいの時間は——」



「珍種はめんどくせえから気に入らねえ。特にテメエは……な」

「稼げ——ッ!？」

「い、いつの間、に——!」

警戒はしていた。その証拠に、瞬きすら忘れてその姿を見ていたはずだった。しかし、それでも気付いた時にはそこにいた。

気を抜けば飲み込まれそうになるほどの殺気を放ちながら、『捜シ者』は桜の後ろに立ち、強く握った拳を振りかざした。

——ゴガッ!!

「——い、いかにも……無事かい? 桜小路君……」

「か、会長!？」

完全に意表を突いて放たれた『捜シ者』の拳。『脳』で反射神経すら強化された優ですら気付かず、桜に向かって放たれた拳は完全に桜を捉えていた。

しかし、その捉えていたはずの拳は桜には届かず、寸でのところで庇ったのだろうか會長が受けていた。なんとか防御して直撃を避けていたが、その姿は明らかに限界を迎えようとしていた。

「すまない……。この傷さえなければ、もっと対等に——」

「どけー！」

「うぐうー！」

立っていることすらやつとといった様子で話す會長だが、『捜シ者』の追撃が容赦なく放たれる。しかし、それでも會長は桜を護ろうと両足に力を込めてその場に立ち続けた。

「どけつつつてんだ。オレはそっちに用がある。アンタは後回しなんだよ」

「な、何度攻撃されようと……。ここは、絶対にどかない！」

「……面白い」

容赦ない追撃を放った『捜シ者』だが、一撃だけでそれを止めて言葉でどかさうとする。まだ會長を手にかける気は無いようだが、どいたら確実に桜の身が危険に及ぶ。彼は桜の実の父親。保身のために娘を危険に晒すなどということはせず、再び力強くその

場に立つ。

その姿を見て、『捜シ者』はニヤリと邪悪な笑みを浮かべ、その拳を強く握った。

——ゴツ！ ガツ！ ドツ！

「あぐっ！ ぬう！ ぐむう！」

「や、やめろ！ これ以上——！」

「下手に動くな、この馬鹿！ 今は下がれ！」

自分を護るため、一方的に傷付く会長。目の前で続けられる胸が痛む光景に、桜は我慢できずにそれを止めようと身を乗り出そうとする。

しかし、優が桜の腕を掴んでそれを止める。『脳』で強化された優の手を振りほどくことができず、桜は睨むように優を見る。

「離してください、夜原先輩！ このままでは会長が！」

「お前が出たところで何ができる！ お前に何かあつたら会長が身を挺した意味が——！」

「い、いいんだよ、優君……」

必死な表情で桜は優に訴えるが、優も真剣な表情でそれを止めようとする。会長が桜に抱える真実を知った者として、彼も桜を護ろうとしていた。

すると、その気持ちを察してか。会長が身体を震えさせながら桜たちに振り向き、静

かに声をかけた。

「桜小路君……優君の言う通りだ。君は、下がっていなさい……」

「会、長……。どうして、そこまで……」

「……嬉しいんだよ。もう二度と叶わないと思つていたのに……また、こうして君を護れた……」

「え……?」

かつて、離れていくその姿を見送つた桜<sup>娘</sup>。父親としてできること、してあげられること全てを他者にすぎり、自分自身は何もできなかった。

それでも、今は違う。自らを盾にして、娘を脅威から護ることができる。たとえ父と呼ばれなくても、知らないままで構わない。自分の中で、父として娘を護つたという真実が残るのなら——

——ドガッ!

「ぐあつ!」

「会長!」

「下がれ!」

自分を犠牲にして娘を護ろうとする会長だったが、すでに身体が限界だった。一際力を込められた『捜シ者』の拳を受け、その身体は桜の前から引き剥がされた。

会長が殴り飛ばされたと同時に、優は桜の腕を引つ張つて下がらせて自分が前に出る。すぐに反応できるように折れた『斬空刀』を構えるが、『捜シ者』は優の存在を無視し、その後ろにいる桜を静かに見下ろしていた。

「……お前のせいだ。お前が、オレの異能を『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>に封じた。だからお前は……珍種の中でも特に気に入らねえ」

「わ、私が……？ 何を、言つて……」

明らかな殺意が込められた眼に見下ろされ、桜は身体の芯から起こるような震えに襲われる。しかし、桜の中で今の状況が二度目であるという既視感を覚える。確信など無い奇妙な感覚を感じていると、今まで忘れていた過去のビジョンが蘇った。

幼い自分を禍々しい眼で見下ろす『捜シ者』……そのビジョンが。

(……そ、そうだ。やはり、この人はあの時の——！)

『捜シ者』の言葉で思い出した桜の過去。その時は思い出すことができなかつた、『捜シ者』と大神の母親を殺し、幼い桜を見下ろす謎の男。だが、全て思い出した。大神の言う通り、彼らの母親を殺したのは他でもない『捜シ者』自身。元の姿の彼が母親を手にかけたのだつた。

明らかになつていく記憶と命の危機に、桜の心臓がドクンと高鳴つていく。ただそこにいるだけで胸が苦しくなるほど高鳴る心音を感じながら、桜は何もできないまま『捜

シ者』を見上げ続けた。

「ふわあ……黙って聞いていれば、まったくつまらないな」

張りつめた緊張感を完全に無視して欠伸をする大神。その行動と言葉に、その場は完全に凍り付いたように止まった。

「……何か言ったか？ 零」

「なんだ、聞こえなかったのか？ どうやらずっと元の姿に戻らなかったせいで、耳にゴミでも詰まったみてえだな」

あくまで桜の方を向いたまま、『捜シ者』は大神に対して言葉をかける。すると、大神はさらに挑発的な言葉で返してくる。何をしようとしているのか、大神の意図が読めずにただ混乱する桜たちも放っておいて、大神はさらに言葉を続けた。

「そんなちやつちい『パンドラの箱』がよほど好きなのか、それとも珍種を追いかけ回すのが趣味のストーリーカー野郎なのか……オレは知らねえがな。どちらにせよ、これがアంతタの言う『正義』だど？」

——カタ、カタ……

大神が言葉をつづけて、左手親指の指輪の揺れが少しずつ強くなっていく。だが、大神はそれに構うことなく、静かに左手を構え……

「くだらねえ。アంతタの講釈はガキの頃から何度も聞いてきたが……クソつまらねえんだよ。反吐が出るほどにな。所詮、どこまでいっても『悪』は『悪』。異能が戻つていようと関係ない……オレが燃え散らす」

——ガタ、ガタガタ……！

明らかに嫌悪を示すような眼を『捜シ者』に向け、左手に『青い炎』を灯す。その瞬間、指輪は今までにないほど強く揺れ始める。決して荒ぶる様子は無い大神だが、おそらく内心では『捜シ者』に対する思いが荒波のように溢れているのだろう。

だが、大神の言葉は確実に、彼以上に『捜シ者』の心を荒らした。

「——ハッ！」

——パァン！

「大神！」

桜を始末しようと、桜の方に身体を向けていた『捜シ者』が嘲笑と共に大神へと振り向く。瞬間、『捜シ者』の眼が輝き、大神の制服の左肩部分が爆ぜる。離れた状態で、触れずに攻撃することができる『捜シ者』の力に驚く桜だったが、『捜シ者』はその驚きを上書きするような言葉を口にした。

「……お前にこのオレが斃せるのか？ 面白い、やれるものならやってみるがいい。

他人ひとからもらったその片腕の……左手の異能だけでやれるのならな」

「な——!？」

（大神の左腕が、他人ひとの腕——!？）



制服が爆ぜたことで露わになった大神の左肩。そこには『捜シ者』の言葉を決定づけるように、グロテスクな傷痕が刻まれていた。接合部分と思われるそこは蒼く変色しており、『捜シ者』の言葉が真実だと周囲に理解させていた。

突然明かされた真実に、優と桜は大きく目を見開くだけしかできなかった。

## code : 62 至高の青、煉獄の炎

以前、彼女は何気なく尋ねたことがあった。

「なぜ左手だけなのだ？」

「え？」

通学途中の電車の中、桜は大神に尋ねた。突然の問いに大神は首を傾げると、桜は質問を続けた。

「異能の話だ。他の者たちは全身で異能を操っているのに、大神は左手だけだろうか？  
何か理由があるのか？」

確かに、刻の『磁力』や遊騎の『音』、平家の『光』も全身から放つことができる。それに対して、大神の『青い炎』は左手以外に灯つたところを見たことが無い。人見との闘いで見せた力でも、左手でのみ操っていた。

桜的を得た質問に対し、最初に答えたのは傍で聞いていた第三者だった。

「そんなの決まってるじゃん、桜ちゃん。大神が『コード：06』だからだよ。だから  
異能も左手だけしか——」

「ガウー！」

「イデアデアデア!!」

明らかかな嫌味を交えた上に、確証もない答えを口にする刻。だが、すぐに『子犬』が飛び出してきて刻の頭に思いきり噛みつく。懐いている大神をバカにするのは許さない、ということなのだろう。

すると、同じく傍にいた優が呆れた顔をしながら会話に入ってきた。

「ま、とりあえず刻の意見は無視していい。で、左手でしか使えない理由だが……何とも言えないな。オレは異能の性質上、直に作用するのは脳だけだが効果は全身に作用する。けど、大神の『青い炎』はそういうものでもないからな……」

「ふむ、なるほど……。実際のところどうなのだ？ 大神」

例を交えた優の言葉に、桜は顎に手を添えながら頷く。優の言葉を踏まえて、桜は改めて大神の方を向く。

瞬間、窓の外から強い光が差し込む。見ると、太陽に被っていた雲が離れたようだった。日光が差し込み、逆光で大神の顔が黒く染まる。

「……偶然、つてやつですよ」

逆光で黒く染まった大神の表情はわからない。それでも、桜はどんな表情をしているかなんとなくわかった気がした。

とても悲しい顔をしている……桜はその言葉を口にはせず、胸の内にしまいこんだ。

「ど、どういうことだ……？　大神の左腕が他人のものだと？」

『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>が開き、異能与元の姿を取り戻した『捜シ者』から明かされた驚愕の事実。大神の左腕が彼自身のものでなく他人のものである……信じられないような言葉だが、爆ぜたことで露わになった大神の左肩には、左腕が手術で移植された跡のようなもののはつきりと刻まれていた。

「ということとは、『青い炎』を使えるのはあの腕の持ち主ってことか……？　いや、だ  
が移植されたことで他人の異能が使えるようになったなんて話は聞いたことが……」

「だ、誰だ!? 誰の腕が大神の左腕に!?!」

「二人とも、落ち着いて……………」

同じ異能者として知識を総動員させるも、優は納得できずに驚きが続く。それに対し、桜は受けた衝撃が大きすぎたのか、あたふたと慌て始めた。

頭を悩ませる二人を見て、横になった状態で会長が声をかける。「捜シ者」から攻撃を受け続けたせいでボロボロだが、なんとか無事なようだった。会長はゆつくりと身体を起こして、近くの瓦礫に背中を預けた状態で座ってから続けた。

「大神君は、特別なんだ……………」

「特別……………?」

「そう。本来、異能というのは現存するエネルギーや状態であることがほとんど……………けど、あの『青い炎』だけは違う……………」

説明をしながら会長は視線を大神へと移す。その左手には『青い炎』が灯っており、親指の指輪がガタガタと揺れる。今まで多くの「悪」を燃え散らしてきた『青い炎』のゆらめきを視界に入れながら、会長は特別の意味について語り始めた。

「二度燃えたら最期……………遺伝子の欠片すら残さず消滅させる炎は現存するどんな炎でもあり得ない。あれはこの世に存在するはずがない炎……………まさに煉獄の炎なんだ!」

「現存するはずがない、炎……………」

「そんなものが……」

これまで『青い炎』は幾多の“悪”を灰も残さず燃え散らしてきた。遺伝子の欠片まで残さず、と言われてもハッキリとしたイメージはわからないかもしれないが、「何も残さない」ということは『青い炎』を目にしてきた者ならわかることだった。

異能の定義を覆すような存在である『青い炎』の力を聞き、優と桜は改めて大神の方を見る。左手の身で『青い炎』を操る彼は、曝け出された左肩を隠そうともせず、その眼をキツと細めた。

「……腕がどうした。元々この腕が誰のものだろうが、どうでもいい。今、肝心なのは——」

ゆっくりと大神の左腕が動く。何の違和感もなく、最初から彼のものであったかのよう。そして、大神は左腕を『捜シ者』に向かって伸ばしながら走り出した。

「テメエはこのオレが燃え散らすってことだ！」

「——だとしたら、どこを見てやがる？」

「ッ!?!」

しかし、大神の左腕は空を切る。先ほどまでそこにいたはずの『捜シ者』の姿は影もなく、はるか上に吊るされている通路から声が届く。見ると、通路の手すり部分に『捜シ者』の姿があった。本来の姿と共に『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>から解放されたと思われる白い

コートで身を包み、鋭く冷ややかな眼で大神たちを見下ろしていた。

「まただ……! 『捜シ者』は一瞬のうちにはあり得ない距離を移動している……!」

「これが、『捜シ者』の異能……!?! だとしたら、いったいどんな……!」

目を離してはいないはずなのに桜の後ろを取ったり、一瞬で上方まで移動したりと目を疑うような移動を試みせる『捜シ者』。彼の身に戻った彼の異能の力だとわかつていく優と桜だったが、その能力について見当もつかないでいた。

だが、過去の経験から異能の正体を知っているであろう大神は、すぐに体勢を立て直そうとした。

「チッ! さつきからちよ

こまかと——ッ!?!」

「……え?」

舌打ちと共に『捜シ者』に向き直ろうとした大神。しかし、その身体は彼の言葉が言い終わる前に宙に浮かんだ。しかもただ宙に浮いただけではなく、『捜シ者』の手が届く

位置に移動していた。突然のことに目を見開く桜だったが、当の大神も驚きで息を呑む。

冷静なのはただ一人……スツと前方に右手を伸ばした『捜シ者』だけだった。そして、『捜シ者』は殺意を込めた眼で大神を捉え、右手を拳に変えた。

「お前が一番よくわかつているはずだ、零。オレは誰が相手だろうと負けることは無い。誰も……オレを斃すことはできない」

——ゴツ！

「ガハッ——！」

「大神！」

何の躊躇もなく、空中で支えを失った大神を『捜シ者』は瓦礫に向かって殴りつけた。落下の際の重力が加わることでより強く打ち付けられた大神の身体は、瓦礫に激突すると同時に大量の血を彼に吐き出させた。口以外にも、額や腕など様々な個所からの出血で周囲の瓦礫が紅く染まる。



ロスト姿の際は大神を「弟」と呼び、少しは『捜シ者』の中にも家族としての情もあるのかと感じられた。だが、今はまるで違う。姿が戻った時に大神に向けた優しい言葉が嘘かと思えるほど、容赦なく手をかけている。誰よりも家族としての繋がりを大事にしている桜は、どうしようもない怒りを感じて感情のままにその身を動かす。

「いくら兄上でも許さぬ！ それ以上は——！」

「やめておけ。今、行けば……死ぬぞ？」

「虹次！」

しかし、その桜をいつの間にか到着していた虹次が止める。『Re—CODE』の登場に身構える優だったが、虹次は瓦礫の山に腰を下ろして静かに大神と『捜シ者』の闘いを見物しようとしていた。

そして、そんな彼の近くにいる者の存在が優と桜の意識を奪う。

「刻！」

「刻君！」

虹次の近くにある瓦礫の上で力無く横たわるのは、虹次に敗北してそのまま連れてこられた刻だった。虫の息とも言える彼の姿を見たことで、桜は進む方向を刻の方へと変えた。

だが、その間にも大神と『捜シ者』の一方的な闘いは続いていく。

「ぐ………！ クソ、が………！」

「ほう、大したものだ。全身ボロボロのくせに動くとはな。その気迫だけは認めてやる」

大量の血を流しながらも、大神はなんとか身体を起き上がらせていく。すると、再び一瞬で移動してきた『捜シ者』が大神の腕を掴み、その身体を軽々と持ち上げてみせた。そのまま空いている手で大神の頭を鷲掴みにし、グイッと顔を上げさせる。

「だが、オレは斃せねえ……何をしようと絶対にな」

有無を言わさぬ迫力で大神の顔を見下ろす『捜シ者』。だが、それだけ言うと『捜シ者』から圧倒的な迫力が和らぐ。さらにそのまま、まるで諭すような言葉を口にした。

「今だったらまだ許してやる。そしたら、また連れてつてやつてもいい。今のお前ならガキの頃よりは役に——」

——ピチャ

しかし、その言葉は唐突に終わる。『捜シ者』の頬に吐き捨てられた、血で紅く染まった唾によって。その唾を吐いた張本人……『捜シ者』の目の前にいる大神はニヤリと強気な笑みを浮かべた。

「気色悪いんだよ……。その汚え顔を近づけんじゃねえ……」

「………気に入ったぜ、零。お前はただじゃ殺さねえ！」

ダメージを負って震える身体でも、大神は挑発するような言葉を吐き捨てる。その態度を目の前にした『捜シ者』は笑みを浮かべ、腕を挿んだまま大神の頭を殴り抜けた。

——ガガア！

ほぼ同時刻の『渋谷荘』地下の上層では、変わらず平家と雪比奈による激戦が繰り広げられていた。日和が最下層に消えたため、王子のみが巻き込まれぬように気を付けている。

変わらず互角の闘いを繰り広げる彼らだったが、『パンドラの箱』ボックスが開いたことでその状況は大きく変わっていた。

「……ようやく、面白くなってきた。オレは正義とか『Re—CODE』の肩書きとかには興味なかったが、『捜シ者』が蘇ったなら待った甲斐があった。あの人には殺しと勝ちしかないから、一緒にいれば退屈することもないからな」

「あなたの思い通りには……させません！」

『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>が開いたことを『捜シ者』の気配で察したのだろう。満足そうに微笑む雪比奈に対し、通信機によつてリアルタイムで開いたことを聞いていた平家は真剣な表情で雪比奈を止めようとしていた。

『光』のムチが身体を絡め取ろうとするが、雪比奈はすぐに見切つてそれを避ける。そして、微笑みを嘲笑のようなものに変えて言葉が続けた。

「しかし、大神もバカな奴だ。『コード：ブレイカー』なんていう、異能の無駄遣いしかさせてもらえない犬になつて『捜シ者』を斃そうとするは。……まあ、仮に犬じゃなかったとしてもこのまま『捜シ者』に殺されて終わるがな」

「雪比奈……！」

大神の全てを否定するような雪比奈の発言に、王子はキツと睨みつけるが雪比奈はそれを無視する。すると、王子と同じように雪比奈の言葉を聞いていた平家が静かに目を伏せ、確信に満ちた声を発した。

「……大神君を、彼を舐めない方がいい。彼には……あの『青い炎』があるのですから」  
確固たる確信に満ちた平家の言葉に、王子は思わず息を呑む。平家がここまで断言するのははつきり言つてかなり珍しい。その根拠を知らしめるように、平家は静かに雪比奈を見据えた。

「かつて、あの『青い炎』は何千何万という数えきれないほどの『悪』を欠片も残さず  
に燃え散らしてきた。そう、まさに煉獄サタン・ブレイズの業火。それが身体に触れれば最期、他の異能  
では絶対に消し去ることはできない。その炎はまだあの腕で燃え続けている」

「あの腕……『コード・エンペラー』と呼ばれる者の腕、か」

まるでその目で見てきたかのような口振りで『青い炎』の真価について話す平家。す  
ると、それを聞いていた雪比奈は相変わらずの無表情で意外な言葉を呟く。

大神の左腕が『コード・エンペラー』と呼ばれる者の腕のもの……会長も口にしなかつ  
た左腕の持ち主について、最初から知っていたような口調で雪比奈はその名を口にし  
た。

「だけど片腕だけだし、あの指輪をつけなきや制御もできない。本当の意味で使いこ  
なしていれば話は別だが、今の大神が操る炎程度ならオレの異能……水を含む全ての物  
質を操る『水態すいたい』でも相殺できる」

「あれじゃ『捜シ者』は斃せない」と最後にはつきり雪比奈は言い切る。確かに、かつ  
て研究所で雪比奈と闘った時も大神は彼を燃やすことができなかった。しつかりと手  
を組み合っただけなのに、彼の『水態』によって完璧に相殺されていたのだ。

自分すら斃せない者に『捜シ者』は斃せない、と確固たる自身で言い切る雪比奈だつ  
たが、平家は臆することなくさらなる根拠を口にした。

「雪比奈……あなたなら聞いたことがあるはずですよ。これまで『エデン』によってあの『コード：エンペラー』の左腕を移植された者は、誰だろうとその『青い炎』で燃え散らされてきた。『青い炎』は何者にも属そうとしない至高の異能です。……しかし、大神君は違う。彼だけはその身を燃え散らされることは無かった。これは、操れる操れないの問題ではありません。」

彼は、至高の『青い炎』に選ばれた唯一の存在——“特別”なんです」

——ガッ！

「ハハハ！ これで終わりか、零！ だが、当然の結果だ！ オレは誰にも斃せない！」

一方的に『捜シ者』からの攻撃を受け続けた大神。何度か反撃を試みようとしたが、例の早すぎる移動のせいでかすりもしなかった。

『捜シ者』は堂々とした笑い声と共に、大神の首に手をかけながら勢いよく壁に押しつける。その手に力を込めて首を絞めようとするが、大神はそれでも闘志を燃やしていた。

「ま、だ……！」

内なる闘志を表に出すように『青い炎』を灯す。そのまま『捜シ者』に攻撃しようとして左腕を振りかざそうとするが、それを見た『捜シ者』が面倒そうに舌打ちをする。

「……チツ。さつきからメラメラと……目障りな炎だ、なー！」

——ズンッ！

「ぐあああー！」

瞬間、大神の振りかざした左腕に細い鉄柱が突き刺さり壁に固定される。見ると、瓦礫の山に転がっていた鉄柱の内の一本を『捜シ者』が左腕の中心を狙って突き刺していた。

左腕から全身に流れる痛みと唯一の武器を封じられた苦痛。窮地に陥った大神に対し、『捜シ者』は心から軽蔑するような眼で大神を見下ろす。

「……この程度か。まったくもって弱すぎる。少しはマシになっているかと思った

が、お前もそのへんにいる「悪<sup>クズ</sup>」と同じか。なら……これで終<sup>しま</sup>いだ！」

何の脅威ともならない大神の力に、『捜シ者』は心から落胆した様子だった。そして、まるで飽きた玩具を捨てるように見切りをつけ、大神の胸に向かつて手刀を放つ。左腕を壁に固定されて思うように身動きができず、大神は目前に迫る手刀をただ見つめるだけだった。

——ブシャ！

「……許され、へん」



「あ?」

だが、その手刀は大神へと届くことは無く、彼を救おうと飛び出した者によって止められた。

「遊騎!」

「お前は、絶対に許されへん……! 時雨を、ろくばんを……よくも——!」

「うぜえ!」

両手を重ねて構えることなどか大神に手刀が届くのを止めたのは遊騎。だが、『捜シ者』の手刀は遊騎の手の皮膚を裂き、力を込めづらくする。それでもなくとも時雨を庇った際に負った傷で瀕死の状態だった遊騎は今にも倒れそうにしている。

それでも『捜シ者』に対して、友を切り捨てて大神第をないがしろにすることへの怒りを言葉にしようとする。しかし、『捜シ者』はその怒りごと振り払うように、遊騎を殴り飛ばした。

「や、やめるのだ!」

「な!? 桜小路さん、何を!」

遊騎を殴り飛ばした『捜シ者』の腕に飛びかかり、桜はなんとか彼を止めようとする。同年代の男性でも敵わないほどの力を持つ彼女が力の限り腕を抑えようとし、同時に跳び出した『子犬』も微力ながら尽力する。

だが、『捜シ者』にとつては意味がないことには変わりなかった。

——ゴッ！

「桜小路さん!!」

「そこで寝てろ、珍種。お前は後回しだ」

桜と『子犬』がしがみついたまま、『捜シ者』はその腕を勢いよく床に向かって振り下ろす。そのあまりの勢いに桜たちは手を離してしまい、その勢いのまま床に激突する。『捜シ者』の力も加わり、より強烈となった衝撃が桜たちの意識を奪う。

しかし、『捜シ者』は追撃しようとはせず改めて大神に向き直る。

——ガッ！

「『壊脳』——!」

瞬間、『捜シ者』の背後から伸びた手が彼の頭を鷲掴みにする。見ると、優が『捜シ者』に向かって飛びかかっている。『壊脳』を使い、『捜シ者』の脳を壊すことで形勢の逆転を狙っているのだろう。風牙との闘いのことを考えると、脳を壊された状態で勝つのはほぼ不可能となる。

優は絶対に離すまいとそのまま頭蓋を砕く勢いで手に力を込め、そのまま『壊脳』を

「次から次へと……邪魔だ、雑魚共がア!!」

——ドガア!

「ガハッ——!」

「優!!」

だが、激昂した『捜シ者』がその手をいとも簡単に片手で引き離す。そのままもう片方の手を拳とし、邪魔された怒り全てをぶつけるかのような拳を繰り出した。

『捜シ者』の拳は優の顔を殴り抜け、その身体をはるか後方に吹き飛ばす。大きく目を見開いて優の名を呼ぶ大神に対して、『捜シ者』はコキコキと首を鳴らす。

「テメエの異能量如きじゃ、オレの脳は壊せねえ。……さて、待たせたな」

優の行動を無駄だと切り捨て、『捜シ者』は再び大神を見据える。左腕に突き刺さった鉄柱はいまだ抜けず、大神をその場に留まらせる。そして、今までなんとか『捜シ者』を止めようとした仲間たちは倒れている。

今の大神には、逃げの道も逆転の道も……何一つ残されていないかった。

「さあ……お前から死ね! 零!」

全てが絶望に染まっていく大神の前に、凶刃と化した『捜シ者』の手刀が振り下ろされた。

「見て、らんねーナ……」

——ドッ！

振り下ろされた。それは確かだった。

現に、その手刀によって裂かれた皮膚から鮮血が飛び出し、視界を紅く染める。

しかし、痛みを感じない。あまりの状況に痛覚が麻痺したわけではない。鉄柱によって突き刺された部分から今も確かな痛みを感じる。

だが、それだけだ。新たな痛みも、身体を貫かれた際の異物感もない。左腕だけだ。

不思議ではなかった。ただ、信じられなかった。  
なぜなら、新たに彼を庇ったのは過去と現在、どちらの状況から考えてもあり得ない人物だったから。

「と、刻!!」

振り下ろされた手刀が貫いたもの……それは大神ではなく、彼を庇おうと大神と『捜シ者』の間に割って入ってきた刻の右肩だった。常に大神を認めようとせずにいがみ合い、すでに虹次との闘いで限界を超えていた刻。

そんな彼が、確かにそこにいた。

「何やってん、だ……この下っ端野郎が!」

虹次との闘いで全てを出し切り、追い打ちにのように『捜シ者』からの一撃を受けた刻。だが、彼はその動かぬ身体をその強靱な精神力で動かし、胸の内に抱える言葉を彼

にぶつけた。

「周りが、見えてねーのかヨ……。今ここで、マトモに動けるのはテメーだけだ……。テメーがあいつを……。『捜シ者』を斃さねえと全員死ぬ！　ここにいるオレたちだけじゃねえ……。世界中で普通に暮らしてる奴らも！　……。テメーしか、お前しかいねえんだよ」

刻の声が大神の耳に届きながら、無意識のうちに大神の視線が動く。

自分を護ろうとして倒れた遊騎、桜、『子犬』、優。

本来の中立という立場と『捜シ者』と交わしてしまった約束、あり得ないと思つていた『かつての弟子捜シ者』からの刃で傷ついた会長。

その場にはいない王子も倒れ、その王子を護りながら平家も闘っている。

この空間に存在する者の中で『捜シ者』を斃せる者……。それは、確かに大神以外には存在していなかった。そして、ここで彼も斃れば世界が地獄に染まる。『捜シ者』の野望により、彼という「悪」が「正義」と名乗ることを許す世界となってしまう。

「キメろ、大神……。！　お前はそのためにも、今までやってきたんだらうガ……。！」

「刻……」

——ドクン

首だけを動かしたことで、刻の顔が大神の視界に映る。その金銀妖眼に射抜かれ、彼

の言葉がダイレクトに大神の胸を震わせる。そして、『捜シ者』が手を引き抜いたことで支えを失った刻も遊騎たちと同様に倒れる。

——ドクン

自分の身など構わず、大神を護ろうとした四人と『子犬』。その彼らが倒れる場所の近くに、大神はつい最近見たことがある一枚の写真を見つける。

以前、無理やり行くことになった夏祭りです最後に撮った全員が写った写真。無邪気に楽しむ仲間たちの顔だが、いつの間にか燃え移った『青い炎』によって欠片も残さず燃え散っていく。

「ッ——！」

『青い炎』によって燃え散る写真……その光景を見た瞬間、大神の頭は真っ白に染まり、過去の光景が次々とフラッシュバックし始めた。

『死ぬぞ?』

幼い自分が発した『青い炎』が燃える中、兄は母を殺した。

『あの時と同じ……お前はまた何もできない』

冷たくなった母の身体に触れ、その身体から流れた血がその手を染めた。

『誰もかも……皆、死ぬぞ——？』

何が何だかわからず、無意識に視線を逸らした先。そこには、幼い自分、母、父……  
そして笑顔の兄が写った写真。その写真を、失った存在をそこから奪うかのように  
『青い炎』が父と母の姿を燃え散らしく。



『さあ、どうする………？』

——うるせえ

『このままでは、ただ繰り返すだけだぞ………？』

——させない。もう、二度と………

そう、もう二度と——

殺させない——!!

「うおおおおおおお!!」

——ゴツ!!

「な——!?!」

刹那、『捜シ者』の中に小さな混乱が起こる。今、自分は殴られた。しかも、右側から右頬を殴られた。

今、彼を殴ることができる距離にいるのは大神のみ。だが、その大神が右頬を殴るには左手を使うしかない。突き刺さった鉄柱によって動かすことができない左腕を。

(腕を引きちぎったとでもいうのか……!?! どこにそんな力が——!)

何が起こったのか理解しようと、『捜シ者』は視線を動かして大神の姿を捉える。すると、そこには予想だにしない衝撃の光景が広がっていた。

「オレは、アンタに育てられて良かったと思うことが一つだけある。それは……」

そこにいたのは覚悟を決めたようにしつかりと立つ大神。全身、『捜シ者』の攻撃によつて刻まれた傷痕が生々しく残っている。それでも彼の眼は強い意志を込めて『捜シ者』を貫き、それに応えるように左腕が揺らめく。

「この手、この炎で！ テメエをぶつ殺すことができるってことだ!!」

大神は、左腕を引きちぎったわけではなかった。彼の左腕は確かにそこにある。傷など一切無く……いや、傷が刻まれること自体あり得ない形となつて。

（左腕が、『青い炎』に変化した、のか——!?!）

『コード：エンペラー』なる者から移植された大神の左腕……その左腕全体が左腕の形を遺したまま『青い炎』と化し、雄々しくその姿を揺らめかせた。

## code : 63 戦場が語りし真実

「さあ、鮮度が命の野菜だよ！ 早いうちに買ってきてきな！」

「この生地、一番のオススメさ！ 奥さんになら似合うぜ！」

「助かるわ！ 息子がこの果物を食べたがってたの！」

少し外に出れば広大な砂漠が広がる地域にある小さな町。決して豊かとは言えない町だったが、そこで暮らす人々の顔には笑顔が耐えず浮かんでいた。

声を張り上げて客を集めようとする商人、家族のために食材を求める主婦……様々な人々が町の中心にあるマーケットにて、どこから流れる民族音楽を耳にしながら過ごしていた。

——ドンッ

「あらあら、ごめんなさい。坊や、大丈夫？」

と、その中に一人だけ異質な子どもがいた。明らかに地元の間人ではない顔立ちをし、砂から身を護るためかポロポロのフードで身体を覆っている。その顔は何も感じていないように無表情で、静かに目を伏せたままその場に立っていた。

「……………」

その子どもはぶつかつた女性にペコリと頭を下げると、変わらず目を伏せたまま歩き始めた。独特な雰囲気を持つ子どもに女性は首を傾げたが、深く追及はせずそのまま別れる。

すると、途端に周囲の砂を撒き上げるような強風が発生する。道行く人々が足を止める中、その子どもは変わらず歩き続けようとするが、強風によつて身に纏つていたフードが大きくめくれ、その内側が晒される。そこで露わになつたものを見て、一部の人間たちに動揺が走つた。

「今の……見たか？」

「ああ、この町にいるって噂は本当だつたつてことか……！」

フードがめくれたことで露わになつた子どもの身体は、一目で普通の子どもではないとわかる外見をしていた。左肩部分には痛々しい接合手術の痕と思われる傷を持ち、どういうわけかその両手には小さな手錠がかけられていた。

その姿……正確には左腕を見た一部の人間たちは、途端にその眼を野心に染めていく。

「間違いない……！ 『青い炎』の異能者……『コード：エンペラー』の腕だ！」

「殺せ！ あのガキを殺して……あの腕を奪え！」

瞬間、左腕を見て様子が変わった者たちの懐から様々なタイプの拳銃が取り出され



「気安く近づくな！ コレはオレの物だ！ 『青い炎』は誰にも渡さねえ！」

グイ、と力強く子どもの手を拘束する手錠の鎖を引つ張る男。一見すると子どもを護ろうとするような行為だが、そうとは思えないほど荒々しい。

さらにはその子どもに対して、はつきりと「物」扱いしていることを断言する。男はその言葉をより印象付けるかのように、かけていたサングラスを外して子どもを両の眼で威圧的に見下ろす。

「いいか、お前はオレの側でオレの役に立て。オレは必ず最強の「悪」になる。人々が恐怖し、今死んだような「悪」ですら絶望してひれ伏す存在となる。誰もがそれを「正義」と呼ばざるを得なくなるほどの絶対悪にな！」

「……………」

側にいるだけで圧倒されるほどの威圧感を放つ男の言葉に、子どもは何も言わずに視線を外す。そうして目に映ったのはたった今、巻き込まれてしまった一般人の少女。買物袋が近くに堕ちているところを見ると、買物帰りだったのかもしれない。

「キヤアアアア!!」

「テ、テロだ！ 通行人が犠牲になったぞ！」

状況を理解した他の一般人たちの悲鳴を聞きながら、その子どもはゆつくりと少女に近づく。すると、幸いにも致命傷は避けたのか、近づいてくる気配を感じて少女は震える声で手を伸ばし始めた。

「た、助けて……。痛い……。痛——」

——グシャ！

「ッ——！」

伸ばした手を取ろうと、その小さな手を震えさせながら子どもも手を伸ばす。しかし、その手を取るよりも前に大人の足が少女の頭を容赦なく踏みつける。勢いよく頭を踏みつけられた少女は強く頭を打ち、そのままピクリとも動かなくなる。

目の前で消えた少女の命に目を見開きながら子どもが顔を上げると、そこには少女を巻き込んだ張本人である長身の男がなんとも思っていないような表情で少女を見下ろしていた。

「コイツも死んだ……。一步間違えればテメエがこうなってたんだ、よく見ておけ。そしてよく考えろ……。こうなった元々の原因はテメエだつてな」

「……………」

まだ救える可能性がある少女に止めを刺しながらも、男は子どもに教え込むような口



調で話しかける。狙われた自分が少女のような変わり果てた姿になった可能性、こうして男が手を出さずつけかけになったのは自分……自分の左腕を狙った者たちがいたこと。幼いながらにそれを理解した子どもは愕然とし、大きく目を見開く。

「——！」

すると、まるで少女たち一般人の仇とでも言いたげにナイフを構えて男に突っ込む。なんの計算もなく感情に身を任せただけの子どもに、男は避ける素振りも見せずその場に立つ。

「うぜえ」

そして、ただ真正面から子ども顔に蹴りを入れてその軽い身体を倒す。いくらナイフを持っていようと結局は子ども。見切るのも容易ならば真正面から迎え撃つのも容易ということだ。

改めて自身の無力を噛み締めるかのように、子どもは倒れた場所から動かずに黙って俯く。だが、その無力感が意外な行動へと駆り立てた。

——ガッ！ ガッ！

「ッ……！！」

なんと、ナイフを自身の左腕へと向けた。いくら両手に手錠をかけられていても、自分の左腕に届くくらいの余裕はある。そのまま自分の身体から切り落とそうとするよ

うに、もう二度と左腕を狙う者が現れないように。

だが、その左腕を目的とする男がそれを止めないはずがなかった。

「何をしていやがる！ 言つただろ、それはオレのだ！ それがあるからテメエは道具としてオレの側にいれるんだ！ 道具の分際で勝手なことをすんじやねえ！」

荒げた声と共に、先ほどより威力が増した男の蹴りが子どもの顔を捉えてナイフも手放させる。それだけでは終わらず、そのまま男はその顔を踏みつけることでその顔に地につける。まさに道具……いや、道具以下の存在であるかのように扱う男に対し、その子どもは……

「……………」

ぐりぐりと顔を踏みつける足に力を込められながらも、明確な憎しみを込めた眼を男に向ける。自分の身体に広がる痛みなど気にせず、ただ目の前にいる男を睨みつける。同年代の子どもならばまず経験しないであろう憎しみを向ける子どもを見て、男はニヤリとその口元を歪める。

「その眼……オレが憎いか？ なら、もっと憎め。『悪』は憎しみの分だけ強くなる。オレもお前も多くに害をなす『悪』……この世で『悪』が生きるには、より強い『悪』になるしかない。だから、よく覚えておけ——」

——悪には悪を、だ

周囲に斃れる死体の中、子どもは目の前でそう語る男の背中を目に焼き付ける。同時に、男が発したその言葉を自らの心に強く残した。同時

そして今、かつての子どもと男が互いの信念をかけて本気でぶつかろうとしていた。

「覚悟しやがれ……テメエはオレが燃え散らす」

「……………」

殴られた際に切ったのか、口内から溢れ出た血を拭う『捜シ者』。彼と相對する大神は、揺るがぬ覚悟を秘めたような強い眼でその場に立つ。

その左腕全体を『青い炎』へと変化させて。

——ビシ、ビシビシ……！

『青い炎』に変化したとはいえ、形状は元の左腕と変わらない。親指にしていた指輪もそのままだが、今までよりも大きな音を立てていた。見ると、いくつかヒビも入って小さな欠片がポロポロと床に落ちていく。誰が見ても壊れる直前に見える指輪と変わり果てた左腕を見て、会長は怪我によって荒くなった息を整えながら呟く。

「指輪をしたままなのに、本来の力を取り戻しつつあるのか……。あの『コード：エンペラー』の腕が……」

目の前で起きている光景に驚きを感じながら呟く会長に対し、より間近で左腕の変化を目にした『捜シ者』は興味深そうにまじまじと左腕を観察する。

「ふむ……お前の怒りや憎しみに呼応して左腕自体が『青い炎』に変化したってところか。面白い、その炎が見てくれだけじゃないってところ……見せてみる」

「黙れ」

経験と知識から、『捜シ者』は左腕の変化についての仮説を立てる。そして、それだけの余裕があることを思い知らせるようにほくそ笑む。

それでも、大神は冷静さを失わずしっかりと『捜シ者』の姿を捉えて左腕を伸ばす。

——フツ

「——チッ！」

だが、その左腕は再び空を切る。周囲を見ると、『捜シ者』は大神のはるか横に立っている。手応えのなさを感じつつ、大神はすぐに『捜シ者』が移動した場所へと意識を向ける。舌打ちと共に『捜シ者』がいる方向に向き直ろうとするが……

「とろいな」

「——ハア！」

「ハハハ！ どこを燃やそうとしている！ その炎はやっぱり見てくれか!?」  
向き直ったその瞬間に『捜シ者』に背後を取られる。すぐに反応して左腕を背後に振るうが、背後を向いた矢先に再び背後を取られて避けられる。

左腕が『青い炎』に変化したことで炎の範囲が広がったが、それでも炎が当たらなければ意味が無い。そして、いくら左腕を振るっても『捜シ者』は一瞬で移動して当たらない。

圧倒的なまでに不利な戦況の大神の姿を見て、会長は改めて『捜シ者』が持つ異能について脅威を感じる。

「やはり強すぎる……! 『捜シ者』の異能……『絶対空間』は空間ごと瞬時に足したり消すことができる……。だから相手と離れるも相手を近づけさせるも……『捜シ者』にとつては自由自在。どんな異能だろうと彼にヒトトさせるのは奇跡に近いんだ……」  
『捜シ者』が持つ『絶対空間』。対象との間に空間を足すことで瞬時に離れることができ、逆に空間を消すことで対象を引き寄せることもできる。相手の攻撃を避けるも背後を取るも自由自在とすることを考えると、彼との闘いは彼が全てのコマを支配するゲーム盤の上で行われるゲームと同じ。いくら足掻こうと決してどうにかできるものではない。

現に、大神は何度左腕を振るっても『捜シ者』に当たることは無い。近づく度に空間

を足され、一定の距離を保たれてしまう。勝つのは絶望的とも思えてしまう状況だが、会長は悔しきではなく託すようにグツと拳を握り、胸の内で大神に語りかける。

(でも大神君……君ならば、きつと奇跡を起こせる……！ 君と『青い炎』がとんでもない番狂わせを起こしてくれると……信じている！)

大神にその言葉は届かずとも、彼と『青い炎』に希望を確信している会長。だが、そんな希望を打ち砕くように『捜シ者』はまた大神の背後を取る。

「——ガラ空きだ」

そして、ニヤリと口元を歪めて大きく振り上げた拳を振り下ろす。完全に背後を取られたことで見切るのはほぼ不可能。容赦なく振り下ろされた拳が大神の頭蓋との距離を縮める——！

——悪を滅せ！

——ゴオ!

「な!?!」

瞬間、『青い炎』と化した左腕が大きく燃え上がる。大神の身体の倍以上とも思えるほどの大きさの炎は背後にいる『捜シ者』の身体を呑み込む。

「——つと、危ねえ」

しかし、炎が身体に燃え移るよりも先に『捜シ者』は空間を足す。完全に意表を突いていたが、ダメージを与えるには至らなかつた。

未だに大きく燃え上がる左腕を見て、『捜シ者』はフツと興味深そうに口元を緩める。『青い炎』の量が前とは桁違いだな。だが、結局は触れなければいい話だ。そして零



……お前はわかつているはずだ」

「……………」

「お前と違って、オレは触れなくても殺すことは可能だってことをな……」

そう言つて、『捜シ者』は静かに右手を大きく開く。それと同時に細い光が数本、彼の指から一斉に放たれた。

「『空間切断』！」

——ガガガッ！

『捜シ者』が右手を開いた次の瞬間、指から放たれた光が通つた個所がいとも簡単に切断される。瓦礫も、『パンドラの箱』ボックスを護っていた扉も、桜たちが倒れる床も……何もかも。そして、完全に切断されたことでバランスを失つた部屋は音を立てて崩れていくが、崩壊するには至らなかつた。

切断された切り口を見てみると、まるで最初からそういう形をしていたように滑らかなものだった。その滑らかな切り口とは対照的に、切断した張本人である『捜シ者』は荒々しく声を張り上げる。

「どうだ！ 『空間切断』SPACE SEVERERは空間自体を切断する！ そこにあるのが何だろうと関係な

い！ さあ、全員死んでいけ！ オレが絶対の存在だと身体の芯まで叩き込みながらな

！」

空間を足したり消すだけでなく、切断することまで可能な『絶対空間』。まさに全ての空間に対する絶対の支配者とも言うべきその力に、多くの者は絶望にその心を染めよう。

だが、彼と対峙している者の眼は未だ闘志に満ちていた。

「やめろー！」

——ゴォー！

圧倒的な力を目にしながらも『青い炎』と化した左腕を振るう大神。大きく燃え上がる左腕は、勢いよく振られたことでその勢いに乗り、『捜シ者』まで伸びていく。

しかし、『捜シ者』は自分に迫る炎を見ながら、小さく鼻を鳴らした。

「——フンツ、諦めの悪い。『空間切断』！」

——キーン！

「なっ!?!」

再び『捜シ者』の指から細い光が放たれる。その光は『青い炎』が伸びる空間を通りすぎ、次の瞬間にはその空間を切断する。空間を切断されたことで、そこにあつた『青い炎』すら切断される。途中で切断された『青い炎』の先は勢いを無くし、『捜シ者』に届くことなく空中で消えていく。

「ダ、ダメだ……！　いくら『青い炎』でも、あの『絶対空間』が相手だとどうにもな

らない……………」

『青い炎』をいとも簡単に無力化する『絶対空間』の力に、会長は改めて強い脅威を感じる。相手との距離も自由自在で、防御すら無視した攻撃……その全てを意のままに操るほどの強さを持つ『捜シ者』。まさに最強の異能と最恐の異能者である。

「……………」この国にいと、平和すぎて「正義」がいかに嘘くせえものかわからなくなる時がある」

その最恐の異能者は、つまらなそうに周囲を見渡す。その眼はすぐ近くの空間ではなく、自身がいる日本全体を見渡しているようにも見えた。

日本は世界的に見てもかなり平和な国だ。『戦争をしない国』としての顔があり、普段の生活でも命の危機を感じる場面は少ない。実際に過ごしている身としてはそう感じない部分もあるかもしれないが、他国と比べればマシな方だ。少なくとも、彼らが見てきた国と比べれば。

「だがな、零。お前はその眼で見てきたはずだ。「正義」の薄っぺらさ、そこに存在する矛盾を。テレビでもゲームでもない……あの生の戦場だな」

「……………」

「よく見ておけ、これが戦場だ」

「……………」

『捜シ者』が『青い炎』を操る子ども……幼い大神を連れてやってきたのは高くそびえ立つ岩場。そのはるか下では、まさに地獄のような光景が広がっていた。

「我らの『正義』のために！」

「怯むな！　ここで奴らを根絶やしにしろ！」

「いやあああ！」

「た、助けてくれえええ!!」

殺意に任せて銃を撃つ者たちと、大粒の涙を流しながら逃げ惑う人々。さらに、はるかに離れている彼らのもとに届くほど強い焦げ臭さと硝煙の臭いが充満していた。明らかに子どもに見せるような光景ではないが、『捜シ者』はそのまま幼い大神に問いかける。

「片や『正義』と信じる主義主張のために無差別テロを繰り返すテロリスト、片やそ

いつらの制裁という「正義」を掲げて一般人すら巻き込んで人殺しにやってきた連中。さあ、本当の「悪」はどっちだ？」

「……………」

それぞれの正義を持って銃を撃ち続ける二つの集団。どちらも同等の犠牲者を出している中、確実に一般人だと思われる人々も犠牲となつている。「たまたま」そこにテロリストがいて、「たまたま」そこで制裁のためにテロリストを追いかけていた集団が追い付いた……そんな「たまたま」のせいで無残にも命を奪われた多くの者たちが。

だが、テロリストも無意味にテロを行うわけではない。何かを訴えようと集つた者たちがそれを訴えるためにテロを行っている。彼らにしてみれば、そこまでせざるを得ない状況にした社会が「悪」なのだ。

それに対し、彼らを制裁するために来たのは社会を護る立場にある者たちだろう。社会に害をもたらす彼らを「悪」とし、問答無用で亡き者にしようとしている。

「……………フン」

「言うまでもない」

互いに自身を「正義」と、互いに相手を「悪」とする双方。そのどちらかが本当の「悪」かという『捜シ者』の問いに対し、同行していた虹次（R. C. D. E.）と雪比奈は答えがわかりきつているような態度を示す。

——ザッ!

だが、問いかけられた幼い大神が答えを口にするよりも前に、戦況が動く。決着をつけようと、互いに銃を持った者たちが一斉に前に出てくる。未だ逃げ遅れている一般人を気にする者は一人もおらず、巻き込むような勢いで引き金に手をかけようとする。すると、それと同時に『捜シ者』の姿が幼い大神の隣から消える。

「時間切れだ。いいか、答えは——」

——ドッ!

「——答えはどっちも『悪』だ」

そう言つて、『捜シ者』は戦場の中心までの空間を消す。その瞬間、線上にいた全ての者たちの身体が空間ごと切断された。

「これが現実だ！　ハハハ！　ハハハハハハハ！」

「……………」

戦う者も、一般人も、何もかも。全ての命が奪われた戦場で、『捜シ者』の笑い声だけが響き渡る。その光景を見て、今まで黙り続けていた幼い大神の中で強い何かを感じた。それを噛み締めるように、『捜シ者』が彼らの命を奪ったのと同じ異能の力を持つ自身の左手をグツと握りしめた。

「いくら『正義』を語っていようと、その名の下に犠牲は増えていく……。これが『悪』以外の何だというんだ!?　この世に『正義』など存在しない！　あるのは『悪』だけ！　全てが『悪』だ！　ならオレは絶対悪としてその頂点に立つことでオレを『正義』とする！　それがオレの辿り着いた理だ！」

決して我欲ではない。彼は今まで見てきた「正義」と「悪」の姿から今の答えに辿り着いている。自らを「正義」と語りながら無意味な犠牲を増やす者たち、「正義」である自身の保身のために「悪」と同じ道に手を染める者たち……本当に多くの者たちを見てきたのだろう。

確固たる信念を持つて辿り着いた答えを口にする『捜シ者』には、一切の迷いが感じられなかった。

「さあ、零……。わかったなら——」

「——それがどうした？」

だが、そんな『捜シ者』の前に変わらず立ちはだかる大神。彼の眼にも……迷いなど欠片も存在していなかった。

「燃え散れ！」

「バカが！」

——キーン！

諦めず、左腕を構えて大神は真正面から突っ込んでいく。それに対し、『捜シ者』は空間を足して距離をとるのではなく、空間を切断することで正面から迎え撃った。いくつもの光が大神に触れ、次の瞬間にはその部分が切断される。

「闇雲に突っ込んできたところで何ができる！ オレには『青い炎』など……無意味



！」

——ブワツ！

「あ、『青い炎』が!!」

さらに続けて、無数の光が大神の左腕を襲う。左腕が存在している空間を次々に切断され、左腕の形を保っていた『青い炎』はどんどん散り散りになっていく。

そして、ついに左肩付近の空間が切断され、左腕と化していた『青い炎』全てがかき消される。希望を託した存在が消えたことで、会長は思わず身を乗り出す。大神はそのまま突っ込もうとするが、すでにかき消された左腕はそのまま——

——ゴオ！

「なに!?!」

かき消されたかと思われた左腕……そこから、巨大な『青い炎』が突如として吹き出す。無力化したはずの『青い炎』の復活に反応しきれなかった『捜シ者』は、空間を足

す暇もなく大神の接近を許し……

——ゴツ！

『青い炎』で形成された左腕の拳が、炎と共にその頬へ確かに届いた。

——ボウ！

「チー！」

大神の拳の直撃を受けた『捜シ者』。『青い炎』で形成されているとはいえ、その威力は普通の拳と同等の威力であり、さらに『青い炎』が頬に勢いよく燃え移る。

『絶対空間』の特性上、当てることすら難しい『捜シ者』への攻撃をついに成功させた大神。そして、今まで閉じていたその口を静かに開き始めた。

「『正義』の名の下に犠牲が生まれる……確かにそうだ。アンタと一緒に、そういう世界を何度も見てきた……」

拳に乗せた思いを改めて言葉にするように、静かに……それでも強く語られる大神の

言葉。彼は最後まで言い切るよう、再び強く拳を握りしめる。そして……

「だが、それでも……!」

彼は真正面から『捜シ者』の顔を見て、真正面から彼の答えを否定する。

「それでも! 罪のない者たちを殺す権利は誰にも無い! 正義にも、オレにも

! テメエにもだ!」

“正義”の名の下に生まれる犠牲を“悪”とする『捜シ者』。だが、その彼も戦場で罪のない犠牲者を生んだ一人。そして、彼の野望が叶えばまた多くの犠牲が生まれる。歪んだその野望を止めるため、大神は激昂する。

「……下らねえ正論だな。そんなものが本気でまかり通るなら……この世に“悪”など最初から生まれぬ!」

——キーン!

普段の冷静さなど忘れて感情のままに放つ大神の言葉に、『捜シ者』は静かな笑みを浮かべる。それと同時に、大神に殴られた頬目掛けて『空間切断』<sup>SPACE CUTTER</sup>の光を放つ。そして……

——フツ

「な——!?!」

次の瞬間、『捜シ者』の頬を燃やしていた『青い炎』はその姿を消す。一度ついたら異能で消すことはできないはずの『青い炎』が消えたことに、会長は自分の眼を疑う。

「いくらオレを燃やしたところで、表面数ミリのところで空間を切断すればそれ以上は広がらない」

見ると、『捜シ者』の頬には大神に殴られた傷とは別に細長い傷が刻まれていた。おそらく『青い炎』が燃やしている部分の皮膚ごと空間を切断することで、火の元を断つたのだ。

数ミリ単位の皮膚を犠牲にすることで、後に全身を燃え散らすであろう『青い炎』を無効化してみせた『捜シ者』。当てることすら難しいというのに、当たったとしても決定打にならない事実を目にして、その場に絶望が――

——ボ！　ボボウ！

「！？」

絶望に染まりかけたその時、その絶望を照らすように点々と青い光が生まれる。『捜シ者』の身体から生まれた光は徐々に大きくなり、そして……

——ゴアアア!!

「燃え散りな」

巨大な業火として、『捜シ者』を包み込んだ。

「気付かなかったのか？ 殴るのと同時にアンタの体内に火種を埋め込んだ。外側表面を燃やす炎は確かに切断して無効化できるだろうが、内側からの炎は切断できないだろう？」

外側からではなく、火種と呼ばれるものを埋め込むことで身体の内側から『捜シ者』を燃え散らす『青い炎』。おそらく、『青い炎』が持つ真の力なのだろう。

かつて人見と闘った際、大神が親指の指輪を外したことがある。その時に見せた、離れた相手を燃え散らす炎、相手を追尾して燃え散らす炎……どちらも火種を操ることで可能にしたものなのかもしれない。だが、その時と今で決定的に違うのは……大神がまだ指輪をしているということである。

(指輪をしているというのに、火種まで操るとは……！ 君は、もうそこまで『青い炎』を自在に操れるようになったのか……！)

未だ親指でカタカタと揺れる指輪を見ながら、会長は大神の成長ぶりにただ驚く。明らかに修業の時とは比べ物にならないほど強くなっており、それだけ今の大神を突き動かしている覚悟が大きいということを改めて感じる。

決死の覚悟で繰り出した大神の攻撃により、ついにその身を燃え散らされていく『捜シ者』。なす術も無く、『青い炎』に包まれる中……ポツリと呟く。

「……つたく、だからお前はまだまだ甘い」  
「なに……?」

『空間切断』!!」

——ブシヤア!

「な——!?!」

不敵な笑みを浮かべて、『捜シ者』は自身の身体の一部を切断する。小さな円を描くよ

うに切断された部分から大量の血が溢れ、一目見て重症だとわかる状態になる。

だが、それと同時に……彼の身体から、『青い炎』が消えた。

「体内に火種がある……それなら身体ごと切り刻み、火種を取り除いてしまえばいいだけだ」

「そ、そこまで……そこまでの覚悟を持って、『悪』を貫くのか……」

全身の至る所から多量に出血しながらも、『捜シ者』は不敵な笑みを浮かべて君臨する。自身の身体を犠牲にしても野望を達成しようとする覚悟に、会長は畏怖の念に似た感情を抱く。

しかし、大神は違う。『捜シ者』の行動は確かに意外だったが、すぐに真剣な表情に戻る。外側からの攻撃も、内側からの攻撃も無力化された。それでも、彼は諦めない。

「……それがなんだ？ テメエはオレが燃え散らす」

彼はまだ、静かに闘志を燃やし続けていた。

## code : 64 立ち上がりし諸刃の剣

『渋谷荘』地下にて人知れず行われている、『コード：ブレイカー』と『捜シ者』たちの闘い。それぞれ激闘を繰り広げていった彼らだが、すでにその闘いも最後が近いことを誰しもが少なからず感じていた。

『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を開いたことで自身の異能を取り戻した『捜シ者』と、『青い炎』に秘められた真の力を引きだしつつある大神。この二人の全身全霊を懸けた闘いによって、全てが決しようとしていた。

「……ク、クク」

異能『絶対空間』により圧倒的な力を見せつけた『捜シ者』だったが、大神は『青い炎』を真の意味で使いこなしていくことでそれに追いついていく。現に、一度は『捜シ者』の身体を燃え散らそうと『青い炎』が彼を呑み込んだ。

だが、『捜シ者』は何の躊躇も迷いもなく、自身の身体を傷つけることでそれを無効化する。結果として深い傷を負うこととなった『捜シ者』だが、彼は深く俯きながら不気味な笑い声を静かに上げる。

「クク、面白れえことを……クハツ、言うじやねえか……」



「……………」

ぼたぼたと、音を立てて流れ落ちる血に混じって響く『捜シ者』の笑い声。自分で自分を傷つけ、拳句に笑い続ける異常な行動に、大神は警戒を最大限に高めて『捜シ者』を見据える。すると、彼から発せられる音に少しずつ変化が現れていった。

——ゴポ、ゴポゴポ

「誰が……ククク、誰を斃すって……？」

「な——!？」

突然、何かが泡立ったような音が響き渡る。それが大きくなるのと同時に、彼の身体から流れ出ていた血が消えていく。いや、血だけではない。確かに彼が自分で刻み込んだはずの傷すらも同じように消えていった。

異常な行動に続き始まった異常な光景に、会長は大きく目を見開く。しかし、彼はかつて『捜シ者』の師として共に暮らし、道を示した身。その光景の原因には一つだけ覚えがあった。今の状況を考えれば、間違いなく最悪とも言える事実が。

(ま、間違いはない……！ これは異能『細胞再生』さいぼうさいせい！ 細胞そのものを再生することで傷を治癒する異能！ 彼は……異能を二つ持っているんだ——！)

「ハーハッハッハ！ 絶望しろ、零！ 誰にもオレを斃すことはできねえ！ 絶対にな！」

生まれながらに持つているという異能……今までの異能者を見る限り、一人につき異能は一つというのが当然だと誰しも思うだろう。しかし、現実は違った。

空間を完全に支配する『絶対空間』と細胞を再生することで異常な速度で傷を治癒する『細胞再生』。攻撃を当てることすら難しい上に、当てたところで一瞬で治癒してしま……味方ならばこれ以上ないほど頼りになる組み合わせだが、敵となると絶望しか感じないような悪魔の組み合わせ。

その力をもって、勝ち誇つたような笑いと共に顔を上げる『捜シ者』。その身体のどこにも、先ほど刻まれたはずの傷は残っていないかった。改めて自身こそが絶対の頂点であることを思い知らせるような『捜シ者』の行動だったが、大神は……

「……何度も言わせんじゃねえ。それがどうした？ テメエに異能が二つあることも……すぐに傷が治ることも知っている。けどな、そんなこと関係ねえんだよ」

変わらず『捜シ者』の前に立ちはだかる大神の眼には、絶望など欠片も存在していなかった。むしろ、彼は最初からこの状況をわかっていたようだった。全てをわかった上で、彼は闘い続けていた。

そして、彼は再びその闘いを始める。

「——燃え散れ！」

——ドン！ ゴアアアア！！

「ぐおおおおお!!」

未だ左腕として燃え続ける『青い炎』で、大神は床を殴りつける。その瞬間、『捜シ者』の足元から巨大な青い火柱が上がり、再び『捜シ者』を呑み込む。殴られた時と違い全身に燃え移った『青い炎』に、『捜シ者』は切断による無効化もできず地を唸らせるような叫び声を上げる。

「大きな傷を『細胞再生』している間、テメエは極端に動きが鈍くなる……さっきのようにな。その間に新しい火種を足元に潜ませておいた。全身に燃え移った以上、切断もできないし、燃えている状態じゃ『細胞再生』をしたところで、燃え散った皮膚が治癒されるだけで『青い炎』は消えない。今度は死ぬまで痛みと恐怖を味わいな」

無意味かと思われた外側からの攻撃だが、無効化できないほどの範囲……全身を一度に攻撃することで決定打としてみせた大神。さらに、同時に『細胞再生』すら一種の足枷としてみせた。燃え散らないよう治癒したところで『青い炎』は消えないため痛みは続き、痛みから逃れようと治癒をやめれば全て燃え散っていく。文字通り、生き地獄を『捜シ者』に与えてみせたのだ。

一気に形勢逆転となった大神……だが、事態は思わぬ流れとなる。

「……下らねえな。痛みだど？ 恐怖だど？ お前の言葉、そっくりそのまま返してやるよ……それがどうした？」

『青い炎』にその身を焼かれながらも、『捜シ者』の言葉に変化はない。弱る様子も無く、ヤケになる様子も無い。強いて言うならば……

「この傷の疼きに比べれば！ オレが抱いた憎しみに比べれば！ こんな炎、心地よささえ覚えるな！」

「なに——!?!」

『細胞再生』しても消えない古傷をなぞり、嬉々とした表情を見せる『捜シ者』。当然のように『青い炎』による生き地獄を選択した『捜シ者』に、さすがの大神も予想できず目を見開く。

すると、それが隙となり『捜シ者』は大きく拳を振りかざした。

「このまま全員死んでいけ！ 『空間圧殺』<sup>PRESSE</sup>!!」

——ズンツ!!

「チィー！」

「うわああー！」

『青い炎』に身体を蝕まれる中、『捜シ者』が拳を振り下ろす。瞬間、数メートルは離れているはずの地点を中心に、周囲が円形に押し潰されて崩壊していく。その円形の範囲に巻き込まれた大神と会長も、崩壊に巻き込まれていく。まるで重力そのものが重くなったような負荷を感じながら、二人はなんとか体勢を立て直そうとする。

「ハハハ！ 『空間圧殺』<sup>PRESSER</sup> は空間をぶつけることで空間そのものが持つ圧力を直接ぶつける！ 『空間切断』<sup>SEVER</sup> 同様、防御は不可能だ！ 他の連中もろとも埋もれていけ！」

「しまっ——！ 桜小路さん！」

空間をぶつける『捜シ者』の攻撃により、中心となった地点から崩壊していく。最悪なことに、すでに『捜シ者』の攻撃で崩れかけていたこともあり、その崩壊はそのまま広範囲を巻き込んでいく。

『捜シ者』の攻撃を受けて倒れた桜たちがいる地点も例外ではなく、ビキビキと音を立てて亀裂が走っていく。そして、そのまま地中に向けて崩れていこうと——

「氣イ抜いてんじゃねえぞ、零!!」

刹那、叱るような大声と共に黒き空間が桜たちを優しく包み込んだ。

「皆のことは私が護る！ 私の『影』が皆の盾にして、この命に代えても絶対に！」

「王子！ お前、そんな傷で……！」

見ると、全身に重傷を負った王子が息を切らしながら『遮影』を展開していた。桜たちをまとめて包み込んだ『影』は絶対防御の空間となり、周囲の崩壊による影響を無効にした。

だが、見るからに限界を迎えている王子のことを考えれば、それも長くはないかもしれない。王子の身を案じる大神だったが、そんな大神を王子は真っ直ぐ睨み返した。

「余計なことに気を回してんじゃねえ！ お前はお前の決着をつけることだけに集中しろ！ 『捜シ者』を……あの人を止めるんだ！」

「王子……」

自分を含めた仲間の安否を「余計なこと」と切り捨て、王子は大神にやるべきことをやるよう諭す。自らの命を懸けて仲間を護り、同時に大神に全てを託した彼女の思いを感じた大神はグッと拳を握る。

だが、その思いを挫くように一つの影が王子に向けて落下していった。

「コソコソと逃げ出したかと思えば……。『捜シ者』の邪魔はさせない！」

「雪比奈——!？」

どうやら王子を追ってきたらしく、雪比奈は落下しながら周囲に氷を生成する。生成された氷は重力も加わって普段の倍近い勢いで落下していき、周囲に『遮影』を展開したことで隙だらけになった王子を完全に捉えていた。

しかし、忘れてはいけない。先ほどまで彼らがいた空間にいた、もう一人の存在を。

——キーン！

「私は『光』……その気になれば光速での移動も可能なのです。その私を相手にしておいて、他の者を追えると思っているんですか？」

「どこまでいっても……面倒な奴だ！」

光速で移動することで先回りしていたのか、落下した氷は平家が横から放った光線によつて粉々に砕かれる。彼らの間にある因縁に加えて徹底的に邪魔をする平家の姿に、雪比奈は今までにないほど感情……殺意を表に出して攻撃を続けた。

「う、うう……」

再開された平家と雪比奈の激闘の近く。『捜シ者』の手によつて引き起こされた崩壊で瓦礫の山と化した場所にいた会長は、腹部の傷から感じる痛みを耐えながら顔を上げる。すると、そこには二人の男が荒ぶる感情のままぶつかり合っていた。

「おおおお!!」

「いくら燃やそうと無駄だ！ オラアアア！」

全身に負った深い傷と共に闘い続ける大神と、身体を『青い炎』で燃やされたそばから治癒を続けて痛みを受け続ける『捜シ者』。両者の勢いは衰えることは無く、加わってきた王子たちの存在すらもう無視しているようだった。

そんな両者の……強いて言えば『捜シ者』の闘う姿に、会長はただただ脅威を感じていた。

「燃えたそばから再生し続けるとは、なんて異エネルギーなんだ……。身体も死ななければ心も死なない……。何が、君をここまで……」

「まったく、大した化物だ」

「ん、虹次君……」

すると、瓦礫に座って王子と同じようなボトルでウイスキーを飲む虹次が入ってくる。未だ続いている崩壊をものもしないように、彼はそのままほくそ笑むような表情で会長を見て……。静かに問いかけた。

「でも……アイツをあんな化物にしたのはどこのどいつらなんでしょうね」

「そ、それは……」

虹次の問いに対し、会長は途端に口ごもる。その態度は、明らかにその問いの答えを知っている者の反応だった。

だが、その反応が返ってくるのを虹次もわかっていたのだろう。彼は再びウイスキー



を口にしてから、ゆっくりと真実を語り始めた。

「そもそも、『エデン』には『コード：ブレイカー』とは別の異能者たちが存在する。『コード：ナンバー』などという番号ではなく、各々が『コード：ネーム』が与えられるほどの実力を持った者たちが」

「……その通りだよ。高い知性に、優れた二つの異能……正義を愛し、人命を心から思いやることができる気高き心。宇宙の理の探究者とも呼ばれる者『CODE：SEEKER』……『捜シ者』と呼ばれていた特別な存在が、彼だった」

『コード：ブレイカー』以外にも存在していたという異能者の存在。今まで大神たちが話してこなかったことを考えると、彼らはその存在すら知らないかもしれない。もつとも、かつてのエースであった人見や古くから『エデン』に所属している平家ならば知っているかもしれないが。

そんな存在に名を連ねていた一人が……まさに『捜シ者』。『コード：シーカー』という『コード：ネーム』を与えられ正義を行使した実力者。だが、そこにこそ彼が変わった理由はあった。

「周囲の状況や些細な人の動作から全てを察する、まるで人の心を読んでいるかのような洞察力。何を考えているのか、凡人には到底計り知れないほどの独善主義。おまけにあの異能だ。その高すぎるスキルは周囲に恐怖に似たものを与え……」

結果として、  
「エデン」はアイツをまだ見ぬ脅威として抹殺を企てた」

——なぜ、私が？

——私が何をした？  
何か間違っていたのか？

——これが、正義エを語る者デたちの答えなのか？

——何が正義だ

——悪クばかりだ！

——私は……いや、オレは！

——ならばオレは絶対悪となり、全ての者に復讐を！！

ただ自分の信じる正義のために行動してきた。そんな彼の持つ力を危惧し、切り捨てた「エデン」。結果として全てに復讐を誓った『捜シ者』の行動は正當なもののように思えてしまう。さらに、言ってみれば今の状況は当時の「エデン」が招いた状況とも言える。

「……そうさ、彼は何一つ悪くなかった。全ては、「エデン」が勝手に恐怖して勝手に彼を切り捨てただけ。今でも彼のロストを、『刻を遡る』姿を見ると思い出すよ……。もう二度と見る事ができない、あの純粋な笑顔を……」

『——お師匠様』

無力な自分を悔やむように、グツと拳を握りしめながら会長は呟く。瞬間、頭の中にかつて見た『捜シ者』の姿が思い浮かぶ。今となつては過去の姿……大神と瓜二つな姿で、大神とは正反對に素直で純粋な笑顔を浮かべる『捜シ者』。その優しき声と笑顔の持ち主は……すでに復讐の化身と化した。

「アイツがいくら『細胞再生』しようとの古傷を消さないのは、その憎しみを消さないためなんだとオレは思いますよ。まあ、何があつてもオレは死ぬまでアイツの『心友』ですがね。……大神の奴は、どうなんでしょうね」

消えずに残る「エデン」に抹殺されようとした時に刻まれた古傷。彼にとって憎しみの象徴とも言えるその傷は、いかに『青い炎』に包まれようとしつかりと刻まれている。

そうした強い意志を持つ『捜シ者』を『心友』とする虹次は、ウイスキーを飲みながらチラリと視線を動かす。その視線の先では、未だ全力でぶつかり続ける二人の男がいた。

「ハア—ハハハ！ 無駄だつてわからねえのか、零！ いくら燃やそうとオレは死なねえぞ！」

「関係ねえ！ テメエが死ぬまで燃やし続ける！」

——ガキツ！！

『青い炎』に燃やし続けられる者と『青い炎』を操る者……『捜シ者』と大神の拳が真正面からぶつかり合う。今までなら『絶対空間』によって難しかったぶつかり合いだが、今となつてはそれが当然となっている。全身を『青い炎』で焼かれ続けて『細胞再生』による治癒を行っているため、『捜シ者』にとつては拳による傷など気にならないのだから。

だが、『細胞再生』を持たない大神は確実にダメージを負っていく。すでに何度も殴られ、大量に出血している。しかし、それでも彼の拳の勢いは衰えない。

「おおおおお!!」

——ゴツ!

「ぬう!」

そして、彼の左腕による拳が『捜シ者』の顔を殴り抜ける。『青い炎』と化している彼の左腕に殴られたことで、痛みと熱さが『捜シ者』を襲い、その身をのけぞらせる。

だが、全身を『青い炎』で焼かれる彼にとっては、そんな痛みと熱さはあつてないよ  
うなものだった。

「この、クソがアアアア!!」

——ドゴオ!!

「ぐあー!」

お返しとばかりに、『捜シ者』の拳が大神の顔面を真正面から捉える。大神と比べてはるかに大きい体格から繰り出された拳の威力に、大神はなんとか踏ん張ろうとするが無情にも身体が吹き飛ばされる。幸いにも後方にあつた瓦礫に突っ込んだことで距離が開くことは無く、大神はすぐに立ち上がろうと——

「これで終いだ………零。

『空間激圧殺』!!  
DEEP PRESSER

「——ッ!!」

刹那、『捜シ者』の手から圧縮された空間が放たれ、大神の身体を瓦礫ごと押し潰した。

「……………」

瓦礫の下、血だまりと共に顔を床に伏せる大神。立ち上がろうとする気配は……………まるでない。

——オオオオオオオオオオオオ……………

『捜シ者』の身体を燃やしていた『青い炎』が……………消えた。

「れ、零イイイイ!!」

「大神君——!?!」

「……やっと終わったか」

全てを見届けていた王子の悲痛な叫びにより、離れた場所で激闘を繰り広げていた平家と雪比奈も戦いの結末を知る。まさかの結末に平家は大きく目を見開き、雪比奈はフツと笑みをこぼす。

『DEEP PRESSER空間激圧殺』は空間を何重にも凝縮することで負荷を数倍にして放つ技だ。その威力は『PRESSER空間圧殺』とは比べ物にならない。あれの直撃を受けた以上、もう終わりだ。今まで闘いのために出していた両手をゆつくりとポケットにしまいながら、雪比奈は大神の敗北を確信する。いや、正確に言えば敗北ではない。もつと重く、信じられないような事実……

「オレの身体を燃やしていた『青い炎』が消える……それが起こるのはアイツ自身が消



「そうとするか、維持できなくなった時。そう、今のように……死ぬことだな」

「——」  
死を告げる『捜シ者』の言葉に、大神は何も答えない。ピクリとも動かず、ただ自分の身体から流れた血だまりに顔を伏せている。

「——ゴオオオオ……」

ただ静かに、すっかり弱々しくなった左腕の『青い炎』が揺らめくだけだった。その指先すら、少しも動く様子がない。

「さて、後はその忌まわしい炎を消して……確実に止めを刺しておくか」

その左腕を見据えて、『捜シ者』がゆつくりと大神に歩み寄る。最後は自分の手で決着をつけようと、高々と手刀を振り上げる。その眼に迷いはなく、勝ち誇った笑みを浮かべて『捜シ者』は別れの言葉を告げた。

「——あばよ、零」

『捜シ者』の手刀が、左腕を切り落とそうと左肩に向けて振り下ろされた——

——ゴキヤ!!

「がっ!!」

瞬間、『捜シ者』の背後から全身の骨を砕くような衝撃が走る。完全に不意を突かれた一撃に、『捜シ者』は思わず膝を突いた。あまりに突然のことに、王子は周囲を見渡す。

「な!? 今の、いったい誰が——」

「……………」

「優!?!」

『捜シ者』のはるか後方……何かを投げた体勢のまま立つ優の姿に、王子の眼が大きく見開かれた。

「……いくら一瞬で避けられるといっても、攻撃に気付かなければ避けられない。だからオレが投げたただの瓦礫でも当たる」

「夜原、優……！」

「大神に意識を向けすぎたな……『捜シ者』」

「最後の抵抗のつもりか……？ 随分とくだらないことをするじゃねえか……」

全身に広がったダメージを感じながら、『捜シ者』は振り向いてギロリと優を睨む。それに対し、優は掌についた瓦礫の欠片を払いながら、チラリと大神を見る。

「……悪いな、大神」

ボソリと、誰にも聞こえないほど小さな声で優は大神に謝罪する。それがどのような意味を持つのか、それは優にしかわからない。だが、その謝罪から覚悟を決めたように、優はゆつくりとその場で構える。

「来い、『捜シ者』。大神に代わって……オレがお前を殺す」

## code : 65 虚無を貫き、紅きに染まる

「来い、『捜シ者』。大神に代わって……オレがお前を殺す」

繰り広げられた激闘の末、大神を完全に地に伏せさせた『捜シ者』。だが、新たに一人の男がその前に立ちはだかる。

無数とも言える数の異能者と一度に闘い、武器も砕かれて重傷を負った……夜原 優が。

「バカ野郎、優！ そんなボロボロで、さっきまで倒れてた奴が何言ってやがる！ 死ぬつもりか！」

「そうだ！ 第一、君の異能と『捜シ者』の異能じゃ相性が悪すぎる！ 闘いを挑むのは無謀だ！」

すると、闘うことを宣言された『捜シ者』よりも先に、見守る立場にいる王子と会長が顔面蒼白といった様子で声を張り上げる。彼らには、この先に待つ結果がわかりきっていた。

今の優の身体は、はつきり言って一目見ただけで重傷だとわかるレベルだった。一呼吸する度に肩が大きく動き、よく見ると立っているだけで汗が噴き出している。さら

に、着ているシャツの所々に血が滲んでおり、白いシャツが徐々に紅く染まっていた。誰が見ても思うだろう……彼は、闘える状態ではない。

そして、仮に全快状態としても彼が『捜シ者』に挑むのは分が悪すぎた。優の闘い方は『脳』によって身体能力を底上げした上で行う格闘戦がメイン。人間とは思えぬ力で繰り出す一撃一撃は当たれば非常に有効となる。だが、『捜シ者』は『絶対空間』で距離すら自在に操り、『細胞再生』であらゆるダメージを治癒することができる。リーチの外から攻撃されたり背後を取られれば、どんなに異常な力だろうと意味は無い。闘ったところで優の勝利は絶望的だった。

「ふっ……中々に威勢がいいな。だが、その二人の言う通りだ。お前は……いや、誰もオレには勝てないんだからな。所詮は無駄な抵抗——」

「黙れ」

王子と会長の言葉に加えて、『捜シ者』から絶対の自信に満ちた声が優にかけられる。「無駄な抵抗」と切り捨てて『捜シ者』の言葉だったが、優は一言でその言葉を遮った。そして、明らかな殺意を込めて静かに眼を細めた。

「オレは『コード：ブレイカー』で、お前は裁くべき『悪』……。どんなに傷だらけだろうと、無駄な抵抗だとしても関係ない。オレは『コード：ブレイカー』としてやるべきことやる……。それだけだ。それに——」

スツ、と視線を動かして『遮影』の中で倒れている桜たちを見る。先ほどまでの自分と同じ状態の彼らの姿を見て、優は再び殺気に満ちた眼を『捜シ者』へと向け――

「『悪』に殺されるのを待つくらいなら、闘って無様に死んだ方がマシだ……!!」

「優……」

殺意に混じって、優の言葉に込められていたのは……嫌悪。『コード・ブレイカー』としてか、それとも自身の信念からか。彼は同じ死だとしても、無抵抗のまま殺されるのではなく闘って死ぬことを選んだ。たとえ、その死が圧倒的力の差による無様なものだったとしても。殺意と嫌悪が込められた優の言葉に、説得しようとした王子も思わず言葉を失う。

「……平家さん」

「……………」

すると、優は視線を『捜シ者』に向けたまま平家に声をかける。大神が斃れたことで雪比奈が手を止めたため、彼も闘つてはいない。だが、平家は返事をせずに黙つて優の言葉を聞こうとしている。そんな平家の意図を察したのか、優は返事がないまま言葉を続ける。

「お手数をおかけしますが、オレが死んだら……アイツには包み隠さず言つてください。そして……『悪かった』と伝えてください」

「……わかりました」

(アイツ……?)

殺意と嫌悪がすっかり抜けた、遺言のような優の言葉。「アイツ」に向けられたその言葉は平家は静かに聞き入れ、ゆっくりと頷く。優の口から出た「アイツ」が誰を指すのか、心当たりがない王子は小さく首を傾げる。だが、その疑問を上塗りするように彼女の中で不安が大きく募る。

そして、王子は「アイツ」に対する疑問も忘れ、不安を言葉にして問いかけた。

「優……。お前、身体は……」

「……なんだ、知ってたのか。まあ、今となつてはどうでもいいけどな」



「大丈夫……なのかな？ その傷じや、もしかしてもう……」

「今のところは問題ない。今まで死ぬ気で鍛えてきた身体だ……そう簡単に壊れはしないさ」

あと一度でも壊れれば再起不能……優の身体が抱える大きな爆弾についての不安を、王子は口ごもりながら優に問いかける。すると、優は首を少しだけ動かして王子の方を向き、フツと微笑んでみせた。まるで少しでも安心させるように……静かに、優しく。

「ッ……」

その顔を見た瞬間、王子は完全に言葉を失う。もう彼は止まらない。何を言おうと、彼は全ての覚悟を決めている。その穏やかな決意の表情を、王子はそれ以上見ていられず顔を伏せる。

だから、見えなかった。

「安心しろ」

その顔に、大きな影が落ちたことに。

「二目でわかるくらい、オレが壊し尽してやる——！」

——ドガア!!

「優?！」

「チツ——！」

優との間の空間を消して一気に距離を詰めた『捜シ者』。大きく振り上げた拳を躊躇なく振り下ろし、瓦礫や床が壊れたことで粉塵が舞い上がる。一瞬のうちに起こった出来事に王子は優の安否を案ずるが、粉塵の中から舌打ちと共に優が飛び出す。

——  
 なんとかか寸でのところで反応できたらしく、その身体に新たな傷はなかった。しかし

「死ね」

「な——」

——ゴシヤア!!

「優!！」

「優君!！」

飛び出したことで距離をとったはずの優だったが、次の瞬間には目の前に拳を振りかざした『捜シ者』の姿があつた。連続で空間を消すことで追撃の手を緩めず、完全に意

表を突かれた優は防御する暇もなく拳の直撃を受ける。

勢いよく吹き飛ばす優の身体を見て、王子と会長は大きく目を見開く。だが、優もすぐに次の行動へと移る。

——ザザア！

『東脳・反転』……視力』

——パアン！ パアン！

吹き飛ばされながらも空中で体勢を立て直し、手と両足を床に擦り付けながらその勢いを殺す。そうして止まったことで身体が安定した瞬間、『東脳・反転』で視力を強化しながら内ポケットから一丁の拳銃を取り出して撃つ。

『斬空刀』を失ったことで唯一の武器となった拳銃は、真つ直ぐに弾を発射して目標である『捜シ者』の身体に穴を開けようと迫る。

『空間切断』

——キーン！

だが、『捜シ者』は慌てる様子も無く、空間ごと弾を切断することで無力化する。滑らかな切り口で半分に切断された弾はそのままポトリ、と床に落ちる。

「くそ！ やっぱりダメか……！」

「たかが拳銃……当たったところですぐに『細胞再生』で治癒できる。結局は無駄だ。

さて……そろそろ両手か両足を使い物にならなくしてやるか」

唯一の武器であり、唯一の遠距離攻撃だった拳銃の無力化。予想していたこととはいえ、ここまで余裕の態度でやられると心中穏やかではない。それに対し、『捜シ者』はゆつくりと片手を前に出し、その延長線上に優を捉える。

ニヤリと口角を上げ、感じる力のままそれを撃ち出した。

DEEP PRESSURE  
『空間激圧殺』！』

「マズイ！ 避ける、優！」

「……！」

大神が最後に受けた、何重にも圧縮された空間が優に向かって撃ち出される。その威力は、直撃を受けた今の大神の状態が物語っている。危機感を感じた王子が力の限り避けるよう叫ぶが、優は座ったまま動かない。ただジツと前だけを見て、目を凝らして見続ける。そして――

——バツ！

大きくその場から跳び上がり、空中から『捜シ者』を見下ろす。その次の瞬間……  
——ドオン！

先ほどまで優がいた場所の後方にあつた瓦礫が、音を立てて跡形も無く潰れた。

「ほう、避けたか」

トン、と小さな音を立てて優が着地すると、『捜シ者』は面白そうにその姿を眺める。優はさほど気にする様子も無く、背後にある完全に潰れた瓦礫を指差しながら立ち上がった。

「その『空間激圧殺』<sup>DEEP PRESSER</sup>とかいう技……何重にも空間を凝縮されたせいで、撃ち出されると微妙にだが通り道の空間が円形に歪む。それをよく見れば、大きさも軌道もわかるから避けられる。威力は確かに高いかもしれないが、避けにくさなら『空間圧殺』<sup>PRESSER</sup>とやらの方が勝つてたな」

「今さつき見ただけでそこまで見破ったか……面白い。だが、見破ったところでオレには勝てねえ！」

実際に目の当たりにしたのは今のが初めてだというのに、その特徴を見破ってみせた優。見事に言い当てられた『捜シ者』は慌てるどころか、面白そうに笑みを浮かべる。そして、笑みを浮かべたまま優へと向かっていった。

「オラア！」

「ハアツ！」

『捜シ者』が骨をも砕く勢いで拳を振るう。だが、身体能力を『脳』で強化した優はしっかりとそれに反応して避けてみせる。やはり単純な格闘戦では彼は圧倒的に有利だ。

「うおおお！」

「どこ見ていやがる！ そんな拳モンが当たるか！」

しかし、優が繰り出す鋭く重い一撃は『捜シ者』にかすりもしない。普通ならば完全に捉えている間合いやタイミングでも、『絶対空間』で空間を足されることで二人の距離は一瞬にして距離が生まれる。それにより、優の攻撃は全て空振りとなって空を切る。そして、そこで生まれた隙を突くように、今度は空間を消して次の攻撃を行う『捜シ者』。遠距離攻撃も無効化され、得意の格闘戦すら圧倒的に不利な状況。最初に王子と会長が言ったように、優が『捜シ者』に勝つことは絶望的だった。

「消え逝け！」

「そうはいきません」

一方、優と『捜シ者』から少し離れたところで、雪比奈と平家の闘いも続いていた。大神が斃れたところで一度は終わった二人の闘いだが、優との闘いが始まったところで二人の闘いも再開したのだ。もつとも、雪比奈が一方的に攻撃した結果だが。

「まったく、あのまま終わるかと思いきや再び始めるとは。そこまで私と闘いたいですか」

「オレは闘いたいんじゃない……お前を殺したいだけだ。『捜シ者』が闘っている以上、まだ闘いは終わっていない。だから、オレはお前を殺すために闘う！」

「相変わらず……熱心な方ですね！」

——パァン！

『水態』によって生み出された氷と『光』のムチが真正面からぶつかり、大きな音を立てる。冗談ではない、本気の殺意を平家にぶつける雪比奈に対し、平家はのらりくらりと彼の攻撃をいなしてみせる。



完全に拮抗した実力の二人の闘いは周囲の瓦礫ごと破壊しながら続いてく。だが、ふとした瞬間にそれは一時的に止まる。

——スパアン！

空中に現れた巨大な氷を、平家は『光』のムチで縛り上げてからバラバラにしてみせる。人を切れば出血すらさせないほど滑らかな切り口を誇る『光』のムチにより、巨大な氷は一瞬で小さな氷塊へと化す。パラパラと欠片となった氷が舞う中、雪比奈がポツリと呟く。

「……………しかし、『コード：07』も馬鹿な奴だ。あの状況で『捜シ者』に闘いを挑んだところで、死期を早めるだけ。勝てもしない相手に手負いの状態で挑むなど、愚の骨頂だ」

「……………」

「殺されるのを待つくらいなら闘って死ぬなどと言っていたが……………どうだかな。奴は、大神に代わって『捜シ者』を本気で討とうとしている。まるで……………なにか勝てる策でもあるかのように」

雪比奈の怪しむような言葉に一瞬だけ平家がピクリと反応する。確かに、闘いそのものを掌握してしまうような異能を持つ相手に、手負いの身体で挑むというのは死に行きだけ。だが、優はそれでも闘いを挑み、今まさに立ち向かっている。無謀とも思える

行動だが、それは彼の信念ゆえの行動なのだろう。

しかし、彼の表情は何かを狙っているようだった。目を見張り、どこかにあるであろう隙を見つけては攻撃を続ける。自身に振りかかるであろう死を覚悟した上での行動にしては、どこかに『勝機』を感じているようで、それが雪比奈には一つの違和感として感じられた。

そして、その違和感の正体を平家は知っている。

（確証はない……。それでも、確かに優君の『あの力』ならば事態が好転するかもしれない。ですが……）

優の中にあるであろう『勝機』について、自信に満ちた表情で平家は思案する。その『勝機』を、自身も『勝機』として疑っていないようだった。

だが、平家は視線を動かし、未だ拳で『捜シ者』と闘う優を見る。そして、その『勝機』が現実になることはあり得ないと確信する。

（ここには目撃者がいすぎ……。『捜シ者』と一対一ならば使っていたかもしれないが、この数では隠し通せないでしょう。）

そしてなにより、彼自身が『あの力』を嫌悪している……。使われることは、決してあり得ない……)

『捜シ者』を相手にしたとしても『勝機』を感じさせるほどの力を持ち、優自身が嫌悪しているという『あの力』。『転移』により集まった無数の異能者たちを斃した際に使ったが、その時はそれだけの覚悟を決めたということなのだろうか。

どちらにせよ、その『勝機』が表に出る可能性は……万に一つも無かった。

「ガツ——！」

たとえ、そのせいで死ぬことになったとしても。

「……結局、お前もその程度か。自分から挑んできた時は面白いと思っただが、もう飽きた。お望み通りに殺してやる」

——ゴシヤア!

「ぐ——!」

『捜シ者』に胸倉を掴まれ、優の身体は地面から離れる。しかし、『捜シ者』がつまらなそうに呟くと同時に勢いよく地面に叩きつけられる。容赦なく、本気の力でやつていることがわかるほどの音が響き渡り、思わず周囲も息を呑む。

「ほら! 死ね! 死ね! 死ねえ!!」

——ガン! ドシヤ! バキ!

「ゆ、優君……!」

さらに、『捜シ者』の容赦ない行動は続く。何度も、何度も優の身体を浮かしては地面に叩きつけていく。連続した強烈な痛みに、優は声も上げられず痛みに耐える。あまりにも一方的で残酷な光景に、会長も思わず目をそむけたくなる。

そして、それは気まぐれのように突然終わる。

——ブン!

「ッ——!」

飽きた玩具を捨てるかのように、『捜シ者』は優を投げ捨てる。今度は体勢を立て直すこともできず、優は受け身も取れないまま身体全体を地面に擦り付ける。

「あ、ぐ……! ハア、ハア……!」

勢いが弱まり、ようやく優の身体が止まる。すると、優はまだ闘う意思があるかのようにつくりと立ち上がる。どこから出血したのかもわからないほどの傷を負い、息も荒れるに荒れている。そこまでして彼は、無抵抗の死を受け入れようとしなない。

あくまで彼は闘い続けようと、再び拳を――

――ズン!

「飽きたつつつてんだ……さっさと死ね」

孔が、開いた。

構えた拳の合間を縫うように、その身体の中央に。

そこにあつた皮膚を、肉を裂き、向こう側にある空間まで手を伸ばして。

『捜シ者』の手刀が、優の腹部を完全に貫いた。

「優ウウウウ!!」

目の前で起きた残忍で非情な出来事に、王子は悲痛な叫びを上げる。嘘だと信じなかった。だが、仲間の身体に開いた孔から流れる夥しいほどの血が、自分の胸を絞め上げるような息苦しさ……全て現実だと物語っていた。

「……やれやれ、あっけない終わり方だ」

腹部を貫かれた優の姿を見て、雪比奈は振り上げていた手を静かに下ろす。そして、ひどく呆れたように深いため息をつく。その深いため息と「あっけない」と切り捨てる言動は、明らかに優に対して向けられていた。雪比奈にしてみれば、優の行動は結局「無駄」としか思えなかった。

(優君……それが、あなたの答えですか)

それに対し、平家はスツと細めた厳しい視線で優を見る。優の中にある『勝機』が出る可能性はないとわかつてはいたものの、あるはずの『勝機』を出さずに斃れるというのはジャッジとして見過ごせないのかもしれない。

だが、それが彼の信念に似た感情のせいだと知っている。あらゆる事情を呑み込んで、平家はグツと拳を握りしめた。

「——ゴフツ！」

逆流するような勢いでせり上がってきた血が喉を通り、優は思わず咳き込んで口外へと逃がす。普通は通らないものが通ったせいか、痛みを感じるほどの熱さを喉に感じる。だが、それ以上に腹部から感じる焼けるような痛みが全身を襲う。

「後悔しているか？ オレに闘いを挑んだことを。あのまま寝ていれば楽に死ねた……そう思っているんだろ？」

腹部を貫いたまま、『捜シ者』は優に話しかける。人の身体を素手で貫いて起きながら、その顔に笑みを浮かべながら話している『捜シ者』の姿は異常そのものだった。

そんな『捜シ者』の問いがなんとか耳に届き、優はかすみ始めた視界でその顔を見上げた。

「……………」

だが、そこにあるはずの『捜シ者』の顔はほとんど見えない。どんどん視界がかすんでいき、暗く染まっていく。

じわりと、浸食するように広がっていく闇。そして、視界の全てがその闇に包まれ――



——カッ!!

「ッ!?!」

「な——!?!」

「これ、は——!」

刹那、『捜シ者』の身体が硬直する。腕一本……筋肉一つすら動かせないように、ピクリとも動かずに固まる。いや、『捜シ者』だけではない。王子も、会長も……虹次までもが、その動きを完全に封じられていた。

だが、それは彼らが意識して行っていることではない。それは、驚きに染まった彼らの表情が語っていた。

(なんだ、これは……!?! 今、オレの身体を支配しているこの感情は……!)

自身の身体を無意識に硬直させる、『捜シ者』の内なる感情。彼は、その感情の正体についてはすぐに予想がついた。

しかし、認められるはずがなかった。なぜなら、その感情は彼にとつて最も遠いものであり、彼はその感情を与える側の人間だったから。そう、その感情は――

――  
“恐怖”

(オレが、 “恐怖” しているだと……!?! 馬鹿な! このオレが何に……!)

じわじわと溢れてくる汗すら拭えず、全身を支配する「恐怖」に抗おうとする『捜シ者』。それでも、彼の身体は相変わらず1mmも動かない。

(いや……さっきのアレだ！ あの……殺気！)

数秒前に感じた人間離れた殺気。まるで巨大な眼に睨まれているような感覚に陥り、全身の筋肉が強張った。蛇に睨まれた蛙……自分が蛙になったと思えてしまうほどの殺気こそ原因と理解はしたが、それでも疑問は消えない。

(誰だ……!?)

(誰が、こんな化物みたいな殺気を……!)

理由が殺気ということはこの際どうでもいい。重要なのは、あの『捜シ者』すら蛙にしてしまうほど人間離れた殺気を放つのは誰なのか、ということだった。『捜シ者』も、王子も、会長も、虹次も……動きを封じられた全員がその殺気の正体を確かめようとした。

だが、それがわかるのに長い時間はかからなかった。なぜなら……

——グツ

「ッ!!」

誰も動けない中、たった一人だけ静かに動いた。静かに……自身の身体を貫いている『捜シ者』の腕を掴んだ。

「…………どう、した？ 随分と、具合が悪そう…………だな」

「夜原、優…………!？」

ニヤリ、とあざ笑うような笑みを浮かべる優。腹部を貫かれ、今にも斃れそうな重傷を負っている彼…………あの人間離れした殺気が放たれてなお動く彼こそが、殺気の正体だった。

しかし、触れただけで斃れそうなほど弱った彼のどこにそんな力があるのか…………あまりに不似合いな現実には、誰もが目を疑った。

「テメエ…………どこに、あんな力が…………」

「…………何の、ことだ？」

だが、当の優は心当たりがないようだった。貫かれたことで記憶が混同しているのか、無意識のうちにやっていたのか…………真実はわからないが、優は構わず次の行動へと移った。

「まあ…………このままお前の腕をへし折るぐらいの力は、残ってるがな…………!」

「この…………死にぞこないが!」

『捜シ者』の腕を掴んだまま、ギリギリと力を込める優。重傷とはいえ、彼の力は『脳』によって強化されている。相手が『捜シ者』といえど、腕一本折るくらいなんてことはない。

すると、殺気を受けてから少し経ったからか、殺気の本体に拍子抜けしたからか……それとも純粹に彼の力か。殺気によって硬直していた身体を動かし始める。優の身体を貫き、折られようとしている腕を優の身体から引き抜こうと——

——グツ！

「な!? ぬ、抜けねえ!」

しかし、いくら力を込めてもその腕が抜けることはなかった。まだ硬直が続いているわけではない。掴む力が強いからかと考えたが、違う。正確には……腕を掴んでいる力以上の力が腕を捕えている。

そして、その腕を捕えているモノを見て、『捜シ者』は驚愕する。

(コ、コイツ……！ 筋肉を収縮させて腕を捕まえてやがる!!)

『捜シ者』の手刀が貫いた優の腹部……その周囲の筋肉が収縮し、万力のように『捜シ者』の腕を捕えていた。異常な手段のためどれほどの力かはわからないが、腹部から大量に流れていた血が今ではすっかり止まっている。つまり、筋肉が『捜シ者』の腕と零距离で密着しているということだ。

そして、その零距离という状態が『捜シ者』の次の手を完全に封じていた。

(クソが……！ この状態じゃ、『絶対空間』を使っても離れられねえ……！)

そもそも、『絶対空間』による移動は『捜シ者』と対象の間に空間を入れたり消したり

することで可能にしている。つまり、移動というよりはテレポートに近い。一見するとメリツトしかない方法だが、実は大きなデメリットが存在する。

それは、触れているモノも一緒に移動させてしまうということ。

もし味方を窮地から救うのであれば、これ以上ないほどの手段だろう。しかし、仮に爆弾が身体に零距离で密着しているとしよう。頭の中では身体と爆弾の間に空間を足そうと考えていても、その間は零であり入る余地がない。ただの計算ならば、零に足すことはできる。

だが、現実とは違う。いくら形のない空間だろうと、零距离で密着している所に何かを<sup>足す</sup>入れることはできない。

つまり、優の腹部と『捜シ者』の腕が零距离で密着している以上、二人の間に空間を足しても意味は無い。もしかしたら、足した瞬間に『捜シ者』の身体から腕が引き千切れるかもしれない。そうなったとしても『細胞再生』で治癒できるが、腕一本を治癒するととなると時間がかかるだろう。

『捜シ者』の移動手段は、完全に封じられた。

「……………どうやら、お得意の瞬間移動は使えない、ようだな。上手くいくか、自信はなかったが……………結果オーライ、つてところか……………」

「デメエ……………！ そんな状態で、確かかわからねえ方法のために……………！」

一向に移動しようとしないう『捜シ者』を見て、『絶対空間』を封じたことを確信した優。弱々しくなった声になりながらも、ニヤリと笑みを浮かべる。だが、彼にとってこの行動は一つの賭けだった。それも圧倒的に分が悪い賭け。

それでも彼は全てを賭けた。そして……………彼は賭けに勝った。

「……………壊し尽す？ 上等、だ。オレの身体一つ、命一つでお前を斃せるなら……………」

そんなもの！ 喜んでテメエにくれてやる!!」

——バギイ!!

全てを賭けた男の、全てを込めた一撃が今……『捜シ者』の顔面を打ち抜いた。

「ぐおおおおお!!」

拳に力を込めて緩んだせいか、その威力のせいか。『捜シ者』の腕は優の腹部から引き抜かれ、その巨体は瓦礫にぶつかりながら地に擦り付けられた。

「クソが!!」

だが、なんとか体勢を立て直す『捜シ者』。すぐに反撃に転じようと、『絶対空間』で優との距離を——

——グラリ

「!?!」

瞬間、『捜シ者』の視界が大きく揺れる。さらに、意識を持っていかれそうなほどの強い吐き気に襲われる。



そして、それは闘いでは大きな隙となる。

——ガッ！

「ぐっ！」

強化された身体能力で距離を詰めてきた優の蹴りが『捜シ者』の顔を蹴り上げる。体格の差をもものもしないその威力に、『捜シ者』の身体は完全に浮き上がり……

——ズン!!

「ゴハッ!!」

空中で無防備な姿を晒し、お返しとばかりに腹部に向かって渾身の拳が放たれる。足場のない空中では堪えることもできず、『捜シ者』は背後にある瓦礫の山に頭から突っ込んでいった。

「いくらお前が強くても……身体の仕事みは人間だ。あれだけの力で顔を殴られれば、当然脳が派手に揺れる。脳はとてつもなくデリケートだから、揺れただけでも身体に異常をきたす。そして……」

「があああああ!!」

腹部に孔を開けながらも、凜と立ち続ける優。『捜シ者』を襲った異常について簡単に説明するが、その背後から『捜シ者』が激昂しながら襲い掛かる。瓦礫に突っ込んでいく、『絶対空間』で背後まで移動したのだろう。背後は人にとって死角。目で見ることが

できない範囲のため、それ以外の感覚に頼るしかない場所。だが……

——ガシ！

「なにイ!?!」

「随分と頭に血が上っているようだな。力が込められているだけで、見切るのは簡単な攻撃だ。それでなくとも、お前は相手が立っている時は背後を取ってから攻撃することが多い。……もう、その攻撃は通じない!!」

——ゴツ！

再び、優の拳が『捜シ者』を吹き飛ばす。ここまで来ると、もう奇跡ではない。彼の洞察力で『捜シ者』の行動パターンを見切り、『脳』で人間の限界まで強化された力を発揮している。そのきっかけとして払った代償は大きかったが、間違いなく今の優は『捜シ者』と互角……いや、互角以上の闘いをしていた。

その優の闘いぶりに、周囲で見ていた者たちも驚きを隠せず驚嘆の声を漏らす。

「優君……。あなたは、『あの力』に頼らなくてもここまで……」

「バカ野郎が……。滅茶苦茶やりやがって……。!」

「これが、『コード：07』……か」

普段はそこまで表立って動こうとはしない。闘いにおいても、『あの力』という秘められた力を誰の目にも触れないように一歩引く。それでも全てを懸けるべき時が来れば、

その時に懸けられる全てを懸けて闘う。たとえば、それが限界を迎えた身体や自身の命だろうと。

それが『コード：07』……夜原 優という男の闘いだった。

「ハア……！ ハア……！ この、野郎……！」

動きを見切られ、続けてダメージを負った『捜シ者』。『細胞再生』で治癒できるとしても、疲労感までは消せない。肩を激しく動かしながら息をしつつ、ギロリと優を睨みつける。そこから放たれる殺気をビリビリと感じながら、優はゆっくりと構えをとる。

「『細胞再生』……厄介だな。それでも、異能は使い続ければ限界が来る。オレとお前……どつちが先に限界が来るかな」

「……舐めんじや、ねえぞ。このガキがアアアアア!!」

「——うおおおお!!」

『絶対空間』ではない、自身の足で跳躍して『捜シ者』が距離を詰めてくる。優は構えをとりつつ、その動き全てを注視する。そして、次の攻撃を予想してから彼も踏み出していく。互いに拳を振りかざし、目の前の敵に向かって力のままに——

——ゴツ!!

「ツ!?!」

刹那、優の身体が真横に吹き飛ぶ。殴られた衝撃が痛みとなり駆け巡り、そのまま派手に倒れる。そして、『捜シ者』の拳も空を切る。

「ツ、ぐ……!?! なんて、お前が……!?!」

だが、優が殴られたこと自体は大きな問題ではない。問題なのは……それをやった人物が彼だったということ。

痛む頬を押さええながら、優は自分を殴った相手の名を呼ぶ。

「答えろよ、大神……！」

「……………」

優を殴った大神は、目を伏せたまま何も答えない。代わりにとばかりに、左腕の『青い炎』が音を立てて揺らめいていた。

## code:66 「悪には悪を」

夢を見た

幼い頃の、懐かしい夢を

そこでも彼は、勝ち誇ったように笑っていた

「ハアーハツハツハ！」

悪クズ

共が！

オレを斃して、コイツの左腕を奪うんじゃない

かったのか!？」

「……………」

幼い大神と『捜シ者』……二人の旅には常に敵という第三者の存在があった。多くは大神が持つ『コード：エンペラー』の左腕を狙った者たちだが、中には『捜シ者』を斃して名を上げようという者もいた。今回の者たちは前者。十分すぎるほどの武装をし、すでに人がいなくなつた廃墟で彼らを襲い、左腕を奪おうとした。

「うぐ……………ば、化物が……………」

「おっと、まだ生きてたか。めんどくせえ……………」

——グシャ！

「がっ——!」

しかし、結果は悲惨なものだった。可能な限りの武装と人数を集め、その気になれば村一つ全滅させることはできるほどの規模になつた。それでも、『捜シ者』という一人の人間に挑むには足りなかつた。どんな武器を使おうと、何人で襲いかかろうと……………彼はポケットから手を出すこともなく全滅させた。

そして、生き残つていようと慈悲はない。生きていれば、なんの容赦もなく止めを刺す。それが『捜シ者』という男のやり方だった。

「……………」

そんなやり方を何十回と間近で見てきた大神は、人の命が途切れる瞬間を目の前にしても何の反応もない。同じ年頃の子どもならば恐怖で動けなくなるような光景にもかかわらず、彼は眉一つ動かさずに消えていく命を見送った。

「おい」

「？」

すると、沈黙を続けていた大神に向かつて『捜シ者』が声をかけた。突然のことに大神は首を傾げ、ジツと『捜シ者』を見上げる。だが、『捜シ者』は声をかけておきながら視線を合わせようとはせず、そっぽを向いたまま続けた。

「お前から見てこいつらはどうだ？ 気の毒に見えるか？ それとも自業自得か？」

……オレから言わせれば完全に自業自得だ。力の差も理解せず、ただ自分たちの欲のために動いた結果こうなった。そもそも、殺す気がかかってきた以上、自分が殺されるのも当然だ」

「……………」

返答こそしないものの、大神は『捜シ者』の言葉を否定する気は無かった。殺す気で向かっていくのなら、逆に殺されてしまうのも十分にあり得る。むしろ、正当防衛として成り立つようなものだ。（『捜シ者』がそう考えて行動したかは別だが）

自分の欲のためだけに武器を取った者たちの末路……そう考えると、『捜シ者』の言葉



は真理であり、桜のように命を無条件で大切にする者でもない限り真正面から反対するのは難しいだろう。

「さて、そろそろ行くぞ。何度襲われようが関係ないが、居座り続ければまた同じような連中が来る。雑魚の相手など面倒なだけだ」

そう言つて、『捜シ者』は大神に背を向けて歩き出す。結局、彼がどんな意図をもつて大神に先ほどの言葉を投げかけたのか明かされないまま。

後を追おうと歩きだした大神。だが、それを見つけた瞬間、その足を止めた。

「う……」

斃れた者たちの中の一人、中年の男がももぞと動いていた。その位置は背を向けている『捜シ者』からは死角となつており、気付かれていない。このままいけば、彼は幸運にも生き残ることができる。

「……………」

大神はチラリと、歩き続ける『捜シ者』を見る。振り返る気配はない。余計な物音を立てなければ、このまま気付かれないかもしれない。

「……………」

すると、大神はなるべく足音を立てないように注意しながら、男の傍へと歩み寄つた。そして、手錠で繋がれた両手で男の背中へと手を伸ばす。苦しそうに呻く男の姿を見

て、大神は少しでも彼を楽にしてやろうと考えたのだ。そのまま背中をさすろうと、ゆっくりと手を――

――ピン

小さな、栓を抜いたような音が大神の耳に届く。だが、その音が何なのか理解するよりも先に、大神の視界は閃光に包まれた。

――ドオン!!

一帯を包み込むような閃光の後に、凄まじい爆音がビリビリと空気を震わせる。それ

らが止んだかと思うと、大量の煙が視界を封じ、むせ返るような火薬の臭いが充満する。栓を抜いた音と、その後起こった爆発。言葉で説明するよりも、この状況自体が全てを物語っていた。

男が使ったのは、手榴弾。死ぬなら道連れに……とでも考えたのだろう。それとも、最初からそのつもりだったか……今ではわからない。どちらにしろ、男は限界に近い意識だったのだろう。誰か近づいてくることだけ感じ、それを『捜シ者』と信じて自爆した。

しかし、実際に彼の元に歩み寄ったのは大神。そして、爆発に巻き込まれたのも……大神である。最後の自爆すら標的には届かず、代わりに幼い大神がその犠牲に――

「――チツ、下らねえ。悪<sup>クズ</sup>の分際で余計なことしやがって」  
「……………」

大神は……無傷だった。あの至近距離で爆発を受けたというのに、身に纏ったものが焼け焦げたような跡もない。彼が受けるはずだった衝撃や痛みは……全て『捜シ者』が引き受けており、彼の身体の実に半分ほどの皮膚が弾け、大きな火傷まで負っていた。

『絶対空間』による移動で大神と男の間に一瞬で移動した『捜シ者』は、大神を少しでも下からせようと手で押しつけた。もっと余裕があれば大神ごと移動できたかもしれないが、どうやらそこまでは間に合わなかったらしい。結果として、大神を護るにはこ

れが最善の方法となった。

「つたく、このバカが！ 一番余計なことしてんのはテメエだ！ 悪<sup>クズ</sup>の心配する暇があつたら、オレの役に立つ努力をしやがれ！」

ドン、と苛立ったように『捜シ者』は大神を押す。傷を負つてすぐのため力が入らないのか、いつもなら倒れてしまう大神もなんとか持ちこたえていた。それがさらに気に喰わないのか、『捜シ者』は大きく舌打ちしながら大神に背を向けた。

「チツ、クソが！ ……『細胞再生』」

——ゴポ、ゴポ

背を向けたまま、それ以上は何もしない『捜シ者』。小さく呟いた後、『細胞再生』で弾けた皮膚と火傷を治癒させ始めた。ゴポゴポと聞き慣れない音が鳴り続ける中、それに混じつて他の聞き慣れない音が聞こえてきた。

「ぐ、く………！ つつ………！」

「……………」

それは、何かに耐える声。『捜シ者』の口から意図せずして漏れている声だった。大神は今まで、『捜シ者』が何かに耐えるところを見たことなど無かった。モノでいえば、耐えるような状況になる前に奪い取っていた。痛みなども、そもそも感じる前に全てを終わらせていた。

今、『捜シ者』が耐えているのは痛みなのか、それとも『細胞再生』に伴う異能の消費なのか。大神にはわからない。わからないからこそ、彼には黙ってその様子を見ていることしかできなかつた。

「ハア、ハア——ツ！」

ふと、自分を見ている大神の姿が視界に入った。ついさつきまで、目の前で爆発という命の危機にいたというのに、いつもと変わらぬ無表情のままにいる少年の姿が。ただ見ているだけ……それを理解していても、『捜シ者』は反射的に動いた。

「何を見ていやがる！」

「ッ!!」

容赦なく、『捜シ者』の足が大神の顔を蹴り飛ばす。ただ反射的に、苛立ちをぶつけるかのような『捜シ者』の暴力に、大神はその場に倒れる。蹴られた衝撃で口内が切れ、鉄臭い血が口から流れていく。

しかし、大神はそれを腕で拭うと、黙って『捜シ者』を見上げる。向かっていこうとも、距離をとろうともせず。ただ黙って、『細胞再生』ですっかり元通りになった『捜シ者』の姿を見ていた。

「ハアの……」

今の自分の姿を見られていることに不快感を感じ、反射的に手を出した『捜シ者』。そ

れでも自分のことを見続ける大神の姿に、思わずまた手が出そうになる。

「……チツ」

しかし、再び大神が傷つくことは無かった。大きく腕を振り上げた『捜シ者』だったが、真つ直ぐと自分を見つめる大神の姿を見て、苛立ちを感じながらもゆつくりと手を下ろした。

そうして、『捜シ者』は再び『細胞再生』による治療を行い、自爆によつて受けた傷を完治した。その上で、『捜シ者』は大神を見下ろしながら口を開いた。

「……『細胞再生』は細胞一つひとつを再生して治療する異能。細胞単位で治療することの異能は、ただでさえ異能を大量に消費する。傷が大きければ大きいほど余計にな……お前にこの話をするのは初めてだが、少なくともオレに隙ができたことはわかつたはずだ」

何を思つてか、弱点ともとれる情報を『捜シ者』は語り出した。いくら大神との間力の差があるといつても、そういった情報は知つていなくても価値がある。『捜シ者』にとつては損でしかない言葉を語り、彼はその上で大神に問いかけた。

「お前……どうして逃げなかった？」

「……………」

その問いに、大神は何も答えなかった。

——ガシヤン！

大神が答えないと、彼の目の前に缶詰が大量に入ったリュックが乱雑に置かれた。カンパン、甘口カレーなど、缶詰の中身は子ども用のものばかりだった。このリュックが何を意味するのかわからず大神が首を傾げると、『捜シ者』は静かに背を向けた。

「……お前には飽きた。それ持って、とつとと消えろ」

——キイン！

ボソリと、それだけ呟くと『捜シ者』はゆっくりと歩き出した。さらに、大神の両腕を封じていた手錠を『空間切断』で破壊し、完全に彼を自由にした。

突然の解放に、大神はその場に立ち続ける。ただ静かに、自由になった自分の両手を見つめていた。すると、『捜シ者』が歩みを止めないまま再び呟いた。

「世の中には『悪』しかない……オレのこの考えは変わらねえ。『正義』なんて言葉振りかざして無意味な犠牲を増やしていく……それができるのは、そんな『悪』が世の頂点に立っているからだ。だからオレは絶対悪として頂点に立つ。そして、犠牲を強いるクソみてえな考えを持つている気に入らねえ連中を一人残らず殺す。……他の奴らから見れば、オレも無意味に人を殺す『悪』。所詮は『悪』同士の自滅、つてことで終わる」

それは、彼が思い描く理想。彼が受けた過去の経験から生まれた、不動の思い。ふと、『捜シ者』は立ち止まって空を見上げる。後ろにいる大神は顔の半分ほどしか見れなかったが、その眼はどこか遠い所を見ているようでもあった。

「……色で言うなら、『悪』は黒だ。黒を塗りつぶすには、より濃い黒であるしかない。そして、黒は他の色があるうと、黒に染め上げる。『悪には悪を』……『悪』を消すなら、自分がより強い『悪』になるしかない。誰よりも強い『悪』になり、世界をオレの色に染め上げる……オレには、そんな方法しか思いつかなかった」

自分をあざ笑うかのように、ククツと喉を鳴らす『捜シ者』。そこまで語ると、『捜シ者』は再び歩き出す。大神の方には振り向かず、ただ……



「……お前は、オレのようにはなるな」  
自分の願いだけを、彼に向けて。

「……………」  
その言葉だけで、『捜シ者』<sup>彼</sup>を理解できたとは思わない。それでも、少しは近づけたよ  
うな気がした。

——タツタツタ

そして、もう少しだけ近づいてみたい……ほんの少しだけ、大神はそう感じて足を進めた。

「ついてくんじゃねえ!!」

——ゴン!

「……痛え」

夢を見た。幼い頃の、懐かしい夢を。  
そして、彼は夢から覚める。

——ゴッ!

「大、神——!?!」

『捜シ者』の一撃により、すでに再起不能に陥っていたと思われていた大神。しかし、その彼が再び立ち上がり、味方であるはずの優に拳を放った。完全に不意を突かれた優は、踏ん張ることすらできずに倒れ込む。

「零! お前、何をしていやがる!?!」

味方を攻撃するという大神の行動に、王子は彼の無事を喜ぶよりも先に行動の真意を

問いたただそうとする。

「……………」

——ガツ！

しかし、大神はその問いに答えようとはしない。それどころか、倒れた優の胸倉を掴んで無理やりにその身体を起こさせた。

そして、大神は怒りを込めた眼を向けた。

「人が氣絶<sup>落</sup>してる間に余計なことしてんじゃねえ……。アイツは、オレが斃す」

「……………やっぱり、そこかよ。つか、もつと他に止め方あつただろ……………」

「勝手に人の代わりを語りやがったんだ。こつちだつて勝手に止めてやる。……………わかつたら、隅の方で大人しく治すことに集中していやがれ」

それだけ言うと、大神は胸倉を掴んでいた手を離す。重力に従つて座り込む優に背中を向け、大神はそのまま歩き出す。その先には…………『捜シ者』が傷一つ無い状態で立つ。再び自分の前に立ちあはだかる大神の姿を見て、彼はニヤリと笑みを浮かべる。

「どこまでもどこまでも…………ゴキブリ以上にしぶとい野郎だな、お前は。…………さつきまでオレの身体を燃やしていたお前の炎は消えた。それでもお前はまだ…………オレを斃すつもりか？」

「関係ねえ、炎が消えたならもう一度くれてやるよ。今度は…………ちやんと死ぬるまで

な」

——ゴオッ！

「テムエは、オレが燃え散らす」

——キーン！

「その前に、オレがテムエを殺す」

大神の左腕でもある『青い炎』が猛り、『捜シ者』の指先が空間を切り裂こうと輝く。向かい合う二人の間にあるのは……もはや殺気のみ。

「おおおおお！」

「ハッ！ それが本気か、零！」

『捜シ者』の姿をその眼に捉え、確實に当てようと大神は左腕を振るう。しかし、『捜シ者』はそれを全て紙一重でかわしてみせる。『絶対空間』による移動ではなく、その場で身体を動かして。大神の動きを見切り、余裕の笑みを浮かべている。

だが、大神も突っ込むだけで終わるわけではない。

——ゴアア!!

「くっ！　また火種か！」

「オラア！」

動きを見切られている以上、『捜シ者』はもちろん隙を突いて攻撃してくる。だが、その瞬間に大神の目前に青色の火柱が立つ。火種を発火させることで火の壁を発生させ、『捜シ者』からの反撃を封じていた。さらに、そうして怯んだ隙に次の攻撃に移っている。

「はああああ！」

「がああああ！」

全力で、自分が持つ全てを懸けて闘う二人。何かの拍子に攻撃が当たる度、互いにその姿を捉えた視線が交差する度に、大神の中で今までの記憶が蘇る。決して幸せとは言えない、非日常な日常の日々が。

「邪魔だ！ 二度とオレの前を通ろうとすんじゃねえ！」

「ツ——！」

理不尽な理由で、何度も痛めつけられてきた。

「ハハハ、いいぞ！ もっと楽しませてみせろ！」

「……冷てえ」

彼が女に囲まれ豪勢な食事があっても、自分は隅っこで冷えた缶詰だけを食べてきた。

「休める時に休め……死にたくなければそうしろ」

「……………」

それでも、休む時や眠る時は隣にいさせてくれた。

「心配はいらない、大丈夫さ。お前にはオレがついている」

「オレ、には……………」

あの日……母を殺し、異能を失ってからも兄でい続けた。

「自宅にいる時こそ用心するべきだ。侵入者用のトラップを欠かしてはいけない」



「……わかった、気を付ける！」

あらゆることを教えられ、そのおかげで生き残れたことが何度もあった。

——いいかい、約束だ。人殺しはダメだ。もちろん、お前が死ぬのもダメだ。この手袋は、人を傷つけないための“お守り”だよ。

「——うおおおおお!!」

——ドッ!

その全ての思い出を断ち切るかのように、巨大な炎と化した左腕が『捜シ者』の胸を

貫いた。優との闘いのことを考えると、有効な一手と思える。

しかし、『捜シ者』は何も問題は無いように笑みを浮かべる。

「ハッ！ 夜原 優の真似事か！ だが、『細胞再生』がある限り『青い炎』で貫かれようが痛くもかゆくも——！」

『細胞再生』により、傷口の治療を始めようとする『捜シ者』。だが、そこで彼は気付く。あまりに決定的な、その違和感に。

「な、なんだ……?! 心臓が、再生しないだど?!」

大神の左腕が突き刺さっている箇所は……完全に心臓を貫いていた。『細胞再生』は心臓だろうと治療させることが可能らしく、それこそが『捜シ者』が余裕を保ってきた理由だった。

しかし、その心臓が一向に再生しない。異能がロストしたわけではなく、その他の異常もない。何があったか考えを巡らせていると、大神が冷静に告げた。

「オレの左腕が突き刺さって、燃やし続けているからだ。どれだけ『細胞再生』を使うが、オレの左腕が胸を貫いている限り心臓は再生されない。そして、直に触れているから『絶対空間』で逃げることもできない。……もう終わりだ」

心臓が再生されず、失った状態が続く。その先に待っている結果は、誰もが予想できる。異能者とはいえ、身体の構造は人間と同じ。心臓を失えば、その先にあるのは……

死、のみ。

「クソが！ その手を離しやがれ！ 『空間切断』——！」

——ゴアツ！！

「ぐはっ！」

「……たとえ死んでも、絶対にこの手は離さない」

離れられないなら、と『空間切断』で大神の左腕を掻き消そうとする『捜シ者』。しかし、『捜シ者』から放たれた光が左腕に向かうよりも先に、貫いている左腕がより強く勢いを増す。身体の内側から放たれた『青い炎』はすぐに全身まで広がり、その熱さと痛みに『捜シ者』は大きくのけぞる。

さらに、大神が意地でもその場から動こうとしない。たとえ左腕が掻き消されたとしても、完全に消える前により大きな炎を灯すくらいの覚悟が見て取れた。そんな大神の覚悟を感じ取ってか、『捜シ者』は抵抗ではなく強気な言葉を口にした。

「ハッ！ そうまでオレを殺したいか!? オレが憎いか、零!!」

心臓を燃やされ続け、その状態が長く続いたためか『捜シ者』の口元から血が溢れ出る。死に近づく体でも、『捜シ者』は強者としての態度を崩そうとはしない。あくまで強気な笑みで、強い口調でその言葉を投げかけた。

その『捜シ者』に対し、大神は左腕で大きく猛る炎とは真逆……冷静な口調で、眩く

ように言葉を返した。

「……そうさ。アンタは最低の『悪』だ。アンタと一緒に回った戦場でも、『コード・ブレイカー』として裁いてきた『悪』共でも……アンタ以上の『悪』はいなかった」

「当然だ！ それがおレの目指した道！ おレは絶対悪として『悪』共の頂点に——  
！」

「——それでも！」

それでも……アンタはおレにとって、たった一人の味方だった」

どんな「悪」が目の前に現れようと、完膚なきまでに斃してきた

どんな方法を使われようと、絶対に護ってくれた

だから、誰よりも信じられた  
だから——

「——だからオレの手で斃す。アンタが他の奴に斃されるトコなんて、死んでも見たくねえんだよ」

すがりつく子どものような眼で、どこか悲しげな表情で……大神は、胸の内に秘めたその思いを『捜シ者』へと告げた。

「零……」

「オレはアンタのようにはならない。何かあろうと……絶対に。でも——」

大神の言葉に、『捜シ者』は大きく目を見開く。瞬間、彼の肌がボロボロと燃え散っていく。意識してか、それとも無意識か。今まで身体が燃え散ることを妨げてきた『細胞再生』が止まっていた。

服も、髪も、皮膚も、何もかも……徐々に燃え散っていく。その姿を前に、大神の全身は小さく震え始める。それでも彼は左腕を離そうとはせず、絞り出すように最後の言葉を投げかけた。

「『悪には悪を』——アンタの嘘のない、この言葉が好きだった」

## code : 67 ?つきの涙

「おおおおお!!」

雄叫びに合わせるかのように、『青い炎』が勢いを増していく。

身体を包んだそれは優しくなど無く、容赦なく四肢を燃え散らしていく。

「――」

その中でも、『捜シ者』は抵抗の一つもせず満足気な笑みを浮かべていた。

「大神君！ ちよつと待って！」

誰一人としてその現場を……大神が『捜シ者』を燃え散らそうとすることを止めない中、会長だけが静止の声を上げる。それが大神のことを思ってたか、かつて生活を共にした愛弟子を救おうとしての行動かは他の者にはわからない。

それでも、彼は本気で大神を止めようとしていたことだけは伝わり、それも止めようという無粋な者もいなかった。

「大神君ってば！ それ以上やったら、本当に――！」

しかし、その声量を考えれば大神にも届いているはずであろう会長の声は、何の変化も生まない。届いてはいるが聞こえていない……言うなれば、そんな状態だった。そう

している間にも、大神の左腕である『青い炎』は『捜シ者』を燃え散らそうと、その大ききも勢いもどんどん強く——

——はぐっ

「やめるのだ！　大神！」

『ツ——!?!』

そのあまりに無謀な乱入<sup>ハグ</sup>に、その場にいた者全てが眼を大きく見開いた。

「桜小路！　お前、いつの間に気付いて——!?!」

『捜シ者』の攻撃を受けて、気絶していたはずの桜だったが、いつの間にか意識を取り戻していた。そして、あろうことか捨て身で大神を止めようとしている。彼女がいつか



ら見ていたのかわからないが、彼女がそこまでして大神を止めようとする理由はわかっている。むしろそれは「いつものこと」である。

だが、今は「いつも」のような状況ではない。

「バカ野郎、優！ そんなこと今更どうでもいい！ あのままじゃ、桜小路も『青い炎』で——！」

「……失礼は承知だが、バカはそっちだ」

「アア!？」

桜の安否より、いつから気付いていたかについて反応した優に対し、王子は慌てた様子で『影』を構える。すると、優は軽くため息をついて呆れたように呟く。そこにもしっかりと反応した王子だったが、優は無視して桜たちを見据えた。

「桜小路は自覚していないといつても、異能が効かない珍種。そして、『青い炎』だって異能には変わりない。あの炎で桜小路は死なない」

「そ、それは……そうだが……」

(なにより、オレはその現場をもう見ている……。桜小路は安全なはず……)

そう、桜は異能が効かない唯一の存在である珍種。無意識にとはいえ、彼女の身体が異能を打ち消してしまうのだ。だからこそ彼女は今まで、どんな捨て身の行動をしても無事でいられた。

「大神！ 殺してはダメだ！ それに、このままではお前も無事では——！」  
——ゴオ!!

「うわー！」

しかし、今回は違った。いくら桜がその場にしようと、異能である『青い炎』は消えようとはしない。それどころか、さらに勢いを増していこうとしていた。

この予想外の事態に、周囲の者たちも再び危機感を覚えていく。

「お、おい優……！ 本当に、桜小路は無事なのか!？」

「……おかしい。前は桜小路が突っ込んだ時点で『青い炎』は消えていた……。小さくなつたわけでもないのに、どうして……」

「こ、このままじゃあ……危険だ」

桜の安否を気にし始める王子と優に対し、会長は確信を得ているような様子で「危険」と呟いた。珍種についてこの場にいる誰よりも理解している会長の言葉に、王子と優も反射的に聞く体勢になった。

「桜小路君の珍種。パワーより、『青い炎』の放出量が圧倒的に多い……！ もう大神君自身でも制御しきれないんだ……！」

「な!?! それじゃあ桜小路は……！」

「いや……このままじゃ全員巻き込まれてもおかしくない。あの『青い炎』は……それ

だけの異能なんだ」

『ッ——!』

会長の言葉に、王子と優は思わず息を呑む。人一人が扱う異能の暴走が、その場にいる全てを巻き込んでいくという予想だにしない状況。いつもならまず否定しようとするが、今まで言葉として、光景として『青い炎』がどれだけ特別な異能であるかを痛感した彼らは、もはや否定しようがなかった。

しかし、そんな絶望的な状況の中で……一人が静かに立ち上がった。

「……いかにも、私が行こう」

「会長……!?!」

「桜小路君一人でダメなら二人でだ！ それなら『青い炎』でもなんとかできる！」

『捜シ者』の一撃で、すでに大量の血を失った会長。立っているのも辛いはずの彼だが、残った力を振り絞るようにして走り出した。その視線の先に捉えるのは大神たち。桜のように大神に触れて、自身の珍種パワーを解放しようとする――

「虹次!!」

「——『空裂』」

——「ビュア！」

「うわっ!?!」

瞬間、『捜シ者』の聲が響き、名を呼ばれた心友が異能を放つ。なんの小細工もない、シンプルなエネルギーの塊を一直線に……会長の眼の前を通るように放ち、その足を止める。

「……わかつている。約束だ、誰にも手出しはさせん。後は、全て任された」

——ドカツ

全て承知している……そんな悟ったような表情を浮かべる虹次。そして、彼はそのまま近くの瓦礫に向かって……堂々と腰を下ろした。

(お前の死に様………ここで見届ける)

「……………」

救いの手を妨害し、後は手を出そうとはしない心友こともの行動を前に、『捜シ者』は静かに微笑む。満足気に、目的を達成したように。

そして、彼は吼える。

「うおおおおお!! 『空間切断』!!」

——ガガツ!!

咆哮に似た声の後、幾重もの光が『捜シ者』の身体を通る。空間を切断する防御不能な攻撃は、身体を燃え散らす『青い炎』を……大神の左腕ごと『捜シ者』の身体を斬

り刻んでいった。

「ぐっ！」

「うわ！」

突き刺していた左腕をかき消されたことで、大神は桜と共に吹き飛ばされる。暴走していた『青い炎』だったが、かき消されたことで増すに増した火の手は一気に弱まっていく。周囲に広がり、桜もろとも燃え散らそうとした炎が消えたことで、周囲の者たちの危機は去る。

ただ一人、自らの身体を斬り刻んだものを除いて。

「——オレに勝つたと思うなよ、零！ オレはお前ごときに殺されるような男じゃない!! この死はオレ自身の意志だ！」

「なっ……!!? そんな、何を言つて——！」

勝ち誇つたように、自信たつぷりに豪語する『捜シ者』。大神に斃されるのではなく、自らの手で死を選ぶ……そう言い放つ『捜シ者』に、桜は大きく目を見開く。

しかし、『捜シ者』は桜にはまるで目もくれず、その隣を見つめる。隣で呆然と、散り行く『捜シ者』の身体を見る……大神を。

「いいな！ 間違つても自分の手柄だなんて思うな！ お前が殺すよりも早く、オレが自分で死んだ！ それが真実！ お前はオレを殺せなかった！ ハハハ！ 先に地

獄に逝っているぞ、零!!」

目的を果たせなかつた大神を笑うように、『捜シ者』は笑みを浮かべる。  
そのことを身体の芯まで染み込ませるように、何度も自分の死を言葉にして繰り返す。

「——だが、お前はまだ来るな」

「——ッ!」

そして、彼は笑みを浮かべる。

「生きろ、零。生きて生きて……苦しみ続けろ。夜な夜な殺した悪の死に顔に怯え、後悔と悲しみにもがけ」

言葉が進むごとに、『捜シ者』の身体が消えていく。未だ自分の身体に残った『青い炎』を連れていくかのように、散り散りに崩壊していく。

「この死よりも辛い生き地獄を……十字架を背負って歩き続けろ。お前にはそれが似合いだ」



足が、腕が、身体が……少しずつ『捜シ者』という一人の人間を構成していたものが散っていく。その中で、生き残ることこそが苦行と大神に告げていく。

最後まで――

「――お前に死など甘すぎる。苦しんで生き抜きな」  
最期まで――『捜シ者』は大切なものを教え込むかのように笑みを浮かべ続けた。

――スウ

「……さらばだ、心友よ」

「うっ……！　うう……！」

『捜シ者』の消滅と共に、大神の左腕と化していた『青い炎』が鎮まっっていく。雄々しく揺らいでいたそれは、生々しい痕が残った肌色の腕へと戻った。

『青い炎』も消えたことで、改めて鬨の終わり……『捜シ者』の死が伝わっていく。独特のずうんという空気の中、心友である者は別れを告げ、師であった者は眼を押さえ、悲しんでいく。

「一番非情で一番辛い……。だからこそ一番、大神君に響く言葉……ですか」

「生き残るからこそその罪……。『悪』としても、育ての親としても望んだ結果、か」

「……つまらない。つまらな過ぎて……。何も考えられない」

「悲しいんだよ……。雪。お前は、悲しいから何も考えられないんだ。お前はかつての私と同じで……。誰よりもあの人を尊敬していたから」

敵である『捜シ者』の最期の言葉に込められた意図について、ひっそりと呟くように考える平家と優。その傍らでは、『捜シ者』を尊敬する者と尊敬していた者が心を痛める。その痛みの意味がわからない雪比奈と、その痛みを知る王子……かつての同志が悲しみに沈んだ。

(……『捜シ者』が、死んだ——)

「……………」

その死を目の前にし、最も近くで感じ取った者である桜と大神。様々な意志が飛び交う中、桜の中には『捜シ者』の死という現実だけが響き渡る。

そして、最期の言葉を向けられた大神は……

——バサッ

なんの声もなく立ち上がり、身体に纏わりついた埃を払い落していく。そして、すっかりポロポロになった制服の上着に袖を通す。いつものように、バイトを終えて後始末をする時のように、平然と。

「お、大神……」

あまりにいつも通り過ぎる大神の姿に、桜は思わず声をかける。かけるべき言葉はあつたかもしれないが、今の彼女にしてみれば名を呼ぶだけでも精一杯だった。

「……………あ、なんですか?」

「……………えと、その」

一方、声をかけられた大神の様子も精一杯なようだった。誰が見てもわかるほど、明らかにワテンテンポ遅い返事。どこか虚ろな眼は、声をかけた桜ではなくその後ろにある背景を見ているようだった。いつも通りなようで、いつもと違う……そんな大神に、桜は次にどんな言葉をかけるべきかと迷いだす。

刹那、鋭く煌めく物体が宙を駆けた。

——ドドド!

「ッ!」

精一杯な状態ながら、飛来する物体に反応して大神はその場から跳ぶ。その次の瞬間、巨大な氷の柱が大神が立っていた場所を貫いた。明らかに大神を狙って放たれた氷の柱。だが、この場にいる中で氷を操れる者は一人しかない。

「やめろ、雪比奈。もう闘いは終わった」

「……………」

『水態』によつて氷を操る雪比奈を、虹次が肩を掴んで止める。しかし、雪比奈は明ら

かな殺気を込めた眼を大神に向けたまま、ゆっくりと口を開いた。

「……『捜シ者』が死んで満足か？ 答えろ……大神」

何があつても眉一つ動かさない雪比奈だったが、今の彼の表情からはハッキリとした怒りの色が感じられた。尊敬していた者である『捜シ者』の死に対する怒り……全てはそこから来た行動と言葉。

それらを向けられた大神は、フツと微笑んでみせた。

「……ええ、満足ですよ。裁くべき『悪』は滅んだ。まあ、最期に自ら命を絶つとは意外でしたが」

「思いつがるな。お前が生き残れたのはお前の力ではなく、その左腕……『コード・エンペラー』の力だ。……いや、それよりも堕ちたものだな。仮にも育ての親である『捜シ者』が死んだというのにその態度とは。『悪』というならば、今のお前の方がよっぽど『悪』に見える」

微笑む者と怒りに染まる者……対照的な二人が向かい合い、互いの言葉をぶつけ合う。その中で、何事も無かったかのように微笑むその態度を責める雪比奈。真正面から『悪』と断言された大神だが、彼はそれでも微笑みを崩すことなく、さらに清々しそうな表情を見せる。

「……オレは『悪』ですよ、他の誰よりも。育ての親だろうが関係ありません。アイ

ツはオレの手で斃したかった。直接斃したわけじゃありませんが、そこまで追い詰めることができた。そのための力が他人のものだろうと、手を下したのはオレです。……だから大満足ですよ？」

今までは、『捜シ者』の名を聞いただけで尋常ではないほどの殺気を放つこともあった。それほどまでに強く、斃すことを目的としてきた者を斃した。達成感のようなものを感じるかもしれないが、その相手は過酷な戦場で共に過ごし、生き残る術を教えてくれた育ての親。

そのような存在を失った喪失感を考えると、達成感などあつという間に塗りつぶされてしまいそうに思える。それでも、大神は微笑み続ける。喪失感など欠片も感じていないように、ただただ達成感だけを胸に秘めて微笑み――

――むにつ

「?つき」

瞬間、微笑んでいる大神の口が桜の手により大きく横に広がった。

「この？つきの能面を剥いでくれる！」

「ひよ……!!? 桜小路s——！」

両頬を引つ張られ、さらにぐいぐいと上下左右へと伸び縮みさせられる大神。突然のことに戸惑う大神は、両頬からの痛みに耐えながら目の前にいる桜を見る。

そして、彼女の眼から流れる涙に初めて気付いた。

「……なんで、あなたが泣いて——」

「好きだったのだろう?」

「……え?」

桜の眼から流れる涙に、大神は思わず疑問の声を漏らす。しかしそれ以上に、桜の口から放たれた言葉が大神にとつて印象的だった。印象的な言葉に上書きされた疑問は、尋ねるよりも先に桜の口からそこに込められた思いが語られた。

「どんなにひどい悪人でも、どんなに憎くても……お前にとつて、大切に大好きなたった一人の兄上だったのだろう? ……だけど、もういないんだぞ?」

言葉が進むごとに、桜の声が身体と共に震える。徐々に、大神の頬を掴む両手の力も弱くなつていき、震える両手は離れていった。それでも桜は支えを求めするように両手をグツと握りしめ、縋り付くように大神の身体にそつと拳を当てた。

「どんなに会いたくても、声が届きたくても……もうできないんだ。触れることも、声を聞くことも、笑いかけてくることも……二度とない。もう、絶対に——」

——よお。今は……零だったか？ 久しぶりだな。見ないうちにデカくなったじゃねえか。



——またバカみたいに缶詰ばかり喰ってんだろ？　ま、そういうところ気に言ってるがな。

「……………」

大神の頭の中に、『捜シ者』の言葉と顔が鮮明に浮かぶ。元の姿に戻り、記憶を取り戻した彼だからこそわかる過去の自分との違いと笑顔で口にできる軽口。闘いの中では決して見る事ができなかつた穏やかな雰囲気的笑顔が、まるで写真のようにはつきりと脳裏に焼き付いていた。

「なのに、お前は……………」

ふと、絞り出すような声を出す桜。数分前の出来事を思い出す大神の様子に気付く余裕もなく、わなわなと震えるほど拳に力を込め始める。

そして、涙目ながらにキツと大神を睨みつけながら、その声を荒げた。

「何が『大満足』だ、この？つき!! 悲しいなら悲しいって言えばいいのに、どうして

お前はそれができないんだ!!」

「……ハッ、何を言うかと思えば。オレは悲しくなんてないですよ、桜小路さん。大  
体、オレはそんな感情なんてとつづく昔に……」

忘れ、て——」

霞む視界。

上手く出ない声。

それが意識して起きたものではないと、彼は気付く。

「……………え？」

そして、眼から流れて頬を濡らす……一筋の雫があることにも。

「なんだ……………？ これは……………？」

自分の眼から流れた液体をすくい取り、不思議そうに眺める大神。それが自分から出たものだと思えないように、どんな感情が自分の中を満たしているのかわからないように。

「ツ、お……………大が——！ ふ、ぐ……………！」

その姿を見た瞬間、なんとも言えない感情が桜の中に溢れ出す。そして、その感情を発散するかのように、大粒の涙が一齐に溢れ出ていった。

まるで、大神の中を満たす分の感情も流れ出すかのよう。

「どうして、大泣きしているんですか……？」 桜小路さん

「お前、が……知らないから……」

「え？」

「お前が、泣き方を知らないから……！ 泣き方を知らないお前の代わりに、泣いてい

るのだ……！」

いつの間にか大神を支えにしていた両手も離し、溢れる涙を拭い続ける。それでも涙は止まろうとはせず、桜は泣き続け、大神は静かに傍に居続けた。

「……………」

闇に沈んでいた意識がゆっくりと鮮明になってくる。何度か瞬きすると、霞んでいた視界もはつきりしてきて瓦礫の山が映る。

意識を取り戻した天寶院 遊騎は、無意識に一人の人物を捜そうと視線を動かす。そして、運よくその人物を見つけることに成功し、その名前を呼ぶ。

「し、時雨……」

顔を伏して斃れ、血を流す見知った人物。自分を憎み、敵として立ち塞がった人物。それでも、遊騎は時雨を救おうと自身の身体を起こそうとする。力を込める度に全身から激痛が走り、意識を再び持つていかれそうになる。その極限状態は、大神たちにまで意識を向けられないほどだった。

それでも、遊騎は時雨に向かって手を伸ばし——

——ザア

「ッ!?!」

瞬間、時雨の身体が塵になって消えていく。その身体どころか、流れた血まで塵と化していく。何事かと思つた遊騎だったが、すぐにその正体について理解した。

(これは、『灰塵』の擬態……! まさか、時雨——!)

「……オレが本気で『捜シ者』のような『悪』<sup>クズ</sup>に従うとも思つたか。全ての正義のため、『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>はこの時雨が頂く」

渋谷荘の外……電柱の上から古びたその建物を見下ろす一人の人物。その手には、開きかけた光り輝く箱が浮かんでいた。その人物……時雨は傷一つ無いその身体で、音もなくその場を後にした。

## code : 68 Happy

『渋谷荘』にて人知れず行われた『コード・ブレイカー』と『捜シ者』の勢力による闘い。『捜シ者』が死に、配下であつたはずの時雨がパンドラの箱を奪つていったという形で終わったこの闘いから一夜が明けた。その朝はいつも通り平和で、昨日あつた出来事全てが夢の中の出来事のような錯覚に陥りそうになる。

それでも、頭に刻み込まれたその記憶は本物である。夢でもなんでもなく、ただ一つの現実だ。今まで過ごした平和な日常と同じ、紛れもない現実の一つ。

「大神！ おーい、大神！」

それを自覚したのはかほ不明だが、桜はいつものように隣人である大神へと声をかける。不慮の事故により壁下に開いた穴があるため、他の部屋よりクリアに声が届く空間。

しかし、一向に大神からの返事がない。といつても、これもよくあることであつた。彼の性格上、毎回律儀に反応するはずがないのだ。そして、その上で桜は次の行動へと移る。

——ガラガラガラ！

「大神！ おはよーなのだ！」

満面の笑みで穴を通り、大神の部屋へと入り込む桜。どこから用意したかは不明だが、なぜかスケートボードに乗った状態で。完全にギャグとしか思えない行動だが、普通の人間がこの光景を目の当たりにしたらまず笑いなど起こらない。起こったとしても苦笑程度だろう。

一方、大神の反応はというと……

——シーン

「ぬ？」

大神、不在のため反応自体なし



「…………ふむ」

まさかの反応なしという事態にもめげることなく、私服に着替えて桜は部屋を出た。他の住人への朝の挨拶兼大神を捜しに出た彼女だったが、少し異様な状況に出くわしていた。

「誰もいない……。まだ休んでいるようだな」

ただでさえ古い造りのため、人が通れば必ずと言っていいほど音が出る『渋谷荘』。そんな『渋谷荘』にいながら、まったく音が聞こえないという現状。このことから、まだ他の住人は休んでいるということを確認し、少し声を抑え気味にする。

「無理もないか……。あんな戦いの後だものな。しかし、大神はどこに行つたのだ？」

ほぼ全員が重傷を負つた今回の闘いは、「疲れない」と言う方がおかしいレベルだ。今まで王子の方針で規則正しい生活が染み込んでいたとしても、圧倒的な疲れの前ではそのリズムが崩れても仕方ない。

あまり騒がないようにしつつ、大神を捜し始める桜。腕を組み、「うーん」と唸りながらどうするべきか考え始める。

「少なくとも起きているはずだからな。となると……洗面所か？」

起きていることから考えて、朝の準備をしているのではと桜は予想する。ちょうど洗面所の近くにいたこともあり、桜はそのまま洗面所へと向かう。そして、誰もいない状

況から確認もせず桜はドアを開ける。

「……あ？」

そこには、確かに朝の準備をしている人がいた。ただ、大神ではない。そこには、は、身体の至る箇所に包帯を巻き、大きめのワイシャツ一枚だけを着て歯磨きをする……

「あ、王子殿。おはようござ——」

「見るなー!!」

——ゴツ!

『<sup>八王子</sup>渋谷荘』の主<sup>相</sup>であった。

「王子殿、そんな照れずとも……女子同士ではありませんか。急に開けてしまったのは申し訳ありませんが……」

正面から王子の頭突きを受け、ダラダラと血を流しながらも桜は笑顔で王子に声をかける。まあ、頭突きとほぼ同時に王子がドアを閉めてしまったから扉越しにだが。

扉越しに桜が声をかけると、扉の向こうから慌てた様子の王子の声が届く。

「す、すまん！　ちよつと今日は寝坊したから慌ててしまつて……！　朝飯なら食卓に用意してあるからな！」

闘いにおいて、最も闘いにくい相手でもある日和を相手にし、さらには防御に適した『影』の異能を持つため鍵キを任されていた王子。それを見抜いてきた雪比奈の攻撃も受け、かなりの重傷を負つたはずの彼女だったが、きつちりと朝食を用意してくれている。自分も疲れているはずの王子の気遣いに、桜は複雑な表情を浮かべる。

「王子殿……もつと自分のことも気遣つた方が……」

「あれ？　朝ごはんつておむすびだけ？　王子、マジ超手抜きつて感じ」

——ガンツ!!

「手抜きで悪かつたな。つか、テメエは腹に怪我してんだろが。食うんじゃねえ」「いかにも、頭の方が痛くなつてきたんだな……」

王子の体調を心配する桜に対し、相変わらず着ぐるみ姿の会長は容赦なく不満を口に

する。その手にしつかりと、王子が作ったおむすびを手にしながら。

そんな会長の言葉を聞いた瞬間、いつもの格好に着替えた王子がドアを勢いよく開け放つ。さらにそのまま会長の頭を踏みつけ、ぐりぐりと踏みながら叱りつける。腹部を貫かれた以上、無理に食事をするのは好ましくないのは間違いないのだが……明らかに会長への怒りも混ざっているだろう。(完全に会長が悪いが)

「おい、優。言つとくがテメーもだからな」

「わかつてる」

「夜原先輩!」

ふと、会長を踏みつけながら王子が食卓の方を見る。そこから返事と共に顔を出したのは、こちらにも至る所に包帯を巻いた痛々しい姿の優だった。彼も『捜シ者』と闘っている中で腹部を貫かれたため、無理に食事はできない。しかし、彼はエプロンを着けてそこに立っていた。

そのエプロンを気にしつつ、桜は優の傍へと駆け寄った。

「お身体の方は大丈夫なのですか?」

「まあな。といつても疲れてるのも事実だ。だから今日は簡単に卵焼きくらいしか作れなかった」

「オレだってメシ握っただけだ。具もない塩むすびだしな」

「あの、二人とも……。ですから、もう少し自分の身体を気遣つて……」

優も王子同様、疲れているにもかかわらず朝食の準備をしていたようだ。彼らしいといえばらしい行動なのだが、闘いが終わった次の日なのだ。もう少し楽をしてもいいのでは、と桜は内心でハラハラしてしまっていた。

「おや」

すると、また新たに話題に入ってくる者の姿があつた。いつも通りの制服姿で、何やら資料などが詰まっていそうなカバンを持った来訪者……平家である。

「おはようございます、皆さん」

「おはようございます、平家さん」

「平家先輩、随分と早起きですね。何か用事でも？」

「ええ。『エデン』に報告等ありますからね。私は皆さんと比べて軽傷なので、特に問題はありませんし。そして今日は……」

挨拶を交わしながら、平家はカバンを開く。多くの資料が入っているカバンの中から、平家は数枚のプリントを取り出して見せつける。

「皆さんに今回の闘いにおけるジャZZを伝えるに参つたというわけです」

「ジャZZ……」

平家を取り出したプリントを見てみると、大きく「通知表」と書かれている。彼は

『コード・02』でありながら「ジャッジ」という立ち位置にある。今回の闘いもあくまで彼らにとつては仕事であるため、その評価がつくのは当然のことと言える。

しかし、闘いの翌日……まして朝にそれを伝えに来るとは、彼の忙しさが伺える。

「平家さん……個人はともかく、今回の闘い自体のジャッジはどんな結果に？」

「……今回の任務は失敗と言わざるを得ません。『捜シ者』を斃すことができたとしても、我々の目的は『パンドラの箱』の守護。そして、その『パンドラの箱』は奪われてしまった……弁明のしようがありません」

神妙な表情で闘い自体の結果を尋ねる優に対し、平家は声のトーンを下げながらその問いに答える。やはり彼も闘いに参加した一人であるので、失敗してしまったことを悔いているのだろう。

すると、先ほどまで王子に踏みつけられていた会長が起き上がり、腕を組みながら口を開いた。

「いかにも、今は待つしかない。『パンドラの箱』を持っている時雨君については『あの壺』が追っているからね」

「『あの壺』が？」

「『パンドラの箱』が地下から出てしまった時、最優先で追尾するシステムが彼女にはあるからね。何かわかったら連絡も入るはずだよ」

「だから『あの壺』の姿も見えず……。無事だといいいのだが……」

単身で時雨を追っているという『あの壺』。異能を吸うことができる対異能者戦に特化した彼女だが、相手は『Re—CODE』に所属するほどの実力を持った時雨だ。桜が彼女の身を案じてしまうのも無理はない。

どれだけ心配でも祈ることしかできない歯痒さを感じていると、会長も堪えるようにグツと拳を握っていることに気付く。そして、会長は噛み締めるように呟く。

「あの『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>は外に出していい代物じゃない……！ 絶対に、取り戻さないといけないんだ……！」

「会長……」

中立という立場を貫き通して『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を守ってきた会長。それが外に出てしまい、さらには少しだけとはいえ開いてしまった。外に出たのは間に合わなかった故だとしても、開いてしまった責任を強く感じているのだろう。その理由を知らないとはいえ、桜は会長の思いが痛いほど伝わってくるようだった。

「……そうそう、忘れていました。雪比奈と虹次は現在も逃走中で居場所は不明という情報がエージェントから入っています。嬉しいですか？ かつてのお仲間が無事で」

「……………」

突然、平家が王子に視線を向けながら雪比奈と虹次についての情報を伝える。彼らは

闘いの後、特に強い抵抗はしようとはせず、その場から退いていった。平家曰く「エデ  
ン」のエージェントが追っているようだが、こちらも簡単に掴まりはしないはずだ。

その事実を嫌味を交えるように王子に伝える平家はニヤリと笑みを浮かべる。しか  
し、王子はそれに腹を立てたりすることはせず、静かに真正面から平家の顔を見る。そ  
して……

「……ありがとう」

「なんですか、それは？ 気味が悪いですね」

「お前には危ない所を助けられた。その礼を言うのは当然だ」

「……………」

深々と頭を下げ、王子は素直な言葉で平家に礼をする。どれだけ彼が自分を嫌ってい  
ようと関係ないとも言いたげに。そんな王子の姿を、平家は顔をしかめながら見下ろ  
し、そのまま――



「5点です」

「…………え？」

「ですから、あなたへのジャツジです。まったくなっていないですね……本当に足手まといです。もつと精進してもらわないと困ります。このままじゃあ、あなたに与えられた『コード：05』の称号名が泣きますよ」

厳しい言葉と評価ながら、次に期待するような言葉もかける平家。そんな言葉と共に叩きつけられた自分の評価が書かれた通知表を手に取り、王子は噛み締めるように拳を握った。

「さて、次は優君ですよ」

王子に言葉をかけたかと思うと、さつさと背を向けて平家は優の方へと向かった。厳しいながらも彼なりの優しさを感じた桜は、「王子のことを認め始めている」と感じていた。しかし、平家はそれに構うことなく、何事も無かったかのようにジャツジを伝えていく。

「優君は4千点です。『捜シ者』に協力していた異能者のほとんどを斃してくれましたからね、よくやってくれました。……自己犠牲に等しい考えで『捜シ者』に向かつていったのは減点対象ですが」

「……すみません。以後、気を付けます」

『転移』によつて無限かと思えるほどの異能者と闘つてきた優。その全てを斃したこともあり、かなり高い評価をもらつていた。といつても、最後に『捜シ者』に向かつていったことについては反省点として咎められた。結果的には良い方向になつたとしても、自己犠牲とも言える危険な行動には変わりない。

「いかにも、烏合の衆とも呼べる異能者たちだつたけど一人で勝てたのはすごいね。やはり私の修業が役に立つたんだな」

「ええ、感謝しています。……あの、平家さん」

優の評価を聞き、会長はうんうんと感心していた。師匠冥利に尽きる、とでも言いたいのだろう。そんな会長に軽く微笑むと、優は改めて平家に向き直る。

「どうしましたか？」

「一つだけ質問があります。オレが斃した異能者たちは、その……確実に全員死んでいましたか？」

「や、夜原先輩……？」

その質問の内容に、桜は思わず顔をしかめる。自分が斃した者たちは確かに死んでい  
たかなど、明らかに普通の質問ではない。だからといって、冗談で済む話でもないし、な  
により優の表情は真剣そのものだった。

「……………」

一方の平家は優の意図を察したのか、同じく真剣な表情で口を閉じる。ジツと優の眼  
を見て、無言のまま数秒が過ぎる。

そして、新たにカバンから別の資料を取り出し、中身を確認しながらその問いに答え  
た。

「……………そうですね。優君が闘ったあの場所にいた異能者は全員が死亡。逃げたような  
跡もありませんでした。例の『転移』を使う異能者も即死状態でしたから、生き残りは  
いません」

「……………ありがとうございます」

その時、優が見せた表情はとても複雑なものだった。ほっとしたようでもあり、心の  
どこかで残念と思っているような……………そんな矛盾した心情を感じさせる表情をしてい  
た。

優にジャッジも伝え、質問にも答えた平家は次に向かうため歩き始める。そうして優  
の真横に移動した瞬間……………ボソリと呟いた。

「——『あの力』を使いましたね？」

「……はい」

「じゃあ、安心してください。先ほども言ったように、生存者は0。目撃者は残っていません」

（……あの子も、か。いや、わかつていたことだ。わかつていたし……覚悟していたことだ）

改めて生存者がいないことを告げられ、優の頭に浮かんだのは咲と名乗った一人の少女。異能によつて居場所を失い、『捜シ者』に従うことを唯一の居場所として望んでいない闘いに巻き込まれた被害者。彼女の『念力』によつて動きを封じられていた優は彼女を斃し、『あの力』を使うことであの場を切り抜けた。

『あの力』を使った以上、目撃者はいてはならない。それでも、優は心のどこかで「もしも」と考えていたのかもしれない。だから、あの質問は生存者がいないことを確認するためだけの質問ではない。同時に、咲という生存者がいることを無意識に願つての質問でもあつたのだ。

しかし、結果は告げられた通りであり、その現実を覆しようがない。優は自身の罪を嘔み締めるよう、グツと拳を握つた。

「遊騎君！ あなたはマイナス1万点です！人を庇いに庇って計四回！ さらに、そのうち一回は敵を庇う始末！ 闘わずして重傷など言語道断です！」

「て、手厳しいですね……」

数分後、平家は遊騎にジャツジを伝えるべく『参號室』まで移動し、他の者もそれについていつていた。だがその内容は、プラスの評価である王子と優に対してマイナスでの高得点という手厳しいものだった。呆れかえっているのか、平家は中に入ることなく扉に通知表を張りつけた。

「人を護るといふのは良い行動に思えますが……」

「もちろん普通はそうです。ですが、遊騎君は違います」

中で聞いているであろう遊騎をフォローするように、人を護ることについて問う桜。だが、平家も人を護ることの大切さはもちろんわかっている。それでも、遊騎の行動は違ふとハッキリと主張する。

「遊騎君は……真理という友人の死の経験から人の死を恐れ、無謀な行動に出ている

だけです」

「真理……確か、時雨もそう言っていた。『真理はお前が殺した』……ってな」

遊騎の人を護るといふ行動の理由を語る平家に続き、優もそれを決定づける記憶を思い出す。それらの言葉を聞き、桜は静かに『参號室』の扉を見つめる。

「遊騎君……」

「……………」

『渋谷荘』の屋根の上……子犬や猫などの動物でもない限り上ることが無いその場所に、遊騎は座り込んでいた。見上げた視線の先には、青空が広がっている。そよ風が頬を撫でるのを感じつつ、彼はふと顔を俯かせる。

「……時雨」

その名を呼んだ眩きは風に乗れ、彼方へと消えていく。しかし、その声に応える者はおらず、風だけが遊騎の横をすり抜けていった。

「さて、次は刻君です。失礼しますよ」

「へ、平家先輩……！ 刻君は一番怪我がひどいからそつとしておいた方がいいのでは……！」

遊騎にジャツジを伝えた一行は、そのまま隣の『肆号室』へと向かう。ノックだけして入ろうとする平家を見て、桜は刻の容体のことも考えてそれを止めようとする。彼は厳しい修行を乗り越え、目的である虹次に挑んだが敗北した。両腕を犠牲にという奮闘ぶりを見せたが、あと一歩及ばなかったのだ。彼の身体の傷や心の傷も考えると、闘いのことを思い出してしまふジャツジを伝えるのは後日でもと思えた、が……

「あ、ゴメン！ 両手使えないから食べさして〜！」

そこにいたのは……

「つと、汗かいちやったナ。拭いてくれる？」

両腕にギプスをし、病院用のベッドの上で過ごし……

「いや、大怪我って最高だよネ〜！」

ピンク色のナース服を着た女性二人に看護される、とても楽しそうな刻の姿だった。

『……………』

「あ、そろそろ失礼しまーっす。じゃあねー」

「アリガト〜。また出張看護よろしくネ〜」

刻のまさかの状態に、揃って言葉を失う一同。だが、心のどこかでは「彼らしい」と納得してしまったのもまた事実であった。

一方、ナース二人は終了時間を迎えたらしく、手を振りながら部屋を後にしていった。刻も笑顔でそれを見送り、「ここは当たりだな」などと呟いていた。

「……………刻君、300点ですよ」

「どーも、先輩。つか、それってマイナスで？」



「いいえ、プラスで300点です」

「アレ〜? なんか先輩、甘くない?」

そんな刻に対し、平家は何事も無かったように通知表を移動式の机に置く。その内容が意外だったらしく、刻はわざとらしく声を張り上げてみせた。そして、フツと自分を嘲笑うかのように笑みを浮かべた。

「オレは負けたんだ。なんの役に立ってないんだから遊騎以下ダロ?」

「それを決めるのはあなたではなく、私です。……では、失礼します」

「……………」

自身を「役に立ってない」と切り捨てる刻。しかし平家は、ジャツジとして自分が決めた結果だと告げて、そのまま部屋を後にした。優も無言でそれに続く。

その様子を気にしつつも、桜は刻を気遣って部屋に残ろうとした。

「刻君、何か私にできることは——」

「行くぞ、桜小路」

「え?」

「バイバイ。これから女の子のお見舞いとかいっぱい来るから邪魔しないでネ〜」

「え? え?」

——バタン!

しかし、王子に引つ張られるように部屋の外まで連れていかれ、刻からもニヤニヤとした笑みを向けられながら外へと追いやられる。どういふことか理解することもできないまま、『肆号室』の扉は閉じられた。

「王子殿！ 本當に放つておいていいのですか!? 刻君、なんだか様子が変だったよ  
うに——!」

——ガシヤアアン!!

「な——!?!」

ほとんど強制的に『肆号室』から出てきた桜は、自分を連れ出た王子に詰め寄ろうとする。しかし、それよりも先に後方から派手な音が響き渡る。

突然のことに桜は目を見開くが、彼女以外の者たちはそれがわかっているかのように『肆号室』の扉を見つめる。

「……………」

「……………今はそつとしておいてやりな」

「外野には……………どうすることもできない」

まるで、その中の状態が見てわかるように。

「ぐ、う……………！　が、あ……………！」

ベッドの上から片手を上げようと、手が震えるほど力を込める。

しかし、その手はベッドからわずかに上がっただけで、そこから先に上がる気配は無い。

——ドン！

「ちく、しょう……！」

ギリ、と歯を噛み締めながら、わずかに上がった腕をベッドに叩きつける。激しい痛みが走るが、その痛みに苦しむ余裕もない。

（虹次に負けた上、刻の両腕はもう再起不能かもしれないんだから……）  
それほど、今の彼に突きられた現実には酷なものだった。

「さて、最後は大神君ですね」

「あ……その、部屋にはいなかったのですが」

「オレも今日は姿を見ていないですね」

複雑な思いを胸に、刻の部屋を後にした一行。ジャツジを伝えるのも残り一人となったため、最後の一人である大神を捜し始める。桜は部屋にいなかったことを、優も姿を

見ていないことを話す。

「ああ、零なら……」

すると、王子が先頭に立って歩き始める。どうやら居場所を知っているらしい。桜たちは王子の後に続いていき――

「ほら。縁側で真っ白になっているぞ」

「――」

「わふっ」

そうして到着した『渋谷荘』の縁側。そこには、両手でお茶を持ったまま空を見上げる……見るからに真っ白な状態の大神だった。

隣で気持ちよさそうに日向ぼっこをする『子犬』と比べると、なんともシュールな光景である。そんなことを思いながら、桜は大神に声をかけていく。

「大神」

「大神？」

「お〜がみ〜」

「……ダメみたいなのだ」

つついても反応せず、腕を引っ張って見ればそのまま動かない。その腕をぶんぶん大きく振らせても、大神はなんの反応も示さなかった。普段の様子と比べてあまりにも無防備過ぎるその姿に、桜も思わず言葉を失ってしまった。

「無理ありません。ずっと追いつけていた『捜シ者』を討つたのですからね。……あ、ちなみに大神君は1万点ですよ」

「精も根も尽き果ててしまった、ということですか……」

「だが、大神のことだ。すぐに元に戻るだろう」

「……そうだな。今は少し休息しているだけだ」

燃え尽き症候群のような状態である大神をそつとしておき、遠巻きに彼を見つめる一  
同。その中で、王子が全てわかつているような表情を浮かべていた。

そして、どこか確信を持っているかのような口ぶりで言葉を続けた。

「『捜シ者』を斃した今、自分が何をすべきなのか……零はわかっていると思うしな」  
「と、いうと……？」

「……『捜シ者』と共に零を育てた家族。彼らが零の本当の家族じゃないことと……桜  
小路 桜。お前が零と一緒にいたあの場所こそ、全ての始まりなんだ」

大神に向けていた視線を桜に移しつつ、意味深な言葉を呟く王子。現時点では確かめ  
ようもないことを告げられ、桜は思わず眉をひそめる。

「ど、どういうことですか？」

「王子、あなた……『捜シ者』から何を託されているんですか？」  
「……………」

桜と平家の問いに、王子は口を紡いで何も答えなかった。

過ぎてしまえば時というのは早く感じてしまうものであり、すでに夜になっていた。夕食の準備がしてある『渋谷荘』のリビングだったが……

「メシができたっつーのに……なんで食えない連中しか集まってねえんだよ……！」

「オレは作る側だったからな。いるのは仕方ない」

「いかにも、そうカリカリしないことだよ？ ストレスは美容の天敵。今にシワまみれに——」

「黙ってろ!!」

「痛いー！」

「……適当に捜してくる」

そこにいたのは食事を作った王子、同じく料理を作ったが食事ができない優、そして食事できない状態がさらに悪化しそうな会長の三人だった。余計な一言で怒りを買った会長が王子に痛めつけられる中、優は他の住人を捜そうとリビングを後にしようとす

その瞬間——



——カッ!

夜とは思えないほどの光が放たれ、『渋谷荘』を包んだ。

「ん?」

「おや?」

「……光?」

「これは……」

「まー君、これって何の光?」

「……何だ？」

「あつちからや……」

「……この音と光は？」

光を見た『渋谷荘』とその付近にいた者たち。強い光が印象的だったが、耳を澄ますと何かが噴き出すような音も聞こえる。その原因の元に向かおうと、彼らは外へと出ていく。

そして、そこにあつたものは……

——シユオオオオ

「——花火?」

「H」「e」「p」「p」「y」と巨大文字のように並べられた無数の花火。打ち上げのよ  
うな派手さはないものの、その数の多さから美しさはかなりのものとなっていた。

「み、みんな……。花火、楽しんでほしいのだ……。うう、やっぱり丸くなくても  
花火は怖いのだ……」

「さ、桜小路さん!」

並べられた花火の間を見ると、前に花火を見た時と同じ表情で震える桜の姿があつ  
た。花火に囲まれているというのものもあるだろうが、一番の原因は両手に持つ着火済みの  
花火だろう。ちなみに、背中には着火前の花火が大量に背負われていた。

花火が苦手なはずの桜がこの花火を用意したことを悟り、大神は驚いて声を上げる。  
すると、その声に気付いて他の住民たちも集まってきた。

「ギャツハハハ! なんだよ、桜チャン! そのブツサイクな顔!」

「花火やし!」

「キレー!」

「一体どこからこの量を……」

隠そうともせず大笑いする刻の横では、遊騎と寧々音が目を輝かせる。優は見渡す限

りに広がる大量の花火を改めて眺め、呆れたように呟く。

「……つうか」

優が言うように準備の仕方にも気になるが、それよりも気になる箇所が彼らにはあつた。そして、彼らは声を揃えてその点を指摘した。

『「Happy」ってなに?』

「ふふふ……きつとおまじないですよ」

「え!? 私ハHappyって……ええ!?」

「見てや。オレ、めっちゃキレイやし」

「おい、遊騎。間違っても自分の方に向けるんじゃないぞ」

「ねーねー。アレ、寧々音もやる〜」

「じゃあ一緒にやるか」

「バカヤロー！ ねーちゃんには危ねーだろ！ 一緒にやんじゃなくて止めろー!!」

「花火……『光』関係ならば負けるわけにはいきません」

「脱ぐナー!! つか、あんたが一番危ねーワ!!」

花火を抱えて走りまわったり、細々と楽しんだり。真似したがる者や注意（ツツコミ）ばかりしている者など、それぞれ花火を楽しんでいく『渋谷荘』の住人たち。だが、それを留意した桜はというと……

「う、うう……」

苦手な花火に囲まれ、全身が緊張で固まったままだった。表情も固定されたままである。そんな桜を見て、大神は半ば呆れたように声をかける。

「だ、大丈夫ですか？ あなたは花火が苦手なのに、どうしてこんな……」

「よ、良かったのだ……」

「え？」

「みんな、笑ってくれて良かったなあ……」

涙を浮かべ、緊張で固まった表情。それでも、彼女の口元は満足そうに弧を描いていた。大神は「何がそんなに嬉しいんですか」と首を傾げていたが、桜にそれを言葉にする余裕は無い。それでも、彼女は胸の内でのその問いに答えていた。

(だって、またこうして皆で笑い合える日が来たことが……夢みたいに嬉しいのだ)  
花火に囲まれ、様々な表情を見せる大神たち。その中でも最も多く見せていた表情こそ……桜が望んだ笑顔だった。一時の気晴らしでも構わない。

——カシャ

この瞬間、彼らが笑顔を見せたことは写真という形にもなり、彼らの心にも強く刻まれた。

く次の日く

「うむ！ 皆でゴミ捨てるのも楽しいな！」

「楽しかねーヨ!!」

「……業者からクレーム来そうな量だな」

「……やれやれ」

## 番外篇

code : extra 16 あの人たちのバレンタイ  
ンデー

「なんか、今日は甘い匂いがするわ」

「社長、今日はバレンタインデーですよ」

「バレンタインデー……?」

ふらりと、珍しく住処である自宅に戻ってきた遊騎は、街中で感じたいつもと違う感覚について社員に話していた。そういった一般常識に縁がない遊騎と違い、一般人である社員は今日がバレンタインデーであることを話す。

聞き慣れない単語を聞いた遊騎は首を傾げ、そのままバレンタインデーがどういったものなのか詳しく話を聞いた。

「なるほどなー。そういえば学校行つてた時、毎年チョコもらえる日があつたわ。差し入れや思つてたけど、違つたんやな」

「ちなみにホワイトデーのお返しは私共の方で送らせていただきました」



「チョコ……」

バレンタインデーについて聞き、長年の謎が解けた遊騎。補足するような社員の言葉を聞き流しつつ、遊騎はボーっと天井を見上げる。

そして、ポツリと呟いた。

「……でつかい『にゃんまる』のチョコ、食べたいわ」

『!!』

その何気ない呟きに、屋敷にいた社員すべてが反応した。

「社長から食事のリクエストがあつたぞ！」

「いつも『何でもいい』と仰っていたあの社長から！」

「急いで厨房にも伝えろ！ 本社とも連携して素材と道具を準備させるんだ！」  
あつという間にてんやわんやの大騒ぎ。社員たちはしていた仕事も中断して準備を始めた。一方の遊騎はというと、そんなこと気にせず『にやんまる』の絵本を読んでいた。

そして、数時間後……

「お待ちせしました、社長！」

『『にやんまる』や……！』

遊騎の前に用意されたのは、子どもくらいの大きさの『にやんまる』……の形をした  
チヨコ。どうやって準備したかは不明だが、これほどのものを数時間で用意してしまう

とは、天寶院グループのレベルの高さが伺える。

その社長である遊騎は、目の前に用意された『にやんまる』チョコに、目を輝かせ……  
「♪にやんにやん『にやんまる』みんなのなかま♪こころやさしいにやんこのみかた  
♪」

「やったー」と両手でチョコを抱き、歌いながら走り回り始めた。満足気なその様子  
に、社員一同はやり切った様子で笑顔を向けていた。

こうして遊騎……もとい、天寶院グループのバレンタインデーは過ぎていった。

（翌日）

「……なんやべとべとするわ」

「社長がチョコ塗れになっているぞー！」

「急いで入浴の準備をしろ！」

「いかにも、今日はバレンタインデー！ 私はチョコだつて好きだから、バツチリいつでもウエルカムなんだな！」

「うつせえ！ いい大人が騒いでんじゃねえぞ！」

『渋谷荘』でも、気分はバレンタイン一色となっていた。といつても、なっていたのは会長だけで、王子はそうでもないようだが。

「えく、王子つたらノリ悪くない？ ささ、ギブ・ミー・チョコレートだよ」

「あ？ テメエにチョコなんてやるわけねーだろ。大体あんな甘つたるい物、オレは食うのはもちろん買うのも嫌だしな」

——バタン！

「そ、そんな殺生な〜！」

いそいそとチョコをせがむ会長に対し、王子は冷たい言葉と視線で一瞥してから自室へと戻る。非情な現実には、会長はしばらく扉の前で悶えていたが、そのうちに諦めてトポトポとその場を後にした。

「いかにも、動いたから小腹が空いたんだな。何かないかな？」

気を取り直して、とでも言わんばかりに台所にやってきた会長。腹の虫を鳴らしながら、手ごころな食べ物を捜しにあちこちを探る。

しかし、どこを捜しても出てくるのは食材や調味料のみ。料理する気などさらさら無かった会長にしてみれば意味は無いものばかりである。散々な結果に肩を落としながらも、最後の希望として冷蔵庫を開いてみる。

「うーん、ここも野菜とかしか……ん？」

丁寧に保管されている野菜や肉類の中に、明らかにそれらとは別物の色を見つける。ちようど一口で食べられるほどのサイズの丸型で、食欲をそそる甘い匂いを放つ……茶色の菓子。

それは、誰がどう見ようとチョコレート。詳しく言うなら、トリュフチョコレートと呼ばれるものだった。さらにそのチョコが等間隔に並べられた皿の下には、短い言葉がかかれた紙が一枚。

## 『勝手に食え』

「……いかにも、勝手に食べていい物だからあげたわけじゃない、つてことかな？　相変わらず回りくどいやり方なんだな。王子らしいといえばらしいけど」

皿と一緒に紙を取り、そこに込められた王子の意図を察する会長。その回りくどいやりに、ため息をつきながら紙をぼいとゴミ箱に投げ捨てる。王子らしいやり方でもらうことができたチョコを一つだけ摘み、そのまま口に入れる。着ぐるみなのにどうやって食べているのか……などはこの際、気にしないことにしておく。

「うん！　いかにも、美味なんだな！」

口内にじわりと広がる優しい甘みを感じつつ、会長は満足そうにピツと片手を挙げる。そうして次のチョコに手を伸ばし、充実したバレンタインデーを過ごしていった。

「……………」

——くびっ

「……………つたく、面倒くせえ」

『捜シ者』ー!! いっぱいチョコ買ってきちやいましTAA<sup>た</sup>!!」

とある高級ホテルの入室……『捜シ者』と『R e — C O D E』が現在の拠点とする一室に、日和の明るい声が響き渡る。外出から帰ってきた彼女の手には、大量のチョコが入った袋が握られていた。

「そんなにあつても邪魔」

「また無駄な出費を……」

「……………ふ、バレンタインというやつか」

雪比奈と時雨が冷めた反応をする中、日和の意図を察した虹次が静かに呟く。一人でもわかつてくれた者がいて嬉しいらしく、日和はパタパタと両手を振りながら部屋を駆けまわる。

「正解だYOよ〜！　せつかくイベントがある日なんだから楽しまないと絶対に損  
JANジャン！」

「……ていうか、バレンタインって何？　そいつを殺せばいいの？」

「そんな血生臭いイベントじゃないYOよ！　つか、バレンタインを知らないとか雪比奈あり得ない！」

『Re—CODE』として、一般的とは言い難い難しい人生を歩んできた日和だが、年若い女子であることは変わらない。イベントには敏感なのだろう。

それに対して、雪比奈は常識など欠片も感じられない言葉を口走りながら首を傾げる。これを冗談などではなく本心で言っているのだから余計に恐ろしい。

「仕方あるまい。雪比奈は興味が無いことに関してはまず知ろうとしない。行事や祭事なども、確実にその部類に入るしな」

「うわ〜、女につまんない男って言われるYOよ？」

「別に知らなくても死なないし」

「それには同意するな」



「時雨まで冷め過ぎー！」

そんな雪比奈をフオローする虹次だったが、当の雪比奈は特に気にする様子も無く冷めた反応をする。そこに同意する時雨も、相当に冷めているタイプの人間だと伺える。しかし、いくら日和がバレンタインを楽しもうと考えていても、こうまで冷めた人間が揃っていては難しいだろう。

「あーM<sup>も</sup>Oー！　こうなったら日和だけで楽しんじゃうS<sup>し</sup>Iー！　後で謝ってきても遅いんだからー！」

「虹次、結局のところバタンレインって何するの？」

「バレンタイン、だ。簡単に言うなら、好いている者にチョコを渡す日だな。外国では関係ないが、日本では女子おなじから渡すというのが一般的だな」

「要するに浮かれた奴らが行う愚行ということか。くだらない」

意地でもバレンタインを満喫しようとする日和に対し、男性陣は日和との圧倒的な温度差を維持したまま話を続ける。

最終的に愚行とまで吐き捨てる時雨は、特に興味を示さぬまま新聞に目を通す。

「ハグハグハグ!!　ヤケ食いしちゃうんだから！　止めても無駄だM<sup>も</sup>ON<sup>ん</sup>ー！」

「日和、チョコに酔かけない」

「ゴクゴクゴク!!　ヤケ飲みだつてしちゃうS<sup>し</sup>Iー！」

「日和、ホットチョコに納豆混ぜない」

自分が買ってきたチョコを、相変わらずの異色の組み合わせで食べていく日和。時雨は新聞に目を通しながらも、日和に細かく注意していく。

「……甘いし、ベタベタする。後は虹次が食べて」

「苦めのものならいいだろう」

一方で、雪比奈と虹次もチョコを食している。しかし、雪比奈は一口食べただけで嫌気がさしたらしく虹次に全部渡す。当の虹次も、苦めのチョコを選んでいるためその減りは遅いが。

……  
ちなみに彼らが自由にやっている間、変わらず窓辺に座り込んでいた彼はというと

「  
Z  
Z  
Z  
……  
」

く  
おまけ  
く

「……甘い、ね」  
——パリ

「Z  
Z  
Z  
……」

「Z  
Z  
Z  
……」

『いやあ、チョコのベッドにチョコの枕……意外と寝心地がいいね』

「ZZZ……」

『コード：01』人見……寝てばかりの彼も、彼なりにバレンタインを楽しんでいた。

code : extra 17 あの人たちのホワイトデー

「突然だけど、日和<sup>チャ</sup>CHANクイズ！ 今日は何の日でしょう？ KA!？」

「3月14日……円周率にかけて数学の日と呼ばれている」

「行事としては廃れたが、国民融和日だ」

「興味ない」

「わかってた！ わかってたYO！ このメンバーが当てられるわけないって最初からわかってたMON!!」

まずホワイトデーという言葉すら浮かばない時雨、虹次、雪比奈の三人。彼らの見当違いも甚だしい答えを聞き、紅一点である日和は一人涙を流し続けた。

「ホワイトデー……白の日、か。……ふっ」  
そして、『捜シ者』は『捜シ者』で謎の笑みを浮かべていたという。

「ホワイトデー?」

「ああ」

普段は聞き慣れない単語を聞き、遊騎はカクンと首を傾げる。その反応は予想していたらしく、話していた王子は呆れることも無く頷く。

本日は3月14日。まさにホワイトデー当日であり、そのことを思い出した王子が話し始めたことがこの流れのきっかけである。

「……ブラックデーは?」

「んなもんねえよ。ホワイトデーはバレンタインデーとセットみたいなイベントだ」「バレンタインデー……前に聞いたことあるわ」

たまたま街中で出会った二人だったが、意外と話が続きそうになり近くにあつたベンチに座る。そこで王子がホワイトデーについて説明を始める。

「ホワイトデーは……言ってみればお返しの日だな。バレンタインデーにチョコをもらった奴は、チョコをくれた奴にクッキーとかを送る、っていう」

「クッキーだけなん？」

「いや、色々あるみたいだぜ？ 確か本命はキャンディーだかマシユマロだか……オレもよく覚えてねえけどな」

「本……命？」

「一番お返ししたい奴、とでも覚えとけ」

簡潔にまとめ、補足も加えながら説明していく王子。遊騎は首を傾げてばかりだったが、その度に説明もされたため理解はできたようだった。

「お返し、なあ……」

「お前もチョコももらったんならちゃんと返せよ。もらった分は返すのが礼儀つてもんだ」

最後にそれだけ言うと、王子はそのまま立ち去っていく。遊騎はその背中を見送り、



見えなくなると空を見上げた。

その夜、天寶院グループ全社員は動揺を隠しきれない様子である場所に向かっていった。

「一体、何事なんだ!? 急に全社員本社に集合なんて!」

「わからん……。なんでも社長命令らしいが」

「あの社長が!? 今までそんなことなかったぞ!」

まさに数時間前、まだ記憶に新しい時間に全社員に伝えられたメッセージ。

『今夜、7時に本社大ホールへ集合』

簡潔な内容だが、その簡潔さが逆に緊急性のようなものを感じさせた。そもそも、社長の奔放さは全社員がわかりきっていることであり、その社長から集合がかかるなど今までなかったのだ。なにか大きな事件か、事故か……あり得ないことだが天宝院グループ存続に関する危機か。

嫌な想像が社員たちの頭を行き来し……そうしている内に本社大ホールは無数の人で満たされた。

天宝院グループ本社の大ホールはパーティ会場のように広く、全社員が集まっても余裕があるほどである。それでも、人が集まれば噂がされ、その噂にも尾ひれがついて回っていく。ざわざわと動揺が大きくなる中、その動揺を鎮められる唯一の人物が現れた。

「しや、社長！」

「天宝院社長！」

「皆、集まってくれてあんがとな」

全社員を集めた張本人である社長……遊騎の登場に、全社員の視線は遊騎に集中す

る。それに臆することなく、遊騎はいつも通りに話し出す。マイクも使っていないのに全社員に声が届いているところを見ると、『音』を使つて声を届けているようだった。

「社長、一体何があつたのですか!？」

「全社員を集めるなんて、よほどのことがあるとしか思えません!」

「お願いします! 説明を!」

次々に不安に駆られた声が上がる中、遊騎は何も答えずその場に立ち尽くす。その間にも社員たちからの声は止まることなく発せられる。

それでも遊騎はその場に立ち尽くし……静かにその手に持ったスイッチを押した。

——バサッ!

「な——!？」

「こ、これは……!」

スイッチを押したと同時に、ある変化が起きる。大ホールの前方……最前列にいるものでない限り気付かなかつたが、そこには黒い布がかぶせられた巨大な置物があつた。

だが、スイッチを押した瞬間にその布は取り払われ、その中身が露わになる。その中身に、社員たちは愕然とする。

「……お菓、子？」

「なんやようわからんけど、今日はホワイトデーってお返しの日らしいわ。オレ、前に『にゃんまる』のチョコもらったから、返さなあかんと思つたから皆に集まってもらつたんや」

先ほどまでとは違う意味の動揺が広がる中、遊騎は淡々とその意図を説明していく。

つまり、王子からホワイトデーについて聞いた遊騎は、ならお返しをせねばと用意をし、チョコを用意してくれた社員たちを集めたというわけだ。言ってみれば、まさにサプライズパーティーというわけである。

そして、遊騎は改めて全社員を見渡し、静かに最後の言葉を告げる。

「ありがとな、皆」

「しや、社長オオオオオ!!」

「一生! 一生ついていきますううう!!」

この日、天寶院グループにて社長に対する信頼が一気に増大したのは言うまでもない。

そして、それについて遊騎が特に深く考えていないということも言うまでもない。

「菓子、美味しいわー」

「いかにも、ホワイトデーというのは『綺麗な薔薇には棘がある』という言葉をなんとも上手く表した日だと私は思うんだ」

ポツリと、やけに真剣な雰囲気を感じさせながら会長は呟く。そのせいか『渋谷荘』の、彼が今いる一室が異様に重苦しく感じる。

「女の子からチョコをもらい、お腹も心も満たされる……。けど、それは文字通り甘い罠なんだ。チョコだからね」

両手を腰に添え、一步一步ゆっくりと進んでいく。その声色だけでなく、俯かれた顔からも……。彼にとつて今話している議題がどれだけ大切なことであるかが伺える。

「でも、受け取ったら最後……。一ヶ月後には、お返しをしなければならぬ。それも……。一般的に言われるのは『倍返し』。倍……。倍なんだ」

『倍返し』……。その言葉を口にした途端、会長の足は止まる。そして、さらに深々と顔を俯かせ、まるで何かを溜めこむかのように身体を震えさせる。

震えに震え、若干の発汗すら見られる。そんな状態が数秒続き、そして……

「いかにも、王子への『倍返し』のアイデアなんて欠片も考えていなかったんだな！」  
「そもそもホワイトデー自体忘れてたよ」とちやつかり付け足す会長のその姿は、反省など欠片も感じさせない。ただ単に目の前の現実から目を背けるだけのダメな大人そのものだった。

「つて！ これはさすがにヤバすぎるよ!? お返しを忘れてたなんて知られたらR18なシーンが流されちゃうよ！ グロ注意になっちゃう！ つまり私の命が危ないんだよ！」

開き直ったのかと思いきや、すぐにドタバタと慌てだす会長。どうやら相当に焦っているらしく、汗をダラダラ流しながら頭を抱え、近くに置いてあるものを全てを蹴飛ばす

勢いで部屋の中を走り回っている。

「——そうだ！ ハッキリともらったわけじゃないんだし、そもそもお返しなんてする必要ないんだ！ 王子だって『勝手に食べる』って書いてたわけだし、問題ないよね！ 問題……………」

く想像したく

「あのチョコ、別にハッキリともらったわけじゃないから何も用意してないよ？ メモの通り、勝手に食べただけなんだな」



「どちらにしろ食ったんだろうが!! しかも全部食ったくせに皿も洗わねえし、片づけねえ! その分も含めてきっちり『倍返し』しやがれ、ゴラア!!」

「い、嫌アアアア!!」

(……いかにも、詰んだんだな)

ふと見つけた解決策を実行した未来を想像し、会長は悟ったような表情で遠くを見始めた。まるで仏のように清々しい表情をしており、見ている者も清々しさを感じるようだった。

「こうなったら……今日はこのまま出かけちゃおう。ホワイトデーさえ過ぎれば返す必要はなくなる。手痛い出費だけど、ホテルに一泊するくらいは——」

「おう、今帰ったぞ」

(いかにも、完全に詰んだんだな)

最後の手段ともいえる外出すら、実行する前に失敗に終わる。会長のこの清々しい顔

が、これから鮮血に染まると考えると、思わず身震いしそうになる。

すると、せめて少しでも生きる可能性を増やそうと考えたのか、会長はいつも以上に迅速に動いた。

「お、おかえりなさいませ、王子様！ 上着はかけておくよ!? 靴も磨いておくんだな！ あと、いつものボトルもちゃんと部屋に持っていくからご安心を!!」

「……なんか今日はやけに素早いな」

「いやいや！ いかにも、私はいつも通りだよ!?」

「……テメエ、何か隠してるだろ」

「ドキイ!!」

汗をダラダラと流しながら迅速に動く会長のその姿は、まさしく異常そのもの。あからさまに怪しむ王子の視線を受け、会長はビクリと身体を大きく跳ねさせた。

「渋谷……オレがいる『渋谷荘』で隠し事するとはいい度胸じゃねえか」

「違うんです、王子様！ これには深海より深い訳が——!」

「オラ！ 洗いざらい吐け、コラア！」

「嫌アアアア!!」

「あ？ ホワイトデーのお返し？ んなもん最初から期待してねーっつの。大体、『倍返し』とか見込んで置いていたわけじゃねーしな。ったく、下らねえ。オイ、渋谷。自分で言ったんだから、さつき言ったことは全部やっておけよ」

「い、いかにも……」

『倍返し』の心配自体が杞憂であり、無駄に重傷を負った会長であった。

くおまけく

「ZZZZ……」

もはやこの人に関しては何も言うまい。

## code:extra 18 流麗の守護神

「……………」

チャポン、とボトルの中でウイスキーが音を立てる。自分がボトルを動かせば、それに合わせて音は立ち続ける。しばらくその音を聞き続けたかと思うと、静かにテーブルの上に置く。

倒れる様子も無い、常に携帯している愛用のボトル。夜の『渋谷荘』のリビングで八王子 泪は、何も言わずにボトルを見続ける。

「……………」

しかし、すぐに再びボトルを手に取り、口をつける。その様子は、まるで何かに耐えていたが、我慢できずに……そのように見えた。

「……………」

飲める分だけ飲み終えると、王子は懐へと手を伸ばす。そこにある薄い物に触れると、ゆつくりと出して机の上に置く。

それは、かつて同志だった者たち……虹次と雪比奈と写ったあの写真だった。

この写真は、今となっては王子が『Re—CODE』に所属していたことを証明する数少ないもの。そして、今の彼女の立場を考えれば……確実にその立場を危うくするものでもある。

それでも、王子は子の写真を手放そうとはしない。この写真が原因で、今まさに行動を共にしている仲間に敵意を持たれようとも。

この……一度切り離れた後に再び繋げられた写真は、決して手放そうとはしなかった。

——ズアツ!!

「が……………」

屈強な体格をした男の胴体に一線が入り、そこから上半身と下半身とでずれていく。その背後では、同じ位置で真つ二つに切り裂かれている男の影があった。

「……………ふん」

下半身という支えを失った上半身、力さえ保てなくなつた下半身が音を立てて倒れる。命を失い、物言わぬただの物体となつた男に冷たい視線を送る女性……………八王子。黒いコートに腰まで伸びた髪と、現在とは違つた出で立ちをしているが、その手にある黒い鎌……………それは彼女のみが操る『影』の鎌だつた。

「……………」

特に言葉をかけることもせず、王子は鎌を消して男の身体に背を向ける。周囲には、すでに崩れかけた建物ばかりで、人の気配はほとんど感じない。それもそのはず、彼女がいる場所は一般的にゴーストタウンと呼ばれる場所で、すでに荒廃した元町なのだ。

だが、なぜそのような場所に彼女が、そして彼女の手にかかった男がいたのか。そん

な疑問をよそに、人がいないはずのそこで王子に近づくと二つの人影があった。

「やっぱりここか」

「その様子だと……すでに用事は終わったようだな」

一人は黒を主調としたフードと十字架型のアクセサリを首から下げた褐色の男。もう一人は胸元を少しはだけさせたスーツを着る左目に癒痕を刻んだ男。

多少の違いはあれど、その要旨はほとんど現在と変わらない……雪比奈と虹次の二人だった。

「……お前らか。つうか、なんでここにいるんだよ。気配まで消して見物しやがって」

「泪のすることなんて、よほどのバカじゃない限りわかる」

「ああ!? ようするにオレはバカだって言いてえのか!?!」

「そう言ったつもり」

「そこまですておけ、雪比奈。話が横道にそれたままになる」

明らかな雪比奈の挑発に、王子は先ほどまでの静かな雰囲気とは真逆に猛々しく彼に掴みかかる。そんな一触即発の二人の間に割って入った虹次は、二人を落ち着かせて話を続けようと少し先に転がる男の死体に視線を向けた。

「あの男……近くの町を騒がせている連続強姦殺人魔だろう。噂されていた見た目と同じだ。被害者の発見現場も、このゴーストタウンと町のちょうど中間地点だからな。



ここに潜んでいるだろうことは明白だ」

「それに気付かない町の警察はただの無能の集まり」

死体と化した男の正体を詳しく話す虹次。その横で雪比奈は棘のある発言をしているが、虹次はそれについては何も触れず王子を見る。そして、静かにその肩を叩く。

「お前のことだ。どこかで奴のことに気付いて、始末せずにはいられなかつたんだろう。町で奴の噂を耳にしていた時のお前は、とてもじゃないが穏やかとは言えない様子だったしな」

「……チツ」

全てを見透かすような虹次の眼に射抜かれ、王子は視線を外しながら舌打ちをする。それは、虹次の推理が正解であると認めたと、長い付き合いである虹次にはわかっていった。

すると、またも雪比奈が横から突つかかってきた。

「異能者でもなんでもない、ただの『悪』<sup>クズ</sup>を殺しに行くなんて時間の無駄。『コード：ブレイカー』の真似事なんかやる必要ない」

「奴らの真似なんかしてねーよ。ただ気に入らねえから始末しただけだ。それ以上でも以下でもねえ」

「本人がそう言っているんだ。そういうことにおいてやれ、雪比奈」

王子の行動を「無駄」と言い切る雪比奈に対し、今度は冷静に言葉を返す王子。そんな二人を見て、虹次はフツと笑みをこぼし、そのまま歩き始めた。

「さあ、戻るぞ。『捜シ者』も、そろそろ待ちくたびれた頃だ」

「……ああ」

虹次の言葉を受け、王子も静かに歩き始める。彼らが共に歩むべき唯一の人物の元に。虹次と雪比奈と同じ……一人の『Re—CODE』として。

そうして、王子が『Re—CODE』として活動を続けて数年が経った。世界中を転々としていた彼女らが再び日本を拠点にし、ちようど日和と名付けた少女を保護した頃のことだった。

「あ？　写真？」

「……ん」

首を傾げる王子に対し、日和はコクンと小さく頷く。複雑な境遇に置かれ、ほとんど他者を信用しないようになっていた日和だったが、王子たちに対しては少しずつ心を開いていくようになっていた。その証拠に、彼女の髪には王子がプレゼントしたりボンがしっかりと結ばれていた。

そんな日和が、どこから拾ってきたのかカメラを手にして「写真を撮りたい」と言ってきた。突然のことに理解が追いつかない王子だったが、日和がポツリポツリと説明を始めた。

「みんなと……ずっと一緒にいたいから。写真だったら、ずっと持つてられるし……証拠にも、なるから……」

「日和……」

小さな手でカメラを握りしめる日和。思えば、日和自身から「これがしたい」と言ってきたのは今回が初めてだった。子どもの成長などには詳しくない王子だったが、これも成長や信頼関係の賜物かとふと思った。

「……しようがねえな。今ここに全員はいねえけど、めんどくせえからさっさと撮るぞ」

「……うん！」

そして、王子は近くにいた他の『Re—CODE』たちに声をかける。否定的な態度

の者もいたが、ちょうど暇だったこともあり、最終的にはその場にいた全員が一列に並んだ。

「面倒臭い」

「うるせえぞ、雪比奈。一回で終わりなんだから黙って立ってろ」

「泪、そういうお前はなぜ日和に背を向けている？ それでは顔が見えんぞ」

「……しゃ、写真なんてほとんど撮られたことねえから、どんな顔していいのかわかんねえんだよ」

並んだ方がいいが、ガヤガヤと静かにならない一行。彼ららしいといえづらいが、撮る側としては困ってしまう。まして、日和はまだ幼い少女だ。どうすればいいかわからず、ただあたふたとしていた。

「え、えつと……えつと……」

いつ撮るべきか、どう撮るべきか考え続ける日和と、まとまる気配がない王子たち。考えに考えた末、日和は……

「る、泪！」

「あ——？」

——カシヤ！

「ハハハ！ おい、雪比奈！ お前、口がポカンって開いてるじゃねえか！」

「顔半分と背中しか映ってない泪に言われたくない」

「ちようど振り向いた時だったからな。仕方ないだろう」

「つか、なんで虹次はちやつかりカメラの方見てんだよ」

「オレはいつ撮られてもいいように構えていただけだ」

現像した写真を見て、各々で感想を言い合う王子たち。撮るまでが大変だったが、いざ完成した写真を見てみるとよく撮れているように見えた。

撮影した日和も、満足そうに笑みを浮かべていた。

「……なあ、日和。なんで撮る時、オレの名前呼んだんだよ」

「泪が、こつち見てなかったから……」

「そ、それはなあ……」

「やつぱり、泪の顔はちゃんと写真にしたかったから……よかった」

「……ハア」

撮影の際、急に名前を呼ばれたことで反射的に振り返った王子だが、結果としてそれが満足できる写真へと繋がった。終わり良ければ総て良し、と考えれば良い結果であることは違いない。そう考えて、王子はそれ以上言うのをやめた。

「つか、日和。ココ、一人肩だけしか映ってねえぞ」

「……あ」

ただ一点だけを除いて。

「泪!」

「……日和」

先のものも見えないくらい激しい吹雪の中、少女が女性王子の背中を追う。吹雪によってほとんどの音がかき消されながらも、なんとか届いた日和の声に王子は振り向く。

その顔は吹雪のせいもあり、よく見えない。一方の日和は息を切らしており、信じられないといったような表情をしていた。

「嘘……だよな?」 泪が、『R E E | C O D E』じやなくなるなんて……。『コード:ブレイカー』になるなんて……。皆を殺した……。『コード:ブレイカー』になんて……」

「……………」

日和の問いかけに王子は何も答えない。ただ静かに日和を見下ろし、その表情を見つめていた。彼女たちにとって、『コード:ブレイカー』というのは敵以外の何者でもない。

数か月前に起こった『捜シ者』たちと『コード：ブレイカー』たちとの闘い。『コード：ブレイカー』の大半が再起不能・死亡という痛手を与えたが、同様に『捜シ者』の勢力にも多くの犠牲が出た。特に、あの写真にもわずかながら写っていた当時の『Re—C ODE』の一人が死亡したというのは大きな犠牲だった。

——オオオオオオオオ……

すると、王子の様子に合わせたように激しかった吹雪の勢いが弱くなる。吹雪に吹かれ続けていた髪が一瞬だけ普段通りに重力に従う。まさにその瞬間であった。

「……ああ、本当だ」

王子の口から、決定的な言葉が放たれたのは。

「……………」

再び吹雪が勢いを増す。無数の雪が肌を冷やすが、もはや寒さも感じない。寒さ以上に、精神的に感じた衝撃の方が大きかったからだ。口を動かそうとしても、上手く言葉が出てこない。これも寒さで凍えているためではない。言葉の出し方も忘れるほど、日和が感じた衝撃は大きいものだった。

「……………な、んで」

「……………お前に言う必要はない」

ようやく出てきた言葉に対しても、王子は冷たい言葉を返す。そのまま日和に背を向



け、何の躊躇もなくその足を一步前に出す。

——ギユ

だが、日和の小さな手がコートを掴んでその足を止める。

「離せ、日和。何をして……変わらない」

「……嘘、だよ」

コートを掴んだ手がかすかに震える。それが震えるくらい力を込めているからだ、王子は背中越しながら感じていた。それでも何も変わらないことを告げるが、日和は手以上に震えた声で否定する。

「家族に……なつてくれたんだもん。一人になった日和に、たくさんのもんくれた……。日和の傍にいるって、言ってくれ——」

——ビリイ!

「ツ——!!」

日和の目の前で、一つの長方形が裂ける。

それは写真。かつて日和が撮った、王子、虹次、雪比奈が中心に映った思い出の一枚。

その写真を、王子は自らの手で切り裂いた。自分が写った部分と、虹次と雪比奈が写った部分。それは言葉で聞くよりも確実に目で見える、彼女の『R e | C O D E』からの決別を意味していた。

「……………これが現実だ。次に会うことがあれば……………オレたちは敵同士だ」

┌

王子の言葉に、日和は何も答えない。ただ呆然と、衝撃で見開かれた眼で王子を見つめていた。彼女のコートを掴んでいたはずの手も、力無く下を向いている。

——ザツ

立ち尽くす日和に、王子もそれ以上の言葉をかけようとはしない。振り返る様子もなく、一步を積み重ねていく。

二人の距離が離れていくごとに、どんどん吹雪の勢いが増していく。それはすぐに互いの姿を見えなくさせ、二人の間に白い壁を形成しているようだった。

そうして家族であったはずの二人は別れ、八王子 泪は『流麗の守護神』から『裏切り者』となった。

「……ハア」

頭に浮かんだ過去の記憶を振り払うかのように、王子は首を横に振る。そして、ポトルに残ったウイスキーを全て流し込み、勢いよく立ち上がる。そうして窓の前まで歩き、そのまま窓を開けて外の空を眺める。

点々と小さいながら無数に散らばる星の中にある一際強い光を放つ月。太陽と比べれば眩しさを感じることはないが、その時の王子が見た月からはどこか神秘的なものを感じ、思わず目を細める。広い夜空に存在する星々と月。夜を照らすその光を目にしてから、王子は改めて写真へと視線を移して一人の人物を思い浮かべる。

(……日和)

どうしようもならない決別をわからせるために、破かざるを得なかった少女が自らの意志で撮った一枚の写真。破った後でも捨てることはできず、再び繋ぎ合わせて持ち続けている。

自分の行動で、かつて自分を心から信じた少女の心にどれだけの傷を刻むか、築いてきた信頼が憎しみにすら変わるであろうことはわかっている。それでも、彼女に後悔はない。何が起ころうと、自分がどう思われようと構わない。

彼女にあるのは、その覚悟だけだった。

（お前たちとの闘い……『コード・ブレイカー』として、オレは容赦するわけにはいかない。……それが、虹次との誓いでもあるしな）

写真を再び懐にしまい、王子はグツと拳を握る。『コード・ブレイカー』として、誓いを交わした同志として……改めてその覚悟を噛み締めるかのように。

（——だが、それでも……）

しかし、それでも人というのは完璧ではない。全て自分の思う通りにはいかない。たとえそれが自分自身のことでも。

（日和……お前との闘いだけはないことを祈りたい）

『流麗の守護神』であろうとも、捨て切れない優しさがあるように。

その微かな願いを秘めて、後に彼女は闘いへと赴いていった。

code:extra 19 『渋谷荘』、過去の住人たち

朝の風景

「うん！ いかにも、今日もいい天気なんだな！」

寝間着姿のまま、会長は自室のカーテンを開けて外の天気を確認する。開けた瞬間、全身を優しく包み込むような温かさを持った日光が視界いっぱいになり、思わず目を細める。それでも、身体を芯から温めて目も覚まさせてくれる温かさがあるため悪い気はしない。会長は「うんうん」と頷いた。

「…………おや？」

ふと視線を下に向けると、庭の木々が昨日までと比べて整っている。まるで一流の庭師が整えたかのように、鮮やかな風情を朝日と共に醸し出している。

「いったいなぜ…………と首を傾げたところで一人の人物が現れる。麦わら帽子を被り、首にタオル、長靴に軍手と、完全に庭いじりをする格好をしている。ただ一点…………

「ああ、君だったのか。なら、納得だね。朝からご苦労様！」

『捜シ者』君！」

「あ、おはようございます。お師匠様」

まるで明暗を逆にしたかのように白い学ランに身を包んでいるということ以外は。

「今日はちよつと早起きしましたので、朝食のついでに庭も綺麗にしておこうかと思つて」

「いかにも、感心だね！ 熱心な弟子を持つて、私も鼻が高いよ！」

やんわりとほほ笑みながら何気ない言葉を口にする『捜シ者』。その優しげな様子はまるで「畑仕事をするおじいさん」にも通じるものがあり、なぜか異様に似合っている。



そんな『捜シ者』に対し、会長は寝起きであることを隠そうともせずそのまま話をする。そして、まるで自分の手柄であるかのように偉そうに胸を張り始めたが、すぐにつくりと俯いてしまった。

「これでもう一人の住人も君みたいに真面目だったらよかつたんだけどねえ……。彼のことだから、今日もまだ寝てるんでしょ？」

「はい。何度か起こしに行きましたが、見事にぐっすり」と

「やつぱり……」

予想通りの現実だと知らされ、会長はため息をつきながらより一層深く俯く。しかし、未だ温かく全身を包み込む朝日のせい、目の前で柔らかな笑顔が浮かべ続ける『捜シ者』のせい。あまり深く考えようとはせず、すぐに気分を切り替えたように会長は頭を上げる。

「ま、今はいいや！ 起きたからご飯食べよーつと！ ところで、今日の朝食はなんだったのかな？」

「今朝はご飯とわかめの味噌汁、卵焼きとお浸しに漬物です」

「うむ！ 日本人らしい朝食だね！ さて、私より長く寝てる人には何も残らないよう、たくさん食べなくちゃ」

そう言って、会長は寝間着のまま食卓へと向かい始める。そんな自由な会長の後ろ姿

を、『捜シ者』は相変わらずの笑顔で見送っていった。

(……………ふう)

食卓へと向かうために廊下を歩く会長。その足取りは軽いものだが、その胸中は先ほど浮かんだ悩みで未だに満たされていた。

そう、もう一人の住人について。

(本当にしようがない弟子なんだな……………人見は)

今も自室で大口開けて寝ているであろう、寝るのが大好きな弟子の顔を思い浮かべながら、会長は食卓へとその足を進めていった。

——ガラン

「…………あれ?」

しかし、食卓に着いたところで会長はピタリと全身が静止する。朝食があると思つていたテーブルには何も無く、調理器具もきちんと片づけられている。

もしやと思つて冷蔵庫を覗いてみたが、ほとんど何も無い。少なくとも、先ほど『捜シ者』から聞いた今朝の朝食のメニューは。

…………と、そこでどこからか声が響く。

「確かに人見の寝過ぎは注意すべきです。ですが、お師匠様も十分に長く寝ていますからね? そして、長く寝ているような人には……言われるまでもなく何も残っていないんですよ…………?」

「…………は、はい」

この弟子も（自分が不真面目故）十分に悩みの種になる、と感じながら、会長は大人しく自分で朝食の準備を始めた。

く修業の佳境く

『フラッシュ・オーバー  
空中放電』！』

『PRESSER  
空間圧殺』！』

修行の時間を迎え、人見と『捜シ者』はそれぞれが持つ異能でカラクリ珍種を次々に蹴散らしていく。

広範囲に広がる人見の『電力』はカラクリ珍種を炭と見間違えるほど黒く焦がし、一瞬でその動きを止めてしまう。さらに、自分に向かって突っ込んでくる手の平サイズのカラクリ珍種の動き一つひとつを全て見切っており、かすることもなく次の攻撃へと移行していった。

同様に、『捜シ者』の『絶対空間』による空間を操つての攻撃は一撃でカラクリ珍種を次々と破壊していく。また異能だけではなく、会長から仕込まれた剣術も織り交ぜながら向かってくるカラクリ珍種全てを残骸にしていった。人見と同じように、一撃もかす

ることなく。

(カラクリ珍種を使う修業としては最高難易度だが、あんなに軽々とこなしている……。一つひとつが手合わせ時の私と同じスピードとパワーを持っているというのに……)

「…………ふう。いかにも、末恐ろしい二人なんだな」

修行場で見事な動きをする二人の弟子を見て、会長は思わずため息を漏らす。今、彼らが行っている修業は、会長の修業の中では最終段階に近いレベル。手合わせ時の会長……コケシを取った大神たちが手合わせした際の会長と同じスピードとパワーで動く無数のカラクリ珍種を相手にする修業。また、このカラクリ珍種は動きだけでなく、異能の通りにくさも最高レベルで、生半可な異能ではまず弾かれる。

少なくとも、大神たちでは一分ともたないレベルの内容だった。そんな修業を、人見と『捜シ者』の二人はというと……

「『捜シ者』く、そっちはもう何体壊した？」

「144体つてところかな。そっちは？」

「142……今回は良い調子だと思っただけだなあ」

「まだ同等じゃないか。ほら、行くよ」

何事も無いように言葉を交わすほどの余裕を見せながら、カラクリ珍種を相手にして

いた。どこまでも人間離れた二人だが、冷静に考えれば納得できることでもある。

片や『コード：ブレイカー』のエースである『コード：01』の称号を長年維持してきた人見。その長さは、歴代の『コード：01』の中でも上位に入る。

そして、その『コード：ブレイカー』の上に位置する存在である『コード：ネーム』と呼ばれる者たちの一人……『コード：シーカー』こと『捜シ者』。どちらも並みの異能者ではない。

「はあああああー！」

「おおおおおー！」

そして、最終的には両者ともに300を超えるカラクリ珍種を無傷で破壊し、見事この修行をクリアしていった。

く『渋谷荘』の元・真の主？く

「いやくだからね？ ついさつきまで修行をしていたんだから、お互いに疲れてると思うし……」

「確かに疲れてるけど、それを理由に放棄しようとは思わないかな」

「疲れてる時に無理にやっても、良い結果は出ないと思うよ？ 急がば回れというし、

ここは昼寝でもしてからでも……」

「それは、単に君が寝たいだけだろう？」

「……正解」

修業を終え、思い思いの時間を過ごそうとする人見と『捜シ者』。しかし、そんな両者の間には奇妙な緊張感が漂っていた。

一方の人見は冷や汗を流し、しどろもどろといった様子で『捜シ者』を言いくるめようとしているように見える。それに対し、『捜シ者』は爽やかな笑顔を浮かべながらも、不動の山のようにどっしりと構えており、人見の言葉を華麗にかわしてみせていた。

この二人、何を理由に対立しているのかという……

「さ、諦めて掃除をするよ?」

「ええ〜……」

どこから用意したのか、バケツ、雑巾、ゴム手袋など……掃除のための道具を一層爽やかな笑顔を浮かべる『捜シ者』。その笑顔を見て、人見は思いきり顔を引きつらせた。

「いやね、掃除をするのは良いことだと思うよ? けど、なんでわざわざ修行が終わってすぐにやらなきゃいけないんだい?」

「身体を動かしたばかりの今なら目が冴えてるだろう? いつも寝てばかりでろくに掃除もしていないんだから、良い機会じゃないか」

「むしろ身体を動かしたから今すぐにでも寝たいんだけど……」

どうやら、『捜シ者』は何が何でも人見に掃除をやらせたいが、当の人見はそれを拒否しているようだ。互いの言い分を言い合いながら、一步も譲ろうとしない両者。その言い合いはいずれ無言の睨み合いへと化し……



「……………」

「……………」

しばらく睨み合った結果……決着は着いた。

「……はあ、わかったよ。確かに、少し埃っぽくなってきたかなとは思っていたんだ」  
参った、と両手を挙げる人見。その姿を見て、『捜シ者』は満足気に微笑む。

「そう言ってくれると思ってたよ。それじゃあ、人見は自分の部屋と一階をよろしく」  
「え？ もしかして掃除って、『渋谷荘』全体……？」

「他の場所は私がやっておくから。さ、行くよ」

「……早くも後悔したよ」

『捜シ者』から道具一式を手渡され、トボトボと歩く人見。その背中からは滲み出る後悔を感じるが、今となってはもう遅い。

そんな後ろ姿を見ながら、会長は煎餅の袋を開けながら手を振る。

「いかにも、よろしくね〜」

「もちろん、お師匠様もやるんですよね？　だって、『渋谷荘』の主ですよのね？」

「え、えーつと……いかに、私はこれからやるのが……」

「お師匠様？　今ならまだ、人見と分担して一階の半分ほどのスペースをやっていただければ何も言いませんが……？」

「誠心誠意お掃除してきます……」

「はい、よろしくお願いします」

しかし、『捜シ者』に許されるはずもなく、彼も道具一式を持ってトボトボと歩き出した。

く月と星く

「目には目を　歯には歯を　悪には厳正の閃電を」

「ぐああああ!!」

深い闇に閉ざされた夜の世界を、人見の手から放たれた『電力』が一瞬だけ照らす。その『電力』が直撃した男は最期の雄叫びを上げると、皮膚のほとんどが黒こげになった状態で斃れた。嗅ぎ慣れなれていなければ嘔吐しそうになるほどの悪臭が漂い始め、人見は「エデン」のエージェントに連絡して後始末を任せた。

「……………ふう」

そうして彼は、お気に入りの昼寝スポットである川原まで移動した。短いため息をつくと、そのままゆっくりと腰を下ろして空を眺める。そこには、数えきれないほどの星々と、一部として欠けることなく満ちた状態で周囲を照らす月があった。

「……………」

その景色から……………正確には月から目を離そうとはせず、人見はただじつと空を見上げ続けた。瞬きすらも忘れて、ただずつと。

だから、彼に声をかけられるまでその存在にも気付けなかった。

「なんだか今日はナイーヴな気分のようにだね」

「……………やあ、『捜シ者』」

かけられた言葉に敵意がないことを感じたため、人見は身構えることなく視線だけを動かして、その人物が『捜シ者』だと認識した。軽く手を挙げて挨拶すると、再び空へと視線を戻す人見。そんな人見の隣に、『捜シ者』は何も言わずに座り込んで同じように

空を見上げる。

ただ黙って空を見上げる二人。数分が経とうとした頃、ポツリと人見が呟いた。

「……月と『コード：ブレイカー』はよく似ている」

「月と……?」

「そう」と答えると、人見は立ち上がって月に向かって手を伸ばす。そうして、彼は静かに続けた。

「月はこうして眺めてる分にはとても美しい。けど、近くで見たらどうだろう? ク

レーターでデコボコになり、生気の欠片も感じない灰白色の荒廃した大地。……『コー

ド：ブレイカー』だって同じさ。建前は世のために「悪」を裁く存在だ。けど、実際は

ただの人殺しであり、「エデン」の都合で動かされている人形さ。そうやって……人形のまま死んでいった仲間を何人も見てきた」

「……………」

「私から見れば、月も『コード：ブレイカー』も良く見えるのは表面上だけ。その実態を間近で見えてしまえば、今までと同じように見ることはできない。……ふと、そんなことを考えてしまうんだ」

静かに語られる人見の言葉を、『捜シ者』は何も言わずに聞き続ける。人見の秘められた思いが込められた言葉を肯定も否定もせず、黙って空を見上げたまま。人見もそれ以

上は何も語ろうとはせず、再び二人の間に沈黙が漂う。

しかし、その沈黙は『捜シ者』の眩きで終わりを迎える。何の前触れもなく、唐突に。

「……それでも、いいんじゃないかな」

「……?」

「少なくとも、こうして見る分には美しい夜空の一部だ。たとえ全てじゃないとはいえ、一部でも美しく見れる部分や見える時があるのなら、それでいいと私は思うよ。そもそも、存在全てが美しいものなんて存在しないだろうし」

「——ッ!」

『捜シ者』の言葉に、人見は大きく目を見開く。空を見上げたまま語られたその言葉に

よって、何か見落としていたものを見つけたかのように。

「……ハハ」

ふと、目元を押さえて笑いだす人見。その笑いは抑えようにも抑えられず、徐々に大きくなっていく。そして気付けば……

「ハハハハ！ 一本取られたよー！」

口を大きく開けて、大声で笑い始めた。その表情は、悩みから解放されたように清々しいものだった。

人見は頭をかきながら、『捜シ者』の方に向き直り微笑んだ。

「確かに、全部が綺麗なものなんてあるわけではない。そんな簡単なことにも気付けなかったなんて、どうかしてたよ。……それに、私たちは全てを承知で今を生きている。全てを……ね」

「……そうだね」

清々しい笑みを浮かべる人見を見て、『捜シ者』の顔にも優しい笑みが浮かぶ。すると、『捜シ者』はそのまま立ち上がり、改めて人見に向き直る。

「さ、帰ろう」

「ああ」

帰るべき場所へと向かい、歩を進める二人。月と星が彩る夜空の下、二人の姿は他よ

りも明るく照らされているようだった。

「会長、過去のミニミニ事件」

「いかにも、突然だけど縮んでしまったんだな！」

「本当に急だね……」

「珍種特有の、ロスト的な何かですか」

ある日、何の前触れもなく縮んでしまった会長を見て、人見と『捜シ者』はその急すぎる展開に反応しきれずにいた。しかし、そう頻繁に起こることじゃないとはいえ、以前にも見たことがある現象だったため、特に慌てることは無かった。むしろ……

「じゃ、今日の修業は体格差がある相手を想定しての修業だね」

「それはいいね。すばしっこいから、二人で相手すればちようどいい」

「……え？」

生き生きと、その表情を（悪い意味で）輝かせ始めた。

『よろしく、お師匠様』

「い、いやああああ!!」

会長が縮めば復讐に走る……どうやら、それはいつの時代も同じだった。



code:extra 20 咲けない少女

——どうして？

少女には不思議な力があつた。

——どうして私なの？

しかし、少女はそのような力は望んでいなかった。

——ねえ、神様。

その力に希望を感じたのは一度きり。

——どうして私は……

だが、その希望は一転して少女の全てを絶望に染めた。

——独りにならなきゃいけないの？

「そして、わるいかいじゅうはまほうつかいにたいじされて、みんなしあわせになりました」

「はい、おしまい。咲ちゃん、絵本読むの上手ねえ」

「えへへー！」

少女は幸せだった。

優しい両親に温かな家。幼い子どもながら、彼女は今の自分を包む周りの環境に満足していた。

「まだ三歳になったばかりなのに、ここまでスラスラ読めるとはなあ。やっぱり咲は天才だな！」

「てんさい？」

「頭がいいってことだよ。将来有望だな！」

「ゆーぼー？」

「もう、パパったら……」

少女は賢かった。

三歳ながら文字を完璧に覚え、ある程度のことは全て覚えて自分で行うことができただ。一般的な保育園や幼稚園ならば、五歳児クラスからできるようになるであろうことを、少女はすでにできていた。

「さき、ほめられてるの？」

「もちろんだ！ 咲は自慢の娘だよ！ ほら、高い高いだ！」

「キャハハ！ わーい！」

少女はよく笑った。

楽しいこと、嬉しいことがあれば素直に笑顔を見せた。その笑顔も、純粹無垢としか言いようがない輝くような笑顔だった。その笑顔を見るだけで、少女の両親も自然と笑顔を浮かべていた。

恵まれた環境に恵まれた才能。順風満帆な人生を予感させる要素を多く持った少女は、他の大人から見ても幸せ者だった。大きな悩みなど抱えることも無く、人並み以上の人生を送っていくのだろうと誰もが思った。

だから、今まさに彼女が抱えている悩みのことなど誰一人として気付かなかった。

意識を集中させ、手の届かない位置にあるぬいぐるみが浮かびあがる様をイメージする。瞬間、ぬいぐるみは誰の手にも触れることなくふわふわと浮かびあがった。

「ッ——！」

——ポトン

そして、やめようと思った瞬間にそれは止まる。ピタリと静止し、空中から床に向かつて一直線に落下して軽い音を立てて床に転がる。

「……………」

今起こった摩訶不思議な現象が自分の意志で起きたものであると認識するかのよう  
に、少女は自分の掌を見つめる。一見すると信じられないことだが、自身の中に感じる  
感覚、ハッキリと感じる自分の意志から、彼女は確信する。

(やっぱりこれって、さきがやってることなんだ……)

少女が初めてこの力を使った時のことは、ほとんど覚えていない。というより、その  
時の自分は物心もついていない赤ん坊であり、両親から聞いただけの話である。

当時、まだ赤ん坊の少女が寝ている場所の近くでは異様に物が落ちた。しかも落ちた  
物は、空の哺乳瓶や音が鳴る玩具など。さらに、不思議なことに何か物が落ちた後は必  
ず少女は何かを訴えるように泣いた。そして、その訴えのほとんどは一その時に落ちた  
物を与えると静かになったという《……………》。

つまり、彼女は赤ん坊の時から無意識にこの力を使っていた。視界に入った自分が求める物を手に入れようと、触れずしてその物体を動かしていた。物心ついた今では、意識を集中させればある程度の物は動かせるようになっていた。

(やつぱりこれって……まえにテレビでやつてた「ちよーのーりよく」……？ ママやパパに……聞いた方がいいのかな……？)

少女が持つその力……何も知らない者はその問いに「YES」と答え、何か知る者は「NO」と答えるだろう。だが、少女はそのことすら知らない。

そう、この時の少女はまだ何も知らない。後に、この力が原因で自身の人生が大きく狂わされてしまうことを。この力で、他者を傷つけてしまうことを。

この「異能」の力のせい——

「それじゃあ、この問題を……咲さん、解いてみて」

「はい！」

数年後、少女は普通の小学生として小学校に入学し、充実した生活を送っていた。

結論から言うと、少女は力のことを隠し続けた。実年齢以上に賢い自身の頭で考えた末、今まで通り隠していた方がいいと感じたのだ。そして、おそらくその答えは正しかった。

「……はい、正解です！ さすが咲さんね！」

「咲ちゃん、すごい！」

「えへへ……！」

現に、そうしたおかげで少女は普通の……少し賢い優等生として生活することができていた。

普通に学校に通い、普通に勉強をし、普通の友達に囲まれ……

「やっぱり咲って頭がいいな！ スツゲーよ！」

「あ、ありがとう……」

特定の異性に対して、普通に特別な感情を感じた。

相手は特に優秀というわけではないが、席が隣ということ接する機会が多く、徐々に気になっていった存在だった。彼の笑顔を見るだけで、彼から認められるだけで、両親に褒められた時とは少し違った喜びが心を満たした。

「えー!? 咲ちゃん、あんなのがいいのー!?」

「あ、あんなのじゃないよ！ すごく優しいんだから！」

同性の友達からの評判は決して高い方ではないが、それでも少女は胸の内の感情を認めていた。それが原因で何かがあっても構わない、とまで考えていた。

「うーん……。優しいのはわかるんだけど……ねえ？」



「そうそう。ホラ、今も話してる」

「……？」

少女の意中の人物について、苦い表情を浮かべる友人たち。突如としてどこかを指差してきたため、少女は首を傾げながらその指の方向を見る。そこには、意中の彼が友人たちと話す姿があった。よほど盛り上がっているようで、その話し声は少女たちまで聞こえてきた。

「カツコよかったよなー！ 昨日の『エスパ丸』！」

「うんうん！ 超能力の必殺技を出すところ、超すごかったー！」

「あーあ。オレも『エスパ丸』みたいに超能力使えたらなー」

「そしたらヒーローじゃん！ オレも使いてー！」

『エスパ丸』……というの最近になって放送を始めた子ども向けアニメーションである。忍者の格好をした『エスパ丸』が、生まれ持った超能力を駆使して悪事を働く敵を退治する……キャラクター全てが二頭身のヒーロー系の作品だ。噂では、『エスパ丸』のキャラクターはかの天竺院グループの天才若社長の落書きから生まれたとかなんとか。

「今どきあんなの見てるなんてガキっぽーい」

「超能力なんて使えるわけないのにねー」

仮想の空間に存在するヒーローに憧れる……特に男子ならば一度は抱いたであろう夢のはずだ。年齢を考えても、彼らはそのような夢を抱いても不思議ではない。だが、同年代の女子から見れば「下らない」の一言で済ませられる話題であるのも事実であった。

「……ヒーロー」

「ん？ 咲ちゃん、何か言った？」

「あ……ううん、なんでもない」

無意識のうちに口にした呟きをごまかし、少女は何気ない話を友人たちと交わす。

しかし、どんな話題に変わろうと、彼女の頭の中では変わらず一つの希望に似たものが渦巻いていた。

（超能力……。私を使うところを見せたら……。もしかして——）  
それが、絶望への入り口だとも知らずに。

「……化物」

「——え？」

「コイツ、化物だ！ 近寄るな、化物！」

「な、なんで……」

「咲に近づくなー！」

「近づいたら超能力で殺されるぞ！」

「こっちに来るな！」

「違う……違う……！」

「ちよつと！ 咲が化物なんて、いい加減にしてよ！」

「超能力使えるなんて馬鹿みたい！ ねえ、咲！ 咲もちゃんと言いなよ！」

「……………」

「なんで何も言わないの!? 違うって、嘘つかないでって言えばいいのに！」

「……………ねえ、まさか……………本当なの？」

「……………」

「化物が来たぞー！」

「避難だ、避難！」

「……………あ、あの」

「こ、こつち来ないでよー！」

「何かする気!? そんなことしたら、すぐにママとパパに言ってやるんだから！」  
「……………」

少女の現実、そのほとんどがかつての形も残さずに崩れ去った。かつて友人と思っていた者たちも、かつて思いを寄せていた者も、全て。自身を「害」とみなし、あらゆる迫害…………『イジメ』を受けた。

幸いにも、「超能力が使える」という話の発信源が子どもであり、超能力という非科学的な内容であったことから、メディアなどが取り上げたり相手の保護者が執拗に動くことは無かった。

だが、この現実の崩壊は確実に少女の身と心を蝕んでいった。

「…………咲? 最近、あまり元気がないみたいだけど…………何かあったの?」

「…………大丈夫」

「本当か？ 何か悩みがあるなら、父さんたちに言ってみろ」

「……………」

それは、実の両親からの優しい言葉すら苦痛なものに感じるほど。

本来ならば薬となるはずの彼らの言葉も、今の少女の精神状態では毒にしかならない。だが、少女の心の闇を知らない両親は、薬として少女に言葉をかけ続ける。

「なに、安心しろ。父さんたちはお前がどんな悩みを持っていようと、解決するまで一緒にいてやる。それが、親の責任だからな」

「そうよ。咲は私たちの娘なんだから。絶対に見捨てたりしないわ。そう——」

——ドンナコトガアツテモ

「——っ、う……………」

仮にそれが本当に薬なのだとしたら、少女の心に築かれつつあった壁を越えたのだろう。

仮にそれが毒なのだとしたら、少女の心に築かれつつあった壁を溶かしたのだろう。

「う、ぐ……………！ ふぐう……………」

だが、たとえそれが薬だとしても……

それが、たとえ毒だったとしたら……

「おと、さん……………！ おかあ、さん……………！ 私イ——！！」

与え続けられれば害を及ぼし、その全てを崩壊させる。

それは、確実に幼い少女に対しての止めとなる。

「傘もなく、上着もなく、直に当たれば痛みを感じるほどの激しい雨の中、一人の少女が歩く。」

その顔は深く俯いており、その表情はまるで見えない。さらに、激しい雨が人々の視界を遮り、その少女の姿自体がまるで幻のように感じられた。

「少女は、言葉もなく歩き続ける。まるで、言葉自体を忘れたかのように。」

雨のせいかわかからない。それほど、少女の口は音を発していなかった。

「少女の周りに人はいない。あえて近づこうとする者もない。」

だから、誰も気付かない。彼女が雨に当たる理由を。

そこに、無意識に選んだ「罰」と「恐怖からの逃走」の意味があることを。

（……なんで？）



少女の内なる問いに、答える者はいない。いくら問いかけようと、いくら考えても。自分の中で答えは出てこない。

それでも、少女は問いをやめない。

(全部……嘘だった。どんなことがあっても、見捨てないって言ったのに)

——ヤメ、テ

「ッ——!!」

数分前の記憶が唐突に蘇り、少女の中で不快感が一瞬で限界を超え、

すでに吐き出したはずの胃の内容物が一気にせり上がってくるのを感じる。

少女は人気がない所を求めて駆けだし、たまたま近くにあった公園の茂みに頭を突っ込んで口元を解放する。

「う、おえ……！　ゲホ、ゲホ！」

出るはずのない内容物を無理に吐き出そうとし、息苦しさと不快感で咳き込む。しかし、それでも身体は中身を吐き出そうとする。

どう考えても異常な状態。普通ならば幼い彼女が経験するような状態ではない。だが、今の彼女はともじやないが正常ではない。いや、正確に言うなら正常ではない経験をした直後だった。

(私……私は………)

「殺したんだね」

「——！！」

「信じていた大切な人に否定され、我を失つてその命を絶たせた。唯一記憶に残っているのは、原型もわからない状態で血に塗れて、助けを乞う醜い肉塊の姿。雨が降っていてよかった。この雨なら人通りは少なくなるし、身体についた返り血も洗い流してくれる。……まあ、君にとっては自分の頭を冷やすための“罰”だったのかもしれないけど」

「だ、誰……？」

気配もなく、気付けば背後に立っていた見知らぬ男。その男の口から発せられる言葉に戸惑いながら、少女は身を護ろうと無意識に距離をとった。

その見知らぬ男は、少女と同じように傘もささずに雨の中にいた。だから、彼も少女同様に全身が濡れている。しかし、異常な状態に見える少女と違い、その男の濡れる姿はどこか常識離れた美しさが感じられた。

「でも、君は気にする必要はないと思うよ。だって、最初に裏切ったのは彼らなんだから」

「……やめ、て」

少女を擁護するような言葉を口にする男だったが、その言葉を聞いた少女の口から発せられたのは否定の言葉。だが、それは擁護自体を否定したわけではない。

「結局、どれだけ大きなことを言っても彼らはただの人間なんだ。だから、社会なんてものが決めた程度の常識の中でしか物事を考えない。そんなつまらないものに縛られているから……」

「やめて……」

否定が向けられたのは、男の言葉そのもの。その言葉の一語一句が、確実に自身の心にヒビを入れていることが感じられたから。だから少女は……

「私たちのような社会から外れた存在を拒絶する」

「——やめてえ!!」

男が語る真実を否定しようと、激情のままに力を解放した。

「——私に、その力は通用しないよ」

「ひっ……………」

自分の首に突き立てられたそれを見て、少女は冷や汗と共に冷静さを取り戻した。降り落ちる雨粒を全て弾くほど鋭利な刀身。かすかに先端が触れている首からは、独特の「ひやり」とした感触があった。

そして、男は少女に突き立てていた刀を静かに戻した。

「悪いけど、君とは住んでいる世界が違うからね。平和に暮らしてきた君の異能力じゃまず私には効かない」

「……………」

思わずぺたりと座り込む。いや、正確に言えばガクンと足の力が抜けた。雨水を吸って泥と化した地面が服と地肌に触れるが、そんなことを気にする余裕は無かった。

もう、何もわからなかった。なぜこの男は自分しか知らないはずの真実を知っているのか。なぜ刀なんて持っているのか。なぜ自分の力が通用しないのか。

あらゆる疑問が浮かんで口にもすることもなく消えていく中で、少女は一つだけを静かに呟いた。

「……誰、なんですか。あなたは……」

「……私かい？」

唯一口にしたその疑問を聞き、男は雨で濡れた髪をかき上げる。すると、男は少女に近づいていって目の前に立つ。

そして、静かに膝を突き、少女に向かって手を差し伸べた。

「私の名は『捜シ者』。君のように力を持った者たちを捜す者」

「……さが、しもの」

途端に、白に包まれた男の姿がキラキラと輝き始める。男自体が輝いているわけではない。男の身体を流れる雨粒が光を反射させ、輝いていた。

気付いて見上げると、いつの間にか雨は上がっていた。

——どうして？

消えゆく意識の中、少女は自身と向かい合う一人の男を見つめる。

——どうして、『あ捜シ者<sub>人</sub>』だったんだろう。

同時に、『思捜シ者<sub>人</sub>』の指示で行った自身の罪の数々が思い浮かぶ。

——もし、あそこになっていたのが……

それらを楽ししいと思ったことなど一度もない。逃げ出したいと常に考えていた。

——『捜シ者』じゃなくて……

だからなのか、少女は今まさに自分の命を奪おうとする彼を見つめ続ける。

——あなただったら、もっと違っていたのかな。

「目には目を 歯には歯を 悪には——」



彼の言葉と共に光に包まれた空間を目に焼き付け……少女の意識は暗黒に包まれた。

## 『エンペラー』復活篇

code : 69 We are LOST, S!

古来より、日本の歴史を彩ってきた城。戦略上の防衛拠点としての印象が強いが、通な者に言わせればその内装、佇まい……込められた歴史も含めて全てが芸術と呼べるほどの「美」を持つている至高の建築物である。

「……………」

目の前に建つこの城も、独特の「美」を持った芸術だった。内装や佇まいはもちろん、そこに秘められた歴史にも思いを馳せることができるようだった。こうして眺めているだけでも十分だと感じる。

しかし、まだこの城は未完成である。世の中には未完だからこそ評価されるものも少なからず存在するが、城は別だ。未完の城など城にあらず。そこに至るまでの歴史の重みを受け止めるには、完成品でなければならぬのだ。

だから、彼は昂る思いを胸に完成への一步を踏み出す。

「これで……………」

最後の1パーツであるシャチホコを手に、屋根にはめ込もうと屋根部分に伸ばす。

「完成——！」

——じいゝ

「……なっ!？」

完成間近となり高揚感に包まれたはずが、何かの拍子に違和感に気付く。自分以外の全員が自分に注目している視線に気付き、大神は机に置かれた城のプラモに背を向けて振り返る。

「あ？　なんで止めんだよ？　それで最後なんだからさっさとやれ」

「いや！　なんですか、一体！　わざわざ全員揃って！」

「大神がバイトと修業以外のことに夢中なのが珍しいだけなのだ！」

「ワン！」

「大神、夢中やったわー」  
ろくぼん

「つーか、後ろ取られても気付かねえとか。どんだけハマってんだヨ」

「ま、大神の集中力は凄まじいからな。集中していたなら気付かないのも無理はない」  
「いかにも」

訳がわからない大神に対し、一同は好き勝手に言葉をかけていく。総合すると、単に珍しいもの見たさに集まったようであり、大神は知らぬ間に見世物になっていたようだった。

「しかし、城のプラモデルを作るのが趣味とはねえ……」

「……な、なんですか？」

「いや、なんとというか……」

すると、会長が軽く首を傾げながら何か言いたそうな言葉をかける。ハッキリしないその態度に怪訝そうな表情を浮かべる大神に対し、会長は腕を組みながら……

「地味だね、すごく」

「おじいっばいわ」

「まあ一人遊び系だシ」

ハツキリしない態度からのストレートな言葉を口にする会長に続き、遊騎と刻もストレートな言葉を発していく。刻に関しては完全に悪意で言っているだろうが。

「別に……趣味とかじゃないですよ。ただの暇つぶしです」

「どーだかね」

ストレートな言葉を受けながらも、落ち着いた様子でそれを受け流す大神。刻はそこをさらに煽ろうとするが、大神は無視することに決めた。

「ふむ。しかし、一番上だけ黒いなんて変わったお城だなあ。昔のものが好きな夜原先輩。なぜこういう造りなのか知っていますか？」

「いや、知らない。というか、オレは確かに昔のものは好きだが、それは小物とかの話だからな。あいにく、城は専門外だ」

「ふむ、なるほど」

「……聞いてるのか？」

一方、桜はいつの間にか大神の隣まで移動し、より間近で城のプラモデルを眺めていた。そして、一番上の階層だけ黒く塗られていることに気付き、その意図について優に尋ねていた。しかし、当の優は考える素振りも見せず「わからない」と言い捨てた。

「そもそも、そんなことは作った本人に聞けば——」

「大阪城ですよ」

「……ん？」

面倒になったのか、大神にパスしようとした優。だが、そのパスが出るよりも先に大神が口を開き、自分からその話題を拾っていった。

そして、彼はそのまま満面の笑みで語り始めた。

「豊臣秀吉が建てた大阪城……大坂夏の陣で真田幸村らが善戦しましたが、秀吉の息子である秀頼と共に落城。その後も何度か全焼していますが、徳川秀忠などによつて復元と再建がされている城なんです。この黒漆部分は栄華を極めた秀吉時代のもので、このモデルは壁細部や屋根形状まで見事に再現されています。その上、接合部のズレもほぼなくて、本当に見事しか言いようが——あ」

『……………』

大神が勝機を取り戻した時には全てが手遅れで、自分以外の住人全員に「じとり」とした目で見られていた。その中でも唯一、桜は微笑ましそうに笑みを浮かべていたが。

「好きだな」

「大好きや」

「城の歴史マニアってところか?」

「いや、むしろプラモデルの方ダロ。プラオタだ」

「……そんなじゃないですよ。まったく、やだなあ」

やんややんやと話のネタにされ、困ったような笑みを浮かべる大神。プラモデル好きを否定してはいるが、先ほどの豊富な知識とマニアックな視点がその否定を打ち消している。

「いやいや、好きな物があるのはいいことだよ? いかにも、中はどうなっているか」

「——バツ!」

ふと、会長が内装を見ようとプラモデルに手を伸ばす。まさに会長の手がプラモデルに向かって伸びた瞬間、大神はその間に割って入り、優等生スマイルで会長に詰め寄った。

「こんなもの、暇つぶしのオモチャですよ? ですから、見る価値なんて欠片もありません」

せんよ……お師匠様」

「……………は、はい」

その有無を言わさぬ迫力に気圧され、会長も思わず敬語で頷いていた。この光景を見ていた『ゴード彼：ブレイカー同業』は、人を燃え散らす時のような迫力と同じレベルだと感じ取っていた。

「大神よ、隠すことは無いぞ。私は大神が悪人を裁くこと以外に興味を持っているのが嬉しいのだ。せつかくだし、私も作ってみようかな」

「桜小路の場合、完成の前に全壊すると思うがな」

「酷いですが、夜原先輩！」

「事実だろ」

そんな中、純粹に大神に興味があつたことを喜ぶ桜。この機会に彼女自身もプラモデルに挑戦しようと思気込んでいたが、隣にいた優の呟きによつてその意気込みは怒りへと変わっていた。当の優は、その怒りすらスルーしているが。

「……………つうかさ、マジな話、どうしたワケ？」

「……………なにがですか？」

すると、今まで散々バカにしていたはずの刻の眼がスツと細くなる。なにやら真剣な雰囲気での問いかけに、大神は不思議そうな表情を浮かべる。



『捜シ者』をブツ斃してから、縁側で真つ白になってたと思つたら今度はプラモ作り……今までそんなことなかったジャン。最近、お前おかしくネ? ……目的の『捜シ者』を斃したから、悪人殺しにももえなくなっちゃったトカ?」

「……………」

刻の言うように、『捜シ者』を斃してからの大神の姿は明らかに違っていた。真つ白になつて意味も無くただ過ごしたり、周りのことが気にならなくなるほどプラモ作りに熱中したりなど……言うなら、あの人見を斃した後でさえそんなことは無かった。

それは、彼の中で『捜シ者』がどれだけ大きな存在だったかを意味しているのだろう。そして、その存在を討つという目的を達した今、一種の燃え尽き症候群に陥っているのかもしれない。

——と、その瞬間。

——グリア

「な——!？」

「痛ッ——！」

「やば——！」

「……え？」

突然、今までも何度か経験している特有の感覚に襲われる大神を除く六人。そして

——ポンッ

「んなっ!？」

刻は子どももの身体となり……

「ぬお!？」

「いかにもっ」

桜と会長は掌に収まるほどのサイズになり……

「おー」

遊騎は人間から猫へと変わり……

「おつとと! あれ? なんか今回は急だね」

優は性別と人格が変わった。

この常識では考えられない身体の異常……この現象の正体を、彼らは知っている。

「——ロ、ロスト!？」

「いかにも、ロストって時々うつるよね」

「せやな」

「アホか！ 欠伸びてーに言うんじゃネー！」

「桜小路さん！ 服！」

「そんな慌てなくても、桜ちゃんの服はそこに……つて!? 裸のミニ桜ちゃんは反則でしょ!?! 色気と可愛さの奇跡のコラボレーション！」

「ぬわー！」

突然起きた、ほぼ全員のロスト。その突然の出来事によって、現場はすっかりカオスなものとなっていた。

左から右へ見渡しただけでそのカオスっぷりがわかる顔ぶれだが、ふと、その顔ぶれにいるはずの人間が一人いないことに刻が気付く。

「つて、アレ？ 王子はどこ行った？」

「そんなことより桜小路さんを取り返すのを手伝ってください！ 王子なんてすぐそ

こに——！」

——いやああああああああ……

『……………』

一瞬のうちに遠ざかり、すぐに聞こえなくなった叫び声。その後訪れた静寂の中で、大神と刻は王子が「ロストして逃げたこと」を確信したのだった。

「…………ハア」

「ちえー。もうちよつと裸の桜チャンを堪能したかったのに。……今から脱がせれば？」

「——燃え散りますか？」

「冗談、冗談」

その数分後、なんとか優子の手から取り返した桜に小さくなつた時用の服を渡したことで、大神は一息ついていた。それでも未だよからぬことを企む優子に対し、大神は左手に『青い炎』を灯して実力行使の意を示す。

「……………」

「……………なんですか？」

大神の本気の怒りを感じ取った優子は、ひらひらと手を振って大神から離れる。すると、今度は二人の様子を見ていた刻が大神に近づいていった。

まだ苛立っているのか、どこか鋭い眼を刻に向ける大神だったが、刻は気にせず口を開いた。

「『青い炎』が使えるってことは、ロストしてねーのはお前だけか。……もしかしてサ、お前だけロストしないのってその『コード：エンペラー』の腕が理由？ ホント、それって何なんだヨ」

「……………」

『捜シ者』一派との死闘を乗り越えた先に起きたロスト。その中で唯一ロストしない大神だが……そこには違和感しかなかった。彼も他の者たちと同様に異能を駆使し、あの死闘を乗り越えたのは違う。それこそ、死に物狂いでだ。

同じ条件下にあるはずの中で、ただ一人だけロストしない大神。そこに何か理由があるとしたら、彼だけが持つ特殊なもの……『コード：エンペラー』の腕しかない。

「……どうでもいいでしょう？ そんなことは」

『捜シ者』との闘いの中でその正体が明かされた大神の左腕。未だに詳細や、元の持ち主である『コード：エンペラー』についてもなにもわかっていないが、この世のものではない『青い炎』を操る力を持つ腕だ。何かがあるのは間違いない。

しかし、当の大神はそこについて何も話す様子はない。何か言えない理由でもあるのか、彼自身もわからないのか……それは謎である。

「とにかく、今ここを襲われたら危険です。元に戻るまでは大人しく——」

狙われた際の対応が困難となるロスト。その現象が連続した今の状態はかなり危険だ。そのことを危惧し、注意を促す大神だが……

「大神よ！ プラモデルとは最高だな！ このまま中に住めそうぞぞ！」

「いかにも、屋根の形状が昼寝に最適なんだな」

「この魚、美味そうやわー」

「」

桜、会長、遊騎と、主に小型化した者たちが好き勝手に大神が作った大阪城に触れ、確実にところどころを破壊していた。その光景に、大神は声にならないショックを受けた。

「……………」

『えく、もつと遊びたいく』

プラモデルを大神に没収され、揃って文句を言う桜たち。だが、大神は湧き上がる怒りを呑み込んで、無言のまま没収したプラモデルを高い棚の上に置いた。

『——続いて、気象情報です』

「ん……?」

ふと、そこで丁寧な口調の声が大神の耳に届く。声の方を振り向くと、町内会で使う大道具やなにやら威厳を感じる鎧など、特に使い道のなさそうな物が廊下の端にまともに置かれていた。そして、その傍にはラジオが置かれており、再びそこから声が出る。

『戦後最大級の超大型台風が接近しています。直撃の恐れもあるため、住人の皆さまは警戒を強めてください』

「誰がこんな所にラジオを……?」

「うーん、いかにも困ったな」

置いた覚えがない場所にあるラジオに違和感を覚える大神だったが、そんな大神の違和感をよそに会長は悩ましげに頭をかき始めた。

「いつもは台風が来ると王子と一緒に『渋谷荘』の補強をしていたんだけど、今回は流石に無理っぽいな」

「……大袈裟ですよ。いくらボロくても、吹っ飛んだりするわけじゃ——」



——バキィ!

「ないですし——」

——ビュオオオオ!!

「ぬおおお!?!」

「おー」

「ワンワンワン!!」

「な!?!」

大神が油断したまさにその瞬間、『渋谷荘』の天井に穴が開き、力を込めて堪えようとしないと身体が持っていかれそうになるほどの強風が吹き荒れる。何事もない大神がその状態のため、小型化した者たちや『子犬』は抵抗する暇もなく身体が宙に浮いていった。

——ガシ！

「あ、危なかった……」

「来る……！ 何かが来るんやな……！」

「ど、どうやらそのようなのだ……！」

「おーい」

「嬉しそうに……しないで、ください……！」

外に吹っ飛ばされるよりも先に、大神が何とか彼らの身体をキャッチする。すぐさま風が届かないところまで移動し、なんとか事なきを得る。ぜえぜえと息を切らす大神に對し、遊騎と桜はキラキラと目を輝かせる。

「いかにも、刻君だつて両腕を怪我してるから動けないし。このまま『渋谷荘』が全壊なんてこともあり得るかも……。そしたら皆、無事で済むかどうか……」

——ガン！ ガン！

数分後、彼らがいる場所周辺の窓は釘で打ち付けられた木材によつて嚴重に補強されていた。その前では、大神が一心不乱に金槌を振るっていた。

「いやあ、いかにも……別に大神君にやれとは言つてないんだけどね」

「ねーねー」

そんな大神の背後で黒い笑みを浮かべる会長。その後も……

「なんやこれ、頭巾や」

「おお！ 防災頭巾がテントのような大きさだ！ 気分はキャンプなのだ！」

「はしゃぐな！」

防災グッズではしゃぐ遊騎と桜。

「いかにも、非常食つて美味なんだな」

「食うな！」

貴重な非常食を無意味に食い漁る会長。

『ヒュ〜ドロドロドロドロ……』

「う〜ら〜め〜し〜や〜」

「光るな！」

それっぽいBGMをラジカセから流し、ランタンで顔を照らす刻。

大神以外に、自ら動こうとする者は一人もいないのであった。そんな彼らに対し、大神が下した決断は……

「城の中を探検なのだ」

「おー」

「遊ぶなって言ったと思ったたら遊べって、天邪鬼なんだから」

「いいからそこで大人しくしてください……！」

「グへ……」

壊されまいと非難させた城を泣く泣く差し出し、そこで遊んでいるよう告げた。その後、大神は今まで見たことがないような勢いで刻の頭を殴って気絶させた。

「まったく、王子の奴……！ ロストしたからって逃げやがって……！」

「おーい」

「大体、なんでこうも揃ってロストなんか……。せめて優が残っていれば力仕事を任せられたものを……！」

「もしもーし」

「いや、そもそも優はロストしたところで女になるだけ……。中身が変わるとはいえ、

動くのに支障はないのに……!」

「ねえ、おくがみくくん」

「ああもう! なんですか、さつきから——!」

まるでストレスを発散するように釘を打ちつける大神。そんな大神を呼ぶ能天気な声の後ろから聞こえ続ける。最初は自分の世界に入ってぶつぶつと文句を言っていたため無視していたが、それがあまりにもしつこいため、大神は苛立ちを隠そうとせざるに振り返る。

だが、そこで彼の眼に映ったのは予想だにしない光景だった。

「な?」

そこにいたのは……全身に水を滴らせ、びったりと肌にフィットしたシャツを着た優子だった。びっしりと濡れた髪が素肌にはりつき、いつもとは違う色気を醸し出している。だが、それよりも気になるのは彼女の服装。濡れたことで肌にフィットしたシャツは素肌を隠す役割を果たしておらず、じんわりと肌色が見えている。そうして肌色が

露わになった彼女の胸部は、無条件で他者の目を引きつけ――

「なんて格好してるんですか!？」

引きつけられるよりも前に、大神は勢いよく目元を隠したうえで目を逸らす。そんな大神の反応を見ても、優子は特に恥ずかしがる様子も無いまま口を開く。

「いや、さつき雨が入ってきた時に直撃を受けちゃってさ。さつきまで優だったから、ブラだつて着けてないから最悪だよ」

「じゃあさつきと着替えれば……!？」

「そうしようと思つてずつと呼んでたよ。『おい』とか『ねーねー』って。こんな状況だから黙つていなくなつたら困るかな、って思ったけど、大神君つたら忙しそうだったし」

「わかりましたから早く着替えて着てください!!」

平常心のまま話す優子に対し、大神は目元を隠したまま目を逸らし続ける。その空気に耐えられなくなったのか、大神は声を荒げて優子に着替えるように言う。

すると、優子は「はい」と返事をしつつ早足で移動を始めた。だが、何かを思い出したようにピタリと止まって振り返ろうとする。

「……あ、何かあつたらここに戻って来れば——」

「振り返らなくていいです！　そして何かあれば服を着た状態でここに戻ってきてください!!」

「了解で〜す」

そう言つて、優子の姿は大神の視界から完全に消えた。優子がいなくなったことを薄目で確認した大神は、大きなため息をつきながらその場に座り込んだ。

「なんでオレがこんな目に……」

「まあ、彼女らしいといえれば彼女らしいですがね」

そんな大神に話しかけるのは、ただ一人……

「まさにゴー・トウ・マイロードです」

「!?」

どこかで聞いたような声で奇妙な英語を発する……先ほどまでいた廊下にあつたはずの鎧だった。

「あ、平家にほんや」

「へ、平家……!? いつから……!?」

「110行前からですよ」

「ま、まさかアンタまで……」

「ええ、ロスト中です。『人前に出られない姿』になつてしまったので、秀吉公の鎧で失礼します。もちろん、大神君が作った大阪城にちなんでですよ?」

「どうでもいいです……」

淡々とロストした事実を話す鎧……ではなく平家。すぐには信じられないが、よく見ると手元には愛読書である緊縛関係の官能小説があるため、どうやら本当のようだ。



「それにしても、この兜の形状……素晴らしい。まさにスーパーライジングサンです！」

「……………」

その後も、数ある武将の中でも派手な形状で有名な兜を指して、平家はどこか楽しそうにしていた。実際に顔は見えていないが、なんとなく今の彼は満面の笑みを浮かべていると想像できた。

しかし、これ以上は関わるまいと考えた大神は黙って平家に背を向けた。再び補強作業を始めようと準備をする大神だったが、そんな彼から少し離れたところである人物がここそこそと動いていた。

「ぐ、ぎ………」

彼の前にあるのは、『捜シ者』との闘いが終わってすぐに行われた花火の写真。大きな闘いが終わったことによる緊張から解き放たれたかのように明るい表情を見せる『渋谷荘』の住人たちが写っている。それら写真が入れてある箱から、彼は一枚の写真を取り出そうとしていた。

普段ならばスムーズにできるはずの作業だが、今の彼は闘いで受けた負傷のせいで両腕共に動くことすらままならない。そのため、彼は口を使っていた。

(一、この写真だけは……台風如きで濡らせるわけには……！)

彼……刻が取り出していたのは、自分と寧々音が唯一揃って写っている写真。端の方に遊騎らしき人物もいるが、黒の油性ペンでめちやめちやに落書きされている。おそらく、この落書きも彼がやったのだろうが。

(ええい、もうちよつとダ……！ 取り出せれば、後は服の中にも入れとけば濡れる心配は——)

——バシ！

「うぎやああああああああああ!!」

あと少しで箱から取り出せる……そう思った直後に、何を思ったか大神が刻の右肩を叩いた。両腕以外にも、右肩に大きな負傷を負っている刻。ようやく傷が塞がり始めた部分だが、直接的な刺激を受ければ容赦ない激痛が彼を襲うのは当然のことだった。

その予期せぬ激痛に耐えられるはずもなく、刻は写真を啜っていた口を大きく開けて絶叫し、その場に倒れ込んだ。

「バ、バカ野郎……！ 右肩はダメだっつの……！ そこはまだ……！」

「……………」

あまりの激痛に涙を流す刻だったが、彼に手を出した張本人である大神は彼に背を向けている。なんとも理不尽で薄情な行動だったが……それは思い込みだとすぐにかつた。

「…………落とすなよ」

「ア…………？」

「右肩そしにもデカイ傷があるだろうが……。わかったら大人しくしてろ」

「…………お前」

落とすな、と言つて大神が刻の首にかけたのは、刻が取り出そうとした写真が入ったネームプレート入れ。ぶつきらぼうで乱暴なやり方だったが、大神は刻のために動いたのだつた。右肩の傷を案じる言葉と共に。

思えば、刻が右肩に負つた傷は大神を『捜シ者』から護ろうとした時に受けたものだ。大神が意図しなかったこととはいえ、刻が大神を護ろうとしたのは事実。しかも、虹次に敗北して満身創痍となつてゐるのにも関わらず。

「…………なんだヨ、それ。優しくしてるつもり？」

「寝言言つてんじゃねえよ。チヨコマカ邪魔なだけだ、バカが」

右肩の傷に対して、彼なりに責任を感じての行動だと悟つた刻。その思いを受け取りつつ、いつもの軽口でいつも通りに接する。

下手に氣遣う必要はない。彼も、自分も。乱雑でも、言葉足らずでも…………彼らにしてみれば、それで十分なのだ。

「お〜い、大神！　大神〜！」

そんな二人のやり取りが終わってすぐ、これまたいつも通りに明るい声で桜が大神を呼ぶ。何かかと思つて大神が声の方を見ると……

「く、苦し……!」

「しっかりやれや、コラ」

「ワ、ワフ……!」

「ふふふ……どうだ!」

さっきまで城のプラモデルで遊んでいたはずの小型化集団。その彼らが何を思ったのか、自分の身体にロープを巻きつけて窓の淵の上部にぶら下がっていた。その中で、桜は白い布を頭巾のように被つて自信満々な笑みを浮かべていた。

「何をやってるんですか！　というか、どうやってそこまで!？」

あまりにも奇想天外な行動に、その意図も方法もわからない大神は思いきり声を荒げる。だが、怒鳴りつける大神を前にしても桜は笑顔を崩すことは無く、笑みを浮かべたまま答えた。

「大神が皆のために頑張ってくれているからな！　少しでも早く晴れるように、私たちはてるてる坊主になることにしたのだ!」

「——!」

桜の言葉に、思わず大神は目を見開く。冷静に考えれば、誰が見てもくだらないことと切り捨ててしまう行動。それでも、そこに込められた純粋な思いは切り捨てることなどできない。

確かに滅茶苦茶なもので、それで現状がどうにかなるということとは無い。それでも、大神は自分の中で何かが軽くなっていくのを感じていた。その証拠に……

「……まったく、あなたという人は」

自然と大神の口元が緩み、今までどこか強張っていた表情に笑みを浮かべさせた。

「別に、頑張っているわけじゃありませんよ。たまたまオレだけ口ストしていませんから、するべきことをやっているだけです」

「ア？　オイ、桜ちゃん何やってんだヨ？　見せる、大神!」

笑みを浮かべながらも、普段の彼らしい謙虚な言葉。しかし、いつもより少しだけ明るいめの声で大神は続けた。……後ろで騒ぐ刻を放置したまま。

「まあ、仮にロストしていたとしてもオレの場合は体温が下がるだけですから、特に問題はありませんけど。むしろ皆が気の毒なくらいです。特に優と平家」

自分はまだマシ、とでも言いたげに言葉を並べる大神。言葉を並べる中、ふと年上二人のことを思い浮かべる。ロストした瞬間、自身が最も苦手とする女性になる優と、人に見せられない姿になり何かに身を隠す平家。少なくとも、自分が知る限りではかなり稀有で気の毒なロストを持つ二人だった。

「優はどんなに嫌がついていても優子さんには好き勝手されますし、平家は何かで隠さないと人前にも出られない。……『人前に出られない姿』なんて、どんな姿だか想像もできませんけど……それならいつそ、姿が見えない方が——」

「——てるてる坊主」

「え？」

言葉を続ける大神の背後で、ポツリと刻が呟く。それは、ロストして小さくなった彼と大神の慎重さを考えれば見えるはずのない桜の姿。ピツタリ大神の背後にいた刻は、完全に大神の顔と重なっていた桜の姿など見えるわけがない。

だが、刻はその姿が見えた。

「刻、よくその位置から見えましたね」

「いや、位置つつーか……」

お前……なんか透けてんだケド」

「え？」

感心したように刻の方に振り返る大神……その顔には、彼の後ろにあるはずの桜たちの姿がしっかりと見えていた。まるで、そこにあるはずの大神の顔が無いかのよう。

「ハハハ、何をバカなことを」

「大神君……ルック・ミラーです」

刻の言葉を何かの冗談だと思い、適当に笑い飛ばす大神。しかし、そんな彼の目前に

平家が手鏡を用意する。本来なら、しっかりと自分の顔が映るはずの位置。だが……  
「……………」

そこに映るはずの見慣れた自分の顔はいつまで経っても移ることは無く、自分の後ろに広がっている光景が映っているだけであり……

「——△Ω★ヰ!!?」

それが真実だと自覚した瞬間、彼は声にならない悲鳴を上げた。

「な、なんだコレ…………!!? ちゃんと触れるのに、顔が映らない…………!!?」

何度も鏡を見返し、自分で自分の顔をペタペタと触って顔があることを大神は確かめる。そこにある感触はあるが、視覚に映らない自分の顔。もしやと思つて腕をまくると、そこにあるはずの腕も同様の状態だった。

現状を知ったが、まったく何が起きたから理解できず混乱する大神。しかし、この中で一番の知識人が堂々と宣言した。

「ロストです」

「ロ、ロスト…………?」

「おそらくですが、大神君の左腕の異能である『青い炎』が真の力に目覚めたことでロストにも変化が生じたのでしょう。言うなれば、この『透明化』こそが大神君の真のロストです」



「そんな、バカな……」

『青い炎』の覚醒によって生じたロストの変化。そのような話など聞いたこともないが、『透明化』などという説明がつかない事態が起こりうる可能性としては、ロスト以外ありえない。

それはわかっているはずだが、理解が追いつかないのか大神は立ちくらみを覚える。

——ドンドン！

そんな大神に追い打ちを立てるかのように、台風によって飛ばされた物が『渋谷荘』の扉を叩いて——

「オラ！ 大神、さっさと開けろ！ クラスメイト様のご訪問だぜ！」

「ヤッホー、桜！ いきなり遊びに来たよ！」

「ここが大神君と桜ちゃんが暮らしてる『渋谷荘』かあ」

「い、今さらだけど……同棲ってことか？」

「これだけデカいから、他にも人がいるはず……ッス」

「なんでもいいっての。つか、台風マジ直撃っぽくない？」

「は、はあ!? 今の声って!」

違う。扉を叩いているのは飛ばされてきた物などではなく、人間の来訪者。しかも、大神と桜のことをよく知る人物……輝望高校のクラスメイト。

「こ、こんな時に客かヨ……!」

「ヤ、ヤバい……!」

(誰も人前に出られない——!!)

ロスト、台風、来訪者……次々に起こる不孝の連続に、大神たちは台風とはまた別の

嵐が起ころうとしていることを予感した。

## code:70 虚しさの渦中

悪いことは続くという。

それがただの偶然か、それとも神の悪戯か……それは誰にもわからない。

ただ、一つだけ言えることがあるとするなら、その不孝の連続は最悪な場面だからこそ起こりやすい。

そう、今の彼らのように……

不幸その一 突然のロスト（全員）

不幸その二 ロスト中の来訪者（クラスメイト）  
不幸その三 直撃の超大型台風

「おーい、大神！ 遊びに来たぜー！」

「桜っ！ 私たちもいるよ〜！」

（だ、誰も人前に出られない——!!）

闘いが終わり、束の間の平穏を味わっていた大神たち。しかし、その平穏は突然のロストを始めとした不幸の連続によって思わぬピンチへと変わった。

「とういか、そもそも何でクラスあメイト連中が『渋谷荘』に……!? 桜小路さん、何か心当たりは!？」

「いや、私は何も教えていないのだが……」

本来ならロストしても「体温が下がる」だけで最低限の生活には支障がないはずだったが、『青い炎』が覚醒したことで「透明化」のロストに変わった大神。そのことに強く

動揺していたが、今はそれよりも訪問者であるクラスメイトたちをどうするべきかと頭を悩ませていた。

そもそも、なぜ彼らは誰も知らないはずもないこの『渋谷荘』に来ることができたのか。桜は教えていないと言うし、大神だって言うはずがない。他の『住人コード：ブレイカー<sup>ち</sup>』に関してはまず彼らと関わりがない。なんの手がかりもなく、全ては謎に包まれていた。

「いやー、でも元氣そうでよかったよね」

「うんうん。神田ちゃんも病欠って言ってたけど……二人とも、生徒会のホームペー  
ジに載ってるんだもんね。楽しそうに花火してる写真」

「クソネコオオオ!!」

「いかにも、タイトルは『落第点の生徒と秘密の強化合宿中』なんだな」

「さすが会長」

もつとも、その正体も全ては会長が原因だったというお粗末なものだったわけだが。  
「……うーん、なんか出る気配ないね。大神くん！ いないのー!?!」

一向に開く気配の無い扉の前に、クラスメイトたちは大神を呼びかける声を、大神の不在を確かめる声へと変える。この状態がそのまま続けば、少なくとも今日のところは帰るだろう。天候を考えても、誰もいないボロボロのアパートの玄関先に居座り続ける

理由は無い。

嵐の中を帰らせるのは心が痛むが、人前に出られない現状では仕方がない……そう大神は結論付けた。

「……こうなったら仕方ありません。申し訳ないですが、ここは居留守を——」

「はいはい。今、出ます」

「なっ!?!」

だが、そんな大神の提案を刻が真つ先に打ち破る。両腕が使えないため、肩で押すことで扉を開ける。そんな刻の行動に慌てる大神だったが、考えてみれば刻のロストは「子どもの姿になる」こと。他の者たちと比べれば、人前に出ても特に支障はないロストだった。

「あれ? ボク、ここに住んでる子? 大神のお兄ちゃんっているかな?」

「……………」

もつとも……

「れ、零お兄ちゃんが今日は留守だつて言えつて……」  
中身はいつも通りのため、色々な意味で支障が出る行動をしたわけなのだが。

言わされてる感が満載な言葉、怯えているような表情と涙目、至るところにある怪我、そして両腕だけが重症という不自然さ。これらの要素から、クラスメイトたちは揃って一つの事態を想像した。

(ぎゃ、虐待——!!?)

——バツ!

「刻……! お前……!」

「ギャハハハ! あー、おもしろー!」

時すでに遅かったが、余計なことを突っ込まれる前に大神は姿が見えないように刻を引つ張り込む。あまりに突然すぎる行動に怒りをふつつつと湧き上がらせる大神だったが、刻はそんな怒りすら面白がるようにケラケラと笑っていた。

「つーか別にいーじゃん。透明人間とか超レアだぜ? せつかくだから見てもらえつ



て」

「他人事だと思つて……！ そんなことを言っている場合じゃ——」

「その声、大神君？」

自分は関係ないとしても言いたげに、無責任な発言をする刻。そんな刻に詰め寄る大神の背から、クラスメイトの一人であるあおばの声が届く。どうやら刻を引つ込めるのに精一杯で、扉の鍵を閉めていなかったらしい。

「なんだ、いたならもつと早く——え？」

幸いとも言うべきか、天候や『渋谷荘』の内装のおかげで薄暗かつたため、あおばたちも声だけで大神がそこにいることを何とか知ることができていた。

だが、人の身体というのは慣れてしまうもの。その薄暗さに目が慣れ、少しずつ大神の姿がはつきりと見えてくる。そう——

「ハア……ハア……！ い、いらつしやい……皆さん」

結論から言えば、その大神は透明人間という超常な状態ではなかった。

ただ、サングラスと顔のほとんどを隠しているマスク、目深に被られた帽子の上には防災頭巾。長袖のジャージに軍手、室内なのに長靴を履いている……息も荒れに荒れている超変な状態だった。

「お、お邪魔だったかしら……？」

入ってきてまさに数秒で飛び込んできた予想外の光景。あおばを含めた全員が「帰った方がいい」と本能的に感じていた。

「こ、この格好は気にしないでください……。少し風邪気味だったので、そのためです……。桜小路さんはインフルエンザのため面会謝絶です、すみません……。ゴホゴホ！」

「た、大変だね……」

「そんな時でも桜人形は手放さないのね……。あと猫も……」

(大人しく)

(なんや、こいつら)

とりあえず風邪のせいということにした大神だが、不審なことには変わらない。彼の

肩から顔を覗かせているミニ桜と遊騎が余計にそうさせる。

「ちよ、ちよつと……あなたたちは大人しくしていてください……!」

「大神、困った時はお互い様なのだ。私も協力するぞ」

「せやで、大神。オレが大神助けたるし」

(桜人形と会話……!?)

(つうか、猫とも……!?)

クラスメイトたちから見えないように桜と遊騎に大人しくしているよう話すが、当の本人たちは聞き入れる様子は無い。それどころか、その会話している様子でさらに不信感が増していった。

「お、大神君……。風邪だったら横になっていた方がいいんじゃない……」

しかし、そんな大神を前にしても「風邪だ」という言葉を信じて体調を心配する紅葉。背中を向けている大神にそつと近づいて……

「近寄んな。しばくぞ、このクソアマが」

「……え？」

(ゆ、遊騎……!!)

体調を案じる紅葉に対して非道な言葉をかける大神……だが、これは大神ではない。ちよやど大神の身体で隠れている遊騎が勝手に話しており、そのせいで大神がそう話し

ているように見えるだけだった。まあ、仮に遊騎が見えていたとしても、誰もその猫が喋っているとは思わないため、どちらにせよ大神が言っているように見えるのだが。

「あの、大神君……今なんて？」

「い、いえ……違うんです。今のは——」

「すつこんどけ、ボケカス」

「ほ、本当に違くて——」

「脳ミソかち割るぞ、オラ」

「……………」

「だから違うんですって!!」

止まらない罵詈雑言に、クラスメイトたちはもはや遠巻きに大神を見ている。どんなに大神が誤解を解こうとしても無駄だという雰囲気がある。そこには漂っていた。

どんどん大神の印象が悪くなっていく泥沼の状況。当然、居心地などいいはずがない大神は、この悪い流れを変える何か起きないかと無意識に願っていた。

「お〜い、大神く〜ん」

しかし、現実とは常に非情なのであった。

「そういえば私の服、洗濯したまま放置しててさ〜。仕方ないから（優の）服借りたよ——って、ありゃ？ お客さん？」

(謎の美女、登場!?)

(服借りたって……どうい関係!?)

ぐちやぐちやに着崩したTシャツとズボンを着て、何食わぬ顔で戻って着た優子。彼女の口から発せられた、もはや悪意が込められているのではないかと思うほどの言い回しに、大神はさらさらあらぬ誤解を受ける羽目になった。

「てゆーか何そのカツコ。我慢大会とか?」

「こ、これは深い事情が……! というかその服、優のですよね! だったらちゃんと優の服を借りたって言うてください!」

「優のだってわかっているならいいじゃん」

「わからない人たちもいるから言ってるんです!!」

(あ、あんなに親しそうに……!)

(大神……! 桜小路さんという人がいながら、まさか……!?)

何食わぬ顔で自由奔放な発言を繰り返す優子に、大神は何か爆発するのを何とか抑えながら詰め寄って注意をする。しかし、クラスメイトから見ればその詰め寄る姿も十分に誤解の素材となるわけだが……当の本人は気付いていない。

そして、もう一人忘れてはいけない人物がいる。普段の姿から考えて、最悪のパターソンとなれば一番のトラブルの元となり得る人物が。

「つたく、どいつもこいつも……！ 平家……お願いですから、あなただけは大人しくしててくださいね……。まあ、あなたなら下手なことはしないでしようが」

ひとまず優子との話を終わらせた大神は、ちようどよく後ろに座っていた平家（鎧姿）にぼそぼそと注意を促しつつも、どこか安心しているような言葉も漏らす。

普段なら奇抜な行動や言動が目立つ平家だが、下手に何かが起きればロスト……つまりは異能の存在が一般人に知られる危険があるこの現状。機密を守ることに厳しい彼ならば、そんな愚行は犯さないとわかっているのだろう。

「ええ、もちろんですよ。私はじつと静かに、ここで嵐が過ぎ去るのを待つて——」

——ピシャアアアア!!

「サンダー☆ソウル!!」

しかし、そんな安心も一瞬で打ち碎かれるのであった。

「バ——!!」

「ギヤアアアア!!」

雷が落ちて轟音と光に包まれたと同時に、高々と手を振り上げて立ちあがる平家（鎧姿）。完全に安心していた大神は、驚きのあまりに大きく肩を震わせてしまい、被っていた防災頭巾が取れて透明な頭が露わになる。突然、動きだした鎧と透明な大神……二重の異常な光景を目撃してしまったクラスメイトたちは悲鳴を上げた。

「……すみません。雷という光の芸術に身体が反応してしまいました……」

「この、バカが……!!」

急いで防災頭巾を被り直した大神は、今にも燃え散らしそうな勢いで平家に詰め寄る。平家もすぐさま非を認め、素直に謝罪の言葉を口にした。

一方、衝撃の光景を見てしまったクラスメイトはというと……

「今……あの鎧、動かなかったか？」

「いやいや……気のせいだろ。雷でよく見えなかったし」

「オ、オレは大神が透明に見えたような……」

「それも雷のせいだそう見えたただけだって」

「……鎧とも友達なんだな」

奇跡的にも、雷の光のおかげで見間違えという結論に至ってくれていた。まあ、さらなる誤解も受けているわけだが。

異様な姿をした大神に、決して手放そうとしない桜人形。容赦のない暴言、怪しい関係が疑われる謎の美女の存在、鎧のお友達……クラスメイトたちが『渋谷荘』に入ってから、外の嵐以上の勢いで起きた衝撃の出来事の連続。それらすべてを踏まえて、クラスメイトたちは揃って同じことを考えていた。

（大神君って……前から薄々気づいていたけど、超変わり者……!?!）

「え、ええと皆さん……今日は色々と立て込んでるので、帰ってください……」  
『ハ、ハイ……』

超変わり者から帰宅を促され、声を揃えて了解の意を示すクラスメイトたち。正直言  
うと、言われなくても帰りたくなっていた。

しかし……

「……あ！ でも、ちよつと待つて……」

——ザパン!!

『洪水警報発令中です。高い所へ避難してください』

「その……帰りの電車が止まるどころか、今夜生き残れるかもわからない状況なんだ  
けど……」

「なっ!？」

今の今まで気付かなかったが、『渋谷荘』の外は大雨、強風、洪水に晒され、とてもじゃ  
ないがで歩ける状況ではなかった。その光景は、嵐が本格的に猛威を振るってきたこと



を示していた。

——ポタ、ポタ……

「や、やだ……！ どうしよう、怖い……！」

「雨漏りのせいかな……？ なんか寒くなってきたような……」

「今気付いたツスが、水も電気も止まってるツス」

「くそ……何か対策を調べようにも、ネットも全滅だ」

「こ、この家……崩れたりしないよな……？」

強風で屋根が脆くなったのか、彼らが集まっていた一階部分のほとんどが雨漏り状態となり、大量の雨水がぼたぼたと落ちてきた。停電による暗闇と雨水による体温の低下……幾度も命の危機を乗り越えてきた大神たちならばまだしも、一般人であるクラスメイトたちは並々ならぬ恐怖を抱えていた。

「ちよつと男子！ なんとかしてよね！」

「うっせーな……。こんな時だけ頼んじゃねーよ、ツボミ」

「お、沖田!? なんかも悪くなってるぞ!？」

「ケンカしてる場合じゃないよう……!？」

「……………」

慌てふためき、荒々しい雰囲気が見え隠れしてくる中、大神はその場をただ静観していた。だが、それは恐怖に怯える彼らの姿をあざ笑うためではない。まして、彼らと同様に絶望しているわけでもない。

「——皆さん! こつちに来てください!？」

「お、大神……?？」

「早く!？」

——ガンガンガン! ガンガンガン!

「…………急場しのぎですが、二階のこの部屋だけは雨漏りを防ぎました。今日はここで寝てください!？」

「はい、ここですか？ ていうか、なんで二階に……？」

「二階は水浸しです。それに、外から水が流れ込んでくるかもしれません。何かあっても絶対に行かないでください」

「——くしゅん！」

「さっきの雨で身体が濡れた人はタオルで拭いて防寒をして体力が落ちないようにしてください。それから、ろ過機を作ったので水はそれを通してから。ガス漏れの危険もあるので火気厳禁をお願いします」

「火気厳禁って……じゃあ、飯は？」

「飯は困りません。缶詰があります」

「た、大量だな……」

大神の指示で二階まで移動してきた一行。大神が急ピツチで仕上げた雨漏り対策がされた部屋に集まって、一通りの注意事項を説明されていた。充電式のランタン、寝袋、大量のタオル、ろ過機に大神の私物である大量の缶詰。少なくとも今日一日だけならば何とかなるほどの用意がされていた。この用意のほとんどを、大神が一人で行ったというのだから大したものである。

「……ふむ、さすがはサバイバルマスターですね」

「ほとんど一人でやってしまうとは……さすが大神なのだ」

「戦場で育てられただけはあるってことカ」

大神とクラスメイトたちのやり取りを陰で見守るロスト組は、大神の迅速な対処に感心していた。といつても、これ以上のトラブルを未然に防ぐために大人しくしているよう大神に念を押され、それ以外にすることがないからである。

そんな彼らとは対照的に、大神はただひたすらに動き続けた。

食事でも……

「缶詰って開けるまで面倒臭いんだよな」

「二度に何個もできないしね」

「できますよ」

——スパ。パ。パ。パ！

「一瞬で五個くらいの缶詰を開けた!？」

「しかも一個の缶切りだけでだよ!？」

補強でも……

「大神、オレたちも手伝うぜ？ お前ひとりに任せるのは男として気が引けるぜ」

「……ツス」

「いえ、皆さんは体力を落とさないように休んでいてください。心配せずとも、こういう作業は慣れているので——」

——ビュオオ！

「あ、隙間風で大神君の頭巾が……」

「飛んでつちまった——って、大神!? なんでお前、頭を包帯でぐるぐる巻きにしてんだよ!? 怪我どころか重傷じゃねーか!」

「……その、聞いたことありませんか？ 風邪気味の時、包帯で身体を巻いておくとうるに良くなるって話」

「(色々な意味で) ねーよ!!」

就寝時も……

「今日は皆さん、この寝袋で寝てください」

「うわ〜！ 寝袋とかキャンプみたい！」

「これだけで寒くないのか？」

「構造上、熱は籠りやすいですし、慣れると快適ですよ」

「けど、寝てる間に屋根とか壊れたりしたらどうしよう……」

「僕が寝ずの番をしておくので大丈夫です。何かあればすぐに逃げられるように手引

きします」

「けど、それじゃあ大神君が……」

「心配しなくても、仮眠くらいは頃合いを見てとりますよ」

そうしてクラスメイトたちが寝静まった頃になっても、大神はただ一人で寝ずの番をし続けた。仮眠などとることなく、ずっと。

「大神……一人で大変ではないだろうか」

見ているだけで疲れるほどの量の作業を、たった一人でこなし続ける大神を陰から見守る桜はボソリと呟く。ただ純粹に、大神の身体を案じた故の言葉だった。

だが、そんな桜とは対照的な言葉を、刻は平然と返した。

「むしろ、いーんじゃネ？ あれでサ」

「え？」

近くにあつた椅子に座りながら、「あれでいい」と口にする刻。その意味がわからず、桜が刻の方を向くと、いつの間にか他の『コード：ブレイカー』の面々も椅子に座り込んでいた。

そして、全員が刻の言葉に納得しているような表情をしていた。

「ま、刻君の言う通りかな。あれくらい忙しい方が気が紛れていいんじゃない？」

「せやな。他のことなんか考える暇あらへん」

「……それが、いいことなのか？」

「今の大神には、ネ」

優子、遊騎は表情だけでなく、言葉でも刻への同意を示す。いまいち理解ができず首を傾げる桜に、再び刻が言葉を返す。

自身の過去を思い出すかのように、目を閉じながら。

「……人が死んだ後ってのは、無駄だとわかっていても色々と考えちまうのサ」

「せやから、メツチャごついプラモや」

「あれは半分くらいは趣味が入ってる気がするけどね」

「プラモもそのために……？ それって——」

「——虚しいんですよ」



ポツリと、平家が付け足すように呟く。プラモデルも、一人で多量の作業も……全ては何も考え込まないようにするため。そして、そうでもしなければ考え込んでしまうものの正体を、平家は静かに告げる。

「たとえ相手がどんな「悪」だろうと……報復という名の死には虚しさしか残らない。何事でも決して埋めることなどできない虚しさが。……もつとも、我々『コード：ブレイカー』の手は、そんな虚しさしか生み出すことはできませんがね」

『……………』

平家の言葉に同意するかのようになり、それぞれ虚空を見上げたり、俯いた状態で黙り込む『コード：ブレイカー』たち。仕事として、「悪」と認定された者を裁く存在である『コード：ブレイカー』。普段の雰囲気や今までのやり取りから、彼らにとつて人の命を奪うことに対しての抵抗は一般人よりも低い……そんな風に思っていたこともあるかもしれない。

だが、彼らは知っている。自身の手によって他者の命を摘んだ後に遺るものを。そして、その重さを。それら全てを理解した上で、彼らは「悪」を裁き続けていた。自身の

手を、虚しさしか生み出さないモノとして。

「……………」

彼らに対する言葉について、桜は最初の一文すら思い浮かばなかった。それほど彼らが発する雰囲気は重く……大きかった。そんな虚しさの存在を感じながら、桜は嵐の夜が終わるのを静かに待ち続けた。

「……………むう?」

すっかり休息に入っていた意識が覚醒していくのを感じ、桜は静かに目を開ける。起きてすぐというのは誰しも身体が上手く動かないものだが、今の桜はいつもより身体が鈍く感じていた。小型化したことによる疲れからか、かなり眠っていたようだった。

「寝過ごしてしまっただか……。そうだ、皆は？」

目をこすり、じつくりと身体を伸ばしながら身体全体も起こす桜。少しずつついづいとの感覚に戻っていくと、桜の意識はクラスメイトたちの安否へと移る。大神たちがいたとはいえ、自分も眠っていたので彼らの安否を直接見続けたわけではない。すぐに確認しようと、昨晚クラスメイトたちが夜を過ごした部屋へと移動した。

すると、そこには丁寧に畳まれた寝袋が置かれ、窓からは温かな朝日が差し込んでいた。

「……………そうか。皆、無事に帰れたのだな」

どうやら桜が起きるよりも先にそれぞれ自宅へと帰ったらしく、その部屋にはもう人の気配は無い。せめて帰るところまで見届けたかったと思いつながら、桜の足は自然と玄関へと向いていた。

「……………むっ？」

階段を飛び下り、玄関へとたどり着いた桜。すると、そこにはすでに先客がおり、玄関のすぐ近くで座り込んでいた。

「おお、大神ではないか！」

そこにいたのは他でもない、クラスメイトたちを最後まで見届けたであろう大神だった。クラスメイトたちが帰ったからか、あの異様な格好はもうしていない。

だが、それでも一つだけ異様なことがあった。

「あれ？ もうロストから戻ったのか？ まだ24時間は経っていないはずだが……」

そう、『透明化』で見えないはずの大神の姿は桜の眼にしつかりと映っていた。大神がロストしたのは一番遅かったため、普通に考えれば一番最後に戻るはずだった。だが、現に大神の姿は元に戻っている。そのことを不思議に思いながら、桜は大神の服をよじ登って彼の肩へと登っていった。

「大神、聞いているのか？ とところで、こんなところに座り込んで一体何を……」

肩に登ると、桜は何を言っても反応を返さない大神の頬をぺちぺちと叩く。それでも反応がないことを不思議に思い、ふと視線を落とすと……

『大神サンキュ〜』

『ありがとうね』

『防災ヒーロー！ 感謝！』

そこには、クラスメイト一人ひとりからのメッセージが書かれた一枚の紙があった。字体や内容は違うが、全てに共通しているのは……そこに、大神に対する純粋な感謝の気持ちがあったことだった。

「これはまた皆らしいのだ！」

「ふわあ……。んだヨ、あいつら良い奴らじゃん」

クラスメイトたちの気持ちが入められたそのメッセージに、桜は思わず笑みを浮かべる。ちようど起きてきた刻（ロスト中）も、素直に彼らのメッセージを評価していた。

だが、当の大神はというと……

「……まったくわからない。オレはやるべきことをやっただけです。わざわざこんなものを書いていくなんて……馬鹿馬鹿しい」

「そう言うな、大神。お前にとつてはそうでも、皆は感謝の気持ちを伝えたかったのだ。お前に助けてもらえて嬉しかったんだと思うぞ」

「……………」

自分はやるべきことをやっただけであり、感謝されるようなことはしていない……クラスメイトたちの行動が理解の外にあるかのように、切り捨てる大神。そんな大神を、桜はクラスメイトたちの気持ちを代弁するかのように笑顔で諭していく。

その桜の言葉を受け取った上で大神は……

——グシヤ!

「!?」

「オイオイ……お前、それも燃やす気カヨ」

乱雑に、左手で紙を掴みとる大神。わずかでも『青い炎』を出せば、紙片も残さず燃え散らせる状態。これまで桜が見てきた大神の冷酷な部分を考えれば、そのまま燃え散らすなど十分にあり得た。

そして、それを現実にするかのように、大神は左手に力を込めて——

「……わかりませんよ。今まで、誰かに感謝なんてされたことがないし。でも——」

——ぐっ……

力を込めて紙を握りしめたまま、大神はそつと自身の胸に添える。まるで、そこに書かれた言葉を噛みしめるかのように。

それを書いた彼らが向かっていった外に、真つ直ぐと眼を向けながら。

「……何？ もしかしてお前……何気に嬉しかったトカ？」

「は？ 何言っているんですか、あなたは。馬鹿ですか？」

「とぼけんな、とぼけんな。今ゼツテー喜んでた口」

「喜んでません」

決して表情が綻んだわけではない。だが、大神が発する雰囲気を感じてか、刻はニヤニヤと笑いながらそれをからかう。刻のからかいに対し、いつも通り淡々と相手をする大神。そんな彼の姿を見て、桜はかつて彼が放った言葉を思い出していた。

『物は嫌いです。人が死んでも物は残るから。だから、先に片付けておきたいんですよ』

かつて、彼はそう言つてクラスメイトたちから渡された名簿を、内容を全部覚えた上で燃え散らそうとした。もし、あの時の彼が今回のメッセージを見つけたとしたら、同じようなことを言つて真つ先に燃え散らしていただろう。

しかし、クラスメイトたちからの感謝が込められたメッセージは、不格好な形になりながらも大神の手の中にある。乱雑な扱いだが、大神なりに大切に持とうとしているように桜には見えた。

「……嬉しかったら素直に喜べば良いのだよ。大神……」



「あなたまで馬鹿なことを……。言っている意味がわかりませんよ」

「わからんか……。ふむ、それならそれで良いぞ！」

「カー!! お前ってホントにメンドクセー奴!!」

「せーの……。『珍鎮水』！」

「むっ」

小瓶に入った独特の色をした液体を、微量に振りまく会長。その一滴が桜の額に付着すると、徐々に桜の身体は元のサイズへと戻っていった。ちなみに、完全に戻り切る前に近くに置いておいたバスタオルを羽織っているので心配はいらない。(色々な意味で)

「よし、戻ったのだ！ それにしても、人間とはよく小型化するものなのだな」

(まだ嘘を信じてんのかヨ……)

「このクソネコが……！ 戻れるならさっさと戻るとけよ……！」

「え〜？ だって戻るよう言われなかったし、もう少し小さいままでいたかったんだも〜ん」

「私は桜ちゃんがちっちゃくて楽しかったよ！」

「聞いてねえよ……！」

あの後、他のメンバーとも合流したところで、『珍鎮水』の存在を思い出した一同。試しに会長に聞いてみるとやはり持っており、こうして使っているというわけである。

思えば、最初からこれを使っていれば大神もここまで苦労はしなかったのでは……そう誰もが思っていたが、キレル寸前の状態で会長に詰め寄る大神を見て、誰もが口にするのをやめた。

「しかし、『珍鎮水』は便利なものですね。我々異能者は24時間経たないと戻れませんか」

「ん？ でも大神君、元に戻ってるよ？」

「ア、オレもそれ気になってた。一体どんな裏技使ったんだヨ」

「いえ、オレは別に……」

桜が元に戻ったところで、話題は大神の方へと移る。ロストしてから24時間経っていないのに、なぜ大神は元に戻ったのか。どうやら平家や会長も心辺りはないらしく、

揃って頭を悩ませていた。

「うゝむ……大神だけ先に戻った方法か。確かにそれは気になる——」

——もに。

「な——」

——もにもに。

「……………ハ？」

大神のロストについて頭を悩ませていたまさにその時……話題の当人である大神が、何食わぬ顔で起こしたある行動は、一瞬で場の空気を固まらせた。

「お、大神……？」

「はい、なんでs——」

突然、桜の胸を揉む……という奇想天外な行動は、その場にいる人間のほとんどを混乱へと叩き落した。

「——%\$\*#Δ!!?」

……当人である大神も含めて。

「な、な……ナニやってんだ、テメエエエエ!!」

「おやおや」

「大神、堂々ろうくぼんとしとんなー」

「わ、私はいつたいどうしたら……」

「ち、違います!! コレはオレじゃない!!」

「アホか! テメーがテメーの手でやってんだろーガ! テメー以外に誰がやるんだヨ!!」

胸を揉む、という大神の行動に、顔を真っ赤にしながら真っ先に反応した刻。彼とは

対照的に、平家や遊騎はむしろ感心するかのよう<sup>に</sup>大神を眺めていた。そして、実際に胸を揉まれた桜はどうすればいいかわからず、汗をダラダラ流しながらその場で固まっていた。

だが、彼ら以上に慌てていたのはそれをやった大神本人だった。顔を真っ赤にしたと思つたら真っ青になり、この上なく混乱しているのが見てとれる。しかし……

「つーか、その手はなんだっつもの!! 慌ててんだか自慢したいんだかバカにしてんだかワカンネーんだヨ!!」

その手……刻が言っているのは、桜の胸を揉み、今は呑気にピースサインをしている大神の左腕のことだった。混乱しきっている大神の表情とは違い、ひらひらと揺れている。慌てているのに余裕の動きを見せる左手……矛盾以外の何者でもなかった。

「だ、だからコレもオレがやってるんじや——」

『——シャバヤー!!』

「…………え？」

突然、大神の言葉を遮るように聞き慣れぬ声。いつたい誰の声だと音の出所を捜すと…………予想だにしない場所に目があった。

『久しぶりのシャバヤー!!』

「…………ひ、ひ——」

間違いない……が、間違いとしか言いようがない。なぜなら、その声の出所は本来なら声など出るはずもない箇所だったから。

「左腕が喋ったアアアアア!!」

嵐が去ったはずの『渋谷荘』。

だが、嵐以上の衝撃が『渋谷荘』の住人たちに、新たに襲いかかったのだった。



code : 71 おはよう、『エンペラー』様

これは、『捜シ者』との闘いが集結して数時間後の深夜に起きた出来事――

木を隠すなら森の中……同様に、人を隠すなら人混みの中が適している。

何か事を成すにしても、ほとんどの人間はよほど自身の好奇心を刺激しない限り、他の行動に興味など示さない。もちろん、殺人など嫌でも注目を浴びる行為をすれば周囲の人間全てが目撃者・証人となる。

「お待ちせしました。『パンドラの箱』……持って参りました」

だが、人が人に物を渡す行為など、意識してみようとする者など一人もいない。たとえば、渡されている物が光り輝く箱だったとしても。

「これで、いよいよ始められます。我々の計画が」

「……………」

『捜シ者』との闘いの中、自身の異能を用いて『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を奪って姿を眩ませた時雨。今、彼はある人物と共に都内の大型交差点の真ん中に立ち止まっていた。周りを無数の人が往来するが、一人として二人のやり取りに聞き耳を立てる者などいない。

そんな中、時雨が『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を差しだす相手……右肩にインコを乗せた人物は、何も言わずに『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>を見つめていた。

——びよこん

すると、今まで姿を見せていなかったもう一人の関係者が、時雨の服から顔を出した。「ちよ、ちよっと時雨！ この人、誰!? な、なんかすっごくヤバい感じがするYO!?!」先の闘いでロストした『Re—CODE』が一人、日和である。小さい亀になっている彼女を、時雨は服の内側に潜ませて行動を共にしていたのだ。唐突に『捜シ者』から受けた傷にも簡易的な処置を施されている。

しかし、彼女は幼いながら『Re—CODE』として行動してきた一人。常人よりもはるかに恐怖というものに慣れている。だが、時雨の前に立つ人物の姿を見た瞬間、日和の全身をぞわりとした感覚が襲いかかり、彼女はすっかり慌ててしまっていた。そして日和の反応を見る限り、彼らが会っている人物は少なくとも『Re—CODE』とは関係のない人物だということが推測できた。

「……………『コード：シーカー』  
『捜シ者』は死にました。彼を斃したのは例の『青い炎』……………『コード：エンペ  
ラー』の腕を持つ『コード：ブレイカー』」

慌てふためく日和に対し、時雨は少しも表情を動かすことなく話を続ける。知り合い  
だからか、元々感情の起伏が薄いからか……………どちらにせよ、確実なのは時雨とこの  
「ヤバい感じがする者」は協力関係にあるということだけである。

「……………そして、『青い炎』は目覚めようとしています」

「……………」

わずかに目を細め、『捜シ者』との闘いの中で目にした『青い炎』の目覚めについて話  
す時雨。だが、相手はそれを聞いても反応を返そうとはしなかった。

すると……………

——ドン！

「痛つ……………！ チツ、交差点で立ち止まってんじゃねーよ。邪魔くせーんだ、ボケが」  
「……………」

突然、時雨と話していた相手の背後から歩いてきた若者がそのままぶつかった。明ら  
かに自分が前を見ていないせいだが、一方的に文句を言つて暴言まで吐いてきた。

背中からぶつかったため相手の顔を見ていないからか、若者は日和のように恐怖を感  
じる様子はない。現に、言いたいことを言うそのまま歩き出している。

——スウ

その中で、その人物は静かに片手を挙げた。そして、その瞬間である。

「つたく、ウゼ——」

——ドサ

ぶつぶつと文句を口にしていた若者。だが、唐突にその文句は途切れ、そのまま力無く倒れた。

——ドサ、ドサ

いや、彼だけではない。交差点を歩いていた全ての人が次々に倒れていった。

「え？ え？ 何コレ………いっただいどうし——」

目の前で起こった出来事が理解できず、日和は時雨の服から飛び降りて斃れた者たちの傍まで駆け寄っていく。

そこで彼女は気付いた。彼らは倒れたのではなく……斃れたのだと。

「し、死んでる!? 全員死んでるYO!? どうゆうこと!？」

交差点にいた百人は超えるであろう人々……その全てが、一人残らず命を失っていた。だが、外傷はない。見た限りの異常はない。死因も、方法も……ある一点だけを除いては謎に包まれていた。

「………零」

謎に包まれた中で、唯一明かされている一点。それは……

「大神……零か」

それを行ったであろう人物が……今まで閉ざしていた口を開き、不敵な笑みを浮かべているということだけだった。

時と場所は変わり、嵐を耐え抜いた『渋谷荘』の玄関では新たな騒動が起こっていた。それも、普段から非日常に生きる大神たちですら顔面蒼白となるほどの出来事である。

『久しぶりのシャバヤー！　ようやく目覚めたぞー！』

「ひ、左腕が喋ったアアアアア!？」

『青い炎』を操る大神の左腕……その左腕が大神の意志に反して動き出したかと思えば、流暢に喋り始めた。人間の腕が喋るなど予想できるはずもなく、その場にいた者全員が驚きを覚えた。

『ハハハ！　よう、零！　久しぶりだな！』

「左腕から声が……!?!」

「大神君、これは……」

「い、いや……こんなの、オレは知らない……!?!」

しかし、そんなことなどお構いなしに左腕はペラペラと喋り続ける。未だ事態を飲み込めていない桜に対し、平家は左腕の宿主である大神に心当たりがないか尋ねる。だが、当の大神も何が起こっているのかわからないらしく、彼らしくもない途切れ途切れの返答が返ってくるだけだった。

——ガタガタガタ!

そんな大神の動揺を表現しているかのように、左手親指にしている指輪が音を立てて揺れ始める。人見や『捜シ者』との闘いで、この指輪が『青い炎』に対して封印のような役割を持っているということは察することができる。

だが、そんな指輪の異常を認識するよりも先に、より目立つ異常が現れる。

——ゴォ!!

「なっ!?! 炎が勝手に——!?!」

『オイオイ、知らないってことはないだろ! オレ様だ! 『コード：エンペラー』様だ!』

「ゴ、『コード：エンペラー』!?!」

突然、大神の左腕に『青い炎』が灯る。大神の反応を見る限り、これも大神の意志ではないことは明白だった。そして、左腕はまた唐突に自身の名……『コード：エンペラー』という大神たちにとつてつい最近聞いたばかりの単語を口にする。その名を耳にした瞬間、大神たちの脳裏に蘇ったのは『捜シ者』との闘いの中で明かされた左腕の秘密だった。

「確か、大神の左腕の昔の持ち主……。平家先輩、これは一体……。？」

「……話しているのは間違いない。『コード：エンペラー』。おそらく、魂の分身のようなものが残留思念として左腕に残っていて、それが目覚めたのでしょうか」

「残留思念ねえ……。ていうか、『間違いない』とか言っちゃうつてことは……。平家つて『コード：エンペラー』と会ったことあるの？」

「さて、どうでしたかね？」

「答える気は無しつてわけね、ハイハイ」

かつて何千何万という悪を燃え散らしてきた『青い炎』……。煉獄サタン・フレイズの業火。それを操っていた『コード：エンペラー』であり、大神の左腕の元の持ち主。思い出すように桜はその情報を言葉にする。だが、それはあくまで確認であるため、それだけで真実に辿り着くはできない。そこで近くにいた平家に尋ねると、彼はどこか確信めいた口ぶりで淡々と現状を整理した。



その確信めいた口ぶりが気になったのか、今まで黙って話を聞いていた優子は腕を組みながら平家に尋ねる。だが、平家は優子の方を向くことも無く適当な言葉を返し、回答をはぐらかした。こうなると絶対に答ええないということを知っているらしく、優子も潔く引き下がった。

「バカな……!!?!? こんなこと、今まで一度も——」

——もに。

「なっ!!?!?」

平家の見解を聞いても混乱が続く大神だったが、『コード：エンペラー』は関係なしに再び動き出す。灯していた『青い炎』を消したかと思うと、そのまま「桜の胸を揉む」という目覚めて最初に行ったこととまったく同じことをしたのだった。

「エロ神イイイ!! 状況、考えろっつノ!!」

「正々堂々やわ。さすが大神うくぼんや」

「だ、だからオレじゃない! 左腕が勝手に!! とうか、桜小路さんは早く服を着てください!!」

「す、すまぬ……! 驚きの連続で、つい……」

言い忘れていたが、桜はまだ小型化から戻ってすぐの状態……つまりタオルを羽織っているだけで、ほぼ裸なのだ。大神に言われて迅速に服を着始めたが、さっきまでの裸同然の状態で「胸を揉む」という行為は周りの人間にとっても視覚的にダイレクトな刺激を与えるわけで、年頃とも言える刻たちには強すぎる刺激であり……

「天誅ー!!」

「がっ!?!」

「断罪!!」

「ぐはっ!!」

その強すぎる刺激によって、二人の人間が明らかに人間を超えた勢いで大神を攻撃した。そして、その二人の人間はどす黒いオーラを纏い、有無を言わさぬ顔つきで大神を見下ろした。

「……私の目の前で桜小路君のお胸を揉むとはね。大神君、君にそんな度胸があったとは知らなかったよ。久方振りに本気を出そうと思うんだが……相手してくれるよね？」

「最初は驚いてスルーしちゃったけど……誰に断って桜ちゃんの身体を好き勝手触つてんの？ 私、優みたいに異能は使えないけど、今だったら誰が相手でも負ける気しないよ？」

「ヒイイイ……！ か、会長と優子チャンが黒い……！」

「だ、だからオレの意志じゃなくてですね……！」

今まで見せたこともないような迫力で大神に迫る会長と優子。会長にしてみれば実の娘を目の前で辱められたようなものだからこの怒りも納得できるが、優子に関しては完全に自分勝手な私怨だった。だが、そこから見せる迫力は本物であり、刻ですら思わず恐怖を覚えてしまうほどだった。

そんな怒りを向けられた大神は、なんとか二人の怒りを鎮めようと説得を試みる。もちろん、望みは薄いのだが、せめて自分の意志ではないことだけはわかってもらおうと思つたのだろう。

「この左腕が勝手にやっているわけで……！」

——ゴォー！

「くっ……！　また勝手に炎を……！」

——ビキ

大神ではなく、『コード：エンペラー』の意志で動く左腕。その左腕に再び『青い炎』が灯ったかと思うと、何かにビビが入ったような音が響いた。

——ビキ、ビキビキ

その音は次第に大きくなり、そして……

——パキン

「な——!?!」

先ほどまでガタガタと揺れていた、大神の親指にはめられていた指輪。今まで『青い炎』の封印の役割をしていたそれが、音を立てて破壊された。

その、まさに次の瞬間——

——ゴアア!!

「ッ——!?!」

突然、大神の左腕全体が巨大な『青い炎』へと姿を変えた。『捜シ者』との闘いの中で

見せた姿は、まだ左腕としての形を保っていた。

だが、今回は違う。左腕どころか、何かの形を保っているわけではない。ただただ巨大な炎として広がっていった。

「ぐ、く……!!」　ぐああああ!!」

「大神!!」

「バカ!　下手に近づくな!」

大神の苦しむ様子から、これが彼の意志でないことは明白だった。なんとか抑えようとしているようだが、『青い炎』はそんな大神の意志に反してどんどん大きくなっていく。

そして、大神から一際苦しそうな声が響いたかと思うと、彼の全身を含んだ周囲一帯が『青い炎』に包まれた。桜は大神を救い出そうと身を乗り出すが、すぐさま刻が静止させる。桜が珍種であるということは把握しているが、今の『青い炎』は完全に暴走している状態。何かあるかわからないのだ。

——フッ

しかし、『青い炎』が周囲を包んだのはわずかな間だった。すぐに『青い炎』は消えた

……

「……お、大神?」

………  
宿主である大神と共に。

「一体どうしてしまったのだ……？ いや、考えている場合ではない！ 皆！ 大神が心配だ！ 一緒に捜すのだ！」

「ふむ、『青い炎』が変化しているのかもしれないね。まあ、こういう時は落ち着くためにお茶でも飲みましょう」

「せやせや。それにひよっこり出てくるかもしれんし」

「エロ神のことだからナー。姿を眩まして乳揉みの件をうやむやにする気なんじゃねーノ？」

大神の失踪に桜は血相を変えて捜そうとする。だが、桜とは対照的に平家、遊騎、刻の三人は呑気にティータイムを楽しんでいた。普段から非協力的な彼らの性格を考えれば予想できたことなのだが、今回ばかりは桜も本気なのだろう。

「早く!!」

「………スミマセンでした」

どこから取り出したか、花火の大玉（着火済み）を抱えながら再び説得（という名の脅迫）を試みる。その行動から桜が本気であることを察すると、刻たちは素直に大神捜索へと加わることにした。

「そうだね、早く見つけなきゃ……!」

「生き地獄つてのを見せてあげるよ……!」

「アンタら、色々と本気だな……」

こうして、二つの危険因子を含んだ大神搜索隊が結成され、『渋谷荘』中を対象にした搜索が始まったのだった。

### ①自室

「……部屋にはいないようだな」

「ま、さすがにここは安直だな」



②他人の部屋

「オレの部屋には……いねえか」

「遊騎君の部屋には——つて、うわあ!？」

「うお!?! どうしたんだヨ、桜チャン!？」

「な、なんでもないぞ!?! 遊騎君の部屋にもいないようだ! さあ、次に行こう!」

「……遊騎。お前、どんな恐ろしい部屋に住んでんだヨ」

「そんな見ればわかるやろ」

「じゃ、じゃあ遠慮なく——ドワアアアアアアア!!」

③それっぽいスペース

「物置にはいなかったのだ……」

「トイレにもいませんでしたね」

「こつちもいなかったよ」

「どこもハズレか……。つか、優子チャンはどこ搜してたワケ？」

「ゴミ箱の中」

「そりゃいねーワ」

#### ④論外

「大神君く怖がらないで出ておいで〜」

「痛くないよ〜？ 精神的に苦しめるだけだよ〜？」

「……あのサ、そう言われて出てくるわけねーシ。いや、それ以前に……そんな小つちえー棚に大神が入れるわけねーじゃん」

「よんぼん刻、洗濯機の中にもおらんかったわ」

「だからいるわけねーダロ!!」

こうして、手分けして『渋谷荘』中を捜しまわった一回だったが、大神の影すら見つけることはできなかった。

「大神、ろくぼん どこにもおらんなく」

「外に出てんじやねーノ？」

「いえ、『青い炎』が不安定な状態で外に出るようなことはしないでしょう」

すっかり疲れ果てた一同はその場に座り込み、どこを捜すべきかの話し合いを始めた。平家の言葉で外に出たという可能性がないと考えられる以上、やはり搜索範囲は『渋谷荘』に限定されてしまう。だが、すでにほとんどの場所を捜してしまったのも事実

だった。そこで、桜はまだ捜していない場所を考えた。

「あと捜していないのは……風呂場なのだ。幸いにも近くにあるし、行ってみよう」

「桜ちゃん、もし大神君がいなかったらそのまま一緒に風呂入る？」

「いえ、私は遠慮しておきます。まずは大神を見つけなくてはならないので」

「……惜しい」

「イヤイヤ」

候補として上がった風呂場に向かう桜を見て、優子が抜け目ない言葉をかける。だが、今の桜には通用するわけもなく、それもあっさりとかわされてしまうのだった。

「しかし、こんな時に『渋谷荘』に詳しい王子殿がいてくれたら助かるのだがな」

「無理無理、王子は帰ってこねーヨ。ロスト中は絶対」

「ということとは……誰も王子殿のロストを見たことがないのか？」

「私は見たことないし、優も見たことないみたいなんだよね。私としては死ぬまでに見たい王子様の姿ベスト3に入ってるんだけど」

「オレも見たことないわー」

「まず興味がありませんので」

ふと、この場にはいない王子が話題に上る。ロスト中は絶対に姿を見せないというのはどうやら本当のようで、誰も王子のロスト姿を見たことがないようだった。まあ、ロス

トした瞬間に絶叫しながら逃げていったことを考えれば、当然のことかもしれないが。

「そうか……。まあ、今は仕方ないのだ。私たちだけで大神を……。……。ん？」

話しながら、風呂場の引き戸に手をかける桜。いつものように引き戸を開けようとしたところで……。それがいつもと違うことに気付く。

「鍵が……。かかっている？」

いくら開けようと力を入れても、ほとんど動かない。この風呂場は男女兼用のため、覗き防止のためとのことで内側に鍵が用意されている。そんな風呂場の引き戸が開かないということは、鍵がかかっていると見て間違いないだろう。

そして、この状況でわざわざ鍵をかけて閉じこもる人間など一人しか考えられない。

「大神！ ここにいるのだな！ 開けるのだ、大神！」

「え？ 見つかった感じ？」

「みたいやな」

「でしたらお力添えしましょう」

「もはや袋の鼠だよ、大神君！」

「浴槽が真っ赤になっても許してね！」

「あの、優子さん……。穏便にお願いますね？」

確信を得た桜の声を聞きつけ、刻たちも加勢して引き戸に手をかける。ほとんどが口

ストしているとはいえ、『コード・ブレイカー』として活動するだけでなく、会長からのトレーニングの効果もあつて彼らの力は同年代よりはるかに強い。そこに桜という怪力の持ち主が加われば……

——バキ!

明らかな音を立てて、鍵が破壊される。閉められていた引き戸はすぐに開き、桜たちは遠慮も無しに乗り込んでいった。

「大神! 無事か——!」

——ちやぼん

「……………え?」

「え？」

そこには、確かに姿を消していた人間がいた。だが、それは桜たちがそこにいるとは予想もしていない人物。そして、普段とは明らかに違う部位をした人物。

「み、見るなアアアアア!!」

顔を真っ赤にして絶叫するその人物は……八王子 泪。風呂場にいたためか、上の衣類はシャツ一枚とラフな格好をしている。

ただ違うのは……下。足として二つに分かれているはずのそこは一つになっていて、その先も地に立てるような形状をしていない。わかりやすくいうならば、魚の尾びれにしか見えない。そう、言うならば今の彼女はまるで――

「人魚オオオオ!?」

「王子殿のロストはなんとも可愛らしい人魚さんなのだな」

「人魚? 半魚人の間違いでしょう」

「なるほどナ……。そりや隠れたくなるわけダ」

「そ、それ以上この姿に触れるな……」

大絶叫をしてすぐに湯船に入り込む王子をよそに、桜は満面の笑みで王子の姿を眺める。一方、平家は完全に悪意のみの言葉をかけ、刻は彼女が隠れたがっていた理由を知って一人納得していた。

と言っても、今の王子にしてみれば何を言われてもまともな反応などできるはずもなく、完全に全身が湯船に浸かっていた。まあ、湯船はそこまで大きくないため尾びれの方は湯船から出てしまっているのだが。そして、そんな姿を見て会長は「頭隠して尾びれ隠さず」などと呟くのがあった。

「恥ずかしがることは無いぞ、王子殿。優子さんや遊騎君だってあんなに感動して



……」

そんな王子を励まそうとしてか、桜はなんとかフオローを入れようとする。そこで、後ろの方でなぜか固まっている優子と遊騎を話題に出したのだが……一つだけ残念なことがあった。

「ハア、ハア、ハア……!!」

「人魚……魚……魚……!!」

「オイ……これって感動してる反応か……?」

よくよく見てみると、優子を見るからに怪しい笑みを浮かべ、だらしなく開いた口からは荒々しい吐息が絶え間なく出ている。

そして、遊騎は確かに目を輝かせてはいるが、その視線は王子の下半身へと注がれている。さらに、何かを訴えかけるように遊騎の腹が「ぐぐ」と鳴った。

とてもじゃないが、どちらも感動しているようには見えない。

「も、もう限界……!! 王子様! 私を抱いてー!!」

「魚喰うし!」

「来るなアアアア!!」

優子は興奮が、遊騎は食欲が限界を迎えてほぼ同時に王子に飛びつこうとする。あまりに突然で、さらに自分が湯船という逃げ場のない空間にいたため、王子は悲痛な叫び

声を上げた。やはりロストしているといつも通りとはいかないらしい。

「いかにも、ここでコイツにも仕返ししちゃってもいいかな……?」

「つ、つーかさ……このまま元に戻ったら下だけすっぽんぽんってコト……?」

そんな王子を助ける素振りすら見せず、会長と刻も己の欲望に従って動こうと画策していた。残ったのは桜と平家だけが、桜だけで子の人数を制することなどできるわけではないし、それができるであろう平家は元より助ける気が無い。

絶体絶命かと思われたが……

「……てめえら」

確かに、ロストしていつも通りとはいかない。だが、それでも変わらないことがある。

それは、彼女が八王子 泪という人間ということである。

「人魚舐めんじゃねーぞ、ゴラア!!」

——バシ!!

「痛い！ けど幸せ！」

「魚〜！」

「ぎやう！」

「いかにも!？」

「さすが半魚人」

尾びれを器用に振り回し、勢いをつけて遊騎と優子を叩き飛ばす王子。そのあまりの威力に、二人は刻と会長すら巻き込んで強制的に風呂場から退場するのだった。

そして、その数分後……

「——コホン。さ、さつきはすまなかつたな」

「……いや、こちらこそ迷惑をかけた。……本当に」

「この世の終わりみてーな顔してんじやねーヨ……」

「なんやそんなに魚喰いたくなくなつたわ」

「ふふ……実に開放的な気分です」

「うむ！ みんな元に戻つたのだ！」

無事にロストから戻つた『コード：ブレイカー』たちは、王子も加えて大神の探索を続けていた。ちなみに、会長はまだ小さいままなのだが。

「これでゆつくり大神を捜せるな！」

「……そう時間をかけてもいられないかもしれないぞ」

「え？」

改めて大神を捜しだす意志を見せる桜だったが、ボソリと呟かれた王子の言葉が彼女の動きをピタリと止める。時間をかけていられないとはどういうことか……尋ねる前に、王子は言葉を続けた。

「お前たちから聞いた話から考えると、もう『青い炎』は目覚めていると考えていい。……思ったよりも早い目覚めだが、これがどんな影響を与えるか誰にもわからないからな」

「どんな影響を……」

『コード：エンペラー』と呼ばれる存在の目覚め……これが吉と出るか凶と出るかは、現時点では誰にもわからない。だが、目覚めた直後でも大神の意志を無視して自身を動かしたり『青い炎』を操ることができれば、時間が過ぎれば何が起こつても不思議ではない。それこそ、大神の身を危険に晒すほどのことが起きたとしても。

「な、なら早く大神を——」

「おつたで」

「なに!？」

王子の言葉を聞き、大神を捜すことに集中しようとする桜。だが、そうした矢先に遊騎が大神発見を知らせる。一瞬耳を疑った桜だったが、遊騎が向ける視線の先……管理人室の中には、こちらに背中を見せて座り込む大神の姿があった。そして、その左腕は全体が『青い炎』と化していた。

「大神！」

『……………』

特に躊躇もなく大神に声をかける桜に対し、刻たち『コード：ブレイカー』は息を呑んで警戒心を高めていた。もし不穏な動きをすればすぐにでも動けるよう覚悟していた。

だが、当の大神は……

「……………」

不穏な動きどころか、何も反応を返さない。聞こえていないのか、反応する余裕すらないのか……それを確かめるためにも、桜たちはゆつくりと大神との距離を詰めていった。

「…………お、大神？　大丈夫か……？」

「……………」

いつもと違う雰囲気緊張を感じつつも、桜は大神の顔を覗き込む。そうして見えた

大神の表情は、ただただ驚きの色に染まっていた。目を見開き、瞬きすら忘れて前方に向けられている。一体彼は何を見て驚いているのか、桜もその視線の先へと意識を向けた。

「これは……『青い炎』の火の玉？」

大神の視線の先……『青い炎』と化した左腕の掌の上にポツリと浮かぶ『青い炎』の火の玉。大神を驚かせている原因と思われる物を見つけた桜だったが、何が大神をそこまで驚かせているのかまではわからなかった。

だが、すぐに彼女も知ることになった。

——随分と長く眠っちゃってたみたいだな

「おはよう。オレが『コード：エンペラー』様だぞ」

その火の玉こそが、『コード：エンペラー』目覚めの証だということに。

『……………ん？』

——多分。



## code : 72 『エンペラー』狂想曲

異能とは、異能者が操る超常の力である。

だが、それらは全てこの世に存在するエネルギーや状態。本当の意味での超常の力ではない。しかし、『青い炎』だけは違う。この世に存在するはずもない、あらゆるものを燃え散らす炎。そんな強大な異能を操る大神だが、かつての持ち主は違う。

その『青い炎』を操って何千何万もの“悪”を燃え散らしてきた者……『コード：エンペラー』。実際に姿を見た者はいなくても、その過去を聞いただけで畏怖の念を抱くほどの存在である。

そして今、そんな存在が大神たちの目の前に現れた……

「ふん、目覚めてはみたものの……随分と退屈な顔ぶれだな。この『コード：エンペラー』様にはな」

……正確には、『コード：エンペラー』と名乗る『青い炎』の火の玉、だが。

「ギャーハハハハ！ 大神！ なんだよ、そのツマンネー芸はヨ！」

「『エンペラー』いう割にはちっこいわー」

「へえ……『青い炎』を使いこなせるようになるとそんなこともできるんだな」

「いや、これは……」

自ら『コード：エンペラー』と名乗る火の玉の出現を目にした刻たちだが、誰一人としてそれを信じようとはしなかった。少なくとも、刻、遊騎、優の三人は大神が火の玉を作ったと思っている。

それに対して、当の大神はなんとかそれを否定しようとしているのか、どう説明しようかと言葉に悩んでいる。だが、そんな大神を無視して刻はニヤニヤと笑みを浮かべながら火の玉に顔を近づける。

「で？ どーゆー仕組みなワケ？ コレが喋ったり動くってゆーのは」

「バ、バカ！ やめろ！」

完全に油断している刻に対し、大神は真剣な表情と声色で彼を止めようとする。しかし、それでも刻は止まらず、ニヤニヤとした笑みをしたまま続けた。

「ハッ、なーにをそんなに必死になつてんだヨ。こんな火の玉にビビってんじゃ——」

——ボオ！

「熱イイイイ!?」

「気安く近寄るんじゃねえ、このカスが」

「……だから言ったのに」

刻が「火の玉」と言った瞬間、火の玉の口から『青い炎』が放たれ、刻の全身を包み

込む。もちろんそのダメージは計り知れないもので、当の刻は悶絶している。

(ま、まさか本当に……『コード：エンペラー』殿なのか……?)

傍若無人な態度に、『青い炎』を自在に操る力。なにより、大神の様子を見たことで、桜はあの日の弾が本当に『コード：エンペラー』なのではと考え始めていた。

「ふむ、まあ仮に本物だとしても魂の分身のようなものですけどね。しかし、分身の身だろうと関係ない、全ての者に恐れ敬われるであろうその佇まい……まさに異能者の頂点に立つ『皇帝』<sup>エンペラー</sup>ですね」

「あんな落書きみてーな顔した火の玉のどこが——！」

呑気に納得している平家だったが、全身黒こげになった刻は涙目になりながらもあの火の玉が『エンペラー』だとは認めようとしなかった。そして、再び「火の玉」発言をする……

「誰が火の玉だ！ このクズ共が!!」

——ゴォ！

「うわあー！」

「どっから見ても火の玉だろーガ——って、熱イ!!」

「よんぼん刻！ 大丈b——熱！」

「お前ら、少し落ち着——あっつ熱！」

「どうやら「火の玉」扱いはタブーらしく、四方八方に『青い炎』を爆散させ始めた『エンペラー』。桜はなんとか避けたものの、遊騎や優も刻と同じように直撃を受けていた。しかも、外れた『青い炎』は容赦なく『渋谷荘』の壁を燃やし始める。木造のため、その勢いは凄まじい。

誰に対しても容赦なく『青い炎』を振るう『エンペラー』。誰も彼を止めることはできないと思われた……その時。

「ハン、カス共が！ この古臭え家ごと燃え散らして——」

「……おい」

「あ？ なん——」

——ブミヨ!

「ブツ!？」

「……ふざけんなよ? テメエ」

「お、王子殿!？」

(ふ、踏みやがったー!!)

背後という死角から、声をかけられる『エンペラー』。それに反応して振り返った直後、高々と振り上げられた足が一切躊躇することなく振り下ろされ、『エンペラー』は顔を思いきり踏まれてしまう。

それをやった者……王子は反省の色など見せるはずもなく、冷たい眼で『エンペラー』を見下ろしていた。

「『渋谷荘』燃やすなんざこのオレが許さねえ……。火の玉如きがイキがつてんじやねえぞ、クソが……」

「ひ、火の玉じゃねえ! 『エンペラー』様だ! このクソアマが、足蹴にしてんじや

ねえぞ！ オレが本気出したらテメエ一人くらいけちよんけちよんに——！」

踏みつけられながら、どこか殺意が込められた王子の言葉を向けられる『エンペラー』。しかし、彼はあくまでも強気な姿勢を崩そうとはしなかった。

「じゃあ、大勢だったらどうだ……？」

だが、その態度を崩そうと不穏な影たちがぞろぞろと集まり始めた。

「オレたち『コード：ブレイカー』にケンカ売るたあい度胸だぜ？ 火の玉君」

「なあ、ガチンコごっこしようや」

「生憎、燃やされかけても大人しくしてるほどいい子じゃないんでな……」

「八王子が踏めるということは、無敵の『青い炎』でも分身なら攻撃は効くようですね。

何が有効か調べるためにも、色々と試してみましようか」

『渋谷荘』の修復費どーしてくれんの？」

それぞれ、恨みや好奇心を胸に『コード：ブレイカー』たちは黒い表情を浮かべる。いくら相手が『エンペラー』といえど今やただの火の玉。さらに自分たちはすでにロストからも回復した万全の状態で、数でも圧倒的に勝っている。強気に出るのも当然だろう。

だが、強気の姿勢を崩さないのは彼も同じだった。

「お、お前ら……！ 本当にやめた方がいいぞ？ オレ様が本気出したら大変なこと

に——」

「知るかヨ！ 『皇帝』殿、お覚悟ー!!」

—— You<sup>こ</sup> の s<sup>カ</sup> c<sup>ス</sup> u<sup>が</sup> m……!!

——ゴア!!

「な——!?!」

まさに、一瞬の出来事だった。つい先ほどまで、簡単に踏みつけられてしまうほど小さな火の玉だった存在が、一瞬のうちに自分たちの四〜五倍の大きさを持った、『青い



炎』によって形成された巨人と化した。

巨大な体格に相応しい巨大な四肢を持つそれは、その右手で刻を包み込んでいた。だが、そこに優しさなど存在するはずもなく、刻は指先一つすら動かさないほどの緊張感に包まれていた。

(なんてデカさ……！ そ、それにコイツ……全部が『青い炎』だ……！ 少しでも動けば、散りも残さずに燃え散らされる……！)

(これが、さつきまで火の玉だった奴だと……!?)

(『エンペラー』の名は伊達じゃねえってことかよ……!)

ジリジリと、全身を焦がすような熱量が刻を襲う。そのあまりのプレッシャーに、刻以外の『コード：ブレイカー』たちも身動き一つできずにいた。

『Flame……Flame……』

そんな彼らを見下ろす『青い炎』の巨人。怒りに染まった眼を向けたまま、地に唸るような声でその殺意を言葉にする。

『Flame away……!』

そして、その怒りのままに『青い炎』の巨人は刻を燃え散らそうと、右手を閉じ――

「やめろ」

大神の、決して大きくない静かな言葉が巨人の動きを寸でのところで止めた。

『……………』

「……………」

巨人から放たれる尋常ではない殺気を前にしても大神は微塵も視線を外そうとはせず、互いに睨み合うだけの時間がじわじわと過ぎていった。

そして……

——フツ

「刻君！」

『『青い炎』、消えよった』

「チツ……………！」

唐突に、巨人が元の火の玉に戻ったことでその時間は終わりを迎える。巨人が消えたことで刻も解放され、心配した桜と遊騎が彼に声をかける。

大神が止めに入ったことで最悪の事態を免れた刻だが、不覚をとられたこと、そして大神に助けられたという事実を素直には受け入れられず、隠すことなく苛立ちを見せる。だが、そこで火の玉……『エンペラー』が意外な言葉を口にした。

「……まあ、零。お前がそこまで言うなら仕方ねえな。オレたちは一心同体……お前の身体はオレの身体だ。そして、オレはお前の心だってわかっている。……どうやら、お前はこいつらが大事らしいな」

「……へえ？」

「……そうなの？」

『エンペラー』の言葉に、優は意外そうに大神を見る。苛立っていた刻も、その苛立ちをすっかり忘れて瞬きを何度も繰り返していた。

「……何を訳のわからないことを」

「ふん、相変わらず素直じゃねえな。まあいいさ。……だがな、零。これだけはよく覚えておけ」

——オレが目覚めた以上、お前はこれからいろんな連中に命を狙われる。こいつらを巻添えにしないよう、せいぜい気を付けるんだな。

その言葉を最後に、『エンペラー』は大人しく大神の左腕へと戻っていった。だが、それはあくまで表面上のみ。内心では、自分をぞんざいに扱う『コード：ブレイカー』たちに対する怒りを燃やしており、なんととしても彼らの弱みを握ってやろうと一人闘志を燃やしていたのだ。

そして、みんなが寝静まった夜……彼は誰かの弱みを握ろうと行動を開始した。こっそり忍び込んだ管理人室にて弱みとなる物を捜す『エンペラー』だったが、ほとんど失

敗状態。落ちていた漫画に感動したり、偶然点いたテレビを興奮したりなど、特に何も発見はできない……と思っていた時だった。

「むっ！ 動きやがったな、王子<sup>凶暴女</sup>！」

『コード：ブレイカー』全員に対し密かにつけていたらしい、『追尾炎<sup>ついびえん</sup>』と呼ばれるものからの信号を受け、王子が外に出たことを察知した『エンペラー』。夜中の外出を怪しんだ『エンペラー』は、向かった先に彼女の弱みがあると信じて後をつけるのだった。

「なあ、大神。なぜ『エンペラー』殿がいなくなったのがわかったのだ？」

「……『エンペラー』が離れるとわかるんです。なんとなくですけど」

「なるほど。一心同体というのやはり本当なのだな」

「そういう桜小路さんは、どうして気付いたんですか？」

「私は偶然だ。『子犬』がトイレに行きたがったから、それに付き合っていた時にな」

「ワン……」

突然の外出を察知し、王子を尾行する『エンペラー』だったが、その後方では当の『エンペラー』を大神と桜が尾行していた。それぞれが『エンペラー』の行動を察知した理由を話し合いながら尾行を続ける二人だったが、その話題はいつしか大元である王子に関するものへと変わっていった。

「……大神、お前は王子殿の外出については知っていたか？」

「たまに出ているのには気付いていました。ですが、今日と同じでバイトではないことはわかっていたので、オレには関係ないことです」

わかっただけのことだが、桜の問いに対して淡泊な言葉を返す大神。いつもならここで、「この薄情者が！」ぐらいの声がかかりそうなものだが……今回は違った。

「私は……全然知らなかったのだ。こんな機会がなければ、気付くことなんてなかったかもしれない……。一つ屋根の下に住んでいても……私は王子殿のことを何一つ知らないのだな」

「……………」

その言葉に込められたのは、明らかに自責の念。気付いた上で何も行動しなかった大神よりも、まず気付くことすらできなかった自分を情けなく感じていたのだ。こうした生真面目さも、彼女らしいといえば彼女らしいが。

「……着いたようですよ」

すると、ちようどよく『エンペラー』がある場所に入ってしまった。どうやら、そこが王子が向かった、彼女の目的地らしい。大神に言われて気付いた桜がその場所を見ると、そこは地下へと続く階段の先にあつた。わずかに開いた扉の隙間から洩れる光は、夜だということを忘れさせるほどの賑やかさを感じさせた。

「ここは一体……？」と、とにかく中に入つて王子殿を——」  
 そうして中に入つた大神と桜。そこで、彼らは知つた。

「——いくぞ！ 次の曲は……『泪くNAMIDAく！』」  
 ——オオオオオオオオオオ!!

八王子 涙……『コード：05』を名乗る彼女が、『8エイtトeaテイrsアーズ』という歌手であることを。

『——おねいちゃん』

『おねいちゃん、おうた。じょうずなおうた、うたつて』  
『だめ……！ ぜったいにだめ……。そんなはずかしいこと、できないよ……』



『やだー！ おねいちゃんがいじわるー!!』

「……………」

王子は、地下のライブハウスでの活動を終えると、一件の空き家へと向かった。ライブハウスでは予想外の客人たちがいて意表を突かれたが、今は特に追われているような気配は感じない。

——ギイイイ

廃れているせいだろう。独特の音を立てる戸を開け、王子は迷いなく空き家の中へ入っていく。

中は、まさに使われなくなった当時のまま、という状態だった。家具、玩具、日用品……全てが定位置とも言える場所に置かれており、動かされた形跡もない。

——おねいちゃん

「……………」

思い出そうと意識したわけでもない。だが、どうしてもここに来ると思い出してしまふ。ここに残る思い出の数々を。それだけは、何度来ても変わることはない。一種の性さがのようなものだと考えている。

だから、心が大きく揺らごうとはしない。だが、心地よく感じるようなことでもない。自分の意志に反して、頭の中で再生され続ける思い出を振り払おうと、彼女は動き――

「……………」

『……………』

動き出したところで、ちょうどよく窓から月明かりが差し込む。窓の傍に障害物など無いため、本来なら窓の形に切り取られた月明かりのみが入り込むだけだった。

しかし、その月明かりの中にはどこか見覚えのある影が映っていた。若い男の左腕と、見間違えるはずもない着ぐるみの形。それらが誰かを理解した上で、王子は次の行動を決定した。

「デメエら!! コソコソそこで何してやがる!!」

「うわあああ!!」

一切容赦することなく、本気で『影』を使って攻撃する王子。常人ならば一瞬で細切れになっていであろう攻撃だが、覗き込んでいた人物たちは寸でのところでそれを避ける。

だが、その正体についてはすでに見抜かれているため、すぐさま王子の怒号が飛び交う。

「こんなところで何してやがる、『渋谷』! つーか、零と桜小路まで一緒になって何やってんだ!」

「オ、オレは別に……! 原因はこいつらで——」

『散歩です』

口裏を合わせたかのように振る舞う会長と大神の左腕（エンペラー）。彼らがここに来た理由……

もとい、原因は彼らにある。

というのも、ライブハウスで王子が歌手であることを知った大神と桜は、そこでバイ

トをしていた会長とも遭遇した。そこで、『捜シ者』との鬪いや直撃した台風、『エンペラー』が壊した部分も含めての『渋谷荘』の修復費を稼ぐために王子に歌ってもらっている、と王子が歌う理由について説明される。

だが、それが全てではないことを大神はすぐに見抜いた。そのことについて言及したところ……：会長は彼らをこの空き家へ案内し、王子の弱みを見つけた『エンペラー』は大神に有無を言わずに同行させたというわけである。

「こつそりついてきてしまったのは申し訳ないのだ……。でも、ここつて一体……ん？」

男たちとは違って素直に謝る桜だったが、王子がここにいる理由……：彼女が歌う本当の理由は誰よりも気になっていた。謝りつつもキョロキョロと室内を見渡す桜は、ある物を見つけた。

「これは……写真？」

写真用の額に納められた、ほとんど埃も乗っていない写真。そこには、仲睦まじい様子で写る四人の家族の姿があった。両親と思われる、満面の笑みを見せる大人の男女。母親の膝の上に座る、まだあどけなさの残る顔立ちをした男の子。

そして、わずかに顔を赤くしてスカート裾をギュツと掴む女の子。その女の子の顔が、桜の中である人物と繋がった。

「もしかしてこれ……昔の王子殿!？」

「いかにも、その通りだよ」

「か、可愛いじゃねえか……!」

「……お前、さつきから何やってんだ」

隠す様子も無く、桜の予想を肯定する会長。その隣では、顔を赤くした『エンペラー』がプルプルと震えており、大神はその奇行をただ見守るのだった。

しかし、なぜこのような空き家に王子の過去を写すものがあるのか。その答えは簡単だった。

「では、ここは王子殿の……?」

「いかにも、ここは——」

「渋谷! ……それ以上は言うな」

その答えを会長が口にしようとした時、王子がすぐさまそれを止める。その表情は懇願するようでもあり、どこか悲痛なものを感じさせるようだった。

まるで、過去の傷を抉られる寸前のような。

「……………」

「…………ツ」

だが、そんな王子の顔を会長は真正面からじつと見つめ返す。あくまで見えているの

は着ぐるみとしての姿なのに、有無を言わさない迫力を王子は感じた。

「——くそ！ 勝手にしろ！」

「お、王子殿！」

「いいんだよ、桜小路君」

普段なら自分の意見を通そうと、頭突きの一発でもお見舞いしているだろう。だが、今回ばかりは会長の迫力に押し負けるようにして、王子は会長たちに背を向けた。

王子を心配して思わず追いかけようとする桜だったが、会長は彼女を静かに止める。

「過去っていうのは、黙って独りで抱えている内は何も変わらない。……ただの過去なんだよ」

「会長……」

まるで自身が体験したかのような、重みを感じる言葉を呟く会長。いつになく真剣な様子の会長に、桜の進みかけた足はぴたりと止まった。

そして、会長は静かに語り出した。『コード：05』……王子の過去を。

「この家は、王子が子どもの頃に家族で住んでいた家だよ」

「やはり、王子殿のご実家でしたか……」

「両親と王子、そして弟の四人家族。私は会ったことは無いけど、飾ってある写真とかを見れば仲の良い家族だったってことはわかるよ」

今でこそ空き家だが、この家はかつて王子が家族と共に過ごしていた家だと明かされる。飾つてある写真、子どもらしい独特のタッチで描かれた絵……幸せな家族だということを実証するようなもの一つひとつが、会長の言葉が真実であることを裏付けている。

「……でも、それも一瞬で終わってしまった」

「え……？」

ふと、会長の声のトーンが低くなる。そして、会長は驚愕の事実を語る。

「王子の家族は皆、異能を持っていた。そして、全員が事故に見せかけて殺されたんだ」

「そ、そんな……!?!」

家族全員が異能を持っていた、というのは冷静に考えれば納得できる事実でもある。現に王子が異能を持って生まれたのだ。血縁者も異能を持っていても不思議ではない。だが、後半については看過することなどできない。事故に見せかけて殺された……つまりは暗殺されたという事実。会長は直接語らなかったが、異能の事実と暗殺の事実を一緒に話したことを考えると、暗殺の理由に異能が関わっているのは確かなのだろう。「けど、両親が庇ったおかげか王子だけは生き残った。……たつた独りでね。それ以降、王子は時間が許す限り家族のために色々な歌を歌っている。まるで独り生き残ったことを贖罪する鎮魂歌のようにね」

「鎮魂歌……」

それこそ、王子が歌う本当の理由。彼女が歌う歌の全ては、金や名誉などには欠片も向けられてはいない。全ては殺された家族のため……生き残ったことを「罪」と考えた所以の行動だった。

——ポオオ……ン

「……当然のことだ」

「王子殿……」

今まで背を向け、決して話に入ろうとはしなかった王子。だが、不意に部屋に置いて



あつたグランドピアノの鍵盤を弾き、心地の良い音を響かせる。

しかし、その直後に呟かれた彼女の声はひどく悲しい声音をしていた。

「昔の私は……弟からどんなに頼まれても、恥ずかしがつて歌わなかつた。……子どもだつたとはいえ、自分が情けなくて仕方がねえ。どんな歌でも……いくらでも歌つてやればよかつたんだ」

「……………」

後悔の言葉を口にしながら、その言葉を噛みしめるかのように拳を握る王子。後悔と悲しみに満ちたその姿に、桜はかける言葉が見当たらずにただ見守ることしかできなかった。

「死んでから気付くものなんですよ」

だが、そこで大神が静かに呟いた。王子に背を向けて窓の外へと視線を向けたまま、自身の経験から語られるような重い言葉を。

「あの時こうしていればよかつた、なぜああしなかつたのか……決して埋めることはできない後悔を人は繰り返します。誰でも……生きている限り」

「大神……」

『コード・ブレイカー』として、人の死には近い日々を過ごしてきた大神。そして何より、彼はかつて生活を共にした『捜シ者』を自身の手で討っている。人知れず彼も通つ

てきた辛い道を語る彼はどんな表情をしていたのか……見えはしなかったが、哀しい顔をしているのだと桜は感じ取っていた。

だが、そこで誰も予想していなかった言葉を口にする者が一人。

「へっ、面白れえ！ あの凶暴女の弱みを見つけたぜ！ そんなに後悔してんなら、そりゃーヒーヒー泣くんだろな！」

「え……!?!」

この上なく悪い笑みを浮かべる『エンペラー』を見て、桜は思わず目を見開く。どことなく嫌な予感を感じたが、それを止める間もなく『エンペラー』は動きだす。

「いくぞ、零！ ボサツとしてんじゃねえぞ！」

「ちよ!?!」

「な……!?!」

左腕を動かして、『エンペラー』は大神も連れて王子との距離を詰める。普段ならば王子もすぐに反応できたかもしれないが、思い詰めていた状態ではそうはいかない。反応が遅れたことで、『エンペラー』は難なく王子の目の前まで移動した。

「覚悟しやがれ、凶暴女! この『エンペラー』様をコケにした罰だ! 死んだ奴らの恨み節で泣き崩れやがれ!!」

——カツ!

——ドオ……ン

突如『エンペラー』の身体が光りだし、その場にいた全員が目を瞑る。ほんの一瞬の暗闇が視界を染めた後、すぐに目を開けると……そこには『青い炎』の巨人と化した『エンペラー』の姿があった。

そして、もう二人……『エンペラー』が差し出した掌の上に立つ、人型の『青い炎』が

あつた。

「こ、これは……」

「……あなたの死んだ家族のようです」

「なに!？」

「『エンペラー』の煉獄サタン・ブレイズの業火は死者の魂の結晶……言ってみれば、全ての死者の魂は奴の下僕も同然。その下僕の魂の一つや二つを呼び出すのは、奴にとっては容易いよう  
です」

突然のことに混乱する王子に対し、『エンペラー』の宿主である大神は冷静に説明する。死者を呼び出すという普通ならば信じられないような内容だったが、相手は『コード・エンペラー』で、彼が操るのは超常の力である『青い炎』。人知を超えた現象を起こしても不思議ではない。

『——』

「ほ、本当に……父さん、母さん」

驚きながらも、王子は二人の顔をジッと見つめる。幼い頃の記憶とはいえ、自身の家族の顔を忘れるはずがない。二人が自分の両親であることはすぐにわかった。

最期に過ごしたあの日……死んだ時のままの姿であることも、すぐに気付いた。

「な、なんて言ったらいいか……。オレ——いや、私独りだけ生き残って……」

本来なら、死んだはずの両親と会えれば話したいことなど山のようにあるだろう。だが、王子の口から最初に出てきたのは生き残ってしまったことへの謝罪だった。

家族一緒ではなく、自分独りだけ生き残ったことを罪とするかのように。

「どう言っても許してはもらえないと思う……。だけど、今の私には……こうするこ  
としかできない。本当に、申し訳な——」

「違う!!」

「……さ、桜小路？」

突然、今まで事態を傍観していた桜が大声を張り上げた。驚いた王子が桜の方を見ると、彼女は全身をわなわなと震わせ、とても哀しげな顔で拳を握りしめていた。

「違うのだ……王子殿。せつかくご両親に会えたのに……謝るだけなんて間違っているのだ！ もっと他にもお話することがたくさんあるでしょう！」

「そ、それは……」

真正面からぶつけられる桜の正論に、王子は思わず目を逸らす。わかつてはいても、自分でできることは謝罪しかない……そう思つて出てきたのが今までの言葉だったから。呑気に笑つて話をするなど自分には許されないと考えていたからだつた。

「ご両親殿！ 王子殿ならもう独りではないから心配いらぬのだ！ 我々だけでなく、刻君や遊騎君、平家先輩や夜原先輩……『渋谷荘』の皆がいる！」

そんな王子の心情を察して……いや、察してはいないのだろう。ただ純粹に、「ならば自分が」と考えて、桜は王子の両親を安心させるような言葉を必死に語り始めた。彼女はもう独りではないと、だから心配いらぬと……桜は懸命に訴えかけていた。

そして、桜が続いてもう一人。両親に向けて話す者がいた。

「いかにも、いいマネージャーもついていますから。王子だつたらちよつと生足出し

て歌えばそりやあもうザックザク——」

——ドガツ!!

「そうだな、ザクザクぶっ殺せるな」

もつとも、その内容は自身の欲望丸出しであり、話をしていた会長は当事者である王子から容赦のない制裁を受けるのだった。

「ぼ、暴力反対だよ〜!」

「誰が悪イんだ、オラ! アア!?!」

「ちよ、ちよつと! 二人とも、仲良くするのだ〜!」

『……………』

会長の発言で、一気に泥沼と化していく王子たち。ギャーギャーと騒ぎ散らして暴力をしたりと、とてもじゃないが実の両親に見せるような現場ではない。

そのカオスな現状に、王子の両親も表情を曇らせて——」

「……………つたく、しょうがない奴らだ」

静かに、そう呟いた時の王子の表情……それは、心から安心している表情。そこが自分の居場所であると、心から感じている者が見せるものだった。

『』  
それを見た両親は、一点の曇りのない笑顔を見せる。そこには不安も、ましてや生き残ったことを憎むような感情は欠片も存在していなかった。

王子と同じ、心から安心している表情を見せて……彼らは消えていった。

——フッ

「ギヤハハハ！ どうだ、死んだ奴らの恨み節は！ さぞ傷ついたらだろ!!」  
「……お前も大したことねえな。所詮は見てくれだけか」



「アア!？」

王子の両親が消えたところで、巨人と化していた『エンペラー』も元の火の玉に戻る。あくまで王子は傷ついたと考えているようだが、結果としては傷つくどころか癒しているようにも感じる。

そんな『エンペラー』に対して毒づく大神だったが、そこで彼は今まで誰も触れようとはしなかった点について触れる。

「弟……王子の弟がいなかっただろうが」

「そ、そういえば!」

「両親二人で手一杯とは、随分と情けねえ皇帝様だな」

そう、『エンペラー』の手で呼び出されたのは両親のみ。両親と共に死んだ弟の姿など影も形もなかった。死んだ家族の恨み節を聞かせるなどと言っておきながら、家族全員を呼び出せない『エンペラー』に呆れる大神だったが、当の『エンペラー』はというと……

「零……お前、バカか?」

「あ?」

「これでオレ様の宿主とか、心底呆れるぜ……。情けねえ上に何もわかつちやいねえ」  
「テメエ……さつきから何を言つて——」

「死んでねえ奴を蘇らせられるわけねえだろ。少しは考えろよ、バーカ」

「……………え？」

「エ、『エンペラー』殿……………それって……………」

「なんだよ……………だから、この凶暴女の弟は生きてるって言ってるんだよ」

『エンペラー』が呆れたように放ったその一言は……………王子たちに両親が現れた時以上の衝撃を与えた。今までずっと、死んだと思っていた弟が生きていた……………それは、王子の心を癒すどころではない。強い希望を与える言葉だった。

「ほ、本当なのですか!? 王子殿を悲しませるための嘘だったりしないんですよね!」  
 「あ? オレ様がそんな下らねー嘘をつくわけねーだろうが。間違いなく弟は生きてるぜ」

「生き、てる……」

何度も確認する桜に対し、しれつと答える『エンペラー』。それだけ淡泊ということ、何も考えずに言っているということ。それに、言い方としては失礼だが、彼は陥れるための嘘をつくならばもつと悪意に満ちた顔をするはずだ。ほんの数時間前に出会ったばかりとはいえ、彼が人を上手く騙せるような器用な人間ではないことは皆わかっていた。

『エンペラー』のその淡泊さが、その衝撃の事実を真実だと決定づけていた。

「よかった……! 本当に、生きて……! ありがとう……ありがとう、『エンペラー』……!」

「王子殿……」

胸の前に拳を握り、こうして明かされた真実を噛み締める王子。その眼から溢れる涙からは、決して悲しさを感じない。ただただ喜びに満ちた……宝石のように輝く<sup>なみだ</sup>泪だった。

今までは鎮魂歌として、死んだ家族に向けて歌われていた彼女の歌。だが、これから

は違う。これからはどこかで生きている弟に向けて歌うことができる……桜はそう感じていた。

「……………」

時は、数十分ほど前まで遡る。扉越しに感じる人の気配で、大神たちが外出したことを感じ取った優だったが、彼はそれを放置した上で自室に籠っていた。といっても、ただ籠っているのではない。灯りは蝋燭の火だけという暗闇の中で、彼は凜とした姿勢で正座をし、目の前にある風呂敷包みを見ていた。

——シユル

伸ばした背中を崩さぬまま、包みを丁寧に解いていく。そうして露わになった中身には……粉々に砕け散った『斬空刀』があった。

「……………」

『捜シ者』との闘いで砕け散った自らの愛刀……その変わり果てた姿を改めて目の当たりにした優は、先日、平家から全『コード：ブレイカー』に向けて話された話について思い出していた。

「……皆さん、『捜シ者』との闘いはお疲れ様でした。『ReeCODE』を仕留めることはできなかつたとはいえ、『捜シ者』という一人の強大な“悪”を斃し、『捜シ者』に加担する異能者たちを壊滅状態にできたことは大きい。……ですが、これで終わりではありません。『パンドラの箱』<sup>ボックス</sup>は時雨に奪われている。いずれはこれを奪い返すために動く時が来るでしょう。その時まで、それぞれ準備を進めるようお願いします」

「やっぱり……このままじゃダメだよな」

ボソリと、そう呟いて優は立ち上がる。窓の外に目を向けると、今日は珍しく星がよく見えた。いつもより若干ながら明るい夜の世界を、優は遠い目で見つめる。届くはずもない……ある人物へ向けて。

「行くべきか……アイツのところへ」

その言葉を最後に、彼は蝋燭の火を消した。完全な暗闇に染まった部屋で、彼は静かに目を閉じた。

## code : 73 イレギュラーな訪問

それは、突然のことだった。

「え？ 何日か出かけるから許可が欲しい？」

「はい」

『エンペラー』の復活（火の玉状態）、王子の秘密や彼女の弟の生存など、衝撃だらけの一日が明けた早朝……朝食を食べ終えたと思ったら、優が会長に対して外出の許可を取ろうとしていた。

といっても、特にこの『渋谷荘』に「出かける時は許可を取る」などというルールは存在しない。しかし、何日かという長い時間のため、念のために許可をもらおうとしているのだろう。そして、そんな突然の外出許可願いに、会長はというと……

「いやあ、私としては好きにしてくれて構わないよ？ しばらく修業もお休みだしね。それに今は『コード：ブレイカー』としての仕事も無いらしいし」

そう、今の『コード：ブレイカー』は全員が休暇中となっている。というのも、『捜シ者』という強敵との闘いからさほど日が経っていないというのが大きな理由だ。さら

に、その『捜シ者』が討たれ、彼に従っていた多くの異能者たちも優が斃した。当面の危機を避けたため、というのもある。

「だから特に問題なし。いかにも、許可はするよ」

「ありがとうございます」

ピツ、と手を挙げて優の願いを快諾する会長。優は深々と頭を下げると、「失礼します」と一言添えてから歩き出した。そのまま食堂を出ようとした……のだが、そうもいかなかった。

「夜原先輩、どこかにお出かけですか？」

朝食を食べ終えてすぐだったため、全員が食堂には集まっていた。そのため、優と会長の話を聞いていたのも、また全員ということだ。

優が外出するという珍しい出来事に興味を持ったらしい桜は、なにやら楽しそうに優に声をかけたのだった。

「ああ、そんなに長くはないが何日かは戻らない。その間、オレが担当の家事はお前らに任せることになるが」

「ハア!? 自分だけサボる気かヨ!」

「心配するな。その分、戻ってきてから代わる。それでいいだろ? 王子」

「ああ、構わねえぜ」



「……チツ、仕方ねえナ」

最初の頃なら「お前には関係ない」とでも言いそうだが、特に嫌がる様子も無く桜と話す優。すると、「家事を任せる」と聞いた途端に刻も会話に混ざってくる。『コード・ブレイカー』としての仕事は無くても、『渋谷荘』での家事分担はもちろん続いている。承諾していることとはいえ、好きなことでもない仕事が増えることが嫌なのだろう。

だが、その分だけ後で代わるという案を出され、真の主である王子もそれをOKとした。そうなる何とも言えないため、刻もそれで納得したのだった。

「……別にオレは家事とかどうでもいいですが……珍しいですね」

すると、今まで黙って話を聞いていただけの大神が口を開いた。誰もが思っていたが、誰も口に出さなかった「珍しい」という言葉を、優に真正面から向けた。

「なにがだ？」

「仕事でもないのに長く出かけるなんて今までなかったでしょう」

それは、なにも『渋谷荘』に住むようになってからの話ではない。優は旅行とか遠出が趣味と言うような人間ではないことは、『コード・ブレイカー』として共に過ごした大神はよく知っている。だから、何日か空けるような長い外出はとても珍しいものを感じたのだ。もちろん、他の『コード・ブレイカー』も。

そんな疑問を察しているかはわからないが……優は大神の言葉に対し、どこか言いつ

らそうに頭をかきながら答えた。

「……まあ、やむを得ない事情ってやつだな」

「……そうですか」

はつきりとは答ええない優の返答を聞くと、大神もそれ以上は踏み込もうとはしなかった。互いのことに深く干渉しない……『コード・ブレイカー』として、彼らが今までやってきた関わり方に徹していた。

しかし、それとは正反対にどんどん踏み込もうとしている人間もいる。

「ところで夜原先輩。先輩はどちらまで行かれるのですか？」

さつき話しかけて手ごたえを感じたのか、そのまま行き先についても聞こうとする桜。彼女の予想……というより期待としては、そこまで詳しくはなくても少しは教えてくれると……

「言う必要はないな」

しかし、そんな踏み込む人間の質問を優は完全にスルーし、さっさと食堂を出てしまった。どうやら、「出かけること」自体について聞かれるのはいいが、「どこに出かけるのか」についてはタブーらしい。

そして、それはそのやり取りを見ていた者全員が感じ取っていた。

「今、完璧に隠しおったな」

「なんだ、あいつ。不愛想な奴だな」

「テメーみたいにふてぶてしいよりはマシだ」

優が出ていった食堂の入り口を眺めながら、遊騎はガタガタと椅子を揺らしている。

さらに、『エンペラー』も大神の左手から現れ、つまらなそうに腕を組んでいた。

ちなみに、見事に期待を裏切られた桜はというと……

「……あ、あれ？」

完全に意表を突かれてしまったようで、何が起きたのか理解しきれずにいた。

そんな混乱する桜を尻目に、刻は頬杖をつきながら当然のように呟いた。

「ま、そーなるだろうネ。アイツ、いつも肝心なことは全然話さねーシ」

「それはそうだが……。でも、行き先くらいは……」

「ただ単に知られたくないだけでしよう。下手に桜小路さんに話せば、そのまま付いてきそうですからね」

「ぬう……!」

「凶星ですか……」

やはり『コード：ブレイカー』としての付き合いがある分、優のことを理解している刻の言葉。今までの経験からそれもそれを否定しきれない桜だったが、そこに大神の的を得た言葉がグサリと突き刺さる。

思わぬところでダメージを受けた桜だったが、その後なんとかして持ち直す。そして、「教えてもらえないなら」と彼女は腕を組んで眉間にしわを寄せ始めた。

「仕方ない……。なら、夜原先輩がどこに行くのか考えることにするのだ」

「どうしてそこまでこだわるんですか……」

「だって気になるのだ!」

目の前で断られたことや元々の性格もあり、桜はどうしても優の行き先が気になってしまっていた。しかし、彼女はそこまで優のことを知っているわけではない。よくどこに行くのかもわからない彼女にしてみれば、短期間でも家を空けて行く場所なんて候補すら浮かばないのだった。

「ぬ、ぬうう……!」

「こんなくだらないことに頭を悩ませる必要なんて無いでしょう。どうせ関係ないことなんですから放っておけば……」

「無駄だ、零。桜小路は聞いちやいねえよ」

「……はあ」

ひたすらに頭を悩ませる桜に、隠すことなく呆れを見せる大神。やめさせようとはするが、王子の言う通り今の彼女は周りの言葉なんて聞こえちやいない。諦めの意味を込めたのか、大神は深いため息をついた。

「ううむ……やはり私では思いつきそうにないのだ。大神、お前はどこか心当たりはあるか？」

「ありませんよ……。さつきも言いましたが、アイツが長く出かけることなんて今までありませんでしたから」

「そうか……」

自分一人では思いつかないと悟ったのか、桜は大神にも意見を求める。面倒だと思いつながらも、大神は素直に自分の意見を口にする。しかし、内容としては桜と同レベルのため、そのまま平行線をたどった。

「……心当たりだったら、無いことも無いケド？」

「え?!」

しかし、そこで意外な人物が意外な言葉を口にし、桜は目を見開いた。そして、その言葉の発信源……刻の顔をジッと凝視した。

「そ、それは本当か!?! 刻君!」

「あつたりまえじゃん。ちよ〜つと考えればわかることだつつ」

「さすがやなー、よんぼん刻」

信じられない、とても言いたげな桜をよそに、刻は自身の頭を指差しながら勝ち誇つたようにして胸を張る。自信満々なその態度に、遊騎もパチパチと拍手を送るのだつた。

「それで!?! 夜原先輩はどこに行ったのだ!?!」

「マーマー、桜チャン。順番に話すからサ」

少し興奮気味の桜に詰め寄られた刻は、ひとまず彼女を落ち着かせようと距離をとる。そして、なぜか顎に手を添えて、これでもかと言うほどカッコつけた顔をするのだった。

「まず、大事なのはタイミング。時期……つてよりは、今しか行けないところつてワケ。そしてここで大切なのは……その今つてのは、『デ捜シ者』との闘カいが終仕わつた時だつてことなんだよネ」

自身の推理を信じて疑わない……そんな自信が見てとれる刻は、すらすらとその全容を話し始めた。おそらくだが、今の彼の頭の中では身体は子どもで頭脳は大人の名探偵のBGMでも流れているのだろう。

「仕事自体もそうだけど、それまでも修業とか色々あつて忙しかった。けど、今はその全部から解放されている。だから、アイツは行動を開始したつてことサ」

「な、なるほど……！　そ、それで……肝心の行き先は？」

「……答えを言うのは簡単だヨ。でも、桜ちゃんにはこれだけは言っておきたいんだ。普段は女が苦手だつて言つて近づこうともしない奴だけど……一応、アイツも男つてこ

とをサ」

「……う、うむ？」

「……………」

答えを催促する桜に対し、刻はどこか遠い目をして天井を見つめる。その言い回しに、黙つて聞いていた大神は嫌な予感を感じるのだった。

「ま、つまり何が言いたいのかつてゆーと……」

「い、いうと……？」

「ちよーつと大人のお店に行つて溜まったモン発散しに行つて——」

「ドラア!!」

「ゲボア!!」

散々引き伸ばして、ようやく口にした刻の答え。そのあまりの低俗っぷりに、『渋谷荘』の主である王子は鬼神の如き顔で刻に制裁を与えた。

「……バカが」

「刻、テメエ……!! 『渋谷荘』にいる以上、スケベな発言は許さねえぞ!」

「冗談だつつーノ! 今までになく本気でやりやがって! マジで頭が割れるかと思つたじゃねーカ!」

「いつそ割ればよかつたのに……」

「大神イ! 聞こえてんぞ、コラア!」



さつきまでの雰囲気はどこへやら、痛みに悶絶する刻は涙目になりながら王子や大神に喚き散らしていた。

結局、全ては刻の悪ふざけだったと知り、期待していた桜は残念そうに……

「なあ、刻君。『ちよつと大人のお店』とはなんだ？」

『……………え？』

ここで、彼らは一つの事実を思い出す。彼女は……極道の家で育った。そして『ゴド・ブレイカー』と共に、本来なら知る由もない裏の世界で凄惨な現実を見つけてきた。それでも、彼女……桜小路 桜という少女は、純粋ピュアな生き物だということに。

「刻君？」

「あ、いや……なんつーか、その……」

「王子殿？」

「オ、オレに聞くな……!!」

「大神？」

「……………」

『『エンペラー』殿？』

「あ？ そりやお前、女が男に——」

「テメエは黙つてろ!!」

「ぶっ！」

純粋すぎる彼女の問いかけに、とてもじゃないが本当の意味など言えるわけもなく

『コード：ブレイカー』たちはそつと視線を外す。そんなことなど関係なしに『エンペラー』はペラペラと話そうとするが、肝心な部分を言う前に大神が全力で彼を握り潰して強制的に引つ込めさせた。

「むう……！ 気になるではないか！ いったい何を隠して——！」

しかし、あからさまに隠し過ぎた大神たちの態度がかえって桜を刺激した。意地でも真実を知ろうと桜が身を乗り出した……まさにその時。

「なあなあ、もしかして優……これに行くんやないか？」

「え？」

今まで会話に積極的に入ってこようとしていなかった遊騎が、ポツリと口を開いた。突然のことだったが、桜の意識は一気にそちらに向いた。ほぼ反射的に遊騎の方を見みると、彼の視線は愛用しているノートパソコンの画面へと注がれていた。

「ほら、これや」

そして遊騎は、見えやすいようにパソコンを桜たちの方へと向けた。そして、そこに映っていたページには……

ト  
【古くから伝わる日本の美、その全てが東北に 日本総合芸術展示会、明日よりスター】

『あー』

この時、桜と王子は揃って一瞬で納得したのだった。

「な？ 行きそうやろ？」

「なになに…… 『初回特典で明日から三日間は入場者全員に特典をプレゼント。特典

は毎日違います』か。なるほど、泊まり込みなのも納得だな」

「さすがなのだ、遊騎君！ 夜原先輩なら間違いないで行くのだ！ 向こうに泊まって全部揃えるつもりなのだ！」

どういわけか、確固とした自信を感じて盛り上がる女性陣。それに対して……

「……なあ、大神」

「……ええ」

(それは違うと思うているはずなのに、否定しきれない自分がある……!!)

大神と刻の二人は、なんとも言えないような顔をしていた。

——ギィ

「……おや、皆さん。随分と盛り上がっていますが、何のお話ですか？」

「平家先輩！」

すると、そこで思わぬ来客が現れた。いつも通りの制服姿で、手には官能小説を持った平家だった。余談だが、彼の姿を見た大神は、「来るのがさつきじやなくてよかった……」と安堵していた。

「実は夜原先輩がしばらくお出かけされるんですが、行き先を教えてくださいな……。なので、皆でどこに行くか考えていたところですよ！」

「それはそれは面白そうですね。それで、答えは出ましたか？」

「はい！ 遊騎君が見事に答えを見つけてくれました！」

目をキラキラさせながら、興奮気味に経緯を説明する桜。生き生きとパソコンの画面を平家に見せる姿を見る限り、どうやらさっきの疑問は見事に消え去ったらしい。どちらにせよ、遊騎たちに救われたという結果になった。

そして、桜に見せられたパソコンの画面に映った展示会のホームページを見て、平家は静かにフツと微笑んだ。

「確かに、何もなければ行っていたかもしれませんが……バッド・アンサーです。優君の行き先はここではありません」

「え!？」

「……………」

平家が微笑みながら口にしたその言葉……それを聞いた瞬間、桜たちの顔は一気に驚きへと染まった。今の平家の言葉は予想とか推理ではない……完全に答えを知っている者の言い方だった。

「……なぜ、あなたが優の行き先を知っているんですか？」

「ふふふ、なぜでしょうね。ついでに言えば、優君がそこに行かねばならない理由も知っています。……そして、それは皆さんにも関係があるということも」

「ハ……!? オイ、そりやどーゆーことだヨー！」

優が決して話そうとしなかったことを知っている。そして、それは大神たちにも関係がある。平家の口から語られた言葉は、彼らに次々と衝撃を与えた。

「まあ、落ち着いてください。私がここで全てを説明するよりも、良い方法があります」

「……良い方法？」

もったいぶるような口振りの平家。首を傾げる大神たちを前に、彼は「ええ」と頷くと……一つの提案をした。

「なので皆さん、明日までにお出かけの準備をお願いします。トウギャザー・ゴー・アウトです」

『……………え?』

……………そして、翌日。

「何日か遠出するわりには、随分と軽装なんですな」

「まあな。最低限の物さえあれば困らない」

あれから優は食事時くらいしか大神たちの前には姿を見せず、ずっと部屋に籠っていた。桜を含め、誰も外出先についてなどは聞くことは無かったので、比較的平和に過ぎ去っていった。

そして今日、ちょうど朝食と昼食の間とも呼べる時間帯に優はウエストポーチ一つだけを持って玄関にいた。たまたま居合わせた大神は、そのまま見送りをしているというわけだ。

「それじゃあ行ってくるが……………」

「……………どうしました?」

大神と軽く言葉を交わした優は玄関の扉に手をかけるが、すぐにそれを開こうとはしなかった。何かが引つ掛かる……とでも言いたげな表情をしている優を見て、大神は腕を組みながら首を傾げた。

「他の連中はどうした？」

優が引つ掛かっていたのは、大神以外の住人たち。朝食の時は確かに全員いたが、いざ自分が出かけようと部屋から出ると……大神以外の住人をまるで見かけなかった。さらに、耳を澄ましても声すら聞こえなかったのだ。

何があったのかと感じ取った優だったが……大神の返答はサラツとしたものだった。

「あなたと同じですよ」

「同じ……」

「あなたが急に出かけるなんて言ったからでしょうね。『なら自分も』って具合に出かけていきましたよ。桜小路さんはクラスメイトと遊びに、刻は都内に買い物、遊騎は最新『にやんまる』グッズが出たとのことでそれを買いに……オレももう少ししたら出かけます。この前の台風で缶詰を大分消費したので」

「ちなみに、オレもこれから溪流釣りだ。こき使うために渋谷も連れていくぜ」

「せ、せつかくの休日が……」

「ああ……二人はいたのか。しかし……うん、まあ………あり得るか」



出かける優に感化されて、それぞれが出かけていった……一見すると少し嘘っぽいことだが、普段から予想外なことをしている彼らだ。特に桜なんて、すぐに「なら私も出かけちゃうのだ！」と言っている姿が目には浮かんだ。

大神、そしてタイミングよく現れた王子と会長。優は改めて彼らに向き直った。

「……じゃあ、行ってくる」

「お気を付けて」

「帰って来たら覚悟しとけよ」

「いかにも〜」

——バタン

『……………』

怪しむことも止め、そのまま玄関から外へ出た優。その後、王子はこつそりと窓の傍まで移動し、そこから外を見て彼がすっかりと外に出ていることを確認する。

そして、確かに優が『渋谷荘』から離れ、その姿が見えなくなつたところで……彼女はやる気を見せるかのように、拳を自身の掌に向けて放った。

「よし！ オレたちも出発するぞ！」

「いかにも！ 作戦開始なんだな！」

（なんでオレまでこんなことを……）

やる気十分な王子と会長に対し、大神はこの上なく冷めた顔つきで顔を俯かせていた。しかし、そんなことはお構いなし。王子と会長に引つ張られながら、大神も『渋谷荘』を出るのだった。

そして残ったのは、「本日不在」の看板を玄関に下げた『渋谷荘』だけだった。

「おーい！　大神〜！　王子殿〜！　こっちなのだ〜！」

優が『渋谷荘』を出発して数時間後……とある山の麓に『渋谷荘』の住人たちは集合していた。待つてましたとばかりに手を振る桜の視線の先には、バイクに跨る王子と大神の姿があった。

彼らも桜たちの姿を見つけると、そのまま彼らの近くでバイクを停めた。

「よう、待たせたな」

「私たちもさつき着いたところだから大丈夫なのだ！」

「大丈夫じゃねーヨ！　さつきから蚊が多すぎて刺されまくってるっつーノ！　あ〜

！ 痒い痒い痒い！

「刻よんぱんの血が美味いからやる？」

「嬉しくネー!!」

遅れての到着について、桜は満面の笑みで気にしていないことを告げる。それとは対照的に、後ろの方では刻が身体の至るところを搔き筆りながら文句を言っているのだが。

「つたく、しょうがねえな……。ホレ、かゆみ止めの薬だ。念のためにと思つて虫よけスプレーも持つてきたから、これも使つとけ」

「さすが王子殿、準備は完璧なのだ」

「た、助かる……。サンキュー、王子」

そんな刻を見て、王子は呆れながらも持つてきた荷物の中から薬とスプレー缶を渡す。『渋谷荘』でも發揮している彼女の準備の良さに、桜は感心し、刻は感動の涙を流すのだった。

「……さて、見送り係のお二人が来たということは……。優君は無事に出発したということですね？」

「……ええ、大丈夫ですよ」

すると突然、今まで会話に入つてこなかった平家がその場で立ち上がる。ちなみに、

彼は愛用のティータムセット（テーブルと椅子付き）で官能小説を読んでいたため、山の麓とは思えない光景がそこには広がっていた。

そんな異様な光景をスルーし、見送り係である大神は無事に優が出発したことを平家に伝える。その報告を聞いた平家は、フツと怪しく微笑む。

「では作戦は成功……というわけですね。イツツ・パーフェクト・プランです！」

作戦……それこそが、王子と大神が見送り係と呼ばれた理由だった。そう、『渋谷荘』の住人たちの突然の外出……それ自体が、平家が立てた作戦だったというわけなのだ。

ちなみに、概要はこうだ。

①まず優以外の住人たちを、バスグループ、電車グループ、見送り係の三グループに

分ける。

- ② 朝食後、バス、電車の順に外出する。この際、優に怪しまれないよう時間をずらす。
- ③ 見送り係は優が怪しまずに出発したことを確認したところで出発する。
- ④ それぞれの手段で、第一の目的地である山の麓まで辿り着く。

と、いうわけである。ちなみに、内訳としてはバスに平家・刻、電車に桜・遊騎、見送り係に大神・王子・会長といった具合だ。まあ、例外を除いたほとんどの者が大神のように嫌々やっていたのだが。

その例外とは、もちろん言うまでもなく……

「むう……それにしても、せっかくなら私が夜原先輩をお見送りしたかったのだ」

「あなたの場合、すぐにボロを出して終わりでしょう……。何か質問された瞬間、ウソ顔になるところが想像できません」

「そ、そんなことは……ないぞ?」

「……………」

優を見送ることができなかつたことを悔しがる例外桜だったが、大神は容赦することなく的確なツツコミを彼女に向ける。桜はその言葉を弱々しい言葉で否定するが……そうやって否定している時の表情がすでに「ウソ顔」になっていることに、彼女は気付いていない。

「……さあ、それでは皆さん。このまま本当の目的地まで移動しましょう。レッツ・ゴー・マウンテンです！」

「ゲー!! まさかとは思ってたケドやっぱり山の中かヨー!!」  
すると、そこで平家が出発の号例を高らかに宣言し、その足取りを目の前の山道へと向ける。他の者たちがそれに続く中、麓にいただけで参っていた刻はガツクリと項垂れるのだった。

しかし、出発してすぐ……桜の中である疑問がふと浮かんだ。

「……あれ? とところで王子殿、会長は?」

「ああ、アイツか。オレたちはバイクで来たんだが、バイクに三人なんて乗れないからな。仕方ねえからアイツは歩きだ」

「……の、乗り物を使っても数時間かかる距離をですか？」

「大丈夫だろ」

何も気にしていないかのように「珍種だしな」と付け足す王子。しかし、王子のスパルタぶりに若干引いていた桜には、もはや何も聞こえてはいなかった。

「ところで平家先輩」

「なんですか？ 桜小路さん」

「私たちが今向かっている、夜原先輩が行こうとしている場所とはどんなところなのですか？」

険しい山道を登り始めて数十分が経った頃。ちょうど休憩を挟んでいたところで、桜は平家に尋ねた。自分たちが優と同じ目的地に向かっているということはわかってい

る。だが、そこがどんな場所かについては誰も知らされていなかったのだ。そのため、彼女の疑問はもつともだとと言える。

「ふふふ、それは着いてからのお楽しみ……というものです」

「そう言われると、余計に気になってしまふのだ……」

しかし、平家は一向に口を割ろうとはしなかった。残念がりながらも洩る桜だったが、特に効果はないだろう。

すると、その会話に加わる者が一人。

「だからサ、桜チャン。昨日も言ったつシヨ？ ちよつと考えればすぐわかるって」

「刻……ここが『渋谷荘』じゃなくても、オレの前でスケベな発言は——」

「だー！ 違う違う！ 今回はちゃんと真面目なヤツだつーノ！」

噴き出す汗を拭きながら、桜と平家の会話に加わる刻。昨日のデジャヴともとれる光景に、すぐさま王子が釘を刺す。なんとか王子を落ち着かせると、刻は手で自身の顔を扇ぎながら続けた。

「こんな山の中だぜ？ 少なくとも、人がいるような場所じゃない。だったら、秘密の修業場とかそういうところじゃねーノ？」

「おお、なるほどー！」

今回ばかりは刻の発言に納得したらしく、ポンと手を叩く桜。それに調子を良くした



のか、刻はニツと笑いながらさらに続けた。

「ま、でも誰かに会うって可能性もあるかもだけどネ。つっても、こんな山の中にいるような奴なんだから、ゴリラみたいな毛むくじやらのオツサンだぜ、ゼッター」

「ふふ……さすがですね、刻君」

「オ？　もしかして大正解!？」

「ええ……」

「見事なまでの不正解です」

——ズザア!

期待させるだけさせておいて一気に落とす……定番といえば定番なやり方をされ、刻はその場で勢いよく転んでしまった。ちなみに、あの平家はいつもと同じように微笑を浮かべていた。

「テメー！ 期待させんじやねーヨ！」

「勝手に期待していたのは刻君でしよう？」

「うっせー!!」

完全にぬか喜びをさせられていたことに気付き、刻は顔を真っ赤にしながら平家に掴みかかる。だが、平家はやれやれといった様子で刻の文句を受け流していた。まあ、ややこしい言い回しだったとはいえ勝手に期待していたのは刻の方だったため、なんとも言えない。

「さて、刻君のくだらない話に付き合っている時間はありませんよ。先を急ぎましょう」

「そのくだらない話をするハメになったのはテメーのせいだからナ！」

「ま、待つてください！」

マシンガンのように出てくる刻の文句をかわしながら、平家はそのまま先へ進もうとする。唯一の案内役である彼からはぐれば、目的地に行くどころか帰り道すら危うくなる危険性がある。ついていくしかない桜は急いでその後を追うが、内心では目的地に着いてはまったく知らされないままの現状を不審に感じつつあった。

「……」つだけ言うとしたら」

「え？」

しかし、先に進んでいた平家が突然ピタリと足を止める。何事かと思つた矢先、顔だけ振り向かせた状態で平家はボソリと呟いた。

「目的地に関係している、とある人のことを優君に話す時、私は……『彼女』、と呼んでいます」

「……『彼女』？」

平家はそれ以上は語らず、再び足を進め始める。詳しいことはまるでわからないまま。しかし、少なくとも彼らが向かっている場所……そこには『彼女』と呼ばれる女性

がいることだけはわかった。

「平家先輩は……その『彼女』殿とはお知り合いなのですか？」

「ええ、もちろん。よく……知っていますよ」

「……………」

その後、桜は黙って平家の後に続いた。ただ静かに、『彼女』と呼ばれる女性がどのような人物かを考えながら。

彼女のことについて、悲しそうな顔で話した平家の顔を同時に浮かべながら。

「ゼエ、ハア……！　ゼエ、ハア……！　ど、どんだけ登んだヨ……！」

「さすがにちよつと、疲れてきたのだ……」

「情けねーな、お前ら。オレ様は全然余裕だぜ」

「『エンペラー』<sup>メエ</sup>はまず歩いてすらいねえだろうが……」

『彼女』の存在がわかつてから約一時間後。道なき道を進み続けた彼らは、すっかり疲

弊しきってしまっていた。そろそろ限界に近い者が多い一同だが、先頭の平家は構わず進み続ける。はぐれないために、なんとか身体を動かしてそれに続く桜たち。そして、まさに今登っている坂道を抜けると……

「お疲れ様でした、皆さん。……着きましたよ」

木々に囲まれた坂道から、一気に視界が開けた。円状に広がったその場所には草だけが生い茂り、周りの木々とは一定の距離が保たれている。上空から見れば、ミステリーサークルのようにも見えるかもしれない。

そして、そんな円の中心……ちようど坂道を登り切った桜たちの直線上には、今となつては時代劇で見えないような、古びた木造の一軒家が建っていた。

「こんな山の中に家が……」

「しかも、あの造り……かなり昔に建てられたもんだナ」

ようやく辿り着いた達成感も確かにあったが、それよりも目の前に広がる景色へと桜たちの意識は向いていた。

今まで右を見ても左を見ても木々ばかりだった空間から一転、それなりの解放感を感じられる景色。それに加えて、今の時代では珍しい家……はつきり言つて、誰もが予想していない景色だった。

「……あ、ななばんや」

そして、その家の扉を今まさに叩こうとしている優がいるということも、誰も予想していなかった。

「——ッ!？」

「お、お前ら……!?!? なんでもここに……!?!」

意味がわからない、と言葉にせざとも伝わってくるような、そんな混乱した表情を浮かべる優。まさかこんなドンピシャなタイミングで優と会うなど、桜たちは予想していなかった。だが、優にしてみれば彼らと会うこと自体が予想していないこと。いや、予想もしたくないことだったのかもしれない。

しかし、現実はそのような彼の思いを打ち砕く。そして、その元凶とも言える人物は何食

わぬ顔で一歩前に出た。

「すみません、優君。私をご案内しました」

「へ、平家さん!? どうして、そんな……!」

「あなたの用事は私たちにも少なからず関係があります。それに、これは『あの人』から頼まれたことでした。……次に優君がここを尋ねなければならぬ時が来たら、『コード：ブレイカー』全員を連れてきてほしい、と」

「な……!?!」

優が混乱する中、ようやく大神たちをここまで案内した理由を平家は明かした。その中で出てきた『あの人』という人物だが……おそらく『彼女』とは別人なのだろう。すでに大神たちにも『彼女』のことをわずかながら話している以上、呼び方を変える必要はない。

だが、そうなるのであれば誰のことを指しているのか……。当然ながら思い当たる節もない桜は、おずおずとした様子で平家に尋ねた。

「へ、平家先輩……? 夜原先輩の用事が私たちに関係あるとは……? というか、そもそもここはいつたい……」

「それは私より優君から言ってもらった方がいいでしょう。……優君にとっても、ね」

「……………」

桜の問いに対して、平家は優にバトンタッチする。当の優はこの状況になっても頑なに口をつくもとうとするが、ここまでできた以上、彼に逃げ場はない。

だが、彼の實力を考えれば力づくで帰らせるという手段を取ることもできる。純粋な身体能力で言ってしまうえば、彼の右に出る者はほとんどいないのだから。しかし、それをやらないということは彼が大神たちを連れてきた張本人が信頼している平家だから、そして『あの人』から頼まれた」という平家の言葉があるからなのだろう。

どちらにしても、彼にとつて自分の意地のためだけに大神たちを帰らせるわけにはいかない。そして、そうなると話すべきことは話すべきということも……彼はわかっていた。

「はい、はいは……」

諦めがついたのか、全身が震えるほど強い力で拳を握りながら口を開く優。まだわずかながらの抵抗はあるが、それでも話さなければならぬということを受け入れている……そんな彼の中に渦巻く葛藤と共に、優は言葉を紡ぐ。

「はいは……オ、オレの——」



——バァン!

「優く————ん!!」

「ぶっ!?!」

——ガシヤアアアアアン!!

「な、なんだ!?!」

「家の中から出てきおったで」

一瞬のうちに起きた出来事に、大神たちは開いた口が塞がらないまま驚くことしかできなかつた。状況を整理すると、この家について優が話そうとしたまさにその瞬間、何かが家の中から飛び出してきて優にぶつかつた。そして、そのまま少し先にある木の根元まで優もろとも突っ込んでいき、大量の砂埃を今もなお巻き起こしていた。

その状況をわかっていても、どういふ理由でこうなったのかはさっぱり理解できない大神たち。だが、一人だけ全てをわかっている人間がいた。

「大丈夫ですよ、皆さん。少なくとも、敵などではありません」

大神たちを落ち着かせるように、平家は掌を広げてみせる。そして、大量に巻き起こった砂埃がようやく薄くなり始めると、彼はそこにいる二人の内の一人が見えるように自らの立ち位置をずらした。

そして、そこにいたのは……

「あれが『彼女』……この鍛冶屋『天下一品』てんかいっぴんの一人娘である乙女さんおとめです」  
絹を連想させるほど滑らかな光沢を放つ腰まで伸びた灰白色のストレートヘア、花と戯れる蝶を表現したような暗い青を主調にした着物。しかしその着方は本来のスタイルから見れば着崩されており、特に大きく着崩された胸元からはこの場にいる誰よりも豊かなのだと主張してくるような二つの膨らみが見えてしまっている。

「おかえり、優君!! 七カ月と十三日ぶりだね!! 私の『あくん』でご飯食べる!? それとも一緒にお風呂入る!? それともやつぱり……!」

雪のように白い肌、左眼下の泣きボクロ……一般的に見ると抜群に整っているはずの美貌だが、その口元からは涎が垂れ、眼はこれでもかとはかりに血走っている。はつきり言って、嫌な意味の方で興奮しているということが一発でわかるほどだった。

「私を食・べ・る!?! キャ〜!! むしろお願い! 今すぐ私を食べて、優くん!!」  
そして、その顔以上にだらしのない発言の連発によって、大神たちはすっかり引いてしまっていた。登場の瞬間から、異常性MAXな行動や言動を見続けた彼らだったが……一つだけ揃って確信していることがあった。

再び……いや三度。<sup>みたび</sup>大きな嵐がこれから起こるのだろうか……大神たちは静かに

悟  
つ  
た。

## code : 74 繋がりにある二人

『コード：ブレイカー』である大神たちと、彼らが暗躍する世界を体験しつつある桜。一般人にしてみれば理解の外をいつている世界を経験している彼らにしてみれば、ある程度のごとは「あり得ること」として理解できる。

「お、乙女……！ 離れろ！ 毎回、毎回……来るたびに突っ込んでくるな！」

「やだっ！ 優君が中々来ないのが悪いんでしょ！ だから私は悪くない！ 断じて！」

しかし、そんな彼らでも万能ではない。そう簡単に理解できないことだつて当然のことながらある。

「突っ込んでくるのは完全にお前が悪いだろうが！ とうかさつさと離れろ！」

現に、目の前にある光景がそうだ。

「すー……はー……。すー……はー……。ふふ、ふふふふふ……！ た、たまらん……！」

「人の匂いを嗅ぐなアアアアア!!」

なぜ『コード：07』こと夜原 優が、乙女と名乗る一人の女性によつてもみくちやにされているのか……何も知らない者たちは、誰一人として理解することなどできなかった。

「もう、優君ったら照れちゃって。可愛い——なっ！」

「——グ!? ム、ムガ!!」

しかし、事態は置いてけぼりの大神たちを待つてはくれない。乙女は我慢できないとばかりに、優の頭に真正面から抱きついた。あくまで「頭に」抱きついたので、当然ながら優の頭の位置は乙女の頭の位置より下になる。

つまり早い話、優の顔は乙女の豊満な胸元に完全にうずめられることになる。

「バ、バカ! やめ——！」

「ダメー！ 今日は何があっても離さない！ だから優君も逃げちゃダメー!!」

——ギユウウウウウ……!!

離れていても音が聞こえるくらいの力で、さらに優の頭に抱きつく乙女。そうなる  
と、余計に優の顔も乙女の胸にうずめられてしまう。その結果、何が起ころのかとい  
と……

「~~~~! ~~~~~……!」

段々と呼吸することすら難しくなってくるわけで顔も真っ青になる。さらに……

「……………グハツ」

女性と目を合わせただけで真っ赤になって倒れてしまう優が、女性特有の柔らかさに  
耐えられるわけもない。呼吸困難と女性に対する拒否反応……その二つが合わさって、  
優の顔はなんとも言えない血色になる。

そして、彼は大量の涙をボロボロ流しながら気を失うのだった。

「あれ……優君?」

優から力が抜けたことを感じ取った乙女は、何かあったのかと優の頭を解放する。そ  
して、ボロボロになった優の顔を見て、彼女は優に何かあったのかを悟った。

「……………ああ! 安心して寝ちゃったのか! しょうがないなく、よーしよし」

「」

……否。彼女は何一つ理解しないまま、屈託のない笑顔で優の頭を優しく撫で始める。当の優はそれを拒否することもできないまま、乙女に撫でられながら気を失い続けるのだった。

『……………』

そして、気を失つてはいないが、何が起きているのかわからず放心状態になっている者が大勢。

「お、大神……。私は何が起きているのかよくわからないのだ……」

「……………いえ、オレもです」

「な、なんだヨ……。あのセクシー和服美女は……」

「ここ、公衆の面前でなんつーことを……………!」

「優、ななぼん気絶しおつたわ」

桜は目を点にし、大神は開いた口が塞がらないまま立ち尽くし、刻と王子はひたすら顔を真っ赤にしていた。その中でも、遊騎はいつも通りといった様子で優と乙女のやり取りを眺めていた。

すると、遊騎と同じく平常運転の人物が何食わぬ顔で乙女へと近づいていった。

「お久しぶりです、乙女さん。元氣そうで安心しました」

「え? ………………あ、平家。いたの?」



「ええ、ずっと。相変わらず優君以外は目に入らないんですね」

「当たり前でしょ。私の優君への気持ち……舐めてるんだつたら殺すよ?」

「そんな滅相もない。その純粋で大きい、素敵な気持ちを軽視するなんてできませんよ」

「うん、わかってるならよし」

近づいていったことで、ようやく平家の存在にも気付いたらしい乙女。なにやら物騒な発言を織り交ぜられていたが、二人の間にはそれなりの信頼関係があることが伺えた。

「……あれ? ねえ、平家。あつちは誰?」

平家に気付いたことで、その奥にいた大神たちにも気付いた乙女は首を傾けながら彼らを指差す。すると平家は「ああ」と言うと、そつと自身の胸に手を添えてから話しました。

「実はお父上から頼まれました、優君の同業者を連れてきたんですよ」

「……同業者?」

同業者、という言葉を聞くと、乙女は目をパチクリさせて大神たちをジツと見つめた。まるで何かを観察するかのような、何かを見極めようとするかのような……彼女の視線は、それだけ用心深く彼らのことを見ていた。

そして一通り見渡すと、乙女は「ふーん」と呟いてから……続けた。

「じゃあ、あの人たちが今の『コード：ブレイカー』……人見の後輩たちってわけね  
『ツ——!!』」

(コイツ、『コード：ブレイカー』のことを知っている……!?)

(それだけではない……。人見先輩のことも……!?)

当然のことのように呟いた乙女の発言により、大神たちの中で緊張感が一気に高まる。一般人ならもちろん、裏の世界でも一部の者しか知らない『コード：ブレイカー』の存在を、彼女は知っていた。さらに、かつて『コード：ブレイカー』のトップである『コード：01』として大神たちを導き、彼らのために自ら「悪」へと堕ちた人見についても知っているようだった。

これまでの行動も十分におかしかったが、この二つを知っているという事実によって、彼女が普通の人間ではないということは誰しもが悟っていた。

「わかった。それじゃあ、居間に行つて。お父さん呼んでくるから」

しかし、そんなことは気にする様子も無く乙女は立ち上がる。そして、そのまま家中を指差して中に入っているよう促す。平家はもちろんそれに従おうとしたが……その前にすべきことがあった。

「ありがとうございます。……あと、できれば優君を離してもらいたいのですが」

「は？」

「……ですから優君を離し——」

「やだ」

立ち上がった乙女……平然としているが、その腕には未だ気を失った優がしつかり抱かれていた。ちなみに優の体重は60kg前後、さらに今は完全に脱力している状態。しかし、乙女はまさに余裕といったような表情で優を抱えていたのだった。

そんな乙女からなんとか優を回収しようとした平家だったが、言葉を重ねるごとに彼女から殺気に似た何か放たれていた。さらに無意識なのか、否定の言葉を並べることになら悲鳴を上げるレベルの力だろう。

「ふむ……それは困りましたね」

すると、平家は目元を押さえながら「やれやれ」といった様子で頭を振った。さすがの彼も諦めたのかと思われた……次の瞬間。

「実は優君、この前の戦いでかなりの重傷を負いました。ですので、無理に動かすと傷が開いて命の危険があるのですが……乙女さんがそれでもいいなら、どうぞそのまま」

「え!!? や、やだ! そんなのやだ! 居間に運んで寝かせるから! そしたら大丈夫!?!」

「おや、いいんですか? ぜひ、そうしてあげてください」

全然そんなことは無く、彼の巧みな話術により優も一緒に居間へと通されたのだった。

平家の巧みな話術により、優と共に中へと入ることに成功した大神たち。家の中は見ただ目通り古風な内装で、まるで昭和にタイムスリップしてしまったかのような錯覚に陥りそうになる。

そんな感想を抱きながら畳が敷き詰められた居間に通されると、乙女は「お父さん呼んでくる」とだけ言って大神たちを残してその姿を消した。もちろん、優を畳みの上に寝かせた状態で。そして、まさに乙女が消えた瞬間だった。

「う……」

「……気がつきましたか？」

頭を押さえながら優が起き上がった。あまりにもタイミングがドンピシャなようにも思えたが……大神はそのツツコミを静かに胸の内にしまいこんだのだった。

「大神……？　ここは……」

「あの乙女とかいう人の家です。あの人は今、父親を呼びに行ってます」

「……そう、か。……助かった」

キョロキョロと辺りを見渡して、乙女の姿が無いことを確認する優。そして大神の言葉が真実だと確認すると、とてつもなく深い安堵の息をついた。

そんな優の姿を情けなくも思いながら、大神は小さなため息をついてから腕を組んだ。

「それで……あの人はいつたいたいなんなんですか？ あなたの知り合いということばかりでしたが……その他がわからないことだらけです」

「そうだ！　なんでテメー如きがあんなセクシー美女に可愛がられてんだヨ!!」

「テメエは黙つてろ」

そして当然のことだが、乙女について尋ね始める。外でのやり取りで、少なくとも彼女と優が知り合いであることはわかる。だが、それ以外のこと……『コード：ブレイカー』のことや人見を知っていたことについては何もわかっていない。

彼女はいつたいたい何者なのか……大神はそれを探ろうとしていた。……完全に私怨に塗れている刻とは違って。

「……………」

「言っておきますが、ここまで来た以上は『関係ない』は通用しません。なぜあの人は『コード：ブレイカー』や人見のことを知っていたのか……全部説明してください」

「……ハア。相変わらず、余計なことばかり言う……」

目を伏せて、口を閉ぎそうとする優を見て、大神は追い打ちをかけるように彼の逃げ道を無くす。すると、乙女が『コード：ブレイカー』や人見のことを話していたと知らなかった（気絶していた）優は苛立ち頭に頭を叩いて、大きなため息を漏らした。

「……………説明、か。何から話せばいいもんだか……」

「んなもん決まってるんだろ！ テメーと乙女チャンの関係だ、ゴラア！ 包み隠さず洗いざらい全部まるっと話しやがれ！」

「よんぼん刻、盛り上がつとるなー」

「ア、アハハ……」

大神に追い詰められたことで何から話そうかと優が考え始めると、少し暴走気味な刻が感情のままに自身の気になっていることをぶつける。そんな刻を見守る遊騎と苦笑いを浮かべる桜を尻目に、優は静かにその口を開いた。

「アイツ……いや、乙女は……」

オレに『コード：ブレイカー』の存在を教え、オレが『コード：ブレイカー』になるために手配してくれた人間だ」

「え——!？」

静かに語られた優の言葉……だが、その静けさとは対照的に、桜は強い衝撃を受けていた。そして、ほぼ反射的に過去に聞いた話が彼女の脳内で蘇る。

「そ、そういうえば先輩はある知り合いに頼んで『エデン』に行つて『コード：ブレイカー』になつたと前に……！　で、では乙女殿がその知り合いなのですか!？」

「そういうことだ」

かつて、優が『コード：ブレイカー』であることを知った時に聞いていた彼が『コード：ブレイカー』になつた経緯。当時は話そうとしなかつた事実が、まさかのここで明らかとなつた。

だが、決してそこで満足してはいけない。なぜなら、肝心な部分についてはまだ微塵も明らかになつていないのだから。

「優……ハッキリ言うが『エデン』はこの国で言うところの暗部だ。その存在を知っている人間つっののは、どう考えてもただ者じゃねえ。……それこそ、『エデン』と直接関係がある人間じゃねえとあり得ない。乙女は……『エデン』の何なんだ？」

「……………」

その部分を見逃すはずもなく、王子は鋭い視線を優に向けながら彼の真正面に立つ。



その視線から逃れるでもなく、同じく真正面から向かい合う優だったが、その口は閉ざされたまま。話すことを迷っているのか、それともどう話すべきかと考えているのか。それを探ろうとすると……二人の間に一つの人影が入り込んだ。

「そのことについては、優君よりは当人たちに話を聞いた方がいい。その方が確実にす」

入り込んだ人影……平家はいつものように腕を組んだ状態で、どこか冷ややかな態度を王子に向けていた。だが、すでに慣れたものなのか、王子は気にすることもなく平家の言葉に首を傾げた。

「……当人たち？」

「ええ……いらつしやったようですよ」

——ガラツ

平家が居間の戸に視線を向けたのとほぼ同時、その戸が勢いよく開け放たれた。そうして姿を見せたのは、黒を基調とした甚平を着た青年。男性にしては長い灰白色の前髪はピンでバツ印に留められ、留められていない方の髪も赤い鉢巻きによつて目元にはかかっていない。

「……………」

だが、何より特徴的なのはその口元。一瞬キセルや煙草のようにも見えるが、その正

体は雑貨屋や祭りの出店で売られている吹き戻し。それを啜えた謎の男の登場に、大神たちは思わず息を呑んでいた。

(誰だ、コイツ……。見た目から考えると……。乙女ちゃんの兄貴とか力……。?)

吹き戻しを啜えているからか、何も話さない男をまじまじと眺める刻。その見た目の若さから考えても乙女の兄弟だろうと予想していると、平家は紹介するようにその男に掌を向けた。

「ご紹介します。彼は刃賀はが匠たくみ……かつて「エデン」にも武器を提供していたこと、鍛冶屋『天下一品』の現当主。そして……乙女さんの父親です」

「……ハ、ハアアアアアアアアアアアアアアアアア!!?」

予想を完全に裏切った平家の紹介に、刻は山全体に響き渡ったのではと思わせるほどの声を放つ。大袈裟なようかもしれないが、少なくとも彼が感じた衝撃はそれ以上のものだったことだろう。その証拠に、今の刻はすっかり腰を抜かしてしまっている。

そんな刻とは対照的に、優は瞬間的に姿勢を正す。そして、深々とその頭を下げた。

「お久しぶりです、匠さん」

「ピッ」

「はい、身体の方はすっかり。匠さんも変わらないようですよ」

「ピッ」

「またまたご冗談を。とてもそんな風には——」

「待て待て待て待てエー!!」

優と匠……二人の間で淡々と繰り広げられる会話（?）。本人たちは何気ない様子でしているが、何も知らない者たちから見ればその光景は異常にしか見えない。刻が大声で会話に割り込んできたのもそれが理由だ。

なぜなら優の言葉に対して、匠はただ吹き戻しを吹いているだけなのだから。

「色々待て! ツッコみたいことがめちやくちやあるが……! まず、何で今ので会

話できてんだヨ!

「………なんでも言われても困るんだが」

「なんで困るんだヨ！　なんでピーピー言うだけでわかるんだヨ！　意味わかんねーヨ！！」

「テメエはヨーヨーうるせえ」

「うつせーゾ！　この『コード：06』端！！」

もつともな疑問を真正面からぶつける刻だったが、当の優は困ったように頭をかき始めた。そんな理不尽な対応に声を荒げる刻と、そんな刻をさらに煽る大神。二人のやり取りに置いていかれながらも、優は頭の中で言葉を整理して説明を始めた。

「あー……まあ、匠さんは昔からこういう人だったからな。いつの間にかわかるようになってたってわけだ。……あ、でも大事なことはちゃんと言葉にするから心配することとは無いと思うぞ」

「お前の耳つつーか、理解力はどーなってんだヨ……」

つまり要約すると……「慣れ」ということらしい。それだけでわかるようになるとは到底思えないが……現にできている人物が一人いる。この現実がある以上、信じるしかない。

すると、そうして一段落したところで今度は別の疑問が浮かびあがる。その疑問は、今まで口を閉ざしていた王子から放たれた。

「……なあ、聞きたいことがまだある。その、乙女の父親って話だが……本当、なのか

？」

王子が疑問に思うのも無理はない。それは、ただ純粹に見た目の問題。実年齢はわからないが、乙女は見た目から考えても優よりは年上に見えた。だが、それに対して匠の見た目はかなり若かった。それこそ二十代と言つても疑われないほどだ。

だから、たとえ乙女の父親と言われてもすぐに信じることなどできるはずもなく……  
「ああ、本当だ。匠さんと乙女は親子だ」

「……義理の、とかか？」

「まさか。匠さんはあくまでちよつと若く見えるだけだ」

「いや、ちよつとつてレベルじゃねえだろ！」

「……わかった。とりあえずは信じることにする」

納得できない刻たちに対し、優は当然のことのように匠と乙女が親子であることを改めて告げる。そして、あくまで匠は実年齢より少し若く見えるだけだと主張する。正直信じられないが、当人たちにこう言い続けられるのでは仕方ない。王子は仕方なくだが、ひとまずこの疑問を終わりにした。

そして、もう一つの疑問を彼らにぶつけた。

「さつき、この鍛冶屋が『エデン』にも武器を提供していたって言うていたが……それは本当か？」

「……事実ですよ。八王子 泪、あなたは私の言葉を疑っているんですか？」

王子の疑問に対し、答えたのは当人である匠ではなく平家。その表情は、気に入らない相手に自身を疑われたこともあり、この上ないほど不愉快だと主張している。

「別にお前の言葉を疑っているわけじゃない。ただ信じられないだけだ。少なくとも、“エデン”に武器を提供するような人間がいるなんてオレは知らなかったからな」

「ソーソー。んで、知らないのはオレらも同じだぜ、先輩。きつちり説明してもらおうか」

不愉快さを前面に出している平家を前にしても、王子はあくまで冷静な様子で言葉を返す。さらには刻も王子の側に立ち、同じく情報を引き出そうとした。

また、会話にこそ入ろうとはしないが大神と遊騎も気にはなっているのだろう。その視線は平家へと向けられている。そして、桜も緊張した面持ちで平家からの返答を待っていた。

「——本当だよ。『天下第一品』は先代まで “エデン” に……いや、正確には『コード：ブ

レイカー』に武器を提供していた」

「……乙女」

「お茶、持ってきたよ。配っちゃっていいよね？」

「ピッ」

「はいはい」

(こつちもちゃーんとわかてるのネ……)

肯定の言葉と共に入ってきた乙女の姿を見た王子は、その言葉を頭へと入れながらも彼女の一举一動に眼を光らせる。それを知ってか知らずか、落ち着いた様子で匠と言葉を交わすと、彼女は運んできたお茶を一人ひとりへと渡していった。

「ハイ、優君」

「……」

「そんな警戒しなくても大丈夫だよ。さつきは久しぶりだからアレだったけど、元気な姿を見れてもう安心した。だから、こうして近くにいるだけで私は満足だよ」

「……そうか」

「あ、ちなみに私の身体の感想は？ 興奮した？」

「やっぱり離れる、お前」

「冗談なのに」

順々にお茶を渡していき、最後の一つを優へと渡す。玄関先での騒動があつたからか、どこか警戒している様子の優だったが、乙女の言葉を聞くとすぐに安心してお茶を受け取った。その後のやり取りを見ても、彼らの間にある信頼関係が伺える。

だが、今の話題は二人の関係ではない。

「なあ、乙女……何度も聞き返すようで悪いが、さっきの話は本当か？」

「ん？ ああ、武器提供の話ね。本当だけど、言った通りそれは先代まで。お父さんはもう「エデン」とは縁を切っているから、今じゃもう昔話だね」

優にお茶を渡したところで、再び「エデン」との関係について問われる乙女。彼女はそのまま優の隣に座ると、特に隠そうとする素振りも見せずに話し始めた。

すると、その内容を補足するかのように平家も口を開いた。

「基本的に、我々『コード・ブレイカー』は各々の異能を用いて動きます。ですが、異能を持つ者の中には優れた武器を持つてこそ初めて真価を発揮する者もいる。そんな『コード・ブレイカー』に対して武器を提供する唯一の鍛冶屋……それがこの『天下一品』



なのです」

言い聞かすように指を立てながら話す平家だったが、そんな彼とは対照的に乙女は「今はほぼ無関係だけどね」とケラケラと笑いながら茶々を入れる。

要するに、乙女の自宅である『天下一品』はかつて『コード：ブレイカー』に武器を提供していた唯一の鍛冶屋。だが、現当主である匠はそれを行っておらず、今は無関係だということだ。随分と奇妙な立ち位置だが、少なくとも、乙女が『コード：ブレイカー』に関する情報を持っていてもおかしくはない事実ではある。

「……………なるほどな。とりあえず、この家と『エデン』の関係性はわかった。しかし、そうなるに優はなんでここを尋ねてきた？ お前と乙女が昔馴染みなのは察したが、ただ顔を見に来たわけじゃあないんだろ？」

「……………」

「やだなあ、そんなの決まってるじゃん。優君は私が寂しがってるのを感じ取って——」

「黙ってる」

これまでの話から、乙女と匠についてある程度のことまでは理解した一同。そうなるに、次に気になるのは彼女たちと繋がりを持っていた唯一の人間……優がここを尋ねた理由だ。出発前に会長に言ったように、彼は少なくとも数日間はこちらに滞在する予定

だったのだろう。だが、ただ顔を見に来るだけなら一日あれば事足りる。ならば、何日かの時間を要する用事があるということだ。

「……はあ」

わざとらしく顔を赤らめる乙女の言葉を制すと、優は溜まったものを吐きだすかのよう大きく息を吐いた。そして、ウエストポーチから何かを包んだ深緑色の風呂敷、自らの懐から少し大きめの巾着を取り出して自身の前に置き、そのままその中身を明かす。

「これが……オレが今日ここに来た理由だ」

そう言って取り出されたのは、刀身も柄も粉々となった彼の愛刀……『斬空刀』。先日の闘いで、大神と桜を護るために犠牲となった……数少ない彼の武器。

「これは……『斬空刀』か？ ……壊れたつてのは聞いていたが、どうしてこれが理由に——」

理由として示された『斬空刀』を見て、王子は顔をしかめる。そこに込められた真意がなんなのか、彼女がそれを理解しようと考えた……まさにその瞬間だった。

——ドガア!!

「な!?!」

突然の轟音と、油断すれば吹き飛ばされるほどの衝撃波が部屋全体に広がる。何があつたか、頭が理解するよりも先に……王子の眼は<rb>そ

</rb>><rp>>(</rp>><rt>・</rt>><rp>>(</rp>><rp>></rp>></r  
uby>を捉えていた。

「……………」

先ほどまで優が座っていた場所で拳を振り抜いた姿勢で立つ匠と、その直線上の壁に倒れかかる……額から血を流す優の姿だった。

## code : 75 そのために

「や、夜原先輩！」

何があつたから理解したところで、桜が慌てて優の元へと駆け寄る。その表情は、すっかり青ざめてしまっている。

無理もない。なぜなら、今まで何事も無く話をしていた優が突然殴り飛ばされたのだ。しかも、彼が尋ねてきた家の主……匠によつて。『コード：ブレイカー』たちを含め、誰もが反応できなかつた突然の一撃を受けた優は、額から血を流しながら壁にもたれかかっている。

「夜原先輩！　大丈夫ですか!？」

「ツ……！」

いつもなら「耳元で騒ぐな」とでも言いそうなものだが、今の優は意識を保つことに精一杯なように見えた。『コード：ブレイカー』として様々な闘いを乗り越えてきた彼だったが、ほぼ限界に達しているようだった。いくら『脳』を使っていない状態だったとはいえ、たった一撃だけで優はそこまで追い詰められたのだ。

そして、その限界まで追い詰めた張本人である匠は優に背を向け、その口元から吹き

戻しをそつと離れた。

「——血を止めたら、頭を冷やしてこい」

どこか威厳に満ちた、覇気のある声でそう呟くと、匠はそのまま部屋を出ていった。ただ一撃だけで、ただ一言だけでその場は静寂に包まれた。誰しもがその場から動かないまま時間だけが一秒、また一秒と過ぎていく。

しかし、一人の人間がその静寂を破る。最も動けないはずである人間が。

「う、ぐ……！」

「せ、先輩！ まだ動いては——！」

「黙って、ろ……。乙女……。『斬空刀』を……」

「大丈夫、なんとかして渡しとく」

「……すまない」

まだ衝撃が残っているのか、頭を押さえながら優が立ち上がる。彼の身を案じ、それを止めようとする桜だったが、優はその静止を振り払って歩き始めた。そして、全てわかっているかのように立つ乙女と言葉を交わすと、彼はそのままフラフラとした足取りで部屋を出ていった。

『……………』

優がいなくなった部屋の中で、言葉を放つ者はいない。それほどに彼らの目の前で起

こつたことは衝撃的で、圧倒的だった。指一本動かすことすら困難に感じるほどの緊張感が部屋一帯を支配していた。

「……ちよつと、ちよつと〜！ みんなして石にでもなっちゃったの？ あ、それとも優君が飛んでつた時にどこか怪我してたとか？」

もつとも、その緊張感もただ一人に関してはまったく作用していないのだが。

「……え？」

「だとしたらゴメンね〜。お父さんもあーいう時は周りのこと考えないから」  
けらけらと、何事もなかったかのように話す乙女に対して周囲が感じたのは——驚愕。

乙女は優を好意的に見ている……それはまだ会って間もない彼らもわかっている。しかし、今の彼女はどうかだろうか。いくら相手が実の父親とはいえ、その意中の相手は何の説明もなく傷つけられたのだ。それなのに彼女は怒りも感じず、むしろそれが当然であるかのように受け入れているように見えた。

「……随分と、あっさりしてるんですね。あなたの場合、父親相手でも掴みかかるかと思つたのに」

その驚きを言葉にして乙女に伝えたのは大神。腕を組み壁に寄りかかった状態で伝えられたその言葉を聞いた乙女は、「ん〜」と頬をかいてから話し始めた。

「まあ、今回のことに関しては優君の方に非があるからね。私がお父さんの立場でも、同じことしたかもしれないし」

「……なぜですか?」

「鍛冶職人にとって、鍛え上げた作品は我が子同然。特にこの『斬空刀』はお父さんが優君のために作った最高傑作。何十回も失敗して……ようやく作り上げた子なの。それを壊されれば、つい手も出ちやうでしょ」

「ま、待つてくださいい!」

匠の突発的な行動の理由を話す乙女に対し、桜は勢いよく身を乗り出して割って入った。そして、彼女はそのまま反論を始めた。

「夜原先輩は私と大神を護ってくれたのです！ 『斬空刀』はその時に折れてしまった……。だから先輩は何も悪くは——！」

「やめな、桜小路」

しかし、そんな桜を王子が引き止める。肩を掴まれて止められた桜は、必死な表情で王子の方に振り向く。

「王子殿!? ですが！」

「オレは鍛冶職人じゃねえから全部わかるわけじゃないが……こういうのは、過程は問題じゃない。何があったとしても、刀が壊れたのは事実なんだ」

「ツ……！」

王子に諭され、桜は何も言えずに立ち止まる。過程と結果、どちらが大事かはここで言い合うことではないが、仮に自分の子が他者を庇って事故に巻き込まれたとする。その過程を聞けば、その子を誇りに思うことはできるが、その子を失った悲しみが癒えるわけではない。

過程がなんであれ、事実だけは消しようがないのだから。

「……さて！ それじゃ私は『斬空刀』をお父さんに渡しつつ、ご飯の用意でもしてくるかな。今日は人が多いから張り切らないとね」

「え？ いや、オレたちは——」



「もう暗くなり始めてるから帰るのは危ないよ。それに、多分まだいてもらわないと困るだろうし」

「……………」

すると、乙女は空気を変えるかのようにパンと手を叩いた。『斬空刀』の破片が入った巾着を持ち、そのまま扉に向けて歩き始めた。そして、食事を遠慮しようとする王子に對して意味深な言葉を残すと、乙女は扉に手をかけた。

「……………あ、ちなみにウチの裏手にある獣道を真つ直ぐ行くとおつきな滝があるの。優君はそこにいると思うから、もし暇だったら行ってきてもいいと思うよ」

部屋を出る前に、乙女は優が向かった場所について簡単に説明する。結局、彼女は最後までずっと変わらぬ調子だった。優が殴られた時も、その理由を話す時も。

そして今は……………うつすらと微笑んでいるようだった。微笑んだまま……………どこからか取り出した日本刀を手にしていた。

「——それじゃ私、ちよつとお父さんとおはなししてくるね？」

「お、乙女さん……？」

「どうぞごゆつくり……うふふふふふふふ」

「……理解はしてるが納得はしてないってことか」

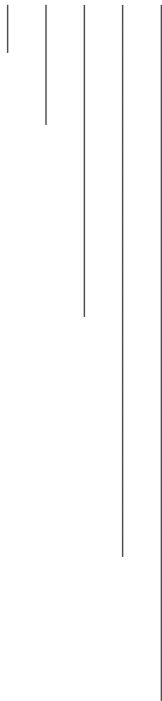
「ふふ、実に彼女らしい」

どこか黒い微笑みを浮かべた彼女が匠とどんなおはなしをしたのか……探ろうとする者は誰一人としていなかった。

「匠さん……オレは、『コード：ブレイカー』になります」

「……………」

正座の状態で凜と背を伸ばし、彼は自身の決意を言葉にして目の前にいる恩人にぶつ



ける。恩人は何も言わず、ただ静かにこちらを見ていた。その覚悟を確かめるかのよう  
に。

「今まで……お世話になりました」

「……………」

多くは話さず、彼は床に手をつけて深々と頭を下げる。たとえ返される言葉がなくな  
も、彼はこの道を進むことを自身で選んだ。何を言われようと……揺らぐことはない。

「……………失礼します」

そして、最後まで恩人からの言葉はないまま彼は立ちあがろうとする。するべき挨拶  
は済ませた。ならばもう止まることは許されない。そうして彼は——

「……………『斬空刀』。空気すらも斬る……最高傑作だ」

「……………え？」

進み始めようとした彼の前に突きだされた一本の刀……鞘に入っているというのに、  
彼には一瞬だけそれが光を受けて輝いているように見えた。

「これは、お前個人に送る刀だ。『コード・ブレイカー』になるからじゃない。『天下第一品』の務めとも関係ない……刃賀匠という一人の鍛冶職人が、お前という一人の人間に託す刀」

「ッ——！」

その言葉を聞いた時に湧き上がった感情を、彼は忘れることは無い。全身が熱くなり、目から雫が溢れそうになってくる。しかし、それを溢れさせるわけにはいかない。それを溢れさせてしまえば、自分はここで止まってしまいそうになりそうだったから。

「ありがとうございます——！」

そうして託された刀の重みは、彼の身体の芯まで刻み込まれた。その重みを自身の手

に納めながら、彼は歩きだす。安寧などない、『『ゴルド：フレイイカー』存在しない者』という茨の道へ向けて。

——  
!!  
~~~~~

「……………」

夜原優は……ただ無心だった。

目を閉じた視界は暗闇に包まれ、『脳』によって聴力を使い物にならない状態にしたため耳をつんぎくような滝の轟音もほとんど聞こえない。唯一感じるものは、一切の容赦なく全身に打ちつける水。少しでも気を抜けば、足場になっている岩に叩きつけられるほどの勢いで流れるそれだけが、今の優が外界から感じられるものだった。だから彼は……

「……………ホントーにいたぜ。つか、スゲー滝」

「人間離れた先で自分のことを優アイツじゃなきゃ、間違いなく一瞬で潰されるな」

数m離れた先で自分のことを見ている者たちに気付くことはなかった。……正確には、気付いている様子は感じられなかった。動揺もなく、動きもなく、何も変わらずに滝に打たれ続けている。

自分たちの存在に気付かず、ただ一心に滝に打たれている優。そこで、彼らはふと気付いた。今の優は滝に打たれているため、上の服は脱いで下の衣類だけを着ている。つまり、彼の上半身は包み隠さずに晒されているということ。だから、見ることでできた。身体中に刻み込まれた、無数の傷痕を。

「夜原先輩……あれほどの傷があるなんて、知らなかったのだ……」

「いかにも、あれはかつての修業で負ったものらしいよ。『脳』で自己回復能力をいくら強化しても消えることはないほどの深い深い傷……彼が強くなろうとした証そのものや」

「そこまでして、夜原先輩は『コード：ブレイカー』に……」

「それほど覚悟と目的が彼にはあるってことだよ」

『……………ん?』

普段は服で隠されている優の身体……そこに刻まれた傷痕を始めて見た一同は息を呑む。何をしても消えない傷を負うほどの修業をし、力を身につけて彼は『コード：ブレイカー』となった。そこに秘められた覚悟と目的について桜が思いを馳せた……………と、  
ところであることに気付く。

なんの違和感もなく、先ほどまでいなかった人物が会話に混ざっているということに。

「か、会長!?! 今までどちらに!?!」

「いかにも、ケチな王子がバイクに乗せてくれなかったから走ってきたんだよ。全速力だったけど、ついこんな時間になっちゃったんだな」

ほむ、と自身の胸を叩きながら到着までの経緯を語る会長。いくら彼が珍種としての身体能力を有しているとはいえ酷なものであることには変わりはなく、現に彼は無意識



に「ケチ」という文句を王子の前で言ってしまった。<sup>本人</sup>

「それは……お疲れ様でした、会長」

「つーか、別にいてもいなくてもよくネ?」

「遅えぞ、渋谷。どこで道草食ってやがった」

「温厚な私でも、この扱いにはキレてもいいよね?」

「ハ、ハハ……」

自力でやってきた会長に対し、桜は労わるような言葉をかけるが、刻と王子はまさに対照的。普段と同じ……いや、もしかしたら普段よりもハッキリと冷たい言葉をかけていた。王子に対しては常に下手に出ている会長もさすがに納得いかないらしく、なにやら負のオーラのようなものを放っていた。

そんなやり取りに苦笑いを浮かべる桜だったが、そこでふと一つの疑問が浮かんだ。そして、何の迷いもなくその疑問を会長へと向けた。

「そういうえば会長、よく行き先がここだとわかりましたね? 確か事前に行き先を教えられたのは運転係の王子殿だけだったはずなのに」

「え? あゝ、それはその……」

行き先を知らなかったはずの会長がなぜ自力でこの場所まで辿り着けたのか。桜からシンプルな疑問をぶつけられた会長は、頭をかきながら言葉を濁した。上手く言葉が

出てこない彼を横目に、大神がため息をつきながら口を開いた。

「……簡単なことですよ、桜小路さん。クソネコは最初からこの場所を知っていた……正確には、ここにいる人間たちのことを知っていた、ですけど」

「え!? 会長は乙女さんのことを知っていたんですか!？」

「いかにも、生徒会長だからね」

「テメー……それ言えばなんでもオツケーだと思つてねーか?」

本人から答えを聞くまでもなく、見事に疑問の答えに辿り着いた大神。特に否定もしないところを見ると、どうやらその通りらしい。すると、会長は特に悪びれる様子もなく、手を挙げながら大神たちに背を向けた。

「まあ、知っているだけで会ったことはないけどね。というわけだから、私はひとまず挨拶しに行つてくるよ。それじゃあね〜」

「あ……お、お気を付けて!」

「……何だったんだ、アイツ?」

「自由やなー」

「テメーが言うのかヨ……」

挨拶に行く、と言って会長はさつきと行つてしまった。見送る桜をよそに、刻は意味がわからないと言いたげな表情を浮かべるのだった。

——ドドドドドド!

会長という話が存在がいなくなったことにより、彼らの間には静寂が生まれる。その静寂の中では、ただでさえ大きい滝の音がさらに大きく聞こえてくるように感じた。その滝の音に誘導されるかのように、一同は再びその滝に打たれ続けている優の姿を目に焼き付ける。

無数の傷にまみれ、ほとんど限界に近い状態の身体。それでも彼は『コード：ブレイカー』として活動し続ける。彼以外、誰も知り得ない『目的』のために。いったい、その『目的』はどれほど大きなものなのか……それを考えると、桜は無意識に彼の名を呼んでいた。

「夜原先輩……」

「ハア、ハア……優君……」

「どうして、そこまで……」

「ハア……いつ見ても、優君の半裸は犯罪的だあ……。うふ、うふふふふ……」

『…………え?』

デジャヴ…………ではないが、ついさつき感じた違和感と同様の感覚が彼らの間に流れる。そして、その違和感の正体に、彼らはそーっと視線を向け……

「うふふふ…………うへへへへ…………」

これでもかというほど恍惚した表情を浮かべながら、鼻から絶賛出血中の乙女の姿を見てしまったのであった。

「——ドワアアア!! なんかいルウウウウ!!」

「お、乙女さん!? いつの間に!」

「優君の裸が見られるのなら、ご飯の支度なんて一瞬で終わらせられるよ!」

食事の支度をする……そう言つて別行動をとつていたはずの乙女がいたことに気がつき、刻は涙を浮かべながら絶叫する。まあ、いるはずのない彼女がそこにいることも驚きだが、そこまでの恐怖を刻に与えたのは他ならぬ乙女の狂気すら感じるほどのだらしなくなつた表情なのだが。

そして、驚きながらもここに來れた理由を尋ねた桜に対し、乙女は勢いよく親指を立てながら力強い根性（欲望？）論を展開するのだつた。……親指以上の勢いで流れる血に構うこともなく。

「……とりあえず、鼻血を拭いてください」

「いや、失敬失敬。やつぱり久しぶりで実際に目にしちゃうとき、抑えようとしても抑えきれない優君への愛がね」

「こんな血生臭い愛イヤだ……」

その後、なんとか鼻血が止まつた乙女はまるで笑い話でもするかのように軽快な様子

で謝罪をした。あくまで「優への愛」と言い張る乙女。刻のツツコミという名の眩きは聞こえていないようだった。

「しつかし……優ななほんのことめつちや好きなんやなく、『ふわ丸』」

「そんなめつちや好きだなんて。将来一緒の墓に入りたいつて思つてるくらいだよ」

「くらいで済む話じゃないと思うんですが……。ていうか遊騎、その『ふわ丸』つて乙女この人のことですか……？」

「だってなんかふわふわしとるし」

「そうですか……」

そんなやり取りをしていると、遊騎が感心したような言葉を口にする。率直に言われたからか、乙女は赤らめた頬に手を添えながらぶんぶんと首を振り遠慮がちな言葉を返す。といつても、その遠慮もあくまで本人にとつてはであり、第三者からしてみれば十分すぎるほどの気持ちを感じ取れるような言葉であつた。

「……………」

そんな中……桜だけはどこか腑に落ちないといつたような表情を浮かべていた。さらに、彼女の眼からは「疑い」の感情がひしひしと伝わってくるようだった。彼女はそんな表情で、乙女を見つめていた。

「……乙女さん」

「ん？ どしたの、そんな真剣な顔して」

「本当に……夜原先輩のことが好きなのですか？」

そして、彼女はその「疑い」を「質問」として乙女にぶつけた。

「さ、桜小路……？」

彼女の質問は、その場にいる人間たちにとっては意外なものだった。乙女が優を好んでいることは、乙女のこれまでの行動を見ればわざわざ確認するようなことではない。

誰だつてわかることだ。

しかし、それでも桜は聞いた。彼女はふざけてこのような質問をするような人間ではない。それは、大神たちにとっては乙女の明らかな好意以上に周知の事実だった。だから、なぜ桜がこのような質問をしたのか……その意図を察した者は一人もいなかった。

「……………」

その質問をぶつけられた当人すらも。

「…………好きだよ？ さつきも言ったけど、一緒に墓に入りたくらい」

「……………だったら、なぜですか？」

しかし、桜にしてみればこの質問は当然のものだった。むしろ、聞かずにはいられない質問。そもそも彼女が求めている答えは「本当に好きなのか」に対する「YES・NO」ではない。

彼女が知りたいのはその先……

「なぜ……夜原先輩が『コード・ブレイカー』になるための手伝いなんてしたんですか？」

そう、なぜ彼女は好意を持っている相手を『コード・ブレイカー』へと導いたのか。いくら自分が『エデン』と関係がある立場にあるとはいえ、どう考えてもマイナスな面が多い。『エデン』の手足となり、『悪』を裁く『コード・ブレイカー』。その日常は嘘と



虚無に塗れ、常に命の危険が付きまとう。現に桜が知る限りでも、優は『コード：ブレイカー』としての闘いの中で何度も危険な目に遭っている。それこそ、一歩間違えれば本当に命を落としかねないほど。

なにより、彼らは存在を抹消されて『存在しない者』となる。それによつて一生抱えることとなる虚しさや寂しさの片鱗を味わった桜は、そんな状況へと追いこむことに意味を見出せなかった。

「……………」

真つ直ぐな目と共にぶつけられた桜の質問に、乙女は沈黙で答えた。しかし、そこに後ろめたさは感じられなかった。なぜなら、乙女が桜へと返すその視線もひどく真つ直ぐとしたものだったから。

「乙女さんは…………『コード：ブレイカー』がどんなことをしているかも知っているのでしょうか？ それなのにどうして、夜原先輩を止めなかったのですか…………？」

「……………」

互いに目を逸らすことなく向かい合う女と女。どちらも「逃げる」という選択肢を選ぶようなことはせず、目を合わせ続ける。

そして、目の前の相手へと一直線に向けられる感情の昂りは、桜の眼に涙という形で溢れ出た。

「……どうしてですか？　夜原先輩が人を殺しているのを知っていて……どうしてそんな平気な顔をしていられるんですか!？」

「桜チャン……」

「『にやんまる』……」

涙と一緒に溢れ出たその言葉は、紛れもない桜がこれまでも抱えてきた感情。たとえばどんな理由があつたとしても、人を殺すことを良しとしない……彼女の甘さ<sup>優しさ</sup>。

「……………」

「乙女さ——!」

そんな隠そうともしない直球な感情が込められた言葉を受けた乙女は、変わらず何も語ろうとしない。抑えようとしても溢れる涙を拭いながら、桜は彼女から答えを引きだそうと言葉を——

「——平気なわけ……ないでしょ……」  
「……え？」

刹那、乙女表情がこれまで見せなかつた色に染まる。それは、気を抜けば今にも押しつぶされそうなほど大きく、そして深い……そんな「哀しみ」の色だった。

「……なーんてね。桜小路さん……だっけ？ そんな真剣な顔で聞いてくるから、ついこつちも雰囲気合わせちゃったよ」

しかし、それを見せたのはほんの一瞬。一度の瞬きの間に終わるくらいの短い時間が過ぎると、彼女はくるりと桜たちに背を向けた。声だけを聞くと先ほどまでと同じ普段の明るい彼女だったが、それが一種の強がりであることは誰しもが感じていた。でなければ、わざわざ背中を向ける必要はない。

「……ハアーツ」

そして、乙女は背中を向けたまま空を仰ぎ、大きく息を吐く。まるで、自分の中にあ  
る感情ごと吐き捨てるかのように。そして、ボソリと呟いた。

「こうなったらもう……話しちやった方が楽だよ、優君」

「え？」

乙女の言葉を、桜は完璧に聞きとることはできなかつた。だから乙女が何を言ったのかはわからない。桜がわかつたのは、こちらに振り返つた乙女の表情からは先ほどの  
哀しみはまるで幻だったかのように消えてしまったということだけだつた。

「……教えてあげようか？」

優君が……なんで『コード：ブレイカー』になったのか……さ」

「え!?!」

『ツ——!?!』

突然の言葉に、桜は大きく目を見開く。桜だけではない。大神たち『コード：ブレイカー』の面々も、乙女のこの言葉は予想することなどできず、ほとんどが意表を突かれていた。

「だって、ここまで言われちゃったら気になるだろうし。優君だって後々大変だろうしね」

「仕方ないってことで」と続けると、乙女は近くにあった岩に座り込んだ。長い話になる……とでも言いたいのだろう。そして、彼女は再び空を仰ぐ。すでに空は黒に染まり始め、一番星がうつすらと輝き始めていた。

「優君が『コード：ブレイカー』になった理由……それは、すごくシンプルなコト」  
人工の光もなく、空という自然の光に包まれ始める中で……乙女は語り始めた。

「優君は……一人の『悪』を捜している」

「夜原優という一人の人間に隠された……深く暗い過去を。」

「自分の家族を殺した『悪』を捜して殺す……そのために、優君は『コード：ブレイカー』になった」

## code : 76 理不尽な不幸が始まりを呼ぶ

「はーち……きゅーう………じゅう！ もういいかい？」

「もういいよー！」

「よーっし！ どこだー！」

都内に建つ二階建ての一軒家、その中で無邪気な表情で遊ぶ幼い少年。特に珍しい光景ではない、どこにでもあるような平和な光景。

「こら！ 遊ぶのはいいけど家の中で走らない！」

「はーい！」

「ハハハ、本当に元気だなあ」

台所に立ち食事の準備をする母親と思われる女性からの言葉に手を挙げて答えながら、少年は隠れた遊び相手を捜す。そんな少年の様子を見て、ソファに座る父親と思われる男性は静かに笑みを浮かべる。

そして、それから数分が経つと……

「光<sup>ひかる</sup>、みーつけ！」

「みつかった……」

少年がもう一人の少年を連れて母と父のいる空間まで戻ってきた。もう一人の少年は少年よりも幼く、どこか少年と似た顔つきをしていた。二人はそっくりな笑顔を浮かべながら、父が座っているソファへと向かっていった。

「お父さん！ 光の奴、お父さんとお母さんのベッドの下に隠れてたんだよ！」

「あんな狭い所によく入れたな、光」

「だって他に隠れられるところ無かつたんだもん」

父の隣まで移動し、先ほどと変わらない無邪気な表情で話す二人の少年。父も嫌な顔などせず少年たちの話に頷き、答えている。そのまま他愛ない話が続くかと思つた……その時。

——グ

「あ、お兄ちゃんお腹鳴つた」

「お母さん、お腹空いた」

「あれだけ動いたんだから当たり前でしょ？ ……はい、できた」

空腹を知らせる音が鳴つたことで、二人の話す対象は父から母へと移る。そんな少年たちに対し、仕方なさそうな表情を浮かべる母は、作っていた物を完成させて皿へと移す。

そして、二つの皿を持って少年たちと父の元へと向かっていった。



「はい、おやつのおホットケーキ。今日のは自信作よ」

「やったー！ いただきます！」

「いただきます！」

「つて、こちら！ 食べる前に手を洗ってきなさい！」

「ハハハ！」

まるで、絵に描いたような幸せな家族。誰が見ても「満たされている」と感じる事ができる、それでいて一般的な家庭の姿。これは、確かにかつて存在していた日常の風景だった。

これは、現在は当時の名も失った少年……夜原優の過去に、確かに存在した真実である。

——ドドドドドドドド!!

「優君の家は、特別変わったことはない普通の家だった。専業主婦のお母さんに仕事熱心なお父さん、そして光って名前のお優君にそっくりな弟……どこにでもあるような普通の家族」

近づくだけで耳がどうにかなってしまいそうなほどの轟音を放つ滝がなんとか視界に入るくらいの位置で、乙女はその滝に打たれている優の過去について静かに語り始めた。

だが、その内容は乙女本人が言うようにあくまで普通の家族の話。探せば同じような家庭などいくらでも出てくるだろう。そこには、確かに特別などなかった。

「……ま、普通と違うところがあるといえば優君が異能を持っていたことかな。そして、両親も異能の存在を知っていたこと」

「異能を知ってたってことは……まさか」

「そ。仕事熱心なお父さんがやっっている仕事は『エデン』の研究者。主に異能関係のね。ちなみにお母さんも元々は同じ。だから『脳』っていう不安定な異能を持つていても、優君は生きることができた」

優が持つ異能……『脳』は扱い方を知らなければ自分自身を取り返しのつかないレベルまで傷つけてしまう諸刃の剣とも呼べる異能。現に彼は、幼少時代には幾度も傷ついては治りを繰り返してきたと大神たちに話したことがある。まさに生き地獄と呼ぶにふさわしい壮絶な経験だが、彼がそれを乗り越えることができたのは彼自身の気力と、乙女が言うように両親のおかげだった。

もし異能の存在も知らない者が親ならば、自身の子どもも異常に恐怖を抱くだろう。それこそ、育てることを放棄してしまうほど。しかし、優の両親がそれをしなかったのは彼らが『それ』が異能であると知っていたから。そういう意味では、優は恵まれた環境で育ったと言える。

「ちなみに、優君のお父さんとウチのお父さんは『エデン』での関わりは関係なく昔からの知り合いなの。よく皆で遊びに来てたし、優君と知り合ったのもそこから。そして、愛し合ったのも……」

「その辺の話はしなくていいです」

「ちえ」

そこで初めて、優と乙女の出会いについて明確な答えが明かされた。親同士の繋がりによって知り合ったというが、「エデン」に所属する優の父親と「エデン」に協力する匠が知り合いだったとは、ある意味では奇妙な繋がりである。

その流れで優との思い出を語り始めようと頬を赤らめた乙女を見て、大神はド直球な言葉でそれを止めた。思い出話を止められた乙女は口を尖らせる。すると、そこで彼女の声が響き渡る。

「お、乙女さん！」

「なに？　桜小路さん」

「え……つと」

乙女が振り返ると、そこには桜が思い詰めたような表情をしながら立っていた。その表情からは、その胸の内に抱えている言葉をはたして口にして良いのか……そんな思いが感じられた。

「ツ……そ、その……」

しばらく口ごもる桜。しかし、それが数秒ほど続いたところで……

彼女は覚悟を決めたかのように拳を握る。そして、乙女の目をジツと見つめながら口を開いた。

「夜原先輩のご家族についてはわかりました……。で、でも……今その方たちは……」

「……………もういない。言ったでしよ？ 殺された、って」

「どうして……………いつたい誰が……………」

「……………」

話を聞く限り、一部を除いては本当に普通の一家である優の家族。だが、今はその家族は優一人を残して存在していない。さらに、「殺された」という乙女の言葉が物語っているのは……………それが誰か他者の手によってもたらされた結果だということだった。

誰がそのようなことをやったのか……………。幸せに満ちていたであろう優の生活の全てを壊した者が誰なのか……………桜は目を伏せながら静かに呟いた。

だが、乙女の次の言葉でその目は大きく見開いた。

「……犯人はわか……つて……るよ」

『!?!』

「え!?!」

乙女のその言葉に、桜だけではない。大神たちも大きく目を見開いて乙女を見る。優の家族を奪った人間は誰なのか……その場にいる誰もが乙女の次の言葉に耳を傾けた。そしてそれを察してか、乙女はゆっくりと……口にした。

「——『クレイジー・ステルスマン』、って聞いたことない?」

『ツ——!!』

「クレイジー……ステルスマン？」

乙女が口にした名前を聞いて疑問符を浮かべる桜に対し、大神たち『コード：ブレイカー』の間には一斉に緊張感が走った。そこから導き出されるのは……『コード：ブレイカー』は『狂った透明人間』を知っているということだった。

「大神……お前は知っているのか？ その者が、どんな人間なのか……」

それを察した桜は、近くにいた大神にその正体を尋ねる。大神は一瞬、言うべきか迷っているような表情を見せたが……静かに息を吐き、彼はゆっくりと桜の顔を見た。

「……オレたちは実際に会ったことはありませんが、話だけなら聞いたことがあります。最低最悪の、稀代の連続快楽殺人犯……それが『狂った透明人間』です」

「連続……快楽殺人犯……？」

「名前の通り、狂った奴さ」

真剣な表情で「連続快楽殺人犯」と話す大神に対し、桜はその聞き慣れないワードをすぐには理解できずに繰り返す。すると、大神の言葉を引き継ぐかのように王子がポツリと口を開いた。

「動機も不明、狙う相手もおそらく奴の気分次第……そんな風に人を殺す。『Re—C ODE』として動いていた時も、もちろん『コード：ブレイカー』になつてからも……あそこまで狂った奴の話をおレは聞いたことが無い。だが、奴の異常性、残酷性……そういう「悪」らしいところだけで評価するなら、奴は間違いなく『捜シ者』以上の「悪」だ」

「な——!？」

『捜シ者』以上、という王子の言葉を聞き、桜の顔は驚愕の表情一色に染まり上がる。世の中を「悪」ばかりと悟り、ならば自身が「悪」の頂点として君臨しようとした『捜シ者』。そこには彼なりの正義の心があつたが、その行動の異常性と残酷性は桜もよく知っている。

しかし、この『狂つた透明人間』クレイジー・ステルスマンはその『捜シ者』すら超える異常性と残酷性を有しているという。そのような「悪」が何をするのか……桜は想像することすらできなかった。

すると、そんな桜の胸の内を察してか、乙女が静かに呟いた。



「——信じられないでしょ？ でも、実際にそんな人間がいて、何十……ううん、もしかしたら何百人っていう人を襲っている。そして……優君はそいつに家族を奪われた。それもまだ小学校に上がったばかりの頃にね」

はたして、その時の優の胸中にあつたのはどんな感情だったのか。

「優君が助かったのは本当にたまたま。たまたま学校から帰るのが遅くなったから現場に居合わせなかっただけ」

異能という点を除けばごく普通の家庭に暮らす小学生が、ある日突然に家族を奪われた。

「だから優君は見ただけ……。血生臭い家を、真っ赤な血の水たまりを……」

絶望か、虚無か、悲しみか、怒りか……。

「そして……動かなくなった家族を、ね」

「……………」

どこか遠い目で語る乙女の言葉を聞き続けた桜からは、もはや反応という反応は返ってこなかった。ただ気付けば……桜の眼は今もなお滝に打たれ続けている優の姿と、その身に刻まれた無数の傷を捉えていた。それらを見ているだけで溢れてきそうになる涙を必死にこらえるように、桜はグツと自身の拳を握った。

「……けど、『狂った透明人間』は無残に人を殺すだけじゃ終わらない。……むしろ、殺し自体は前菜みたいなもんだ」

「ええ……殺しだけでは終わらない。本当に胸糞悪いのは……そこから先です」

「……ええ？」

しかし、そこで桜の視線は優から離れる。王子と大神が口にした……明らかな嫌悪感を感じさせる眩きを聞いて。

人を殺すこと自体を前菜とまで言わせる……そう、『狂った透明人間』の真の狂気はそこから先にこそあった。

「……どういう、ことですか……？」

「……」

何も知らず、その狂気に触れようとする桜。口にして良いものかと、一瞬は口をつぐんだ大神たちだったが……すでに彼女は狂気の一部を知ってしまったている。

大神は、その狂気の内容を言葉にして伝えた。

「……『狂った透明人間』は殺した相手に対して必ずしていることがあります。それが男だろうと女だろうと……子どもだろうと老人だろうと。一人としてそれをされな

かった被害者はいません」

「……一体、何を……何をするといいのだ……？」

「——死体を弄んで自身の性欲を解消させるんですよ」

「……………え？」

大神の言葉を聞いた桜の眼から、完全に光が消えた。想像の斜め上どころか、もはや別次元といってもいいその驚愕の内容に、桜は怒りを覚えることすら通り越して呆然としてしまっていた。

「死体相手に興奮してヤっっちゃうとか……ホント、ここまで胸糞悪い変態ヤローなんて他にいないぜ」

「死者に対する冒瀆……いえ、もはや冒瀆以上の凌辱です。決して許すことはできません」

「会ったことなんかないけど……ホンマに嫌いやわ」

「同感だな……」

常軌を逸した、人としての尊厳も何もかも無視した凶行に対し、それぞれが嫌悪感を示していた。俗に言う裏社会で活動する彼らにここまで言わせるのだ。一般人ならば理解するより先に気分を悪くしてしまうだろう。現に……

「……………」

ある程度、裏社会にも触れていった桜ですら今にも意識を失ってしまいそうな様子だった。それでも二本足で立ち続けているのは、彼女の芯の強さのおかげとも言えるだろう。

そして、そんな桜の視線は……無意識に乙女の方へと向けられていた。

「……じゃあ、夜原先輩……の、ご家族も……まさか……………」

「……………」

搾り出したように放たれた桜の言葉に、乙女は何も答えようとはしない。言葉ではも

ちろん、頷くことも首を振ることさえもしない。だが、力強く自身の身体を抱きしめて  
いる彼女の様子を見る限り、何もなくとも答えが浮かんできってしまう。

そう、大神が言ったように「それをされなかった被害者はいない」……それはつまり

「——そうだ」

『ツ!!』

瞬間、今まで会話に加わっていなかった者による肯定の言葉が響き渡る。短いながらも、詰めるに詰め込まれた嫌悪と憎悪が入り混じったその言葉に……一同は大きく目を見開いた。

「今でもはつきり思い出せる……。血と死体の臭いに混じって嫌でも鼻に入り込んでくる……。吐き気がこみ上がってくる悪臭がな」

「……夜原、先輩」

「……滝に打たれながら聞いてたのかヨ」

「『東脳・反転』で聴力を強化してな。集中すれば目当ての音だけ聞きとることだってできる」

振り返った桜の眼に飛び込んできたのは、全身から水を滴らせる優の後ろ姿だった。彼はどこからか用意したタオルで身体を拭いており、その様子だけ見ると何も感じていないようにも見える。

だが、彼らは確かに聞いていた。嫌悪と憎悪が入り混じった彼の言葉を。彼がこちらに背中を見せているのも、おそらく今の自分の顔を見られたくないのだろう。

……殺意に満ちた表情を。

「……ごめんね、優君。勝手に……話しちゃって」

「……………」

「許せないならそれでいいよ……。悪いのは、私だからさ」

背中を見せたままの優に対して、乙女は勝手に彼の過去を話してしまったことを素直に謝罪する。しかし、優は何も言わずに自身の身体を拭き続けている。それが彼女に対する怒りからなのか、許さないという意思表示なのかはわからないが……彼女はそれを見ても言い訳も何もしなかった。

「ただ私が勝手にしたことだから、ただの自業自得——」

——ビチャ

「——つて、冷たっ?!」

しかし、そんな乙女の言葉は唐突に途切れた。突然の暗闇と水気が彼女を襲い、何が起こったのかと身体を跳び上がらせる。そして、次の瞬間には——

「……許すも許さないもない。お前が話した方がいいと思つて話したんなら……別にいい」

「……優、君」

「それでも悪いと思うんだつたら、タオル洗つといてくれ。それでチャラだ」

先ほどの言葉とは違い、嫌悪や憎悪なんて微塵も込められていない柔らかな言葉。それを乙女にかけていたのは、他ならぬ優だった。自身についた水分を拭いたタオルを彼女の顔に押しつけながら、何も気にしていないことを告げる。

彼なりの優しさに包まれたその言葉を聞いた乙女は、押しつけられたタオルをギュッ



と握った。

「うん……ありがと、優君」

ふと、タオルから一粒の雫が零れ落ちる。それは握ったことにより絞り出された水分なのか、それとも乙女から流れた水分を新たに吸い取ったからなのか……いや、どちらでもいいだろう。

どちらにせよ、そこにマイナスな感情は存在しないのだから。

「……………」

「……おい、いつまでも顔につけてると服まで濡れるぞ」

「ねえ……これって優君が使ってたタオルなんだよね？」

「……そうだが？」

「……………」

「……………」

「……パクツ」

「食うな！」

「ヂュウウウウウ……!!」

「吸うなアアアア!!」

「優君の身体を拭いたタオルが目のあるのに吸わないなんて選択肢がある!?!  
い

いや、無い!!」

「真剣な顔で言うことじゃないだろうが!!」

その証拠に、彼らのやり取りは最初に見たのと同じようなものにすっかり戻っていた。……まあ、常識とはかけ離れた内容だが。

それでも……

「……プツ、アハハハ!」

「……やれやれ」

「つたく、イチヤイチヤしてんじゃねーヨ」

「ホンマ仲良しやな」

「……仕方ねえ奴らだ」

「フフフ……」

そのおかげで、沈みかけていた彼らにも自然と笑顔が戻った。気付くと、先ほどまで彼らの間に渦巻いていた重苦しい空気は綺麗さっぱり消えてしまっていた。

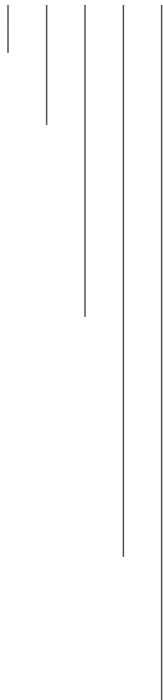
「大丈夫! ちゃんと洗つとくから! 一通り楽しんだ後で!」

「洗つても使えなくなるだろうが! やっぱり自分で洗うから返せ!!」

「もつと! もつと優君のエキスを!!」

「やめろオオオオオオ!!」

「——つたく、滝に打たれるより疲れる……」  
「私、今日はご飯いらないかも♪」



「ちやんと食え」

数分後、ようやく満足した乙女は顔をツヤツヤさせながら満足気に笑っていた。その背後には、彼女とは対照的に疲れ切った顔をしながら服を着る優の姿があった。そして、すっかり最初に会った時の雰囲気に戻った二人を大神たちは安心したように眺めていた。

「……………」

しかし、その中で一人だけ……王子だけが何やら考え込んでいた。顎に手を添えて真剣な表情を浮かべる彼女は、その真剣な面持ちのまま口を開いた。

「なあ、話を蒸し返すようで悪いんだが……優が『コード・ブレイカー』になった目的はわかった。そうすると、『エデン』は対価としてお前に『狂った透明人間』クレイジー・ステルスマンの情報を与えている……ってことでいいのか？」

「……ああ。オレが『コード・ブレイカー』として動いている限り、奴に関する情報があれば逐一もらえるようにはなっている」

「……………っては、やつぱ『狂った透明人間』クレイジー・ステルスマンは——」

「その通り、現在も野放しになっている状態です」

王子の言葉を遮るように、平家が口を開く。いつものように腕を組んだ状態ではあるが、その表情からはどこか怒りに似た感情が感じられた。

「情けない話ですが……『狂クレイジーった透明人間』は証拠もほとんど残さずに現場を去ります。……唯一手掛かりとしてあるのは、現場に残る彼の体液のみ。しかし、そこから採取したDNAをいくら検査しようとも一致する人間はどのデータベースにもいない。まさに透明人間……『エデン』も手を焼いている、というのが現状です」

「そんな……」

「ですが、奇妙なことにここ数年は彼が起こしたと思われる殺人は起こっていません。国外に逃げたかとも考えましたが、どの国でもそれらしい事件はありませんでした。何か理由があつて姿を隠しているのかもしれませんが」

「エージェントが捜してはいますが」と付け加える平家の中にあつたのは……まさに屈辱。決して「悪」を許さない彼にしてみれば、『狂クレイジーった透明人間』という狂いに狂った殺人者が野放しになっているのが許せないのだろう。いくら事件が起こっていないとしても、何人もの人間を弄んできた人間が平然と生きているのだから。その証拠に、腕を組む彼の手にはかなりの力が込められており、手が触れている部分の制服にシワができていた。

「……それでも、かつて起こった事件の情報はもらえています。それだけでも助かっていますよ」

「……ありがとうございます、優君」

「ピッ」

「ええ、わかっています。焦ってもしょうがないですからね……」

「ピッ」

『……………ん?』

もはや狙っているとしたか思えない三度目のこの光景……この後、驚いた刻が絶叫したことは言うまでもない。

「なんでアンタらはこう、気付いたら話に混ぜてんだヨ!!」  
「ピッ」

「気付かなかったただけだろう、だって」

「気付くように来いってノ！」

会長と乙女同様、気付いた時には話に混ざっていた匠。涙目ながらに抗議する刻を適当にあしらうと、匠は改めて優の方へと向き直った。昔からの知り合いとはいえ、仮にも先ほど殴った者と殴られた者。一瞬にして、ピリツとした緊張感が周囲に漂った。

「……頭は、冷えたか？」

「はい。……申し訳ありませんでした」

「何を謝る？」

「……自分が未熟だったばかりに、『斬空刀』を折ってしまったからです」

「当然だ。」

あの『斬空刀』は……未完成品だ」

『——ッ!?!』

匠の言葉に、優たちは言葉を失う。これまで優が必殺の武器として扱ってきた『斬空刀』が未完成品……誰も予想だにできなかった衝撃の事実には、彼らは息を呑むしかなかった。

「だが、もう完成させてもいい頃合いだ。……これからの闘いのためにもな」

「え……?」

最後に、呟くように言った匠の言葉に桜は首を傾げる。だが、意味深なその言葉の真意を確かめるよりも先に、匠は一同に背を向ける。

『『斬空刀』を真の『斬空刀』として完成させる。そして、そのためにはお前たち全員に協力してもらおう……』『コード：ブレイカー』』

顔だけ振り向かせた匠の鋭い眼が『コード：ブレイカー』一人ひとりの眼を射るように見える。その眼は、過去や事実を知るだけでは終わらない……彼らも動くべき時が来たことを大神たちに告げていた。



# code : 77 『魔』の石

乙女と匠……優の過去を知る二人の存在。

優の家族に起きた悲劇と、彼と『クレイジー・ステルスマン狂った透明人間』の間の因縁。

そして、優の刀である『斬空刀』が未完成だったという事実。

たった一日を思い返してみても、多くの優に関する事実が明らかになった。今まで優自身が話そうとしなかったこともあれば彼自身も知らなかったこともあり、優を含めた全員が衝撃を受けた。

そして、そんな激動の一日を乗り越えていった彼らは今……

「あー……気持ちえくわく」

「疲れが吹き飛ぶようですね」

「イヤ……しつかし信じらんねえよナ。まさか家に温泉があるとは思わなかつたワ」

そう……彼らは今、温泉へと入っていた。

といつても、別の言い方をすれば乙女宅の浴室なのだが。

「ただのポロ屋だと思つてたけど、中々いいモンだな」

「ウチの風呂より狭いけど、めっちゃ気持ちええわ」

「天本院グループ社長の自宅と比べたら狭いに決まつてるでしょう……」

遊騎は狭いと言っているが、一般的な家庭の浴槽と比べたらかなり大きめだった。その証拠に、彼ら三人が一緒に入つてもまだ少し余裕がある。さらに、浴室や浴槽も木で作られているため木の香ばしい匂いが彼らをさらにリラックスさせていた。

まるでちよつとした旅館のような入浴を楽しんでいると、脱衣所とを隔てる扉がガラリと開き、新たにもう一人が入ってきた。

「邪魔するぞ」

「お先にいただきます」

「遅いでー、ななぼん優」

「アレ、平家は一緒じゃねーのかヨ」

「平家さんは後で入るそうだ」

「あつそ……つーかさ、あの服脱いだらピカピカ光っちゃうのにならうやつて風呂に入るんだろーナ」

「知りませんよ……。本人に聞いてください」

「服のまま入ればええやん」

「服はさすがに脱ぐダロ……」

新たに入ってきた優は風呂桶を手にして、そのまませつせと身体を洗い始めた。それに対し、刻は平家がどうやって入浴するかについて気になり始め、一人で悶々と考え始めた。

そんな刻をスルーする大神は、気付けばこちらに背を向けて身体を洗う優の背中を目で追っていた。そこには、先ほど滝で見たのと同じ……無数の傷痕が刻まれていた。彼が家族の仇をとるために必死の思いで鍛え上げたその証拠とも言える……彼の努力の証である。

「……こんな身体だから、オレは人前で肌を見せることはまず無かった」

「……すみません」

「別にいいさ。滝でも見られたんだから、もうお前たちに隠す必要はない」

大神の視線に気付いたのか、優は手を止めてポツリと呟いた。素直に謝罪する大神だったが、優はまったく気にしていないような声色で返した。

「元から隠す必要なんかねーつつの。傷痕なんてどーにも思わねーし」

そうして再び手を動かしした優だったが、急に刻が話に加わってきた。どうやら考え事はひとまず終わつたらしい。

「ま、そんなボロボロになるまでテメーを鍛えた奴には興味あるけどナ。……予想はつくけどヨ」

「……オレの師匠は、匠さんだ」

優の返答に刻は「やっぱりナ」と、百も承知と言いたげな表情で呟いた。すると、彼は浴槽の端まで移動してそのまま背中を預けた。

そして、スツと細めた眼を優へと向けた。

「アイツ、いったい何者なんだヨ」

「……どういう意味だ？」

「言葉のまんまの意味だろーガ。人間離れた身体のお前を簡単にぶっ飛ばせるわ、  
“エデン”とも関係を持っているわ……………正直、信じろつて言われても素直に信じらんねー印象だ」

「……………」

刻の鋭い視線に込められていたのは……疑惑。だが、冷静に考えて見れば無理はない。かつて関わりがあった優以外の人間にしてみれば、突然現れた第三者に他ならない。そんな人間が一般的には知られていない情報を知っていたり、『コード：ブレイカー』である優を上回る実力を持っているのを急に見せられれば、頼もしさより怪しさを強く感じるのが普通である。

「……大神と遊騎も同意見か？」

「……まあ、すぐに信頼はできませんね」

「『エデン』とつるんでたって話やしな」

急に話に巻き込まれた大神と遊騎だったが、彼らの口から刻と同意見である言葉が出てくるのにそこまでの時間はかからなかった。特に遊騎にしてみれば、日頃から「嫌い」と言っている『エデン』と繋がりがあったというだけで良い印象は持てないのだろう。

「……………」

自分以外の誰一人として匠のことを信用しようとしないうちに、優は静かに息を吐き出した。

そこでちょうど自身の身体を洗い流すと、彼はそのまま立ち上がった。そして、その身体を大神たちの方へと向き直した。

「なら、しようがない。そこはお前たちの好きにすればいいさ」

「……エ？」

淡泊としか思えない言葉を言ったかと思うと、優はそのまま湯船に入る。四人目が入ったことで少しだけ狭く感じるようになった湯船の中で、刻はポカンとしたまま間抜けな声を出していた。

「……そんだけ？」

「悪いか？」

「イヤ……普通この流れだったら『お前らは知らないだろうが』とか『あの人の何がわかる』とか言ってる昔のエピソードとか語るところじゃねーノ？」

「話すようなエピソードはない」

まさに拍子抜けといったような様子で予想していた反応を語る刻だったが、それでも優は何も変わらない。話しながらタオルを畳んで頭に乗せて、温泉気分を味わっている。いや、実際に温泉なのだが。

「……お前、もしかしてアイツのこと嫌いなワケ？」

「バカ言うな、あの人には感謝しかしていない。ただ、オレが匠さんをどう思っているとお前たちには関係ないだろ。それとも、オレがそれっぽいエピソードを話せばすぐに信用するのか？」

「そりゃ……すぐに、は無理だろーけどヨ」

刻の言葉に「だろ」とだけ返すと、近くにあつた風呂桶をバスケットボールのように指先で器用に回してみせた。明らかに遊んでいるその態度を見れば、彼が本心のままを言葉にしているということは夜原優という人間の性格を知る者ならばすぐにわかった。まあ、意外とは感じるだろうが。

するとそれを察してか、優は風呂桶を回しながら呟いた。

「結局、人と人の信頼関係なんて時間の問題だからな。オレにはあの人を信頼できるだけの時間はあつたが、お前たちにはまだそれだけの時間がなかった……それだけだ。あの人が信頼できるかどうかは、これからお前たち自身が決めればいい」

決して大神たちに匠の人間性を説いたりせず、個人の問題として話す優。一見すると

冷たくも見えてしまうが、別の味方をすれば優の匠に対する信頼の高さを表しているようにも見える。匠という人物の人間性を信じているからこそ、それをどう思うかは個人の自由……そういうことなのかもしれない。

「……………まあ」

ふと、優の態度が変わった。回していた風呂桶を軽く上に飛ばしてからキャッチしたかと思うと、どこか遠い目をしながら……彼は嘔み締めるように呟いた。

「家族を亡くして絶望しきつていたオレを、あの人はずっと面倒を見てくれた……それだけは、わかっけてもらいたいかな」

「……………」

その言葉を聞いただけで、彼の中にある匠に対する言い表せないほどの感謝の気持ちが伝わってくるようだった。そして、優にとつて匠は師匠であると同時に、親代わりでもあるということもわかった。そんな彼ならば、ここまでの信頼を置いているのも納得できる。

「……………ま、あなたの言う通りですね。あの人が信頼できる人間かどうかはこれから判断すればいい。あなたの話を含めて、ね」

「せやなー」

「つつつても、そんな会うことはないだろうけどナ。こんな山奥まで何度も来たくねー



シ

今のやり取りで、彼らの中で匠に対する疑惑が消えたかはわからない。それでも、少しは彼に対する評価や見方が変わるかもしれない。まあ、それは彼ら個人の問題なのが。

「……ああ、そうそう」

すると、そこで優が思い出したように口を開いた。何事かと思つた大神たちが視線を向けると、優は持つていた風呂桶についた水分をタオルで拭きながら話し始めた。

「さっき信頼関係は時間の問題なんて言ったが……例外があることを忘れていた」

「……例外？」

「ああ」

と、その瞬間だった。

——ガラツ！

「優くん！ 一緒には——」

——ゴッ!!

「」

タオルを巻いた状態が入ってきた乙女の顔面に、優が投げた風呂桶が直撃する。彼女は呻き声一つ上げることなく、そのままパタンと倒れた。

「コイツだけは何年経とうが信頼できそうにない。人が風呂に入るといつもこうだからな」

「…………た、大変ですね」

その後、倒れた乙女は匠が回収していったため、彼らは問題なく風呂から上がった。ちなみに、この回収すらもいつものこととのこと。

「おはようございます、  
匠さん」

「ピッ」

—

—

—

—

—

「おはよう優君！ 昨日は、激しかったね……♪」

「お前が夜中に忍び込もうとしたからな。激しく叱つて柱に縛りつけたな」

翌日、朝食を終えた彼らは匠の仕事場に集まつていた。朝の挨拶を済ませる中、何やら気になるやり取りもあつたが他の者たちも少しは慣れたのだろう。誰一人としてツツコむことはなかつた。

「……それで、集まつたのはいいんですけど何をされるんですか？ そもそも、なぜ優の刀を完成させるのにオレたちが必要なんですか？」

「ピッ、ピピピピピッ」

「……………」

「ピピッ、ピピーピピ」

「いや……わかんねーつての」

やり取りが終わつたところで、こうして大神たちまで呼ばれたことへの説明を求め大神。思えば、彼らがこうして『天下一品』までやつてきたのは平家の思惑があつてこそだ。ずっと追及せずにはいたが、彼はここに到着した時、乙女に対して確かにこう言つた。父親……匠に頼まれて大神たちを連れてきた、と。

それに対する説明を本人である匠に求めたのだが……彼は吹き戻しを啜えたまま話しているため、大神たちには何のことだかわからない。刻が呆れ顔でツツコんでいる

と、乙女が匠の隣に立って通訳を始めたのだった。

「理由は簡単、君たちがいないと真の『斬空刀』は完成しないから。正確に言うなら……君たちの異能が必要。……だって」

「……異能が？」

「ピッ」

コクリと頷く匠に対し、刻は「ハッ」と呆れたように鼻を鳴らす。そして、わざとらしく頭をかきながら口を開いた。

「それってつまり、『この刀に全員の異能を込めろー』ってコトかよ。アッホらし。ファンタジーとかゲームの世界じゃねーんだぜ？ そんなんで刀ができるわけ——」

「もちろん、そんなことはやらないよ。ていうか、やったところで刀が壊れるだけだしね」

間髪入れずに刻の言葉を肯定する乙女。ならばどうするのか……誰かがその疑問を口にするよりも先に匠は乙女へ吹き戻し越しの言葉を伝える。

そして、彼女はなんの戸惑いもなく、彼らにその方法を伝える。

「とりあえず今から………洞窟探検ね！」

『………』

「あ、私は留守番してるから頑張ってきてね」

『……は？』

「いかにも、同じセリフなのに怒りと威圧感を感じるんだな」

---

---

---

---

---

「というわけで……ここが我が『天下一品』専用の採掘場！ その名も——！」

「ちよつと待てエ！」

「えー!? 何か言ったー!?」

「だーかーらー!!」

その後、特に詳しい説明もなく乙女に外へと連れ出された一同は、『天下一品』専用の採掘場とやらに来ていた。しかし、そこは採掘場と言われてもすぐには信じられない場所だった。だからこそ、また刻が叫んでいるのだ。

なぜならそこは……

——ドドドドドドドドドド!!

「ここつてどう見ても採掘場じゃなくて滝だろーガ!!」

「採掘場だよー! 滝でもあるつてだけー!」

そう、彼らが今いるのはまさに昨日、匠に殴られた優が打たれ続けていたあの滝だった。急に洞窟探検と言われたかと思えば滝に連れていかれ、拳句にそこが採掘場だと言われた刻たちはもはや乙女と匠が何をしたいのかすっかりわからなくなっていた。

「オイ、優! ちゃんと説明しろヨ! ここが採掘場つてどーゆーことだヨ!」

「……オレだつて知らない。そもそも、採掘場があるつて話自体が初耳なんだ」

——ドドドドドド!!

「アー!? 聞こえねーヨ!!」

「知らねえつて言っている!!」

もはや大声を出さないと何も聞こえないほど滝に近づいている一同だったが、どこからどう見ても滝である。採掘場や洞窟があるとは思えないし、ここに土地勘がある優ですら知らないというのだ。彼らにしてみればすっかりお手上げ状態だった。



「ハイハイ、イライラしない！ 答えはすぐにわかるよー！ つてことで泣ちゃん！  
お願いー！」

「ちや、ちゃん!？」

『影』であの滝、止めて！

「ハ、ハア!?! いきなり何を——!」

「いーいーかーらー!」

唐突過ぎる乙女からの「お願い」に、突然のちゃん付けに照れる暇もなくなった王子。何をしたいのか問い詰めようとするが、乙女はまるで聞く耳を持たずとしない。

こうなつては仕方がない。会つてまだ間もないが、こうなつた乙女はテコでも動かないというのは王子もなんとなく感じ取つていた。

「——つたく、しょうがねえな!」

——ギユオ!

まさにヤケクソとばかりに、王子は滝に向かつて手を伸ばす。それと同時に、彼女の『影』は形を変えてその方向へと飛び出していった。

そして、次の瞬間——

——パァン!

半円を描くように広がった『影』は、その内部へと滝の水が浸入することを見事に防いだ。そうして滝の一部分が露わになったことで……彼らはようやくそれを発見することができた。

「あ、あれは——!?!」

ちようど滝によつて隠れていた岩壁……そこにある、歪な形ながら確かに開いている空間。それはまさに、『洞窟』と呼ぶにふさわしいものだった。

「『天下一品』専用の採掘場……『魔場』まじょうによろこそ」

「フラッシュ・ザ・ワールド!!」

——ピカア!!

「おう、さすが平家」

「いえいえ、それほどでも。これで先に進めそうですね」

王子の『影』を使って滝を止めるという意外な方法で採掘場……『魔場』へと入ることができた一同。しかし、そんな彼らを襲ったのは圧倒的な暗闇。ライトや火で照らすうとしても、その深すぎる暗闇のせいではほとんど灯りとしての役割を果たせなくなるほどだった。

だが、『光』の異能を操る平家にしてみれば些細な問題。特製の制服をただけさせたことで漏れ出た彼の『光』は、『魔場』を支配していた暗闇を一気に振り払った。

「初めてコイツがいてよかつたって思ったぜ……」

「初めて……? 刻君……その言葉は聞き捨てなりませんねえ?」

「じよ、冗談だつてノ!」

「……………」

相変わらず緊張感を感じない刻と平家のやり取りを聞き流しながら、大神は『光』に照らされた一帯をぐるりと見渡す。見た感じは特に何の変哲もない、「洞窟らしい洞窟」という印象だった。壁と天井の役割を果たすごつごつとした岩壁に、独特のひんやりとした空気。もう少し奥に進めばコウモリが大量に出てきてもおかしくはない。

「………… 『魔場』なんて名前の割には、案外普通な洞窟ですね」

「そりゃあね。ここが『魔場』って呼ばれているのは、見た目とか危険度とはまったく別の話だから」

「油断したら死ぬけどね」と平然と歩きながら付け足す乙女。そのことには誰もツッコもうとはせず、黙って彼女の後へと続いた。『光』でなければ照らせないほどの暗闇………… 常人なら、少しでも奥に進めば二度と帰ってこれないだろう。

「(ここ)が『魔場』なんて呼ばれているのは、ここで採れる石たちが原因。この辺はまだ入り口だから外と変わらない石が採れる。でも奥に進めば進むほど、この世のものとは思えない………… それこそ、魔法とか魔界のものなんじゃないかって思えてしまうような石が存在している。そんな石たちが採れる、世界規模で見ても唯一の場所………… それがこの『魔場』」

「(この世のものとは思えない石…………?)」

急にオカルトチックな話になり、桜は思わず首を傾げる。たしかに、急に「この世のものとは思えない」と言われたところで何も思い浮かびはしないだろう。

それは乙女もわかりきっているようで、「そ」と相槌を打つと歩きながら話し始めた。「砕くと一瞬だけ七色に光る石とか毎晩三時になると叫び声みたいな音を出す石、持つてるだけで幸運になれる石もある。あと水切りをすると二十回以上跳ねる石とか」

「なんか段々しよぼくなつてつてねーか……？」

「水切りの石、欲しいわー」

にわかには信じがたい効果(?)を持つ石たちに関する話に、刻は明らかな疑いを持つた目で乙女のことを見ていた。まあ彼に限らず、遊騎を除いた全員がそうなのだが。

「……で、今回私たちが採ってくる石はその中でも希少中の希少。」

『青い炎』でも絶対に燃え散らない石」

「な——!?!」

その言葉を聞いた瞬間、乙女以外の全員があまりの衝撃にその足を止めた。これまで幾度となくあらゆるものを燃え散らしてきた大神の『青い炎』……かつて『コード：エンペラー』が操り、一度つけば他の異能でも消し去ることができないというその『青い炎』でも燃え散らない石の存在を知らされたのだ。驚くのも無理はない。

しかし、一人だけはまったく違う感情を抱いていたのだが。

「テメエ、テキトー言ってるんじゃないぞ!?」この『コード：エンペラー』様の『青い炎』で燃え散らせないものがあるわけねーだろうが!!」

「オ、オイ! 今まで大人しくしてたくせに急にでてくんじゃねえ!」

「うっせー! テメーは黙ってる!」

『青い炎』に燃え散らせないものがあると言われ、怒り心頭といった様子で出てきた『コード：エンペラー』。『天下一品』に到着してからずっと出てこようとはしなかった彼だったが、さすがにプライドが傷つけられたのだろう。

「……………」

「お、乙女さん…………! その、これは違うんですよ…………! 今のは手品というか——

!

「ああ、大丈夫。『コード：エンペラー』さんでしょ？ お父さんから聞いてるよ」

「ッ……!？」

突然現れた『エンペラー』をジッと見つめる乙女に気付き、大神はとつさに『エンペラー』を隠してなんとか誤魔化そうとする。だが、彼女は特に驚きもせず、それが『コード：エンペラー』であることを見抜いていた。異能の存在を知っているのはまだしも、『コード：エンペラー』の存在まで知っているという事実……乙女と匠（匠）が持っている情報量に、大神は思わず息を呑んだ。

「ねえ、『エンペラー』さん。今のあなたはまだ目覚めたばかりだから覚えてないかもしれないけど、かつてのあなたでも燃え散らせないものが確かにあるんだよ」

「だーかーらー！ テキトー言うんじゃないわねー！ この『エンペラー』様に燃え散らせないものなんてあるわけが——！」

「——指輪」

「あ!？」

「大神君が左手親指にしていた指輪……今から採りに行くのは、それに使われた石なんだよ」

「お、大神のあの指輪に——!？」

続けて語られた乙女の言葉に、桜たちは再び衝撃を受ける。『エンペラー』の目覚めと共に砕け散った大神の指輪……あれに使われた石こそが、今から彼女たちが採りに行く石なのだという。

だが、その事実と今までの乙女の言葉を合わせて考えてみると……今まで明かされていなかった一つの真実が浮かび上がってくる。

「お、おい……。ちよつと待て……。たしか、ここで採れる石って他では採れないんだろ……?。」

「ついでに言うと、その石に手を加えたりできるのはウチのお父さんだけ。他の職人さんたちはそんな石の存在すら知らないだろうね」



すると、その真実がいち早く気付いた王子が目を見開きながら乙女に尋ねる。そうして返ってきた乙女の返答を聞いて、彼女の眼には確信の色が宿った。

「じゃ、じゃあやつぱり……」

「王子殿？ いったいどうし——」

そして、彼女は確信へと変わった真実を口にした。

「材料の石はここでもしか採れない、そして加工できるのも一人だけ……。だったら、浮かび上がってくるのは一つだ……。」

零のあの指輪は『天下一品』で作られた……ってことだ」

## code : 78 誰が為にその力を振るう

「お、大神の指輪が『天下一品』で作られた——!？」

「……………」

『天下一品』専用の採掘場……『魔場』にて真の『斬空刀』を完成させるために必要な石を採りにきた一行。しかし、その石が大神が操る『青い炎』でも燃え散らせることができない代物だということが判明し、その石を加工できるのは『天下一品』当主の匠だけということから、かつて大神の本当の力を抑えていたあの指輪が『天下一品』で作られた物という可能性が浮かんできたのだ。

間接的なものとはいえ、優以外の『コード・ブレイカー』……大神にも『天下一品』との関係があることがわかり、驚きで大きく目を見開く桜。当の大神は彼女のように大きな反応を示してはいないが、それでも動揺しているのだろう。彼の表情からは強い緊張感が感じられた。

「……………イ、イヤイヤ！ さすがにそれはネーンじゃねーノ!? 大体、あのオッサン匠はもう『エデン』にはほとんど協力してねーって話じゃねーカ！ 昔っから関係があつた優ならまだしも、なんで大神の指輪なんて作る必要があつたんだヨ！」

「……それはオレにもわからない。だが、乙女の話を書く限りはその可能性が高い……それだけだ」

しかし、そんな意外な可能性を刻は真つ向から否定する。かつて『天下一品』は『エデン』に武器を提供する協力関係にあったという話は彼らも聞いていたが、今の『天下一品』は『エデン』と縁を切っている状態ということも聞いていた。だから刻の言う通り、匠が大神のためにあの指輪をつくったとはとても考えられない。

その矛盾はこの可能性にいち早く気付いた王子自身も感じていたらしく、刻の言葉に強く反論することも無く彼女は目を閉じながら呟いた。

「……大神」

「……なんですか？ 桜小路さん」

大神の指輪についての疑念が膨らむ中、桜はポツリと大神の名を呼んだ。突然のこと驚いた大神だったが、それを表に出そうとはせず、あくまで平然を装ってそれに応えた。

そして、桜は真剣な目を大神へと向けた。

「そもそも……あの指輪はいつたい何なの？ 人見先輩の時から気になっていたが……できれば、何も隠さずに教えてほしい。お前は、あの指輪をどうやって手に入れたのだ？」

「……………」

指輪と『天下一品』の関係から一度離れ、大神が指輪を手に入れたルーツについて尋ねた桜。それは、仲間のために「悪」へと堕ちた人見との闘いの時に初めて指輪を外した時から彼女の中に渦巻いていた一つの疑問。聞く機会もなく、また聞いたところで答えないのでと感じていたため聞かずにいたが、こうして指輪が話の中心に上がったのだ。謎を解くためにも、まずはそのルーツを知ろうと思つたのだろう。

「なるほどな……。たしかに、零が指輪を手に入れた経緯がわかれば『天下一品』との関係も見えてくるかもな」

「オイ、大神。あの指輪はどこで手に入れたんだヨ。まさか道に落ちてたから拾つたつてワケじゃねーダロ？」

桜の質問をきっかけに、一同は大神へと注目する。彼が指輪を手に入れた経緯からヒントを得ていこうとしたのだ。

「……………」

他の者たちの視線が集中する中、大神はしばし沈黙する。

だが、彼の中で覚悟が決まったのか、小さく息を吐く。そして……彼はその口を開いた。

「あの指輪は……『捜シ者』から渡された物です。手袋とは別に、ある日唐突に……ね」

『——ッ!?!』

『捜シ者』……その名を聞いた瞬間、乙女を除いた全員が大きく目を見開いた。その様子を見れば、誰もそこで『捜シ者』が関係してくるなどとは思っていなかったということがわかる。

しかし、一人だけ……驚きで目を見開きながらも、すぐに冷静さを取り戻した者がいた。

「……なるほど。そういうことでしたか……」

「平家先輩……?」

目を見開いたかと思うと、ほんの少しだけ考えこんだ平家。そうして彼が発した言葉

と表情には……明らかな“納得”の色が見えていた。

「オイ！ なに一人で納得してんだヨ！ なんかわかったのか!」

「……『捜シ者』はかつて、“エデン”において『コード：シーカー』と呼ばれていました。『コード：ナンバー』のみ与えられる我々『コード：ブレイカー』とは違い、彼は『シーカー』という『コード：ネーム』を与えられていた特別な存在。……しかし、彼はその高すぎる能力を脅威とした“エデン”に裏切られ、“悪”へと堕ちてしまった……」

「な………」

それは、かつての『捜シ者』との闘いの中で会長と虹次が話していた『捜シ者』の過去。『コード：ブレイカー』とは別の異能者として“エデン”に名を連ねていたという、大神たちはまだ知らなかった真実。

『捜シ者』が“エデン”に所属していたこと、『コード：ブレイカー』以外に異能者の存在がいたこと、『捜シ者』が悪に堕ちた理由は“エデン”にあつたこと……それらの事実衝撃を受けながらも、彼らは論点を元に戻していく。

「つ、つまり……“エデン”に所属していた『捜シ者』なら『天下一品』のことを知っててもおかしくねーってことか……?」

「せやけど、なんでわざわざ大神ろくほんの指輪なんか作らせたんや?」

「……それはわかりませんが、大神君と過ごしていた時の彼はロスト中。大神君が自身に敵対してきた時のために保険として作らせたと考えるのが妥当——」

「違エよ」

「……王子殿？」

「あの人は……そんなことをしたりしない。真実なんてわからないが、それだけは断言できる。あの人は零をそんな風に見ちやいなかった」

真剣な目つき、そして何があっても揺るぎそうにない凛とした姿勢で平家の前に王子が立ち塞がった。これまで平家から何と言われようと強く反抗してこなかった王子だったが、今回ばかりは違う。真正面から平家に立ち向かっていつている。

おそらく、彼女の中には確信があるのだろう。かつて『捜シ者』を誰よりも近くで護ってきた……彼女ならではの確信が。

「……あくまで可能性の一つというだけです。いえ、そんなことよりも……『悪』に堕ちた者を庇うとはやはり元『悪』ですね、八王子泪」

「オレのことを何と言おうと構わない。だが、あの人が零のことをどんな風に思っていたか……それだけは譲れない」

「では教えてほしいものですね。その『思い』とやらを」

「……………」

両者ともに一歩も引かず、正面から睨み合う二人。平家の中の『悪』に対する思い、そして王子の『捜シ者』に対する思い……二人の中にある純粋な思いがぶつかり合っていた。

それぞれが譲れない思いで対峙することで、その緊張感は周囲一帯へも広がる。張りつめた緊張感で、誰一人として彼らの間に入ろうとする者も――

「どうでもいいな」

「……大神？」

張りつめた空気を引き裂くように響き渡る大神の声。今まで平家と王子に向けられていた視線は一転、大神へと向けられた。彼は他の者たちに背を向け、進行方向に向け



て先頭に立った。

『捜シ者』がオレのことをどう思っていたとか、なんのために指輪を渡したとか……そんなこと、今となってはどうでもいい。『捜シ者』はオレが殺したし、指輪だつてもう壊れた。だが、今のオレたちにはそれ以外にやることがあるだろ」

「大神……」

そのまま話を終わらせようとするかのように、言い切るような口調で大神は言葉を並べていく。だが、おそらく大神の真意は違うのだろう。

両親を失った自分を育て、生き抜く術を教えてくれた恩人。何があつても自分が斃すと決め、それでもそれが叶った時は溢れるように涙が流れた。それだけ大神の中で『捜シ者』という存在は大きい。損な存在が自分に何を思っていたのか……気にならないはずがない。

他の誰でもない。『捜シ者』の真意を誰よりも知りたいのは……大神のはずだった。それを感じ取つても何も言えず、俯いた桜はそんな彼の名を呟くことしかできなかった。

「……まあ、そもそも頭を悩ませることでもない」

「え……？」

ふと、大神の口調が和らいだ。何事かと顔を上げた桜が見たのは……

「『捜シ者』の考えなんて、オレが地獄に逝った時に直接本人から聞いてやれば済む話だ。どうせお前らも逝くところは一緒なんだから、その時に教えてやるよ」

振り返り、フツと嘲笑するかのような笑みを浮かべる大神。正直、なんの解決にもなっていない方法を語っているわけだが……もしかしたら、そこは問題ではないのかもしれない。

なぜなら……

「……お前がそう言うんなら仕方ねえ。せつかくだから、死んだ後の楽しみにしといてやるよ」

「何も解決していませんが……まあ、いいでしょう」

「つて、ちよつと待つのだ、大神！ 私は地獄になんていかないぞ！ ……多分」

「アゝア。だとしたらオレに情報が来るのは一番最後カ。こん中で一番長生きするとしたら絶対にオレだもんナ」

「ほんなら、刻よんぱんが一番しわくちやになってからくるんやなあ」

「嫌な言い方すんナ！」

言つてしまえば、まるで馬鹿みたいな話。死んだ後に故人の遺志を知れるなど、何の根拠もない。しかし、そんな何の根拠も確証もない言葉を言ったからこそ大神の「どうでもいい」という言葉は他の者たちへも伝染し、張りつめていた緊張感を知らぬ間に解

いていった。

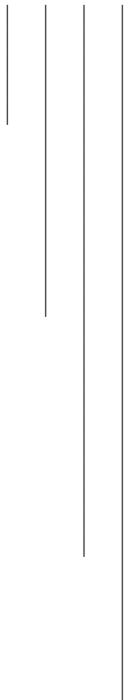
なんだか一気に空気が軽くなったような感覚に浸りながら、和気あいあいと談笑を始めた一同。そんな彼らを一步離れて眺めていた優と乙女。隣に立つ彼らにしか聞こえないような声で、ポツリと呟いた。

「良い人たちだね、優君」

「ああ。……だからオレも気に入っている」

「それ、皆に言ってきたら？」

「……それだけは遠慮する」



「なあ、この際なんで『捜シ者』がああ指輪を作ったかは後回しでいいが、その……『青い炎』でも燃え散らない石ってのはそれ自体に封印みたいな力があつたのか？」

その後、再び目的へと向けて歩き出した一同だったが、その道中に王子が乙女に目的の石について尋ねた。大神の例の指輪……それが『青い炎』でも燃え散らない特殊な石で作られたというのはわかった。これで大神がいくら『青い炎』を使つても指輪が無事だったことは説明できるが……封印の役割についてはまだ不確かなところがある。燃え散らないどころか『青い炎』……異能を抑え込む力が果たしてその石にあつたのか。王子が知りたいのはそこだった。

そして、それに対する乙女の返答はというと……

「あゝ、無い無い。その石の力はあくまで『青い炎』でも燃え散らないってだけ。封印の役割をしてたのはまた別の石だよ」

「別の石？」

「そう。えくつと……」

例の石は燃え散らないだけ、と言う乙女。そこでまた、指輪に使われた別の石の存在が判明した。すると、乙女は何かを思い出すように眉をしかめてから……

——ムニユ

「……は」

何の躊躇もなく、自分の胸の谷間へと手を突っ込んだ。

「んぐ……あ、あった。ハイ、これだよ」

「ど……ど……どごにしまったんだ、ゴラアアア!!」

「え？ どこつて……むん」

「言うなアアアア!!」

念のために言っておくが、今の乙女は昨日と同じ……着崩して胸元が大きく開いた着物を着ている。そのため彼女が自身の胸の谷間に手をつ突っ込んでいるところも、石を捜そうと手を動かしたことで形を柔軟に変えていく胸すらも周囲にバツチリ見えてしまっているのだ。

つまりどうなってしまうかというところ……

「……ゴ、ゴホン」

「ナ………！ ナ………！」

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏………！」

(夜原先輩、気絶しまいとお経を唱えておられる……)

年頃の男性陣にとっては刺激が強すぎる光景だったというわけだ。まあ、一方で……

『『ふわ丸』、ムニユムニユやー』

「ふふ、相変わらず常識に囚われない」

まったく気にしていない男性陣もいるわけだが。

——ガガガガッ!!

「テメーら!! そのだらしねーツラをなんとかしやがれ!!」

「り、理不尽だ……」

「南無、阿弥……」

「痛いわー」

「な、なんでオレまで……」

それでも平家を除いた男全員、王子による制裁（頭突き）を受けたのだった。

「……ゴホン。この際、さつきのはひとまず忘れるとして……だ。乙女、その石はなんだ？」

「んー？ これも『魔場』でしか採れない特殊な石の一つだよ。まー、かなりのレア物だけどね」

「レア物……ですか？」

制裁を終えた王子は咳払いをして気を取り直すと、改めて乙女の方へと向き直った。その手に先ほど取り出した石……まるで丹念に磨かれた墓石のように独特の艶を放つ灰白色の石を握った乙女は、王子の質問に答えながらその石をジツと見つめている。

そうして、その石を「レア物」と称することに大神が反応を示すと、乙女は「そ」と言ってから……何気ない顔で続けた。

「これは『珍鉱石』……異能の力を抑え込む石。……珍種みたいに、ね」

「な……!?!」

「異能を抑え込むって……マジかヨ!?!」

「……本当だろうな。大神のあの指輪が何よりの証拠だ」

『珍鉱石』という特殊な石の力が明かされ、一同は息を呑む。異能を無力化する珍種が希少な存在だというのに、それと同様の力を持つ石があるなどにわかには信じられないのだ。

しかし、現に大神が指輪を外すことで飛躍的に『青い炎』の力が上昇したのを彼らは目の当たりにしている。そして、その指輪が壊れたことで今まで表に出てこなかった『コード：エンペラー』が復活したところも。

本当にその『珍鉱石』にそういった力があるかどうかはともかく、そういった力があ



る石があるのは揺るぎない真実なのだ。

「私はお父さんと比べて鍛冶関係はからつきしだから詳しくは知らないけど……あの指輪は『青い炎』でも燃え散らない石をベースにして、粒子状になるまで砕いた『珍鉱石』と一緒に作ったって話。なんで作ったかは知らないけどね……つと」

手にした『珍鉱石』を眺めながら指輪に関する情報を話す乙女。しかし、突然何かに気付いたようにその足を止めた。先頭にいた彼女が足を止めたため、他の者たちも反射的に足を止める。

そして、ふと前を見た時に目の前の光景が今までとは違うことに気付く。

「な、なんだコリヤ……」

「分かれ道……ですね」

今までの洞窟らしい一本道とは違い、少し広めの空間に到着した一同。彼らがいる方とは反対側の壁の方には奥へと続くであろう穴があったが……その数は五つ。典型的な分かれ道であった。

「コリヤ素人だけで行ったら戻ってこれねえパターンだな……。乙女、どの道に行けばいいんだ？」

「わかんない」

「そうか、わかんないか。なら仕方——は？」

五つの分かれ道を目の当たりにし、『魔場』が想像以上に複雑な空間であることを改めて感じた王子が案内人である乙女に正解の道を探ねる。

だが、正解を知っているであろう彼女の口から出たのは……「わからない」という予想だにしないものだった。

「お、おい！　まま、まさかここまで来て迷ったってわけじゃ——！」

「あー、違う違う。そーゆーことじゃないの」

乙女の返答を聞いて一気に不安感が増した王子に対し、乙女は平常心のままテクテクと歩きだした。

「実を言うとね、私もお父さんもこの『魔場』の全体図を把握しているわけじゃないの。

どこを行っても、どこまでも空間が広がっている。……『魔場』にはね、行き止まりが無いの。どれだけ奥に行っても……ね」

「行き止まりが……無い……？」

「どこまでも続く闇の空間……どんな人間でも呑み込む魔の空間なんだよ、『魔場』は」

『……………』

乙女のその言葉に、彼女以外の人間のほとんどが思わず息を呑んだ。『魔場』に入った際に、『魔場』と呼ばれる由縁は普通では考えられない鉱石と話していたが、今の話を聞く限りでは真の由縁は違うのだと感じてしまう。行き止まりもなく、どこまでも人を呑み込んでいく魔の空間……それこそ、ここが『魔場』などと呼ばれる由縁なのだ。

「二応、この先に行けば目的の石は採れるポイントなんだけど、なにせ希少なレア物だからね。一つのポイントで採れるのも、一回の鍛冶ですぐ使いきっちゃうくらい。しかもそのポイントも目に見える特徴とかもないから、普通に見つけるのはほぼ無理。大神君の指輪を作った時も、お父さんが十日くらい『魔場』に引きこもってようやく見つけたくらいだもん」

さらに、乙女の話した石に関する話で一同はさらに絶望する。この『魔場』のことを最も知っているであろう匠でさえ、十日も籠らなければ見つけれないほど希少な石。人手があるとはいえ、ほぼ全員が採掘と洞窟探検には素人レベル。見つけるのは、それ

こそ奇跡でも起きない限り不可能である。

「オ、オイオイ！　まさかオレたちもこんな洞窟に籠つて掘らなきゃいけないのかヨ！　オレはゼツテー嫌だゾ！　なんで優のためにそこまでしなきゃいけないーんだ!!」

「私は大丈夫だよ？　むしろ、この薄暗い洞窟に優君と二人きりなら……うふ、うふふふ……」

「二人きりじゃないだろうが。そして今のを聞いてオレも帰りたくなつたぞ」

「アハハ、冗談冗談。……じゆるり」

「冗談に聞こえない音が聞こえてきたんだが」

ネガティブな情報ばかりを与えられ我慢できなくなつたのか、刻は怒りを露わにした。そんな刻とは対照的にこの状況すら楽しんでる様子の乙女だが、そんな乙女を見て優はひっそりと二、三步後退つていた。

「大丈夫、大丈夫。ポイントはすぐにわかるからさ」

「は……？」

満面の笑みを浮かべながら、先ほどとは正反対のことを乙女は口にする。確かに彼女は先ほど、ポイントを見つける特徴は無いと言つていた。だが、彼女は今、確かに言つた。「ポイントはすぐにわかる」……と。

「……ポイントに特徴は無いんじゃないんですか？」

「目に見える特徴はね。でも、目に見えない特徴ならあるんだ」

「目に見えない特徴……?」

「そ。はい、じゃあ刻君」

「ア……? オレ?」

矛盾した発言をする乙女に不信感が込められた視線を向ける大神だったが、乙女は平然と「目に見えない特徴ならある」と答える。それでも話の先が見えずに頭を悩ませる大神。

しかし、そんな大神をよそに、乙女は怒りを露わにしていた刻を呼ぶ。そして、唐突に彼に言った。

『『磁力』であの分かれ道の先、全部調べて』

「ハ?」

「ほらほら、騙されたと思って」

「イヤイヤ……急に言われても意味がわから——」

「い・い・か・ら」

「……ハイ」

『磁力』で道の先を調べるよう話す乙女に対し、刻は訳が分からず反論する。しかし、有無を言わさない迫力の乙女的笑顔に圧倒され、刻は仕方なく道の先の方へと掌を向

けた。

——キイーン

「……………ア？」

「どうしたのだ？ 刻君」

道の先にあるであろう何かを『磁力』で探る刻。すると、何か違和感を感じたかのよ  
うに突然声を上げた。何事かと桜が声をかけると、刻は五つの分かれ道の内の一つを指  
差した。

「ほんのわずかだが……ココだけ磁場が他と違うナ。数値にしたら1%にも満たねえ  
くらいだが……」

「オツケー。じゃあ、その道だね」

「オ、オイ！」

『磁力』を操る刻だからこそ気付くことができたほんのわずかな違和感。そうして探  
り当てた一つの道に、乙女は何の迷いもなく進み始めた。唯一の案内人である彼女と別  
行動をとるわけにもいかないため、他の者たちも急いでその後を追う。

すると、乙女は歩きながら振り向いた。

「さ、ここからは遊騎君だよ」

「はにゃ？」

「今から諸々と説明するからさ、ちよつと周りの反響音を聞いて。私の声の」

「……なんでや?」

「大丈夫。ちゃんと説明するから」

「……わかったわ」

刻に続き、遊騎にも異能を使つての探りを依頼する乙女。「説明する」という乙女の言葉信じ、遊騎は両耳に手を添えて周囲の壁にぶつかつて反響する乙女の声に歩きながら集中し始めた。

「……それで? 刻と遊騎の行動にはどんな意味があるんだ?」

「もちろん、石を見つけたためだよ」

素直に乙女の言葉を信じた遊騎を見ながら、優は乙女に説明を求める。対して乙女は、歩くペースを特に変える様子も無く説明を始めた。

「私たちが捜している石……『青ノ不灰石』あおのふはいせきは本当に特殊な石だね。大神君の『青い炎』でも燃え散らないっていう特徴もそうなんだけど、どういうわけか周りの石とかにも変な影響を与える石なんだよね」

「『青ノ不灰石』……」

「変な影響……というのとは?」

「まずは周囲一帯の磁場を狂わせること。といつても、それはほんのわずかなレベル

だから普通の機械じゃ気付けない。敏感な感覚を持つてる人間じゃないとね」

おそらく、これが先ほど刻に『磁力』で探らせた理由。機械では気付けないほど微々たるレベルでの磁場の違いに気付ける人間……つまり『磁力』を操る人間にしか、どの分かれ道の先に目的の石である『青ノ不灰石』があるかはわからないということだ。

「といつても、その狂わせる範囲も結構広いから磁場の違いだけじゃピンポイントで捜せない。だから今度は……『音』が必要なのに」

「……あつたで」

「えっ？」

突然の遊騎の眩きに、全員がその足を止めて遊騎を見た。すると遊騎はスタスタと一人で歩き出し、壁の前で立ち止まった。

そして、その壁をコンコンと叩きながら他の者たちの方に振り向いた。

「ここだけ少し変な風に反響してきたわ。せやから、多分ここや」

「おお！ 結構近くにあつたね！」

遊騎の報告を聞いて、乙女は笑顔でその壁へと近づいていく。目に見える特徴は無いというのは本当のようで、その壁も他の壁も特に違いは見られなかった。それでも、乙女は遊騎の耳……『音』の異能を信じており、目的のモノが見つかったことを喜んでいった。



「じゃ、後は優君の番だよ」

「……オレの?」

「そ。優君の『脳』を使って、この壁を砕くの。多分、それが一番手っ取り早いし」

「……わかった」

「ちよつと待つてね? 今、鶴嘴とか出すから」

「いや、必要ない」

乙女からの指示を受けると、優はゆっくりとその壁の手前へと移動していく。それと同時に、他の者たちはその場所から一定の距離をとる。自分以外の全員が離れたことを確認すると、優はゆっくりと呼吸を整え……ゆっくりと構えた。

「拳があれば……十分だ」

静かな呼吸を繰り返しながら、優は『脳』で自身の身体能力を解放する。常人では扱いきれない程の力をその拳に溜め、集中力も極限まで高めている。

「……………」

集中している中で、ここまで辿り着くまでの過程を思い出す。王子、平家、刻、遊騎……そして、おそらく大神の『青い炎』はこの先で必要になってくる。

一度は自分の失態で失った武器のため、彼らはここまで協力してくれた。彼らだけではない。乙女も、匠も……自分のために手を貸してくれたのだ。

「——みんな」

彼らの力を無駄にはしない……そう心に決めた優の拳に、より一層の力が宿る。

「ありがとう」

——ドンツ!!



「燃え散れ。」

——ゴォ!

大小様々な大きさの石に対し、大神は『青い炎』で燃え散らそうとする。しかし、それらの石はいつまで経っても灰になることは無く、その身に『青い炎』を灯し続けた。

「——ピッ」

「オツケー。本物の『青ノ不灰石』……だつてさ」

「ああ……今のはオレらもなんとなくわかつたワ」

『青い炎』でも燃え散らない様子を見て、匠は吹き戻しを吹くと同時に両手で丸を作つてみせた。そのジェスチャーのおかげで、刻たちにも持ち帰ってきたそれが目的のモノ

であることがわかった。

あの後、優の一撃によって砕かれた石を一人ひとりができる限り持ち帰り、なんとか無事に『天下一品』まで戻ってきた。そして、本物であるかどうかを確かめるために大神が『青い炎』を灯してみせた……というわけだ。

「これだけあれば足りる？」

「ピッ」

「そっか。よかった、よかった」

「で、ではついに『斬空刀』が完成するのですね！ よかったですね、夜原先輩！」

「……ああ」

「なく照れてんだヨ。さっきみたいに素直になれって。『みんな、アリガト〜』って  
っ」

「殴るぞ」

量も問題ないことを確認すると、一同は改めて安堵の息を漏らす。後は『斬空刀』が完成するまで待てばいい……と思っていた。

「……一っだけ聞く。優、お前は『斬空刀』が完成したとして……何のためにその刀を使う？」

安心しきっていた一同の間に、ピリツとした緊張感が一瞬のうちに流れる。見ると、

吹き戻しを外した匠が鋭い視線を優へと向けていた。まるで優を試しているかのよう  
に……これから完成するであろう『斬空刀』の使い道を尋ねた。

「……………」

匠の鋭い視線に対し、優は逃げることなく真正面からその眼をジツと見た。気を抜けば  
圧倒されそうなその迫力を前にし、彼は大きく息を吸ってから……答えた。

「……………」この『青ノ不灰石』は、オレ一人じゃ決して手に入れることはできなかつた。  
『コード：ブレイカー』の皆がいたからこそ、手に入れることができた。ならオレは、彼  
らと同じ『コード：ブレイカー』として、裁くべき“悪”を裁くために……その力を使  
います」

「……………」

優の答えに対し、匠は何も言わない。しばらく優の顔を見つめたかと思うと、急にフ  
イツと背を向けて歩き始めた。答えを間違った……その不安と緊張感が漂い始めた――  
――その時だった。

「——この石は扱いが難しい。『斬空刀』が完成するのにも相応の時間が必要になる。  
完成するまで、お前は『コード：ブレイカー』で在り続けることだ。……無事に完成し  
たら、すぐに伝える」

「……………」よろしくお願ひしますー！」

その言葉を最後に、匠はそのまま部屋から出ていった。彼には聞こえないかもしれない……それでも優は、深々と頭を下げた。そして同時に、緊張の糸が解けたようにワツと歓喜の音が溢れる。

「おめでとく、優君！ お祝いのハグ！ 後でお祝いのキスもあげる！ そしてぜひお祝いに一夜を共に——！」

「二個たりともいらん!! さっさと離れ——アーツ!!」

「なーに遊んでんだか……」

すっ飛んできた乙女にくつつかれたことで悲鳴を上げる優。そんな二人の様子を、他の者たちはあきれ顔で眺めているのだった。

しかし、ただ一人……桜だけは満面の笑みを浮かべていた。そんな彼女の表情に気付いた大神は、ポツリと呟いた。

「……よかったですね」

「ああ！ 本当によかったのだ！」

復讐のために自らの全てを捨てた優……彼はこれからもその目的のために“悪”を裁き続ける。それを良しとしたわけではないが、今の彼は以前の彼とは違う。仲間の存在を受け入れ、一人ひとりを信頼している。そして、おそらくそれは他の『コード：ブレイカー』たちも同じ……そう感じていた桜は、屈託のない笑顔を向けた。

しかし、彼女はまだ気付いていなかった。

その仲間という存在がすでに崩壊していることを。

これから起こる逃れることのできない新たな闘いの幕開けは……すでに始まっているのだと。

## code : 79 隻腕の宿敵

『捜シ者』との闘いが終わった矢先に起こった『コード・エンペラー』の復活……そして、（色々な意味で）波乱を呼んだ乙女と匠との出会い。

それら乗り越え、再び『渋谷荘』での生活に戻ってきた大神たち。そんな彼らの日常は……

——キーン、コーン、カーン、コーン

「バイバイ、桜、大神君！ また『渋谷荘』に遊びに行くからね！」

「待ってるぞ、あおば！ また明日なのだ！」

「……さようなら」



危険など何一つ存在しない、とても平穏な日々となっていた。

「なあ、大神。そういえば匠さんにお前の指輪のことを聞くのすっかり忘れていたな」  
「また急に唐突ですね……。わざわざ聞かなくてもいいと思いますが」

「いや、気になるのだ。また機会があつたら聞こうな」

「好きにしてください」

あれから……。ちようど『コード・エンペラー』が復活した頃から、大神は『コード・ブレイカー』としての仕事をしている様子も無く、こうして平日の日中は桜と一緒に学校へと通っている。授業を受け、クラスメイトと談笑し、帰り道には二人で他愛のない会話を……。それが今の彼らの日常だった。

「おお、大神。プラモデル屋があるぞ。なんなら寄っていくか?」

「……結構です」

「そうか。なら一杯付き合え、なのだ」

「……酒みたいに言わないでくださいよ」

ただ、そんな日常は大神にとっては不慣れなものかもしれない。だが、桜にとっては少し前までの生活に戻っただけ。そんな平和な日常に今、自分と大神がいることを実感すると……彼女はついつい笑顔をこぼしてしまふのだった。

「むふふ」

「なんです? おかわりですか?」

「またこうして、大神と一緒に学校に來られて嬉しいなあ」

「そんなことが嬉しいんですか……? 相変わらずおかしな人だ」

「ああ、そんなことが嬉しいのだ。……あ、あとおかわりも欲しいのだ」

「……ちやつかりもしている人ですね、あなたは」

それは今日も同じであり、帰り道に寄ったカフェで互いに飲み物を飲みながら溢れんばかりの幸せを口にする桜。そんな彼女に、日常と呼ぶには程遠い日常を送ってきた大神は呆れたような顔をする。

しかし、その表情も桜のある人ことによって別のものへと変わった。

「しかし、本当によかったのだ。こんな日がずっと続くと良いのだ」

「ずっと……ですか」

「……大神？」

ふと、大神の声のトーンが変わった。パツとその顔を見てみると、大神は目の前にいる桜の方に視線を向けながらも、その眼はどこか遠くを見ているようだった。

(……また、なのだ。最近、大神はよくこうやって遠くを見ている……)

だが、それは今日に限ったことではなかった。『渋谷荘』でも、学校でも……大神はどこか遠くを見ているような眼をしていた。

今までに何度か「どうしたのだ？」と聞いてみたが、その度に大神は「なんでもありません」とはぐらかしてきた。特に理由となることも思いつかなかったため、今まではそこで終わっていた。しかし、これまでのことを思い出すと関係ありそうなことが一つだけ思い浮かんだ。

桜はそれを大神にぶつけてみる。

「……なあ、大神。前に王子殿が言っていた、大神のやらねばならぬこととはなんなのだ？」

「……………」

「よく遠くを見ているのも、それが関係しているのか？」

「それは——」

「——うつるせえなあ。学校行つてんのは珍種のテメーを観察するためだろうが。でなきや誰があんな退屈なトコロに好き好んで行くかつてんだ」

「おお、『コード：エンペラー』殿」

だが、その質問に大神が答えるよりも前に大神の左腕……に灯った『コード：エンペラー』が割つて入ってくる。『青い炎』でできた火の玉である彼が出てきたことで、大神は質問どころではなくなった。

「テメー——！ 急に出てくんじゃねえ！」

「宿主如きがオレに命令すんな！」

「すっこんでろ！ このバカが！」

「んだと、ゴラ！ テメーの指図は受けねーよ！」

「うむ。二人はやっぱり仲良しなのだ」

「わふう……」

なんとか『エンペラー』を隠そうとする大神とお構いなしに表に出ようとする『エンペラー』。そんな二人のやり取りを見て呑気な感想を言う桜に、彼女のカバンに入っていた『子犬』は呆れたような顔をするのだった。

——ああああん

「……ん？」

そんな桜の耳に、今までは言っただけでこなかった音……いや、声が入ってくる。明らかにな幼さを感じるその声は決して話し声などではない。聞こえてくれば、今の桜のようについて視線を向けてしまう声。

「うわああああん！」

感情を爆発させた泣き声……その出所である男の子の周りには、同じような子どもたちもいた。

「アイシユ〜！ アイシユ食べたいよ〜！」

「が、我慢ちて……」

「そーだよ……。今日は氷二つ食つたる?」

見ると、子どもたちがいるのはアイス屋の前。ショーウィンドーに展示されたアイスのサンプルが道行く人の食欲を刺激させている。それはあの子どもたちも同じようで、泣いている子はもちろん、それを論じている女の子と少しふくよかな男の子も視線はショーウィンドーの中のアイスに向けられている。

「……………」

しかし、ただ一人だけショーウィンドーには目もくれない子がいた。他の子たちより1, 2歳は年上化と思われるその男の子はゴソゴソとポケットを漁つたかと思うと、そこに入れておいたのであろう小銭を取り出した。だが、それは遠目から見ても何か物を買えるような金額ではない。

「——チツ」

——ダダッ!

「あ……………」

すると、その男の子は他の子たちを置いて急に走り出した。自分より小さい子を置いて行ってしまった様子を目撃した桜は、思わず立ち上がって周囲を捜す。

そうして見つけたのは、走り出した男の子がコンビ二へと入る姿だった。

「……………」

コンビニの奥にあるアイスコーナーに真っ先に進んでいった男の子。チラチラと周囲を警戒している様子で何度か見渡すと、彼は中であつたアイスを一つ手に取り……

——ササツ

自分の服の中に隠した……それは、紛れもなく万引きという犯罪行為だった。

「い、いかん！ やめるのだ！」

幸いにも服に隠した瞬間を見たのはコンビニの窓越しに彼を見ていた桜のみ。だが、店員が気付かないという保証はないし、何より犯罪行為を見逃すわけにはいかないという正義感が桜を動かした。

しかし、桜が中に入って止めるよりも先に……

——ガシツ

「ッ——！」

男の子のアイスを持っていた方の腕を掴むもう一つの腕……その腕の主は、男の子が逃げようとするよりも先に静かに告げた。

「盗みはやめろ、と言いたじやろう。和樹かずき」

「春人！」

「は、春人!？」

和樹と呼ばれた男の子の万引きを止めたのは、かつて桜の命を狙って現れた始末屋・春人だった。過去に大神と闘った際に腕を燃え散らされたが、その腕を自分で切断することです生き抜いた隻腕の強敵。桜を狙って襲ってきた時も人を催眠状態する音や瞳術で大神たちを苦しめたが、最後には大神が『青い炎』で燃え散らそうとしたが、桜が無



意識に放った珍種。パワーによって再び生き抜いた。

その後は行方をくらまし、始末屋としての活動も皆無だと思われていた男……その春人が、今まさに桜の目の前に姿を晒していたのだ。桜は驚きつつも物陰に身を隠し、様子を伺おうとした。

「メグルの分だけ持っていけば、千代ちよと勇大ゆうだいが不満を持つじやろうて。……皆の分だ、持っていけ」

春人は和樹が盗もうとしたアイスに戻して外に出ると、大きく膨らんだレジ袋を和樹に渡した。中には様々な種類のアイスが詰め込まれていた。

だが、そのアイスを盗んでまで手に入れようとした和樹は、不服そうに眉をしかめて下を向いた。

「……誰も頼んでねえよ。だいたい、お前の金で買ったものなんてオレは……」

「あー！ 春人兄ちゃん！」

春人の申し出を拒否しようとする和樹だったが、そんな彼の後ろから女の子……千代が春人に気付いて小走りで寄ってきた。それに続くように、先ほどまで泣いていたメグルとそれを論じていた幸平も走ってきて、和樹が持っている袋の中身に気付いた。

「うわあ！ アイシユだ！」

「ホントだ！ アイスだ！」

「お、おい！ お前ら！」

子どもたちは和樹の思いなんて知らず、それぞれがアイスを手に取り夢中で頬張り始めた。

「すつご〜い！ とつても甘い！」

「ありがとう、春人兄ちゃん！ アイスつて棒まで甘いんだな〜」

「おいちつ、おいちつ」

その食べ方は一人ひとり違えど、共通して見えるのはまるで初めて食べたかのように感動しているということだった。先ほど泣いていたことを考えても、彼らにしてみればアイスは手が届かないほどのご馳走なのかもしれない。

「……………こんな奴のくれたモンなんて食うなよな。……………おい、メグル。オレの分もやるから、もうちよつとゆつくり食べるよ」

「いいの!?! わーい！」

他の子どもたちがそのご馳走を食べるところを見ても、和樹はアイスを食べようとはせずにメグルに渡した。それは明らかな我慢だったが、まだ小さいメグルはそれに気付くこともなく、渡されたアイスをまた夢中で食べ始めた。

「……………」

「食べる」

「——ツ！ い、いらねーよ！」

「これはお前の分だ」

「お前がくれたモノなんて……！」

「いいから食べる」

「ツ………！ くそっ！」

そんな和樹の目の前に春人が別のアイスを差し出す。しかし、和樹は春人からの施しは受けまいとそれも拒否しようとする。それでも春人は何度も和樹に渡し、食べさせようとした。そして、最終的には和樹の方が我慢の限界を迎え、彼はひたたくように春人の手からアイスを取って食べ始めた。どうやら限界を迎えていたのは我慢だけでなく空腹の方でもあったようで、アイスはあっという間に無くなってしまった。

「………この借りは、オレが大人になったら必ず返す」

「和樹、お前は金の心配はするな。もう辛抱は終いじや」

「は………？ オイ、どういうことだよ！ まさか、また火傷とか怪我とかするような

………そんな危ないことするつもりじゃないよな!? なあ、春人！」

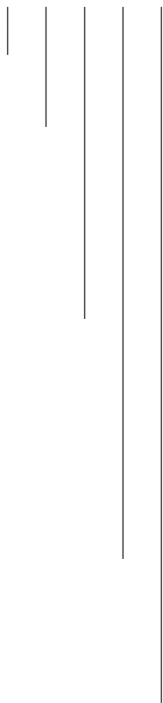
「……………」

「金の心配はするな」………そう言い残して、春人はその場を去っていく。今のやり取りだけで確信は持てないが、少なくとも春人とあの子どもたちは無関係ではない。いや、

それどころかまるで春人があの子たちを養っているようにも見える。

（あの子……また、と言っていた。ということは、まさか春人は私を狙ってきた時からあの子の面倒を……？）

去っていく春人の背中を見つめながら、桜はそんなことを考えていた。



——シユツ！ ババツ！

「ハアー、ハアー……！——フツ！」

——ブオン！ ダンツ！

場所は変わり、『渋谷荘』の地下にある修業場には空気を切り裂くような鋭い音と荒々しい呼吸が響き渡っていた。そこには、空中に向かって拳や脚を振るう優の姿があった。

滝のような汗を流しながらも、それを気にも留めずに彼は動き続ける。だが……

——パチパチパチ

「……？」

唐突な拍手が彼の動きを止めた。肩で息をする彼の視線の先には、彼がよく知る人物がいつの間にか立っていた。

「素晴らしいです、優君。動きのキレが以前より上がってきていますね」

「平、家さん……」

「しかし、いくらあなたでもやり過ぎはよくありません。少し休憩してもいいのでは？」

「……そう、ですわね」

優の動きを称賛しながらも、彼を氣遣つて休憩を促す平家。溢れる汗を拭いながらその言葉を聞いていた優もそろそろ限界を感じていたのかもしれない。荒々しく肩で息をしながら、平家に同意して彼の元へと歩いていった。

「誰に言われるでもなく自主的に修業とは……その精神を刻君や遊騎君も見習つてほしいものです」

「……あいつらもやる時はやりますよ。それに、オレが鍛えなきやならないのは当然のことですから」

「……『コード：07』だから、ですか？」

「それもありませんが……理由の大半を占めているのは別のことです」

平家の傍に腰を下ろした優に、まるで愚痴のような口調で平家は話し始めた。そんな平家の言葉に苦笑しながらも、優は天井を見上げながら続けた。

「今のオレは『斬空刀』……自分にとつて一番の武器が使えない状態です。ならその分を補えるよう、自分自身を鍛えようと思っただけです。……これからも、『コード：ブレイカー』でいるために」

「……………そうですか」

『捜シ者』との闘いで破壊され、匠に預けた『斬空刀』。それを使つての戦いぶりを見れば、優にとつて一番の武器だということも納得できる。それが使えない今、残された武器である自身を鍛える……………それが彼が出した答えだった。

そんな優の言葉を聞いて平家は何か思うところがあるのか、スツと目を細めた。

『斬空刀』といえば、私たちが『天下一品』から帰る時はすごかったですねえ」

「……………思い出させないでください」

しかし、次の瞬間にはにっこりと微笑んだ平家。話題も『斬空刀』から『天下一品』へ……………正確には、〃『天下一品』から帰る時〃へと移った。

そう、それは優たちが『青ノ不灰石』を見つけて帰ろうとした時のことだった——

「や・だ」

「いや、ですから……」

「い・や・だ」

『……………』

匠に『斬空刀』と『青ノ不灰石』を預けて、誰かが「そろそろ帰ろう」と口にしたまさにその時……乙女は目にも止まらぬ速さで玄関へと向かい、一瞬のうちに釘を打ちつけて扉を封鎖してしまった。その素早さと技術は大神以上だった、と周囲の人々は語る。

「……すまん、皆。ある意味じゃ、これも恒例行事みたいなものなんだ」

「まあ、なんとなく予想はしてたけどな……」

「いかにも、これも愛つてやつなんだな」

「しみじみと言つてる場合か、クソネコが」

乙女がこんな行動に出た理由……それは誰かに聞くまでもなく、優だ。単に優と離れたくないから、彼女はこんな行動に出たというわけだ。

「おい、優。いつものことだったらお前がなんとかしろよナ。ハグなりキスなりして、

『またすぐに戻ってくるヨ☆』とでも言つてやれヨ」

「そんなことしても調子に乗るだけだ」

（いや……まず優にそんなことできるわけねえだろ）



現状に呆れた刻が適当なアドバイスをするが、優はバツサリとそのアドバイスを切り捨てた。その横で王子がひっそりと心の中でツツコンでいたのは誰も知らない。

「…………たく」

すると、仕方ないといった様子で優が乙女へと近づいていく。しかし、乙女の方も優が帰らないように警戒しているのか、両手を大きく広げて玄関への道を塞いでいる。

そんな乙女を説得するべく、優は今までの経験から最良の言葉を口にする。

「乙女……二十歳も過ぎた大人が我儘を言うな」

(デリカシーの欠片も無い説得ウウウ!!)

女性にとってタブーとも言える年齢から責めた優の説得。もはや説得というより叱責に近い内容に、乙女は……

——ツチラ

「ツ?!?!」

——バタン

何のためらいもなく、着物の裾をほんの少しだけめくり上げてみせた。突然の色仕掛けに不意を突かれた優は、そのまま前のめりに倒れてしまい……

「優君ゲツト！ もう絶対に離さないもんね！」

あつさりと乙女に鹵獲されてしまうのだった。

「優ウウウウウウ!!」

「なんとというか……もう何も言えません」

「あく……情けねえ」

「乙女殿！ 女子ならばもう少し恥じらいを持つべきなのだ！」

「いかにも、少し論点がずれているよ」

(乙女の扱いに関して) 経験豊富な優を失った一同。その反応は十人十色だが、このままでは本当に帰ることができない。彼女の性格を考えると「優以外は帰っていい」と最終的には言いそうだが、それで帰るわけにもいかない。どうするべきか悩む大神たちだったが、当の乙女はそんなことは知らずに優を思いきり抱きしめる。



「優君のほっぺから……違う女の匂いがするウウウウウ!!」

『……は?』

その言葉を最後に……乙女は、そのまま動かなくなつた。

(……リリーの「お礼」がこんな形で役に立つとはな。というか、あいつの鼻はどんな嗅覚をしてるんだ)

「どうしました? 優君」

「なんでもありません、忘れてください」

以前、研究所でリリーにされた「お礼」の際に残つた彼女の匂いを嗅ぎ取つて乙女は氣絶した。その後は、乙女のことを匠に任せた一同は優を連れて（平家が引きずつて）『渋谷荘』へと戻つた……というわけである。ちなみに、優から女性の匂いがしたことについては「桜チャンか王子のことダロ」という刻の適当な結論で片付いた。この時ほど、優は刻の適当さに感謝したことはなかつた。

「……………」

そんな思い出話をし終わると、再び平家の眼はスツと細くなる。まるで見定めるかのよう……じっくりと優のことを見ていた。そして……

「ところで優君……」つだけ聞いてもよろしいでしょうか」

「なんですか？」

「あなたには前線から退いてもらう……と言ったら、どうしますか？」

「まったく、どこに行つてたんですか。あんまりウロチヨロしないでくださいよ」

「う、うむ！ すまんな！」

「何か用事でもあつたんですか？」

「ぬう!? よ、用事など何もないぞ!?!」

「……………」

「そ、それよりだ大神！ 今日面白いテレビがな……………」

——パシンツッ!

「痛ッ!」

春人と子どもたちのやり取りを目撃した後、桜は大神と合流して再び帰路についたのだが、それからの様子は明らかに挙動不審だった。そしてなにより、彼女自身は気付いていないが彼女の表情は例の“ウソ顔”になっていた。

大神がそれを見逃すはずもなく、呆れ顔をしながら桜の頭をひっぱたくと大きくため息をついた。

「……今度は何を隠しているんですか? 顔を見ればわかりますから、隠しても無駄ですよ」

「そ、そんなことは……」

「桜小路さん」

「……はい」

一度はごまかそうとしたが、大神相手にごまかしが通じるわけもない。真っ先に桜の方が折れ、路上での事情聴取が始まったのだった。

「その……もしも、だぞ?」

「はい」

「もしも……本当にもしも、あくまで仮定の話だからな!」

「……はい」

「間違えるなよ!? もしも、仮定、もしかしたらの——」

「……わかりましたからさっさと行ってください」

あからさまに「もしも」を強調する桜の様子は、これから話すことが「もしも」のことではないと言っているようなものだった。もちろん大神も気付いてはいたが、話がややこしくなるのでそこに関しては何も言わず、さっさと話を聞くことにした。

「……もしも、仮に滅し損ねた『悪』が目の前に現れたらお前は どうする? いいか? もしも……だからな」

桜が言っている滅し損ねた『悪』……それは紛れもなく春人のことだった。一度は自分の命を狙いに来た敵なのは確かな過去。だが、先ほど彼女が見た子どもたちとのやり取りもまた確かにあったこと。

大神は『悪』に対して一切の容赦はない。それはかつて春人と闘った時も同じ。そんな彼がもし、何かの拍子に春人と再会したら——そんな不安が、桜の中には渦巻いていたのだ。

「……………」

そんな桜の問いを聞いた大神は、静かに目を伏せて口を閉じた。しかし、その時間はほんの数秒ほどであり、彼はすぐに……あの目をしながら答えた。



「……愚問ですよ、桜小路さん。『悪』は滅します。……たとえば、誰であろうと」

「大、神……」

(また……遠い目をしている……)

カフェで見た時と同じ……どこか遠くを見ながら答える大神を見て、桜は上手く次の言葉が出てこなかった。そんな二人の間を静寂が包み始め――

「ほう……それは面白い。だが、オレは貴様などには殺されぬぞ。……大神」

上……歩道橋から顔を覗かせた男が二人の静寂を打ち破る。そこには、今まさに桜が思い浮かべていた一人の『悪』の姿があった。

「久しぶりじゃな。貴様の左腕……頂きに参ったぞ」

「は、春人!？」

「……お前か」

「おーおー、とうとう来やがったぜ。この『エンペラー』様を狙いに来た刺客がよ」  
危惧していた春人と大神の再会に動揺を隠せない桜。対し、大神は驚く素振りもなく  
スツと目を細めており、『エンペラー』も刺客が来るのを予想していたかのような口ぶり  
で大神の左手から出てきた。

「何度も何度も……懲りない『悪』が」

「ふん……今回の依頼主は気前が良くてのう。この仕事は成し遂げねばならん」

歩道橋の階段を一步一步……ゆっくりと降りてくる春人。帽子を目深に被っている  
ため真正面から対峙していれば見えづらいが、今は大神たちが彼を見上げている状態。  
だから、その顔……口元がニタリと弧を描いたのはすぐにわかった。

「……金じゃ。小金が少々必要なのぞな」

——『和樹、お前は金の心配はするな。もう辛抱は終いじや』

(金……もしかして、さつき春人が言っていたのはこのことなのか……?)

春人の口から「金」という単語を聞いた瞬間、桜の頭の中ではほぼ反射的に先ほど春  
人が子どもに対して口にしていた言葉が再生された。

春人が大神の左腕を狙いに来たのは金……子どもたちのためなのではと考える桜。

だが、彼が狙う大神は誰であろうと「悪」は滅すると今さっき言ったばかりであり、冗談でそんなことを言うような人間ではない。

かつて大神を苦しめた春人だが、それは彼の實力に加えて大神がロストしていたというのも大きい。だが、今の大神は『エンペラー』が目覚めて『青い炎』が真の力を取り戻した状態。ましてやロストもしていない。いくら實力が高いとはいえ、異能を持たない春人が敵う相手とは到底思えなかつた。

「や、やめるのだ！ いいか、春人！ 大神はすごく、すごく強くなつたのだ！ お前では敵わぬ！ だからここは退くのだ！」

「言うてくれるわ、桜小路桜。……だが、忌々しいことにそれは真実じゃな」

「そ、そうだ！ だから——」

「しかし、それはかつてのオレならの話。そう……オレが異能を持っていなかったからじゃ」

春人と子どもたち……詳しい関係は知らないとしても、少なからず春人が彼らとにかしらの関係があると察した桜。もし春人に何かあれば子どもたちがどうなるかわからない。そのためにも説得を試みってみるが、春人は引く様子を見せない。大神たちの前に立ち塞がったままだ。

そして、彼は近くに停めてあつたバイクにそつと右手で触れる。

「——今は違う」

——ギョオ!

「バ、バイクを吸い込んだ!?!」

春人が眩いた次の瞬間、彼が触れていたバイクは彼の右手に吸いこまれるように消えていき、跡形もなくなってしまう。そして、かつて大神に燃え散らされ失った左腕部分が突然光り出した。

——ジャキン！

「今度は負けぬ。新しく手に入れた力……異能『変 殻』があるからのう」  
 春人の左腕……失われたはずの彼の左腕がそこにはあった。いや、正確にはそれは腕ではない。金具やタイヤ……先ほどまでバイクだったものが変形した、鎌のような武器だった。

「バカな——！ 異能を持っていない人間が異能を手に入れただと——!？」  
 目の前で起きたことに、さすがの大神も驚きを隠せず大きく目を見開く。だが、彼は確かに言った。それが異能であると。そして、目の前で起きた現象が異能としか説明できないと、彼は直感で感じていた。

「さあ、大神……その左腕、貰い受けるぞ」

「ッ——!」

大神と春人……三度目となる因縁の闘いが今、幕を開ける。

## code : 80 命を買う金

「……………」

『渋谷荘』の地下……かつて大神たちが『捜シ者』との闘いに向けて己を鍛えた空間に、優はたった一人で立ち尽くしていた。元々、空間自体が薄暗いというのもあるが、今の優は何やら思い詰めたように顔を伏せており、その表情全てに影がかかっている。

何をするわけでもない、ただ立ち尽くす彼の中では……先ほどまで同じ空間にいた者の言葉が繰り返されていた。

『前線から退いてもらうって……どういふことですか、平家さん』

『……………』

突然放たれた言葉に大きく目を見開く優。それに対し、その言葉を放った張本人……平家は腕を組み、細めた眼を優へと向けていた。

『……冗談にしては、笑えませんよ』

『……………』

明らかな動揺を見せる優だったが、平家は何も答えない。ただジツと優を見つめ、頑なに口を閉じていた。だが、その態度だけで彼が言わんとしていることはわかる。

今言ったことは……決して冗談ではないと。なぜならその眼は、彼が仕事に見せる眼とほぼ同じだったから。

『……何か、言ってくださいよ』

『……………』

『平家さ——!!』

『甘ったれるのはやめなさい……』『コード：07』

『ツ——!?!』

その一言に、優は全身が硬直した。鋭い眼を鈍く輝かせ、厳しい言葉をかけた平家……今の彼からは、確かに“殺気”に似たプレッシャーを感じた。

そんなプレッシャーを真正面から優にぶつけながら、平家は続けた。

『今一度、あなたの立場を思い出しなさい。あなたは『コード：07』……藤原総理が特別に“ナンバー”を与えているだけの存在です。『コード：ブレイカー』は本来『コード：06』を末尾とする。あなたは本来、今の『コード：ブレイカー』にはなり得ない……“異物”です』

『……………』

『そんな“異物”であるあなたが、なぜ『コード：07』というナンバーを与えられているか……理解していますか?』

『……それ、は』

『答えは一つ、戦力として利用価値があるからです』

つらつらと言葉を並べる平家に対し、優はたった一言を絞り出すのに精一杯だった。



それほどまで、今の平家から感じるプレッシャーは強かった。

『確かにあなたは強い。特殊な異能である『脳』を命懸けで使いこなし、先の闘いでは『捜シ者』に加担した異能者のほとんどを片付けてくれました。……ですが、今のあなたはもうですか？』

平家の鋭く細められた眼が優を射抜く。まるで心臓を鷲掴みにされているような緊張感に襲われ、優の全身を冷や汗が流れる。

『一番の武器を無くしたあなたを……』エデンが必要とすると思えますか？ 武器が再び完成するのを待ってくださると思っておりますか？』

『……………』

『はつきり伝えます。……』エデンは、これを機にあなたを見限ろうとしています』

『——!!』

その言葉に、優はこれまでにないほど目を見開き……一気に力が抜けていくのを感じた。しかし、それでも崩れ落ちるようなことは無く、その場に立ち続ける優。ただ唯一、その顔だけは力無く無機質な床を見つめていた。

——ポタ

ふと、何かが滴るような音が空間に響く。それは、力を込めるあまりに自らの肉に穴を開けた……優の拳から滴る紅い液体。

「……………」

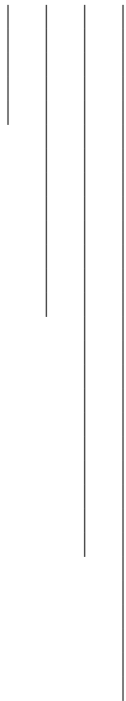
痛みは感じていた。だが、それでも優は力を緩めようとしなない。それどころか、拳に込める力は徐々に強くなつていき、さらに穴を広げていく。

そうして紅く染まっていく拳。その下に滴る液体が巨大な円を描き始めた頃……優は、その拳を振り上げた。

——グアシャアアアア!!



『——ですが、この仕事の結果によってはそれも変わるかもしれません。受けますか  
……？ 優君』



「せえい！」

「ぐっ！」

幸いにも休工中であり、街中よりもはるかに人が少ない工事現場。そこで、常人を遥かに超えた脚力で跳び上がり、異形の武器と化した左手を突き立てる春人。対する大神は寸でのところでそれを避け、なんとか一定の距離を保とうとする。

「どうした、大神……逃げるだけか！」

大神が避けたことで地面に突き立てられた左手……春人はそれを勢いよく振り上げることとで追撃する。その流れるような追撃も避ける大神だったが、ハッキリ言つてギリギリというレベルだ。いつまで避け続けられるかわかったものじゃない。

「情けないものじゃな、大神。先ほどから逃げの一手のみ。こちらとしては狩りやす

いかな」

「チツ……！」

挑発も込めていられるであろう春人の言葉に、大神は小さく舌打ちをしながら自らの左手を見る。そこには手袋を外し、いつでも『青い炎』を使える状態……戦闘態勢に入っている左手があつた。

ただ……そこに肝心の『青い炎』は灯っていないかつた。

「やめるのだ、春人！　大神は逃げているのではなく闘いたくないだけだ！　その証拠に、『青い炎』を使っていないだろう！」

「使っていない……か。ふっ、果たして本当にそうなのかのう」

なんとか春人を止めようと説得する桜。『青い炎』を使わないことから大神に闘う意思がないことを主張するが、春人はそれを鼻で笑う。

「……………」

対する大神は、鋭い目つきで春人の動きをジツと見ている。いつ攻撃が来ても動けるように集中しているのだ。

だが、彼は内心では明らかに焦りがあつた。それを示すかのように、冷や汗が額から流れ落ちる。その理由はただ一つ……

今の大神は『青い炎』を使わないのではない。使えないからだ。

「オイ、『エンペラー』……！ どうせ原因はテメエだろう、なんのつもりだ……！」

『ハツハー、なんのことだかな！』

「テメエ……！」

春人や桜に聞こえない程度の音量で、だが明らかな苛立ちを含んだ声を『エンペラー』が宿っている左手に向ける大神。しかし、当の『エンペラー』はそんなのお構いなしと言わんばかりに陽気な声を返してきて、大神の苛立ちはさらに高まっていく。

『……見せてみな、零』

「あ？」

だが、次の瞬間……先ほどの陽気な声とは打って変わり、呟くように静かな声が左手

から届く。ふざけている様子は一切感じられない『エンペラー』の言葉に、大神は眉をしかめる。

『法でもない、『コード：ブレイカー』としてでもない……お前自身の裁きつてやつを見せてみな。ただし、オレの宿主として不合格な裁きをしたならすぐに丸コゲにしてやる』

「……何をわけのわからないことを——」

「左腕との別れは済んだか？ 大神」

法による裁きでもなく、『コード：ブレイカー』としての裁きでもない大神自身の裁きを見せろという『エンペラー』。真剣な様子で話す『エンペラー』に、大神は今まで感じていた苛立ちもどこかへ消えてしまい、『エンペラー』のその真意を問おうとする。

しかし、今彼らが相対している敵はそれを許してはくれなかった。

「お前が来ないのならこちらから行かせてもらおう。我が異能『変殻』トランスフォーム』……物質があるところならば、ありとあらゆる攻撃が可能じゃからな」

——ズオ！

言いながら、春人は近くに停まっていたクレーン車へ右手を向ける。瞬間、クレーン車の形は歪み、なんの抵抗もなく春人の右手へと吸い取られていく。そして、今までバイクを基に構築された刃があった左手部分が光り出し、また新たな武器を構築してい



く。

——ガキン!

「こ、今度は砲になった!」

「弾にはさっきのバイクを細切れにして詰め込ませてもらった。さあ、大神……覚悟してもらおう!」

「——ッ!」

『コード：エンペラー』によつて『青い炎』を封じられた大神と新たに異能を手にした春人。二人の闘いは言うまでもなく、大神が圧倒的に不利な状態で進んでいった。春人の猛攻に大神は避けるしかなく、闘いである以上は桜もうかつに手が出せなかった。

だが、それでも桜は春人の説得を試みた。一度は始末屋から手を引いたのには理由がある、と考えたからだ。そして、桜はその理由になり得る存在が春人の近くにいることを知っていた。だからこそ彼女は春人に問うた。「金が必要なのは子どもたちのためな

のか」——と。

しかし、春人はその言葉がただの戯言であるかのように笑い飛ばす。そして……邪悪な笑みで答えた。

「あのじやり共は殺し屋にするために掠<sup>さら</sup>ってきただけじゃ。使えなければ売り飛ばす。子どもは金になるからの」

春人のその言葉に、桜は説得を諦めかける。どこからも突破口は見えず、大神がただただ追い詰められていく……そんな時だった。一人の乱入者によって、全ての流れは変わった。

「やめろ！」——そう力の限り叫んで大神と春人の間に割って入ってきたのは……春人が連れていた子どもの一人である和樹だった。

実は、和樹は大神と春人のやり取りを全て物陰から見ていたのだ。まだ幼い子どもゆえ、話の全ては理解できてはいないが、彼はどうしても春人に確かめたいことがあった。

「春人！ 始末屋は……悪いことはもうやめたって言ってただろ!? なのにこんな……ちゃんと説明してくれよ!!」

「……………」

和樹の問いかけに春人は何も答えなかった。すると、そこで大神が思わぬ言葉を口にした。

「この和樹という子どもは、大神と春人が最初に闘った時……春人が誘拐し、その口で「殺した」と口にした……死んだはずの子どもだと。」

春人は「知らぬ」と一蹴したが、和樹は違った。彼は語った。彼が春人と出会った時のことを。

和樹は裕福な家庭の一人息子だった。だがある日、母親が事故により他界。和樹がまだ幼いということもあり、父親はすぐに別の女性と結婚した。しかし数か月が経つと、今度は父親が亡くなった。

継母と二人暮らしになった和樹。そんな和樹が誘拐されたのは父親の葬儀が終わってから数週間が過ぎた頃だった。その誘拐犯こそ、依頼を受けた始末屋……春人だった。

春人は継母に身代金を要求したが、その身代金は支払われることはなかった。捕らわれている間、和樹はそのことは知らない。知る由もない。だが、彼にはわかっていた。身代金など支払われない、と。

なぜなら、春人に和樹を誘拐させたのは継母本人だとわかっていたから。

和樹の両親が遺した財産……それを独り占めするために、継母は和樹を始末しようとしたのだ。それを子どもながらにわかっていた和樹は、春人に言った。

早く殺してほしい。どうせ自分が死んでも誰も悲しまない——と。

次の瞬間、春人は和樹の拘束を解いた。呆気にとられる和樹に、春人は射抜くような眼で和樹に言った。

「死んで悲しむ者がおらぬなら、それはまだ生きてもない証じゃ。然りと生きてから逝ね。でなければ、殺しがいもないわ」

それから和樹は春人に育てられた。他の子どもたちも同じだと和樹は語った。他の誰でもない、命の大切さを教えてくれたのは春人だった、と。

だが、春人はそんな和樹を容赦なく殴り飛ばした。そして言った。金より命が大事なんで綺麗事、命は金で買える、と。

そう言い捨てる春人の中には、確固たる信念に似た思いがあった。そして、彼は今までになく感情を爆発させ、その思いを叫んだ。

「野草を喰い、泥水を啜って生きていけるか？ 否。住処も着物もなく人としての  
なりが保てるか？ ……否。綺麗事で、腹は膨れん。生きるには金がいる！ そのため  
に悪に堕ちて何が悪かろうて！ 所詮は血塗られた手！ 殺しとて厭わぬわ!!」

…この時、大神の中で一つの覚悟が決まった。

彼は、『青い炎』が封じられた左手をグッと握った。

「……………」

『渋谷荘』の縁側……そこでは、刻がやめたはずの煙草を唾えたまま、吸うことも煙を吐きだすこともなくただ呆けていた。近くの灰皿にはすでに十本以上の吸い殻が置かれており、彼が長い間そうしていたということを裏付けている。

現に、今唾えている煙草も半分以上が灰になっており、ボロボロと風に乗って落ちて

「煙草はやめたんじゃないやなかったんですか？」

「どわあ!?!」

突然、背後に現れた平家に話しかけられ、刻は大きく身体を跳ね上がらせる。驚きのあまりドクドクと高鳴る心臓を抑えながら、刻は勢いよく振り向いた。

「驚かすんじゃないよー！ この変て——！」

——グアシヤア！

「うおわあ!!」

「なんだか楽しそうですねえ、刻君」

「どこがダヨ!!」

振り向いて文句を言おうとした刻だったが、それをかき消すように派手な轟音が鳴り響き、同時に『渋谷荘』全体を大きく揺らした。

それが、先ほどまで自分が話していた同業者によるものだとすぐに予想がついた平家は微笑みながら素っ頓狂なことを口にしていった。

「……つたく、なんだヨ今のは。地震、つてわけでもネーだろうし……」

「さあ……なんでしようね」

ニコリ、と含みのある笑みを浮かべる平家。刻からは見えなかったため彼は何も言わないが、平家の様子は明らかにこれがなんで起きたのかわかっている……といったような顔つきだった。まあ、実際わかっていたのだろうが。

「そんなことより刻君。『エデン』専属の病院へ行ってきたと聞きました。医者はお



「あなたの両腕の状態を何と？」

「……………」

すると、平家は話題を刻自身の事へと移す。虹次との闘いにおいて「片腕で一発ずつ」という制限を破って放った磁撃砲。ガウスキャン今後には支障はないかを確かめるために病院へ行ったことを知っていた平家は、その結果を彼自身から聞こうとする。

だが、今の刻は少し目を伏せてすぐに答えようとはしなかった。しかしそれも一瞬、彼はすぐに普段の明るい口調で口を開いた。

「べつつに大丈夫ですよ〜？ まー、ちつとはリハビリが必要とは言われたけど、大したことねーシ。ちゃんと柔らかい物でも揉みまくつてリハビリしますヨ」

問題ない、と言いたげに両手で何かを揉む動作をする刻。（彼の言う柔らかい物が何であるかは触れないが）

しかし、長年の付き合いからか、それとも上に立つ者としての経験か……平家はそれで納得はしなかった。

「嘘は無駄ですよ。……まあ、日常生活は問題ないでしょう。ですが、あなたの両腕は磁撃砲どころか強力な磁力の放出にすら耐えられない状態。大方、あなたはもう戦えない……でも言われたのでしょうか？」

「ツ——！」

平家の言葉を受けて、刻は大きく目を見開く。そして、彼はそれを隠すかのように普段より声を張ってそれを否定する。

「バ、バツカじゃねーノ!? んなワケが——」

だが、落ち着きを欠いたその様子は誰が見ても明らかな事実を述べていた。

平家の言葉は間違っていない……ということ。

「まあ、『コード：ブレイカー』として『悪』を裁く程度なら問題は無いでしょう。ですが、闘いとなればそうはいかない。虹次を斃すのは諦めた方が賢明でしょう。……仕方のないことと言えば仕方のないことです。あなたはそもそも異能を持っていないかった。寧々音から異能を分け与えてもらったという、あなたの方が姉弟だったからこそなしかつ得た奇跡があつたから異能が使えていただけ。本来なら、異能を持たない一般人が途中から異能を貰い受けるなど——」

「うるせえ!!」

畳みかけるように、冷静に事実を述べ続ける平家に、刻は我慢の限界を迎えてその胸倉を掴んで強制的に言葉を中断させる。そして、強い眼光を込めた眼を平家へと向けながら声を荒げる。

「横からゴチャゴチャと勝手なこと言ってるじゃねえ! 虹次はオレが斃す! あんまふざけたこと言ってるアンタだろうとブツ斃して——!」

——パシッ

「な——！」

突然、平家は刻が啞えていた煙草を奪い取り、自身が啞えた。そして、深く煙を口内に溜めこむと……何の躊躇もなく刻へと向けてその煙を吐きだした。

「——餓鬼<sup>ガキ</sup>が。仇を討つたらあの人が蘇るのか？ 復讐なんて、所詮はお前の自己満足。それこそ、その辺にいる『悪』と同じ……反吐が出る」

「ゲホッ！ なに、を……」

「そして敵討ちも無理だとわかればすぐに煙草<sup>コレ</sup>で自暴自棄。そんな甘ちゃんじゃ、一生かかってもあの虹次には勝てっこない」

煙草をガリッ、と噛み締めながら厳しい言葉を刻へと浴びせる平家。咳き込みながらも反論しようとする刻だったが、普段の平家からは想像もつかないほどの厳格とした雰囲気、彼は何も言えずにいた。

そう、彼にできることといえば、せいぜい彼の言葉を認めまいと否定することだけだった。

「テメエ……言わせておけば勝手に——！」

「——将臣!!」

「——え？」

「将臣、それ以上あたしの可愛い弟いじめたら承知しないわよ？」  
振り返り、声がした方へと視線を向ける。そこにいたのは見間違えるはずもない……  
かつて彼の目の前で消えた人。

あの目を境に、決して相見えることの無かった本当の彼女……

「この『コード：ブレイカー』……藤原寧々音がね」

「ね、ねーちゃん……!?!」

刻が心から「姉」と呼べる相手……藤原寧々音だった。

## code: 81 たった一人のヒーロー

人間に限らず、生物というのは少なからず欲求というものを持っている。

その中でも人間は、特に多様な欲求を持っている。そうした多様な欲求の中でも生命活動の維持に必要な欲求を生理的欲求という。

食欲や睡眠欲などがそうだ。もちろん、人間はそうした最低限な欲求の他にも様々な欲求を持ち、見足そうと各々が考えている。

だが、そんな人間が生きる社会はどうだろうか。

店先に並ぶ食品一つを手に入れるためには金がいる。

安全が約束された場所で寝る・過ごすためには金がいる。

身なりを整えようと、服を揃えようとすれば金がいる。

何をするにしても、たとえそれが人間にとって最低限度な行動だとしても金がいるのだ。

だから人は金を得るために社会で働く。

金を得るため、時には対価となる物売り払う。

そうして人は金を得て、人としての生活を保っていく。

しかし、そうした手段で金を得ることができない者たちもいる。

罪に手を染めた者、働く力がない者、親を失った子ども……………

彼も……春人もその中の一人。

だから彼は語る。「生きるには金がいる。そのために悪に堕ちて何が悪いのか」……と。

「さあ、死ね！　大神！」

——ドドドドツ！！

「くっ……………！」

「大神！」

異能『変<sup>トランスフォーム</sup>殻』によって砲と化した春人の左腕から無数の弾丸が発射される。弾丸一

つひとつが鉄材などを球状に固めた物のため、直撃はしなくとも着弾した瞬間の爆風で飛び散った破片が確実に大神の身体を傷つけていた。

今こそなんとか直撃を免れてはいるが、ダメージが蓄積すれば動きは鈍くなり、直撃のリスクは高くなる。だが、それでも今の大神は『青い炎』を使わずにいる。逃げるしか手段はない。

「ちよろちよろと逃げ回るだけか！ 大方、弾切れを狙っているのだろうか……物がある限り、弾は無限に生み出せる！ いい加減、観念しろ！」

——ズオ！

勝ち誇った表情を浮かべながら、春人は空いた右手で周囲の物質を吸収していく。そうして吸収した物質を弾に変えて左腕の砲から発射し続けているのだ。

こう考えると、二人がいる工事現場というのは春人が圧倒的に有利なフィールドだった。鉄材はもちろん、用具などがそこかしこに置かれているこの場所では、春人は武器に困ることはない。

もちろん、物によっては大神でも武器として扱えるだろうが、春人の猛攻がそれを許そうとはしない。

「……………」

だが、それでも大神の眼は変わらぬ鋭さで春人を見ていた。そこに諦めのような感情は感じられず、なにかの機会を伺っているかのようにも見えた。



——ピキ

「そろそろ終わらせてもらおうぞ！溜めこんだ弾を一斉発射じゃ！」

——ドドドドドドドドドドツ！！

「ぐうー！」

——ピキキ

「もうやめろ、春人！　こんなことをするべきでは——！」

——スッ

「大………神………？」

「ふっ、観念したか！　さあ、その左腕を捧げてもら——！」  
そして、その時は訪れた。

——ビギツ!

「ぬっ!？」

——ドガアン!!」

「ぐあっ!」

「春人!？」

和樹はもちろん、当の本人である春人ですら何が起こったのかわからなかった。今まで逃げに徹していた大神が桜を庇うように彼女の前に出たかと思うと、次の瞬間には春人の左腕の砲が音を立てて爆発したのだ。砲を構成していたパーツは全てバラバラに飛び散り、残ったのはかつて大神に燃え散らされようとした際に斬り落とした左腕の傷のみ。

「こんなタイミングで……! 爆発か!？」

「いったい何が……? 私には今、砲が勝手に爆発したように見えたが……設計ミスか?」

「……違う」

桜も混乱する中、大神はただ一人何が起こったのかを理解していた。次に何が起こるのか、も。

——ドパツ!!

「ガハツ!? な、なんじゃ……これ、は……」

突然、春人の身体の至るところの皮膚が裂け、大量の血が噴き出した。口内へと溢れてきた血を吐きだしながら思わず膝を突き、春人は自分の身体に何が起こったのか考えようとしたが何もわからない。

すると、大神が春人との距離を詰めていき、冷酷な眼を向けながら春人の前へと立った。

「キツそうだな。お前の身体が異能に耐えられなくなったんだよ」

「な……!?!」

「……オレも途中から左腕と共に異能『青い炎』を得た身だ。同じ経験がある。異能の源は人間の生命力……使いこなせてもいない内に急激に使えば、身体がついていかなくなる」

そう……大神は春人がこうなることをわかっていた。他ならぬ、自身の経験から。そして、この先がどうなるかも……彼は知っていた。

「もうその辺でやめておけ。じゃねえと、ロストする前に生命力が事切れる……つまりは『死』が待っている。それもただの『死』じゃねえ。全身を裂かれるほどの痛みを伴った『死』だ。まあ……テメエみたいな『悪』<sup>クズ</sup>には似合いだがな」

「ぬ………！　ぐぐ………！！」

大神の冷酷な瞳が春人を射抜く。迫力に満ちたその言葉は、彼の言葉が嘘ではないことを物語っているようだった。春人もそれを本能的に感じたようで、何も言い返せず全身の痛みに耐えていた。

だが、彼はそれで終わるような人間ではなかった。

「それが……どうした!!」

——ギョオオ!!

「は、春人!？」

大神の言葉から、全身から今まさに感じる痛みから……このまま異能を使い続ければ自分の身体がどうなるかはわかる。しかし、それでも春人は右手を振りかざし、傍にあつたチェーンを吸いこみ左手に武器として構築していく。

すでに限界を迎えている身体は、吸いこんだ途端に皮膚が裂けて血が溢れ出し、口内に鉄臭い液体が溢れ出す。だが、それでも……

「それでも………！　異能を使えぬ、今のお前はただの人間………！　限界だろうが、この手で………仕留めてくれるわ!!」

——ガガガガッ!

痛みに耐えながら強気な笑みを浮かべ、武器として構築されたチェーンを大神の顔に

向けて放つ春人。大神は左手でそれを防御するが、彼の左手にチェーンが複雑に絡みついていた。元々彼の左腕が目的である春人にとっては願ったり叶ったりな状況になり、彼はそのまま左腕を引き千切ろうとチェーンを引き――

「――悪<sup>クズ</sup>が」

――ブチイ!

だが、次の瞬間……大神は異能も使わず、素手の状態である左手で、チェーンを軽々しく引き千切った。

「ただの人間……? 残念だが、クソネコに散々しごかれてきたからな。たとえ異能が使えなくても、今の弱り始めたテメエなんざ……オレの敵じゃねえんだよ。……三度

目の正直だ。今度こそオレの手で裁いてやる。春人……心して死ね」

「ぬ……………ぐ……………」

冷め切った眼で春人を見下ろす大神。それに対し、春人はそんな大神を見上げることすら難しいほどだった。

全身に痛みが広がり、思うように動こうとしない。誰が見てもわかる……春人の負け、だと。

「ぐ、うう……………!!」

それは春人自身もわかつてはいる。ここからの挽回は絶望的だと。今の自分を待つ未来は大神による裁き……死だと。

「……………なぬ」

理解はしていた。

だが……………

「——死なぬ!!」

——ゴッ!

「なっ!?!」

限界を迎え、先ほどまで膝を突いていた春人の身体が動き、大神に拳を放った。予想だにしていなかったことに、桜は大きく目を見開く。

——ビキ!!



「ぐうぐうぐうー！」

だが、春人の身体が限界なのは変わらない事実。引き裂くような痛みが全身に走り、再び膝を突きそうになる。

しかし、春人はそれに耐えて再び拳を握る。

「オレは、絶対に死なぬ！ 貴様如きにやられるか！ この身体がいかに傷つこうと！ この手がどれだけ血に染まろうと………絶対に死なん!!」

始末屋でも、自らの命に執着する者はいる。それはただ純粹に、「死にたくない」という命ある者なら持つて当然の思いからくるものだ。

だが、春人はそんな者たちとは違っていた。

かつて、左腕を切り落として命を永らえた。だが、腕を犠牲にしてまで生きることを選んだのは、決して死に恐怖したからではない。

それ以前に、始末屋として生きていく以上は死などというのは身近にあるものとして受け入れていた。

死への恐怖はない。

だが、それでも……………

（オレは物心ついた時には天涯孤独。だが、寂しさや不自由はない。金さえあれば生きていけた）

（気まぐれで、和樹じゅりを生かした）

(大した理由はない。情が芽生えたわけでもない。ただの気まぐれだった)

(じやりは……一人二人と増えていった)

(ふと気付けば……)

「春人兄ちゃん！」

「春人兄ちゃん！」

「春人兄ちゃん！」

「……春人」

(気まぐれは……日常になっていた)

「あと五年! いや……十年! あやつらが大人になるまで!」

気を抜けば全身が砕けてしまいそうなほどの痛みの中、春人は拳を振るい続ける。

「生きるにたる金が手に入るまで! ……オレは!!」

そして、大神もその拳全てを真正面から貫き受ける。かわすでもなく、捌くでもなく。

まるで……

「あやつらを……生かす!! たとえどんな悪に成り果てようと!!」

初めて吐き出された、春人の真意を受け止めるかのように。

「——バカが」

——ゴツ！

「ぬぐう！」

春人が、もう何度目になったかわからないほど振るわれた拳を再度振りかぶった時、大神は冷たい言葉と共に容赦のない蹴りを春人の顔面へと喰らわせた。

さらに……

——ゴリツ！

「ぐ……………」

倒れた春人の頭を踏み、強制的に地に伏せさせた。完全に大神が春人を見下し、その生死を自由にできる状態。そんな状態で大神は、春人に言い放った。

「『悪』<sup>クズ</sup>の分際で慈善事業の真似事とは……笑えるな。なあ、春人。そんなに金が欲しいんだったら……」

静かに、大神は内ポケットから一枚の真つ黒のカードを差し出した。そして、それを見せつけるかのようにひらひらと動かし、ニヤリと口角を上げた。

「始末屋・春人、テメエはオレが買ってやる。オレの靴を舐めて服従を誓え」

大神が春人に言い放った言葉を、その場にいた誰もが理解できなかった。

『コード・ブレイカー』である自分なら春人が望むだけの金は持っている。服従を誓えば依頼主の倍以上の金を渡す……そう取引してきたのだ。

だが、長年の宿敵からのそんな取引に春人が応じるはずもなく、その首を縦に振ろうとはしなかった。それでも大神は取引を受けるよう言い続けた。

金のために人を殺せるなら靴を舐めるくらい訳ない……そう言つて。

だが、春人はそれを断固として受けようとはしなかった。すると大神は、そのまま春人を蹴り飛ばし、無抵抗な彼をいたぶり始めた。まるで普段から彼らが対峙する「悪」そのもののような行動に、さすがの桜も大神を止めようとした時……彼らが現れた。

「やめろ！ 春人兄ちゃんをいじめんな、この悪者め！」

「そうよ！ あたしたちが許さないわよ！」

「ゆ、ゆゆ許さないいい……！」

それは、和樹のように春人が匿っていた子どもたちだった。彼らはその小さな身体を震わせながらも、必死になってこしらえた武器である泥団子を大神へと投げつけた。

彼らは言った。春人は自分たちを助けてくれた正義のヒーローなんだ、と。

そのヒーローをいたぶる大神は悪者として、彼らの攻撃を一身に受けていた。

そんな子どもたちに対して……大神はまたもニヤリと口角を上げながら言った。

「……そうさ。オレは悪。金のためなら人だって殺す悪だ。生きるには金がいる。それに、命だって金で買える世の中なんだ。その何が悪い？ オレは金のためなら人だって殺す」

「ツ——！」

大神の言葉を聞き、桜は大きく目を見開いた。なぜならその言葉は、先ほどまで春人が言っていたことそのままだったから。

だが、大神はまるで自分の意見であるかのようにそれを言い放った。

そして、それを聞いた子どもたちは……

「そんなのおかしいよ！ 自分さえよければ、他の人が痛い思いをしていいなんて！ オレたち、金はないけど春人兄ちゃんのおかげで今とっても楽しいんだ！ 一人だった時よりずっといい！」

「お金なんか無くたっていい！ みんなでいければそれでいいんだよ！」

そう言い、彼らは武器が尽きるまで大神に投げ続けた。彼らのやり取りを聞きながら柱に身体を預けていた春人は、静かに顔を伏せていた。

子どもたちの言葉は、本当は大神ではなく彼自身に向けられた言葉。それは、彼自身がよくわかっていた。



「……もう、嫌なんだよ」

「和樹……」

顔を伏せていた春人の隣に立った和樹が、絞り出すような声で言った。春人は顔を上げ、真っ直ぐと和樹の方を見つめてその言葉を聞こうとする。

「春人が傷つくのも、悪いことするのも……オレ、見たくねえんだよ。あいつらにも……知ってほしくない。だって……だって、春人は……」

和樹の身体は震えていた。

涙も溢れていた。

それでも、彼の言葉は力強く、不思議なほどしっかりと春人の耳へと届いた。

「春人兄ちゃんはおれたちを助けてくれた……たった一人のヒーローなんだ……！」

「……………」

溢れる涙を隠すように、乱暴に腕で目をこする和樹。そんな彼の言葉を聞いた春人は、全身の痛みに耐えながらゆっくりと立ち上がった。そして……

——ポン

「…………お前たちの下らん茶番のせいで、戦う気も失せたわ」

優しく和樹の頭に手を置き、そう言った。

勝敗で見れば、完全に春人の負け。しかし、不思議と悔しさなどは感じなかった。ただ、彼が抱いていたのは……今までとはまったく違った感情だった。

（大神零…………つくづく腹の立つ男よ。小癩な真似をしおって…………何があったかは知らんが、昔と違って嫌な奴になりおったわ）

不愉快だとは感じつつも、悪い気はほとんど感じない…………そんな不可思議な感情だった。

何があったかまではわからない。だが、それでも大神が変わったということは、敵である春人も感じ取ったのだった。

そして、当の大神はというと……

「にやにや」

「……………なんですか」

「オレの靴を舐めて服従を誓え！」

「……………」

今までとは打って変わって、にやけ面をした桜におちよくられていた。

最初は、いったいどうしたのかと感じていた。だが、今となってはまったく感じない。大神がしたことの本意は、桜はしつかりと理解していた。

「春人と子どもたちのために、わざと悪を演じたのだろう？ 憎い奴なのだ」

「……………なんのことですか？」

「ぬふふ、認めぬか。まあ、今回ばかりはそれもよかろう。にやにや」

「なんなんですか、さつきから……………！ あと、にやけるだけならまだしも、実際に口で『にやにや』とか言わないでください……………！」

桜がおちよくつてくる意味がわからず、気味悪そうに引く大神。そんな彼女にため息をつきつつも、彼は次にすべきことをしようと動いた。

そう……………春人のところへと。

「……………春人、わかっていると思うがまだ終わっちゃいない。お前の処遇についてだ」

「わかっておる。だが、その前にぬしに言っておきたいことがある」

「……………なんだ」

「知れたこと。お前とて気になっていることだ。」

オレが異能を得た理由と、オレにぬしの左腕を狙わせた依頼主についてじゃ」

「……………」

春人の言葉に、大神の眼がスツと細くなる。

しかし、今の彼はまだ知らない。

春人から語られようとしていることが、これからの闘いの幕開けであることを。

## code : 82 『狩り』の始まり

大神と春人の鬪いが終わり、春人から今回の依頼についての真実が語られる数分前……『渋谷荘』では驚くべき事態が起きていた。

それも、並大抵のことではない。なぜなら……

「つたく……将臣のバーカ！ 私の弟いじめるなって、何回も言ったでしょーが！」

「ね、寧々音……」

かつて癡痕の『Re-CODE』によって刻の目の前で命を奪われ、もう二度と会えるはずがない姉……寧々音が目の前で生きており、平家に悪態をついている。

いや、正確に言えば藤原寧々音という一人の少女の身体は生き続けており、刻自身も桜と知り合ってから会ったことはある。命を奪われたのは、かつて『コード：ブレイカー』として生きた時の彼女の記憶……人格とも呼べるものなのである。だから今の寧々音は刻のことを知らないし、ましてや自分が自分の弟などとは夢にも思っていない。たとえ彼が、自身の生命力の塊である異能を分け与えた唯一無二の存在だとしても。

しかし、現実はどうだろう。今まさに刻の目の前で喋っているのは、紛れもなく『コード：ブレイカー』だった時の寧々音の人格。今あるべき彼女だったら平家のことを「まー

くん」と呼ぶし、間違つてもこんな強気な口調で悪態をついたりしない。

さっぱり現状が理解できない刻に対し、平家は刻から奪つた煙草を啜えたまま平然と寧々音と向かい合つた。

「おや、手厳しいですね。寧々音、これでも私はとても大切に彼のことを見守つて居るのですよ?」

「ハツ、どうだかね……。つていうか、いい加減煙たいのよ!」

かつて共に『コード：ブレイカー』として活動してきた旧知の仲であることを感じさせるやり取りをしつつも、寧々音は平家が啜えている煙草を勢いよく没収する。そして華麗に煙草の向きを変えると、火が点いている方を平家へと向けた。

「あんたは昔からおいたが過ぎるのよ、将臣」

「……あなたには敵いませんね」

——ジウウ

火を向けられながら変わらぬ悪態をつかれる平家だったが、特に気にする様子も無く彼女に向かつて掌を出す。すると、寧々音は何の躊躇もなく平家の掌に煙草の火を押しつけ、彼の手でその火を消した。

まるでいつものことのように接する二人に対し、刻は完全に置いてけぼりをくらつていた。

（ど、どーなってるんだ……？　今の寧々音ねーちゃんはオレのことを覚えてないはず……。眼鏡だっと思ってないし、いったいどうなってるんだヨ……）

警戒しつつ、まじまじと寧々音を見る刻。普段から彼女が着ている輝望高校の制服ではなく、黒を基調としたへそ出しのセーラー服。そして学校では常にかけていた眼鏡も無く、学校での彼女しか知らない者が見たらとてもじゃないが寧々音とは信じられないだろう。

一体何が起こっているのか、刻が混乱していると寧々音は軽快な足取りで刻に近づいていき……

「久しぶり」

「のわっ！」

刻の胸倉を掴み、ぐつと自身の顔に近づけて刻の額と自身の額をコツンと合わせた。先ほどよりもより近くで見ると寧々音の顔……それは見れば見るほど偽者とは思えないし、額から感じる彼女の体温がしっかりと現実と彼女が存在していることを感じさせた。

「すっかり背も伸びてイイ男に育って……。ねーちゃん、嬉しいよ」

「ほ、本当に……寧々音ねーちゃんなのか？　オレのこと……わかるのか？」

「当たり前でしょ？　あんたは私の可愛い弟なんだから」

「け、けど寧々音ねーちゃんはあの時に……。一体、なにがどうなって……」

寧々音の存在を確かにその身に感じながらも、やはり信じきれない刻。無理もない。いくら一般とは外れた世界にいる『コード：ブレイカー』といえども、死んだはずの人間が生きているなんて超常現象を易々と信じられるはずもない。

なぜ、どうして、なにがあつて……。どれだけ考えても答えが出ない刻は、当人である寧々音に尋ねようとする。平家も事情を知つていそうな雰囲気だったが、彼の性格を考えると素直に教えるとは思えない。

しかし……

「悪いけど、詳しく説明してる時間はないの。……今回は、アレが少ししか開かなかつたから私が動けるのはほんの少しだけ」

「アレ……？　開く、つて……まさか、パンドラの箱ボックスか!?　アレと寧々音ねーちゃんには何か関係があるのか!」

「……ごめんね。いつか……また、必ず——」

寧々音の復活にパンドラの箱ボックスが関係あるとわかったところで、途端に寧々音の存在が薄くなったように感じた。心なしか、声も小さくなっている気がする。彼女の話から考えると、活動限界を迎えようとしているのだろう。

「ま、待ってk——!」



——キーン!

「ッ!？」

なんとか呼び止めようとした時、寧々音から光が放たれる。突然のことに思わず目を瞑った刻が次に見たのは……身体から力が抜けて座り込む寧々音の姿だった。そして……

「……あれ? まーくとマグネスなのー」

(も、戻ってる……!?)

すぐに目を開いた寧々音は、完全に今の彼女に戻っていた。その雰囲気も、先ほどまでの彼女のような力強さは感じられず、おっとりとした雰囲気か漂っていた。

「んー……なんかお腹がスースーするの。あれ? メガネがないのー」

「……藤原さん、眼鏡はこちらにありますよ」

「やったー。ありがとなの、まーくん。……まーくん?」

自分の格好がいつもと違うことに気付き、寧々音は腹部をさすりながらキョロキョロと辺りを見渡す。すると、平家がどこからか彼女がいつもかけている眼鏡を差し出した。戻ったからか、彼女に対する呼び方も、「寧々音」から「藤原さん」へと意図して変えて。

しかし、意図せずして変わった部分もあった。

「まーくん……どうしてそんなに悲しそうな顔してるの？」

「……なんでもありませんよ、藤原さん」

声色だけ聞けば普段と変わりない様子だったが、その表情はどこか悲しそうに曇っていた。なぜ彼がこんな顔をしているのか……それは彼にしかわからないが、寧々音は「いーこ、いーこのな」と言つて優しく平家の頭を撫で始めた。

「オイ、平家！ 一体どうなつてんだヨ！ 説明しろ！」

何があつたか聞き出そうとした寧々音も消えてしまい、彼女が一時的にとはいえ戻つた原因を知っているであろう人物は平家一人となつた。本意ではなかつたが、刻はなんとか彼から真実を聞き出そうと声を荒げた。もちろん、寧々音もいるのである程度ボリユームは下げているが。

だが、はたして平家が素直に教えるものか……と考へていると、意外な言葉が返つてきた。

「……教えるのは構いません。しかし、一つだけ条件があります」

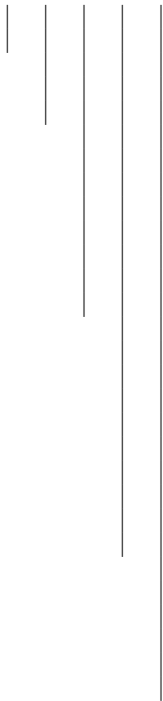
「はあ……？」

意外にもすぐに「教える」と言う平家。思わず面食らつてしまった刻だったが、平家が発した「条件」という言葉に首を傾げる。

「『エデン』からのある指令をあなたに受けて頂きたい」

「指令ゴミつて……  
……いいえ。悪ゴミ掃除か？」

『狩り』ですよ。ある獲物の……ね」



そして時は戻り、大神と春人の決着がついた頃……春人は大神と桜に今回の依頼についての真実を語り始めた。

「大神……今回オレに貴様の左腕を狙うよう依頼した者、そしてオレに異能を与えたのはパンドラの箱ボックスと呼ばれる宝物ほうもつを所持した一味じゃ」

「パ、パンドラの箱ボックス!? ということは……時雨が!?」

「生憎、依頼主とは直接顔を合わせたわけではない故、その時雨という者かどうかはわからぬが……奴は貴様のことをよく知っているようじゃったぞ、大神」

「……………」

春人が語った依頼主の正体は、パンドラの箱ボックスを持っている者たち。それが誰であるか、大神たちは『捜シ者』との闘いでよく知っていた。『捜シ者』の部下である『Re | CODE』でありながら『捜シ者』の眼を欺き、パンドラの箱ボックスを奪って姿を眩ました時雨こそが、春人に大神を狙わせた張本人だった。

春人の口から語られた真実に桜は驚くが、対して大神はいたって冷静だった。

そして、次に春人は自らに与えられた異能について話し始めた。

「そしてオレに与えられた異能じやが……実際のところは催眠状態にあつたため詳しい方法はオレにもわからん。だが、依頼主の話だとパンドラの箱ボックスの作用で異能を得たということらしい」

「パンドラの箱ボックスが、異能を……!?!」

続けざまの真実に、桜は大きく目を見開く。先の闘いで、パンドラの箱ボックスが開いたことで『捜シ者』に異能が戻ったところは桜も目にしている。しかし、それはあくまで『捜シ者』が元々持っていた異能がパンドラの箱ボックスに封じられていたからだ。それに対し、春人は元々異能を持っていない。つまり、パンドラの箱ボックスには人間に異能を与える……異能者を生む力があるということだ。

（あんな小さな箱にそんな力が……? まさか、パンドラの箱ボックスには私が思ってる以上にとんでもない力が秘められて……）

掌に収まるほど、白くて小さな箱。だが、渋谷はそんな小さな箱を命懸けで守ろうとしていた。それは『捜シ者』に異能を戻さぬためかと桜は考えていたが、春人の話から察するにパンドラの箱ボックスには想像以上に危険な代物なのでは思い始め、そんな物を持って姿を眩ませた時雨に桜は改めて危機感を覚えた。

「……オレが知るのはいくらまでじゃ」

「……そうか」

「……………のう、大神」

全てを話し終えた春人は、真っ直ぐ大神を見る。そして、意を決したように次の言葉を口にした。

「オレを燃え散らすがいい。元々、許しを乞うつもりは毛頭ないからな」

「は、春人!？」

まさかの言葉に、桜は先ほど語られた真実を知った時以上に驚く。和樹たちという守るべき存在があるにもかかわらず、大神に自分を殺すよう言ったのだ。

「オオ!? なんだよコイツ、面白えじゃねえか! どうすんだよ、零!」

「……………」

大神の左手に『青い炎』の火の玉が宿り、『エンペラー』がにやにや笑いだす。ふざけているとしか思えない様子の『エンペラー』に対し、大神は表情を一切変えずに春人を見ていた。

「駄目だ、春人! 死んで何になるというのだ! 死は何も生まん!」

桜はなんとか春人を説得しようと、力強く春人の両肩を掴む。彼女はこれまでの闘いで知っている。死というものがどれだけ残酷で、どれだけ虚しいものなのか……を。

「たとえ己の罪を認め悔やんでも……死はなんの償いにもなりはしない! どんなに悪人だとしても、死は虚しさしか生まないのだ! そうだろう、大神!」

必死に言葉をぶつけながら、桜は平家たちが言っていた言葉を思い出していた。

……………人が死んだ後ってのは、無駄だとわかっているても色々と考えちゃうのサ。

——たとえ相手がどんな「悪」だろうと……報復という名の死には虚しさしか残らない。何事でも決して埋めることなどできない虚しさが。……もつとも、我々『コード：ブレイカー』の手は、そんな虚しさしか生み出すことはできませんがね。

これまで数えきれないほどの「悪」をその手で裁いてきた『コード：ブレイカー』たち。そんな彼らだからこそ、死の後に遺るのがどんなものかよく知っていた。そして、それは彼らと行動を共にしてきた桜も痛感していたことでもあった。だからこそ、彼女はどうしても春人が死ぬことを止めたかった。



「だから春人！ 償うんだつたらもつと別の形で償うべきだ！」

「……だからといって、オレが傷つけてきた者たちへの痛みをなかつたことにはできん」

しかし、春人の決意は揺るがない。始末屋として多くの者を傷つけてきた彼の罪は計り知れない。そして、それは当人である彼自身がよくわかっていることだった。

だからこそ、自分には死という罰が相応しいと考えているのだろう。

「春——！」

「桜小路」

春人の説得を諦めようとしないうちに桜に対し、春人はそれを遮るように右手を彼女の前に出して彼女の言葉を制した。そして、少し離れたところに視線を送る。

そこには、無邪気な笑顔で遊ぶ和樹たちの姿があった。

「ぬしがあの時、オレを生かすなどという余計なことをしてくれたおかげじゃ。こんな……こんな下らん気持ちを知ることができたのは。……すまんが、じやり共を頼む」

「ツ——！」

和樹たちを見つめながら、フツと微笑む春人。それはどこか満ち足りたようで、それでもどこか残念なようで……今まで春人が大神たちの前で見せたことのない顔だった。

その言葉を最後に、大神が春人との距離を詰める。そして、『エンペラー』が消えた左

手を静かに自らの胸の高さまで上げた。

「……春人、命の罪は命でしか償えない。お前の望み通り……裁いてやる」  
そして、大神は左手を春人の肩へと置く。次の瞬間には……左手に『青い炎』が灯つた。

「目には目を 歯には歯を 悪には悪を」

「つぐ！ ぐあああああ!!」

「や、やめろおおお!!」

——フツ

「な……!?!」

大神の『青い炎』が春人の全身を包み込んだ……かに見えたが、その『青い炎』は一瞬で消え去った。大神が左手をグツと握りしめたのと同時に。

全身を襲っていた痛みが突如として消えたことに春人が戸惑っていると、大神は春人の胸を指差した。

「——『咎<sup>とが</sup>めの炎』。お前が死ぬまで決して消えることなく体内で燃え続け、お前を咎める枷だ。そして、お前が再び罪を犯そうとすれば一瞬で業火になり、お前をチリ一つ残さずに燃え散らす」

「オレの、体内で……」

大神の言葉を受け、春人が自身の胸に意識を向けると僅かながら焼けるような痛みが確かにあった。死ぬ間で燃え続けるということはこの痛みが一生続くということだが、決して日常生活に支障をきたすほどの痛みではない。

「言った通りだ。命の罪は命でしか償えない。だが、お前のような『悪<sup>クズ</sup>』に死は甘すぎる。これは死よりも辛い罰。生きて犯した罪を償え。……命の限りな。まず手始めに、あのガキ共をいっばしに育て上げることだ」

「……ッ！」

大神のその言葉を聞き、桜の頭の中には『捜シ者』が最期に遺した言葉が浮かんだ。

——お前に死など甘すぎる。苦しんで生き抜きな。

「大神、お前……」

「チツ、オレ様と共に生まれた『火種』をもう自在に操りやがって。しっかし、随分とイキな裁きをするようになったじゃねーか」

大神が下した裁き……それは『捜シ者』が大神へと遺した言葉を同じだった。今までの大神だったら、おそらく何の躊躇もなく春人を燃え散らしていただろう。しかし、『捜シ者』との闘い……『捜シ者』の死によつて、大神も少しずつ変わっていつているのだと桜は感じていた。

だが、もちろん春人はそんなことは知らない。それでも大神が以前とは違うことは感じた春人は、どこか疑うような視線を大神に向ける。

「オレを……生かすのか？ 何があつたのか知らんが、随分と変わったものだな。じゃが、こんなことしたところで——」

「変わつてねえよ」

「なに……？」

春人の言葉を遮るように、大神はそう言い放つ。そして、フツと笑いながら続けた。

「オレは『悪』……いや、『極悪』だ。地獄に堕ちるその時まで、この世の『悪』を燃え散らす。……一人残らずな」

覚悟の証のように、静かにそう告げる大神。そして、彼は『悪』を燃え散らすための

左手に手袋をして――

「ぬん」

――ガシッ

「……………は？」

――ぶんぶん

「……………ちよつと」

――ぶんぶんぶんぶん

手袋をしようと思つたら、桜が両手を掴んでそれを止めた。そして、なぜかそのまま左手をぶんぶんと上下に動かし始めた。振りほどこうとしたが、桜の馬鹿力の前に大神は成す術が無かつた。ちなみに、桜の握力は51kgである。

「な、何するんですか……………。手袋を……………」

「へへへへへへへへ」

振りほどけないなら直接言おうと桜に声をかける大神だったが、当の桜はにやにやと笑いながら普段なら絶対しないであろう不気味な笑い方をしていた。

しかし、そんな不気味な光景は東の間。心から安心したような穏やかな表情を浮かべた桜は、掴んだ大神の左手に自身の頬を静かに当てた。

「初めて『ハグ』した時から伝わっていたぞ。大神……………お前の手は確かに血塗られては

いるが、やはりとてもあたたかい。

——大好きだ」

「……誰が何を好きだったって？」

「む？　何がなのだ？」

桜らしい、純粋な気持ちのこもった「大好き」という言葉。それに対して、『エンペラー』はそういうことかと確認するかのようにジトリとした視線を送るが、純粋な桜はその意図を読み切れずに首を傾げた。……この様子を見ると純粋というより鈍感とい

う感じかもしれないが。

「……………」

そんな桜たちの様子を見ていた春人。今までだったらこんなやり取りは「茶番」と言っていたかもしれないが、今は違う。彼らのやり取りを見て、春人は一人静かに穏やかな笑みを浮かべ……納得していた。

（この娘にして、この男あり……ということか。何が「正義」で、何が「悪」かわからんこの世界だが……貴様なら辿り着けるかもしれないな。

その先の真実に――)

「——困った……困ったものだ」

——ドツ!!

「がっ!？」

「は、春人!？」

「ぐ……う……!？」

突然、春人の背後から先の尖った鉄パイプが投げつけられ、的確に春人の左胸に突き刺さった。幸いにも心臓に直撃はしなかったらしく、春人は痛みを耐えるように歯を食いしばりつつ膝を突いた。

桜と大神はすぐさま春人に駆け寄り、そのまま背後の方を見やる。そして、そこにい



たのは……

「この程度も避けられんとは……所詮は『悪』、ということか」

「し、時雨！」

所有権を主張するかのようにその手にパンドラの箱を持ち、見下すように春人を見る……時雨。だが、それだけではなかった。

「左腕も奪えぬ『悪』に生きる……生きる価値はない」

春人に突き刺さったものと同じ鉄パイプを持つて座るフードを被り肩に小鳥を乗せた謎の人物、さらに彼らの奥には同じようにフードを被った者が二人……三人とも顔は見えないが、彼らからは明らかな敵意を感じた。

「よくも……こんな、卑劣な……！ 時雨と一緒ということは、お前たちが依頼主か!?」

「……………」

春人の身体を支えつつ、時雨たちに怒りを爆発させる桜。隣では大神がいつでも動けるように鋭い視線を時雨たちに向けていた。

しかし、当の時雨たちは何も答えようとはせず、それが桜の怒りをより爆発させた。

「この……！ なんとか言ったら——！」

「——やめや。『にやんまる』、そこまでにしとき」

「遊騎君！ それに刻君も！」

桜たちと時雨たちの間……そこに現れた顔を見て桜の表情は明るいものへと変わる。当然だ。遊騎と刻……これまでの鬪いを共に乗り越えてきた者たちだったのだから。

「よかつた……。二人とも、助けに来てくれたのだな。けど二人とも、気を付けるのだ。奇襲とはいえ……奴らは春人に——」

「わかつとる。」

全部……知つとつたし」

そう言つて、二人は歩き始める。  
彼らが……共に闘うべき者たちの方へ。

「…………え？」

そう…………時雨たちの方へ。

「ふ、二人とも…………？　なにを、してるのだ…………？　危険だぞ…………早く、こつちへ——」  
「行けねーヨ」  
「え…………？」

『』にゃんまる』……オレらもう、仲間やないねん。

“エデン”は……オレら『コード・ブレイカー』にこいつらと組んで、大神ろくぼんの左腕……  
『青い炎狩り』の指令を下したんや。せやから、オレらはもう仲間やない——敵や」

「な、にを……」

遊騎の言葉を、頭はすぐに理解しようとはしなかった。だが、目に見える現実……時

雨たちと並んで立つ遊騎と刻の姿を見て、身体は自然と震えていた。

「なにを……言っているのだ……？ う、嘘だろ……？ そうに決まって——」

『コード：エンペラー』が復活した……その時点で、こうなることは決まってたらしいわ。言つとくけど、ここにはおらんだだけで……平家（にほん）、そして優（ななほん）も同じや。……そろそろ王子（ごほん）にも話がいつてる頃や」

「な、あ……そ、そんな……」

嘘だ、という言葉は出てこなかった。出したい、と思っても身体がそれを拒否するかのように口が上手く動かない。それだけ遊騎の言葉と態度は真剣そのもので……向けられる殺意も本物だったのだから。

「堪忍な、大神（ろくぼん）。その左腕……オレらが貰うわ。わかっと思おうけど……生死は問わんつちゅーことや」

[.....]

こうして、新たな闘いの幕が開く。

だが、それは今までの闘いよりもはるかに厳しく、凄惨な闘い。

背中を任せる者も、共に闘う者も誰一人としていない……孤独な闘い。

敵は……『コード：ブレイカー』。

n  
e  
x  
t  
  
c  
h  
a  
p  
t  
e  
r  
—  
『青い炎狩り』  
篇



## 番外篇

code : X-1 過去～past～

それは、『天下一品』から帰って数日経った頃に起こった。

「た、大変だー!!」

突然、『渋谷荘』リビングの扉が勢いよく開け放たれたかと思うと、大きな袋を持った桜が肩で息をしながらそこに立っていた。明らかに何かあった様子だったが、ちょうどリビングにいた大神は特に慌てることも無く……それどころか、どこか冷ややかな視線を桜に送るのだった。

「……買い出しから戻ってきたかと思えば、いったい何事ですか？」

「だ、だから……大変なことが起こったのだ！」

「……そうですか、大変ですね」

「大神！ お前、真面目に聞いていないな！」

「あく、うつせーナ。いったいなんだっつーの」

適当な対応をする大神にご立腹な桜だったが、そんな二人の（主に桜の）騒ぎを聞きつけて他の住人たちもリビングへと集まり始めた。まあ、そのほとんどが大神と同様に危機感など欠片も感じていない様子だが。

『「にやんまる」、なんかあったんか？』

「何かあったんだとしても騒ぎ過ぎだ。もう少し落ち着け、桜小路」

「う……す、すみません」

「ま、桜ちゃんらしいっちゃらしいケド。んで？ なにがそんな大変なんだヨ」

「おお、そうだ！ 大変なのだ！」

「だから何がだっつーノ……」

王子に諭されて一度は落ち着いた桜だったが、刻に何があったか尋ねられてすぐに復活する。ぶんぶん両手を興奮気味に振っているが、おかげで話がまったく先に進まない。

さっさと話を終わらせようと思い、大神は自分の方から質問することにした。

「買い出しで何かあったんですか？」

「む！ 勘が良いな、大神！ まさにその通りなのだ！」

「買い出し？ 行ったらまたまたタイムセールでもやってたとか？」

「ふっふっふ……刻君、そんなことで満足しているようではまだまだぞ？」

「……なんでオレ煽られてんノ？」

大神の予想通り、どうやら桜が先ほどまで行っていた買い出しで何かあったらしい。買い出しで興奮すること……ということでは刻はタイムセールでもあったかと考えたが、桜は腕を組んでどこか勝ち誇ったような笑みを浮かべてそれは不正解だと語る。

では何があったのか……その言葉を誰かが言うよりも早く、桜は堂々と胸を張って正解を口にした。

「なんと！ 買い出しに行く途中でたまたま拾った福引券で福引をしたら3等賞が当たったのだ！ どうだ！ すごいだろう！！ ハッハッハ！」

((く、下らねえ……!))

『にやんまる』、すごいわー』

散々引つ張った挙句、ただ福引で3等賞が当たっただけという桜の言葉に、大神、刻、王子の三人はなんとも言えない表情になった。一方、遊騎はパチパチと拍手をしながら唯一桜を称えていた。

「わかってくれるか、遊騎君！ 恥ずかしながら、今までやった福引はハズレばかり……。3等なんて上位の物が当たるなんて夢にも思わなかったのだ！」

「……なんつうか、幸せ者だな。アイツは」

「ホント……さすが桜ちゃんだわ」

「ハア……」

福引で3等が当たったというだけで満面の笑みを浮かべる桜を見て、改めて桜小路桜という少女の人間性を知った王子と刻。そして、大神はというと深々とため息をつくのだった。

「ところで『にやんまる』、なに当たったんや？」

「うむ、よくぞ聞いてくれたのだ。えーっと……」

純粋なためか、桜と一緒に喜びを共有していた遊騎は肝心の景品は何かと気になっていた。首を傾げながら景品の内容を聞くと、桜は持っていた袋を置いて何やらゴソゴソと捜し始めた。それを見て、大神たち三人も自然と出てくるものに注目し始めていた。下らないとは思いつつも、何か物が当たったとなれば何が当たったか気になるものだ。

「今回当たったのは……これなのだ!!」

そう言つて桜が取り出したのは……桜の顔より一回りは大きい円型の物体。ポツンと存在する小さな円を中心に、花火を思わせる黒白の模様が外側へと向かつて伸びている。そして、その先には散り散りに割り振られた1から20の数字があった。

それは、学生である桜や大神にしてみればあまり近いものとは言えない。だが、それが何であるかは誰もがわかっていた。

「……ダーツ?」

「うむ。ダーツ盤と矢のセットだったのだ」

「……………」

「どうだ、すごいだろう」と言わんばかりに胸を張る桜に対し、大神たちの反応は寂しいものだった。言葉にするんだとしたら「なんだ、そんなものか」というレベルだ。

「な、なんだその反応は! 3等だぞ?! 上から三番目の商品なんだぞ!」

「……ちなみに桜チャン、他の商品はなんだったワケ?」

「む？ えーつと、1等は温泉のペア宿泊券で、2等は商品券1万円分。で、4等は蟹セットで5等はトイレットパーパー半月分だったのだ」

「なんでそのラインナップで3等がダーツなんだヨ！ 明らかに3等と4等、逆だろ！」

「いやいや、バカにははいけないぞ。このダーツセット、ちよつとお高いダーツセットらしいのだ。あくまでちよつとらしいが」

「ちよつと、なのネ……」

明らかに他の景品と比べて豪華さが劣る内容に肩を落とす刻だったが、桜はスルーしてダーツ盤を壁にセットし始めた。最中、大神に「高さはこのくらいか？」と確認していたが、大神は「そうなんじゃないですか」と適当な返事をするのだった。

そして、壁にダーツ盤をセットすると、桜はいそいそと矢を持って盤から距離をとった。そして、楽しみでしようがない、といった表情で矢を構えた。

「ふっふっふ……何を隠そうこの桜小路桜、ダーツをやるのは初めてなのだ！ だが、ちゃんとルールは知っているのだ。真ん中を狙って………とお！」

——カッ！

真ん中を狙って放った桜の矢は、見事に真ん中に……とはいかず、真ん中より右斜め上にずれたところに刺さった。その後も二発続けて投げる桜だったが、どれも真ん中に

はかすりもしなかった。

「うぬぬ……！ やはり難しいのだ」

「あくあ、見てらんねーナ。桜チャン、ちよいとオレに貸してみ」

「刻君？ もしかして……ダーツができるのか？」

「当つたり前ジャン。ダーツはモテる男の嗜みだぜ？ あと、ダーツで真ん中狙えば

いいつてのは高得点取るって意味じゃ間違いないんだヨ、桜チャン」

「え!!? そうなのか!?!」

ダーツの難しさを桜が噛み締めていると、刻が仕方なさそうに盤に刺さった矢を回収した。そして、桜が立っていた位置まで移動しながら、自信満々な様子でダーツの説明を始めた。

「ダーツにも色んなルールがあるからそれによって変わるけど、純粹な点取り勝負だったら真ん中は50点。でも、一番高いのは真ん中から上に向かって伸びてるゾーンの……あの狭いところ」

「そういえば、いくつか色分けされているな……。これはなんの意味があるのだ？」

「真ん中より少し外側のところはシングル。外側に書いてある数字がそのまんま得点になるところ。んで、一番外側にあるのはダブルで点が2倍。シングルとダブルに挟まれている狭い部分がトリプルで3倍ってワケ。真ん中から上に向かって伸びてるとこ

ろは20点のゾーンだから、そのトリプルに当てれば……60点ってこと！  
——カッ！

説明を終えると同時に矢を投げる刻。すると、刻の矢は見事に20のトリプルへと刺さった。刻の射撃の腕が高いことは知っていた桜だったが、ダーツでもその才能が発揮されたところを見て目を輝かせた。

「おお！ 刻君、すごいのだ！」

「まあね〜！ 射撃が得意なオレにとつて、あれくらいの的を狙うなんて朝飯前なんだよ……ネツ！」

その後も二発続けて投げる刻。しかし、一発目はわずかにずれて20のダブルへと刺さる。そして二発目に関しては……18のトリプルへと刺さった。

「外れてますよ。朝飯前じゃないんですか？」

「う、うっせー！ こちとら手が全快じゃねーんだから外すのは仕方ねーっの！」

自信満々に投げておきながら外した刻を見て、大神はここぞとばかりにそれを指摘する。刻も予想外だったらしく、顔を赤くしながら反論するが悪あがきにしか見えない。

と、彼らが騒いでいると別の住人が新しくリビングへとやってきたのだった。

「さつきから騒がしいと思って来てみれば……何事だ？」

「夜原先輩！ 実はですね……」



少ししかめっ面をしながら入ってきた優に、桜は福引でダーツセットを当てたこと、刻の腕前がすごかったことなど……事の経緯を説明した。

桜から一通りの経緯を聞いた優はダーツの矢を一本持ち、興味深そうにそれを眺めていた。

「……ダーツ、か」

「よければ先輩もやってみませんか？ 先輩も初めてだったら、初心者同士で上達を目指しましょう！」

「ハハハ！ 無理だつて、桜チャン。こんな下つ端ヤローは百年経つたつてダーツなんてできるわけねーつてノ」

「……ふむ」

興味を持った様子を見せる優をダーツに誘う桜だったが、その後ろでは刻が下品な笑みを浮かべながら辛辣な言葉をかけていた。

だが、当の優はそんなものは無視して桜と刻が投げた位置に立つ。矢を構え、ダーツ盤を真正面に見据え……放った。

——カツ!

「……エ?」

刺さったのは……20のトリプル。優の放った矢は、吸いこまれるようにそこへと刺さっていた。

「……久し振りにやったが、腕は落ちていなかったようだな」

「ええ!? 先輩、ダーツをやったことがあるんですか!」

「へえ、それは初耳だな」

「……嗜む程度だ」

優がダーツ経験者であることに驚く桜、そして感心する王子だったが、そんな二人に對して優は調子に乗ることも無く、続けて二発を投げるのだった。

——カッ!

20・トリプル。

——カッ!

20・トリプル。

「……180点だ」

「おおおおお! 全部20のトリプルに入っているのだ!」

「中々やるじゃねえか。フォームも綺麗だったし、随分やり込んでたんだな」

「刻は外したけど、よんぼん優ななぼんはすごいな」

「ええ、刻は外しましたけどね」

「うっせー!!」

見事に3投全て20のトリプルへと投げた優の腕前に、一同は感心する。

だが、遊騎と大神に煽られたからか、それとも純粹にプライドが許さないのか……刻だけは面白くなさそうに苛立っていた。

「こ、こうなつたら……優！ オレと勝負しやがれ！」

「別に構わないが……お前、手がそんな状態でできるのか？」

「ハッ！ これくらいハンデだっつーノ！ テメーにオレの本気、見せてやるぜ！」

そう言うと、刻は眼帯を出して右眼を隠した。彼が銃を使う時のみ見せる、射撃特化のスタイルだ。

「ルールは3投8ラウンドのカウントアップ！ 純粹な点取り勝負だ！ 負けたらオ

レに土下座しやがれ！」

「なんで土下座しなきゃいけないのかわからないが……了解だ」

「な、なんだか白熱してきたのだ！ 頑張れ、二人とも！」

「おい、零。ボードか何か持つてこい。二人の点数、書いとかねえとな」

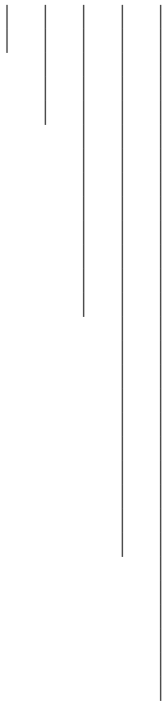
「なんであなたまで乗り気なんですか……」

こうして、刻のプライドと優の土下座を懸けた二人の勝負が始まったのだった。

「よし！ それじゃ始めるぞ！ 対戦するのは優と刻！ ルールは3投8ラウンドのカウントアップ！ 全て投げ終わった後、点の高い方が勝ちだ！」

「うむ！」

「言っておくが、審判はオレだ。不正なんてしようもんならば殺してやるから覚悟



しろ」

「王子殿！ お任せしました！」

（何気に一番楽しんでいるだろ……王子）

点数を書くための画用紙を用意したところで、王子が高々と二人の対決の幕開けを宣言した。それに同調するようにテンションを上げる桜だったが、大神はそんな二人の様子を呆れながら観察するのだった。

「んじゃ、先攻後攻決めよーぜ。何で決める？」

「……コイントスでいいだろ。どっちに懸ける？」

「テメーは裏手がお似合いだからナ。オレは表だ」

「じゃあ、当たった方が先行だ」

——ピン！

プレイする順番を決めるため、優はコインを出してコイントスを提案する。特に順番は気にしていないのか、刻は深く考える様子も無く「表」に即決する。

刻が決めた面を聞くと、優はすぐにコインを親指で上空へと弾く。天井ギリギリまで上がったコインは重力に乗っていき、優の手の甲へと落ちる。それと同時に優がもう片方の手でコインが見えないように隠し、しっかりと手の甲にコインが乗っていることを感觸で確認する。

ゆっくりと手をどけると、コインがしっかりと手の甲に乗っている。見えていた面は……「表」。

「よっし、オレの先行ナ」

「刻君、頑張るのだ！」

「オイオイ、桜チャン。頑張る必要なんかねーつての。相手は所詮、下っ端の優なんだからサ」

「さつき、その下っ端より低い点を取ってたくせによく言うな」

「言つたる？ さつきは本気じゃなかったんだヨ。本気のオレを舐めんな……ヨ！」

——カッ！

——カッ！

——カッ！

さつきと三発続けて投げる刻。一、二発目は見事20のトリプルへと刺さるが、三発目は20のダブルへと刺さっており、合計は160点となった。

「チツ、少しずれたか。ま、でも上出来ダロ」

「刻の1ラウンド目は160点だ。次、優の番だ」

画用紙にしつかりと刻の点数を書くと、王子は後行である優を呼ぶ。優は表情を変え、することも無く、定位置に立って構えた。

「へっ、さつきはまぐれで180点取れたかもしれねーが、そんなラッキーが何度も続く——」

——カッ!

「わけ——」

——カッ!

「な、い……」

——カッ!

刻が言葉を言い終えるよりも前に、優は3投を投げ終える。それらは全て、20のトリプルへとしっかり刺さっていた。

「す、すごいのだ! 夜原先輩、また満点なのだ!」

「ぐぐぐ……! な、舐めんなヨ! 次はオレだつて!」

2ラウンド目……刻118点・優180点

3ラウンド目……刻150点・優180点



4  
ラウンド目……刻170点・優180点

5  
ラウンド目……刻160点・優180点

6  
ラウンド目……刻114点・優180点

7  
ラウンド目……刻96点・優180点

そして、迎えた最終ラウンドでは……

「オラア！」

「……18のダブル。刻の点数は112点だ」

「ち、ちつくしよおおお!!」

最後まで満点を取ることなく終えた刻。すでに勝敗は決しているが、それでも優が投げ終えるまでゲームは終わらない。

そして、優は最後の3投を投げるため矢を構える。

「それにしても、夜原先輩はすごいな……。今のところ全部満点なのだ」

「……そうですね。そこは素直に驚きました」

もはや勝敗も決したということもあつたが、観戦者である桜と大神は優の腕前に唾然としていた。まさかこれまでの全ラウンドで全て満点を取るとは思っていなかったからだ。

だが……

「……これくらい、驚くことでもない。なんだつたら、もう少し驚かせてやる」

「え？」

桜と大神の言葉を聞き、ポツリと呟く優。そして次の瞬間……彼の宣言通り、彼らは

驚くこととなる。

——カカカッ！

優の放った矢は、今回も全て20のトリプルへと刺さった。だが、これまでと違うのは……彼は3投一緒に投げたということだった。

「は……ハアアアアアアアア!!？」

「お、大神!? 私の目が確かなら夜原先輩は今、三つ同時に投げたよな!」

「え、ええ……。オレもそう見えました」

「トリオ投げやー」

ダーツの矢を三つ同時に投げて、その三つを全て20のトリプルへと命中させるという技を見せた優。その技術に、刻を含めた優以外の人間は驚愕に感嘆と様々な感情を見せていた。審判である王子ですら、驚きのあまり声も出ていなかった。

「ツ——! ゆ、優の得点は180点。合計は……刻が1080点、優が………1440点。優の勝ちだ」

「ナ……ナ……ナ……」

「刻、筋は悪くないが後半になるにつれて力みすぎだ。下手に力めばフォームも崩れる。それに、お前の投げ方自体、少し肘がぶれて——」

「ダー!! うっせー!!」

王子が改めて優の勝利を発表すると、刻は開いた口が塞がらなるとばかりに大口を開けたままわなわなと震えていた。そんな刻とは対照的に、優は平然と刻に対するアドバイスを行っていた。

だが、もちろん今の刻がそれを素直に聞くはずもなく、刻の大声によってそのアドバイスは強制終了となった。

「すごいです、夜原先輩！ まさにプロ並ではないですか！」

「嗜む程度……なんて言っていました、とてもそうは見えませんか」

試合が終わったことで、桜は興奮冷め切らぬままに優の元へ行き、大袈裟なジェスチャーで感動を表していた。その後ろでは、大神が感心した様子で声をかける。

しかし、当の優はそれらの言葉が不相応とでも言いたげに、ふるふると首を振った。

「そんなことはない。強いて言うなら……先生が優秀だったんだ」

「先生？」

「ああ。子どもの頃、オレにダーツを教えてくれた人だ」

「それは……刃賀匠ですか？」

「いや、違う」

自分ですごいのではなく、自分に教えてくれた人がすごいと話す優。そう言われ、大神は真つ先に匠を思い浮かべたが、優はあっさりとそれを否定する。

「匠さんはダーツとかは一切やらない人だからな。あの人がやる遊びはメンコとかベーゴマくらいだ。オレが世話になっていた頃からよく一人でやっていた」

「それはそれでヤベエ……」

意外なところで匠のプライベートな部分が暴かれたが、彼が一人でメンコやベーゴマをしている絵を想像するとシニールなものである。現に、実際に想像してみた刻は若干

引いていた。

「あの人がじゃないとなると……誰なんだ？　お前をそこまでの腕前にした先生つてのは」

「……とりあえず、表に立つ人間じゃない。だが、オレたち『コード・ブレイカー』ほど深い裏にいる人でもない。ある組が胴元のトップを担う賭けダーツのプレイヤーだ。……あの人は、そこではこう呼ばれている」

表の人間ではない、と事前に言ったことで優が言った「組」という言葉が裏の世界に属する者たちを指す言葉だと誰もが瞬時に理解する。

そして、優は話し始める。そんな裏の世界をダーツの腕前のみで生き抜き、自身にダーツの技術を授けた人物について。

「——『迷路の悪魔』、つてな」

C  
O  
D  
E  
:  
B  
R  
E  
A  
K  
E  
R  
  
×  
  
エ  
ン  
バ  
ン  
メ  
イ  
ズ

## code : X | 2 邂逅 ( encounter )

当時の夜原優は、抜け殻だった。

家族全員を理不尽に失った彼は、両親とは旧知の仲で交流があった刃賀匠によって引き取られた。

しかし、両親・弟を一度に失った彼の眼は虚空のように淀み、口は食事を摂る時以外に開くことは無かった。

あまりに深い悲しみを背負った彼は……涙も、泣き声すら枯れてしまっていた。



「……………」

この現実に対し、匠はあまりに無力だった。

元々、彼は鍛冶屋ではない。カウンセラーではないし、心理学といったものにも疎い。

今の匠には、かつての友人たちから引き取った唯一の子宝を救う手段がわからなかった。

自らの愛娘であり、何度か共に遊んだ仲間でもある乙女とも協力し、なんとかその凍りきった心をほぐそうとした。だが、何をしようと変化が現れることは無かった。

彼らが出会ったのは……そんな匠が行った努力の一つから始まった。

——カラン

乾いた鈴の音が、その空間に新たな人間が訪れたことを告げる。

不定期に鳴る音だというのに、先ほどから流れているピアノ（CD）に上手い具合に

合わさっているように聞こえた。

「いらつしや——まさか、本当に連れてくるとはな」

カウンターの向こうに立つ細身の男は、新たに訪れた人間たちを見て一瞬だけ動きが止まった。なぜなら、その光景はあまりにその空間に似つかわしくなかったからだ。

「……まあいい。久しぶりだな………匠」

「ピッ」

声をかけられ、慣れた様子で手を挙げて挨拶をするのは……刃賀匠。相変わらず啞えている吹き戻しを除けば、彼はこの空間にいてもおかしくない存在だ。

……彼だけ、ならば。

「それと……はじめまして、少年」

「……………」

彼の隣に立ち、彼に手を引かれて一緒に訪れたもう一人の人間は……まだ幼い少年。それは、このバーという空間ではまず見ることがない存在だった。

「お前はいつもの日本酒でいいだろう？ 少年はどうする？」

「……………」

「ふむ…………とりあえずミルクでも用意しよう」

カウンターに座った匠と少年は、マスターである細身の男からそれぞれ飲み物を受け取る。匠は慣れた手つきで日本酒を口へと運ぶが、少年は牛乳が入ったグラスを手に取りとうすらしなかった。

ただ、ひどく淀んだ眼でグラスを見ていた。

「話には聞いていたが…………これは思ったより重症だな」

少年のただならぬ様子を間近で見、マスターは改めて目の前にいるこの少年がどれだけ深い傷を負っているかを知った。

そもそも、なぜこのマスターが少年のことを知っているか…………答えは簡単である。

「昨日、お前から電話があった時は何かの冗談かと思ったがな。しかし、いくらなんでも無茶苦茶じゃないか？ 傷心の子どもをこんな場所に連れてくるなんて」

そう、匠は事前にマスターに連絡して少年を連れてくることを話していた。まあ、それも当然だろう。何の連絡もなしに連れていけば、入店拒否されてもおかしくない。そもそも普通なら事前に連絡しても拒否されるようなものだが、このマスターと匠は旧知

の仲であったため特例として許してくれたのだ。

「……今まで知らない世界に触れる。そうすることで、この子が何かに興味を持てばと思つてな」

そして、なぜ匠が子どもをバーに連れてきたかという点、心に深い傷を負った彼のためを思つてのことだった。

彼は、そのあまりに深い心の傷のせいで何事にも興味を示すことが無くなっていた。年齢的に普通なら遊びたい盛りのはずなのに、どんなに珍しい玩具や知らなかった遊びが目の前にあつても動くことは無かった。匠や乙女の方から声をかけても無言で首を振るばかりで、匠は彼を引き取ってから彼が何かで遊ぶところを見たことが無く、彼の心の傷の深さを物語っていた。

そんな優が興味を示すのなら何でもいい、たとえ一般的には間違っている物だとしても……匠はそう考え、行動に移したというわけだ。

「……見たところ、効果は期待できなさそうだがな」

しかし、当の優はという点と出されたミルクにも手をつけず、ただただグラスを見つめるだけ。店内に流れる音楽にも、カウンターの向こうに並んだボトルにも……一切興味を向けようとはしなかった。

(そう上手くいくとも思つてなかったが……やはり駄目か。さて、どうしたものか

……)

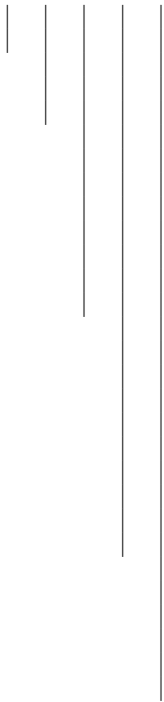
匠が次の手を考えようとした……その時だった。

——カラン

入店を告げる鈴の音が鳴り、一人の男が入ってきた。

ひどく疲れているようで、肩を上下させながら息をしている。バーにはお似合いのスーツを身につけたその男は、大量の汗が流れている顔をマスターに向け、ひくついた笑顔で口を開いた。

「……り、リンゴジュースって……あるか？」



「今日は本当に珍しい客が来るな……。子連れの旧友、そして……。いい大人の迷子とは」

「悪かったな……。ヒデエ方向オンチなんだよ……」

男が来店してから数分後……。男はリングジュースで喉を潤すと、店に辿り着いた経緯を話し始めた。

なんでも知り合いと会うために待ち合わせ場所に向かっていたが途中で迷ってしまい、かれこれ一時間ほど彷徨った挙句にたまたま見つけたこの店に入ったというわけらしい。男は明らかに成人していたが、その経緯だけを聞くと子どもが言ったようにしか聞こえない。

マスターは仕方なさそうにため息をつくとき、奥から携帯電話を持ってきて男に渡した。

「その知り合いに繋がる番号がわかるんなら、それ使いな。さすがに電話くらい使えるだろ」

「機械は苦手だが、そこまでじゃねーよ。えーつと……。この店、名前は？」

「桜花だ」

「桜花ね……。じゃ、ちよつと借りるぜ」

マスターに店の名前を確認すると、男は席を立って知り合いに電話をかけ始めた。ど



うやら知り合いも飽きれているらしく、男は苦笑いをしながら「仕方ねーだろ」などと話していた。

そうして男は、知り合いに「桜花」という店名を告げ、最後に「待ってるぜ」と言っ  
て電話を切った。どうやら知り合いがこのまま店まで迎えに来るようだ。男は携帯電  
話をマスターに返すと、ニツと爽やかな笑みを浮かべた。

「迷惑かけたな。迎えに来るらしーから、もうしばらく邪魔するぜ」

「そうか」

「……しっかし、ここも珍しい店だよな。子連れで来店できるバーなんてそうそう無  
いぜ」

知り合いが迎えに来ることになり安心したのか、男は今まで触れようとしなかった少  
年の存在に目を向け始めた。見知らぬ大人だというのに、少年はチラリと男を見るとす  
ぐに目を逸らした。緊張や恐怖から……という様子ではない。ただ興味を失ったよう  
に、表情一つ変えずに目の前のグラスへと視線を戻したのだった。

「この子は特別だ。少し訳ありだな」

「……ま、それはなんとなくわかるぜ」

少年の抱える闇の大きさは一目でわかったらしく、男はそれだけ言うとお出されたりん  
ゴジュースを口にする。そして、そこから根掘り葉掘り事情を聞いたり、あれやこれや

と話を盛り上げようとするのもなく、店内は音楽の身が流れる静かな空間となった。まあ、バーという場所らしいといえばらしいのだが。

「……悪いな。もう一杯もらえるか」

歩きすぎて喉が乾いていたのか、男はリンゴジュースを飲み終わるとおかわりを要求した。それに対して、マスターは空になったグラスを下げつつ男が求めるもう一杯の準備を始めた……のだが。

「ところでアンタ、まさかと思うが金はあるんだろうな？ あいにくこつちも商売だから、タダってわけにはいかないぞ」

「ハッ、馬鹿にすんのもいい加減にしてくれよ。自分が持つてる金もわからねーほど馬鹿じゃねーよ」

「道はわからなくなっただのにか？」

「うっ……そ、それとこれとは話が別じゃねーか……」

的確なツツコミを受け、男は顔を引きつらせる。明らかに分が悪い会話を終わらせようと、男は内ポケットへと手を伸ばして財布を取り出そうとする。

「……………あ？」

が、そこで男の動きが止まった。

——ゴソゴソ

「……………」

——ポンポン

「……………」

——バサバサ

「……………」

ズボンのポケットも調べ、全身を軽く叩いて感触を確かめ、上着を脱いで扇いだ……  
が、見るからに何も入っていない様子だった。そして……

——ダラダラダラダラダラダラダラダラダラダラ

男は店に入ってきた時よりも大量の汗を流し始めた。

「……おい、アンタ」

「ち、違うんだぜ!? 家出た時は確かにポケットに入れててだな!? た、たぶん迷ってる間に落としてしまっただけで……」

「……警察、呼ぶか」

「だああああ!! ま、ままま待つてくれ! 金はツレが絶対に払う! アイツはその辺しっかりしてるから財布がないなんてことはないはずだ! だ、だから警察なんて穏やかじゃねー話はやめてくれ!」

「と、言つてもな……。こつちも商売である以上、まだ来てないアンタの連れに免じてタダにするわけにも……。ん?」

まさかの財布が無いという事態に大慌てする男と頭を悩ませるマスター。さてどうしたものかと考えていたマスターだったが、ふと何かを思いついたかのような顔をした。

そしてまたしばらく考えると……ニヤリと口角を上げながら男にある提案をした。

「……なあ、場合によっちゃ全部タダにしてやつてもいいぞ」

「は、はあ……。そりや一体どういう……」

「アレで満点取れたらな」

そう言つて、マスターは店の奥側を指差した。見ると、そこにはテーブルが何台かと

……ダーツ台が三台ほど置かれていた。

「……あんな物、いつの間に置いたんだ」

「つい最近だ。知り合いがいらないから持って持ってきてな。ま、ウチはダーツバーじゃないからあんな奥の方に置いてるがね。なんならお前もやるか？」

「近代的な遊びは好きじゃない」

「ま、お前はそう言うだろうと思ったよ。それで？ アンタはどうする？」

何度か足を運んでいる匠もダーツ台があつたことは知らなかつたらしく、少し驚いた様子を見せた。だが、すぐに興味を無くしたようですぐに視線を逸らした。その反応はマスターも予想していたようなのでスルーしたが、それに対して男はというと……

「……満点取れば、タダでいいわけか？」

「ああ、男に二言はないぜ」

「……へえ」

「……？」

その声を聞いて、少年はふと男の方を見た。そして……思わず目を見開いた。

——びびびびび

男の目……黒目が白目ギリギリのところまで動き、奇怪な音を発していたからだ。

「……遊びでダーツはやらねー主義だが、仕方ねえか。考えてみれば、ツレが金を持つてこない可能性だってあるわけだからな」

(……雰囲気が変わった?)

男の態度の変わりようは、匠もすぐに気付いた。いや、もはや態度どころではない。纏ってる雰囲気そのものが先ほどまでとは別物のようだった。

「じゃあマスター、さっきアンタが言った条件でやらせてもらうぜ。満点取れたら全部タダだ。ちなみに何ラウンドだ?」

「……なんだか自信ありげだな。なら、8ラウンドといこう。3投8ラウンド、ルール

はシンプルにカウントアップで」

改めてルールを決め、マスターは男に矢を渡す。矢を受け取った男は、不敵な笑みを浮かべながらダーツ台の方へと向かう。

「了解だ。……ああ、ちなみに言っとくぜ、マスター」

そして……男は構える。

「後悔すんなよ」

「——完敗だ」

そうやって、マスターは男の前に新たに注いだリンゴジュースを出す。その態度は平静を装ってはいるが、額には冷や汗が伝っていた。

「おう、ありがとうよ」

対して男は満面の笑みでリンゴジュースを受け取り口にする。それもそうだ。その一杯も含め、男がここで飲み食いする物は全てタダとなったのだから。

「しかし……まさか本当に満点を取るとはな。アンタ、プロのダーツプレイヤーか？」

「そんな輝かしいもんじゃねーよ。ただ、ダーツばっかやってただけだ」



「ハア、とんだ出来レースだったわけだ……」

「言つたら？ 後悔すんなって」

支払いという唯一にして最大の問題が解決したおかげか、ニヤニヤと笑みを浮かべながら男は飄々と語る。知らずとはいえ、よりによつて相手の土俵で相撲を取つてしまつたマスターは「わかつてる」と言いながらも頭を悩ませていた。

数分前とは打つて變つて變つて真逆の態度となつた二人。それはもちろん先ほどの勝負のおかげなわけだが……もう一人、その勝負によつて様子が變つた者が一人いた。

「……………」

それは、先ほどまで何があつても反応もせず、興味も示さなかつた少年だった。少年は、先ほどまで男がプレイしていたダーツ台をただジツと見ていた。

「……………？ どうし——」

そんな少年の變化に気付いた匠が少年に声をかけようとした……その時だった。

——ガタツ

突如、少年が椅子から下りてダーツ台の方へと向かつていった。そして、近くのテーブルに置かれていた矢を手取る。

まさか……匠がそう感じた次の瞬間——

——ヒュッ

「——ッ!!」

少年が、矢を投げた。いや、ダーツをプレイした。今まで何をして興味を示さず、何をしようともしてこなかった傷心の少年が……ついさつき見知らぬ男がやってみせたダーツを自らやり始めたのだ。その姿に、匠は大きな衝撃を受けた。

だが、衝撃を受けたのはそれだけではなかった。

——カッ!

少年が投げた矢は、先ほど男の矢が全て刺さった場所へ吸いこまれるように刺さった。

そこは、カウントアップでいうなら20点のトリプル……つまりは3倍の60点が取

れる最高点の場所だった。もちろん最高点を取れる場所なので、その範囲は狭く当てるのは容易ではない。

だが、少年はそこに当ててみせた。彼は今までダーツなどやったこともなければ、ダーツの矢を触ったことすらない。(保護者である匠が昔の遊びしかやらないため)突然の衝撃の連続に、匠はしばらく言葉を失っていた。だからだろう……そんな少年に最初に声をかけたのはあの男だった。

「……おい、ガキ。今のは狙ったのか？ それともたまたまか？」

見ると、男はいつの間にか啞えていた煙草をふかしながら少年の方を見ていた。その眼は、明らかに少年を興味深そうに見ていた。慣れなければ鼻をつまみたくなるような独特の匂いが漂い始めた中、少年はそんな男の視線を真正面から見返していた。

「——った」

「あ？」

「ねら、つて………やった………」

「ッ!？」

細々と、かすれるような声で答えた少年。それは匠にしてみれば久しぶりに聞いた少年の声だったが、まさかこんな形で久々に声を聞くことになるとは思わなかっただろう。

というより……思いたくはなかつただろう。

「……首だと、思つて……狙つて、やつた……」  
久しぶりに聞いた少年の声には、明らかな怒<sup>雷</sup>み<sup>み</sup>りが込められていたのだから。

—  
び

—びびびびびびびびびびびびびびびび

「—面白エ」

「だからあ！ もつと肘を上げろ！ 何回言やわかんた、このクソガキ！」

「……………こう？」

「それじゃ上げすぎだっつもの！　それで肘ブレ過ぎだ！」

「……………子ども相手にそんなムキになるな」

それからすぐ、男は少年にダーツを教え始めた。とても丁寧とは言い難い教え方だったが、少年は文句も言わずにその教えを受け入れていた。

「……………」

「……………難しい顔してるな」

「……………喜ぶべきことか、悲しむべきことなのか。頭も悩ませる」

「まあ、だろうな」

そんな光景を、匠はどこか遠い目をしながら眺めていた。

今まで、何をしようと動こうとしなかった少年がようやく自分の意志で何かをし始めた。それ自体はもちろん喜ぶべきことだ。

しかし、少年が発したあの言葉――

『……………首だと、思ってた……………狙って、やった……………』

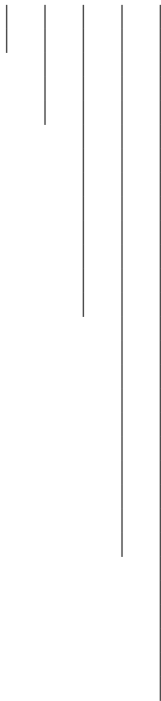
そこに込められたのは、言葉だけ見てもわかる通り……………殺意。動き始めたからと言って、少年の心はその内に刻み付けられた傷から欠片も癒されてはいない。

むしろ、そこに囚われているからこそその行動だった。

「だが、大事なものはこうして何かを始められたってことだ。きつかけは喜ばしいことじゃなかったとしても、ここから好転していく可能性は十分にある」

「……そう思いたいがな」

そう呟いて、匠は改めて少年を見る。大の大人が年甲斐もなく大声を出しながら発する教えを聞きながら、ダーツ台を見据える少年。その眼は、標的を射抜こうと狙いを定めているようだった。



「それが……先輩がダーツを始めた理由、なのですか」

「決して褒められたものじゃないがな。ただ、あの時のオレにはあの人のダーツがハッキリとそういうものに見えた。……あの人が纏っていた雰囲気、そう見えさせた」

「ナルホドな、表に立つ人間じゃないってのはそーゆーコトか」

「そう考えると、優の射撃の腕もその時の経験があつてこそ……ってことだな」

優から語られた彼の過去に、桜は思わず拳を握る。彼女の性格を知っている優にしてみれば、このような反応は予想していたのだろう。弁解もすることなく、ただ淡々と事実として語っていた。

そんな彼の話に次第に興味を持ったのだろう。刻と王子は頷きながらそれぞれが感じたことを口にし始めた。

(といつても、実際のところは……)

「……夜原先輩？」



「いや、なんでもない」

ふと、優が遠くを見るような目をしたのが気になった桜だったが、優はすぐに首を振った。

「……なんで？ その『迷路の悪魔』センサーにずっと手取り足取り教えてもらってたって力？」

「ああ。あの人は基本、人に教えるなんてことはほぼほしないらしいんだがな。まあ、あの人の人にとっては暇潰しの一種だったかもしれないが、その後もオレはそのバーに通ってダーツをし続けた。あの人が客として来た時にはダーツを教えてもらいながらな。といつても、そんなに長い期間じゃない。あの人もいつの間にかそのバーに来ることはなくなっただけ」

「フーン……で、それで終わりのワケ？ んだヨ、もーちつと面白い話が聞けると思ったのにヨ」

「刻君！ そのようなことを言っただけ……！」

「……面白い話、か」

「ア？」

ようやく持てた興味もなくなってしまったような刻の言葉に、優はフツと何か思い出し笑いをするかのようにつぶやいた。そんな優の態度に刻は眉をしかめると、優は言葉を続

けた。

「面白い話になるかはわからないが、もちろんこの話はこれで終わりじゃない。あの人が来なくなつてからもオレはダーツをし続けた。教わつたことを反復しながら。そうしていく内にオレは乙女から『コード・ブレイカー』の存在を聞き、こうして『コード・07』となり——オレは『コード・ブレイカー』としてあの人と会うことになつた」  
「ハ？」

優の言葉に、刻は大きく口を開けながら首を傾げる。『コード・ブレイカー』として会う……それが意味することがどういうことか……そこにいる人間全員がわかつていた。

「……そ、それはまさか……夜原先輩は、その先生殿を……」

「勘違いするな。ターゲツトは別だ。ただ、そのターゲツトを狙う過程で、あの人に会つたということだ。……オレがやってきた中で、他とは違う唯一の仕事——」

唯一、誰も死ななかつた仕事の時にな」

「……では優君、次の仕事です」

「はい、平家さん」

「ターゲットは、ある賭けダーツの胴元を務める組の若頭。一勝負で数千万円ものお金が動くかなり大規模なものです。あなたは、そこにプレイヤーとして忍び込み、ターゲットに近づいてください」

「賭けダーツ……ですか」

「聞いたところによると、優君はダーツが得意だそうです。人見が言っていましたよ」

「……少し覚えがあるだけです」

「そう謙遜せずに。ハッキリ言つて、この賭けダーツは動く金額だけに参加するプレイヤーも並ではありません。しかし、あなたなら十分に通じると人見も言っていましたから」

「……………」

「……………どうしました？」

「……………いえ。これが……ターゲットなんですけどね？」

「ええ。その写真の男が今回のターゲット——」

講談組の若頭……絹守一馬きぬもりかずまです」

## code : X-3 無く Invisible 〈1〉

都内に立ち並ぶ無数のビル……その中の一つである巨大マンションの一室にて、二人の男が大量の書類が乗った机を挟んだ状態で向かい合っていた。

一人は赤いシャツの上に黒のスーツを羽織っており、その口元には煙草を啜えている。もう一人は会社員のようなスーツを着て、オールバックの中に角のようにも見える程立ったメツシユが入った髪、そして眼鏡をかけた細目の優男……のようにも見えるが、その首元から見える刺青から察するに想像通りの優男とは言えないだろう。

「……こりやなんの冗談だ？」

「冗談なんかではありませんよ」

「……これ全部？」

「ええ。あなたの対戦者のリストです」

「多すぎだろ……」

煙草を啜えた男はげんなりした態度を見せながらも、ぺらぺらと机の上に乗った膨大な量の書類を適当に手にしていく。そこに書かれていたのは、何人もの人間の顔写真と名前前のリストだった。実は、そこに書かれている人間全てに共通するのは、煙草の男と

同じプレイヤーであるということ。

だが、当の男は眺めては捨て、眺めては捨てを繰り返した。

「今のあなたは変わらなず貧乏人ですからね。あまり選り好みもしてられないのでは？」

「つつても、目に入った奴全員とやってたら身体がついてかね——あ？」

と、そんな男の手がふと止まった。彼にとつて、そのほとんどが見知らぬ人間であるリストの中……その中に含まれていた一人の顔写真を……男はジッと見ていた。

「……なあ、こいつ」

「……やはり気付きましたか。私も最初に見た時は何度も見返してしまいました。確信と言える情報があるわけではないので断言はできませんが……似ていますよね」

「……………」

煙草を啜えたまま、ジッとその写真を見る。その写真に写っていたのは、二人にとつて懐かしい顔と言える人間の面影がある男だった。

「そーいや……名前なんて聞いたことなかったな」

「そんなことだろうと思ってましたよ……。あの頃の君はと言えば、ずっと『ガキ』としか呼んでなかったですからね」

「ガキにや違いねーんだからいーだろ」

二人の頭の中に浮かぶのは、幼い少年。もちろん、その頃の顔と完全に一致しているわけではないが、見れば見るほどその少年の顔を思い出してしまふ。名前を知っていれば確信を持てるだろうが、話の通り彼らは少年の名前など知らなかった。だから、その写真の横に書かれた名前などなんの当てにもならなかった。

「まあ、それを差し引いたとしても中々に優秀なプレイヤーですよ。若いですが、実力は間違いありません。それに、賭け金も十分です」

「……………」

眼鏡の男の話の聞きながら、手にしていた紙を机の上に放つて男は煙を吐き出す。煙越しに再びその写真を見て、その横に書かれた名前に視線を移す。

「……………夜原優、ね」

今回、優のターゲットである絹守という男……実は優にとって知らない存在ではない。  
い。

というのも、この絹守という男は幼い頃の優と何度も顔を合わせているからだ。

(……子どもながら、只者じゃないとは思っていたがな)

彼にダーツの技術を教え込んだスーツの男と初めて会った日……それが優と絹守が最初に出会った日でもあった。あの時、「財布を落とした」と言っていた男が「ツレ」と呼んだ人間こそが何を隠そう絹守だったのだ。バーのマスターが提示した賭け(のよなもの)が終わり、優が怒鳴られながらダーツを教わり始めてしばらく経った頃に彼は店にやってきた。

『……財布を落とした？　ハア、まったく……。あなたは相変わらずダーツ以外はからつきですね』

そんなことを言いながら、深々とため息をついた姿が優の記憶にも残っていた。

ターゲットの情報として平家から与えられた絹守の写真……優は改めてそれに目を落とす。そこに写っていたのは、優がかつて会った時とほとんど変わらない——

オールバックの中に角のようにも見える程立ったメッシュが入った髪。

眼鏡をかけ、その奥で弧を描くにこやかな細目。



そして、首元に刻まれた独特な刺青がある姿だった。

『さあ、皆様！ 大変長らくお待たせいたしました！ いよいよ！ いよいよ本日の

メインイベントでございます！』

——オオオオオオ!!

巨大なモニター、何百人と入ることができそうな程に広い観客席……一見すると競技場、ミュージカルの舞台にも思えるその空間の中で、マイクによつて拡張された司会と思われる声と全観客席からの声援が響き渡つた。

『かつて！……ここでその姿を見ることすら幸運とされてきた伝説のプレイヤー！ その試合回数はある時期を境に増えていきましたが……それでも！ 彼の試合を見ることのできる皆様には幸運の女神が微笑んでいることでしょう！』

まるで観客を扇動するかのように力強い言葉を放つ司会に、観客は再び声援で答える。その盛り上がりはまるで、テレビで中継されるようなスポーツの試合にも見えたが……これはそんな表立つて行われるものでは決してない。

地下鉄〇〇線△△駅にある謎の小さな扉……その先にあるのがここだ。普通に行つては決して入ることはできず、特殊な合言葉等を知る者にだけに開かれる場所。

そんな特殊な地下空間で繰り広げられるのは、法外な賭け金にて行われる特別なダーツ勝負。ある組が胴元を務め、人間離れとも思える腕を持った一流のダーツプレイヤーが集まるその勝負は、どう考えても表ではなく裏社会に通ずるものだった。

そんな法の外に位置する空間にて、圧倒的な声援を送る観客たちは今回の勝負を行う

プレイヤーたち……いや、その内の一人を待ち望んでいた。その意図を汲み取ってか、司会が声高らかに宣言した。

『それでは！ 只今より本日のメインイベント!!』

その声と共に、観客席の下に広がるプレイゾーンとでも呼ぶべき空間に二人の男が入場した。

『//迷路の悪魔// ! 烏丸<sup>からすまこう</sup>徨!!』

『対!!』

『“インビジブル”無“”！夜原優の試合を開始いたします!!』

——ウオオオオオオオ!!!

今回の対戦者である二人の男が入場し、その異名と名前が司会によって呼ばれたことによつて観客たちの声援は最高潮を迎える。もはやその空間だけ地震が起きているのではと思えてしまうほど、地面が思わず揺れてしまうほどに観客たちの声援は大きかった。

というのも、彼らにとつて今回の対戦者の一人である烏丸という男はとても特別な存在だったからだ。

『さあ、今回の対戦カードも大変に貴重なものです！片や言わずと知れた圧倒的猛者！あらゆる猛者たちを完膚なきまでに破つてきた常勝不敗の圧倒的帝王！“迷路の悪魔”!! 烏丸徨!!』

「……………うまで言われるとさすがに恥ずかしくなってくるぜ」

呆れ顔になりながら煙草をふかすスーツの男……烏丸隼。彼はこの賭けダーツにおいて伝説とも呼ばれる存在であり、その試合を見ること自体が非常に幸運とも言われていた。司会が言った通り、彼は今まであらゆるプレイヤーとの勝負を負けることなく勝ち進み、その巧みな手腕と頭脳によって対戦相手を迷路に迷い込ませることから“迷路の悪魔”と呼ばれる。この賭けダーツに参加するプレイヤーの中で、間違いなくナンバーワンプレイヤーである。

『しかし！ 今回の彼の対戦相手も決して只者ではありません！ その経歴は一切不明！ 公式・非公式どちらの経歴もまるで無し！ しかし、その実力は他のプレイヤーには引けを取りません！ 本日が鮮烈なデビューとなります！』  
インビシブル  
 “無”！ 夜原優!!』

「……………」

そんな烏丸と対峙するのは……『コード：07』夜原優。なぜ彼が烏丸の対戦者としてこの場にいるのかというと、全ては今回のターゲットである絹守に近づくためである。彼が若頭を務める組が胴元である試合にプレイヤーとして出場することで、彼に近づくことが容易となるということだ。

まあ、他の者ならばもっと別の方法があっただろうが、今回彼を狙うのは優。彼の

ダーツの腕を知る人見によつて、「どうせなら」とこのような方法がとられたわけである。(優の性格を考えるとこうして目立つのは不本意だと思われるが)

「なるほどねえ……。経歴がわかんねーから、インシブル無……透明人間つてか?」

「……………」

だが、優にとつてこの方法は奇妙な縁を感じざるを得なかつた。

なぜならかつて会つた者を殺すために、かつて自分を救うきっかけを与えた男を……その男から教つたダーツにて斃そうとしているのだから。

——ワアアアアア!!

「初めてだつーんなら、この空気は慣れねーだろ? ま、その内慣れてくるさ」

「……………いえ、別に気になりません」

「……………そつか」

そんな因縁を知らぬ観客たちは変わらず声援を送り続け、彼ら二人の会話は聞こえない。といつても、こうして因縁を感じているのはあくまで優であつて、対する烏丸は数ある対戦者の一人としてしか見ていないのかもしれない……………そう、考えた時だつた。

「……………随分でかくなつたじゃねーか。クソガキ」

「ツ——!」

烏丸の言葉に、優は思わず目を見開く。

彼の口ぶりは、間違いない。優を知っているという口ぶりであった。

「……覚えていましたか？」

「そりゃ、オレがガキンチョにダーツを教えるなんてあれつきりだったからな。しかし、まさかこんなところで会うとは夢にも思ってたけどな」

「……それはオレも同じです」

彼らの間にある因縁……それは、両者互いに覚えていることだった。こうなると、この組み合わせや巡り合わせに何者かの意図があってもおかしくなく思えてしまう。

「ま、こうして会ったのも何かの縁だ。特にオレなんて、一度会った奴ともう一度会うこと自体が珍しいからな」

「ダーツを教わった時、何度もお会いしましたか？」

「それ終わってからはさっぱりだったろーが」

「……まあ、いいです」

だが、そんなことは関係ないとばかりに優は目を伏せて正面にある巨大モニターへと目を向ける。

そう、今の彼らは思い出話に花を咲かせるような関係ではない。

彼らは今や対戦者――

彼らは今や狙う者と妨げる壁――

かつて教えを乞い、その相手の「ツレ」の命を狙う少年――



かつて乞われるまま技術を授け、彼の真の目的を知らずに立ちはだかる男――

今、この二人はどうあっても相反する立ち位置にいる敵同士だった。

『さあ、それでは早速ですがルール説明へと移ります！ ルール自体は3投8ラウンドのカウントアップとシンプルなものですが、もちろんただのカウントアップではございません！ なぜなら今回のゲームにおけるテーマとは……『対価』！』

「……『対価』？」

そんな二人の関係など欠片も知らない司会によって、ついにルールの説明へと移る。何度もこの会場でゲームに参加している烏丸は当然として、事前に情報を得ていた優もこのゲームがただのダーツであるわけがないということにはわかっていた。

なぜなら、ここで行われるゲームに参加するプレイヤーはこの二人を始め超一流のプレイヤーばかりである。それこそ、普通に勝負すればまず外すことがないのは当然なほど。

そんな彼らが確実に勝敗をつけるため、ここでは変則的とも言えるルールによってゲームが行われる。実際にあつたゲームルールを挙げるなら、スコアがランダムに入れ替えられた上にボードにはスコアの表記が無い状態でダーツを行う、それぞれ1000台のマトを迷路のように配置して行う早投げカウントアップなど、普通のルールとはかけ離れたものばかりだ。

ゆえに、ここでのゲームではダーツの腕はもちろんとして何よりも精神力……強い意

志が試される。

『今回のゲームでは各ラウンド開始時に『目』、『痛み』、『縮小』、『回転』、『移動』の5つから最大二つまでを選んでいただきます！ 『目』は目隠しをした状態で、『痛み』は身体に電流が流れた状態で、『縮小』は半分ほどのサイズとなったボードで、『回転』は高速で回転するボードでプレイしていただきます！ そして『移動』ですが、プレイヤー二人の周辺をご覧ください！』

司会の言葉によつて、観客たちの眼は烏丸たちの周囲へと向けられる。そこには、烏丸たちを囲むように円形で膝までの高さがある壁があつた。壁の上面を見ると中央にはわずかな穴があり、ダーツ台はその穴にはまるような形で設置されている。さらに、ゲームの際にダーツを投げる位置と思われる中央には円盤型の台座が置かれていた。

そして……

——ゴ、ゴゴゴ

機械音がしたかと思うと、中央の台座とダーツ台が音を立ててそれぞれ時計回りと反時計回りに回り始めた。それはかなりのスピードであり、遠くから見ただけでも目が回ってくる。

『これこそ『移動』！ マトは移動し続け、さらにプレイヤー自身は回転する台座の上で投げなければならないのです！ このようにプレイに関して大きな制限がかかるわ

けですが、今回の勝負に至ってはアウトボートについては強制的に敗北となります!」

「……なんで『移動』なのに台座の『回転』も入ってんだよ」

「難易度を求めた結果じゃないでしょうか」

ルールを聞きながら、早くも呆れたような顔をしている烏丸に対し、優は表情は一切変えずに失速を始めたダーツ台を見つめていた。おそらく、このルールにはまだ何かある……と思いながら。

『さて、この制限ですがもちろんただプレイを制限するだけではありません! 制限を乗り越えて得た得点には、その分の『対価』が支払われます! この制限にはそれぞれ倍率がかけられており、それら制限をかけた状態で得た得点はその倍率によって大きくなっていきます! 『目』と『痛み』には2倍、『縮小』には3倍、『回転』は5倍、そして『移動』には……10倍の倍率がかけられております!』

「……ハイリスクハイリターンというわけですね」

「ああ。しかも最大二つまで選ぶことは……」

『その通りです! 二つの制限を選んだ場合はさらに倍率は大きくなります! 例えば『目』と『縮小』を選んだ場合は2倍と3倍の倍率がかけ合わさり、6倍の倍率となるわけです! もちろん制限も目隠しをした状態で回転するボードに向かって投げなくてはならないので、その難易度もかけ合わさるわけでありませぬ! しかし、この制限

ですがそれぞれ2回までしか選ばれません！ ちなみにゲーム途中で制限を全て2回選  
び終えてしまった場合はそのプレイヤーはそこでゲームは終了！ それ以上の加点は  
できません！』

簡単に言うならば、これは縛りプレイでの勝負。さらに選ぶ制限の回数にも限りがあ  
る以上は可能な限り高倍率になる制限の選び方をしたくなるがその分だけ難易度も跳  
ね上がるため、アウトボードが即敗北となる以上は無理はできない。自分の実力や相手  
との点差……それら全てを踏まえた上で差し出す『対価』を選ぶというわけだ。

「……へえ」

——びび

「ツ——！」

——びびびびびびびびびび

ルール説明が終わると同時に、烏丸の目がかつて優が見た時と同じように奇怪な音を  
発した。烏丸が何を考えているのかはわからないが、おそらくどう制限を選んでゲーム  
を進めていくかを考えているのだろう。

そして、ついに試合が始まろうとしていた。

## code : X | 4 無〈 Invisible 〉〈 2 〉

「んじゃ、先攻後攻決めつか。何で決める？」

「烏丸さんにお任せします」

「りよーかい。じゃ、コイントスで決めるとするぜ」

「じゃあ、裏に賭けます」

司会によるルール説明も終わり、いよいよ試合開始となった。先攻後攻を決める話し合いを始めると、烏丸は「コイントスで決めよう」と言いながら500円玉を器用に右手の親指で上空へと弾き、そのまま右手甲へと落ちると同時に左手で隠した。流れるような手つきから、手馴れたものであることが伺える。

「えーつと……裏だな。アンタが先行だ」

烏丸が左手をどけると、500円玉に掘られた「500」の文字が上を向いており、優の先攻が決定した。

『どうやら先手は夜原に決まったようです！ それでは制限をお選びください！』

『痛み』

『了解しました！ それでは中央の台座へと移動してください！』

迎えた最初のラウンドは『痛み』を選んだ優。司会に言われた通り、中央の台座へと向かっていくとスタツフと思われる黒服の男が現れ、優の右手に黒いリストバンドを着した。おそらく、不正が無いよう目隠し等は彼らがプレイヤーに装着させるのだから。

『さあ、それでは試合開始です！ 先手の夜原、『痛み』に耐え高得点を狙えるか！』

——ビリッ!!

(……なんだ、こんなものか)

『痛み』によって流れる電流は身体に害がない程度とはいえ、常人ならば普段通りにダーツを投げることは難しくなるレベルだった。だが、優は『コード：ブレイカー』であり、これとは比べ物にならないほどの痛みをその身に受けることもある。結果として、彼にしてみればこの制限は完全にノーリスクと呼べるほどだった。

——カッ、カッ、カッ！

『おっと、夜原！ まるで『痛み』に惑わされる様子も無く180！ 倍率は2倍のため、360点を取得しました！』

「随分と痛みに強えーみたいだな。ここの胴元にや敵わねーだろうけどな」

「……講談組の若頭と張り合う気はありませんよ」

「そりゃそうだ。んじゃ、オレは『目』を選ばぜ」

続いて後攻の烏丸は『目』を選び、先ほどの優と同じように台座に立つと黒服の男が烏丸に目隠しをつけた。ダーツ台は真正面にあるとはいえ、視界を遮られた状態でダーツなど普通ならば不可能だが……

——カッ、カッ、カッ！

『なんと烏丸！ 目隠しをしていたというのに難なく180！ 同じく360点を取得です！』

そんな常識は彼には通用しないようで、一切迷ったりすることなく3投を終え、最高得点を当然かのように叩き出した。これには観客たちからも一気に湧き上がり、拍手と声援を送る。まあ、目に見えない電流と比べて目隠しというわかりやすい制限のため、観客たちも凄さがわかるのだろう。

『さて、第1ラウンドは互いに360点！ 同点にて第2ラウンドへと移ります！』  
「……『目』」

第2ラウンドへと移ったが、優は第1ラウンドと同じように制限一つのみを選んだ。目隠しをかけられたことで視界は暗闇に包まれるが、彼は普段から夜に仕事をすることが多い。つまり暗闇には慣れており、気配で相手の位置を把握する。それは無機物に対しても有効であり、どの位置に何があるかは視界を遮られていようとわかる。

『180！ 烏丸と同じく、目隠しをした状態でもまったく迷いがありません！』



「やるじゃねえか。オレは『痛み』だ」

総得点720点となった優だが、欠片も油断はしていなかった。子ども頃とはいえ、烏丸の実力は近くで何度も見てきた。それに、その時の実力が彼の全力だという確証もない。油断など、間違ってもしてはいけない相手なのだ。

「いででで?!? お、おい! これって身体に絶対、悪影響だろ!?! このまま片腕麻痺とかになったら笑えねーぞ!!」

「人体に影響はない程度には抑えてありますので」

「嘘だろ!?!」

……多分。

黒服に対して電流の強さについて文句を言う烏丸を見ながら、優はなんとか気を引き締めようとした。

『180！ 夜原、3ラウンド目でも勢いは止まりません！ かけていた制限は『目』なので、総得点は1080点となりました！』

(……そろそろ、『回転』や二つ選びを始めないとか)

今の戦況としてはまったくの同点。第2ラウンド、電流の強さについて騒いでいた烏丸だったが結局は180……360点を取ってみせた。(まだ痛みが残っているのか、煙草を吸いながら時々手に息を吹きかけているが)

そして迎えた第3ラウンド、優は再び『目』を選んだ。一瞬、『痛み』か『縮小』も選ぼうかとは思ったが、まだ堅実にいこうと考え、結局は『目』一つとなった。

「烏丸さん、終わりましたよ」

「あ、ああ。ちつとだけ待ってくれ。フー、フー……」

(……そんなに強い電流だったのだろうか?)

痛みに関しては一般人なため、烏丸の反応は普通なのだ。逆に言えば、優の痛みに対する耐性が一般人のはるか上をいつているというわけだ。

「あー……やつと普通になってきた。こりゃ、『痛み』に関しちや後半に残したくねーな」

「じゃあ、また『痛み』ですか」

「……そうだな、

『痛み』と『縮小』だ』

「ッ！」

やはり………という言葉が真っ先に浮かんだ。やはり、この男を相手に油断などもつてのほかだ。先ほどまで残った痛みに悶えていた姿とは打って変わり、その姿からは圧倒的な自身が溢れていた。

『なんと！ ここまで烏丸、初の制限二つ！ 『痛み』と『縮小』を選びました！ 電流が流れる状態で、半分ほどの大きさとなったボードを狙ってもらいます！』

黒服が二人現れ、片方は烏丸に目隠しを、もう一人はダーツ台のボードを取り外して明らかにサイズが小さいボードへと取り替えた。大きさが半分ということは、シング

ル、ダブル、トリプルの範囲も狭くなっているというわけだ。こうなると、トリプルには3投を投げ切ることも難しくなる。

「ちつくしよ、痛えーな……。んで、小つき過ぎて目も痛くなってくるぜ……」

リストバンドから流れる電流の痛みにも耐えながら、目を細めて狙いを定める烏丸。会場の誰もが「さすがにこれは……」と思ってしまうような状況。

しかし、『迷路の悪魔』にとつては容易いことであつた。

——ヒュー！

『——180!! これは素晴らしい！ 烏丸、見事にパーフェクト！ 総得点は……1880点となりました!』

「あんな小さいところに……さすがですね」

「へっ、あんま褒めるんじゃないよ。似たようなことならやったことあるっただけだ」

「……似たようなこと?」

「道に迷った挙句に入ったダーツバーでイカサマ勝負ふっかけてきたバカがいてな。ソフトダーツだったんだが、ボードの穴を塞いで矢が穴に入らねーようにしたんだ。だからオレはすでに矢が入った穴に矢の先端を折って詰め物にして、その閉じなくなった穴に狙って入れるようにしたってわけだ」

「……今でも迷子になってるんですか?」

「気にするとこ、そこかよ……。そこはスルーしとけ」

「けど……納得しました。ソフトダーツの穴なんて小さいところも狙えるなら、ほとんどハンデになりませんね」

ダーツにはハードダーツとソフトダーツとある。ハードダーツは今回の勝負でも使われている、矢の先端の針を突き刺すタイプで、ソフトダーツは烏丸が言ったように無数に空いている穴にダーツの先端を通すというものだ。

ダーツの先端という細い部分にびったりフィットするため、ソフトダーツの穴も当然ながらとても小さい。だが、烏丸はその穴単位で狙って投げることが可能だというのだ。ならば、サイズが小さくなったダーツ台などなんの問題にもならない。

「さ、ようやく点差がついたな。お前も二つ選んどくか？」

「……………」

今、二人の点差は800点。何の制限を、いつ、いくつ選ぶかによつては逆転は可能な点差だが、今は4セット目でようやく折り返し地点というところだ。ここで慌てて点差を埋めについては、いざ終盤になった時に追いこまれたなら完全に打つ手がなくなってしまう。

「…………『縮小』。それ一つだけで」

「…………へえ」

優が選んだのは3倍の倍率である『縮小』一つ。これではたとえ180を取ったところで二人の間にある点差を完全に埋めることはできない。

(だが、今はまだそれでいい)

今はまだその時ではない、と考えつつ、優は構える。『縮小』専用のボードのサイズは先ほどの烏丸のプレイで目の当たりにしているとはいえ、いざ自分がそれでプレイするとなると話は変わる。瞬きの一瞬ですら狙いがずれそうになる小ささに鋭い視線を送る優。

だが、忘れてはいけない。彼はその気になれば、飛んできた銃弾を銃弾で狙い撃つことすら可能だということを。

---

---

---

---

『烏丸、180! 選んだ代償は『目』のため総得点は2240となります! 夜原は『縮小』を選んで180を取得しましたが、二人の点差は2240と1620! その点差はいまだ開いております!』

「はっ……つつつても徐々に縮まってるがな」

「オレが負けていることには変わりありませんよ」

「そりゃあな。じゃあ、ここらで逆転の一手でもやる気か?」

「……そうですね」

第4ラウンドは結局、優は『縮小』、烏丸は『目』を選びどちらも180を取ってみせた。だが、司会の言う通り二人の点差は開いている。終盤に逆転の芽を残しておくのも肝心だが、あまりに点差が開きすぎてしまうとそれすらも絶望的になるため、そうなるとその辺りからお互いの選ぶ代償は重要になってくる。

そんな局面である第5ラウンド……優はついに選択した。

『回転』。とりあえずは逆転を目指します」

『おおっと！　ここで夜原、ついに『回転』を選びました！　高速で回るボードを相手に、果たして高得点を狙えるか！』

司会が喋り終えると、ボードが少しずつ回り始めその勢いは強くなっていく。そして……

——ゴオオオオ!!

最終的にはもはやボードの端に書かれている得点の数字などさっぱり読めなくなるほどのスピードで回っていた。ルール説明の時に披露された『移動』と比べるとインパクトは負けるかもしれないが、この高速回転には観客たちもざわつき始める。

「おいおい、なんだアレ……。あんなの、高得点どころか刺さるかどうかも怪しいんじゃない……」

「こっから見てても目が回ってくるぜ……」

そんな観客たちの動揺をよそに、優は静かに構える。その眼力は今まで以上に鋭く、なんとかか目の前で回り続けるボードを見極めようとする。

「……………」

その集中は会場全体にも伝わっており、観客たちも固唾を飲んでそれを見守る。よつて、会場には回転するボードの音のみが響き渡る。



そして、優が構えに入ってから数十秒が経ったその瞬間……動いた。

——シュ!

ようやく優の手から一投目が放たれ、真っ直ぐ放たれたダーツは回転するボードに命中する。その後も慎重に時間を置いてから残りを投げる優。全て投げ終えたところで、ボードは徐々に失速を始めどこに命中したかが明らかになる。

だが……

「……ッ!?!」

ボードに刺さったダーツの3本の内、1本だけが他2本とは離れた位置にあった。

「こ、これは！ 夜原、ここでパーフェクトならず！ ですがこれは驚くべき結果！  
20のトリプルに2本！ 14のトリプルに1本！ あの高速回転するボードながら、  
全てトリプルに命中させ、162点を獲得！ さらには『回転』の倍率でその点数は5  
倍！ 810点が追加され、2430点となりました！」

——ウオオオオオオ!!

難関と思われた『回転』から、パーフェクトとはならなくとも全てトリプルという結果に観客たちは今まで以上の盛り上がりを見せる。だが、そんな盛り上がりとは正反対

に、優は苦虫を噛み潰したような表情で戻っていった。

「……………ま、よくやった方じゃねーか？ これで逆転はできたわけだしな」

「またすぐ追い越される範囲です。逆転とは言えません」

「そーかよ」

『さて、ここで逆転を許した烏丸！ 代償は何を選ぶのか！』

「……………あー」

煙草を口から離し、煙を吐きだす烏丸。そして、その煙草を灰皿に押しつけながら

……………彼は宣言した。

「オレも『回転』だ」

「ッ！」

『なんと！……ここで烏丸も『回転』を選択！』

——オオオオオ!!

まるで優に対抗するように、同じく『回転』を選んだ烏丸。その姿に、観客たちも大歓声を上げる。だが、彼の対戦相手である優にとつてみればかなりのプレッシャーだった。

烏丸が準備を終えると、再び高速回転を始めるボード。その速さは優の時と変わりはない。しかし、それを目標に構える烏丸は今までと何ら変わらない。むしろ、どこか余裕を感じさせるようだった。

「……なあ」

「……う？」

構えながら、ふと口を開く烏丸に優は思わず怪訝そうに眉をひそめる。すると、彼からは信じられない言葉が紡がれた。

「悪いが、オレはこれよりもタチが悪いヤツを経験してる」

そう言って、烏丸は放った。その時、彼の眼はどこか寂しげなように見えた。

『……………』

——シーン

『……………ひゃ』

——ざわ、ざわざわ

『ひゃ、180ウウウ!!』

——ワアアアアアアアアアアアアアアアア!!

「ッ……………!」

なんと、烏丸はあのボードから180を取ってみせた。まさに神業とでも呼ぶべきその腕前に、思わず司会も点数を読み上げるのを戸惑ってしまった。しかし、我に帰った司会が点数を読み上げたことで、会場はとんでもない盛り上がりを見せた。

『これで烏丸、3140! さすが常勝不敗の帝王! 帝王としての貫禄を見せつけ、

再び夜原と点差を大きく開いて見せた!!」

一度は逆転を許したが、再び先ほどまでとほぼ同等の点差をつけられ、優は思わず拳を握る。過去の経験から、烏丸の実力が人並み外れて高いことはわかっていた。

だが、これに関しては完全に優の予想を上回っていた。もはや、この烏丸という男の実力の底などさっぱり見えなかった。

「……チツ」

しかし、当の烏丸はというと戻って早々に舌打ちをすると新たな煙草を取り出して火を点ける。あんな神業染みたことをやった後だというのに、まるで普通に打って戻ってきたかのように。

「……さっきの」

「あ?」

「投げる直前に言っていた、これよりタチの悪いヤツを経験している……:というの?」

そんな男を前に、優は先ほど烏丸が言った言葉について尋ねる。本来なら、烏丸に追いつくために戦術を練らなければならないが、優の意識はそちらには一切向いていなかった。

「……少し前だがな」

そして、烏丸は煙を吐きだしながら尋ねられたことに対して答え始める。どこか遠くを見るように、上を見上げながら。

「あんなマトモなボードじゃなく、ぐにやぐにやにひん曲がった上に回転するボードでやったことがある。それと比べりゃ、マトモな形してる分こっちのが簡単だったわけだ」

「……なるほど」

優は、それ以上は聞かなかつた。烏丸の様子からして、その記憶には何かあると直感的に感じた。決して、興味本位で踏み込んではいけない領域であると……察した。

その後の第6ラウンドでも、優は烏丸に追いつくことはできなかつた。むしろ、先ほどの『回転』で180を取れなかつたことと烏丸の予想以上の実力の高さに驚いてか、より高得点を狙える『移動』などを選ぶことを躊躇してしまい、『痛み』を選んで360点

を得るのみで終わった。

「……なんだ、もう諦めたのか」

「……………」

烏丸のその言葉に、優は返す言葉がなかった。任された仕事のためにも、あつさりとして負けを認めるわけにはいかない。だが、こうなると試合は諦めて別の方法でターゲットに近づくと術を考えた方がいいのでは……とも考え始めていた。

「……ハア」

だが、そんな優を見て烏丸は心底つまらなそうにため息をついた。自身の番のため、投げる舞台である中央に向かい、優とすれ違う……その瞬間。

「オレたちがいるこの世界じゃ、ダーツの腕自体はそこまで重要じゃない」

「……………え？」

「なにせ、普通にダーツをやらず外すことなんかねえ。今回みたいに変なルールがなければな。だから、オレたちが試されるのはダーツの腕じゃない」

「……じゃあ、何を」

「……………意思の強さ。ハッキリ言って、ガキだった頃のお前の方がまだ強かったぜ」

「——ッ!!」

その言葉を聞き、浮かんたのは烏丸と初めて会った時のこと。家族の死をきっかけ



に、何に対しても関心を示さなかった優が、なぜダーツに引かれたのか。

いや、なぜ烏丸のダーツに引かれたのか。

(……そうだ)

それは、決してダーツを投げる様が家族の仇に一矢報いるための足がかりになると感じたのが全てじゃない。

(オレは、あの時……)

子どもながらに感じた、ダーツを投げる瞬間の烏丸から感じた……

(この人の……意思の強さに引かれたんだ)

『見事180！ 烏丸、『縮小』を選んだため3680点となります！』

「……ん？」

「……………」

自分の番を順調に終えて戻る烏丸だったが、その視線の先にいる優は先ほどとはまる

で別人だった。今の彼からは、並々ならぬ意志が感じられた。

「まだ諦めていない」……たとえ言葉にせずとも、優が放つ雰囲気こそ物語っていた。

「……ようやく目が覚めたか？」

「ええ、ありがとうございます」

「対戦相手に礼を言うとはな。だが、どうすんだ？ こつから逆転するには……」

「わかってます」

そう言って、優は烏丸の横を通って中央へと向かった。そして、中央に立った彼は何度か深呼吸を繰り返し……堂々と宣言した。

『縮小』。そして……『移動』

——ざわ!

『な、なんと夜原、ここですいに二つの『対価』! しかも最高の倍率である『移動』を選択! さらに『縮小』……これはかなりのリスクがあります!』

そう、『移動』はボードが動くだけでなく優が今立っている中央の台座も回る。さらにボード自体が小さいものにも変わる『縮小』も同時となつては、その難易度は倍以上に跳ね上がる。

そんな優の選択を聞いて、烏丸も思わず口角が上がる。

「……ハッ、大きく出たな。大丈夫か? 『回転』でも180取れなかったお前が、『移動』と『縮小』の二つ同時なんて」

「……どうでしょうね」

「おいおい……」

確信はない。烏丸の言う通り、『回転』で180を取れなかった優にとつてそれより倍率が高い……つまり難易度が高い『移動』を選ぶこと自体、不安要素の方が多い。現に、観客席から聞こえる声に耳を傾ければ「ヤケになったか」などとの言葉もちらほらと聞こえていた。

だが、今の優は決してヤケになつたわけでも、勝負を諦めたわけでもない。

「ただ……今は外す気が無い。それだけです」

その言葉と共に構えた優、同時に『縮小』用のボードへの交換が終わり『移動』のギミックが動き始める。台座が回転することで少なからず身体に感じる空気抵抗での姿勢のズレ、そして回転する景色の中に現れては景色から消える動くボード。

しかし、優は視線や構えた腕を崩すことは無い。ただ静かに……自分が投げるべきそのタイミングを見計らっていた。

そして………

——ヒュ

運命の一投が、放たれた。

『…………え？』

司会の口から思わず漏れた声。それは、目の前で起きたその光景が信じられないためだった。

投げ終えたことで、徐々に減速を始めて所定の位置に戻るボード。そのボード自体が小さいため、観客たちも目を凝らさないとその結果は見えない。

だが、観客たちがその結果を目にするよりも早く、司会からの言葉でその結果が伝えられた。

『ひゃ、ひゃ……………180ウウウウ!?!』

——ざわ!!

その言葉に、観客たちは歓声よりも先に動揺の言葉が走った。

絶望的と思われた状況。だが、現実はどうだろう。その絶望的な状況は……すでに覆われてしまっていた。

——オ、オオ、ウオオオオオオオオオオ!!!

「……烏丸さん」

地響きを感じるほど圧倒的な完成の中、優は烏丸に告げる。

そう、まだ勝負は……終わっていない。

「オレは……勝ちます」

## code : X—5 無〈Invisible〉〈3〉

『さあ！ これで勝負はわからなくなつた！ 第6ラウンドまでは2790と3680と烏丸の圧倒的優位の点差となつていましたが、第7ラウンドでなんと夜原！ 『縮小』と『移動』の二つの『対価』を選んだ状態で見事に180を取得！ 倍率は30倍となるため、取得点はなんと驚異の5400！ これで夜原の点数は8190となり、烏丸を大きく突き放しました！』

今回の仕事の目的であるターゲットに近づくために参加した地下で行われる賭けダーツにて、かつて自分にダーツを教えた男である烏丸との試合を繰り広げる優。烏丸の圧倒的な実力により、一時は絶望的な状況に置かれた優だったが、烏丸の一言により調子を取り戻した優は一気に逆転を試みさせた。

「……………」  
だが、今の優の眼には油断の色なんて欠片も感じない。今、烏丸との点差は自分が確実に優位だが、それでも油断なんてしてしまえば一瞬で足をすくわれる……彼が相手になっている烏丸という男は、そういう存在なのだ。

「……………あーあ。こんなことになんだったら余計なこと言わなけりやよかつたぜ」



「その割には、後悔しているような顔はしてませんね」

「どーだかな……。実際のところ、オレはもう『目』も『痛み』も『縮小』も選び尽くしちゃった。となると、残ってるのは『回転』一回と『移動』二回。選び方次第じゃ逆転は可能だろうが……。ハッキリ言っただけはオレでもリスクが高すぎる」

そう、すでにゲームも終盤のため選べる『対価』も残り少なくなっている。そして、烏丸にとつて残された逆転の手は『回転』と『移動』を同時に選ぶことだが、この難易度は極めて高い。『回転』によってボードが高速で回転するだけでなく、『移動』によってそのボード台は動き、さらには投げられる際に自分が乗っている台座も回ってしまう。自身も回転している状態でボードの回転を見極めるだけでなく、その見極めとダーツを投げるといふ行為を移動しているボード台が見えた一瞬でやらなくてはならない。なぜなら、ボード台の移動する向きと台座の回転の向きは逆のため、自身が向いている向きにボード台が現れるのはほんの一瞬のためだ。これを3投……。とてもじゃないがリスクが高すぎる行為だった。

「……そんなこと言っておきながら、簡単に180を取ってしまいそうですけどね」  
「ハッ、随分と高く評価してくれんだな」

「それはこの会場にいる全員が思っていることだと思えますけど」

優の言葉を受け、烏丸はふと盛り上がった観客席へと目を向ける。彼らは次順で

ある烏丸がどのような選択をし、そしてどんな神業的なプレイを見せてくれるのか……そんな期待をしている空気で溢れかえっていた。

「あいつらは自分が楽しめればいいだけだからな。好きなものだけ騒いでりゃいい」

そう言つて、烏丸は新たに取り出した煙草に火を点ける。優に逆転を許してしまった以上、残つたプレイでの選択を慎重に選ぼうとしているのだろう。

……そう、優が考えた時だった。

「……なあ、夜原優」

「はい？」

「オレと……賭けをしない？」

「……賭け？」

「ああ」

まるで予想していなかった烏丸のその言葉に、優の思考は一瞬フリーズした。しかし、当の烏丸は真剣そのものといった面持ちで言葉を続けた。

「なーに、簡単な賭けだ。この第7ラウンドでオレが選ぶ『対価』……それを  
お前が選んでくれればいいだけだ」

「な……!？」

完全に面食らった表情を浮かべる優。当然だ。烏丸は仮にも対戦相手である優に対して、自分が得る得点の鍵である『対価』を選ばせようというのだ。だが、先ほど烏丸が言ったように彼に残った『対価』は『回転』一回と『移動』二回。普通に考えれば、ここで『回転』を選ばせればたとえ残り二回パーフェクトを取ったとしても烏丸の逆転は完全に不可能となる。それこそ、優が最終ラウンドでアウトボードでもしない限り、だ。

「……ふざけないでください。そんなお情けのようなことをされて勝ったところで、オレは——」

「……………勘違いしてんじゃねーよ」

烏丸から提示された賭けとも言えないような内容の賭けに対し、わずかながら怒りを感じた優。だが、そんな優に対して烏丸は大きく煙を吐き出しながら、ポツリと呟いた。「お情けなんかじゃねえ……。これで正解を選べばお前は勝つ。だが、間違えれば……オレが勝つ。れっきとした賭けだ」

「ッ……………」

そこまで言われたが、優はやはり意味がわからなかった。だが、一つだけはわかる。これは決してふざけていたり、動揺を誘っているわけでもない。烏丸の言う通り、選択を間違えれば自分は負ける……。そんな危機感を思わず感じた。

「……………」

そこで、ようやく優は真剣にその賭けの内容について考える。だが、いくら考えたところで正解……自分が勝つための選択は一つしか思い浮かばなかった。

はたしてそれでいいのか……浮かんだ答えを口にしようとするれば湧いてくるその疑念に何度も躊躇しながら……優は覚悟を決めた。

「…………『回転』、です」

「……………そうか」

優の答えに対し、烏丸はそれだけ返して吸い終わった煙草を灰皿に捨てる。

そして彼は…………『回転』一つだけを選んで第7ラウンドを開始した。

——カツ!

『か、烏丸180…………ですが、それでも得点は900点。夜原の点数には遠く及びません…………』

——ざわざわ

「なんで、ここで『回転』を？」

「せめて『移動』も選ばばまた逆転できたかもしれないのに……」

烏丸の選択に、司会と観客のどちらも動揺を隠せなかった。彼らから見ても、この烏丸の行動はどうか考えても勝とうとしているようには思えなかった。

誰も口には出さないが……「諦めたのか？」という思いが彼らの心の中には生まれていた。

そんな緊迫感の中……ついに勝負は最終ラウンドを迎えた。

(……おかしい)

そんな中……優は彼らとは全く別の感情が渦巻いていた。まるで、首元に見えない刃物をずっと添えられているような……そんな、不安定ではつきりしない危機感が彼を支配していた。

(なぜ、あの人はあの場面でオレに自分の『代償』を選ばせた……？ いや、それよりもオレが選んだのは……正解だったのか?)

考えれば考えるほど、わからなくなる。当の烏丸はまるで追いこまれたような様子は無く、また煙草をふかしている。あれは果たして、勝利を確信した余裕なのか、それとも勝ちを諦めただけなのか……。

(――違う)

(今、オレが考えるべきことはそこじゃない)

(オレは……勝つためにやるべきことをやるだけだ)

次々と浮かんでくる疑念に呑み込まれようとした……一歩手前だった。今、自分がすべきことを再確認する。そう、彼は『コード：ブレイカー』として仕事をこなすためにも……勝たなくてはならない。

なら、自分がすべきことは決まっている。

それは――

「最終ラウンド……『移動』と『回転』を選びます」

油断や躊躇などを一切せず、ただ勝ちに向かっていくことだけだった。

『さあ、ついに迎えた最終ラウンド！ ここまででのお互いの得点は夜原8190に対し烏丸4580とその点差は圧倒的！ だが、夜原は決して容赦はしない！ ここで『移動』と『回転』の二つを選ぶことで烏丸との点差を絶対的なものにしてしま



す！』

この『移動』と『回転』を同時に選んだ際の難易度の高さは先にも述べた通りだが、今の優にとつてはそんな難易度なんて些細なことではしかなかった。いや、むしろ関係なかった。どんなに高い壁だろうと、自分は乗り越える必要がある。ならば、それに全力を尽くすのみだった。

——ゴゴゴゴ

ついに、『移動』と『回転』のギミックがそれぞれ動き始める。足場である台座が回転していることで安定しない視界。その視界の中に、一瞬だけ現れるボード台。高得点を得られる保証はない。だが、ここまで来て諦める気も毛頭ない。今の彼の中にあるのは、先ほど烏丸から告げられた言葉だった。

(——必ず、当てる。その意志の強さだけは………今は負ける気は無い)

——ヒュ

その後、彼が3投全て投げ終えるまでそう時間はかからなかった。

——シ……………ン

会場は、静けさに包まれていた。

そこにいる人間たちは、ただただ一点に視線を注いでいた。

投げ終えたことで減速を始め、徐々にハッキリ視認できるようになってきたボード台。どこに何本……………いつたい何点を取ったのか……………ただ、そこだけに注目していた。

そして……………ついに、判明する。

『……………ひゃ、180ウウウウ!! 夜原、驚異的な難易度を乗り越えて倍率50倍! 9000点を獲得してみせたああああ!!』

——オオオオオオ!!

「……………」

司会の言葉を改めて聞き、会場の観客たちは大いに盛り上がる。さらに、当の優も小さくガッツポーズをとっていた。

これで、優の総得点は17190。もはや、彼の勝ちが絶対的なものとなった。

『さあ、圧倒的な総得点となった夜原! しかし、試合は彼が投げ終えるまで終わりま

せん！ 続いては烏丸の最終ラウンドです！』

司会その言葉を聞き、優は烏丸の元へと向かう。だが、彼にしてみればなんとも言えない状況と言えるだろう。なにせ、これから自分がどうやろうとも逆転など不可能なのだから。

負けるとわかった状態。それでもやってくる自分の番。そんな状況で烏丸はただだ

「……………え？」

.....笑って、いた。

大きく、歯を見せながら……その口は、三日月の如く弧を描いていた。

だが、そこから感じるのは三日月のような神秘的なものではない。

ただ……言いようもない邪悪さを感じた。

「……やつちまったな、ガキ。しっかりとルールを聞いてねーとダメじゃねーか」  
(……なんだ?)

「こうやってルールが決められている以上、そのルールをしっかりと理解するのはプレイヤーとして当然のことだぜ?」

(一体、この人は……)

「前にオレの知り合いが言っていたが、オレたちが一流のプレイヤーのはあくまでルールによって守られてこそその一流だったな」

(何を、言って……………?)

——今回のゲームでは各ラウンド開始時に『目』、『痛み』、『縮小』、『回転』、『移動』の5つから最大二つまでを選んでいただきます！

——しかし、この制限ですがそれぞれ2回までしか選べません！

「制限……『代償』を最大二つまで選ぶ。」

「同じのを一緒に選んじやいけねーなんて……誰も言つてねーぜ？」

「ッ——!!」

今、理解した。

自分は………間違えたのだと。

烏丸に残っている制限は『移動』が二回分………『移動』一つにかかる得点への倍率は10倍。ならば、それを二つ選んだとしたら………100倍。

「………理解したよーだな。アンタのいる『そこ』——

そこが、デッドエンド行き止まりだ」



「……………完敗です」

「……………」

数時間後、司会や観客がいなくなった会場には優と烏丸の二人だけが残っていた。

あの後、結局烏丸は『移動』二回を選び、見事に180点を射抜いてみせ、1800点というこのゲームにおける最高得点を叩き出して勝利してみせた。ちなみに、実際

にプレイを行った際は『移動』のギミックのスピードが倍になっており、烏丸は投げ終えた後は回り過ぎて酔ってしまい、しばらくダウンしていた。

「特殊なルールに対する理解力も、純粋なダーツの腕も……オレは、あなたには敵わなかった」

「そりゃ、ガキとはくぐった修羅場の数が違うからな」

——ボツ

煙草に火を点けながら、優の言葉にそつげなく答える烏丸。吐き出した煙は天井へと昇っていくが、天井に届く前に空気に消えて見えなくなる。ほのかに煙草の臭いが優の鼻に届き始めたかと思つたその時……二人に近づくと人物が一人。

「お二人とも、お疲れ様でした。今回の試合は最近では一番の盛り上がりでした」

「……絹守さんか」

「……………」

そこに現れたのは、この賭けダーツの胴元である講談組若頭、そして優の今回のターゲットでもある男……絹守一馬だった。

「お久しぶりですね。こうして会うのは君が幼い頃以来なんです……覚えていますか？」

「……………ええ。烏丸さんと一緒でお変わりないので」

「なんだ？ 昔話するためになんか来たのか？」

「いえいえ、お話があるのは確かですが別の話ですよ」

しわの一つも無いスーツにきっちり整えられた髪。その丁寧な口調と穏やかな笑顔のまま淡々と話を続ける絹守。

だが、彼が次に発した一言に優と烏丸は思わず息を呑んだ。

「私がお話したいのは、彼の私を殺すという仕事についてですよ」

「ッ！」

「……………は？」

「……………気付いてたんですか？」

「これでも若頭ですからね。君たちの存在について耳にしたことはありません」

「……おいおい、急に出てきたと思つたら何の話だ？ このガキがアンタを殺すとか……」

絹守の言葉は、『コード・ブレイカー』について知つていふという口ぶりだった。だが、烏丸は知らなかつたやうで絹守の言葉にただ混乱していた。

「といつても、あくまで都市伝説程度の噂でしたがね。法で裁けない“悪”を裁く『コード・ブレイカー』という闇の存在……。ですが、私にも不本意ながら“上”の人間に知つてゐる人間がいますよ。本当は関わる気はなかつたのですが、もしやと思つて確認してみたんですよ。あなたがその『コード・ブレイカー』であり、私を殺す仕事を請け負つてゐるということをおね」

「……なるほど」

どうやら絹守は全てを知つてゐるやうだった。彼が言う“上”の人間というのが誰かは気になるが、今の優にとつてそれを問いただすのは無意味なことだった。そもそも、絹守がそう簡単に口を割るはずもないのだから。

「……よくわかんねーが、テメーは絹守さんを殺すためにこの賭けダーツに参加した、つっ—ことか」

「……そうです」

瞬間、烏丸の眼に警戒の色が一気に現れる。だが、間違ってはいけない。優は常人には無い異能を持っており、烏丸と絹守はあくまで常人。優が本気になれば、この二人など相手にすらならない。

「ですが、今となつては状況が変わりました。『コード：ブレイカー』という存在について知られた以上は……オレは烏丸さんも処分しなくてはならなくなりました」

「おいおい……絹守さん、アンタのせいでオレまで狙われちまつてるようだけぞ？」

「みたいですね」

「みたいですね、つて他人事かよ！」

「……ですが、問題は無いと思いますよ」

「あ……？」

——ピリリリ

ふと、優の携帯電話から着信音が鳴り響く。優は烏丸と絹守から視線を外すことなく、携帯を手に取り通話ボタンを押し耳に当てる。液晶に表示されたのは「非通知」の文字。それが表すのは……「エデン」からの連絡ということだった。

「……はい」

『『コード：07』、今回の仕事は中止だ』

「……はい」

携帯越しに聞こえてきた「エデン」のエージェントの言葉に、優は思わず目を見開いた。こんなことは初めてのことだったからだ。どういふことかと問い詰めるより先に、エージェントは続けた。

『総理直々の決定だ。とある人物から総理へと話があり、結果として中止となった』

「……そんなことで中止なんてことがあるんですか？」

『それだけ「上」の人間から話があったということだ。とにかくこれは決定事項だ。すぐに戻ってこい。お前には次の仕事がある』

——ブツツ

「……………」

「…………どうやら、この仕事は中止になったようですね」

優が発する言葉から、電話の内容を察した絹守は変わらぬ笑顔で口にした。それに対し、烏丸はわけがわからず首を傾げている。

そして、優は耳に当てた携帯を再びしまうと……大きく息をついた。

「…………こうなった以上、引き下がるしかありませんね」

「…………つたく、わけわかんねーな。とにかく、絹守さんを殺すのはヤメつてことではないのか？」

「ええ」

おそらくだが、絹守が言う「上」の人間とエージェントが言っていた総理に話をしたという人物は同一人物。総理にそんなことを決定させるとは、その人物が何者なのか気になるところであるが……聞いたところで、絹守もエージェントも答えるはずはないと優は感じていた。

「では、失礼します。……言っておきませんが、『コード：ブレイカー』については決して他言はしない方がいいですよ。不用意に喋れば、何があるかとあなた方を消さなくてはならなくなると思います」

「もちろんですよ。ねえ、烏丸君」

「生憎、そんな怪しい話をベラベラ喋る気はねーよ」

二人の返答を聞いたところで、優は彼らに背を向ける。そして、そのまま会場の出口へと向かっていった。そんな優に対して、烏丸と絹守は追おうとはせず、その背中を見つめていた。

「——おい」

だが、そんな優に声をかけたのは烏丸だった。いつの間にか煙草は灰皿へと置かれており、両手をポケットに入れていた。

しかし、優は歩みを止める様子は無く出口への距離を縮めていく。

それでも、烏丸は構わずに言葉を続けた。

「……オレが『迷路の悪魔』なんて呼ばれてるのは、対戦相手と二度と会うことがねーからだ。中にや例外もいるんだが………テメーだったら、また会っても悪くねーかもな」

——ビュオ!!



——ドガァン!!

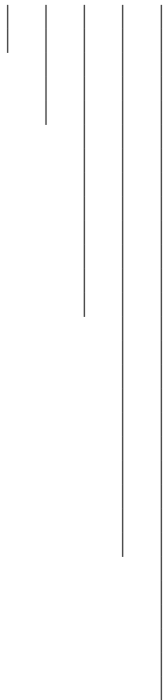
「なっ——!?!」

「ッ——!」

瞬間、優が振り向いたと同時に放った何かが烏丸と絹守の横を一瞬で過ぎ去り、彼らのはるか後方にある今回の試合で使われたダーツ台が轟音を立てて崩れる。

見ると、そのダーツ台の中央には3本のダーツが深々と突き刺さっており、ダーツ台全体に亀裂を走らせていた。

「――オレも、同じ気持ちです。ですが……きっと無理でしょう。悪魔」と  
エデン<sup>神</sup>：“……この二つの呪いに勝てるわけがありませんから”



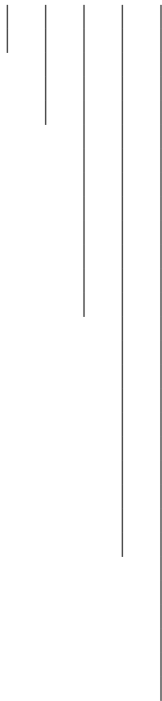
「……『コード:07』には仕事の中止が伝わったようだ。絹守一馬と烏丸隼は無事だ  
そうだよ」

「そう、それはよかったわ」

「だが、こんなことはもうやめてほしいね。仮にも法で裁けない“悪”を裁く存在で  
ある我々がこのような交渉に応じるなど、あつてはならないことなのだから」

「わかっているわ、こんな我儘はもうしない。それに、条件のこれから一生あなた方に情  
報を提供するというのも破る気は無いから安心してちょうだい」

「なら、いいけどねえ」



「……それが、先輩と先生殿の勝負の結末というわけですか」

「そうだ」

そうして時は現在……優から話された烏丸との試合について聞き終えた桜たちだったが、桜を除いた『コード：プレイヤー』たちはどこか納得がいかない様子だった。

「一つだけわからないんですが……優、どうして一回外したんですか？」

「む……？　大神、聞いていなかったのか？　それは厳しい制限があつたからで……」  
「違いますよ、桜小路さん。優の異能である『脳』を使えば、動体視力なども強化できます。ですからいくらが回ろうが動こうが、優にとっては問題ないはずなんです」

大神たちが感じた疑問……それは、優が最初に『回転』を選んだ時に180を取れなかったこと。確かに『脳』を使えば常人を越えた身体能力を得ることができ、銃弾を銃弾で撃つことができる優にとってただ回るだけの的を外すことなど考えづらかった。

しかし、その答えは優があつさり和白状した。

「……当たり前だ。オレはあの人の試合の時……一度だつて異能は使わなかつた。異能を使ったのは、試合が終わってからの一投だけだ」

そう、優は烏丸との試合において……異能は使っていないなかつた。使つたのは最後……烏丸たちに別れを告げる際に放つた一投だけであつた。

「ハア？ お前、結果的には中止になつたとはいえ勝たなきや仕事になんねー状況で

異能を使わなかったとか……バカじゃねーノ？」

「……オレにはなんとなくわかるわ、ななばん優の気持ち」

「そうだな、オレもだ」

勝たなくては仕事がこなせないという状況で異能を使わず、それで苦戦したという優に對し刻はわけがわからないという顔をするが、遊騎と王子はどこか納得したような表情をしていた。見ると、言葉にはしていないが大神もなんとなく予想がついているようだった。

「……バカでいいさ。ただ、あの人には純粋な自分の実力で勝負してみたかった……それだけだ」

「……そーかヨ」

「おお……さすが夜原先輩！ 正々堂々真劍勝負とは男らしいのだ！」

かつて自分の師であつた男との勝負にかける思いを語つた優に、刻もそれ以上は何も言わなかつた。また、桜も桜で感銘を受けたように尊敬の眼差しを優へと向けていた。

「よーし！ 私も夜原先輩のような腕前を目指すのだ！ 先輩！ ぜひご指導を！」

「悪いが、それは断る」

「えー!? なぜですか、夜原先輩〜！」

「桜チャーン、ダーツだったらオレが教えてやるつて〜。構え方とか、丁寧に教えちゃ

うヨ?」

「優に負けてるくせに偉そうに言ってるじゃねえよ」

「せやな、負けてたわ」

「刻! テメー、オレの前で下心見せるたあいい度胸だな!」

わいわいと騒ぎ始める『渋谷荘』の住人たち。大きな闘いが終わり、また新たな闘いが始まる間のほんの一瞬……それでも、彼らが過ごしたかけがえない一コマだった。

——人生なんてのは面倒な迷路のようなものだ

——どこかに向かおうとすれば、何度でも壁が目の前に立ち塞がる

——そこが行き止まりであるかのように

——だが、そこで諦めればそこは本当に行き止まりとなる

——大事なものは、何度行き止まりが目の前に現れようとも



——  
進み続ける意思の強さが、  
いずれ出口へと自身を導く

## 『青い炎狩り』 篇 序

code : 83 破壊が伝える覚悟

——『にゃんまる』……オレらもう、仲間やないねん。

聞き間違いだと思いたかった。

——“エデン”は……オレら『コード：ブレイカー』にこいつらと組んで、大神ろくぼんの左腕……『青い炎狩り』の指令を下したんや。

だが、ハッキリと鼓膜に届いたその言葉は……聞き間違いなどでは決してなかった。

——せやから、オレらはもう仲間やない。

彼らは確かに言った。

自分たちは、もう仲間ではない。

そう、彼らは——

——敵や。

「…………う、嘘だ」

春人に異能を与えて大神を襲わせた謎の人物、そしてパンドラの箱ボックスを持ち去った時雨……大神と桜の前に立ちはだかった敵としか思えない者たちの側に立つ遊騎の言葉に  
対し、桜はそう返すのが精一杯だった。

「そんなの……そんなの嘘だ！　そうだろう、刻君！　遊騎君！」

だが、それは桜にとつて本心であり願いだった。彼らが自分たちと……大神と敵対するなんて嘘としか思えなかった。確かにこれまで、何度もぶつかり合うことはあった。

だが、それでも彼らは共に闘う仲間として様々な「悪」と闘ってきた。

そんな彼らが敵対……殺し合う関係になるなど、とてもじゃないが信じられなかった。だから、これは何かの間違い……たちの悪い冗談に決まっている……：……：……：桜はそう自分に言い聞かせようとした。

だが——現実はず違った。

「……………」

「……………」

桜の言葉に対し、刻と遊騎は何も答えない。遊騎は眉一つ動かさず、刻は黙って煙草を啜るだけ。肯定しようとも、否定しようともしない。

だが、こんな状況ではその沈黙こそが何よりも物語っている。間違いでも冗談でもなく、彼らは本気なのだ。

そして、彼らが本気であることを後押しするような言葉が遊騎の口から放たれる。

『にやんまる』、ままごとはもう終いや。はよ自分の家に帰り。オレら『コード・ブレイカー』全員が相手や。今までの連中とは訳が違う。……大神が死ぬところ、『にやんまる』には見せたくないねん」

「な——」

大神が死ぬ……はつきりと口に出されたその言葉は、これまでのどんな言葉よりも強

い衝撃を桜に与えた。思わず必要以上の力を込めて拳を握り、カタカタと震える体を抑えようとする。

「なにを、言っているのだ……。いくら、"エデン"の命令だからって、皆にそんなことできるわけが——」

ふと、刻の煙草の先……灰になった部分が煙草からポロリと落ちる。そのまま重力に従い、一直線に地面へと落ちていき——

——ヴオ！

灰が煙草から離れ、刻の足元へ落ちる……そんな、ほんの一瞬のうちに遊騎は大神の後ろへと音速で移動した。突然のことに桜も反応できず、何が起こったのかと固まって

しまう。

「……そうか」

だが、大神はわかっていた。その行為がどんな意味を持つのか。決して桜を黙らせるためではない。

「本気なんだな、遊騎」

左腕から走る激痛と滴る出血……音速で通りすぎた一瞬のうちに遊騎からつけられた傷が、全てを物語っていた。

彼らは……できる。『エデン』の命令ならば、たとえ相手が大神だろうと……関係はなかった。

「……当たり前や。いつも言ってたやろ、大神。ろくぼんオレらは……『コード・ブレイカー』ともだち——ちやうねん」

「……そうだな」

——ゴオ！

再び向き合う遊騎と大神。瞬間、遊騎の身体からは音波が発せられ、大神は左腕全体を『青い炎』を変化させる。

それは紛れもない戦闘態勢。二人の眼には躊躇などなく、目の前にいる『敵』を斃すという強い覚悟が見て取れた。

「や、やめ——!!」

桜が止めるよりも先……今、互いにその距離を詰め、相手への攻撃を——

「はい、そこまで」

だが、その攻撃は一瞬のうちに二人の間に現れた帽子を目深に被った謎の男によって止められた。

「ッ……!!?」

「何者だ……? いったい、いつの間に……」

謎の男の介入に目を見開く刻に、時雨も彼の接近に気付けなかったようで目を丸くしていた。



「まあまあ。とにかくこの勝負、私が預かせてもらうよ」

しかし、謎の男は正体についてなどは何も語ろうとはせず、ただ大神と遊騎の闘いを終わらせるという目的のみを口にした。

「……誰か知らんと、すっこんどき！」

「そうはいかないだよねえ」

「は——!?!」

だが、当の遊騎は攻撃を止められたくらいで闘いを終わらせる気は無く、謎の男に向かって音速の蹴りを繰り出す。常人ならば反応すらできない程の速度の蹴り……のはずだったが、謎の男に向かって放たれたはずの蹴りは空を切り、謎の男は両脇にいつの間にか気絶させた桜と傷だらけの春人を抱え、さらに大神も連れて遊騎から距離をとっていた。

(早エ……!?! 遊騎の音速を超えている……!?!)

音速の蹴りが届くよりも先に桜を気絶させ、彼女と倒れた春人を回収するという謎の男の行動は、彼が確実に遊騎の『音』よりも素早い速さを持っていることを確信させた。

「……いつかこの日が来るとは思っていたよ。だけどね、大神君を“エデン”に殺させるわけにはいかない」

「やかましーいしー」

強い覚悟を持つて放たれる謎の男の言葉。しかし、遊騎はそれを聞こうとはせず口から音波を彼らに向けて発射する。轟音を立て、周囲にあつた鉄骨や地面が大きく抉れて土埃が上がる。

だが……

「逃げられた……逃げられたか」

土埃が晴れたそこには謎の男や大神の姿は無く、彼らがこの場を離れたことは誰の目にも明白だった。

「ふん……下らん情でもかけて逃がしたんじゃないのか？」

「黙んナ、時雨。『エデン』の命令だから仕方なくつるんでいるが、テメーに口出しされる筋合いはねえんだヨ。……大体、『コード・ネーム』なんて聞いたことも無い胡散臭い連中、本当に『エデン』に所属してるかどうかだつて怪しいぜ」

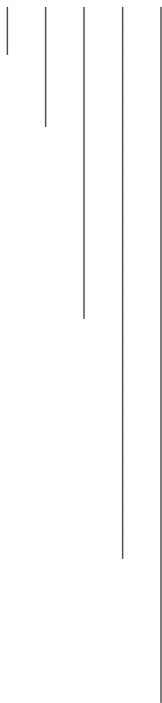
「当然だ。オレたち『コード・ネーム』は貴様らのような下つ端が知るところにはない」  
「なに!？」

「やめろ……」

まるで大神をわざと取り逃がしたとも言いたげな時雨の言葉に刻は反発する。そのまま言い争いを続ける二人だったが、フードを被った男がそれを止める。

「やめろ。今は大神を追うのが先。なぜなら『コード・エンペラー』が目覚めし今、大

神零……大神零は巨悪になりうる『まだ見ぬ脅威』となった。今のうちに下さねばならない……“エデン”による正義の裁きを」



「ふざけるな!!」

場所は変わり、大神たちが通う輝望高校の新校舎。普段、多くの生徒たちが勉強に励む場であるそこに呼び出された王子は、呼び出した張本人である平家から語られた〃狩り〃の話に思わず激昂した。

「何が『青い炎狩り』だ! 零のどこが『まだ見ぬ脅威』だつて言うんだ!」

「……………」

思わず平家の胸倉を掴んで詰め寄る王子。だが、平家は同様する様子など見せず、冷たい視線を王子に向けていた。

しかし、それでも王子の中に灯った熱は冷める気配は無い。

「いったい〃エデン〃は何を考えている! 『捜シ者』の時だつてそうだった! 罪なき『捜シ者』を勝手に『脅威』として裁いただけでは事足りず、零まで……………! 〃エデン〃はそうやって再び同じ過ちを繰り返そうと——!」

——ドゴオ!!

「ツ——!」

普段の冷静な態度とは打って変わり次々と言葉を吐きだす王子だったが、ただそれを聞くだけだった平家が唐突に後ろの壁を殴りつけたことでそれは止まる。よほどの力で殴ったのか、壁は大きくへこみ、亀裂も走っていた。

「……………今のは聞かなかったことにします。『悪』の肩を持つなど……………『コード：ブレイカー』にはあるまじき発言です」

「ツ……………だ、だが」

「やるしかないんですよ……………。遊騎、刻……………そして優にも決して譲れぬものがある。そのために『コード：ブレイカー』になったのですから。だから……………彼らだって迷いはしない」

平家の眼と言葉には、これまで見せたことも無いほどの冷たさが込められているようだった。先ほどまで激昂していた王子も、思わず言葉に詰まってしまうほど。

だが、その迫力は平家が本気であるということ物語っている。遊騎や刻と同じように……………彼も大神の『敵』となるということ。

「……………お前は、お前はこれでもいいのか!? 平家ー」

「……………関係ありません。」

来るべき時が来た……………それだけです」

「……危ないところだったね。ああ、春人君たちは安全な場所に送り届けたから心配はいらぬ。遊騎君につけられた傷も、出血の割には深くなくて良かったよ」

「……………」

工事現場から遠く離れた裏路地……大神たちはそこで身を隠していた。遊騎によってつけられた大神の傷には包帯が巻かれ、最低限の処置がなされていた。

一方の桜はまだ気絶しており、『子犬』が心配そうに彼女の腕などを小さな舌で舐めていた。

「わかつてると思うが、”エデン”の裁きは絶対だ。裁きを下すまで地の果てまで追ってくるだろう。どんな手段を使っても……」

工事現場で見たどこかおちやらけた雰囲気は無く、真剣な様子で大神たちを救った謎の男は話を続ける。しかし、そこには真剣さに加えてどこか強い覚悟を感じさせるようだった。

「でも、決して君を『捜シ者』の二の舞にはさせない」

「あんた、まさか……」

真つ直ぐと、強い意志を持った眼で大神を見る謎の男。その姿を見て、大神の中でこの謎の男の正体と呼べる者が一人だけ浮かんだ。

「…………いや」

しかし、大神はその正体についてそこで口にしようとはしなかった。そして、謎の男に背を向けてすつと立ち上がった。

「ちやうどいい。そろそろ『エデン』の嘘臭い正義にも飽き飽きしていたところだ。売られたケンカは遠慮なく買ってやる」

「報復なんか駄目だ！ 『捜シ者』はそれで人の心を失って『悪』に堕ちて——！」

「ならない」

「……え？」

大神の言葉に、謎の男は彼が『捜シ者』と同じ道を歩もうとしていると感じて声を荒げる。目の前にいる男が同じ過ちを犯すのを何とか止めようとしたが、大神は言葉を続けて謎の男の言葉を否定する。

「オレは『エデン』の言いなりにも、『捜シ者』の二の舞にもなる気は無い。……オレはオレだ」

真つ直ぐと、静かに言い切る大神。その言葉と表情には、何事にも惑わされることのないような……そんな意思の強さをひしひしと感じた。

そして、大神はあざ笑うかのように「フツ」と表情を和らげる。

「そもそも、これ以上の『悪』になど堕ちようがないからな」

「大神君……君って奴は……」

その姿に、謎の男は確信に近いものを感じた。彼なら……大神ならば、やってくれる。彼の言う通り、『エデン』に従い利用され続けることも、『捜シ者』と同じ過ちを犯すこ



ともなく。

「おーおー、カッコつけやがって。さすがはオレ様を選んでやった宿主だな。いや、オレ様やつばスゲエな〜」

そんな大神に茶々を入れる『エンペラー』に対し、大神は苛立ちを前面に押し出して睨みつけた。

「火の玉風情が何言ってやがる。そもそも、誰のせいどころなつたと……」

「ん、うーん……」

「ギクツ!？」

と、『エンペラー』との言い合いが始まるかと思われたところで桜が気がついたようにゆつくりと動きだした。

すると、謎の男は全身をびくりと震わせたかと思うと、慌ててその場を離れ始めた。

「じ、じゃあ私はこれで!」

「おい、待て! あんたは——!」

急にその場を離れようとする謎の男を止めようとする大神だったが、謎の男はくるりと振り返ると口元で弧を描きながら高々と右手を上げて別れを告げた。

「いかに、通<sub>と</sub>りすがりの二人の味方さつ! じゃあ、またねつ!」

「……ふう」

先ほど、大神たちといた裏路地から少し歩いたところにある川沿い。大神たちと別れた謎の男は辺りに誰もいないことを念入りに確認しつつ、目深に被っていた帽子を外した。

「やつぱり、久々に脱ぐと身体が軽いなあ。……あ、『捜シ者』が来た時にちよつとだけ脱いじやつたっけ」

ぼそぼそと呟きながら、生い茂った雑草に隠していたそれを取り出していそいそとそれを着始める。

「何はともあれ……いかに、バレずに済んでよかつた。今は姿を晒すわけにはいかないからね。……そう、来るべき時が来てしまった今は……」

そうして見せた姿は、大神たちにとって見慣れた存在。『にやんまる』……ではなく、その着ぐるみ。そう、『渋谷荘』にて大神たちと共に過ごした……会長だった。

「やっぱりテメエか、クソネコ」  
「わあ!!?」

と、いつの間にか彼の背後に立っていた大神の声に、会長はまたも全身をびくりと震わせた。だが、大神は特に驚いた様子はなく、言葉からも「予想通り」と言いたげな様子だった。

「お、大神君!? そこを!?」

「ふん、クソネコのくせに随分とスカした顔したもんだな」

だが、当の会長はまさかバレていたなどとは思っていなかったようで、あたふたと落ち着かない動きを繰り返し返していた。普段から静かな動きをする方ではない会長だったが、この時ばかりは必死さが懸命に伝わる動き方をしていた。

「あ、あわわわ……！　と、とにかく中身のことについては桜小路さんには絶対に黙つてて……！　お願い！」

すると、会長は大神に隠すのは諦めたようで、代わりにとても言いたげに桜には秘密にするよう大神に対して深々と頭を下げた。『捜シ者』との闘いの最中に明かされた、会長と桜の関係……実の父親と娘であるということ、桜に隠すためにも、自分の姿を桜に知られるわけにはいかないのだろう。

「いや、別にオレはあの人にバラそうなんて気は——」

「会長……」

『なっ!?!』

それは大神も察しており、バラす気は無いと話そうとしたその矢先、大神の後ろに立っていた桜の声で大神と会長は同時にぎくりとする。いつからそこにいたのかわからない以上、彼女がどこまで話を聞いてしまったのか……または、見てしまったのかはわからないからだ。

「さ、ささささ桜小路さん……！　い、いつからそこに……！」

「会長……酷いのです。遊騎君と刻君……私を本気で騙そうとしているのです。み、皆が大神を……って、そんなわけ、ないのに……」

だが、その心配は杞憂だったようで、桜は先ほど起こったショッキングな出来事のこ

とで頭がいっぱいな様子だった。どうやら、何も聞かれずに済んだようだった。

「さ、桜小路さん……」

しかし、だからといって安心していいわけではない。桜にとつて、遊騎と刻が敵となることなんて想像できないことであり、したくもないことだろう。だが、それが現実として目の前で起こり、宣言された。否定したい願望と現実とに挟まれた桜だったが、そこでハッと気付いた。

「ツ——！　　そ、そうだ！ 『渋谷荘』！」

「え!？」

「とにかく『渋谷荘』に戻るのだ！」

「さ、桜小路さん！」

言葉にしてすぐ、桜は無我夢中で走り始めた。背後で会長が自分に向かって手を伸ばしていたが、それに気付く余裕もなく、一心不乱に『渋谷荘』を目指した。

（そうだ……『渋谷荘』に戻るのだ。戻ればきつと、王子殿や平家先輩……夜原先輩もいる。お三方に相談してみよう。それに、もしかしたら遊騎君と刻君だつて戻ってきていて、「冗談だ」って言ってくれるかもしれない……）

荒くなる呼吸や疲れなど意にも介さず、走り続ける桜。今の彼女にとつて、『渋谷荘』とは唯一にして絶対とも言える希望だった。

（いつだってそうだ……。何があつたつて、『渋谷荘』にいつも皆いたではないか……。王子殿が元『Re—CODE』だとわかつて喧嘩した時も、『捜シ者』たちと闘つてどんなに苦しいことや悲しいことがあつた場所だとしても……。いつだって、最後は『渋谷荘』あそこで笑い合つていた。だから、だからきつと——！）

だからきつと、そこには自分が望む……。いつも通りの風景が広がっている。そう、純粹に信じていた。

「み、皆——！」

だが、いくら強く思おうと現実がその通りになる保証など……。どこにもない。

「……仕方がないよ。この地下は要塞化しているからね。放っておくわけがない」

「それに、ターゲットである零がいた場所の一つだ。あぶり出すにや、こうするのが常套手段だ」

「……………う、嘘、だ」

目の前に広がる光景に、桜の身体は静かに震える。  
信じられない。

信じたくない。

しかし、どれだけ否定しようと目の前の現実是不変ならない。

「こんなの……………だって、ここは……………」

溢れ出すように、大粒の涙が頬を伝う。そうして伝い落ちた涙は……………足元に落ちていた夏祭り時に撮った写真を濡らした。

「ここは、いつだって皆で過ごした大切な……………！」

「……………それだけ、あいつらが本気だということだ」

崩壊した『渋谷荘』……………その光景は、何よりもはつきりとした現実として桜に突きつけられた。

## code : 84 『影』は迫る

——王子殿が毎朝ピカピカにする玄関

——夜原先輩のエプロンがかけられた台所

——遊騎君がラクガキをした壁

——平家先輩が決まって寄りかかる柱

——刻君がお気に入りの洗面所の鏡



——大神が直した雨漏りの後

——みんな、みんな………無くなっちゃった

突如として告げられた刻と遊騎の敵対という現実をなんとか否定したくて、彼らと共に過ごした『渋谷荘』へと走った桜。しかし、そこで待っていたのは明らかに人の手によって破壊され尽くした『渋谷荘』という、追い打ちをかけるような惨状だった。

「え、えつと……み、皆だつて好きでこんなことしたわけじゃないよ！ きつとのつぴきならない事情があつて……！」

「ハッ、どーだかな〜？ 所詮は『コード・ブレイカー』なんて飼い犬は、飼主エデン”の

言うことなら喜んで聞く奴r——」

「そんなこと言っちゃダメだつて〜!!」

「イテテ！ 何すんだ、この珍種が！」

なんとか桜を慰めようと言葉をかける会長だったが、『エンペラー』はそんなことお構いなしにその慰めを無駄にするような言葉を口にする。そんな『エンペラー』の言葉を止めようと会長はビシビシと叩き始めたが……当の桜はというと、そんな彼らのやり取りに耳を傾ける余裕など欠片もなかった。

「……なんなのだ。こんなことをしてまで大神を狙うなんて…… “エデン” の言いなりにならねばならぬ理由なんて……」

『渋谷荘』が壊された悲しみ、仲間だったはずの大神を狙う理不尽に対する怒り……様々な感情でわなわなと身体を震わせる桜。

しかし、まさにその渦中の中心とも言える人物である彼は……フツと不敵な笑みを浮かべた。

「……どうだつていい。かかってくる奴は全員ぶつ殺すだけだ」

「お、大神……」

「さあ、行きましよう。とりあえず、遊騎の『音』でも探し当てにくい場所で態勢を整えましよう」

そんな彼の態度に、桜は流れていた涙も思わず止まり顔を上げる。そうして見えたのは、いつもと変わらぬ足取りで『渋谷荘』を後にしようとする大神の後ろ姿だった。

——キイイイン

一方、遊騎と刻は時雨と行動を共にして大神の搜索を続けていた。『音』の異能を持つ遊騎が耳を澄ますことで大神たちの足取りを掴もうとするが、先ほどから成果と呼べるようなものはなかった。

「大神零一人すら見つけられんとは、『音』の異能もヤキがまわったか」

「あいつだってバカじゃねー。遊騎の『音』での探索のかわし方なんてまず一番に考えて手を打つだろーぜ。こうなったらそう簡単には見つかるわけがネー」

そんな遊騎に対し、呆れたような口調で話す時雨。だが、それは決して遊騎が悪いわけではない。

刻の言う通り、大神は『音』による搜索を警戒して動き始めていた。同じ『コード：ブレイカー』として『音』の異能を間近で見してきた彼にとって、対策も立てやすいのだろう。

「どうだか……大神零に情でもわいて見つからぬフリでもしているんじゃないか？ まったく、懲りない奴だ。貴様のその下らん情が人を死に至らしめる。……真理のようにな」

「――！」

しかし、それでも時雨は遊騎が手を抜いているとも言いたげに言葉を続ける。彼らにとつてターゲットである大神が上手と認めたくないのか、ただ遊騎を認めようとしていないのか……そのどちらであるかはわからないが。

そうして冷たい言葉をかける時雨と、言い返そうとはしない遊騎。だが、時雨が最後に口にした真理という名前を聞いた瞬間、遊騎は大きく目を見開いて時雨の胸倉を掴んだ。

「取り消せや、時雨！ 真理は……真理は生きとる！ 死んどらん！」

「アレで生きているだと……？ よく言えるな。いいか、真理は死んだんだよ。お前が……お前が真理を殺したんだ！」

「ッ……！」

珍しく感情を露わにする遊騎だったが、時雨は臆することなく真正面から言い返す。

そして、「真理はお前が殺した」という言葉を受けたことで、遊騎は思わず唇を噛みしめ

……

「遊騎！」

そのまま時雨に背を向け、その場から走り去っていった。刻の声に止まることもせず、遊騎の姿はすぐに見えなくなった。

そんな遊騎を見て、胸元のネクタイを直しながら時雨はため息をつく。

「ふん。裏切るのか、腰抜けが」

「……裏切らねーヨ」

相変わらずの態度を続ける時雨だったが、刻は新しく啜えた煙草に火を点けながらそれを否定する。

「アイツは『エデン』に反発はしているが、一度だって仕事を放棄したことはない。

……なんでそこまですんのかは、アンタの方が知ってんじやネーの？ 時雨クン」

「……………」

かつて、桜も聞いたことがある。遊騎は『エデン』を嫌っている。それでも『エデン』に従う理由……それこそが遊騎にとっての『コード：ブレイカー』になった理由なのだろう。

そして、おそらくその理由については古くからの知り合いである時雨の方がよくわかかって――

「そんなことはどうでも……どうでもいい」

「ツ――!？」

唐突に聞こえた無機質な声。思わず声が聞こえた方向へと体の向きを変えつつ距離をとる刻。

しかし、そうして見えた景色に刻は思わず息を呑む。

(ッ、これは――!?)

そこに立っていたのは、工事現場で春人に対し不意打ちとも呼べる攻撃をしたフード

を被った男。しかし、異常なのは彼の周りだった。

彼を中心として円系に、足元に生える草が見る見るうちに萎れていき、その範囲に生えていた木々も枯れ果てていく。さらに、上空からボトボトと力無く落ちてきたのは……鳥。見るからに息絶えており、萎れた草の上にはフードの男以外の生気が失われているようだった。例外としては、フードの男の肩に乗っているインコのみは生きているようだった。

(コイツ……一瞬で周りの動植物の命を奪った……? 一体、何の異能を……)

「邪魔しないでいただけませんか? まだ、この犬を殺すつもりはないので」

警戒心を高める刻に対し、時雨は特に気にする様子も無くフードの男を見る。そして、彼はフードの男の正体を告げた。

「週末ヲ告ゲシ者……『コード：クローザー』さえちか 冴親さん」

名を呼ばれたことで、男……冴親は被っていたフードを脱ぎ捨てる。そうして露わになった姿は、男性にしては珍しく腰まで伸びた長髪、刻と同じ閉成学院高校の制服を着た柔和な笑みを浮かべた端正な顔立ちの美少年だった。

「躰のなっていない駄犬……駄犬は殺してしまおうか、時雨君。ああ、でもその美しい金銀妖眼を失うのは惜しい……惜しいな」

だが、その柔和な笑みを浮かべる口から放たれた言葉は物騒極まりない言葉。見た目

だけでは判断できないが、間違いなく彼も『コード：ネーム』の一員ということなのだろう。

「そ、その制服ってオレの高校の……」

「黙れ。『コード：ブレイカー』は大人しくオレたち『コード：ネーム』の言うことを聞いていればいいんだ」

「なに!？」

冴親の登場に動揺する刻に対し、時雨は高圧的な態度を続ける。いや、正確には先ほどよりも高圧的な感じは強い。何より、時雨が刻を見る目が明らかに見下している眼であるからだ。

そんな時雨の態度に、思わず刻も時雨を睨みつける。

「格が違うんだよ。罪を犯した者しか裁けないお前たちとは違って、オレたち『コード：ネーム』は必要とあらば何者であろうと殺せる自由を『エデン』から許されているのだから」

「アア!?! 何言ってるやがル!」

「ふん、まだわからんか。オレたちは『悪』を裁くのではない。『正義』か『悪』かオレたちが決めるんだ。『コード：ネーム』四人は貴様ら『コード：ブレイカー』の遙か上の強さ・権利・自由を持つ存在。人の生死さえもこの手に握る至高の存在だとよく



覚えておけ」

「……………」

かつて『捜シ者』もその一人として君臨していた『コード・ネーム』。並外れた者たちではないことは予想していた刻だったが、まるで自分たちが神であるかのように話す時雨の言葉に、刻が抱いた感情はシンプルなものだった。

……気に入らない、と。

「とにかく、お前は引き続き大神を捜すことに専念……専念することだ。遊騎ヌの代わりの駒も用意している」

——パチン

そう言った冴親が指を鳴らすと、近くに生えていた木の陰から何者かが飛び出してきた。だが、それは刻にとってよく知った顔だった。

「テメエ……優！」

「……………」

優の登場に驚いた様子を見せる刻だったが、当の優は刻には目もくれずに冴親の方を見る。

「冴親様、一帯の気配は探りましたが大神はいません」

「ふん、最初からそんなことで見つかるとは思っていない。気配など探る暇があれば、

その無駄に鍛えた身体を使って捜しまわれ」

「……わかりました、時雨様」

「ッ……！」

深々と時雨に頭を下げる優を見て、思わず刻はわなわなと拳を震わせる。いくら『コード・ブレイカー』の上に立つ存在だとしても、こんなにも下手に立って大人しくしている優を見て、刻は明らかに苛立ちを感じていた。

「では、失礼します。……行くぞ、刻」

「アア!? オレは別にテメエとなんて——！」

「そういう指示だ。いいから行くぞ」

「……………チッ！」

刻は一際大きい舌打ちをすると、冴親たちに背を向けて歩き始めた。続くように、優も一礼してからその後を追う。そんな彼らの背中を見て、時雨はつまらなそうに鼻を鳴らし、冴親は現れてから一度も崩さないその柔らかな笑みを浮かべ続けていた。

「とにかく、まずは大神がどう動くかを考えることからだな。アイツのことだから、まずは素敵に有利な遊騎の『音』を避けるために……」

「……………」

「……………おい、刻。聞いているか？」

「つせえんだヨ！ さつきから見たりやペコペコしやがッテ……………！ よくもまあ、そんな風に尻尾振れるもんだぜ！ やっぱテメエはどこまでも犬野郎ってことかヨ！」

先の『捜シ者』との闘い……………正確にはその闘いに備えた修業にて、少しとはいえ優を認めようとしていた刻。だが、彼が見たのはその認めようとした男がみつともなく気に入らない存在に黙って従う姿。とてもじゃないが……………その気分はいいわけがない。

「……………そう文句を言うな。『コード：ネーム』なんて存在があつたことはオレも知らなかった。時雨……………様が言う通り、彼らはオレたちより上の強さと権利を持っている。反発したところで、良い結果が待っているわけじゃない」

「だからってテメーみたいにペコペコすんのはゴメンだ！ オレは性根まで犬野郎のテメーとは違うんだヨ!!」

「……………」

「犬野郎」と罵る刻に対し、優は何も反論はしなかった。それは自分でも認めているか

らかはわからないが、刻のように激昂しようとはしなかった。

ただ、何かを覚悟したかのような……静かな、強い眼をしていた。

「……なあ、刻」

「アア？ うっせーな、大神を捜すのはテメーがやれヨ。オレは足で稼ぐなんて汗臭いやり方に付き合う気は——」

「違う。お前に一つだけ話と……頼みがある」

「……頼み？」

「ああ」

「実は——」

---

---

---

---

---

「真理……何も心配せーへんでええんやで。〃エデン〃に任せとけば全部大丈夫や。〃エデン〃はな、すごいんやで。オレに電話も家だつてくれてようしてくれるし、何より〃エデン〃の医療は五十年先いつとるつちゆう最先端や。真理も……きつと良うなる」

都内のある大病院。人員も規模も他の病院より一步上をいく大きな施設の中の、限られた人間しか立ち入れない特殊な治療室を……遊騎はガラス越しに見ていた。いや、中にいる患者に話しかけていた。

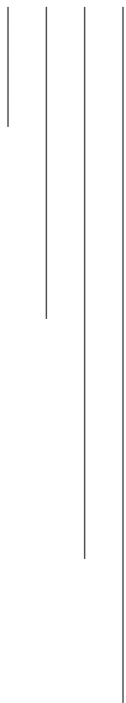
「……今な、『狩り』しとんのや。『青い炎狩り』……悪い奴、斃すんや。そしたらな、〃エデン〃はまた最新の治療を世界の誰よりも先に真理に試してくれるんや」

ギユ、と拳を握る遊騎。遊騎の言葉は、半分は真実であるがもう半分は嘘。少なくとも、遊騎自身はそう感じていた。『狩り』の対象である大神は遊騎にとって、共に過ごした者。悪い奴などとは……言えるはずもない存在。

だが、本当のことなど言えなかった。たとえガラスの向こうにいる彼に聞こえていないとしても、そんな存在を追っているなどは。

「……時雨も待つとる。『真理が良うなったらまた三人で遊びたい』つて言うとした。……アイツらしいやろ？ だから、真理……

——はよう目え、覚ましてや………



「いや、それにしても考えたね大神君。地下や室内ではなく、あえて屋外を拠点に選ぶなんてね」

「ちようどよく、その悪趣味なデザインのテントが無事でしたからね。有効活用するだけです」

「いかにも、近くを流れる川の音で遊騎君の『音』の探索から逃れられる。それにこんな自然だらけじゃ刻君の『磁力』に作用するものもほとんどないしね」

その頃、大神たちは勢いよく流れる川の近くに『にやんまる』がデザインされたテントを広げていた。周囲にある物といえば砂利や生い茂る木々くらいといった、まさに自然に囲まれた空間。どうやら優の予想通り、遊騎の『音』による探索から逃れるための策を講じたようだった。

「それより、さっきも言いましたが水はろ過機を作ったので必ず火を通してください。あと、枯れ木以外には火を点けず、ガス缶を使う時は……」

「うんうん、サバイバル生活をしている君は輝いているね」

台風の時にも見せたサバイバル技術を最大限に駆使できる状況だからか、大神は何やら小さな木材を削る作業をしながら注意事項をどこか生き生きとした様子で語っていた。

しかし、忘れてはならない。今の彼らはあくまで……追われる存在なのだ。

「……でも、どうせキャンプをするなら皆で来たかったね」

「……………」

先の『捜シ者』との闘いにおいて、大神たちは桜を『渋谷荘』から遠ざけるためにキャンプという嘘をついた。だが、彼らがやっているのはキャンプといえなくもない。

その目的は、かつての仲間の追撃から逃れるためというのが皮肉なものだが。

「——逃げるのだ」

「……桜小路さん？」

ポツリと、弱々しく呟いた桜の言葉に、大神は作業を止めて桜の方を見る。そこには破壊された『渋谷荘』を見た時の悲しみに塗れた様子は無く、なんとか大神を説得しようとする桜の姿があった。

「逃げるのだ、大神！　そうすれば皆と殺し合う必要など無い！　……もちろん、お前が悪くないことはわかっている。だが、皆と闘うことになるくらいなら勇気ある逃亡を



「オレは逃げません。……絶対に」

「……なぜだ！」

しかし、大神はそんな桜の説得を間髪入れずに否定する。そして、そのまま桜に背を向けて中断していた作業を再開する。そんな大神を見て、桜は思わず語気を強める。

「そうまでして、なぜ皆と闘おうとする！ 喧嘩の売り買いじゃないんだぞ?! 誰かが……死ぬかもしれないんだぞ?!」

「誰かが死ぬ可能性があるのは今までも同じです。それに、所詮は喧嘩の売り買いです。命懸けの喧嘩ってわけです。面白いじゃないですか。『エデン』の方から喧嘩を売ってくれたおかげで、オレは自由になりましたし」

「ッ——！ 大神！」

遊騎と刻……共に『渋谷荘』で苦楽を共にした仲間との命懸けの闘いを「面白い」と話す大神に、桜はどうとう我慢の限界を迎え大神の肩を掴む。

「いい加減にしろ！ 命懸けの喧嘩などと……！ お前は本気で皆を——！」

——ガッ！

瞬間……肩に伸びていた桜の手首を大神の手が掴む。そのまま桜の手を肩から離し、大神は桜の方を真正面から見る。

「殺しますよ……絶対にブツ殺す。オレがそのつもりだつてことくらい、あいつらはわかっている。……あいつらなら」

それは、言うなれば信頼。共に死線をくぐり、共に生きてきた彼らの間だからこそ生まれるもの。だからこそ、大神は逃げない。刻たちも大神を逃がさない。

初めから彼らの間に……逃走などという選択肢は存在していなかった。

(なんて……決意だ)

だが、彼らとの間に信頼を感じていたのは桜も同じだった。だから……認められなかった。

「……ダメ、だ」

震えながら、言葉を絞り出す桜。大神も刻たちも、止まることは無いと今の大神とのやり取りだけで桜は理解した。だが、納得までできるわけがなかった。大神にとつても桜にとつても、仲間である刻たちと闘うことなど……そうすぐに納得できるわけがない。

(止められないのか……？ もう、戻ることはできないというのか……？)

しかし、発した言葉とは裏腹に頭の中には弱気な言葉が次々に浮かぶ。今の桜の中には、ただ「ダメ」と繰り返すしか言葉が浮かばなかった。

「ダメなのだ、そんなの……。ぜ、絶対に……」

彼らを止める言葉も、術も……何も浮かばない。もう本当に……戻れないのだという  
非情な現実が桜の頭の中を侵食していった。

(昨日まで当たり前前にあつた、あの日常には……)

「……でも、ただブツ殺すのは面白くない」

そう言って大神は、桜の手に何かを置いた。

そこには、桜の掌に収まるほど小さな……『渋谷荘』があつた。

「これ、は……小さな……『渋谷荘』？」

「ええ。でも、一人じゃそれが精一杯です。だからブツ殺す前にあいつら全員を馬車馬のように働かせて『渋谷荘』を建て直させます。……もちろん、もう雨漏りなんてしない立派なヤツを、ね」

「お、大神……！ お前、最初から……！」

大神の言葉に、桜は思わず目を見開く。大神の言葉はつまり、刻たちと闘うことになっても殺しはしないということ。さらには彼らが破壊した『渋谷荘』も元に戻してみせる……彼らと、一緒に。

「さんざんオレのことを笑ったあいつらを召し使いのようにこき使つてやるのも悪くない」

「お、大神君！ じゃあついに『渋谷荘』マンション化計画の時が……！」

「てめえは黙つてろ」

そんな大神の言葉に便乗するかのように、どこから取り出したのかお手製の『渋谷荘』マンション化計画の計画書を持ってそわそわとする会長。せつかくの雰囲気をぶち壊す発言に、大神は冷ややかな言葉を返す。

そんな彼らのもとに……一本の糸が放られた。

——ヒュン

「ぬおっ!? 『渋谷荘』が!？」

その糸は桜の手にあった『渋谷荘』に引つかかると、そのまま桜の手から『渋谷荘』を奪う。まるで……釣りでもしているかのように。

——パシッ

「……へえ? 相変わらずうまいもんだな、零」

「王子殿!」

突如として放られた糸が戻った場所には、自身のバイクに背を預ける形で立つ王子の姿があった。釣りを趣味とする彼女にとって、その程度はお手の物ということだろう。

王子の登場にパツと表情を明るくする桜。しかし……

——ス

「お、おい……大神? 王子殿に限ってそんなことは……」

そんな桜を制するように、大神は桜の前に立つ。そんな大神に困ったような表情をす  
る桜だったが……すぐに思い知った。

——バシヤ!

「——え?」

「……ままごとはもう終わったんだよ」

大神が作った『渋谷荘』を、何の躊躇いもなく近くの川に投げ捨てる王子。そう、彼女も……『05』のナンバーを持つれっきとした『コード：ブレイカー』なのだ。

「さあ……覚悟決めな、零」

王子の足元から、『影』が溢れ出す。『影』は大神たちを絶望に染めるかのように、彼らへと伸びていった。

## code : 85 諦めていた再会

「……覚悟、ですか。そんなもの、とうにできていますよ……王子」

「……そうか」

刻と遊騎の追撃から逃れようとした大神たちの前に現れた王子と、真正面から睨み合う大神。桜にとつては信じたくないだろうが、王子もれっきとした『コード：ブレイカー』である以上……今の立場は刻たちと同じだった。

「なら、零。その覚悟……無駄にはしない！」

それを証明するかのように、王子は『影』によって生成した鎌を容赦なく大神に振るう。自らの『影』が截断されれば致命傷になりかねない王子の攻撃を避け、大神はその左手に『青い炎』を灯す。

「それは……こつちの台詞だ！」

「無駄だ！」

『エンペラー』が復活した影響か、これまでより巨大になった『青い炎』はまっすぐ王子に向かっていく。しかし、王子はすぐさま『影』の鎌を地面に突き立てることで『遮影』を展開する。

——パアアン!!

青と黒……『青い炎』と『影』がぶつかり合い、その衝撃で川の水が弾けるように音を立てて辺りに広がっていく。普通なら『青い炎』によって燃え散るところだが、『影』はかつて王子が言ったように実体がない。実体がなければいくら『青い炎』でも燃え散らせることはできないのだろう。

そして、二人はそのまま次の攻防にうつろうと真正面から睨み合い——

「——フツ」

しかし、次に王子がとった行動は攻撃でも防御でもなく……『影』を消してその顔に笑みを浮かべることだった。

「ハッハッハ！　たいした肝の据わり様だな！　『渋谷荘』が全壊にされようが、『コード：ブレイカー』のオレが相手だろうと関係なしか！　さすがだな、零！」

「お、王子殿……？」

大神に向かつて攻撃したかと思えばすぐに攻撃をやめ、けらけらと笑う王子の姿に、桜はわけがわからないといった様子だった。王子からの敵意が感じられなくなつたのか、大神も『青い炎』を消して王子を注意深く見ていた。

「……悪いな。ちよつと試させてもらった。オレはお前を狙いに来たんじゃない。……守護まもりしに来たのさ。そもそもオレが『コード：ブレイカー』になつた理由の一つは



それだからな」

自分は大神を斃すためではなく、守護まももするために来たと話す王子。さらには、それが王子が『コード：ブレイカー』になった理由でもあると話され、桜はさらにわけがわからなくなる。

「お、大神を守護まももすることが王子殿が『コード：ブレイカー』になった理由……!? それには、いったい……」

「……全ては、『捜シ者』の遺志だ」

簡潔に、そう告げる王子。そんな彼女の頭の中では、『捜シ者』とのやり取りの記憶が蘇っていた。

まだ、王子が『Re—CODE』としてロスト中である『捜シ者』の傍にいた頃……『捜シ者』は唐突に彼女に別れを告げた。

「泪……私の『麗艶の守護神』。これからは私ではなく、零を守護してやってほしい」  
「そんな……なぜなのでしょう？ 私は、これからもあなたを……」

「もう、私を守護する必要はない」

跪いて『捜シ者』の言葉を聞く王子は、納得できないといったような表情で抗議しようとする。だが、『捜シ者』は彼女の前に膝を突いてその手を優しく握った。

「零は『まだ見ぬ脅威』として、いずれ必ず“エデン”に狙われる。だが、零は絶対に屈することはない。そして、いずれ辿り着くだろう。私には捜しえなかつた永遠不変の心理に。だから、泪……零を頼む」

その後、彼女は『コード：ブレイカー』となる。『Re-CODE』として迫害されることも何もかも覚悟して……『捜シ者』の言葉のままに。

『捜シ者』が……」

「ああ、あの人は全てわかっていたんだ。こうなるってことがな」

大神の左腕が『コード：エンペラー』の腕であることは、『捜シ者』も知っていた。だからこそ、彼は大神が今のような状況にいずれ陥ることを予測していたのだろう。そして、その時に大神の味方となる者として……王子は選ばれたのだ。

「けどな、たとえ『捜シ者』のその言葉がなくなるともオレは『コード：ブレイカー』だ。この手で裁くのは悪のみ。……お前を裁くつもりなど毛頭ない」

「王子殿！」

王子の言葉に、桜は笑顔を浮かべる。しかし、当の大神はというと腕を組んで怪訝そうな表情を浮かべる。

「……知りませんよ？ 結構ハードな闘いになる。あなたについてこれるんですか？」

「ああ!!? お前、誰に向かって口聞いてんだ!!? 本当にブツ殺してやろーか、オラ！」  
王子の実力を疑うような大神の言葉に、王子はすぐさま得意の頭突きを大神に繰り出

す。だが、そのいつもと変わらぬ威力の頭突きこそ、大神に対する「問題ない」という返答に他ならなかった。

そして、それは大神もわかっていた。

「……フツ、その元気があるなら問題なさそうだな」

「当たり前だろ。お前に心配されるほどヤワじゃねーのさ」

「誰も心配なんてしては——」

「王子殿！ やっぱり王子殿は王子殿なのだ！」

「ワフツ！」

「どわっ！ さ、桜小路！」

そこでようやく笑みを浮かべる大神。そして、桜は嬉し涙を流しながら『子犬』と共に王子にハグをした。なんとか彼女たちを支える王子のその姿は、かつて共に過ごした時と変わらないものであった。

「どんな理由であれ、『エデン』の命令をあつさり無視しやがるとは……さすがオレ様の歌姫だぜ、『8tears』<sup>エイスティアーズ</sup>」

「いかにも、いかにも」

また、『コード：エンペラー』も王子の行動に感銘を受け、ボロボロと涙を流していた。彼としても、一ファンとして王子と闘うことにならず安堵しているのだろう。

「ところで王子殿、どうして私たちがここにいるとわかったのですか？」

「他の連中は知らないと思うが、ここは『渋谷荘』から一番近い溪流だ。釣りの穴場だからオレはよく来てたがな。そして、零ならまずは得意なサバイバルフィールドに身を置くと思ってたってわけだ」

「おお！ 『渋谷荘』が釣り上げられたのだ！」

「ぶん投げて悪かったな。でも、釣り糸は引つかけたままだからいつでも釣り上げられたってわけだ」

王子が味方として加わったことに安堵しつつも、そもそもなぜこの場所がわかったのか尋ねる桜。大神のことをよく理解した王子ならではの推理に納得する桜は、王子が釣り上げた『渋谷荘』を再び貰い受ける。

しかし、探知系の能力があるわけでもない王子がこうして大神の元に來れた以上、他の『コード・ブレイカー』たちがここに来ないとは言いきれなくなったことでもある。

「だが、ここもいつまでも安全ってわけじゃない。早く移動した方がいい」

「……で、ですが『コード・ブレイカー』の皆と『エデン』相手ではすぐに見つかってしまいそうなのだ……」

そして、それは王子も予想することであったよう移動を提案する。しかし、桜の言うように『磁力』に『音』といった搜索に有利な異能を持つ刻たちから隠れられる場所

などそう簡単には見つかりそうはなかった。

しかし、王子はそんな桜の言葉に対してすぐに首を振った。

「いや……一つだけ安全地帯と呼べる場所がある」

「……………え？」

「お前たちの通っている輝望高校だ。今や安全地帯はあそこしかない」

「き、輝望高校が安全地帯!?!」

「ギギギ、ギクウ!」

まさかの言葉に、桜は仰天する。安全地帯と言いきれる場所があることにも驚いたが、何よりその場所が自分たちが通う高校であるとは予想だにできなかった。

……なぜか会長は焦っている様子だったが。

「ああ、なぜならあそこは——」

「お前を見張っていて正解……正解だったようだな、八王子泪。他の者の眼は欺けてもオレには通じない……通じないよ」

「だ、誰だ!？」

突然の聞き慣れない声に、声の方向を振り向く桜。そこには、先ほど刻たちの前に姿を現した時雨と同じ『コード：ネーム』……牙親が肩にインコを乗せて立っていた。

「オレは『コード：クローザー』終末ラッパ告げ者牙親。君が零……大神零か」

「……さつそく『コード：ネーム』のお出ましか」

「あの制服は、刻君と同じ閉成学院高校の……。しかし、なんとも華のように美しい人なのだ……」

『コード・ネーム』の登場に身構える大神と王子に対し、桜は冴親が纏う華やかな雰囲気思わず警戒心が少し緩んだ。彼を慕うかのように、冴親の肩や手には小鳥がとまっていた。そんな姿から、桜は彼から敵意を感じなかったのだろう。

「大神零、お前は『まだ見ぬ脅威』と呼ぶにはあまりに気高く……。気高く美しい……。……だが」

——バギュー！

しかし、その認識は一瞬で崩れ去る。撫でるかのように、そっと小鳥を包む冴親の手。その手は次の瞬間には、その小鳥を一切の躊躇なく握り殺した。

「生きている限り、いつか悪に堕ち醜く穢れる」

「な、なんということを……！」

ボタボタと、冴親の手から小鳥の血が滴り落ちる。その向こうで笑みを浮かべる冴親からは……。何とも言えぬ不気味さを感じられた。

「だが、その前に……。その左腕だ。その左腕もろとも裁く……。裁くべきだ」

次の瞬間、冴親の足元や近くの木の影から真つ黒な狼のような物が生まれ、大神に向かつてきた。おそらく冴親の異能であるそれらを防ごうと大神は身構えるが、その前に



王子が割って入る。

——ガガツ！

「王子！」

「零！ ここはオレに任せてお前は移動しろ！」

『遮影』を展開して冴親の異能を防ぐ王子。かつて守護神と呼ばれた彼女の『影』の防御を破るのは用意ではない。その間にこの場を離れるよう、王子は大神に諭す。

「だが……！」

「心配すんな！ オレの『遮影』がこんな程度の攻撃で破られるわけ——」  
破られるわけがない……そう言おうとした瞬間だった。

——ズオ！

「なっ!? 『遮影』が……喰われた!？」

冴親が放った狼が王子の『遮影』を喰い破ったかのように突破してきた。そうして王子に近づいた狼は王子の周りを高速で移動し、その胴体を別の物へと変えていく。

——ガシャアン!!

「王子！」

狼だった物はまるで鳥籠のような檻と鎖に姿を変えて王子を捕える。そちらに目を奪われる大神だったが、彼の後ろからは新たに生まれた狼が大神の元へと向かってきて

いた。

——ガッ！

「ぐっ!! この……燃え散りな!!」

狼はそのまま大神の首や身体に容赦なく噛みつく。対する大神は『青い炎』と化した左腕を勢いよく振るい、周囲一带を狼もろとも燃え散らす。

「まだ……まだだ」

しかし狼は完全に燃え散ることなく、残った部分から新たに狼の首が生えて大神への攻撃を続ける。

「うぐー… な、なんだこの異能は……!?!」

大神は困惑する。確かに『青い炎』と化した左腕は狼に触れた。一度触れば細胞まで燃え散らす『青い炎』である以上、燃え散らせないなんてことはあり得ない。そう、それこそ……

「これは、まるで王子の……!」

王子の『影』のように、実体を持たない物でもない限り——

「ぐああああ!!」

「大神! 待ってろ、今助けに——!」

次から次へと数を増やす狼に、大神は全身のいたるところを噛みつかれていく。王子

も捕まっている以上、今の大神を助けられる者はいない。

ならば自分が、と大神の元に駆け寄ろうとする桜だったが……

——ビュオ！

狼と同じように、冴親の足元から伸びた黒い筋のようなのが巨大な大岩を軽々と持ち上げ、それを桜に目がけて放り投げた。それに桜が気付いて振り向いた時にはもう……大岩は桜の目の前に迫っていた。

——ドゴオ！

「か、会長！」

しかし、寸でのところで会長が桜を抱えながら移動することで大岩は桜には当たらず勢いよく地面にめり込んだ。それでも黒い筋は狼のように次々に増えていき、その一つひとつが会長と桜目がけて大岩を投げつけてくる。

「す、すまない大神君！ こっちは桜小路君を護るので手一杯……！」

そのあまりの数と桜を抱えていることもあり、会長も避けるので精一杯といった様子だった。そうしている間にも、大神の傷はどんどん増えていった。

「おいおい、零！ いくらオレ様でも今はこれが精一杯だぜ!? さっさとなんとかしろ！」

「だったら……そこで大人しくしてろ……！」

絶望的とも言える状況に、『コード：エンペラー』も冷や汗を流しながら大神に檄を飛ばす。対して大神は「黙っている」とでも言いたげに強気な態度を崩さずにいた。

「うざってえな……！　まとめて燃え散りな！」

そして、大神は左腕を地面に思いきり突き立てると同時に今出せる最大の大きさの『青い炎』を自身を中心にして展開する。瞬間、少なくとも大神に噛みついていた狼はその大部分が消え、大神への攻撃も止んだ。しかし、狼の破片は再び再生を始めようとしていた。

「言われなくとも……振りかかる火の粉は、一片残らず燃やし尽くす！」

だが、大神はその一瞬の隙を見逃さない。その一瞬で冴親へと向かっていき、『青い炎』と化した左腕を冴親の身体へと伸ばし——

——スツ

冴親が右手を小さく動かして指先を大神の方へと向けた瞬間……大神の身体に無数の穴が開いた。冴親の手から、何かが放たれたわけでもなく……ただ、向けた瞬間に。

「今、何を……」

「……………」

何が起きたのか、何をされたのか……大神は一つとして理解することはできず、ただ視線の先で柔和な笑みを浮かべる冴親を視界に映したまま膝を突くことしかできなかった。

「大神イ！」

謎の攻撃に膝を突いた大神の姿に、桜は悲痛な叫びを上げる。しかし、今の彼女は會長に抱えられて身動きが取れず、その會長も冴親から伸びる黒い筋から放たれる大岩を避けるのに手一杯でとてもじゃないが大神の救援には向かえない。

「零！ くそ！ こんな檻……！」

そんな中、捕えられた王子はなんとか自分を捕える檻を破壊しようと『影』の鎌を出す。しかし、彼女の両手は後ろ手に縛られているためいつものように鎌を振るうことはできない。ならばと身体全体を動かすことで鎌を檻へと何度もぶつける。だが、檻は一

向に壊れる気配を見せない。

「……のお!!」

それでも王子は諦めず、渾身の力で鎌を檻へとぶつける。しかし、その瞬間……

——ズズウ

「な……!?!」

王子の鎌が檻から外に出た。だが、それは檻を破壊できたからではない。まるで元から同じ物質であるかのように檻と鎌が溶け込んだからだった。

(オレの異能が同化した!?! ……ま、まさか)

それを見て、王子はある答えへと辿り着く。決して、あり得るはずがない答えに。

「……『影』!?! この異能は……『影』か!?! バカな! オレと同じ異能を操る人間なんて——!」

あり得ないはずのその答えだが、それを正解だとすれば冴親の謎の攻撃には全て説明ができた。最初に放たれた黒い狼は木の『影』、そして冴親の足元から現れた。人間の足元には、当然のことながら『影』ができている。そこから現れ、そして大神の『青い炎』でも燃え散らなかつた。王子の『影』と同じように。

そして、大神が膝を突くことになった謎の攻撃……冴親の手からは何も放たれてはいないが、王子の鎌のように『影』による大神の『影』への攻撃だとしたら、見えなかつ

たとしても不思議ではない。

(……同じ、異能?)

しかし、これまで多くの異能者と対峙してきた王子たちだが、まったく同じ異能を使う者とは一度も会ったことが無い。かつて風牙との闘いにおいて優が放った言葉……異能者には特有の異能を使うための細胞があるという言葉の通りならば、それこそ血の繋がりででもない限りは……

「ま、まさか……」

「やつと……やつと捕まえたオレのカナリア。さあ、歌え。悪を裁くオレに愛の賛歌を」

ふと、頭に浮かんだ一つの答え。自分と同じ異能を持つ可能性がある存在はもういない……そのはずだった。しかし、以前『エンペラー』から明かされた衝撃の言葉……それが目の前に立ちはだかる存在の正体と静かに繋がる。

「……ねえ。」

お歌を歌ってよ……おねいちゃん」

まるで気付いてほしいと言わんばかりに冴親の口調が幼さを感じるものへと変わる。

さらに、突如として吹いた風が冴親の髪をかき上げ、右眼の下……王子とまったく同じ位置にある泣きボクロが露わになる。

それは、かつて王子が何度も見た顔と何度も聞いた言葉。それはもう……王子にとつて疑いようがなかった。

「ッ……!？」

(こゝ、こいつが……生き別れた王子殿の弟なのか——!?)





## code : 86 大いなる遺志に集いし者、刃向かう者

——それは、彼女にとって幸せの記憶であり……今となっては永遠に蘇ることが無い  
悲しき記憶。

「ねーねー、おねいちゃん。おうた、うたつて」

「……い、いやよ。はずかしいんだから、わがままいわないで」

ピアノの椅子にこじんまりと座る幼い少女に、少女と同じ髪色をした少女よりもやや  
幼い少年が純粋な瞳を向けていた。しかし、少女は頬を赤く染めながら静かに首を振  
る。

「やだー、うたつてよー」

「……だ、だめ」

「やーだー!!」

それでもめげずに少女にお願いする少年だったが、変わらず少女は首を振った。すると、少年は腕をその場でぶんぶんと振って声を大きくする。

「も、もう……。じゃあ、ちよつとだけ……。ちつちやい声で」

これは聞くまで解放されない、と感じた少女はとうとう諦めたように少年の方に向き直る。そして少年を手招いて近くまで来させると顔の前はその小さな手を添えて、少年にだけ聞こえるような声量で歌い始める。

その歌声は幼いながら心地よさを感じ、彼女の歌唱力の高さがうかがえる。

「♪♪♪……え?」

しかし、少女は自分の口から発せられる歌声が大きくなっていることに気付く。そしてよく見ると、静かに歌を聞いていたと思われていた少年の手にマイクが握られており、そのコードが繋がったラジカセから自分の歌が大音量で流れていることに気付いた。

「(、)(、)らー」

「あははははー」

顔をより真つ赤にして少年を叱る少女。しかし、少年は悪びれる様子も無く純粹な笑顔を浮かべる。

そして、その笑顔のまま少女に抱きつく。

「えへへへ……だって、みんなにきいてほしいんだもん。だいすきなおねいちゃんのスてきなおうた！」

少女と同じ髪色と同じ位置にある泣きボクロ……それは、どこにでもあるような姉弟の日常の一コマであった。

しかし、その日常は突如として失われた。

「あついでいよ！ あついでいよ！ おねいちゃん！」

「たすけて……！」

—— たすけて！ おねいちゃん！

両親と共に燃え盛る車の中に取り残された少年。すぐるように伸びたその手は少女に届くことは無く、助けを求める叫びは夜の中に溶けていくように徐々に消えていった。

こうして、彼女……王子は愛する弟と永遠の別れを迎えた——そう、思っていた。

「会いたかったよ、おねいちゃん」

『コード・ネーム』を名乗り現れた男……冴親の口からかつて何度も聞いた呼び名が発せられ、王子はただ目を見開く。確かに彼の髪色は王子と同じであり、同じ位置に泣きボクロも存在する。何より、王子と同じ『影』の異能を持つ者であるというのが、彼女との血縁関係を物語っていた。

「お前が、私の……。い、今は……冴親……」

弟が生きているということは『エンペラー』により知らされていた。しかし、まさかこうも早く目の前に現れるとは想像していなかった。ましてや、自らと同じ『エデン』

に属する『コード：ネーム』の一人であるとは思いつきもなかっただろう。

「ようやく気付いたか。でも、これからは……」

——グイツ！

「ぐあつ！」

突然訪れた弟との再会に言葉を失う王子。すると、冴親はそんな王子を縛る『影』の鎖を乱暴に引き、王子を檻の端に叩きつける。

「もう離さない。ずっとずっと一緒だ」

そんな乱暴な行為とは裏腹に、冴親は柔和な声色で続ける。そして、そのまま愛でるかのごとく額を合わせるように顔を近づけていき……

——ゴォ！

「お前の相手は……オレだ！」

瞬間、大神が『青い炎』と化した左腕を二人の間に振りかざす。冴親は瞬時に身体を翻してその攻撃を避け、王子は檻に捕らわれていることもあり『青い炎』の影響を受けることは無かった。

「燃え散れ！」

大神はそのまま王子を護るように冴親と向き合い、『青い炎』による攻撃を続ける。そうして冴親と王子の距離が開いたところで、大神は勢いよく左手を突き出して『青い炎』

を冴親に向けて放出させる。

「…………邪魔するな。終われ」

——ドク、ン

「な…………!? なんだ…………これ、は…………!?」

大神の『青い炎』を冴親に届くかと思われたその瞬間…………冴親を中心とした円形の空間が変わった。草木は枯れ果てていき、上空を飛んでいた小鳥は力無く地面に落ちていった。

そして、同様にその円形の空間に足を踏み入っていた大神も謎の息苦しさと脱力感により思わず膝を突きそうになる。



その様子は、まるでその円形の空間に存在するものの命が失われていくようだった。

「れ、零……！ しっかり、しろ……！ でない、と……オレも……」

そして、それは『エンペラー』も影響を受けているようで彼の身体である日の玉も徐々に小さくなっていった。

唐突に訪れた謎の現象だが、冴親を中心として起きていることから冴親が何かしたというのは確定している。

しかし、彼の異能でもある『影』については王子も同じ異能であることから大神もある程度は理解をしている。だからこそ、大神は一つの結論へと辿り着いた。

「これ、は……『影』じゃない……！ まさか、お前……『捜シ者』と同じように、異能を二つ——」

「見事な美しさだな、大神零。お前の命の終わっていく様は何よりも美しい。だが、前のおかげで姉君と会えたのは事実」

二つ目の異能……それが大神が出した結論だった。今までならば異能を二つ持つなどあり得ないと考えてしまうが、今となっては『捜シ者』という前例がいる。

しかし、当の冴親は否定も肯定もせず静かな表情で大神に近づいていく。そして、徐々に冷たくなっていく大神の頬にそつと手を添えた。

「その礼に今回は……左腕だけで勘弁してやる」

「っ!？」

その瞬間、大神の左肩から鮮血が飛び散る。見ると、大神の左腕の接続部分が少しずつ身体から千切られようとしていた。

突然のことに混乱するが、大神は瞬時に理解した。なぜなら、彼らの背後に伸びた『影』にはしっかりと写っていた。冴親の大神に添えた手とは逆の手が、大神の左腕に重なりそのまま左腕を引き千切ろうとしているのを。

「ぐ、が……!？」

「いけない!　大神く——ぬわっ!」

大神の危機に会長は桜を抱えながらも加勢しようとし、一瞬動きを止める。しかし、その一瞬を冴親の『影』は決して見逃さず、『影』が放った大岩が会長に直撃する。それにより、会長は大神の元へ駆けつけるのは不可能となる。

「あ、ぐ……ああああああ!!」

そうしている間にも、大神の左腕は音を立てて引き千切られていく。大神の苦痛な叫びが響く中……黒き者が空気を切り裂いた。

——ブォン!

「やめろ、冴親!　零には手を出すな!」

そこには、先ほどまで冴親の『影』の檻に捕らわれていた王子の姿があった。その姿

は漆黒に染まっており、大きく振り抜いた『斬影』の鎌は通常時より大きな破壊力を生んでいた。

それは、日和との闘いで見せた『女帝の矛と盾』エンプレスパラドックスであった。全てを喰らうその性質を活かし、冴親の『影』を喰い尽して脱出したのだ。そして、今度は彼女が大神を護ろうと冴親の前に立ちはだかった。

「お、王子……！ お前は、引つ込んで——」

「バカ言つてんじゃねえ。引つ込むのはお前だ。その腕と身体で何ができる。いいから黙つて見てろ。……お前は絶対にオレが護る」

「王、子……」

自分を護るために立つ王子に、大神は千切られかけた左肩を抑えながらも強気な言葉をかけようとするが王子はそれを一蹴する。その姿からは、『捜シ者』の遺志として大神を護るという彼女の言葉が確かなものであるという強い覚悟を感じるようだった。

「あの檻を自力で破るとはな。その悪を護る……？ 護るために？」

しかし、そんな王子の姿に冴親はただ首を傾げる。『エデン』に属する者である彼にとつて今の大神は裁く対象……つまりは『悪』。そんな存在を護ることなど理解できない……そう言いたげに。

「……ずっと会いたかった。だが、『コード：ネーム』は『コード：ブレイカー』以上

に存在を知られてはいけない身。だが、ずっと……ずっと見ていた。いつか会えると信じて。世界でたった一人の大好きな……おねいちゃん」

「そ、それは……」

そして、冴親はそのまま王子に対して募らせていたであろう思いを静かにぶつける。かつては共に過ごした愛する存在。互いに生きており、同じ組織に所属している……しかし、そんな二人の距離は近いようでとてもなく遠いものだったのだろう。

そんな冴親の姿が、王子の脳内に残るかつての幼い彼の姿と重なり思わず表情が歪む。

「それは、私だって同じだ冴親！　だが、お前は——」

「——なのに」

——ゴツ！

「王子！」

突然、冴親の足が王子の顔を蹴り抜いた。

思えば彼は、今まで王子に対しては『影』の檻に捕えるのみで攻撃という攻撃はしていない。それは王子が彼にとつてようやく会えた姉であるためだろうが……冴親は唐突に王子に手を出した。一切……なんの容赦もなく。

「こんな……こんな悪を護るなんてオレのおねいちゃんらしくない。弟のオレの手で躑……躑し直さなくては」

「なっ……！」

そう静かに告げる冴親の顔は……これまで見せた柔らかな笑顔とは対照的に、暗く冷たい……侮蔑し見下ろすかのような表情だった。

——ドドドドツ！

「ぐあっ！」

「王子！」

「さ、下がつてろ……！ つー！」

そんな冴親の表情に戸惑う王子に対し、冴親は手から『影』を針状に伸ばし王子に攻

撃を続ける。しかし、それでも王子は大神を護ろうと退こうとはしない。

その姿を見て、冴親は徐々にその語気と攻撃の勢いを強めていく。

「そいつは悪！　そして、消すべき『脅威』！　生きていても誰の得にもならない、やっかいな存在！　そいつが死んだって世界中の誰一人困らぬ存在しない悪！」

冴親の攻撃はどんどん勢を増していき、王子の護りを突破して大神にも少しづつ傷が増えていく。まさに圧倒的とも言える冴親との実力差に、二人はただ耐えるしかなかった。

「……さあ、わかっただろうか？　そいつを護る無意味さが。命を懸けて護る価値なんて無い」

「お、王子……！　もういい……！　そこを、どけ……！」

まるで最後のチャンスとでも言わんばかりに、冴親は攻撃の手を止めて諭すように王子に声をかける。大神も、もう王子を巻き込めないと思っつか自分の前から下がらせようとする。

「……護るさ」

しかし、彼女は決して動こうとはしなかった。

「世界がどうかは知らねえ……たとえ最後の一人になろうと、オレはお前を護る。それが……『心友』ってヤツだろ？」

「ッ……………」

「それに、『渋谷荘』を建て直してもお前がいないと……誰も雨漏りを直せねえだろ？」  
「王、子……………」

傷つきながらも、会いたいと願っていた弟と闘うことになっても……王子は決して揺らがなかった。『捜シ者』の遺志を継ぐ者として、何よりも大神の……一人の『心友』として。

——ギリッ

しかし、その言葉が冴親の逆鱗に触れた。

——ズォー！

「か、『影』が……………！ 同化して、動けな——！」

突然、王子を囲むように地面から『影』が湧き上がる。同じ異能である『影』により、王子の動きは完全に止められ、冴親はゆっくりと王子の横を通り過ぎて大神の眼前に立つ。

——スッ

「ッ——！ やめ——！」

「悪は、終わった」

静かに前に出した冴親の左手から強大な『影』が放出され、漆黒の闇が大神もろとも消し飛ばした。

「……………う、嘘だ」

王子が力無く眩くと同時に、自らを拘束していた『影』が消える。しかし、そうして自由になった彼女が最初にとった行動は……絶望により膝を突くことだった。

「嘘だ……。零、そんな……」

抉りとられた地面から土煙が上がり、大神の姿は確認できない。

全ては、一瞬だった。結局、冴親がその気になれば大神を始末することはいつでも可能だった。そんな冴親との力の差と、護るべき者神を護り切れなかったことに対する絶望が……まるで闇のように王子の心を侵食していく。



「零………！ オレは………！ お前を護り切れずに——！！」

「——見てられないな」

「——案ずるな、泪」

しかし、その絶望はピタリと止まった。土煙の中から聞こえる………  
かつて何度も近くで聞いたその声によって。

「いや……我が同志よ。オレたちが来た以上、もう何も案ずる必要なし」

「虹、次……!? ゆ、雪比奈！」

土煙が晴れたそこには、大神を護るように君臨する二人の男……先の闘いで宿敵『Re—CODE』の虹次と雪比奈が、冴親の攻撃を無力化していた。

「お前たち……なんで……」

「泪だけではない。全ては『捜シ者』が遺志。『エンペラー』目覚めし時、我ら『Re—CODE』は大神零が元集わんと」

突然のことに混乱する大神だったが、虹次は全ては『捜シ者』の遺志であると語る。その顔には何の迷いもなく、『捜シ者』の言葉をただ護ろうとする男の姿があった。

「いいか、大神零。死してもなお残る大いなる遺志によって、お前は護られている。

……お前は独りではない」

「『捜シ者』が……」

「う、うう……そ、そうか……。そうだったんだね……」

「零……みんな……。良かった……」

『捜シ者』が遺した遺志に、桜も目を見開き、会長は嬉しさからか涙をなんとか堪えようとしていた。

しかし、いくら『捜シ者』の遺志とはいえ……雪比奈に関しては大神に対して良い感情を持つていたとは言えなかった。

『捜シ者』はお前のせいで死んだ。許すわけにはいかない。お前はオレが消え逝かす。こんなところで殺されるなんて許すわけがない」

「雪比奈……」

あくまで大神を殺すのは自分だ、と主張する雪比奈。大神との因縁がなくなつたわけではないが、少なくともこの場においては虹次と同じく味方であると考えてもいいようだった。

「……また醜い悪が集まつたものだ。まあ、丁度いい。一まとめに……一まとめに終わらせて——」

大神を仕留め損ね、さらには虹次と雪比奈という二人の『Re—CODE』の増援。普通ならば形勢逆転ともとれる状況だが、冴親は特に気にする様子も無くそのまま闘いを

続けようとする。

その……瞬間だった。

——ビキッ!!

「がつ!!? ぐ、あああああ!!」

「なっ……!!? あいつ、何か様子が……!」

「さ、冴親?!」

突然、冴親の全身の皮膚に痣のようなものが現れて苦しみ始めた。冴親の異常を知らせるかのように、彼の肩にとまっていたインコも「ギャア、ギャア」と大きな鳴き声を上げる。

そして、そのまま冴親はぐらりと後ろへと倒れていき——

——ズサア!

「へ、平家先輩!」

倒れようとする冴親を支えたのは、光速で現われた平家であった。そして、彼はそのまま冴親を介抱し始める。

「冴親様……これ以上はお身体に障ります。一度戻りましょう」

「う、ぐ……!」

冴親を抱き上げ、大神たちには背を向ける平家。そんな彼に対し、桜はなんとか声を

振り絞った。

「へ、平家先輩!!」

「……………」

「行かないで、ください……。せ、先輩はいつも正しくて強いから……。どんなことがあっても「エデン」の言いなりになどなりませんよね……。？ 大神が悪だなんて……。思いませんよね……。？」

「……………」

「先輩!」

桜の必死な言葉に、平家は何も答えず動かない。肯定とも、否定ともとれるその行為に桜は思わず声を荒げる。

しかし、彼が放ったのは残酷な言葉であった。

「……大神君、次に会った時は本気で殺す」

「ッ——!!」

今まで実際には見たことがない、平家の殺意が込められた言葉。桜は希望を打ち砕かれたように、言葉を失った。

——ザッ

「先輩! 平家先輩——!」

しかし、そのまま去ろうとする平家に説得を試みたのか、桜は彼を追いかけようとする。

——ゴオツ!!

その瞬間——大木が桜に向かって放たれた。

「危ねえ!」

「桜小路さん!!」

突然のことに王子と大神は桜に声をかけるだけで精いっぱいであり、彼女を護ろうと

動こうとはするが大木の速さは凄まじく、とてもじゃないが間に合いそうにない。桜も  
 気付いてなんとか自身を護ろうと身構えるが、生身では大怪我は必至である。

——パァン！

「虹次……！」

その危機を救ったのは虹次だった。『空』により大木は跡形もなく粉々になつて事な  
 きを得たが……問題は、この大木を放つたのが誰か、ということである。

「礼には及ばん。それより構えろ、泪。どうやら……現れたのは奴一人だけではない  
 ようだ」

「……悪いが、平家さんと冴親様は追わせない」

「や、夜原先輩!？」

平家に続き大神たちの前に立ちはだかる 『コード・プレイヤー』 敵 ……そこに立つのは、『コード：0

7』の称号を持つ男——夜原優であった。

「優……！」

「そんな……夜原先輩まで……」

優の登場に、大神は傷だらけながらもなんとか身構える。桜は、続け様にかつての仲間が立ちほだかる現実にあたしショックを受けていた。本来なら平家のように説得を試みようとしただろうが、先ほどの攻撃が何より明確な敵対の意思として表われていたため、それも無駄だと悟ってしまっていた。

「……優君」

「ここはオレに任せてください。それより、早く冴親様を」

「……わかりました」

一方、平家は優に最低限の言葉のみを交わして冴親と共にその姿を消す。そうしてただ一人残った優は眼前に揃う大神たちに鋭い視線を向けていた。

「……どうやら本気らしいな」

「だが、足止めとしては役不足だな」

その様子から、優が平家と冴親を追わせないために残ったことを悟る虹次。しかし、



雪比奈はつまらなそうに辛辣な言葉を告げる。

『コード：07』如きが手負いとはいえ『コード：ブレイカー』二人、そしてほぼ無傷の『Re-CODE』二人に勝てるだけでも？ 風牙にすらやつとの思いで勝ったお前にとつては荷が重いな」

「……………」

雪比奈の言う通り、状況を見れば圧倒的に優が不利であった。大神と王子の強さは元より、『捜シ者』との闘いにおいて『Re-CODE』の強さというものを優も体験している。

しかし、虹次はそう思っていないかった。

「油断するな、雪。あの眼……………ただの時間稼ぎの者がする眼ではない。オレたち全員をここで仕留めようとしている……………そんな眼だ」

「……………ああ、その通りだ。オレが残ったのはお前たちを足止めするためじゃない。大神を……………いや、お前たちを……………斃すためだ」

——ゾクツ

決意と殺意を口にした優の姿に、大神は悪寒を感じる。『Re-CODE』二人という味方、対して優は今、一番の武器とも言える斬空刀は手元には無い。それなのに……………大神の中で悪寒は止まらなかった。

「桜小路さん！ 下がっ——！」

——ブオン!!

「なっ?!」

桜に声をかけようとした瞬間、大神は彼らから遠く離れた位置まで優に掴まれた状態で移動させられていた。そのあまりの速さに、虹次たちも反応が遅れているようだった。

（バカな……!!? 今のスピード、明らかに『脳』で強化した時とは違う……! それ以上……まるで——!）

「——悪いな、大神」

そのまま攻撃される……そう感じ身構える大神。だが、優が次にした行動は予想だにしないものだった。

——トンツ

静かに、大神の額に自らの額を合わせる優。そして、彼はポツリと呟いた。

「——『鏡脳』」  
きょうのう

(な、なんだ……!?!? この、頭の中を見透かされているような感覚は……!! 何をしているのかわからないが……マズイ!)

額を合わせられた途端、言い知れぬ違和感を感じた大神は左腕に『青い炎』を灯して優を振り払おうとする。しかし、優は先ほどと同じ超スピードで大神の元からすでに離れていた。

「大丈夫か!? 零!」

「ッ……」

優が離れたことで王子が駆け寄るが、大神はなんとも言えずにいた。攻撃を受けたわけではない。先ほどの行為はあくまで額を合わせただけであり、頭突きなどを受けたわけではなかった。

その行為になんの意味があるのか考える大神に対し、優は離れた場所で自らの左腕をジツと見つめて、何かを確かめようとしていた。

「……………問題はなし、か」

「おい、零! 大丈夫なのか!」

「……………ダメージは、無い。いったい、今は……いや、そんなのは後でいい!」

混乱し何も言わない大神を心配する王子だったが、大神は攻撃を受けたわけではないことを伝える。相変わらず何をされたか理解できないが、敵を前にしていつまでも考えているわけにもいかない。

大神は、別の疑問を解消することにした。

「優……お前、何をした？ さっきのスピードは、いくら『脳』で身体能力を強化したお前でも出せるようなスピードじゃなかった。あんなスピード……遊騎の『音』でも使わないと出せるわけがない」

「……………やっぱり、すぐ気付かれたか」

不意打ちだったとはいえ、『Re—CODE』二人に反応を遅らせるほどのスピードは今までの優とは別次元のものだった。それこそ大神の言う通り遊騎と同じスピードだった。

「だが……関係ない。この力について知られようと……ここで全員斃せば済む話だ」

「ま、まさか優君……！ 君は——！」

この力という優の言葉に、会長はハツとする。しかし、次の瞬間……彼らは信じられない光景を目にする。

「覚悟決めろよ……大神」

「目には目を」

「齒には齒を」

「悪には……」

——ゴオ!!

瞬間、優の左腕が『青い炎』へと変化した。

「なっ!?!」

「や、夜原先輩の左手から……『青い炎』が!?!」

「どうして、優が『青い炎』を!?!」

目の前の光景に驚きを隠せない大神、桜、王子。しかし、優は変わらず鋭い視線を彼らに向ける。その眼は『青い炎』が如く冷たく、熱く……目の前に立ち並ぶ敵を捉えていた。

「悪には………悪を」